

問題児たちが異世界から来るそうですよ？
の～

～無形物を統べるも

biwanosin

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

問題児の世界に原作通りの三人とオリ主がやってくる話です。

ナレーションがたまに突っ込みをします。

初投稿＋二次創作作るのが初めてなので駄文ですが、お手柔らかにお願いします。

それでは、駄文でもいいという人はぜひ読んで、感想を残していただくさい。

意見待ってます。（あんまり厳しいのはやめてください）

タイトルを変えさせていただきました。

101番目の百物語からはキャラが何人か出てきます。

『暁』にてマルチ投稿させてもらっています。

目次

キャラ設定	1
プロローグ	
プロローグという名のオリ主紹介	14
YES！ウサギが呼びました！	
問題児たちとの出会い	16
初の黒ウサギ弄り	21
箱庭の説明	24
自由に散歩	31
コミュニティの現状	34
A CAPTIVE TITANIA ①	39
A CAPTIVE TITANIA ②	43
A CAPTIVE TITANIA ③	47
A CAPTIVE TITANIA ④	52
A CAPTIVE TITANIA ⑤	57
フライングボディーアタック	62
白夜Ⅱ変態	68
アングルモア・プロフィット	73
vs十六夜	79
メイド二人	87
虎は死に、吸血鬼が登場する	94
サウザンドアイズの偉い人って、変態しかいないんだろうか・・・	100
CAPTURE the GRAIAI	104

あら、魔王襲来のお知らせ？

火龍誕生祭 117

ハーメルンの笛吹き 121

アンダーウッドの迷路 126

The PIED PIPER of HAMERUN ①

130 The PIED PIPER of HAMERUN 一時中

断 134

断 134

The PIED PIPER of HAMERUN 再開

141 The PIED PIPER of HAMERUN ②

146 The PIED PIPER of HAMERUN ③

151 The PIED PIPER of HAMERUN ④

154 The PIED PIPER of HAMERUN ⑤

160 The PIED PIPER of HAMERUN ⑥

165 The PIED PIPER of HAMERUN ⑥

交渉 170

そう……巨龍召喚

依頼 175

サボる 180

IRE KING	④	273
SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMP	③	269
IRE KING	②	264
SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMP		260
IRE KING	特訓	260
SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMP		255
IRE KING	一時中断	249
SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMP	①	249

十三番目の太陽を撃て

種		245
破滅の抜け道	⑥	240
破滅の抜け道	⑤	234
破滅の抜け道	④	227
破滅の抜け道	③	222
破滅の抜け道	②	216
破滅の抜け道	①	208
魔王とティータイム		202
白澤		195
無双		191
死		188
一つ目の鬼		185

降臨、蒼海の覇者

拉致 | 284

露店巡り | 290

千切り | 294

馬肉 | 301

ヤシロ | 307

求道丸 | 313

一对三 | 317

剣閃烈火 | 324

スレイブ | 330

ヒツポカンプの騎士 ① | 335

ヒツポカンプの騎士 ② | 339

親愛なる同士 | 343

ウロボロスの連盟旗

煌焰の都 | 348

再会 | 352

荒野 | 357

魔王連盟 | 362

ウサ耳 | 368

落陽、そして墜月

T a i n B o C u a i l n g e ① | 373

T a i n B o C u a i l n g e ② & 大祓 ① | 378

T a i n B o C u a i l n g e ③ & 大祓 ② | 382

短編	一輝と湖札の物語	①	514
短編	一輝と安倍晴明	⑥	506
短編	一輝と安倍晴明	⑤	501
短編	一輝と安倍晴明	④	496
短編	一輝と安倍晴明	③	492
短編	一輝と安倍晴明	②	488
短編	一輝と安倍晴明	①	484

②	リリの大冒険く働かざる者食うべからずと偉い人は言いましたく	477
①	リリの大冒険く働かざる者食うべからずと偉い人は言いましたく	468

異邦人のお茶会	460		
短編	一輝とお姫様	⑥	451
短編	一輝とお姫様	⑤	441
短編	一輝とお姫様	④	433
短編	一輝とお姫様	③	427
短編	一輝とお姫様	②	423
短編	一輝とお姫様	①	418

短編集? part 1

覚悟	415				
Tain Bo Cuailnge	⑧	&	大祓	⑦	411
Tain Bo Cuailnge	⑦	&	大祓	⑥	407
Tain Bo Cuailnge	⑥	&	大祓	⑤	400
Tain Bo Cuailnge	⑤	&	大祓	④	394
Tain Bo Cuailnge	④	&	大祓	③	390

短編	一輝と湖札の物語	②	518
短編	一輝と湖札の物語	③	522
短編	一輝と湖札の物語	④	528
短編	一輝と湖札の物語	⑤	532
短編	あるお盆の物語	①	542
短編	あるお盆の物語	②	547
短編	あるお盆の物語	③	553
短編	あるお盆の物語	④	557
短編	あるお盆の物語	⑤	563
短編	あるお盆の物語	⑥	567
短編	あるお盆の物語	⑦	572
短編	あるお盆の物語	⑧	576
短編	あるお盆の物語	⑨	581
短編	あるお盆の物語	⑩	586
短編	あるお盆の物語	⑪	591
短編	あるお盆の物語	⑫	596
短編	あるお盆の物語	⑬	600
短編	あるお盆の物語	⑭	607
短編	あるお盆の物語 オマケ		614
白夜叉の送別会			618
短編	湖札とウロボロス、出会いの物語	①	628
短編	湖札とウロボロス、出会いの物語	②	633
短編	湖札とウロボロス、出会いの物語	③	637
短編	畑の天狗、今に至るまで	①	647
短編	畑の天狗、今に至るまで	②	652

短編 畑の天狗、今に至るまで ③

短編 畑の天狗、今に至るまで ④

短編 畑の天狗、今に至るまで ⑤

短編 畑の天狗、今に至るまで ⑥

乙 ①

乙 ②

乙 ③

乙 ④

乙 ⑤

乙 ⑥

乙 ⑦

乙 ⑧

暴虐の三頭龍

名の継承

神明裁判 ①

神明裁判 ②

神明裁判 ③

神明裁判 ④

そして、兎は煉獄へ

人類最終試練、二人

神明裁判 ⑤

神明裁判 ⑥

神明裁判 ⑦

誓いと呪い

短編集? part 2

箱庭のとある日常	783
乙 ⑨	789
乙 ⑩	795
乙 ⑪	799
乙 ⑫	804
乙 ⑬	809
乙 ⑭	814
乙 ⑮	819
撃て、星の光より速く！	
戦力外通達	826
鍵の継承	831
兄妹の出会い	836
これは、違う	842
力の契約	846
力と対価	852
王と女王 ①	858
王と女王 ②	863
王と女王 ③	868
王と女王 ④	874
王と女王 ⑤	879
少女の想い	885
◆◆◆◆	891
一族の物語 — 我／汝、悪である — ①	896
一族の物語 — 我／汝、悪である — ②	907
一族の物語 — 我／汝、悪である — ③	913

番外編

異世界の家族へ

兄と妹。その想いに込めるのは。

ifストーリー

湖札の受難

オリジナル編 1

目覚め

容体

暇だ

泣きつかれる

お見舞い客、一組目

お見舞い客、二組目

お見舞い客、三組目

お見舞い客、四組目　そして、異変

訪問者

悔しさ

土地の復興

問いかけ

チームバトル

後継者

本気で殴り合う

一生勝てねえ

恨むぞ

兄妹喧嘩 ①

兄妹喧嘩 ②

兄妹喧嘩 ③

1073

biwanoshin、天崎コラボ 二つのぬらりひよん出会いし
時、相對せしは偽物。

邂逅

1089

宴会

1095

遭遇

1103

別れ

1111

ウイル・オ・ウイスプ編

手合わせ

1122

ジャック

1126

寝やがった!?

1131

相談

1137

吊り橋効果?

1142

どんな道を歩むのか

1150

本拠の守り

1155

(真剣)

1160

え、えー……

1164

biwanoshin、オシロイバナコラボ 破綻者と歪狂者。その

邂逅の果てに

邂逅

1169

決闘

1177

交流 ①

1182

交流 ②

1186

命令権

1193

カーニヴァル ①

1200

決意の瞬間	1396
外道討伐編	
年末短編 魔王ジャンヌ・ダルク 前編	1373
年末短編 魔王ジャンヌ・ダルク 後編	1359
正月に気が狂った、許せ	1349
外道の執行	1342
正義の執行 ②	1328
正義の執行 ①	1321
ギリシア神話	1311
仏門・・・というか白夜叉	1305
日本神話	1295
北欧神話	
1283	
神話世界に喧嘩売ってみた、あるいは第二回異邦人のお茶会	1279
上層へ	1272
一つの日常 託宣者と陰陽師	1264
一つの日常 化け物と怠惰	1256
一つの日常 キメラと三頭龍 ②	1250
一つの日常 キメラと三頭龍 ①	1244
別れ	1239
カーニヴァル ⑤	1232
カーニヴァル ④	1225
カーニヴァル ③	1213
カーニヴァル ②	
上層巡り編	

キャラ設定

てらにし かずき
寺西 一輝

本作の主人公。勿論問題児。

黒髪で、本人がそう言ったことに無関心なため、前髪は眉毛にかか
るくらい、とかそんな感じの無難な長さで切られている。フアツシヨ
ンなどにも本当に無関心なので、基本ジーンズにTシャツ姿。その日
の気温に合わせて何か羽織ったり袖の長さが変わったりはするけど、
それくらい。

箱庭に来る前は札の取り出しやすさという利点からウエストポー
チを愛用。箱庭に来てからはギフトカードという便利アイテムを得
たために、出番がなくなっている。

また、白澤が率いた妖怪たちによる一族の崩壊までは神社で暮らし
ていたため、きちんとした格好をするならスーツより和服派。普通の
和服でも戦えちゃうくらいには着なれていて、寝るときも浴衣である
ことが。

初期の所有ギフトは『無形物を統べるもの』『陰陽術』『空間倉庫・
1番〜10番』。原作で言う二巻の際に奥義を継承し、『陰陽術』は『外
道・陰陽術』へと変化する。

諸事情から他者が抱いている、自分に向ける感情を無意識のうちに
察するため(恋最近恋心も加わった)、その関係で本人に真正面からぶ
つかることも多々。作中では音央に鳴央、スレイブ、ヤシロなど一輝
の周辺の人物がそれを受けている。結果として口説き落としてし
まっているのだが、本人に自覚はない。

一度失っていることと諸事情もあり、自分にとっての大切に何か起
こる、失われることを防ごうとする気持ちは強い。それこそ、必要な
ら自分にとっての大切以外のすべてを犠牲に出来てしまうほどに。

なので、『巨大な敵との戦闘直前、他の者に仲間がさらわれた。何を
されるのか分からない』というような状況で、普通の主人公なら

「作戦に変更はありません。このまま、この場にいる全員で立ち向か
います」

「ふざけんな！あいつを見捨てるのかよ!？」

「では、このまま『アレ』を放置するのですか？こうしている間にも命を奪い続けているであろう、私たちなら倒せるかもしれない、『アレ』を」

「それは・・・」

「理解してください。・・・私だって、つらいのです」

「・・・クソツッ!」

というような感じになる場面でも、

「作戦に変更はありません。このまま、この場にいる全員で立ち向かいます」

「あつそ。あ、俺はアイツ助けに来るから」

「・・・ふざけないでください。今こうしている間にも『アレ』は多くの命を奪っています。それを、一人のために見捨てるというのですか？」

「そうだけど？別に俺は、俺の知らない奴が百人死のうが千人死のうが、どうでもいい。その犠牲であいつを助けられるんなら、安いもんだろ」

とはつきり言ってしまうタイプの人間。『全くもって無関係な千人』と『友人一人』でどちらかを殺せばもう片方は助けてやると言われたら、迷わず前者を殺しちゃう人間。敵ですらひく。

家に伝わる技をひたすら覚えていたため、大抵の武器は扱うことができる。だが、本人にとって得意なのが体術と剣術であるため、素手で戦うか剣を用いるか、呪術をメインにおいて戦うのが基本となる。

所有するギフト

『無形物を統べるもの』

『外道・陰陽術』

『空間倉庫・1番～10番』

また他にも、神格武具である、妖刀であり神刀でもある刀『獅子王』を持つ。一輝にとっては、『一族としての最高の相棒』。

使用可能な疑似創星図

『■■■■■■■■』

『百鬼矢光』

『アヴェエスター』

一輝の檻の中にいる／いた妖怪等一覧。

機尋はたひろ（ペスト戦で『妖武装』に使用）

送り狼おくりおおかみ（現在、そのうちの一体が式神になっている）

火取魔ひとりま（アジ・ダカーハ戦にて覇者タワルナフの光輪を喰らった）

牛鬼ぎゅうぎ（一度登場し、湖札の作った鬼を食い殺していった）

納豆小僧なっとうこぞう

白澤はくたく（一輝自身の手によって封印された霊獣）

是害坊ぜがいぼう

ユラン

九尾きゅうび

パロロコン

ダイダラボッチ

八面王やつらおう

蚩尤しゅう

ジャック（原作にも登場する彼です）

アジィダカーハ（原作の『絶対悪』さんです）

ぬらりひよん（一輝に奥義を与えている張本人）

ぬらりひよん

鬼道の一族、全員の檻の中に存在する、妖怪の総大将。

初代鬼道と契約し、鬼道の一族に奥義を与えている。

契約の内容は、『歪み』を殺すこと。

六実むつみ 音央ねお

基本的な設定は『101番目の百物語』に登場するのと同じ。

違う点は、

妖精を召喚し、使役することができる。

所持するギフトが一つ増えている。

の二点。

『少女の想い』で一輝にキスをし、告白している。

所有するギフト

『夜妖精の女王』
テイターニア

『妖精の女王』
タイターニア

六実 むつみ 鳴央 なのお

基本的な設定は『101番目の百物語』に登場するのと同じ。

違う点は、

神隠しから連想される物を使う事ができる。

『アビス・ワールド奈落の世界』を会得した。

の二点。

所有するギフト

『神隠し』

スレイブ

一輝の剣となっている少女。その本質は、北欧神話の魔剣『ダイン・スレイブ』。

元々はヤシロ陣営の滅びの物語だったが、一輝がその呪いを解除したことで一輝のものとなった。

出会ってすぐは一輝のことを呼び捨てにしており、呪いを解呪されてからはマスター、第六十二話以降は人前では『一輝様』、二人きりのときは『兄様』と呼ぶようになる。

胸のサイズはB、目の色は紫。服装は猫耳メイドとなっている。

また、獅子王が『一族にとっての最高の相棒』であるのなら、スレイブは『一輝個人にとっての最高の相棒』。

ヤシロ・フランソワ一世

基本的な設定は『101番目の百物語』に登場するのと同じ。

一部原作には登場しなかった百詩篇も使用する。

さらに、『聖剣と魔竜の世界』に登場するキャラも『破滅の物語』として出すことができる。

所有するギフト

アンゴルモア・プロフィット
『ノストラダムスの大予言』

あまのこさね
天野湖札

一輝の妹。

一輝の実の妹ではなく、本当は分家の『贄殿家』の人間。

一輝が作ったものを除く全ての鬼道の奥義と、自分で作った奥義を使うことができる。

一輝が名を継承した際、同時に名字が『鬼道』に戻った。

所有するギフト

『言霊の矢』

『外道・陰陽術』

『空間倉庫』

使用可能な疑似創星図

◆◆◆◆◆

湖札の檻の中にいる／いた妖怪一覧

あまのざこ
天逆海
あわとんどん
青行燈

ぬらりひよん

スイミ

一輝と契約を交わして封印された歪み。

形はなく、見た者に永久の生と虚無の死を感じ取らせる。

一輝はこれを封印していることにより『無形物を統べるもの』や『
■■■■■■■■』の使用が可能となっている。

ヴァチ

一輝と湖札によって封印された歪み。

日本の『席組み』の『第二席』、登録コードは『犬神使い』。
奥義はそのまんま、犬神を使うもの。

慈吾朗の犬神の名前は、ベル。

稲葉前（いなばさき）

日本の『席組み』の『第四席』、登録コードは『化け狐』。

奥義は管狐を操るのと、九尾の狐となるもの。

桑神豊（くめがみゆたか）

日本の『席組み』の『第五席』、登録コードは『白澤図』。

奥義は白澤図の中に蒐集されている妖怪を使い、色々使うもの。

匂宮美羽（におうのみやみう）

日本の『席組み』の『第六席』、登録コードは『化け猫交じり』。

現匂宮家の頭首見習い。

猫多羅天女の血を引く一族で、奥義はその血を開放し、巨大な、十尾の化け猫となるもの。

一輝に片思い中。

九頭原刃（くずはらもんめ）

日本の『席組み』の『第七席』、登録コードは『刀使い』。

現九頭原家党首。

その奥義は全ての刀を使うことが出来、それらの刀を統合してさらに強い刀を作ることが出来る。

一輝に片思い中。

星御門鈴女（ほしみかどすずね）

日本の『席組み』の『第八席』、登録コードは『式神使い』。

奥義は、自分の身に封印した式神を使役するもの。

土御門殺女（つちみかどあやめ）

日本の『席組み』の『第九席』、登録コードは『金剛力』。
奥義は、仁王からその純粋な力を借り受け、それを振るうというもの。
の。

一輝に片思い中。

雷剛拳（らいごうこぶし）

日本の『席組み』の『第十席』、登録コードは『雷撃』。

奥義は、自分の身に雷又は神鳴りを降ろし、使役するもの。

以下、ギフトとかについてです。

『無形物を統べるもの』

名前の通り、形のないものを操ることのできるギフト。形がなければ基本なんでも、水だろうが火だろうが雷だろうが重力だろうが空気だろうが魂だろうが操ることができる。ただし、人や生物の体内にあるものは操れず（例外あり）、感情などもまた形はないが操れない。

生まれつき所有していたギフトではなく、『歪み』の一体であるスイミが自ら一輝と契約し封印されたことで得たギフト。

大本となった存在であるスイミが生と死、限らない無を所有していたために、開放することで『■■■■■■■■■■』という疑似創星図を使うことができる。

ギフトそのものは何の制限もなく使えるものなのだが、得た当初六歳であり歪みの封印は体に対する負担が大きいだろうと星夜が封印を強めたために『外道・陰陽術』との併用ができず、またスイミとの契約によって使うたびに生命力を消費していた。

現在では神成りの際に星夜のかけた封印が解け、スイミとも対価なしという形で再契約したためにそういった制限は一切なくなっている。

『無限書庫』

ヴァチの封印によって得られるギフト。

効果としては、自分自身の脳とは別の記憶場所を得て、その場所に

無限に近い本棚と、そしてその本棚を満たすほどの量の本がしまわれているようなイメージ。

そこに収められている本には、妖怪や魔物、霊獣、神といった様々な「普通でない」者のことがすべて記されている。

基本的には意識して繋げない限りそこにあるものを読み解くことはできないが、繋げれば一瞬でほしいデータを得ることができる。

一輝と湖札がヴァチを半分ずつ封印していた間は、二人ともが別の記憶場所を得て、一輝のほうには空の本棚が、湖札のほうには本が存在していたような形になる。それゆえ、一輝は何もなかったが、湖札は思い浮かべるだけで相手の情報を知ることができ、『言霊の矢』と組み合わせることでそれはもう無茶苦茶なことをしていた。だが、そのデータを取り出すのには少しばかり時間がかかってしまう形に。イメージとしては、図書館の本が全部ぶちまけられていて、その中から欲しいものを探す感じ。

『陰陽術』

一輝が二十九話の終わり寸前まで有していたギフト。

奥義を習得していない、『卵』の状態の陰陽師全員が持っているギフトで、奥義を習得するとその奥義の名前にギフトネームが変化する。

この状態で出来ることは、式神の展開、使役、妖刀の使用、お札の使用、作成、といった基礎的なことだけ。

だが、高位な式神はこの状態では使うことが出来ず、妖怪との式神契約も交わすことが出来ない。

妖刀は低ランクのものであれば間違いなく使うことが出来、高ランクのものは使い手の技量次第になる。最高ランク、『神刀』に近いランクのものは妖刀自身が使い手を選ぶため、この時点でも使うことが出来る可能性はある。

『外道・陰陽術』

一輝が二十九話の終わりで習得したギフト。

まず、『陰陽術』で出来ることは全て出来、その精度は比べ物になら

ないものになる。

高位な式神を使うことが出来るかは本人の技量しだいだが、妖怪との式神契約も行うことが出来る。

『鬼道』の一族に伝わる奥義のカテゴリーのようなもので、かなり多くのことが出来る。

・『妖使い』

『外道・陰陽術』に含まれる奥義の一つ。

自分の檻の中に封印されている魂に仮初の肉体を与え、開放、使役する奥義。

普通の妖怪、魔物は「さあ、百鬼夜行の始まりだ！」と言う言霊で開放することが出来るが、霊獣、神を召喚するにはそいつら専用の言霊を唱える必要がある。

『外道・陰陽術』の基礎に当たる奥義で、継承した者全員が使える。

・『妖武装』

『外道・陰陽術』に含まれる奥義の一つ。

妖怪の魂と妖刀とを混ぜ合わせ、新たな武器にする奥義。

その際、素材とした妖怪の属性を限界まで高めて発動することが出来る。

・『憑依』

『外道・陰陽術』に含まれる奥義の一つ。

自分自身に妖怪の魂を憑け、その妖怪となったり、その力の一部を発動する奥義。

・『百鬼武装』

『外道・陰陽術』に含まれる奥義の一つで、一輝のオリジナル。

檻の中身全部を妖刀に宿らせて武器にする奥義。

その霊格を開放して顕現させることも、吸収して自身の身に力を宿らせることも、武器としてそのまま使うことも出来る。

・『神成り』

『外道・陰陽術』に含まれる奥義の一つ。

文字通り、神になる奥義。発動するには、檻の中に神がいて、そいつが自分の手で倒したやつであるか、協力してくれるヤツである

か、どちらかの必要がある。

その際、かけられている封印があったのならそれのうちいくつかは解ける。

・『百鬼統合』

『外道・陰陽術』に含まれる奥義の一つで、一輝のオリジナル。

檻の中に存在する全ての霊格を一時的に統合し、そののちに自らの霊格と統合させるもの。

『憑依』のように自分の種族を書き換えるのではなく、そのままでのみを得る。

・『百鬼統一』

『外道・陰陽術』に含まれる奥義の一つで、湖札のオリジナル。

女のみが会得することができ、鬼道の一族の長の檻の中に入り、自分の檻と繋げるもの。

・『???』

『外道・陰陽術』に含まれる、いまだ明かされていない奥義の数々。

本編にて登場次第、更新。

『言霊の弓』

湖札が身に宿すギフトの一つで、この世ならざるものの霊格を直接穿ち、削る弓矢。

ただし、発動するためには対象に関する知識を言霊にして、矢に乗せる必要がある。

始めて歪みとであった際に、とある女神より与えられた。

『鬼道流』

鬼道の一族が作り出した数々の技。

鬼道流剣術

攻^{こう}撃用の剣術。

第一ノ型『鬼突^{きとつ}』

突きの技で、基本的には何連撃かで放つ。

元は喉などの急所を連続で突く技であり、一輝はそういった

使い方をする。

第二ノ型『鬼面』

鞘をかぶせた状態の刀で、鞘を掴んで後ろにいる敵の額に柄頭をぶつけるもの。

指南書には相手の鼻を潰すようにと書かれている。

第三ノ型『上段、鬼面』

鬼面を改造した技で、劍の腹や峰で相手の顔を叩き潰すわけ。

第十ノ型『一角獣』

半身にした体をさらに捻り、一気に解放して突きを放つ技。

一点集中の破壊力が基本的なもののだが、使う人の腕によつてはダメージを体中に流すことができる。

第十八ノ型『千本斬り、鬼直』

上段に構えた刀を勢いよくふりおろし、斬激を放つ技。

名前の通り、放つたら木を千本斬り倒すほどの威力を持つ。

居合 名前の通り、居合の技。

第五ノ型『鎌鼬』

ものすごい速度で居合切りを放ち、空気の刃技。

一人で放とうとすると筋断裂する危険すらある技で、よほどの事がなければ使わないようにと伝えられている。

一輝はこれをスレイブの補助を含めることで安全に放っている。

竜退治 対竜（龍）専用の劍術

第三ノ型『鱗殺ぎ』

抜刀術で、竜の鱗を削ぐ……と言うより、砕き、殺していく技。

鬼道の一族の奥義と併用する技。

鬼道流混成術

特殊なケースでのみ使う事の出来る技。体術から劍術まで

様々なもので技がある。

第六ノ型『霞投げ』

形のない相手を掴み、背負い投げの要領で投げる技。
呪力をうまく手に纏わせるコントロールが必要になってくるので、使うのは賭けになってくる。

第九ノ型『返しかえし』

物理的要素ではなく呪力などの要素を多様に含む技を刀にからめ捕り、撃ってきた本人に返す技。

プロローグ プロローグという名のオリ主紹介

ある冬の日、彼『寺西 一輝』は家のベッドの上でラノベを読んでいた。

最近、バイトで入ったお金を全てつき込んだので、相当な量である。冬休みだからもうすでに五日間ずっと読んでいる。

今日もすでに読み始めてから十二時間、さつき高校の同じクラスの知り合いにメールで言ったら、『少しは家から出ろ。』と言われた。気にしない。

種類を問わず、読書が好きな人はわかってくれると思う。

「あーあ、どうして人間は睡眠をとらないといけないうらさう。

早くこのラノベノ山を読みきって、面白いことを探しに行きたいのに。」

自分で買ってきておいて、勝手なものである。それに、お前ならとらなくても問題なく動けるだろ、一生でも。

「この場所にながら何か面白いことないかな」

あるかなもん。どっちか片方を選べ。

「よし。全部持って出かけよう。」選ぶ気なしだ。

と言うと、一輝は何もないところをふすまを開けるようにして『空間に穴を開けて』そこに既読、未読問わず持っている本を全て入れた。

そしてそのまま、今読んでいる本と携帯、ICレコーダーを持ち、ICレコーダーの予備の電池をぎつと千本ほどとり、それもさつきのように『空間に穴を開けて』そこにしまった。

一輝はたまにもものすごく慎重になる。どれくらいかという、慎重の度が過ぎすぎて、周りが何も言わなくなるほどだ。

そして持ち物が全てそろったので出かけるために部屋から出ようとした。

否、正確には、『出かけようとした』である。

なぜなら、いざ家を出ようとしたら急に窓から手紙が入ってくるのを見たからだ。

「え、うそ!? なにこれ、スツゲー面白い!!」

その手紙をつかみ、裏返してみるとそこには『寺西一輝殿へ』と達筆で書かれていた。

「あれ、俺宛だ。」

少し驚いた。ほかの人宛で、それを読んで楽しむなり、誰かに届けるなりする気だったからだ。

「こんな届け方をするような物好きな知り合いはいないと思うんだが……まあいつ

か。面白い事態なのは変わらないし。」

そういうと、一輝は封を切り、中身を見た。

すると中にはこうかかれていた。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。

その才能を試すことを望むならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界のすべてを捨て、

我らの『箱庭』に来られたし』

「んな事を言われてもな……財産は全部持ち歩いてるし、そもそも行き方……」

とぼやいていたら、急に場所が空に変わった。

|||||

「うお!?!」

「わっ」

「ぎゃー!」

空にいたほかの三人と一輝は同じ感想を抱いた。

《呼び出したやつ……絶対に絞める。》

YES!ウサギが呼びました!
問題児たちとの出会い

現在落下中

絞めることを決めたはいいが、四人とも落下するのを止められるわけではなく、ただ呆然と落下している。

一輝にいたっては《あー……落ちてるなく。》とか考えている。のんきだなおい。

《こっからどうするのが面白いかなく……湖が下にあるみたいだから落ちても死なないだろうし、水も綺麗そうで冷たそうだからこのまま落ちて思いつきりもぐったり泳ぐのも楽しいかなく。》本当にのんきだな。ってか、くそうって理由で決めていいのか……

そして、ほかの三人は、一輝のようにどうでもいいことを考えていたり、呼び出したやつをどう絞めるかを考えたり、遠くのほうを眺めたりしている。のんきも召喚の条件なのか?

そしてそのまま四人は《あ!!》落ちて……っておい!!急に大声を出すな!!ほかの三人も思考を停止してそっちを見てるぞ!!

《まずい。このまま落ちると……》落ちると?

《携帯とICレコーダーが壊れる!!!!》っておい!!

そんなことかよ!!もつと重要なことは今、いくらでもあるだろ!急に異世界に呼び出されたと思ったらそこが空で、落下中なんだぞ!!!

《これより重要なことなど、今、起こっていない!!》ナレーシヨンに突っ込むな!ってか、どうして突っ込めた!?偶然か!?

《壊れたら音楽が……アニソンやボカロが聴けなくなるんだぞ!?》んなこと知らん!!

《携帯とICレコーダーが壊れて俺が耐えられる可能性は……ない!!》だから、お前は誰に対して言ってるんだ!?

とりあえず、一輝は水には落ちないことに決めたようで、足が下に

なるようにし、下に向かって小さな紙を投げた。そして次の瞬間：

一輝は水の上に立っていた。
ちなみに、大きな水柱が三つ、上がっていた。

|||||

そんな感じで一輝たちが無事、召喚されたことを確認した黒ウサギは召喚予定の湖に向かいながらこんなことを考えていた。

《今回呼び出した方々について「主催者」は「今回紹介した人たちは・・・人類最高クラスのギフト所有者だ・・・うん。人類最高クラスのギフト所有者ではあるんだが・・・それと同時にかなりの問題児だ。どんな事態になるかは私にも解らない。念のために胃薬を準備しておけ。」と言っていました。それほどに押す方たちならきつと、黒ウサギたちのコミュニティの復興が夢じゃなくなるかもしれない。しかし・・・あの方が冗談を言うなんて・・・少し意外です。おっと、あそこの湖ですね。》

実は「主催者」が言っていたことには一切冗談が含まれていないのだが、黒ウサギがそのことを知るのもう少し、ほんの少し先のことである。

|||||

《ふう・・・どうにか間に合った。一応確認しとくか。えーつと・・・携帯とICレコーダーは・・・両方とも動くな。これで、万事解決。》
してねえよ。まだ、何で呼び出されたのかすらわかってねえだろ。

そんなことを考えながら起動させたICレコーダーのイヤホンを左耳に入れていると（基本的に両耳には入れないのだ）一輝の耳に「にゃー！にゃー！」と少しあせったような猫の鳴き声が聞こえた。なので一輝は少し自分の聴覚をいじると、その鳴き声に耳を傾けた。

『お、お嬢！溺れる！溺れてまうー!!』

なんか足元にいるみたいだし、ほつとくと本当に溺れ死にしそうだったので、一輝はしゃがんでその三毛猫を拾い上げた。

「おい。大丈夫かー？なんだか歳いつてるみたいだし、こんなスカイダイビングしたらだめだろ。今いくつ？」

『うるさい！わしも年取りたくて年取ったわけでも、やりたくてスカイダイビングしたわけでもないわ!!』

「よし。そんだけ元気に文句が言えるなら大丈夫だな。えーつと…この猫君の？」

そんなことを三毛猫と話しながら陸に上がると、なにかに驚いたように、目を丸くしてこつちを見ている女の子に聞いた。すると

「……うん。私の友達。ありがとう。」

「どういたしまして。」

そして俺はその子に猫を渡しながら一緒に落ちてきた二人に目を向けた。

「ったく、普通、急に空に投げ出すか？場合によっちゃその場でゲームオーバーだぞ。まだ石の中に呼び出されたほうがよっぽど親切だ。」

《石の中に呼び出されて、そこからどうやって出るんだよ……》

「……いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」

《よかった。俺がおかしいわけじゃないんだ。》

「俺は問題ない。」

《ないのか!?!》

「そう。身勝手ね。」

《その程度のリアクションで済むのか!?!》

二人の男女はフン、と互いに鼻を鳴らして服の端を絞りだした。

《……よし。疲れるからこれからはいちいち突っ込むのはやめよう。きつと、突っ込みキャラが現れる。》現実逃避である。

そんなことを心の中で決めながら一輝は空間に穴を開けてそこからタオルを四枚取り出すと、それをさつき言い争っていた男女にむけて、

「言い争いなんかしないで一回落ち着け。後、風邪ひくからタオルどうぞ。」

「おつ、サンキュー。」

「ありがとう。」

二人ともお礼を言うのと一輝からタオルを受け取り、髪などから拭き始めた。

「はい、そつちの君も。君の分と三毛猫の分で二枚。」

「・・・ありがとう。」

茶髪の女の子もお礼を言うのとタオルを二枚受け取り、三毛猫を拭き始めた。

《いや、常に持ち物を空間に穴を開けて全部持ち歩いててよかつた。》

一輝はそんなことを思いながら、倉庫の中身を確認する。

「さて、まず間違いないだろうが、お前らにもあの変な手紙が？」

「そうよ。でも、まずはその呼び方を訂正して。——私は久遠飛鳥よ。以後、気を付けて。そこの猫を抱えているあなたは？」

「・・・春日部耀。以後よろしく。」

「ええ。よろしく春日部さん。次に、タオルを貸してくれた親切なあなたは？」

「えつと・・・親切つてのは、過大評価過ぎるんだけど、俺は寺西一輝。趣味は読書とアニメと散歩と面白いこと探し。これから長い付き合いになりそうだけど、どうぞよろしく。あと、できれば名字の寺西じゃなくて名前の一輝のほうで呼んで。」

「解ったわ、一輝君。最後に野蛮で凶暴そうなその貴方は？」

「ずいぶんと評価に差があるな。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子そろった駄目人間だから、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれよ、三人とも。」

「そうして欲しいなら取扱説明書を作ってくることね。そうしたら考えてあげるわ、十六夜君。」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様。」

心からケラケラと笑う逆廻十六夜

傲慢そうに顔を背ける久遠飛鳥

我関せず無関心を装う春日部耀

もはやそこに参加すらせず、釣りを楽しんでいる寺西一輝

そんな彼らを物陰から見ている黒ウサギは、

「うわぁ・・・なんだか皆さん問題児って感じですねえ。まさか」主催者「が言ってたことが本当だなんて・・・」

黒ウサギは召喚した方々が協力する姿を想像できず、ため息を吐きながら肩を落とすのだった。

初の黒ウサギ弄り

「んで、なんか異世界に召喚されたみたいだが何で誰もいねえんだ？
普通招待状にかかれてた箱庭つてのを説明するやつがいるんじゃないのか？」

「勝手に呼び出したのだからそうするべきなのでしょうけど、ずいぶん
と落ち着いているのね。」

「状況がまったたくわからないんだから落ち着いて考えるしかねえだ
ろ。」

「・・・この状況で落ち着きすぎてるのもどうかと思うけど・・・」
《まったたくです。これでは出て行きづらいではないですか・・・》黒ウ
サギは心の中で突っ込みを入れた。

「まあまあ三人とも、腹が減っては戦はできぬというし魚でも食わな
い？釣れたてが焼けたぞ。三毛猫には生な。」

『「「ありがとうございます。」』
「つて、落ち着きすぎでございますー!!出て行きづらいではありません
んか!!」

黒ウサギはつい突っ込みを絶えられず大声を出しながら茂みから
出てきた。出てこれてんじやねえか。

ちなみに一輝は《やった、突っ込みキャラだ!!》とさつき望んだこ
とがかなって喜んでる。

「お、やっぱそこにいたのか。」モグモグ。

「何だ、貴方も気づいていたの？」モグモグ。

「当然。そっちの猫抱えてるやつも気づいてたんだろ？」モグモグ。

「・・・風上にたれたらいやでも解る。一輝は？」モグモグ。

「気づいてたから無理やり引きずり出すために魚を焼いた。ついで
に、おいが向こうに行くようにした。」モグモグ。

『小僧、やること意外と容赦無いんやな。』モグモグ。

「とつてもおいしそうにモグモグしながらしゃべらないでください!!
うらやましいじゃないですか!!黒ウサギにもください!!」怒りよりも
食欲が勝った。とつても物欲しそうに魚を見ている。

「はい、どうぞ。釣りたて焼き立てだ。」

一輝は焼き魚を渡した。もともと黒ウサギの分も釣っていたのだ。「ありがとうございます。いただきます!!」モグモグモグモグ!!

黒ウサギは夢中で魚を食べ始めた。そして、黒ウサギが出てきてから、ずつと興味深そうに黒ウサギのウサ耳を見ていた耀が隙ありとばかりに黒ウサギの背後に立ち、黒ウサギが魚を食べ終わると同時にウサ耳の根もとをつかむと、思いつきり引っ張った。

「ふう〜ご馳走様で、って、何をするんですか!?!触るまでなら黙って受け入れますが引っこ抜きにかかるとはどういう見ですか!?!」

「・・・どうなってるのか気になった。つまりは、好奇心。」

「問題児にもほどがあります!」

「へえ、そのウサ耳は本物なのか。」

「・・・じゃあ私も。」

春日部のやっていることをとても楽しそうに見ていた十六夜が右から、やっていいのか判断できなかったが、最終的には好奇心が勝った飛鳥が左から思いつきりウサ耳を引っ張り、黒ウサギの悲鳴が近隣にこだました。

ちなみに、一輝はその様子を楽しそうに見ながら携帯で写真を撮っていた。

「あ・・・ありえないですよ。まさか耳を離してもらうまでに小一時間、そして、落ち着いて話を聞いてもらうまでに小一時間、計二時間もかかってしまうとは。」

「まあまあ、ドンマイ黒ウサギ。むしろこの面子でその程度の時間ですんだことをよかつたって思ったら?」

「なんだか、いい事を言っているように聞こえますが、後半の一時間の原因は一輝さんが撮った写真なのですよ!!」

一輝は、ほとんど連続撮影で撮っていたため、かなりきわどい写真も含まれていてそれで四人は一時間盛り上がったのだ。

「まあそれはおいといて」

「おいとかないでください!!」

「おいとかないといつまでたつても先に進まないぞ?」

黒ウサギは反論ができず仕方なくそれをおいといて、話を進めることにした。

箱庭の説明

「はあ……。それではいいですか？いいですよ？いいですよ？」くどいぞ、黒ウサギ。」黙らっしゃい!!では、ようこそ、”箱庭の世界”へ！我々は皆様のように恩恵、ギフトを持つものだけが参加できる”ギフトゲーム”への参加資格をプレゼントさせていただくために、このたび召喚させていただきました。」

「ギフトゲーム？」

「YES！すでに皆さんお気づきでしょうが、あなたたちは普通の人間ではありません。その力はさまざまな修羅神仏、悪魔、精霊などから与えられたものです。”ギフトゲーム”は恩恵を持つもの同士が競い合うゲーム、この箱庭は強力なギフト所持者がオモシロオカシク生活するために作られたステージなのです！」

「初歩的なことだけど、私たちを呼び出した”我々”とは貴女を含む誰か、もしくは団体なの？」

「YES！異世界から召喚されたギフト所有者は箱庭で暮らすにあたってあまたある”コミュニティ”のいずれかに属していただきます。」

「嫌だね。」

「属していただきます！」ギフトゲーム”とはギャンブルのようなもので、勝者は”主催者”の提示した品をゲットできるという仕組みになっています。」

「………”主催者”って誰？」

「ゲームによって様々です。暇を持って余した修羅神仏が人を試すためと称して暇つぶしのために開催することもあれば、コミュニティの力を誇示する、拡大するために独自開催することもあります。前者は主催者が主催者だけにハイリスクハイリターンです。リスクとしては、ゲームが難題だったり命の危険があることもあります。リターンとしては、新たな”恩恵”を手にすることも可能です。」

後者は参加するためにチップが必要です。参加者が敗退した場合はチップを全て開催者である”コミュニティ”に寄贈されます。」

「後者は結構俗物ね・・・チップには何を？」

「そちらもまた、様々です。金品・土地・利権・名誉・人間・・・ギフトなどを出せます。相手からギフトを奪えばより高度なギフトゲームに挑むことも可能となりますが、逆に奪われてしまえばそれ以後の“ギフトゲーム”では勝つことはほぼ不可能になるでしょう。」

《黒ウサギは今、愛嬌たっぷりの笑顔でいったが・・・これは挑発に近いな》

一輝は自分を呼び出したやつらについて知ることを優先していた。箱庭の仕組みなんて暮らしながら理解すればいいという考えの下である。

「さっき言ってた“コミュニティ”ってのにはもちろん、黒ウサギも所属してるって考えでいいのか？」

「はい。もちろんでございませう。」

「じゃあ、その“コミュニティ”について質問いいか？」

「・・・はい、どうぞ。」

初めて黒ウサギが回答するのにためらったようだが、腹をくくったようだ。

「細かいことを聞く気は無いから安心しろ。そのコミュニティってにぎやかか？」

《どうせ所属するならにぎやかで毎日退屈しないところがいいからな。》

その質問が予想していたものとはまったく違ったようで一瞬ぽかんとしたが、すぐに気を取り直すと、

「はい。子供がたくさんいて、とつても賑やかですよ!!」

と答えた。

その答えに対して一輝は「了解」とだけ答えると先を進めるように黒ウサギにジエスチャーをした。

「さて、ほかに質問はありますか？あるなら黒ウサギには全ての質問に答える義務がありますからお答えしますが？」

「じゃあ、俺が最後に質問いいか？」

今まで静聴していた十六夜が今まで浮かべていた軽薄な笑顔を消

し、威圧的な声を上げているので黒ウサギは、構えるように聞き返す。「どういった質問ですか？もうゲームや箱庭についてこの場で説明できることは説明してしまいました。」

「そんなものはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、今ここでお前に聞いてもそれが変わるわけじゃねえしな。何か変えたければこのボスにでも直談判すればいいんだ。俺が知りたいのはたった一つ、手紙に書いてあったことだけだ。」

そういうと、十六夜は視線を黒ウサギからほかの三人、巨大な天幕に覆われた都市と移し、そのまま何もかもを見下すような声で、

「この世界は・・・面白いか？」と一言。

「」

ほかの三人も無言で返事を待つ。

手紙には“世界の全てを捨てて箱庭に來い”とまで書いてあったのだから、それに見合うだけのものがこの世界にあるのか、それこそが四人にとって一番重要なことだった。

そして、それに対する黒ウサギの答えは

「YES。」 “ギフトゲーム”とは人を超えたもののみが参加できる神魔の遊戯。外界にあるものよりも確実に面白いことを、黒ウサギは保証いたします。」

四人を十分に満足させるものだった。

|||||

あの質問を最後とし、黒ウサギ御一行は箱庭へと向かい始めた。

なんでも、黒ウサギたちのコミュニティで歓迎の準備ができていた。そうだ。

そんな感じで、一輝は周りの風景を楽しみながら歩いていると、

「んじゃあ、ちよつと世界の果てを見に行ってくる。」

と十六夜から話しかけられた。

「黒ウサギにはそう伝えとけば?」

「ああ。聞いてきたらそういつといてくれ。」

「了解。」

一輝の返事を聞いた十六夜は、ものすごい勢いで駆け出した。

《初速でよくあんだけ出るな。》

一輝はそんなことを考えながらICレコーダーを取り出し、イヤホンをさすと聞く曲を選び出した。

「・・・ねえ一輝君?」

すると、そのICレコーダーを不思議そうに眺めながら飛鳥が声をかけてきた。

「飛鳥、何かよう?」

「用というほどのことでもないのだけれど、それって何?あと、さつき写真をとっていた小さな機械も。」

それを聞いた一輝は携帯も取り出すと、

「携帯とICレコーダーのこと?」

「携帯にICレコーダーって言うのね?」

「ああ。携帯は携帯電話の略で、そのまま携帯できる電話のこと。

これは写真とか動画も取れるしメールもできる。」

「メール?」

「こんな感じで文章を打って相手に送ること。まあ、この世界では使えそうに無いけど。」

「へえ、便利なのね。ICレコーダーは?」

「これの一つ目の使い方は録音すること。何かしゃべってみて?」

と言うと一輝は録音ボタンを押し、飛鳥の前にICレコーダーを出した。

「ええっと・・・久遠飛鳥よ。これでいいの?」

「ああ、十分。」

そして一輝は音量を上げ、今録音したものを再生した。

「ええっと・・・久遠飛鳥よ。これでいいの?」

「きゃ!!」

さつき言ったことがそのままレコーダーから流れて飛鳥はとても

驚いている。

その反応に満足した一輝は説明を続けた。

「二つ目は音楽を聴くことかな。」

そして一輝はG線上のアリアを再生した。

「これは・・・いい曲ね。」

「俺もお気に入りなんだ。ほかにもいろんな種類の曲があるよ。たとえば」

次はボーカロイドの曲を再生した。

「これはなんというか・・・人が歌ってる感じがしないわね・・・」

「まあ、歌ってるのは機械だからな。」

「・・・なんだか、理解しづらいわね・・・」

「普通そうだよ。」

そんな会話をしていると黒ウサギが誰かを見つけたようで声を上げる。

「ジン坊ちやーん！新しい方々を連れてきましたよー！」

《へえ、あれがコミュニケーションのメンバーか。坊ちゃんってことは、結構上のほうの立場なのかな？》

そんなことを考えながらICレコーダーと携帯をポケットにしまおうとして、さっき水没しそうになったことを思い出し空間に穴を開け、そこにしまった。

「お帰り、黒ウサギ。そちらの御三方が？」

「はいな、こちらの御四人さまが・・・三方？」

黒ウサギはジンの言葉に違和感を感じ、あわてて振り返り、そのまま固まった。

「・・・あれ？もう一人いませんでしたっけ？全身から“俺問題児!!”ってオーラをはなってる殿方が？黒ウサギの錯覚ですか？」

「ああ、十六夜なら聞いてきたら世界の果てを見に行つてくるって伝えてくれて言つてあつちのほうに」

一輝は断崖絶壁があつたほうを指差す。

「な、なんで止めてくれなかつたのですか!？」

「別にいいかなど。」

「ならせめて、黒ウサギにその場で伝えてくれない?」

「面倒くさかったし、飛鳥と話してたし。飛鳥と耀だったらどうしてた?」

「面倒くさいから、聞かれるまでほうちね。」

「以下同文。」

黒ウサギはorzのポーズをとった。

「ところで黒ウサギ、あっちのほうには大量の幻獣がいたように見えただけで、いいの?」

「はっ、そうでした。このままだと十六夜さんが幻獣のギフトゲームに!!」

「それは難しいの?」

「かなり。幻獣は強力なギフトを持っているものが多いので。」

「あら、じゃあ彼はもうゲームオーバー?」

「ゲーム参加前にゲームオーバー?・・・斬新?」

「そんなゲームがあったら、話題を呼びそうだな。悪い意味で。」

「冗談を言っている場合ではありません!ジン坊ちゃん。十六夜さんをお捕まえてまいりますので。」

「いつてらっしや〜い。」

一輝の間の抜けた見送りの声を背に黒ウサギは駆け出した。

「ええと・・・簡単に自己紹介を。コミュニティのリーダーをしているジン・ラッセルです。年齢十一になったばかりの若輩ですがよろしくお願ひします。」

「ええ、よろしく。私は久遠飛鳥よ。そこで猫を抱えてるのが」

「春日部耀」

「んで、俺は寺西一輝。早速だけど、一つ頼まれてもらっても?」

「は・・・はいかまいませんが。」

一輝はジンの了承を聞くところちょっとおかしな頼みごとを言った。

「ありがとう。じゃあ、後で俺が来るから、今から出てくるものを俺に渡しといて。」

「は・・・はい?今あなたはここにいるのに、ですか?」

「うん。よろしく。」

そう言う和一輝の体から煙が上がり・・・

今まで一輝がいたところに一枚の小さな紙が残っていた。

自由に散歩

時間はさかのぼり、召喚された四人が湖に落ちたころ、一輝は一人、森の中を歩いていた。

「ふう〜。やっぱり森の中はいいよな。木々に囲まれてて、涼しいし。勝手に抜け出して正解だったな！」自由すぎるだろ。何やってんだ。《別に、ただ落ちていく際に式神を投げて、そいつを俺に化けさせただけだよ?》

だ・か・ら、何でこっちに対して返事を返してんだ！聞こえないはずだろ!!

余談だが、式神が感じた五感は一輝も感じる事ができるため、湖での会話はリアルタイムで聞こえている。

《ふうん。ギフトゲームね、それは楽しそうだ。でも今は・・・》

一輝は少し開けたところに出ると周りを見回しながら一言、

「このすばらしい景色を楽しみますか。ざつと三、四時間くらいはのんびりできるだろ。」と言った。この目的のために一輝は式神に命令し、黒ウサギを弄ることになる。

そんなことのために弄るな。

そんな感じに、のんきに歩いていると急に背後から声がかかった。

「ここ、いいところですよ。空気は綺麗ですし、自然はたくさんあります。」

「!？」

一輝は背後を取られたことに驚き、あわてて振り向く。

するとそこには巫女服を着た黒い長髪で、一輝と同じ年ぐらいの十五、六歳ぐらいの少女が立っていた。

|||||

さて、一輝は驚きはしたものの、すぐに落ち着きを取り戻してレジャーシートを敷き、簡単なティーセットを並べると、何をしだしたのかと見ていた少女に「どうぞ座って」と言い、二人で座った。

メニューとしてはパックの紅茶にチーズケーキだ。

「さて、じゃあ自己紹介からでいいかな？」

「はい、どうぞ」

「では、俺は寺西一輝。趣味は読書に散歩にアニメ。今日箱庭に召喚されて、いい景色が見えたから散歩してた。一輝って呼んで。君は？」

「私は六実鳴央(むつみなお)といいます。趣味は散歩などです。ここはお気に入り場所なので結構頻繁に来てます。では、私も鳴央でいいです。」

二人は話しながら食事を始めた。

「じゃあ、質問タイムにしてもいいかな？お茶にお菓子もまだまだあるし。」

「はい、一輝さんからどうぞ。」

「じゃあ一つ目の質問。何であの場で俺に話しかけてきたの？」

「ええっと・・・いつも誰も来てない所に人がいましたので、気になりました。」

「ここっていつも人がいないの？こないところなのに。」

「ここはとてもしい場所なのでそんなにたくさんではないにせよ、人は来ると思っていた一輝はそう聞き返した。

「はい。このあたりには幻獣がいますから。」

「危険だったことか。次はそちらからどうぞ。」

「ではこちらから。一輝さんはもうどこのコミュニティに所属するかは決まっていますか？」

「いきなりそれをぶっこんで来る？」

「い、いきなりって言うほどのことでしょうか？」

「言うほどのことだろ。普通は目的の質問は最後に来るものでは？」

「ももも、目的って一体何のことですか？心当たりが無いのですが。」

《ごまかしきれないが・・・まあいつか。どっかで解るだろうし。》

「俺の勘違いならそれでいい。」

「ホッ。」

《隠す気あんのかな・・・》

「まあ、今のところは俺を召喚したやつがいるコミュニティに入る予定だけど。」

「なんていうコミュニティですか？」

「名前は聞いてないけど、黒ウサギってやつがいる。」

「実際にウサ耳の生えてる？」

「そいつ。」

そう答えると鳴央は、

「それは・・・もし、一輝さんが箱庭で有意義な生活をしようと思ってるなら、やめておいたほうがいいです。」

と答えた。

「？なんで？あいつはけっこう強そうだし、そのコミュニティも十分に強いと思うんだけど？」

確かに、黒ウサギは何かを隠しているように話しているので、コミュニティについて何かあるとは思うのだが、強さとは関係ないと一輝は踏んでいた。

しかし、鳴央が言ったことは、その想像とはまったく違う事実だった。

「いえ、あのコミュニティはかつてはとても強いコミュニティでしたが、魔王に襲われてしまいとても、強いとはいえません。」

一輝は何かがあったのかが気になると同時に魔王に対するものすごい興味を抱いていた。

コミュニティの現状

《魔王か・・・なんて・・・面白そうなんだ。》

一輝は鳴央の言った魔王という言葉にもものすごい興味を示していた。それこそ、コミュニティの現状以上に。

いいのかそれで・・・

それを一輝は表情に出しながら声には出さず表情には出して、鳴央に質問した。

「とりあえず、黒ウサギたちのコミュニティの現状を説明してもらってもっ？」

「はい。ではコミュニティというのがどういったものなのかから始めさせていただきます。コミュニティとは読んで字のごとく、複数名で作られる組織の総称です。」

「動物や幻獣で言う群れのようなもの？」

「はい。そして、コミュニティはコミュニティとして活動するにあたって、箱庭に“名”と“旗印”を申告する必要があります。旗印はコミュニティの縄張りを主張する大切なもので、あの天幕の中に入ると商店や建造物になにかしらの紋が入っていますし、コミュニティに所属している人は、自分のコミュニティの旗印が刻まれた小物を持っていることが多いです。」

「その旗印が身分証明のようなものになるから？」

一輝は空になった自分と鳴央のカップに紅茶を注ぎながらそうたずねる。

「あ・・・ありがとうございます。はい。一部のお店では入る際にコミュニティの名前を尋ねるか旗印を見せるように言ってきますから。」

《なるほど・・・身分が確かじゃないと、取引をしても損をする可能性が高いからか。そして、“ギフトゲーム”の仕組みは・・・》

一輝は旗印と名の重要性を理解しながら、同時に箱庭の、“ギフトゲーム”の仕組みについても考え、一つの、最悪の推測を立てていた。「ここからが、黒ウサギさんのコミュニティに関することです。実際、

数年前までは黒ウサギたちのコミュニティは東区画最大手のコミュニティでした。」

「へえ、入らない方が良いつて言ってたから、最底辺なのかと思ったんだけど・・・」

「あくまでも、数年前は、です。そのころのコミュニティのリーダーはギフトゲームにおける戦績で人類最高の記録を持っていた人で・・・あ、いえ。今のリーダーが悪いというわけではないのですが・・・彼は比べ物にならないくらいに優秀で、東区画最強のコミュニティだったそうです。」

「なんだか、ものすごい歴史を持つてるコミュニティなんだな。」

「はい。」

「じゃあ、何で入らないほうがいいの？昔に比べて今がかなり劣っていたとしても、それだけの歴史があればいろんなところにパイプもありそうだし、十分有意義な生活が送れると思うんだけど。」

「確かに、劣っているだけなら十分に有意義な生活が送れるでしょう。しかし、彼らはぜったいに敵に回してはいけないものに目を付けられてしまったんです。」

《あつ、ここで話が戻るのか。》

「もしかしてそれが、最初に言ってた・・・」

「はい。魔王です。彼らは箱庭で唯一最大にして最悪の天災です。」

「そんな比喻を受けるようなやつらなのか・・・」

「残念なことに、一切比喻ではありません。」

「・・・マジで？」

「マジです。」

《それはさすがに・・・驚きだな。まさか、天災と称される生物がいるとは・・・》

さすがの一輝でも、驚いたようだ。

《ぜひ捕獲して、観察したい!!》

ぜんぜん驚いていなかった。ってか、んなこと出来るか。

「ちよつと気になったんだけど・・・それは倒したり、無効化したりしたらものすごく感謝されたりするような存在？」

本気で観察する気だ。

「はい。また、倒せば条件次第で隷属させることも可能です。」

捕獲可能だった。マジか……

《へえ？それは……そつちを目指して倒さないとな。》

一輝はへんな決心をした。

「魔王とは『主催者権限』というものを持つ修羅神仏が大体です。」

「『主催者権限』とは？」

「簡単に言ってしまうえば、相手を強制的にギフトゲームに参加させる権限です。」

「そんな危険なものを渡さなければ良いんじゃない？」

珍しく、一輝がまともな意見をまともな理由から出した。

明日は嵐かな？

「そうなのですが、元々『主催者権限』は罪を犯したものを裁くための試練、信仰心を裏づけするための試練、新しい進化を迎えるための試練、などといったことが目的で渡される権限ですから。」

「そのことを考えれば、渡さないってのは難しいわけか。」

「その通りです。なので、魔王でなくても『主催者権限』を持つものはたくさんいますし、先ほど言ったようなことが出来るものになら、修羅神仏でなくとも主催者権限を渡されることはあります。」

《ふむ……となると……》

「魔王とそうじゃない者との線引きは？」

「全ての『主催者権限』には「く」に対して使う場合、このゲームが正当であることを保障します」のようなことが書いてありますので、それに当てはまるものに対して行う限り、魔王の烙印は受けません。」

「なるほど。」

「魔王というものを理解していただけたようなので、話を戻しますが、彼らは魔王のゲームに強制参加をさせられ、地位、名誉、仲間、そして名に旗印までコミュニティとして活動していくために必要な全てを奪われてしまい、今は名無しのその他大勢、「ノーネーム」と呼ばれています。」

「ノーネームってのはいくつもあるのか？」

「はい。」

「となると、名と旗印が無いってのは不便だな。名前もどこのノーネームなのかわからないし……新しく作ることは出来なかったの?」
「可能でした。」

「じゃあ……」

作ればよかったじゃん、と続けようとした一輝の言葉をさえぎり、
鳴央は言った。

「しかし、彼らのうち残された人たちは、仲間たちが帰ってくる場所を守るために改名を選びませんでした。」

《仲間の帰ってくる場所を守るために、ね……帰ってくる保証も無いのに……よくやるよ……》

それは、一輝がかつて選ぼうとして、それでも選べなかった道である。

そして、だからこそ一輝の中に一つの決意が生まれようとしていた。

「彼らがあなたたちを召喚したのはコミュニティを再建し、コミュニティの名と旗を取り戻すために強力なプレイヤーが必要だったからでしょう。」

「茨の道だな。」

「はい。ですから……もう一度言いますが、有意義な生活を送りたいのなら彼らのコミュニティには入らないほうがいいです。」

一輝がしばし悩んでいると、鳴央が声をかけてきた。

「そこで、もしよろしければ私たちのところに来ませんか?」

「私たちって……鳴央のコミュニティ?」

「申請はしていませんが……そのようなものです。」

申請していない、というところに一輝は違和感を持ったが、それは後回しにした。

「何か、入るにあたっての条件みたいなものってある?」

「条件とは?」

「例えば、黒ウサギたちのところだと、魔王と戦わなくてはいけない、みたいな感じの。」

鳴央は言っているのかどうかを悩み、それでも言っておくことにした。

「はい。あります。」

《やっぱりか。》

「それはどんな？」

一輝はその内容をお互いの空のカップにもう一度紅茶を入れながら尋ねた。

「ありがとうございます。条件としては、神隠しにあっただきます。」

「神隠しって、人が急に消える？」

「はい。正確には、記録からも、人の記憶からもだんだんと消えていき、最終的には完全に忘れ去られます。」

「……マジ？」

「マジです。」

《そこまでとは……予想してなかったな。》

「ええっと……かなり驚いてはいるんだけど、いったんおいといて、他には？」

「とくにありません。」

《なるほど……後、判断に必要なのは一つだけだな。》

「じゃあ次の質問いい？」

「はい。どうぞ。」

「では、遠慮無く。」

そこで一回言葉を切り、深呼吸すると一輝は……

「君の目的と言うか、人を神隠しにあわせる理由って……何？」
最初のほうから気になっていた、目的について鳴央に聞いた。

A CAPTIVE TITANIA ①

「君の目的と言うか、人を神隠しにあわせる理由って・・・何？」

「そ、それは・・・それが私たちで決めた規則なので・・・」

「ダウト。」

鳴央が驚いたように、ビクツ、となった。

「ど、どうしてそんなことが・・・」

「いや、あの言い方で解らないのはよっぽどのお人よしくらいだろ。それに、この『ギフトゲーム』をするためにあるような箱庭で記憶、記録から消えるってのは・・・」

「それは・・・」

鳴央は反論できる材料がみつからず、うつむいて口を閉ざしてしまった。

「だから、俺は何か事情があるんじゃないかと推測した。」

「・・・はい。一輝さんのおっしゃるとおりです。私には目的があり、一輝さんをだまして神隠しにあわせようとしていました。」

「そうか。」

「はい。本当にすいませんでした。」

鳴央は謝ってすむとは思わず、それでも心の底から謝り、頭を下げた。

そして、それを見た一輝は・・・

「うん。許す。」

あつさり許した。

「はい。簡単に許してもらえるとはい・・・って、え？今なんど？」

「だから、許すって。ちゃんと謝ってくれたし、事情があったんだから。人を神隠しに合わせないといけないほどの事情なんですよ？」

「はい。」

「だったら問題ないよ。ところで、まだ質問タイムは継続中？」

「・・・どうぞ。」

鳴央は一輝が簡単に謝ったことと、今そんなことを聞くかと言う二つのことに戸惑いながら返事を返した。

「じゃあ質問。・・・その事情は何？ここまでかかわった以上知る権利はあると、俺は見たけど？」

「・・・解りました。」

そこで鳴央は一拍おき、

「それはこの森に魔王が一つのギフトゲームを設置したことが原因です。そのギフトゲームのせいで・・・私の大切な人は捕らわれてしまっているんです。」

「ここでも魔王か・・・」

「はい。詳しいことは『契約書類』を見たほうが早いです。ついてきて下さい。」

そういつて歩き出した鳴央に一輝は一言もしやべらずついて行っ
た。

|||||

「これです。」

鳴央が止まったのはさっきの場所から少し進んだところにある小さな鳥居の前だった。

そして、彼女は鳥居に貼り付けてある一枚の羊皮紙を指差した。
そこにはこう書いてあった。

『ギフトゲーム名 “A CAPTIVE TITANIA”

・プレイヤー一覧 この森で神隠しにあったもの全て

・登場人物一覧 村人全員

神隠し

妖精の女王

・プレイヤー側クリア条件 捕らわれの少女を解放せよ。

・プレイヤー側敗北条件 降参。

村人によって贄とされる。

・登場人物側勝利条件 プレイヤーの敗北による女王の解放。

・ 備考
しない。

ギフトゲーム中はこちらでは時間が経過

プレイヤーは勝利条件を満たしたら任意でギフトゲームを終了できる。

女王は霊格が一定量を超えた場合、解放される。

プレイヤーが勝利した場合、解放した少女はプレイヤーに隷属する。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

『ルインコーラー』印』

《ふむ…ギフトゲーム名から考えると、捕らわれの少女ってのはティターニアってことではないのかな？

ってか、景品つきって、なんか魔王のイメージが…》

一輝は自分の中にある魔王のイメージが崩れかけていた。

「質問だけど、鳴央が神隠しをする理由、捕らわれてる大切な人ってのはティターニアってことではないの？」

「はい。ティターニアは…音央ちゃんは私の妹なんです。」

《神隠しとティターニアが姉妹ってことは…》

「チェンジリング？」

「はい。元々は二人で一つの存在でした。」

「んで、今は神隠しとティターニアの二つに分かれた。だから姉妹ってことか。」

「はい。」

「じゃあ、このギフトゲームは、ティターニアを開放したらクリア？意外とどうにかなりそうだな。」

「どうにかなりそうって・・・まさかこのゲームに!？」

「もちろん。じゃなけりやなんでここに來てるの?」

「・・・神隠しにあつて、そのまま消えてしまふかもしれないの?」
「クリアすれば良いだけだ。」

鳴央のもつともな意見に対して、一輝は一瞬で答えを返した。

「なぜそこまで・・・?」

鳴央は一輝がなぜここまでしてくれるのか気になり、再び質問をした。

そして、この問いに対しても一輝は悩まもなく、

「なぜって・・・友達の問題を解決しようとするのは普通でしょ?

少なくとも、見捨てるって選択肢は昔捨てた。」

そう答えた。

「っ!？」

「さて、出してた式神も解除したし、武装も出来たから早く始めたいんだけど、鳴央は付いて来る?」

「・・・はい。私はギフトゲームが始まると、強制的にプレイヤーと同じ場所に転送されますから。」

「ふくん。この鳥居をくぐったらOK?それとも鳴央が俺を神隠しに合わせるの?」

「ええっと・・・どちらでも行けますが、どちらかと言えば鳥居をくぐったほうが難しいので私が神隠しに合わせたほうが良いかと・・・」

「よし。じゃあ鳥居をくぐろう。ほら、行くよ?」

そう言うで一輝は鳴央の手をつかみ鳥居をくぐっていく。

「あ、あのー!こっちのほうが難しいのですけど!？」

「どうせやるなら楽しそうなほうを!」

一輝はそんな勝手なことを言って鳥居をくぐりきった。

するとそこには、小さな村があった。

A C A P T I V E T I T A N I A ②

「・・・村だ。」

一輝は、ほかの言葉も出ず、ただそう言った。

そんなりアクションしか出来ないくらい、そこは村だった。空には星が輝いており、中央には神殿がある。

ここにあると違和感半端ないな、神殿。

「はい。ここは神隠しにあつた人が来る村、富士蔵村です。」

「どつかで聞いた気が・・・確か、日の入りの時間にワンダーパークに入場するとたどり着く村だっけ？」

「それもまた神隠しです。山の中を散歩していたら、などの形で神隠しにあつてここに来ることもありました。箱庭に召喚されてからはあの森限定になりましたが。」

「ギフトゲームを行うために？」

「はい。」

《そこまでギフトゲームによる縛りは強いのか・・・》

一輝は、実際に体験しながら箱庭の仕組みを理解していく。

「じゃあ次の質問。契約書類にあつた村人ってのは・・・」

そこで一回言葉を切ると、一輝は辺りを見回し、

「包丁だのバットだのを持って俺らを囲んでる、目が真っ黒な人たちってことでいいのかな？」

早速のピンチを迎えた。

「はい。」

「ピンチなんだが？」

「だから私が神隠しにあわせたほうがいいと・・・」

《なるほど。あそこから入るところなるのか。》

「じゃあ、敵だから倒しても良いんだよな？」

「かまいませんが、この状況でどうやって倒すのですか？」

「まあ見てなつて。」

そういうと、一輝はさつき武装したものの一つをポケットから取り

出した。

「……あの。」

「?なに?なんかおかしいことでもあった?」

「はい。なぜ、今それを取り出すのですか?」

「それって?」

「その……」

そこで鳴央は言葉を切り、一輝が取り出したものを指差して言った。

「350mのペットボトルです。」

そう。先ほど一輝が武装したものの一つは中に水が入った350mのペットボトルだったのだ。

ちなみに、他にはライターとバタフライナイフ。武器と呼べそうなものが一つしかない。

「確かに水分補給も大切ですが、何も今しなくても。」

「ああ、そういうことか。違う違う。俺にとってこれは立派な武器だよ。」

一輝はそう言うふたを開けさかさまにすると水はこぼれていき、そのまま空中にとどまった。

「!?!」

「ああ、言い忘れてたけど、近くにいないと巻き添えを食らうよ?」

「それはもっと早くに言ってください!!」

鳴央はあわてて一輝の近くによる。

「じゃあ、始めますか。」

その言葉と同時に水は一輝と鳴央の二人を囲むように円になり、
「発射!!」

そのまま円を大きくするようにしてもすごいスピードで発射し、
村人たちを切り裂いた。

「こ、こんな簡単に……」

「うくん……予想以上に弱いな。塵は積もってもやっぱり塵か？」

鳴央の驚きをよそに一輝は不満をもらしていた。

「……一輝さんのギフトは水を操るものなんですか？」

「え？違うよ？そんな弱いギフトじゃない。」

「ではいったい……」

何なのですか？と言い切る前に一輝から説明を開始した。

「俺のギフトは形の無いものを操る能力。俺は無形物を統べる者って呼んでる。」

「形の無いもの？」

「ああ。水に空気、火、そういった形の定まってるものならほとんど思いのままに出来る。」

「っ!？」

予想以上の便利さ、チートさに鳴央は絶句した。

「もちろん代償もあるけどね。」

「代償ですか？一体どのような？」

「使ってる間は頭痛がする。」

「頭痛？その程度なら……」

「その程度ってひどいなあ。だって、一番症状が軽い水を操っても、頭を金槌で殴られる二百倍は痛いんだよ？」

「や、二百!？」

「一番軽くてね。まあ、もうそれくらいならなれたんだけど。」

そんなことを言いながら、驚いて固まっている鳴央をおいて歩き出すと、

「じゃあ、まずはこの村にいる村人を全滅させよう。捕まったらアウトみたいだしな。なにより……」

言葉の途中でライターを取り出す一輝。そしてそのまま火をともし……

「村人がこの程度のやつらなら、戦うだけ損だ。一気に終わらせる。」

その火を操り、村の中央を除く全体に火を放った。

A C C A P T I V E T I T A N I A ③

「いやゝ。頭が痛い。」

「先ほどの話を聞いた限りだと、その程度で済むとは思えないのです
が……」

一輝と鳴央はどンドン燃えていく村を前にそんな話をしていた。

鳴央はもう、この程度の無茶苦茶は気にしないようだ。

「言ったでしょ。俺はもうこの程度ならなれてるって。きついつて感
じるのは、普段は固体のものかな。」

「あれ？形の無いものを操るのでは？」

「うん。そうだよ。」

「では、どうやって固体を？」

「？……。ああ、そういうことか。なに、どうやってかは簡単なこと
だよ。ある二つのものを同時に操るだけだよ？」

「二つのものですか？それは一体……」

一輝はそろそろ燃え尽きそうな村に足を向けながら

「その固体の温度と溶けた状態のもの。溶けちゃえばそれに形はなく
なるからな。」

ただ、そう答えた。

|||||

一輝は火が完全に消えた村に向かって歩きながら、今更ながらこの
村についての説明を鳴央から受けていた。

「この村は、神隠しにあい、迷い込んだ人が来る村というのはもう言い
ましたよね？」

「うん、聞いた。」

「そして、この村にいる村人は元々村人としていた抜け殻と、魂を生贄
とされた人たち、皆死体のようなものです。」

「だから悲鳴も一切上げなかったのか。」

「魂がないため、一切の感情がありませんから。」

「じゃあ、村人の中にはギフト所有者もいるのか？」

「この箱庭に来てから神隠しにあった人は持っているでしょう。」

「ふくん。」

一輝の中から村人を殺すことに対する、ほんの少しあった躊躇いが消えた。

「あれ？じゃあ今さっき倒した人たちもじきに？」

「立ち上がるでしょう。」

「・・・少し手間がかかるが、仕方ないか。」

村人が来たら困る（面倒な）ので一輝は対処をとることにする。

「うくん。十体もいれば足りるか。」

「？なにが十体なのですか？」

「うん？それはね・・・」

一輝は、湖に落ちるときに投げたのと似た紙を取り出すとそれを宙にほうった。

「式神。」

その一言と同時に、紙から煙が出て、煙の中から十体のひょうたんを持った狸が現れた。

「はく。ふく。よし。」

一輝は深呼吸をして心を落ち着けた後、式神にいつもよりも低い声で命令を下した。

「我、寺西一輝は汝らに命ずる。汝、この村にありし屍をすべて封印せよ。」

その命令を受け、式神たちは村中にちった。

「よし。これであつちはどうにかなる。さ、神殿に向かうぞ。」

「えっ？あ、はい。」

鳴央は一輝の態度が急に変わったり戻ったりするのに戸惑いながら、前にいる一輝の背を追った。

|||||

「お、あれが今回の目的地か。なんか門番っぽいのがいるなく。」

「いますね。ここまで捕まらずにこれた人はいなかったの、知りませんでした。」

《さて……どうするか……》

一輝は悩んだ末、とりあえず水の刃を放つことにした。

「3. 2. 1. 発射!!」

「えっ!？」

一輝は躊躇いなく水の刃を放ち、鳴央はそんな躊躇いのなさに驚いた。

「あれ?」

「え?」

そして、二人はその体制のまま別の、今見えている光景に驚いた。その視界には……

たった今攻撃をくらったはずの二人がそのまま立っていた。

|||||

《これなら……少しは楽しめるかな?》

一輝は、この村に少しは手ごたえがあるやつがいることを喜んでいった。

「さて、相手が相応の相手なら武器を少し強いものにするか。」

と言うと、一輝は空間に穴を開け、中から日本刀と酸素ボンベ、水素ボンベ、チャツカマン、ガソリンの入った350mlのペットボトルを取り出した。

普通の武器が一個しかねえ。

ってかお前の場合ライターとチャツカマンは違いなくね?

「さて、鳴央はここにいて。ちよつと斬ってくる。」

「そんな散歩に行くような気軽さで!？」

鳴央は一輝の気軽さに驚いていたが、躊躇いがなくなった以上一輝の中には気軽さしかない。

「では、行くとしますか。」

一輝は刀を抜き、左手に火を、自分の背に水素と酸素をまとい門番たちに向かって行く。

「おらあ!!」

そのまま片方に斬りかかった。

だが門番は簡単によけた。

そしてもう片方の門番が一輝に襲い掛かる。

「よつと。へへ。これなら、少しは楽しめる!!」

一輝は二人の実力を測り、そのまま距離をとる。

そして距離をとった一輝の前で二人の門番は姿を変える。

片方は狼男に。

もう片方は鬼へと。

「へへ。人型の化物のギフトか!」

一輝は鬼にガソリンの槍をぶつけ、狼男に刀を向ける。

分担することに成功はしたが、どちらにも攻撃は当たらない。

ぎりぎりのところで身を引いている。

「ここまでよけられると・・・イラツと来るな。頭も痛いし。」

それは相手とは関係ない。

「じゃあ、これなら!」

そういうと一輝は刀には水素と酸素をまとわせ、ガソリンの槍には火をつけ、再び向かう。

相変わらず、先ほどまでと同じようによけるが、それでは駄目だった。

ぎりぎりのところでは、意味がない。

「鎌鼬!!」

一輝は刀の先から先ほどまとわせた空気を刃にして放ち、それが狼男に少し刺さると同時に

「ファイアー!」

左手から炎を放つ。そして水素と酸素が混ざった気体に火がつき爆発し、爆発によって倒れたところを左手の火で止めを刺す。

「二人終了!」

そのまま鬼のほうに体を向け、残りのまもっているものを全て鬼に放つ。

鬼は、刃によって斬られ、爆発に巻き込まれ、ガソリンに燃え移り一気に燃える。

容赦ねえな、おい。

余談だが、二人を倒した瞬間さっきの式神二体がよってきて、その死体をひょうたんのように吸い込んでいた。

「ふう〜。終わった。お〜い、鳴央〜!終わったぞー!!」

呼ばれた鳴央はこっちによって来るなり一言、

「あなたは化物ですか?」

そんな失礼なことを言い放った。

「急にひどいな、俺はただの人間だよ?」

「何をどうしたらただの人間が鬼と狼男に圧勝して、後ろにひょうたんを持った人サイズの狸が控えることになるのですか?」

「あ、お前らいたのか。」

一輝は後ろをふりむくと一言、

「解。」

と一言、低い声でいい、式神を全て回収した。

そして再び鳴央の方を向くと、

「・・・偶然?」

と答えた。

A C C A P T I V E T I T A N I A ④

「さて、村人は全員倒して封印したし、神殿に入りますか。」

と言うと一輝は神殿の扉に手を当て、普通に開けた。

「普通に開けるんですね。意外です。」

「おいおい。その言い方だとまるで、俺が破壊して入ったほうがイメージ通りみたいじゃないか。」

「さっきまでの戦い方をして、そのイメージがもたれないとお思いなのですか?。」

《あれぐらいでそんなことを言われてもな。》

「ま、そんなことはどうでも良いからさっさと入ろう。」

「自分のイメージはどうでもいいのですか・・・」

この程度なら、一輝からしたらどうでもいいようだ。

どこからアウトなんだろう・・・

「ところで、この光景を見てたときから気になってたんだけど・・・」

「なんででしょう?。」

「なんで、建物の中に入ったのに、庭園なの? 太陽光っぽいのも上から感じるし。」

そう、神殿の中に広がる空間は茨の壁に囲まれた美しい庭園だったのだ。

先のほうには茨で出来た迷路があり、入ってすぐのところに変な祭壇みたいなものがある。

「それは、富士蔵村に入ったときと同じようなものです。」

「別の空間に飛ばされた?。」

「はい。」

一輝、今日三回目の別空間へのワープである。

「・・・もういいや。この程度のことには気にしないようにしよう。箱庭ではよくあることなんだ、きつと・・・」

「確かに、よくあることですね。自分のゲーム盤を持つてる主催者もいますし。」

「ここにも富士蔵村みたいな名前はあるの?。」

「はい、あります。 妖精庭園（フェアリーガーデン）」と言います。」
「ふうん。じゃあ、さっさと進もう。」

一輝は迷路を躊躇いなく直進していく。
茨を切り裂きながら。

「・・・迷路を普通に攻略する気は？」

「ない。なんか、奥から何かに謝ってるみたいな声も聞こえるし。急いだほうがいいかなど。ちよつと走るけど、大丈夫？」

「ええつと・・・この格好だと・・・」

確かに巫女服では走りづらいだろう。

「うくん・・・仕方ないか。急ぎたいから我慢してな。」

「え？なにを・・・つて、え!?!」

一輝は鳴央の膝裏と背中に手を浴え、お姫様抱っこをした。

「ちよつと一輝さん!?!」

「悪いけど急ぐからこのままな。あと、舌噛まないように気をつけて。」

その一言を言うと、目の前に空気の刃を作りそれで切り裂きながらものすごいスピードで走っていく。

「いやっほー!!」

「キヤー!!!」

二人は声を上げながらどんどん奥へと向かっていった。

====

「よし。この辺から歩こう。」

一輝は、ここからすこし進んだら声の元にたどり着くと言う辺りで止まり、鳴央をおろした。

「一輝さん・・・」

「?なに?」

「・・・これから、あれをやる時は一言、言ってください。」

「・・・了解。ごめん。」

鳴央のぐったりとした様子から、一輝は本の少し反省した。

「さて、ここなら声が聞こえると思うんだけど、どう？」

「・・・はい、聞こえます。確かにこれは音央ちゃんの声です。」

「じゃあ、行こうか。」

「はい。」

一輝は目の前にある最後の茨の壁を切り裂き、その先へ歩いていく。

|||||

「ごめんなさい。ごめんなさい。私のせいで、私なんかのために・・・」

一輝たちの目の前で、茨の中に捕まっている少女が目を瞑り、涙を流しながら繰り返しそうつぶやく。

「なあ鳴央、もしかして・・・」

「はい。私たちに気づいていないんだと思います。」

「・・・あんだだけ派手にやっというて？」

「神殿の扉が開いたときに、生贄が来たと思ったのかと・・・」

「そうか。なら・・・」

一輝は茨の中の少女に近づき、

「えーつと・・・俺は別に生贄になってないぞ？」

「!?え?うそっ!?!」

「そんなに信じられないか・・・」

「う・・・うん。」

「じゃあ信じろ。ここまで来れたんだから。」

そこで一輝は一泊おき、自己紹介を始める。

「俺は寺西一輝。今日箱庭に召喚されたばかりの人間。一輝って呼んで。」

「え、ええつと・・・私は六実音央（むつみねお）。私も音央でいいわ。」

「じゃあ音央、君がテイターニアだよな？」

「ええ。そうだけど・・・一輝はなんでここに？」

「?べつに。ただ『A CAPTIVE TITANIA』に挑戦した
ただけけど?」

「・・・『契約書類』は読んだ？」

「もちろん。」

「じゃあなんで・・・」

「挑戦したのかって？」

「ええ。」

「簡単だよ。一つはギフトゲームをやってみたかったから。」

「そんな理由で挑戦するにはリスクが高すぎるでしょう!」

「?そうかな?捕まらなければいいだけだし。」

「捕まった場合のリスクを言ってるのよ!」

「その場合はそうだな。でも、理由はまだある。」

「・・・その理由は？」

「友達の鳴央が困ってたから。」

「そう、鳴央が・・・」

「あと、今出来た理由が一つ。」

「・・・それは？」

「新しく出来た友達の、音央が困ってるから。」

「っ!？」

「以上の理由から、俺はこのゲームに挑戦してるし、このゲームを何が
何でもクリアして、二人を助ける。」

一輝はそう、はっきりと宣言した。

||||||||||||||||||||

「・・・そう。絶対にやめる気は無いのね?」

「ねえな。」

「・・・解ったわ。じゃあ私の後ろにある祭壇を見なさい。このゲームを設定した“主催者”はそこにクリア方法を記したって言ったから。」

「・・・このゲームを開催したのは魔王だって聞いたんだけど・・・」
「ええ。そうよ。」

「魔王に対するイメージが・・・」

一輝の中で音を立てて、魔王のイメージが崩れていく。

「・・・まあいいや。＼ルインコーラー＼とやらに行つて直接確認しよう。」

そう言いながら一輝は祭壇に近づいて行き、そこにあつた羊皮紙を読む。

そこには一輝にとっては最悪の方法が記してあつた。

『妖精庭園にたどり着きしものよ。汝に敬意を記し、ここにゲームクリアの方法を記す。』

・ 神隠しを殺め、神隠しの村より妖精の女王を解放せよ。

・ 妖精の女王を殺め、神隠しをその使命より解放せよ。』

それは一輝にとって、最低最悪の選択肢、片方を犠牲にする選択肢だつた。

「一輝さん。そこにはなんと?どうしたら音央ちゃんを解放できるのですか?」

鳴央が少し興奮した様子でそう聞いてくる。

無理もない、妹を解放できるかもしれないのだから。

そんな鳴央に一輝は何も言わず羊皮紙を二人が読める位置に持つていく。

二人は驚いた顔をしていたが、次の瞬間同時に一輝に言った。

「一輝さん、私を殺して、音央ちゃんを開放してください。」

「一輝、私を殺して、鳴央を開放して。」

二人は顔を見合わせると、言い争いを始める。

「なに言ってるの、鳴央!」

「音央ちゃんこそなに言ってるんですか!」

「私は、私よりもあんたが生きるべきだから!」

「いえ、音央ちゃんが生きるべきです。だから、私が消えます。」

「だめよ!私は、自分が死んでも鳴央に生きてほしいの!」

「それは私も同じです!音央ちゃんに生きて欲しいんです!」

お互いに、自分よりも相手が生きるべきだと譲らない二人、普通に考えればお互いのことを思っているいい姉妹なのだが、一輝は怒りに震えていた。

「だから、音央ちゃんが・・・!」

「鳴央のほうこそ・・・!」

「うるさい!良いからそのくだらない話をやめろ!!」

一輝がキレた、ブチギレた。

急に大声で怒鳴ってきた一輝に一瞬ビクツとなる二人だが、

「くだらないって・・・どこがくだらないのよ!」

「そうです。大切なことを話してるんですから、関係のない一輝さんは口を出さないでください!」

二人の矛先が一輝に向くが、一輝は一切ためらわずに、

「その、自己犠牲と自己満足で相手のことを考えてない会話がくだら

ねえつつつてんだ！少しは相手のことを考えろ！」

そう怒鳴り散らす。

そして、このことに二人が反応しないわけもなく、

「考えてるわよ！だから鳴央が生きるべきだって……！」

「考えてます！だからこそ、音央ちゃんが生きるべきだと……！」

二人そろって怒鳴り返す。

「考えてるって？自分が犠牲になって大切な人を生き残らせることがかよ！そんな選択肢が考えた結果だったのか！」

「ええそうよ！そうすれば自分の大切な人は生き残れる！」

「そのためならこの命くらい……！」

「じゃあ聞くんが、お前らがそんなことをされて嬉しいか？違うだろ！ふざけるなって思うだろ！」

「そ、それは……」

「そうかもしれないが……」

「それにな！今回の場合、そのために自分の大切な人が死ぬんじゃないよ、殺されるんだ！その意味が解ってんのか！」

「……」

二人が、何も言わないので一樹は言葉を続ける。

「少なくとも俺の中には、自分のために命を懸けてくれた人の分も生きようなんて感情はわかかなかった。あつたのは勝手に決めんなって怒りと、俺の家族を、父さんを殺したやつに対する殺意だ。」

「それって……」

「俺も大切な人が目の前で、俺のために命を捨てたんだよ。俺が時間を稼ぐから逃げろって、俺に一族に伝わる全てを託してな。」

「……そのおかげで今、こうして生きてるのでしょうか？だったら……」

「……そうよ。だったら私たちがそれをして……」

いいじゃない。そうつなげようとした音央の言葉をさえぎり一輝は続きを話した。

「いや、俺は親への反抗でその場に残り、家族を殺したやつらが来たら怒りのままに全員殺した。」

一輝はいったん言葉を切り、いつの間にか下を向いていた顔を上

げ、二人の顔を見ると、

「おそらく、それが人間なんだ。結局のところ本能で行動してしまう。お前たちは自分の大切な人をそんな目にあわせていいのか？」

そう、さつきまでとはまったく違う、優しい声音で言う。

そして、そのせりふや、それまでの台詞が恥ずかしかったのか、いつもの感じに戻ると、

「それに、この場合、殺したの俺になっちゃうからな。命を狙われるのはごめんだ。」

そういつて、ごまかそうとした。

「・・・確かに、大切な姉妹をそんな目に合わせたくはありませんね。」

「・・・そうね。開放されるなら二人一緒に。」

二人がわかってくれたようなので一輝は安心した。

「さて、それじゃあこのゲームの完全攻略の方法を考えよう。鳴央はこのゲームのルールを覚えてる？」

「はい。」

「じゃあこつちのクリア条件と敗北条件、備考を教えてください。忘れちゃった。」

「では、重要そうなものだけ。クリア条件は捕らわれの少女、この場合私と音央ちゃんのことですね。の開放。敗北条件は生贄にされたら負け。備考はテイターニアは生贄によって霊格を高め、一定の霊格を超えると開放される。そして、ゲームクリアの場合、解放された少女はプレイヤーに隷属する、といったところですね。」

「え、じゃあ私たちは一輝に隷属することになるの？」

「まあ、意地でもそうするよ、生贄にはされたくないし。」

一輝はそういいながら、鳴央が言ったことを振り返り、ある一箇所
で思考がとまる。

「・・・音央、一つ質問いいか？」

「ええ、私に答えることなら。」

「じゃあ、ここで生贄にされるのは魂だけで、肉体はなくてもいいんだよなっ。」

「ええ、そうよ。」

「・・・そうか・・・」

《・・・魂だけあればよく、生贄で解放できる・・・これは・・・》

「・・・二人に言つとくことが一つ。・・・すいませんでした。」

「?どうしたのよ、急に?」

「そうですよ。一体何を謝っているのですか?」

「ええっと・・・今すぐにクリアできる方法があつたのに、それに気付かなかつたことです・・・」

そういうと、空間に穴を開け、中から『封』と書かれた御札が張つてある小さな瓶を大量に取り出す。

「?この液体は?」

「ええっと・・・先代が封印した妖怪の魂です・・・はい。」

「・・・一輝の家つて一体何?」

「さつき村のほうで式神を使つたから鳴央は予想が付いたかもしれないけど、うちは陰陽師だったんだ。んで、復活しないように先代がこうやって封印した。」

それ以来代々受け継がれてる。」

「はあ・・・それで?それが何?」

「これを生贄にしようかな、と。結構有名な妖怪、鶴とかのクラスばつかだから、十分いけそうじゃない?」

「いけそうですが、そんなものを使つてもいいのですか?」

「?別にいいだろ。バカな先代のせいでこんな形で残っちゃったんだし、もう俺が継承してるし。生贄は入り口のところの祭壇に?」

「ええ、そうだけど・・・本当に使っちゃっていいの?」

「問題ない、問題ない。」

一輝はそういいながら入り口の祭壇のところに行き、合計百本以上ある瓶のふたを取ると、中身を全て祭壇にぶちまける。

しばし待つ。

すると、音央の体が輝きだし、全ての茨がはじけ飛んだ。

「よし、成功!!」

「一輝、なんだか私解決したって気がしないんだけど。」

「なんだか・・・最後はあつけなく終わりましたしね。」

一輝は解決したことを喜び、音央と鳴央は釈然としないようだった。

「まあまあ。ちゃんとテイターニアは村から解放されて、神隠しは任務から解放された。全て解決してるよ。深く考えたら駄目だって。」

「・・・それもそうね。」

「はい。では一輝さん、ゲームの終了を。」

「了解。」

「二「ゲーム終了!」二」

三人は声を合わせてそう言い、森へと帰った。

|||||

「ふう〜。それじゃあノーネームに向かうか。行くぞ、二人とも!」

「はい!」

「ええ!」

そうしてA CAPTIVE TITANIAはあっけなく終わり、一輝たち三人はジンたちのいるカフエテラスへと走っていった。

フライングボディーアタック

箱庭につくと、疲れたのか一輝たちは会話をしながら歩き始める。ジンたちの場所は式神のおかげで解るので、そこに話しながら向かう。

「ねえ、一輝。一応知っておいたほうが良いと思うから聞くけど、一輝って天涯孤独なの？」

「うん．．．かもしれないし、そうじゃないかもしれない。」

「?それはどういう意味なのですか？」

「いや、両親に祖父母は寿命だったり家が襲われた時に殺されたりしてるんだけど．．．色々知りたいっていつて魔物に会ったりする旅に出た妹が一人いてな。そいつが生きてるかどうかで決まる。」

《あいつのことは結局ほったらかしちまったな。どうにかならないものか．．．》

一輝にとって唯一の心残りは妹のこのようだ。

このシスコンめ。

《．．．俺にとっては最後の血のつながった家族なんだぞ?それを心配するのをシスコンというか．．．?》

．．．それはごめんさいだけど、こっちの文に対して返事をするなって何回言ったら解るんだ!!

「．．．きつと生きてますよ。」

「そうよ。あんたの妹なら陰陽術も使えるんでしょ？」

「まあ、俺と同じくらいには使えるけど、それだけで生き残るのはちょっと難しいしな。」

「それは一体．．．」

「おつ、あそこにいるな。何か黒ウサギが怒ってるな。」

一輝は鳴央の質問の途中で黒ウサギたちを見つけ、そこに急ぐ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「な、なんであの短時間にフォレス・ガロとゲームをすることになって

いるのですか!?!」「しかも明日なんて……準備する時間もお金もありません!」「一体どういう心算で……って聞いているのですか三人とも!!」

「ムシヤクシヤしてやった。反省はしていません。」「反省していません。」「

御二人は反省してください!!!」

反省の様子がない二人に対して黒ウサギはハリセンを振るう。

いい音が鳴ってるなく。

「別に良いじゃねえか。見境なく喧嘩売ったわけじゃないんだし。」「

「十六夜さんは面白ければいいと思ってるのかもしれないが、このゲームは自己満足のためだけにやるようなものなんですよ?」

「確かに、得られるのは自己満足だけだが、それも大切なことだろ。もちろん、俺は参加しないから頑張れよ。」「

「ええ、もちろん貴方なしでやらせてもらおうわ。」「

二人のその会話に、黒ウサギはあせって割り込む。

「だ、駄目ですよ!御二人はコミュニティの仲間なんですからちゃんと協力しないと。」「

「あのなあ黒ウサギ。この喧嘩は、コイツらが売って、ヤツらが買った喧嘩だ。なのに俺が手を出すのは無粋ってもんだ。」「

「あら、わかってるじゃない。」「

「……もういいです。ところで一輝さんは?先ほどから姿が見えないのですが……」

「彼なら紙に変わったわよ。ねえジン君?」

「そうなんだ黒ウサギ。俺に渡しといてって言ってこんな紙に。」「

ジンはポケットから紙を取り出し黒ウサギに渡す。

「これは……」

「式神じゃねえか?」

「ですね。じゃあ一輝さんはどこに……」

「入れ替われたとしたら落ちてくる最中くらいだろうな。」「

黒ウサギは本日二度目のorzのポーズをとる。

「十六夜さんに続いて一輝さんまで……なんでこんな問題児をう……」
ひとしきり落ち込もうとして、一輝のいる場所について思い出し……

「ジン坊ちゃん！もう一度行ってきますので、もう少し時間をつぶして……」

「いる必要はないんじゃない？」

たところで、後ろから人の声が聞こえた。

|||||

「いえ、探して来る間は待っていただかないと。この後の予定もありますし。」

「俺、黒ウサギの後ろにいるのにな？」

「はい？」

黒ウサギが振り返ると、そこには今問題になっている一輝がいた。

「い、一体どこで何をしていたのですか、一輝さん!!」

「ちよつと外の森で散歩を。一応、はじめまして。」

「あ、確かにそうですね。はじめまして……ってそれより、一体どういう心算で！」

「上から見たら綺麗だったから散歩したいな〜って。」

「そんな理由で!？」

黒ウサギが一輝の自由っぷりに十六夜るときほどではないが驚く。

「それよりも、一輝。そのの」

というと、十六夜は一輝の後ろにいる二人……音央と鳴央を指差し、

「お前の後ろにいる制服二人は誰だ？」

と聞いた。

「ええっと、私は六実音央。これからよろしく。」

「私は六実鳴央です。これからよろしくお願いします。」

「あ、私は黒ウサギです。これからというのは……？」

「俺と音央、鳴央はノーネームに入るって意味だ。」

「一輝さんはもう私たちのコミュニティについて・・・?」

「ああ。鳴央に聞いた。その上で加入させて欲しい。」

「ありがとうございます!」

黒ウサギは十六夜たちにつき一輝たちも入ると聞いて大よろこびだ。

「喜ぶのは良いが、黒ウサギ。一個聞くことがあるだろ。」

「そ、そうでした。後ろの御二方はどちらで?」

「ええっと・・・」

一輝は勝手にギフトゲームをやったことに対して、多少の後ろめたさを感じるが・・・

「森にあった神隠しのゲームをクリアして、俺に隷属することになりました。」

「あのゲームにですか!?!失敗したら生贄にされるんですよ!?!」

「すぐに村人は全員、封印したから大丈夫だ。」

ジンと黒ウサギが頭を抱えているよそで四人は会話をはじめる。

「神隠しのゲームなんて楽しそうなのを一人でやってたのかよ。」

「ずるい。」

「そうよ。そういう楽しそうなのは皆でやるべきよ。」

「そういうお前らも、悪人を裁くなんて楽しそうだし、十六夜もあの樹は何だ?絶対結構な相手とのゲームの賞品だろ。」

「水樹っていうそうだ。水が出るらしぞ。」

「じゃあ風呂には入れそうだな。」

「それは素敵ね。湖に投げ出されたから、お風呂には入りたかったところよ。」

「それは大賛成。」

「・・・もういいです。皆さんの性格については諦めましょう。サウザンドアイズに行つて皆さんのギフトの鑑定をしてもらつてきますので、ジン坊ちゃんは先に帰っていてください。」

「うん、行つてらっしゃい。」

|||||

サウザンドアイズに向かう途中、飛鳥が道に植えられている木を不思議そうに眺めてつぶやく。

「桜の木・・・ではないわよね。今は夏だもの。」

「いや、夏つつつても初夏になったばかりだぞ。気合の入った桜が咲いててもおかしくないだろ。」

「・・・？今は秋だったと思うけど。」

「俺のところは冬だったな。」

話が噛み合わない四人は顔を見合わせて首を傾げる。

すると黒ウサギが、

「それはですね「あんたたちはそれぞれ違う世界から召喚されたのよ」

「へえ？パラレルワールドってやつか？」

「近いですが、正確には立体交差並行世界理論というものです。これについての説明を始めると何日かかかってしまうので興味がある方は自分で調べてみてください。」・・・音央さんは解りますが、鳴央さんに台詞をとられるとは・・・」

鳴央の性格が予想していたのと違い、黒ウサギは本日何度目かわからない驚きをした。

そんな話をしていると、割烹着の女性が看板を下げているのを見て黒ウサギがあわてて待ったをかける。

「まっ」

「待ったなしです。」

待ったをかけられなかった。

そのまま黒ウサギたちが言い争いをしているよそで一輝は音央と鳴央と話していた。

「ところで、サウザンドアイズって？」

「それ私も知りたい。鳴央は知ってる？」

「はい、知ってますよ。特殊な瞳のギフトを持つものたちの郡体コミュニティ。箱庭全土に精通する超巨大商業コミュニティです。」

「にしては、商売っ気が無くないか？」

「そうよね、閉店時間の五分前に客を締め出すなんて。」

「たしかに、それはそうですね。」

「うくん・・・軽く脅したらやってくれるかな？」

「追い出されるわよ。」

「追い出されると思います。」

「だよなく。さて・・・」

どうするか、と続けようとしたところで大声が割り込む。

「いいいいやおおおおおお！久しぶりだ黒ウサギイイイイ！」

黒ウサギはその声の主、着物を着た白い髪の少女にフライングボディーアタックをされ、二人で水路まで吹き飛んだ。

白夜叉Ⅱ変態

「し、白夜叉様!?!どうして貴方がこんな下層に!?!」

「そろそろ黒ウサギが来る予感がしておったからのう!ほれ、ここが良いかここが良いか!」

白夜叉と呼ばれた少女が黒ウサギの胸に顔をすりつける。

「離れてください!」

黒ウサギはそんな白夜叉を引き剥がすと頭をつかんで店のほうに投げる。

偉い人だと思っただが・・・いいのだろうか?

そして、飛んできた白夜叉を十六夜が足で受け止める。

「てい。」

「ゴバア!お、おんし、飛んできた美少女を足で受け止めるとは何様だ!」

自分で美少女って言いやがったよこいつ。

「十六夜様だぜ。以後よろしく和装ロリ。」

「・・・なあ鳴央。あの人はかなり偉い人だと思っただが・・・良いのか?」

「まあ、あの人なら大丈夫でしょう。確かにかなり偉い人ですが、あの人はそういう人です。」

「偉い人ってより、ただの変態よね・・・」

一輝たち三人の中で白夜叉Ⅱ偉い変態と言う等式が成り立った。

「うう・・・まさか私まで濡れることになるとは・・・」

「因果応報・・・かな」

「耀の言う通りだな。はい、タオル。」

「あ、ありがとうございます。」

疲れたのか少し元気がない。

まあ、すぐに回復するだろう。

「白夜叉はタオルいる?」

「いや、もう乾いたからいらんよ。すまん。」

「いやいや。気にしなくていい。」

一輝は出したタオルを空間に穴を開け、しまう。

そんな感じでやり取りをした後、黒ウサギたちはやや広い和室に通される。

「さて、もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の外門、三三四五外門に本拠を構えている『サウザンドアイズ』幹部の白夜叉だ。黒ウサギにちよくちよく手を貸してやっている器の大きい美少女と認識しておいてくれ。」

「その外門って何?」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。中心に近くなれば数字も若くなり、同時に強大な力を持つ者たちが住んでいるのです。」

黒ウサギは上空から見た箱庭の図を描く。

「・・・超巨大タマネギ?」

「いえ、超巨大バウムクーヘンではないかしら?」

「そうだな。どちらかといえばバウムクーヘンだ。」

「おいしいよね、バウムクーヘン。コンビニで売ってるようなのでよければあるけど、食べる?」

「二食べる!」

領きながらバウムクーヘンを食べる四人。

黒ウサギはガクリと肩を落とすが、白夜叉は対照的に哄笑を上げる。

「ふふ、うまいこと例えるのう。ところで、私にもバウムクーヘンをくれんか?」

「もちろん、どうぞ。鳴央たちの分もあるぞ。」

一輝は白夜叉に黒ウサギ、音央、鳴央にもバウムクーヘンを配る。「ありがとう。ついでに言うと、このすぐ外にはコミユニティに所属してはいないが強力なギフトを持つもの、その水樹の持ち主のような者たちが棲んでおるぞ。」

白夜叉は黒ウサギの持っている水樹を見ながらそう言う。

「して、誰がどのようなゲームで勝ったのだ?」

「十六夜さんが蛇神様を素手で叩きのめして得たものです。」

「なんと!? 直接的に倒したとは・・・その童は神格もちの神童か?」

「いえ、それは違うかと。神格なら一目見れば分かるはずですし。」

「それはそうだが・・・それでは神格を持つものに勝ったことの説明がつかんぞ。」

「黒ウサギも目を疑いました。白夜又様はあの蛇神様とお知り合いだったのですか?」

「知り合いも何も、あれに神格を与えたのはこの私だぞ。」

「へえ? じゃあオマエはあの蛇より強いのか?」

白夜又の発言に十六夜は物騒に瞳を輝かせて問いただす。

「当然だ。私は東側の階層支配者だぞ。この東側の四桁以下で並ぶものがない、最強の主権者なのだからな。」

最強の主権者、と言う言葉に十六夜・飛鳥・耀・一輝の四人はいっせいに瞳を輝かせ、一輝の性格を知る二人は同時にため息を吐く。

「そう、なら貴方のゲームに勝利できれば、私たちのコミュニティは東側で最強のコミュニティということになるのかしら?」

「無論、そうなるのう。」

「探す手間が省けたな。」

四人は鬪争心むき出しの視線を白夜又に送り、それに気づいた白夜又は高らかに笑い声を上げた。

「依頼しておきながら、私にギフトゲームで挑むとは、抜け目のない童たちだ。」

「え? ちよ、ちよつと皆さん!?!」

黒ウサギは慌てるが白夜又が右手でそれを制する。

「よいよ。私も遊び相手には常に飢えている。」

と言うと白夜又は懐からカードを取り出して一言。

「して、おんしらが望むのは挑戦か? もしくは決闘か?」

次の瞬間、一輝たちは白い雪原と凍る湖畔、そして太陽が水平に回る世界に投げ出された。

「さて、今一度名乗りなおそうかの。私は太陽と白夜の星霊・白夜又。」

箱庭にはびこる魔王の一人よ。」

四人は一瞬言葉をなくすが、十六夜が言葉を発した。

「水平に回る太陽・・・そうか、あの水平に回る太陽やこの土地はオマエを表現してるってことか。」

「如何にも。この永遠に世界を薄明に照らす太陽こそわたしの持つゲーム盤の一つだ。」

して、どうするのだ？挑戦を望むのであれば手慰み程度に遊んでやる。しかし、決闘を望むのであれば話は別だ。魔王として、命と誇りの限り闘おうではないか。」

四人全員が返答を躊躇った。

勝ち目がないことだけは明確なのだ。

そして、たつぷりと悩んだ末、今回もまた十六夜がゆっくりと挙手をし、

「参った。やられたよ。降参だ、白夜叉。アンタには資格がある。今回は黙って試されてやるよ。」

「して、他の童たちも同じか？」

「ええ、私も試されてあげてもいいわ。」

「右に同じ。」

「正直に言うと、あんたと本気でやりあうなんて、ごめんだよ。」

三人は意地を張り、一輝は純粹に降参した。

「そうか、解った。正直に言ったものもいるようだから私も真実を言わせてもらうが、私が魔王だったのは、もう何千年も前の話だ。今は元・魔王といったところだな。」

そんなことを言っているとかなたにある山脈から甲高い叫び声が聞こえた。

「何、今の鳴き声。初めて聞いた。」

「ふむ・・・あやつならおんしらを試すには打ってつけかもしれないの。」
というと、白夜叉は山脈に向かって手招きをし、山脈からグリフォンが飛んできた。

あの距離でよく見えたな。

「グリフォン・・・嘘、本物!?!」

《耀ってあんな驚いた声出せるんだ!》

耀はグリフォンに驚き、一輝はそんな耀の様子に驚いた。

「さて、おんしらにはこのゲームに参加してもらおう。」

そういうと、白夜又は輝く契約書類を十六夜に渡す。

『ギフトゲーム名 〃驚獅子の手綱〃

・プレイヤー一覧 逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

寺西 一輝

六実 音央

六実 鳴央

・クリア条件 グリフォンの背に跨り、湖畔を舞う。

・クリア方法 〃力〃 〃知恵〃 〃勇気〃 の何れかでグリフォンに

認められる。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせな

くなった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフ

トゲームを開催します。

〃サ

ウザンドアイズ〃印』

アングルモア・プロファイット

「私がやる。」

読み終わるや否や、耀がものすごいまっすぐに、指先まで綺麗にそろえた拳手をした。

そして、その目はグリフォンに向いている。

三毛猫や白夜叉が心配や警告をするがどちらのも問題ないと答える。

よっぽどグリフォンに興味があるようだ。

「OK、先手は譲ってやる。失敗するなよ。」

「気を付けてね、春日部さん。」

「頑張ってこい。」

「うん。頑張る。」

そこから、耀はグリフォンと会話をし、その背に跨り、湖畔を一周した後、グリフォンのギフトを得て風を纏って浮き、その後、白夜叉に木彫りを見せたりした後、一輝が皆に配ったココアでまったりしたりした。

前回あそこできったのに、ダイジェストすぎないか？

「白夜叉様、今日は鑑定をお願いしに来たのですが。」

「よ、よりにもよってギフト鑑定か。無関係もいところなのだが…おんしらは自分のギフトの力をどの程度把握している？」

「企業秘密。」

「右に同じ。」

「以下同文。」

「数だけ。」

「どんな物かくらいは。」

「私もです。」

「うおおおい？いやまあ、仮にも対戦相手だったものにギフトを教えるのが怖いのは分かるが、それじゃ話がすすまんだろ。少しは後半三人を見習わんかい！」

「別に鑑定なんていらねえよ。人に値札張られるのは趣味じゃないし

な。」

はつきりと否定する十六夜とそれに同意するように頷く二人。

白夜又はそんな三人に困ったように頭を掻くが、突如妙案が浮かんだとばかりにニヤリと笑った。

「なんにせよ、主催者として、試練をクリアしたおんしらには恩恵を与えねばならん。ちよいと贅沢な代物だがコミユニティ復興の前祝だ。受け取るがよい。」

白夜又がパンパンと拍手を打つ。すると六人の眼前に六枚の光り輝く六枚のカードが現れる。

カードにはそれぞれの名前と、体に宿るギフトを表すネームが記されていた。

コバルトブルーのカード逆廻十六夜・ギフトネーム コードアンソウ “正体不明”

ワインレッドのカードに久遠飛鳥・ギフトネーム “威光”

パールエメラルドのカードに春日部耀・ギフトネーム “生命の目録”

“ノーフォーマー”

クロムイエローのカードに寺西一輝・ギフトネーム “無形物を続べるもの” “陰陽術” “空間倉庫・1番〜10番”

ピーコックグリーンティターニアのカードに六実音央・ギフトネーム “夜妖精の女王”

ピーコックブルーのカードに六実鳴央・ギフトネーム “神隠し”

「ギフトカード!」

「何それ、お中元?」

「お歳暮?」

「お年玉?」

「ち、違います!このギフトカードは顕現しているギフトを収納できる超高価なカードなんですよ!」

「素敵アイテムってこと?」

「一輝さんも、適当に聞き流さないください!あーもうそうです、超素敵アイテムなんです!」

「我らの双女神の紋のように、本来はコミユニティの名と旗印も記されるのだが、おんしらはノーネームだから。少々味気ない絵になっ

ておる。」

《へえ〜。便利そうだな。十六夜の水樹が収納できてるてことは……》
一輝はポケットと空間倉庫から持っている式神をすべて取り出しカードを向ける。

すると式神は全て光の粒子となってカードに吸い込まれ、ギフト欄に『式神・化×2』『式神・封×1000』『式神・攻×1000』『式神・防×1000』『式神・武×5』の名前が並んでいる。
《これは……便利だな。とっさに出せる量は……》

一輝はギフトカードを自分の前に掲げ『式神』が出てくるように念じた。すると……

「全知であるラプラスの紙片がエラーを起こすはずなど……って、な、何だ！この化物の群れは!?!」

ギフトカードにしまった全ての式神が出てきた。

「……すまん。どれくらいなら一気に出るのかと思ってやってみたら……全部出た。」

「じゃあ、こやつらはおんしの……?」

「俺の式神だ。すぐにしまおう。」

一輝は再びカードを自分の前、式神たちに向け、式神をしまった。

そこで、黙っていた音央たちが

「ところで白夜叉さん。何か、私たちも貰っちゃってるんだけど……」

「いただいて良いんでしょうか?」

と白夜叉に尋ねた。

え?別にいいんじゃないの?だって……

「何も問題はないよ。今回は新たに召喚されたものたちを試そうと思いい、おんしたちもギフトゲームに参加しとるからな。」

ゲームに参加した以上、ギフトを得る権利はあるだろう。

「……あの、私たちは今日召喚されたのではないのですが……」
「?私の記憶ではおんしらは元からのノーネームのメンバーではないはずなのじゃが?」

「音央さんたちが言っていることは合っていますよ。そして、白夜叉様の言っていることも。」

「東のフロアマスターとして、正式に礼を言わせてもらおう。知っているかもしれないが、あのゲームは魔王が設置したゲームでな、何人も人が神隠しに合っていたのだ。」

「それは、挑戦する前に鳴央から聞いた。」

「そうか。それで色々なコミュニティから被害届のようなものが届いてな。」

「そのこともあって、魔王対策の一環として私が解決する予定だったのだ。」

「そうか。もう俺がクリアしたんだが。」

「じゃから、私からいくつか恩賞を与えようと思ひ、残ってもらったのだ。何がいい？」

「……その前に一つ質問なんだが、この件で二人が罰を受けるってことは？」

「無論、ない。」

「……となると、一つ……というか三ついいか？」

「うむ、言ってみよ。」

「こう……俺がこの二人を召喚できる……みたいなもの。」

「ふむ……魔王の隷属の際に使うものに近いな。どのようなものかい？」

「出来る限り持ち歩いて違和感がないもの……こんなのは？」

「と言うと、一輝は空間に穴を開け、携帯を取り出した。」

「ふむ……携帯電話、と言うのだったか？」

「そう、それ。」

「解った。作らせよう。出来たら連絡する。他にはあるか？」

「他にか……じゃあ、物はあと一つ。妖刀をくれない？」

「どのくらいいのものを？」

「べつに、妖刀と分類されればどんなものでも。」

「解った。ではこれでよいか？」

「と言うと、白夜又はギフトカードを出したときのように拍手を叩き、一輝の前に一振りの刀が現れた。」

「どんなものでもいいと言うから、かなり弱いぞ？」

「十分だよ。」

一輝は刀にギフトカードをかざし、それもしまう。

ギフトカードには「量産型妖刀」という文字が並んだ。量産型で。後、個人的なお願いを二つほどいいかな？」

「ふむ。言ってみよ。」

「じゃあ一つ目。あの神隠しのゲームを設置した魔王に出来る限り手を出さないようにして欲しい。白夜叉だけじゃなくて、他のコミュニケーションも。」

「その理由は？」

「あんだけのことをしたんだ。俺たちで倒す。」

「く、くく……そうか。解った。出来る限りやっておこう。もう一つは？」

白夜叉は一輝の目に強い覚悟を感じ、承諾した。

「その魔王、ルインコーラーとやらにいる魔王について教えて欲しい。」

「……教えられることは限られておるが、それでもか？」

「ああ。」

「そうか、いいだろう。」

「その魔王は、ノストラダムスの大予言（アングルモア・プロフィット）の名を『ヤシロフフランソワ一世』と言う、破滅の予言をする魔王だ。」

V S 十六夜

「その魔王は、ノストラダムスの大予言（アングルモア・プロフィット）の名を『ヤシロⅡフランソワ一世』と言う、破滅の予言をする魔王だ。」

「それってあの、終末論を唱えた？」

「そうだが、この箱庭では、破滅の予言とともに自らの力で破滅に導くことも出来る。」

「コミュニティのメンバーも全員破滅のギフトを持つ、破滅の物語たちだ。」

「何、その嫌な集団・・・」

「コミュニティのリーダーであるヤシロが自ら集めた辛気臭い集団じゃのう。」

「挑戦するときは一気にやることにしよう。」

一輝にはそんな状況を耐えることはできないようだ。

「あとは、あのコミュニティは五桁に本拠を構えていて、たまに最下層に来ることぐらいだな。」

「なんで、わざわざ来るの？」

「新しいメンバー探しだそうだ。」

《さらに辛気臭い仲間を集めるのかよ・・・》

「・・・まあいいや。いつ来るかとかが解ったら教えてもらっても？」

「かまわんよ。解ったらすぐに連絡しよう。」

「よろしく。」

一輝としてはもう話は終わったので出て行こうとするが、白夜叉に呼び止められた。

「ちよつと待ってくれんか。もう一つ、すぐに終わる案件がある。」

「それは？」

「その二人はおんしに隸属しとるのだよな？」

「あのゲームから二人とも開放したからな。そうなるが。」

「では、一日預けてくれんか。あのゲームについて聞いておきたいこともあるし、こやつらが隸属するにあたって一つ、それっぽい衣装を

与えたいのにな。」

「だそうだが、どうする?」

一輝はさつきから一切会話に参加していなかった二人に声をかける。

「そうね。いつまでも制服つてのも嫌だから服がもらえるのはありがたいわ。鳴央は?」

「私がかまいませんよ。それに、あのゲームについては白夜叉さんに話しておいたほうがよさそうですし。」

「どのことなので、どうぞ。明日、迎えにこればいいか?」

「ああ、それまでには注文の品も準備しておこう。」

一輝は音央と鳴央を残して、ノーネームへと向かった。

=====

「・・・あれ?場所を間違えたかな?」

暗くなってきたころ、一輝はノーネームにいたが、目の前に広がる光景に自分の目を疑った。

そこに、狐のような耳をはやした少女がいたので、一輝は彼女に聞くことにした。

「ねえ、君。」

「は、はい。何でしょう?」

《うっわー。思いつきり警戒されてる。》

狐耳の少女は急に話しかけてきた一輝を警戒していた。

「ええっと・・・今日箱庭に召喚されて、ノーネームに入ることになった寺西一輝っていうんだけど・・・ノーネームってここであってる?」

「あ、はい!ここがノーネームの本拠です!」

一瞬で警戒は解かれた。

「・・・うん。一つ質問いい?」

「どうぞ!」

「・・・マジで、ここが?」

「はい!間違いなく、ここはノーネームの本拠です。」

《…よし。気になることは多々あるが、後でまとめて黒ウサギに聞こう。》

「あ、申し遅れました。私はリリと申します。」

「よろしく、リリ。そういえば、何でこんな時間にここにいるの？」

普通、最初に気づくべき点に今更気づく一輝。

「黒ウサギのお姉ちゃんに一輝さんが来たら案内するよう言われたんです。」

「…待たせちゃってごめん。」

《そして、黒ウサギは後で説教だな》

黒ウサギへの用事がどんどん増えていく。

「大丈夫です。白夜叉さんから連絡が来てから待っていたので、そんなに待っていませんから。では、屋敷に案内しますね。」

「うん。よろしく…。」

ズドガアアアアン!!!

「…よろしく。」

「今の爆音完全無視なんですか!?!」

「大丈夫。きつとやったのは十六夜だ。あいつ以外にこんな無茶苦茶なやつは知らん。それより、早く横になってゆっくりしたい。」

「…解りました。では、案内させてもらいます。」

リリは爆音が気になるようだが、案内を再開した。

再開といっても、元々その場から動かずに話をしてただけだな。

|||||

リリから部屋は好きな部屋を使っているといわれたので、最上階の角部屋を使わせてもらうことにした。

眺めがよさそうだしね。

「…疲れたし、風呂は簡易式でいいか。」

と言うと、一輝は水を少し取り出し、高速で回転する渦にすると、自分の体の上を這わせる。

一輝のギフトもあって、これなら濡れずに体の汚れを全て落とすこ

とが出来る。

《風呂に入ったって気はぜんぜんしないんだよな。》

そして、寝巻きに着替えた一輝は、ベッドに横になり目を閉じる。

「おやすみなさ……」

「寝るな。」

寝ようとしたところを十六夜によって止められた。

「……何の用？寝ようとしたところを起こされてかなり不機嫌だから、今なら安い喧嘩でも買うぞ？」

「お、そりやちようどいい。お前のギフトと実力だけ知らなかったからな。ちよつと試したかったんだ。」

「この台詞に乗ってくるやつ、リアルで始めてみた……」

一輝としては、今の台詞で終わって欲しかったようだ。

「んで？ルールは？」

「そうだな……外に出たの勝負。先に膝をつかされたほうの負けつのでどうだ？」

「OK。」

そのまま、二人は窓から飛び降りて外に出る。

「もう一度確認しとくが、ルールはあれで良いんだな？」

「ああ。この勝負の目的は、このコミュニティのメンバーの实力を知ることだからな。」

そのまま、二人は距離を開け、お互いに向かい合う。

「最後に、もう一個質問いいか？」

「さつさとしろよ。」

「何で、あいつらここにいるん？」

気づくと、黒ウサギにジン、飛鳥、耀と主要メンバーが集まっていた。

しかも、観客席っぽいのを作って。

「俺と一輝がバトルっていったら見に来た。」

「……そういや、誰にも俺のギフト見せてなかったな。」

黒ウサギたちは、一輝のどうでもいいギフトは見ているが、メイン

のギフトは見えていないのである。

「そういや、それってオマエのもじゃね?」

「確かに、俺の実力を知ってるのは、いねえな。黒ウサギは知ってるほうだが。」

男性陣、ぜんぜん実力見せてねえな。

「さてと、武装も終わったし、もういつでもいいぞ。」

「・・・一輝君。一つ質問いいかしら?」

「そろそろ十六夜が、我慢の限界になりそうだから手短によろしく。」
何度も延長されてるからな。

「じゃあ手短に。あなたの武装というのはそれらのことをさしているのかしら?」

飛鳥は一輝が腰にぶら下げた水の入ったペットボトルなどを指差す。

大体、富士蔵村で装備したものから日本刀を抜いたものがある。

「そうだよ。どう使うかは見てからのお楽しみで。」

「さすがにもうはじめるぞ。」

「どうぞどうぞ。」

十六夜はポケットからコインを取り出し、コイントスをする。

そして、コインが地面にはねた瞬間、十六夜は一輝に向かって殴りかかり、一輝は十六夜に向かって水の刃を飛ばす。

結果、十六夜の拳によって水の刃は破壊された。

「何だ、その出鱈目は!」

「オマエが言えたことかよ!」

一輝は、自分の周りに水を漂わせ、左手に炎をまとい、右手に酸素と水素の混合気体をまとった。

「面白そうだな、オイ!」

「オマエの出鱈目もな!」

一輝は水の刃を放ち、鎌鼬を放ち、炎を放ち、爆発を起こすが、どれも十六夜に傷一つつけなかった。

それどころか、それらを石ころ一つで貫いてきた。

「あつぶねえモン投げつけてくるな!」

「こつちが投げたのはただの石ころだ！」

「本当に、ありえねえだろ、オイ！」

一輝は武器を変えた。

今までの装備を全て捨て、ギフトカードを掲げる。

「式神展開！ 〃攻〃ならびに〃武〃！」

一輝のギフトカードから鎧武者の式神が二体、日本刀が二本出てきた。

一輝は鎧武者二体を十六夜のほうに向かわせる。

「時間稼ぎくらいには「オラァ！」って、一瞬で破壊した!？」

一撃で粉碎された鎧武者たちは、紙に戻り、一輝のギフトカードの中に入っていく。

「こいつら、弱すぎないか？」

「一応、妖怪退治の戦士達なんだがな!？」

《こいつ、おかしすぎるだろ。負けないことだけを考えよう。》

一輝は、勝つための作戦から負けないための作戦へと切り替えた。

「これで終わりか？」

「んなわけあるか。」

「そうこなくっちゃな。」

《あく。うん。頭痛のことは考えないようにしよう。》

ここで、一輝の能力の代償の頭痛について説明しておこう。

これは、操るものの種類が多くなったり、そのものの規模が大きかったりするとひどくなる。

種類による増加は足し算のように増えていき、規模によるものは掛け算のように増えていく。

「十六夜！俺は負けたくないから、裏技を使わせてもらおうぞ！」

「おう！何でもかかって来やがれ！」

だから……

《重力を百倍に。効果範囲、十六夜の周辺。》

こんなことをしたら、普通の人なら一瞬で死ぬレベルに達する。

当の一輝も、

《イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ

イ》

頭の中はこんな感じである。

読みづらいな、おい。

「おい、こら。さすがにこれは、ありえねえだろ・・・」

「これで膝をつかないオマエがありえねえよ。さらに百倍。」

ドオン!!!

この凄い音とともに、十六夜が膝をついた。

重力一万倍で方膝をつく程度って・・・。

「あつたまいてー!!」

一輝はその瞬間にギフトを全て解除し、その場にうづくまる。

「おい、一輝。」

「何だ十六夜。」

「オマエのギフトは何だ？さっきのはあまりにも出鱈目すぎる。」

「そ、そうですよ！あの十六夜さんが負けるなんて！」

「まったくもってありえないわー！」

「説明を要求。」

十六夜だけでなく、呆然と見ていた黒ウサギたちも聞きに来た。

「・・・こつちからしたら、十六夜が裏技一発目に耐えたことのほうがありえないんだが？」

一輝は少し間を空けて、一言

「俺は、十六夜の周辺の重力を百倍にしたんだぞ？」

「・・・ハイ？今、重力を、といました？」

「ああ。俺のメインのギフトは、無形物を統べるもの。効果は、名前の通り。形の無いものを操れる。」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「おまえら、少しは十六夜を見習え。何で四人そろって呆然としてんだ。」

いや、これが普通だろ。十六夜みたいに納得するやつの方がおかしい。

《目の前で見せてたのに？》

そうだよ。ってか、またこつちの文に介入してきやがって・・・

「もちろん、細かい制約みたいなのもあるし、代償として頭痛もひどいけどな。」

「へえ、頭痛つてのはどれくらいのが?」

「一番軽い水で、頭を金槌で殴られる三百倍くらい。さっきの重力操ったときのはもう例えるものがない。」

「うわお。」

「そういうことだから、俺に気まぐれみたいな理由で能力を使わせないでくれ。今回みたいにひどいと、結構長く残るんだよ・・・まだ痛いんだよ・・・」

「おう。解った。」

一輝のかなりマジなトーンに、さすがの十六夜も了解した。

「じゃあ最後に、オマエから見た、俺の審査結果は?」

「十分合格だよ。まさか、ここまでとは思ってなかった。」

「そりやどうも。そこの固まってる集団はよろしく。俺はもう寝る。」

「引き受けた。」

一輝はそのまま部屋に戻り、頭痛薬を二箱飲んで寝た。

メイド二人

異世界に召喚された次の日の朝、一輝は普通に起きた。
昨日の頭痛はすっかり治ったようだ。

「ふあく。腹減った〜。」

一輝は寝巻きから普段着に着替え、寝巻きを空間倉庫の中の洗濯機に入れ、スイツチを入れると部屋を出る。

今日はガルドとのゲームだと言っていたので、皆起きているだろう。なら、メシもあるだろう。そんなことを考えながら食堂に向かう。

「シヤクシヤク。」

ついでにりんごを食べながら。そんなに耐えれんのか。

そうやって、りんごを三個食べたところで食堂に着いた。

「おはよう。」

「遅い！」

「・・・皆、早起き過ぎない？」

そこには十六夜たちだけではなくリリと同年くらいの子や、それより年下の子もいた。

メンバー全員大集合である。

「ところで、朝食は？」

「向こうで受け取ってこい。」

「了解。」

一輝が朝食を受け取りにいくと、四人分渡された。

十六夜、飛鳥、耀、一輝の分だそうだ。

「お前ら、まだ食ってなかったのか？」

「ええ。一輝君のギフトについて聞いておこうと思って。」

「起きるのを待ってた。」

「・・・スイマセン。」

惰眠をむさぼった結果、謝ることになった。

「それで、何を聞きたいの？」

「そうだな・・・。まず、お前のギフトはいくつつあるんだ？」

「ギフトカードに出たのだと、三個というか十二個というか……見てもらったほうが早いかな。」

一輝は三人に見えるようにギフトカードを出す。

「……確かに何個とするか迷うわね……何もないところから物を取り出してたのはこれ？」

「ああ。空間倉庫っていうみたいだな。便利だぞ。」

というところ、物をしまつてある倉庫の扉を全て開ける。

「……持ち物全部入れてる？」

「必要なものだけ出せば、部屋が散らからずにすむからな。」

ちなみに、この持ち物とは、家電製品まで含んでいる。

「つてか、思いつきり財産持つて来てんじゃねえか。」

「問答無用で呼び出されたからな。それはどうしようもなかった。」

一輝は倉庫を閉じる。

「……式神多いね。」

「確かに、こんなにいるの？」

「あんなザコども、いらねえだろ。」

「あれは、オマエが異常なだけだからな？数については、これくらいならまだ普通。多い人は億超えるからな。」

「どんな人は超えるの？」

「自分自身は弱いけど、式神を操ることだけは出来る人と、儀式系の術を使う人。」

「その二パターンだけか？」

「だけだな。それ以外の人は持ち歩いてても邪魔なだけだし。」

一輝は朝食を食べ終わって、デザートのりんごを倉庫から取り出して齧る。

さつきあんだけ食つといてまだ食うか……

「ズルイ……」

「何が？」

「リンゴ。」

耀は一輝の手にあるリンゴをさして言う。

「こいつ、食いしん坊か？」

「よくないわよ！」

一輝と白夜叉の会話にメイドの一人・・・音央が突っ込む。

「いや、お前らのメイド服姿が似合っていることは重要だろ。」

「私達がメイド服姿なことに疑問はないのですか？」

「昨日、白夜叉があんなことを言ってたしな。」

「あの時点で予想がついてたなら言いなさいよ！」

「もったいないだろ。」

一輝はこうなることを期待していたようだ。

「そんなに嫌なら着替えたら？」

「元々着ていた制服は白夜叉さんが持っていますから・・・」

「そうか。白夜叉・・・」

「なんじゃ？」

「超グツジョブ！」

「うむ。」

一輝と白夜叉がお互いに親指を立てる。

「敵に回るのですか!？」

「まあ、元々着替えを許可する気は無かったけどな。」

「何であんたに命令されてるのよ！」

「いや、だって、お前らは俺に隷属してるんだし・・・これくらいよく

ね？」

「はあ。もういいです。」

鳴央は諦めたようだ。

「私は嫌よ！」

「他の服を希望するなら、出品は白夜叉だぞ？」

「これでいいわ！」

手のひら返しである。

「じゃあ、この服はもらっちゃっても？」

「もちろんじゃ。その二人のサイズぴったりに作ってあるからな。

守りの恩恵もついておる。」

白夜叉はメイド服をあと三着に、寝巻きを何着か二人に渡す。

「さて、本題に入ろうかのう。これが依頼の品だ。」

白夜叉は柏手を叩き、一輝たちの前に黒い携帯電話が現れる。

「これが？」

「ああ。おんしの依頼の品、名を『Dフォン』という。」

「使い方は？」

「おんしが持つておった携帯電話のように電話やメールが出来る。そして、召喚はデータフォルダの中にある画像を選択すればよい。」

「簡単でいいな。」

「写真についてはいくつか種類があるから、好きなものを選択するとよい。」

一輝は試しに、鳴央の選択肢を見てみる。

そこには制服にメイド、巫女服、和服、ナースetc.

《二人は昨日、白夜叉の着せ替え人形にでもなったのか？》

もう一つ、音央の選択肢を見てみる。

そこには制服にメイド、露出の多い妖精のような格好、ナースetc.

《間違いないな。》

どうやら、二人は着せ替え人形になっていたようだ。

だが、二人の写真にそれぞれ一枚ずつ、これはどうなんだという写真がある。

「・・・二人とも。もう少し警戒心もとううぜ？」

「昨日は何かテンションがおかしくなってる・・・」

「ノリノリだったんです・・・」

「いや、そうじゃなくてさ。こんな写真を撮られてるぞ。」

そういうと一輝はディスプレイを・・・二人の下着姿の写真を見せる。

スリーピングビューティ

「茨姫の檻！」

アビスフォール

「奈落落とし！」

次の瞬間、音央が茨で白夜叉を縛り上げ、鳴央が開けた真つ黒な穴に放り込む。

「急に何をするか！」

そのまた次の瞬間には白夜叉は目の前にいた。

「さて、もう用事は済んだし帰りましょう。」

「そうですね。帰りましょうか。」

「今日はガルドとのゲームだし、そっちを見に行こうよ。」

「何か一言ないのか！」

「あなたが「あんたが」「お前が悪い！」です！」

一言を要求されたので、一言を返して、一輝たちはサウザンドアイズからゲームの会場に向かう。

虎は死に、吸血鬼が登場する

一輝たちは、ゲームを行っている居住区画へと向かっている
どこでやっているかは女性店員に聞いた。

「んで？お前らは昨日、白夜叉と何をしてたんだ？」

「まず、五分ほどあのゲームについて話をしていました。」

「たった五分？」

「ええ。元々、あのゲームについてある程度知ってたみたい。」

「私達、当事者の意見を聞きたかっただけのようでした。」

「その後は？」

一輝としては、そっちのほうが気になっていた。

「まず、服を作るからと採寸をされました。」

「正確には、採寸という名目でセクハラをされたわ。」

「…それでもちゃんと、採寸はしたんだよな？そのメイド服があるってことは。」

「採寸は、白夜叉を茨で縛ったりしてたらきた、女性店員さんがやってくれたわ。」

《白夜叉は何もせずただセクハラをしたのかよ…。そりや呼び捨てにもなるな。》

「…なんとなく予想はつくが、その後は？」

「白夜叉さんのコスプレコレクションを見せてもらって…」

「その中には露出の少ない可愛いのもあって…」

「それを着て騒いでるうちになんだかテンションがおかしくなりまして…」

「恥ずかしいのとかも着て写真撮影を…」

「それがこの写真か。」

一輝はDフォンのデータフォルダを開く。

「ところでそれ、どの写真で登録しているのですか？」

「まさか、下着姿じゃないでしょうね？」

二人が笑顔なのにとっても怖い。

その証拠に、周りの人たちが距離をとった。

「い、いや。登録はメイド服でしてる。気分で他に変えるかもだけど、下着にはしないって約束するよ。」

「そう。ならいいわ。」

二人が普通の笑顔に戻った。

「さて、今朝ジンと話してたんだが、お前達には子供たちと一緒に働いてもらいたいんだが、かまわないか？」

「ええ。それぐらいはするわ。」

「私達は一輝さんに隷属している立場ですし。」

「ありがとう。じゃあ、よろしく、つと。ちようど着いたな。」

そんな話をしているうちに、目的地に到着した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「黒ウサギ！早くこっちに！耀さんが危険だ！」

《ん？何かあせったような声が聞こえるな。》

一輝は偶然聞こえたその声に、いやな予感が広がる。

「なんか、ジンのあせった声が聞こえるから先に行く。二人は後から来てくれ。」

「了解。」

「解りました。」

一輝は自分の走る速さを操り、ジンたちの元へと急ぐ。

「こ、これは・・・ひどい怪我です。すぐに・・・」

「何があった。」

そして、一瞬でジンたちの下へとたどり着き、すぐ近くにいた黒ウサギに状況を尋ねる。

「い、いつの間にここに？」

「いいから早く！」

「耀さんがガルドとのゲームで重傷をおったんです。それで、黒ウサギにコミュニティの工房まで運んでもらおうと。」

「この出血の仕方だと、運んでる間にかなり危険だぞ。今ここで止血だけでもする。」

というと、一輝は倉庫を開け、中からワセリンとモルヒネを取り出す。

そして、ワセリンを傷口に塗り、強引に血を止めて、痛み止めにもルヒネを注射する。

「これで一応はもつ。つつてもその場しのぎだからそのつもりで。」

「はい。それでは失礼します。」

耀を抱えると、黒ウサギは全速力で工房へと向かった。

「・・・なんつー速さだよ・・・」

「やっぱりオマエらは面白いな。黒ウサギは俺並には程遠いも、メンバーの中じゃ別格だし、オマエなんか俺に勝つくらいだしな。いつかりベンジするから、覚悟しとけよ。」

「俺が勝てたのは、俺に有利なルールだったからだ。それに、あの重力を耐えられたら俺の負けだぞ?」

「あそこが限界か。なら、次は俺の勝ちだな。」

「すいませんでした、十六夜さん。」

一輝と十六夜が話していると、急にジンが謝ってきた。

「ん?どうして頭を下げる?」

「僕は結局・・・何も出来ず仕舞いでしたから。」

「それでも、勝ちには勝ちだろう?こっちが勝ったんなら、御チビにも何か要因があつたつてことだ。」

「それに、耀の応急処置はジンがやったんでしょ?何もない状況であそこまでやるのは中々のものだ。あれがなかったら、とつくに腕は再生不能だ。」

「つてことだし、これでいいんじゃないやねえの?それより、初のギフトゲームは楽しめたのか?」

「・・・いえ。いえ。楽しむことは出来ませんでした。本当に・・・僕を担ぎあげて、やっていけるのでしょうか?」

「他に方法はないと思うが、御チビ様が嫌だと仰るのなら、止めますデスヨ?」

「・・・いえ、やっぱりやります。僕の名前が全面的に出ていれば、皆さんの被害が軽減できるかもしれない。」

「リーダーだからって、あんまり気負うなよ?」

ジンの、これから襲ってくるであろう脅威を自分の名前に集めることを重畳だというような覚悟をかつての父のように、全てを一身に受ける覚悟を感じ、不安になる一輝であった。

|||||

「今より『フォレス・ガロ』に奪われた誇りをジン・ラッセルが返還する! 代表者は前へ!」

十六夜が1,000人を超える衆人を前に、尊大な物言いで叫んでいる。

「聞こえなかったのか? お前達が奪われた『名』と『旗印』を、お前達の誇りを返還すると言ったのだ! フォレス・ガロを打倒したジン・ラッセルが、その手でお前達に返還していく!」

《へえ、こうやって俺達のことを売り込むのか。考えたな。》

一輝はそんな十六夜の様子とさっきの会話から、十六夜のたくらみを理解する。

「これは、どういう状況?」

気がつくのと、後ろにはメイドが二人、立っていた。

「売り込み、かな? 俺達、『ノーネーム』は売り込めるものが限られてるからな。」

「何を売り込んでいるのですか?」

「今回はリーダーの名前。後はインパクトかな。」

「まあ、こうして奪われた誇りの返還をされれば、かなりのインパクトよね。」

「あと、打倒魔王ともこれば、かなりのものですね。」

「ってか、こんな宣言をして大丈夫なの?」

「大丈夫だろ。それに、俺達もそのつもりなんだし。」

「それもそうですね。」

「さて、出来る限り早く、『ノストラダムスの大予言』を倒して、この宣言を裏づけしないと。」

「ええ！」

「はい！」

|||||

その後、本拠に戻った一輝たちは耀の容体を確認しにいき、二、三日もあれば治ると聞き、一輝と十六夜、黒ウサギの三人は、そのまま談話室へと向かう。

「で、例のゲームはどうなった？」

「それが・・・延期になりました。」

それが、申請にいつてきた黒ウサギの回答だった。

「しかも、このまま中止の線もあるそうです・・・」

「なんてつまらない事をしてくれてんだ。白夜叉に言つてどうにかならないのか?」

「どうにもならないでしょう。」

なんでも、巨額の買い手がついたこと、サウザンドアイズは郡体コミュニティで、今回のホストは傘下のコミュニティの“ペルセウス”というコミュニティであることもあり、白夜叉にどうにかできることではないそうだ。

「ところで、その仲間つてどんな人?まさか、プラチナブロンドの長髪?」

「は、はい。そうですが・・・なぜそれを?」

「い、いや。偶然、その窓の外にそんな人が見えてな。ほら、そこ。」

一輝が窓のほうをさすと、二人もそつちを向く。

そこには、金髪ロリ少女がいた。

「レ、レティシア様!」

「え!?マジで!」

「様はよせ。今の私は他人に所有されている身分。モノに対して敬意を払ってはいは笑われるぞ。」

黒ウサギが錠を開けると、レティシアが苦笑しながら入ってきた。

「ジンには見つからずに黒ウサギと会いたかったのな。こんな場所

からの入室ですまない。」

「そ、そうでしたか。あ、すぐにお茶を淹れるので・・・」

「もう淹れたよ、黒ウサギ。紅茶とお菓子を少し。さ、どうぞ。」
「相変わらず、便利なギフトだな。」

一輝は倉庫を使い、一瞬でティーセットを準備する。

「んで？レティシアはどんな用件で？」

「君が一輝だったな。いや、用件というほどのものではないよ。新生コミュニティがどれほどの力を持っているのを見に来たんだ。ジーンに会いたくないのは、お前達の仲間を傷つける結果になってしまい、合わせる顔がないからだ。」

「吸血鬼？なるほど、だから美人設定なのか。」

「へへ。レティシアって吸血鬼なんだ。なら納得。」

「は？」

「え？」

「どうぞお気になさらず。」

「続けてくれ。」

十六夜に一輝の二人はヒラヒラと手を振って続きを促す。

ちなみに、一輝の頭の中には吸血鬼というワードから物語シリーズの忍が連想された。

《結構キャラかぶってるよな。》

そこからは、十六夜と黒ウサギ、レティシアが少し話をして、十六夜とレティシアが一騎打ちのようなことをし、十六夜が圧勝し、レティシアのギフトについてごちゃごちゃした後、屋敷に戻ることになった。

《何でこんなにダイジェスト？》

いや。このままだと原作の丸写しになりそうで・・・っておい！こつちの文に介入するなって何回言ったら解る!?

《おっ、これがノリ突っ込みか？》

五月蠅い!!

サウザンドアイズの偉い人って、変態しかいないんだ
ろうか……

一騎打ちが終わり、屋敷に帰る途中、遠方から褐色の光が一輝の方に射し込み、レティシアはハッとして叫ぶ。

「あの光……ゴーゴンの威光!？」

「って、俺の方に来てないか!？」

一輝は自分に向かってくる光を操ろうとするが、その前にレティシアに突き飛ばされる。

「だ、ダメです!レティシア様、避けてください!」

黒ウサギの声も虚しく、一輝をかばったレティシアは瞬く間に石像となり、横たわった。

そして、光の射し込んだ方向から、翼の生えた靴を履いた騎士風の男たちが飛んでくる。

「いたぞ! すぐに吸血鬼を捕獲しろ!」

「ノーネームもいるようだが、どうする!？」

「邪魔するようなら、切り捨てろ!」

空をかける騎士たちの言葉を聞き、一輝は黒ウサギに尋ねる。

「なあ、黒ウサギ。あっちもああ言ってることだし、邪魔をしてきていいか?」

「お気持ちにはわかりますが、我慢してください! とりあえず本拠に……」

「これでよし。今回の交渉相手は、箱庭の外とはいえ、一国規模のコミュニティだからな。奪われでもしていたら……」

「箱庭の外ですって!？」

黒ウサギが一輝の説得をしている途中、聞こえてきた言葉に抗議を上げる。

「彼らヴァンパイアは箱庭の中でしか太陽の光を受けられないのですよ! そのヴァンパイアを箱庭の外へ連れ出すなんて……」

「我らの首領が取り決めた交渉。部外者は黙っている。」

気がつくのと、百に匹敵する軍勢が空を飛んでいる。

こんな規模での不法侵入をするのは、「ノーネーム」だということで見下しているからこそ、やる行為だ。

「そのの方々？不法侵入の罪でぶっ潰しますよ？」

一輝は、自分達が見下されていることに気づき、静かに怒る。

「ふん。こんな下層に本拠を構えるコミュニティに礼を尽くしては、それこそ我らの旗に傷がつくわ。身の程を……」

「貴様が知れ!!」

ブチギレた。一輝がブチギレた。一輝の人生で二位くらいのキレっぷりだ。

そして、キレた勢いでざっと五十人ほどを重力によって地に縛り付ける。

「こっちは、話してた友達を急に石化されたり、所属してるコミュニティをバカにされたり、」

一度、言葉を切り、左腕を……避けきれず、石化した左腕を見せて、続ける。

「左腕を石化されたりして苛立つてるんだよ。今おとなしく帰ればこれ以上、この場ではなにもしないどいてやる。」

レテイシアは……そっちの所有物だからな。持って帰ってもいいぞ。」

一輝は怒気を強め、重力を解除して交渉を……いや、命令を下す。「く……撤退。」

ペルセウスの軍勢は不可視のギフトを使い、レテイシアごと消える。

それを確認した一輝は二人のほうを向き、

「……一人だけ言いたい放題、やりたい放題やってごめん……」

冷静になった一輝は、とりあえず二人に謝る。

「まあ、左腕の分で抑えたからよしとしてやる。」

「そりやどうも。黒ウサギもそんな感じで？」

「は、はい。それよりも、左腕は大丈夫なのですか？」

「これのこと？」

一輝は動かない左腕を指して尋ね、黒ウサギはそれを首肯する。

「別に、なんの問題もない。何なら今すぐにも戻せるけど・・・それはしないほうがいいかな?」

「まあ、一輝はあんなだけのことをしたからな。やられた分はやり返したってことにするにはそのままのほうがいいな。」

「では・・・」

「ああ。白夜叉のところに行くぞ。御チビとお嬢様、メイド二人を呼んでこい。」

|||||

「うわお、ウサギじゃん! いやー本当に北側にウサギがいるなんて・・・つてか、ミニスカにガーターソックスつてずいぶんエロいな! うちのコミュニティに来いよ。三色首輪付で毎晩可愛がるぜ?」
とつても解りやすい外道っぷりを見せながら、ルイオスは黒ウサギを視姦してはしゃぐ。

サウザンドアイズの幹部つて、変態しかいないんだろうか・・・

「先に断っておくけど、この美脚は私達のものよ。」

「そうですねそうです! 黒ウサギの脚は、つて違いますよ飛鳥さん!!」

「どうぞお嬢様。この足は既に俺のものだ。」

「そうですねそうですこの脚はもう黙らっしやい!!!」

「よかろう、ならば言い値で」

「売・り・ま・せ・ん! あーもう、まじめな話をしにきたのですからいい加減にしてください! 黒ウサギも本気で怒りますよ!!」

「馬鹿だな。怒らせてんだよ。」

「このお馬鹿さま!!!」

スパーン!!! ハリセンを一閃。今日の黒ウサギは短気である。

そこから、ルイオスがノーネームをペルセウスに勧誘したり、黒ウサギの服装のことで十六夜と白夜叉が意思疎通したり、その光景に音央と鳴央がデジャブを感じたりしてから、本題に入った。

《何か最近、ダイジェスト多くない?》

変えづらいというか、なんと言うかで・・・増えてはいるな。

ところで、いつになつたらこつちの分に介入しないってことを覚えてくれるんだ？

《そんなつまらないことを、俺がすると思う？》

つまらない云々じゃなく、覚えてくれ。

さて、話を戻して、黒ウサギがレイシアのことや軍勢の放った暴言の数々について話し終わったところだ。

「以上の内容になりますが、何か言いたいことは？」

「もちろんあるよ。こつちもそいつに五十人あまりを攻撃されているし、あの吸血鬼が逃げ出した原因はお前達なんだ。こつちにのみ非があるわけではない。」

「攻撃については、非はそつちにある。やりたいことはやったからチャラでいいけどな。」

一輝は石化した左腕をルイオスに見せる。

「やられた分はやり返すって形にはなったが、これは、そつちに非があるよな？」

「・・・解つたよ。じゃあ、こつちも五十人のことは構わない。難癖付けられても困るしな。その石化はといとくよ。」

ルイオスは、一輝の腕に懐からとり出した液体を一滴たらし、一輝の腕を元に戻す。

「さて、それじゃあ交渉に入ろうか。」

そこからは、知っている人も多いだろう、黒ウサギとレイシアとの交換の話をして、解散する。

《一話の中で二回もダイジェストって・・・》

変えられるようなところがないんだ、しょうがないだろ。

そして・・・

《こつちの文に介入するな？もうそれ飽きたよ。》
ならやめろ。

《あんたで遊ぶのには飽きてない。》

ここのやろう・・・

CAPTURE the GRAIAI

一輝は一人、コミュニティの門で待ち伏せをしていた。

仲間の一人が悪巧みをするような顔をしていたのがどうしても気になったのだ。

「・・・まだ来ないか。気のせいだったのか？」

暇なときの癖で携帯を取り出し、圏外であることを思い出し、しま
う。

代わりにICレコーダーを取り出し、イヤホンを耳にさす。

「・・・・・・・・・・」

ついでに、Dフォンを取り出し、暇を持て余す。

「本格的に、気のせいか？」

「なにがだ？」

「おわっ!？」

ふとつぶやくと、後ろから声が聞こえる。

振り向くと、そこには十六夜がいた。

「いつのまに・・・ってか、どうやって・・・」

「いや。お前が待ち伏せしてたからちよっと驚かせようと思ってな。」
「なるほど。」

なぜその理由で納得するんだ。質問の回答にもなっていないだろ
う。

「で？待ち伏せの理由は？」

「オマエが、面白いことをしようって顔だったから、一枚かませてもら
おうかと。」

「ちようどいいいな、戦力が欲しかったんだ。時間もないしな。」

「何をする気だ？」

「その辺は、歩きながらにしよう。」

そのまま二人は歩き、二つの建物が建っている場所にたどり着く。

両方の建物には「ゴーゴンの首」の印が掲げられている。

「ここでは、最下層のコミュニティには常時解放しているゲームがあ
る。」

ようやく、十六夜が説明を始める。

「んで、二つともクリアすると、何とビックリ。ペルセウスは自らの伝説と旗印を賭けたゲームへの挑戦を許してくれる。」

「OK。目的は理解した。俺はどっちを担当すれば?」

「右の建物のほうだ。力任せのゲームは俺のほう得意だからな。」

「了解。ついでだし、出来なかったほうは罰ゲームでどうよ?」

「はっ。後で後悔するなよ!」

そして、二人はそれぞれの建物へと向かった。

|||||

《これは・・・潮の香り?》

一輝は、入ったら吹いてきた風にそんな感想を得た。

そのまま、地下の最奥までたどり着くと、そこは、回り一面海の、小島だった。

「・・・建物を一直線に進んだら、小島?」

一輝は首を傾けるが、箱庭だし、こんなこともあるか、という結論に達した。

「二伝説に挑戦するものよ。名を名乗れ。」

どこからか、三重に重なった声が聞こえる。

「ノーネームの寺西一輝!そっちも姿を見せるのが礼儀ってもんじやないのか?」

一輝が名乗りを上げると、目の前の海水から三人の老婆が現れる。

「我らは『グライアイ』おぬしはペルセウスの伝説へと挑みに来たのだな?」

「ああ、そうだ。」

「では、ゲームを始めよう!!」

一輝の目の前に、『契約書類』が現れる。

『ギフトゲーム名』 『CAPTURE the GRAI AI』

・プレイヤー一覧 寺西 一輝

・クリア条件 グライアイを捕らえ、その誇りを奪う。

・敗北条件

プレイヤーが戦闘不能になる。

プレイヤーが上記の勝利条件を満たせな

くなつた場合。

宣誓 上記を尊重し、《寺西 一輝》はギフトゲームに参加します。

《グライアイ

》印

「『キサマの力、見せてみよ!!』」

その言葉とともに、三人は立っていた場所・・・海水へと溶けていく。

「こうして海水へと消えた三人を捕らえるのか。普通にやったら骨が折れるな。」

そう、普通にやったなら、かなり面倒くさい。ならば・・・

「普通じゃない方法でやれば、問題ないな!」

そう声を上げ、一輝は・・・

その場にある海水を全て操り、自分の頭上へと集め、圧縮する。

「な、何だと!?!」

「我らは海水に溶け、同化していたはず!!」

「キサマ、一体何をしたのだ!!!」

その場には、さきほど解けたはずのグライアイたちがこのころ。

「別に、ただ海水を操って、自分の近くに集めただけだ。」

「それでは我らが分離されたことの説明がつかん!」

「物分り悪いな、この老婆達。俺は海水だけを持ち上げたんだ。いくら同化したところで本質は変わらない。お前らは海水ではなく、グライアイだからな。」

そう、一輝はそこにある液体を操ったのではなく、海水に限定して操ったのだ。

「さて、お前達の逃げ場はなくなつたことだし、攻撃開始といきますか。」

FAIRYTALE in PERSEUS

挑戦権の片割れを手に入れた一輝は、水に乗ってコミュニティの本拠を目指していた。

とか言ってる間に到着した。

「さて、着いたはいいが……このまま黒ウサギの部屋に向かうか、面白くするか……」

外から黒ウサギの部屋を眺め、真剣に悩む一輝。

すると、中から黒ウサギの怒る声が聞こえる。

「どうやら、十六夜が破壊して入ったようだ。」

《これは……俺もやるしかない!》
なぜそうなる。

「では、レッツゴー!」

一輝は再び水に乗り、黒ウサギの部屋の窓から突っ込む。

「たっだいまー!」

「つて、一輝さんまで!なんで破壊して入ってくるのでございませるか!?!」

「だって、窓に鍵かかってたし。」

「貴方たちの中に、普通に扉から入って来るといふ選択肢は無いのですか!?!」

「!?!それはつまらない!?!」

黒ウサギは諦めた。

「ところで、その大風呂敷、何が入ってるの?」

「こっちはゲームの戦利品だ。」

「一輝君のは?」

「遊んできたらくれた。楽しかったぞ。」

二人は少しだけ風呂敷を広げて、耀と飛鳥に中身を見せる。

「二人でこれを集めてきたの?」

「取ってこれなかったら罰ゲームってルールでな。」

「結局、二人とも取ってきたんだがな。」

二人は黒ウサギのほうを向き直り、風呂敷を突き出す。

*・ホスト側のゲームマスターは本拠・白亜の宮殿の最奥から出てはならない。

*・ホスト側の参加者は最奥に入ってはいけない。

*・プレイヤー達はゲームマスターを除くホスト側の人間に姿を見られてはいけない。

*・姿を見られたプレイヤー達は失格となり、ゲームマスターへの挑戦資格を失う。

*・失格となったプレイヤーは挑戦資格を失うだけでゲームを続行することはできる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、
“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

“ペルセウス”印

|||||

「姿を見られれば失格ってことは、ペルセウスを暗殺しろってことか？」

「いや、さすがに眠ってるってことは無いだろ。」

「それもそうか、と十六夜は納得する。」

「ところで、あの外道は強いのか？」

「ルイオスさん自身はさほど。本当に強いのは……」

「隷属させた元・魔王様」

「はい、その通りで……え？なぜ御二人はそのことを？」

「俺は白夜叉に器具を借りてちよつと星座を調べたら解った。一輝はどうやったんだ？」

「いや。ただ、あのチョコーカーからかなりの禍々しさを感じたからな。これでも一応、陰陽師の卵だし。」

そこで一輝は言葉を切り、一つの提案をする。

「ところで、全員が最奥までたどり着けるプランがあるんだが、ちよつと乗らないか？」

「へえ……どうやるんだ？」

「ちよつとあいつに頼るだけだよ。」
そういつて一輝は、鳴央を指差した。

|||||

白亜の宮殿の最奥にて、ノーネームのメンバーは全員そろってルイオスの前に立っていた。

「ぜ、全員でたどり着くだ?!?あいつらは一体なにをしてるんだ!?!」
ルイオスは目の前の光景を信じられない、というように大声を上げる。

「あいつら?..ここに来るまでの間には誰もいなかったぞ。まるで神隠しにでも会ったみたいだ。」

「ちつ。そいつのギフトか。」

ルイオスは鳴央のほうを見て、舌打ちをする。

そう、一輝の作戦とは騎士達を一人残らず、神隠しに会わせてしまふ、というものだったのだ。

「まあいい。ようこそ白亜の宮殿・最上階へ。ゲームマスターとして相手をしましょう。・・・この台詞を言うの、初めてだな。」

ルイオスは天を舞い、ギフトカードから炎の弓を取り出す。

「伝説とは関係ないギフトを使うのか?」

「空を飛べるのに同じ土俵で戦う理由なんて無いしね。それに、メインで戦うのは僕じゃない。」

ルイオスは首にかかったチョーカーを外し、解放する。

「目覚めろ、アルゴールの魔王!!」

次の瞬間、蛇の髪を持ち、拘束具によって体を拘束されている、巨大な女の化物が現れる。

「ra、GYAAAAAaaaaa!!」

「あれが元魔王様か。十六夜、あいつは譲ってやるよ。俺はあのお調子者をつぶす。」

「俺もそつちのほうありがたいな。ぜひ、元魔王様の实力を知りたかったしな!!」

十六夜は嬉々としてアルゴールのほうに向かう。

「さて、あんたの相手は俺だ、ルイオス。」

「ふん。空も飛べないやつが何を……」

「落ちろ!!」

水にのって飛んだ一輝は、ルイオスの台詞をさえぎり、後ろから踵落としを放つ。

「な、いつの間に!」

「俺も空を飛べるんでね!」

避けられたので、次は妖刀で切りかかる。

「オマエのギフトは水を操る類か!」

「そんなオマエにこんな攻撃!」

一輝は水、火、空気の三つを刃にして放つ。

「水だけじゃないのか!」

反撃をしないとまずいと思い、ルイオスも炎の矢を放つが……

「自分でくらいな!!」

それを一輝は操る。

炎は一輝の支配下にある。

「じゃあ……こっからは思いつきり行くぞ!!」

一輝は攻撃に使えるものを大量に、絶え間なく放ち続ける。

「くそつ。このままだと……」

そこで、ルイオスはアルゴールのほうを見て、極めつけに凶悪な笑顔を浮かべ、

「アルゴール!!この二人に石化の威光を!!」

石化のギフトを解放する。

十六夜のほうと一輝のほうに褐色の光が向かってくるが……十六夜は、

「ハッ、しゃらくせえ!!」

褐色の光を、踏み潰した。一輝は、自らの前にお札を一枚掲げ、

「禍払いの札よ、蛇を喰らい、邪を払わん!!」

その光を浄化し、ただの光へとかえる。

「……予想以上に弱い?」

「まさか、『星霊』の力がこんなものなわけないだろ。」

「いえ、これ以上のものは出てこないかと。」

黒ウサギが口を挟む。

「おそらく、ルイオス様は、星霊を支配するには未熟すぎるかと。」

「なるほどね。だから拘束具につながれてたのか。」

「となると・・・もう終わりか。」

「なんとというか・・・」

「予想以上に弱かったな。」

一輝と十六夜の意見が一致する。

「鳴央、そののでかいのを神隠しに会わせといてくれ。」

一輝は戦闘に参加していないメンバーのところに行き、鳴央に頼む。

「はい。『奈落の穴』。」

黒い穴に、アルゴールが飲み込まれる。

「さて、これでオマエには全ての戦力がなくなったわけだが・・・このままゲームに負けたらどうなるか・・・解ってるんだろうな？」

「その吸血鬼が目的じゃないのか!？」

「そんなものは後でも出来るからな。次は旗印を盾にゲームを申し込み、名をいただこうか。」

ルイオスの顔から一気に血の気が引く。

今の自分には、騎士達も、アルゴールもない。

もう自分には、たいした戦力が無いことに気がついたのだ。

「その二つが手に入った後は、『ペルセウス』が永遠に活動できないほどに貶め続けてやるつもりだが・・・」

「や、やめろ・・・!」

ルイオスは今になって気づく。

自分達は・・・いや、自分は崩壊の危機に立っているのだと。

「それが嫌なら・・・来いよ、ペルセウス。命がけで、俺を楽しませろ。」

ルイオスは始めてこのゲームに対して真剣になり、十六夜に立ち向かう。

「負けて、たまるかあああああああああああああああ
!!!!!!」

ルイオスと十六夜の拳が交差し、勝敗は決まった。

|||||

「「じゃあこれからよろしく、メイドさん」」

レテイシアは、十六夜たちの所有権は自分達にある、という主張を呑み、25%ずつの所有権で、「ノーネーム」三人目のメイドとなった。

|||||

ペルセウスとのゲームの三日後、貯水池付近にてノーネームの歓迎会を行っていた。

「えーそれでは！ 異世界からの四人の新たな同士と、メイドさん三人の歓迎会を始めます！」

黒ウサギの声とともに、子供達の歓声上がる。

そんな中、一輝たち三人は一箇所に固まって食事を取っていた。

「何度聞いても、この人数の子どもがいつせいに声を上げると、かなりのものだよな。」

「ほんとうね。・・・慣れるまで、まだかかりそう。」

「元気でいいじゃないですか。」

談笑をしながら食事を取っていると、黒ウサギが大きな声で注目を促す。

「それではただいまより、本日の一大イベントが始まります！箱庭の天幕に注目してください！」

一輝たちは全員そろって天幕に集中する。

「・・・あっ」

誰かが声を上げるのと同時に、流星群が流れ始める。

「この流星群を起こしたのは他でもない、我々の新たな同士達です。ペルセウスは『サウザンドアイズ』を追放され、あの星空からも旗

を降ろすことになりました。

「さあ皆さん、今日は一杯騒ぎましょう!!」

「・・・これは予想外だったな。」

「きれいね・・・」

「はい・・・」

二人は放心状態だった。

そんな幸せそうな顔を見て、一輝は再び覚悟をきめる。

《絶対に、次こそは絶対に、この場所を失わない。もう二度と、居場所を失ってたまるものか。大切な人を・・・失ってたまるものか。》

あら、魔王襲来のお知らせ？ 火龍誕生祭

箱庭二一〇五三八〇外門居住区画・ノーネーム本拠の空き工房にて、一輝はお札を作っていた。

ルイオスとの戦いで意外と役に立ったため、量を作っておくことにしたのだ。

お札について補足しておく、作り方は霊験あらたかな紙に決まった紋章を書くだけという、とてもシンプルなもののだが、作る時間帯がある一時間だけと決まっており、その時間が毎日違うという面倒くさい面もある。

そして、一度使ったらもうそのお札は使えない。

使い捨てなのだ。

「よし。こんなもんにしとくか。」

開始してから大体一時間がたったので、一輝は作業を終わりにする。

目の前にはこの一時間で作ったお札が大体千枚ほど。

箱庭に来て初めてやったときは一時間で三十枚しか出来なかったのだが、慣れてきて、ギフトを使い始めた結果一気に数が増えた。

一輝は作ったお札をギフトカードにしまい、布団を敷いて二度寝をしようとするが……

「一輝君……ここにいるの!?!」

扉のほうから飛鳥が一輝を大声で呼んでいた。

《……無視するほうが面倒だな。》

一瞬、無視して二度寝、というのも考えたが、それは危険だという結論に達した。

「どうぞ〜。」

飛鳥と十六夜、耀と、なぜか気絶しているジンが入ってくる。

《ジンのことは良いとして。》

よくねえだろ。

「皆さんそろってどういったご用件？」

「悪いのだけれど、今急いでるの。走りながらでいいかしら？」

「寝不足なんだけど・・・」

「それは、春日部以外全員共通だ。」

「OK。目的地は？」

「サウザンドアイズ。」

「了解。」

一輝は水を多めに取り出し、その上に乗る。

「皆も乗ったら？」

「そうするわ。」

「今、走ろうと思えないのも事実だしな。」

「じゃあ私も。」

全員が乗ったところで出発する。

「で？用件を話して欲しいんだけど。」

「そうね。とりあえずはこれを読めば解るわ。」

そう言つて、飛鳥は一輝に招待状を手渡す。

「なににな・・・『火龍誕生祭』の招待状？『北側の鬼種や精霊達が作り出した美術工芸品の展覧会および批評会に加え、様々な『主催者』がギフトゲームを開催。メインは『階層支配者』が主催する大祭を予定しております』!?何この面白そうなイベント!?!」

「ノリノリね。」

「それで、北側に行くためにこうして『サウザンドアイズ』の白夜叉に会いに行こうってわけだ。」

「何で白夜叉に？」

「北側までの距離・・・約九十八万キロ。」

耀の言葉に、一輝は全てを理解した。

「じゃあ、さっさと行きますか。」

一輝はスピードを上げ、『サウザンドアイズ』へと向かった。

|||||

「つーわけで、北側につれてけやゴラ。」

「まあ、とりあえず落ち着け。」

十六夜はおとなしく座布団に胡坐をかいた。

「さて、本題に入る前に一つ確認しておくが、『フォレス・ガロ』との一件以来、魔王に関するトラブルを引き受けていると聞いたが・・・それはコミュニケーションのトップとしての方針か？」

「はい。名も旗印も無い僕達の存在を手早く広めるには、これが一番だと思われましたので。」

「ならよい。では、東のフロアマスターから正式に頼みたいことがあるのだが、よいか、ジン殿？」

「は、はい！謹んで承ります！」

ジンは露骨に喜んで答えた。

「では、内容だが、北側のフロアマスターの一角、『サラマンドラ』が世代交代をしたのを知っておるかの？」

「いえ、知りませんでした。今はどなたが頭首を？やっぱり長女のサラ様か、次男のマンドラ様が？」

「いや。頭首は末の娘・・・サンドラが襲名した。」

「・・・は？」

ジンは何かに驚き固まるが、すぐに身を乗り出した。

「彼女はまだ十一歳ですよ!？」

「それ、お前が言うか？」

「そ、それはそうですけど・・・。」

一輝たちがジンをからかっている間、まったく関心の無い耀が続きを促す。

「私達は何をすればいいの?？」

「そう急かすな。今回の誕生祭はサンドラのお披露目もかねておる。じゃがその幼さゆえ、東のフロアマスターである私に共同のホストを依頼してきたのだが・・・」

重々しく口を開こうとした白夜叉を、耀がはっと気がついたようにしぐさで制す。

「その話、長くなる?？」

「ん？そうじやのう・・・後一時間程度はかかるが・・・」

三人の問題児は顔を見合わせて一つ頷くと、白夜叉に言った。

「白夜叉！今すぐ北側へ向かってくれ！」

「それは構わんが・・・依頼は受諾したということだよいか？」

「かまわねえから早く！事情は追々話すし何より・・・その方が面白い！俺が保障する！」

「待て待て待て！一体何の話を・・・」

「そうか、面白いか。娯楽こそ我々神仏の生きる糧！面白いならば仕方が無いのう？」

「だから何の話を・・・」

一輝の言葉をさえぎり、白夜叉がパンパンと柏手を打つ。

「ほれ、北側に着いたぞ？」

「「「「・・・は？」」」」」

ハーメルンの笛吹き

北と東の境界壁。

四〇〇〇〇〇〇外門・三九九九九九外門、サウザンドアイズ旧支店。

四人が店から出ると、熱い風が頬をなでた。

「へえ……！980000km離れてるとなるとずいぶんと文化様式が変わるんだな。」

「ああ。歩くキャンドルスタンドなんて、実際に見る日が来るとは思わなかったぜ。」

「？探せば意外といたぞ、俺のいた世界には。」

「……普通にいるの？」

「妖怪が普通に現れたからな。」

陰陽師がいる世界なのだから、当然といえば当然である。

「今すぐ降りましょう！いいでしょう白夜叉？」

飛鳥はとてもハイテンションだ。

「ああ、構わんよ。続きは夜にでも……」

「見つけたのですよおおおおおおおおお！」

黒ウサギが降ってきた。

「ようおおおやく見つけたのですよ、問題児様方……！」

淡い緋色の髪を戦慄かせ、怒りのオーラを振りまく黒ウサギ。

なぜ黒ウサギが怒っているのかを知らない一輝はキョトンとし、知っている十六夜たちは逃げ出す。

「逃げるぞ!!」

「逃がすか!!」

「え、ちよつと、」

十六夜は、逃げられるだけの身体能力を持たない飛鳥を抱きかかえ、展望台から飛び降りる。

耀は旋風を巻き上げて空に逃げようとするが、黒ウサギに捕まる。

「後デタツプリ御説教タイムデスヨ。」

「りよ、了解。」

一輝は黒ウサギに怯える耀を見て、逃げることにする。

「ええつと……。二人とも！また後で！」

一輝は水を取り出し、走り出すが……

「『奈落の穴』！」

「おわ！」

目の前に真っ暗な穴が現れたので、立ち止まる。

「『茨の檻』！」

その隙に、茨でぐるぐる巻きになる。

「逃がさないわよ、一輝！」

「おとなしくして下さい！」

気づくと、目の前にメイドが二人、鳴央と音央がいた。

「おとなしくしてもいいが、なぜこうなってるのかを教えてください。」

捕まった以上、抵抗は無駄だと判断して冷静になる。

「あんな手紙を残しておいて、よくそんなことが言えたな。」

もう一人のメイド、レティシアも来ていた。

「何のことだか解らないが……説明をお願いしても？」

今の状況に一切ついていけないので、説明を求める一輝であった。

|||||

「せめて説明してから巻き込めよ……。」

耀から巻き込まれただけだと証言してもらった一輝は、鳴央たちか

ら説明を受け、状況を理解した。

「急に縛り上げたのは謝るわ。」

「面白がって参加してるとばかり……。」

「そう思われてもおかしくないことをばかりしてたからな。気にするな。」

一輝はシユンとなる二人に買ってきたクレープを渡す。

「それに、せっかく来たんだから楽しもうよ。食い物や展示品もたくさんあるみたいだし。」

「……ん、それもそうね。」

「めいっばい、楽しみましょう。」

三人ともクレープを食べながら歩く。

「にしても……さつきから何回か似たようなステンドグラスを見てる気がするんだが……。」

「いくつか種類はあるみたいよ?」

「笛を吹く男に川辺、嵐、あと……これは何を表してるのでしょうか?」

鳴央が指さすステンドグラスには、子供達が苦しんでいるような姿が描かれている。

「……解らん。お手上げだ。」

「私にも解らないわ。ただ苦しんでいるとしか……。」

「まあ、この四種類だけですわね。」

「四種類で一つの作品なのか?」

一つが解らないせいで、他の作品とのつながりが見つからず、首を傾げる三人だった。

|| || || || || || || || || ||

一輝たちは暗くなってきたのでサウザンドアイズの旧支店に戻り、来賓質に集合している。

「それでは、ただいまより第一回、黒ウサギの審判衣装をエロ可愛くする会議を」

「始めません。」

「始めます。」

「始めません!」

「ちなみに、第十回まで予定して」

「いるわけ無いでしょう、この御馬鹿様!」

ちなみに、一輝は音央の着ていた妖精の衣装を押し予定だった。

「審判というのは本当だぞ? 実は明日から始まる決勝の審判を黒ウサギに依頼しようと思っただけ。」

どうも、十六夜と黒ウサギが町で暴れまわったせいで、月の兎が来ているということが公になり、明日以降のギフトゲームで見れるの

ではないかと期待が高まっているそうだ。

なにやっつてんだ、オイ……

「分かりました。謹んで、承らせていただきます。」

「うむ、感謝するぞ。」

「審判衣装は音央が着てた妖精の格好なんてどう？」

「それだ！」

「それだ、じゃないですー！」

黒ウサギ、相変わらず絶好調である。

「白夜叉。私が明日戦うコミュニティってどんなコミュニティ？」

「すまんが、言えるのはコミュニティの名前だけだ。」

白夜叉が指を鳴らし、一枚の羊皮紙を取り出す。

そこには「ウイル・オ・ウイスプ」「ラッテンフェンガー」と書いてあった。

「こやつらは六術の外門からの参加、格上じゃ。覚悟をしておいたほうがよいぞ。」

「解った。」

耀がコクリとうなづく横で、十六夜は物騒に笑う。

「『ラッテンフェンガー』ってことは、明日の敵はさしずめ、ハーメルンの笛吹きってところか？」

「ハーメルンの笛吹きだと？小僧、どういことだ？」

なんでも、「ハーメルンの笛吹き」というのは昔いた魔王の下部に属するコミュニティで、その魔王はすでにこの世を去っているんだぞうだ。

ついでにこの二つの関係性だが、「ラッテンフェンガー」とはネズミ捕りの男という意味で、これはグリム童話中の「ハーメルンの笛吹き」をさす隠語。

この物語の原型となった碑文にはこう記されている。

—— 一二八四年 ヨハネとパウロの日 六月二六日

あらゆる色で着飾った笛吹き男に一三〇人のハーメルン生まれの子供らが誘い出され、

丘の近くの処刑場で姿を消した——

この碑文は実際に起こった事件を示すもので、後に「ハーメルンの笛吹き」という物語となる。

「ふむ・・・それだと、滅んだコミュニティの残党が此度の祭りに忍んでおる可能性が高くなってきたのう。」

「白夜又様の「主催者権限」により「主催者権限」が持ち込めない以上、その線はとても有力でしょう。」

「へえ、そんなことをしたんだ。」

「うむ。「主催者権限」を持つものは、私の許可無く入れず、参加者の「主催者権限」の使用を禁じるよう設定した。」

「なるほど。それなら魔王が襲ってくるのは不可能だな。」

「だね。押さえるべきところは押さえてある。」

一輝に十六夜は納得したように頷く。

《さて、これならそこまで心配は無いだろうけど・・・なんか重要なことを忘れてる気が・・・》

今聞いた話にかかわる、何か大切なことがあったきがする一輝だが、結局思い出せず、そのまま解散となった。

アンダーウッドの迷路

境界壁・舞台区画。『火龍誕生祭』運営本陣営の特別席に、ノーネームのメンバーは腰をかけていた。

一般席が空いていなかったことから、サンドラが取り計らってくれたのだ。

「いや。ノーネームがこんない席から試合を眺めれるとは思って無かったよ。」

「サンドラさんに感謝ですね。」

「それに、あんなバカ騒ぎをしてる所にはいたくなかったし。」

音央の目は、観客席のほうを向いている。

「うおおおおおおおおおお月の兎が本当に来たああああああああああああああああ!!」

「黒ウサギいいいいいい!!お前に会うために此処まで来たぞおおおとおおおお!!」

「今日こそスカートの中を見てみせるぞおおおとおおおとおおおとおおお!!」

割れんばかりの熱い情熱を迸らせる観客の姿に、黒ウサギは笑顔を保ちながらもへにより、とウサ耳をたれさせて怯む。

おおかた、身の危険でも感じたのだろう。

そんな観客席に対して、飛鳥が生ゴミの山を見るような冷めきった目で見ていたので、一輝は飛鳥に一つ伝えることにした。

「一つ言っておくと、あの手の文化は日本が大本だよ。少なくとも、俺がいた世界では。」

「・・・そう。日本があんなふうになるのね・・・。」

なんだか、軽く絶望しているように見える。

戦後間もない時代から来たのなら、当然なのだろうか？

「ついでに言っておくと、あっちでやってるやり取りも。」

一輝が黒ウサギのスカートについて語り合っている十六夜と白夜叉を指差して言うと、飛鳥は一輝に対して問う。

「私はどんな反応をとればいいのかしら?」

「飛鳥なら参加はありえないだろうし、生ぬるい目で見ればいいんじゃないかな?」

「そう。解ったわ。」

そんな会話をしている間に、ゲームは開始した。

|||||

「へえ、ジャック・オー・ランタンか。自分の目で見るのは久しぶりだな。」

一輝は、耀とアーシャの戦いを見ながらそんな声を漏らす。

「一輝は今までにあのかぼちやお化けを見たことがあるの?」

「昔、いろんな国々を回ってたころにな。といっても、あいつとはまったく関係ない、別の世界の、だろうけど。」

そこでいったん言葉を切り、少し思案顔になる

「さて、耀が勘違いしてないといいんだけど・・・」

「勘違いって、何をですか?」

「いや、たぶんあのジャックはあのアーシャってやつが作ったものじゃなくて、一番有名なほうのジャックなんだよ。」

「どうしてそんなことが解るのよ?」

「俺、これでも陰陽師の卵だからな。相手が妖怪とか悪魔とかの類なら、その力量を測ることはできる。」

「陰陽師、では無いのですか?」

「一応、違うな。俺のいた世界だと、陰陽師を名乗っていいのはその家に伝わる奥義を習得したものだけなんだ。俺は、そんなもの習得していないからな。」

一輝。習得する機会も無かったし、という言葉を飲み込んで、話を終える

それから少ししてゲームは終わった。

|||||

「負けちゃったわね。」

「まあ、相手はかなり悪かったよ。」

「それに、すばらしいゲームメイクでした。」

「シンプルなゲームでも、見ごたえのあるゲームにする。そうそう出来ることではないわ。」

敵の挑発を冷静に流し、敵の冷静さを奪い、敵の情報を獲得し、それを生かす。

一輝には到底出来ないことである。

間違はなく火力とパワーに頼るに決まっている。

《大きなお世話だよ。》

間違つてはいないとおもおうが？

《勝てればいいんだよ、勝てれば。》

ええ……。

そんな会話を地の文としてしていると、一輝は上空から雨のようにばら撒かれる黒い封書を見つけ、それを開封する。

「音央、鳴央。どうやらお出ましのようだぞ。」

そこにはこう書かれていた。

『ギフトゲーム名 “The P I E D P I P E R o f H A M E
R U N”

・プレイヤー一覧

・現時点で三九九九九外門・四〇〇〇〇〇〇外
門・境界壁に存在する参 加者・主催者の全コミュ
ニティ。

・プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター

・太陽の運行者・星霊・白夜叉。

・ホストマスター側 勝利条件

・全プレイヤーの屈服・及び殺害。

・プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスターを打倒。

二、偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。
宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

〃グリムグリモ

ワール・ハーメルン“印”

The P I E D P I P E R of H A M E R
U N ①

「魔王が・・・魔王が現れたぞオオオオオオオオ!!」

一輝が「契約書類」を読み終えるのとほぼ同時に、白夜叉の全身を黒い風が球体に包み込んだ。

「な、何?」

「白夜叉!!」

一輝が黒い風を操ろうとするが、一切操れず、むしろ風は勢いを増し、白夜叉を除く全ての人間を一斉にバルコニーから押し出した。

「ぎゃ・・・!!」

「音央、鳴央!」

空中に投げ出された一輝は水を足元に送り、同じように空中に投げ出された二人を確保して着地する。

横を見ると、十六夜が飛鳥を抱えていた。

「二人とも、無事?」

「ええ。」

「ありがとうございます。」

二人の無事を確認した一輝は、十六夜たちのところに合流する。

「魔王が現れた。・・・そういうことでもいいんだな?」

「YES。」

黒ウサギの言葉に、メンバー全員が緊張を見せる。

「白夜叉の『主催者権限』を破られた様子はないの?」

「ありません。黒ウサギがジャツジマスターを勤めている以上、誤魔化しも利きません。」

「じゃあ、むこうはルールに則ったままここに現れているの?」

「いったいどうやって・・・。」

メイド二人がそんなことを考えているが、今はそれどころじゃない。

「二人とも、考えるのは後だ。」

一輝は十六夜のほうを向き、自分達の受け持つ役割を伝える。

「俺達は観客の避難誘導をしてくる。この中で一番、臨機応変に動けるのは俺だからな。」

「ああ。まかせた。」

一輝はメイド二人を連れて、避難誘導に向かう。

|||||

「全員落ち着いて動け！無駄にあわてるとかえって遅くなるぞ！」

一輝が声を張り上げるも、誰も聞く気配が無い。

一輝はあきれ返って、Dフォンを取り出す。

「音央、鳴央、作戦変更。無力な女子供を優先的に助ける。そいつらさえこの場から抜ければ、残りのやつらは勝手に逃げてくれる。」

「了解！」

「分かりました！」

二人の返事を聞いてから、通話状態のままDフォンをしまい、ギフトカードを取り出す。

「式神展開！〃攻〃ならびに〃防〃！」

そして、ギフトカードの中にある〃功〃 〃防〃の式神を全て展開する。

「汝らに命ずる。今、この土地にいる無力なるものを助けよ。安息の地に運びたまえ！」

式神たちは命令に従い、小さな子供などを抱え、安全なところへと運んでゆく。

「後は勝手に逃げてくれるだろうし、護衛にてつするか。」

と言いつつ振り返ると、後ろから黒い霧がこつちに向かってくるのに気づいた。

「このパターンで、あれがなんでもないってことは無いよな？」

絶対に無いと言えるだろう。

《だよな！》

相変わらず、こつちの文に介入してくるな、コイツは・・・

《さて……今回のあれは、病魔の類っぽいし……》

一輝は、今回の相手が魔王であることを思い出し、お札を十枚手に持ち、三十枚ずつを両方のポケットにしまおうと、手持ちのお札を掲げて、唱える。

「禍払いの札よ、この場に在りし病魔を喰らい、平穏をもたらさん！願わくば、すべての死を喰らいたまえ！」

一輝の言葉に反応し、お札が黒い霧を吸い込んでゆく。
だが……

「うそっ！こんなに速いペースで?！」

始めてから十数秒で、十枚全部が使用不能になり、崩れ落ち、一輝がもろに黒い霧を浴びる。

「マズイ、マズイ!!」

慌ててポケットに入れてたのを全部掲げ、ギフトカードから千枚を取り出し、足元につむ。

「さて……全力でいかないと飲み込まれそうだな。」

一輝は吸い込むスピードを上げさせ、一切取りこぼしが無いようにする。

「……早くだれかが、これを止めてくれないかな……。」

そろそろ積み上げておいたお札が切れそうである。

と、そのとき……

「『審判権限』の発動が受理されました！ これよりギフトゲーム The P I E D P I P E R of H A M E R U N は一時中断し、審議決議を執り行います！プレイヤー側、ホスト側は共に交戦を中止し、速やかに交渉テーブルの準備に移行してください！繰り返し返します——」

という黒ウサギの声とともに黒い霧は消えた。

「ひゃー……。あんなに有ったお札がもう一枚も残ってない……。かなりのピンチだったようだ。」

一輝はそのまま座り込み、服の袖で額を拭うが……

「ん？何だこれ？」

腕に黒い斑点があるのを発見する。

「こんなのは今まで無かったし……ってことは、これはあの黒い霧の影響？」

こんな状況だというのに、冷静に判断する一輝。

そのまま、冷静に対処を開始した。

《とりあえず、自分の中の免疫反応を強制的に底上げして……あと、自分の中の邪も払っておいて……》

その他もろもろのことを、二つのギフトを同時に使うことによつて対処し、まだ正体すら把握していない、自分の体内の異物を全て取り除いた。

おまけで、一輝の体内にこの病気(?)に対する抗体が出来たが、これを他人に与えるにはいくつか面倒なことをしないとイケないので、使うことは無いだろうと、一輝は思っていた。

思っては、いた。

The PIED PIPER of HAMMER UN 一時中断

「おーい！飛鳥ー！どこだー!?!」

一輝は大祭運営本陣営の宮殿で飛鳥を探していた。

一時中断した後、六実姉妹と合流して帰ってくると、耀が飛鳥を探していたので、一輝も手伝うことにしたのだ。

六実姉妹はケガ人の手当てなどを手伝いに行っている。

「いねえな、飛鳥。あのプライドの高い飛鳥が疲れて倒れてると思えないし・・・」

もし、倒れそうだとしても無理をするやつだという認識のようだ。

「可能性としては・・・捕まった？あいつのギフトは格上には効かないし。身体能力もな・・・」

一輝がそんな思考を重ねていると、耀とアーシャが話をしているのを見つめる。

「じゃあ、私は行くぞ。」

「うん。ありがとう。」

二人が話を終わるのを見計らって、一輝は耀に話しかける。

「お疲れ様、耀。」

「あ・・・一輝。お疲れ。どうだった？」

「あいにく、こっちにもいなかった。見かけたって人もいなかったな。」

「そう・・・飛鳥、どこに行っただのかな・・・」

そんなことを話しながら、ふらふらとゆれる耀。

目の焦点も合っていない。

「私、もう一回探して・・・」

ゆれ幅がどんどん大きくなっていき、言葉の途中で倒れる。

「お、おい！大丈夫か!?!」

一輝は、慌てて倒れる耀を途中で受け止め、声をかける。

いくら声をかけても全然反応が無いので、額を触ってみると・・・

「わっ、凄い熱だな・・・このタイミングで熱ってことは・・・」

一輝は耀の腕などを見て、あるものを探す。

そして、一輝に有ったのとほとんど同じ位置に、それを、黒い斑点を見つけた。

「やっぱりあったか・・・。鳴央たちも、高熱を出して倒れる人が多いって言ってたし、同じ症状だろうな。」

一輝はDフォンを取り出し、鳴央に電話をする。

「もしもし?」

「鳴央か?俺だ。耀が熱を出して倒れた。病室を一部屋、準備しといてくれ。」

「解りました。隔離部屋の個室を一部屋、準備しておきます。」

「よろしく。」

一輝は電話を切り、音央にいくつか食材と、薬草や霊草の類を準備しておくよう、メールでリストを送って頼むと、耀を抱えて隔離部屋へと歩き出した。

|||||

一輝は耀を運んだ後、鳴央に止められたのを無視して、耀が眠るベッドの脇で頭を抱えていた。

「さて・・・飛鳥は行方不明だし、耀は倒れるし、しかも原因が黒死病つて・・・」

一輝の心は絶望の連鎖中である。

もうあと少しでよ〇ーんである。

「しかも、このルールは無いだろ。いくら仕方がなかったといえ・・・」

「どんなルール?」

「うわ!!」

一輝は、すっかり寝ていると思っていた耀が話しかけてきて、思いつきり驚く。

絶望の連鎖がば〇えーんに達していたのも原因の一つかもしれない。

最大連鎖、おめでとう。

「そんなに驚かなくても・・・」

「いや、寝てると思ってたやつが急話しかけてきたら驚くだろ・・・おきてて大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫。おなかがすいて起きたくらいだし、大丈夫だと思う。」
「ハハハ・・・耀らしいな。おかゆ作ってくるから食べながら話そう。」
そういつて一輝は部屋から出て行こうとし、扉に手をかけたところで振り向く。

「言い忘れてたが、耀は黒死病にかかっているから、おとなしくしとけよ。」

「え・・・黒死病ってたしか・・・」

耀が何か思い出そうとしているのをみて、一輝は厨房へと向かう。

|||||

「たしか・・・ここが厨房だったよな。」

一輝はなんとなくそれっぽいところに向かい、扉を開く。

「おじやまします。」

「あ、一輝。頼まれたものは準備しといたわよ。」

そこには音央と一輝が頼んだ食材、素材、それに調理器具もあった。

「ここにあんたが来たってことは、耀ちゃんは目を覚ましたの？」

「ああ。おなかがすいたって言ってたからおかゆを作りに来た。」

「耀ちゃんらしいわね・・・。あんたのほうは、あの部屋にいて大丈夫だったの？」

「問題ない。いっただろ？俺の中には出来たての黒死病の抗体があるって。」

「いまだに信じられないんだけどね・・・。まあいわ。私は鳴央の手伝いに行くから。」

「了解。これ、ありがとな。」

「私はサラマンドラの人に頼んだだけ。気にしなくていいわよ。」

そっくり残して、音央は厨房から出て行った。

「さて・・・おかゆを作りますか。」

一輝はおかゆの材料以外をギフトカードにしまい、おかゆを一人分作ろうとしたところで、量を五倍に変更した。

|||||

「おかゆ出来たぞ、耀。」

「・・・なんでその量？」

一輝が持つおぼんには土鍋が五つのついていた

「普段の耀の食べっぷりを見た結果だ。全部味は違うから、飽きは来ない・・・と思う。」

一輝は土鍋の一つから少しおわんにとり、耀に渡す。

「さて、じゃあ質問タイムと行きますか。何が聞きたい？」

「ハム、モグモグ・・・。さつき黒死病って言ってたけど、それって敗血症の？」

「それで合ってるけど。」

「一輝はここにいて大丈夫なの？」

「問題ない。おれはもう、その病気にはかからないからな。」

「?それって・・・」

「その辺の説明は後にさせてくれ。たぶん、他の質問にいけなくなる。」

「・・・解った。それはあとでいい。」

耀は気づいたらおわんを空にして一輝のほうに突き出していた。

いつの間に食ったんだ・・・。

「はい、どうぞ。」

「ありがとう。次の質問だけど、審議決議の結果はどうなったの？」

「はい。これが最終的な『契約書類』。」

一輝は黒く輝く『契約書類』を耀に渡す。

『ギフトゲーム名』The PIED PIPER of HAME
RUN

・プレイヤー一覧

・現時点で三九九九九外門・四〇〇〇〇〇〇外門・境界壁に存在する参加者・主催者の全コミュニティ。（『箱庭の貴族』を含む）

・プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター

・太陽の運行者・星霊・白夜叉（現在非参戦のため、中断時の接触禁止）。

・プレイヤー側・禁止事項

・自決及び同士討ちによる討ち死に。

・休止期間中にゲームテリトリー（舞台区画）からの脱出を禁ず。

・休止期間中の自由行動範囲は、大祭本陣営より500m四方に限る。

・ホストマスター側 勝利条件

・全プレイヤーの屈服・及び殺害。

・八日後の時間制限を迎えると無条件勝利。

・プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスターを打倒。

二、偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。

・休止期間

・一週間を、相互不可侵の時間として設ける。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

グリムグリモワール・ハーメル

ン『印』

「こつちにとって有利だったり不利だったり：：なんだか大変なルールになったね。」

「ああ。しかも、まだ謎解きの糸口もつかめていない。」

「まったく?」

「すくなくとも、俺が最後に十六夜にあった時点ではな。気になるん

なら十六夜に聞いてくれ。」

一輝は言葉を切り、耀に問う。

「さて。もう質問は終わり?」

「まだ一番大切なことを聞いてない。どうして一輝は黒死病にかからないのか。」

「・・・もう他にないならいいか。それは、中断した辺りで黒死病にかかって、それをその場で治したから。ただそれだけのことだ。」

耀がとても驚いている。

自分の力でギフトによる病を治したといっているのだ。普通の反応だろう。

そこであることに気づいたように、身を乗り出す。

「私の黒死病もおせる?」

「悪い、無理だ。俺のギフトは他人の体の中には使えないんだ。」

「そう・・・。」

耀はあからさまにがっかりする。

《まあ、一つだけ方法はあるが・・・この方法は・・・。》

一輝はその方法を封印している。

「じゃあ、他に私を治す方法はない?」

「・・・可能性がある方法は一つあるが・・・色々結構つらい上に、ゲーム再開までに治る可能性は2〜3%。かなりおすすめはしない。」

「でも、治る可能性はあるんだよね?」

「ああ。」

「じゃあ、お願い。」

「・・・一応、メインの材料を伝えておくぞ。」

「何?」

「俺の血。これが半分以上を占める。」

一輝は言葉を切り、説明を始める。

「この方法に使う飲み薬は、俺の血にいくつかの薬草、霊草を混ぜて、俺のギフトでそれにある性質を・・・抗体を服用者の体内に吸収される性質を与えるもの。」

量も結構あるし、副作用として、服用時にかなりの痛みを与える。」

こんなところだ、と一輝は言葉を切る。

「……一輝はそれを作る際につらくはないの？」

「まあ、つらい。血を俺が生きれるギリギリまで使うからな。それでも、オマエが望むなら、俺に来るつらさはオマエが感じるようになるものより楽だし、構わないぞ。」

耀は少し悩むようなしぐさをして、回答する。

「おねがい、私も皆の手伝いをしたい。」

「OK。今から作ってくるからちよつと待ってろ。」

——10分後——

「ハイ……完成……。」

ものすつごいフラフラになった一輝が日本酒の瓶に似た形の瓶に入れた薬を持って、かえって来た。

「一輝……本当に大丈夫？」

「……大丈夫……。死ぬことはないから……。」

とても信じられる状態ではない。

「それ……一気に飲んでもいいけど、死ぬことは絶対になくても、苦痛がバカにならないからお勧めしない。」

でも、全部飲んだほうが治る確率は上がるから、うまいこと前日までに全部飲んだほうがいい。」

「うん。ありがとう。一輝は早く休んだほうがいいんじゃない？」

「そうする……。おやすみ、耀。」

「うん。おやすみ、一輝。」

そう会話を交わして、一輝は部屋を出て行く。

「さて……。全部飲んだほうが効率は上がるって言ってたよね。」

耀は一輝の忠告を無視して、瓶の中身を一気に飲み干した。

The PILED PIPER of HAMMER
UN 再開

一輝は自分に割り当てられた部屋でパソコンをいじっていた。

まだ薬を作るために使った血がほとんど戻っておらず、フラフラしているため、音央と鳴央から部屋でおとなしくしているよういわれ、ドアの前に監視に付かれたため、二人ともが監視から離れるまでの間、初日に撮った写真の整理をしている。

すると、途中である写真を目にし、ずっと気になっていたことを思い出す。

「そうか・・・あいつらはこうやって、この会場に潜り込んだのか。」
その写真は、見かけるたびに撮っていた、会場のあちこちに飾ってあった、ステンドグラスの写真だ。

「とすると・・・これがヴェーザー、これがラッテン、これがシュトロムで・・・。」

一輝は、それぞれの写真のタイトルを変更していく。

「んで、これがペストで・・・ん？」

一輝の手は、子供が描かれているステンドグラスがに連続できたところで違和感を感じた。

「この写真・・・なんか違う？」

一輝はその二枚を交互に表示したり、同時に表示したりして、その二枚を見比べる。

「やっぱり違う。子供のイメージが強かったせいで同じものかと思っただけ、片方は苦しむ子供でペストだが、もう片方は狂いながら踊ってるんだ！」

一輝は自分の発見に喜ぶが、まだ大事なことを見失っている。

《大事なことって？》

言うわけがないだろう。

《まだ何か大切なこと・・・》

一輝は最近聞いた情報や見たものなどを必死になって思い出し、何

かにひらめいたかのように「契約書類」を手に取り、全体をざっと眺め、一つの項目を見つける。

「碎き、掲げる。それが出来るものは、これだ！」

ようやく気づいた。

「この情報は伝えないといけないよな。ついでに、五人目がいるのかも聞きに行かないといけないよな！」

一輝はいい口実が出来たとばかりに、窓から飛び出した。

|||||

コンコン。

「おじやまします、って十六夜？オマエここにいていいのか？」

一輝が耀の部屋に来てみると、耀はぐっすりと寝ており、ベッドの脇で十六夜が本を読んでいた。

感染しないのだろうか・・・？

「別に、この程度のものに俺がかかるわけがないだろ。」

「それはこの病気にかかった俺と耀にけんかを売ってるのか？」

一輝はフラフラしながらそんなことを言う。

「そんな状態のやつにけんかを売って何の得があるんだよ。んで？何か用か？」

「まあそうだな。二つほど質問があつてきた。」

一輝はいすを引っ張ってきてすわり、耀の容態を見ながらたずねる。

「二つ目に、碎き掲げるものの正体はつかめたか？」

「ああ。不自然なほどに大量のステンドグラスが、今回のお祭りに展示されてたからな。間違いないだろ。」

どうやら、わざわざ来る必要はなかったようだ。

「ならいいや。んじゃあ、二つ目の質問に移ってもいいか？」

「どうぞ。」

「では・・・今回の魔王の軍勢って、ペスト、ヴェーザー、ラッテン、シュトロムのほかにもう一人いる？」

「ああ、いるぜ。まだ誰も会ったことのない、五人目がな。」

十六夜の返答に、一輝は予想が当たっていたことを知る。

「そいつについて、何かわかってることは？」

「あいつらには『ダンス』って呼ばれてるってことだけだ。」

「ハーメルンの伝承の中で踊りが関わってきそうなものは？」

「『ハンチントン舞踏病』って病気だな。これに感染した子供達がウイルスを広げないために、町をさったってな。」

「どんな能力か検討もつかんな。」

「ああ。だから今、黒ウサギやサラマンダラの連中が必死になってこうではないかって議論してる。」

「じゃあ、黒ウサギに会ったら伝えといてくれ、そいつの相手は俺がするってな。」

「勝算は？」

「もちろんある。」

十六夜が珍しく驚いたような顔をする。

「ってことは、そいつの能力のあてがあるってことか？」

「いや、予想はついても確信に至る材料はいつさいない。」

「じゃあ、どこに勝算があるんだよ。」

「別に、ただ俺が、一番多くの事態に対応できるってだけの話だ。」

「確かにそうだな……。了解。オマエが自信満々に言ってたって伝えとく。」

「自信満々ではない気もするが……。よろしく。」

《まだ血も戻ってないし。》

それから、一輝がハーメルンの伝承について聞いていると、耀が目を見ました。

「う、ん……。十六夜に一輝？」

「お、起きたか。黒ウサギが心配してたぞ。」

「黒ウサギ、耀がペストにかかったことをそこまで気にしてたのか？」

一輝の質問に対して、十六夜がこいつ名に言ってるんだ？という顔をします。

「オマエ、ここ五日間、何も聞いてないのか？」

「ずっと部屋に閉じ込められてたから、情報が一切入ってこなかった。」

「ならしかたねえか。春日部は自分がどんな状態だったのか自覚あるか?」

「ない……。」

「そうか。なら言つとくが、春日部はずっと、この五日間気絶してたんだ。」

は?という顔をする一輝と、原因に気がついたのか、マズイという顔をする耀。

そんな耀の顔を見て、一輝はジトツとした目を向ける。

「耀……お前まさかとは思うが……。」

「たぶん、そのまさか……。」

一輝は頭を押さえながら、ゆっくりと立ち上がる。

そして薬を入れていた瓶を持ち上げ、確信する。

「気絶の原因でもわかったのか?」

「ああ、解つたよ。間違いなくこれだつてのがな……。」

一輝はあきれを通りこし、もう何も考えなくなった。

「さて……明日に向けて式神とお札の準備でもしとくか。つてことで俺は帰る。耀は、確実にやすむこと。いいな?」

「うん。わかった。」

一輝は部屋を出て、自分の部屋へと帰っていった。

|||||

《さて……お札を作る時間にはまだ早いし、まずは式神の整備をしておくか。》

そんなことを考えながら歩いていると、前方から二人の怒った声が聞こえてくる。

「一輝ー!部屋でおとなしくしてなさいって言ったでしょう!!」

「どうして部屋を出ているのですか!」

一輝は本気でこの場から逃げることも考えたが、自分の血の量から

考えて無理だと判断する。

「ちよつとお見舞いと確認をしにいった。」

「だとしても、せめて私たちについていかせなさい!」

「あなたのからだは、いつ倒れてもおおかしくないですよ!」

一輝は二人の必死な剣幕にかなり反省しつつ、自分のやったことに後悔はしていない。

「了解。それじゃあ、俺はゲーム再会まで部屋にこもってるから、二人ももう休んで。」

「たった今まで脱走してた人が、それを言う?」言いますか?」

「それを言われるとつらいが・・・それでも言う。どうせ俺は今からお札を作ったり、式神の整理をしたりして、やりたい放題する時間がなくなるんだ。」

だったら、お前らも明日に向けて少しでも休んどいたほうがいい。

俺達は、まだ誰も会ってない悪魔と戦うことになるからな。」

そーいい残して、一輝は自分の部屋へと入っていった。

「・・・どうする?」

「この状況で一輝さんが嘘をつくとはさすがに思えませんし、明日に向けて休むとしましょう。」

「それもそうね。ここ毎日ほとんど寝ないで働いてたから、今日が休みになったんだし。」

そう言っつて、音央と鳴央も自分達の部屋へと向かっていった。

そして20時間後。

魔王とのギフトゲームは再開する。

The PIED PIPER of HAMER
UN ②

一輝は、ゲーム再開の前に一人、高い建物の上に行った。

「我、汝らに命ずる。我が願いの元に動き、その使命を全うせよ。」

厳かな声で命ずると同時に、一輝の目の前から、三つの物体が消える。

「よし。これで準備は終わりだな。」

一輝は立ち上がり、空を見上げる。

そしてそのまま、死と隣り合わせになる覚悟を、決めた。

|||||

ゲーム再開の合図と同時に、町の風景はまったく別のものとなる。

「ここは一体・・・」

「おそらく、ハーメルンの街だ。」

鳴央の疑問の声に、一輝が答える。

「なんでわざわざ?」

「混乱が目的だろうな。実際、マンドラがまとめなければ、参加者のほとんどは混乱していた。」

「そこについては、あの人のファインプレーですね。」

三人は気楽に話すことで、緊張を和らげる。

「さて、目的の敵がいそうなところへ行くか。」

「と、いうと?」

「ダンスって名前だし、広いところじゃね?」

「そんな気軽さでいいのでしょうか・・・?」

「解らないものを考えても意味はないぞ。」

「それもそうね。」

「はあ・・・解りました。」

一輝と音央の気軽さに、鳴央は嘆息しながらも了解を示す。

「では、とりあえず街の中央に……」
向かいますよう。という言葉さえぎり、大きな音が聞こえてくる。

「『BRUUUUUM!』」

音のほうを振り向くと、五体のシュトロムがいた。

「……向かう前に、あれをどうにかしましょう。」

「ちようど、目的地の辺りにいるから、倒さないといけないわね。」
「だな。」

一輝は倉庫やギフトカードから武器を取り出し、装備する。

横では、二人が一瞬のうちに衣装がメイド服から和服、妖精の格好へと変えていた。

「二人は二人一組で動き、一度に相手をする数は最大二体まで。いいな!?!」

「了解!」です!」

三人は一斉にシュトロムのほうへと駆け出し、攻撃を放つ。

「スリーピングビューティー!」

「ウォーターカッター!」

「アビスホール!」

そして、距離があるまま、一体を縛り上げ、バラバラにし、消し去った。

「よし、さっさと片付け」

「『BRUUUUUM!』」

さらに五体のシュトロムが出現する。

「……OK。この広場に近づいたら出現したからには、ここに何かあるな。」

「でしようね。」

「なら、ちようど今、目の前にいますし。」

「シュトロムを出現元から絶つとしますか!」

一輝たちは目的を変え、広場への襲撃を始める。

「お前ら二人はそっち側からやれ!こっちは俺一人でやる!」

一輝の指示に従い、二人はシュトロムの少ないほうから攻める。

「さて・・・俺も同時に相手するのは三対にするとして、残りのやつらは・・・」

一輝はさらに増えて、散り散りになって動こうとするシュトロムたちに手を向け、一気におろす。

「地にでも縛っておこう。」

次の瞬間、シュトロムたちは自重によってその場から動けなくなる。

かつて十六夜にやったように、重力をあげたのだ。

《これで潰すつてもありなんだが・・・後のことを考えると、無謀だな。》

一輝は量産型妖刀と、水の刀を手に取り、水に乗って飛ぶ。

「さあ、デカブツ狩りの始まりだ！」

そのまま勢いで、縛っていなかった三体のうち、二体を手に持った刀で切り裂き、もう一体を足場の水を飛ばして切り裂く。

「次！」

一輝は縛っているやつらのほうに矛先を向け、狩を始めようとするが・・・

「「「BRUUUUUM！」」」

新たに五体、シュトロムが出現する。

「本当にきりがないな！」

一輝は三体を残して縛り、その三体へと攻撃を始める。

ちなみに、全部を縛らないのは、頭痛による負担をなくすためである。

《集中力が切れたら、コントロールを失うからな。まあ、この程度なら耐えられるだろうが。》

一輝はその自信を信じて、ギフトを使い続ける。

「一回、数を片付ける！」

そういうと、一輝は自分の周りの空気を操り、巨大な空気の刃を作り出して・・・

「なぎ払え！」

一気に振り下ろした。

二次被害として建物がいくつかが倒壊する。

「よし、一回さっぱりした!」

一輝が満足そうに大声で言うと、ポケットの中のDフォンがなる。

「ハイ、もしもし?」

「もしもし?じやないわよ!この辺りにはステンドグラスがあるかもしれないのよ!」

「あ……」

「以後、今みたいな攻撃は禁止!いいわね!」

「そうすると、俺は無限に出てくるシュトロムを縛り続けられないといけないんだが!」

一輝は素晴らしいながら、新たに出現したシュトロムを縛る。

「耐えなさい!」

「んな無茶な!」

一輝の抗議を無視して、通話が切れる。

「しかたがない。シュトロム切れになるまで頑張るか。」

「シュトロムは無限に現れるわ。その希望は捨てるべきよ。」

広場のほうから決して怒鳴っているのではないが、はつきりとした声が聞こえてくる。

「……アンタがダンス?」

「ええ。私がダンス。狂わせ、躍らせる悪魔よ。」

「無限に出てくるとは?」

「私がここにいる限り、シュトロムは無限に量産できる。」

「そんなことは……」

「あるのよ。だから、あなたも諦めなさい。」

「アンタにだって、体力や精神力ぐらいあるだろ。」

「ええ、確かにあるわ。でも、そんなもの、この場、この状況において、何にも関与しないもの。」

「そうかい。なら仕方がないな。俺がそこに行つて、お前を倒してやるから、待ってろ。」

「このシュトロムたちをこえることが出来たら、ね。」

その言葉とともに、新たなシュトロムが十体ほど追加される。

「さてと、絶対に乗り越えてやる！」

一輝は痛みとふらつきのある頭を押さえながら、狩を再開した。

自分が想像しているより、限界はすぐそばにいたとは、考えもしないで。

The PIED PIPER of HAMER
UN ③

シュトロム狩りを開始してから数十分が経過した。

だが、シュトロムの量は一向に減らず、むしろ増えている。

「切り裂け！」

一輝が火、水、空気の三種類の刃を使い、シュトロム三体を同時に
つぶすが、

「「「BRUUUUUM！」」」

新たに五体のシュトロムが追加される。

「重力操作！」

そして、その五体のうち、二体を縛るが、

「「「BRUUUUUM！」」」

さらに増える。

「・・・いやだ、これ・・・」

一輝のやる気は、シュトロムが増えるごとに、減っていく。

「戦力の追加をするか・・・」

一輝はギフトカードを掲げ、唱える。

「式神展開！ 攻め！」

その声に応じて、鎧武者の式神が百体現れる。

《俺の立場なら、ちゃんとやらないと駄目なんだけど、》

「そのデカブツをつぶせ！」

一輝は言霊をかなり適当に唱え、式神たちに命令する。

その命令に式神はちゃんと従ってくれた。

「これで少しは楽が・・・」

式神は、五十体当たりで一体のシュトロムを相手取る。

「それはおかしいだろ！」

言霊を適当に済ましたつけど。

「「「BRUUUUUM！」」」

「うるせえ！」

追い討ちをかけるように、シュトロムが追加される。

「重力操作！」

一輝はそのシュトロムたちを丁寧に縛り付ける。

「ほう。これだけの量を縛り続けますか。」

広場のほうからダンスの声が聞こえてくる。

「このくらいの量、どうにかなるに決まってるんだろ。」

「そうなのですか？ 私には、限界ぎりぎり、という風に見えますが？」

「気のせいだろ。」

「あなたがそう言うのなら、それが真実なのでしょう。では、仕方がありませんね。」

「お、ついにこのシュトロム軍団も終えて、ご本人の登場？」

一輝は少し期待をもって聞くが、

「いえ。」

ダンスは、一輝の心を折りにくる。

「召喚のスピードを上げさせていただきます。」

「「「「「BRUUUUUM！「「「「「」」」」」」」

その言葉と同時に、十体のシュトロムが召喚される。

「こ、これは・・・」

一輝が冷や汗をたらしていると、音央達のいるほうからも、新たなシュトロムの声が聞こえてくる。

「OK。鳴央。」

一輝はDフォンを取り出し、後方から、音央の支援をするといっていた鳴央に電話をする。

「はい、なんででしょう？」

「ダンスがシュトロムの召喚スピードを上げるって言ってたから、気をつけて。」

「解りました。一輝さんはどうします？」

「全部重力で縛り続ける。」

「そ、それは危険すぎで」

「じゃあ、そういうわけで、頑張つて。」

一輝は鳴央の声をさえぎって、一方的に言いたい事を言うと言とうと勝手に

電話を切った。

そのあいだにも、シュトロムは増え続けている。

一輝は、そいつらの方を向き、深呼吸をすると、

「重力操作！」

自らのギフトを一気に使い、シュトロムを縛る。

「ぐ……が……」

一輝は頭痛による苦痛を顔に出す。

「ほら。限界は近いように見えるけど？」

「そつちも、さつきからしゃべり方が微妙に毎回違うぞ？限界が近いのか？」

「私はこのしゃべり方が、統一感がないのが素なの。」

そんな会話をしているうちにも、シュトロムは増え続ける。

一輝は、時折数体を燃やしつくし、数でつぶされないようにする。

「へえ？燃やすんだ。」

「邪魔だからな。」

「でも、このペースだと？」

さらに、召喚の速度が上がる。

「この……」

燃やせるだけの余裕もなくなり、ただ重力で縛り続ける。

そして、頭痛がひどくなっていき、一瞬何も感じないと思った
ら……

全てのコントロールを失った。

The P I E D P I P E R of H A M E R
U N ④

《え・・・操れない?》

一輝は急に重力のコントロールを失い、呆然としていた。

「BRUUUUUM!」

その隙に、シュトロムの風による攻撃が放たれ、一輝は建物に叩きつけられる。

「ガハッ」

一輝は少し血を吐く。

「BRUUUUUM!」

そして、別のシュトロムが一輝を狙ってくる。

「やべっ。」

一輝はあわてて水を操ろうとするが・・・

ズキン!

「あ・・・ぐ・・・」

今までとは桁違いの頭痛により、その場で頭を抱える。

《なんで・・・まだ、あのときほど操ってないのに・・・!》

確かに、一輝の本来の限界まではまだまだ遠い。

しかし、今とそのときとの状況はまったく違うし、何より一輝はいま、大量の血を失っているのだ。

体の限界が早くなるのは、当然のことだろう。

そして、うずくまっている一輝に向けて、シュトロムが攻撃を放ってくる。

《俺、ここで死》

「スリーピングビューティー!」

シュトロムによってつぶされる寸前に、茨が一輝を捕らえ、引っ張る。

「この茨って・・・」

「一輝! あんたなにやってるの!」

引つ張られた先には、ものすごい怒っている音央がいた。

いや、正確には……

「オマエ、何でここに……」

「何で、ではないでしょう!」

音央と同じくらい怒っている鳴央もいる。

「だって……お前らも知ってるだろ?こつち側にはシユトロムが大量にいることぐらい。なのに何で?」

「あなたがあんなことを言うからでしょう!」

「あんなこと?」

「召喚速度の上がったシユトロムを全部重力で縛るって!」

「あなたの体はまだ本調子ではないのですよ!」

「そんな状況で頭痛を抱えながらやり続けるって言われて、心配しないわけ無いでしょう!」

「でも、この数相手にお前達じゃあ、命の危険があることぐらいわかるだろ。」

二人の実力では、まだ半分は対処できない、そう思ったから。

だから、自分で引き受けよう。

自分が助けたんだから、最後まで守り続けよう。

その責任感から、一輝が自分のほうに相手の意識を集中させたのだ。

しかし……

「箱庭に来てすぐに、命の危機に飛び込んでいった人が、それを言いますか。」

「あたし達を捕らえてたゲームだって魔王が設置したゲームだったから、十分に命の危機はあった。」

《それは、まだ魔王の実力を知らなかったから。》

「それに、神隠しにあつて、存在自体が消えてしまう可能性も。」

「それでもあんたは、迷わず私たち二人を救ってくれた。」

《ただの自己満足だ。》

「だから、一輝さんが危ないときは、私たちで守ります。」

「そういうわけだから、あんたはそこで見てなさい。」

そういつて、音央は茨を操り、鳴央は自分の周りに野球ボールくらいの大きさの黒い球体を無数に作り出し、シュトロムたちへと攻撃を開始する。

「スリーピングビューティーー！」

「アビスフォール！」

音央が空を飛びながら、茨で縛り上げ、ぶつけ、破壊していく。

鳴央が自分の周りの黒い玉を飛ばし、シュトロムを喰らっていく。

一輝は、何も出来ずただその光景を見ていた。

《せつかく、守るための力を手に入れたのに……》

自分は何も出来ず、仲間が傷つくのを、見る。

《自分が守られててどうすんだよ……》

何も出来ない、自分の現状を見る。

《俺は……もう二度と大切な人を、仲間を、居場所を、失わないんじゃないやなかったのかよ……》

そして、自らの欲望を、願う。

《チカラが欲しい。仲間を、大切な人を、居場所を、全てを守れるだけのチカラが……欲しい!》

《ほう……チカラを望むか、小僧。》

その声は、一輝の中から、響いてきた。

|||||

急に響いた声に驚き、目を開けると、そこは何もない、ただひたすらに暗い空間だった。

「ここは……?」

「おぬしの中の檻じや。」

先ほどと同じ声が背後から聞こえ、振り向く。

そこには、着物を着た、頭の長いお爺さんが立っていた。

そして、一輝にはこのお爺さんが何者なのか、心当たりがあった。

「あんたがぬうりひよん……いや、ぬらりひよんか?」

「うむ。今はその名で呼ばれておるのう。」

当たりだったようだ。

「しておぬし、先ほどチカラを望んだな？」

「ああ。」

「じゃから、わしはおぬしを呼び出した。」

「チカラを、くれるのか？」

「うむ。それがわしと、おぬしの先祖との契約じゃからのう。」

ぬらりひよんは、そこで初めて、一輝と目を合わせる。

「ただし、対価をいただこうかのう。おぬしは何を出せる？その覚悟に見合ったチカラを、くれてやろう。」

その合わせた目は、一輝を見定めようとしていた。

いや、ぬらりひよんの目だけではない。その場の360度全ての方
向から、一輝を見定めようという視線が向けられている。

一輝の中に封印されている妖怪の、魔物の視線を、向けられる。

「俺は……」

「悩んでおるか。まあ、仕方がないことではあるな。ちなみに、おぬし
の父親は自らの体を差し出した。じゃから、あやつの体はだんだんと
妖怪に近づいていった。」

一輝はその言葉を聞き、どうするのかを決めた。

「俺は……オマエたちには何も差し出さない。」

「ほう……なら、チカラはいらんのか？」

「いや。俺が守りたいのは今だ。なのに、自分の体が妖怪に変わって
いったら、困るからな。だから、おれ自身は何も差し出さない。」

だが、俺からお前達に与えられるものはある。」

「『それは、なんだ？』」

ぬらりひよんの声だけでなく、他の妖怪達の声も聞こえてくる。

「それは、お前達を外に出してやることだ。」

「『……』」

妖怪達が黙る。

「俺は確かにチカラがほしい。自らの体に宿るようなチカラも、武器
のようなチカラも、強くなれる全てのチカラがほしい。」

でも、一番欲しいのは仲間を守るチカラだ。そして、それには自ら

の力だけじゃなく、戦力が必要になる。だから俺は、お前達には、俺の戦力になつて欲しい。

そして、そうなれば、お前達は一時的にとはいえ、外に出られる。妖怪として戦える。

俺から出すのは、その権利だ。」

どうだ?と一輝は問いかける。

その言葉に、ぬらりひよんはといえば・・・

「わっはっはっはっはっはっはー!」

ものすつごい笑っていた。

「自らの身は何も差し出さん。しかし別の対価ははらう、か。なかなか面白いじゃないか!おぬしらもそう思うじゃろ?」

ぬらりひよんが問うと、周りにいる気配はどんどん盛り上がっていく。

「満場一致じゃな。」

「つてことは?」

「うむ。おぬしにチカラをくれてやる。

それも、ただのチカラではない。おぬしの一族に伝わる奥義のすべてをくれてやる。ありがたくおもうがよい。」

「ああ。感謝するよ。」

「ならば、唱えよ!おぬしの望む能力、それをあらわす言霊を!」

「ああ!」

一輝の意思はだんだんと戻ってゆき、元いた場所へと戻っていた。

|||||

一輝が少しふらつきながらも、しっかりと立ち上がる。

「一輝さん?」

「一輝?」

音央と鳴央が心配そうに声をかけてくるが、気にせず立ち上がる。

まだふらつく体には、しかし確かに力がこもっている。強い意思は、満身創痍に等しい体に力を与える。

そうしてゆったりと体を起こしながら腰にさした量産型妖刀を抜き、頭上に構え……

自らの望む力を、唱える。

「さあ、百鬼夜行の始まりだ！」

誰も見ていないから気づくものはないが、一輝のギフトネームが一つ、変化していた。

“陰陽術”が、“外道・陰陽術”へと。

The PIED PIPER of HAMMER
UN ⑤

「さあ、百鬼夜行の始まりだ！」

一輝のその声と同時に、一輝の体から黒い霧が広がっていく。

そして、広がった霧は少しずつ集まり、かたまり、形を作っていく。

長い頭を持つ着物を着たおじいさん、ぬらりひよんの姿を。

牛の頭と蜘蛛の体を持つ牛鬼の形を。

体長二メートルを超える大猿、猿神の形を。

全身が緑色で、背に甲羅を、頭に皿を持つ河童の姿を。

多種多様な付喪神たちの集合体である塵塚怪王の姿を。

そのほかにも様々な妖怪達が、その場に現れる。

「こ、これは・・・」

「俺が呼び出した百鬼夜行だ。」

音央と鳴央が魑魅魍魎を見て呆然としてみると、後ろから一輝が声をかけた。

二人が振り向いて一輝の姿を見るが、その姿も普段とは違っていた。

神職につく人が着るような白い和服をまとい、腰には量産型妖刀をぶら下げている。

自分達も、戦闘時には服装が変わるからか、二人は一輝の服装については何も言わない。

「一輝さんが、ですか？」

「ああ。」

「この量を、どうやって?」

「前に奥義のことを話しただろ?」

一輝が言っているのは、アンダーウッドの迷路の観戦時に言ったことだ。

「あれを今、全て習得した。これはその中の一つ、"妖使い" だ。」

「そう・・・なら、あれは味方なのね？」

「そうだ。だが・・・」

一輝は視線をぬらりひよんへと向ける。

「伝説級のやつらが一人も出てきてないと思うんだが？」

「わしらのような格がかなり上の存在を呼び出すには、それぞれの言霊が必要じゃからのう。それに、中にはまだおぬしを認めておらんものもおる。」

「あんたが出てこれてるのは？」

「わしは百鬼夜行の主。あの言霊で出てこれるのは当然じゃろう。」

一輝は妖怪は勝手だな、という形で納得し、気を引き締める。

「さくて・・・俺の百鬼に告げる!!」

そして、自らの百鬼に命令を下す。

「そのデカブツたちを・・・叩き潰せ！」

妖怪達はその命令に従い、大喜びで戦闘を開始する。

「それじゃあ、わしも体を動かすとするかのう。」

と、ぬらりひよんも老人とは思えない軽快な動きでシユトロムを倒しに行く。

「・・・で？」

「私たちは何をすればよろしいのですか？」

「そうだなあ・・・」

一輝はあいつらと一緒にシユトロム狩りを、と頼みかけたが、それでは今まで通りだと意見を変える。

「俺はこれからダンスを倒しに行く。だから・・・俺の進む道を作ってくれ！」

「ええー！」

「はいー！」

そして、一輝たちは駆け出す。

|||||

音央のスリーピングビューティーや鳴央のアビスフォールによつ

て道を作ってもらった一輝は、広場の中央へとたどり着いた。

そして、そこにはドレスを着て、腰に笛を下げ、赤い靴を履き踊っている女がいた。

「確認の必要もないだろうが・・・あんたがダンスだよな？」

「ええ。私がダンス。」

ダンスは踊り続けながら答える。

「敵が来たつてのに、呑気なもんだな。」

「呑気？それは違うわ。これが、私の役割だもの。」

一輝が首を傾げると、女の前に置かれていた本が輝き、少しはなれたところでシュトロムが召喚される。

「へえ・・・踊りによる悪魔の召喚か。」

「そう。だからこそ、私が適任だった。私は、踊りをやめられないから。」

「・・・そうか。オマエは・・・」

一輝は何かに気づいたようだ。

「さて、それではお前を倒すとしますか！」

一輝は腰の刀を抜き、ダンスに切りかかる。だが・・・
「!?」

思いつきりきりきつても、踊ることをやめない。

「無駄よ。これは私の体がどうなろうと関係ない。」

「そうか・・・呪いだっただな。」

一輝はこの手の攻撃が無駄だということを知る。

「なら・・・これならどうだ？」

一輝はバタフライナイフを取り出し、腰の笛に投げる。

そのままナイフは笛のほうに飛んでいき、笛を砕いた。

「へえ？そこに気づいたんだ。」

「ああ。おまえはハーメルンの笛吹きには登場しない。だから、召喚には触媒が必要だったんだ。そうだろう？カーレン。」

一輝が言っているのはハンス・クリスチャン・アンデルセンの作品、赤い靴に出てくる女性のことである。

この話は、女性が赤い靴をはいたら体がひとりで踊りだし、靴も

脱げなくなる。最終的には首切り役人に足首ごと切り落としてもらう、というものだ。

この童話はハーメルンの笛吹き of 伝承の一つ、ハンチントン舞踏病がモデルだといわれている。

実際に、目の前にいる悪魔も赤い靴を履き、踊り続けている。

「ええ。そうである以上、私は消えるのでしょね。」

ダンス……いや、カーレンはそう言いながら、足首から下をはずす。

そして一輝のほうを向く。

「さて、消える前に最後の観客様と私の主にお礼を述べないとね。」

ダンスはドレスのスカートをつまみ、一礼をする。

「ご観覧、ありがとうございました。」

一輝はすつきりとする終わり方にはっとするが、それもつかの間に、シュトロムを召喚していた魔道書が思いつきり輝く。

「……これは？」

「私の最後の悪あがき。」

「せつかくいい感じだったのに……」

一輝はがっかりしている。

「では、きょうなら、一輝さん。」

その間に、ダンスは光の粒になって消えていった。

「はあ……ま、仕方ないか。」

一輝は自分の前後から向かってくるシュトロムのうち、前にいるやつだけに集中する。

後ろにいるやつは、何も問題ない。

「妖刀、一閃！」

そして、背後の敵を一太刀で切り捨て、背後の敵は……

「っ!!」

上から飛んできた耀が、グリフォンのギフトで吹き飛ばす。

「大丈夫、一輝？」

「ああ。耀のおかげでな。オマエのほうはどうなんだ？」

「おかげさまでばっちり回復。」

どうやら、ギリギリ間に合ったようだ。

「さて、これからどうする?」

「そんなの、決まってる。」

「OK。」

一輝はその辺りの妖怪を物色し、一体の妖怪へと近づいていく。

そして、妖刀を抜き、妖怪に触れて唱える。

「わが百鬼たる妖怪よ!今、我が武具に混じり、新たなる武とならん!

一輝が触れている妖怪と妖刀が黒い霧になり、混じり、形をつくつていく。

霧が晴れると、一輝の手には一つの弓があった。

「ま、こんなところか。つて耀?どうかした?」

「それ・・・かつこいい。」

一輝は、耀の意外な言葉に、少し照れる。

「〃外道・陰陽術〃妖武装。うちの家系に伝わる奥義の一つだよ。」

「外道?」

「ああ。妖怪を倒す陰陽師が、式神とするのでもなく妖怪をそのまま使う。

だから、外道・・・道を外したものって呼ばれてる。」

一輝は近くにいた狼の妖怪・・・送り狼を呼び、それに乗る。

「では、行きますか?」

「うん、行こう。」

そして、耀は空を駆け、一輝は狼に乗り、魔王の元へと向かう。

The PIED PIPER of HAMER
UN ⑥

「ところで一輝、ペストの居場所はわかるの？」

「それは、まあ問題ないんじゃないか？」

一輝の目は前方を向いている。

耀もつられて見ると・・・そこには黒い霧が広がっていた。

「これって・・・！」

「ペスト、だな。」

一度、同質のものを見た一輝は断言する。

「だけど・・・あれに込められた死は前とは比べ物にならない。」

「そんなものが広がったら参加者が・・・」

「たぶん、こつちがクリアに近づいたから白夜叉だけを手にすることにしたんだろ。」

一輝は冷静な口調を保ちながらも、内心ではかなりあせっていた。

「さて・・・まずはあれを何とかするか。」

「だね。私は向こう側にいくよ。」

耀はグリフォンのギフトで飛んでいく。

そして、一輝は送り狼から下りてその場に立ち、お札を一枚だけ持つ。

「禍払いの札よ。我が命に従い眼前に広がりし死を喰らいつくさん！」

そして、前とは違い、一枚だけで自分のほうにきていたのを吸い尽くす。

逆側には風が吹き荒れているので、耀が何とかしているようだ、と判断するが、どうにも押されきみだ。

「禍払いの札よ。彼方にありし死を喰らいつくさん！」

一輝はお札を放ち、その霧も吸い尽くす。

「一輝さん！それに耀さんも！こちらに来てください！」

二人は黒ウサギに呼ばれたので、そちらに向かう。

「まだ最終決戦は終わってないよな？」

「はい。今から開始です。」

一輝は対魔王戦がまだ終わってないことに安心する。

「へえ・・・まだお仲間がいたのね。でま、所詮は人間。星も砕けない分際では魔王は倒せない。」

近くにいた十六夜は、その言葉と同時に放たれた衝撃波で一輝たちのほうに落ちてくる。

「・・・星も砕けない分際だと？カツ、素敵な挑発をしてくれるじゃねえか斑ロリ。」

「だな。そういうなら砕いてやろうじゃねえか。」

十六夜が拳を構え、一輝はおのが内にいる妖怪を開放しようとするが・・・

「御二人とも、ちよつと待ってください！作戦がありますから、そちらを尊重してください！」

黒ウサギにあわてて止められ、一旦は拳を収める。

「別に作戦を実行するのはかまわねえが、どうする気だ？」

「今から魔王を討ち取ります。皆さんは魔王に隙を作ってください。」

「あの風はどうするんだ？俺がお札で吸い続けるとしても、絶対に取りこぼしが出るぞ？」

一輝の言葉に対して、黒ウサギは白黒のギフトカードを口元に当て、答える。

「ご安心を！今から魔王とここにいる主力——まとめて月までご案内します♪」

次の瞬間、一輝たちは月の上に立っていた。

「確かに、ここなら犠牲者は出なくてすむな。」

「うん。でも月にくることになるとは思わなかった。」

いつの間にか、耀が一輝の横にいた。

「さて・・・いつものギフトは使えないけど、行きますか！」

一輝はサンドラの炎から出てきたペストにお札を放つ。

「禍払いの札よ！邪なるものを払いたまえ！」

お札はペストに向けて一直線に進むが、少しのダメージも与えずに

朽ちる。

「死神たる私に、そんなものは効かないわ。」

「だよなあ……。」

一輝はそんなことを言いつつも、お札を投げ、ここにいる味方全員に一枚ずつつける。

「これは……。」

「お守り代わり。一回なら防いでくれる。」

耀はその言葉を聞き、ペストのほうへつつこんでいき、ペストを殴る。

「無駄よ。あの男以下の打撃なんて、防ぐにも値しない。」

耀は霧にのまれるが、お札のおかげでなんともない。

「無茶するなあ……。」

「私に出来ること、無いから。」

「なら、一つ協力してもらっても?。」

「?。」

耀は一輝の言葉に首を傾げる。

「黒ウサギは何か切り札があるみたいだけど、それを使うにはあいつの動きを止めないといけない。」

「うん。」

「俺の弓ならそれが可能だが、俺に弓の腕が無いから、上を狙って当てる気がしない。」

「何、その変な自信……。」

「今まで、本格的に練習したのは刀くらいだからな。弓は平面でしか狙えん。」

「そう……。」

「って訳で、足場を作って欲しい。」

耀は自分の役目を理解した。

「解った。」

「後、出来たら矢を風で後押ししてもらえると……。」

「それは自分で何とかする。」

「はい……。」

どんだけ自信がないんだ。

《最後に使ったの、もう二年前だし・・・》

まあ、耀の言う通り自分で何とかしろ。

《は〜い。》

よろしい、って、この状況でも割り込んでくるのか、オマエは！

「さて、不意打ちをするためにも、どっかに隠れてようか。」

「うん。」

二人は瓦礫の影に隠れようとするが・・・

「軍神に月神に太陽神・・・！護法十二天を三天までも操るなんて、この化物——！！」

ペストの死の風が焼かれ、ペストの目が黒ウサギに集中するという絶好のチャンスが出来上がっていた。

「・・・耀！」

「っ!!」

一輝は耀がおこした風の上に立ち、弓を引き絞る。

すると、一輝の手に矢が表れるので、それに言霊を吹き込む。

「我が手に在りしはたひろ機尋の矢よ！その執念によりて我が敵を捕らえん！」

一輝は言霊を吹き込んだ矢を、ペストに向けて放つ。

運よく、矢はペストに向かって飛び、ペスウに当たったが・・・

「無駄よ。そんな矢では私を貫けない。」

「貫こうとはしてねえよー！」

ペストが眉を顰めた瞬間、矢が本来の妖怪としての姿、黒く細長い布になって、ペストに巻きつく。

ペストは無理やりそれをほどこうとするが・・・

「無駄だよ。機尋は邪念と執念の固まりで、その対象を絞め殺す妖怪。

そして、この弓は相手を絞めるという属性を固めたものだ。絶対に放さないよ。」

そう。一輝の習得した奥義の一つ、《妖武装》はその妖怪の持つ属性の一つを固め、使用者の思い描く形にするもの。

それゆえ、捕まっているペストは抜け出すことが出来ない。

「と、言う訳で。やっちなまえ、飛鳥！」

「ええ！撃ちなさい、デイン！」

「DEEEEEEE e e eEEEEEN!!」

デインが放った矢は一直線にペストに向かい、機尋ごと貫く。

機尋は、貫かれた瞬間に消えた。

「こ、この・・・程度、なんかで・・・！」

「無駄でございますよ。その槍は真正銘、帝釈天の加護を持つ槍。太陽の鎧と引き換えた、勝利の運命を宿す槍なのですから。」

そう、一輝の矢が当たれば必ず対象を捕らえるように、インドラの槍は穿てば必ず勝利をもたらす槍。

当たった以上、ペストを待っているのは、敗北である。

「そんな・・・私は、まだ・・・！」

「——さようなら、『黒死斑の魔王』」

飛鳥が別れの言葉を告げるのと同時に、激しい雷光が月面を満たし、軍神の槍は、魔王とともに爆ぜ、一輝たちの初の魔王とのゲームは幕を閉じた。

交渉

各コミュニケーションがゲームの後始末をしているころ、一輝は宮殿の中を歩き回り、マンドラの部屋を探していた。

「誰もいなかったから簡単に入れたのはいいけど……どこだ?」

と、まったく場所がわからず、うろうろしていると……

ズドガアン!

「……」

すぐ右にある部屋から何かを破壊したような音が聞こえてくる。

「……たぶんここだな。」

一輝はこの音を立てた犯人がわかり、連鎖してここがマンドラの部屋だと確信する。

「お邪魔します。」

そして、珍しく普通に入る。

ノックなどのことは一切していないが。

「ん? 何で一輝がいるんだ? メイドたちからの説教は終わったのか?」

「ちよつとマンドラに用事が二つあってな。今度お詫びはするってことで終わりにしてもらった。まあ、片方はオマエとかぶってると思うが。」

ちなみに、お説教の内容は何も言わずに魔王のところに向かったことである。

「なら、俺から用事を済ませてもいいか?」

「どうぞどうぞ。」

マンドラ、完全放置である。

「で、何が悪いことなんだ?」

十六夜はこの言葉からはじめ、サラマンドラがペストを祭りに招き入れた証拠を並べていく。

マンドラは自分のコミュニケーションを守ることの覚悟、仲間の意思を語り、最後には自分の命すら差し出してきた。

十六夜も、死んだ連中が承諾済みということもあり、マンドラに一

つ、魔王との戦いで何かあったときには真っ先に駆けつけるように命じて、終わりとした。

「んじや、俺からはこれで終わりとして、次は一輝だな。」

「どうも。まあ、予想通りひとつはお前と被ってたから、コイツのことだけなんだが。」

一輝はそういいながら、三つの小瓶を取り出す。

これは、ゲーム再開の前に一輝の命令を受けていたものだ。

三つの中にはそれぞれ量の違う液体が入っている。

「さて、これの正体を説明する前に、一つ質問いいか？」

「ああ。なんだ？」

一輝はお言葉に甘えて、一つ、質問をする。

「死んだお仲間の死体ってどうなってる？」

「今回の祭りが完全に終わってから埋葬する予定だが・・・」

「そう。なら間に合うな。」

二人がこいつ、何言ってるんだ？という顔をしているので、一輝は説明を始める。

「まあ、はつきり言っちゃうと、この中身は今回死んだあんたのお仲間×3の魂だ。」

「・・・！」

マンドラの表情は驚愕へと変わり、十六夜は笑みを浮かべていた。

「使い方は簡単。魂と適合する死体の口にこの中身を流し込むだけでその人は復活します。適合する死体の捜し方も、この瓶を死体に近づけた際に光りだしたらそれ、という簡単な仕様になっております。」

「では、それがあれば・・・」

「ああ。五人中三人はよみがえる。三人になった理由は、空き瓶の持ち合わせが三つしかなかったからだ。」

マンドラの顔に希望の色が見え始める。コミュニティの仲間は大切なのだろう。

「これを渡すにあたって、こちらからの要求はあるが、いいか？」

「構わん。私個人でやれる範囲ならば、すぐにでもやらせてもらう。」

「いや、そんな身構えるほどのことじゃねえよ？」

「こいつ、言われたら即座に命でも捨てるんじゃないか？　という顔に、一輝は軽く引いている。」

「まあ、たいしたことじゃねえよ。ただ、ジンとサンドラが友達として接することに対して文句を言うなってだけだ。」

「それは・・・」

サンドラの立場などを言おうとしているマンドラに対して、一輝は続ける。

「オマエはバカか？　サンドラのことを思うなら、これは当たり前のことだぞ？」

「なにっ？」

「なにっ、じゃねえよ。あいつはまだ十一だぞ。そんな子供がフロアマスターになって、仕事も増えて、周りからの期待が高まって？　そんな重圧をくらってるところに友達まで奪われてみる。いつかつぶれるぞ？」

「それは・・・」

マンドラも、一輝の言葉に納得はしているのだろう。悩み始めている。

「本当にサンドラが成長して欲しいなら、そういったものもないと。まあ、どうなってもいいってんなら、話は別だが？」

「・・・解った。以降あの二人や、サンドラの友好関係について、私は口を出さない。」

「よろしい。まあ、不良とかなら口を出してもいいし、付き合うとかもかまわねえけどな。」

一瞬、マンドラの額に青筋が浮かぶ。シスコンか？

《たぶんそうなんだろ。》

・ ・ ・ ・ ・ こんなことにも口を出すのか？

《いや、あんたと意見が合うってなかなかないな、と。》

そんなことで口を出すな。

「んじゃあ、これは渡しとくよ。」

「ああ。何か、サンドラから御礼の品が渡されるかもしれないから、そのつもりでいてくれ。」

「了解。」

そこで話は終わり、一輝と十六夜は扉から出て行った。

|||||

ところ変わってコミュニケーション本拠の回りの林で、一輝は伐採を行っていた。

メルンが肥やしがあれば土壌を復活出来るかもしれないと言っていたので、一輝は木を倒し、子供が二人がかりで運べる大きさまで切っている。

「ま、こんなもんか。」

切りすぎてもいけないのでほどほどで止めて子供達を呼ぶ。

「二人で一つを運ぶように。無理はするなよ?。」

「「「「「はい!!」」」」」」

子供達は元気に返事をし、木を運び始めたので、一輝は少し休むことにする。

「ふう・・・なんか、予想以上に色々あったなあ・・・」

今回のゲームで、一輝は自らのギフトについて、ほぼ全てを理解した。

無形物については、限界のライン、操るものとの距離と威力、代償との関係について、などの力任せにやっていたせいで知らなかったことを知り、陰陽術は進化した。

ちやつかり、かなりの得をしているのだ。

「ぬらりひよんには感謝だな。」

「わしを呼んだか?。」

いつのまにか、一輝の後ろにぬらりひよんがいた。

「どうやって出てきた?。」

「わしはおぬしに封印されてはおらんからのう。契約に従い、おぬしの中に住んでおるだけ。ならば、出てこれて当然じゃろう。」

「はあ・・・まあいいや。この間はありがとう。おかげで全部うまくいった。」

「おぬしが手に入れた力でおぬしがやったことじゃ。わしは何もしとらんよ。それでもお礼が言いたいのなら、おぬしの中の妖怪、全てに言うんじやな。」

「了解。」

そこで、ぬらりひよんの表情が真剣なものになる。

「して、おぬし。名はどうするのだ？」

「・・・なんのことだ？」

「とぼけるでない。奥義を習得したのだ。《鬼道》を名乗ってもいいのではないか？」

鬼道、鬼の道。この名前に対して、一輝は何も感じないというわけではない。

かつてはこの名を名乗っていたのだから当たり前だ。しかし・・・

「まあ、名乗りたかって気持ちがないわけじゃない。」

「ならば・・・」

「でも、その名前を名乗るのは、俺の独断で決めていいことじゃない。もう一人、相談しないとイケないやつがいる。」

「・・・そうか。」

「ああ。それに、ここに召喚されたのは『寺西 一輝』だからな。こっちでいいんだよ。」

「ならば、わしからはなにも言わん。中には名乗れ、と言っている者もいるが、わしが説得しておこう。」

「ああ、よろしく。」

ぬらりひよんは黒い霧となって一輝の中へと戻っていった。

「一輝さーん！」

「重くて運べないから、こっちに来て手伝って！」

音央と鳴央が呼んでいるので、一輝は、

「OK！今行く！」

返事をして、そっちに手伝いに向かう。

そう……巨龍召喚
依頼

自分が十五年間暮らしてきた神社の境内。彼はそこに立っていた。そこには彼以外何も無いわけではない。

神社だから、鳥居だってある。

しかし、今はそんなもの視界にも入らない。

その場を埋め尽くしているのは——数々の死体だ。

姿かたちは狼に蜘蛛、牛、そういった動物のものが多い。

しかし、それらは動物のものではない。

大きさが違うものがある。何種類か混ざったものがある。牙が異常に長いものがある。

それらは……本来この世にはいないもの、妖怪の死体だ。

そして、その中にはポツリポツリと妖怪のものに比べたら小さく、少ない死体もある。

人の死体だ。そして、彼にとっては特別な意味を持つ。

彼が生まれたときから一緒にいた両親の死体。

昔から、彼の家に陰陽師として修行に来ていた人たちの死体。

そういった、死体たちの前に、彼は立っている。何も守れず、ただただそこに立っている。

十五歳の誕生日、彼は……一輝は、

たくさんの“大切”を失った。

|||||

「嫌だ」

問題児達は即答した。

ちなみに、これはジンの収穫祭に行くにあたって一人は残って欲し

いという言葉に対する返事なのだが・・・彼らにとっては当然の返事だろう。

お祭りがあるけど行くな、は彼らにとって喧嘩を売られるに近いものなのだ。

ジンがこの返答に頭を抱えていると、十六夜が提案する。

「つてか、一輝が残ればいいんじゃないか？」

「それよ。」

十六夜の提案に、二人の少女も賛成する。

「この場合、それが一番正しい選択よ。」

「うん。活動方針を決めるために集まったのに、一輝がいないのが悪い。」

そう。先ほどの鍵括弧の数でわかった人もいるかもしれないが、この場に一輝はいない。もしいたなら、十六夜が提案した時点で止めているし、十六夜たちもこんな提案はしない。

「ええつと、それは・・・」

「なんだ？何か問題でもあるのか？」

「それに、なぜここに一輝君がいないのかしら？」

「音央と鳴央も今日は見かけてないし。」

なぜ一輝たちがいないのか、知っているだけに言い出せないジンだが、三人からの圧力に負ける。

「一輝さんは・・・」

「・・・は？」

黒ウサギも、なぜ一輝がいないのかは知らないのに、三人と一緒に聞く。

が、誰も予想していなかった返答がジンの口から飛び出す。

「白夜又様の依頼で・・・魔王退治に・・・」

その場の時間が止まったように静かになり、数秒がたつと、

「！！マジで!?!」「すか!?!」「ございますか!?!」

その場にいた、ジン以外の全員が、驚愕の声を上げた。

く言えるか解らないけど、それでもよければ。」

「ええ、いいわよ。」

「すいません、一輝さん。」

「気にするなつて。今、俺は高二で、あれは中三のころだから・・・大
体二年前のことかな。」

一輝はその日のことについて、話し始めた。

サボる

二年前、中学三年生の夏休み、一輝は十時に起きた。「ふあゝ。もう十時か・・・」

すでに四度寝くらいまでいつているが、さすがに寝なおす気は無いようで布団から出ると、枕元においてある携帯を開く。

そこには『不在着信 一件』とあるが、誰からの電話かを確認すると、携帯を閉じる。掛けなおす気はないようだ。

「まずは・・・メシか。」

一輝は部屋の障子を開き、食卓へと向かう。

途中で、木刀の素振りをしている集団が目に入る。

「一輝さん、おはようございますー!」

「二!」おはようございますー!」

その集団が一輝を確認するとすぐにそろって挨拶をしてくる。

彼らは一輝の家・・・神社に陰陽師としての修行のため、弟子入りをしている人たちで、その長男である一輝を目上の人として扱っている、が・・・

「おはよう、今日も朝早くから元気だね。眠くないの?」

「もうすでに始めてから五時間はたっていますので、眠気はとびました。」

「・・・そのころはまだ二度寝にも入ってないよ・・・後、敬語は違和感があるからやめてって言わなかったっけ?」

一輝としては、この明らかに年上の集団から目上として扱われることに違和感が半端ない。

「我々は弟子入りをしている身ですから、無理です。」

「・・・はあ。さいでつか。じゃあ俺はメシ食ってくる。」

後ろで挨拶をしているが、気にせずに食卓に向かい、たどり着く。

一輝の先祖がかなり頑張って妖怪退治をした結果、無駄に広い神社なので、食卓までの距離は遠い。歩いてる間にもどんどん空腹になっていた一輝は自分の分を見つけると、すぐに食べ始める。

「いただきます。」

目の前にあるザ・和食を食べながらテレビをつけ、ニュースに合わせる。

『昨夜未明、男性二名が殺害されました。警察は牛鬼の犯行と見て、陰陽師に捜査依頼をだし、現在近辺の山を捜索中です。また、牛鬼による犯行は今年に入ってからこれで十三件目で——』

「へえ、また牛鬼出たんだ。討伐依頼、来ないかな。」

今のニュースでもわかるように、一輝の世界では当たり前のように妖怪が出没する。

街には、人と共存する妖怪もいるが、大体は人を襲っているため、その妖怪を倒せるであろう陰陽師や陰陽師の卵に討伐の依頼が来る。

報酬は、政府が決めた妖怪の種類別の討伐金と依頼主からの支払いで、これが結構な額だったりする。

そして、どんな妖怪を倒したかを陰陽師と陰陽師の卵に渡されるライセンスが記録し、市役所などで申請することで口座に振り込まれる仕組みだ。

「ごちそうさまでした。」

「おそまつさまでした。もう少し早く起きれないの？」

食事の最中に来た母親から質問をされたので、一輝はいつもどおりのことを答える。

「深夜枠のアニメを見てるから、無理。」

「録画じゃ駄目なの？」

「録画はしてるけど、父さんのせいで見る時間が作れないから、リアルタイムで見るしかないの。それに、起きてれば依頼が来るかもしれないし。」

「たしかに、見る時間は無いかもだけど、夜更かしはやめなさい。」

「だったら、父さんを説得してください。」

「このやり取りは毎朝行われている。だから、一輝はこのタイミングでやっと完全に起きる。」

「じゃあ、俺は準備をしたら出かけるよ。」

「お昼は？」

「外で食べる。昼食に帰ってこれる距離にはいないかもだから。」

「了解。父さんに捕まらないようにね。」

「それはない。間違いなく。」

一輝は自信満々に宣言すると、自分の部屋に戻り携帯、財布、ICレコーダー、ライセンス、通帳をウエストポーチに、その他使いそうなものを適当に“空間倉庫”に入れると、玄関にはむかわず、そのまま外に出る。

部屋を出れば、その通路は外とつながっているため、玄関に向かう必要はないのだ。

そのまま無駄に長い階段に向かい、見えてきた辺りで、後ろから呼び止められる。

「一輝ー…たまには修行をしろー!」

が、構わず進み、階段を下り始める。

「父親の言うことを聞かんかー!」

それでも構わずに下り続けると、さすがに一輝の父がキレ、五枚の紙を掲げると、

「式神展開! “攻”!」

五体の式神を放ってくる。ふつう、息子に対して使うか、それ…しかし、一輝はそいつらに見向きもせず、一枚の紙を掲げると、

「式神展開 “攻”」

式神を一体だし、五体全てを破壊する。

そして、後ろを振り向き、悔しそうにしている父親のほうを見て、思ったことを言う。

「いい加減、実力差を受け入れようぜ? この実力差じゃ教わることねえし。」

「ぐぬぬ…」

そう、現党首の父親と一輝の間では、陰陽師として雲泥の差が開いている。

それはもう、一輝の父親が唯一使える奥義、“憑依”を使っても一輝が式神三体で圧勝するくらいには。

「しかし、このままでは奥義を習得できず、家も継げんぞ。」

「俺の名前、どんだけ有名か解ってる? 継がなくても十分やってける

くらいには有名だよ?」

「それでは、『鬼道』の名が途絶えてしまうだろうが!」

「別に、あんたの子供は俺だけじゃねえだろ。湖札(こさね)に頼めよ。」

湖札というのは一輝の一つ下の妹で、今は色々な魔物を見て回りた
いと外国を転々としている。

今どこの国にいるか、どうしているか、生きていかなどは、誰も
把握していないのだが。

「おまえは妹に負けてもいいのか!」

「勝ち負けじゃねえだろ・・・じゃあ、俺は行くから。」

「あ、こら、待たんか!」

一輝は後ろから聞こえてくる声を無視して、階段を下りる。そし
て、一番下についたところで電話がかかってくる。

「はい、もしもし。」

「もしもし?鬼道?」

「ハイ、鬼道です。」

「滝沢だけど、今日の夏季補修に参加していないわけを聞こうか。」

この滝沢とは一輝のクラスの学級委員で、今は中学三年の夏休み。

学校では、受験に向けての補修が行われているのだが、一輝は一回
も参加していない。よって、学級委員に目を付けられ、毎日サボった
理由を聞いてくるのだが・・・

「その一、面倒くさかった。その二、寝てた。事実を言うところな感じ
かな?」

「毎回毎回、ふざけてるのか、君は!?!」

「さすがに、電話で尋ねてくる人がいるのにふざけたりはしないよ。」

「だったら参加してくれないかな!ボクだってわざわざこんな電話し
たくないんだ!」

後、この人はボクっ子である。

「なら電話しなければいいじゃん。俺は陰陽師関係で参加自由って
なってるんだし。」

「だからって一度も参加しない理由にはならないだろ!」

「毎日、依頼が来る可能性を考えて四時まで起きてる人間に、そんなことを言うのか？」

さすがに、向こうも黙ってくれた。一輝はバス停のベンチに座る。《この機会に、説得しとくか。》

「そういうわけで、俺は夏季補修には出れない。出たら死ぬ。睡眠不足で死ぬ。」

「・・・解ったよ。なら、早くに寝た日があったら参加するんだよね？」

「んなわきゃない。」

「ちよつとまで！」

「じゃあ、また二学期に。」

「人の話しを聞けー！」

一輝は電話を切ると、そのまま電源も落とし、倉庫の中にしまう。ちようどバスが来たので、バスに乗って適当なところで降り、そのまま散歩を開始する。

「本屋とかねえかな。」

なんのあてもなく、一輝は歩き始めた。

「あれはどこにいた？」

一輝は鬼をさして問う。

「解りません。歩いていたら急に飛び出してきて・・・」

「腹が減って食い物を探してたつてどこか。」

「あのう・・・あなたは陰陽師ですか？」

「その卵。でも、あの程度なら問題ないから安心して。」

一輝は手を水で濡らしながら式神のほうを向き、命令を変える。

「今ここに在りし無力なる者を守りたまえ！」

式神はすぐに女性を守る位置に来て、命令を遂行する。

そして、相手がいなくなった鬼は、

「Gyaaaaaa！」

標的を一輝に変え、走ってくる。

一輝はあわてずにその動きを見て、攻撃をかわすと、胴に両手をあてる。

「はあー！」

そして、手についた水を撃ちだし、鬼の体を一瞬で貫く。

本来、鬼の体は硬く、刃物は効かないのだが、ダイヤモンドすら切り裂く水の刃は守れなかったようだ。

「・・・・・・・・」

「イッテェー！」

鬼は今の攻撃が致命傷だったため、何も言わず、一輝は頭痛に悲鳴を上げる。

そう、このころの一輝はまだ、代償の頭痛には慣れておらず、ほんの一瞬でも気を抜くと気絶してしまいそうになる。

そして、鬼が完全に死ぬと、その体から光の玉が出てきて、一輝の中に入る。

一輝の一族はこうして自分の中に妖怪の魂を封印することができ、封印した妖怪を自らの力として使ってきた。

だからこそ、わざわざ瓶づめにして封印した先祖のことを一輝は「バカ」だといったのだ。

「鬼は退治できた。検査のため、近くの神社まで運ばせるね。」

妖怪による汚染がないか、それを確認しないと終わらない。妖怪と人との垣根は、意外と低いのだ。

一輝は痛む頭を押さえながら、式神に命令を下す。

「汝が守りし者を神の社に運びたまえ！」

一輝は式神をもう一体追加し、式神たちは一輝が倉庫から出した担架に女性を乗せ、運ぶ準備をする。

「陰陽師さん、ありがとうございます。お名前を聞いてもいいですか？」

その最中に女性が尋ねてきたので、一輝は近づいていき、答える。

「一輝。この辺に住んでないから、次に会うことはないと思う。」

一輝は、外道と怖がれる可能性があるのでは、名前だけを名乗る。

最近ではかなり減ったが、一輝の一族を外道と否定する人や恐怖する人はいる。

「私は心花（このか）つていいいます。また会うときがあったら声ぐらいはかけてくださいね、一輝さん。」

「解った。お大事に、心花。」

そこで、式神たちは心花を連れて行った。

そして・・・

「イテー!!」

そこには、頭を抱えて・転がる一輝が残った。

死

一輝は「一体出たから十体はいるだろ。」という、とある黒い虫のよ
うな考えで山中を散策し、追加で計二十体の鬼を陰陽術で退治し、帰
宅のためバスに乗った。

既に九時を過ぎていているが妖怪退治なら門限はないし、階段の無い裏
から入る気なので、気にしていない。

「今日の成果は鬼が二十一体。買ったものはラノベが十冊だから、お
金はプラスだな。」

一輝は基本的に、ラノベにDVD、CDを買う金を稼ぐために妖怪
退治をしている。

「さて、この時間だとまだ修行やってるやつらがいるだろうし、静かに
行かないと。」

門限がなくても、父の言うことを無視して出掛けたので、面倒なの
だ。

まあ、次の日には会うことになるのだが、また逃げる気なのだろう。

そして、神社までたどり着くが…

「なんだ、この感じ…?」

今いるのとは反対側、表から禍々しい気配を大量に感じていた。

「普通の妖怪もたくさんいるみたいだけど…」

気配の中に一つ、変なものを感じ、さすがにあせり、表に走る。

そしてそこにたどり着くと、

「なんだよ…これ…」

そこには大量の妖怪と、そいつらに殺されたであろう、たくさん
人の死体があった。

「一輝か!？」

その中、唯一生き残っていた人間、一輝の父親が駆け寄ってくる。

「父さん、これはいったい…?」

「説明するからついてこい!!」

一輝の父親は一輝の手をつかみ社の中に入り、

「式神展開! 防!」

持っている防御の式神を全てだし結界を張らせる。

一輝の父でも数十分くらいはもつだろう。

「で？何があってあんな集団が…ってか、なんで別の種類の妖怪が力を合わせてるんだ？」

「解らんが、同じ目的を持った妖怪をまとめあげた親玉がいる。」

一輝は言葉を失う。

妖怪に同じ種族の集まりはあるが、別のやつらが大量に集まるなど、ぬらりひよんが率いた百鬼夜行しか、一輝は知らない。

そして、ぬらりひよんは一輝の一族と契約し、それぞれの檻の中にいる。

「そんなことを出来るようなやつってもう…」

「ああ。霊獣位だろうな。」

もちろん、妖怪と霊獣では強さの桁が違う。

強さとしては、

妖怪、魔物 <<<<<霊獣 <<<<<<<<<<<<神

って感じだ。

妖怪の群れに加え、そんなやつが相手では一輝の父親では歯がたたない。

だから、一輝は提案する。

「俺がメインで戦うから、サポートを…」

「ダメだ。俺が一人で戦う」

「それで勝てるわけ無いだろ。」

「ああ、だろうな。」

「だったら…」

サポートにまわれ、そう言おうとした一輝を父がささえぎる。

「だが、お前が逃げる時間くらいは稼げる。」

「!!」

「確かに俺は一輝より弱い。それでもお前の親だ。そして、子供を守るのは親の仕事だ。」

そう言いながら、父親は立ち上がる。

「ダメだ！俺も、」

「最後までいい親の言うことを聞かんか！」

その言葉に、強い覚悟を感じ一輝は動けなくなる。

その姿を理解したと見た父親は、社から出ていく。

妖怪たちと戦い、死ぬつもりで。

そして、残された一輝は一人愚痴る。

「勝手に決めやがって…ふざけんなよ…」

そして、倉庫から式神をつかみ取り、

「式神展開。社にありしすべてのものを運び、我が背にある蔵に入れよ。」

後ろに空間倉庫を開き、命令を出す。

「さて、俺はご神体を回収するか。」

一輝は祀られているものを倉庫に運び入れていく。

そして、一番奥にあった刀、ご神体を運び入れたとき、ちょうど式神たちも回収を終えたようで一列に並んでいた。

「解。」

一輝は式神たちも倉庫にしまい、正面の出口を開く。

そこには、足を折り、妖怪たちに囲まれる父の姿があった。

「一輝…なぜ逃げていない…」

「俺は、家族を殺されておとなしくしてはられないんでね。」

「ダメだ…今からでもにげ」

「うるせえよ。」

一輝の父は、言葉の途中で殺された。

そして、父の檻の中身、鬼道の一族が封印してきたすべての魂が一輝の檻の中に継承された。

「お前たちは何が目的で手を組んでるんだ？」

一輝は妖怪たちに問いかけた。

無双

「何を目的に手を組んでいるか？そんなモン決まってるだろ。」

一輝の問いかけに対し、桶から妖怪が出てきて、答えた。

その妖怪は、最近ニュースにもなっていた妖怪、牛鬼だった。

「決まってる？俺にはあんたみたいな大妖怪がほかの妖怪、自分よりも弱い妖怪と手を組む意味がわかんないんだけど。」

「確かに、普段なら絶対に組まんだらうな。だが、今回は違う。」

「どう違うんだ？」

一輝は問いかける。

自分の中にある感情を必死に抑えながら、問いかける。

「今回は全員が同じ目的を持っていた。そして、このメンバーをまとめられるものがいた。」

「そいつは信用できるのか？」

「無論だ。あの方の目的は俺達とは違うが、過程に相違点はない。」

「なるほど。なら・・・お前達の目的は何だ？こんなメンバーを集めることが出来た、目的は。」

一輝が感情を抑えていた理由はこれだ。

この真実が知りたくて、感情を抑えていた。

「それこそ、考えるまでもない。それは・・・」

「我らの同類の、解放だ。」

「・・・」

一輝は何もいえないでいた。

確かに、一輝の一族は大量の妖怪をその身に封印している。

復活の出来る妖怪にとつては開放したいというものだろう。

「そのために、こうして集まった。普段は気にもしない弱いものも、いつ消しに来るか解らない強者も、この場では関係ない。その意識を持っていくか、関係があるのはそれだけだ。」

「そうか。凄いなだな、お前達は。」

一輝はこの妖怪たちに尊敬の念を抱いていた。

同じ人間ですら協力していないことが多いのに、この妖怪たちは関係なくかわわっている。そのことに、尊敬の念を抱いた。

だが・・・

「それでも、俺はお前らを許せない。」

一輝は、水の刃を大量に放ち、その場にいる妖怪の九割を殺した。

「キ、キサマ・・・！」

「へえ、意外と残ったな。実力のあるものもそれなりに集めたのか。」

一輝は妖怪の魂に照らされながら、つぶやく。

いつもなら、一瞬打ち出すだけでも限界だった一輝だが、このとき、初めて細かい形を作り、それを操り続けていた。

別に頭痛がなかったわけではない。ちゃんといつも以上の頭痛はあった。

だが、それ以上に自分の中にあった感情によって気にもならない。

一輝は、静かに・・・静かに怒っていた。

「式神開放。『防』」

一輝は防の式神を四対召喚すると、それを神社の四隅に送り、

「結界陣、包囲。」

誰も逃げないように、結界を張った。

「さあ、かかってこいよ。全員俺が、叩き潰してやる。」

「なめるな、人間！」

「うるさい、ザコ。」

一輝はその頭上を飛び越えながら、細切れにした。

その勢いのまま、相手のど真ん中に着地し、水の日本刀を振り、切っていく。

「そもさ」

「うるさい。」

「信州」

「だまれ。」

「ぐいぐい」

「キモい。」

「貴様の心は」

「読んでる暇はねえよ。」

どれも『蟹坊主』『猿神』『猩々』『狒狒』と、一流の陰陽師ですら苦戦する相手なのだが、一輝は全て、一刀で切り伏せていく。

無表情でやっていくから、恐ろしいことこの上ない。

「……キサマ、本当に陰陽師の卵か？」

「ああ。正真正銘、ただの卵だよ。」

最後に残った牛鬼は、啞然としていた。

卵だからと下に見ていたガキに仲間を全て殺され、封印されたことにただただ驚

いていた。

「将来有望ってことじゃないか？」

「そうかもしれないな。ならばその芽、我が摘んで……」

「もらわれてくれ。」

一輝は牛鬼も一刀で切り裂いた。

「……キサマ……名は……？」

牛鬼が最後の力を振り絞って問いかけてくる。

「檻の中にこれば、誰かが教えてくれるだろ。」

「我を倒した……キサマに、聞かなくては……意味がない。」

死んでしまえば楽になるのに、それを拒否してまでの質問に、一輝は生まれてはじめて、陰陽師の名乗りを上げた。

「……我、鬼道一輝。一族が歩みし鬼の道を、輝かせるものなり。」

「そうか……その名、しかと覚えたぞ。」

牛鬼はようやく息絶え、その体から一つの光の玉が、一輝の体へと移る。

「にしても……キャラが変わりすぎだろ。」

このタイミングでそれをいいますか。

《あんたもそう思ったでしょう？》

「さて……最後の仕上げに入るとしますか。」

一輝は虚空に対して水の刃を飛ばす。

それは、その場を通り過ぎることもなく、その一点でとまった。「さっさと出てこいよ、霊獣さん。」

一輝は、この事態を作った張本人と、喧嘩する気なようだ。

白澤

「ほう、我に気がつくとは。少々侮っていたようだ。」

一輝が放った水の刃が消え、一体の霊獣が現れる。

カモシカのような体、たてがみをなびかせた獅子のようであり、人のようでもある顔、角が二本に眉間にある三つ目の目、さらに両脇腹にも三つずつ、合計九個の目を持っている。白澤（はくたく）だ。

「へえ、白澤か。こっちのネットワークではもう引退したことになるてたけど？」

「確かに、ここ何百年かは誰にも知識を与えず……いえ、与えられなかったのだ。そう思われて当然だろう。」

「それが今更になって動く理由は、やつらと同じ？」

一輝は妖怪の死体の山を指差す。

「否。やつらのような妖怪と違い、霊獣は一種類につき一体しか存在しない。助けたいと思う相手など、いやしない。」

「なら、なぜここを襲った？」

一輝は問いを重ねる。

先ほどの妖怪たちのときと同じで、気になるのだ。

その答え次第では、敬意を持って、全力で相手をするつもりだった。そして、白澤は答え始める。

「我が白澤であるためだ。」

白澤は九つの目で一輝をにらみ、続けた。

「先ほどおぬしが言っていたように、我は我が存在意義たる情報を与えられておらん。この状態で、どうして白澤を名乗れようか。」

「なら、伝えればいいだろ。東京でもどこでも行って来い。」

「それはできません。なぜなら、我が持つ怪異の知識は、ある時を境に、完全ではなくなってしまうた。」

「……」

一輝は、原因に一つ、心当たりがあった。

これがあたりなら、鬼道の一族を襲ったのも、当たり前前のことだろう。

それだけで解決はしないが、八割方解決といえるのだから。
そして・・・

「それは、貴様ら人間が妖怪を封印する手段を得てしまったことだ。」
一輝の予想は的中した。

「一般的に使われている瓶に魂を封じめる方法、これはまだよい。その瓶を見ることが出来ればその情報を読み取ることが出来る。本音を言ってしまうえば会うべきだが、贅沢は言えん。」

一輝は自分の考えを訂正する。

八割ではなく、十割達成できる、と。

なぜなら・・・

「だが、貴様らの一族は違う。ぬらりひよんと対等の契約をし、自身にその魂を封印し始めた。これではその情報を読み取れない。」

そう、これが理由だ。

瓶詰普通めにすなれば問題ないが、檻異常に閉じ込めると問題がある。

だから、異常を殺しに来たのだ。

「これで、我が目的は理解したな？」

一輝は確かに理解した。

だが・・・

「ならばその命、我に」

「黙れよ、クソ野郎。」

尊敬するには、値しなかった。

そして、怒りを静かなものに抑えていた尊敬の念はなくなり、純粋な怒りへと代わる。

「他のやつらみたいに、自分と他人のため、ってんなら苦しませずに送ってやったが、自分のことしか頭のないやつは、容赦しなくていいよなあ!!」

一輝の周りを様々なものが漂う。

水があり、空気があり、炎があり、雷があり、溶けた金属もあつた。それらの全ては、刃を形作っていく。

「・・・我に、霊獣に歯向かうということは、伝説に歯向かうことになるぞ。」

「だからどうした。鬼道の一族は道を外してる。神様すら殺すやつがいるくらいだ。今更伝説に齒向かおうがなんともねえよ。」

それに、と言いながら、一輝はいつの間にか足元に有った父の死体からその腰にあるただの日本刀を抜き、それを白澤に向ける。

「どうせなら、名を失う前に伝説殺しとして名を連ねたいんでね。死んでもらうよ。」

「いいだろう。貴様を殺し、我に齒向かった愚か者として、一生語り継いでくれる！」

キレた白澤は、白黒で出来たからだのうち、黒い部分を一輝に放つ。それは、一回り小さな白澤となつて一輝に襲い掛かるが・・・その途中で刃たちによって切り刻まれる。

「どうした？今のが攻撃か？」

「この・・・かかれ！」

白澤がミニ白澤を大量に放ってくるが、一輝は一步も動かずに切り刻む。

「で？この程度で何をするつもり？」

「キサマ・・・一体・・・」

このとき、白澤は僅かながらも恐怖していた。

自分よりは弱い人が相手をすることが出来ないはずの、小さい自分を一步も動かずに全滅させる一輝を。

そして、その感情は塗り替えられる。

「はあ・・・予想以上につまらない。もうこっちからいく・・・ぞー！」

一輝は日本刀に空気をまとわせ、そのまま、一刀両断にした。

「な・・・いつの間に・・・」

「へえ？気になるのはそこなんだ。あんたも霊獣ならそれどころじゃないことに気がつくと思うんだけど？」

白澤は一輝のその言葉を聞き、自分の状態を確認し始める。

今の白澤はただ見るだけでは体を上下に分けられたただけだ。

しかし、一輝の攻撃はその程度で終わらなかった。

白澤の体の中を破壊しつくしていたのだ。

人と言う脳を残し、その他全てを破壊。それが一輝のやったこと

だ。

だから、一つだけおかしいことがある。

「な……なぜだ!?なぜ我は死なない!!」

そう、白澤はここまでやられてなお、生きている。

これが、一輝の言っていたことだ。

「やっと気づいたか。こっちは頑張ってるのに、気づかれないってのは悲しすぎる。」

「キサマ、答えんか!なぜ我は……」

「うつせえよ。一回黙れ。」

一輝はそう言いながら、分断した白澤の下側を日本刀でさす。

本来なら、つながっていないし、神経も全て破壊されたので痛みなど感じることはない。

だが……

「ぐぎゃっ!」

白澤は痛みを感じた。

一輝のせいで、痛みを感じた。

「なっさけねえ悲鳴だな。さて、黙ったところで説明を始めるか。」

白澤は一輝をにらむが、当の本人は何も気にせずに説明を始める。

「まず、あんたが死なない理由は、俺がオマエの魂が体から少しでも出るたんびにに押し戻してるから。」

「な、なんだと!?!」

白澤が過剰に反応するが、後の説明に一輝は納得する。

「それは……魂の操作は神の領域だぞ!?!封印程度ならともかく、自由に操るなど……!」

そう、これが白澤が驚いた理由であり、一輝はいまだに知らないが頭痛の原因でもある。

一輝の能力は神の領域にまで達することが出来る。

ゆえに、入り込み過ぎないようにストッパーとして頭痛が付属し、一輝に宿った。

「そして、痛みを感じたのも俺がその発生した痛みの信号を直接脳に送ってやったからだが……今のあんたにとって、それは些細なこと

かな？」

一輝の言うとおりに、白澤は一輝という存在におびえきっている。もちろん、思いつきり神の領域に入り込んだ一輝には今すぐに意識を失ってもおかしくないレベルの頭痛が襲っているが一輝は無意識のうちにギフトを使い、これを防いでいる。

操るのは自分の意識。

これをただ保っているため、一輝は意識を失わない。

これを意識的に行うことが出来れば、このギフトをもつ全ての人が神の領域に入ることが出来るが、一輝は無意識のうちにやったため知らない。

頭痛が増えるため、記憶を無意識のうちに封じ、考察することも出来ない。

「さて・・・神の領域、ね。だったら霊獣程度殺しても何の問題もないよなあ？」

一輝はまず、白澤の下半身を切り刻む。粉になるまで、切り刻む。途中で白澤の意識が飛んだが、もう一度攻撃をすることで強制的に起こす。

最後に、その粉を燃やして下半身は終わる。

「さて・・・次は上半身を切り刻むかな？それとも・・・別の方法にしようか？」

「た、たのむ・・・もう」

「やめてくれ？自分のつごうで、自分のためだけに俺の親を殺したやつが、そんなことを言えるのか、な！」

一輝はまず、腕を切り落とした。

「があ!!」

一輝は笑いながら、斬り続ける。

一太刀で粉まで刻むこともあれば、ゆつくりと、丁寧に斬ることもある。

鈍くなっている部分で痛みを与えることもある。

一輝の中には、ただ苦しめることしかなかった。

それがいに、目的はなかった。

「たのむ・・・我が悪かったから、もう・・・」

「・・・はあ。予想以上につまらないな。弱いしプライドもない。もういいや。何か頭もいつも以上に痛いし。」

一輝は最後に倉庫の中から手榴弾（一輝の改造した）を取り出し、白澤の中に入れ、爆発させる。

爆発の中から一つの光る玉、妖怪のものの三、四倍はあるものが出てきて、一輝の中に入る。

「さて・・・こっからどうするか・・・」

一輝はとりあえず、人の死体と妖怪の死体とを分け、妖怪の死体を式神に封印させる。

後ほど、政府から陰陽師関係の担当者が来るだろうという予想から、利用されないように封印した。

《別に使われてもいいけど、こっちが下に見られるのはかんべんだしな。》

そして、集めた人の死体から、形見として一つずつ物をもろう。

そのまま火をつけ、骨だけにして、裏にあるお墓にいれ、作業を終える。

そのころにはもう、太陽が昇っていた。

こうして一輝は、一日でたくさんの「大切」を失い、箱庭に召喚されるまで、一人で生きていくことになった。

|||||

「と、こんなことがありました。まる。」

一輝はくだらない話をしめるように過去の話を終える。

実際、一輝からすれば既に吹っ切ったことだし、一人といっても友達づきあいは合ったのだ。

「これは、予想以上に・・・」

「悲しい、つらい話ですね。」

「うん。とっても悲しい、破滅の物語だね。」

「いや、俺からすればもう終わった話だし・・・うん？」

一輝は聞こえてきた感想に首を傾げる。

今、自分の目の前に座っているのは二人。だが聞こえてきた返事は三人分。

そして、椅子の空きは一輝の横の一つ。もちろん、ここには誰も座っていない。

一輝は残った方向である、後ろを振り返る。すると、そこには……

長い金髪に赤い瞳、学者っぽい衣装をまとった、小さな少女がいた。

魔王とティータイム

「こんにちは、お兄さんにお姉さん達。まずは自己紹介かな?」

少女は一輝たちが固まっている前で、にっこりと笑いながら言う。

この状況で話し掛けてきた以上、誰なのかは想像がついていたが、一輝はその歳相応の笑顔に警戒心を解き、自己紹介を始めた。

「ノーネームの寺西 一輝だ。んで、こっちの二人は」

「同じく、六実音央。」

「同じく、六実鳴央です。」

だが、メイド二人は警戒心を解いていなかった。

「で?なんとなく想像はつくけど、君は?」

「へえ、想像がつくんだ?」

「ここに来た目的と被りそうだからね。」

「そっか。私はヤシロⅡフランソワ一世。ノストラダムスの大予言の主人公です。」

その言葉に、メイド二人は警戒を強めたが、解ききった一輝はそうでもなかった。

「どう?予想は当たった?」

「面白いぐらいにどんぴしゃだよ。えっと・・・ヤシロちゃん、でいいのかな?」

「うん、それでいいよ。」

「じゃあヤシロちゃん、席も一つ空いてるし、お茶しながら少し話さない?聞きたいこともいくつかあるし、ケーキに紅茶もあるから。」

「一輝さん!何を呑気なことを言っているのですか!」

「じゃあ、私も聞きたいことあるし、お言葉に甘えようかな。」

「なんでそっちも乗り気なのよ!」

のんびりしている二人にメイド二人が突っ込む。

音央は・・・よく魔王相手に突込みが出来たな。

「まあまあ。ペストみたいなのパターンならすぐにバトルだが、今回はそうでもないみたいだし。それに、あんなふうに笑うやつにまず刀を向けるってのは無理だ。」

「それは・・・解らなくもないけど・・・」

「この様子を見てもそうですよね・・・」

一輝の横に座っているヤシロは、頬に手を当てながら「おいしー!」と足をばたつかせている。

二人も一輝の言うことに納得したようだ。

「さて、質問タイムに入ってもいいかな?」

「ハム、ムグムグ・・・うん、食べながらでよければ、だけど。」

ヤシロは唇の横にクリームをつけた状態で笑いながら許可する。

なので、一輝はそのクリームを拭ってから質問を開始する。

「本当に子供にしか見えないな・・・。まず一つ目に、神隠しのゲームを設置したのは本当にヤシロちゃんなの?」

「ありがとうつ。うん、そうだよ。」

「理由は?」

「そうだね・・・色々有るけど、一番の理由は二人に私の仲間になってもらうためかな。」

「普通に誘うんじゃだめだったのか?」

「うん。私のコミュニティに入ってもらう・・・物語になってももらうには、破滅の属性がないとだめだから。」

「破滅? そういえば白夜又もそんなことを・・・」

「白夜又お姉さんから聞いてるんだ?」

「たいした事は聞けてないから、説明をしてもらえると助かる。」

「そっか。じゃあ簡単に説明すると、あのゲームは誰かにクリアされても主催者側の勝利でも音央お姉さんか鳴央お姉さん、もしくは両方に破滅の属性が付く予定だったの。」

「そんなふうになってたんだ?」

「うん。プレイヤーの生贄によって開放されれば、村一つを犠牲に開放された、という形で二人に破滅の属性が、どちらかが死ぬことによつて終了すれば、絶望から破滅の属性が付くはずだったの。けど・・・」

「俺が想像しなかった方法で開放してしまった?」

「そう。だから前からどんな人か興味があつただけど・・・」

「会ってみてどうでした？」

「優しいお兄さんって感じがする！」

笑顔でそういう様子は、もう何度目かわからないが魔王には見えな
い。

ちなみに、あの終わるタイミングを決められるルールも破滅の属性
を与えるためのものだ。

自分を助けた人を殺す、そのための時間だ。

「そりやどうも。じゃあ次に、俺の話が破滅の物語ってのは？」

ヤシロは一輝の過去話に対して『とつても悲しい、破滅の物語』と
言っていた。

そこについての質問だろう。

「うーん・・・それについて答える前に、こつちからも質問いい？」

「こつちから聞いてばかりだったな・・・どうぞ。」

「じゃあ、お兄さんはその後どうしたの？」

「その後、とは？」

「大切な人たちの埋葬をした後だよ。」

「ああ、そこか。あの後はどこから聞きつけたのか政府の人たちが来
た。」

「なにをしに？」

「一つ目に、ご神体を回収しに来た。」

「ご神体？」

「ああ。大体のご神体は強力な武器だから、頭首がいなくなり、他に奥
義を窮めたものがない以上持つ権利はないって名目のもとにな。
ついでに、全く同じ名目のもとに苗字を取られたから、母さんの旧性
の寺西に変えた。」

「で、お兄さんは渡したの？」

「いや。ちやうど神社が倒壊してたからあんなかにあるって言って
ちよろまかした。」

「うわお。」

「なんか、嫌味ったらしく言ってきてむかついたからな。」

「それで逆らったんだ？」

「そういうこと。たぶん、いまだに必死になって探してるんじゃないかな？」

俺の一族のはそれだけの価値があるものだし。」

一輝の言葉に、警戒して話に参加してこないメイド二人はジト目を向け、ヤシロはこらえきれずに吹き出した。

「あはははっ。お偉いさんがありもしないものを探す・・・面白い光景だねっ。」

「笑いをこらえるのに必死だったよ。んで、二つ目は俺を保護するって名目で思い通りに動く強い陰陽師を作ろうとしてたな。」

「そっか・・・親も住むところもなくなったのを利用しに来たんだ。それはどうしたの？」

「白澤を殺した分の報酬が、三十年は遊んで暮らせるレベルのもだったから、それを見せて無視った。」

「そんなにあっただ？」

「霊獣殺しの報酬は本当に桁が違ったな。妖怪であれに近い値段になるのは、白面金毛九尾の狐とかダイダラボッチみたいに神としても見られてるものや、是害坊みたいに国最強の称号を持つもの、あとは、神様でも殺せばそれ以上の値段になるかな。」

「神様を殺してももらえるんだ。そのあとは？」

「一週間は暗かったけど、妹が生きてるかもしれない、会ったときに兄がこんな状態ってのはどうなんだ？」と思い、普通にすることにした。」

「そっか・・・妹さんが、か。でも、それくらいならどうにかなるかな。」

ヤシロは二つ目のケーキを食べながら自己解決する。

「私が言ったのは、家族を殺されて、その殺した相手を全て、その手で殺す。これは立派な破滅の要素だってことだよ。」

「そうなんだ？」

「うん。後はそのまま絶望して目に付く人を殺して回るーとか、善悪関係なく全ての妖怪を殺すーとかの要素があれば完璧なんだけど、それぐらいはどうにでもなるからね。」

「それで破滅の物語か。」

「そういうこと。で、物は相談なんだけど・・・皆、破滅の要素を持つてるんだし、」

一輝たち三人は、流れから次の言葉の予想が付いていた。

「私のコミュニティ、『ルインコーラー』にこない？」

「断る。」

だから、即答が出来た。

「うわお、即答だ。」

「一応、俺はヤシロちゃんを倒すぞーって息巻いてきたわけだし。」

「私たちはあのゲームについてかなりうらんでるし。」

「そちらのコミュニティに行くわけがないじゃないですか。」

ヤシロは解りやすくがっかりする。

「なら仕方ないか。質問はもう終わり？」

「うん、後はヤシロちゃんを隷属させてからでいいかな。」

「じゃあ、はじめようか。私の隷属とお兄さん達のコミュニティ参加を懸けてのギフトゲームを。」

ケーキを食べ終えたヤシロちゃんはいすから降りながら大きな本を取り出す。

「それは？」

「ノストラダムスの預言書。私の魔道書だよ。」

ヤシロが本を開くと、ページが飛び、黒い輝く契約書類となる。

『ギフトゲーム名 『破滅の抜け道』』

・プレイヤー一覧

・寺西 一輝

・六実 音央

・六実 鳴央

・ホストマスター側 勝利条件

・プレイヤーを破滅へと導く。

・プレイヤー側 勝利条件

一、少女を破滅から救い出す。

二、全ての破滅を退ける。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

『ルインコーラー』印』

「さあ、破滅の物語を始めましょう。」

一輝たちにとっては二度目の、魔王とのゲームが始まった。

破滅の抜け道 ①

「じゃあまずほ……この子からかな？」

ヤシロの持つ魔道書のページが一枚飛び、紙を中心に魔方陣を描く。

「そんな風に召喚するんだ？」

「うん。破滅の物語って暗い子が多いから、この中に引きこもってるんだ。」

そんなやり取りをしている間にも召喚は完了した。

出てきたのは黒い少女に真つ黒な羽が生え、顔にはギラギラと輝く複眼が二つだけ。

黒い長髪は触手のようにうごめき、腕の代わりに虫の足が六本。頭からは触覚が二本生えている。

「キモッ！」

「何なのよ、あれは！」

「人と蛾を足して二で割った……といったところでしようか？」

三人の感想はこうだった。一見冷静そうに見える鳴央だが、実際にはものすごい震えているのでそうでもないだろう。

「まさかとは思うけど……破滅の物語って全部あんな感じなのか？」

黒い羽で飛び回っている蛾人間(?)を指差しながら一輝は問う。

「それはさすがにないよ。あんな感じの子もまだいるけど。」

「あんなのがまだいるの……?」

音央が露骨にいやそうにする。

「うんっ。あの子は三つのロアを足してあんな感じになってるけど、他の子は単体であんな感じかな。」

「三つと言いました？」

「そうだよ。倒せたらなにを足したのか教えてあげるねっ。」

魔王とのゲームだというのに呑気に話をしている。

気楽過ぎるだろ……

「さて、二人はあれと戦える？」

「無理。」です。」

「だよな・・・行ってきます。」

一輝は足元に水を送り、蛾人間のほうに飛んでいく。

「えっと・・・こんにちは？」

「——ッ!!」

「おわっ!!」

一輝が挨拶をすると、回答として触覚の間から電撃を放ってきた。

「少しぐらいはしゃべってくれませんかね!」

一輝の言うことを無視して電撃を放ち続けてくる蛾人間に、一輝は電撃を操って盾にし、攻撃を防ぐ。

「——ッ!?!」

「隙あり!」

蛾人間が驚いたので、一輝はためた電撃を撃って蛾人間の動きを止め、

「これで終わりっつと。」

ただの日本刀で一刀両断にして倒した。

「へえ・・・一応、由緒正しいロアを中心にしてただけど役不足だったみたいだね。」

「まあ、相性が最悪だったのもあるけどね。で?あれはなに?」

一輝はバトル開始前に言っていた正体について聞く。

『『モスマン』と『飛行する魔女(フライングヒューマノイド)』、『サンダーバード』だよ。』

「それであんな見た目になったのね・・・」

「実際に人と蛾が混ざっていた、というわけですか・・・」

「つてか、サンダーバードの要素が電撃しかねえ・・・」

他の二体は見た目に出ていたが、攻撃には出ていなかったので問題ないだろう。

「さて、次はこの子にしようかな?」

魔方陣が展開し、新しい破滅が出てこようとする。

次に出てきたのは・・・

「さつきよりはマシだが・・・」

「それでもやっぱり・・・」

「気持ち悪いですね・・・」

三人がこんな感想を漏らすのは、人くらいの大きさで全身が毛に覆われており、背中にトゲ、鋭利な爪、赤い目を持つトカゲ。これは、一輝にも正体がわかった。

『チユパカブラ』の群れかな?」

「正解だよ、お兄さん。南米あたりで目撃されてる未確認生命体だね。」

「なんだか・・・外国の化物ってわかりやすいのが多いのね・・・」

「日本だと、地味なのに強い、というのが多いですから・・・」

一輝の妖怪たちは強いやつらもいるが、数としては弱いやつのが圧倒的に多い。

「で?また俺が行く?」

「そうして欲しいんだけど・・・それをやってると出番がなくなりそうですね。」

「ですね。というわけなので私が行きます。」

今回は鳴央が行くようだ。

「多対一でいいんだ?」

「全員に活躍の場は与えないとね。本当に危なくなったら行くけど。いまだに敵同士でありながら呑気に話す二人である。」

もう少し警戒心を持ってよ、お互いに。

『奈落の穴』

鳴央は自分の周りに小さな黒い玉をいくつか作り、半分ほどチユパカブラに向ける。

バカみたいに真正面から突っ込んできたやつらは消え、それを見たやつらは攻撃できずにその場に残る。

「これは・・・また相性が悪かったかな?」

「みたいだね。あの子達は特殊な攻撃とか出来ないから。」

相手が警戒してはどうかしようもないと判断したのか、群れの周りに黒い玉を大量発生させ、動きを止めていた。

そしてそのまま、『奈落の穴』の輪を小さくしていき、チユパカブラは全て消えた。

「ふう・・・終わりました。」

「お疲れ様。いやあく圧倒的だったな。」

「そうね。まったくあせらずに対処する姿は綺麗だったし。」

破滅陣営、二体とも惨敗である。

「お兄さんも鳴央お姉さんも強いね！私の物語がここまで圧倒されるとは思ってなかったよ。」

「このまま、何の問題もなく行けると楽でいいんだがな。」

「ですね。ところで、一つ質問いいですか？」

「ん？内容によるかな。どんなこと？」

鳴央は今チュパカブラたちとやって何かに気がついたのだろう。それについてきいた。

「あなたの仲間・・・物語たちは、自我をもっているのですか？」

「いや、それぐらいはあるだろ。なあ？」

「ええ。じゃないとあんなふうに警戒するわけがないし。」

鳴央の質問に対し、一輝と音央は否定的発言をする。

だが、ヤシロの回答はどちらでもあり、どちらでもなかった。

「うーん・・・持つてはいるけど、持つてないって感じかな。皆破滅の属性が強いからその辺曖昧なんだよね。」

「そうですね。だからあんなふうに消えるときにもおとなしかったのですか？」

「うん、そうだよ。中には強い自我をもってる子もいるけど、基本あんな感じ。」

一輝と音央は一切納得していないが、鳴央は納得したようで話が終わった。

「よくわからないけど・・・まあいいわ。次は私の番ね。」

「順番せいになったんだ。」

「そういうわけじゃないけど、一回ずつぐらいは一人でやってもらおうかと。」

この後は全員でかかっていく気なので、一対一(?)はラストだ。ラストの予定だ。

「じゃあ、面白そうだし、この子にしようかな。」

魔方陣が展開し、輝くが・・・

「・・・えっどこにいるのよっ」

何も出てこなかった。

「ヤシロちゃん、失敗？それともサボタージュ？」

「ちゃんというよ。」

「目に見えないくらい小さいとか？それとも・・・」

ドドドドドドドドドドドド！！

一輝の言葉の途中で大きな音とともに地面が揺れ、ヤシロはそのまま立ち、音央は羽を生やして飛んだ。

「きゃっー！」

「おっと。」

一輝はバランスを崩しながらも、倒れそうになる鳴央を支える。

「あ、ありがとうございます。」

「無理に立とうとするなよ。まだ続きそうだから。それより・・・」

一輝は頬を赤く染めている鳴央を支えながら、地面を見る。

「地下にいるってことであってる？」

「うん。そろそろ出てくるんじゃないかな？」

ヤシロの言うとおりで、地面の一部が盛り上がり、怪物が出てくる。

「ちよ、なによあれ！！」

音央の指差す前で、さらに三体の怪物が出てくる。

それは、口には鋭利な牙がびっしりと生え、赤くてブヨブヨした巨大な・・・ミミズだった。

「あんな気持ち悪いの、嫌よ！」

「それは全員同じだな。やるって言った以上、頑張りましょう。」

「代わってあげようって気は無いの!？」

「無いな。」

「ありません。」

「何ですよ!？」

「気持ち悪いから。」

即答である。

間違はなく、あんなのと戦おうという人はいないだろうから、こうなって当然だろう。

「ああもう、分かったわよ！やればいいんでしよう、やれば！」

音央はやけくそ気味に飛び掛っていく。

「そうそう、あれ、モンゴリアンデスワームっていうから。」

「そんなことどうでもいいわよ!!茨の檻!!」

音央は怒りのままに茨の鞭を放つが・・・

「ブヲオオオオオオ!!」

気持ち悪い雄たけびとともに口から火を放ち、焼ききってしまう。

「うそっ！」

「ブヲオオオオオオ!!」

「ブヲオオオオオオ!!」

音央が驚いているすきに、残りのやつらが電撃と毒を放つ。

「マズッ！」

音央は反応しきれず、目を瞑り衝撃に耐えようとするが・・・

「・・・あれ？なんで・・・」

いつまでたつても衝撃がこず、むしろ何かに支えられている。

気になって目を開けると・・・

「一応聞いとくけど、なんとも無い？」

「!!、!!」

音央の目の前に一輝の顔があり、自分はお姫様抱っこで抱えられていた。

一瞬で音央の顔が赤くなる。

「あ、ありがとう・・・」

「羽、溶けたみたいだから当分出ないぞ。おとなしくしてるように。」

「それはいいけど・・・は、早く下ろして！」

「下が毒まみれだからむり。そういうわけだから、少しおとなしく・・・」

といいながら一輝が音央の顔を見ようとするが・・・

「こつち見んな！スリーピングビューティー！」

「イテエ！地味にイテエ！」

音央の茨で顔をぐるぐる巻きにされ、見えないようにされた。

「これ外せ！何も見えん！」

「いいのよ、見えなくて！」

「バランス取れなくて落ちるから！毒の中に落ちるから！」

「……絶対にこつち見ないでよ……」

音央はしぶしぶといった様子で茨を解き、一輝は躊躇い無く音央のほうを見る。

「つて、みんなって言ったでしょう！」

「気になったからな。にしても、オマエ……顔赤くね？熱でもあるか？」

「無いわよ！」

そんな感じでラブコメをしている間に、毒はきえ、それで死んだらしいモンゴリアンデスワームの死体が転がっていた。

自滅である。バカだろ……

「ふう……終わった。」

「早く下ろしなさい！」

「はいはい。」

一輝はさっさと下に降り、音央を下ろす。

「お二人とも、お疲れ様でした。」

「俺は音央から受けたダメージしかねえよ。何で仲間から攻撃受けてんだよ……」

「うっさい！あんたが悪い！」

「ええ……」

一輝はなぜ自分が悪いのか分からず、納得できないようだ。

女三人は納得しているようだから、聞くことも出来ない。

「まさかラブコメしながら倒すとは、思ってた無かったよ。」

「ラブコメしてないわよ！」

音央は主張するが、この場では無意味だろう。

「さて……ここからは同時に何体も召喚してもいいのかな？」

「こつちに合わせてくれてありがとう。もういいよ。」

音央はたいした活躍が出来ていないが、この後してくれることだろ

う。

「じゃあ、いつきにいくよ?」

ヤシロの周りで魔方阵が大量に発生し、その場を破滅が満ちた。

破滅の抜け道 ②

「……何、この暗い集団……」

一輝の感想は、これである。

それくらいに、重苦しい集団だった。

「とりあえず……あの天使っぽい集団は俺が相手するから、他をよろしく。」

「了解！」

一輝が天使の集団のほうに走って行きながら、途中にいた空飛ぶ円盤と黒服の集団を全滅させる。

その勢いのままに七人の天使の中の唯一何も持っていない天使に量産型妖刀で切りかかると、そいつの足元に刺さっていた不気味な紫色に光る大剣をつかみ、妖刀を斬った。

その瞬間に、妖刀を抜いたことをトリガーとして、白い和服になっていた一輝の服装は、普段着へと戻る。

「結構気に入ってただけど……仕方ないか。こいつらは『七人の御使い（セブンス・エンジェル）』？」

「うん、そうだよ。黙示録に記された、終末を告げる天使さん。」

その全員が、身長は三メートルはあり、右手には様々な武器、左手には金色のラップを持っていてる。

武器の種類は短剣、斧、槍、弓矢、ハンマー、鎌、大剣、凶悪なものだらけである。

「さて……とりあえず斬っていくか。」

一輝は右手に水の刀、左手に炎の刀、自分の周りには様々なもので作った刀が浮いている。

まず、同時に迫ってきた斧と短剣に対して自分の周りに有った刃を飛ばし、動きを止めた隙に両手の刀を投げて首を飛ばす。

そのまま走りながら鎌、ハンマーの攻撃をよけ、唯一の遠距離武器である弓矢の元にいく。

矢を握って突き刺してこようとするのをよけ、新しく作った刀で首を飛ばす。

「まず三体……っておわっ！」

一輝が気を抜いた隙に大剣が攻撃を仕掛けてくるので、あわててよける。

よけながら攻撃をするが、その全てをはじかれる。

《武器の質も実力も他のやつらとは桁が違うな。なにかあるのか?》

一輝はその思考から、大剣を後回しにし、喰らったらまずそうなハンマーの元に向かう。

大振りなハンマーの攻撃が当たる前に、その首をはねる。

ハンマーを拾い、槍に投げつけようとするが、拾う前に消える。

《持ち主が死ねば、武器も消える……? いや、持ち主ごと消えるのか。》

死体のほうに目を向けると、もう既に消えていた。

他の死体も既に消えている。歩く邪魔にならないのは助かるだろうが、武器を利用できないのは誤算だったのだろう。舌打ちをしている。

「仕方ない、なー！」

一輝は槍のほうに向かい、その武器を奪うと、鎌のほうに投げつける。

鎌が鎌を振り上げたところに（紛らわしい！）タイミングを調整して殴り掛かってきた槍の腕をつかみ、ハンマー投げの要領で投げつける。

鎌をとめることは出来ず、槍は真つ二つにされ、一輝は鎌を振り切る前に近づき、その首を落とす。

「さて……後は、」

プアーン。

一輝がラツパの音に反応して振り返ると、そこには大剣を持った天使がいた。

「さて……こつちも切り札を使うしかないかな。」

一輝は倉庫を開き、一振りの刀を、強い存在感を放つ刀を取り出す。

「それは?」

「元妖刀、現神刀のご神体。鶴殺しによって与えられた名刀獅子王。」

「それが、お偉いさんが頑張って探してる?」

「そうだよ。俺も使うのは初めてだけど、陰陽師になった俺なら」

一輝はそう言いながら、刀を鞘から抜く。

一輝の服装は、その瞬間に白い和服になり、手に持つ刀は……しっかりと、一輝の手に収まっていた。

「使いこなせそうだな！」

ガキン！

先ほどは音すら立てず量産型妖刀を斬った大剣だったが、今度はしっかりと打ち合った。

一輝はこれなら攻撃が出来る、ということそのまま攻撃を続ける。

休憩のために一度距離をとると、ヤシロが話しかけてくる。

「さつきみたいなのに、水とかは使わないの？」

「なぜか陰陽師モードになるとあつちが使えなくなるんだよ。まあ、使えたとしてもあれにダメージを与えられる気がしないけど。」

「うん、あの子は他の六人とは強さも武器も特殊だからね。」

ちなみに、一輝のギフトの状況としては、

『無形物を統べるもの』＋『陰陽術』可

『外道・陰陽術』＋『陰陽術』＝『陰陽師』

『無形物を統べるもの』＋『陰陽師』不可

といった感じだ。

「さて……頑張ってみますか！」

一輝は再び天使に向かって斬りかかる。

それでは先ほどまでと変わらないので、トリツキーな動きも加えるが、全て防がれ、それどころか一輝が攻撃を喰らいそうになる。

「あぶなー！」

前髪を少し切られたところで、一輝は後ろに跳ぶ。

このままいけば、最終的には一輝が負けるだろう。

だが、一輝にはまだ策が有る。

使ってからが本領発揮の策が。

一輝は、言霊を唱える。

「大陸を制した、伝説の天狗よ！」

自らの内に在る伝説を召喚するために。

「大陸一の実力を持ち、日ノ本にて初めて敗北を味わいしものよ！」

この場を打開する、そのために。

「今ここに顕現せよ、是害坊！」

言霊を、唱えた。

「へえ、綺麗だね。」

ヤシロがそう言うように、伝説の召喚は妖怪の召喚とは違う。

黒い霧ではなく、光り輝く霧が一輝から広がり、形を作っていく。

霧が固まると、そこには鳥と人を足して二で割ったような姿の天狗が現れる。

「こんにちは、是害坊。オマエは俺に協力してくれる側？」

「ああ。俺は一輝を認めてるからね。他にも、ユランとかのあたりも認めてる。プライドの高いやつらは認めれてないけど。」

「そっか。なら、『憑依』よろしく。」

「了解。いつでもどうぞ。」

一輝は許可をもらうと、是害坊に触れ、奥義発動の言霊を唱える。

「我が百鬼たる妖よ。今、我が身に宿り、我が力とならん！」

是害坊の体が再び霧となり、一輝の体を覆うと、そのまま体に入る。

全て入ると、一輝の背から大きな鳥の羽が生える。

「そうなるんだ？」

「全部を変えることも出来るけど、今回はこれだけでいいかな。まだやることあるし。」

一輝は再び言霊を唱える。

その隙に天使が攻撃してこようとするが、ヤシロが止める。

手の内は見ておきたいのだろう。

「他の国にて、その猛威をふるいし竜よ。同種の中では弱くとも、確かな猛威をふるいしワイバーンよ。今ここに、我が百鬼としてその力をふるわん。」

再び、伝説が召喚される。

「今ここに顕現せよ、ユラン！」

先ほどと同じように、一輝の体から輝く霧がでて、形を作る。同種の物の中では小さいが、それでも大きい、ワイバーンが、現れる。

「さて、力、借りるよ?」

「うむ。我が力、使うがよい。」

一輝は、再び奥義を使う。

ペストのゲームでも使った奥義を。

「わが百鬼たる魔物よ!今、我が武器に混じり、新たなる武とならん!」

ユランと獅子王が霧となり、混ざる。

霧が固まると、そこには龍の装飾を得た獅子王があった。

見た目の変化は少ないが、放つ存在感は先ほどまでの比ではない。

「待ってくれてありがとう。もういいよ。」

「そっか。じゃあ、どう変わったのか見せてもらおうね。」

ヤシロが言い終わると、天使は一輝の方に向かってくる。

一輝はそれに真つ向からぶつからず、羽を使って飛ぶと、背後から獅子王で斬る。

刀は、先ほどまでとは違いしっかりと天使を切り裂き、その命を奪った。

「すつごくパワーアップしてるねっ。」

「二応、そうなるようにやったからな。竜の牙や爪は鋭いものだよ。」

一輝はそういいながら憑依と武装を解き、二体の伝説を体内にしまい、獅子王を納刀して陰陽師モードも解除する。

それが終わるころには死体も消えていた。

「さて、これで天使は全部・・・ん?」

一輝が念のために周りを見回すと、なぜか天使が持っていた大剣だけは消えずに残っていた。

「他のやつらは消えたのに・・・どうしてこれだけ?」

一輝が近づき、拾おうとしたところで・・・

刀は、紫の瞳の全裸の少女に変わり、一輝の心臓に向けて手刀を

放
っ
て
き
た
。

破滅の抜け道 ③

時間は少し戻り、場所も変わる。

音央と鳴央は二人で破滅の物語と対峙していた。

一輝に言われた、ではなく、二人がこれが一番いいと判断しての行動である。

「さて、さっさと片付けるわよ、鳴央！」

「ええ、音央ちゃん！」

気合を入れる二人の前には、様々な破滅がいた。

まったく同じ姿をした大量の殺人鬼、クローン・マーダー“複製殺人鬼”。

悪魔のような容姿で生まれ、悪魔になってしまった少女、リーズ・サージェイソン“

13番目のリーズ”。

科学の力で現代に復活した肉食恐竜、ミュータントレックス“復活恐竜”。

ハロウインの日に毒入りの菓子を配り、子供を殺すハロウイン・サディスト“お菓子配り”。

音央は一番何も出来なさそうなお菓子配りを茨で縛り上げ、鳴央があけた穴に落とす。

お菓子配りが何の抵抗もせずに落ちていき、二人は固まるが、特に何か出来るやつではないので仕方がない。

「何か拍子抜けね・・・まあいいわ。私はあの人っぽいのを担当でいい？」

そのおかげでこんな冷静な判断が出来ているのだから、もうけものだろう。

「・・・あ、はい。それでいきましょう。」

どうするか決まったので、音央は殺人鬼の集団のほうに向かい、鳴央は恐竜と悪魔のほうを向く。

|||||

「スリーピングビューティー！」

スパツ、ザクツ、タアン。

音央が茨を放つが、殺人鬼たちはそんな効果音を立てながら、茨を切ったり、茨にナイフをさして止めたり、銃で撃つて破壊したりして防ぐ。

中には防ぎながら銃を撃ってくるのもいるので、これまた音央とは相性が悪い。

やりづらい敵だ。

「あーもう！何で当たらない連中ばかりなのよ！」

その無意味っぷりに、自分でキレた。

本人も混乱しているのかもしれない。

「はあ・・・よし、一回すつきりした！当たらないなら・・・」

それでもなかったようで、音央は何らかの作戦を実行する。

それは・・・その場を動かない、というものだった。

もちろん、殺人鬼がその隙を見逃すわけがなく、銃で狙ってきたり、刀で切りかかってきたりする。

だが、音央は動かず、タイミングを待つ。

ほんの一秒待つと、音央は口を開き、この状況を突破する策を実行する。

『真夏の夜の夢（ミッドサマー・ナイトドリーム）！』

瞬間、一番遠くにいた殺人鬼の位置と音央の位置が入れ替わる。

そうなれば、入れ替わった殺人鬼は切りかかってきた殺人鬼に殺され、切りかかった殺人鬼は、一瞬の動揺の隙に銃弾を受けて死ぬ。

それと同時に進行する形で、音央はすぐそばにいる殺人鬼の腕をつかみ、別の殺人鬼にぶつける。

二人はぶつかって倒れたので、運よく落としてくれた爆弾を投げつけ、死亡させる。

結果として半分の殺人鬼が死に、数が減ったので音央はギフトカードを掲げ、自分の有利なステージへと移動する。

『妖精庭園（フェアリーガーデン）！』

その瞬間に、周りの景色が変わる。

茨で囲まれた、かつては神隠しのゲームのステージの一つであった、音央の城へと。

「さて……どうしましょうか……」

鳴央は、防御のためにいくつか玉を追加し、距離をとると、作戦を考え始める。

悩んで、悩んで、悩み続けた結果、一つの少し危険な作戦が思いつく。

「これは……出来ればやりたくないですけど……」

いくら攻撃をしても、全て防いでくる悪魔を見て、作戦を決行する。

「アビスホール。」

鳴央は自分の目の前に一つと、悪魔の周りに大量の玉を作り出す。

「グギャギャギャギャー！」

悪魔が一つずつ食べ始めるので、鳴央は全て食べられる前に次のやることを開始する。

『奈落の門（アビス・ゲート）』。

鳴央は、目の前にある暗黒の球体に右手を突っ込む。

突っ込んだ右手は指先から粒子になっていくので、相当苦しい。鳴央も玉のような汗を流している。

それでも手を抜かず、再生するようなイメージを持って入れ続ける。

すると……まだ食べられていない球体の一つから鳴央の手が伸び、悪魔の額に触れる。

「やっと……届きました。『真夏の夜の夢（ミッドサマー・ナイトドリーム）』。」

鳴央は手から直接『夢を見せる』力を送り込み、悪魔を眠らせる。

そのまま、手を抜きながら回りに残っている球体で悪魔を飲み込み、残りの敵へ目を向ける。

悪魔を攻撃している間、一切攻撃してこなかったのは、鳴央がうまく邪魔になるように設置した球体のせいだ、ようやくそれを抜けてきた。

「Gyaaaaaa aaaaaaa aaaaaaa!!」

散々邪魔されたストレスからか、一直線に鳴央のほうに向かってくるが、それでは何の意味もない。

「アビスホール。」

鳴央が目の前に奈落の穴を作るだけで、勝手に入っていき、消えた。恐竜・・・たいした活躍してねえな。

「さて・・・これで全部ですし、音央ちゃんのほうに向かいましょうか。」
鳴央は音央の向かったほうに向けて走り出すが、途中で空に投げられた剣と、それに向かっていく大量のお札を見る。

「あれは・・・一体何を・・・」

少しの不安を胸に、鳴央は音央のいるほうに走っていく。

|||||

また場所が変わって音央のところ。

音央は空にあるものに驚愕していた。

「あれって一体・・・」

「音央ちゃん！」

音央が唾然としていると、鳴央が音央のほうに走ってくる。

「鳴央！そっちは終わったの？」

「はい。音央ちゃんは？」

「こつちも今片付いたところ。それよりあれって・・・」

「お札が飛んでいるということは、一輝さんでしょうね。何をしているのでしょうか？」

「それは解らないけど・・・行ってみるしかないわ。」

「ですね。行きましょう！」

「ええ！」

二人は、一輝がいるであろう方向に走っていった。

破滅の抜け道 ④

「あぶねー！」

心臓に向けて放たれた手刀を、一輝は体をそらせてよける。ギリギリでよけることは出来たが、服の手刀がかすった部分が、刀で斬ったように、綺麗に切れる。

「この服も気に入ってたんだけど・・・それどころじゃないか。」

一輝は攻撃をよけながら、目の前の状況の分析を始める。

《剣がいきなり人にならわって、そいつの手刀で服が切れて、ついでに俺が作ってるいろんな剣も効かない。目が紫の少女で、全裸。ムネの大きさはBぐらいで・・・》

一通り今の状況を書き並べた結果、結論は

《何も解らん！》

である。だからか、一輝は直接聞くことにしたようだ。相変わらず呑気に。

「こんにちは。オマエは何者？何で全裸？剣の性質を持った人である？..」

一輝はどうせ何も答えてくれないだろうと、かなり適当に、聞いたいことを聞くが、

「私は人ではない。呪われた魔剣、『ダンスレイブ』。服を着ていないのは、剣の姿の際に、服など纏っているはずがないからだ。」

「・・・え？」

しつかりと、全ての問いに対する答えが返ってきて、一輝の思考が固まる。

「え？あれ？ヤシロちゃん、君さっき自我はもってるかどうか曖昧って言ってなかった？」

「うん、言ったね。」

「じゃあ、何であるの子はこっちの質問にハッキリと答えたり、今もこっちが話してるのを狙ってこないの？」

「私、中には強い自我を持つてる子もいるって言わなかったっけ？」

「・・・言ってみましたね。それがあの子？」

「うん。スレイブちゃん。」

一輝は再び少女、ダインスレイブのほうを見る。

「じゃあスレイブ、君は自我がありながら、自ら破滅に向かう気か？」
「その通りだ。私はこの世にあるべきではない呪いによって生まれた。毒だ。」

二人は戦闘を再開していた。

スレイブが切りかかり、一輝がそれを何種類もの剣で防ぐ、一方的な戦いが。

「その毒は、一体誰に迷惑をかけるんだ？」

「誰に、だど？愚問。我が呪いを知らぬからそんなことが言える！」

「じゃあ教えてくれよ。そうしないと、お前を救えない。」

一輝が何のためらいもなく言った一言に、スレイブはキレる。

「私を、救う？何をふざけたことを言っている！今まで、敵を全て切り倒していたものが！」

「確かに、自我の弱いやつは切り倒したな。破滅することに、何の感情も持たないやつは。」

「ならば！なぜ助けるなどのたまう！」

「オマエは、間違いなく自我を持つてる。それも、かなり強い自我を。だからだよ。」

「そのどこが理由なのだ！」

「そんなやつが、自ら破滅に向かうのを、俺は見たくない。もう二度と、そんな光景は、な。それに、呪いなら俺の専門分野だ。」

一輝の中で、スレイブは少しだが父親とかぶって見えていた。

何かしらの責任感から、死へと向かう姿が。

「何度も言っているだろう！私は、この世から消えるべき存在なのだと！」

スレイブが手刀を振り上げるが、一輝はその手をつかみ、顔を近づける。

「そんなこと言うな。」

「っ！」

一輝は今までにないレベルの真剣な声で言う。

「オマエはちゃんと自我を持つてる。強い責任感を持つてる。そんなやつがこの世からいなくなっただろうがいい訳がない。」

「それは、お前の考えだろう!」

「そうだ。ただの俺の、超個人的な考えだ。だからこそ、俺の目の前でそんなことを言ったら、全力で止める。」

一輝はスレイブの目を見ながら、説得を続ける。

もちろん、万人は救われるべき、だなんて思っていない。

それでも、自分が救いたいと思ったら全力で動く。

それが、寺西一輝という人間なのだ。

「だが!私の持つ呪いは、この世にあっていいものではない!そして、この呪いはそう簡単には消えん!私ごと消えるのが、一番の方法なのだ!」

「呪いが消えれば、それでいいのか? そうなればオマエは、生きていくのか?」

「そんなこと、あるわけが・・・」

「俺には出来る。だから、オマエの呪いを・・・」

教えてくれ、と続けようとする一輝の声をさえぎり、スレイブが感情を乗せきった声で叫ぶ。

「私の呪いは!」一度鞘から抜かれたら、必ず誰かを殺す! 確かに、この呪いが消えるのならば、それはとても素晴らしいことだ! だが、私はお前を、こんな醜悪な呪いを消せるとは、信じられない!」

一輝は、やつと本心を語ってくれたことに少しうれしく思い、説得を続ける。

「そこは、信じてくれとしか言えないな。」

「それが出来たら・・・こんなに苦労はしていない・・・!」

スレイブは涙を流しながら、感情を吐露していく。

心を覆う鞘もなくなっただけでスレイブの手を離し、両肩をつかむと、自分に出来る最大の提案をする。

「だったら、俺はオマエを上投げる。刃が下になって、俺を貫くように。」

「っ!」

「だから、オマエが俺のしたこと満足できなかったら、俺を貫け。そうすれば、俺を殺して、呪いによる犠牲も出来て、普通に生活できる。」
「だが、私の呪いは……」

「消えないな。それでも、もう一度鞘をかぶせる、ってことをしない限り、呪いは達成されたままだ。何も問題はない。」

スレイブの表情は、驚愕に固まっていた。

目の前にいる男の善人っぷりに。

自分の命を差し出してまで、人を助けようとすることに。

だから、まだ疑っていた。

「そんなことをして……お前に何の得がある?」

「得かぁ……一つ目は自己満足かな。」

この理由そのものには、納得できた。

だが、命を懸けるレベルではない。

「二つ目は?」

「そうだなぁ……なら、これでいいか。」

あごに手を当て、悩んでいた一輝だが、何か思いついたようにスレイブのほうを向く。

「もし呪いが解けて、俺を認められたら、俺の剣になってくれ。うん、獅子王を抜くと無形物が使えなくなるし、普段から使う剣も必要だし、それでいいこう。」

「私をもらうと?」

「何か別の意味に聞こえるが……そうなるな。それが俺の得って事で。」

スレイブは、疑いが消えた。

二つ目の理由は、本当にその場で考えたものだ。

でなければ、一輝は相当の演技力の持ち主ということになるくらい、二つ目は適当に言っていた。

「……いいだろう。お前を信じよう。」

「おう、任せろ。」

スレイブの体が一瞬で剣に変わり、一輝の手に収まる。

「本当にやるんだ?」

「ああ、やるよ。この命に代えても。」

「ふうん・・・じゃあ、私の破滅の物語をどう変えるのか、見せてもらうね?」

「どうぞどうぞ。」

一輝は、ヤシロとこんな会話をしているが、内心はそれどころではなかった。

一度深呼吸をすることで落ち着き、ポケットからギフトカードを取り出す。

「・・・魔剣の解呪、開始!」

一輝はダインスレイブを空高く、刃が自分のほうを向くように投げる。

そしてギフトカードを掲げると、刀が最高点に達したところで、「禍払いの札よ!我が願いは魔剣の解呪。汝らは我が望みに従い、剣に宿りし呪いを、全て喰らいつくさん!!」

今まで作つてためておいた、大量のお札を放ち、スレイブの呪いを取り除いていく。

さすがに、長い時をかけ、道具を人としてしまうほどの呪いは軽いものではなく、お札が触れた瞬間に朽ちていく。

ギフトカードの中には、億のお札が有つたが、それもものすごい勢いで減っていく。

「我が命に従い、我が願いをかなえん!」

一輝は、言霊をかけなおす事によってその働きを高め、少しでもその呪いを消そうとする。

そして、ころあいを見て一輝はお札の発射をやめ、その場に立つ。剣は空から勢いをつけて一輝に一直線に近づき、そして・・・

寸前で人の姿になり、一輝に抱きついた。

「この反応ってことは?」

「ああ。確かに私の中に有つた呪いは、全て消えた。呪いが消えるというのは、こんなにも、気持ちのいいものだったんだな・・・」

「それはよかった。解呪、おめでとう。」

「ありがとう。今日から新しい自分となる。よろしく、マスター。」

「おう。よろしく、スレイブ。」

一輝は、新しい仲間であり、心強い剣、*“ダインスレイブ”*を手に入れた。

「一輝ー!」

「一輝さーん!」

二人が落ち着き、一輝が自分の昔の服の中からスレイブに合うサイズのものを取り出し、着せたところで音央と鳴央もやってきた。

「こつちだ、音央、鳴央!」

一輝は二人を呼ぶ。

「そちらは無事に終わりましたか?」

「ああ、たった今終わったよ。そつちは?」

「疲れはしたけど、私も鳴央も無傷よ。」

「それはよかった。」

三人は、お互いの無事を確認し、現状の確認を始める。

結果、一秒とたたず(最初から気づいていたのかもしれない)、一人増えていることに気づいた。

「えっと、一輝?」

「その子は敵ですか?味方ですか?」

今あったことを、二人は正確には知らないので、一輝に尋ねる。

「大丈夫、味方だ。名前はとりあえず、スレイブ。今引き抜いた。」

「では、あのお札はそのため?」

「そうだ。結構消費した。」

「そう、私は六実音央。よろしくね、スレイブちゃん。」

「私は六実鳴央です。よろしくお願ひします、スレイブちゃん。」

「ああ、よろしく、えっと・・・」

「私は音央でいいわ。」

「私も鳴央で構いません。」

「では、よろしく、音央、鳴央。」

一輝は、先ほどまでとは違い、やわらかく対応しているスレイブを

見て、普通にも出来るんだ、と安心する。

「ところでマスター、とりあえず、とは？」

「ただの気分だよ。このまま慣れたらスレイブで行くけど、道具扱いしてるみたいでなんか引つかかるんだよ。」

「そうですか？私あまり気にしませんが。」

「まあ、そのあたりはまた今度な。」

一輝は視線をヤシロへと向ける。

「で？まだ誰がいる？」

「もういないよ。それにしても・・・まさか全滅されるだけじゃなく、一人引き入れちゃうとは、お兄さんはすけこましさんなのかな？」

「それはないと思う。ただ、偶然うまくいっただけだよ。」

一輝の答えに、ヤシロは少し笑うと、一輝たちのほうを向きなおす。「じゃあ、そろそろ私が行くけど、死なないようにだけ気をつけてね。」

ついに、魔王『ノストラダムスの大予言』の攻撃が、始まる。

「我が百鬼より出でよ、火取魔！」

超簡単だな、オイ。伝説との扱いが違いすぎるだろ。

《まあ、所詮は民間伝承レベルだし。》

だからってオマ・・・って、こっちに入ってくるな！

《では気を取り直して続きへ。》

クソツ・・・

コホン。一輝の中から黒い霧が少量出てきて固まり、一塊の暗闇が出来る。

霊格はかなりしょぼい。ガルド以下である。

「そんなやつで大丈夫なの？」

「失礼ながら、たいした霊格を感じられません。」

「それに、小さいですし・・・」

こんな会話をしているうちにも、周りは燃えているのだが・・・自覚はあるのだろうか？

「まあ見てなって・・・喰らえ、火取魔。」

一輝の命令に従って、ただでさえ小さな暗闇が分裂し、全ての炎へと向かい、たどり着くと・・・

同時に、全ての光が消えた。

「へえ・・・まさかなあんな子がここまで出来るとは、思ってたよ。」

「確かに、あいつは実体もないし弱いけど、それでも長所の一つぐらいはあるからな。」

一輝とヤシロの二人は状況を理解していたが、残りの三人は理解できず、すぐそばにいた人も見えず、困っていた。

そして、その場に光が戻ると・・・

三人の目には、さっきまであった炎の固まりが消え、代わりに少し大きくなった暗闇と、社交ダンスを踊っている二人が映った。

「って、何をしているのですかー！」

「社交ダンスだけど？」

「何で今やってるのよー！」

「いい感じに暗くなってたし。」

「それ以前に、私たちとヤシロは敵同士！何を馴れ合っているのですか！」

三人は当たり前前のことを突っ込むが、この二人に、その当たり前が備わっていないかった。

「じゃあ、明るくなったしバトルパートに戻ろうか。」

「そうだね。私からの試練は、まだ二つ残ってるし。」

なんとも呑気に、ヤシロにいたっては自らの手数をあつさりバラして、二人は元の位置に戻る。

その間に、完全に周りから忘れられた火取魔は一輝の中に戻っていた。

ドンマイ、火取魔。

「さて、じゃあ次のにいくよ。」

「おう。まあ、何とかなるだろ。」

「呑気すぎます、マスター。相手は魔王ですよ？」

「それに、さつき以上のが来るでしょうし。」

「間違いなく、警戒すべきです。」

呑気な一輝とそれを止める三人。

これでもまだ止まらないのだから、もう少しストップパーが必要かもしれない。

そんなやり取りをしている間に、ヤシロは唱え始める。

「

Le^五 tremblement^{の月} si^大 fort^い au^な mois^る de^地 Mai^震

Sat^土urne^星, Cap^魔er, Jup^宮iter^水, Mer^木cure^星 au^は bo^金e^牛

Ven^金us^星 aus^もsi^巨 Canc^蟹er^宮, Mar^火s, en^星 Non^はnay^処,
Non^女nay^宮,

Tom^やbera^が gre^てssile^卵 lors^よ plus^り gros^もse^大 plus^き gros^なse^電 plus^が

詩を終えると、まず激しい地震が一輝たちを襲うが、これには全員が耐える。

問題なのは、いつの間にか空に広がった宇宙空間から飛来してくる、大量の雹だ。

「雹か・・・なら、燃やしてもらうのが一番かな？」

一輝は方針を決め、言霊を唱える。

「かつて国の王をたぶらかし、破滅へと追いやった狐よ。」

今度は、伝説を召喚する。

「自らは何もせず、それでも破滅へと導く、怠惰なる狐よ。」

そのものを一番あらわすと思う言霊を唱え、そして

「今わが百鬼として、その力を振るわん。」

そのものを、召喚する。

「今ここに顕現せよ、九尾！」

一輝の体から光り輝く霧が広がり、目の前で固まっていく。

その霧が全て消えると、そこには金髪の女性がいた。

「こんにちは、九尾。」

「ええ、こんにちは。いくつか質問よろしいかしら？」

「色々危険だから、急いでもらえる？」

一輝は空を見ながら提案する。

「そうでしたね。でしたら、まずあれを何とかしましょうか。」

そういうと、女性の姿が九つの尾を持つ狐へと変わり、周りに青い火を出現させると、それを広げる。

「結構広い範囲に使えるんだね？」

「みたいだな。いや〜便利そうだ。」

一輝とヤシロの二人はそんな会話をし、雹から逃げていた残りの三人は、

「すっごい火力ね・・・」

「さすがは伝説、ということなのでしょうか・・・」

「あれを、人のみで倒したというのか・・・」

ただ、圧倒されていた。

ちなみに、スレイブは音央鳴央から一輝のことについて簡単に説明されている。

一輝対ヤシロ、という雰囲気なのでやることなく、おしやべりをしていたのだ。

そのまま、青い火、狐火は雹をすべて溶かし、やがて消えた。

「ありがとう、九尾。で、質問って？」

「まず一つ目に、あの私の言霊ですが、あなたが考えたものですか？」

「そうだけど？」

一輝が肯定すると、人の姿になった狐は、あの怠惰、などの言葉を使った言霊を……

「私のことをしつかりとあらわした言霊、気に入りました。認めないつもりでしたが、あなたを認めて差し上げます。」

大絶賛した。相当気に入ってるな、これは。

「それはありがとう。是害坊がプライドの高い人たちは俺を認めてないっていつてたから心配だったんだ。」

「ええ。私は苗字を変えもしないあなたを、認めるつもりなどこれっぽちもありませんでした。しかし、気が変わった。それだけのことです。」

一輝はこうして、伝説に認められた。

残り、認めていなさそうなやつは、一体である。

「で、二つ目の質問ですが、なぜ苗字を変えないのです？あなたには権利があるのに。」

「前にもぬらりひよんに言ったけど、もう一人、妹に相談しないと決められない。それだけのことだよ。」

「意識を変える気は？」

「ない。」

一輝がはつきりと言い放つと、狐が折れた。

「そうですか。では仕方がありません。諦めるとしましょう。」

狐はそういい残して、一輝の中へと戻っていった。

「ふう。あとはあいつか……一番面倒なのが残ったな……」

一輝は自分の檻の中について考えると、それどころではないとその考えを脇に追いやる。

「にしても、この二つをよく乗り越えたね？」

「妖怪つてのは結構たくさん事態に対処できるからな。まだくる？」

「うくん、それもいいんだけど…取って置きのも二つが効かなかったってことは、他はどれも無駄だろうし、別の手段でいこうかな。」

二人が話している間に、音央たちもくる。

「それで最後ってことかしら？」

「うん、これで最後。でも、お姉さん達はたぶん生き残れないよ。」

「それほどまでに強い破滅なのですか？」

「そう、とつても解りやすい、私自身の終末へと、案内することになるから。」

ヤシロが素晴らしい終わると、ギフトカードを掲げる。

ギフトカードが光ったと思うと、その姿が消え、目の前にとつても解りやすい、終末の光景が広がった。

破滅の抜け道 ⑥

そこにあるのは吹き荒れる暴風雨、炎を纏った大量の隕石、全てを破壊しつくさんとする稲妻、その全てが、世界を滅ぼさんとしている。そんな場所にいれば、巻き込まれて死ぬのは確実なので、

「式神展開『防』結界陣！」

一輝は自分達を覆うように結界を張らせ、危機を逃れる。

「三人とも、無事？」

「はい、三人とも無事です。二人は気絶していますが・・・」

スレイブは音央と鳴央を支えている。破滅の気配にあてられ、気絶してしまっただろう。

ちなみに、スレイブは今の今まで破滅サイドだったので耐性があり、一輝は中にいるものが強すぎたため、影響を受けていない。

「まあ、疲れてるんだろ。後は休んでてもらおう。」

一輝はギフトカードをかざし、二人を中に入れる。

「で、これからどうするのですか、マスター？」

「俺は、ヤシロちゃんを探して、救い出してくるつもりだ。」

「この破滅の中を、ですか？」

「ああ。俺のギフトなら、問題なく探せる。ここにあるのは、たいてい形がないからな。」

「なら、私はいても邪魔なだけでしょうね。」

「悪いけど、そうなるな。少しでも身軽なほうがいいし。」

一輝は本当にすまなさそうな顔で、スレイブを見る。

「構いませんよ。私は、マスターを信じて待つだけです。」

「ありがとう。必ず、このゲームをクリアするよ。」

「御武運を。」

スレイブは自分からギフトカードの中に入る。

「さて、いつも通り、行きますか。」

一輝は式神をしまい、水に乗って飛ぶ。

目の前にある竜巻を空気の膜をまどって突破し、降ってくる隕石は水で切り裂く。

くれぐれも、二つ目の勝利条件をクリアしてしまわないように、慎重にだ。

途中にいた化物たちは、ヤシロの言うとおりでそこまで強くはなく、見向きもせずに切り伏せていく。

「さて・・・ヤシロちゃんはどこだ？」

一輝は視界が悪い中、必死に探し、途中で視覚をいじればいいことを思い出す。

「あせるな・・・冷静になれ、俺。」

そして、視覚をいじると、一瞬でヤシロを見つける。

そこまでの苦労(?)は何だったのだろうか。

「ここだけは、静かなんだ。」

「うん。ここは、台風の目みたいなものだからね。」

「なら、ゆつくりお話が出来るな。」

一輝はヤシロの横に座り、全身の力を抜く。

「戦える、じゃないんだ？」

「ああ。勝利条件に『ゲームマスターの打倒』は入ってないからね。むしろ、その逆だし。」

そう、今回のゲームの勝利条件は『少女を破滅から救い出す』こと。

ヤシロ本人と戦っては、意味がないのだ。

「で？ヤシロちゃんとしては、何から救って欲しいんだ？」

「それを言ったら意味がないよ。お兄さんが自分で考えないと。」

「なら、勝手に思いついたことを言ってくよ。」

一輝はヤシロの前に回り、目の高さを合わせると、

「ヤシロちゃんは自分にある破滅から救ってほしい。だからこのゲームなんだ。」

そう、自分の考えを語る。

「自我の強いヤシロちゃんやスレイブはその感情があるはずなんだ。だから俺は、スレイブを助けたし、君も助けようとしてる。半分は、勝手な自己満足だけだな。」

一輝は微笑みながら、ヤシロに告げる。

「そっか。これがお兄さんの力なんだ。」

「力？」

「うん、力。ちゃんと自分が救いたい人の心を理解する。それは、立派な力だよ。」

「今までにうまくいったのは、箱庭に来てからの四回だけだと思うけど。」

一輝のカウントは、鳴央、音央、スレイブ、そして、今成功したヤシロの四回だ。

「きつと、もといいた世界でも気づかないうちにやってたんだと思うよ。」

「そうだったら、うれしいな。」

ヤシロは一輝のほうを見て、話を続ける。

「で？お兄さんはどうやって私を救ってくれるの？私は破滅という概念の具現化。この世界でもわかるように、様々な手段で破滅するよ？」

「そんなもん、決まってるだろ。」

そういうと一輝は立ち上がり、手を広げると、

「こんな破滅は、全部俺が操ってみせる。」

一輝の言葉とともに、嵐は止まり、津波は全て消え、雷と炎に包まれた隕石ははるか上空に上がり、お互いにぶつかって消滅する。

形無いものによって作られる破滅は、一輝にとってなんでもない。

自らの意思によって消せるものだ。

「お兄さんのギフトって、ここまで出来るものだったの？」

「ああ。この手の破滅なら朝飯前だし、形があるなら、破滅という概念を操ってやる。俺になら、オマエを破滅から救い出せる。」

一輝はヤシロに手を差し出し、

「だから、俺と一緒に来い。魔王という道から、破滅という未来から、完膚なきまでに救い出してやる。」

「うんーこれからずっと、お兄さんについていくー！」

ヤシロがそう宣言し、一輝の手をつかんで立ち上がると、
「契約書類」から勝利宣言がなされ、元の森に戻る。

「終わりましたね。お疲れ様でした、マスター。」

と、同時に、スレイブがギフトカードの中から音央、鳴央とともに出てくる。

「おう。全部終わった。だからたぶん・・・」

一輝はポケットの中を探り、一枚の羊皮紙、白夜叉からの依頼書を取り出す。

それが光ると、羊皮紙が消え、代わりに二つのDフォンが現れる。

「はい、これが俺との隷属の証。スレイブは少し違うけど、まあいいだろ。」

「ありがとう、お兄さん。私の霊格がどんどん落ちてく感じがするよ！」

「ありがとうございます、マスター。私のほうは何も感じませんが・・・」

「まあ、魔王の霊格を保ったままってのはありえんから、耐えるしかないな。」

スレイブがなんともないのは、剣と主との契約だから、かな？」

二人の登録がDフォンにされると、次は虚空から二着のメイド服が現れる。

「マスター、これは一体・・・」

「メイド服。隷属する人は着ることになってるっばい。」

「いや、ですがこれは・・・ヤシロも私と同じ」

「この服可愛いね、お兄さん！サイズもぴったり！」

「既に着ている!?!」

このメイド服は特別仕様で、今着ている服に合わせると勝手ピツタリになるように変わり今着ている服と入れ替わる、というもの。

ゆえに、この場で服を脱いだわけではない。

「さて、後はオマエただぞ。そこの二人も着てるし。」

「ううう・・・解りました。」

スレイブはそのまじめな性格ゆえ主に逆らうことは出来ず、自分の服に合わせる。

すると一瞬でメイド服に変わる、が・・・

「これは・・・予想以上に動きやすい。これならいいかもしれません、マスター。」

「うん、そうか。オマエがいいならいいんだけど・・・」

「？まさか、似合ってますか？」

スレイブがちよつと悲しそうな顔で聞いてきて、一輝はあせる。

「いや、それはないぞ。すつごく似合ってる。なあ？」

「うん。スレイブちゃん、かなり似合ってるよ。」

「では、何が問題なのですか？」

「それは・・・」

「ええっと・・・」

一輝の目はスレイブの頭の上に、ヤシロの目はスレイブの後ろに向けられる。

その視線から理解したのか、頭と背中に手を伸ばすが・・・

「なぜ私のものだけこれが!？」

そこにあつたのは猫耳と猫の尻尾。

思いつきり猫メイドだったのだ。

「まあ、そういうことだ。似合ってるからいいとは思うが。」

「いいわけがないでしょう、こんな恥ずかしい格好!」

スレイブは素晴らしいながらメイド服を脱ごうとするが、あわてているためかうまく脱げず、全裸になることを忘れ、剣の姿になるが、

「おっ。鞄が付いてる。」

メイド服は脱げず、剣に鞄が付いた。

「なるほど。一番ぴったりの格好になるから、剣の時には鞄が付くんだ。」

「そして、メイドの間は猫耳と尻尾。スレイブ、一個命令な。」

「はあ・・・何でしょう?」

スレイブは脱げなかつたことに落ち込んでいるが、一輝が追い討ちをかける。

「それ、着用を義務付けます。」

「・・・ハイ。」

スレイブは、全てを諦めたような声で、そういうのだった。

種

「さて、ついでだしこのままアンダーウッドに行こうか。」

森を歩き、外門に向かっていた一輝は二人にそう提案する。

「白夜叉には報告に向かわなくていいのですか？」

「大丈夫だろ。そんなことよりも収穫祭に参加したい。」

「楽しそうだもんね、収穫祭！」

スレイブは少しばかり抵抗があり、ヤシロは肯定的。

この様子なら多数決で決定だろう。

ちなみに、残りの二人はいまだに気絶しており、音央は一輝が背負い、鳴央は一輝の腕の中だ。

一人で二人を運ぶのはつらいはずだが、一輝は何の問題もなく進む。

「それに、白夜叉からも急がなくていいって言われてるし。」

「・・・解りました。では、そちらに向かいましょう。」

「レッツゴー！」

そうして、一輝たちは心躍らせ、アンダーウッドに向かった。

が・・・

「・・・なあ二人とも、ブチギレてもいいか？」

そこは、巨人族であふれかえっていた。

「失礼ながら、マスターが本気で暴れるとやり直す、ということも出来なくなるかと。」

「そうだね。本人が戦うにしろ、伝説を召喚するにしろ、そうなるのは目に見えてるよ。」

今にも暴れだしそうな一輝を、二人のメイドが冷静に抑える。

「それにほら、あの黒い霧が巨人達を倒していつてるし、すぐに収まるよ。」

ヤシロのいうとおり、黒い霧が広がり次々と巨人族を倒している。

それを見た一輝は・・・

「あれ、何かで見たな。えっと・・・ペストか。」

一輝はかつて魔王であったものの名前を思い出す。

そして、すぐ横にいる元魔王を見て、

「ついでだし、お前のお披露目もやっちゃうか。」

「？」

「雷の嵐で全部つぶしちゃおう。」

一輝の提案に、ヤシロは楽しそうな顔になる。

「待てヤシロ！あなたがそれをやっても危険なのに変わりはない！」

「大丈夫！あの群れがいる範囲に限定するし、巨人だけを貫くよう設定するから！」

「いや、それでも」

「やっちまえ、ヤシロ！」

「マスターもおおらないでください！」

スレイブが必死に止めるも、止まる気配はない。

そして、ヤシロは詩を唱え始める。

「
L e t r e m b l e m e n t s i f o r t a u m o i s d e d e M a i

S a t u r n e , C a p e r , J u p i t e r , M e r c u r e a u b o e u

V e n u s a u s s i C a n c e r , M a r s , e n N o n n a y ,

T o m b e r a g r e s l e l o r s p l u s g r o s s e p u

唱え終わると、一輝とのバトルのときに比べれば低い威力の、それでも強い攻撃が巨人族を襲う。

結果として、ペストによって死ぬか弱り、そこに雷がとどめをさす。

オーバーキルだな、これ。

「さて、ジンのところに向かおうか。」

一輝はその光景に満足したのか笑顔になり、二人に提案する。

その笑顔は、どこか怖いものがあった。



ヘッドホンの召喚に立会い、眺めていた一輝は耀が登場するなり、「スレイブとキャラがかぶった?」

そう漏らした。

一輝の見る先では、耀がヘッドホンを、猫耳ヘッドホンをつけていた。

「うくん……スレイブちゃんは猫耳メイドでワンセットだから大丈夫じゃない?」

「それもそうか。よかつたなスレイブ。」

「別に、かぶっても構わないのですが……」

一輝は、音央と鳴央を医務室に預けた後、今回加わった二人を紹介するために来たのだが、それどころじゃなかったのでこうしてたわいもない会話をする事になった。

そして、フェイス・レスが耀のギフト、生命の目録をみていくつか会話をし、全部終わったところで一輝たちはジンのほうへ向かう。

「再召喚、お疲れ様。全部終わったからこっちに合流させてもらった。」

一輝は、ギフトを使ってほぼ瞬間移動でジンの背後に現れ、皆を驚かせる。

「か、一輝さん?!いつこちらに?」

「ペストが暴れてたとき。」

「へえ、魔王に勝手に挑んでたことに対して、いくつか聞いておきたいのだけど。」

「後回しでお願いします。」

「なら、質問をかえましょう。もしかして、あの雹は一輝君が?」

「その辺も含めて、二人紹介しとく。」

というと、一輝は後ろにいた二人を、前に押し出す。

「今回、俺が参加した魔王のゲームの結果、新しく同士になる二人だ。」

「元魔王のヤシロです!これからよろしく!」

「剣としてマスターに仕えることになったスレイブだ。これからよろしく。」

ぜんぜん違うテンションの二人の自己紹介の後、一輝からいくつかの説明を入れる。

「まず、ヤシロちゃんは『ノストラダムスの大予言』で、あの雹をやつたのもそのギフト。」

スレイブは魔剣ダインスレイブ。といっても、その呪いはもう解いたから、今は超強い剣。

とまあ、こんな感じだな。質問があるなら、二人はここに置いてくから。」

といって、一輝はその場を去り、面白そうな気配のするほうへと向かう。

|||||

一輝は、自らのギフトで邪魔なものをどかし、目的地・・・展示保管庫だった場所にたどり着く。

そして、そこにある燃えカスの中から面白そうな気配の正体、まだ生きている種を発見する。

「これか・・・ためしに育ててみるとしよう。」

一輝はその種を、倉庫のうちの一つ、畑になっているところの一角に植え、成長を待つことにした。

その日の夜、アンダーウッド中に黒い契約書類が降り注ぎ、一輝にとっては三戦目、魔王とのゲームの連戦が始まった。

十三番目の太陽を撃て

SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMPIRE KING ①

『ギフトゲーム名』SUN SYNCHRONOUS ORBIT
in VAMPIRE KING

・プレイヤー一覧

・ 獣の帯に巻かれた全ての生命体。

※但し獣の帯が消失した場合、無期限でゲームを一時中断とする。

・プレイヤー側敗北条件

・ なし（死亡も敗北と認めず）

・プレイヤー側禁止事項

・ なし

・プレイヤー側ペナルティ条項

・ ゲームマスターと交戦した全てのプレイヤーは時間制限を設ける。

・ 時間制限は十日毎にリセットされ繰り返される。

・ ペナルティは「串刺し刑」「磔刑」「焚刑」からランダムに選出。

・ 解除方法はゲームクリア及び中断された際にのみ適用。

※プレイヤーの死亡は解除条件に含まず、永続的にペナルティが課される。

・ ホストマスター側 勝利条件

・ なし

・ プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスター・「魔王ドラキュラ」の殺害。

二、ゲームマスター・「レイシアードラクレア」の殺害。

三、砕かれた星空を集め、獣の帯を玉座に捧げよ。

四、玉座に正された獣の帯を導に、鎖に？がれた革命指導者の心臓を撃て。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

“印”

一輝は降ってきた契約書類を読むと、すぐさまDフォンを取り出し、四人を召喚する。

「大して休めてないところ悪いが、魔王だ。それも、俺としては最悪の展開の。」

一輝は四人にそう言い、空をにらむ。

そこには、巨大な龍がいた。

一輝はそれを睨みながら、話を続ける。

「ゲームマスターはレティシア。空にはでつかい龍。しかも、鱗から危険そうなのを大量に作り出してる。」

「待って！今、レティシアって言った？」

「ああ。契約書類にはそう書かれてる。」

「それは、あのレティシアさんですか？」

「おそらく、そうだろうな。」

「でも、なんで・・・」

音央と鳴央は理解が出来ず、悩み始めるが、事態はそれどころじゃない。

「その辺は、後で黒ウサギにでも聞いたほうが早い。今はあの出てきた化物だ。」

「だね。私が言うのも、って感じだけど、魔王は天災。いつくるかなんて予想が付くものじゃないから。」

「今は、冷静に対処すべきでしょう。」

三人の言葉に音央と鳴央もいったん落ち着く。

「じゃあ、俺とスレイブはあの巨人軍に。皆は、出来るだけ分散して一人でも多くの人を助ける。無茶はしないように。何かあったら俺に

連絡。いいな！」

「「はい！」」

返事と同時に三人は走り、スレイブは剣になって一輝の手に収まる。

「いきなり実戦で悪いが、いくぞ！」

「はい、マスター！」

一輝はスレイブを腰にぶら下げ、巨人軍のほうに飛ぶ。

そして、巨人のところへ向かっていると、途中で十六夜を発見する。

「十六夜！お前も巨人軍のところへ？」

「ああ！土気が落ちてるっぽいから、ちょっと活を入れようかとな！」

「乗ってけよ！もうちよいならスピードも出るぞ！」

「ハッ、いらねえよ！」

十六夜は、走るスピードを上げる。

「ヤバイ、見せ場全部とられる！」

「それはどうでもいいとして、私たちも急ぎましょう！」

一輝はスピードを上げ、どうにか十六夜と同じタイミングで到着すると、十六夜が投げ飛ばすタイミングにあわせて巨人のうちの一体を切り刻む。

「スレイブ、お前予想以上に使いやすいな！」

「お褒めの言葉、ありがとうございます。」

一輝は、その切り刻む感覚から無意識のうちにスレイブをほめていた。

そして、十六夜と話し出す。

「・・・へえ？ケルト神話の巨人族と聞いてたから、てつきり神軍をさすものだと思ってたんだが。」

「いや、それはないでしょ。こんなの、ただ巨大化しただけの人類だよ。」

「だな。それにしても、俺達みたいながき相手にこのぎまじや、ご先祖様が泣いてるぜ？」

そんな話をしている間にも、二人は暴れ、足元に巨人族や武具のかげらなどで山が作られていく。

そうしてこの場を支配していた絶望をぶっ壊した二人は、純粋な殺意を瞳に宿らせ、巨人族に言い放つ。

「一度だけ言う。今すぐうせろ、木偶の坊。こっちは本気で収穫祭を楽しみに来たんだ。唯でさえ空飛ぶトカゲも相手しなきゃならぬのに、余計な手間をかけさせるなよ。」

「だな。それに俺はまだ一日もたたない間に魔王との連戦だ。ストレスが絶えられそうにねえんだよ。」

二人とも、本気でキレていた。

そして、そんな状態でいった言葉は挑発と受け取られ、巨人軍は再びアンダーウッドを指して進撃を始める。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——！」

先陣を切って飛び掛る巨人を、十六夜は踏み台にして飛び、一輝はその横を走り抜ける。

一輝の視界の中で十六夜が鎖で捉えられるが、一輝はそれを無視して、横の巨人の足を切る。

そのまま走る勢いを緩めることなく、巨人を切り続けていく。

途中、一輝の体を捕らえ、動きが止まったところに十六夜にはなつたものと同じ轟雷を放つが、

「いい覚悟だ。でも、無駄だよ。」

一輝によつて操られ、敵に武器を与える形となる。

巨人達は十六夜のめちやくちやの後だったため驚きは少なめだが、一輝は気にせず、その轟雷で周りにいる巨人を倒す。

「……それほどの覚悟を持ちながら、なぜこんなことをする？」

一輝の問いかけは、巨人の雄叫びによつてなかつたことにされる。

「……どう解釈したらいいんだ？」

「おそらく、こちらにはこちらの事情がある。だが、ここは戦場だ。と行ったところでしょう。」

「そうか。なら、戦うか！」

十六夜が幻獣に対して何か言っているが、一輝は気にせずに切り倒していく。

そのまま三十は切り倒したあたりで、後ろから駆けてきた幻獣に

「了解。それならこっちで対処できる。」

一輝は一度電話を切り、ヤシロの画像を選択する。

「ありがとう、お兄さんっ!」

「どういたしまして。魔道書はこれが落ち着いてから探す?」

ヤシロは首を傾げるが、一輝が魔道書を落としたと思っていると気づき、ギフトカードを取り出す。

「それなんだけど・・・魔道書はここに有ったり・・・」

ヤシロが見せるギフトカードには、確かにノストラダムスの預言書、と記されている。

「落としたんじゃないやなかったのか。でも、それなら俺を呼んだ理由は? サンダーバードでも呼べばよかったじゃん。」

「それが・・・私の物語たちを呼び出せないんだよね・・・」

「え?それって・・・」

一輝に対してのヤシロの説明をまとめると、

一、・百詩編のような自らが唱えるものなどはいまだに使える。

二、・ただし、破滅の物語の召喚ができなくなっている。

の二点だ。

「なんで、そうなった?」

「私にも解らないけど、霊格が下がったのが原因かも。」

「マジか・・・」

「うん、マジ。」

一輝は思わぬ戦力の低下に、少し頭を抱えるのだった。

SUN SYNCHRONOUS ORBIT
in VAMPIRE KING 一時中断

一輝はとりあえず、全員と合流するために、治療所へと向かった。そして、向かった先で約二名いないと聞き、探してみたが、どこにもおらず、かなりあせる。

《前のゲームみたいに飛鳥がいない、なら解りやすいんだが、耀がいないってのは相当な事だ。十六夜たちのほうで見つかつてるといいんだが……》

一輝は最後に空から強化した視力でざっと探した後、再び治療所へと向かう。

そこにウサ耳をへによらせた黒ウサギと、一輝一派と耀、レティシアを除いたノーネームの主力メンバーを発見し、一輝は尋ねる。

「黒ウサギ、耀は見つかつたか？」

「あ、一輝さん。行方については判明しました。」

「どこだ？」

「それが……子供を助けようとしてあの城に乗り込んで行ったそうです。」

一輝はそれを聞くと、ペットボトルを手に持ち出口へと向かう。

「一輝さん？一体どちらに……」

「決まってる。耀を助けに行く。」

一輝がいつもより低い声でそれを言うと、黒ウサギと飛鳥があわてて止める。

「ちよ、一輝君?!あの城に一人で行くつもりなの!？」

「ああ。俺なら飛べるし、妖使いを使えば戦力もいける。最悪、伝説を大量召喚するさ。」

「待ってください！これからこの件について会合を設ける予定ですし、攫われた人の中には連盟の要人もいます。早ければ明日にでも救援隊を組むかと思われまますので、今は我慢してください！」

「そんな呑気にしてる場合じゃない！」

「落ち着けよ。」

一輝が声を荒げて言うのと、十六夜が一輝の前に立ち、冷静な声で押し返す。

「確かに、オマエの言うとおり呑気にしてる場合じゃない。だが、それでも作戦は必要だ。今は、落ち着くべきだ。」

「・・・悪い。取り乱した。」

一輝は十六夜の言葉に納得し、いったん落ち着く。

「黒ウサギに飛鳥も、ごめん。たぶん、これからもあんな感じになるから、そのときもよろしく。」

一輝は二人に頭を下げ、他のここにいない人たちについて問う。

「で、俺のメイドたちは？」

「ごこの手伝いをしています。どう見ても人手が足りていませんから。」

「そっか。じゃあ、あいつらには頑張ってもらおう。」

一輝はそのまま、攻略会議を待つことにした。

|||||

「えーそれでは此れより、ギフトゲーム“SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMPIRE KING”の攻略会議を行うのです！他コミュニティからは今後の方針を委任状という形で受け取っておりますので、委任されたサラ様とキャロク様は責任ある発言を心がけてくださいな。」

「分かった。」

「はいはいー！」

まったく正反対の返答をする二人。

一輝は、高いテンションで応答した猫族が記憶に引つかかる。

《なんだっけ・・・間違いなくどこかで会ってるんだけど・・・》

一輝が悩んでいると、十六夜が猫族、キャロクと話し出す。

「アンタもしかして、二一〇五三八〇外門で喫茶店をやってる猫のウエイトレスか？」

《そうだ！何か三毛猫とも仲がよかった・・・》

そこで一輝は完璧に思い出す。

なんでも、六本傷の頭首、ガロロ・ガンタツクの二十四番目の娘で、父親の命令の下東で喫茶店を開き、諜報活動を行っているそうだ。

いい噂もちゃんと流れている、とありがたい事を言っているが、問題児達がそれを気にするはずがない。

むしろ、そのタイミングで悪戯をしますが、この問題児達である。

「へえ、諜報活動か。そんなことをしてるなんて聞いたら、今後はあの店に入れなくなるよなあ、二人とも？」

「だな。美味しいからよくあそこを使って作戦を立てたりしてたけど、全部筒抜けだったってことだからな。怖くてつかえたもんじゃない。」

「そうよねえ。此処は一つ、二一〇五三八〇外門の『地域支配者』として地域に呼びかけでもしたらどうかしら？『六本傷』の旗本に、間諜の影あり！』みたいなチラシでも作って。」

「いいねえ、それ。簡単にだけど、こんな感じか？」

「お、いいじゃねえか。効果抜群だろうな。」

十六夜と一輝、飛鳥の三人は周りに聞こえるようなノリノリの声で話を進め、一輝は話をしながら、いつの間に準備したのか、パソコンとプロジェクター、スクリーンを出し、そこに広告の画像を映す。

一方のキャラは猫耳と鍵尻尾を跳ねさせて焦る。

「ちよ、ちよつと待ってくださいよ！そんなことをされたらうちの店がやっていけなくなりますよ！それになんですかそのチラシは！無茶苦茶完成度高いじゃないですか！」

それはそうだ。一輝が元いた世界で、実際に喫茶店をつぶすために使ったものを、少しいじつただけなのだから。

今回のケースとは違い、その喫茶店は法律に違反しまくっていたので、一輝は店の信用を一日で破壊し、店を一日で破壊し、大元のヤクザを一日でつぶしたのだが。

「あら、そんなこと知ったことじゃないわ。私たち『ノーネーム』には地域発展と治安改善の義務があるのだもの。表立って諜報活動を

している喫茶店なんて、放っておけるはずがないわ。」

「それを見逃して欲しいって言うなら・・・相応の態度つてもものがある
だろ?」

「ちなみに、キャロロの発言は全部録音されてるから、今更ごまかすの
は無理だぞ?」

すつごく生き生きとしている、問題児三人である。

そして、キャロロは半泣きだ。

「・・・これからは皆さんに限り!当店のメニューを格安サービス一
割引に

「二三割だ。」

「うにゃあああああーサ、サラ様あ〜!」

キャロロはサラに泣きつく。

だが、サラは割りとしびアに答える。

「「いえ〜い!」」

その脇で、大きな音を立ててハイタッチする三人のアクマ。

「何でこんな問題児様がたは〜・・・」

「止められないリーダーでごめん・・・」

それを見て、頭を抱える黒ウサギとジン。

そんなメンバーは、フェイス・レスが話を進めるよう促すまで、ずつ
とそんな感じだった。

|||||

その後の、まじめな会議の内容をまとめると、

①黄金の豎琴、バロールの死眼は敵に盗み出された。

②それぞれの階層支配者、〃サラマンドラ〃 〃鬼姫〃 連盟 〃サウザ
ンドアイズ〃 が同時に魔王の襲撃にあっている。

③仮称〃魔王連盟〃 とでも言うべき敵がいる。

④敵の目的はおそらく〃全階層支配者〃を決めること。

⑤これになれば、暫定四桁の地位と太陽の主権の一つが与えられ
る。

⑥黒ウサギは“箱庭の貴族（笑）”であり、“箱庭の貴族（恥）”である。

⑦かつて“全階層支配者”だったレティシアは修羅神仏に戦争を仕掛けた。

⑧とりあえず、今回は捜索隊を送ってから決める。

⑨十六夜は既に謎が解けており、この勘違いを利用する方針で行く。

⑩キャロロを再び脅して口封じ。

といったところだ。

余計なものは混ざっていない。

ちなみに、このときは不憫だと思ったのか、一輝はキャロロの頭をなでて慰め、一人だけ印象をよくしていたのだった。

SUN SYNCHRONOUS ORBIT
in VAMPIRE KING 特訓

「さて、特訓を始めようか。」

「はい、マスター。」

一輝とスレイブの二人は、空間倉庫のうち、何も入っていない倉庫に立っていた。

というのも、作戦を立てるのは十六夜に任せ、飛鳥を試すのにジンとペスト、グリフォンに頼みに行くのに黒ウサギと、一輝には何もやることがなかったのでスレイブに使い慣れるのに時間を使うことにしたのだ。

日本刀しか使ったことのない一輝は、どうにもその癖で動いてしまい、危険がある。

「じゃあ・・・全ての妖をすべしものよ。百鬼をひきいて、己の霊格をあげしものよ。今ここに顕現せよ、ぬらりひよん！」

一輝の言霊により、黒い霧が現れ、それが固まりぬらりひよんとなる。

本来なら輝く霧で現れるべきなのだが、ぬらりひよんはそれが嫌なようだ。

「急に老人を呼び出しおつて。何の用じゃ？」

「知ってるくせに聞くなよ。ちよつと修行相手をしてくれ。」

「やはりか・・・まあよい。獅子王を貸せ。」

一輝は倉庫から獅子王を取り出し、ぬらりひよんに渡す。

「ふむ。で？おぬしは何を学びたいのだ？」

「スレイブの使い方。両刃の剣の使い方は知らないからな。」

「日本の妖怪であるわしが知っておるわけがないじやろ。」

「だから、実戦の中で学ぼうかと。」

「無茶苦茶だのう。だが、それよりも学ぶべきことがあるであろう？」

「？それは・・・」

「その身で学べ！」

一輝がしゃべっている最中にもかかわらず、ぬらりひよんは切りかかる。

一輝はあわててスレイブの手をとり、剣の姿になってもらうとそれを防ぐ。

「甘い！」

「が……」

が、その隙に一輝の腹に蹴りを放ち、一輝は後ろに吹っ飛ぶ。

そして、一輝が止まる前にぬらりひよんが一輝に追いつき、獅子王の峰で一輝の腹を打ち、叩き落とす。

「一回死亡じゃ。」

そこでぬらりひよんは一輝から離れ、元の位置に戻る。

「いつつ……」

「大丈夫ですか、マスター？」

腹を押さえて苦しんでいる一輝に、人の姿になったスレイブが手を貸して、どうにか立ち上がる。

「おぬしは確かに強い。だが、それはおぬしが普段使っている二つのギフトがあつてこそだ。それを使えなくなると」

「ある程度強い存在とは、一切戦えなくなる。」

「そうだ。実際ペストとの戦いでは、一時的に役立たずになったのう。」

痛みが軽くなり、なんとも無くなったところでぬらりひよんは話を再開する。

「だが、それは一人で戦った場合。一人の人間が、ただの武器を持った場合だ。ここまで言えば、解るかのう？」

「……なるほど。スレイブ、一つ質問いいか？」

「どうぞ、マスター。」

「では、ヤシロとのゲームの時、お前を使ってる七人の御使いだけ、動きが違ったが、その原因は？」

「私が、あの天使の体を操っていたからです。剣の姿でも周りが見えますから。」

一輝はスレイブと目を合わせ、

「じゃあ、うまくやってもらえるか？」

「解りました。うまくやります。」

二人はそんな会話を交わし、スレイブが剣になるとぬらりひよんに向き直る。

「じゃあ、もう一回よろしく。」

「うむー！」

先ほどと同じようにぬらりひよんが切りかかってくるが、

「・・・ほう？」

スレイブが一輝の体を操り獅子王を防ぎ、一輝の自我で蹴ってきた足をつかむ。

「うおりゃー！」

そして、そのまま振り回して投げる。

それはぬらりひよんには一切ダメージを与えないが、先ほどに比べれば、はるかに素晴らしい。

「たった一回でここまで出来るようになるとは、予想外だのう。では、こんなのはどうじゃ？」

一輝たちの目の前でぬらりひよんの姿がゆらぎ、視認できなくなる。

「背中、任せたぞ。」

「了解。」

一輝は前を、スレイブは後ろを担当し、気配を探る。

そして、

「はあー！」

スレイブが一輝と手をつないだ状態で人の姿になりぬらりひよんの攻撃を防ぎ、

「せえの！」

スレイブが刀の姿になってぬらりひよんのバランスを崩し、二人がまったく同じベクトルで刀を振り、初めて攻撃を当てる。

「ふむ。初にしては十分かのう。」

が、たいしたダメージにはなっていないようだ。

「今のでその程度か・・・」

「意外と、つらいものがありますね・・・」

二人は結構シヨックだったようだ。

「さて、ここからは少しばかり本気を出すが、死ぬでないぞ？」

「まて！これ以上やると・・・」

「この程度でへばっていては、あやつを支配下にはおけぬぞ？」

「！・・・はあ。悪い。もう少し付き合ってもらえるか、スレイブ。」

「私はあなたの剣。どうぞお気になさらず。」

一輝とスレイブとぬらりひよんは、このまま夕食の時間まで続け、

一輝一人だけが全身に打撲を負ったのだった。

まあ、全部終わってから自己回復能力を底上げして治したのだが。

SUN SYNCHRONOUS ORBIT
in VAMPIRE KING ②

『ふん。この空も飛べない猿が。』

一輝たちが二翼のリーダー、グリフィスに話しかけると、こんな返事が返ってきた。

「おい、テメエ今なんていった？」

通訳の言葉を聴いた十六夜は、グリフィスをにらみつける。

『ふん、爪も牙もないみすばらしい小僧どもが。私に話しかけるな。』
「御チビ、こいつ殺したらダメか？」

「ダメです！何を言われたのかは知りませんが、抑えてください！」
「なら、これぐらいにするか。」

一輝はこんなことで奥義を使い、是害坊を憑依させることで爪と翼を得る。

「これで話を聞くのか？」

『ほう・・・猿が翼を得るか。よいだろう、話くらいは聞いてやる。』
《獅子王で斬ってやろうか、コイツ・・・》

一輝は何とか耐え、話をする。

「いや、ちよつと挨拶しようと思ったのと、リーダーの名前でも売ろうかとな。」

『そうか。だが、私は猿のコミュニティに興味がない。』

「・・・そうか。ならもういい。二度と会わないことを祈らせてもらう。」

一輝は憑依を解き、二人の元に戻る。

「よくわかった。あれは俺が苦手なタイプだ。」

「だな。あの先天的な増長をするやつがリーダーのコミュニティ、こう・・・」

「ああ。」

二人は一瞬間を置き、

「全力で叩き潰したい。」

声をそろえてそういった。

「やめてください！ コミュニティをつぶす時点でアウトですし、
龍角を持つ鷲獅子”連盟の一角ですよ！”

「大丈夫だ、御チビ。なあ？」

「ああ。二割冗談だ。」

「ほとんど本気じゃないですか！」

苛立っているため、二人そろってジーンで遊んでいる。

「さて、グリーももういるみたいだし、俺は作戦の確認でもしとく。」
「おう、俺はグリーに挨拶してくるが・・・アイツもさつきみたいなやつだったら俺はどうしたらいい？」

「考える必要もない。グリーはあれとは真逆だ。」

一輝はそこで話しを切り、メイドたちのほうへと向かう。

「ただいま。グリフィスは思わず殺したくなるようなやつだった。」

「何があったのかは解りませんが、我慢してくださいね？」

「ちなみに、何を言われたの？」

「空も飛べない猿とか、爪も翼もないみずぼらしい小僧とか。」

「マスターに対し、そのような罵倒・・・！ マスター！ 今すぐ切り殺しに」

「行ったらだめだから、お兄さんはここにいるんだよ、スレイブちゃん？」

スレイブは最近、一輝に関することで怒りやすくなってきている。

「さて、あれを切り殺すかはまた今度にして、」

「切り殺さないでください！」

「えー・・・まあ、我慢できる限りは我慢しよう。」

今回の作戦だけど、俺とスレイブは城に乗り込んで大暴れ。ヤシロちゃんは百詩編で巨人の殲滅のために残る。音央と鳴央はその手伝い。OK？」

「ええ。」

「大丈夫です。」

「問題ないよ！」

「了解です。」

一輝は四人の返事を聞くと、手持ちの武器の確認を始め、水を補充しに向かった。

|||||

“アンダーウッド” 上空1000メートル地点。

一輝は人の姿のスレイブとともに水に乗り、グリーのすぐ横を飛んでいた。

「いや、ホント、いい眺めだな。」

「ですね。閉ざされた空間でありながら、地平線が見える、なんとも不思議な光景です。」

一輝はそうやって箱庭を眺めながら、倉庫から取り出したサンドウィッチを食べる。

いつでも呑気なやつだ。

「スレイブも食べるか？」

「今食事を取るといえるのはどうかと思いますが、いただきます。」

スレイブも小腹が減っていたようで、素直に受け取る。

「十六夜もどうだ!? うまいぞ!」

「なら俺とサラとグリーの分、三つくれ!」

一輝は十六夜に三つのサンドウィッチを渡す。

「サンキュー! ついでに、グリーが編隊を崩せばこの五倍は出せるって言ってるんだが、どう思う!?!」

「俺も出すから、行こうぜ!」

「だから、先ほどから行くなどいつているだろうが!」

サラは二人の問題児に振り回される。

そうやって楽しんでいた集団だが、だから気づけなかった。

編隊の真正面に黒い円盤のようなものが現れていることに。

それは、突如として形を変え、蠢くように戦慄き始める。

そして・・・

「ぜ・・・全員、逃げろおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお!!」

!!!
!!!

急に巨人が現れ、アンダーウッドを強襲し始めた。

「十六夜！あいつらはどうやって……」

「さあな。だが、何かしらの策があったってことだろ。ただし、これでは大混乱が確実だ。誰かが指揮を執らないとまずいんじゃないか？」

「……解った。私が行く。お前たちも無茶はするな。」

サラはそう言うと言とアンダーウッドに向かう。

そして、十六夜は学ランの袖を引きちぎり、止血のために左肩に巻き始めるので、

「有っても効果があるかわからんが、モルヒネ使うか？」

一輝はそれを手伝いながら、十六夜にたずねる。

「いや、今はこの痛みで意識がはつきりとしてるほうがいい。」

「そうか。でも、念のためにオマエ用とグリー用を渡しとく。」

一輝は学ランのポケットに注射を二本入れる。

「大きさを解るから、それを使ってくれ。」

「オマエはどうするんだ？」

「一つ、気になることがあるし、これが当たりなら俺以外が対処するのは難しいだろうから、俺も下に行く。」

「お前の実力なら、突撃を手伝って欲しかったんだが、それなら仕方ないか。」

「悪いな。それと、こっちは任せた！」

「ああ、任された！」

一輝はその声を背に、アンダーウッドへと向かった。

一輝は違和感の原因が見つからず、とりあえず巨人を狩っていた。聴覚を強化して聞こえてきた会話でも、とりあえず混乱させる、とあったので問題ないという判断だ。

「スレイブ、無双って意外と楽しいかもしれない。」

「解らなくはありませんが、これで満足しないでください。」

「解ってるよ。俺が降りてきた目的は、これじゃないからね。」

そう言いながらも、スレイブで次々と巨人を切り倒す。

ただ倒すだけだと飽きるのか、たまに三枚に下ろすなどの遊びまで入れている。

「さて・・・何か動きはないか?」

一輝は、自分は基本戦闘に集中して、スレイブに怪しいものを探してもらっている。

「そうですね。今のところ特にない」

ズガアアアアアアアアアアン!!

「訂正します。たった今、何かありました。」

「だな。あの赤い稲妻は・・・」

「黒ウサギの、『擬似神格・金剛杵』ですね。」

つまり、黒ウサギがそれを使うほどの相手がいた、ということなので。

「一応、行つとくか。」

「それほどの実力者なら可能性はありますからね。」

一輝は水に乗り、巨人族を切りながら黒ウサギのほうに向かう。

|||||

“アンダーウッド” 東南の平野。

一輝はそこに着くと同時に黒ウサギに向かうナイフを、全て切り落

とした。

「嘘！」

「嘘じゃないよ。んで、大丈夫か、黒ウサギ？」

「YES。ありがとうございます。」

「ならよかった。じゃあ、この子は俺に任せて『バロールの死眼』をどうにかしてくれ。スレイブも、向こうの武器はただのナイフみたいだから、サポートについていってってくれ。」

「解りました！」

「了解！」

黒ウサギとスレイブは、脱兎のごとくその場を走り去った。

「さて、俺はノーネームの寺西一輝だけど、君は？」

「いや、この状況で自己紹介とかがしますか？つてそれより、今、名前は何だと？」

「どう呼んでいいのか解らないと不便だからな。後、名前は寺西一輝だ。」

「そうですね。私はリンです。にしても、あなたが・・・聞いていたような感じがしませんね。偶然同じ名前の人がいた？」

一輝はリンの言葉に違和感を感じ、聞き返す。

「えつと・・・リンちゃん・・・でいいかな？今聞いてたつて言ったか？」

「はい。でもただの偶然だと思います。鬼道、なんて苗字に聞き覚えはないですよね？」

「いや、俺が元々使ってた苗字だけど。」

リンは一瞬、聞き間違えたかのように目をパチクリさせた。

「え、え？それつて本当ですか？」

「ああ。つてか、こつちとしては何で知ってるの、つて感じなんだけど。」

一輝は質問をするが、リンは答えず、

「そつか。ならちゃんど戦つて実力を知つておかないと！」

ナイフを投擲してきた。

「危ないなあ。」

そして、なんのひねりもなく、普通に飛んできたナイフを、ただの日本刀ではじく。

「あれ？じゃあこれは！」

リンは再びナイフを投擲するが、それも普通に飛んでいく。

「え？なんで・・・」

「そうそう、リンちゃんのギフトだけどね、もう見破ってるし、完璧な対策も立てたよ？」

「・・・あれ？私が何をしているのか分かるの？」

「分かるし、どれだけの規模かも知ることが出来る。」

一輝はリンの疑問を肯定し、その解を言う。

「リンちゃんは、概念的な距離を操ってるんだ。だから黒ウサギの攻撃は効かないし、自分の攻撃はトリッキーに動く。違う？」

「・・・いえ、違いますけど・・・どうして分かりました？私、何か・・・」
「ああ、そうじゃないよ。ただ、そう考えれば巨人のことも説明がつくしね。」

あとは、俺が空気の一部を操ってどのくらい操ってるのかを測って、」

一輝は一瞬でリンの後ろに回り、

「同じだけかそれ以上、操ればいいだけだよ。」

刀を振り下ろすが、リンにナイフで防がれる。

一輝はペストとのゲームで知った、距離と頭痛の関係を利用したのだ。

「危ないなあ。それが本当なら、私大ピンチじゃないですか。」

「そうだね。それに、他の魔王たちももうすぐ片付くだろうしね。」

リンは一輝の言っていることが分からないのか、小首を傾げる。

一輝はDフォンを取り出し、

「この場は見逃してあげるから、もう帰ったほうが良いよ。さつきコイツに、白夜叉から連絡があった。『今、仏門に神格を返上した。じきにこちらも片付くから、最低でも、持ちこたえろ。』って。確かに、本来なら霊格を上げる神格も、白夜叉にとっては枷でしかないだろうしね。」

「・・・嘘、」

「じゃないよ。あいつが本気でやるなら、下層にいるような魔王は相手じゃないだろうし、あいつが全部片付けてくれるだろ。で、俺個人としてはその苗字を知っている・・・つまり、何らかの形で俺の過去を知ってる人と繋がりがあるやつを今消すのは得策じゃない。」

「・・・では、お言葉に甘えます。」

リンは、顔に苦渋の色を滲ませながら空を見上げ、戦場から姿を消した。

一輝は、巨人が復活し、カオスなことになっている戦場のほうを向き、

「さて、俺のことを誰から聞いたのかは気になるけど・・・今はあっちだな！」

そのまま、戦場に向けて飛んだ。

SUN SYNCHRONOUS ORBIT
in VAMPIRE KING ④

一輝は全速力で飛ばし、鳴央たちと合流した。

それは前線で、他にもサラや飛鳥、ペストもいたので、そちらに作戦を聞く。

「手が空いたから合流したが、何か出来ることはあるか？」

「そうね。じゃあその人たちと一緒に邪魔な巨人を倒してもらえる？」

私が「バロールの死眼」を抑えるのに邪魔なのよ、あれ。」

「武器が心配になってくるけど、了解。」

スレイブは黒ウサギと行動しているため、今近くにはいない。

水などか日本刀を使うしかないだろう。

一輝はメイドたちの方を向き、作戦を伝える。

「まず、ヤシロちゃんには火でも電でもいいからここから殲滅。」

「はい！」

「音央は誰か危険そうな人、巨人の攻撃に気づいていない人を茨で助ける。」

「ええ！」

「鳴央は、向こうが撃ってくるであろう雷撃を防ぐ。これは俺もやるから。」

「分かりました！」

「あと、俺はあの死の恩恵を自分の周りに限定で抑えられるから、直接行くので、俺に攻撃が当たらないようにしてください。お札使いながら水使って、さらに別の攻撃をよけるとか、無理です。」

急に口調が変わった一輝に、三人は笑い出していい感じに肩の力が抜ける。

「準備できたぞ。」

「そう。なら一瞬でいいから、私が「バロールの死眼」に手を伸ばせるだけの道を作って。」

「OK!行くぞ!」

「ええ!——突き破りなさい、デーン!」

「DEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

一輝が黒い光の渦に突っ込み巨人を切り刻み、デーンがそこに突進をかけ、道を開く。

どうせなら、一輝がお札で一気に喰らい尽くせばいいのだが、スレイブの件で使いすぎて残量がほとんどないのだ。

「La grand \boxtimes étoille par sept jours brûlera, (巨星が七日間燃え続け)

Nueuf heures soleil apparaît : (雲が二重の太陽現すだろう)

Le gros mastin toute nuit hurlera, (獯猛な巨犬が夜通し吠え)

Quand grand pontife changera de terroir. (法王が大地を変えるとき——)」

一輝がギリギリで巨人に対処していると後方からヤシロの声が聞こえ、

「茨の檻!」

「奈落の穴!」

音央の茨で巨人が転ばされ、奈落の穴に稲妻が吸い込まれていく。そして、巨人が転んだところに巨大な火の玉が一つ(霊格の減少にともない、大きさはゲームのときに比べ、小さくなっています。)降ってきて巨人を骨も、塵すらも残さず燃やし尽くす。

「改めて考えると、あいつらって結構チートだよな……」

自分のことを棚にあげて何を言ってるんだこいつは。

「うーん……ま、今はやめとくか。」

そう言つて稲妻を操り、巨人を倒していく一輝。

つかオイ、今何をしようとした。いつもみたいに介入するつもりだったのか?

《そうだけど?》

そうか。止めるってことを学習してくれて、俺はうれしいよ。

ただ、そのまま介入しないでもらえるとうれしいんだが？

《それは無理。》

オイこら。

「さて……あれは意地でもどうにかしないとダメか……」

一輝がにらむ先には、今までののが可愛く見えるくらいの勢いでその猛威を振りまく、黒い光の渦だった。

「ふう……頑張ってみますか。」

一輝は獅子王を抜き、少しでも効率を上げるために陰陽師モードになると、ギフトカードを掲げる。

「全部吸い尽すのは無理だろうけど……禍払いの札よ！今ここに、死の恩恵を喰らい尽くしたまえ！」

ギフトカードに残る、残り少ないお札の全てが発射され、黒い光を包んでいく。

途中、リンが誰かを回収していくのを確認するが、気にするほどの余裕もなかった。

「今ここに、我は願う。我らの生を助けたまえ！」

一輝はちよくちよく言霊を挟んで効果を上げ、死の恩恵に対抗する。

結果として、一輝は勝負に勝った。

途中で黒ウサギが太陽の鎧を召喚したことにより、バロールの威光は徐々に力を失ったのだ。

「ふう……これで少しぐらいは休めるかな？」

「いえ、それがそうでもないみたいです。」

一輝の呟きを、いつの間にか後ろにいたスレイブが否定する。

一輝の後ろには他にも、音央に鳴央、ヤシロと勢ぞろいしていた。

「いきなり不吉なこと言うなよ、スレイブ。」

「それはスイマセンでした。ですが、あれを見れば理解していただけるか。」

と、スレイブは上を指差す。

一輝もつられて上を見ると、顔が真剣なものになる。

「おい、何でアイツがこっちに向かっているんだ？まだゲームの再開時

「まで時間は有ったよな？」

「有ったわ。でも、何かの原因があつて、今再開したんでしょ。」

「何連戦だよ、俺……」

「お疲れのところ申し訳ありませんが、もう一度頑張ってください。」

「頑張つてどうにかなるレベルじゃない気がするなく。でも、もう一頑張りしよう、お兄さん！」

結構ガツツリと落ち込む一輝を、メイドたちは励ましながら軽く追い討ちをかける。

そんなことをしている間にも巨龍の鱗から化物が生まれ、参加者を襲う。

「はあ、仕方ないな。スレイブ、よろしく。」

「はい、マスター。私はあなたの剣、あなたの望むままに。」

スレイブの姿が消え、一輝の手に抜き身の大剣と、それにぴつたりと合う鞘が現れる。

「八つ当たりの始まりだ！」

「二そんな理由で戦うな！」わないでください！」

「行けー、お兄さん！」

「二ヤシロ（ちゃん）もあおるな！」あおらないでください！」

そして、そんな気持ちで狩を続け、一輝の周りに山が完成したところ、
“契約書類”に勝利宣言がなされる。

が、それは箱庭の大天幕を開け、太陽の光が降り注ぐという、最低最悪の終わり方を示しており、

「GYAAA!!」

それが開く前に、巨龍は“アンダーウッド”に突撃してきた。

“アンダーウッド” 大樹の麓。

一輝が到着した時点ではディーンはかなり押されており、飛鳥はサラから逃げるよう促されていた。

一輝は今日のゲームだけで、一体どれほどの距離を移動したのだろうか。

「飛鳥！サラ！」

「一輝か！頼むから、お前からも飛鳥を説得してくれ！」

一輝は送り狼を戻し、飛鳥の元に駆け寄る。

「飛鳥はどうしたいんだ？」

「決まってるわ。私は絶対にアンダーウッドを守る。」

「あつそ。なら俺も、手伝わせてもらおうよ。」

一輝自身、そのつもりだったので、あつさりと飛鳥側に付く。

「一輝！今の状況が分かっているのか！」

「ああ。それは飛鳥も同じだろ？」

「ええ。これが自殺まがいの行為だとも理解してる。それでも、ここで引けば生涯悔いが残るわ!!」

「つてなわけで、俺はあれを止めるよ。」

そんなことを言っている間にも、ディーンの状態は危険なので、一輝は伝説に頼る。

「地を揺らし、その神格を得し大蛇よ。汝はその力によりこの大地を揺らし、人々の平穏を奪う。だが、今ここに、その力を我がために振るわん！」

今、巨龍を少しでも止めるために、必要だと思ふ伝説を、召喚する。
「今ここに顕現せよ、パロロコン！」

一輝の体から輝く霧が出るが、それが固まる前に、次の伝説を召喚する。

「日ノ本の国に伝わりし、大いなる巨人よ。わが国を作りし、偉大なる巨人よ。今ここに、その所在無き身を、我が眼前に現さん。」

先ほどの大蛇とは違う、神としてすら見られる、伝説を召喚する。

「今ここに顕現せよ、ダイダラボッチ！」

一輝の体から再び、輝く霧が現れ、固まっていく。

伝説二体分の霧がすべて消えると、そこには巨大な蛇と巨人がいた。

「こんにちは。しっかりと挨拶したいところだけど、時間がないから省略で。」

「構いませんよ。私たちは、中からあなたのことを見ていましたから。」

「今更聞きたいことはない。」

一輝は友好的な態度に感謝し、命令を出す。

「そののでつかい龍を、紅い鉄人形と協力して止めろ！」

「了解！」

パロロコンは巨龍に巻きつき、地震の神格によってその身を揺らす。

ダイダラボッチは、ディーン横に立ち、ともに巨龍を止める。

巨龍は敵が二体増えたことで、いったん退く。

そして、一輝も獅子王にユランをまとわせ、剣を強化する。

二人の覚悟を真正面から瞠目して受け取ったサラは、静かに嘆息を漏らし、

「退けないか？」

「退けないわ。」

「友達が戦ってるからな。」

「……死んでもか？」

「……退くぐらいなら。」

「それに、元から死ぬつもりもない。」

二人の意思は、とても固かった。

今巨龍に対抗している三体も、それに答えるかのように巨龍に抵抗する。

ゆえに、サラも、今の自分を捨てる覚悟をする。

「——分かった。ならば、私も同じだけの決意を示そう……!!」

サラは剣を抜き、何のためらいもなく龍種としての誇りである龍角を切り落とした。

飛鳥は何が起きたかを理解できず、啞然と固まるが一輝はそうではなかった。

「サラ・・・お前、今、自分が何したか分かってるのか!？」

龍種の靈格の大きさは、その龍角の大きさに現れる。

それを折つたらどうなるか、一輝はそれを知っていたから、黙ってはいられなかった。

「分かっているし・・・気にしなくて、いい。」

一輝にそれだけ答えると、飛鳥のほうに倒れこむ。

「龍角は、純度の高い靈格の固まりだ。神珍鉄にもうまく溶け合う・・・！」

君達なら・・・止めてくれると、そう思える。

「アンダーウッド」を、私の第二の故郷を守ってくれ・・・！」

自分の思いを伝えたサラは、そこで意識を失った。

「あなたの故郷、必ず守るわ。」

飛鳥は自分の腕の中にいるサラにそう伝えながら抱きしめ、龍角をデイーンに捧げた。

龍角は、デイーンの装甲と一体化し、その力を上げる。

サラが二百年の時を懸け、鍛えたギフト、その思いを、デイーンはしっかりと受け取った。

「サラの覚悟、絶対に無駄にはしない。」

「ああ。あの二体にも、今は飛鳥の命令を聞くよう伝えたから、そっちは任せた。」

「ええ。——巨龍を迎え撃ちなさい!!」

「DEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

鉄人形と巨人が巨龍を真正面から迎え撃ち、大蛇が再び巻きつく。

それでもなお、巨龍が押しているが、二体は持ちこたえた。

デイーンは肩の装甲が壊れ、踏ん張っている足は磨り減る。

ダイダラボッチも、その腕はボロボロになる。

パロロコンは・・・

「わが百鬼たる魔物よ！今、我が武器に混じり、新たなる武とならん！」

すぐ近くにある小さな光を全員が反射して、他の人から来た光を反射して、を繰り返して思うんだ。その結果、いずれは大きな光になる。たまに太陽になる人もいるけど、それもたまにだよ。」

「一輝はそう考えるのだな。私は、さつきも言ったように太陽だと思うよ。」

レティシアは一度言葉を切り、真剣な表情になる。

「こんかいは、私を助けてくれてありがとう。この恩は、これから私たちと共に魔王と戦うことで返させて欲しい。」

「そっか。ならもう二度と、自分を犠牲にするな。」

「ああ、了解した。」

「あと、もう一つお願いがあるんだが、いいか？」

「もちろんだ。私に出来ることなら何でも言ってくれ。」

レティシアは即答する。

「じゃあ、もう一回収穫祭をやり直すのは知ってるか？」

「さつき耀から聞いたよ。」

「そこに、ノーネーム全員を招待してくれることになって、行きの子供達のお守りを俺が任されたんだが、手伝ってくれ。」

「は？そんなことなのか？」

「そんなことだよ。俺はスレイブとヤシロちゃんの件の報告にも行かないといけないから、一回抜けるかもしれないし、こうでもしないと、レティシアは来る気なかったでしょ？」

凶星を突かれたため、レティシアは黙るが、一輝は続ける。

「今回のゲームが、レティシアは操られただけってことはサラが説明してくれたから、問題ないし、ついでに収穫祭に参加していくこと。これが俺からのお願いだ。」

「・・・はあ。本当に主殿はお人よしだな。わかった。引き受けよう。」

「じゃあ、よろしく。俺はまた後で、メイドたちを連れてくるよ。」

一輝はそういって、自分の部屋に戻っていった。

降臨、蒼海の覇者 拉致

二一〇五三八〇外門・「ノーネーム」本拠。

一輝は本拠の入り口の広間で列を作っている子供達の前に立ち、今日も元気な子供達に圧倒されていた。

朝ごはんの話になると、

「はい、美味しかったです！」

「今日はご飯と目玉焼きとミカンでした!!」

「昼食が待ち遠しいです!!」

と、とつても元気に言うのだ。

その声は聞いていて自然と口元がほころぶが、同時に苦笑してしまう。

ミカンは一輝の倉庫からの提供だ。

《いや、この子供達はいつでも元気だよな・・・賑やかで、昔のことを考えなくてすむけど。》

吹っ切ったといつても、静かになると無意識に考えてしまうものだ。

《さて、今日は皆を手伝うことにするか。》

一輝がそんなことを考えている間に、レティシアの話は終わったようだ。

子供達は一斉に走り出し、その場には一輝、レティシア、ペスト、ヤシロ、スレイブ、リリの六人が残る。

「毎日、よくあんなに元気に働けるわね。」

「それが彼らのコミュニティにおける役割だからな。それに、今回は収穫祭に参加できるという楽しみがあるし、一輝がデザートの実を人数分出してくれるようになってからは皆、本当に元気に働くようになった。」

「あれは、皆が素直な子だったのが大きいよ。まあ、果物についてはたまる一方で困ってたから、正直俺も助かってる。」

一輝は中学に入って一週間が経った頃、ある妖怪が一輝のクラスに妖怪が来て「強者はいねえかー!」と言って暴れ、一輝によってあっさり取り押さえられたのだが、クラスメイトの前で殺すのがためらわれ、反省のために倉庫の中の畑の世話を任せ（命令し）たのだが、その妖怪が畑仕事にドハマリしてしまい、反省したら開放するつもりが、本人が拒否。

それ以来ずっと畑で果実を育て、気が付けば一種類の果物だけで一年暮らせる量が毎年たまる。

もちろん、そんな量を食べきれるはずもなく、知り合いに配っても減る気配がない。

なら捨てればいいかと言うと、もったいないので無理。

倉庫の中の一つに、中の物の時が進まない、と言うものがあるためそこにためていたのだ。

余談だが、その妖怪はちよくちよく倉庫から出てきて、子供達と一緒に畑仕事をしている。

「ところで、朝から姿を見ないけど、黒ウサギはどこに行ったのよ？昨日までは本拠にいたでしょ？」

比較的早起きな黒ウサギの姿を見ないことで、ペストがレティシアにたずねる。

「ああ、そのことについては・・・一輝に聞いてくれ。」

「ん？何で俺？」

「当事者が説明するのが普通だと思うよ、お兄さん。」

「確かに、マスターはあれを手伝ったのですから、聞かれたなら答えるべきでしょう。」

「あれ？」

スレイブの濁した内容について、ペストは一輝に目で尋ねる。

「あれってのは、拉致のことだよ。」

「拉致!? 一体誰がそんなことを・・・」

さすがのペストも、拉致と言う言葉には驚いたようだ。

「やったのは白夜叉だよ。んで、俺も協力したんだ。」

一輝はそう言うと、そのときの状況について説明を開始する。

「おはよう、白夜叉。わざわざノーネームに来るなんて、なにかあった？」

「いや、二つほど用事があったな。一輝と黒ウサギにだから、勝手にいくでないよ、黒ウサギ。」

何かいやな予感でもしたのか、こそこそと逃げ出そうとしていた黒ウサギは、白夜叉に呼び止められ戻ってくる。

「まずは一輝にじゃが、私からの依頼について、追加で欲しいものはないか？」

「追加ってことは、ヤシロちゃんとスレイブの隷属以外で？」

「ああ。私からの依頼、と言う形であった以上、何か別のものを贈らねばならぬからな。」

一輝は本気で悩む。

強い刀が二振り手に入り、これと言って欲しいものが思いつかないのだ。

散々悩み、結果、一つ思いつくが、

「ジンの要求って、通るの？」

「旗を手に入れば、十分に権利を与えられるよ。」

問題なかったためボツだ。

「……なら、今回の件でもらえるだけ、これを作って欲しい。」
一輝はそういってお札の元である霊験あらたかな紙を白夜叉に見せる。

「ふむ。これは見本として預かってもよいか？」

「ああ。まだ割りとあるし。」

「では、作らせるが……おそらく、ほぼ無限の量になるぞ。」

「……いいよ。他に思いつかないし、無限にあったら助かるっちゃ助かるし。」

一輝は、一瞬固まった後に、そう返す。

「では、次は黒ウサギのほうの案件じゃが、」

「なんででしょう？」

白夜叉は少しばかり黙る。

その状態から、重要なことだと考えた黒ウサギは真剣な表情にな

る。

一輝は、かすかに噴出しそうになっているのを見つけたため、半分面白がっているな、と考え、式神を五枚手に持つ。

白夜叉は顔を上げると、黒ウサギの目を見て、こういった。

「天平の旗本にスカウトに行くから、黒ウサギも付いてくるのだ！」

黒ウサギは全速力で逃げ出した。

「一輝！」

「おう！新入りのお披露目だ！」

一輝は先ほど作った五枚の式神のうち、一枚を掲げ、言霊を唱える。

「式神展開。『食』！捕まえろ!!」

式神、ブラック★ラビットイーターが現れた！

ブラック★ラビットイーターは触手で黒ウサギを捕らえた！

「によわー！なぜここにラビットイーターが!？」

黒ウサギが全部燃やしたはずなのですよー!!と、振り回されながら叫ぶ黒ウサギ。

「残念だったな！その中に残った種を育ててもらい、ブラック★ラビットイーターは俺の式神となった！」

「何をしているのですか貴方は!？」『擬似神格・金剛杵』！」

黒ウサギは稲妻によって焼き倒そうとするが、

「なぜですかー!」

それは触手十本を犠牲に逸らされる。

今、式神となったブラックラビットイーターはその霊格を上げている。

完全には防げなくても、逸らすことくらいは出来るのだ。

「追加で、式神展開。『食』!」

一輝は残りの四体も召喚し、ブラックラビットイーター五体で黒ウサギを弄る。

全身を触手で撫で回され、真っ赤になったあたりで止めさせて黒ウサギを白夜叉に預ける。

「では、行ってらっしゃい!」

「うむ、行ってくる!」

こうして、黒ウサギは誘拐されていったのだった。

|||||

「とまあ、こんな感じで黒ウサギは連れて行かれたよ。」

「なにやってるのよ、アンタは……」

ペストは思いっきりあきれていた。

「さて、じゃあ俺は子供達を手伝ってくるよ。力仕事は危ないからね。」

一輝はペストのあきれの視線を背に、子供達の手伝いに向かった。

露店巡り

「さて、三人を呼んだのはちよつと相談があるからなんだ。」

収穫祭前日の夜。

一輝は自分の部屋に音央、鳴央、ヤシロを呼んでいた。

余談だが、年少組、年長組も既にアンダーウッドに来ている。

「それって、スレイブちゃんのことですか？」

「確かに、あの子だけじゃないわね。」

「うん、正解。ちよつと気になることがあつてさ。」

「気になること？」

ヤシロが聞きなおすと、一輝は一つうなずいて、話を続ける。

「スレイブって、お前たち……いや、俺以外と話すときはタメ口だろう？」

「ええ。初めて会ったときからそうだったわ。」

「実際、俺も始めて会ったとき、戦闘中はタメ口だったんだよ。」

「それがどうしたのですか？」

特に問題点が見つからなかったのか、鳴央が首を傾げてたずねてくる。

だが、一輝にとっては一つの問題（？）がある。

「つまり、あいつの素は初めて会ったときの口調のはずなんだ。」

なのに敬語で話してるってのが……違和感ハンパ無い。」

「それは仕方ないわ。」

「それは仕方ないです。」

「それはしようがないね。」

上から音央、鳴央、ヤシロの順で否定される。

「だって、あの子は剣で、一輝を所有者としてるわけでしょ？」

「それに、自分にかかっていた呪いも一輝さんが解いたわけですし。」

「何より、あの子は騎士っぽいところがあるからね。」

「だとしても、あそこまで固いのは……」

四人全員が黙る。

一輝は、三人の言うことに少し納得してしまい、音央、鳴央、ヤシ

口もまた、一輝の言うことに共感できたのだ。

「・・・で、今回の収穫祭で少しでもどうにかならないか、と。」

「それで私たちを呼んだのね・・・」

「でも、これは・・・」

「難しいよね・・・」

四人のうち三人、アイデアが出てこない。

そして、残りの一人のヤシロはといえば、

「じゃあさ、お兄さんとスレイブちゃんデートでもしてみたら?」

「は?!!」

アイデアを出して、残りの三人を驚かせた。

「ちよつと待て!何でデート!?!」

一輝は自分の部屋から音が漏れないようにしているので、何の躊躇いもなく大声を出す。

「あ、でも・・・」

「それならもしかしたら・・・」

しかし、残りの二人は納得してしまったようだ。

「じゃあ、多数決で決定だねっ。」

「その前に説明をしてくれ!」

一輝の言葉に、ヤシロが説明を開始する。

「特に深い意味はないよ。デートって行っても、男女の二人が出かけるってだけだし。」

「それは途中で気づいたからいいんだ。何で、それで解決するんだ?」

「遊んでて感覚が途中で友達、とかに変われば解決するでしょ?」

「もし解決しなかったら?」

「それなら、スレイブちゃんにとってどっちも素だ、ということですよ。」

しっかりと解決しそうなので、一輝は文句が言えなくなる。

「じゃあ、解決ね。私と鳴央は一緒に回るけど、ヤシロはどうするの?」

「うくん・・・レティシアちゃんと一緒に回るよっ。まだちゃんとお話したことないし。」

「はあ・・・OK。それで行こう。また相談があったら呼ばせてもらっ

ていいか?」

「「もちろん!」です!」

こうして、一輝はスレイブと二人で収穫祭を回ることが決定した。

|||||

収穫祭初日。

一輝とスレイブは二人で露店を回っていた。

「さて、何か食べたいものはあるか?」

「いえ、特にありません。マスターが食べたいものでいいです。」

結論、特に変わる様子がなかった。

「・・・はあ。さつきも言ったけど、今日は主従関係とか気にしなくていいぞ?」

「無理です。マスターがマスターであることは、変わりようがありませんから。」

メイド服の一部である尻尾がフリフリしているところを一輝は確認する。

《これは・・・本心で言ってるな・・・》

このメイド服に搭載されている猫耳と尻尾は本人の感情に従って動く。

こうして動いているということは、感情を偽っているわけではないのだ。

《これじゃ何も解決しそうにないけど・・・》

「食べたいものを言いなさい。」

一輝は命令した。

「そうですね・・・強いてあげるなら甘いものです。」

そう淡々と言ったスレイブに、一輝は大げさではなく、驚愕の表情を向けた。

「マスター、さすがにその表情は傷付きます。私も一応、女ですよ?」

「・・・ああ、悪い。だな。スレイブは、一応じゃなく、れっきとした女の子だったな。ちよつと待ってろ。」

「え、ちよ、マスター!？」

一輝はスレイブをベンチ(?)に座らせると、「化」の式神も使つてぎつと露店を回る。

一分後。

「好きなのを食っていいぞ。」

「どれだけ買ってきたのですか・・・」

一輝は目に付いた甘いものと、美味しそうだったものを片っ端から買ってきた。

両手に収まらず、ギフトを使って落ちないようにしているほどだ。

「お祭りなんだから気にするな。」

「マスターらしいですね。では、これをいただきます。」

スレイブは一輝の手の中から一つの袋、綿あめを取る。

そしてそれを、笑顔でモフモフ食べ始めた。

尻尾も音が鳴るほどに動いている。

《すこしずつ溶けてきてる・・・かな?》

一輝はそう判断して、買ってきたでかい骨付き肉を食べる。

「ふう、美味しかったです。箱庭にも綿あめがあるとは・・・」

「俺も驚いたよ。まあ、ハバネロ味とかがある辺り、どうかと思うけど。」

しかもそれが一番売れているのだ。

さすが箱庭。

そこからは全部食べるまでは話しながら歩き(さすがに大体を一輝が食べた)、それから遊びの類の露店を(どこもギフトゲームの形で出店している。)回ることにした。

千切り

「何かやりたいのはある?」

一輝は隣にいるスレイブにたずねる。

「では……あれがいいです。」

先ほどの食べ物から、自分の意見をちゃんと言うようになったスレイブは、ある露店を指差す。

「なにになに……「キャベツの千切り」?」

その露店には、確かにそう書いてあった。

「えっと、「参加資格、切断系のギフトを持っていること。」これは大丈夫だな。」

「はい、私自身が剣のギフトですから。」

「……勝利条件、その場で早く、綺麗な千切りを作ったものは店主が行う。」

「はい。」

「一位と二位には商品として焼きそばなどを贈呈、九位と十位にはその代金を支払ってもらおう。」……まだ何か食べたいの?」

「違います!」

一輝が無神経なことを言うと、スレイブが必死で否定してくる。

「じゃあどうして?」

「これなら、マスターを待たせずにすみませうから。」

一輝は一瞬黙る。

《まだ俺のことを優先か……》

だが、それでも自分の意見を言うようになっただけましである。

「じゃあ、すみませーん!二人参加でお願いしまーす!」

「え?」

「二名様参加でーす!」

スレイブから疑問の声が上がるが、参加のエントリーは終わってしまふ。

「ん?何か問題があった?」

「いえ、その・・・てつきりマスターが私を使うものだ・・・」
「それ、楽しいの？」

「はい。私は剣ですから、自分が認めた主に使われていることが喜び
なのです。」

「そっか。でも、たまにはこういうのもたまにはいいでしょ。」

「はあ・・・」

一輝の目的も有るので、少し強引にでも参加させる。

「あ、それともう一個。」

「なんででしょう？」

「やるからには一位を目指すこと。」

「ですが、」

「勝ちを目指せないような剣を、使いたいとは思わないぞ。」

一輝が言うと、スレイブの目に火がつく。

やる気を起こすのは割りと簡単だった。

「では、十人そろいましたので、はじめたいと思います。参加者の皆さんはこちらに並んでください。」

一輝たちが最後だったようで、ゲームが始まる。

「では、お手元の『契約書類』にサインをしてください。」

一輝たちの手元に、羊皮紙が現れる。

『ギフトゲーム名 “千切り”』

・ルール説明

・店主の掛け声でゲームを開始する。

・二玉のキャベツを、より早く、より綺麗に千切りする。

・上位二人には、キャベツ十玉分ずつの焼きそばを

贈呈。

・下位二人は、上位二人分の代金を支払う。

・順位はポイント制とし、早さが早いものから10
ポイント、千切りが綺麗なものから10ポイント、合計最大20ポイ
ントを付けるものとする。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、 “ ” はギフト
ゲームに参加します。

一輝はルールを読むと、空欄になっているところにコミュニケーションの名前と自分の名前を記入する。

全員が記入を終えると、『契約書類』は店主の手に集まる。

「では、皆さん！準備をしてください！」

その声とともに、参加者は包丁などの刃物を取り出していくが……「おや？ノーネームの御二人はいいのですか？」

一輝たちが何もしないのを見て、店主が聞いてくる。

見物している人たちと、参加者のうち二人が「ノーネームには包丁すらないのか。」と笑っているが、一輝はそれを無視し、スレイブに我慢するように言う。

「もう既に準備は終わっていますよ。」

「刃はここにある。問題ない。」

二人が淡々と言うと、笑っていたやつらも黙り、店主の声を待つ。

「えー、では、全員準備が出来たようなので、始めたいと思います！始め!!」

店主の開始の合図で八人の参加者は一玉目を半分に切る。

が、一輝とスレイブは違う行動をしていた。

二人は集中した表情で二玉とも持ち、上に投げた。

そして、一輝は右手を、手のひらが前を向くように上げ、スレイブは両手を虎爪の形にして、待つ。

そして……キャベツが落ちてくると同時に……

「ウインドカット！」

「虎爪！」

一輝は腕を横に動かし、風の刃で一瞬で全部千切りに、スレイブはその指で切り刻み、一瞬で千切りを作った。

「終わった。」

「……の、ノーネームの寺西一輝、スレイブ、二名の千切りが終了しました。」

会場が固まった。

まだ誰も、半玉すら終わらせていないなか、この二人は二玉全てを

終えたのだ。

「では、二人とも同時だったため、速さのポイントは両名に10ポイントずつ入ります。次の人が終わるまで時間が有るので、先に審査をしてしまいます。」

店主が最初に帰ってきてそう言うと、他の人も動き出す。

観客は「早いだけだ。雑に決まってる。」と言っているが・・・

「これは・・・あなた方、料理の経験は？」

「経験って言うほどはありません。」

「私も、マスターと同じです。」

一輝はもといた世界で本当にテキトーに作るか、外食で食事を済ませていたため、特に料理をしていたというわけではない。

スレイブについても、ノーネームに来てからメイドの仕事で作ったのが料理初体験のため、最近始めたばかりである。

「それでここまで・・・御二人とも、六本傷で厨房に入りませんか？」

「スイマセン、お断りさせていただきます。」

「では、私も断らせていただきます。」

「そうですね・・・残念です。私は六本傷で副料理長をさせてもらっています。もし気が向いたら、いつでも言ってください。」

本当にながかりとした表情を浮かべている店主に、観客は言葉を失う。

その後、千切りを終えた選手は、最初の二人のインパクトが高すぎて、凄く居づらそうにしていた。

「では、結果を発表します。一位は、ノーネーム、スレイブ！20ポイントです！」

ノーネームが満点を出したことに、観客から驚愕の声が上がる。

「二位は、ノーネーム、寺西一輝！19ポイントです！」

結果として、上位二つをノーネームが取ることになり、さらには店主があそこまでの反応をしたので、他の参加者も、観客も何もいえないくなる。

ゆえに、その場で声を出していたのは、観客の中にいたノーネームの子供達だけだ。

「残りの順位はこのようになりました。ベッチオさんとエンリーコさんは、料金を支払っていただくさい。」

よりにもよって一輝たちを笑った二人が料金を支払っていくことになり、その二人は支払うとその場を走り去っていった。

「コミュニケーションに帰ったら盛大に笑われることだろう。」

「いや、すすきりした!」

「はい。特にあの二人が支払っていったということが。」

その光景に二人はとつても満足していた。

「では、焼きそばが出来るまでしばらくお待ちください。」

店主はその言葉とともに、調理を開始する。

「一輝さんにスレイブさん、今の何!」

「どうやって切ったの?」

「皆相変わらず元気だな。一回落ち着け。」

スレイブが困っているの、とりあえず落ち着かせる。

「俺がやったのはカマイタチで切っただけだよ。思いつきり力技だからコントロールが難しいんだけど。」

「私は剣だから、ただ自分の指で切った。」

「へく。だから包丁でやってるときやりにくそうにしてたんですか?」

「ああ。刃物が刃物を使うことがな。どうしても違和感が拭いきれない。」

そうやって子供達と話していると、焼きそばが届いた。

「はいよ!自信の一品召し上がれ!」

「ありがとうございます。にしても・・・凄いやつですね。」

「ま、子供達にも手伝ってもらうんだな。あと、これはあんな失礼なやつらがいたことへの詫びだ。」

という、店主はコロッケを大量に渡してくる。

「いいですよ!あいつらが悪いだけで、店主さんは関係ないんだし、」

「いや、このゲームの主権者は俺だ。この責任の一部は俺にある。」

「・・・解りました。では、遠慮なく。」

一輝はそれを受け取ることにした。

「後、店主さんじゃなく、名前で呼んでくれ。これからも会うことになりそうだしな。」

「同盟のこと？」

「ああ。その関係で、会う可能性はあるだろう？」

「戦う側と後方側・・・可能性は低いけど、あることにはあるか。」

「そういうこった。俺はボノ。これからよろしく。」

「ああ、よろしく。」

握手をすると、ボノは露店のほうに戻っていく。

「さて、焼きそば食べたいやついるか？」

一輝の質問に、子供全員が手を上げる。

「一人で一パック食うと晚饭が食えなくて怒られそうだし・・・二人で

一パックな。箸はこっから持つてけ。」

子供達が持つていくが、それでもかなり余る。

「では、私たちもいただきますしよ。」

「だな。「いただきます。」

二人は同時に一口目を食べ、

「美味しい・・・」

そのまま一気に一パックを食べきった。

「いや〜うまかった。」

「はい。あの人はかなりの腕前ですね。」

だが、それがまだ大量にある。

一輝はこの現実から軽く目をそらし、スレイブの口元を拭き取った。

《こういうところは見た目の年齢と合致するんだよな・・・》

「あ、ありがとうございます。」

「いいよ、これくらい。」

スレイブは顔を真っ赤にして一輝にお礼を言う。

そのまま無言の状態に入り、気まずくなったところで助けが入った。

「あら、一輝君じゃない。」

「よう、飛鳥。それに耀も。ゲームのほうはどうだったんだ？」

「ガロロさんのせいで中途半端。」

耀は少しご立腹だった。

そして、そのまま視線を一輝の横、スレイブがいるのとは逆に向け、「それは？」

「ん？ああ。さつき参加したゲームの賞品。かなり美味しいけど、食べる？」

「食べる!!」

耀は早速一つ目を幸せそうな顔で食べだす。

「飛鳥も食べたなら？ホント、信じられないくらい美味しいぞ。なあ？」

「ええ。食べないのは、もったいないです。」

「そうね・・・じゃあいたadakわ。」

「残り全部どうぞ。」

一輝は二パックだけ取ると、残りを全て二人に押し付け、スレイブとともに次の露店へと目指していった。

背後から聞こえてくる、飛鳥の声を無視して。

馬肉

「——天が呼ぶ！」

地が呼ぶ!!

人が呼ぶ!!!

少し落ち着くと人は言うツ!!!」

一輝たちは収穫祭の開会式で白夜叉の登場を見ていた。

二人の反応は対照的だった。

一輝は、その光景に大爆笑、大絶賛。

スレイブはこんなのが階層支配者をやっているのか・・・と悩んでいた。

もちろん、あの後も色々な露店を周り勝負をしたが、勝った回数はお互いに一緒になるので、そこで区切りとした。

途中から決着をつけようとしたが、そこからはいくらやっても引分けとなったのだ。

「神格を返上して、完全体になっても白夜叉は白夜叉だな。これで確信した。」

「あれは、普段からあのように・・・？」

「ああ。本気でシリアス、って時じゃなければあんな感じ。音央と鳴央に聞けば愚痴をこぼしてくれるぞ。」

本格的にスレイブが疑い始めた。

「まあ、今は隠してるけどかなりの実力者だから。俺らがレテイシアのゲームをやったとき、向こうにも神霊級の竜が出たり魔王が来たらしいんだけど、一瞬で消し飛ばしたから。」

「それだけの実力者がなぜ・・・」

「それは、うちのコミュニティの問題児全員に言える。」

「マスターは別です。」

スレイブの中で、一輝の株が異常なほどに高い。

「ははは・・・音央と鳴央に聞けば問題児っぷりは聞けると思うぞ?」
「確かに聞けました。」

「既に聞いたのかよ・・・」

「ですが、それ以上にマスターがやってきたことが聞けました。コミュニティの食事のためのギフトゲームをしているとき、一体何人の人を助けたのかも、誰にも言わずにいくつの悪質なコミュニティを潰してきたのかも。」

一輝は驚いて言葉を失う。

そんな一輝を見てスレイブは小首を傾げてたずねる。

「どうかしましたか、マスター?」

「いや・・・どうやってそれを?」

「先ほと言いました。音央と鳴央に聞いたと。」

「何であいつらは知ってるんだよ・・・」

「Dフォンにデータが載っていたそうです。」

一輝は慌ててDフォンを取り出し、いじる。

すると検索システムがあったので、「寺西一輝」と入力してみる。

そこには、いくつのコミュニティを潰したか、潰したコミュニティの一覧とそのコミュニティのやっていたこと、魔王との戦いでどんな成果を上げたか、そういったプラスの内容に、ギフトについての説明が網羅されている。

「何だこれ!?!」

「何だって、検索システムですが?」

「どうやってこの情報を!?!」

「載せたのは、白夜叉とラプラスの小悪魔だそうです。」

「そういや、全部ちゃんど報酬を払ってくれたな・・・こういうのを知られるのが、一番恥ずかしいんだな・・・初めて知った。」

「そうでしょうか?私としては、マスターのことを知れて特をした気分です。」

一輝はついでに、Dフォンを持っている全員の名前を入力してみると、一輝のところに書いてあったのと変わらない内容が書かれていた。

|||||

“アンダーウッド” 収穫祭本陣営。

一輝は十六夜に呼び出され、本陣営に来ていた。

そして、その場でこの件に関する説明が行われたが・・・

《伝説から何まで、全部あの馬肉のコミュニティにけしかけてやろうか・・・》

一輝は内心穏やかでなかった。

今すぐに、グリフィスを呪い殺しかねないくらいには。

「話はよく分かった。この件は両者に非があるため、両者不問とする。しかし次に問題を起こしたら強制退去だ。」

「ふざけるな!!!」

《アイツ、マジで呪い殺そうかな・・・》

一輝が自分の中にいる妖怪や、使える呪術の類を片っ端から頭の中でリストアップし、最も苦しい呪い殺し方を完成させると（道を外しているためか、一輝の家にはその類の本も大量にあった）、話はかなり飛んでいた。

「どうなってアイツはおとなしく黙ってるんだ？」

一輝は隣にいる十六夜に聞いた。

「ああ。白夜叉の同胞であるグリーを馬鹿にした以上、バレたら潰されるぞ、つてな。」

「なら、俺らは気にしなくていいな。」

「ああ。」

二人は退室していこうとするグリフィスを睨むと、奇跡でも起きたのか、まったく同じ事を言う。

「・・・おい、待てよ馬肉。何を勝手にまとめてやがる。」

馬肉呼ばわりに、グリフィスは絶句しながら振り返った。

「逃げてんじゃねえよ。白夜叉の件はそっちの都合だろうが。何で俺達が譲歩しないといけない。」

「十六夜の言うとおりのだ。ここで消えるってんなら、俺が伝説を使ってコミュニティを潰すぞ。」

「い、十六夜さん・・・一輝さんも・・・」

黒ウサギが焦って止めに入る。

彼女自身憤りはあっても無用な血が流れることは望んでいない。

白夜叉が何かしらの報復行為をとるのは間違いない、そこに一輝の伝説による攻撃が加われれば、オーバーキル気味に潰れるのは間違いない。

白夜叉が皆殺しにするのは言いすぎだろうが、一輝は本当に潰す。

黒ウサギが知っているメンバーだけでも可能なのだから、全て使えば言うまでもない。

二人の発言を聞いた蛟劉も肩をすくめながら説得しようとする。

「あのなあ、ちょっと落ち着けよ二人とも。言いたい事は分かるが、先に暴力を振るつたんは君らの同胞、春日部耀やで？ 本来なら君らがさばかれても何の不思議もないんやから。」

だが、二人はそんなことを論点においていない。

「ハッ、ふざけんな。じゃああれか？ 公衆の面前で口舌を切りつけるのは無実なのか？ 確かに、切りつけられた相手には外見的な傷は残らない。」

「だが、代わりに魂を傷つける。こっちは外見的な傷と違って治りにくい。こっちのほうがよくよっぽど悪辣で卑劣だ。それも、切られたのは十歳の子供だってんだから、さらに治りにくい。」

二人の剣幕に、その場にいるすべてのものは驚きか恐怖の感情を抱いた。

十六夜は普段の軽薄な笑みとはまったく違う怒りを浮かべており、一輝は背後にうつすらと百鬼夜行が見えている。

一輝の怒りの感情につられ、無理矢理に顕現しかけているのだ。

「白夜叉が牙をむくとしたら、それは同じ口上のはずだ。」

「だから、俺達は牙をむく。ここに間違いはない。」

「違うか？」

二人に睨まれ、蛟劉も一考し、

「・・・なるほど、一理あるな。」

そう結論付けた。

「な、おい！」

二人の様子から、本当に潰されかねないと感じたグリフィスは慌て始めるが、蛟劉の言葉を聞いて、落ち着きを取り戻す。

「まあ、潰すのを許可するわけやないよ。今は収穫祭の真っ最中で、他の参加者も楽しんでるんやから。・・・どうやる？ここは一つ、箱庭らしくギフトゲームで決着を付けるというのは？」

蛟劉が胡散臭い笑みを浮かべながら提案する。

落とし所としては悪くないと考えた十六夜は素早く頷き、一輝もしぶしぶ納得する。百鬼夜行は収めていないが。

「そうだな・・・確か、二日後の『ヒツポカンプの騎手』が、収穫祭で一番大きなゲームだったな。それで決着を付け、敗者は勝者に土下座。異論はあるか？」

しつかりと決着の場を作り、相手の誇りをズタボロにする。

そのルールにグリフィスも納得し、本陣営を後にした。

十六夜と一輝におびえてさえいなければ、完璧だったのに・・・

「さて、そろそろそれ、しまったほうがよくないか？」

「それって？」

「気付いてなかったのか？背中を見てみるよ。」

一輝は背中を見て、初めて認識する。

「こんな顕現の仕方が出来るのか・・・いつから出てた？」

「蛟劉さんを説得していた辺りからです。」

「そうか・・・檻に戻れ。」

一輝がそういうと、それは消えた。

「二人とも、よう我慢してくれたな。ところで、君が陰陽師君か？」

蛟劉に指差され、一輝は肯定する。

「まあ、俺は陰陽師だけど。あんたが言ってるやつかは分からんぞ？」

「弟子から聞いた話いやと・・・妖怪を操り、魔王に立ち向かったっていつとつたな。」

「それは間違いなく俺のことだな。」

「やっぱりか・・・悪いんやけど、一つええか？」

「・・・予想は付いてるし、言われたら仕方ないって思ってるから、どうぞ。」

「じゃあホンマに悪いんやけど、今回のゲームに参加せんどいてもらえるか？」

反対しようとする飛鳥に、百鬼夜行を召喚されたり、水を操られたりすると滅茶苦茶になると説明し、一輝のほうを向く。

「いいよ。十六夜たちならあんなザコ、どうにでもなるだろうし。」

「わるいなあ。ま、関係者はほかにも三人おるし。」

「・・・？ま、いいや。じゃあ俺はこれで。」

蛟劉が一輝だけに聞こえるよう言った言葉の意味がわからなかったが、何を話したかを一輝が話すのを待っている、メイドたちのほうに向かった。

「つと忘れてた。」

向かってなかった。

一輝は戻つてくると、黒ウサギのところに歩いて行き、

「蛟劉に話を聞くんなら、これ飲んでいいぞ。」

「あ、はい・・・って！これ結構お高いお酒では!？」

「家に大量に送られてきた酒だ。どうせ俺は飲めねえし、まだ大量にあるから。」

一輝はそう言うと、日本酒に焼酎、ワインなど色々な種類の酒を置いて、今度こそメイド達のもとに向かった。

ヤシロ

「とまあ、こんな感じになった。」

一輝は部屋に戻り、そこで待っていた三人のメイドに会議の内容報告をした。

一人足りないのは、スレイブが「推測したいことがありますので、今日はもう休みます。」と行って自分の部屋に行ったからだ。

スレイブのことも話すつもりだったので、ちようどいいかもしれないが。

「そのギフトゲームには、参加条件などありますか？」

「いや、俺が出場禁止ってくらい。他には何にもないはず。出たいの？」

一輝が尋ねると、三人ともが頷く。

それを不審に思った一輝は、蛟劉が言っていたこともあるのでさらに問うことにした。

「ふうん。ところで、蛟劉が何か他にも関係者がいるって言ってたんだけど……」

一輝が言い終わる前に、三人は顔をそらした。

「分かりやす過ぎるな。」

「はあ……何をしたの？」

「えっと……私はある手下の人に雹を降らせたよ。」

「私は、少々からだが消滅する恐怖を……」

「で、私は二人を手伝ったわ。」

三人は正直に、音央にいたっては開き直った。

「まあ気持ちは分かるけどな？俺もあの場で呪い殺しかねなかったし。」

「呪い殺すって……」

「もちろん、一番苦しい方法で。」

一輝は思い出した、とその方法をメモし始めた。

「まあ、いいんじゃないの？いくつか禁止事項を加えたいけど、出たいなら出れば。あれはボッコボコにして欲しいし。」

別に一輝の許可が必要なわけではないので、一輝はそう返す。

ヤシロに百詩編の乱用だけは止めるようにいったが。

「じゃあこの話はおしまいね。で、スレイブのほうはどうだったの？」
音央はすぐに話を切り替え、一輝に聞いてくる。

「どうって聞かれてもなー。スレイブは楽しんでたけど、人として、とかそういう扱いを俺がするたんびに呆れたような顔してた。」

「変な扱い方はしていないのですよね？」

「まあ、そのつもり。」

一輝は自信がないのか、最後は濁した。

「うくん・・・まだスレイブちゃんは変わらないかー・・・ここまで来ると何か理由がありそうだけど・・・」

「予想が付きませんね・・・」

ヤシロと鳴央は悩み始める。

「くー・・・」

訂正、ヤシロはそのまま寝た。

精神的には成長していても、体が子供のままだからだろう、夜更かしはつらいのだ。

「で、俺はどうしたらいい？」

一輝はヤシロを抱き上げ、ベッドに寝かせながら残りの二人に尋ねる。

「まあ、明日はヒッポキャンプ選びを手伝ってもらいたいし、アンタは仕事でしょ？」

「子供達の世話関係が有ったな。」

「なら、明後日に、もう一度スレイブちゃんとデートをして、気が付いたことを聞いてみてはどうでしょう？」

「そうね。もうそこで決めるならそれぐらいしなないと。」

一輝は内容を頭の中で整理し、確認を取る。

「つまり、俺はスレイブとデートしつつ、おかしなところを探せば？」

「後、楽しませることも。」

「結構難しいな・・・」

「まあ、頑張るしかないですね。」

そうして、一輝の今後の方針が決まり、二人は出て行く。

「ホント、難しいな・・・俺に出来るのか？」

「お兄さんだもん、きつと出来るよ。」

「おわっ!？」

一輝は急に後ろから声をかけられ、驚きの声を上げる。

そのまま後ろを振り向くと、ヤシロがベッドの上に座っていた。

「寝たんじゃなかったのか？」

「狸寝入りだよ。運んでくれてありがとう。」

一輝は呆れながらも、こんなやつだったな、と受け入れた。

「で、わざわざ狸寝入りをした理由は？」

「一つ目はお兄さんとお話するため。私だってスレイブちゃんみたいに遊びたいんだけど・・・今回それは無理だろうしね。」

「そっか。ありがとう。」

「あははっ、何でお礼を言うの？」

「なんとなく言いたくなったからだよ。」

一輝はそう言うと、紅茶だけを取り出す。

「さ、お話を始めようか。と言つても、話すほどのことはないけど。」

「うん、この機会に私が聞きたいことを聞くから、大丈夫だよ。」

ヤシロは紅茶を一口飲むと、最初の質問を始める。

「じゃあ、何で私たちを助けたの？」

「何でって、何が？」

一輝は本気で聞いていることが分からず、ヤシロに聞き返す。

「だって、助けることには責任が生じる。全ての場合がそうではないけど、今頑張ってるスレイブちゃんも、箱庭でお兄さんが助けた人たちもそうでしょ?。」

「まあ、ヤシロちゃんたちは、俺と一緒に来ることになっちゃってるかな。」

「そうじゃなくて、お兄さんが助けた全ての人。他のコミュニティの人たちもね。」

「・・・ヤシロちゃんもそのこと知ってるの？」

「前に女子会を開いたんだっ。内容はお兄さんについてで、また開く

予定だけど・・・お兄さんも来る?」

「俺について議論をする女子達の中に入る?居心地悪すぎるだろ。」

一輝は心から断り、紅茶を飲む。

「まあ、強いて言うなら、父さん達のことから立ち直ってからは、妹が自慢できるような人間になろうって努力してたし、それがもう癖になったからだよ。」

下層での悪質コミュニティなら、魔王のところじゃなければ解決できる自信あるし。」

「ふうん。じゃあ次、お兄さんは私たちが邪魔だとは思ってないの?」

「思っていない。」

「わあ、即答だ!」

一輝は何のためらいもなく、反射的にそう答えた。

「そう思うんなら、助けてないよ。もしそう思ってたら、音央と鳴央のゲームも最悪の形で終わらせてたし、スレイブも解呪してない。ヤシロちゃんのゲームも一つクリアして終わらせてた。さつき言ってたように、責任が生じるからね。」

「じゃあ、私たちは一緒にいてもいいんだ?」

「当たり前だろ?」

「もしお兄さんが元の世界に帰ることになって、ついていきたいって言ったら?」

「ありがたいね、大歓迎だよ。住む場所も、神社の権利を奪い返せばいいし。」

一輝がそう言うのと、ヤシロは一輝の目を見て、告げた。

「ありがとう、凄くうれしい。でも、私は、お兄さんに倒されて隷属することになった、元魔王。だから、私はずっとお兄さんに隷属することになる。一生、箱庭を離れても、お兄さんに付いて行く事になる。だから、真剣に考えて、さつきの答えを、」

「だから、問題ないって言ってるだろ。あれは嘘偽りない真実。」

一輝は聞いていられず、言葉をさえぎって、ヤシロの目を見て答える。

「別に、家族が増えることは嫌じゃないし、俺なんかについてきてくれ

るなら、そんなありがたいことはないよ。」

「・・・はあ、そつか。そうだったね。お兄さんは、こんな人だった。」
ヤシロは顔をうつむけ、言葉を紡いだ。

「何悩んでたんだろ、自分があんまり構ってもらえてないからって・・・
バカらしいな、ホント。」

ヤシロは再び顔を上げ、その赤くなった目を一輝に向けると・・・
契約を始める。

「じゃあ、私がまた悪の道に走ったら?」

「意地でも止める。多少手荒なまねをしても、だ。」

「私が破滅しそうになったら?」

「前にも言っただろ?俺が全て操って、破滅なんてさせない。」

「私が、お兄さんの世界に行ったら?」

「家族として、妹として受け入れる。まあ、もう妹だって思ってるんだ
けどな。」

「うん、じゃあこれを契約内容にしよう。」

「契約?」

一輝はヤシロがいった言葉の意味が分からず、聞き返す。

「うん、契約。魔王の隷属だけでも足りるとは思っただけど、」

魔王の隷属は、魂を木っ端微塵にして倒したとしてもなされる、強い契約だ。

十分に強い契約だが、ヤシロはそこに新たな契約を加え、より確実なものにしようとしているのだ。

「それでも、絶対なのかは分からないから、もう一つ加えたいの。私、
ヤシロⅡフランソワ一世とお兄さん、寺西一輝が結ぶ契約を。」

ヤシロは一輝の手をとり、契約を終える。

「私、ヤシロⅡフランソワ一世は、さっきの契約が守られる限り、未来
永劫貴方と共に生きる。」

ヤシロはそれを言い終えると、一輝に抱きつき・・・可愛らしい寝
息を立てて、眠りについた。

「・・・ありがとう、ヤシロちゃん。これからもよろしく。」

一輝は、ヤシロに抱きつかれたまま、その体を支え、ベッドまで行

くど．．．そのまま眠りについた。

求道丸

次の日の朝、一輝とヤシロはスレイブに起こされ、二人して怒られた。

まあ、怒られた時間はヤシロのほうがかなり長いのだが。

そんな感じで朝を迎えた一輝とヤシロは、水着を選びに来ていた。

白夜叉の暴走により、ヒツポキャンプを借りるコミュニティの女性は水着の着用が義務付けられたのだ。

で、一輝はこの類に疎いのだが、ヤシロに見て欲しいとせがまれ、ついてきたのだ。

「どうかな、お兄さん？」

「へえ・・・可愛いな。似合ってる。」

一輝は、考えて言わず、無意識に口から言葉が漏れた。

その様子に満足したのか、ヤシロはその、ワンピースタイプの水着に決めた。

「あ、二人ともいた！」

「もう選び終わりましたか？」

「うん、今終わったよ！」

なんだか、朝からずっとハイテンションなヤシロである。

言い忘れていたが、スレイブはいまりりのバイトの手伝いに行っている。

黒ウサギが、リリが一人で働くことに猛反対したため、手が空いていたスレイブが付いていくことになったのだ。

「じゃあ、通訳お願いしてもいいですか？」

「OK。三匹人のよさそうなものを選ぼうと思うと、結構大変そうだけど、」

「それだけど、ルールが変わったから一匹でいいわ。」

音央はそういうと、『契約書類』を一輝に渡す。

『ギフトゲーム名 “ヒツポキャンプの騎手”』

・参加者資格

一、水上を駆けることが出来る幻獣と騎手（飛行は

不可)。

で選出可。

- 二、騎手、騎馬を川辺からサポートする者を三人まで選出可。

- 三、本部で海馬を貸し入れる場合、コミュニティの女性は水着必着。

・禁止事項

- 一、騎馬へ危害を加える行為は全て禁止。
- 二、水中に落ちたものは落馬扱いで失格とする。

・勝利条件

- 一、〃アンダーウッド〃から激流を遡り、海樹の果実を収穫。

- 二、最速で駆け抜けたものが勝利。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、各コミュニティはギフトゲームに参加します。

〃龍角を持つ鷲獅

子〃連盟 印』

「なるほど、チーム戦に変わったんだ。」

「はい、ですから、一匹で構いません。」

「了解。あとは・・・四人目は誰か心当たりあるの?」

〃契約書類〃には三名までサポートが出れるとある。

これを三名出さない手はないだろう。

「いえ、いません。」

「ノーネームからもう一チーム出るから、頼む相手がいないし・・・」

「スレイブちゃんには断られましたし・・・」

が、いかなせん人数不足だった。

「だったら・・・一人男が混ざってもいいか?」

「はい、構いませんけど・・・」

「私も別にいいけど、あてはあるの?」

「まあ、ある。ヤシロちゃんは?」

「いいよ!面白い人?」

「かなり面白いと思う。」

そう言うと、一輝は倉庫の一つ、畑になっているところを開け、その住人を呼ぶ。

「求道——求道丸——出てこーい！」

「分かりましたー！」

返事が聞こえると、一輝は倉庫の入り口からどき、三人にも放れるように言う。

数秒待つと、倉庫の入り口から人が一人跳んできた。

「どうも、一昨日ぶりです、兄貴！」

「おはよう、求道丸。一つ頼みがあるんだが、いいか？」

「もちろんです！」

一輝は、相変わらずの楽さに、解決したことを確信する。

「えっと……その人はだれ？」

話に加われずにいた三人のうち、音央が一輝に尋ねる。

「ん？ああそうか。お前たちとは初対面だったな。コイツは、倉庫の中で畑をやってくれてる、」

「木の葉天狗の、求道丸です！姐さん方のことは、兄貴より聞いています！」

求道丸は音がる勢いで頭を下げる。

格好が、上半身裸なのでちよつとシニールだ。

「えっと……六実音央です。」

「同じく、六実鳴央です。」

「ヤシロですつ。よろしく、求道丸お兄さん！」

「はい、よろしくお願いします！音央の姐さん！鳴央の姐さん！ヤシロの姐さん！」

四人は、挨拶を終える。

「で、今回頼みたいことはこういう事情なんだけど……」

一輝は求道丸にこの流れを説明した。

求道丸は珍しく、話の内容を全て理解し、

「分かりました！その馬肉を殴り飛ばせばいいんですね！」

とても張り切っていた。コイツは妖術を使えないが、体術に長けている。

その一環として、強敵探しのたびをしていたのだとか。

「そうだ。じゃあ、四人は頑張ってくれ。」

「はい！」

こうして、一輝チームの中から出場選手が決定した。

ちなみに、海馬は一輝がさつきと選び、一分もかからなかったとか。

「さて、まだ畑の作業が終わってないので、戻ってもいいですか？」

「ああ。じゃ、明日はよろしくな。」

「もちろんです！」

求道丸は倉庫の中に戻っていく。

「あ、そうだ。お姉さん達。」

「なに？」

「なんででしょう？」

一輝が部屋に戻ろうとすると、ヤシロが音央と鳴央を呼ぶ。

「私、一生お兄さんというっていう契約を、昨日交わしたから。」

その言葉で二人が固まったので、いやな予感がした一輝はその場を脱兎のごとく去った。

一対三

その後、一輝は会場中を使つての鬼ごつこの末、音央の茨に捕まり、二人からロリコン、と責め立てられたのだが、しっかりと説明をし、「何考えてんだ。」と言うと、二人とも顔を真っ赤にして謝った。

「ごめん・・・勘違いしてた。」

「つい、冷静さを失つてしまい・・・」

「いや、もういいから。つてか、ヤシロちゃんも何であんな言い方?」

「そつちのほうが目白そうだったからだよ!」

ヤシロの気まぐれにより、大変なことがあつた一日は、この後は何もなく終わった。

|||||

「スレイブSIDE」

「で、今日はなにをする?」

「マスターのしたいことで。」

私は、マスターの問いかけに対してそう返した。

マスターは困つたような顔をしているが、確かめたいことがあるからこれでいい。

「いや、これは俺とスレイブとの親睦を深める意味も有るから、出来ればスレイブが・・・」

「私はあなたの剣。貴方の喜びは私の喜びです。」

「えっと、そうじゃなくて・・・」

これはこれで事実だから、仕方がない。強いて言うならあの露店は面白そうだが、今はいい。

「あそこの店か。えっと・・・剣を使つての三本勝負?」

なぜ分かつたのでしょうか?私がああ露店に興味があると。

「いや、顔に分かりやすく出てるから。」

「そんなに出てましたか?」

「うん。」

これは恥ずかしいです。それに、目的が果たせそうにありません。これからは出さないように気をつけなければ。

「で、やってく？」

「そうですね・・・そうしましょう。」

「じゃあ、はい。木刀。」

マスターは私に木刀を渡してきました。

つい受け取ってしまいました。・・・これをどうしろと？

「剣持参って書いてあったし、必要でしょ？」

「？別に、私が剣なのですか？」

「いや、それだとスレイブが出れないじゃん。」

・・・どうにも、推測は当たっていいそうですね。

まだ確証があるわけではないので、今は気にしません。

「では、マスターはどうするのですか？」

「見たり、写真を撮ったり。」

「マスターを待たせてまで参加しようとは・・・」

「いいから行ってらっしゃい。自分で体を動かすのも好きだろ？」

なぜそのことを知っているのでしょうか？たまたまマスターは鋭いです。

でも、それなら私は刃物を使うことに違和感があることに気づいてくれても、

「それに、それなら一応刃物じゃないし、違和感も少ないんじゃない？」

既に気づかれています。その上そこまで考えてくださるとは・・・ますます怪しいです。

「すいません。では、行ってきます。」

「おう、行ってらっしゃい。」

私はマスターに一言言ってから、会場に向かう。

「挑戦したいんだが？」

「あ、はい。ではこちらへどうぞ。」

スタッフは案内をしてくれ、その間に説明もされた。

「どうやら向こうの選手三人と戦い、三人ともに勝てれば賞品をもらえるようだ。」

「私はマスターの剣。マスターに恥をかかせないためにも、勝たなくては。」

「何か言いました?」

「いや、ただの独り言だ。」

私は適当にごまかした。

どうせそこまで入り込んでくることは無いのだ。

「そうですか。では、こちらに所属コミュニティとお名前を記入してください。」

やはりそうだ。

私は、ノーネーム、ダインスレイブと記入し、スタッフに渡す。

「は、では、難易度を決めてください。」

「どんなのがあるんだ?」

「一対一を三回、一対三を一回です。」

「一対三を一回。」

マスターを待たせるわけにはいかない。速く、そして確実に勝たなくては。

「分かりました。では、そちらの会場へ。すぐに始まりますので。」

「分かった。」

私は、スタッフの指す、広い場所へと向かう。

人の声が聞こえてくるが、観客でもいるのだろうか?

「では、挑戦者の入場です! アンダーウッドを救った英雄、ノーマムより、ダインスレイブさんです!」

「どうやら、ここをやっているコミュニティはちゃんと理解しているようだ。」

旗印によると・・・一本角だな。

だが・・・観客の中にはノーネームと笑っているものも多いな。

まあ、私を笑う分にはきにしないでいい・・・

「がんばれー、スレイブ!」

マスターが私を応援することで、マスターまでノーネームだと笑わ

れ始めた。

殺しても問題ないだろうか？

「スレイブー！抑えろー！」

止められてしまったのでは、仕方ないですね。

圧倒してしまうことで、我慢しましょう。

「では、一体三で、始めたいと思いますー！」

相手はあの三人か。確かに実力者だが・・・マスターには遠く及ばないな。

私はマスターの太刀筋をまねることしか出来ないが、それでいけるだろう。

「始めー！」

「は!!」

まず、一番弱そうなのを。

《鬼突、十連。》

首を、連続で十回つき、倒す。

のどを押さええてうなつているのを確認し、そのまま、残りの二人から距離を置くと、向き直る。

あの二人はすぐ横で仲間が倒されても何のリアクションもなかった。

隙を突いて、というのは期待しないほうがいい。

「さて、あまり時間をかけたくないのですが・・・」

「それは無理だろうな。」

その瞬間、後ろから声が聞こえてきたので、

《柄頭、鬼面。》

木刀なので、刃の部分を持ってそのまま相手の額にぶつける。

相手の武器に合わせて攻撃をしなかった、こいつのミスだ。

「ガッ・・・」

「二人目。」

そして、振り向く勢いで頭を打ち、気絶させる。

残り、一人。

「あの猫耳、強すぎるだろ・・・」

「ほんとに、ノーネームなのか・・・？」

観客の中からそんな呟きが聞こえてくるが、せめてメイドであつて欲しい。

メイドには慣れても、この耳と尻尾には一向に慣れない。恥ずかしい。

「君、何でノーネームにいるんだ？」

残りの一人からそんな質問がされる。

戦闘中に何をやっているんだ、とは思うが、そういえばマスターもこんなことをしていたな。

おかげで救われたのだから、否定してはダメだろう。

「マスターが、そこにいるからだ。」

「マスター？」

「ああ。我が剣の使い手、私を救ってくれた人だ。」

「そいつは、マスターとしてふさわしいのか？」

「ああ。でなければ、使い手として認めてなどいない！」

マスターへの侮辱に、私は切りかかった。

さすがに防がれたが、それでも続けた。

「それ以上の侮辱は、私が許さないぞ。」

「いや、その格好を見ると聞きたくなくなるんだけど？」

それを言われると少し困るが、それでも、

「あの人は、呪いにまみれた私を救ってくれた。消えるしかないと思っていた私に、別の道を示してくれた。この格好も、あの人の中ではちゃんとした理由がありそうだしな。」

まあ、ただの趣味の類という可能性も、否定は出来ないが。

「ふうん、それならいいけど。」

「もとより、心配してもらう必要などない！」

私は力づくで相手の剣をはじきとばし、がら空きになった胴に止めを加える。

《一角獣！》

半身にした体を捻り、一気に開放する。

相手は数メートル後ろにとばされ、気絶する。

これで全員戦闘不能だ。

「勝者、ノーネームダインスレイブ!」

結果として、相手に一切攻撃をさせず、勝利できた。

マスターのことを馬鹿にした連中も黙っているし、後はマスターと話しをすればそれでいい。

「では、賞品の数多の霊獣の角を使って作った剣を差し上げます!」

・・・剣に剣を渡して、一体どうしろというのだろうか?

「ありがとうございます。では、これで。」

私は剣を受け取ると、すぐにマスターのもとに向かう。

「終わりました、マスター。」

「うん、お疲れ様。」

予想通り、野次馬どもは驚き、言葉を失った。

「これ、どうしましょう?」

「大して強そうにも見えないし・・・ってか、これもろそうに見えるんだけど。」

「そうですね・・・一般的な剣よりは丈夫で、切れ味もありますし、霊獣の力を振るうことも出来るようです。ですが、私や獅子王には遠く及びません。」

「だよな。コミュニティの武器庫にでも放り込むか。」

とりあえず、マスターの倉庫の中にしまっことになった。

「なあ君、うちのコミュニティに来ないか?」

その言葉に振り向くと、野次馬の一人がいた。

マスターを笑ったクズの一人だから、しっかりと覚えている。

「断る。私はマスターに仕えている。マスターのもとを離れるつもりはない。」

「だからって、君はノーネームに埋もれるべきではない。きちんとした待遇をするつもりだし・・・」

そういうと、このクズはマスターのほうを見る。

「コイツよりは、強いやつがいると思うよ?」

私の中で、何か切れる音がしたが・・・

「一回落ち着け、スレイブ。こいつは、お前がいくら言っても聞く気は

ないよ。」

マスターに止められたので、落ち着くことにする。

「アンタは？」

「ノーネームの寺西一輝。コイツのマスターだよ。」

「だったら話が早い。そちらのお嬢様を、こちらに譲ってもらおうか。貴様には手に余るだろう？」

今すぐにも斬りかかりたいが、マスターが手振りで抑えるよう示すので、マスターに任せることにする。

「確かに、俺にはもったいないくらいの子だけど、オマエに比べれば圧倒的にましだよ。」

「何だど？」

「どこのコミュニティか知らないが、オマエにはこの子を渡す気はないし、俺が劣つてるとも思わないし、何よりこんな可愛い子を渡すつもりはない。」

最後の一つは必要だったのだろうか？

そして、やはりこの人は、私のことを　として見ている。

今、確信した。

「そこまで言うのなら、示してもらおうか。」

「どっちが強いのかを？」

「ああ。さすがに、ノーネームにそこまで言われて黙っているわけにはいかないからな！」

クズがキレたが、マスターは何のリアクションもない。

むしろ、この程度かとがっかりしているようだ。

「いいよ。言い訳できないように、主力メンバー全員出したら？」

「後悔するなよ、小僧・・・！」

「じゃあ、すいませーん！場所借りてもいいですかー!？」

マスターは一本角の人に、場所の使用許可を取りに行く。

こうして、マスター対コミュニティ「剣閃烈火」の試合が執り行なわれることになった。

結果が目に見えてるが、それは気にしないほうがいいだろう。

剣閃烈火

さて、マスターたちが場所を借りて戦うことになったのはいいが・・・なぜ私は観客なのだ？

私はマスターの剣なのに・・・

「まあ、見てなつて。それに、あいつら程度にスレイブや獅子王どころか、量産型妖刀すら使うのはもったいないよ。」

それに、女の子が参加するようなものじゃないし。」

また考えていることが読まれた。

不満そうな顔でもしていたのだろうか・・・？

「それに、あいつらを叩き潰したいんだ。」

「マスターは、たまに戦闘狂になりますよね。」

「マジで？それ、結構いやだな・・・」

「剣としては、マスターのような戦闘狂に使われることは本望です。」
快樂殺人者のようなやからに使われるのは、心の底から嫌ですが。

マスターのように、戦いを楽しんでくれるものになら、いくらでも力を貸します。

「ですが、それではマスターの武器は？」

「これ。俺のギフトから考えれば、結構相性はいいんだよね。まあ、スレイブたちには及ばないけど。」

マスターが見せてくれたのは・・・木の枝でした。

「・・・それでどう戦うのですか？あのクズどもはマスターには遠く及びませんし、負けるとは微塵も思っていないませんが、」

「大丈夫だって。負ける可能性とかないし、他にも使うから。」

そういって、マスターはクズどものところに歩いていきました。

「さあ始めようか。スレイブとまだ遊ぶ予定だから、時間はないんだよ。」

「ふん、恥をさらす覚悟をしておくんだな。」

そう言いながら、剣閃烈火からはかなりの数が来ている。

向こうからすれば、アピールのつもりかもしれないが・・・他の観客は「名無し」相手に・・・という空気だ。

まあ、マスターが戦い始めれば変わるだろう。

「ルールの確認に入ります。」

審判を頼まれた一本角のものが、*“契約書類”*に書かれているルールの確認を始める。

「まず、ノーネーム、寺西一輝が敗北した場合、ダインスレイブは剣閃烈火に移る。」

マスターが負ける可能性などないから、私は承諾した。

「次に、剣閃烈火が敗北した場合、今回のゲームで使った全ての刀剣類を寺西一輝に譲り、無礼をわびる。」

マスターは別にいらんと言ったが、聞く耳を持たずに入れてきた。

「両者、問題ありませんか？」

「ノーネーム、問題ありません。」

「一つ質問をしたいのだが・・・！」

マスターは問題ないといったのに、クズは何かあるようだ。

手短に済ませ。

「どうぞ。」

「では、それは何だ!?我々を侮辱する気か!!」

クズはマスターの持っている木の枝を指差して喚いた。

キサマごときにマスターの考えが分かるわけがあるまい。

「ん?これ?武器だよ?」

「ふぎけるな!」

「至極まじめだよ。といっても、他にも使うけど。」

「そうか。ならよい。先ほど得た剣も・・・」

「このチャッカマンを!」

「ふぎけるな!!!」

マスターはポケットの中からチャッカマンを取り出す。

私は前にそれを使うところを見たことがあるが・・・

「なるほど、そういうことですか。」

ならばあの枝は・・・確かにマスターには相性のいい武器になる。

「ええい!もういい!さっさと始めろ!」

「は、はい。では、始め!」

審判の合図とともに、クズどもはマスターを取り囲み、各々の剣を抜く。

そして、マスターの持つ枝からは・・・水が出てきて、マスターの周りを漂い始める。

マスターの持っていたのは、水樹の枝。

そして、マスターのギフトを使えば・・・

「発射！」

相手の持つ剣を、同時に全て弾くことも可能だ。

「な、」

「まず五人。」

そして、マスターはがら空きにあったところに水の弾を撃ち込み、気絶させる。

音から、一切、骨を折っていないようだ。

私なら、腕の一本ぐらいは切り落とすが、マスターは優しいですね。

「さて、まだやるかい？」

マスターが残っているクズどもに言うと、そいつらは新たな剣を取り出す。

今のを見てもなお、勝てると思っているのだろうか？

「全員、かま」

「えられるかな？」

マスターはチャッカマンの火をつけ、それを槍の形に、大量に作る。

同じだけの水の槍も出来ており・・・

「一声掃射！」

それを一気に放った。

容赦なく、剣すら構えさせません。

「これで・・・残り一人か。」

土煙が晴れると、立っているのはマスターとクズどものリーダーの二人だけ。

クズのほうは吹くは土まみれで、息も上がり、元いた位置からはかなり離れているが、マスターは対照的に服は綺麗で息も整い、元いた位置から一切離れていない。

分かりやすく、マスターの強さが現れています。

「さあ、まだやる？」

「・・・ああ。俺は、貴殿との一騎打ちを申し込みたい。」

なんだか口調が変わっているのだが・・・先ほどまでのことを覚えているのだろうか？

「無論、このようなことが出来る立場ではないことは重々承知。しかし「いいよ。」これほどの実力者にとって、え？」

クズは驚いた顔でマスターを見る。

「どうせ結果は変わらないし、たまにはこういうのもいいしね。さつさと構えなよ。」

マスターは倉庫の中からもなんでもない、ただの日本刀を取り出し、鞘から抜く。

「・・・感謝する。」

そして、クズも新たな一振りを取り出し、構える。

「じゃあ、いくぞー！」

マスターは日本刀を手に持ち、そのまま駆ける。

「ふんー！」

クズはタイミングを合わせて剣を振るうが、それは日本刀に受け止められ、受け流される。

「はい、おしまい。」

そして、バランスを崩したところにマスターの剣が打ち込まれ、クズは気を失った。

「勝者、ノーネーム、寺西一輝！」

その圧倒的な力を目の当たりにし、観客は言葉を発せずにいた。

うん、実によい反応だ。

|||||

「この度は数々の無礼をお詫びさせていただきます。」

「|||||」まことに、申し訳ありませんでした！「|||||」

クズどもは全員がおきると、全員そろって土下座をした。

マスターは面倒くさそうにしているが……ここまで変わるものなのか。

「こちら、我々の使っていた」

「いらん。さっさとしまえ。」

マスターは言葉をさえぎり、そう言う。

クズどもは驚いているが、まあ、今回は使うだけの時間がなかったが、それなりに強い恩恵を宿しているものもあるのだ。そうなるだろう。

「ですが、ルールでは、」

「じゃあ、お前らにやる。俺には、」

というと、マスターが手を握ってくるので、私は剣の姿になる。

そして、ギフトカードから獅子王も取り出し、二刀を構えると、

「こいつらがいるからな。その程度をもらっても、邪魔なだけだ。」

「……ありがとうございます。」

クズどもは、再び土下座した。

マスターが獅子王をしまうので、私も人の姿に戻った。

「もういいから。暑苦しいから。」

「我々、あなたに忠誠を」

「誓うな。」

結局、そいつらはマスターのことを師父と呼ぶようになり、その場を去った。

「面倒なやつらだな……出来ればもうかかわりたくない。」

「そうですね。」

本当に、かかわりたくない類の連中だ。

さて……そろそろ問いただすべきですね。

「少し移動しませんか？かなり人も集まってきましたし。」

「だな。どこか行きたいところある？」

「そうですね……ではあちらに。」

私は、サラから聞いていた露店が一切出ていない、人気のない高台を指差す。

「ん、じゃあ行こう。」

話したいことがありますし、それを考えると人気はないほうがいい。
あそこはぼっちりだろう。

スレイブ

「で、話したいこと、あるんでしょ?」

着くなり、マスターにそう切り出されます。

どう始めるか悩んでいたのも、助かります。

「はい。マスターは私のことを、どう認識しているのですか?」

これが、私が確認したいこと、昨日推測していたことだ。

「どうつて?」

「そのままの意味です。あと、ここからは割りと本音で話すので、口調が荒くなってしまいかもしれませんが、お許しください。」

「べつにいいよ。で、どう認識してるかだけど・・・仲間。友達。あとは、家族、かな。」

「あなたの剣、ではなく?」

「それもあるけど、さっき上げたの方が大きい。」

やはり、そうでした。

「つまり、私のことを人間として認識している?」

「当たり前だろ?」

「当たり前では有りません!」

でも、それは違います。

「私は剣!あなたが振るう、あなたの剣!決して人ではない!」

「人だよ。」

「だから違うと」

「違わない。そんなことを言うな。」

マスターはいつもよりも低い声で、私の言葉を遮る。

「スレイブはしっかりと自我を持つてる。自分というものを認識してる。そういうやつらは、人だよ。」

「違います!私は、」

そこで、私は一度剣の姿になり、また人の姿を取る。

「今のような姿に成れる!そして、今の姿が私の本性です!」

「だからなんだ?それにお前も言ったじゃないか。私も一応、女ですよ?」って。」

「それは・・・確かにそうです。ですが、私は剣で」

「それは関係ないってさつき言ったよな？」

マスターは、どうして私をそう見るのですか。

「俺は、お前の本質が何であろうと、人としてみる。認識する。」

どうしてそんなに、優しいのですか。

「どんな姿になれるかだって、何も関係ない。俺も人ならざるものの姿をとれる。妖怪、魔物、そういったものにな。」

それでは、ダメなんです。

私は、剣なのだから。

「・・・私はっ、魔剣、ダインスレイブでしたっ。」

なぜでしょう？ 嗚咽が出てきてとてもしゃべりづらいです。

「ですが・・・私は呪いを失い・・・剣と、なった。」

マスターを見ますが、視界もぼんやりとしています。

それに・・・頬が、何かで濡れているようです。

「それでも、私は、剣、です。ただ、振るわれるもの・・・。」

これでは、マスターの顔がよく見えないじゃないですか。

「なのに・・・私はっ、感情を持った。憎悪の類ではなく・・・喜びを。

楽しみを。持ってしまった。」

そして、マスターに情けないところを見せてしまいます。

「それは、剣に、あるまじきこと、です。でも、マスターは、」

両手を使い、涙を拭いますが・・・止まってくれません。

「なぜ、マスターは優しくするのでか！それがなければ・・・感情を

持たずに、入れたのに・・・」

これでは、情けない姿は一向に直りません。

「これでは、マスターの、お役にたてない。恩を、返せません！」

それに、マスターの顔が、見えません。

「お願いですから・・・私に、恩を返させてください・・・」

こんなにも見たいのに、見る事が出来ません。

「お願いしますから、私を・・・」

でも、何でこんなことを思うのでしょうか？ 私は、剣なのに。

「私を、あなたの剣でいさせてください・・・」

ああ、それでも、こう思わずにはいられない。

「あなたと共に、いさせてください……」

きつと、マスターは微笑んでくれている。

私のことを、やさしく見てくれている。

それを見たい。

でも……見る事が出来ない。

力が抜けて、私はその場に腰を下ろしてしまいます。

崩れる様に、下ろしてしまいます。

「そっか。ありがとう、スレイブ。」

なぜ、ここでお礼を言うのでしょうか？

「でも、それは間違いだよ。」

マスターは、言いながらゆつくりと、私に近づいてきます。

「そんなに悩ませちゃったのは、あんな言い方を、俺の剣になつてくれって言った、俺のせいだ。本当に、ごめんな。」

マスターは私に謝りながら、近づいてくる。

そんなことはありません。私は、あの言葉に助けられたのですから。

謝るのは、私のほうなんです……

「だから、ハッキリと言っておくよ。」

マスターは、私の目の前まで歩いてきました。

そして、私の頭に手を置いて、

「俺は、そんなスレイブのほうがいい。」

撫でながら、そう言ってくれました。

それは、反則です。涙が、余計に止まらないじゃないですか。

「嘘、です。そんなの、」

「嘘じゃないよ。俺は、今のスレイブと一緒に居て欲しい。」

私は、声を上げないよう、必死になきます。

そこまで情けない姿は、見せたくありません。

「だから頼むよ、そんなこと言わないでくれ。」

「でもっ、私は剣なのに、」

「確かに、お前は剣だよ。でも、感情はあつていいと思うんだ。」

さつきより、嗚咽がひどくなってきました。

「むしろ、そうであって欲しい。剣として一緒に居るなら、それだけの時間を過ごすなら、家族みたいなもんだろ？」

「家族……？」

ああ、ダメです。

もう、感情を抑えるのが辛いです。

「ああ。家族。そして、家族には笑顔でいて欲しい。」

「私は、家族になっても、いいのですか？」

「いいよ。」

「私は、剣なのに。」

「いいんだよ。それに、俺は人としてみてるんだ。」

「迷惑に、感じるかも、」

「家族つてのは、そういうもんだ。妹が兄に迷惑をかけて何が悪い。」
もうダメです。

聞かずには、いられません。

「では、箱庭にいる間、あなたと共に居て、いいのですか？こんな、剣として中途半端な、私が？」

「もちろんだよ。ってか、箱庭を出てからもだ。」

マスターは、私の望み以上のことを許してくれた。

感情を持つていても、関係ないといってくれた。

マスターの剣で、いさせてくれた。

「だからさ、もうそのことで悩むな。」

感情を持つてていいんだ。むしろ、喜ぶべきことなんだ。」

そうか、私は……それを、受け入れることが、出来なかつたのか。

「スレイブが望むなら、一緒にいて欲しい。」

剣として、仲間として、友達として、家族として、妹として、一緒に

にいて欲しい。」

そういつて、マスターは、私を抱きしめてくれた。

ああ、なんて暖かいのだろう。

もう、我慢できないじゃないか。

「うあ、マスター、私、私、」

「もう我慢するな。泣きたいときには、泣いていいんだ。声を上げて、泣いていいんだ。」

「でも、私……」

「いいんだよ。一回泣いて、すっきりしろ。泣き止むまで、一緒にいるから。」

感情は全部、受け止めてやるから。」

私は、そこでもう我慢が出来なくなり、声を上げて、泣いた。

生まれて始めて、感情をさらけ出した。

マスターは、そんな私を、優しく、抱きしめてくれた。

私が泣き止むまで、ずっと。

ヒツポカンプの騎手 ①

「さて、騎手はどうしましょう?」

一輝がスレイブとデートしているころ、鳴央達は開会式前に騎手を決めていた。

決めるの遅いだろ。

「求道丸お兄さんは動き回るほうが得意だろうし、音央お姉さんも飛び回る戦い方だから、鳴央お姉さんか私かな?」

「私は、あの力を使う際に集中しないとなので、ヤシロちゃんに任せてもいいですか?」

「いいけど、鳴央お姉さんについてこれる? 時速70キロ出るらしいけど?」

「一輝さんから、式神にした送り狼を借りています。」

便利性から、ブラック★ラビットイーターを式神にした後、一輝は送り狼も式神にした。

「なら大丈夫だねっ。私が騎手をやるよ!」

こうして、消去法で騎手はヤシロになり、そのまま十六夜たちの元に向かう。

余談だが、求道丸は精神統一と言って、スタート地点近くで座禅を組んでいる。

「ヤッホー、十六夜お兄さん!」

「ん? ああヤシロか。」

十六夜は、そのまま自分達のほうに向かってきた女性陣を見て、

「おう、三人も、中々にエロいぞ。」

「貴方、またそれなの?」

そう言いながら、親指を立て、飛鳥には呆れられていた。

三人の格好だが、ヤシロは一輝が可愛いといったワンピースタイプの水着、音央と鳴央はビキニタイプの水着だ。二人のFカップの胸はかなりの迫力である。

「イエーイー!」

「何で感想が一輝と一緒になのよ・・・」

「男性は皆そうなのですか・・・」

そして、ヤシロは十六夜にピースサインを返し、音央と鳴央は顔を真っ赤にしている。

「にしても・・・普段から思ってたんだが、六実姉妹ってホント似てるな。」

「あら、双子なんでしょう？当然じゃない。」

「いや、水着だから気付いたんだが、体つきも似すぎてないか？」

「眉毛の色から考えて、一卵性じゃないだろうし。」

十六夜に言われて、耀も二人を見比べる。

水着姿でじろじろと見られ、顔が赤いまま、二人は説明を始める。

「実は、私たちは元々同じ存在なんです。」

「『妖精の神隠し』チエンジリングって聞いたことない？」

「私は聞いたことないわ。」

「私も知らない。」

「俺は少しだけ知ってる。ヨーロッパの子供が入れ替わる都市伝説だったか？」

「そう、それ。私たちは元々はその都市伝説だったの。」

「私が神隠し、音央ちゃんが妖精でした。」

「で、私が箱庭に召喚するとき、ゲームのために二つに分けたんだ。懐かしいなく。」

そんな会話をしていると、黒ウサギが来てその水着について音央と鳴央以外の四人で弄り、黒ウサギが挨拶をしようとすると、雄たけびに邪魔をされ、白夜叉が悪乗りし、色々遠回りをしてようやく、白夜叉が開始を宣言した。

『それでは参加者達よ。指定された物を手に入れ、誰よりも速く駆け抜けよ！』

此処に、『ヒッポカンプの騎士』の開催を宣言する！』

|||||

「ア、奈落の穴！」

その直後、フェイス・レスが参加者達の水着を切り裂き始めたので、鳴央が慌てて奈落の穴を使い、盾にする。

「な、なんて恐ろしいことを・・・」

「でも、確かに有効な手ではあるよね。」

ヤシロの言うとおり、フェイス・レスの攻撃によって騎手の大半は自ら水中に飛び込んでいる。

「にしても、これが話に聞いていた奈落の穴ですか。素晴らしいです！ぜひ一度、立ち向かってみたい！」

「一瞬で神隠しにあうから、止めといたほうがいいわよ。」

求道丸はなんにでも立ち向かおうとするバカなので、いつか立ち向かい、神隠しにあうだろう。

「さて、予定通りでいいのかな？」

「ええ、それで」

『クツ、流石は我が仇敵が選んだ騎士ツ！血も涙もない冷徹なその判断力と、肌には傷を付けず水着だけを切り捨てる剣技ツ！宿敵の臣下なれど見事だと言わざるを得ないツつうかもつとやれヤツホウウウウウウ!!』

「「ヤツホオオオオオオオオオ!!」」

「・・・それでいくわ！春日部さんに付いて行って！」

「了解！」

「分かりました、音央の姐さん！」

「いいですけど、あれをスルーなのですか？」

最近、一輝のスルースキルを身に付けてきた音央である。

ちなみに、トップ集団の順位は、一位、フェイス・レス。二位、飛鳥。三位、ヤシロ。四位〜六位、二翼。といった形である。

そして、耀が進んだ道を四人も進み、どうにか声が届く距離につめる。

「耀お姉さん！私たちも来たよ！」

「え、ヤシロ？それに音央たちも・・・」

「いいから！こっちにグリフィスたちがいるんでしょう？」

「私たちは、あの方を倒すために参加しましたから！」

鳴央が簡潔に説明をすると、耀も一応納得する。

「分かった。私は飛んであいつらの前に行くから、音央はついてきて。他の皆はこのまま進んで、あいつらに追いついて！」

「「了解！」」

「妖精の羽（ティンカーベル）！」

耀は光翼馬の具足を装着し、音央は背中から妖精の羽を生やして、飛んでいく。

残りの、鳴央、ヤシロ、求道丸はそのまま走って目標の元に向かう。

ヒツポカンプの騎手 ②

「La grand étouille par sept jours brûl
Nue fera deux soleils apparoir :
Legros mastin toute nuit hurlera,
Quand grand pontife changera de terre
「茨の檻！」

全員が攻撃を出来る間合いに入ると、ヤシロは二翼の後方から火の玉を放ち、耀と音央は二翼の前方から輝く旋風と茨を放つ。

それにより、有翼種は二体、他のサポートが落とされ、動きを止められる。

そして、自分達を襲撃したのが誰か分かったグリフィスは、

『先日の遺恨を晴らしに来たか、小娘ども！』

「・・・別に、遺恨なんてないし。戦略的に潰しに来ただけだし。」

「二」何を言ってるのか分からない。「二」分かりません。」

『ッ、何処までも舐めてくれるな・・・それより、私は人語を使っておる！』

キレた。普通にキレた。

『貴様ら！今すぐ取り囲み、攻撃を』

「是害流究極絶技、其の式！『空木倒（うつぎだおし）！』」

グリフィスが指示を出し切る前に、求道丸が二翼の一人に向かって走り、ハイキックを喰らわせ、水中に叩き落す。

『な・・・』

「おらー！どんどんいくぞー！『虚空太鼓（こくうだいこ）！』」

求道丸がさらに攻撃を加えようとするが、グリフィスは雷を放ち、求道丸をはじく。

はじかれた求道丸に傷がないあたり、十分な実力を持っている。

ちなみに、空木倒は木の倒れる音が聞こえる怪異、虚空太鼓は海上で太鼓の音が響くという妖怪現象なので、本来は決して、物理的なものではありません。

「なかなかやるな、あの馬肉！」

「求道丸お兄さんもね。その姿が本来の？」

「はい、これが木の葉天狗の本来の姿です！テンションが上がっていると、どうしてもこの姿になってしまつて。」

今の求道丸の姿はオウムとトカゲと狼を足して三で割つたような姿だ。

「まあ、自分は妖術が一切使えませんので、こちらの姿になっても何にも変わりませんが！」

「嬉々として言うことなのでしょうか・・・？」

常に前向きハイテンション、それが求道丸である。

そんなことを話している間にも、耀が輝く旋風の竜巻を起こして相手を落としたり、それでバランスを崩したやつらを音央が茨で縛り、水中に落としていく。

『この・・・喰らえ！』

「させません。奈落の穴。」

グリフィスは、二人が自分に注意を向けていないタイミングを狙つて雷を放つが、全て鳴央の奈落の穴に吸い込まれ、

「奈落の門。」

グリフィスの前に作つた門から放つ。

『この・・・猿無勢があー！』

「俺は天狗だあ！」

求道丸の拳と、グリフィスの雷がぶつかる。

その拳は、十六夜のように霧散させることはない。

しかし、雷を貫いていく。

『な・・・キサマ、一体どのようなギフトを、』

「ただの体術だあ！」

そう、求道丸は何のギフトもなく、己の拳だけで雷を貫き、グリフィスに一撃を入れる。

「耀の姐さん、後は頼みます！」

「うん、分かった！」

そこからは、グリフィスは耀一人に任せ、

Le^五tre^のmb^月lement^にsi^大fort^いau^なmois^るde^地Ma^震

Sa^土tu^星rne^は,Ca^魔per^羯,Ju^宮piter^水,Me^木rcu^星re^はau^金bo^牛e

Ve^金nu^星aus^巨si^蟹Can^宮cer^火,Ma^星rs^はen^処Non^女na^宮y,

Tom^やbera^がgre^てsl^卵elors^りplus^もgros^大se^きpu^電u

「奈落の穴！」

「真夏の夜の夢！」

「空木倒！」

四人による、オーバーキルが始まり、二翼はどんどん失格していく。

耀のほうがクライマックスに入ったころには、騎手の一人を除いて全員が失格していた。

「ヒッ！」

残りの騎手も、自ら河川に飛び込もうとするが、

「茨の檻！」

音央によつて茨で縛られ、飛び込めなくなる。

「悪いけど、あっちが解決するまで、失格してもらおうわけにはいかないのよ。」

「少し痛いかもだけど、我慢してね！」

その騎手の顔は、今にも死ぬんじゃないか、というレベルで青ざめていた。

|||||

一分後、二人の勝負が耀の勝利で終わったので、捕まえてた騎手を水中に沈めた後、四人で耀の元に向かう。

「お疲れ、耀！」

「うん、頑張った。」

全員がハイタッチをし、喜びを分かち合い、全員で勝利宣言をするのだった。

|||||

「さて、私はこのまま飛鳥たちを待つけど、皆はどうするの？」

耀は四人に尋ねる。

この後で果実をとりに行き、ゴールを目指すには時間がなさ過ぎる。

それゆえの質問だろう。

「まあ、目的は果たせましたし。」

「飛鳥お姉さんなら、トップ集団に入って戻ってきて、」

「そのまま優勝すると思うから、ここでリタイアするわ。求道丸も、それでもいい？」

「はい、皆さん達に従います。そして、後は耀の皆さん達に任せます！」

「うん、任された。後でちゃんと自己紹介をしよう。」

「はい！」

こうして、音央たちは自らリタイアし、後を飛鳥、耀、十六夜に任せた。

そしてそのまま、飛鳥は期待通りに一位でゴールし、勝利を飾った。

親愛なる同士

「ところで、これらどうするのですか、マス、兄様。」

「取り合えず、例の品は買えやし、ヒツポキャンプの騎手の会場で良いんじゃないか？それとも、どこか寄りしたいところある？」

「いえ、大丈夫です。」

スレイブが泣き止んでから、まずは呼び方を変えることにし、二人きりのときは兄様、他の知り合いがいるときは一輝様と呼ぶことになった。

ずっと兄様でいい、と一輝は言ったのだが、スレイブが恥ずかしいから、と断った。

それからは、買っておかなければならないものがあつたので、それを購入し、今に至る。

「お、見えてきたな。さて、ノーネームは優勝できたろうか？」

「あれだけのメンバーで出来なかつたら、逆に不思議です。」

「それもそうか。おーい！」

一輝は、声が届きそうだったので、音央たちに声をかける。

「あ、一輝！そっちはどうなったの？」

「まあ、上手くいったよ。買うものも買えたから、もう完璧に。」

「それはよかったです。」

「こつちも、飛鳥お姉さんたちが優勝したよ！」

「そうか。その様子だと、グリフィスは倒せたのか？」

「はい、耀の姐さんが思いっきり！ところで、そろそろ畑に戻らないと・・・。」

「あー確かにな。これ、この収穫祭で食べれる食い物。中で食べるよ。」

一輝は求道丸に大量の食べ物を渡し、倉庫の入り口を開ける。

「ハイ、ありがとうございます！では、これで失礼します。お疲れ様でした!!!」

求道丸は大声で挨拶をし、倉庫に戻っていく。

「さて、まだ就任式までは時間が有るし、皆で露店、回ろうか！」

「はい！」

このまま、五人は食べ物から遊び系まで、様々な露店を回り、収穫祭の最終日を楽しんだ。

||

|||||

就任式の後、メイドたちには別行動をしてもらい、一輝、十六夜、飛鳥、耀、リリたち年長組は黒ウサギに話しかけるタイミングを探っていた。

「今、じゃないかな？」

「そうですね・・・では！」

リリは、黒ウサギの元に走っていく。

「あの、黒ウサギのお姉ちゃん。」

「・・・リリ？どうしたのですか？」

一輝たちは、リリに頑張れ、と心の中でエールを送る。

それが聞こえたのか、リリは狐耳を紅潮させながら、小袋を手渡す。

「・・・これは？」

「プレゼントです。十六夜様や、一輝さんや、飛鳥様や、耀様や、ジン君や、私たち皆で選びました。」

分かりやすく驚き、視線で問題児達に問いかけると、一輝以外はそれぞれ別方向にそっぽを向き、一輝は黒ウサギのほうを見ながら、それぞれ頷いた。

「・・・ま、こんな面白い場所に招待してくれたし、」

「連盟も組んで、一つの節目が出来たわけだし、」

「何時もありがとう、黒ウサギ。」

「笑顔でいっても、顔を背けたら意味ないぞ、耀。ま、そういうこった。音央たちメイドからのもあるからな。」

一輝は、さつき受け取ったばかりの袋を、黒ウサギに渡す。

黒ウサギは、四人のそれぞれ個性的な不器用な心遣いが嬉しかったのか涙を流し、

「あ、ありがとうございます。．．．ございます。とても大切にしますので．．．！」

黒ウサギがそう言いながら開けようとする、問題児四人は慌ててそれを遮り、黒ウサギの手から取ったプレゼントをリリに渡し、会場の中心まで黒ウサギを連れて走り出す。

「いいから、贈り物の確認なんて後でやれ！」

「今日が最終日なのだから、飲んで食べないでどうするの!？」

「まだまだ楽しむことはたくさんある！」

「行こう、黒ウサギ！」

「え、ちょよ、ちょっと待ってください！」

黒ウサギは止まろうとするが、今までにない慌て方の問題児達に、そのまま連れて行かれる。

《あんなもん、目の前で読まれるのはちよつとな。》

最初に黒ウサギに渡した袋の中には、プレゼントのほかに手紙が入っている。

四人ともが、それぞれ黒ウサギに書いた手紙で、

『親愛なる同士・黒ウサギへ』と、宛名に書いてあった。

|||||

「へえ、ちゃんと居場所があるんだね。それも、心から楽しめる。」

そんな集団を．．．いや、一輝を見ている少女が一人、いた。

「にしても．．．あんな笑顔、見たことあったかな．．．? 明るくなつた?」

少女は携帯電話を取り出し、一輝の顔を撮影する。

そのまま待ち受けの画像にすると、満足したように笑みを浮かべて、

「じゃあ、まあね。．．．兄さん。」

夜の暗闇に、消えていった。

|||||

「さて、それでは！第二回女子会を始めます！」

一輝のメイドたちは、音央が使わせてもらっている部屋に集まり、女子会を始めていた。

主催者はヤシロである。

「って集められたわけだけど、何を話すのよ？」

「一輝さんがどのような人かは、この間話しましたし。」

二人は話す内容が見つからず、ヤシロに聞きなおす。

「まあ、お姉さんたちは聞くだけになるかな。話すのは私とスレイブちゃん。」

「私もか？」

スレイブは話すような内容を探し・・・一つだけ見つける。

「・・・そういうことか。」

「理解できた？なら、まずは呼び方が変わったことからお願い。」

スレイブは観念したのか、恥ずかしくない程度の範囲で、今日あったことを話す。

「・・・お兄さんって・・・」

「まあ、こうなるんじゃないかとは思ってたけど・・・」

「性格的なこともありますしね・・・」

三人は、呆れ半分、関心半分といった様子だ。

「で、ヤシロのほうはどうなんだ？私は何も知らないが。」

「うん、スレイブちゃんだけは知らなかったね。」

自分がしゃべらせたので、ヤシロも何があったかを話していく。スレイブと違うのは、あったことをすべて話したことだ。

「そうか。なら、ヤシロも一生一輝様についていくと？」

「うん、そうなるね。これからもよろしく！」

「・・・はあ。分かった。よろしく。」

二人は握手をした。

「まあ、お兄さんが誰を選ぶかは、お兄さんに任せるってことで。」
「なんの話だ？」

「結婚とか、そっちの話。」

ヤシロが当たり前のように言うと、スレイブの顔が真っ赤になり、「なにを言っているんだ、貴女は！」

「何って、結婚とか、そっちの話。」

「だから、なぜ、」

「スレイブちゃん、お兄さんに恋してるでしょ？」

それがスイッチだったのか、スレイブの顔がさらに赤くなり、

「もう寝る！お休み！」

そのまま走って、部屋を出て行った。

「うくん・・・あれはまだ大変かな？」

「なにやってんのよ、アンタは・・・」

ヤシロが振り向くと、二人が呆れたような顔をしていた。

「あははっ。一回自覚させようかな、と。」

「まあ、それは大切ですけど。」

「今じゃなくても・・・」

「まあ、ちよつとあせつてたのは認めるよ。」

ヤシロは素直に認めた。

「でも、早めに自覚しておかないと、いつ言ってもあれだろうし。お姉

さん達はどうするの？」

そのまま、音央たちに問いかける。

「うくん・・・私たちは、そういう感情よりも、感謝とかの方が大きい

から、」

「まずは恩返しから、ですかね。」

「そっか。まあ、少しでもあることを自覚してるならいいや。お休み

〜。」

そのまま、ヤシロも部屋を出て、自分の部屋に向かう。

「・・・じゃあ、これで終わりにしましょうか。」

「ええ。明日も速いですし、もう寝ましょう。お休みなさい。」

「うん、お休み。」

そうして、鳴央も部屋からでていき、女子会は終わった。

ウロボロスの連盟旗 煌焰の都

さて、煌焰の都にいる問題児達は、耀の突風に運ばれ、煌焰の都の象徴である、巨大なペンダントランプの上に乗った。

その際にヒビが入ったような音がしたが、問題児達が気にするわけではない。

「おお！思った以上に絶景じゃねえか！」

「ええ。炎と硝子の街だけあって、まるで地上の宝石箱だわ。」

「うん。アンダーウッドとは対照的な景観。」

「ここから眺めてるってのも大きいよね。」

一番目立つように設置したものの上から眺めれば、景色もすばらしいものになるだろう。

そんな風に眺めていれば、当然注意をするものも出てくるが、問題児達はそんなことを気にもせず、真面目に悪戯を執行していく。

「さて、そろそろ弁当にするか？」

「うん、一輝、お願い。」

「了解。」

一輝は、倉庫の中から城下で買っておいた弁当を全員分取り出し、配っていく。

仲良く昼食を取りながら、歓談を始める。

ちなみに、一輝の弁当はラーメン。カップなどではなく、普通の完成品だ。

いくら時間がたっても伸びず、冷えず、こぼれることもないあたり、箱庭は凄い。

「そういえば、春日部はまだ参加するゲームが残ってるんだろ？」

「うん、火龍誕生祭でも参加した『造物主の決闘』。今回はリベンジ。」

「ふふ。今回こそ勝てると良いわね。」

「楽しそうだな。俺も参加すればよかった。」

「何か創作系のギフトはあるのか？」

「お札がOKだったらしい。」

そんな会話をしているうちにも、耀は三つのおにぎりを頬張り、頬袋をいっぱいになっている。

下のほうでいまだに怒鳴っている人がいるが、四人にとってはBG Mでしかないのです、気にしない。

「で、十六夜はこれからどうするんだ？」

「俺？今日は散策にでも行こうと思ってたし、特に予定はないな。お嬢様に付いて行つてからはノープラン。」

「あら、珍しい。普段は考えすぎなくらい計画的に過ごしているのに。」

「そうか？一人で魔王に挑んで行つた一輝に比べれば、たいしたことじゃねえだろ。」

「それ、今は関係ねえよな。」

「まあ、一輝はやりすぎだけど、」

「オイ。」

「たまにはそういう日があつてもいいと思うよ。十六夜は普段から色々考えすぎだし、一輝は考えずに動きすぎ。もう少し周りの速さに合わせて生きて欲しい。」

「それはなんとも難しい注文だな。俺としては今でも十分に歩幅を合わせて生きているつもりだぞ。少なくとも、一輝よりは歩幅を合わせてるはずだ。」

「俺がまったく合わせてないみたいに言うな。お前よりはよっぽどましなはずだ。」

まあ、二人とも何でもかんでも解決していこうとするので、そこまですり合はない、と思われる。

「さて、そろそろ別行動に移るか。俺とお嬢様はジャックたちと合流してくる。」

「私はゲームに参加。一輝は？」

「メイドたちも、何か色々やりたいことがあるらしいから、自由にしてるし、適当に散歩でもするよ。」

まあ、そのやりたいことが一輝関係ばかりなのだが、本人は知る由もない。

そんな気楽に話す四人の背後には、憤怒の闘気を纏い、仁王立ちをする黒ウサギがいるのだが、やはり四人は無視をし、弁当を食べきる。

「では、ここで一時解散とするか。」

「だな。いや、散歩しがいがありそうだ。」

「で、飛鳥はどうするの?」

「どうするも何も、私は皆と違って一人じゃ降りられないわ。誰かに下ろしてもらわないと。」

「なら、確かまだ水があった

「その前に黒ウサギが叩き落してあげます、この問題児様方あああああああ!!!」

スパパ。パ。パ。ア。ア。ン!!!と、勢いよくハリセンが振るわれ、四人はペンダントランプから叩き落される。

「じゃあ、俺はもう行くな。」

「行つてらっしゃい。」

それでもなお、問題児達は通常運転である。

だが、それも行かず、

「待たんかー!」

しばしの間、亜龍との鬼ごっこをすることになった。

|||||

「あー……疲れた……」

一輝は、黒ウサギたちとは別ルートで逃げることでお説教を回避し、一人散歩をしていた。

「にしても……やっぱり凄いやな、こーい。」

一輝の視線の先には、七色の炎を放つキャンドルランプ、それに群がる炎の微精霊、極寒の土地にはとても似合わない。

「もといた世界だと、あんな小さいのすら殺すやつらがいたからなく。ホント、見境がない、金の亡者だらけだよな。」

一輝は誰かがいるわけでもないが、誰かに話しかけるように言う。

一輝は何の返答もない、そう思っていたが、

「うん、本当にそんな人ばかりだったね、兄さん。」

予想外なことに返答があり、慌てて振り返る。

「でも、父さんもそうだったし、一族全体で見れば、私たちの家系も、金の亡者だと思うよ。ともあれ、久しぶり、兄さん。」

そこには、一輝がもう長いことあっていない、一輝の妹。

湖札が、立っていた。

再会

「えっと・・・湖札か？」

「うん、湖札だよ。今は、天野湖札、だけど。」

一輝は、目の前にいるのが間違いないと自分の妹だと確信すると、

「湖札ー!」

「わ、ちよ、兄さん!」

抱きついた。感動のあまり、抱きついた。

「うわー、やべえ。予想以上に嬉しい!自分の家族に久しぶりに会うって、予想以上に嬉しい!」

「嬉しいけど、それは嬉しいんだけど!周りの目が痛いことになってるから!一回離して!」

「断る!」

「断らないで!」

一輝は仕方なく、湖札から離れる。

「にしても、まさか生き別れ(?)の家族に異世界で会うことになるとは・・・」

「まあ、普通じゃないよね。」

「ところで、湖札はもう父さん達のこととは・・・?」

「うん、何か急に陰陽師課の人から電話があって、説明された。」

「そっか。じゃあ聞いたくけど、俺奥義習得したんだ。」

「へえ、兄さんもしたんだ?」

「ああ。何か、全部くれた。湖札は?」

「二、三。こっちの中にいるぬらりひよん、ケチなのかな・・・」

「全部の檻の中に、平行して存在するだけだし、そこまで変わらないだろ。で、本題だけど、」

「どうぞ。」

「苗字、どうする?鬼道に戻す?」

「うくん・・・今更こっちの知り合いに苗字が変わったって説明するのは・・・」

「面倒だよな。」

「うん。だから、この世界にいる間は、天野で行く。」

「じゃあ、俺も寺西で行くか。」

そこで一度話を切り、

「さて、湖札は何か参加するゲームある？」

「ううん、ないよ。」

「なら、久しぶりに会ったんだし、一緒に回らないか？」

「うん、行こう！」

二人は手をつないで、歩き出す。

普通の兄妹ならこうはしないだろうが、久しぶりに会ったことと先ほど抱きついたり抱きつかれたりしたことと感覚は麻痺している。

お互いにブラコン、シスコンのケがあることも、原因の一端なのだが……

「で、海外ではどうだったんだ？」

「いろんな人や魔物に会えたよ。仲良くなれたこともあれば……ちよつと戦うことにも……なりました。」

「まあ、陰陽師と魔物ならありそうだけど、人ともか？」

「うん、盗賊団に襲撃されたりして。」

「で、そいつらはどうしたんだ？」

「戦ってる途中で魔物に襲われて、助けてあげたらどっかに行っちゃった。」

湖札は、陰陽師としての実力が一輝と大差ない。

ほとんどの魔物は退治できる。

「まあ、恩を感じたのもあるだろうが、予想以上に強いって分かったんだろ。」

「たぶん、そう。そんな感じでいろんなところを転々として、魔物について学んで、それから日本に帰ったんだ。」

「それっていつの話だ？」

「〇〇年の、一月八日。」

「俺がこっちに来たのと同じ日だな……」

「で、ためにしに神社に行ったら、箱庭に召喚されたんだ。今日で△□日目かな？」

「何でそこまで被るんだよ。奇跡か？」

「奇跡、だね。で、今は拾ってくれたコミュニティで働いてる。私は、誰かが召喚した、とかじゃなく、気がついたらこっちに来ちゃってた、だから。行く場所もなくて。」

「だったら、その人たちには感謝だな。俺は召喚したコミュニティのノーネームにいる。毎日賑やかで楽しいよ。」

一輝は途中で店により、アイスを二人分買って来る。

「はい、アイス。」

「ありがとう。」

極寒の地でも、熱風が吹くくらいには暑いので、アイスは美味しいだろう。

「兄さんは、こっちの世界でどう過ごしてきたの？」

「あつたことと言えば・・・来てすぐに二人助けてメイドにしたり、五桁のコミュニティに喧嘩を売ったり、この辺りで魔王のコミュニティと戦ったり、南側の箱庭の外でたつた三人で魔王に挑んで、そこでメイドが二人増えて、その後すぐに魔王のゲームをしたり・・・かな？」

「いや、なにやってるの。と言うより、よく生きてるね。」

湖札の反応は当然のものだろう。

「まあ、意外とどうにかなるっぽいぞ。」

「まあ、兄さんらしいけど・・・それだと、今兄さんのコミュニティにはメイドが四人、いることになるの？」

「いや、話に出てきた四人は、俺個人のメイドになる、かな。」

コミュニティとしては二人。あと、十六夜ってやつに一人、いる。」

「・・・ゲームの結果なの？」

「三人は。一人、隷属とは少し違うやつがいるんだけど。」

湖札が一輝を呆れきった目で見る。

「まあいいや。脅して、じゃないんだよね？」

「それはないよ。で、今は四人とも休暇中。」

「そっか。あーあれやらない？」

湖札が指差すのは、射的のような店だ。

使えるのは、様々な銃から弓、ボウガン、スリングショットなどの

道具から、手で投げるといふ原始的なものまである。

「どんなルールなんだ？」

「分からない！けど、面白そうじゃない？」

流石は兄妹、こういうところは似ている。

「まあ、面白そうだな！」

二人は、その露店に向かう。

「すいませーん！ルールを教えてくださいんですけど！」

「ん、ああ。二人一組で、こっちの用意する選手と戦ってもらおう。武器はこの中から選び、他の攻撃は禁止。で、こんなのを」

といいながら、店主は小さな皿のようなものを取り出す。

「三つ体に付けてもらって、これが全部割れたら失格。先に相手を全員失格にしたほうの勝ちだ。」

「だって。どうする？」

「楽しそうだし、兄さんと私の二人で出よう？」

「OK。じゃあ、やらせてください。」

「わかりました。まずは、使用する武器を選んでください。」

二人は並べてある武器の前に立ち、選んでいく。

「私はこれ、かな。」

湖札は、弓を選んだ。

「弓かー。」

「まあ、この中だと一番使い慣れてるし。兄さんは？」

「俺はこれかな。」

一輝は、普通の拳銃を取る。

「これなら連射も出来るし、一番使い慣れてるから。」

「陰陽師らしくない武器を、一体どこで練習したの？」

「はっはっは。警察を脅してみた。」

「なにやってるの。」

一輝は、割といろんなことをしている。

「では、こちらからゲーム盤に転送されますので。」

二人は案内された場所に立つ。

「最後に、難易度はどうしますか？」

その質問に、二人は何の打ち合わせもなく、

「最高難度で！」

そう、選択した。

「では、行ってらっしゃいませー！」

二人は光に包まれ、ゲーム盤に転送された。

荒野

一輝たちが飛ばされたのは、西部劇でもやりそうな荒野だった。

「これは・・・弓が面白いほど似合わないな。」

「うん・・・でも、兄さんのもの、リボルバーじゃないし。」

「似合わないのは同じか。」

二人がそんな会話をしていると、どこからか声が聞こえてきて、ルールの再確認が始まる。

「では、ルールの確認を。まず、体に付けた小型の円盤が三つ壊れたら、その選手は失格。円盤は三つとも転送されるので、今から付けてください。」

二人の目の前に袋が転送され、二人はその中身を体に付けていく。

「次に、武器はこちらから出したもののみを使用。衝撃は与えられませんが、一切の怪我にはなりません。」

「なら・・・」

「うん、割と簡単だね。」

二人は、まだ始まってすらいなのに、早くも結論を出す。

「そして、最高難度を選択されたので、対戦相手はこちらになります。」

二人の前後左右、ある程度の距離をとったところに一人ずつ、ガトリングを二門持った人が現れる。

「確かにこれは、難易度高めだな。」

「でも、どうにかできそうだね。」

「ああ。楽しめそうでもあるし、十分だ。」

二人は、それぞれの武器を手に持ち、いつでも始めれるようにする。

「それでは、準備も出来たようなので、始めたいと思います。」

ゲーム、スタート！

開始の合図と共に、二人は揃って・・・

「「「はあ!?!」」」

相手にそんな反応をさせた。

含む意味は、一人だけ違ってくるが、驚愕、という意味では同じである。

二人の行ったことは、二人の目の前にいる一人に向かって走り、残りの三人を無視する、というものだ。

だから、自分に向かつてきた、という一人と、無視された、という三人では含む意味が変わってくる。

「兄さん！」

「了解！」

全員が呆然としていているうちに、一輝は湖札の手首を持ち、斜め上方に投げる。

そのアクションで全員が現状を思い出し、ガトリングを一輝に向け、その引き金を引く。

同時に、湖札は狙っていた一人に対して矢を放ちまくり、一輝は丁寧に引き金を引いていく。

「撃て撃て撃て！まずはあの男の皿を破壊しろ！」

「いや、無理だよ？」

一輝はそういいながら、丁寧に、自分の皿に向かってくる弾丸を、撃ち落していく。

途中からは銃を使わず、避けたり弾丸を手で発射したりして、前方からは守りきる。

後ろには皿を一つも付けていないので、完全無視だ。

そんなことをしているうちに、湖札の矢が二つ、一輝の撃った弾の一つが偶然一つ、一人目の皿を割る。

「次、どの人を潰す？」

「それはその場で決めるとして、まずは武器を剥ぎ取ろう！」

着地した湖札の質問に対し、一輝はそう答え、ガトリングの弾を全て取っていく。

「あれ、銃は？」

「いらん！重いし、邪魔くさい！」

一輝はそのまま、失格にした一人をつかみ、振り回すことで自分達を守る盾にする。

「そのほうが、邪魔くさくない？」

「有効利用できるから、これは別！」

振り回している男の目は、既に白目を向いている。

それでも構わず使う兄と、それを心配しない妹。

本当に、性格が似ている。

「で、ここからどうするの?」

「うくん……もう三人とも俺らの前だから、さっきの作戦は使えない。」

「なら、いつそ正面から行く?」

「それが一番難しそうだし、それでいこう!」

二人は、一輝がつかんでいた男を相手のほうに投げると同時に、三人に向かって走り出す。

「クソ、邪魔だ!」

相手は飛んできた男をガトリングで殴ってどかし、再び残りの二人と共に敵に向ける。

「えー、仲間を殴り飛ばす?」

「さすがに、ありえませんか。」

「人を盾にするやつらが言うな!」

三人はその言葉と共に再び弾をばら撒くが、二人には一発も当たらない。

弾を弾か矢ではじき、自分の元へは届かせない。

脅威の身体能力である。銃弾の速度以上に動きやがる。

「では、そろそろ……」

「壊していきましょう!」

二人は銃弾弾きを楽しむと、攻撃に移る。

どうせやるなら楽しく、が二人の今回決めたルールだ。

さつきと終わらせるために、一輝は三発一気に、湖札は三本一気に放ち、二人を片付ける。

「湖札——残りの一人だけど……」

「うん……もう終わらせよう!」

そのままの勢いで、二人は残りの弾、矢を一気に放ち、ゲームを終わらせた。



「お、お疲れ様でした・・・御二人は、どこかのコミュニティに所属しているのですか?」

二人が元の位置に転送されると、店員が二人に聞いてくる。

「俺は、ジンIIラツセルのノーネーム。湖札は?」

「私は・・・コミュニティには所属していませんが、結構危ない品も取り扱っていますので、自分からは教えてはいけません。」

二人の答えに対し、店員はもったいなさそうな顔をして、二人を送り出す。

露店から少し歩き、ベンチがあるところにたどり着くと、湖札はふと前方を見て、

「・・・はあ。兄さん、私、のど渴いたんだけど・・・」

「はいはい、わかりましたよ。何かジュースでも買ってこよう。」

「よろしく。」

一輝は、断つても無駄なことを知っているのでジュースを買いに行く。

その場に残り、ベンチに座った湖札は、

「・・・せっかくの兄さんとのデートの最中に、何か用?」

と、誰もいない状況でつぶやく。

「それは、邪魔をしちゃってスイマセン。なら、混世魔王さまに会いに行くのに、ついてきてはもらえませんか?」

その声に対して、リンの声が返ってくる。

姿を現してこそいないが、近くにいるのだろう。

「無理。それに、こっちも重要だつて殿下が保障してくれてるでしょ?」

「はい。なので、絶対についてきて欲しいわけではないです。友情よりも異性を探られて、少し悲しいですが。」

リンはそう言うと、表情を真剣なものにし、

「それにしても・・・あれは本当なんですか?」

そう、疑っている声音で湖札に尋ねた。

まあ、湖札はそう思われても仕方がない情報を理由に、殿下から許

可してもらっているので、当然であるが。

「うん。あの時はかもだったけど、今は間違いのないって保障できるよ。」

「・・・マジですか？」

「うん、マジ。」

湖札は一度、一輝の行ったほうを見て、

「兄さんは、私と同じ方法で『主催者権限』を手に入れることが出来る。」

「・・・分かりました。では、勧誘活動、頑張ってください。」

「うん。といっても、出来そうにはないんだけどね。」

「そこは、湖札さんがどうにかしてください。私も、個人的にあの人に興味がありますし。」

その声で区切りがつき、リンの気配は遠ざかっていく。

「湖札、買ってきたぞ。」

「うん、ありがとう！」

湖札は、何もなかったかのようにジュースを受け取り、再び歩き出した。

魔王連盟

あのゲームをした後は、特に変わったことはしなかった。歩いて目についた店に入り、興味があるものを一通り見て、次の店に向かう。

そして、食べたいものがあれば買って食べる。もちろん、支払いは一輝がすることになった。

「さて・・・次はどこに行く?」

「そうだね・・・もう大体は回っちゃったからなー。」

湖札は少し悩むと、何かを思いついたように提案する。

「たしか、もうそろそろ『造物主達の決闘』じゃなかったっけ? それを見に行かない?」

「あー、そういえばそうだな。うちのコミュニティからも参加するし、行くか!」

「うん!」

二人は、そのまま闘技場を目指していった。

|||||

「賑わってるなー。」

「うん、まあさっきの対戦カードを聞いたら当然かもだけど。」

湖札が言っているのは、一輝達が闘技場に入ってすぐに流れた、アーシヤによる第一試合の選手発表のことだ。

その中に、北側最強、ウィラの名が連なっているのだから、こういうのが自然だ。

「さて、たぶんこの辺に・・・お、いた!」

「誰がいたの?」

「コミュニティの仲間。どうせならあっちのほうが場所もありそう
だ。」

一輝はそういうと、湖札の手を取って黒ウサギのいるほうへと走っていく。

「俺達もこの辺に座っていいか、黒ウサギ?」

「あ、一輝さん。構いませんが、そちらの方は?」

黒ウサギの髪の色が、緋色から青に戻っていくところで一輝は声をかけた。

何で怒りを表していたのかは分からないが、収まったのならいたことはないだろう。

「始めまして、寺西一輝の妹で、天野湖札といいます。兄がいつもお世話になってます。」

「あ、黒ウサギです。ええと・・・苗字が違うのは・・・」

「この間、鬼道の苗字については話しただろ・・・それより、飛鳥がすごいことになってるぞ。」

一輝の言葉で、黒ウサギは慌てて闘技場を見る。

そのタイミングで、蒼炎の嵐は巨大な氷柱となり、砕け散った。

「凍る炎、か。これはまた凄いな。」

「しかも、炎も地獄の業火。あの人は何者なの?」

「お嬢様、つてことぐらいしか知らないな。あそこまで強くはなかったと思うんだが・・・」

一輝としては、それよりも重要な問題があった。

「どうして、ルイオスがここにいるんだ?」

軽く怒気を含んだ声で、そうたずねる。

「それは、ペルセウスが最後の同盟相手だからです。」

「そうか。なら、もう帰っていいぞ?」

一輝は、なんのためらいもなく言い放つ。

「ま、待てよ!ノーネームとの同盟に参加するコミュニティなんて、そうそうあるわけが・・・」

「心配しなくても、俺が頼めば間違いなく参加するコミュニティぐらいはあるよ。頭はちよつとあれだけど・・・実力はそこそこだ。」

一輝が言っているのは、『剣閃烈火』のことである。

「それなのですが・・・私たちはある魔王に狙われていまして、そいつに対抗するには最強種の力があると、とても助かるのです。」

一輝に対し、ジャックが説明に入る。

「・・・そういえば、あのザコも一応、星霊だったな。それで、コイツはゴミクズ野郎だけど、星霊を従える力くらいはあるから。」

「おい待て！今、聞き捨てならない言葉が、」

「はい、その通りです。」

「否定しろよ！さすがに、これは否定しろよ！同盟関係だよね!?!」

一輝とジャックは共に頷き合う。ルイオスが「またこの展開!?!」と叫んでいたが、あえて無視したようだ。

「あ、黒ウサギ！それに一輝さん、ジャックも！」

一輝が満足したあたりで、ジンに呼ばれる。

どこにいるのか、ざっと周りを見回し、上の観客席にいることに気づく。

「ちようどいいや。あれが、俺達のコミュニケーションのリーダー、ジン＝ラッセルだ。」

「へえ、結構有名だから話には聞いてたけど・・・本当に幼いんだね。」

湖札は、ジンの年齢に驚いているようだ。

「まあ、あれでも魔王を従えるだけの能力は持つてるし、戦闘以外では頼りになるリーダーだよ。」

「本当に、あそこまで幼い子に、魔王が?」

「ああ。たしか・・・『精霊使役者』って魔王でさえも問答無用で従わせるギフトを持つてるらしい。」

「・・・それ、うまく使えばかなり強くなるんじゃない?」

「使役対象が少ないんだよな・・・」

二人の会話は、ルイオスの放つ言葉によって、そこで終わることになる。

その言葉は、ルイオスが白髪金眼の少年、殿下を指差して、

「お前・・・僕と、どこか出会ってないか?」

というものだった。

それに対し、殿下は少しだけ驚いたような反応をすると、すぐに答え始める。

「まあ、うちは商業コミュニティだからな。『ペルセウス』とも、商談の中であったことがあるかもしれないな。」

「ああ、うん。そんな感じがする。なんか・・・結構大きめの商談のときにチラッと・・・」

ルイオスが思い出せず、不快そうにしているのを見て、一輝は、コイツこんな顔のほうが見る機会多い気がするなー、などと考えていた。

そして、そんなルイオスのようすに、ジンは苦笑いを浮かべながら、「あの、ルイオスさん。その事なんですけど・・・」

「あん？なんだよ？」

ルイオスがそう返してくると、ジンは一瞬で笑みをけし、さりげなくサンドラを後ろに庇うと、

「それ——レティシアさんを買ったとき、じゃないですか？」

ジンの言葉に、殿下の表情が驚愕に染まり、一輝は確信をえて、ギフトカードから獅子王を取り出す。

そして、そばにいる味方を背に庇い抜刀する。

「全員、俺の背を出るな。死ぬぞ。」

一輝は真剣な声で忠告する。

ちなみに、一輝の背にいるのは、ジャック、ルイオス、湖札の三人だ。

「おい、急にどうしたんだよ？」

「気がつかないのか？この世にレティシアを売ったコミュニティは魔王連盟に所属するコミュニティ以外にないんだよ。」

その言葉で、一輝の背に二人分の緊張が伝わってくる。

「それと・・・殿下って呼び方からあいつはかなりの実力者の可能性が出てくる。この中で対抗できる可能性があるのは、俺か黒ウサギだけだろ。」

スレイブがいらないのはつらいな・・・、と一輝はもたす。

そして、警戒をとかないままに、殿下たちの会話に耳を傾ける。

「なるほど。出合いがしらで既に見抜かれていたとは・・・ジンのフアインプレーだな。素直に見直したよ。」

「じゃ、じゃあ・・・リンも・・・？」

「そうだ。騙して悪かったな。俺達は、お前たちが魔王連盟と呼ぶも

のだよ。そして・・・」

殿下は、一輝の背後に目を向けると、

「そいつは、俺でも対処するのに少し、骨が折れる。だから・・・頼んだぞ、湖札?」

「うん、殿下。」

湖札にそう言い、湖札もそれに返す。

一輝が一瞬固まり、慌てて振り向くと、そこには刀を持ち、巫女服になった湖札がいた。

「まさか、湖札も・・・?」

「うん。ごめんね、兄さん。」

湖札はそういうと、一輝に向かって刀を振るう。

「あーくそージャック!ボンボンは任せた!」

一輝はジャックにそういうと、獅子王で湖札の攻撃をガードする。

「ここで戦うと殿下の邪魔になるから、移動しよう、兄さん!」

「待て、湖札!」

湖札は先に闘技場の中央に飛び降り、一輝もそれを追う。

だが、二人が着地するより先に、湖札が何かをつぶやき、その場が白い霧に包まれる。

「これは・・・妖使い!」

「正解だよ、兄さん。」

霧がだんだんと妖怪の姿をとっていき、視界がよくなると一輝は湖札の姿を視認した。

先ほどまでと変わっているのは、手に持つ刀が、形を変えていることだろう。

「そして、『妖武装』か。それが、湖札がぬらりひよんからもらった奥義?」

「うん。あと、もう一つごめん。ぬらりひよんからは、私も全部の奥義をもらってる。」

「そうか。にしても、困ったな。」

一輝は、奥義を一つも発動しない。

妖使いは、一輝がこの場で使ってしまうと妖怪であふれかえり、身

動きが取れなくなる。

かといって、伝説の召喚を湖札は許さないだろうし、武装する暇もない。

妖怪の群れとその将に対し、一輝は一人で戦わないといけないのだ。

「私の役目は、兄さんをこっちに引き込むか、足止めすることだから。これぐらいはしないと。」

「そうか。なら、こっちのほうがいいな。」

一輝は獅子王を納刀し、ギフトカードから水樹の枝を取り出す。

「じゃあ、行くぞー！」

ウサ耳

一輝は枝から出る水を飛ばし、妖怪を切っていく。

決して死ぬことはないが、本来致命傷となるだけのダメージを与えれば、一時的に檻の中に戻すことが出来る。

もう一度出すには、一度奥義を解除しないといけないので、有効な手だ。

「そっか。もうそれは使いこなせるんだね！」

湖札は、直接一輝に攻撃を仕掛ける。

一輝はその攻撃をよけながら水で攻撃するが、全てよけられる。

「なんで、湖札が魔王連盟に！」

「言つたでしょ、拾ってもらつたつて。その恩を返すためだよ！」

たとえ鬼といわれても、受けた恩は返す。

その覚悟が、湖札からは感じられた。

「だから私は、魔王連盟に所属する魔王として！ここに立ってる!!」

「魔王つて、ただの人の湖札が、どうやって!?!」

「兄さんだつて、考察ぐらいは出来てるでしょ？その方法だよ!?!」

一輝が湖札の言葉に驚き、一瞬固まった隙を突かれて蹴り飛ばされる。

「あ……ぐ……」

「さて……もう少し兄さんと話したかったけど、手加減されてるところをこれ以上やっても、意味ないよね。それに、そろそろ迎えもきそうだし。」

湖札は、十六夜に殴られそうになっている殿下を見る。

つられて一輝も見るが……その姿は、十六夜のこぶしが当たる寸前で消える。

「あれは……」

「境界門の使用による、瞬間移動。じゃあね、兄さん。次に会うときは、私の主催者権限で相手をするよ。」

一輝がどうにか立ち上がると、湖札は刀を納め、妖怪を檻に回収す

宮殿内に、マンドラの恫喝が響き渡る。

殿下が残した言葉と、首魁の中に一輝の妹がいたことにより、ノームのメンバーは間諜の疑いをかけられていた。

そのためにジンとペストはマンドラを連れ出した、と投獄され、召集会に参加させるかどうかを審議中である。

ちなみに、妹だということは話したが、魔王だということは話していない。二人にも口止めをしているあたり、一輝はあまり知られたくないのだろう。

だが、普通なら真面目になる状況でも、この四人は問題児なので、

「黙秘権発動。」

「右に同じ。」

「拒否権行使。」

「以下、同文。」

「こんなときぐらい真面目に答えられんのかあああああ!!!」

十六夜、一輝、飛鳥、耀の順に答え、マンドラは執務机（ちやぶだい）返しを発動する。

美しいちやぶ台返しを見せたマンドラは肩で息をするが、問題児四人はそのマンドラを責めるように睨む。

「そもそも、二人を連れ出したのはマンドラだって話じゃねえか。」

「そして、そんなことになったのは、アンタがマンドラを信じなかったせいで。」

「一緒にいた魔王連盟の子供は前から宮殿に出入りしていたそうじゃない?」

「・・・怪しいのは、私たちじゃなくて、サラマンドラ」のほう。」

そして、そのまま正論だけで返したので、マンドラは一切の反論が出来ない。

怒りは蓄積されても、落ち着くことは出来たようです。腰掛け、頭を抱えるようにしてため息をつく。

一輝はとりあえず、頭痛薬を渡しておく。

「それについては、我々に咎がある。実」

「まあ、予想はつくけどな。」

「ああ。『ハーメルンの笛吹き』の魔道書はあいつらから買ったんだろ?」

二人が言葉を遮ってマンドラに返す。

あの時に有ったことを全て知っている二人には、当たり前前の考えだ。

そこからは、あの時に殿下とリン、それに初老の従者とローブ姿の女、金髪メイドに巫女服がマンドラをそそのかし、彼らにとって都合よく、一石二鳥になるようにだまされたこと、マンドラはそいつらが魔王連盟だとは知らなかったこと、そして十六夜が旗印から敵についての考察をし、答えは出ない、という結論を出す。

「・・・何にせよ、ようやく敵の全貌が見えてきたって事さ。三人とも、気合入れとけ。」

十六夜が不敵に笑うと、三人も力強く頷く。

「ああ。あいつらを倒す日も近いな。」

「そうになったら・・・いよいよ取り戻せるかな。」

「そうになったら・・・いよいよ取り戻せるわね。」

四人はコミュニケーションの「旗印」と「名前」の手がかりを得て、今日までの戦いは無駄ではなかったのだと確信する。

「連中は近いうちに現れるだろう。」

「ああ。今度こそ階層支配者を狙って。」

「全員が揃うのは三日後。それまでに準備を整えましょう。」

「すぐに黒ウサギにも知らせに——」

「ヤ、ヤヒヨヒヨヒヨヒヨ!!? 皆さん、大変でございますよ!!?」

ジャックが、かなりの動揺をしているようで、ホがヒヨになって飛び込んでくる。

三人は、どう反応しているのか分からず、顔を見合わせるが、一輝は一つ、心当たりがあったので、宮殿内の気配、霊格を探っていく。そして、ある一人の気配を見つけ、その霊格を感じると、ジャックがこうなった原因の人物を知る。

「黒ウサギが・・・でも、こんなことって・・・」

一輝は、見たほうが速い、と結論付け黒ウサギの病室に走り出す。

「お、オイ一輝！クソ、悪いが話は後だ！」

「ジン君の釈放、お願いね！」

「あと、四人分のご飯もお願い！」

「そんな呑気にしている場合じゃないですよ！」

耀は、今回は自分の分だけではなく全員分頼むが、それでも呑気である。

一輝は、病室の前で立ち尽くし、

「こんなことって・・・」

「開けないならどけ。オイ、黒ウ——」

十六夜は、その場にいる全員は言葉を失う。

その視線は病室の主に向けられている。

「み、皆さん・・・！」

まず、よかったことは彼女が意識を取り戻していることだろう。

傷も大体は癒え、問題はなく見える。

だが、それでも、今の彼女は大事態だ。

そんな状況の中、しゃべることが出来たのは女性陣二人であった。

そしてそれは、大粒の涙を溢れさせている彼女には失礼だが、現状をよくあらわしていた。

「く、くろう、」

「・・・詐欺？」

まさに、そう聞きたくなる状況だ。

なぜなら、彼女は耳を・・・側頭部にある耳を押さえているのだから。

「う、うしゃ・・・黒ウサギのウサ耳が・・・ウサ耳が無くなったのですよッ——!!!」

落陽、そして墜月

T a i n B o C u a i l n g e ①

空間倉庫の中。

一輝はスレイブと共に、そこにいた。

「で、ここで何をするのでですか？」

「ああ、まだ説明してなかったな。」

一輝は準備のために獅子王を取り出し、抜刀する。

それによつて一輝は白い和服をまとい、陰陽師モードになる。

「これからの戦いで使えそうな力、檻の中の俺に従ってない最後の一人を従わせるんだよ。」

「なるほど・・・分かりました。私はどうすれば？」

「剣の姿になってくれ。スレイブのサポートなしで生きてられるとは思えない。」

「そこまでの・・・分かりました、兄様。」

スレイブは一輝の手を握り、剣の姿となる。

「さて・・・我、今ここに――」

一輝は言霊を唱え、顕現させる。

「さて・・・先代はどうやってコイツを殺したのか。」

一輝はそのまま、伝説級を全て獅子王に宿し、そいつへと向かっていった。

|||||

“煌焰の都” 本拠宮殿・隊舎前の鍛錬場。

一輝はスレイブに支えてもらいながらそこに出ると、

「重力変化。」

自分のいるほうに向かってくる化生どもを地面に縛る。

「十六夜、これはどういう状況だ？時計塔にも三体くらい突き刺さってるし。」

「現状を教えるためだ。あいつらとの実力差はこうしたほうが分かりやすいだろ。」

それより、何と戦ったらそうなるんだ？」

「後で、用事と一緒に説明するよ。」

一輝は自然回復を底上げし、体を治して自分の足で立つ。

「じゃあ、武器の調整とかしたいから俺は工房にでも行くけど・・・いいか？」

「ああ。やって欲しいことは十分にやってくれたからな。」

一輝はそのまま、メイドたちが準備をしてくれている工房へと向かった。

|||||

「で、結果はどうだったのよ。まさか、負けてたりはしないわよね？」
「ああ。どうにかこうにか、やりたい放題にやってどうにか勝ったよ。」

「あのような戦い方は、一輝様以外には出来ないでしょう。誇っていいです。」

「いや、向こうの攻撃をわざと喰らって、そのまま切り刻むなんて無謀な戦い、誇りたくはないな。」

「なんてことをしているのですか・・・」

一輝は武器の整備をしながら、何があったかを話していた。

わざわざジャックに直してもらった「量産型妖刀」もまた折れてしまったので、いつそ小刀に作り変えている。

「でも、勝てたってことはお兄さんの言うことを聞くんでしょう？」

「奥義の発動には協力してやるが、自分で戦うかは気分次第だ、って言ってた。」

「まあ、目的は果たせたんですから、よかったですじゃないですか。」

だな、と一輝は返し、小刀の量産を終える。

「さて、まだ決定したわけじゃないけど、十六夜から許可が取れた場合の作戦、こんな感じで行くから。」

一輝たちは、そのまま作戦会議を始めた。

|||||

「で？用事って何だ？」

一輝は十六夜に一つ頼みに来ていた。

「まあ、今からこんな状況でなに言ってるんだ、って頼みをするがいいか？」

「内容によるな。」

「だよな・・・」

一輝は真剣な顔になり、話し始める。

「俺と、音央、鳴央、ヤシロちゃん、スレイブの五人は湖札の相手をさせて欲しい。」

「却下だ。」

だが、一瞬で却下される。

「あのな・・・オマエは魔王のゲームをほぼ一人でクリアしたんだぞ？そんなやつをただの人間にぶつけるわけねえだろ。メイド四人で前の妹に対処し、オマエは魔王か、リンの相手をしてもらったほうがいい。」

十六夜の言っていることは正論だ。

だが、十六夜はまだ一つ、重要なことを知らないのだ。

「まあ、湖札が陰陽術、外道・陰陽術を使うだけなら、そうなんだろうな。でも、そうじゃなかったら？」

「どういうことだ？」

十六夜の声にも真剣な声音が混ざる。

「はつきり言うと、湖札は『主催者顕現』を持つてる、魔王だ。」

十六夜が、珍しく驚いた顔をする。

「まて、それはありえねえだろ。オマエも、オマエの妹も、人なんだろう？」

「ああ。人だ。」

「なら、どうやって『主催者顕現』を手に入れるだけの功績を得るん

だ？」

「・・・これは、ノーネームの主力以外には話さないで欲しいんだが・・・俺の一族には」 “ って奥義が有って、これは——」

そこで、一輝は奥義の一つについて説明をしていく。

「・・・それは、オマエの妹・・・湖札が持っていて、使えるのか？」
「持つてるのは間違いないと思う。湖札なら、奥義の全部をもらうだけの覚悟も、力も示せる。使えるかは、五分五分だな。一つ面倒な制約があるし。」

「ああ・・・だが、もし仮に使えたとしたら・・・」

「俺か十六夜、ウイラ辺りじゃないと対処できないだろうな。」

「だが、俺はあの白髪鬼、ウイラは春日部と一緒にマクスウエルの魔王・・・」

「だから、俺が対処する。それに、“妖使い”も使えるから、妖怪どもに対処するやつらが必要になる。それで、あの四人だ。」

十六夜は少し考えるようにするが、他に案が思いつかなかつたのだろう。

「オーケー。それでいこう。ただ、もう二つ質問言いか？」

「どうぞ。」

「なら、一輝はそれを使えるのか、一輝は昼、何と戦ってたのか。以上だ。」

「結論から言っちゃえば、今日、倉庫の中で使えるようになった。」

「なるほどな。それなら、あの有様にも納得だ。」

十六夜はそれだけで全部分かったようで、納得する。

「まあ、今回のゲームでは使えそうにないけどな。念のため、位のもんだよ。」

「それで死にかけるなよ。結構な戦力なんだからな。」

「善処するよ。」

一輝はそういい残し、部屋を出て行った。

『ギフトゲーム “Tain Bo Cuailnge”

・参加者側ゲームマスター “逆廻十六夜”

・主催者側ゲームマスター “ ”

- ・ゲームテリトリー “煌焰の都” を中心とした半径2 km。
- ・ゲーム概要

※本ゲームは主催者側から参加者側に行われる略奪型ゲームです。

このギフトゲームで行われるあらゆる略奪が以下の条件で行われる限り罪に問われません。

条件その一：ゲームマスターは対一の決闘で雌雄を決する。

条件その二：ゲームマスターが決闘している間はあらゆる略奪可
(死傷不問)

条件その三：参加者側の男性は決闘が続く限り体力の消費を倍増する (異例有)

条件その四：主催者側ゲームマスターが敗北した場合は条件を反転。

条件その五：参加者側ゲームマスターが敗北した場合は解除不可。

条件その六：ゲームマスターはゲームテリトリーから離脱すると強制敗北。

終了条件：両陣営のゲームマスターの合意があつた場合にのみ戦争終結とする。

ゲームマスターが死亡した場合、生き残ったゲームマスターの合意で終結。

宣誓 上記を尊重し誇りと御旗の下、“ウロボロス” 連盟はゲームを開催します。

ウロボロス“印”

そして、その日の夜。

ゲームが始まった。

①

「禍払いの札よ。わが身に宿りし、衰退の呪いを喰らい続けよ。」

一輝は体にお札を三枚、直接貼り付け、呪いを打ち消す。

「それ、参加者の男の人全員にやってあげないの？」

「もう数がないからな。それに、湖札とのバトルで必要になるかもしれないし。」

一輝はそのまま、一直線に森の奥へと進んでいく。

「あの・・・先ほどから迷わず進んでますが、こちらで合っているのですか？」

「間違いない・・・と思う。あいつはこっちにいる気がする。」

「気がするって・・・そんな曖昧な、」

「でも、兄妹ならではの感覚なのかもしれませんね。」

スレイブがこのような感覚的なことを信じたことに、その場の全員が驚く。

「・・・私だって変わっているんですよ？」

「あ、ああ。そうだよな。悪い。」

「でも、いい変化よね。」

「ええ。」

「いつかは、その敬語も消えるといいねっ。」

「それはありえない。」

そんな会話で全員の緊張はほぐれ、一輝は真剣な話を始める。

「さて、作戦の確認だが、これから戦う湖札は『主催者権限』を持って魔王だ。しかも、ヤシロちゃんの時とは違って、ゲームで魔王と戦うことになる可能性もあるし、一族の力で大量召喚してくる可能性がある。」

「もう、何でもありだね。」

「それが俺達の一族だからな・・・。しかも、奥義は全部持ってるし、俺は今回『無形物』のほうで行く予定だから数をぶつけられない。と

いうわけで、俺とスレイブは湖札と戦って、妖怪どもは音央、鳴央、ヤシロちゃんに任せた。」

「了解！」

「分かりました！」

「任せて！」

「兄様の仰せのままに。」

スレイブは魔王と戦う前の重要なときだからか、素で返してしまい三人から「え……？」という目をされるが、

「……全員戦闘準備。あと少し進むと湖札がいる。」

一輝がいつになく真剣な声と顔で水樹の枝を取り出し、スレイブの手を取るの、全員服装を変えたり姿を変えたりして、戦闘準備を整える。

「……こんばんは、兄さん。」

「おう。偶然だな。こんなところで会うなんて。」

「そうだね。こんな森の中、どうして二人とも来たのか、分かる？」

「さあ？なんとなく、ここに湖札がいそうだと思うただけだよ。」

「へえ……偶然？ううん、それはできすぎかな。」

「つてことは……」

「うん、私も。昔、何かあったのかな？」

二人は仲のいい兄妹のように……いや、仲のいい兄妹の会話をし、ゲームの話に移る。

「さて、そろそろ現状の話に移ろうか。」

「それもそうだな。」

「じゃあ、こつちから最後の提案。兄さん、こつちに来ない？」

「断るよ。これでも『ノーネーム』には貸しも有るし借りもある。仲間友達に友達もいるからな。裏切るつもりはない。」

「そつか、残念。」

「じゃあこつちから。湖札、『ノーネーム』に来ないか？」

「ごめん、無理。殿下たちには貸しも有れば借りも有るし、仲間友達だからね。裏切りたくないな。」

二人は似たような質問をし、似たような返答をする。

それでも、一切隙を見せないのは最初から回答が分かっていたからだろう。

「でも、最後の肉親である兄さんとは一緒にいたいんだよね。だから、私が勝ったら兄さん……いや、五人まとめてでいいからこつちに来てね。」

「魔王のゲームに拒否権はないだろ。でも、こつちが勝ったら湖札は俺に隷属することになる。これはいいよな?」

「うん、それが箱庭の仕組みだからね。」

「なら、意地でも隷属してもらおうぞ。新しい妹を二人、紹介しないとだしな。」

「はあ……相変わらず、無意識のうちに……」

湖札は呆れた顔で一輝を見て、すぐに真剣な顔に戻る。

「じゃあ、始めるよ?私の主催する、私のゲームを。」

「こいよ。俺たち五人は、負けないけどな。」

湖札は両手を広げ、巫女服の袖から白い霧を広げていく。

今更になるが、湖札の着ている巫女服も、前にあつたときよりも神々しさを有しており、その手にも腰にも妖刀はない。

向こうもまた、本気である。

そして、広がった霧は少しずつ固まっていき、黒く輝く契約書類となつて降り注ぐ。

『ギフトゲーム名 “大祓”』

・参加者一覧

・寺西 一輝

・六実 音央

・六実 鳴央

・ヤシロ・フランソワ一世

・ダインスレイブ

・ホストマスター側 勝利条件

・大祓えを完遂する。

・プレイヤー側 勝利条件

- 一、ゲームマスターの打倒。
- 二、全ての鬼の殺害。

・備考

このゲームは、ゲームマスターが主催者権限を失うと同時に、勝敗を付けず、強制終了するものとする。

宣誓 上記を尊重し、誇りとホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

”

あまのざこ
天野湖札”印』

「さあ、鬼軍進行を始めましょう。」

その瞬間、辺り一面を白い霧が包んだ。

②

湖札の手から広がった霧は、少しずつ形を取っていき、妖怪の軍団を作った。

だが、それは一輝や湖札の使う奥義、「妖使い」とはまったく違う。あの奥義は己の内に封印されている様々な妖怪を召喚する。

だが、この霧は……

「全部鬼……だな。こんな奥義有ったか？」

そう、その全てが、鬼の姿をとったのだ。

角の数が一本から三本まで、武器も様々なものがあり、体格までその全てが一致するものはないが、全て鬼と呼ばれるものだ。

「ううん、これは奥義によるものじゃないよ。もう少しちゃんと契約書類を読もうね、兄さん。」

一輝は湖札に言われて契約書類を読み直す。

そして、最後に記されている名前は、わざわざルビが振ってあった。

「あまのぎこ……ああ、天逆海、か。ならこいつらはその能力か。」

「そう、スサノオより生まれた女神、天逆海は鬼を無限に生成できる。

妖使いとは違って、ね。」

「予想以上に面倒だな。準備はいいか？」

一輝が聞くと、全員がうなずく。

「じゃあ……状況開始！」

「茨の檻！」

一輝の声とほぼ同時に、音央の茨が湖札までの道を作り出す。

「右手は音央、鳴央。左手はヤシロちゃん。GO！」

「了解！」

一輝の指示と同時に三人は鬼退治を始め、一輝は……

「上段、鬼面！」

スレイブを抜き、上段からの一撃を加えるが、

「その程度じゃ、私には通らないよ！」

あつさりと湖札にガードされる。

「悪いけど、俺の中に正々堂々って言葉はないぞ！」

「え、一体何を……！」

一輝は腰のベルトで固定した水樹の枝と辺りにある水を操り、湖札に撃つ。

湖札はそれを打ち落とそうとするが、湖札の意識がそちらに向いた隙に、一輝はいったん離れる。

「少し荒い技になるけど、手伝ってくれるか？」

「もちろんです。」

「ありがとう。じゃあ、行くぞ！」

一輝はいったんスレイブを鞘に納め、スレイブと呼吸を合わせると、

「居合、鎌鼬！」

居合斬りの要領でスレイブを振り、空気の刃を飛ばす。

今回のものはギフトによる攻撃ではなく、単純な刀を振る速度によるものだ。

もちろん、一人で使える技ではないが、二人係で一人の体を動かせば、可能になる。

「ウォーターカッター、フレイムカッター！」

一輝はさらに水と火の刃を飛ばし、追い討ちをかける。

「これで、相手にダメージを、」

「いや、たぶん無理だろうな。」

一輝はスレイブの言葉を否定し、次の攻撃の準備を始める。

「……あれほどの攻撃を喰らい、無傷とは……」

「ううん、兄さんが正解。」

「ッ？」

「やっぱりか……」

攻撃による砂煙が晴れ、湖札の姿が視認出来るようになる。

そこには、自分の周りに風のドームを作り、無傷で立っている湖札がいる。

「どこまで天逆海の力を使えるか、確認のつもりだったんだが、ほとん

ど全部か？」

「さあ、どうでしょう？でも、今の兄さんに勝ち目はないんじゃないかな？」

「かもなー・・・スサノオの力が使えるんじゃないや、結構ピンチだ。」

先ほど湖札が言っていたように、天逆海はスサノオから生まれた女神だ。

ゆえに、湖札はその嵐を操る力により、全ての攻撃を防いだのだ。

「どうピンチなのですか？」

「まあ、あれを俺のギフトで破るのは骨が折れるし、」

一輝は言いながら、空気の刃を湖札に撃つ。

それは、湖札に当たる前に止まり、一輝の元に十倍になって返ってきた。

「あぶねっ！とまあ、空気や風を操ると、こんな感じになる。」

「なるほど・・・では、どうするのですか？」

「まあ、こうするだけだよ！」

一輝は火、水の槍を大量に作り、それと共に湖札のもとに走っていく。

「相変わらず、兄さんは単調だね！」

「ああ！ヘンに作戦を立てんのは、性に合わん！」

そのまま、二人は打ち合いを始める。

一輝はスレイブや槍で攻撃をし、湖札はそれを腕で受ける。

一輝の攻撃は、服の袖にすら傷を付けることが出来ていない。

「今度はこつちがいくよー！」

「うを！おいこら！髪の毛切れたぞ！」

湖札は一輝に向かってハイキックを放ち、一輝はどうにか体をそらす、前髪が切られ、飛ぶ。

「当たり前でしょ！私は気性の荒い、戦いを好む神になってるんだよ！」

「だからって、そこまでの一撃になるか!？」

「なる！神の体と人の体じゃ、差が出来て当然！」

一輝は湖札に蹴り飛ばされ、その威力から、確信する。

「ケホツ・・・やつぱり、憑依じゃないんだな。」

「うん。これは、そんな弱い奥義じゃないよ。鬼道の一族に伝わる奥義の中で、最も強く、最も使えるものが少ない奥義。」

「五代目が生み出した、鬼道の中でも異質な奥義。」

「神成り。」

「どうやら、一輝の予想は的中したようだ。二人の声は完全に重なり、その場に響く。」

「それを湖札が使うってことは・・・自らの力で神を殺し、己がうちに封印したのか？」

「もちろん。契約で縛ったんじゃない、ね。四年ぶりくらいに日本に帰ってきたら急に現れるんだもん。」

「それは・・・ドンマイ。」

「ありがとう。まあ、どうにか勝てたんだからよかつたけどね。」

湖札は詳しく話す気はないようだ。そのときについては話してこない。

「で、あんな神様なら倒しさえすれば言いなりになってくれるし、こうして使えてるんだ。」

その点については・・・兄さんよりよっぽど楽かな？あそこまでプライドが高いと・・・」

「ああ、聞く耳もたん。呼びかけを無視してきやがったからな。」

そんな会話をしながらも、二人の攻防は続いている。

攻防といっても、一輝の攻撃は一切決まらず、湖札の攻撃ばかりが決まるのだが。

「どうにか退かないと・・・」

「逃がさないよ！」

一輝は再び距離を置こうとするが、湖札がそれを許さない。

「ああ、クソ！スレイブ！」

「了解です、一輝様！」

二人係でどうにか脱出し、一輝は傷を治していく。

「妹にボッコボコにされる兄・・・なっさけねー。」

「全力を出さない兄様が悪いのでは？」

「ひどいな。俺は出せるだけの力は出してるよ。ちよくちよく重力と
かも操ってるし。」

「それは分かっています。でも、私が言っているのはそちらではありません。」

「それは……」

「仲良くお話をしていられるの!?!」

一輝がスレイブに尋ねようとすると、湖札が殴りかかってくる。

そして、一輝はそれをもろに喰らってしまう。

「ゲホツゲホツ。やばい。骨いった。」

「兄様、上です!」

一輝はスレイブに言われ、上を見る。

そこには、刀を持って、一輝に降ってくる湖札の姿があった。

「ヤベー!」

一輝はどうか転がり、攻撃をよけるが、その際に骨が折れた部分を傷めてしまう。

「……本気で来てよ、兄さん。じゃないと、意味がない。」

「俺は最初から本気だよ。スレイブ、骨をくつつける間、任せてもいいか?」

「……分かりました。ですが、私や湖札の言っている言葉の意味、少し考えてください。」

「了解……」

一輝は意識を回復に集中し、骨をつなげていく。

「へえ、兄さんのそのギフトはそんなことも出来るんだ。」

「悪いが、いま一輝様に話しかけても何も返ってこないぞ。それほどまでに集中している。」

湖札の質問には、スレイブが答える。

一輝は、その音が聞こえてすらいないのだ。

「なるほど……そういった隙を埋めるのが、君なんだ。スレイブちゃんって呼んでいい?」

「断りたいところだが……兄様の妹、となると断れないな。」

「じゃあ、スレイブちゃん。今の兄様ってのは、何?」

「……」

「だんまり、決め込まれちゃったな。」

スレイブが人の状態だったなら、顔は見事に真っ赤だったであろう。

「じゃあ、質問を変えるね。何で兄さんと一緒にいるの？」

「……一輝様は、私をすくってくれた。私の主は、その時点より一輝様一人だ。」

「なるほど、ね。こっちの世界でも人助けしてるんだ。本当に、鬼道の一族はそんな人ばかりだよな。」

「貴女もその一員では？」

「あはは……まあ、そう……かな？」

湖札は、自分自身にも思い当たる節が合ったようで、答えづらくなる。

「でも、兄さんはその中でも飛びぬけてたんだ。で、私はそんな兄さんにあこがれてた。」

「……それは分かるな。一輝様の魅力の一つだ。」

「うん、それで、いろんな人をひきつけるんだもん。本人は無意識のうち。」

「何の話だ？」

一輝はそのタイミングで目を開け、話に割り込む。

「いえ、なんでもありません。それより、骨はつながったのですか？」

「おかげさまでな。」

「じゃあ、いい加減に本気になってよ。」

湖札は、怒気を含んだ声で一輝に言ってくる。

「……二人が言いたいことは、まあ分かったよ。でも、湖札はいいのか？」

「うん。それに、その状態の兄さんに勝たないと、こっちに来てもらう意味がない。」

「そうか。なら、分かった。ここからは容赦はしない。全力でお前に挑む。」

一輝はそう宣言すると、スレイブを納める。

スレイブもすぐに人の姿になり、

「では、私はヤシロの手伝いに行ってきます。」

「ああ、よろしく。」

そのまま鬼の中に突っ込んでいく。

一輝はそれを見送ると、ギフトカードの中から“獅子王”を取り出し、抜刀する。

一輝の服装は一瞬で白い和服に変わり、霊格も上がる。

「じゃあ、俺は湖札の知らない、新しい奥義を見せてやるよ。」

「新しい、奥義？」

「ああ。」

一輝は獅子王を掲げ、言霊を紡いでいく。

「わが身に宿りし百鬼に告げる。これは勅命である。」

いままでの言霊以上に、命令的な言霊を。

「我が望むのは、汝らの力、その集まる武具である。」

そして、その体から黒い霧と輝く霧が流れ出し、獅子王の周りに集まる。

「そして、その武は一にあらず。十の武と成り、我が助けとなれ。」

一輝は量産型妖刀をもとに作った小刀も九本取り出し、そこに輝く霧を纏わせる。

「今ここに、我はこの奥義を発動する。その名は、百鬼武装也！」

一輝が唱え終わると、霧はそれぞれの武器に吸収され、その形を変えらる。

獅子王は、鞘に百鬼夜行の彫を持ち、刀は凶悪なものになる。

量産型妖刀は、一つは翼を持ち、一つは八つ首に分かれた。

一つは蛇腹となり、一つは龍の爪のような形となる。

一つは巨人が振るうような巨大なものとなり、一つは青い炎を纏う。

一つはその姿が曖昧となり、一つは白黒になる。

そして、最後の一つはブレスレットとなる。

一輝は獅子王を手を持ち、巨大な剣は背中に吊るして、残りは腰にある鞘にそれぞれ収められ、ブレスレットだけ左手首に付ける。

「さあ、始めようか。」
一輝の反撃が、始まる。

③

「真夏の夜の夢！」

音央と鳴央は同時に技を発動し、相手の位置を入れ替えたり、相手を眠らせたりしていく。

そうして動きを止められたものから神隠しにあわせていくが、天逆海は鬼を無限に生成できるため、状況に変化は見られない。

「ああ、もう！茨の檻！」

音央は、そんな状況に嫌気が差したのか、八割がたの鬼を茨で縛り上げると、

「ちよつと行ってくるわ！妖精の園！」

「分かりました！こっちは任せて下さい！」

音央はそのまま、そいつらを連れて自分の領域へと連れて行く。

「さて……このまま縛ってても意味なさそうだし。」

音央は茨を解こうとするが、その前に鬼が火を噴き、燃え散らしてしまう。

「……鬼ってこんなことできるの？」

音央は知らなかったことに驚くが、鬼というのはかなり自由度の高い妖怪だ。

持つ武器も様々、能力を持っていたりもするし、角の数も1〜3本。

一輝なら、「あ、火吹いた。」くらいの反応になるだろう。

「でも、吹いたってことは吹くんだし……あれを試すにはちようどいいか。」

音央がそんなことを言っていると、今度は別の鬼が武器から雷を放ち、毒を吐き、もうやりたい放題だ。

「……一輝も言ってたけど……妖怪って……適当ね。」

ふう……女王の命令に従いなさい。」

音央は妖精の女王として、妖精に命令していく。

音央のギフトネームは妖精の女王、ティターニア。今までは自分の

力だけで動いていたが、本来は命令する側である。

そして……

「ウンディーネー！」

まずは、水をつかさどる妖精の力により水を放ち、火を消す。

そのまま、一輝のように斬ろうとするが、

「これ、結構難しいのね。今度一輝にコツ、聞かないと。」

ぜんぜん切れず、諦めて次の妖精の力を使う。

音央の周りに風が漂い始める。

「シルフ！ついでにサラマンダー！」

最初は風だけで行くつもりだったが、何かを思いついたのか、火も追加する。

そして、二つの要素を組み合わせて、

「火の竜巻って、意外と作れるものね。」

危険すぎるものを作り、鬼にぶつけていく。

力づくで組み合わせただけなので、荒々しいことこの上ないが、殺すためのものなのでいいだろう。

「この力初めて使うけど、うまく使えるようになれば、一輝みたいな攻撃が出来るのかしら？」

音央は新しい可能性に心躍らせながら、さらに妖精を追加する。

「バグベアー！子供を喰らいなさい！」

音央の言葉と共に全身毛むくじやらの人が現れ、子供の鬼を喰らっていく。

余談だが、毒は風で払い、雷はよけ続けている。

「さて……そろそろ避けずに対処しますか。ノーム！」

音央の言葉と同時に地面が盛り上がり、雷を受け止める。

「この様子なら……あ、鳴央？どうにかかなりそうだから、こつちにも定期的に何体か送って。」

『分かりました。まずは今までに神隠しにあわせたものを送っていきます。』

音央は数が少なくなったため鳴央に電話をして敵の増加を頼む。

今回のゲームでは鬼の殺害が勝利条件なので、神隠しにあうだけで

はだめなのだ。

「さて・・・スプリガン！ジャックフロスト！」

音央は巨大な妖精と雪男のような妖精を召喚し、鬼に向かわせながら、

「ウォーターリーパー！ウンディーネ！」

水をつかさどる妖精二体分の力で先ほどよりうまく水を操り、先ほどの竜巻も使って鬼を潰していく。

|||||

「さて、こちらも試すのでしょうか。」

一方、森に残った鳴央も新しい力を試そうとしている。

この二人は、一輝の奥義を参考に、自分のギフトの本質を学ぶことで新しい戦い方を編み出した。

だから、この二人の力は・・・どこか一輝に似ている。

「神隠し。これを起こす存在は私だけじゃない、ですか。妖怪に詳しい一輝さんに聞いて正解でしたね。」

鳴央は自分の「神隠し」という属性から別の属性に繋げる。

「よーいっしょー！」

鳴央は自分の手に現れた、葉っぱの扇を振り、風で鬼を吹き飛ばし、もう一度振ることで風で切り裂く。

これは、天狗の力を使ったものだ。

ただ、反動で軽く後ろに飛んでしまうのが問題だが。

「私には使いづらいですね・・・でも、これ以外はまだよく分かっていませんし。」

というと、鳴央は再び扇を振り、鬼を切り裂く。

「あ・・・でも、天狗からつなげていけば・・・かなり近いものなら、」
というと、鳴央はもう少しだけ広げる。

「こんな感じで・・・」

鳴央が手を突き出し、少し目を瞑ると、手から炎が出て、燃やしていく。

「普通の火が出てしまいましたか・・・まあ大丈夫ですかね。後はこれにあわせて・・・」

鳴央は火を風であおり、さらに奈落の穴、奈落の門を組み合わせて鬼を倒していく。

この炎は、天狗という属性からそれに化身しているといわれている楼羅天の力を使ったのだが、少し遠いためか金色の炎は出ず、少し神気を持つ火、位のものだ。

「なんだか・・・イメージと違います。どうにも力技は苦手ですね。」

鳴央はそんなことを言っているが、鳴央の性格のおかげでうまく倒しているだけで、一輝や音央がこれを使えば、森はなくなっているだろう。森林伐採である。森は大切に。

「あ、電話ですね。はい、もしもし。」

『あ、鳴央？どうにかかなりそうだから、こつちにも定期的に何体か送って。』

「分かりました。まずは今までに神隠しにあわせたものを送っていきます。」

鳴央は自分の意識の一部を富士蔵村に繋ぎ、さらに妖精の園に繋げることで鬼を送っていく。

「では、もうひと頑張りといきましょう！」

鳴央は火と風、奈落の穴、門を操り鬼を倒していった。

④

「にしても……皆違うのにどれも鬼だって分かるんだから、不思議だよね。」

ヤシロは百詩編で雹を降らせ、火の玉を操りながら鬼の観察をしていた。

「それに、一部は特殊な業も使うみたいだし。こつちも新しいの使わないと、かな。」

ヤシロの見る先では、火を食らう鬼や、雹では一切の傷がつかない鬼などがいる。

そして、火を食った鬼はそのまま火を吐いてきたので、ヤシロは新しい詩を唱える。

「L e b o u t e f e u p a r s o n f e u a t t r a p e , , (放火犯がおのれの火の罫にはまる)

D u f e u d u c i e l a , C a l c a s & G o m i n g e : (天の劫火がカルカソヌとコマンジユへ)

F o i x , A u x , M a z e r e , h a u t v i e i l l a r t e s c h a p p e , (フオア オー マゼール 老いたる重

要人物が逃走)

P a r c e u x d e H a s s e d e s S a x o n s & T u r i n g e . (ヘッセン チューリングェン 一部のサクソン

人に助けられ)

ヤシロが唱え終わると同時に、鬼の吐いた火が進行方向を変え、鬼を燃やしていく。

それだけでは終わらず、天からも炎が鬼を襲い、火を使う鬼は殲滅された。

「よし。やっぱり百詩編はまだ使える。だったら、」

ヤシロはまだ残っている鬼と、追加された鬼を見て、別の詩を唱える。

「Au moys troisieme se levant
le Soleil, (第三番目の月に日昇るとき、)
Sanglier, Liepard, au champ Ma
rs pour combatte (猪と豹、干戈交えんと戦場に
あり。)

Liepard lasse, au ciel extend
son oeil, (倦んだ豹は天に目をあげて、)

Un Aigle autour du Soleil voi
ts, esbatre. (見えるは、太陽の周りを飛び回る一羽の
鷲。)

その詩は唱えている間に効果を現していった。

まず、猪と豹が現れ、鬼を蹂躪していく。

次にもう一匹豹が現れ、天にはえる。

最後に、豹の声と呼ばれ、一羽の鷲が姿を現し、鬼を食い殺してい
く。

「やっぱり、これによる召喚なら、しっかりと機能するし、実力も十分
にある。上出来上出来！」

ヤシロはご機嫌でそれらを操り、鬼を退治していくが、そのせいで
背後に鬼が迫っていることに気づけず、

「きゃあー！」

背中に一撃を喰らってしまう。

「ゲホツゲホツ・・・いたーいー！」

ヤシロはそんなことを言いながらもしっかりと自分を襲った鬼を
倒す。

具体的には豹の集中砲火で。

「うう・・・あれ使おう。」

Corduba encor recouvrera son
siegge (コルドバはもう一度その座を回復するだろう)

.....
(.....)

(.....)

(.....)」

ヤシロが唱え終わると、背中の傷は完全に治る。

手を抜いているように見えるかもしれないが、これも立派な百詩編の一つである。

「あく痛かった．．．もう怒った。絶対に怒った。

Second & tiers qui font primemusique (第二と第三が一級品の音楽をつくり)

Seraparr Roy enhonneur sublimée, (国王により過分の名誉を賜るだろう)

Pargrance & maigre presquedemyetique (肥りかつ痩せることにより なかば衰弱さえしながら)

Rapport de Venus faux rendradepriime. (金星(ヴィーナス)の詐りの報告のために貶められる)

Taschede meurdre, enormesadulteres, (殺人 不義密通で汚れ)

Grandennemy detout le genrehumain: (全人類の不倶戴天の敵)

Queserapire qu, ayeuls, onclesneperes, (そいつは祖先の誰よりも凶悪 父親たち叔父たちよりも)

Enfer, feu, eaux, sanguin & inhumain. (鉄 火 水 血なまぐさい人非人)

Mortconspiree viendran en plaieineffect, (企みによる死が申し分ない効果を生むだろう)

スレイブは馬ごと斬り捨てにかかる。
だが、そう上手くいくものではない。

馬は後ろ足で手刀をけり、無傷のまま方向転換をする。

「今ので傷一つおわないとは・・・それにこの馬、首から上がないな。
となると・・・夜行さん、だろうな。」

スレイブは後ろ足をよけ続けながら、攻撃をしようとするが後ろ足が邪魔すぎた。

夜行さんの乗る首なし馬の特徴は、後ろに立った物を蹴り殺す、というもの。

うかつに攻撃を喰らえば、その性質により死んでしまう可能性があるため、細心の注意を放っているのだ。

「だが、後ろ足じゃなければ！」

スレイブは夜行さんの頭上を跳び、相手二体の正面にたつ。

そして、相手が反応してくる前に手刀を叩き込み、終わらせる。

「鬼の属性を持ってさえいれば、何でも出てくるのか。かなり厄介だな。」

スレイブはそういいながら、次に来た鬼に対して、

「変則版、一角獣！」

思いつきり突きを放ち、大量の鬼を串刺しにする。

そこからは、一輝の肩を真似た攻撃を繰り返していき、どうにかヤシロのもとにたどり着くが、

「・・・なんだ、この状態は。」

百詩編によってボロボロになった森を見る。

それは、既に森とは呼べなくなる位に破壊されている。

「こつちにはこれほどの敵が・・・？それとも・・・」

スレイブは二つの可能性を考え、後者だと推測する。

「まあ、鬼さえ退治すれば・・・！」

「スレイブちゃん、後ろ！」

スレイブは反射的にその声を信じ、後ろにいたやつを殴り飛ばした。

「助かった、ヤシロ。」

「どういたしまして。それより、スレイブちゃんがこっちにいいの？お兄さんの武器は？」

「ああ。それなら問題ない。一輝様は今、獅子王に量産型を何本も使い、妹、湖札と戦っている。私がいても邪魔になってしまう。」

「そっか。なら、一緒に鬼退治しない？」

「それについては構わないが・・・どうやってここをボロボロにしたのだ？」

「百詩編を使いまくった！」

ヤシロが笑顔で言ってくるので、スレイブは何も言えなくなり、

「・・・わかった。とりあえず私たちは私たちのやることをやろう。」

「うん！」

そのまま二人は構え、新たに現れる鬼を退治していった。

うにないし、」

一輝は獅子王を納刀し、腰から八つ首の小刀と、翼を持つ小刀を抜刀する。

「こいつらでいってみるか!」

一輝はそのまま翼を持つほうを投げ、八つ首を振るう。

翼持ちは湖札を攻撃し続け、八つ首は伸びる。

そのまま二振りの刀は湖札を攻撃し続け、一輝に近づかせない。

「これ! 凄く邪魔なんだけど!」

「邪魔するための組み合わせだ! 当然だろ!」

湖札は刀をよけ続けるが、一輝はそれを追うように八つ首を伸ばし、鞭のように打ち、隙が出来たところに翼持ちを飛ばす。

「この・・・吹っ飛ばせ!」

だが、湖札によって翼持ちを弾き飛ばされ、八つ首をつかみ、投げ飛ばされる。

「ひどいな! せっかくの武器を!」

「勝つために必要なら、こうするでしょ!」

「・・・俺もそうするな、うん。」

一輝は湖札の行動に納得し、一気に冷静になる。

「まあ、問題はないけど・・・霊格開放! 八面王、是害坊!」

一輝の言葉と同時に、二振りの小刀は姿を変え、八つ首の大蛇、八面王と鳥人間、是害坊の姿を取る。

「二体とも、行け!」

「了解!」

「GYAAAAA!!!」

是害坊は雷でコーティングされた木製の歯車、護法輪を湖札に向けて打ち、八面王はそのまま湖札に向かう。

「わと、まずはこっち!」

湖札は護法輪をよけ、八面王を殴る。

そのまま八面王が何も出来ないうちにポッコボコにし、その巨体から離れる。

「あれ? 神獣クラスにかなり近かったはずなんだけど?」

「何も出来ないただの大蛇だからね。これぐらいなら！」

といいながら、湖札は護法輪をつかみ、是害坊に投げ返す。

是害坊はそれをまともに喰らい、その場に倒れる。

「結構簡単に倒せるよ。」

「そうなるのか・・・なら、俺が使うのが一番かな。」

一輝が手を向けると、二体の妖怪は刀に戻り、一輝の手に納まる。

「まだ使えるんだ？」

「一応使えるけど、この状態じゃ大したことは出来ないな。別のでいこう。」

一輝はその二振りを納刀し、蛇腹剣と龍剣をとる。

「西洋の龍蛇二振り。試してみますか。」

「試すって・・・その表現おかしくない？」

「いや、この奥義自体、使うのは今回が初だ。こんなのが出来たってぬらりひよんから聞いてただけだけだ。」

「私もやったこと有るけど、新しい力をわざわざ戦場で試す？」

「面白いからだろ！」

「いや・・・でも、そうだね。」

一輝はまず、蛇腹剣を振り、斬激を飛ばす。

湖札はそれを防ぐが、

「あれ、弱すぎない？」

「早合点は止めてくれよ。」

一輝の言葉に湖札は首を傾げるが、

「あ、いつつ・・・なにこれ・・・」

「コイツの斬激だよ。」

「でも、それ一回しか・・・」

「ああ。一回だけ通用する、不意打ちみたいなものだよ。」

湖札は一度しか振っていないのに二回攻撃が来たことに驚くが、一輝は説明を始める。

「コイツのものは大蛇、パロロコン。こいつは知ってるだろ？」

「うん、地震の神格を持つ大蛇・・・あ、そういうこと。」

「理解してくれたなら説明は省くけど、P波とS波ってだけだよ。」

地震には、初期微動を起こすP波と主要動を起こすS波がある。名前の通り、P波とS波が引き起こす揺れの強さはS波の方が大きい。

そして、P波とS波ではP波のほうが進む速度が速い。それを表した攻撃なのだ。

「でも、確かにそれなら決まるのは一回だけだね。さすがにそのことを知ってはいようといまいと、警戒はするだろうし。」

「だから、こんなことも試してみようかな、と！」

一輝は二振りの刀を振り、斬激をあわせる。

結果、起こることは、

「ちよ、これさっきの比じゃ・・・！」

前の攻撃より強くなった攻撃である。そして、これは合わせ方によつて攻撃の型を変える。

湖札はそれをどうにか弾くが、先ほどのこともあり次の攻撃に備える。

そして、一輝はといえば、

「隙あり！」

そこに背中を抜いて振り下ろした。

容赦なく、思いつきり。

「ちよ、こんなものあり!?!」

「隙を見せたお前が悪い!?!」

ちなみに、一輝が使ったのはダイダラボッチをもとにした剣、ただひたすらに破壊力を備えた剣だ。

「それに、いつまでたつてもS波が来ないんだけど!」

「ああ、それか。それなら龍の一撃と混ぜてP波と一緒に届いたよ?」

「そんなのあり!?!」

湖札は驚いているが、一輝はそんな人間である。

相手すら利用し、自らの勝利に繋げる。

「ありだよ。ここはルールの中なら何でもありの世界、箱庭だろう？だから当たり前のように俺に隷属とか起こってるんだし。」

「それ、ちょっと詳しく聞きたかったんだけど、何であんなことにな？」
湖札の声が少し低くなり、剣を弾かれるが、一輝は気づかず、剣を納めて説明を始める。

「まず、音央と鳴央・・・俺と同じ年の二人な？」

「あの、スタイルのいい二人？」

「正解。あの二人は魔王が設置したゲームに捕らわれてたんだけど、そのゲームに俺が挑戦して、無理矢理に二人とも開放してみた。そして、ゲームのルールで隷属することになった。」

「・・・それだけじゃない気もするけど・・・次は？」

湖札は表情を曇らせながら、次を促す。

「ああ。そのゲームを設置した魔王に俺と音央、鳴央の三人で挑むことになって、」

「そこから突っ込みたいんだけど。何でコミュニティで行かないの？」

「倒す理由が、音央と鳴央にやったことだからな。三人で行かないと。」

「相変わらず、兄さんらしいというか・・・何も考えていないようでものすごい考えてるといえるか・・・」

「まあ、白夜叉が許可出したから、大丈夫だろうってことで。」

「・・・まあいいや。で？そこでは誰を？」

「残りの二人。順番に説明してくけど、まずはスレイブ・・・猫耳メイドな？」

「説明の前に、あの格好は何？隷属だからメイド服はまだいいとして・・・よくないけど、猫耳と尻尾。」

「ああ、似合ったから強制した。」

「・・・確かに似合ってるし、いつか。」

いや、よくないだろ。

《いいんだよ！似合ってるし、感情が分かりやすいし！》

《可愛いんだから、それが正義です！》

二人がかり!?

「で、アイツはかの有名な魔剣、ダンススレイブなんだけど、呪いを解

いたら俺についてくれた。」

「・・・そのことがあつてあれなら・・・まだ分かるかな。あの呪いはつらかっただろうし、解呪させてもらうまでに色々あつただろうし。」

「あいつの呪い、知ってるの?」

「ダインスレイブって北欧神話の有名な魔剣だよ? 抜いたら必ず人を殺しちゃうことぐらい、陰陽師とかエクソシストなら知つてて当然だと思ふけど・・・兄さんなら知らないか。」

「武器と戦うことはないからな。まあ、スレイブについては調べたけど。」

一輝はノーネームの書物の豊富な書庫でスレイブについての本を片っ端から読んでいる。

ついでに言うなら、テイターニア、神隠し、ノストラダムスの大予言についてもである。

「話を戻すけど、最後の一人ヤシロは、長い金髪のやつな? アイツが魔王で、そのゲームを完全クリアして隷属することになった。」

「今の話を聞いた感じだと・・・やっぱり兄さんは相変わらずか。私が旅をしてる間に聞いた噂でもそんな感じだったから、予想はついてたけど。」

「相変わらずって何のことだ?」

「お人よし。人助けすぎ。もう一つあるけど・・・これは言わないほうがいいかな。」

「湖札がいたところと、箱庭に来てからはそうだけど、もとの世界では・・・」

「結構信憑性が高い噂なんだけど、某国のお姫様。」

「・・・」

一輝は何も言わず、目をそらす。

それでも湖札に攻撃し続けているのだが。

「兄さんが日本レベルだけで動いてれば誤魔化せたかもだけど、さすがにこのレベルはまずいよ?」

「仕方ないだろ。あれを見過ぎすのは不憫すぎるし。」

「まあ、私もそう思うけどね。でも、そのまま連絡先交換して、関係を

作ることはないと思うよ?」

「せつかく知り合えたのに、友達にもなれないって悲しすぎるだろ。」

「一国のお姫様だつてことを考えようよ……」

湖札はあきれ返る。

一輝はそんな感じでいろんな人と友好関係を結び、人脈を広げていった。

それに必要な言語はそのときに覚えていくので、一輝は結構な量の言語を使うことが出来たりもする。

「さて……聞きたいことも聞けたし、本格的に再開しようか?」

「ああ。湖札が旅で何があつたとかは、隸属させてから聞くとしよう。」

「さて、それは出来るかな!」

湖札は一輝に殴りかかり、一輝もそれを迎え撃つ。

そして、二人のこぶしはぶつかり、あたりを振動させた。

⑥

一輝と湖札は、一撃をぶつけてからぶつかり合いを始めていた。

「何で兄さんが！私と同じ威力を打てるのかな！」

「相手の変化には！しっかりと気づきましょう！命取りになるぞ!!」

一輝は素晴らしいながら、足払いをかける。

湖札はそれを跳んでかわすが、その際に上から見てからくり気づいたようだ。

「背中の剣?」

「正解。霊格吸収ってね。便利なもんだよ。」

一輝は、背中の剣、ダイダラボッチを吸収することで湖札と互角に打ち合っていたのだ。

憑依を強力にしたような感じだ。

「それが可能なら、かなり怖い奥義だね。」

「そこまですでもないよ。少なくとも、神成りよりはました。」

「これは比べる対象じゃないよ。まったく別の次元にある。」

そう言いながら、一輝は背中に剣を戻し、新しく剣を抜く。

姿が曖昧な剣と、青い炎をまとった剣だ。

「次はこいつらでいくか。なんだか、分かりやすそうだし。」

「片方はそうだけど、もう片方はまったく分からないよ。」

「そうか? そうでもないと思うけど!」

一輝は青い炎を振るう。

すると、それは狐の姿をとり、湖札に襲い掛かる。

「予想してたのと違った!」

「俺もだ。まさかこうなるとは。」

一輝は素晴らしいながらも剣を振り続ける。

狐を量産し、全て湖札に向かわせるが...

「邪魔!」

の一言で霧散された。

湖札の被害状況は手に軽いやけどを負っただけである。

「よえー、青狐。」

「呑気にしてる場合!!」

一輝が狐の弱さに驚いていると、湖札が一気に距離をつめ、攻撃を仕掛けてくる。

一輝はそれに反応しきれず、ダイダラボッチも剣に戻しているの
で、ただ殴られ続ける。

「このまま押し切るよ！兄さんさえ倒せば、残りはどうにかなりそう
だし！」

「ちよ、少しは加減しろよ！」

一輝は一発もよけきれず、どんどん殴られ、蹴られていく。

「兄さんは、体中の骨が折れても安心できないんだよ！」

「俺はどここの化物だ！」

そして、一輝が自分の体重を支えきれないかのように、地に膝を着
いたところで、

「チャージ完了！狐火、九尾将来！」

湖札の後ろから、一輝が青狐を放つ。

そのサイズは先ほどとは比べ物にならないくらい大きくなり、尻尾
の数も一本から九本に増えている。

「え、ちよ、きやあああああああ！」

「はっはっは！不意打ち大成功！」

湖札がそれをもろに喰らうと、一輝が急に姿を現す。

「やっぱり、コイツはチャージ型だったんだな。今くらいで九尾にな
るなら、戦闘でも十分に役立つな。」

「あつつい！この・・・えい！」

一輝が武器の性能を検証していると、湖札が風を起こして、炎を吹
き飛ばす。

「お、もう脱出したか。ダメージを与えてもこんなペースで無効化
されるなら、やっぱり使い方を考えないと、かな？」

「そんなことより・・・どうやって後ろを取ったの？確かに私の前で倒
れてたと思うんだけど。」

「ああ、それは」

一輝はいまだに倒れている、一輝に手を向け、「解。」と唱える。すると、倒れている一輝は一枚の紙になり、一輝のギフトカードに入っていく。

「式神でごまかした。」

「なるほどね。でも、背後を取った方法は？ 気配はなかったんだけど。」

「それは、こいつの力だよ。」

一輝は姿が曖昧な刀を取り出し、湖札に見せる。

「コイツは見た目どおり、俺を曖昧にしてくれる。」

「それで急に私の後ろに出てきたんだ。ぬらりひょん？」

「正解。かなり便利な武器だな。」

そういうと、一輝は青い炎を納刀し、代わりにまだ使っていない一振りを抜く。

「では、また消えまゝす。」

「ちよつと待ちなさい！」

待てといわれて待つ人などいるわけもなく、一輝は再び消える。

「次はどこから来るんだろう・・・」

湖札が警戒して周りの気配を探っていると、

「・・・そー！」

背後に気配が現れ、そこに風をぶつける。

確かに、そこに一輝はいたし、もろにその風を喰らって吹っ飛んだ。

ただし、白黒の。

「・・・え？」

湖札がその一輝に疑問を抱いていると、湖札の周りに大量の気配が現れる。

それは、全て白黒の一輝であった。

「うそ!?!なにこれ?!」

湖札は驚いている。

湖札が知る、鬼道に封印された妖怪や魔物、霊獣などの中にはこんなことが出来そうなものはいないのだ。

「どうやってこんなことをしたのかは分からないけど……とりあえず！」

湖札は自分の周りに風を撃ちまくり、白黒一輝を消していく。

湖札はその様子を観察して正体を探っていくが……

「……墨？」

そう、白黒一輝は消える際に墨になって消えている。

湖札はそれと、一輝が全て白黒というところで正体に気づいたようだ。

「そっか。白澤、だね？」

「正解。バレちゃったらもういいか。」

一輝は姿を現し、湖札の前に立つ。

「でも、鬼道が封印してきた中に、白澤っていたっけ？」

「ああ。ギリギリ鬼道が封印した、に含まれるよ。」

「なるほど。封印したのは兄さんなんだ。」

そう、白澤の封印は鬼道の名前を奪われる直前に、一輝が殺し、封印した霊獣だ。

その事実は陰陽師課が隠していたので、湖札が知らないのも十分に納得できる。

「ああ。かなり弱かった。」

「一応霊獣なんだけど……でも、兄さんのギフトなら白澤が何かする前にいけるのかな？」

「そ、一撃で真っ二つにしてやった。」

実際にはそれで終わりではないのだが、一輝はその先を話さない。

「でも、これで兄さんの武器は九個どんな物か分かった。神になってる今なら対処も出来そうだよ？」

「まだ一つ残ってること、忘れてない？」

一輝はそう言いながら、左手首を見せる。

「覚えてるけど、それでどうやって攻撃を？」

「それは、見てからのお楽しみってことで！」

一輝はそのブレスレットを使い始めた。

⑦

「じゃあ、こっちから行くぞー！」

一輝は右手で湖札に殴りかかる。

湖札はそれを右手で応戦するが、ぶつかる前に一輝の左手のプレスレットが光り、組紐になって一輝の右腕に巻きつく。

そして、二人のこぶしはぶつかり、湖札がダメージを負った。

「いっつ……」

「まだまだ行くぞー！」

湖札は右手を押さえて下がるが、一輝はそれを追って攻撃を仕掛ける。

一輝は一切容赦せず、湖札に向けてこぶしを振るうが、湖札はそれをよけ続ける。

反撃してこないのは、喰らったらずいと思っっているからだろう。

そして、一輝が湖札の後ろにあつた木に拳を当て、突き刺さった隙に湖札は距離を置く。

「それ……なに？結構ダメージがでかいんだけど。」

「なんでもないよ。ただのセスタスだ。ちゃんとした名前はあるらしいけど……それはいいか。」

「いや、神様に明確なダメージを与えるものが『ただの』、なわけないでしょ。名前は？」

「気になるのか。」

一輝はそういいながら、セスタスを構える。

すると、一輝の背後にタイヤの一つ一つが人の背丈の二倍はありそうな、巨大なダンプロトラックのヴィジョンが現れ、

「製作者いわく、『象られた力（ジャガーノート）』だそうだ。」

「だそうだってことは、製作者がいるの？」

「ああ、そうだ。」

一輝はそういいながら、セスタス……象られた力で殴りかかる。

が、さすがに湖札もそれを喰らう気はないので、よけながら一輝の腹に攻撃を喰らわせる。

思いつきり殴った後で隙だらけだった一輝は、それをもろに喰らって吹っ飛ぶ。

「いってー・・・なにすんだ！」

「さつきまでの仕返し。それは喰らったらまずいけど、避けやすいし、もう当たらないよ。」

「まあ、そうなるよな・・・仕方ない。」

一輝はそう言いながら象られた力をブレスレットに戻す。

「にしても・・・それは一体何なの？セスタスを持ち歩きやすくしただけ？」

「んなわけないでしょ。こんなことも出来るよ。」

一輝は左手を上へ上げ、ブレスレットを起動する。すると、ブレスレットは光り、姿を消す。

「！次はどこから・・・」

「こつちもいるぞ！」

一輝は獅子王と巨剣を抜き、湖札に斬りかかる。

「気をとられてたらもろに喰らうぞ！」

「警戒しないとか、無理だよ！」

湖札は消えたブレスレットを気にしながら、一輝の攻撃をかわし、攻撃を返す。

そのせいかな、湖札の攻撃は一発も一輝に当たらず、一輝の攻撃をかわすのはかなり危うい。

「《そろそろかな。》霊格開放！ダイダラボッチ！」

一輝の持つ巨剣が巨人の姿になり、湖札に向かう。

「ああもう！何でこつちもいやなタイミングで顕現させるかな！」

湖札は一瞬警戒を外し、ダイダラボッチを殴り飛ばそうとするが、「戻れ！降り注げ！」

一輝はその瞬間にダイダラボッチを回収し、空から大量の剣を降らせる。

これが、先ほど一輝がブレスレットで行ったことだ。

「わ、ちよ、これをどう避けろと!？」

「避けさせるつもりはないぞ〜!そのために数で攻めてんだ!」

もちろんだが、一輝の周りには一切降ってこない

そして、逃げ続けるのにも限界が来たのか、湖札は剣に当たるが、

「あれ?痛くない?」

「あ、やっぱり?そんな気はしてたんだよな。」

湖札は驚くが、一輝は大して驚いていない。

「どういうこと?」

「数を張れば威力が落ちるってこと。反比例みたいに片方が増えれば片方が減る。絶対量が決まってるんだろうな。」

「なるほどね。なら、私は別に避ける必要がないんだ。」

湖札はそうと分かると避けるのを止め、一輝に風の刃を大量に放つ。

「仕返し!」

「ってなるよな〜。」

一輝は剣の雨をブレスレットに戻し、再び起動する。

今度は、分厚いガラスの覗き窓のついたタワーシールドだ。

一輝の背後に浮かび上がるのヴィジョンは、暴力鎮圧部隊。

一輝はその後ろに隠れ、覗き穴から湖札の様子を窺いながら風の刃を防ぐ。

「どうにかなりそう・・・だな。」

「だね。まあ、仕返し程度だからいつか。さっきの雨とそれにも名前かが?」

「ふむふむ・・・雨のほうは、俺の勝手なイメージだからないって。でも、タワーシールドには「一九八四年」って名前があるそうだ。」

「何で年号?」

「・・・聞いてみたけど、「気分だ」だそうだ。」

「そんな適当でいいんだ・・・」

二人して呆れている。

そして、一輝が全て防ぎきり、一九八四年をブレスレットに戻すと、再び龍蛇の双剣を抜く。

「じゃあ、もういつちよいくか。」

「うん。まだゲームは終わってないしね。」

二人は再び、力をぶつけようとするが・・・

それは、大地の地殻から立ち昇る、それ以上の脅威によって妨害された。

覚悟

「この揺れ・・・地震!?!」

「え、うそ。これって・・・!」

二人はその揺れに堪えることが出来ず、地に膝をついて耐える。

二人の視界に入る鬼は全て倒れ、下にいるものから消滅していく。

「湖札!今の言い方は、このことを知ってるのか!?!」

「知ってはいるけど・・・説明してる暇はないよ!早く『煌焰の都』を離れないと、皆殺しになる!」

湖札は素晴らしいながら、体内から出てきた妖刀を引き抜き、一度鞘に収めて再び抜く。

すると、『契約書類』から『主権者から『主権者権限』が失われました。これにてギフトゲーム、『大祓』を終了します。』というアナウンスが流れるが、一輝はそれどころではない。

「それでも説明してくれ!この地震、ウロボロスが原因なのか!?!」

「ああもう!そうだけど、こんなに早くにやる予定じゃなかったの!」

「地震を起こすことがか!?!」

「違う!これは、地下に封印されてる魔王が復活する余波なの!!」

一輝は湖札の言葉に絶句し、固まった。

「たぶん、復活した魔王が狙うのはサラマンドラの宮殿だろうから、そこには絶対に近づかないでね!!」

湖札はそう言い残し、妖怪に乗ってその場を去っていく。

一輝はそこで冷静になつて動き出し、Dフォンで四人を召喚する。

「四人とも、緊急事態だ。それも、今までに無いレベルで。」

「言われなくても分かるわよ!何が起こってるの!?!」

一周回って冷静になった一輝とは違い、音央たち四人は慌てている。

「まず、これは魔王が復活する余波だそうだ。」

「これが余波、ですか・・・?」

「ああ。で、そいつはサラマンドラの宮殿を最初に狙うそうだから、お前らはその林をぬけたところまで逃げろ。ヤシロちゃんか三人を

一輝は全速力で、今までに出したスピードのさらに上を行くスピードで宮殿に向かったが、それでも遅かった。

一輝が付いた時点で既に、黒ウサギをかばい、十六夜は貫かれていた。
「うそ．．．だろ．．．」

一輝は目の前の光景を受け入れられずにいたが、

「十六夜！まさか、死んじやいねえよな!？」

「一輝か．．．本音は一緒に戦って欲しいんだが．．．」

十六夜はそう言いながら、脇腹で自分を貫いている爪を抱きとめ、
「黒、ウサギを．．．連れて逃げろ!!」

「く．．．了解。」

「ああ、皆を頼んだ。この龍は．．．俺が足止めする．．．!!」

十六夜に加勢しようとする意思を抑え、一輝は陰陽師モードになり、是害坊を憑依させると、黒ウサギを抱き上げ、上空に逃げる。

一輝は涙を流しながら、伝説級を除いた空を飛べる妖怪、魔物を顕現させ、この場では無力な人たちを逃がすよう命令する。

「だ．．．．．駄、あ、．．．．．駄目．．．．．!!!」

黒ウサギは一輝の腕の中から落ちそうなほど身を乗り出し、十六夜の背に手を伸ばす。

十六夜は、それに気づいたが、

「——ごめん。旗を取り戻す約束は．．．果たせそうにない。」

無理矢理に笑みを作り、まっすぐな言葉で謝罪をした。

黒ウサギは言葉にならない叫びを上げ、身を乗り出すとするが、一輝が腕に力をこめ、制する。

十六夜の言葉を聞いた時点で、覚悟を受け取った時点で、一輝は黒ウサギを逃がすと決めたのだ。

一輝は十六夜に背を向け、その場から一目散にさった。

短編集？ part 1
短編 一輝とお姫様 ①

これは一輝が高校一年のころの話。

一輝は陰陽師関係のコネで高校に入り、さらにその関係で単位も気にしなくていいという立場なのだが、学校にはいないといけないので毎日通っていた。

それでも、夏休みにまでいく必要はないので（来てくれたらありがたい、とは言われているが。）補修も全てサボって陰陽師の仕事かラノベやアニメ、漫画に時間を使っていた。

「いや〜今期も面白いのが多いな〜。さて、昨日買ったラノベを」

PRUUUUUUU! PRUUUUUUUU!

一輝がラノベの山に手を伸ばすと、携帯電話が鳴る。

一輝は私生活用の携帯ともう一つ、陰陽師としての仕事受注用の携帯を持っている。

今回鳴ったのは後者の携帯だ。

「どんな依頼だろ？はいもしもし。寺西一輝です。」

一輝は「この携帯では」敬語も使うし、礼儀正しく話をする。

『こんにちは。今回は仕事を依頼したくてお電話させていただきました。』

電話の主は、少し低めの男の声だった。

「それはどうもありがとうございます。ご存知かもしれませんが、僕はまだ卵なので、仕事の依頼が来るのはとても助かります。」

『ご謙遜を。あなたの名前はそちらの業界では知らない人がいないとか。』

「卵が一人で頑張っているのが珍しいだけです。それで、依頼の内容はどのような？」

『それなんです。直接会って話をさせてください。そうすれば、すぐに分かるでしょうし。』

「はい、構いませんよ。いつがよいでしょうか？」

『少しでも早いほうがいいので、今日にもお伺いしてよろしいでしょうか?』

「多少部屋が散らかっていますが、それでもよろしければ。」

『構いませんよ。では、今日の十七時にお伺いします。』

「分かりました。あ、それと。僕、電話ではこのように話せていますが、直接会うと口調などが崩れてしまいますが、ご容赦願います。」

『分かりました。では、皆にもそのように伝えておきます。』

通話はそこで終わり、一輝は時計を見る。

現在時刻、十六時半。来るのは後三十分後である。

「さて、準備しますか。」

一輝は靴を履くと家、マンションの一室から出て、そのまま向かいの部屋の鍵を開けて入る。

今までいた部屋はプライベート用の部屋で、今入った部屋は事務所のようなものだ。

もちろん、きっちりと片付いている。

一輝はとりあえずお茶を準備し、お茶菓子も準備する。

もちろん、人数が多い可能性もあるので、かなり多めに準備する。

準備を全て終え、一輝が時計を眺めていると、

ピンポン。

一秒の狂いもなく、ピツタリ十七時にチャイムがなる。

「うわお、時間ピツタリ。・・・どうぞ。」

一輝は玄関まで歩いていき、ドアを開ける。

そこには黒服サングラス軍団と帽子を深くかぶって顔を隠す、一輝と歳の変わらない少女がいた。

「電話したその日に申し訳ありません。こちらにも事情がありました・・・。」

「いいよ、陰陽師への依頼には、そんなのも多いし。訳ありなら、それにあつた対応をするだけ。話を聞くから、入って。」

一輝は入るよう促し、自分が先に入っていく。

人数が予想以上に多かったので倉庫の中から椅子と机を出そうとするが、

「いえ、座るのは私とこのお方だけなので、椅子はこれで構いません。」
「・・・了解。お茶とかはもう準備しちやつたから、飲んでつて。」

一輝はソファに座っている二人とその背後で直立している人たちにお茶とお茶菓子を配る。

「では改めて、陰陽師の卵をやっています、寺西一輝だ。まずはその帽子を取ってもらっても？さすがにその状態の人の依頼を受けようとは思えないし、カーテンも閉めたから誰にも見られないし。」

「・・・分かりました。構いませんか？」

「ええ。預かっていてください。」

少女は帽子を取って黒服に預ける。

一輝はその整った顔と綺麗な金髪を見て、記憶に引っかけかり悩み始めるが、それは長くは続かなかつた。

「あー・・・どおりで見覚えがあるわけだ。」

「はい、こちらは私たちの国の第一公女、マヤ様です。」

一輝はそれで黒服軍団がいたのか、と納得し、今まで出が一番偉いのではないかと？というレベルの依頼者に驚いている。

「・・・まあ、驚いてても仕方ないか。で、依頼内容は護衛？」

「はい、それを依頼するために、こちらに来させていただきました。」

「それなら、何で俺なんか？俺はまだ高校生だし、陰陽師の卵。俺より強くてしつかりと陰陽師を名乗れる人もいると思うんだけど？」

「それは、」

「私が歳が近い人がいい、と頼んだからです。」

黒服が答えようとするが、お姫様・・・マヤがそれを遮り、答える。

「マヤ様、わざわざ貴女が答えなくても・・・」

「いえ、私の我侷ですから、私が自分で答えるのが道理です。」

マヤは無表情で無感情な声を出し、黒服に答える。

一輝はそれを止めて欲しいと思ったが、今それを言っても仕方ないと思いをきる。

「そう思った理由は？」

「日本にいる間だけとはいえ、自分の周りに人が一人増えるのですから、歳が近い人のほうがやりやすいです。」

「ごもつとも。でも、それなら女子のほうがよくないか？」

「それはそうなのですが、こちらで言う高校生の女子で、力のある陰陽師はいませんでしたので。」

「たしかに、男子ならいるけど女子にはいないな。それで、マヤは俺に白羽の矢を？」

「え？」

マヤは一輝の問いかけに驚いたような声を上げる。

「ん？もしかして、意味の分からない単語、あった？」

「あ、いえ。すいません。そういうわけではないです。理由は、それと加えてあなたがその年齢層の中で一番実力を持っているからです。」

「それはありがたいお言葉を。ま、それは事実だな。」

「はい。噂では、貴方は常識はずれの技を使い、妖怪を封印するとか。」

「まあ、まず間違いないな。それは俺のことで合ってる。」

一輝は身に覚えありまくりなので、あっさり認める。

「そうなのですか？」

「ああ。その噂は一切増長されてないし、むしろ抑えられてるな。」

「・・・では、今までに受けた依頼が成功率百パーセントというのも？」

「ああ。公式非公式問わず、全部成功させてるよ。にしても、マヤは俺のことに詳しいいな？」

「あ・・・はい。一応調べましたので。」

「マヤはしっかりしてるな。俺なんか、」

「おい、キサマ。」

一輝とマヤがお話をしていると、その横に座っていた黒服がかなり低い声を出す。

「なにかな？」

「先ほどから思っていたが、マヤ様のことを呼び捨てにし、タメ口を使った理由、教えてもらえるか？」

「癖だ。」

「・・・・・・・・依頼はなしだ。帰りましょう、マヤ様。」

「ですが・・・」

「このような無礼者、例え実力があろうとマヤ様の護衛を任せるわけ

にはいきません。」

マヤは渋っているが、黒服は帽子をかぶせ、部屋を出るよう促す。

そしてそのまま、黒服軍団とマヤは部屋を出て行き、一輝一人が残された。

短編 一輝とお姫様 ②

「私としては、あのお方に依頼したいのですが。」

一輝の事務所を出てから、マヤは車の中で黒服のリーダーにそう言った。

「駄目です。あのような無礼者。マヤ様の護衛など、任せるわけには行きませんから。」

「ですが、彼並の実力者はそういません。それに、私は歳の離れた人に頼むのは反対です。」

「分かっております。ですが、あの無礼者の実力が桁違いなだけで護衛を任せられるだけの実力者がいないわけではありませんから。」

「・・・分かりました。では、そちらには貴方達だけで行って下さい。私はホテルに戻り、休ませてもらいます。」

「会わなくてもよろしいのですか?」

「はい。貴方がその基準で判断するのなら、どのような方が来るのかは予想が付きましますし、パーティーで話すことも決めなければなりませんから。」

「明後日ですから、それは考えなければなりませんね。」

黒服は滞在予定のホテルへと向かうよう、部下に命令した。

|||||

「ふう、依頼はなしか。なら、別口で一件仕事とするか。」

一輝はマヤたちが出て行ってから、パソコンを使って何か討伐依頼が出ていないかの確認をする。

結果、特に面白いものはない。

「ここまでないか・・・雑魚は新人の訓練用だろうから俺がやってもだし・・・。」

一輝がどうしようか悩んでいると、電話が入る。

「はいもしもし。寺西一輝です。」

『すいません。川に河童の群れが出て、子供が遊べず、釣りも出来ずで

困っているのですが・・・』

「分かりました。川の場合と、貴方の名前を教えてください。」

『寺林茂男、といます。川の場合は——』

「はい、では、今すぐ向かわせてもらいます。」

一輝は電話を切り、すぐに準備をして家を出た。

一輝はそのまま、河童と、大量発生の原因を退治しに向かった。

|||||

「マヤ様、到着しました。」

「ありがとうございます。」

マヤが車から降りると、リーダー以外の黒服が全員降りる。

「・・・では、私は部屋にいますので。」

「はい。私も護衛を任せられる人を連れて戻ります。」

黒服のリーダーを乗せた車はその場を去っていく。

そして、マヤも部屋に戻り、黒服たちはそれぞれ、ホテル内の所定の位置に付く。

「はあ・・・あぜこんなことになったのでしょうか。」

マヤは部屋で一人になると、本音を言い出す。

「それに、私は気を使いたくないから同年代がいいといったのに・・・これでは気を使うことになりそうです。」

マヤはそう言いながら、スピーチなどの内容を考える。

真面目な子なので任せられたことを投げ出すことはできないのだ。

——1時間後——

「こんなものですかね。まだ陰陽師の方も来ないようですよ・・・お手洗いにいきがてら、少し散歩でもしましょうか。」

と言っても、ホテルから出ることは出来ないのですが、と言いながら、マヤは部屋を出て、まずトイレに向かう。

マヤの本音ではホテルの外に出て遊びたいのだが、黒服をつれて回るのはいやだろうし、どうにか交渉の末、陰陽師の護衛となら、と許可を得たがそれもまだ来ていない。

もいますが、お金で被害者を出さずに済むのなら、それに越したことはないんです。」

一輝はこの人に会い、少し話をしてすばらしい人だと分かったからさん付けで呼んでいる。

「で、依頼量はいくらでしょうか？」

「ああ、ちよつと待って。」

一輝は倉庫の中から領収書などが入っているかばんを取り出す。

一輝がこんなことが出来るということは、会ってすぐに倉庫からものを取り出したので、茂雄も驚かない。

「では、遠出分はサービスして、千円で。」

「・・・それだけでいいのかい？」

普通なら、河童一匹でとるレベルの代金なので、茂男は驚いている。

「ああ。まあ、一つ条件がるけど。」

「なるほど・・・なんででしょう？」

「これからも、俺に依頼してくれる、って条件。こんだけ有名でも、俺はまだ卵だからな。何があるか分からないし、お得意様が出来るとなり安心なんだよ。」

それに、あの量の河童のおかげで別口でもお金が入るし。」

「そんなことでいいのなら、喜んで。家族全員、一輝さんに依頼させていただきます。」

一輝はその場で領収書を書き、茂男からお金を受け取る。

「では、これで失礼します。」

「あ、ちよつと待ってくれ。これ、うちで取れた野菜だ。ぜひ、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

一輝は野菜を受け取り、夕食の献立を考えながら、水に乗ってその場を去った。

短編 一輝とお姫様 ③

一輝は空を飛び移動していると、一瞬変な感じがし、そのままその感じがしたほうへと向かう。

普通なら、一瞬だったために気のせいだと考えるのだが、一輝は違う。

気の向くままに、行動するのだ。

「さて・・・この建物であつてると思うが、ここは何だ？」

一輝は携帯を開き、GPSでこの建物が何なのかを調べる。

そこは、その辺りでは一番大きく、お偉いさん御用達のホテルであり、夕方に一輝のもとにきたマヤがパーティーを開く場所でもあった。

「なんか・・・流れだとマヤが巻き込まれてるのか？」

一輝はそんな予想を立てながら、今いる場所・・・建物の屋上を調べ。

まず妖気の類がないか念入りに探るが、一切反応は無し。

「仕方ない。自分の目で探すか。何か痕跡があるはずだし。」

一輝の中では何かあるのは確定のようだ。

そして、給水塔の陰に足を伸ばすと・・・

「・・・さて、これはどういう状況だろう？」

そこには、下着姿で縛り付けられているマヤがいた。

「二つ目、マヤはそういうった趣味を持っていて、これはその証拠である。」

一輝はとても失礼なことを考えるが、

「さすがにそれはないか。となると・・・」

一輝は真剣な顔になり、その可能性を口にする。

「二つ目、何かしらの事件に巻き込まれている。三つ目、何かしらの妖怪現象に巻き込まれている。」

この状況では、十分に可能性のある事柄だろう。

「前者は、どうせやるなら人質にするだろうから無し。後者は・・・こんなことをしそうな妖怪に心当たりがあるんだよな・・・こっちはか。」

一輝はそう言いながら、マヤを縛っているロープを水で切り裂く。そして、頬をぺちぺち叩いてマヤを起こす。

「おーい、マヤー。目を覚ませー!」

「ん……ん……は……」

一輝はマヤが目を開けるのを確認すると、倒れないように給水塔にもたれかからせ、背中を向ける。

「えつと……貴方は?」

「昼間に会った無礼者。」

「ああ、あの時の。ところで、なぜ貴方はこちらを見ないのでですか?」
「まず、自分の格好を確認しましょう。」

マヤは一輝に言われて自分の体を見る……いや、服を見るつもりが自分の肌を見てしまう。

マヤは状況を理解すると自分の体を抱きしめるようにし、

「ちよ、何で私こんな格好!?それに、ここ屋上!?この状況何!」

「そんなしやべり方も出来るんだな。男物で悪いけど、Tシャツとジーンズ。」

本当の意味での素のマヤの声を聞いて驚きながら、一輝は倉庫の中から自分の服を取り出し、後ろ手にマヤに渡す。

「あ、ありがとうございます……」

「着替え終わったら言ってね。」

一輝の後ろでマヤが急いで服を着る。

「もう大丈夫です……」

「了解。」

一輝は後ろを振り向き、マヤを見る。

「……まあ、そんなのしかないから、我慢してください。」

「あ、いえ。それは構わないのですが……なぜこのような状況に?」
こんな状況で自分でも整理が付いていないからか、事務所のとぎとは違い、マヤのしやべり方には感情がこもっている。

「それについては、マヤのほうに記憶がないか?気絶する直前とか。」
「そうですね……』ここを開けてください。』と言われて、ロッカーを

開けたところまでは覚えているのですが……」

「なるほどね。なら、当分は大丈夫か。」

一輝が勝手に納得すると、マヤは首を傾げるが、
「で、こっからどうする？ たぶん、部屋に戻ったりするとパニックになった後、マヤが殺されることになるかもだけど。」

「さらりと嫌な事を言わないでください・・・なら、ここに残れと？」

「いや、そうしたら料理されて食べられることになるぞ。」

「死しかないじゃないですか。なら、どうしろと？ 私がいなくなったら、皆が探し回っているのでは・・・？」

「いや、これは入れ替わり系の妖怪の仕業だろうし、そいつはあの黒服とかには手を出せないから。」

マヤは再び首を傾げるが、気にしないことにしたようだ。

「では、私にはどんな選択肢があるのですか？」

「そうだな・・・死ぬか生きるかと、後はやりたいことをする？」

一瞬マヤの目が光ったのを、一輝は見逃さなかった。

「何かしたいこと、あるの？」

「あ・・・はい。どうせなら、日本で遊びたかったんです。」

マヤは少し恥ずかしそうに言う。

「なら、そうするか？ 今日はまだ無理だとしても、明日なら時間もあるだろうし、代わりにマヤの仕事をしてくれるやつもいるしな。」

「・・・はい？」

マヤは理解できていないのか、一輝に聞き返す。

「いやだから、明日一日、日本で遊ぶか？ 道案内に荷物持ち、護衛くらいなら俺でも出来るし。」

「・・・それはとってもありがたいのですが・・・いいのですか？」

「いいよ。暇だし、暇だし。まあ、寝泊りする場所は俺の家になっちゃうけど。」

「・・・では、お願いしてもいいですか？」

「OK。まずは家に向かうか。シャワー、浴びたいでしょ？」

一輝は水を出し、乗って大丈夫なのかと躊躇っているマヤの手を取り、引つ張り上げて飛んでいった。

体を洗いながら、マヤはそんなことを考え始める。

「全然悪い人には見えなかったから付いてきちゃったけど・・・そう思った根拠もないし。」

マヤは一度シャワーを浴びて泡を流し、そのまま考える。

「うくん・・・でも、あの人が悪い人つてことはまずないだろうし、今回のことも間違いなく親切から来てる。それは間違いない・・・はず。」
自分でははつきりとそう思っているが、根拠がないからか最後は自信がなさそうにしめる。

「・・・まあ、どうせ今は信じるしかないんだよね。」

マヤはそう結論付けると、髪を洗い始めた。

|||||

「ただいまー。」

「あ、お帰りなさい。」

一輝が帰ると、マヤは寝巻き姿でソファに座っていた。

「とりあえず、今からメシ作るけど、食べれないものとかある?」

「ううん、ないよ。私に出来ることってある?」

「そうだな・・・とりあえず、服と・・・かの類を買ってきたから、着れるかどうか試しといて。」

一輝はマヤに紙袋を渡す。

「あー、そっか。遊びに行くには必要だもんね。でも・・・買ってもらうことになっちゃったのは・・・」

「気にすんな。妖怪退治で金は使い切れないほどたまってるから。強いて言うなら、それを買ってきた俺の勇気をほめてくれ。」

一輝がそういうので、マヤは袋の中身を見る。

そこには、女物の普段着がいくつかと・・・女物の下着が四セット。
「・・・うん、君は凄いな。」

「ありがとう。そう言っただけで貰えると報われるよ。」

マヤは一輝にそう言うと、別の部屋に入っていった。

そして、服や下着を全て試してみても、その全てがサイズピッタリ

だったことに驚いていたが、下着姿をみられたことを思い出し、顔を真っ赤にしながらか納得するのだった。

短編 一輝とお姫様 ④

「マヤ。メシ出来たけど。」

「あ、今行くから、ちよつと待って。」

マヤは悶絶状態から立ち直り、寝巻きを着なおすと、部屋を出る。

「サイズはどうだった？」

「怖いくらいにピッタリだったんだけど。」

「・・・お互いのためにノーコメントで。」

「うん・・・そうだね。」

二人は顔を赤くしながら食卓に着く。

「まあ、お姫様の口には合わないかもだけど。」

「さすがに、この状況で文句を言うつもりはないけど。」

二人はいただきますと言い、食事を始める。

「・・・普通に美味しいんだけど？」

「それはよかった。まあ、今回は時間をかけたからこんな感じになった。」

「今回、は？」

「俺は、手を抜けるところは抜くことにしてるからな。さすがに仕事では抜かないけど、普段の生活は別。料理も、一分クツキングだし。」
「どうやって作るの!？」

マヤが驚くので、一輝は水や火、空気を操ってぎつと一品仕上げる。

「こんな感じに作る。まあ、味はここに並んでるのは比べ物にならないけど。」

「・・・」

「マヤ?。」

マヤが固まっているので一輝は心配になって声をかける。

「あ、ごめん。何か、現実離れたものを見た気がして・・・」

「ここに来るのにも水に乗ると言うファンタジーがあったと思うけど?。」

「・・・やっぱり、あれも現実だったんだ・・・」

「まあ、妖怪や魔物がいるんだからって受け入れた方が楽だよ。変に

考えても答えは出ないし。」

「うん、そうする。」

実際、考えても答えが出なかったのだろう。

マヤは考えることを止め、食事を再開する。

「にしても・・・マヤは日本語うまいよな？何でしゃべれるの？どう見ても日本人のハーフとかじゃないだろうし。」

「それは、日本には元々興味があつて、日本語を習っていたから。読み書き聞き取りが出来ないと困ることもあつたし。」

「困ること？」

「うん。私が日本に興味を持ったのは、日本のサブカルチャーが理由なんだ。」

一輝は日本のサブカルチャーと聞き、思い当たるものが一つしかなかった。

「アニメ？」

「うん！でも、住んでた所で見てるとちよつと・・・ね？」

「そりやそうだろうな。」

一国のお姫様が部屋でアニメを見ている。

黒服がそんなことを知れば、間違いなく止めさせるだろう。

「で、そういったものを見るのも今回の目的の一つだったんだ。」

「あの黒服たちと一緒に？」

「そんなわけないでしょ？周りに迷惑過ぎるし、一切楽しませてもらえない。」

「だよな。でも、ならどうやって？」

一輝の疑問はもつともだが、マヤはそれに対して対策をとっている。

「どうにか説得して、陰陽師の人と一緒になら、と許可を得ました。」

「それで同年代の人に限定したのか。」

「はい。気兼ねなく話せる人がいいな、と。でも、あの様子だと・・・間違いなく、そんな人は来なかつただろうな。」

黒服が連れてくる人は頭が固い人になる。

マヤは再び、一輝は始めてそう結論付けた。

「だから、そういったものを見て回るのは諦めてただけど……」

「まあ、明日一緒に見て回ればいいな。ついでに、この辺も見るか？」

一輝はご馳走さまと言いい、食器を食洗機に入れるとある部屋の入り口を開く。

そこには、一輝が集めたアニメのDVD、Bluray(の一部)が部屋を占領していた。

「……これ、全部……？」

「アニメのだな。陰陽師関連でたまった金で買ってみた。」

マヤは目を輝かせると、物色を始めた。

そして、数分後、一輝が風呂から上がるとテレビでアニメを見て、机の上には山のようにケースが積み重なっている図が完成していた。

きつちりと並べてあるあたり、本人の性格が出ている。

「視るのはいいけど、夜更かしに慣れてなかったりしたら早めに寝とけよ。明日は行きたいところを回るんだから。」

「うん。でも、たまに国でも隠れて視てた関係で慣れてるから、もう少し位なら大丈夫。」

「そ、ならいいけど。」

一輝はそう言いながら、自分も椅子に座り、一緒になってアニメを視る。

——二時間後——

「ふう……もうこれくらいにしますか。」

「だな。そろそろ寝ないと明日起きれないだろうし。」

二人はケースを片付け、寝る準備をする。

「じゃあ、その部屋に布団があるから、そこで寝て。」

「うん、了解。ところで……えつと……」

「どうした？」

一輝は何かにつまった様子になったマヤにそう尋ねる。

「ええつと……私は君の事をなんて呼べば？」

「そーいや……まだ決めてなかったな。それどころか、しっかりと名乗った記憶すらない。」

一輝はそう言うと、改めて自分の名前を名乗る。

「では遅くなったけど、俺は寺西一輝。個人的な事情で苗字で呼ばれても反応できないことがあるから、一輝でよろしく。」

この事情とは、苗字が変わったことで慣れていない、ということである。

「ん、わかった。じゃあ、一輝はどこで寝るの？何かあったときのために知っておきたいんだけど。」

「ここで寝るけど？」

一輝は今立っている床を指す。

「え・・・一輝の部屋は？」

「そこだよ？」

一輝は先ほど指した部屋を指差す。

「そ、そんな！お世話になってるのに、その人の布団で寝るのは・・・！」

「他に布団がないから仕方ない。それに、マヤより俺のほうが体が強いのは間違いないし。」

「だとしても！ここは私がこちらで寝るのが道理で、」

「あつたとしても、女子をこんなところで寝かせるわけにはいかないよ。部屋の掃除もさつき終わったし、物も片付けたからその辺は大丈夫だし、布団も洗濯してから使つてない。」

一輝のギフトはこんなところでも役に立つ。

「そういう問題ではなく！」

「なら他の問題は何だ？ないなよしさつきと寝ろ。」

「待つてください！」

一輝はマヤを無理矢理部屋に入れようとするが、マヤはそれに抵抗する。

「だったら、一輝も同じお布団で寝れば、」

「お互いの年齢を考えましょう。」

「でも、このままでは何も解決しない・・・」

「マヤがおとなしく寝れば万事解決。」

「では寝ません。」

マヤは結構頑固なようだ。

「・・・それなら、私は寝ないけど、どうする?」

「はあ・・・まさかここまで頑固だとは。」

「じゃないと、ダム——私の護衛の人たちのリーダーね?——
—を説得なんて出来ないよ。」

「OK。分かりました。もうそれでいいですよ。」

結局、一輝が折れてマヤの案をのむことにした。

「じゃあ、もう寝るぞ。今の言いあい時間で時間、意外とたったし。」

「うん、そうだね。もうかなり眠い・・・」

マヤが欠伸をするのを見て、そんな眠いなら早く折れてくれ
よ・・・と一輝は思ったが、口には出さない。

もう諦めている。

二人はそのまま布団に入り、お互いに背中を向けて寝ようとする。

ちなみに、枕は一輝が無理矢理にマヤに使わせている。せめてもの
抵抗なのだろうか?」

「・・・ねえ一輝、私は今の状況が夢みたいなんだ。」

さすがにすぐには眠りにつけず、マヤが話し始める。

「私は一生、自分の立場に縛られて、感情を隠して、そんな生活を送る
んだと思ってた。」

「それで、あんなしやべり方を?」

「うん。本当に小さいころはそうでもなかったんだけど、十歳くらい
からずっと、家族・・・父さまや母さま、お兄様に対してもそうだった。」

「ずっと、自分を偽ってたのか?」

「さすがに、ずっとって訳じゃないよ。部屋で一人のときとか、隠れて
アニメを見てるときとかですら違ったけど、たまにこの口調で独り言
を。」

「・・・」

「だから、会って二回目で感情を含んだしやべり方にして、そのまま今
の口調になってる状況も信じられないし、そのまま男の人の家に泊
まって、今は同じお布団に入ってる。夢だと思ってても仕方ないと思わ
ない?」

「まあ・・・頭が付いて来れてないのは、分かる。そうでもない、こんな状況を受け入れたりはしないだろ。」

「あはは、そうだね。でも・・・この生活をずっと続けたいって考えてる自分がある。これは間違いないと思う。」

「元の生活に比べれば、かなり不自由の多い生活になるぞ?」

「それでも、自分を出せるのは、大きいよ。」

一輝はそれを聞き、ちようどいい機会だと、一つの話をする。

「じゃあ、マヤが自分の話をしてくれたところで、次は俺の話をしてよ。つっても、知ってるかもしれないけど。」

「ううん、聞かせて。一輝のことは先に日本に来てたダムが調べただけだし。」

「じゃあ、かなりダイジェストに。俺、元々はこの苗字じゃなかったんだ。」

「だから、寺西って名前を調べても何も出なかったんだ。」

「そっか、少しは調べたんだっけ。じゃあ、もとの苗字が何か知ってる?」

「ううん、それはなんだか隠してるような感じがしたから、調べてないよ。」

「うん、正解。俺は奥義を習得するまで、苗字は信頼できる人以外には言わないことにしてるから。」

「いいの?そんな話を聞かせてもらって。」

「ああ。マヤは信頼に足る人だって、そう思うから。」

一輝は少し間を置き、

「俺のもとの苗字は、鬼道。日本では良い意味でも悪い意味でも有名な、道を外した陰陽師の名前だ。」

そう、話を始めた。

そこからは、一輝自身は陰陽師の修行に対して乗り気ではなかったこと、父親の言うことを気にせず、自由に行っていたこと、家が妖怪の群れに襲われたこと、一輝がそれを退治し、親玉である白澤を殺したことを、五分程度で話した。

「・・・と、これが俺についての話。」

「・・・なんだか、私とはまったく逆の話のようで、でもどこか似てる話、だね。」

「ああ。だから話そうと思ったのもあるよ。だから、俺にはマヤの気持ち、少し分かる。」

一輝はそこで、一番話したかったことを話す。

「だから、俺はマヤに二つ、選択肢を出せる。」

「選択肢?」

「そう。明日は行きたいところを回る。これは決定としても、その後のことはまだ決まってるから。」

「・・・それは、どんな選択肢?」

「二つ目は、今マヤと入れ替わってる妖怪に全部押し付けて、この生活を続ける。」

「それは可能な?」

「ああ。いまマヤと入れ替わってる妖怪の目的は、やりたい放題することだったけど、マヤを殺せなかったことでそれは出来なくなった。」

アイツはマヤを殺せるまではこのまま演じるしかないし、演じ続けた結果、妖怪としての部分が消えて人間に、本物のマヤになってしまふ。」

「それでも、私の戸籍とか、住む場所は?」

「まあ、戸籍は俺のコネで作って、兄妹・・・いや、姉弟なのか? まあ、そのどっちかには出来る。住む場所もここでよければここに、嫌ならもう一室とればいい。」

「もし私がそれを選択したら、一輝はやってくれるの?」

「ああ。ただし、アルバイトはすることになるだろうし、俺の仕事も少し手伝ってもらうことになると思う。さすがに、命の危険があることはやらせないけど。」

一輝がそう言うと、マヤは次に促す。

「で、二つ目は入れ替わってる妖怪を退治して、マヤがそこに戻る。」

「そこで、今までどおりの生活をするの?」

「それはマヤしだいだ。そっちを選ぶなら、俺に手伝えることはかなり少ないから、マヤがやりたいようにするしかない。」

「私の、やりたいように・・・」

「まあ、明日中に聞かせてくれればいいから、」

「・・・分かった。明日中には返事をするよ。」

二人はそこで話を終え、今度こそ、どうにか眠りに付いた。

短編 一輝とお姫様 ⑤

次の日の朝、一輝が目を覚ますと一輝の横にマヤはいなかった。

そのことに一輝が首をかしげながら部屋を出ると、マヤは朝食を作っていた。

「ふああ．．．おはよう、マヤ。」

「あ、おはよう、一輝。なかなか起きてこないから勝手に朝食を作ってるけど、冷蔵庫の中身は使ってもよかった？」

「ああ。ありがとう。」

一輝はマヤにそう返すと、新聞を取りにいき、ついでに事務所のほうで何かしらの依頼がないかを調べる。

依頼が入っていないことを確認し、元の部屋に戻るともう既に朝食は並んでいた。

「あ、帰ってきた。口に合うかは分からないけど。」

「そんな贅沢は言わないよ。飲み物は何がいい？」

「じゃあ．．．あつたらでいいけど、紅茶をお願いしても？」

「紅茶紅茶と．．．あつた。」

一輝はマヤの紅茶と自分のお茶をくみ、席に着く。

「では、」

「いただきます。」

二人はそのまま今日の予定を話しながら食事を終えた。

「ご馳走様でした。美味しかったですよ。」

「ありがとう。じゃあ私は着替えてくるね。」

一輝は食器の片付けに入り、マヤは着替えに行く。

——三十分後——

「準備できました。」

「よし、じゃあ行くか。」

一輝が準備を、マヤが変装を終えると二人はそのまま部屋を出て、出かけた。

変装といっても、髪形を変え、カラーコンタクトを入れただけだが。「じゃあ、まずはその辺の本屋から回る?」

「うん!」

マヤはそういったところに行つたことがないので、十分に楽しめるだろうと言う考えから、まずは近場から回り、一回食事を挟んでから東京にでも行こう、となった。

そのまま、近場の本屋、CD、DVDショップを回り、昼食を取ることになった。

え、描写?この光景とか読んでても面白そうじゃないし、書きづらすぎますよ?」

スイマセン、いい訳です。そんなの自分には書けません。

「さて、何を食べたい?」

「食べたいもの・・・せっかくだから、何か日本らしいものがない、かな。」

「日本らしいもの・・・急に言われて思いつくのは、寿司か好み焼き、もんじゃ焼き?」

「そうですね・・・回るお寿司屋さんとか、結構あこがれてたりする。」
「これまた庶民的なところになったな。」

一輝はGPSでこの辺りにある回転寿司を探し、一番近いところまでの地図を覚えると、

「じゃあ、行こうか。少し歩くけど。」

「うん!」

二人は歩いてその店に向かう。

まあ、言うまでもないことだがマヤは周りの視線を集めに集めていく。

そんな中歩くこと数分、目的地に着いた。

「ここが、回転寿司?」

「ああ。繁盛してるな!」

「席・・・空いてるかな?」

「それは大丈夫。手は打ってある。」

マヤが首を傾げるが、一輝は気にせず歩いていく。

そして、店に入ると、そこには一輝と瓜二つの人が立っていた。

「え、え!?一輝が二人!!」

「落ち着け、マヤ。お疲れ様、解。」

一輝がマヤを落ち着かせながら目の前にいる自分にそっくりな人に手を向けそう言うのと、それは一枚の紙になる。

「あれ・・・?紙になった?」

「ああ。こんなときにも便利な式神だよ。席はどこ?」

一輝は驚いているマヤにそう説明し、店員に尋ねる。

「・・・あ、すいません。こちらです。」

店員も固まっていたが、すぐに一輝たちの案内を始める。

そして、席に着くと店員はどうしたらいいのか悩んでいたが、

「すいませんが・・・ライセンスを見せてもらってもいいですか?」

そうたずねてきた。

基本的に、私生活での式神の使用は、一部の陰陽師やその卵を除いて禁止されている。

それゆえに、高校生の一輝が使ったことに疑問を抱き、店員は確認しようとしているのだ。

「ああ、そうか。はい、ライセンス。」

一輝はそのことに気づき、ポケットから取り出したライセンスを店員に渡す。

店員はそのライセンスを見ると、表情に驚愕を表し、一輝にライセンスを返すとそのまま去っていった。

「何だったの、今の?」

「一部の人を除いて、なんでもないときに式神を使うのは禁止されるからな。そのための確認だろ。ライセンスを見ればそれくらいは分かるし。」

私生活での式神の使用を許可されている陰陽師のライセンスには、式神使用許可と書かれているか、もつと分かりやすい特徴がある。

「さ、そんなことは置いといて、食べたいものをレーンから取って、それを食べる。今はそうしよう。」

「うくん・・・うん、そうだね。美味しそうな物が多いし、早く食べよ

う！」

二人はそのまま食べ始めた。

マヤが普通に食べているところを見て、一輝は疑問に思い聞いたが、アニメでこういったシーンはあったんだとか。

「ところで・・・気のせいだったらいんだけど、」

「どうした？」

「なんだか・・・視線が集まってるような・・・」

「今更かよ。本屋とか回ってるときからずっとだぞ。」

「うそ!？」

「ほんと。ま、仕方ないだろ。マヤみたいに染めたわけじゃない金髪で、可愛い子がいれば、自然と視線は集まる。」

「か、可愛い!？」

マヤがそのワードに反応するが、一輝は気にした様子ではない。

「ちよ、一輝!？今、かわ、かわ、可愛いって・・・」

「最後のほう、声が小さくて聞き取れなかったんだけど？」

「えと、その、あう・・・」

マヤが俯いて黙ってしまったので、一輝は気にせず食事を再開することにした。

|||||

数分後、マヤが落ち着きを取り戻してから食事を終え、一輝の操る水に乗って東京に向かった。

「まったく・・・まさか一輝がなんの躊躇いもなくあんなことを言う人だとは・・・」

「さつきから何度も言ってるが・・・一体何のことだ？」

「なんでもありません！自分で考えなさい！」

「んな滅茶苦茶な・・・」

まあ、これは一輝が悪い。

「ふう・・・よし！切り替えて遊ぼう！」

「・・・まあ、マヤがいいならそれでいいか。」

二人はその案件を無理矢理に片付け、楽しむことにした。

「さて、どこから回りたい？」

「じゃあ・・・まずはあそこからで。」

マヤが指すのは、遊園地。

「アニメ関係はもう回ったから、次は遊びたいな、と。」

「いいけど、他のところを回れないと思うぞ？」

「それでもいいのー！」

「なら、何も問題はないよ。行きますか。」

二人は、マヤが指差した遊園地に行き、そのまま入場する。

「で、どれに乗る？」

「一輝は乗りたいのじゃないの？さっきから聞いてばっかりだけど。」

「なら・・・最初にジェットコースターに乗る？」

一輝が指すのは、この遊園地でも人気の高いアトラクションである、ジェットコースターで、妖怪ですら気絶した代物である。

それは、見た目にも分かりやすく、恐怖体験できることが分かる。

「・・・あれ、脱線しないの？一部一部道がないんだけど・・・」

「大丈夫、雪女か何かが道を作るみたいだし。」

「なんでそれが分かるの？」

「妖気を感じたのと、今日の前で起こってるし。」

マヤも言われて目を凝らし、透明な道を視認する。

「よくあんなのが見えたね・・・」

「眼は結構いいからな。まあ、勘の部分も多いけど。」

そんなことを話している間に氷の道は消えた。

「で、どうする？あれを最初は結構きついと思うけど。」

「ううん、乗る。頑張る。」

「そんなことを頑張られても・・・」

マヤは若干震えているが、それでも乗る気なようで、ジェットコースターのほうに向かっていている。

そして、乗る直前、さすがに心配になって最後に聞く。

「今ならまだ、降りれるけど？」

「ううん、ここまでできたんだから、乗る。」

が、意思を変えるつもりは無い様なので、一輝は気にしないことにした。

その後、マヤはずっと、悲鳴を上げていた。

「大丈夫か？」

「・・・無理・・・ぜんぜん、大丈夫じゃない・・・」

「・・・やっぱり止めとけばよかったか。」

マヤは一輝に背負われていた。

とても歩くことが出来る状態ではなかったため、一輝が無理矢理に取った手段だ。

「さて、今水出すから、少し横になってろ。」

「はい・・・」

一輝はマヤをベンチに下ろし、そのまま横になるように言う。

「あんなに怖いなんて・・・」

「まあ、普通は空中浮遊とかしないから。目の前に道が出来たり、後ろの道が消えたりも。」

「うん・・・ていうか、何で一輝は、なんともないの？」

「まあ・・・陰陽師関係の仕事で・・・何にもなしでスカイダイビングも、やったことがあるからな・・・」

「・・・大変な仕事なんだね。」

マヤはそのまま休み、数分後に復活した。

「よし、復活！次はどこに行く？」

「念のため、絶叫系は禁止な。まだ万全じゃないかもしれないし。」

「うん。でも・・・それだも行ける所って限られてくるよね？」

「ま、パンフレットでも見て考えろ。」

一輝がパンフレットを渡すと、マヤはすぐに行きたいところを見つけたようだ。

「これなんてどう？お化け屋敷！」

「・・・いいんじゃないか？」

「ふっふっふ。一輝に対して絶叫系が意味ないなら、こっちはどうなのかな？今度は一輝が悲鳴を上げる番だよ？」

「あ、いや、マヤ重要なことを」

「ぎ、レッツゴー!」

一輝が何か言おうとするも、マヤは進んでいってしまふ。

「・・・俺、陰陽師の卵なだけどな。」

一輝はそうつぶやき、マヤのあとを追った。

まあ、結果は予想が付くだろう。

ジェットコースターに本物の妖怪がいるのだから、もちろんお化け屋敷にもいて、マヤは盛大に怖がり、一輝はノーリアクション。

マヤは途中から歩くことも出来なくなり、一輝の腕に抱きついて目を瞑り、出口まで誘導されることになった。

「もう出口に着いたぞく。目を開けろー!」

「・・・怖かった。」

マヤはそう言いながら、その場に崩れ落ちる。

「いや、立てって。すぐそこにベンチあるから、座るならそこにしなさい。」

「無理。腰がぬけた・・・」

「・・・文句は一切受け付けません。」

一輝はそういつてからマヤをお姫様抱っこの要領で持ち上げ、ベンチまで運ぶ。

「・・・ありがとうございます。」

「どういたしまして。何か欲しいものある?」

マヤは何か仕返しを思いついたような表情になると、一輝に提案する。

「じゃあ、膝枕してくれるかな? 枕が欲しいんだけど・・・」

「了解。少し頭上げるぞ。」

「え?」

一輝が何の反応もなくさらっとやったので、マヤは自損技に失敗し、余計なダメージを受けた。

「・・・なんで当たり前のようにやっちゃうかな・・・」

「なんか言ったか?」

「なんでもない。それと、何か冷たいものが欲しいな。」

「膝枕はもういいのか?」

「予想以上に恥ずかしかつたからね。」

「じゃあ、普通に座つてて。そこで買ってくるから。」

一輝はマヤの体を起こすと、すぐそこにある売店に行く。

「ふう．．．一輝を負かすのは諦めよう。」

マヤは現状から一輝に絶叫を上げさせたりするのは無理だと判断し、普通に楽しむことにした。

「ねえそこの娘？一人？」

「俺達と一緒に遊ばない？」

そのままマヤが一輝を待っていると、数人の男がマヤに声をかけてくる。

いわゆるナンパである。

「いえ、一緒に来ている人がいるので結構です。」

「そんなこと言わずにさ。何なら、その娘も一緒に。」

マヤは無感情無表情で対処するが、ナンパどもは気にせず、さらに誘ってくる。

「ねえ、一緒にお茶するだけでもいいからさ。」

「どう？一緒に」

「おーい、マヤ。ソフトクリーム買ってきたけどチョコとバニラどっち食べる？」

そして、そんな状況を見捨てず一輝はマヤの前まで行き、ソフトクリームを選ばせる。

「じゃあ、バニラで。」

「はい、どうぞ。」

「おい、邪魔するんじゃないよ。」

が、ナンパ野郎どもがそれをよしとするわけがなかった。

「ん？何か用？」

「こつちが話してるところに割り込んできいて何言つてやがんだ。」
「あんたらがはけるのを待ってたらソフトクリームが溶けるだろ。そんなことも分からないのか？」

「ちよつと面かせやこら。」

一輝が挑発を繰り返すと、ついにナンパ野郎どもがキレた。

「これ……」

「念のために、な。その状況を見てマヤがどう思うのか。それも含めて、返事をしてくれ。」

一輝は、しっかりと判断して欲しいのだ。

一人の人間の人生を丸ごと変える話だ。

「……ねえ、一輝。私って頑固で負けず嫌いなんだ。」

「ああ、知ってる。」

「だから、こんな状況を見たら思いつくことは一つしかないんだよね。」

「そっか。なら、俺はそれを手伝おう。」

「ありがとう。じゃあ、私からの依頼、聞いてくれる？」

「もちろん。俺は成功率百パーセントを誇る。必ず成功させるよ。」

一輝がそう宣言すると、

「私は、元の自分の立場に戻って、さらに素の自分も出す。そのために、あの妖怪を退治して。」

マヤもその依頼を口にした。

短編 一輝とお姫様 ⑥

二人はその後、一輝の家に帰り食事を食べ、また同じ布団で眠りに付いた。

一輝は帰りに布団をもう一組買おうとしたのだが、マヤがもつたいないと拒否し、こうなった。

そして、次の日の夜、パーティが始まる一時間前。

「さて、最後に確認しとくけど、マヤはパーティが始まった十分後に会場に入ってスピーチを始めるんだよね？」

「うん、その予定だったはず。もしかしたらスケジュールが変わってるかもだけど。」

「まあ、そうなったらその場で対処すればいいだろ。そのためにここにいるんだし。」

二人はホテルに忍び込み、簡単に確認を行っていた。

忍び込み方としては、水に乗って屋上に入り、ピッキングで屋上から中に入ると言うものが。

一輝のギフトで鍵を回したので、ピッキングでいいのかは微妙だが。

「さて、そろそろ人が入場し始めるころだし、マヤは予定通りに隠れてもらっても？」

「うん、タイミングは教えてね。」

マヤはそう言いながら、作戦で決めた位置に隠れる。

「さて、上手くいけばいいけど・・・たぶんあいつはな・・・」

一輝はまだ確証がないため、マヤにも話していないことがあるのだが、それがどう転ぶのかを心配していた。

|||||

「それでは、マヤ様のスピーチに移りたいと思います。」

そのまま時間が過ぎ、パーティが始まってマヤのスピーチに移った。

そのままマヤ（偽物）が会場に入り、マイクの前に立つと、ズガン!!

入り口のドアが蹴り飛ばされ、マヤ（偽物）の横を通っていった。「すいませーん、お邪魔します。」

「そいつを捕らえろ！」

そして、ドアのなくなった入り口から一輝が入ると、すぐに周りを黒服に囲まれる。

「お前・・・あの時の陰陽師か？」

「だから、俺は卵だって。依頼があつたから来たんだけど、通してもらえない？」

「おいお前らー早くそいつを捕らえろー！」

一輝の言葉は無視され、黒服が一輝を捕らえようと迫る。

「はあ・・・邪魔。」

「な・・・」

一輝はそいつらに向かって腕を一振りし、風でそいつらを吹き飛ばす。

「さて・・・パーティに参加されている御偉い様方、無粋にも邪魔してしまい申し訳ありません。ですが、今しばらくご容赦願いたい。」

一輝はそう言って参加者を落ち着かせ、マヤ（偽物）を見る。

「なんでしよう？出来る限り手短に済ませていただけますか？」

「ああ。そこまで面倒な依頼は入ってないからな。もし協力してくれればすぐに終わる。」

「では、その内容を教えてください。出来る限り協力させていただきます。」

「そう？それは助かる。じゃあ、殺されてくれない？」

一輝が気軽にそう言うと、その場の空気が固まる。

そして、最初に動いたのは黒服のリーダー、ダムだった。

「キサマー！ふざけたことを抜かすな！姫様を殺害など、」

「いやいや、俺は一言もマヤを殺すとは言ってないぜ？ただ、そこにいるやつを殺すって言ったんだ。」

「こちらにいるのがマヤ様だろうが！」

「違うよ。なあ、偽物？」

一輝はマヤ（偽物）に話を振る。

「・・・何の事だか分かりかねますが、どうしてそのように？」

「まあ、お前が偽物だからだな。」

「証拠はあるのですか？」

「ああ。凄く分かりやすいのがな。なあ、マヤ？」

一輝はそう言いながら倉庫の扉を開ける。

「ええ、この私自身が、その証拠です。」

そして、倉庫の中からマヤが出てくる。

「マヤ様が二人・・・？」

「一体何が・・・？」

参加者はその光景に驚いており、まともに行動できているのは一輝、マヤ、マヤ（偽物）、ダム。そして、護衛についている陰陽師の五人だけだ。

「そんなもの、キサマの式神だろう？」

「いや、そうじゃねえよ。それはお前が証明してくれるんじゃないか？護衛に付いた陰陽師さん？」

「・・・ああ。確かにそれは、式神ではないな。」

「つてことは、こっちのマヤが本物だって証言してくれるんだな？」

「そうするしかないだろう。にしても・・・一輝、俺はいつから面倒ごととに巻き込まれていたんだ？」

「最初から。将人が依頼を受けた時点で入れ替わってたよ。だから言っただろ？物事を少しぐらいいは疑えって。」

「これからはそうしたほうがよさそうだな。」

二人は会話を交わし、一輝の言っていることの証明をする。

そして、この会話から分かるかもしれないがこの二人は知り合いだ。
だ。

「さて、これで分かってくれたかな？こっちが本物でそっちが偽物だって。」

「・・・では、私は一体なんだと？」

マヤが一輝にそう聞いてくる。

既にバレると諦めているためか、軽く妖気がもれており、ダムが距離を置いている。

「お前の正体は天邪鬼。人の感情を逆なでして遊ぶ鬼だろ？」

「はあ・・・そこまでばれてるなら仕方ないか。ああ、正解だよ。」

一輝に言い当てられ、本性を現していく。

体が黒くなっけいき、形も鬼の形になる。

「さて、こいつは俺にやらせてくれないか？汚名返上したいんだが。」

「お前への依頼は護衛。で、それは開始した時点で失敗してるんだ。

俺が受けた依頼だよ、これは。」

「はあ・・・分かったよ。クソ、何とかして汚名返上しねえと・・・」

「礼儀正しくしてたらどうだ？」

「今はそんな気分じゃねえよ。」

ちなみに、将人は既に奥義を習得しており、陰陽師を名乗れる立場である。

「にしても、後で見に行ったらいなくなってたが、まさか連れて行かれてるとはな。おかげで演じ続けることになった。」

「お前のミスのおかげでな。油断して妖気をもらすからだ。」

「あつそ。でも、卵程度なら俺でもやれるぜ！」

そこで天邪鬼が包丁を持ち、一輝に襲い掛かる。

一輝はそれをよけ、距離を置く。

「逃げるだけかよー！」

「ここはパーティの会場だぞ？荒らすわけにはいかねえだろ！」

一輝はそう言いながら広くなっているところまで誘導する。

「さて、観客もいることだし、少しは頑張ってみるか。」

「は、卵ぶごときが何言ってるんだー！」

天邪鬼はすぐそばのテーブルをつかみ、一輝に向かって投げる。

が、それとそれに乗っていたものは全て空中でとまり、別の位置に運ばれて並べなおされる。

「空気で支えるには重いんだぞ？出来る限り飛ばすんじゃないよ。」

一輝はそう言いながらペットボトルを逆さにし、自分の周りに水を漂わせる。

「へえ、それがテメエの能力か？」

「まあ、そうなるかな。水だからって甘く見るなよ！」

一輝は水の槍を形成し、飛ばす。

天邪鬼はそれを避けるが、槍は方向転換をして天邪鬼を追い続ける。

「これは・・・ちよつとまずいか？」

「いや、チェックメイト。」

そして、天邪鬼の意識が完全に槍に移った瞬間、一輝は空気の刃で天邪鬼を斬る。

「な・・・」

「はいおしまい。」

一輝はそのまま水と空気で斬り刻み、バラバラにしたものを水で包んでその場を汚さない。

そして、光る小さな玉、魂が一輝の中に入ると、一輝は式神を出してその死体を封印する。

「おい、あの少年水で妖怪を・・・」

「ああ。式神すら使わずに、卵がここまでするのは・・・」

「まさか、噂になつてる型破りの・・・？」

一輝の様子を見た観客はそんなことを言っている。

そして、一輝はその人たちのほうを向くと、

「ああ、正解。俺がその型破りだけど？」

さらつとそう伝える。

「それは、本当に・・・？」

「ああ。俺が日本の第三席、型破りこと寺西一輝だ。」

一輝からすれば、ここまで宣伝できる時もないので出来る限り知名度を上げていく。

そして、今言った第三席とは日本内のランキングのことだ。

霊獣を倒したことでこの席についている。

そして、国内ランキング10位までは式神の使用許可など、様々なことが許されており、その旨はライセンスに明記されているので店員は驚いていたのだ。

「じゃあ、彼が霊獣殺しの一人か？」

「まさかまだ卵だとは……」

「それに、まだ子供だぞ……」

ちなみに、このあたりの情報は一輝の年齢もありあまり公表されていない。

国のお偉いさんが調べれば突き止めることは出来るが、ただ偉いだけの人は知ることが出来る内容ではない情報となっている。まあ、この一件で一気に情報はバレたが。

「さて、これで妖怪は退治できましたが、まだやることが残ってるのでまだ時間をもらいますよ。」

一輝はそう言いながらダムの方々に近づいていく。

「さあ、これで依頼は終わったから次は個人的な用事に移ってもいいか？」

「……ああ、なんだ？報酬でも欲しいのか？」

「そうじゃねえよ。俺はアンタに用事があるんだ。」

「何のようだ？早く再開したいからな。さつさと済ませろ。」

「じゃあ単刀直入に、アンタを野良の妖怪と取引した罪で拘束する。大人しくしてもらおうか。」

一輝の言葉に一瞬マヤとダムが固まるが、すぐに取り直す。

「一輝、一体何を言ってるの？」

「マヤ様の言うとおり、何の事だかさっぱり分からないな。いつ俺がどの妖怪と取引したと？」

「マヤに聞いたが、お前は先に日本に来てたんだろ？その時にあの天邪鬼と取引したんだ。でないと、このホテルに天邪鬼程度が入り込めるわけがない。」

ここはお偉いさん用のホテル。そういったものに対するセキュリティがないわけがない。

「なるほど、その時間を使えば可能だろうな。だが証拠はあるのか？」

「まあ、あるな。取引の様子の録音が。」

一輝はICレコーダーを取り出す。

それを見た黒服の顔が険しくなり、

「・・・いつ録った？」

そう聞いてくる。

マヤは一輝の顔が真剣なものだったため、口をつぐんでいる。

「今朝、ちよつと過去に戻ってきた。寒戸に頼めば過去にもいけるからな。」

「は、そんな妖怪を放置しているわけがないだろ？」

「いや、俺がこの倉庫の中に匿ってるからな。俺の立場ならそれも許可されてる。」

「・・・」

「じゃあ、おとなしく捕まってくれるか？」

一輝はそう聞きながら、ICレコーダーを再生する。

そこからは、天邪鬼がマヤと入れ替わり、本物のマヤはダムが好きにしているという取引の内容が流れる。

「は・・・ははは・・・そうさ。俺がああ妖怪に攫ってもらった。」

「認めるんだな？」

「そこまでの証拠を出されたらな。」

「なぜ、こんなことをした？」

「・・・マヤ様を俺のものにするためだ。」

そんなことを薄笑いを浮かべながら言うダムに、マヤが怯えて距離をとる。

「俺が護衛に付いたのは！全てマヤ様を俺のものにするためだ！この美貌は、俺が求める究極のもの！だから誰かに汚される前に俺が」

「ああ、キモい黙れ。」

一輝はダムの言葉を遮り、殴り飛ばした。

「マヤが怯えまくってるし、もう黙ってる。いつそ殺してしまいたいが・・・いいか？」

「駄目だよ！」

「これ、ストーカーと言えると思うんだけど？」

「うん、かなり怖かったけど・・・それでも殺すのは・・・」

「優しいねえ。ま、それなら拘束するだけでいいか。」

一輝は手と足に手錠をかけ、さらに縄でぐるぐる巻きにし、式神二

体を監視につけて倉庫に放り込む。

「じゃ、後は任せた。」

「いや、一輝も参加していけば？一人参加者減ったし、ちよーどいいよ。」

「えー……この空気の中参加するの？」

「この空気を作ったのは一輝でしょ？さっきの水とかで盛り上げてよ。」

「はあ……分かりましたよ。やらせていただきます。」

一輝はその後、投げやり気味に水や火を操り、その場を盛り上げた。

|||||

次の日、空港にて。

「じゃあ、私は帰るね。」

「ああ、またな。あと、これ渡しとく。」

一輝はポケットの中から名刺のような物を取り出す。

「何、これ？」

「俺のプライベートのほうの連絡先。何かあったらメールしてよ。助けに行くから。」

「どうやってくるつもり？外国だよ？」

「俺は、無断での入国を許されてるよ。」

一輝は国でのトップランクなのだから、もちろん世界的にもトップランクだ。

そして、もうこれでもか、と言うほどにいろいろなことを許されている。

いざという時に対処が出来るように、と言う名目のもとだが、乱用している人物はかなり多い。

一輝はまだしていないほうだが。

「そうだったね……じゃあ、お願いしてもいいの？」

「ああ、友達を助けるのは当然だよ。」

「友達……ね。まあ、家族になる方法は他にもあるか。」

「マヤはそうつぶやくが、もちろん一輝には聞こえていない。」

「マヤ様、そろそろお時間が・・・」

「分かった、すぐに行く!」

「マヤがそう返すのを見て、一輝は微笑を浮かべる。」

「頑張ってるな。」

「うん、国に帰ったらまずは家族相手にこれで話してみる。」

「そうしとけ。後から後悔するのは、結構つらいからな。」

「一輝も、妹さんに会ったら素でいきなさいよ?」

「まあ、暴走しないといいんだがな。」

「溜まった家族愛なら、仕方ないでしょ。あ、そうだ。ひとつ忘れてた。」

「何を忘れてたんだ?」

「えっと、ちよつと目をつむっててくれる?」

「別にいいけど・・・」

一輝が目を瞑ると、一輝の頬にマヤがキスをする。

「え・・・は!?!」

「お、初めて一輝を動揺させた!なるほど、直接行けばうまくいったのか。」

「いや、お前・・・何してんだ・・・?」

「今回のお礼、だよ。ありがたく受け取りなさい。」

「マヤはそう言い残すと、飛行機に乗っていった。」

そして、一輝はしばらくその場でブーツとし、どうにか意識を取り戻したところで、

「あ・・・変態ストーカーのこと忘れてた。」

あわてて刑務所に行き、ダムを警察に引き渡し、後のことを全て任せた。

後日のニュースでは、ダムは永久拘束になったと流れていた。

一般人が妖怪と取引、契約をすることは禁止されており、この永久拘束とは無期懲役とは違い、本当に死ぬまで出れず、こき使われ続けるというものだが・・・まあ変態ストーカーにはちよつどいい罰だろう。

異邦人のお茶会

俺、寺西一輝は十六夜の部屋に向かっている。

何でも、親睦会をするそうで、飛鳥と耀に来るように言われたのだ。「確かこの辺だったはず・・・ん？なにやってんだ、飛鳥？」

十六夜の部屋に付いたはいいが、なぜかその前にお盆を持った飛鳥が笑顔で青筋を浮かべながら立ってる。

「見て分からない？両手がお盆でふさがっていて開けられないのよ。」
「なら、中の人に頼めばいいじゃ・・・そういうことか。」

俺はこの状況の原因をなんとなく理解し、扉を開ける。

敵に回しても何にも得はないからな。

「ありがとう、一輝君。あ、春日部さん？通してくれないかしら？でないと高くて美味しい紅茶が冷めてしまうわ。」

「りよ、了解。」

そして、扉の前に立っていたらしい耀は、飛鳥がここまで怒っているとは思わなかったのだろう。軽く怯えている。

よし、触れないでおこう。

俺は備え付けられている椅子に座り、進行を女子二人に任せることにした。

「それじゃ、第一回異邦人の親睦会を開催しましょうか。」

飛鳥のその台詞に、女子二人がわー、パチパチ、と手を叩き合っている。

よく他人の部屋で勝手に盛り上がれるものだ。俺からしても他人の部屋なのだが

十六夜もそんな感じの表情をしているが、

「ま、人の部屋で勝手に開催するのはいいとして。」

いいのか。まあ、十六夜らしいっちゃらしいか。茶請けのチョイスも悪くないしな。

「一輝のところのメイドたちは参加しないのか？ヤシロとスレイブはよく知らんが、残りの二人は異邦人だろ？」

「今回は、あの時召喚された組の、だそうだ。あいつらは別の機会に何

度が集まってるって言ってたし、いいんじゃないか?」

「ならいいか。主催は女子組なんだから、進行はそっちで頼むぜ。」

「だな。俺はそっちに任せるよ。面倒だし。」

「任せなさい。お題だって決まっているのだから。」

「うん。第一回のお題は、自分の世界の生活観で行こうと思う。」

え．．．俺、陰陽師関係でかなりしゃべらされたんだけど．．．

「まあ、いいんじゃないか? お嬢様や春日部がそういうSFチックな話題を振ってくるとは思わなかったが。」

「そうかしら? 自分の生きた時代と別の時代の人間と話し合うなんて、なかなか素敵だと思うけど。」

「私はそういう会話にはあんまり興味ないな．．．でも三人を見た感じ、私が一番未来から来てるみたいだし、話題は提供できるかなって。それに、一輝のいた世界のなら、かなり興味あるし。」

「待て、既にかなりしゃべらされたんだが?」

この上で、さらに新しい話題なんて．．．まあ、あることにはあるか。十分に驚いてくれそうなのが．．．

「そんなことを言いつつ、まだ十分あるだろ?」

「．．．まあ、一応あるな。」

「なら、問題ねえな。それじゃ、年代順に話すとして、まずはお嬢様からどうぞ。」

十六夜が飛鳥にふるが．．．目を逸らしてしまったぞ?

「そうなるのだけど．．．ごめんなさい。私、ずっと実家の屋敷か女子寮にいたから三人が楽しめるような話題は提供できそうにないわ。久遠家が五指に入る財閥だとか、財閥解体政策の裏側の珍話ぐらいなら提供できるのだけど。」

「それはそれで楽しそうだが、一輝は耐えられそうにねえな。」

「スイマセン．．．どうにも社会系は苦手で．．．」

社会の授業とか、基本寝てたからな．．．いや、どの授業もか。

「大丈夫よ。一輝君でも楽しめるような話もあるし。」

「まあ、その話はまたの機会にしよう。今回の話題から少しずれるしな。それより、久遠財閥って日本を代表するような、規模のでかい財

「閤だったのか？」

「ええ、間違いないはずよ。身内を憎く思っている私でさえそう思ったのだから、外部の人間にはなおさらでしょうし。」

「・・・ふうん？」

十六夜が何か考えているが・・・頭を使う仕事は全部あいつに任せよう。

あんまり得意じゃないしな。

さて、飛鳥の話はどうするんだろうか・・・とか思っていたら、耀が拳手して飛鳥に質問をした。

なるほど、こういった形もありか。

「次は私からの質問だけど、昭和の女性って、膝から上が露出している衣服は着ないって本当？ミニスカートやショートパンツもなし？」

確かに、よく聞くな。

そのたびに今とは大違いだな、と思ったものだ。

「当然よ。春日部さんや黒ウサギは、もつと淑女として恥じらいを持ちなさい。」

まあ、こればかりは時代によるな。

耀が服装を変えるところは思えないし。

にしても・・・この二人でこれなら、サンドラやサラはどうなるんだ？

音央の妖精の衣装も結構なものだし・・・

今度聞いてみよう。

「次は俺からいいか？」

「ええ、どうぞ。」

「では、飛鳥のいた時代で、神様とかの扱いはどうなってたか、分かるか？」

「陰陽師らしい意見ね。でも、中途半端だったわ。私の家でも何か大きなことをするときには神社とかに行っただけ・・・形だけみたいだったし。」

「そうか。神社の生まれとしては、そうであって欲しくなかったんだけど。」

「仕方ないよ。一輝のいた世界と違って、妖怪なんて出ないんだから。」

はあ・・・やっぱりそれは大きいか。

「じゃあ、もう一度私から。昭和人から見ても、箱庭はどう見える？」

「とても素敵などころだと思わうわ。大河をまたぐ水樹も、そこに住む人たちも。こんな神秘的なこと、私たちの世界じゃ考えられないことばかりなもの。」

「いや・・・俺のいた世界じゃ結構神秘的なことはあったぞ。」

「一輝君のところは例外よ。もつと根本的なところが違うもの。」

うむ、それもそうか。

妖怪の類がいるかないか、から分かれてるからな。

「・・・お嬢様。さっきの発言は一輝の世界を除いた、俺達の世界を総じてつてことか？」

「ええ、そのつもりで言ったわ。十六夜君の話だと、貴方の世界にも妖怪の類はいなかったのでしょう？」

「ああ、確かにいなかったが、それは訂正を求めませ。お嬢様が言ったものこそなかったが、それに匹敵するものなら俺達の世界にもあったからな。」

へえ・・・俺の世界とは別であれに匹敵するものか・・・一体なんだろう？結構興味がある。

まあ、飛鳥には及ばないが。外の世界を知らなかったのだから、当然の反応か。

目が輝いてるよ。

「私たちの世界にも、"アンダーウッド"と同じくらい凄いものがある？」
「お嬢様の時代には存在しなかったが、あったぜ。」

あ、飛鳥が眉を顰めてる。それじゃあ、知りようがないからな。

十六夜は、まずイグアスの滝について話した。

なんでも、イグアスの悪魔を探すために飛び込んだそうだが・・・
ホント、規格外だな。

生物がいれるような場所じゃないだろ・・・

そんなことを考えていると、十六夜が質問をしてきた。

「そういや、一輝のいた世界なら、イグアスの悪魔もいるのか？」

「ん？ええつと・・・」

まあ、十六夜が抱く当然の疑問だよな。

確かイグアスの悪魔は・・・

「いたぞ。まあ、俺が生まれた時点で既に、殺されて封印されてたみたいだが。」

「へえ、そいつはどれくらいの強さだったんだ？」

「ただの下級悪魔。討伐に行ったエクソシストが五分で殺したらしい。」

「なら、会えても大したことはなかったのか・・・くそ。」

十六夜ががっかりしているが・・・事実なんだから仕方ない。

そして、その次に話したのはイタイプ発電所という水力発電所のことだった。

人の力でここまで作れるのかという話だったんだが・・・絶対にこれで終わりじゃないな。

十六夜のことだから、何かオチがあるはずだ。ぶっ壊したとか、そういう類の。

「以上、『アンダーウッド』にも負けない人類繁栄の軌跡でした。どうだ？この話だけでも大樹の水舞台に負けてないだろ？」

「・・・え、ええ。」

胸を張って言う十六夜と、歯切れ悪く応答する飛鳥。

十六夜は自信満々で、飛鳥は信じられないってところかな？

それと、耀はイタイプ遺跡とか言ってるが・・・そこまで未来から来たのか。

「それにしても、十六夜のお義母さんって、凄いパワフルな人だね。」
「いや、パワフルとか言うレベルじゃないだろ。」

「まあな。アイツが居なかったら、俺はとうの昔に暇死してただろうさ。」

「羨ましいわ。私もその人に拾ってもらっていたら、いろんなことを教えてもらって、いろんなところに連れて行ってもらえたかもしれないのに。」

飛鳥が少し拗ねる様に唇を尖らせているが・・・まあ、それには賛成だな。

それにしても暇死って・・・十六夜らしい死に方だな。

「じゃあ、年代的に、次は一輝の話か。」

「一番面白い話が聞けそうね。」

「期待してる。」

おい、ハードルを上げるな。話すのが難しくなるだろ・・・

まあ、この話題ならいけるかな？

「じゃあ、俺のいた世界で最近増えてきたことでいいか？」

「まあ、内容によるな。」

「じゃあ試しに・・・俺のいた世界では、妖怪との結婚が増え、妖怪と人間のハーフが普通にいた。」

「うわお。」

三人ともこの反応なら、この話題で大丈夫そうだな。

「それが成り立ってるって事は、普通に人間社会に妖怪が混ざってるってことになるが。」

「それであってるよ。本当に一部の妖怪だけど、人間の中で、人間のようにならしてるのはいた。」

「悪事とかを働くことはないの？」

「まあ、それがないように、妖怪には一人陰陽師が担当で付くことになってる。」

「その担当はどうやって決めるの？」

「そいつを連れてきたやつが担当になるな。求道丸もその一人だ。俺が担当してる。」

「なるほどな・・・なら、妖怪にも働き口があるってことか？」

「あるぞ。お化け屋敷とか、物の配達とか、あと、発電所でも雇ってたな。」

俺は、十六夜の話から繋げてみる。

「発電所に妖怪って・・・まさか、その妖怪が発生させた電力を使うわけではないわよね？」

「いや、飛鳥大正解。その妖怪に電気を発生させて、それを変換してる

だけだったな。

給料は、かなりよかつたはず。」

「いや・・・驚いたぜ。まさか異なる種が、それも普通の世界で共栄してるとは・・・」

お、十六夜が驚いてる。

他の二人も驚いてるが・・・まあ、陰陽師と妖怪の戦いを聞いていれば仕方ないか。

「さて、皆驚いてくれたみたいだし、俺の番はこれで終わりでもいいか？」

「ああ、十分だ。二人はどうだ？」

「私もこれでいいわ。十六夜君のとはまた別の驚きがあつたし。春日部さんは？」

「私も満足。一度いつてみたいな。」

よし、好評をいただけたな。

さて・・・次のときは何を話すか・・・なんか探しとかないとな。

「最後はどうとう、自称未来人・春日部の番だが、」

「もうずいぶんと時間が遅くなつてしまつたわね。」

「まあ、楽しい時間は早く過ぎるものだからな。」

「そうだね。明日も早いし、今日は切り上げようか。」

俺はいいかもしれないが、飛鳥と耀は淑女だからな。

男の部屋にいつまでもいるのは常識的によくないだろう。

たまにヤシロが俺の部屋で寝てたりするが・・・

「そういえば、三人は何を手伝つてるんだ？」

「俺はまだ来たばかりだからなにも。」

「私は建築現場には付き合えないから、主な活動は巨人軍に対する警戒よ。」

「私は樹海の方の見回りと、木の実集めの手伝いかな。まだペリユドンや魔獣が残留してて危ないみたいだし。」

二人はしつかり働いてるんだな。

俺も少しは頑張らないと・・・かな。

サラも怪我してるのに休もうとしてないそうだ。

魔王の爪あとが残るのは分かるが、少しは休んだほうがいいと思う。

「そういえば、前に戦った移動式のサーカス、あれも魔王の残留品だったのか?」

「白夜叉に聞いてみたら、そうだって言ってた。」

「ハーメルンの魔書と同じように、魔王が倒されてもお構いなしに起動し続けるものだからいわ。」

「でも、あれはちよつと面白かったよね。」

「確か・・・収穫祭の少し前だったか?」

不謹慎な話だが、あんな遺留品ばかりだったら面白いのに。

「さて・・・そろそろ飛鳥が大きな欠伸をしてるし、限界かな。」

「それじゃ今晚のしめに、春日部さん、一つ質問言いかしら?」

「うん。なに?」

「何か、春日部さんの時代の流行品を教えてくださいようだい。」

「流行・・・服とか、アクセサリーとか?」

「まあ、なんでもいいんじゃないか?」

「強いて言うなら、春日部が未来人だって分かる物がいいな。」

「耀は思案するように腕を組んでいる。」

「まあ、簡潔に、手短かに、別の時代の流行だと分かるものなんてなかなかないからな。」

「だが、耀は意外にも早く、それを見つけたようだ。」

「それじゃあ、私の時代の、流行のヘッドフォンを紹介します。」

「ヘッドフォン?それに流行なんて・・・」

「私の時代には————ウサ耳ヘッドフォンが、世界的に流行ります。」

「耀が両手でウサ耳のモノマネをするが・・・俺たち三人は瞳を丸くした後、大声で笑い、その場で笑い転げた。」

「あの黒ウサギのシルエットが世界中にあって、そんなヘッドフォンが世界的に流行るような世界、もうこの上なく平和なのは確実なのでから。」

リリの大冒険く働かざる者食うべからずと偉い人は
言いましたく ①

収穫祭前夜祭。

これは収穫祭が始まる三日前のことだ。

俺たちは主賓室での晚餐に呼ばれていた。

なんでも、十六夜に飛鳥、耀の三人が腕を振るったというので、興味がある。

「で？三に・・・二人は何を作ったんだ？」

俺は三人ともに問おうとし、途中で十六夜と耀の二人に変えた。

どう見ても、飛鳥は失敗しました、というのが分かるからな。

「俺は、リリに言われた材料をもとにパンプキンキッシュを作った。」

「私はいい食材があったからポトフを作ってみた。」

「なるほど・・・欧風にしたんですね？」

二人の作ったものから、料理をするらしい鳴央が答える。

他の三人が料理をするのかは知らん。

「さて・・・冷めないうちにいただきます。」

さて・・・まずはパンプキンキッシュ、その次にポトフを食べて・・・

「耀に一票で。」

「普通、一口で決める？」

近くの席に座る音央がそんなことを言うが・・・これは間違いない。

「食ってみれば分かる。両方ともレベルが高いが、耀のは桁が違う。」

これは・・・腕が高いだけじゃなく、食材選びからこだわった品だ。

それに、夜は肌寒いこの地域なら、なおさら美味しくなる。

ちなみに、俺たち五人の席は

音央、鳴央、俺、ヤシロちゃん、スレイブ

となっている。基本、食事はこんな感じで取る。

さて、残りの四人も料理を食べ始め

「お兄さん、食べさせて？」

三人は食べ始め、一人よく分からんことを言っている。

なぜか、ヤシロちゃんはたまにこんなおねだりをしてくる。

なぜ、見た目相応の行動を取らない・・・その見た目なら、そういうことに恥じらいを持つところだろ・・・

「・・・あーん。」

「はむっ。うん、美味しい！」

まあ、断ったら次どんなのが来るか分からないからやるんだが。

くそう・・・なぜわざわざ人目があるときに・・・約二名視線が冷たいし、三名弄るネタを見つけたって感じだし・・・

「残りは自分で食えよ。俺だつて食つてるんだから。」

「分かつてるよ！自分で食べれるし！」

「ならやらせるなよ・・・」

さて、無理矢理に話を変えよう。

もうこの雰囲気いやだ。

「で？四人の感想は？」

「そうですね・・・十六夜さんには悪いですが、私も耀さんです。」

ありがとう鳴央！話に乗ってくれて！

なんだか、キアラ崩壊してる気がするが（俺が）、もうそれはいいや！

「私も同じね。両方とも美味しいんだけど、耀さんのほうは本当に別枠。」

「だねっ。でも、十六夜お兄さんののも美味しいよ！」

「私もだ。これは、もっと根本的なところからの問題だな。」

そして、残りのメイド三人も賛同する。

十六夜自身も自覚しているようなので、問題ないだろう。

そして、そのまま晩餐会は進んでいったのだが、リリが言った話の内容により、俺達とはある店に行くことになった。

|||||

さて、リリがいう店があるという亀裂までは来たが・・・

「ここだけ露店も、賑やかさもないのはおかしくないか？」

「まあ、簡単には人が入らないようになってるんだろ。」

「そうだろうな・・・もしかしたら、人払いの恩恵、一種の結界のようなものが張られているのかもしれない。」

「あら。それならリリはどうやってこの亀裂を見つけたの？」

「そ、それは、その・・・暴れ牛に撥ね飛ばされて・・・」

「はあ？暴れ牛って・・・しかもそれに撥ね飛ばされてここに入るのはどんだけ偶然が重なったんだって話に・・・」

「うわああああ！暴れ馬だああああああああああああ!!!」

・・・馬がリリを突き飛ばしていった。

しかも、綺麗に亀裂の中に入って行っただぞ・・・

「つて、何呑気に考えてんだ俺は！」

とりあえずリリに怪我は・・・ないな。

いや、あの勢いでそれは・・・やっばりないな。

何かくらくらしてるけど、それもすぐに直りそうだし。

「リリは大丈夫なの？」

「ああ。特に怪我とかはなさそうだ。リリ？痛いところはあるか？」

「いえ・・・目の前が少しクルクルになったぐらいです・・・」

よし、問題ないな。

しかし・・・あの馬達はどうしようか・・・

「春日部。明日の夕飯は、暴れ馬の馬刺しなんてどうだ？」

「賛成。ついでに暴れ牛の焼肉もしいとね。」

お、それなら・・・

「焼肉は任せてくれ。肉を焼くのには自信がある。」

昔っから何度か、何も持たずに野宿ぐらいのことはあったからな。

一番取りやすい食材が肉で、これの腕だけは異様に高くなった。

「で？問題の店はあれか？」

俺は道を進んだ先にある黒塗りの扉を指差す。

「おそらくそうだろうな。行ってみよう。」

サラが指先に火をともして進んでいくので、俺達は後についていく。

にしても・・・やけに地盤の裂け目が湿気ってるな。

戦うにはいいが、気分的にはなんとも言えん。

さて・・・ようやく着いたが、何か場違い感がハンパないな。どれも高そうだし・・・いや、何か意味分からのもあるな。

ヤシロちゃんがいたら喜びそうだが、スレイブは頭を抱えそうなところだ。

まあ、この辺の指輪なんてあいつらは喜びそうだが・・・高いな。俺は値札を見て、その指輪をそつと戻した。

どれか一個くらい安めで買えそうで喜びそうなのはないか・・・

「オイ一輝、商品見てないでこの契約書類読んどけ。」

「あ、忘れてた。」

すつかりここに来た目的を忘れてたな。

さて、ゲームの内容は・・・

『――わたしはせかいいちのはたらきもの――』

ひとりめのわたしはせかいいちのはたらきもの！

だれのをかりなくてもうごいてうごいてうごきつづけたよ！

あまりにうごきつづけたから、はじめのとうさんもおよろこび

！

だけどあるひ、それがうそだとばれちゃった。

ひとりめのわたしとうさんは、うそがばれてこわれちゃった。

ふたりめのわたしはせかいいちのはたらきもの！

ともだちがてをかしてくれただから、うごいてうごいてうごきつづ

けたよ！

あまりにもうごきつづけたから、つぎのとうさんもおよろこび

！

だけどあるひ、それがにせものだとばれちゃった。

でもふたりめのわたしとうさんは、ともだちのおかげではたら

きつづけたの。

さんにんめのわたしはほんとうにはたらきもの！

まだうまれてないけど、えいえんにはたらきつづけるの！

はやくうまれろ！ はやくうまれろ！ みんなにそういわれつ

づけたよ！

だけどあるひ、わたしがうまれないとばれちゃった。

だからさんにんめのとおさんは、さんにんめのわたしをあきらめたの。

だけどそんなのゆるさない！　たくさんのとうさんがわたしをまっつている！

とみも！　めいせいも！　じんるいのゆめも！　わたしがうまれたらてにはいる！

だからお願い……………わたしを諦めないで……………！　例え、真実が答えでも……………！　』

．．．なんだこれ？

え、こんな契約書類あるの？　つてか、これにはルールとか書いてあるの？

いや、もしかしたら要点だけで見れば．．．

一番多く出てくるのは働くって言葉か．．．一応写真に取っておこう。

久しぶりに使うなくこの携帯。

「で、サラ。こんな契約書類もあるのか？」

「まあそれは間違いないだろうが．．．わたしにはさっぱり分からん。お前たちに任せるよ。」

「いや、任せるなよ階層支配者。」

「一輝の言うとおりのだ。これから戦う魔王の中に知略に特化しているのがいたらどうするんだ？」

サラはぐぬ、とか言いながら黙った。痛いところを突かれたんだらうな。

で、少し頬を染めてそっぽを向き

「それぐらい分かっている。だが、誰でもお前たちや白夜叉様のように万能なわけではないんだぞっ。」

あ、拗ねた。

それと、俺は別に万能じゃないぞ。そこまで頭使うようなゲームに挑戦したことないし。

それに、この文面も．．．あれ？　一人目、二人目は失敗し、三人目

は誕生すらしない・・・そう証明された・・・働き続ける・・・動く・・・まあ分かったが、これはまた、酷いゲームだな。クリア方法はあるが、それ以前に、だな。

まあ、今はそんなことよりも、

「この地鳴りは何だ？」

こつちのほう的重要だろう。

その問いにはサラと耀が答えてくれた。

「気をつけろ！何かいるぞー！」

「それも多分・・・一つや二つじゃない・・・！」

耀は『従業員以外立ち入り禁止』と書かれた向こうを見てるから、そつちから何か来るんだろうな。

念のために水樹の枝だけは準備しておくか。

「リリ。絶対に離れるな。」

「は、はいー！」

「——来るー！」

さあ、扉の向こうからは何かく

「——うわお。」

・・・俺たち四人の驚きの声が同時に発せられた。

うん、これは正しい反応のはずだ。誰だってこの状況ならこの手の反応をするはずだ。

だって、リリは既に涙目だし、サラですら綺麗な赤髪を真っ白にしてるし。

うん、まあ何が出てきたかというと・・・マッチョ人形だ。

もう既に何言ってるのか分からないが、これが現実なんだから仕方ない。

いや、人形としての完成度はかなり高い。

その道の玄人が見れば感動の涙すら流すのではないかというくらい
の出来ではあるし、もとの世界では立场上、そういった芸術分野も
少しくらいは学ばないとならなかった。

たまに依頼者の自宅で自慢げに見せられたりしたからな・・・
話が脱線したが、それでもこれはない。

胸筋と背筋が細かく痙攣してるのはもう気持ち悪いことこの上ない。

こいつらは、こんな感じのやつらが取りそうなポーズを幾つか取り、白く輝く歯を見せて、

「・・・ムキッ！」

「ムキ!!」

「ムキ!!」

「ムキって鳴いた!!?今ムキって鳴いた!?!」

「ちよつと落ち着け女性陣。今のはきつと鳴き声じゃない。」

「そうだな。ムキッて鳴くはずがないしな。」

そうだ、そうに決まってる。

きつと混乱しすぎて物音とかがそう聞こえただけだ。そうに違いない。

よし。一回落ち着けばちゃんと音が聞こえるはずだ。

さあ、マツチヨ人形郡が大仰に臨戦態勢に入ったぞ。こつちもいつでも迎え撃てるように

「・・・マツチヨ！」

「マツチヨ!!」

「マツチヨ!!」

「マツチヨって鳴いた!!?今のは絶対にマツチヨって鳴いた!!」

「そうだな。今のは絶対にマツチヨって鳴いたな。」

「うん。物音を聞き間違えるってのも無理があるしな。」

そもそも、動物並みの聴覚を持つ耀が聞き間違えるはずもないしな。

きつと作った人が筋肉にちなんでそう設計したんだ。他にもそれっぽい鳴き声を出すのかもしれない。

ただ、これ以上はリリが限界な気がするから止めて欲しい。

十六夜の肩の上でカタカタ震え続けてるぞ・・・

さて、大きささまざまなマツチヨ人形の群れが出てきたが・・・もうこつちに統率力はないな。先に行動するのは無理そうだ。

だが・・・そうなるとまたこいつらが、

結局、俺達は断崖壁の入り口まで逃げ、水樹の枝から出した水の温度を下げ、氷の壁にすることでどうにか逃げ延びた。

どうせあのゲームはクリアできないんだし、もう俺がここに来る必要はないだろう。

もうあの人形群は見たくない・・・

リリの大冒険く働かざる者食うべからずと偉い人は
言いましたく ②

「アンダーウッド」主賓室。

俺達は呼ばれてここに来た。内容は例のゲームについてだそうだ。

「ねえお兄さん、わたし達まったく話の内容が分からないんだけど。」

「ああ、四人は例の店に行つてなかったしな。まず、あの人形は店に置いてあつたものだ。」

「それはなんとなく分かつてるんだけど・・・なんでわざわざここまで話し合いになつてるのよ。」

「それは、あいつ・・・コツペリアを連れ出したことでゲームに組み込まれてた魔王、退廃の風が開放されたからだ。」

「たしか、恩恵の有無にかかわらず、触れた瞬間に霊格を磨り潰す魔王、でしたか?」

「そう。で、対処法としてはまず、コツペリアをもといた場所に戻すことなんだが・・・」

「それではリリちゃんが納得しないでしょうね。」

「間違いなくな。で、この話し合いになつてるんだろ。」

「他に対処法はないの?何かこう・・・退廃の風にだけ効く方法とか・・・」

「それは、今白雪が話してるよ。」

まあ、そう簡単な方法じゃないだろうがな。

俺達はそつちの話に集中する。

「要点をまとめるとだな・・・退廃の風を押し返すには、該当する階層以上の旗印・・・今回なら四桁以上の旗印が必要、ということだ。」

これはまた・・・ヘビーなのがきたな。

もちろん、俺達ノーネームには上層に頼むだけのコネクションはない。
い。

となると方法はゲームクリア以外にはないんだが・・・あれをクリアする方法は・・・

「・・・ゲームをクリアするしかない、か。」

・・・は？今十六夜はなんていった？

「おい十六夜。それは本気で言ってるのか？お前が言ってるのは、あれを完成させるってことだぞ。」

「ああ。幾つか確認することはあるがな。ガロロのおっさん、退廃の風はゲームのロジックとして呼び出された魔王であってるか？」

「・・・ああ。話を聞く限りじゃ、今回のケースはそれだろうな。」

「よし。次にお嬢様、ディーンは今も連れてるのか？」

「連れてはいるけど、片腕が損壊したままだから激しい戦いに出すのは・・・」

「いや、戦わせるつもりはないから安心しろ。後確認することは――」

ディーンを戦わせるつもりはなく、それでも必要？

で、あれを完成させる必要があるから・・・なるほどな。確かにそれなら、人類の手によるものじゃあないが、完成させることは可能だろうな。

「そういうことか。相変わらず、話がぶっ飛んでやがる。」

「どういうこと？」

小声で言ったつもりだったが、ヤシロちゃんに聞かれていた。

いや、他の三人にもだな。まあ、話しても問題ないか。

「まず、このゲームのクリア方法だが、想像はつくか？」

「いえまったく。そもそも、あの文面からルールを考えること事態、」

「・・・無理よね。これ、よく分からないことが書いてあるし。」

「まあ、普通に考えれば無理だな。でも、わたしは人に作られたものであり、とうさんはそれを作った人であると考えたら？」

「・・・その創造物を完成させる、ですか？」

「スレイブ、正解。で、この創造物については働き続けるを動き続けるとかで考えれば？」

「まさか・・・第三種永久機関？」

「そ、つまり、このゲームのクリア条件は」

「第三種永久機関を完成させること。でもそれは・・・」

くと、

「鬼道流体術、霞投げ！」

そのまま背負い投げの要領で地面に叩き落す。

よし、まだこの技使えた。それに、お札も頭に描いた通りに機能してくれた。

今の俺の手はお札に込められていた呪力のようなものを纏っている。

これは邪を弾き、邪を喰らうお札の呪力。

退廃の風のような物ならうまく機能する。

俺が安心していると、十六夜が声をかけてくる。

「まさか、一輝にはそんなことまで出来たのか。そのまま倒してくれねえか？」

「ふざけんな。この技使うの自体久しぶりなんだ、次も成功するとはかぎらねえだろ。」

「そっか。まあ、役者も揃ったことだしその必要もないか。」

十六夜が見ている方向を見ると・・・そこにはコツペリアがたっていた。

そして、手に持った契約書類を広げると、それは一枚の大きな旗となり、*「アンダーウッド」*に靡く。

「——ゲームクリアです。*「退廃の風」*よ、もはや貴方ではわたしを滅ぼせない・・・!!」

へえ、あれがコツペリアのコミュニティ、ラスト・エンブリオの旗印か。

真つ赤な生地に重なり合う歯車、幻想を孕んだ蕾。

「去りなさい、退廃の風よ*「わたし」*の終わらない夢、パラドックスゲームが終了した以上これ以上の限界は契約違反、箱庭から追放されることになりますよ。」

さて、これであの魔王がおとなしく去ってくれるといいんだけど・・・無理だろうな。

コツペリアが完成したことでここら一带はアイツにとってのご馳走の山だ。

技で霞投げって言う。」

「そんな技があるのですか？」

「まあね。やり方としてはお札とかに含まれる呪力的なもので手を覆って、そのまま投げるだけの技なんだけど、結構そのあたりのバランスが難しいんだ。無形物を統べる者で操れる保証もなかったし。」

「でも、あの場面で使ったってことは自信があったんだ？」

「いや、もうかなり久しぶりに使うし、呪力を操ったこともなかったから、一切自信はなかった。」

一気に俺を見る目がジト目になった。

こうなるから話したくなかったんだ・・・

「・・・はあ。まあ、あの状況じゃあ仕方ないか。」

「そうね。今回は大目に見ましよう。」

「ただし、前にも言ったけどお兄さんはあんまり危険な賭けに出ないでね？」

「過去に一度、それで死に掛けていることをお忘れなく。」

スレイブが言ってるのは無形物を統べるものを使えなくなったと
きのことだろう。

何で二人もそのことを話すかな・・・心配してくれるのは嬉しいけど。

「了解。一人の時には極力避けるよ。」

「いや、常に避けなさいよ。」

「俺はお前達を信じてる。何かあったら助けしてくれるって。」

「助けますけど、そんな事態を作らないでください。」

さて、そんなことを話してる間にも全員にパンプキンキツシュが配られたみたいだし、俺も手を合わせるか。

さて、いただきま

「うわああああああああああああ!!! 暴れマッチョだああああああああああ!!!」

まさか・・・またあいつらが・・・

「・・・おい。あの筋肉、ゲームの一部じゃなかったのか？」

「ご冗談を。あれは追憶に追いやられた何某かの具現です。」

・・・ってことは・・・せつかく、もう会うことはないって安心してたのに・・・

「マツチヨって何・・・?」

「あの店の奥にいた人形だよ・・・窓から見れば、言ってる意味が分かるだろ。」

四人は窓から外を見て、顔を青くしたり、面白がったりした。

「何、あのキモイの!？」

「しかも大量に！」

「今すぐ退治しに行きましょう、マスター!!」

「あはははは!あれ面白い！」

いや、俺は気にしない。もうあれは見たくもないし、あんなのにスレイブを使いたくない。

とりあえず、キツシユを食べよう。

「おい一輝、何当たり前のように食ってやがる。マツト狩りハードに行くぞー！」

「ふざけんな!一人で行ってこいよ！」

「メイドたちが怯えてるが、いいのか?」

確かに・・・三人は怯えてるな。

だが、わざわざ追い掛け回したくもないし・・・

「ああクソ!行くぞヤシロちゃん！」

「うん、了解お兄さん！」

俺は唯一楽しそうにしていたヤシロちゃんを連れて窓から飛び降り、

「さあ百鬼夜行の始まりだ!あのキモい人形どもをブツ潰せ！」

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

百鬼夜行を召喚してあの人形どもを狩りまくった。

短編 一輝と安倍晴明 ①

マヤの一件が有った夏休みも終わり、二週間がたったころ、一輝は制服を着て登校していた。

一輝が高校に通っている理由は二つ。一つは気分。もう一つは仕事である。

「さて、今日も何事もなく一日を過ごせたらいいな。」

「誰か助けてー!!」

一輝の願望は一秒もかからずに打ち砕かれた。

そして、少し不機嫌になりながら振り返ると、一輝と同じ学校の女子生徒が逃げてくる。

それを追っているのは、背丈二メートル、全身深緑の体毛で覆われ、鶏のようなクチバシを持つ妖怪だ。

「また朝から面倒な・・・今日はなにか嫌なことがありそう。」

一輝はその場に立ち止まり、その妖怪と女子生徒のほうを見て、倉庫の中からペットボトルを取り出す。

ちなみに、一輝は荷物を一切持たずに登校している。

「とりあえず、俺の後ろに隠れてて。」

「え・・・あ、はい!」

女子生徒はそこで一輝の存在を認識したようで、声をかけられたことに驚くが、一輝の顔を見るやいなや、安心したような顔になり一輝の後ろに隠れる。

「にしても・・・コイツは山地乳か? たしか夜に活動する妖怪のはずなんだが!」

一輝はそんなことを言いながら水でその妖怪を切り、自らに魂を、式神に死体を封印する。

「ま、弱いしっつか。終わったよ。」

一輝は自己解決し、後ろにいる女子生徒に声をかける。

「うん、ありがとう一輝君。」

「ん? 何で俺の名前、つてなんだ、里香か。珍しく遅いな。」

「たまにはこういう日もあるよ。まあ、今回はあの妖怪のせいな部分

も多分にあるけど・・・」

「よくここまで逃げてくれたな。流石は陸上部。」

この少女、清水里香は一輝のクラスの委員長で、陸上部のキャプテンである。

その立場上、いつもは学校が開くと同時くらいには学校にいるのだが、今日はそうも行かなかったようだ。

「一輝君がいてくれて助かったよ。今度お礼するね。」

「いいよ別に。生徒を妖怪から守るのが、俺の仕事だし。」

「でも、まだ学校についてないんだから、時間外労働じゃない？」

「そういえなくもない・・・かな？じゃあお言葉に甘えて。」

「うんっ。」

さて、今の会話にも出てきた一輝の仕事内容だが、学校にいる間と学校行事中、生徒を妖怪から守ることだ。

これを実行しているため、一輝は私立高校にもかかわらず学費、その他学校で必要な費用を免除され、単位も何もしなくても入る。本来は大人がやる仕事なのだが、一輝はその立場からこの仕事に割り当てられ、楽できるからと一輝もそれに乗った。

ちなみに、このシステムが出来た原因は、保護者による子供が妖怪に襲われたらどうするのかという意見（クレーム）で、すべての学校に学年数だけの実力のある陰陽師を配置することが義務づけられた。で、さっきの妖怪はなんなの？山地乳って言ってたけど。」

「ああ、それがあいつの名前。やることは、夜寝ている人の枕もとに現れ、唇にあのクチバシを突っ込んで息を吸いだし、生気を吸いきると次に胸をポンポンと叩き、出て行く妖怪。その場には死体が一つだけ残る。」

「キスされて胸まで触られるの・・・」

里香は本気で気持ち悪そうに、顔を真っ青にしている。

「まあ、その様子を第三者に見られたらそいつは出て行き、被害者は健康になって寿命も延びるらしいけど・・・」

「嫌に決まってるでしょ!？」

「だよな。まあもう退治したし、封印したから。にしても・・・追いつ

ている。真面目に授業を受ける気は一切ないのだ。

一輝はそのまま一日中寝ていようとしますが、後十分で授業が終わるタイミングで放送が流れ、そもいかなくなる。

『寺西一輝君。寺西一輝君。お客様が来ています。至急校長室まで向かってください。繰り返しです。寺西一輝君。——』

《俺に客ってことは・・・陰陽師関係か。面倒だな・・・》

一輝はそう思いながらも立ち上がり、教室を出る。

そのまま校長室に着くと。そこには見覚えのある人物がおり、一輝は顔をしかめる。

「陰陽師課の人間が何のようだ？」

「出合いがしらにその態度は悪くないか？」

「攻撃されなかっただけありがたいと思え。で、本当に何のようだ？」

一輝は軽く殺意を滲ませながらさういう。隙あらば自分を利用しようとするやつらだから、悪い印象しかないのだ。

そして、たつぷり二十秒ほど間をおき、一輝のイライラがピークになりそうなタイミングで、そいつは用件を言った。

「晴明神社周辺で異常現象が発生。対処を依頼してきました。」

短編 一輝と安倍晴明 ②

「さて……そろそろどんなことが起こってるのか話してくれるか？」
一輝は車で生命神社周辺まで向かいながら、運転している陰陽師課の人間にそう聞く。

さすがに、一般人が巻き込まれそうだったため、学校を早退して依頼を引き受けたのだ。

学校には他にも陰陽師がいるので、一輝がぬけても大事になることは少ない。

「そうですね……竜巻から狐火による不審火、持ち主不明の式神が暴れたり、他にも様々なことが起こっています。」

「死者は？」

「なぜか、一般人からは出ていません。ただ、対処しようとした陰陽師の人間や、こちらから依頼した陰陽師など、その現象に立ち向かった陰陽師は全員死亡しています。」

「となると……何か強い妖怪が目的を持ってやってるってことになるか。一般人の避難は？」

「既に完了しています。周辺にはうちの人間以外誰もいません。」

「なら、俺が到着したら俺以外全員を避難させろ。あと、報酬に壊れた家やそこにあるもの全ての弁償。それが完了するまでの間、その人たちに住む場所をしっかりとったところで無料提供。これを追加で。」

「……分かりました。貴方が成功した場合、全ての要求をのむよう言われていきますから。」

一輝はそれで満足したようで、倉庫の中から水や火などの武器を用意しようとして、ふと思ったことを聞く。

「その辺りって、学校設備でも何でもいいからプールある？」

「そうですね……はい、いくつかあります。」

「晴明神社に向かいながらよれるところには全てよってくれ。武器を補充する。」

「了解しました。」

一輝はそのまま、三軒のプールに張ってある水を全て操り、現場に

向かった。

|||||

「では、ご健闘を祈ります。」

一輝は近寄れる限界地点まで付くと、車を降りてその現象に向かつていく。

「まずは竜巻を！」

一輝は操ろうとしたが操れず、同規模の竜巻をぶつけることで相殺した。

そして、水を使っていくつかの現象を潰しながら走ると、式神らしきものに出会う。

「骨だけのやつに動物を凶悪化したようなやつら・・・妖怪が元になった式神か。俺の式神じゃ対処しきれそうにないな。」

一輝はとりあえず水で対処することにし、まず三体を紙の状態にし、再召喚されないように倉庫の中に放り込む。

「さて・・・残りのやつらはどうするか・・・」

一輝は鹿が突進してきたり象が踏みつけてこようとしたり、狼が噛み付いてこようとするのを避けながら悩む。

そして、とりあえず鹿の角をつかんで突進を止めると、

「ウオラ!!」

そのまま振り回して狼にぶつけ、倒れたところに近づき尻尾をつかむと、両手にそいつらを持って象に向かつていき、その二体を使って象を紙の状態に戻し、残りの二体もぶつけて紙の状態にする。

結局、力技である。

「よし、このまま突き進もう！」

一輝はそのままその異常現象を潰しながら、一直線に晴明神社に向かった。

|||||

||

「こんなんでも何人もの陰陽師が死んだのか・・・いくらなんでも弱すぎだろ。ランク外ばかりが挑んだのか？」

一輝は無傷で異常現象の中心地、清明神社へたどり着いた。

まあ、これは一輝が異常なほどに強いだけで他の陰陽師が弱すぎたりするわけではない。

「さて・・・とりあえず神社の中に入るか・・・いつそ壊しちゃえばこの現象は止まるのかな？」

一輝はそんな罰当たりなことを言いながら神社の中に足を踏み入れる。

「いや・・・そこまでする必要もないか。」

一輝は入ってすぐにその場の異常に気づく。

そこには、妖気と神気が充満していたのだ。

「何かの封印が解けたのか？いや、それよりはここに奉られてる存在から考えたほうがいいのか？」

一輝がそんなことを考えていると、どこからか声が聞こえてくる。

『ほう、ようやくここまでたどり着けるものが現れたか。その実力ならば、十分であろう。』

「は？一体どこから・・・」

壁などないのに、響いて聞こえてくる声に一輝がきよろきよろしている。

『では、我が悲願を成し遂げるため、共に参ろう。』

「いや、だか、ら・・・」

一輝はそこで、意識を失った。

|||||

|||||

「おーい、はよ起きんかい。わざわざ連れてきた意味がないやろ。」

一輝は自分に向けられた声と、頬を軽く叩かれる感覚で目を覚ました。

「あれ……ここは？確か清明神社に入って……」

一輝は辺りを見回すが、そこには神社などない。どうやら山の中にいるようだ。

「お、やっと目を覚ましたんか。さすがに、陰陽師として覚醒してもないところを連れてくるのは無茶だったみたいやな。」

「つてことは……アンタが俺をここに？確か、あそこからはもう人を避難させてたはずだが。」

「まあ、ボクが連れてきたのは正解やな。」

「なら、早くあそこまで案内してくれ。」

一輝はようやくその人物を見る。

そして、表情が驚愕に染まる。

「……は？そっくりさん……いや、このレベルの霊格は……でも、もう死んでるはず……」

「ん？何か言ったか？」

「いや……俺は、寺西一輝だ。あんたは？」

一輝はその質問で全てを解決するつもりだった。

全てが偶然のものだと、そうするつもりだった。

だが……

「ん、ボク？ボクは安部晴明やけど？君がいた時代ならかなり有名やし、しつとるやろ？」

だが、その期待はあっさりと、新たな事実と共に打ち破られた。

短編 一輝と安倍晴明 ③

「・・・ちよつと待つて。一分でいいから時間をくれ。自分の中で今の状況を整理したい。」

「ええよ。すぐに理解は出来ないやろうし。」

「では、お言葉に甘えて。」

——1分後——

「つまり、アンタはあの、清明神社に奉られてる陰陽師の安倍晴明で、ここは俺がいた時代から見た過去。俺が何でここにいるかというアンタのほうで何か目的があったから、で合ってるか?」

「ああ、おおむねその通りや。じゃあ、詳しい説明に入ってもええか?」

「ああ。とりあえず全部話してくれ。」

一輝は宣言通り、一分で現状を理解し、話を進めるよう言った。

「じゃあ、君は酒吞童子ってしつとるか?」

「ああ。たしか、あんたが見つけて、誰だったか忘れたが他のやつが討伐した、日本三大悪妖の一体だろ?」

「そ。でも、ボクはその歴史に納得しておらんのや。」

「と、言うと?」

「まあ、簡単なことや。何でボクの手柄を他人に横取りされなならんねん、つて。」

一輝はその言葉に、ものすごい疑問を抱いた。

「なら、報告せずに討伐しちゃえばよかつたじゃねえか。それで万事解決だろ?」

「いや、そうもいかんねん。さすがに、この時代のボク一人で酒吞童子の一派を倒せるわけではない。だから援軍を頼もうとおもつとつたんやけど、」

「それよりも、別働隊を動かそうとなった、と。」

「正解や。さて、ここまで言えば全部理解したんとちやう?」

「ああ・・・つまり、俺のいた時代で神様になったアンタは、その力を乱用して歴史を変える・・・それが出来なくても枝分かれを作ろうと

「千本斬り、鬼直！」

日本刀を勢いよくふることで巨大な斬激を放ち、雑魚の鬼を全て殺す。

「さあ、やろうか酒吞童子？」

「ほう、我に勝負を挑むか。よかろう、相手をして」

「いえ、このようなものに頭首が相手をするまでもありません、私がやります。」

酒吞童子に仕える四天王の一人、虎熊童子が清明と酒吞童子の間に立つが、

「わるいが、テメエらの相手は俺だ！」

一輝が横から殴り飛ばし、さらに空気の弾を飛ばすことで四天王と茨木童子を酒吞童子から引き離す。

「キサマ、邪魔をするな！」

「悪いが、断らせてもらう！これが、俺の今回の仕事だからな！」

一輝は式神を展開し、結界を張ることで完全に隔離する。

そして、そのまま自分の武器を自分の周りに漂わせ、まず熊童子に攻撃を仕掛ける。

「お、俺に来るか！いいぜ、ぶっ殺してやる！」

そして、熊童子が防御の構えを取ると、その上から殴りつけ、手につけた水を放つ。

「な・・・そんなのありかよ・・・」

「ありだよ、これくらい。俺の能力を抑えて使ってるだけありがたいと思え。」

一輝はさらに水を放ち、その命を奪うと、死体を後ろに投げる。

この様子に残りの四体が固まるので、

「さあ、かかって来いよ。少なくとも、全員で来ないと死ぬぞ。」
そう挑発をかける。

流星は鬼というべきか、その挑発に鬼どもは反応し、
「いくぞー！コイツをどんな手を使ってでも始末しろ！」

一輝に襲い掛かってくるのだった。

短編 一輝と安倍晴明 ④

「さて、あつちは一輝君がやってくれるみたいやし、こつちも始めよか？」

一輝がザコの鬼を全て片付け、四天王プラスαを引き受けている間、晴明は酒吞童子と対峙していた。

「よいのか？あの小僧に加勢してやらんで？」

「問題ないよ、彼なら十分、あの鬼達を圧倒できる。それより、自分のことを考えや！」

晴明は袖から式神を六枚取り出し、同時展開する。

「さ、いこか。ボクの式神たち！」

その掛け声を合図に六体の式神が酒吞童子のもとにかけていく。

最初に狼のような式神がたどり着くが難なくかわされ、蹴り飛ばされて紙に戻る。

そのまま鹿、象、鎧武者、骸骨、猪が攻撃を仕掛けるも、全て一撃の元に紙に戻される。

「あら、一輝君のときもそうやったけど、そこまで弱くないはずなんやけど？」

「確かに、式神の出来はよい。だが、それでも所詮は式神だ。」

「やつぱり、そうなるんやなく。ま、ほかにも手はあるし、ええか。」

「それは怖いな。何かする前に葬るとしよう！」

今度は酒吞童子が晴明に襲い掛かる。

日本三大悪妖といっても、鬼であるためか肉弾戦が中心のようだ。

酒吞童子は晴明に殴りかかり、蹴り、様々な攻撃を加えるが、全てお札によって防がれる。

有名な、ゴボウ星の書かれたお札ゆえに、普通のものの何倍もの防御力を持っているようだ。

「その程度か？」

「いや、そのはずはないだろう！」

酒吞童子は虚空から棍棒と鎌を取り出し、再び晴明に襲い掛かる。

晴明はそれを再びお札で防ごうとするが、その防御を簡単に突き

破ってくるので、慌てて避ける。

「あつぶないなあ。何で攻撃が通るんや?」

「我が武器は、全てが少しばかりの神気を帯びておる。そのようなもので防げる道理があるまい!」

「なるほどなあ。ほな、僕も別のを使おか。それに対応できるだけの武器を。」

晴明は式神を掲げ、そこに呪力をこめる。

すると、次の瞬間に晴明の手には木刀と五鈷杵が現れる。

もちろん、木刀もただの木刀ではない。神木を削って作り上げた、業物である。

そして、五鈷杵というのは蓮の蕾のような形をした、古い時代の武器である。

「その武器でどこまで出来るか、見せてもらおう!」

酒吞童子が獲物を使って攻撃を仕掛けるが、晴明は全て木刀で防ぐ。

神木を削って作り上げたため、それ自体が軽く神気を帯びているのだ。

そして、何度か打ち合い、がら空きになった胴に五鈷杵を突き刺すと、

「ナウマク、サンマンダ、バザラダン、カン。」

「ぐ、ぬううううう!」

自らの呪力を流し込み、内側から攻撃する。

そのまま、出来た隙に木刀を叩き込み、片方の腕を使い物にならないくする。

「ほう・・・なかなかの武器、のようだな・・・」

「まあ、母上からもらったものやからな。業物にきまつとるやろ。」

「母上、だと・・・?」

晴明の言葉に、酒吞童子は片腕を抑えながら晴明を見据え、一つのこと気に気づく。

「そうか・・・どこかで感じたことのある気配だと思ったら、貴様の母のものか。」

「ああ。一部遺伝したみたいなんや。ま、便利やからええんやけど。」
清明がそう言うと同時に、清明の周りを狐火が回り始める。

「ま、君との戦いでこれはつかわへんけどな。半分人間やから、あんまり多様は出来んのや。」

「それはありがたいな。同じ日本三大悪妖であつても、あの方との間には天と地ほどの間がある。」

酒呑童子は虚空から新たな武器を取り出す。

それは、日本刀だった。ただし、長さが異様に長い。

「まだあるんか?」

「もちろんだ。まだまだいくらでも出てくる。」

そう言いながら、酒呑童子は日本刀を振るう。

それを使う目的は清明と距離を置き、五鈷杵を使わせないことで、案の定それは成功する。

「近づけへんなあ、それ。」

「それが目的だからな。まだまだあるぞー!」

そう言いながら槍も取り出し、折れた腕に縛り付けて振るい、さらに距離をとる。

結果、清明は距離を置かざるをえなくなり、五鈷杵をしまう。

「ようやくその武器を収めたか。」

「まあ、この状況で使えるとは思えへんしな。それに、遠距離の武器は他にもあるんやぞ?」

清明はそう言いながら新たな式神を取り出し、呪力を流して武器にする。

それは、一般に銃と呼ばれるものだった。

「これなら距離があつても撃てるし、」

そう言いながら狙いを定め、一気に五回引き金を引く。

「呪力をこめれば連発も出来る優れものや!」

「まさか、そのようなものまで!」

急に現れた飛び道具に酒呑童子はあせり、武器を落としてしまう。

「さあ、いつまで避けつつけるんや?」

「く、忌々しい!」

酒呑童子は最初のうちは避け続けていたが、きりがないと気づき石を清明の手にぶつけて銃を落とさせ、思いつき踏みつけて破壊する。

「ああ、もったいない。結構高かったんやで？」

「そんなこと、我が知ったことではない！」

酒呑童子はそのまま肉弾戦に持ち込み、清明を圧倒する。

所詮清明は人間であり、式神などを使って戦うことがメインだ。肉弾戦はあまり得意とはいえない。

「わ、ちよ、殺す気かい！」

「当たり前だろう！何を今更！」

清明はついに避けきれず、連打を喰らい始める。

「ああ、痛いなあ・・・ハッ！」

「熱！」

が、喰らい続ける気はないようで狐火を使って酒呑童子を遠ざける。

そして、その間に指先で星を・・・清明紋を描き、

「喰らいや！」

「何だこれは!？」

そこから、膨大な呪力の散弾を撃ち始めた。

それには、一撃一撃が霊獣の命をも脅かす力がこめられている。

普通の陰陽師には決して、一輝ですら撃てない、清明レベルだから撃てるものである。

「まあそれは、一発喰らえば分かるんとちゃうん？」

「それで致命傷になることは分かりきっている！」

「まあまあそう言わずに、試しにズガっと、」

「話を聞いていたか!？」

だんだん、清明がボケ、酒呑童子が突っ込みになってきている。

「まあ、喰らわんならそれでええんや。」

「ほう、この攻撃を諦めたか。」

「いんや、そんなわけは無いやろ？」

「・・・は？」

「こんな時にするべきことは……」

「弾数を増やす、や!!」

晴明はさらに二個晴明紋を追加し、散弾の量を増やす。

「な、おい!この流れでそう来るのか!?!」

「ああ!ちなみにこれは、一輝君の戦い方から学んだことや!」

そして、それすら酒吞童子が避けきったことからさらに十個という数を追加し、数ウ茶当たるの考え方で撃ちまくり、どうにか一発あてる。

「ようやく当たったな。ま、楽しかったで?」

「それはキサマだけだ。最後があのような終わり方では死にきれん……いつか蘇ってみせる。」

そういつて、酒吞童子は死んでいった。

いや、確かにこんな終わり方はいやだろうな……

短編 一輝と安倍晴明 ⑤

一輝が張った結界の中、一輝は四人の鬼と対峙していた。

「さあ、こないのか？それならそれで簡単に葬れるから楽でいいんだけど。」

そう言い放つ一輝に、四人の鬼は恐怖を抱いていた。

あつさりと四天王の一人を葬り、さらに四天王と副首領である自分達が目の前においても一切自信を失わない、そんな人間は今までにいなかったのだ。

だが、それでも彼らは誇り高い鬼である。

「・・・恐怖を捨てろ！今はこの人間を・・・寺西一輝を葬るのだ！」
茨木童子の言葉で三人の鬼もまた武器を取り始める。

そして、一輝に向かってくる。

「・・・やっぱり、お前たちは誇りを持った鬼だな。ここに、敬意を示す。」

一輝はその言葉と共に形無いものを漂わせていく。

そして、まず一輝に襲い掛かってきた星熊童子の刀に水の刃をぶつけ、次にきた金熊童子の鎌に炎の刃を、虎熊童子の棍棒を空気の楯でガードする。

「お、意外。まさか武器全部使つてようやくガードできるなんて。」

「覚悟を持つ一撃は強大な一撃をえる！これで終わりだ！」

そして、全ての形無いものを使ったところに茨木童子が二振りの長刀で襲い掛かるが、

「な・・・!?!」

「まあ、無くなったなら増やせばいいだけなんだけど。」

一輝が取り出した日本刀とバタフライナイフによって防がれる。

もちろん、清明の木刀と違って何の変哲もない、ただの武器で、である。

「我が刀を、そのような武器で・・・だと!?!」

「まあ、驚くのは仕方ないけど、隙を見せちゃだめだよ?」

一輝はそのままバタフライナイフのソードブレイカーを使って一

振りを破壊すると、そのまま水を抑えるのに精一杯な星熊童子にバタフライナイフを投げる。

軽くその場にある空気をまとわせたその刃は、星熊童子を貫き、その命を奪った。

「さあ、これで水は使えるようになったよ?」

「な、キサマ・・・!」

茨木童子が感情に任せて襲い掛かるが、一輝の操る水によってその攻撃は失敗に終わる。

「さあどうするの?俺の手には武器が一個戻ったよ?そして、君のお仲間それぞれ俺の武器に苦戦中。」

「ならば、俺が一人で倒せばいいだけだ!」

そういつて茨木童子は一輝に刃を向けるが、一輝の操る水によって一瞬で弾き飛ばされる。

「な・・・」

「悪いけど、君程度の妖怪一人で俺は・・・伝説殺しは倒せないよ。」

一輝はそう言いながら、水や火、空気を霧散させ刀とバタフライナイフのみを構える。

「何のつもりだ?」

「たいした意味はないよ。ただ、これ以上頭痛が酷くなるとこの後がつらそうだと思うただけ。」

「それが、その技の代償か?」

「そうだよ。でも、お前ら相手になら、これは使わなくても勝てる。」

「ずいぶんとなめてくれるな?」

「ああ。俺は、一人で妖怪軍団を相手に出来るからな。」

実際、一輝は白澤との対戦の際にこの鬼レベル達相手に無双している。

残り三体程度ならば、ギフトを使うまでもないのだ。

「ならば、容赦はしないぞ!」

三体の鬼が本気の一撃を一輝に放つ。

それは命を懸けた、自らの生命力すらをもこめた一撃だった。だが、その攻撃は、

「鬼道流剣術、返し！」

一輝の剣術によって絡み取られ、そのまま打ち返される。

「これで終わり。まあ、楽しめたよ。」

「ふん、我らからしてみれば楽しむ要素などなかった。」

「が、いくつか学ぶこともあったな。」

「ああ。次はこれをいかして大暴れするでしょう。」

「あつそ。今回はしないけど、次に殺されて、封印されたら一生復活は出来ないものだと思えよ。」

「そうか。覚えておこう。」

そういって、三体の鬼の命は散った。

「そっちも終わったみたいやな。」

一輝が散っていく命に手を合わせてると、後ろから清明が来てそういった。

「ああ。なんとも面倒な一対五は無事に終わったよ。もってことはそっちも？」

「うん、終わったで。とは言っても君とは違っていくつか攻撃を受けたんやけど。」

そういう清明の体には、確かにいくつかの傷がある。

「んなこと知るか。お前の力不足だ。」

「うん、それは間違いないな。」

「で？もう終わったんだから帰らせてもらっても？」

「え、なんで？帰すと思ってたん？」

「だよなあ・・・あの狐の息子が、そんな気前がいいとは思えん。」

元々、一輝は清明のことを信じていなかった。

だから、一輝は戦いの途中で無形物を統べるものを使うのを止めたのだ。

「なら、ボクが言いたい事も分かるんやな？」

「ああ。式神になれば、とでも言うつもりなんだろ？お断りだよこの野郎。」

「そんなことを言っておえんか？ボクはこの時代に干渉するからこのころの力しか使ってへんけど、神としての力を使ってもええんやで

？」

その瞬間、清明の霊格が一気に上がる。

だが、それでも一輝はひるまず、自分の周りに武器を漂わせる。

「……本気か？」

「ああ、本気だ。勝算はあるしな。」

一輝はそう言いながら、少し倉庫の入り口を開く。

「そうか……ならば、我も手加減はせぬ。」

一輝の覚悟を理解したのか、清明の口調が神のそれになる。

そして、一輝は一瞬息をのむと、

「全弾掃射！」

「な、ちよつと待てー！」

手元にある操れるもの全てを操り、清明の目から見えないようにする。

そうして出来た隙に倉庫の入口を思いっきり開け、住人に声をかける。

「いまだ、寒戸！俺をもといた時代に連れてけ！」

「な、おい！ちよつと待てー！」

「待たん！」

そして、一輝はそのまま寒戸に送ってもらい、もといた時代に帰った。

|||||

「……戻ってこれたか。」

一輝はもといた神社で目を覚まし、急いで本殿の中に入る。

「えっと……この封印が解けてたのか。」

一輝はそう言いながら、清明が出て来れた原因であろう封印の綻びを見つけ、そこに倉庫の中に突っ込んだ式神を無理矢理に突っ込み封印をしないおす。

もちろん、今までの封印の何倍もある強度で、だ。

「よし……後は専門家でも呼ばせて封印をさらに書き足してもらえば

いいか。」

一輝は作業を終えると、仕事用の携帯を取り出してここまで送ってきたやつに連絡をする。

「終わったぞ。再発しないように封印が得意なものを何人が送ってくれ。」

『分かりました。すぐにそちらに送ります。』

「あと、報酬のほう、金は振込みで。後から要求したことは今すぐに始めろ。」

『・・・今指示を出しました。では、これで全て終了ということですか？』
「ああ。依頼は完遂した。全部終わりだ。」

一輝は電話を切り、すぐそばの水道から水を出してペットボトル一本分を補充すると、さらに水を出してそれに乗り、学校へと向かうのだった。

もちろん、授業を受けるためではなく、睡眠をとるためだ。

短編 一輝と安倍晴明 ⑥

「とまあ、これが俺がもといいた世界で体験し、驚いた怪異現象の一つだよ。」

一輝は音央と鳴央に安倍晴明との一件を話していた。

時系列的には、一巻と二巻の間くらい、場所的にはノーネームの一輝の部屋である。

「一輝のいた世界ではそんなことが起こったの？」

「ああ。つつてもこれだけのことが出来る存在はかなり少ないから、貴重な体験なんだけど。」

「貴重、ですむものではないと思うのですが・・・歴史は変わらなかったのですか？」

「それは大丈夫だった。あそこで分岐点が出来て、別の未来が出来ただけみたい。」

そう、あの後一輝はもとの歴史で色々調べたが、その範囲では何一つ変わっているところはなく、少し拍子抜けしたのだ。

「ところで、聞いてて思ったんだけど、いい？」

「ああ、どうぞ。」

「その寒戸って妖怪を使えばノーネームが崩壊するよりも前の過去に行ってそれを防げるんじゃないの？」

音央の疑問はもつともである。

十六夜がいればたいいの魔王はどうかかなりそうだ、と思って当然のことを彼はしているのだから。

が、そう事は上手く運ばない。

「それが、寒戸はもう倉庫の中にいないし、俺の監視下にいないんだよね。」

「どうしてですか？」

「俺が箱庭に来る一週間前に嫁入りした。」

「嫁入り!?!」

二人が揃って驚く。まあ、普通の人からしたら当然の反応だろう。

「うん、嫁入り。生まれてくる子供がどんな能力を持つのか、ちよつと

楽しみだったんだよな。」

「いや、そんなことより。結婚相手も妖怪なの？」

「いんや、人間。確か歳は……二十七だったかな？まあ俺がいた時代では妖怪と人間の結婚も許されてるし、最近では珍しくもなかったよ？」

「……想像できないです……」

一輝はその二人の反応に満足したようで、立ち上がる。

「さて、話して欲しいって言ったから話したけど、どうだった？」

「二回驚いたわよ……それも、予想外のところで。」

「そうですね……全く違う種族での結婚とかも、本当に想像がつきませんし。」

「この箱庭の世界でなら意外とあるんじゃないかな？何背こんなにいるんな種族が集まつてるんだし……ん？なにこれ？」

一輝は話している途中で手紙を発見し、それを手に取る。

「これは、サウザンドアイズの旗印だけど……話を始める前からあつたっけ？」

「いえ、私達が部屋にきたときにはなかったはずですが……」

「サウザンドアイズって事は白夜叉でしょ？あの人なら気づかれずに手紙をおいていくぐらいできるでしょ。」

「それもそうだな。」そうですね。」

一輝を呼び出した手紙も気づかないうちに置かれていたものだから箱庭ではよくあることなのかもしれない。

「さて内容は……おぬしに客人が来ておる。時間があれば店に來い。」

『白夜叉』俺に客人？」

「参加したゲームで出来た知り合いとかではないですか？」

「それなら、わざわざ白夜叉を介する必要はないだろ。少なくとも、白夜叉が動くだけの相手のはずだから。」

「そんな相手に心当たりはあるの？」

「……ないな。こっちでの大物の知り合いとか、そんなにいないし。」

一輝はそう言いながら窓を開け、倉庫の中からペットボトルを取り出す。

「行くの？」

「ああ。重要な用件とかだったら困るしな。今日は比較的暇だし、ちようどいいだろ。」

「では、念のために私たちもついていきます。」

「そうね。一輝に恨みを持つてる、とかだとその場でゲームを挑んでくるかもしれないし。」

「用心深いなあ。じゃ、行きますか。」

三人はそのまま水に乗り、サウザンドアイズに向かっていった。

|||||

「やあ、久しぶりやな一輝君。」

「何でお前がここにいるんだよ、清明……！」

サウザンドアイズに着いて白夜叉の部屋に案内してもらうと、そこには先ほどの話にも出てきた伝説の陰陽師、安倍清明がいた。

「お、来たか一輝。」

「ああ、手紙で呼び出されたから来たけど……まさか、客人ってコイツか？」

「うむ。コミュニケーション、陰陽師の集いのリーダー、安倍清明だ。」

「そんなコミュニケーションやってんのか……陰陽師しかないのか？」

「いや、そんなわけないやろ。最初のころはそうやったけど、今となってはいろんなギフト保有者がおるで？」

「そうか……どうやって俺のことを？ 白夜叉に聞いたのか？」

一輝はここまでの話の中で敵意を感じなかったことと、白夜叉がいることから警戒を解いてその場に腰を下ろす。メイド二人は状況を理解できていないようでポカンとしている。

「いや、捕らわれの少女のゲームの噂を聞いたんや。形無いものを操る少年がそのゲームをクリアし、少女を解放したってな。」

「それだけで俺だって決め付けたのか？」

「いや、さすがにそのときは偶然やと思った。けど、その後にペルセウスของเกมのことを聞いて確定したんや。」

「あの時、お札を使ったな……」

「そ、星霊の威光をたった一枚で防ぎきれただけの実力者なんて、そうそうおらんからな。で、白夜叉に聞いてみたらどんぴしゃだった、と言おうわけや。」

「はあ……まあ、見つかったもんは仕方ないか。で？何のよう？式神にしたいとかだったら、今度こそ殺すけど？」

一輝はガチな殺気を放ちながらそうたずねる。

あの時は戦闘を回避する方法があったためその道を取ったが、今はそんな選択肢はない。

ならば、戦うしかないのだ。

「いやいや、そんな話やないで。もしそうなら、白夜叉が呼んでくれるわけないやろ。」

「それもそうだな……じゃあ何で？まさか、懐かしいから話をしたい、なんて理由じゃないだろ？」

「うむ、そうではないな。これは、清明から私への依頼なのだ。」

一輝の問いには、白夜叉が答えた。

「依頼？」

「うむ、依頼だ。中途半端で終わってしまった勝負の決着を付けたい、というな。」

「なるほど……つまり、俺と清明でギフトゲームをしよう？」

「そうや。君かて、あんな中途半端で満足してるわけやないやろ？」

「まあ、そりやな……」

一輝があの時、あの手を取ったのには理由がある。

それは、確実に依頼を完遂するためだ。

そのために、楽しそうな戦闘を放棄して逃げの一手を取った。

「なら、勝負はしてくれんやな？」

「ああ、つつても、こつちが負けたからって言っつて何か差し出せるものがあるわけじゃないけど。」

「それについては気にせんでええよ。こつちから無理に誘ったゲームやし、そつちのコミュニティについてはしつとるからな。こつちはリスクがあるけど、そつちはノーリスクでええ。」

「それは断らせてくれ。さすがにこっちだけノーリスクってのは、」
「なら、そっちが負けたら、そのバタフライナイフをもらおか？」
「……」

「別に嫌なら他のものに変えるで？ただ、鬼の命をそんなナイフで奪ったって事に興味があるだけやし。」

「いや、これでいいよ。そんだけの理由があるなら、これでいい。」

一輝はそう言いながら立ち上がり、晴明もそれに合わせて立ち上がる。

「じゃあ、二人はここで見ててくれ。思いつきり暴れてくるから。」

「いまだに状況は理解できてないんだけど……」

「とりあえず、頑張ってください。」

「おう、頑張る。」

「ではよいかの！」

三人の会話が終わると、白夜叉が二人の間に立つ。

「今回のゲームは晴明からの依頼により、できる限り単純なもの、決闘方式とする！」

白夜叉が柏手を打つと、二人の手元に契約書類が現れる。

『ギフトゲーム名 『陰陽師の決闘』』

・ルール説明

・相手を気絶させる、または行動不能にしたものの勝利。殺しはご法度とする。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗と主催者権限の名の下、ギフトゲームを開催します。

白夜叉

印』

「では、ゲーム開始だ！」

白夜叉の言葉と共に、二人は白夜叉のゲーム盤の一つ、水平に太陽が回る世界に跳ばされた。

「おお、寒いなあ……一輝君もそう思わん」

「ウォーターランス！」

一輝は晴明の言葉を遮り水の槍を飛ばす。

「ちよ、急に始めるなや！」

晴明は慌てながらも狐火を出して水を蒸発させるが、

「エアカット、水分多め！」

その水蒸気でカマイタチを作り、晴明に撃つ。

「その技は何でもありか！ありえんやろ！」

「悪いが、この戦い方が一番何も考えなくていいからな！」

晴明はその水蒸気を刀で切り、足元の雪をぶつけることで温度を下げまくり、氷にする。

「あら、そう来るか。」

「今度はこっちの番や！」

一輝に出来た隙に晴明が刀を持って突っ込んでくるが、

「いや、お前の番はやらん！」

一輝が日本刀で防ぎ、晴明の刀を絡め取る。

剣の腕は一輝のほうが上のようなのだ。

「え、ここまで差があるん？」

「ああ、ある！アンタみたいな神として奉られるようになった、その程度の神なら、どうにでもなるんだよ！」

一輝はそのまま刀の峰で攻撃を続け、ある場所に誘導する。

「その割には全然あたってらんぞ！」

「いいんだよ、これで！」

一輝はそのまま攻撃を続け、晴明は一輝の思い通りに動いてしまふ。

「さて、ここで一つ質問なんだが、」

「なんや？」

「オマエって、一応神なんだからさ……氷付け程度じゃ死なないよな？」

「は？そりやそうやけど、なに言ってる、おわ!?」

晴明の悲鳴と同時に、バシヤン！という音が鳴る。

そう、一輝は晴明を湖に誘導していたのだ。

「ちよ、冷た！水温低すぎやろ！」

「こんなところにありや、低くて当然だろ。さて……もつと低くなる

から、覚悟しとけよ?」

「え、ちよ、それは出来れば止めてもらえると・・・」

「断る。」

一輝は水の表面に手を置き、湖全体の温度を一気にマイナスまで持っていく。

結果どうなるかといえば、簡単なことだ。晴明ごと、湖全体が凍るだけである。

そうして、一輝は超力技で相手を行動不能にし、勝利を収めたのだった。

|||||

「うう、寒かった・・・風邪でもひいたらどうすんねん・・・」

「まあ、湖に落ちたおんしが悪いのう。一輝に簡単に誘導されるからだ。」

ゲームをクリアしたことで二人は白夜叉の私室に戻り、晴明はコタツに入っている。氷付けになったのが効いているようだ。

「まあ、あんな方法とはいえ負けたのは事実やしな。約束どおり渡すとしよか。」

晴明はギフトカードを取り出し、そこから大量のお金を出した。

「これが賞品や。もってき。」

「いや、さすがにこの金額は・・・」

「受け取りづらいものが・・・」

「ありがたくもらうぞ。」

「そんなあつさり!?!」

一輝が何のためらいもなくギフトカードにしまうのを見て、メイド二人は突っ込みを入れる。

「賞品なんだから、遠慮することはないだろ。」

「一輝君の言う通りや。それに、うちのコミュニティーはその辺は問題ないから、遠慮せんでええよ。」

「じゃあ、これで俺は帰るぞ。まあ、何か依頼があったら言ってくれ。」

内容によってはやってやるから。」

「お、それは助かるな。また何かあったらSOSを出すで。」

その会話を交わすと、一輝たち三人はノーネームへと帰って行った。

その金額を見てジンが驚いたのは、また別のお話である。

短編 一輝と湖札の物語 ①

これは一輝が十三歳のころの、まだ鬼道を名乗っていて、湖札と同じ家（神社）に暮らしていたころの話である。

土曜日、休日の朝、一輝は起きると同時に体が動かしづらいことに気付く。

《金縛りか・・・？いや、ここは神社だし・・・》

一輝は寝惚けた頭でそんなことを考えながら、目をこすろうとして動かないことに気付く。

そして、そのまま目を開け、ぼやけた視界の焦点が合うのを待ち、自分の体を見ると、そこには自分に抱きついて寝ている少女がいた。

「ああ・・・また湖札か。さて、今日はどうするか・・・」

今の一輝の台詞からわかるかもしれないが、湖札はちよくちよく一輝の布団に入り込み、一輝に抱きついて寝ているのだ。

いつもなら躊躇いなく起こすのだが、（声をかけたり、体をゆすつたりと優しい方法で、だ。）今日は学校も休みで特に急がなければならぬ用事はない。ゆっくり寝かせてやるのもよいかと思ったのだ。

「このままじゃ俺が動けないし、仕方ないか。おーい、朝だぞー。起きろー湖札。」

「うみゆ・・・後ー」

「一分か？まあ、それくらいならいいが・・・」
「時間。」

「今すぐ起きろ！どんだけ俺の行動を制限する気だ！」

違和感を感じている方がいるかもしれないが、このころの湖札はこんな感じだ。

本編の湖札は旅で精神的に成長しただけに過ぎない。

「ふあゝ・・・おはよう、お兄ちゃん。」

「ああ、おはよう湖札。朝っぱらから俺に抱きついてた理由は？」

「昨日の夜ね、急にお兄ちゃんに抱きつきたくなったの！」

「またそれか・・・湖札はもうあと二ヶ月で中学生だって自覚はあるのか？」

「大丈夫！他人がいるところでこんな態度は取らないから！」
「友達がいるところではなんの躊躇いもなく取ってるよな！それも止めろー！」

「もう皆には話してるよ！私はお兄ちゃんが大好きだって！」

「始めて聞いた人は、全く違う意味で取ってる！兄弟愛的な意味で取ってる！この間も俺と湖札が一緒のところを始めてみて、絶句してやついたよな！」

まあ、もうお分かりだろう。

湖札は、超がつくレベルのブラコンである。

再開したときのあの態度は、一輝と敵対することになると分かっていたことや、これもまた旅で精神的に成長したことが原因だ。

まあ、それでもブラコンは治っていないのだが。

「はあ・・・もういいや。腹も減ったし、メシ食いに行くぞ。」

「うん！あつさごっはんくあつさごっはんく！」

二人はそのまま、食卓まで移動して朝食を取る。

そこに移動するまでの間、湖札は一輝の腕に抱きついていたが、もう描写はしない。

「「「いただきますー！」」」

こうして、四人で朝食を取るのがこのころの鬼道家の日常だ。

さすがに、一輝もまだ自分で依頼を取っていないので、夜更かしすることも無いし、アニメも視ている本数が少なく、それも録画である。

「で、一輝と湖札の二人は、今日はどの修行をするんだ？」

「俺は、面倒くさいから父さんを倒す、のコースで。」

「お兄ちゃんがそれなら、私もそれで！」

「せっかくの休日だ、そのメニューを選ぶか・・・」

ちなみに、一輝の父親の言う言葉の意味は、『せっかく時間があるんだから、時間のかかるメニューを選べ』という感じだ。

「いや、むしろ休日だから、だろ。」

「うん。せっかくの休日なんだから、遊ぶ時間は必要だよ。」

「ならせめて、普段のメニューに基礎的なことを混ぜろ。ここ最近、二人が実戦形式か実戦をしているのしか見てないぞ。」

「だって、俺の能力よく分からんし、実戦の中で知るしかないだろ。陰陽術は、きつと大丈夫！」

「私のもよく分からないし、実戦しかないよ。陰陽術は、きつと大丈夫！」

「陰陽術も真面目にやらんかあ!!!」

鬼道父はちやぶ台返しを決めるが、一輝、湖札、鬼道母は予想がついていたので、自分の食器と鬼道父の食器を一人一つずつとり、避難させる。

「食事中にちやぶ台返しって、食べ物が無駄にするつもり？」

「ただでさえ父さんの収入は少なめなのに？」

「あなた、感情に任せて動いてはダメよ？それと、三人の中で一番弱いのが自分だって自覚を持ってね？」

「ぐ……すみません。」

鬼道父は反論が思いつかず、黙った。

が、一輝がそれでよしとするわけがなく、

「プライドはないの？自分の妻に子供以下だつて言われて。」

「ちよ、一輝！その話をむしかえすのは、」

「確かに、お兄ちゃんの言うとおりでよね。あそこで黙っちゃうなんて。」

「湖札も、そんなこと言ったらあの人は、」

「……いいだろう。今日のメニューは対二の式神戦。制限はなしだ！」

まあ、こうなった。前にやった過去編でもあったが、この人は簡単に動かせる。

二人からすれば、修行内容が簡単になって、ラッキーなだけである。

「OK。普通にやってもつまらないから、何か罰ゲームでもつけようか。」

「ああ！何でも言ってこい！その代わり、お前達が負けたらこの二日間は修行漬けだぞー！」

「いいよ。じゃあ、父さんが負けたら明日の私達の修行はなし！父さんはいつもの五倍のメニューでー！」

「まあ、それぐらいでいいかな。」
「覚悟しておけよ！もう一ミリも動けなくなるまでしごいてやるからな！」

余談だが、鬼道父は自分が弱いことを自覚しており、修行メニューは元からかなりきつめである。

短編 一輝と湖札の物語 ②

さて、前回決定した修行内容の確認といこう。

- ① 一輝&湖札 v s 鬼道父で行う。
 - ② 使っていいのは式神のみ、数などに制限はなし。
 - ③ 一輝&湖札ペアが負けた場合、二日間修行漬け。
 - ④ 鬼道父が負けた場合、修行メニューを五倍。
 - ⑤ 勝利条件は先に相手の式神を破壊し尽くすこと。
 - ⑥ 一度破壊された式神は、今回の勝負で使うことが出来ない。
- 以上である。まあ、有利不利は火の目を見るよりも明らかだ。

「お母さん！開始の合図お願い!!」

「はあ・・・どうなっても知らないわよ。・・・始め!」

鬼道母が合図を出すと、三人の親子は同時に式神を取り出し、

「式神展開、攻!」

式神を召喚する。

今回展開したのは三人が三人揃って鎧武者。

数は、鬼道父が三十体、一輝が五体、湖札が五体だ。

「それだけしか展開できんか!」

「いや、できるけど。」

「あっさり終わってもつまらないでしょ?」

この二人は、もうこのころには式神を同時に百体は操れる。

この場でそれをしないのは、単につまらないからである。

「この・・・何が何でも全力を出させてやる・・・!」

そう言いながら鬼道父は式神を一輝たちに向ける。

「さて、一人十五体でいい?」

「うん、競争ね!」

そう言いながら、二人は自分のほうに向かってくる十五体に自分の式神を向かわせ、一気に破壊しつくす。

「終わったけど、同時だったかな?」

「そうだね。やっぱりこうなったか・・・」

ここで、二人の式神についての適正について記しておこう。

まず、一輝は操作もそこそこ高いが、それ以上に攻撃特化である。一輝の式神は攻撃力がかなり高くなり、一撃で鬼道父の式神を破壊して見せた。

次に、湖札は攻撃力もそこそこ高いが、それ以上に操作特化である。

操作技術がかなり高いため、スピードが高く、攻撃的中率は100%だ。必ず狙ったところに攻撃があたり、鬼道父の式神の弱点に正確に攻撃して見せた。

「さて、もう終わり？それならそれでいいんだけど。」

「そんなわけないだろう・・・式神展開、**攻** **防** **封** **!!!**」

もう半分やけくそである。この場合、封は役に立たんだろ。

とはいえ、同時に百体以上展開して見せたのはすごいことである。そこまで怒りが高いのか・・・

「これで・・・どうだ・・・」

「いや〜凄いんだけど・・・息切れてるぞ?」

「それに、これで父さんが持つてる式神全部じゃない?もう少し戦いに工夫を混ぜようとは思わないの?」

自分の限界を超えて見せた父に対して、もの凄い言いようである。

「さて・・・こんなんでも父さんは新しいものを見せてくれたわけだし、こつちも別のやり方でいこうか?」

「うん、父さんにはまだ見せてない方向だね。」

そう言いながら、一輝は三枚の式神を取り出し、湖札は手持ち全てを取り出す。

そして、まずは一輝が力を見せる。

「式神展開、**武** **!**」

そう、本編では使ったことがあるが、このころ、一輝以外にこの式神を得た人間はいない。

式神を武器の形で展開したものは過去にいたが、武器そのものが式神であることは初なのだ。

今回作り出したのは、自分の身の丈にあった日本刀と、短刀を二振りだ。

次に、湖札が力を。

「式神統合。形状、和弓。」

そうつぶやくと、湖札の持つ式神が宙を舞い、一つに混ざっていく。そして、その渦の中心に手を突っ込み、引き抜くと湖札の手には立派な和弓が握られていた。

これが、湖札が自ら作り出した技、式神統合。

名前の通り、式神を統合して一つの武器を作る技である。

余談だが、ペスト戦で一輝が作った機尋の弓矢は、今湖札が作り出した和弓のビジュアルを参考にした。

「な、何だ、それは・・・見たことも聞いたこともないぞ・・・」

「まあ、昨日朝起きたら急に手元に来てたやつだからな。うちの神様の機嫌でもよかつたんじゃないか？」

「私のも、お兄ちゃん以外には教えてなかったやつだしね。まあ、こんなお披露目になるとは思ってたけど。」

そう言いながら、一輝は日本刀を、湖札は和弓を構える。

「待て！今回のルールでお前達が戦うことは禁止されている！」

「何言ってるの？今回禁止されてるのは、式神以外を使うことだぞ？」

「そして、今私たちが使ってるのは式神ではないんだよ？」

「そうである以上、これは一切ルールに触れていないぞ！」よ！」

まあ、この兄妹の言っていることは一切間違っていないのだが、普通今までになかった力を使ってくるとは想像しないだろう。

「この、そんな技を・・・」

「持っていたんですな、これが。」

「それに、ルールには触れてないんだからこのまま戦ってもいいよね。」

「というわけで、一気に行くぞー！」

そこからの戦いは、もはや戦いと呼ぶことさえもはばかられた。

鬼道父が式神を向ければ、一輝が先行して切り裂き、援護として位置する湖札が切り残しを貫く。

一輝の日本刀を振りにくいようにと大量に近距離に送ると、一輝は獲物を小刀に変え、小回りを利かせて切り裂いていく。

ならばと遠距離から二人を狙わせてみれば、湖札がそれを正確に穿ち、意味を成さない。

最後の手段とばかりに二人を分断し一輝には遠距離、湖札には近距離で攻めてみれば、一輝は小刀を投げて攻撃を出来そうなものを潰し、動きを阻害すると一気に近づいて切り裂く。

湖札はもはや矢を矢として使わず、両手に握って突き刺していく。それから、三分とかがらずに鬼道父の式神は全滅し、鬼道兄妹の圧勝で幕が下りた。

短編 一輝と湖札の物語 ③

一輝と湖札の二人が勝ったため、鬼道父は修行メニユ―五倍を死に物狂いで行い、二人は近くにある森の中を散歩していた。

何をするか考えた結果、特にやるのがなかったためこうして散歩することにしたのだ。

余談だが、湖札はまた一輝の腕に抱きついてる。

「なあ湖札、冬とはいえこれだけくっついて暑くはないか？」

「そんなことないよ！私はお兄ちゃんへの愛で年中暑いから、このくらいなんともない！」

一輝はもはやあきれを通り越して感心している。

むしろ、こうでないと違和感を感じてしまうほどだ。

「それに、こうしていられる時間も少ないしね・・・」

「どういうことだ？中学に入ったら自重するとか？」

「あ・・・」

湖札はしまった、というような顔になる。

心の中で思っていたことが口に出てしまい、しかもそれが一輝に聞かれてしまったからだろう。

「ええと、その・・・」

「俺の予想はずれか。じゃあ、どうしてだ？」

湖札は何とか言い訳を考えようとするが、結局思いつかず、事実を話すことにした。

「まだ父さんと母さんにしか言っていないんだけど・・・ちよつと魔物とかの勉強のためにいろんな国を回ろうかと思って。」

「どうしてまた？」

「特に理由はないよ。ただ、もっと妖怪とか、魔物とかについて知りたかって思っただけ。」

「勉強熱心だな。それって陰陽師留学扱いで？」

「うん。頑張って中学の内容は全部終わらせて、この間やった試験で許可が出たよ。」

用語解説だが、陰陽師留学とは陰陽師の卵がその力を伸ばすために

行方留学のことで、一定量以上の実力があることと義務教育を終えるか、その間に習う内容の試験に合格することで許可が下りるものだ。

つまり、湖札は小学六年生にして中学三年までの内容を全て覚えたと、ということである。

「まあた頑張ったな・・・そこまでしていきたかったのか？」

「うん。それに、この留学で私の能力についても知れるかもしれないし。」

「ああ、確かに。確か、何かしらの神から与えられたもの、だっけ？」
「うん。だから目的としては、その神様が何なのかを知ることと、お兄ちゃんの能力について何か分からないかな、って感じかな。」

「俺のか・・・まあ、期待せずに待ってるよ。」

「うん、あんまり期待しないで。私のと違って、お兄ちゃんのは何にも分かってないんだから。」

そう、二人に陰陽術とは別の能力が宿っていることを知った両親は、その正体をつかむために霊視できる人間に霊視を頼んだが、湖札のものは何かしらの神から与えられた力だとわかったのに、一輝のものについては完全に謎。何にも分からなかったのだ。

だが、一輝はあんまり気にしておらず、むしろ変に決め付けられなくてよかったと思っている。

「そうか・・・となると、もうあと二ヶ月で湖札は外国に行っちゃうのか・・・」

「寂しい？」

「当たり前だろ。今まで一緒に暮らしてた妹が、急にいなくなるんだから。」

「大丈夫だよ、私は兄さん一筋だから！」

そう言いながら、湖札はさらに強く一輝の腕に抱きつく。

「いや、そういう意味じゃないんだが・・・まあいいか。」

「そうそう！もう後二ヶ月しかないんだから、毎日一緒に寝ても・・・」
「いや、それは違うだろ。」

「なんで!?!いいじゃん別に！長い間私と一緒に寝れないんだよ？寂しくないの?」

「それが普通だろ。むしろ、今までが異常だったんだ。」

「むう……いいもん、勝手に入り込むから。」

「これからは寝袋で寝ることにしようか……」

「お願い、やめて！私の楽しみを奪わないで!!」

一輝が冗談半分に言うと、湖札が本気で止めにかかってくる。

「ブラコンここに極まれり、だろうか？いや、上には上がいることだろう。」

「冗談冗談。まあ、毎日は無理だけど、そんなに一緒に寝たいなら、四日に一回くらいなら文句言わないでやるぞ?」

「ホント?お兄ちゃん大好き!!」

湖札は、腕ではなく一輝本体に抱きつく。

一輝はいつになったら兄離れできるのやらと思いつつ、その頭を撫でるのだった。

「やっとお兄ちゃんが私の愛を分かってくれた!」

「いや、そうじゃないから。」

が、すぐに引き剥がし、歩き出す。

「……え?頭撫で撫では!」

「終わったよ。早く行くぞ。まだ面白いものが見つかってないんだから。」

「ちよ、ちよと待ってー!腕を!せめて腕を組ませて!」

|||||

あその後、二人は山を進んでいき、途中で見つけた岩を粉々に破壊すると、洞窟を発見する。

途中、立ち入り禁止の立て札があったが、無視して突き進んでいるところだ。

「こんな洞窟があったんだな……何度も遊びに来てるのに知らなかった。」

「まあ、今まではこの辺りにつく前に妖怪が出て、それに対処して時間切れ、って流ればかりだったからね。今回は珍しく何にも出な

かったし。」

そう言いながらも、どンドン突き進んでいく。

当たり前のことだが、洞窟内を照らすために一輝が懐中電灯を右手に持っているため、両手がふさがっている状態だ。

もう片方の手は、もちろん湖札。

「さて、わざわざ岩で隠してたんだから、少しは面白いものがあると思うんだけど……」

「今のところ、壁にかかれた絵ぐらいだね。この絵もよく分からないし。」

湖札はそう言いながら、すぐ横の壁に描かれた絵を手で触る。

そこに描かれていたのは、上から降ってくる茶袋とそれに驚く村人だ。

「まあ、それが何を書いたかはわかるんだけどな。こんなのを残した理由が思いつかん。」

「だよね……茶袋なんて伝説があるわけでもないし。地味だし。」

「まあ、中には鬼とかの有名どころもあるし、何かしらの意味はあるだろう。」

そう言いながら二人は進んでいくが、二人は気付いていない。

二人が得の前を通りすぎて少しすると、その絵の前にもうすぐが現れ、火をともしていくことに。

「あ、そろそろ洞窟も終わりじゃない？ なんだか広がった空間があるし。」

「ホントだ。じゃあ、ここまできいて面白いことはなし？」

「そうかもしれない……残念だったね、お兄ちゃん。」

二人はそう言いながらも、何かないかと希望を持ち、進んでいく。

そうしてたどり着いた空間は二人が予想していたものよりも広く、人間が百人は座れそうだった。

「結構広いな……何かの集場所か？」

「そうかも……お兄ちゃん、あれを見て。」

湖札はそう言いながら、中央に置かれた甕を指差す。

そこからは、普通ではない禍々しさがあふれていた。

「あれは・・・ほつといちや駄目なやつだよな?」

「多分、駄目だろうね。危ないものだろうし。」

そう言いながら二人は甕に近づき、好奇心のままにその蓋を取る。すると、その空間にムワツつとアルコールのにおいが充満した。

「げ、これお酒だ・・・」

「それがこんな禍々しきを放ってるってことは、何かの儀式によって・・・お兄ちゃん、多分ここ危ないよ。その甕を持って帰るだけじゃなくて、洞窟も破壊しちゃったほうが良い。」

湖札は話している途中で何かに気付き、一輝にそう提案する。

「ここが何なのか、分かったのか?」

「うん。まず、ここに来るまでにあった妖怪の絵の数は、合計でちょうど百。」

「数えてたのか?」

「当たり前でしょ。私の能力は、相手をどれだけ把握してるかで決まるんだから。」

湖札は真剣な口調でそう言い、一輝からも離れて何かあったらすぐに対処できるようにする。

「次に、そのお酒はここで行われた儀式そのものを取り込み、完成したものだ。」

「コイツを作ることが目的だったのか?」

「多分、そのつもりでここに人が集まり、儀式を行ったんだ。成功すれば、催眠作用のあるお酒ができるから。」

一輝は自分も自体を把握しようと、周りを見て自分達が来た方向で異常が発生していることに気付く。

「湖札、何か絵の前にろうそくが立ってるんだけど。」

「ホントだ・・・となると、もう手遅れかも。その甕から離れて。」

一輝と湖札の二人は、甕を挟むように立ち、距離をとる。

「そろそろ儀式の正体を教えてくれないか?」

「そうだね・・・これだけ言えば分かるんじゃないかな? 百の怪異談と、百の人間。そして、百のろうそく。」

湖札がそう言うと、急に風が吹き、ろうそくの火を次々に消してい

く。

「まさか……でも、それを行うには、人によつて語られることが必要
なはずだ。ここには一人も……」

「そのために、この甕と絵があるんだよ。甕にはその人たちの怨嗟が
こめられてて、絵は怪異談そのものを表してるから。」

そして、全ての火が消え、甕が震えだす。

「つまりここは……簡易的にある儀式を行うための空間。人が入ると
それに反応して自動的に行われるようにしたもの。」

そして、その中身が噴出し、ある鬼の姿をとる。

「日本では一番有名な、彼岸への通路を開く儀式、百物語を、ね。」

そして、二人の目の前に百物語の集合体、青行燈が現れた。

短編 一輝と湖札の物語 ④

「式神展開、武!!」

一輝は青行燈の頭現を確認すると、すぐさま式神を五体展開し、武装する。

このころは、代償のせいで「無形物を統べるもの」はほとんど使えないのだ。

「お兄ちゃん、どうする!?!」

「とりあえず、こいつは俺が相手するから、湖札はあの絵から情報を!」

「分かった!」

湖札は一輝に言われたとおり、来るまでにあつた壁画を見に行く。

前回、本人も言っていたが湖札の能力は相手についてどれだけ知っているかで決まるのだ。

「さて・・・どうしようか。」

「・・・キサマガ、ワレヲヨビダシタノカ・・・」

「はい?」

「キサマガ・・・ヒヤクノモノガタリヲ、カタツタノカ・・・」

「いや、違うけど。」

一輝がそう言うと、青行燈は一輝を睨み、

「ナラバ・・・キサマヲクロウテモカマワヌナ!!」

そう、読んでいてすぐく分かりにくい言い方をし、一輝に向かって六メートルほどになった腕を鞭のように振るってくる。

「あぶねえな!!」

一輝はそれを盾にした式神（以下「盾」）で防ぎ、距離を置こうとするが、そこに九メートルになった脚が襲い掛かる。

「長!!腕も脚も長!!」

一輝は驚きながらも、日本刀にした式神（以下「日本刀」）でそれを斬り、今度こそ距離をとる。

「何だよこれ・・・青行燈つて鬼女じゃなかったか?」

「ホウ・・・コノテイドデハ、イミヲナサヌカ。」

そう言いながら、青行燈は脚を生やす。

「せっかく斬ったのに……意味ないのかよ……」

「デハ、コレナラドウダ……!」

次の瞬間、青行燈は姿を消した。

「……は?どこ行った、あの野郎……」

一輝がそう悩んでいると、上のほうから、シャー、という何かが壁とこすれる音が聞こえてくる。

「……まさかとは思うけど……上?」

一輝が上を見ると、そこには自分を圧死させようと向かってくる一枚の板があった。

「これどうやって避けんだよ!!」

そう言いながらも、しゃがんで姿勢を低くし、日本刀の切っ先を上に向けて構える。

すると、その切っ先に当たる寸前で板は消え、青行燈が再び現れる。

「マサカ、タイシヨホウヲ、シツテイヨウトハ……」

「いや、何もしらねえけど。」

「ダガ、マダオワラヌゾ!」

するとそのまま青行燈の姿は燃える巨大な車輪に変わった。

そのまま、車輪は一輝に向かってくる。

「単純な破壊力か……ならこつちも。」

そう言いながら、一輝は手のひらサイズの斧を取り出し、呪力をこめることで自分の二倍くらいの大きさに変える。

もちろん、これも式神から作り出したものだ（以下「大斧」）。

「どーせい!!」

そして、そのまま叩きつけて、車輪を止める。

一輝らしい、単純な考えだ。

「このままぶっ壊して」

「イヤ、ソウハサセヌヨ。」

一輝がさらに力をこめようとする、車輪は姿を消し、再び鬼女の姿に戻る。

姿を変える前にかできなければ、勝つことは不可能だろう。

「またその展開かよ。」

「ツギハコレダ!!」

もはや、一輝が愚痴る時間もなく次の一手を使ってくる。

今回は、手に一目で業物と分かる太刀が現れた。

「クラウガヨイ！」

「嫌に決まってるだろ!!」

青行燈がか刀を振るうと、空気の刃が放たれる。

一輝はそれを『盾』で防ぎながら、槍にした式神（以下『槍』）を投げつけて太刀を落とす。

太刀はそのまま、空気に溶けて消えてしまった。

「ふう、とりあえずは大丈夫じゃねえ!」

一輝が一瞬気を抜くと、その隙を突くように巨大な槌が転がってくる。

が、一輝は『盾』に呪力をこめて巨大化させ、叩き割る。

そこから、一輝は大忙しだった。

叩き割ったと思ったら近くにある小さなものが一輝に向かって飛んできて、それを全て叩き落とすとムササビのようなものが飛んできて血を吸おうとし、それを斬ると次は狼を引き連れた猫が現れ、槍で一掃したら見上げるほど大きい僧が現れ、「見越したあ!!」の一言で消すと十二単を着た女が血を吸おうとし、ムササビと同じように斬り、というような作業を数えるのすら嫌になるくらい続けたのだ。

「おい……どれだけ手数があるんだよ……こんな妖怪聞いたことねえ……」

「ホウ……ココマデシテマダイキテオルカ……ダガ、コレデオワリダ!!」

一輝がさすがにバテ、槍を杖にしていると青行燈が巨人の姿をとつていく。

そして、そのまま青行燈は一輝に拳を打ちつけようとし、一輝の表情を見て止まる。

「……ナゼワラツテイル?」

「いや……これで勝ちだと思ってるのが可笑しくてな。忘れたのか?」

「ここにいるのは、俺だけじゃないんだぜ？」

一輝がそう言いながら入り口のほうを見ると、そこには
「そう、私もいるよ。」

銀色に輝く洋弓を持った、湖札がいた。

短編 一輝と湖札の物語 ⑤

「もう知識はたまったのか？」

「うん、全部覚えたよ。時間稼ぎ、ありがとうね。」

一輝はそれを聞くと、青行燈を殴り、その場を離れる。

そのまま湖札の横に着くと、『日本刀』を構え、湖札を守るようにする。

「イマサラヒトリフエヨウト、ナニガデキルト！」

「悪いけど、もう終わりだよ。」

青行燈が腕を伸ばして湖札を攻撃するが、一輝はそれを切り裂く。

そして、湖札は一輝を信頼し、言霊を唱える。

「我は全ての魔を穿つもの、その存在の全てを穿つものなり！全ての異形は、我が内に在りし勝利を恐れよ！」

言霊を唱え終わると同時に、その空間が変わる。

洞窟の中にいたはずが、広く、銀色に包まれた空間となっていた。

「コレハ・・・」

「貴方は百物語の終わりに現れる、百物語そのものといえる鬼女です。」

青行燈が驚愕に染まっているが、湖札はそんなこと気にもせずと言霊をつむぐ。

「それ故に、貴方は一の妖怪でありながら百一の妖怪の力を持つ。お兄ちゃんに対して使っていたのは、語られた怪異談の妖怪です。」

「そうか、だから俺が知らないような力を。」

「うん、正解。・・・だから私は、その存在の全てを穿っていく。」

湖札はそう言いながら弓を引く。

すると、湖札の手に矢が現れ、弓につがえられる。

「まずは、最初にお兄ちゃんに使った妖怪、手長人から。」

湖札はその矢に言霊を吹き込み、引き絞る。

「手長人は九州に伝わる妖怪で、手長国の住民とされている。名前の通り手が長く、二丈もの長さがあるとされた。」

湖札はさらに矢を引き、二本目の矢を出現させる。

「そして、手長人は基本、もう一種類の妖怪と行動を共にする。それが足長人。」

湖札は新たな矢に言霊を吹き込んでいき、もう片方の矢には呪力を込める。

「これもまた九州に伝わる妖怪で、足長国の住民とされる。こちらもまた足が長く、三丈の長さを持つ。」

だんだんと湖札の口調は厳かなものになっていき、青行燈は様子を見るつもりか、何もしてこない。

「この二体は共に行動することが多く、海での漁も共にしていた。足長人に背負われた手長人が、その長い手で獲物を取るという、単純な方法で。」

湖札は矢をギリギリまで引き、

「その二体の妖怪が、貴方を構成する物語の一つ！まずは、その存在を穿つ！」

青行燈に放つ。

その矢は青行燈本体には一切のダメージを与えなかったが、確実にその存在の一部を抉り取った。

百一のうち二を抉り、残りは九十九だ。

「ナ・・・ワガモノガタリヲ!？」

「さあ、アイツを抉りきることに、湖札はそれだけを考えて。俺があいつから守るから。」

「うん・・・次に、貴方は板の鬼の物語を使用した。」

湖札は新たに矢をつがえ、言霊を込めていく。

「この場合の鬼とは、ただ妖怪の総称としての意味しか持たない。ゆえに、あれは板の妖怪と呼ぶべきもの。」

「ソノコトダマヲ、ワレヲアバクコトヲヤメヌカ！」

青行燈は板の鬼となり、湖札を押しつぶそうとするが、一輝はそいつに刀を向け、その動きを止める。

「板の鬼はあまり強い妖怪ではない。だから刀を向けられるだけで恐れ、動きを止めてしまう。お兄ちゃんへの攻撃が途中で止まったのは、その性質が現れてしまったから。」

一輝のとっさの行動は、この妖怪に対して正解の行動だった。

「この伝承は、男はいかなるときも刀を手放すな、という教訓だけのために語られた妖怪、だから貴方の存在は薄く、もろい！」

湖札は再び矢を放ち、その存在を抉った。

残り、九十八。

「オノレ・・・モウテカゲンハセヌゾ!!」

青行燈の姿は消え、燃える巨大な車輪と業物の太刀、近くにある小石、吸血ムササビ、猫の先導する狼、巨大な僧、血を吸おうとする十二単を着た女性、叩き潰そうとしてくる巨人、以上が同時に現れた。

「この数を同時に唱えるのは・・・」

「ううん、ここまでの過程で分かったけど、所詮語られただけの妖怪だから、そこまで細かく込める必要はないみたい。その姿で顕現してる今ならなおさら！」

湖札はそう言いながら弓を引き、一輝は湖札に向かってくる妖怪を切り裂いていく。

「貴方が今使っているのは、火車、構い太刀、猫又、野鉄砲、化け猫、見越し入道、山姫、大坊主！全て日本で語られ、広がった妖怪!!」

湖札は同時に八本の矢を放ち、全ての存在を同時に抉る。

目の前にいたため、同時に矢を作ることができたのだ。

残り、九十。

「そこまで上手かったか、オマエ・・・」

「この矢ね、軽いホーミングが付いてるみたい。」

「いいなーそれ・・・俺のに比べてかなり使いやすいじゃん。」

「ハハハ・・・うん、確かにそうだね。」

湖札は何かしらの一輝の能力のメリットを探そうとしたが、一切見つからず認めてしまった。

「オノレ・・・マサカワレガココマデナルトハ・・・」

「あ、復活した。」

「だね。まだ後九十個あるし、それも穿たないと。」

「コレイジヨウハヤラセヌゾ・・・!!」

一輝たちが迎撃準備に入ると、青行燈は巨大な、角を持つサルと

なった。

「あれも百物語の一部？」

「ううん、違う・・・なんであんなことが・・・」

「コノスガタナラバ、ウガツコトハデキマイ！サア、オトナシククワレヨ!!!」

湖札が驚いているが、青行燈は一切躊躇せずに二人に襲い掛かる。

湖札は動けずにいるので、一輝が「盾」を巨大化させ、青行燈の攻撃を防ぐ。

「湖札！コイツは俺が足止めするから、早く言霊を！」

「でも、この姿になった理由が・・・」

「俺が知ってる！だから早く残り九十個を！」

湖札は一瞬迷うような姿を見せるが、兄を信じることにし、言霊をつむぐ。

「貴方を構成する物語、その一角をなす妖怪の中に、共通点がある妖怪がいます。」

「ヤメヨ！ソレイジヨウ、ワレヲアバクテナイ！」

「行かせるかよ！」

青行燈は湖札を攻撃しようとするが、一輝は「武」の式神以外にも、使える限り大量の式神を使い、その攻撃を防ぐ。

「愛知県に伝わる甘酒婆。関東地方に伝わる手長婆。奈良県に伝わる白粉婆、砂かけ婆。茨城県に伝わる柳婆。愛媛県に伝わる雪婆。岡山県に伝わる納戸婆。神奈川県に伝わる箕借り婆。静岡県に伝わる夜泣き婆、木綿ひき婆。宮城県に伝わる疱瘡婆。これらの妖怪は、全て老婆をモチーフとした妖怪。」

湖札が弓を引くと、そこには十一本の矢が現れた。

今日の前にはいないが、それでも共通点があることによつて、作ることができるのだ。

「甘酒婆、夜中に「甘酒ござらんか」と民家を訪ね歩く妖怪。その返答は肯定、否定のどちらでも答えたものに病気を与えてしまう。ゆえに疫病神としても伝えられている。」

一本の矢に言霊が宿り、青行燈を穿つ。

残り、八十九。

「ジャマヲスルナ、ヒトノコヨ！」

「断固拒否だ！・テメエはここで消えうせろ！」

青行燈は様々な力を使い一輝を倒そうとするが、一輝は全ての攻撃を防ぎ、お札の呪力によつてその場に縛る。

妹を守るのは、兄の役目である。

「手長婆、これは水中に住み、姿を見せることのない妖怪。ただ水辺で遊んでいる子供の足をつかみ、「水の中に引き込むぞ」と脅かすだけの存在。」

二本目の矢にも言霊が宿り、同様にして青行燈を穿つ。

残り、八十八。

「白粉婆、雪の降る夜に現れ、酒を求め歩く妖怪。顔一面に雑に白粉を塗り、その姿は旅人を恐怖させた。」

矢を穿ち、その存在を抉る。

残り、八十七。

「砂かけ婆、人気のないところを通ると、その人に砂をかけて脅かす妖怪。その姿の記録はなく、姿を持たない、とも言われている。」

さらに穿ち、その存在に穴を開けていく。

残り、八十六。

「ハナセ！ワレハ、キエルワケニハ！」

「ああクソ！湖札！早いところそれだけでも撃つてくれ！」

「うん、一気にやる。」

湖札は矢を引きなおし、言霊を込めなおす。

「柳婆、樹齡千年以上の柳の木が老婆に姿を変え、道を行き来する人に声をかけたとされる妖怪。柳の古木が怪異をなすことは、世界に広く知られている。」

残り、八十五。

「雪婆、雪の降る時期に現れる、一本足の老婆の妖怪。子供をさらうとされ、伝承の伝わる愛媛県では子供を外に出さないようにしていたという。」

残り、八十四。

「納戸婆、人家の納戸の中に住む妖怪。箒でたたき出すことができる。地方によつては納戸神とも呼ばれ、家や華族の守り神であつたとも言われる。」

残り、八十三。

「箕借り婆、旧暦の2月8日、12月8日に現れ、人家を訪れて箒や人間の目を借りていってしまうとされる。一つ目小僧を連れていてもされ、網目のたくさんあるものを見せることによつて退治することができる。」

残り、八十二。

「夜泣き婆、憂いのある家の前に現れ、泣く妖怪。人々は皆それにつられて涙し、そのいえに不幸が来てしまう。」

残り、八十一。

「木綿引き婆、落葉樹の下に現れ、人が通りかかると恐ろしい視線で睨みつける妖怪。」

残り、八十。

「疱瘡婆、宮城県に疱瘡を流行させ、病死した人間を食べたとされる妖怪。その姿は、顔が赤く、白髪に覆われ、体調が三メートルある老婆の姿だった。」

残り、七十九。

「マサカ、ワガモノガタリヲニジユウイチモケズルトハ：：ダガ！コレイジヨウケズレルトオモウデ」

「うるせえよ。大人しくしてやがれ。」

青行燈が起き上がろうとするが、一輝が「日本刀」を突き刺し、再び縛る。

ついでに呪力を流すことで少しでも長く縛ろうと調節する。

もう既に青行燈に抵抗するだけの余裕を残していない。

「さて・・・もう一氣にやったほうがいいかな？」

「ああ。頼むからそうしてくれ。結構疲れるんだよ、これ。」

「了解。」

そのまま、一輝が抑えている間に湖札は一氣に言霊を唱える。

村を洪水に巻き込む妖怪『ヤロカ水』

名前と違い河童であり、怪火をだす妖怪『磯天狗』
死んだ馬の霊が人に取り憑く妖怪『馬憑き』

人間に取り付き、様々な悪戯をする妖怪『おとら狐』
草履の片方を奪う妖怪『片足上臈』

猫を食らうねずみの妖怪『旧鼠』

木の上から落ちてきて、人を襲う妖怪『つるべ落とし』

夏の夕空を大きな音を立てて飛ぶ怪火『天火』

見上げるほどに大きくなっていく妖怪『入道坊主』

山野で人を迷子にさせる妖怪『宇婆』

木から赤い子供のような手を出しているだけの妖怪『赤手児』

アカシアの木から火の玉のような姿でぶら下がる『イジゴ』

声をかけ、返事をした男に取り憑く妖怪『河女』

光を発しながら坂道を上下する球体の妖怪『テンゴロバシ』

人間の女を好んで人里から盗み取る妖怪『経立』

少女の姿で水の中へ人を誘惑し、溺れさせようとする妖怪『メドチ』

友好的で、少量の報酬で大仕事を手伝ってくれる気前のいい妖怪

『大男』

山中で人に会うと、自らの体を破裂させ肉や内臓を周囲に撒き散ら

す妖怪『小玉鼠』

老いたツバキの木に精霊が宿り、怪木となって人を誑かす妖怪『古

椿の霊』

骸骨の姿をした女性の妖怪『骨女』

落雷とともに地上に落下する妖怪『雷獣』

海の近くを飛び回る鬼火『海月の火の玉』

不気味な光を放ちながら群れで移動する怪火『そうはちぼん』

一つの体に二つの頭を持つ化物『どうもこうも』

気持ちが悪く乱れている人間に取り憑きその心を乱す妖怪『通り悪魔』

白い骨格のみの姿をした鯨の妖怪『化鯨』

頭髮が体全体を覆うほど長い姿の妖怪『倉ぼっこ』

両目が顔ではなく両手のひらについている妖怪『手の目』

目を凝らしてみると小さな坊主頭が家の屋根を越えるほどの大き

さになる『乗り越し入道』人家に住み着く赤い髪の子供の妖怪『赤ジャクマ』

808もの群れになった化けダヌキ『隠神刑部』

海から現れる髪がぬれている女の妖怪『濡女子』

夜道で人の歩行を邪魔する妖怪『ノツゴ』

赤々とした鶏冠を持ち、口から赤々とした炎を吐き出す怪鳥『波山』

長いざんばら髪の先端に鉤針状の鉤を持つ女の妖怪『針女』

「チツ、チツ、チツ」といいながら山道を歩く人の後ろに付いてくる妖

怪『夜雀』

二、三歳くらいの山に登った河童『セコ』

美女に化けて妻帯者や恋人のいる男性に言い寄る狐の妖怪『おさん

狐』

頭頂部に一つ目を持つ女性に幽霊のような姿の妖怪『後神』

鬼ノ城を拠点に吉備地方に支配行政を行っていた妖怪『温羅』

古いエノキの木からぶら下がってくる馬の首『さがり』

美しい女性の姿に化けることができる蜘蛛の妖怪『絡新雲』

人の歩きを邪魔する妖怪『すねこすり』

夏から秋にかけての夜に海岸に火の玉のなつて出現する妖怪『たく

ろう火』

道を行く人の足にまとわり付き、歩きにくくする妖怪『赤足』

足にまとわりつき、通行人を転ばせる妖怪『足まがり』

人と同じ姿の七人組の亡霊『七人同行』

山々を跨ぎ、海で手を洗う巨人『手洗い鬼』

夕暮れ時にヒラヒラと飛ぶ妖怪『一反木綿』

股の下を潜られると死んでしまう片耳のない豚の妖怪『片耳豚』

道が交差した場所にいる魔物『辻神』

家に憑いて火事を引き起こす怪鳥『ヒザマ』

山に住む小さな子供のような姿の妖怪『ヤマンボ』

空中などに巨大な生首が現れる『大首』

75匹の動物が憑いているとされる『牛蒡種』

人の心を見透かす妖怪『覚』

頭は猿、胴体は虎、尾は蛇の魔物『さるとらへび』

巨大な蜘蛛の怪異『大蜘蛛』

スッポンのような体の海坊主の一種『和尚魚』

充分な供養を受けていない死体が化ける怪鳥『陰摩羅鬼』

炎と煙に包まれた乞食坊主の姿の妖怪『火前坊』

龍そっくりで四本の足を持ち、鱗の間が金色に光る蛇『七步蛇』

炎に包まれた牛車の車輪の中央に男の顔が付いた妖怪『輪入道』

海中から現れ、豊作や疫病などの予言をする半人半漁『アマビエ』

一つ目一本足の爺の姿をした妖怪『山爺』

子取り名人のような妖怪『夜道怪』

琴の付喪神『琴古主』

人を化かした地蔵『袈裟切り地蔵』

妖術が使えず、体術に特化した天狗『木の葉天狗』

ホラガイが数千年を経て竜となったもの『出世螺』

海蛇の化身とされる説もある『濡女』

スサノオに倒された八首の蛇『ヤマタノオロチ』

人に憑いて首を括らせる妖怪『縊鬼』

人間の髪を密かに切る妖怪『髪切り』

火を食べ、人や動物の血を吸う妖怪『野衾』

牛や馬を殺す妖怪『牛打ち坊』

大晦日に首切れ馬に乗って現れる鬼『夜行さん』

老いたサルがなる妖怪『狒々』

そして、二人が見た絵、茶袋が空中からぶら下がった姿で出現する

『茶袋』

以上、七十九の存在を穿ち、青行燈を呼び出した百の物語は完全に破壊された。

残り、一。青行燈。

「オノレ・・・ワガモノガタリガ・・・ワガソンザイガ・・・」

「さて、後はコイツ自体を穿って終わりだな。」

「うん、そろそろこの猿について教えてくれない？」

「そうだな。始めよう。」

青行燈は既に動くこともできない状態なので、一輝も湖札の矢に言霊を乗せる。

「百物語は、青行燈が現れるという流れのほかに、サルが出る、という話がある。ゆえにオマエは、鬼女の姿のほかにサルの姿をとることができる、その力を振るうことができるんだ。」

「そして、貴方は黒く長い髪に角、歯を黒く塗り白い着物を着た、嫉妬に捕らわれた妖怪。」

「それが、貴方（オマエ）の存在だ!!」

二人の言霊が乗った矢は、青行燈の胸を貫き、完全にその存在を穿ちきった。

崩れていく体から出た魂は湖札の中に封印される。

「さて、これで青行燈は封印できたわけだけど。」

「まだこの破壊をしないと、終わりとはいえないよね。」

「だな。では、」

「お兄ちゃんよろしく!」

湖札は一輝に丸投げした。

「えー・・・マジ?」

「うん、マジ!もう私は疲れた!」

「・・・まあ、それもそうか。式神展開、**攻**、**封**!この場を破壊し、禍々しき酒を封印せよ!」

その後、一輝は洞窟と絵を完全に破壊しつくし、甕の中にあつた酒を封印しきると、湖札を背負って家まで歩くのだった。

短編 あるお盆の物語 ①

これは、一輝の高校一年の夏休み、マヤの一件よりも後に有ったお盆の話である。

一輝は一族の墓参りをしていた。

一輝が白澤を殺した後、自分の一族がどれだけ生き残っているかを調べると、全く同じ日に全て妖怪の群れに殺されていた。

それゆえ、一輝は一族全員の墓を回らねばならず、割と大変なのが一切口を言わずに行っている。

死者への敬意は、しっかりと持っているのだ。

そうして、鬼道、贄殿、そのほかいくつもある分家を合計十三件回り、墓参りは・・・一輝のお盆の重要イベントの一つは終わる。

一輝はそのまま、もう一つのイベントのために東京にある陰陽師課の本拠地へと向かった。

|||||

「さて、第一席から第十席まで全員そろいましたか？」

「第一席、『降神師』夜刀神白夜、います。」

「第二席、『犬神使い』犬神慈吾朗。すでにおる。」

「第三席、『型破り』寺西一輝。寝てもいいか？」

「第四席、『化け狐』稲葉前、既にいますわ。人を呼び出すのなら茶ぐらい出しなさい。」

「第五席、『白澤凶』桑神豊。そこ二人、ふざけたことをぬかすな。」

「第六席、『化け猫交じり』匂宮美羽。あの・・・すいません。」

「第七席、『刀使い』九頭原刃。匂宮、何を謝っている？」

「第八席、『式神使い』星御門鈴女も既に。大方、何も言うことがなかったのだろう。」

「第九席、『金剛力』土御門殺女。別に何も言わなくていいのにね。」

「第十席、『雷撃』雷剛拳。うむ、全員おるな！」

途中からふざけだすものもいたが、これが日本の陰陽師のトップ十

人である。

性別としては、上から男、男、男、女、男、女、女、女、女、男。年齢は第二席がご老人。第十席が三十代。第一席、三席、六席、七席、八席、九席が十代後半。第四席、五席は二十代だ。

性格については台詞から考えてください。

そして実力についてだが、上三人が抜き出ている。

実際の序列では一輝と前の間には一つしか違わないが、実力面では本当に、桁が違う。

その違いは、霊獣クラスか、それ以上の存在を単独で撃破できるか否か、にある。

「はい、大丈夫ですね。この後、皆さんを食事お連れしますので、稲葉さんはもうしばらくお待ちください。後、寺西さんは寝ないでください。」

そして、この全体の進行を担当している人は陰陽師課のトップ、闇口光也。一応、陰陽師である。

座っている席は

殺女 刃 豊 一輝 白夜

光也

拳 鈴女 美羽 前 慈吾朗

といった席順となっている。

「さて・・・今回集まっていたいただいた理由については、説明する必要があるですか?」

「ないな。毎年のことだ。」

「そうだね〜いつものごとく、お盆のイベント。」

「妖怪の大量発生について、だな?」

「その通りです。今年は、明後日に彼岸の扉が開きます。」

お盆といえば、霊が帰ってくる日としても有名だ。

それゆえ、過去に退治された妖怪の霊が帰ってきて再び顕現したり、妖怪の妖力が高まったりして世界中に大量の妖怪、魔物が発生する。

中には大物もいるため、迷惑極まりないイベントだ。

「あら、結構遅いですね。」

「去年はいつもよりも強めに封印をかけましたから・・・」

「まあ、多少前後しようと思えばいい！我々のやることに変わりはないのだから!!」

「拳殿の言うとおりだな。むしろ、準備期間が長いことを喜ぶべきだ。」

「個人的には、さっさと終わらせてゆつくりしたかったんだけど。」

「これもまた、我ら十人の仕事じゃ。受け入れよ。」

ちなみに、一輝が第三席についたのは一年前、中学三年生のときのことなので、このイベントに参加するのは二回目である。

「で、今年はどの手で行くのだ？去年と同じか？」

この質問は、白夜によるものだ。

一応、第一席がこういったことを聞くという流れになっている。

「あれかー。時間はかかる方法だったけど、楽しかったよね。」

「確かに、あれだけすつきりとする方法ならば、文句は言いません。まあ、気に入らなければ容赦なく言いますが。」

「だが、あれはやりすぎだ。冷静に考えれば分かることだろう、この戦闘狂どもが。」

「あの・・・去年は豊さんも楽しそうでしたよ?」

「そんな事実はない。訂正しろ、『化け猫交じり』。」

「ひう・・・すいませ」

「謝ることはない。去年の豊殿は確かに楽しそうにしていたのだからな。」

「うむ！あのような第五席は見たこともないくらいに楽しんでおった！」

ちなみに、その作戦とは一輝の提案に賛成七、反対二、中立一で決まったもので、とても単純なものだった。

本当に単純で、同時に負けがありえない陣形。

つまり・・・十人が全員共に動き、目に付いた妖怪を消していくというもの。

ザコの妖怪は何もできずに消え、最後に現れた霊獣、夜刀神でさえ、完全なオーバーキルとなった。

「いえ、さすがにもう一度あれをやるうとは思いません。確かに被害は少なかつたですが、」

「少なかつた理由は、強い力がお互いにぶつかることによつて相殺されたからだ。」

「何が起こるかとひやひやする羽目になりましたから。あんな心臓に悪い作戦、もう二度としたくありません。」

「「えー……」」

「そこ三人、我慢してください。」

文句を言ったのは、一輝、前、殺女の三人だ。

「で、どのような手で行くのじゃ？」

「複雑なのは……やめてください……」

「大丈夫ですよ。去年ほどではありませんが単純です。」

「そう言いながら、十人にプリントを配る。」

そこには

『第一部隊』リーダー『降神師』メンバー『式神使い』『雷撃』

『第二部隊』リーダー『犬神使い』メンバー『化け狐』『白澤図』

『第三部隊』リーダー『型破り』メンバー『化け猫交じり』『刀使い』『金

剛力』

と書かれており、約三人が小さくガッツポーズを取つた。

「この三部隊に分かれていただき、各担当地域の妖怪を殲滅。霊獣クラス以上が出た場合には、担当が終わつたものからそこに直行していただきます。」

「メンバーはこれだけでか？」

「殲滅は基本このメンバーで、避難などには地域の陰陽師にも参加してもらいます。」

「俺のところの男女比がおかしいのは？」

「人数が多いのは、貴方を取り押さえる必要が出た時用です。この中で一番の問題児は、間違いなく貴方ですから。男女比は、上二人に貴方のところにいる女性を入れると、その二人がコミュニケーションを

取れるとは思えません。」

第一席、二席、弱点は女性である。

それぞれの部隊にいる女性は、そいつらが唯一まともに話せる女性だ。

そして、一輝の部隊にいる三人は、ガッツポーズを取ったメンバーだ。理由は・・・まあ、ご想像いただきたい。

一年の間に一輝に助けられた、などのイベントがあった、とだけ言うておこう。

「ああ・・・そういうことか。了解。情けない上司達のためにも受け入れましょう。」

まあ、特に文句もないし。」

約二名文句をいいたそうにしているが、事実であるために何もいわない。

「では、担当地域を指定させていただきます。第一部隊には北海道から新潟辺りを。第二部隊には兵庫県あたりから沖縄県までを。第三部隊は残り全てです。何か質問はありますか？」

場所割り、かなりテキストである。

「では、質問は無いようなので、これで終わりとします。現地入りは明後日の朝までにしてくださればいつでも。宿泊費など費用が出た場合にはすべてこちらに請求するようにしてください。」

そのあたりの話し合いも含めて、只今よりお食事に行きましょう。」

そうして全体としての話し合いは終わり、食事で部隊ごとの話し合いをすることになった。

短編 あるお盆の物語 ②

「いらっしやいま・・・せ？」

一輝たち十一人が、陰陽師課の予約した料亭に入ったときの、店員の反応がこれである。

だが、それもしかたない。

「こちらでお食事となります。部隊ごとに分かれて席にお着きください。」

これは光也の台詞。

彼はスーツをぴっちりと着ており、常に微笑んでいるので特に驚くことはない。

「ここか。いい雰囲気だな。」

これは白夜の台詞。

服装は歳相応のものだが、表情はなく、腰に一振りの刀を下げている。

店員が驚くには十分である。

「うむ。去年の店にも劣らぬ、よい店だ。」

これは慈吾朗の台詞。

服装が和服で白いひげは貴方は仙人ですか？というレベルで伸びている。

周りが若者ばかりの中にいるため、十分に目立つ。

「やっぱり、こういう店は落ち着かない・・・来年からもっと気楽な店にしない？」

これは一輝の台詞。

一輝は服装は歳相応、表情もけだるそうなものが浮かんでおり、無表情ではない。

持ち歩くものも全て倉庫に入れているのでこれとっておかしくないことはない。

珍しく、まともだと認識される状態だ。

「そればかりは慣れるしかありませんね。話す内容が内容ですから、これぐらいのところではなければ。」

これは前の台詞。

服装は慈吾朗と同じように和服で、腰のところに狐の面と小刀を二本下げている。

こちらもまた、普通ではない。

「この程度のところでのその態度、情けないぞ。それでも日本の第三席か？」

これは豊の台詞。

服装などは歳相応の普通のものだが、手に持つ古びた本が異彩を放っている。

その本のせいで全体的におかしく感じる。

「あの・・・一輝さんは去年入ったばかりですし、仕方ないかと・・・」

これは美羽の台詞。

服装は歳相応で、おどおどした態度は気になるが、周りのメンバーほどではない。

強いて言うなら髪で左目を隠していることと、両手で持っている大きなカバンが気になる程度である。

「それに、こう言っては何だが、一輝の先代の鬼道はそこまで腕のいい陰陽師ではなかった。あまりこういった機会はなかったのだろう。」

これは刃の台詞。

服装は巫女服で、腰や背には合計八振りの日本刀。

目立つことこの上ない。

「そういった意味では、慣れるまではここくらいがいいだろうな。あまり本格的過ぎては美味しい食事を味わう余裕すらなくなってしまう。」

これは鈴女の台詞。

彼女はこれの中では一番常識というものを知っているので服装は歳相応。

持ち物もズボンのポケットに式神を三体と、一部の式神を隠し持っているだけなので、この中で一番まともだ。

「でも、カズ君がこういうところに慣れるって想像つかないよね。問題児だし。」

これは殺女の台詞。

服装は歳相応、他にも目に見えるおかしな点は見つからないのどこか異質だと感じるものがある。

「俺は山で食料を集めてその場での調理を進めるぞ！あれが一番美味しいし、誰にも聞かれる心配はない!!」

これは拳の台詞。

服装は袖が引きちぎられた道着。

露出している腕は傷だらけで本人の顔にも大きな傷が。

そしてこのハイテンションな大声なので、このメンバーの中で最も目立っている。

さあ、そんなメンバーが来店した光景を思い浮かべてみよう。

あの店員の反応は当たり前のものだと理解していただけるだろう。

「あ、予約していた陰陽師課のものです。料理の準備をお願いします。」

「・・・あ、はい！少々お待ちください！」

光也が店員にそう言うのと店員は慌てて奥へ入っていく。

そちらから「ご予約された方々がいらつしやいました!」「も、もうか?!まだ下ごしらえしか終わってないぞ!」「急げ!今なら他の注文は入っていない!」「全員総動員しろ!」とあせった声が聞こえているが、十一人は気にせず席に着き、一輝にいたっては

「肉料理全種類追加でー!!」

と嬉々として追い討ちをかけている。もとの苗字に恥じない、問題児に恥じない鬼つぶりである。

「そんなに食べれるのか?」

「墓参りに行つてたから、今日はまだ何も腹に入れてないんだよ。余裕でいけるだろうし、三人も食べたければどうぞ、って感じで。」

「あくそういえば結構な数回らないといけないし、朝から呼び出されたもんね。」

「お疲れ様・・・です。お体には、お気をつけて・・・」

「心配してくれてありがとう、美羽。」

一輝はそう言いながら、四人がけの席の一輝の隣を勝ち取った美羽

の頭を撫でる。

美羽は一輝より年下で、撫でられるのが好きと知っているが故の行動だ。

まあ、そこに『一輝に』という言葉がつくことは知らないが。

「……♪」

「……(ジト)」

結果として美羽は気持ちよさそうにするが残りの二名からはジト目である。

「?どうしたの、二人とも?」

「なんでもない、気にするな。」

「そう?じゃあ、今回の殲滅についての話に入るけど、」

なんと、一輝はそのまま作戦の話に入った。

「はあ……で、何を決めるんだ?」

「特に決めることはないかな。強いて言うなら、四人で固まって行動するか、バラけるかだけど……」

「二固まってで。」

「よし、決まったな。」

それと同時に料理が全て届いたので、(なんと、肉料理でもある。)食事を始める。

「そういえば、カズ君はいつ現地入りするの?」

「ん?もうこの後すぐ行く予定だけど。」

「またはやいな。どうしてだ?」

「入っちゃえばそこでかかった金は全部陰陽師課に押し付けられるから。それと、知り合いにあつたら補修に来てってうるさいし。」

一人だけ全部サボっていればそういわれて当然である。

「行かないと、駄目ですよ……」

「ヤダ、面倒くさい。」

「カズ君はブレないね。ま、私も同意見だけど。」

「二人はもう少し学業にも力を入れたらどうだ?そこそこに参加して、なかなかの成績を残せば文句は言われなぞ?」

匆はそう二人に言うが、

「大丈夫、全教科学年トップは維持してる。」
そう切り返す。

なんともまあ理不尽なことに、二人とも頭はよく、それこそ今すぐ大学に放り込まれても出席日数以外の項目でなら卒業できるレベルだ。

「そういうえば、二人はそうだったな・・・まったくうらやましい・・・」
「本当です・・・私なんて、現状維持に必死なのに・・・」

そして、この二人は真面目なのに物覚えはそこまでよろしくない。その上に真面目なので陰陽師の仕事も真面目に細かく行っており、勉強時間もない。

本当に、理不尽なものである。

「さて・・・もう皆食べ終わったようだし、解散にする？」

「そうだな・・・念のために刀の手入れをしておきたいので、残念ながらそれに一票だな。」

「私も一度家に帰らないといけなからなく。仕方ないか。」

匆、殺女の二人は心から残念そうにそういう。

「一輝さんは、この後どうするのですか・・・？」

「もうこのまま現地入りしてグータラ過ごすよ。皆と違って、『型破り』だし。」

「じゃあ、私もついていきます・・・もう準備は終わっていますし・・・いい、ですか？」

美羽は涙目の上目遣いで一輝にそう聞く。

どうやら、大きなカバンの中身はそのための準備だったようだ。

「いいよ、別に。じゃあ、残りの二人は当日合流で？」

「明日には合流する！」

「ヒツ・・・」

一輝の質問に対し、二人は軽く美羽を睨みながらそういった。

「じゃあ、一応後でどこに泊まってるかだけ連絡しとく。行こうか、美羽？荷物持つよ。」

「はい、ありがとうございます・・・じゃあ、また明日・・・」

一輝と美羽の二人はそのまま店を出て、一輝が出した水に乗って目

的地まで飛んでいった。

その後は、美羽が作戦について話すという名目で一輝の部屋を訪ね、そのまま一輝と同じ布団で寝たり、残りの二人が次の日の朝一で来て四人で適当に遊んだりして二日間を過ごした。

翌朝からは、妖怪狩りの開始である。

短編 あるお盆の物語 ③

会議があつた日の次の日、23時55分。部隊はそれぞれの担当地区に集合していた。

「今、日本全体に結界を張りました。民間人の避難も終わりましたので、被害については気にせず、妖怪退治に励んでください。」

「第一部隊、了解。」

「第二部隊、了解。」

「第三部隊、了解。」

光也からの連絡に、各部隊のリーダーはそう返事を返す。

光也は陰陽師であると前に語ったが、彼の習得した奥義は「結界」の類のものだ。

攻撃のための奥義ではなく、何かを守るための奥義で、それを建物などに密着するように張ることで一輝たちが遠慮なく暴れられるようにしたのだ。

「じゃあ、最後に簡単に確認するぞ。まず、美羽はサポートに回って。」

「はい……。」

「次に、殺女はでかい一撃を大物に叩き込む。」

「りよ〜かい!」

「刃はザコから大物まで、目に付いたやつを切り刻め。」

「分かりやすいな、了解だ。」

「で、俺は全体のサポートをしつつ妖怪を問答無用に潰していく。」

後全体的なことだけど、封印作業はする余裕がないだろうからしなくていい。霊獣以上のやつが出た場合、最低でも三人で対処し、最低限俺が行くまでは耐えること。」

一輝の見立てでは、三人がかりでならば霊獣クラスも倒すことができる、という形だ。

一輝とはかなりの差があっても、日本での第五、七、九席だ。間違いはないだろう。

「なにか質問は?」

「あの……いい、ですか?」

「どうぞ、美羽。」

一輝が質問はないかと聞くと、美羽が遠慮がちに挙手をする。

「今回、特異点は、分かっているのですか・・・?」

特異点とは、今回の妖怪大量発生を中心となる地のことである。

「一応、分かっているよ。ほら、あそここの『危険、この辺りに特異点あり(笑)』って看板のところ。」

「あのふざけた看板?あれが一体・・・」

「あそこがちょうど特異点。」

「ならあんなふざけた看板を立てるな!!」

「あれは・・・駄目、です。」

一輝としては大真面目だったのだが、三人からするとそうでもなかったようだ。

「まあ、今回は大きいのが三つに小さいのがバカみたいな量あるから、」

その瞬間、日付が変わり、

「あそこが特異点だと分かっても、だから何?って感じなんだけど。」

日本全土を覆いつくすように、妖怪が出現した。

もちろん、一輝たちの目の前にも、大量に、視界を埋め尽くすように。

「おー!!去年の比じゃねえぞ!これは楽しめそうだ!」

「いやいやいや!」

「この量は、ちよつと笑えないかな・・・」

「かなり、笑えません・・・」

現時点で、四人の中でこの状況を楽しんでいるのは一輝だけのだ。

「じゃあ、作戦開始!美羽は俺の水の上に乗れ!」

一輝の乗る水の上に乗りながら、美羽は左目を隠していた髪をどかし、猫のようになってる左目で辺りにいる妖怪を見る。

すると、見られた妖怪たちが動けなくなったかのように固まるので、

「目覚めよ、あめのおはばり天之尾羽張!」

それを、右腰に差した刀のうちの一本りを抜いた刃が、一気に切り刻む。

ここまでの流れは、かなりスムーズなものだった。

まず、美羽が使った力についてから説明しよう。

彼女の一族は呼び名の通り『化け猫交じり』。化け猫の血が混ざっている。

妖怪達の動きを止めたのは化け猫が使う妖術、『猫操り』、相手やものの動きを操る妖術だ。

とはいえ、かなり昔に混じっているため血は薄く、普通ならばたいした力は発揮されない。

では何故美羽は力を振るえるのか？それは、彼女は化け猫の血を隔世遺伝したからだ。

そして、彼女はその力を操ることが自然と行え、第五席となった次に、刃が使った刀について。

これはイザナギがカグツチを斬る際に使ったとされる神刀で、また、後には神の名ともなる。

ただそれだけの刀だが、それでも神が使い、神を殺すだけの刀、かなりの力を持っている。

そういった只者ではない刀を使いこなすのが、刃が習得した奥義、『刀使い』である。

「おー、これまた一気に減ったなー。」
「こうでもしないと・・・なかなか減りませんし、」

美羽はそう言いながら自分達の上空を見て、
「殺女さんから、気をそらさせれませんし。」

自分の背後に金剛力士像のビジョンを漂わせる、殺女の姿があった。

「わが身に宿りしは全てを砕く力。我が前に残るものはないと知れ！」

言霊を唱えながら降ってきた殺女は、妖怪達との距離が縮むと拳を放ち、拳圧で一気に妖怪どもを潰す。

殺女の家が継承していく奥義は『金剛力』。

これは何にも複雑なことはい、純粹な力そのものだ。

その力は山河にとどまらず、この世の全てを破壊しつくすことができるものである。

「妖怪が押し花みたいに潰されたな。」

「そんな綺麗なものじゃない・・・です。」

「まあ、ただの死体だしな。これだけあるとさすがに邪魔か・・・式神展開、〃封〃。異形なる骸を封印せよ。」

一輝は〃封〃の式神を全て展開し、死体を封印していく。

「じゃあ、次は俺がやるかな、つと！」

一輝は大量に準備してあった水を環状の刃とし、一気に放つことで三人の日じゃない量の妖怪を殺す。

陰陽師としての力ではなくとも、一輝の実力はけた違いなのだ。

「ここまであっさりやられると・・・自身失うなく。」

「まあ、仕方ないだろう。一輝は霊獣殺しなのだから。」

「それに・・・陰陽術の類とは、違いますし・・・」

「それ以前に、どこから来た力かすら分からないし、いつ何が起こることか・・・」

そう言いながら一輝は片手間で妖怪を退治していく。

中にはもちろん、妖怪としての大物もいるのだがそんなことは何の問題にもならない。

差別なく全て殺され、魂を一輝の中に封印されていく。

「さっさとするぞ！まだまだ大量に妖怪は顕現してるんだ、早く終わらせて打ち上げだ！」

「カズ君は気が早いなく。でも、それには大賛成！」

「そのためには、誰も怪我をせずに終わらせなくてはな！」

「はい・・・頑張りましょう！」

そのまま、四人は台風のような勢いで妖怪を殺していき、あと少しで終わる、というタイミングで・・・三箇所霊獣が出現した。

短編 あるお盆の物語 ④

さて、時間を遡り場所も変わって第二部隊のところである。

「さて、何か聞きたいことはあるかのう？」

「質問も何も、まだ何も決めていないだろう。誰がどう行動するか、どのペースで移動していくのか、作戦を決めろ。」

豊はそう慈吾朗に言うが、

「そんなものはない。本人が一番よいと思ったことをする。それをワシがフォローし、全体のバランスを取る、これでよいじゃろ。」

「慈吾朗の言うとおりです。このメンバーでそのようなことを考えても、何の意味もありません。」

『犬神使い』、『化け狐』、そんなてきとうでいいはずがないだろう。もう少し真面目に考えろ。」

「豊はもう少し頭をやわらかくしなさい。そのように硬い考えでは、臨機応変に対処できませんよ？」

「前のいうとおりじゃ。これくらいのことを受け入れられないのは、靈獣殺しは不可能。自らの力も上昇せんぞ。」

一切聞き入れられることなく、そう返される。

まあ、この妖怪大量発生では何が起ころっても可笑しくないので、作戦は立てないほうがいい。一輝が作戦を伝えたのは自分が臨機応変に動けば言いという考えからだし、それでもかなり簡単なものだ。

「はあ・・・こんなことならばあの場でメンバーチェンジを頼むべきだったな。『降神師』のところなら、まともな作戦が立っていただろうに・・・」

「いや、それはないじゃろ。あやつはワシ以上にそのあたりはてきとうじゃ。」

「作戦が立っているとすれば、一輝のところぐらいでしょう。」

そんな話をしているうちに、日付は変わり・・・妖怪の大量発生が始まる。

「はあ・・・始まってしまったのなら仕方がないか。白澤図よ、汝が内に在りし異形を、今我がために開放せよ。ここに記されしは、歴代の

衆神が集めし、その功績なり。」

豊はそう言霊を唱え、手に持っていた古びた本を掲げ、

「今ここに再臨せよ。全ての妖怪よ。そして、我が命に従え。」

そこから、大量の墨を放射していく。

それらは少しずつ集まり・・・白黒の妖怪軍を形成し、そのまま妖怪の群れに突っ込んでいく。

そこに一切の自我は感じられず、ただ使命を全うするというだけの、機械のような動きではあるが、それでも勢いよく妖怪を倒していく。

これが衆神に伝わる奥義、『白澤図』だ。

これは、過去に一輝が殺して封印した霊獣、白澤が残したといわれる蒐集本で、自らの手で殺した異形のデータが記載されていく、この世に一冊しかないものだ。

ゆえに衆神には奥義を使えるものが一人しかおらず、常に滅びと背中合わせとなっている。

その力は単純で、記載されている異形から意識を奪い、ただ自分の思いのままに動く人形とする。一輝の奥義、妖使いに似ているように、全く違うものだ。

「あら、抜け駆けとは酷いですね。先に始めないでください。」

「何を言っている。この状況で何もしないほうが間違っているだろう？」

「まあ、豊の言う通りじゃな・・・ほれ、早くせぬと前の出番もなくなるぞ?。」

「く・・・まあいいでしょう。」

そう言いながら、前は腰に下げた九つの刀を取り、右手に五、左手に四をつかむと言霊を唱えていく。

「今ここに、われは力を使う。汝、その核となれ。」

そう言いながら両手から四振りずつの刀を投げ、残った一振りを媒介として力を流し込む。

「我が込めしは狐の力。今、汝らは管狐となる!。」

言霊が終わると、投げられた刀は三尾の狐の姿となり、妖怪を喰ら

い、切り、燃やしていく。

そして、前自身も刀を構えて走り、管狐が喰らった妖気を使った妖術や剣術を持って妖怪を殺していく。

これが、前の継承した奥義の一部だ。

前の一族は美羽と似たようなもので、化け狐の血を引いている。

その狐は、一輝の先祖が殺したのとは別の九尾で、一輝側の悪妖とは違い人々を守り、実りを与える豊穰の神である。お稲荷様、とかその辺だ。

その結果、美羽の狐バージョンのような奥義を使う。狐の大将として小さい狐を使い、その力を自らのものとする。

まあ、美羽の力も前の力もこの程度ではないのだが、それを披露するのはもう少し先だろう。

「さあ、慈吾朗も早くなさい！この後の酒会、一番戦果の少ないものの驕りです！」

「待て『化け狐』！未成年が大体なのに酒会となるはずがないだろう！」

「はっはっは！なに、このメンバーでの集まりでそのような法律が通用するはずもなからう！」

国としてもこのメンバーの力を失いたくないので、その程度であればもみ消されるだろう。

それに、下手に敵に回したらこの十人によって日本が潰されかねない。規格外の集まりなのだから。

「さて、そういうことならばワシも少しばかり働こうかのう。」

「少しではなく全力を出せ！これは遊びではないんだぞ！」

「まあまあ、ワシのような老輩は、若き者たちのためにも手を出さんほうがよいのじゃ。」

そう言いながら、慈吾朗は和服の懐から和笛を取りだし、それを吹く。

すると、慈吾朗の体から青いもやが出てきて、それが巨大な犬の姿になり、吼えた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

それだけで一部の妖怪は消え去り、消えなかった妖怪も力が抜けたようにその場に崩れる。

そうして弱った妖怪は巨大な青い犬……慈吾朗の使う犬神によって噛み砕かれ、踏み潰されて消えていく。

「よくやったのう、ベル。これからもその調子で頼む。」
「ウオン。」

さて、第二席の説明に入ろう。

慈吾朗は笛を吹くことによって自らの体に住んでいる犬神を呼び出し、使役することができる。

慈吾朗の体に住んでいるのは青い巨体を持つメスの犬神、ベルだ。

この犬神は誰かから継承したのではなく、生まれつき慈吾朗の体に住んでいたもので、慈吾朗と共に成長していく（最初は子犬程度のサイズからはじまる）。

その体質のため、犬神の一族は生まれたその瞬間から、奥義を習得した陰陽師なのである。

次に、妖怪を消し去り、弱めた力についての説明に移ろう。

まあ、特に難しい理由はない。ただ古来より犬の鳴き声には御払い、お清め、そういった効果があるというだけだ。こんなもの、犬神の犬という属性に付属したおまけみたいなもののだが、慈吾朗はそれすらも伸ばし、霊獣を消し去れないにしても隙を造つたり弱めたりすることはできるほどだ。そして、その隙に犬神の真骨頂を使い、霊獣殺しに成功した。

「さて、まだまだおるで。前に豊、隙は作るからその隙に消してゆけい。吼えよ、ベル。」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

慈吾朗の命令に従い、ベルは先程よりも大きな声で吼え、より広範囲の妖怪を消滅、ないし弱らせた。

「これでは慈吾朗より大きい成果を上げるのは難しそうですね……仕方ない。豊、貴方に奢らせてみせます！」

「まだそんなことを言っているのか……これは仕事だぞ。そんなことを」

「あら、逃げるのですか？」

前がそう挑発すると、豊はその口を閉じ、前を睨みつける。

「あら、黙っているということは凶星なのでしょうか？」

「……………どういうことだ？」

前に言われて返す豊の声は、今までよりも低い声だった。

「あら、先程ので分からなかったと？では分かりやすく説明して差し上げます。」

貴方は私との勝負に勝てないと思い、恐れ、勝負を引き受けない腰抜け野郎なのですか、と言ったのです。」

「ハハハ……いいだろう。その喧嘩買ったあ！」

豊はそう言いながら白澤図に全ての妖怪もどきを戻し、自らに向けると、

「鬼道の奥義を、妖怪の意識を奪うことによってより効率化した俺の奥義！見さらせえー！」

言霊を唱え始める。

「今この書に蒐集されしは数多の異形！ここに宣言する、我は汝らの力を我が物とする！今、我が命に従い、わが身に宿らん！」

唱え終わると白澤図から大量の墨が豊に吹き出され……否、豊に入り込み、そのデータを豊に書き込んでいく。

それが終わると、豊の服装は白黒の和服に変わり、さらには豊自身が白黒へと変わる。

これは豊自身が鬼道の奥義の文献を参考にして作り出した新たな衆神の奥義、“取り込み”だ。

これは“憑依”を元とした技だが、他の奥義を元にしたものも、もちろん存在する。

もつとも、神のデータがなければならぬ“神成り”や一輝が箱庭で作りに出した“百鬼武装”などを除けば、ほとんどの奥義が、だ。

「おらあ！妖怪ども、かかって来いやあ！」

切れて妖怪の惨殺を始めた豊を見て、前と慈吾朗の二人は

「相変わらず、扱いやすいですね……」

「うむ。あの短気はやつの武器だが、同時に弱点でもある。もう少し

感情のコントロールができるといいんじゃないのう・・・」

そう言いながらも、妖怪退治に参加した。

「そしてほとんど退治しきり、豊と前がどちらのほうが多く倒したのかを口論していると、

日本で三箇所にも、霊獣が出現した。

そして、ある場所ではより強い存在が、目を覚まそうとしていた。

短編 あるお盆の物語 ⑤

再び時間を遡り、場所も変わって第一部隊のところ。

「特に作戦はない。以上だ。」

白夜はそう二人に言つて、刀を抜いた。

特に名があるわけでもないが、夜刀神家に伝わる強力な……強力すぎて、危険すぎる妖刀だ。

「相変わらず単純だな、白夜殿は。拳殿はこれで？」

「うむ！なんせ俺はバカだからな！作戦など説明されても理解できん！！」

冷静に式神の調節をする鈴女と、ガツハツハ！と笑う拳。

正反対な二人だが、意外と気が合う二人でもある。

「そうだ、先ほど捕らえた猪を焼いたのだが、食べるか？美味いぞ！」
そう言いながら、焚き火で焼いた猪一頭分の肉を差し出す拳。

「やけに来るのが遅いと思つたら……そんなことをしていたのですか？」

「うむ！腹が減つては戦に勝てぬ！単純に美味しいものはそれだけで力をくれるからな！」

「相変わらず単純すぎる考えだな……だが、間違つてはいない。ありがたかったです。」

「では私も。御相伴に預かるとしよう。」

そういつて、拳は漫画に出てくるような骨付きの肉を豪快に食べ、白夜と鈴女は普通に箸で食べ進めていく。

そして、一頭分の肉を三人で食べつくし、食器や骨を片付けたタイピングで、日付が変わり、妖怪の大量発生が始まる。

「お、始まったな。では討伐開始と行こうか。」

「では、まずは動きを封じるところ。縛れ、『紅緋』！」

その言葉と同時に鈴女の背後に一メートルほどの蜘蛛が現れ、糸を吐いて周りにいる妖怪を全て縛り上げる。

鈴女は紅緋の口元の、全ての糸がまとまったところを切り、拳に渡す。

「では拳殿、お願いします。」

「任された！天よ、我に雷撃の加護を与えん！」

拳がそう唱えると、天から落雷が拳に当たり、拳のもつ紅緋の糸を通じて全ての妖怪に流れ込み、その命を奪う。

では、まず鈴女の奥義から説明するでしょう。

まあなんてことはない、全ての式神を使うことができ、その力を300%発揮できる、というもの。

本来そこまでの負荷をかければ、式神は壊れてしまう。だが、それが起こらないのが星御門の奥義の一端である。

さらに、星御門の人間は式神を紙の状態ではなく、自らの体に入れ、持ち歩く。常に武装を解かない一族だ。

次に拳の奥義。

これについては、本当に単純なものだ。

それは、天に頼み、天より雷を預かり、それを扱うというもの。

体にいくら電撃を流し込んでも効かないなどのことはあるが、本当に、ただそれだけの単純な能力だ。

「さて、これで近くにいたものは退治できたが……」

「今年はいつともより特異点の数が多い。その上、三箇所に一際でかいのがあるからな。早々数は減らん。」

「だが！向こうも無限ではない！いつか終わることだ！」

「単細胞が……まあいい。この俺自ら、数を減らしてやろう。」

そういつて、妖刀を構えると……一気にその力を解放し、荒れ狂う呪力、妖力の波を放つ。

結果、先ほどの比ではない量の妖怪が倒され、それらの死体と先ほどの死体が、全て妖刀に食われた。

「ふむ……ザコばかりではあるが、あれだけの数があればそこそこにたまるのだな。まあ、まだ全然足りんが。」

「おや、今回は準備していなかったのか？」

「したんだが……その、妹が勝手に使ったんだ……」

「小さな子供の手に届くところに置いてはいかんど！」

「相変わらず、夜露殿は好奇心旺盛だな。おっと、貫け、『雌黄』！」

無駄話をしているうちに集まってきた妖怪は、鈴女が召喚した蜂の式神の放つ黄色い光に貫かれ、絶命する。

そして、その死体を白夜の妖刀が貪欲に食い散らす。

「では、倒した妖怪の死体は、全てその刀が片付けてくれると考えていいのだな?」

「ああ。霊獣が現れたときのために、できる限り準備はしておきたいからな。」

「では、俺達は第一席のためにも妖怪を狩るとしようか!雷鬼晚餐!」

拳は再び雷を自らの身に落とし、それらを鬼の形にすると妖怪に走らせ、食い漁るかのように噛み千切り、命を奪わせる。

こんな性格だが、意外と器用だったりする。イメージに合わないところが多いやつなのだ。

「焦げてはしまったが、問題あるまい!」

「多少変わるのだが……まあ、これだけの量がいれば大して気にはならんか。」

「あまり贅沢を言ってもいけない。まあ、白夜殿の奥義は使わずにすんだほうが……おや?」

三人が妖怪を殺しながら進んでいると、鈴女が何かを見つけた。

「どうした、鈴女?」

「いや、今人がいたような……拳殿、あれ……人ですよ?」

鈴女は大量の妖怪がいるその先、自分達のほうに向かってくる四つの人影を指差す。

「どれ……うむ、二人は人、二体は人形だな。傀儡か?」

「は?俺達以外は避難したはずだろう……おい光也。どうということだ?」

拳が保障したことで、白夜は光也へと連絡を取る。

「おかしいですね……確かに避難するように命令したはずですが。」

「なら、あれは命令違反ということか……最悪、見捨てればいいな。」

「お願いなので、それは最終手段としてください。」

光也は白夜にそういつて、電話を切った。

「はあ……しかたない。まずはそいつらと合流するか。」

「うむ！死んでしまう前に保護しなくてはな！」

「巻き込まれただけならば、助けなくてはならない。それが強者の責任というものだ。」

三人の意見が一致したため、その二人の元に向かおうとするが：その瞬間、日本で三箇所霊獣クラスが出現、うち一体は二人の傀儡使いの元に出現した。

そして・・・三人の霊獣殺しのいる位置から等距離の地点に、神が、出現しようとしていた。

短編 あるお盆の物語 ⑥

「これは・・・確認しなくても分かるな。霊獣クラスが出現してる。」

一輝はかつて白澤と戦ったときのような、強者の出現を感じ取り、三人に聞こえるように言う。

「一輝、それは間違いないのか？」

「間違いないね。一回でもあのクラスのやつと一対一で戦ったことがあるやつなら、近くに出現したことに気付く。」

「それは、私達には分からない感覚だねえ。じゃあ、今回のボスはそいつ？」

「近くにつて・・・運が悪い、です・・・」

一輝の感覚の分からない三人は、半信半疑ながらも起こっていると話を進める。

「まあ、一応連絡をしてからかな・・・おい、光也。」

『これはどうも、寺西さん。どうかしましたか？』

一輝は光也へと電話を繋ぎ、現状を簡単に説明する。

『今回はそちらのあたりに出現しましたか・・・あ、スイマセン。ほかの二部隊からも連絡が入ったので、少々お待ちを。』

「了解。できる限り早くな。」

霊獣が出現したため他の部隊より優先すべきではあるが、現状把握くらいはしておいたほうがいい。

そちらでなにか、もつと重大なことが起こっている可能性もあるのだ。

「とりあえず、霊獣が出現した辺りに向かおう。監視くらいはできるようにしておきたい。」

「了解。」

一輝は光也が再び電話に出るまでの間、時間を無駄にしないためにも行動を始める。

『あ、寺西さんですか？ちよつと予想外の事態になっていますよ。』

「は？予想外？」

一輝は光也に聞き返す。

霊獣が出現したこと以上の事態が思いつかなかったのだ。

『信じがたい話なのですが・・・夜刀神さん、犬神さんのところでも霊獣が出現。夜刀神さんのところではただの陰陽師が立ち向かおうとしているそうです。』

「そいつら、バカだろ。それか自殺志願者？」

一輝は思ったことをそのまま口にした。

霊獣に立ち向かった自分が言えたことではないが、幼いころから立ち向かうな、と教育されているはずだからだ。

『それが・・・卵に殺せて、自分達に殺せないはずがない。そんなやつが『席組み』にいるべきではない、追い出してやる、と言っているそうです。』

「はあ・・・明日にでも、そいつら俺のところに来て。一度戦つて、実力の差を思い知らしてやる。」

まあ、卵はまだ見習い、奥義を習得したもののだけが一人前である、と言うのが陰陽師の中の常識。卵にできることは陰陽師にできて当たり前、と思っているものもかなりの数なのだ。

《まあ、席組みに入ったときも、色々面倒だったからな・・・》

一輝はそのときのことを思い出しながら、話を続ける。

「じゃあ、こつちに顕現したやつはこつちで対処したほうが？」

『そうなりますね。一応、顕現したのが何なのか、だけ教えてください。』

「了解。もう面倒だから交戦することにする。三人も、それでいいか？」

一輝は部隊にいる残りの三人に確認を取る。

「去年よりは少ない人数での戦いだが・・・」

「きつと、なんとかなる・・・よね？」

「心配ですけど・・・頑張り、ます。」

「ああ、お前たちなら俺がいなくても大丈夫だよ。じゃあ、行こう。」

三人が頷くのを確認し、一輝は一気に目的地まで水に乗って飛ぶ。

もちろん、残りの三人も乗せて、だ。

「確かこのあたりのはず・・・おわ!？」

「え？」

「水が消えたな。」

「冷静になってる場合じゃない!!」

大体目的地の辺りにつくと、一輝たちは攻撃され、水が消滅。そのまま落下していく。

「まずは安全確保!!」

が、一輝はいたって冷静に、他の三人を回収しながら空気抵抗を操って落下速度を緩め、安全に着地する。

回収方法としては、まず美羽を右腕で抱え、次に刃を左腕で抱え、最後に殺女を自分の背中に抱きつかせる、と言った形だ。

「ほう・・・陰陽師として覚醒もしていないのに、よく動く。それに、なにやら面妖な術も使っておるな。」

「そりやどうも。アンタは、いったい何もんだ？」

一輝は三人を下ろしながら、自分達を攻撃してきた霊獣クラスの妖怪に話しかける。

その姿は青白い、病人のような肌を持ち、高貴な着物を着ている。

日本の妖怪について、少し詳しく目の知識を持っていればその正体の予想はつく。

「ただの平民が我に名を尋ねるのであれば、せめて自らの名を名乗ってはどうか？」

「そいつは失礼。確かに、上皇ともあろうお方に失礼だったな。俺は寺西一輝。家の名すら失った、なっさけ無い半端もんだ。」

一輝はふざけた口調でそう返す。

「匂宮美羽。今の匂宮家の頭首見習い・・・です。」

「九頭原刃。現九頭原家頭首。」

「土御門殺女。ただの陰陽師。」

残りの三人も、簡単に名を名乗る。

「なるほど・・・中々に素質の高いものたちだ。では、我も名を名乗ろう！我が名は崇徳！第七十五代天皇にして、日ノ本の三大悪妖怪の一角である！」

「だそうだよ？聞こえたか？」

『はい、確かに聞きました。崇徳上皇とは、こちらもかなりのビツクネームになりましたね。』

光也はそうお気楽な口調で言うと、急に口調を変えて一輝にある事態を伝える。

『でも、そのレベルならよかったです。まだ、匂宮さんたち三人で対処できますから。』

「その言い方・・・まるで、俺がこの場を離れないといけないみたいな言い方だな？」

『まあ、その通りですからね。』

一輝は光也のその返しに、一気に冷静になりながら相手の攻撃を裁きつつ話を続ける。

「何かやばい事でも起こったか？」

『ええ、ここまでのことは過去の記録をあさってもありません。なんせ、三体の霊獣と、一柱の神が、ほぼ同時に出現したんですから。』
「.....はっ!」

一輝は光也の言っていることが理解できなかった。

まあ、当然のことであろう。ここまで重なるなんて、運がなさ過ぎる。

「それは、マジでいつてるのか？」

「一輝、いつまで話している!」

「もう向こうは攻撃を始めてるよ!」

「はやく・・・手伝ってください!」

他の三人がそう言うが、一輝の耳には一切入っていない。

『大マジですよ。今回顕現した霊獣のうちの一体が、神使だったので、それに影響されて封印が解けたと思われます。』

「その流れか・・・今回の打ち上げ、容赦なく楽しむからそのつもりでいろよ?」

一輝はそういつて、電話を切ると式神を崇徳上皇に向かわせて、時間を稼ぎ三人と話す時間を作る。

「カズ君、呑気に話してる時間はないよ?」

「分かってるよ。ただ、ちよつと緊急事態なんだ。」

「緊急事態？ 霊獣出現以上のか？」

「ああ。何とビックリ、ここのほかにも二箇所です。霊獣が顕現し、さらには神様まで顕現した。」

「……はい!?!」

一輝は三人が予想通りの反応をしたことに満足しつつ、話を続ける。

「って訳で、俺はその神様のほうに向かう。こっちは任せていいか？」

「それなら、仕方ないですけど…… 神様相手に、大丈夫ですか？」

「大丈夫だろ。光世の口ぶりからすると、他の霊獣殺しも来るみたいだし。」

「じゃあ、そっちは大丈夫かもね……うん、こっちも頑張ってみよう！」

話が纏ったところで、一輝は立ち上がって式神を回収する。

「じゃあ、美羽、刃、殺女。こいつの退治は任せた！」

「行かせはせぬ、」

「邪魔立て禁止！」

一輝の乗った水を攻撃しようとする崇徳を刃が攻撃し、一輝は離脱に成功する。

「我の邪魔をするか、女子よ。」

「一応、ここを任せられたからね。」

「その責任くらいは果たさないとく。」

「では……いきます！」

「うむ、我を楽しませよ！」

一つ目の対決が今、始まった。

短編 あるお盆の物語 ⑦

さて、第二部隊のところである。

「ふむ・・・分かった。すぐに向かおう。」

慈吾朗は、光也から一輝が受け取ったものと同様の連絡を受け、そう返した。

「さて・・・この辺りにも顕現しているが、どうするか・・・」

『犬神使い』、何の連絡だ？このあたりの妖怪はあらかた消しきったが。」

慈吾朗が悩んでいると、豊がそう声をかけてきた。

もう既に辺りの妖怪は消し去ったため、取り込みもとき、口調も元に戻っている。

「いや、ちよつと色々あつてのう。前はおるか？」

『化け狐』なら、じきに来ると思うが・・・」

「正確には、今すぐに、ですわね。」

前は、豊の背後に現れた。

「急に後ろに立つな、『化け狐』！というか、ついさつきまでかなり遠くにいなかったか!？」

「驚かせるのが目的ですから、お断りします。それに、元から近くにいましたよ。で？慈吾朗は何のようですか？」

前はそう、慈吾朗に問いかけた。

「まあ、かなり真剣なことなんじゃ。どうにも、三体ほど霊獣が顕現したらしい。」

「ありえん。」

豊は、一瞬で慈吾朗の発言を否定した。

「顕現すること自体珍しい霊獣が、そんなに同時に顕現するはずがないだろう。一体どれだけの確立になると思っている。」

「いや、むしろ確立がある以上、可能性があると考えたほうがよい。そこに盆の要素も加われば、十分に考えられることだのう。」

「そんな議論はどうでもいいです。一体、どこに何が顕現したのです？私達はどの霊獣を担当するのです？」

前はそういつて話を区切り、慈吾朗に問いかける。

「そうじやのう・・・場所はここじやが、正体をあつさり教えては何の意味もない・・・では、クイズにでもしようかろう？ヒントは、今ここで起こっている現象じや。」

「ふざけるな。さつさと話せ。『犬神使い』も共に戦うのだろうか？」

「いや、わしは別のものの対処じや。」

「他の霊獣のところには？」

「いや、神の所に。」

瞬間、二人は絶句した。

「では、わしは行く。頑張るんじやぞ。・・・ベル！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!」

慈吾朗はそんな二人に見向きもせず、ベルに一吼えさせ、そのまま間をおかずにベルに乗ってその場を去った。

「・・・まあ、変に考えるのは止めましょう。それより、今ここに顕現している霊獣が何なのか、それを考えるべきです。」

「たしか、今起こっている現象と言っていたな・・・」

豊はそう言いながら、周りを眺める。

すると、妖怪が現れたので、豊は白澤図を向けて蒐集しようと黒い触手を伸ばすが、

「ん？手ごたえがない・・・な。」

「の割には、こちらに向かつて攻撃が来ていますが。」

そして、二人が避けようと離れたその少し横に、その攻撃は当たった。

「見えていた軌道と実際の軌道がずれていますね。」

「まあ、この程度の攻撃であれば問題はないが、さすがに数が来るとつらいものがあるな。」

「ですね・・・念のため、管狐を放っておきましょう。」

前は八体の管狐を放ち、辺りにいる妖怪の殲滅と、自分達に向かつてくる攻撃の撃退を命じた。

「すまん。」

「構いませんよ。それに、あなたの奥義では自らの手で操る必要があ

りますし、今回はむきません。」

二人は現在、協力する体制をとっている。

さすがに二人は席組み。自分達では協力せずに霊獣に勝てないと自覚しているのだ。

「その代わり、あなたには霊獣の正体を探ってもらいます。知識はあなたのほうが勝っているでしょうし。」

「任された。」

二人はそういって、冷静に自分の役目を執行する。

今のところは死の危険があったわけではないので、特に慌てる必要はないと考えているのだ。

「まず、ここで起こっている現象だが・・・恐らく、蜃気楼だろう。」

蜃気楼。

下層大気の著しい温度差によって空気の密度に差が生じ、それによって発生する光の異常屈折現象。

それによって像の位置が前後左右にずれたり、倒立したり、実在しない像が現れたりする。

豊が前の位置を正確に認識できなかったのも、これが原因だ。

「なるほど・・・それで実際の像と見えている像がずれたのですね。」
「だろうな。となると・・・狙う位置はいくらかずれたところ。」

豊が試しに、目に見えている位置から少しずれたところに触手を放つと、今度は成功して白澤図に蒐集される。

「成功だな。これでザコどもの攻撃を受けずにすむ。」

「助かりますね。それが分からずに大物が出ていたら、対処ができなかったかもしれません。」

そう言いながら、二人の視界に顕現した大物の妖怪を殺す。

それさえ分かっただけならば、妖怪の中で大物、程度は片手間で倒せる。

まあ、ぬらりひよんのような例外はいるが。

「この現象自体、こんな場所で起こることではない。となると、『犬神使い』が言っていた現象とは、このことで良いだろう。」

「であれば、この現象に伴って顕現するか、この現象を引き起こす霊

「獣、ということですね？」

「ああ。そこまで絞ることができれば、もう答えは出たようなものだ。」

豊はそういつて、軽くため息をつく。

「確かに霊獣だが、格は低いほうだな…それでも、十分に厄介だが。」

「そうですか。で、その霊獣の名は？」

「大蛤おおはまぐりの霊獣、シンだ。」

「ああ…なら、私に良い手がありますよ？」

「なら、頼んだ。」

「分かりました。管狐！渦巻きなさい！」

前の指示に従い、八匹の管狐が渦を巻き、片っ端から、妖気の宿つたもの、現象を吹き飛ばしていく。

結果、その場にいた妖怪と蜃気楼が吹き飛ばされ、二人の陰陽師と、

一つの巨大な蛤はまぐりが残った。

「さて、あとはこれを破壊すれば終わりか…霊獣にしては、かなりあつけなかつたな。」

「ですね。まあ、あの蜃気楼が厄介なだけの霊獣ですから、あれに対処できる私がいた時点でこうなることは決まりきっていました。」

「それについては、感謝しよう。…さて、さっさと殺すでしょう。」

豊と前の二人はシンに近づき、攻撃を食らわそうとするが…

『我も霊獣の一角…ここで終わってなるものか…！』

「な…!?!」

「何故、貴様がそれを…!?!」

それを当てる前に、蛤から巨大な光が空に上がり…立派な角を持つ、龍が現れた。

短編 あるお盆の物語 ⑧

では、第一部隊と行こう。

「……ん？この感じは……二人とも、あいつらを助けるか見捨てるか、真剣に考えろ。」

白夜は何かを感じ取り、二人にそう問いかける。

「なぜですか？とりあえず合流し、助けられそうなら助ける予定では？」

「そうだったが、まあ予想外の事態というやつだ。」

「その内容次第、早く教えてはくれないか、第一席？」

「あいつらのところに霊獣が出現した。」

白夜が淡々とそう言うと、二人が一瞬固まった。

「見えないか？あの白い衣をまとったやつだ。」

白夜が差す位置はかなり遠いが、呪力によって視力を強化してみている。

「それは見えますが……だとしたらまずいのでは？」

「うむ。早くせねばあの二人は命を落とすぞ。」

三人から視て、二人の人形遣いはかなり格下だ。

どう考えても、霊獣と戦って生き延びることはできないだろう。

「だが、同時にあいつらを助けるだけの余裕があるのか分からない。光也も言っていただろう、最終手段としてならよい、と。」

「あれは、絶対にするな、位でとるべきかと。」

「それに、我らには助ける責任がある。」

白夜の提案は、二人によって却下された。

「ならば、少しばかり急ぐとしようか。多少は痛い目を見なければ、反省はしないだろう。」

「他にも反省させる手段はあると思うのだが……」

「まあ、少ししたらすぐに助けるのであれば、よい経験で済むだろう！」

三人は方針を決め、バカ者二人の元へ向かうのだった。

くいね。今ならば、その命を見逃してやろう。」

そして、そう宣告する。

去らなければ、その命をとる、と。

「……いや、まだだ。卵ごときに霊獣が殺せて、僕たちに殺せない理由はない！」

「ああ。俺達は陰陽師、正しく奥義を継承している！」

だが、二人は慢心からその宣告を聞き入れず、さらに自分達の獲物を呼び出し、一気に決めようとする。

「二人形劇、悲劇！『黄泉祈念』」

そして、二人が出せる最大の一撃を繰り出す。

「ははは……これでいけただろ。」

「ええ……土蜘蛛を屠った一撃、やれないはずがありません。」

二人はへ口へ口になりながらも勝利を確信する。

そして、衝撃によって起こった土煙が晴れると……そこには、無傷の霊獣と粉々になった人形と傀儡の山ができていた。

「そ、そんな……」

「逆に、俺達の人形が……」

「ふむ、それが最大の一撃か。」

霊獣はそう言って、足元の山を蹴り飛ばす。

「なんとも脆弱な、脆い一撃であった。そして、我が与えた機会を捨てたな。」

そして、力が抜けて地面にへたり込んでいる二人へと歩みを進める。

「我に齒向かった度胸だけは認めて、その命を絶つてやろう。」

「いや、悪いがそう言うわけにも行かない。」

「うむ、救える命は救わねばな。」

が、その前に出てきた二人の人間によってその歩みは止められた。一人は両の拳に雷をまとい、一人はその手に刀を持っていた。

そして、二人より送られて出てきた女性が、バカ二人の前に出てくる。

「その二人、これで懲りたか？」

「あ、あんたらは……？」

「ほう・・・貴様たち三人は中々に出来るようだな。それに、一人は靈獣殺しのようだ。」

智也の台詞は靈獣によって遮られ、その靈獣の言葉で、亮は自分達の目の前にいる三人の素性を知る。

「ま、まさか・・・あなたたちは『席組み』の・・・?」

「ああ、そうだ。私は第八席、『式神使い』。そして、あちらの雷を使っているのが、」

「第十席、『雷撃』!」

「そして、俺が第一席、『降神師』だ。」

三人は、靈獣への挨拶もかねてそう言う。

「君達は命令違反をしている身だ、ということは理解しているかね?」
「・・・ああ。もちろんだ。」

「ですが、これも半端物を引き摺り下ろすためで・・・あなたたちも、あの半端者をよくは思っていないでしょう!?!」

鈴女は冷静に説得しようとするが、二人は聞く耳を持たない。

「卵が榮譽ある『席組み』にいるなんて・・・」

「ああ、やはりそう言うことか。うん、そう思うのも無理はない。何せ、私達の中にも最初はそう言うものが多かったからな。」

「だったら、何故追い出そうとしない!そして、貴方達が行動を起こさないから僕たちがこうしているんです!」

まあ、二人がやりたかったことは、自分達でも靈獣が殺せることを証明し、ただ靈獣を殺しただけで『席組み』にいる一輝を引き摺り下ろそう、ということだ。

日本において、『席組み』にはいるということはそれだけ、陰陽師があこがれていることなのだ。

「まあ、それは追い出せる人がいなかったから、だよ。彼は『席組み』にいるに足る存在だ。」

「そんなこと・・・」

「信じられないのなら、自ら確認すればよい。一輝殿からの伝言だが、『一度俺のところに来い。実力の差を思い知らせてやる。』だそうだ。」

鈴女は一輝の口調を真似てそう伝え、立ち上がって靈獣たちのほう

を見る。

「これで私の役目は終わりかな、白夜殿？」

「ああ、助かった。俺や拳ではそう言ったことは出来ないからな。」

「では、第一席はあの二人を！ここはおれたちで十分！」

「無論、そのつもりだ。」

白夜はそう言うと、バカ二人の襟足をつかみ、その場を去った。

「二人だけでよいのか？」

「ええ。彼には、もっと大きな存在を相手してもらいますので。」

「ところで、いい加減名を聞かせてはくれんか？こちらはもう名乗った、名乗るのが礼儀であろう！」

拳がそう言い放つと、霊獣は「確かに、礼儀に欠いておったな。」といい、名乗りを上げた。

「我が名は『ヤタガラス』！日ノ本の先触れが一人よ！」

そして、三つ目の戦いが始まった。

短編 あるお盆の物語 ⑨

「光也からの連絡ではこの辺りなんだけど・・・」

一輝は光也から伝えられた、神が出現した地点についていたが・・・

「どこもかしこも火の海で、何にも見えねえな・・・」

そう、見渡す限りの火で覆われていて、上空からでは何も見えないのだ。

「まあ、光也が張った結界があるし、その下は無事なんだろうけど・・・原因が見つかからないんじゃない、対処のしようもないしな・・・仕方ない。無理矢理引きずり出そう。」

一輝はそう言つて倉庫を開き、その中に詰め込んでおいた大量の水を、砲弾のようにして乱射する。それはもう広範囲に、火の海を余すところなく。

結果、一輝に向かって大量の、炎の砲弾が飛んできた。

「死ぬ！これあたったら間違いなく死ぬ！久しぶりに操れないし！」

で、一輝は必死になってその砲弾を避けて避けて避け続け、避け切れそうになると同時に、

「吼えよ、ベル！」

「ウオオオオオオオオオオオオオン!!!」

その火の玉に犬神の遠吠えが当たり、霧散する。

「悪い慈吾郎。助かった。」

「気にせんでよい。おんしのおかげで向こうさんが起きてくれた様じゃしのう」

慈吾郎が見る先では、広がっていた炎が一点に収縮していく。間違いなく、この炎の原因は一輝たちを認識している。

「あー・・・もしかして、向こうが寝てる間にどうにかするべきだったか?」

「相手が神である以上、それは間違いなく無理だろう。そもそも、どうやってあの炎に攻撃をする気じゃ?」

「確かに、それは無理だな。そして、向こうさんもあれ以上の攻撃は、

この状態じゃできない、と。」

一輝はそう言いながら、倉庫から日本刀、その他形無き物を大量に取り出し、武装する。

「二人で勝手に始めようとするな。普通、こういうときはトップを待つものだろう。」

「お前が遅いのが悪い。」

「じゃのう。遅刻はよくないぞ、白夜。」

「命令違反者を二人ほど、連行していたのだ。仕方ないだろう。」

そして、第一席の白夜もあのバカ二人を光也に引き渡し、この場に到着。霊獣殺し三人が集合した。

「でだ。二人は神相手にどうなると考えている？」

「ワシは、一瞬でも油断したらその場で命が尽きると考えておる。ここまで派手なことが出来る神ならば、かなりの実力者じゃろうしいう。」

「まあ、この炎から大体の名前の予測は立ってるんだけどな。ちなみに、俺はこのメンバーならなんだかんだでどうにかなる気がする。」

実際、先ほど一輝は危険なところを慈吾朗に助けられている。

あのようにお互いがお互いを助け合えば、誰も死なずに倒せる、と言う考えだろう。

「それに、白夜が奥義を使えばかなりいい戦いに持ち込めるのは間違いないしな。」

「ああ、それだがな。まだチャージができていない。」

「オイ待て。そう言うことは前もって準備しておくべきじゃないのか？」

「・・・夜露が、だな・・・」

「相変わらずじゃのう。だが、将来はいい陰陽師になりそうじゃ。」

そんな話をしながらも、三人の目は収縮していく炎から離れない。一切警戒は緩めず、お互いの状態を確認するためにこうして言葉を交わしている。

「・・・幾百年ぶりの顕現だろうか。それに、よく分からぬ結界で覆われておる。」

そして、炎が集まってできた人型の神は、そう言葉を漏らす。

「しかも、我が眠りを妨げるものがあると思えば、霊獣殺しが三人いる。」

そして、一輝たち三人を視界に捕らえ、明らかな戦意を見せる。

「では、我が眠りを妨げた罰と、霊獣殺しという存在。まとめて消させてもらおうか！」

そして、三人を余裕で飲み込めそうなサイズの火の玉を放つ。

が・・・

「雄々しく吼えよ、ベル！」

「ウオオオオオオオオオオオオオン!!!」

今までのものとは比べ物にならないレベルの遠吠により、打ち消される。

「行くぞ一輝！」

「おう！」

そして、その隙に一輝と白夜は神に向かって走り出す。

「ここまででは来させぬぞ！」

「悪いんだけど！」

「そうも行かないのでな！」

神は二人に向かって火の玉を放つが、一輝は様々な無形物を足場に、三次元でのトリッキーな動きによって避け、白夜は妖刀で切り裂き、先に進む。

そして、攻撃圏内まで入り込むと、

「鬼道流剣術、走交叉！」

「走斬！」

二人はその刀で神を斬る。

しかし、相手は神。二人の攻撃では表面を少し切る程度で止まった。

「な、これは・・・」

「その程度か、陰陽師よ！」

白夜が切れなかったことで一瞬固まり、神がその隙に攻撃をしようとするが、

「ぼけつとすんな、白夜！」

一輝がすんでのところで白夜をつかみ、その場から離脱する。

「ああ・・・すまん、助かった。」

「そう思うんなら、もうぼけつとしないでくれ。かなりギリギリのところだったんだからな。」

そう言う一輝の服は若干こげている。一瞬火がついたところに慌てて水をかけたのだ。

「どうじゃ二人とも。勝てそうか？」

「普通に考えたら無理そうだな。今の攻撃が一切効いてなかった。」

「だな。やはり、あれが使えないのでは無理があるか・・・」

白夜が妖刀を見て唇を噛む。

「とはいえ、この場を投げ出すわけにも行かんしな。おそらく、一人でも離れたらその瞬間に負ける。」

「じゃのう。はてさて、どうしたものか。」

「まあ、まず一番の目標は白夜の奥義を使える状態にすることだよな・・・となれば、最善の策は・・・」

一輝はそう言いながら辺りを見回し、最後に神を見る。

「あの炎のせいでこの辺りには妖怪がないし、ひとつしかないよな。」

「じゃのう。となると、作戦も一つのみか。しかたない、光也には少々無茶をしてもらおうとしようかのう」

「すまん・・・俺がしっかりと管理をしていなかったばかりに・・・」

「そう思うなら、白夜は今回、これ以上の失敗禁止な。」

一輝は神相手に少々無茶なことを言いつつ、飛んできた火の玉を避ける。

当然のことだが、相手がこうして話している間に攻撃してこない道理はない。

ここまでの会話も、飛んでくる火の玉を避けながらのものだ。

「やけに身のこなしがよいな・・・人間。貴様らの名を教えよ。」

「面倒だな・・・どこに教える義理がある！」

「神の攻撃をここまでかわし、我に二太刀刻んだものたちだ。気に

なつて当然であろう？」

どこまでも自分中心な考えにうんざりしながら、三人は名乗りを上げると。

「寺西一輝。白澤殺しで、家の名すら失った半端者。」

「犬神慈吾朗。牛頭天王殺しの、現犬神家頭首じゃ。」

「夜刀神白夜。武鳥夷殺しの、現夜刀神家党首。」

そして、三人が名乗ったことで、神も名乗る。

「では我も名乗りを上げようか！我が名はカグツチ！日ノ本の火の神よ！」

こうして四つ目の、最も大きな戦いが、始まった。

短編 あるお盆の物語 ⑩

では、再び第三部隊のところへ戻るとしよう。

「碎け、貫け、叩き潰せ！」

「剣よ、病魔の化身を斬り捨てよ！」

「あたりはせぬよ、その程度！」

殺女が金剛力の拳を振るい、刃が日本刀二振りを振るうも、崇徳は軽々とかわし、自らの刀で防ぐ。

そして、その隙を狙って美羽が猫操りをしようとするが、さすがに崇徳には効かない。

「やっぱり……いつも通りじゃ駄目だよね……」

「去年私達の攻撃が効いたのも、一輝さんたちが弱らせてくれたからですし……」

「だが、泣き言を言っても始まらない。今ここには、私達しかいないのだからな。」

「話している暇などないぞ！」

崇徳はそう言って病魔を広げていく。

が、美羽がそれを操り霧散させるので、その攻撃も当たらない。

「ただ……向こうのあれも、私なら防げるみたいですし……」

「どうにかして一太刀浴びせる事ができれば、勝機はありそうだな。」

「それが一番難しいんだけど、っと！」

そして、その間にも崇徳は攻撃を重ねる。

刀を振るい、けりを放ち、拳を振るうが、全て刀か金剛力によって防ぐ。

「ああ、もう！我らが神たる金剛力士よ！今一時、その力を分け与えたまえ！」

そして、そんな状況に業を煮やした殺女は、すぐに放てる中では最大の一撃を放ち、崇徳にあてる。

崇徳はそのまま吹っ飛び、結界にぶち当たる。

「よっしーこのまま、」

「今のはよい一撃であった！」

それを隙と見た殺女は近づこうとするが、崇徳はたいしたダメージを負っておらず、返り討ちにあう。

「きゃあー！」

「すまん、殺女！」

「人を踏み台にしないでっ！」

「刀よ、切り裂け！」

そして、吹っ飛んでいく殺女を使って崇徳の元までとんだ刃は、天之尾羽張を崇徳に振るい、そのまま連続できり付ける。

「その刀、神すらを殺すものか。」

「そうだ！これならば貴様も、」

「だが、当たらなければ問題はあまい！」

「な・・・！」

が、神すらを殺すその刃は一切崇徳に届いておらず、逆に刃が一太刀浴びてしまう。

「刃さん！大丈夫ですか!？」

「美羽が声を張り上げるとは、珍しいものだな。なに、後ろに飛んだから傷は深くはない。それより、何故あいつは傷を負っていない・・・？」

美羽はそうは言っても傷の深い刃の傷に治癒札を貼り付け、殺女と打ち合っている崇徳を見ながら説明をする。

「崇徳さんは・・・自らの体に病魔を貼り付けて、盾のようにしていました。」

「無限に出てくる盾か・・・当たらないわけだよ。」

治癒札による応急処置が済むと、刃は両手に三振りずつ刀を握り、立ち上がる。

「太刀数を増やしたら、どうにかなると思うか？」

「多分・・・無理、です。」

「そうだろうな・・・まあ、手がない以上はそうするしかない訳だが!」「はいー！」

美羽が猫操りで操って刃を空に投げ、刃は近くにいる崇徳を斬り、出来た隙を突いて殺女が踵落として地に叩き落とす。

その瞬間に美羽が簡易結界を張り、崇徳が空に逃げるのを邪魔する。

「その程度の結界では、」

「逃げる暇を与えなければよい！」

「だね！」

当然、崇徳は結界を破壊して空に向かおうとするが、殺女と刃が絶え間なく攻撃を放つことでそれを妨害する。

「ええい、うつとうしい！」

崇徳は刃が持つ刀を全て蹴り飛ばし、刃を別方向に投げ飛ばす。

「貴様も、何!?!」

が、刀とは逆方向に飛ばしたはずの刃が刀を持って背後から切りかかるので、崇徳は慌てて避ける。

「上手く隙を突いたと思ったんだがな！」

「確かに、危ないところであった!褒めてつかわす!!」

「何も嬉しくはない！」

そして、崇徳の正面から切りかかっていた刃は一瞬で姿を消し、崇徳の背後から切りかかる。

「二度も同じ手は効かぬぞ！」

崇徳はそれに気付き、後ろを振り向くが、

「背後ががら空きだよ！」

「な、」

「そして、正面もな！」

「おまけで・・・上も、です！」

その瞬間に殺女に背中を殴られ、気を取られた一瞬の間に刃が袈裟切りをし、美羽の猫操りで地面に落ちたままの五本の刀が串刺しにする。

「ふう・・・私の意図に気付いてくれたこと、感謝する。」

「私は、体が動くままに任せただけだね。みーちゃんは？」

「私は、刃さんが一振りしか使わなかったのもしかしたらと思いまして・・・」

さて、一つ種明かしをしよう。

まず、今回の作戦の目的は予定通りに成功している。

では、刃はどのようにして自分とは逆方向に飛ばされた刀を持つていたのか、一瞬での移動を可能にしたのか、という疑問が残る。

それは、刃が瞬間移動をしたり、瞬間移動をさせたりしたからだ。

刃には、自分が刀の元に飛ぶ奥義と、刀を自分の元に飛ばす能力がある。

一度目には自分の元々に刀を飛ばすことで奇襲をし、二度目には袖口に隠していた残りの二振りの片方を崇徳の背後に落とすことで崇徳の背後に移動し、連携攻撃へと移ったのだ。

「さて、これで倒せていけば万事解決なんだが、」

「・・・もう、手加減はせぬぞー！」

「そうも行かないみたいだね。」

「どうしましょう・・・？」

「そもそもー！」

三人が悩んでいると、本格的にキレたらしい崇徳は、口調を荒げ、「あのような貧相な男に仕えているものどもが、我に傷をつけるなどあつてはならぬことだ！人を見る目もない、ガキどもになぞー！」

「「・・・」」

そして、その一言が種火となつてしまった。

火薬を爆発させる、種火に。

「我らが神たる仁王よ、今、わが身にその力の全てを分け与えたまえ。わが身は砕けることなく、その全てを受け止めん。」

「刀よ、今我が名の下に集い、一振りの刀とならん。八つの頭は集い、新なる九の頭となる。」

まず、二人が危険なために使わないうた奥義を使う。

結果として、殺女はその身に仁王と同じだけの力を宿し、刃は神をも殺す八つの刀を統合してより強力な、凶悪な刀を作り出す。

「人の子が、今更何をしようと、」

「うっさい。」

そして、一瞬で崇徳の正面へと移動した殺女が本気でその顔を殴り、結界へと叩きつける。

そこに打ち付けられた崇徳の顔は、もはや原形をとどめていないほどに、たった一撃でなっていた。

「今のは、一体……」

「死ね、このクズが。」

そして、立ち上がった崇徳に刃が二太刀を浴びせ、両腕を、病魔の化身ごと切断する。

「が……我が腕が、切り落とされるだど!?!」

「我らが一族の祖たる猫多羅天女よ。我らが血の一部開放を、我は望む。我は一時人の身を捨て、化生となる。我が願いを聞き入れ、我が血を開放せん。」

そして、親指の皮膚を噛み千切り血を流した美羽は、血で両腕に一筋の線を入れながらそう唱え、先祖の血を開放する。

そうして十の尾を持つ巨大な化け猫となった美羽は、崇徳を殴り、殴り、殴り、止めを刺した。

今回の教訓、女性は怒らせると怖いです。

こうして、一つ目の戦いは、断末魔の声を上げることすらできずに終わった。

短編 あるお盆の物語 ⑪

続いて、第二部隊のところである。

「豊・・・貴方は何故龍が現れたのか分かるのですか!？」

「相手が霊獣だから確信はできんがな! 少なくとも、アレはシンの力ではない!」

天に上がった龍が完全に顕現するまでの時間を使い、二人は情報の交換をする。

龍が顕現しようとしている余波で風が強いため、声を張り上げながらだ。

「では、何の力だというのですか!？」

「恐らく、大元は法螺貝の怪異、出世螺しゅっせぼらの法螺抜けだ!」

出世螺とは、山で三千年、里で三千年、海に三千年住ごした法螺貝が龍となる怪異現象だ。

そして、その龍が天に上がることを法螺抜けという。

似た現象としては、西遊記の蛟魔王が有名な海で千年、山で千年を過ごした蛇が龍となる、海千山千がある。

「ですが、あれはどう見ても法螺貝の要素はありません!」

「それ以前に、俺たちの間での常識があるだろう! 妖怪は、似た性質さえあれば問題なくそれをやる! それが霊獣にも適応されるかは知らんがな!」

そして、二人の会話が終わるとほぼ同時に、龍となったシンが顕現する。

『これで我にも戦う力が備わった! さあ、武勇を決しようぞ!』

「質問ですが、豊は何か、龍に勝てるだけの力がありますか?」

「微妙なところだな。何より、アレがどれだけの力を持っているかによる。」

二人はそう言いつつも自分の獲物を構え、何か来ても対処できるようにする。

すると、龍の口から蜃気楼が吐き出される。

「やはり、シンとしての力は残っているか。『化け狐』、頼んでいいか

？」

「もちろんです。渦巻きなさい、管狐！」

前は最初と同じように管狐を使って蜃気楼を吹き飛ばすが、その隙を突いて龍の口から激しく渦を巻く水流が吐き出され、二人を襲う。

「く……豊！」

「力技は苦手なのだが……蒐集されし物の怪どもよ！我らを守る防壁となれ！」

そして、二人がミキサーにかけられる前に豊が防壁を張り、どうにか耐え抜く。

現在は、防戦一方となってしまう二人だ。

「さて……まず一つ、大きな問題があったな。あの高さに届く攻撃がない。」

「そうでしたわね……一輝ならば飛べますし、鈴女ならばそれこそ、式神がいますが……」

「俺たちには、それが無い。が……」

「何とかするしかありませんわね。仕方ない、私は切り札を使います。」

「そうだな、頼んだ。」

会話が終わると、前は管狐を全員呼び戻し、小刀の状態に戻し、狐の面を被る。

「さあ、わが身に流れる血よ、今一時わが身を九尾としなさい！」

そして、前の体が狐のものとなり、九つの小刀はそれぞれが尾となる。

そこにいたのは、全長十メートルほどの九尾の狐だった。

「これで、強力な狐火が放てますし、多少は空を駆けることもできます。少しは攻撃ができるでしょう。豊はどうにかして倒せるだけの手段を準備してください。」

「分かった。何とかして手段を探してみよう。」

前は返事を聞きすらすらに空を駆け、龍へと迫る。

「さあ、貴方の相手は私です、シン！」

『よかろうー！いざ参ろうー！』

龍は火の玉を、前は青い火の玉をぶつけ合い、体当たりをし、前が尾で突き刺せば龍は牙で噛み付き、という怪獣バトルが繰り広げられる。

『その狐の力、稲荷のものだな！あやつ、人と交わっておったか！』
「私の家の祖先と交わりました。といっても、子を残してからはすぐに神域に戻りましたが。」

『あやつも物好きよな！人なんぞと交わるとは！』
「他にも、猫多羅天女が人と交わったそうですよ。私には関係ありませんが！」

なお、他にも人と交わった霊獣の例は存在し、現在進行形で人と共に暮らす霊獣も、日本に一体だけ存在する。

「さて・・・後どれくらい時間を稼げばよいのでしょうか・・・」

|||||

「さて、任されたものの・・・龍ほどの存在をどう対処するか・・・」

豊は白澤図のページをめくりながら、そう漏らした。

呑気なように見えるが、白澤図とそこに蒐集されている妖怪こそが豊の武器。それを確認するのは必要なことなのだ。

それに、今シンの興味は前にむいているので、豊にとっての脅威は一切いない。

強いて言えばザコの妖怪が大量にいるが、そいつらは一定範囲内に近づくと白澤図に蒐集されていき、近づくとすらできず、ひたすらに武器を与えてしまっている。

「少なくとも、この中には対処出来そうな妖怪はいないな。かといって、すぐに手に入るようなザコでは意味がない。」

そう言いながらも蒐集範囲を広げていく辺り、諦めが悪い。

「次に奥義だが・・・俺が編み出したものも、陸上での戦いを想定したものだ。よって、これもまた対象外。遠距離に向けて放つことが出来る唯一の攻撃は蒐集だが、龍相手に通じるはずもないから対象外・・・万策尽きたな。」

本気で何も無いようで、豊は白澤図を閉じ、ポケットからスマートフォンを取り出し、いじりだす。

少しいじると、画面にはある古文書、鬼道の奥義にかかわる古文書のコピーが写される。

「だとすれば、何か新しい手段を生み出すしかないな。なにか・・・興味があるものは多いが、すぐに使えるものではないな。また『型破り』に聞くとしよう。」

こんな時だというのに好奇心のことを優先する。

まあ、新しく作り出した奥義は全て好奇心からのものなので、好奇心を出すのは間違っていないだろう。

「・・・お、これならいけそうだな。何故今まで作っていないかったのか・・・ああ、俺には合わない判断したからか。」

そう言いながらも、えり好みしている場合ではないと判断し、奥義の基盤をくみ上げていく。

「軸にする武器がないが・・・それについてはこいつで代用するとして・・・なら、いつそうアレンジしてしまえば・・・」

そうして基盤をくみ上げていく豊の顔は、不気味な笑みを浮かべていく。

近くに人がいたなら、通報されているレベルだ。

「よし、出来た。ぶつつけ本番になるが、それもまた一興だな。」

そう言って、豊は言霊を唱える。

「さあ、蒐集されし全ての妖よ。妖を蒐集せし目録よ。汝らは、今姿を変える。」

豊が手に持っている白澤図は姿を変えていき、その中身は墨の姿で豊の周りを回る。

「我はここに武具を望む。敵を穿ち、妖の力を振るい、その身を蒐集する武具を望む。」

そして、白澤図は槍に姿を変え、墨はその槍に吸い込まれていく。

「さあ、大いなる武をここに表せ！」

そして、豊の手には白黒の槍が握られていた。

「やはり・・・このような野蛮なものは性に合わんな。まあ、必要であ

る以上は仕方ない、と割り切るとしよう。」

豊はそう言いながら、片手で槍を構え、支えきれずに地面に落とす。

「……中身を使ってブーストすれば、いけるか。」

再び槍を拾い、今度は槍の石突きから墨を噴出することで問題なく槍を空に向けて発射し、龍にあてる。

『ぬ……これは……』

「ほう……やりましたね、豊。」

龍は体に刺さっている槍を興味深そうに見て、前は豊の元に降りてくる。

「後少しすればシンは問題なく蒐集される。」

「のようですわね。見たところ、無理矢理に法螺抜けをした影響で存在は弱まっているようですし。」

『ははは……よき戦いであった！礼を言うぞ、陰陽師たちよ！』

そして、シンは完全に槍に吸い込まれ、本の姿に戻った白澤図が豊の手に戻ってくる。

一番後ろのページを開くと、そこには蜃気楼に包まれる大蛤、シンが描かれていた。

「蒐集完了。これで、万事解決だな。」

「此処は、と付きますがね。」

こうして、二つ目の戦いも、終了した。

短編 あるお盆の物語 ⑫

では、最後の霊獣。第一部隊のところである。

「で、どうしますか？個人的には、様々な形で我ら人間の先祖を助けたヤタガラスを退治することに少々ためらいがあるのですが。」

「とはいってもなあ。」

二人はそんな会話をしているが、その間にもヤタガラスは攻撃をしてきており、二人は全力で避けている。

「コレだけ攻撃をされているのでは、そんなことも言っておれんぞ?」「ですよね……」

「まあ、一輝も人々に知識を与えてきた白澤を殺しておるのだし、手を出してくるのであれば仕方なからう?」

「皆がハク殿のような方であればよいのですが……そうも行かないですわね。」

鈴女はそう言いながら、式神を大量に開放する。

「ひとまず、私がアレの気を引きますので、拳殿はその隙に。」

「うむ、了解した!」

二人は作戦通り、鈴女の式神でヤタガラスを牽制し、拳がその隙に雷を纏った拳を振るう。

だが、手を三本持つヤタガラスは、器用にその攻撃をいなし、空から悠々と攻撃を繰り返す。

「槌壁!我らを守れ!」

そして、その攻撃は鈴女の式神によって防がれる。

普通ならば式神程度で霊獣の攻撃を防ぐことは出来ないのだが、星御門の式神は全て妖怪が元となっている。

ただ防ぐ、ということに特化していれば防ぐことが出来るのだ。

「さて……縛れ、紅緋!」

「効かぬよ、そんなもの!」

が、攻撃となるとそうは行かない。

今現在、ヤタガラスに対してダメージを与えるだけの攻撃は出来ないのだ。

「貫け、雌黄！」

「雷よ、われに大いなる加護を！」

「効かぬといっておるだろう！」

二人はただ貫通力に長けた攻撃を放つが、ヤタガラスは当然のようにそれを弾く。

が、二人の狙いは、完遂される。

「行ってください、拳殿！」

「うむ、任された！」

「ほう、我と同じ場に立つか！」

拳はその間に雷に乗って飛び、さらに自分の体の一部を雷にする。

そして、拳はそのまま、二人の攻撃を弾くことで二本の腕がふさがっているヤタガラスの元まで飛び、

「雷豪一拳！」

思いつきり、防ぐのに使われた三本目の腕ごと殴り飛ばす。

ヤタガラスは勢いよく地面にぶつかり、土煙を上げる。

「ふう・・・追撃はやめたほうがいいか？」

「でしょうね。変に追いかけても・・・」

「ハハハハハハ！我に土を着けるか！よい、よいぞ陰陽師よ！」

強い風が・・・ヤタガラスの羽ばたきによる強い風が吹き、土煙が晴れると・・・そこには、高笑いを上げるヤタガラスが立っていた。

そして、その三つの手にはそれぞれ曲刀が握られていた。

「その力に敬意を記し、我も武をとろう！これを人相手に抜いたのは初めてだ、誇りに思うがよい！」

「それはありがたいですね。ただ、現状だけを見れば迷惑だが。」

「俺は嬉しいぞ！どうせやるなら全力でなければな！」

そう言いながらも、鈴女は式神を放ち、拳は己が身で突っ込む。

が、式神は一瞬で細切れになり、拳の一撃も軽く防がれる。

拳の拳が切れなかったのも、ただの偶然だ。少しでもお互いの攻撃の威力、纏った雷の量が違えば、拳のひじから先はなくなっていた。

「わが身よ、解ほけよ！」

「む・・・面妖な術を・・・」

拳は一瞬のうちに危険だと判断し、自分の体を完全に雷に解いて、鈴女のいるところまで後退する。

「危ない危ない・・・本当に、危ない・・・」

「ええ、先走りすぎましたね。さすがに、あの剣を甘く見すぎました。」

「うむ・・・鈴女は、まだ何か手が？」

「一応、切り札は残してあります。この状況で使っても無駄な気がしますし。」

「では、それはギリギリまで温存すべきだろうな・・・隙は俺が作ろう。」

拳はそう言いながら自分の身に雷を落とし・・・蓄電量を上げていく。

そして、雷のクラスも上げていき・・・神鳴りの領域まで、上昇させる。

「我らが神よ、その象徴たる力の一端をわが身に与えよ。雷ではなく神鳴り、御身の音そのものを、我が力とせん！」

そうして、拳は色のない雷を身にまとい、ヤタガラスを睨みつける。

「そこまでの神鳴りをつかえるとは、見事也！」

「ただ使うだけではなく、もはや我が手足、その刀にも負けませぬぞ!!」

拳はそう言いながら神鳴りを放ち、同時にそれを纏った体で突っ込んでいく。

そして・・・

「雷閃槌！」

「ぬお!!」

ついに、三本の刀を溶かし、ヤタガラスを地面に叩き落した。

さらに、溶けた刀によってその場に軽く固定されている。

「まさか、我が刀によって動きを阻害されようとは・・・」

「そして、その命を終わらせることにも?がります。」

そう言いながら、鈴女は身中の式神を開放する。

「来い、消炭!我が敵を喰らい尽くせ!」

「ぬ・・・龍、だど!!」

そう・・・鈴女の切り札の式神は、龍を従わせて式神にしたもの。

あくまでも倒したわけではないため、霊獣殺しに名を連ねてはいないが、これが、鈴女を席組みの一員たらしめている一因だ。

「……鳥だ。」

「……は？」

「美味そうな、鳥だ。」

「ま、まさか……」

「……いただきます。」

「ぎゃあああああああああー！」

そして、動けなくなったヤタガラスは、消炭によって美味しくいただかれた。

こうして、三つ目の戦いは終了した。

短編 あるお盆の物語 ⑬

では、一番派手な戦い、一輝たちのところに戻ろう。

そこでは、地上から巨大な火の散弾が絶え間なく、四方八方に放たれ続け、三人の人間がそれを避け、カグツチに向けてお清めボイスの大砲、形なき様々なもの、斬激が放たれ続けるといふ、カメラが有ったら映画のバトルシーンも真っ青な映像が取れる状況になっていた。

「何なんだこの状況は!?! 最初からクライマックスか!?!」

「神との戦いでこの程度、なんでもないだろう! 白澤と戦ったときのことを思い出せ!」

「一方的に惨殺したよ! こんな派手にはなつてねえ!」

「楽しくおしやべりをしているとは、余裕だな人間!」

そして、大声でそう言いあっている二人に、カグツチが飛び交っているものより一回り大きな火の玉を放つが、

「吼えよ、ベル!」

「ウオオオオオオオオオオオオオン!!!」

それは今までと同じように、ベルの遠吠えによってかき消された。

カグツチ自身は音を超える速さで動けるが、火の玉はそうではない。い。

一輝たちにぶつかるよりも早く、火の玉にぶつかり、消し去つてくれるため、何度も二人のみを救っている。

「悪い慈吾朗、助かった! ついでに、エアボム!」

一輝はお礼を言いながら、近くの空気を体積が一万分の一になるくらいに圧縮し、カグツチに投げる。

「む・・・なにを、」

「開放!」

「ぬうううううう!」

もちろん、空気なのでカグツチには見え、開放した際の衝撃でカグツチは軽く飛ばされた。

「あああ・・・あれ、結構疲れるんだよな。」

「かなり便利な技だな。いざとなつたらまた、使つてくれないか?」

「白夜、オマエにはちゃんと俺の能力の代償についていったよな？かなりの負担なんだぞ、あれ！」

「まあまあ、本当にいざと言うときじゃよ。二度も通じるとは思えんが、それゆえの作戦はある。」

三人はその隙に集合し、作戦会議を始める。

「二人に聞くけど、このまま続けて、勝てると思う？」

「無理じゃろうな。」

「無理だ。」

一輝の問いに、二人は即答した。

「なら、打開策として思いつくのは？」

「ワシは、白夜の奥義じゃのう。一輝が何か隠しているのなら、それもよいと思うが。」

「俺は何も隠してないよ。まだ習得できる見込みすらない奥義なら有るけど。」

「そんなものを頼ってなんになる。」

「白夜にはつきり言われているが、一輝に気にする様子は一切見られない。」

「このころの一輝は、奥義を継ぐ気など一切なかったので当然だが。」

「じゃあ、作戦として使うのは白夜の奥義で。慈吾朗もいいよな？」

「うむ、構わんぞ。ワシは、後の者の為にも出来る限り手は出さんかう。」

ちなみに、四行前くらいからカグツチは戻ってきて攻撃を続けているため、三人はあまりはなれずに避けている最中だ。

「面白い業を使うな、人間！楽しくなってきたぞ！」

「そうかい。なら、これからもっと楽しませてやるよ！」

一輝はそう言いながら、日本刀を鞘に納め、左手で鞘を、右手で柄を持つ。

「ほう、居合いか？」

「残念ながら、ハズレだ！」

そして、一輝はそのまま、カグツチに向かって走り出した。

「ただ走り込むだけとは、無謀であるぞ！」

「避けるくらいはするよ！」

一輝はそう言つて、カグツチが放つてくる火の槍を避けながら、それでも一切速度を緩めずに走り進む。

左右に動くことで火の槍を避けるためすれすれのところを通ったり、肩に当たったりするが、一輝は一切、体の軸はぶれない。

「ちよこまかと・・・だが、これでしまいだ！」

が、近づけば近づくほど避けるのは難しくなるわけで・・・カグツチの放った槍は、正確に、一輝の心臓を貫いた。

「一輝！」

「ははは！これで一人、」

「心頭滅却、常住戦陣。」

が、一輝の足は、止まらない。

「な、何故止まらぬ！なぜ血が流れぬ！」

「鬼道流剣術、奔り。六の型！」

そして、一輝はカグツチのすぐ目の前まで来て、本気で踏み込み、姿が消える。

「あやつ、いったいどこに・・・」

カグツチは一輝の姿を探す。そして、すぐ後ろで、音がした。

チン、と、刀を鞘に納める音と、

「後斬り、五連！」

という、技の名を言う一輝の声。

「な・・・貴様、いつの間に・・・いや、それより何故、」

動ける、と言うカグツチの言葉は、自分の真横でなった音によって、止められた。

別に、大きな音がしたわけではない。ただ、ザン。ザザザン！と言う斬激の音と、ポトツ、と言う、何かが落ちた・・・カグツチの腕が落ちた音だ。

「わ、我が腕が、切り落とされただど!？」

「どうだ、予想外の出来事は楽しめたか？」

驚愕に染まるカグツチに、一輝は冷静にそう返した。

一輝の表情には、一切の苦痛の色がない。

「オイ一輝！オマエ、その傷で・・・」

「そんなこと言ってる場合か、白夜！おれがこの程度の傷でどうにかなるわけねえだろ！それより、早く喰わせろ！」

一輝が白夜の台詞をさえぎって叫びながら、風を使いカグツチの腕を白夜のところへ飛ばすと、

「クツ・・・喰らえ。」

白夜も状況を思い出し、妖刀にカグツチの腕を喰わせる。

そして、カグツチの腕が贅として足りないわけがなく、妖刀は輝きだし、チャージが完了したことを告げる。

そして、白夜は言霊を唱える。

「日ノ本の神々よ、我が声にくたえてくれ。」

それは、日本では鬼道の奥義の次に珍しいことが出来る奥義だ。

「我が刀に宿りしは物の怪、神の軀。我が献上する贅である。」

それは、人としての身分を、一時的に捨てるものだ。

「我は、これの対価として力を望む。汝らの力を、その一部を、和が手にせんと欲す。」

そして、言霊は完成する。

「我が声を聞き届けし神よ、願わくば、我に大いなる力を！」

白夜の言霊が終わると、天から神々しい光が降りてきた。

その神々しい光り・・・日本神話の主神、アマテラスオオミノカミ

の一部は、白夜の体に入り込み、神々の力の一部を与えた。

これが、白夜の受け継いだ奥義。

神の力の一端を、贅を捧げることによつて自分のみに降ろし、使役する奥義だ。

もちろん、神の力を借りるのだから相当な量の贅が必要になるし、どの神が力を貸してくれるかは、その時しだいと言う、運の要素が大きい面もある、不安定な奥義だ。

だが、使いこなせれば、神の力なのだからかなりのことが出来る。

「太陽よ、我が敵に裁きの一撃を！」

「ぬ、我に火をぶつけるか！我が姉弟、アマテラスの力で！」

そして、白夜は太陽神アマテラスの力で太陽の火を放ち、カグツチ

大したことはしていない。ただ、犬神を自分の身に憑けたただけだ。
「では、行くとしようか!」

「おう!」

「OK!」

三人はそれを合図に跳び、カグツチを重心とする正三角形の頂点に立つ。

「む、散ったか・・・」

そして、急に散ったことで一瞬迷っている隙に、白夜は刀を鞘に納め居合いの型を取り、慈吾朗は右腕に呪力を込めてそこだけが人狼のような姿になり、一輝は自分の周りに空気を集めて荒ぶらせ、刃のドームを構成する。

「だが、全員を撃てばよいだけのこと!」

そして、カグツチが強力な一撃を準備しようとする間に、三人は行動に移す。

「居合い、太陽斬刃!」

「犬神憑き、部分開放。犬鎌!」

「エアブースト、荒れ狂い!」

ほぼ同時に、だが微妙にタイミングをずらし、白夜、慈吾朗、一輝の順にカグツチを斬る。

「まさか、我が斬られる、だと・・・!?」

「俺がああの程度で腕を落とせたんだから、全力を出せばいける。」

「ははは・・・確かに、言われてみればそうであるな。」

一輝がはつきりと言うと、カグツチはいつそすつきりしたようで、表情から驚愕が消える。

「だが、我は再び光臨する!その時また、合い間見えようぞ!」

「いや、貴様はもう二度と、復活せん。」

「じやのう。今から、封印するのじやから。」

そして、一輝が止めを刺したことで具体的に魂が現れると、三人は片膝をつき、一輝が渡したものの・・・封印用の瓶を地面に置き、片手で印を斬る。

「封印陣、三魂分離の陣!」

同時にそう言うと、魂が三等分され、瓶に入り、三人が同時に蓋をして封印の札を貼る。

「ふう……終わった〜……」

「じゃのう。そして、治療士も来たようじゃ。」

慈吾朗がそう言いながら遠くを見ると、羽を生やして、一輝のところに一直線に飛んでくる人影が見えた。

見た目からすると、一輝と同じ年くらいの少女のようだ。

「え、あ、と、止まらないです〜!」

「……なにやってんだ、オマエ……」

そして、一切減速せずに飛んで来るそれを、一輝は空気をクツションにして受け止めた。

「ありがとうございます、一輝。」

「あんなことがあったのになんともない辺り、流石は靈獣だよな……」

一輝はそう言いながら、その少女を地面に下ろす。

「で、怪我をした人はいるんです?ぱっと見はいないみたいですが。」

「いや、一輝が死の危険があるレベルで重傷だ。」

「はいです?」

少女は首をかしげながら、一輝を見る。

「こんなぴんぴんしてるのにです?」

「ああ。見るか?」

「キヤツ!」

一輝がTシャツをめくって見せると、少女は手で顔を覆い、それでも指の隙間から見て、

「って、何これです!?!心臓のあるところがくりぬかれてるです!?!」

「ああ。カグツチにやられた。」

「ほえ〜……なのに血液の循環が問題なく起こってるあたり、やっぱり一輝です〜。」

「どういう意味だ。ってか、早く治してくれ、ビヤク。」

「あ、了解です!」

ハク……てはくながり 鶴鶴はそう言って、一輝の傷の治療を始めた。

そうして、一輝の傷を治し、四つ目の戦いは終了した。

短編 あるお盆の物語 ⑭

「えくでは。今回のお盆大騒動は今までにない大騒動となりましたが、誰も重傷を負うことなく、」

「俺、心臓がなくなっただけだ。」

「・・・誰も欠けることなく終わることが出来ました。では、乾杯！」
途中一輝による無駄口が入り、光也は無理矢理にめて打ち上げを開始した。

「それより一輝、心臓がなくなっただとはどういう意味だ？」

「それ、私も気になったんだよね。どうということかな？」

「教えて、ください・・・」

席組みは班毎にテーブルに着き、その他の今回働いたものは大きなテーブルについているので、一輝は先ほどもらした件について質問されている。

「あー・・・口を滑らすんじゃないかった・・・」

「それ、私も聞きたかったです。治しはしたけど、どうやったらあんな傷になるんです？」

「そして、ビヤクはどうしてここにいる・・・」

「あ、光也にこちらに来ていいといわれたです。いいです？」

「一輝に問い詰めるのを手伝うならば。」

「分かったです。」

「オイ、何故敵が増える？つてか、仲いいな。」

「どんどん一輝に不利な状況が出来上がっていく。」

そして、さすがにしばらくはつくくれるのは無理だと判断し、一輝は簡単に、腕を落とすために仕方なくくらい、それからは能力で血液循環をしていたことを話した。

「二「相変わらず無茶を・・・」三」

「異口同音に言われるほどしたか、俺!？」

そのタイミングで料理も届いたので、五人はそれを食べ始める。

「私が知ってる中で一番のは、ウチのお婆ちゃんに真正面から意見言ったことかな。」

土御門の家はかなり強い立場にあり、さらに言えば殺女の祖母は引退さえしていなければ席組みの第四席には納まるような人だ。

もちろん、一輝がした意見とは、その祖母に対して反発するようなことである。

「私を知っているものだど・・・席組み七人に対して武器もなし、能力もなしで戦ったことだ。」

これは、一輝が席組みに入った際に行った力試しのことだ。

一輝はその際、ただひたすらに体術、剣術だけで今の第四席く第十席に圧勝している。

「私は・・・そもそも白澤に喧嘩を売ったことが・・・」

これはもちろん、一輝が名を失った際のことだ。

「私は、私をこうして普通に生活できるようにしましたことです。」

前回さらつと出したが、ビヤクの本質は鶴にはくなぶり鴿という、日本で唯一人間と共に生活している霊獣である。

そして、そんなビヤクに一般常識を教え、監視期間中、そして今担当につき、一度暴走したときには殺さずに正気に戻す、などの全てを行っただのが一輝だ。

「・・・確かに、そういわれてみれば少しは無茶をした気も・・・」

「二「少しじゃない。」」です。」

「？」

一輝は本気で首をかしげながら、箸を進めていく。

現在、十皿制覇だ。

「まあまあ、そんな話は置いておきましょうよ。せっかくの打ち上げですから。あ、このジュース、席組みのテーブルに配っているので、皆さんどうぞ。」

そして、五人のいるテーブルの雰囲気は瓶を四本持ってきた光也によつて打ち壊された。

「あー・・・俺はドリンクバーでいいや。俺の分は飲んでいいぞ、ビヤク。」

「はいです。ありがとうございます。」

「口調は相変わらず直らないねえ・・・ま、直す必要はないと思うけど。」

一輝はそう言つて、ドリンクバーをとりに行つた。
そして、瓶を開けた際に漂つた匂いに気づくものは、誰もいなかった……

|||||

「さて、何を飲もうか……炭酸で腹膨らませるのもなんだし、オレンジジュースでいいか。」

一輝がそう言いながらジュースを汲んでいると、豊が通りすがり、一輝に話しかけた。

「オイ『型破り』。少しいいか?」

「内容次第かな。まあ、オマエから話しかけてきたなら内容は絞られるけど。」

一輝はそう言いながらも、ドリンクが汲まれていくグラスから目を逸らさない。

「では、内容だが……『神成り』、と言う奥義についてだ。」

「……また、答えるのが難しそうなのに目をつけたな……」

一輝はゲンナリ気味になりながらも、断らない。

「何か質問があるのか?それとも、全体的な説明?」

「そうだな……全体的な説明の後に、質問をさせてもらおう。」

「欲張りめ……」

一輝は今汲まれた物を一気に飲み干し、次はアップルジュースを汲み始める。

「まあ、特に面倒な説明はないんだけどね。本当に単純に説明すれば、名前の通り、神になる奥義。」

「無論、それくらいは分かっている。俺が聞きたいのはそんなことではない。」

「だろうな。まず大前提として、檻の中に神が封印されている必要がある、その封印されている神になる奥義。」

一輝は一度呼吸を置き、説明を続ける。

「この奥義を習得する方法は二つ。まず一つ目に、奥義覚醒の際にぬ

らりひよんから与えられる。もちろん、ぬらりひよんの気分ですら影響されるから、この方法で習得したのは歴代でもたったの四人。」

「では、二つ目のやり方は確実なものなのか？」

「ああ。成功すれば、手に入れることが出来る方法だ。まあ、難易度が半端ないけど。」

一輝の口調は、くだらないことを話す口ぶりだ。

「その分、複雑なことはないんだけど。なんせ・・・神を単独撃破し、封印するだから。」

「・・・は!？」

豊は心底驚いた、と言うリアクションをし、一輝はそれを満足そうに見る。

「ちなみに、この方法で習得したのはこれまでに一人もいない。強いて言えばこの奥義を編み出した七代目がそれに近いけど。」

「なら、何故その方法があると分かる？」

「七代目に、ぬらりひよんがそう教えたらしい。」

一輝は、「ついでに言うと、」と説明を続ける。

「神を殺した場合にはその瞬間に神成りが発動し、その余波により全ての奥義を習得できたりもするらしい。」

「・・・ちなみに、それに理由はあるのか？」

「神成りが発動するのは、檻を神を封印できるだけの状態にするため。全奥義を習得出来るのは、神様相手に通用するほど奥義の封印が強くないらしい。」

「封印製なのか・・・」

「ああ。だから鬼道の一族は、奥義を与えられるってよりは、奥義の封印を解いてもらう、ってのが正しいらしい。」

「そうか・・・もういい。答えの全部を聞いてもつまらないしな。」

「じゃ、俺はもう行くな。」

一輝はそう言って、自分達のテーブルに戻っていった。

途中から嫌な雰囲気を感じながらも、臆することなく。

|||||

「なんでこうなった・・・」

一輝はテーブルにたどり着くと同時に、そうもらした。それはもう、本心から。

「あゝ一輝さくん。かゝずゝきゝさくん！」

「すう・・・すう・・・」

「あはははは！カズ君だカズ君だ！あははははは!!」

「よいぞよいぞ！もつと酒を持ってこい！」

テーブルには、酔っ払いが三人出来上がっていた。

まだ一人眠っていることが一輝にとって救いになるレベルの、酔っ払いが。

「原因は、その瓶だよな・・・光也のヤロウ・・・」

一輝はとりあえず自分の席に付き、バランスを崩して床に頭を打たないようにと、隣で眠っている刃の頭を自分の太ももの上に置く。ようするに、膝枕だ。

「む、一輝ではないか。おんしも酒を飲め！酒はよいぞ！」

「なるほど、ビヤクは酔っ払いと昔の感じに戻るのか。そして、俺は酒を飲まん。断じて飲まないからな。」

「断じて、だって。あははははははあはは！」

「えゝ。飲みましようよ。お酒、美味しいですよ。」

「殺女は一体何が面白いんだ何が。で、美羽は性格変わりすぎだろ。酒に飲まれるなら飲むなよ・・・そして、刃はなんでこの状況で寝続けていられるんだ・・・」

「いえ、彼女達は何も悪くないんじゃないですかねえ？」

一輝が頭を抑えていると、後ろから光也がやってきた。

「オイ光也。オマエが渡したのは酒だよな？」

「ええ、お酒です。大体、普通のお酒の五倍くらいのアルコール濃度となっております。」

「普通に飲んだら危ないレベルにいつてないか、それ!？」

「大丈夫ですよ。普段から自分の身に神の力の一端を宿している土御門さんや神の血を引く匂宮さん、霊獣であるビヤクさんはこれくらい

で危ない状態にはなりませんよ。」

「今俺の脚で寝てる刃はどうなるんだ！」

「瓶を見たところ、少量しか飲んでいないようですし、問題ないでしょう。」

一輝が刃の前にある瓶を持つと、そこには確かに、かなりの量が残っているのが確認できた。

「どうしてこんな面倒ごとを・・・」

「はつきり言ってしまうえば、そちらのほうが面白そうですし、何より彼女達のためになるかな、と思ひまして。」

「むしろ、俺なんか酔っ払った姿を見られるのは嫌なんじゃないか・・・？」

「そうですかねえ・・・では、私はこの辺りで。あ、もちろん四人の飲酒については、我々陰陽師課が全力を持ってもみ消させていただきます！」

「さて、原因はオマエだろ。オイこら、こいつらを俺一人に押し付けんな！つてか、そんなことに政府の一機関が全力を注ぐな!!」

「一緒に飲みましようよ〜一輝さくん。」

「そうだよお。美味しいよお?」

「うむ。童手わらわずから飲ませてやろう。」

「くつつくな!色々あたってんだろ!三人とも自分達のスタイルと格好を考えろ!あと、ビヤクについてはそんな喋り方するのを見るの初めてだぞ!?!まさか、前世まで引っ張ってんじゃないだろうな!?!つて、刃が落ちる!頭から落ちるから俺を揺らすな!」

ちなみに、三人のスタイルとしては美羽が一番大きく、ビヤク、殺女の順に続く(どこが、は察してください)。

そして、アルコールを摂取したことで体温が上がっていたせいかな服は軽くはだけている。

そんな感じの大騒ぎは、三人全員が酔いつぶれて眠るまで続き、次の日に一輝の家で目を覚ました四人は、激しい頭痛に悩まされることになった。

短編 あるお盆の物語 オマケ

「四人ともまだ起きてないか・・・仕方ない、諦めて朝食でも作るか。」
一輝自身空腹に耐えられそうになかったので、もう気まずくなるのは受け入れ、五人分の朝食を作り始める。

「ご飯は前夜、四人を自分の部屋に敷いた、わざわざ買ってきた布団に寝かせた後にタイマーで炊くよう設定していたので、たまにはいいか、と焼き魚を作りつつ味噌汁を作る。」

もちろん、他にもいくつかおかずを準備しながらだ。

「あー・・・一輝？なんで私はオマエの部屋で寝ているんだ？美羽に殺女、ビヤクもいたが・・・」

「お、起きたか匆。そこに水を汲んであるから飲んどけよ。」

「あ、ああ。もらおう。」

途中で匆が起きてきたが、匆は寝ていたため気にせずにはなしをする。

ちなみに、一輝は四人が起きてきたときのために水を汲んだコップを四つ準備している。こういうった気配りは出来るが、問題児的行動は止めない、それが、寺西一輝と言う人間なのだ。

「ふう・・・にしても、頭痛がするのだが・・・」

「あんだけでも二日酔いになるのか・・・」

「今、二日酔いと言ったか？」

匆は信じられない、と言うような口調でそう言う。

「未成年の身で何を、と思うかもしれないが、私はそこそこにアルコールには強い。そう簡単に酔うとは・・・」

「まあ、普通なら酔わないのかもしれないな。ただ、アルコール濃度が普通の酒の五、六倍で、霊獣のビヤクですら酔ったからな。」

「そ、そうか・・・私が飲んだのは光也に渡された瓶だけだから・・・」

「そう、あれが件の酒だ。一体どこから調達したのか・・・」

一輝と匆がそう話している間、他の三人は一切起きてくる気配がなかった。

残りの三人は、最終的に一人1、3本ずつ飲んでいたので、中々起

きないのかもしれない。

「そうと分かると、なんだかフラフラしてきそうだな・・・水、もう一杯貰ってもいいか?」

「おう、飲みたいだけ飲んでいいぞ。ペットボトルごと置いておくれから。それと、二日酔いの薬が欲しければあるけど?」

「何から何まですまないな。ありがたく貰おう。」

刃はそう言って薬を受け取り、水を汲んで飲む。

気分的には、いくらか楽になったようだ。

「ふう・・・何か手伝うことはないか?」

「あー、強いて言えば一つあるが・・・もう少し覚悟をする時間が・・・」
「どうした?」

「・・・ま、後に回し続けても仕方ないか。じゃあ、そろそろ完成しそうだから、あの寝ぼすけ三人を起こしてきてもらえるか?」

「うむ、引き受けた。」

刃はそう言って、寝室のほうへと歩いていった。

|||||

「起きろ、三人とも!ただでさえ迷惑をかけているのに、さらに一輝に迷惑をかける気か!」

刃はそう言って三人の布団を剥ぎ取り、それでも起きる気配がないので、三人に少し呪力を流し込む。

「うにゃ!」

「すう・・・」

「今、何か変な感じが・・・」

そして、二人ほど起きたので、刃はまず二人を起こす方向で話を進める。

「殺女は何故起きん・・・とりあえず、二人とも服装を整えろ。一輝が朝食を作って待っている。」

「一輝、さん・・・?」

「なんで一輝がここにです?」

「打ち上げの際に私達はアルコール濃度の高い酒を飲んだらしい。で、酔いつぶれた私達をわざわざ自分の家に運んでくれたのだ。」

「打ち上げ……」

「一輝……」

そして、二人は同時に首をかしげ、同時にボツ、と顔を赤くした。

「へ、みや、にや、みゆく……」

「え、あ、その……一輝は、そっち、に……?」

「当然だろう。先ほどもいったが、ここは一輝の家なんだぞ?」

「……無理。」

「は?」

「無理……恥ずかしくて一輝の前に出て行けない……」

二人は同時に言つて、同時に頭から布団にもぐりこんだ。

「今更何を言っているんだ……確かに私も、寝顔を一輝に見られたことは恥ずかしい……恥ずかしくてたまらないが、」

「いえ……そうではないんです……」

「昨日、酔っ払った私達が何をしたのか思い出しました……」

「……ちなみに、三人は何を……?」

匆はそこで、三人が酔っ払っている間に何をしていたのか、全て説明を受け、

「それは……まあ、災難だったな……」

「一人だけ被害なしみたいに言うですけど……」

「匆さん……寝ちやってからずっと、一樹さんの膝枕で……」

「……」

匆はたつぷり十秒間固まり、先ほどの二人の比ではない勢いで顔を赤くした。

「え、あ、そ……なんでー!?」

「グハッ!ちよ、何!?襲撃!!」

そして、そのままつい頭に当てていた拳を振り下ろしてしまい、それが殺女の腹に当たる。

「私、そんなこと……で、でも、それはそれで役得な気も……」

「お、なんでか分からないけど、もんめんがギャップ萌えモードだ!レ

アだよレア！」

「ええっと、これはですね・・・」

「.....@*{+?;%#W*\$%?!?!?」

経緯を聞き、打ち上げの際のことを思い出した殺女は、今までの三人の比ではないレベルで顔を赤くした。

||||||||||||||||||||

「お、おはよう。三人とも起きたか。ありがとな、匆。」

「二」(コクコク)「三」

一輝はどうか声をかけるが、四人とも下を向きながら頷くだけで、一言も喋ろうとしない。

一輝からは見えないが、顔もものすごく真っ赤になっている。

「あー・・・二日酔いの薬と水はそこにあるから、飲んでけよ。それと、朝食も出来てるから、席についてくれ。」

そして、五人は大変いづらい場にて、朝食を食べた。

白夜叉の送別会

——送別会・〃円形闘技場〃。

山梶子の花が咲き乱れる円形闘技場には、たった三人だけが立っていた。

一人は、今回のゲームの主催者である白夜王こと白夜叉。

一人は、白夜叉から〃階層支配者〃の任を受け継ぐ蛟劉。

そして、最後の一人は両手で剣の常態になったスレイブを握る、寺西一輝。

スレイブをカウントしなかったのは、剣の状態だからだ。

蛟劉は数百万トンの水流を用いて闘技場を大渦で包み込むが、一輝はギフトを用いて、白夜叉は当然のようにたって微動だにしない。

それどころか、白夜叉は愛用の扇を一閃し、炎を伴った閃熱を放って渦を真つ二つにする。その熱量で、蛟劉が放った水流は一瞬で蒸発した。

閃熱はまだ消え切れておらず、二人の元に向かい、風を纏ったスレイブによって切り裂かれ、ようやく消滅した。

「悪いな、スレイブ。熱くなかったか？」

「いえ、一輝様のおかげで、そこまでは。」

その一幕だけをみればいい試合をしているようにも見える。

だが、両腕に水流を纏わせている蛟劉や、スレイブを構え、自分の周りに様々なものを漂わせている一輝は肩で息をしているのに対し、白夜叉は余裕そうに立っている。

ちなみに、最初はレティシア以外のメイド全員が参加していたのだが、途中で一輝の手にあったスレイブ以外は皆吹っ飛ばされた。

「ふむ。これで残ったのはおんしらだけじゃの。」

「んん、まあ・・・真に不本意やけど、そうなるな。」

「つてか、俺がまだ残ってるのが不思議でしょうがねえよ・・・」

蛟劉は白夜叉の挙動一つ一つに、一輝は白夜叉の周りの気流の変化に警戒しながらそう漏らす。

別に、二人とも白夜叉と戦いたくて参加しているわけではない。

蛟劉は後継者として参加しとくのが礼儀だと考えて、一輝はメイドたちのことで色々と手を回してもらったし、悪徳コミュニティを潰した際に破格の報酬を受け取ったりしているので、お礼代わりに参加しておこう、位のつもりだったのだ。

だがしかし、いざ気付けばかなり熱の入った試合になっている。

まあ、隠しきれない実力の差が有るのだが。

「さて、せめてあの使い魔くらいはどうかできないと、恥ずかしくて皆のところへ帰れないんだが……」

一輝は、白夜叉の周りにいる四つの発光体を睨みつつ、そうつぶやく。

「それもかなり難しいと思います。一体一体が先ほどの渦を消滅させてお釣りが来るほどの力を秘めているようですし。」

「ってか、アレが使い魔ってのはどうなんだ？あれ自体がもうボスクラスだろ。」

しかも、それぞれが白夜叉を守るように立ち塞がるのだから、攻撃のしようがない。

「いやはや、東側にも存外喧嘩好きが多いな。老骨にはちと堪えたぞ。」

「そんなくだらしない冗談言ってるじゃねえよ。」

「一輝の言う通りや、白夜王。このていどでどうにかなるたまとちやうやろ。」

「うむ、少し猫被ってみた。実は全然疲れておらんのか！」

白夜叉が阿々と笑う姿に、一輝は眉間にしわを寄せる。

まあ、それだけの實力を持っているのは確かだし、そこには何も言わない。

それに、初日だけで何千人と戦いを挑んだとはいえ、後半は三人の戦いに巻き込まれて吹き飛んでいるのだし、同等の疲労があるわけではないだろう。

ちなみに、メイド組もその余波で吹き飛んだ。

「さて、下層で名のあるコミュニティは既に出場したようだし、残っているのは……」

「——よう。待たせたな白夜叉。」

そんな時、入場口から声がした。

一輝がそちらを向くと、十六夜、黒ウサギ、飛鳥、耀、レティシアの五人がギフトカードを持って入場してきた。

「遅かったな、皆。ってか、十六夜は参加しないと思ってたんだが。」

「ああ、俺は参加しないつもりだったぜ。」

「って、オイ十六夜！アレだけお世話になった素敵神のゲームをスルーとは、さすがに失礼ではないか!？」

十六夜の台詞に、白夜叉は本気でショックを受ける。

相手と自分の実力差をほぼ正確に知っている一輝ですら参加していたため、そのショックは一段と大きそうだ。

そして、一輝も合流したノーネーム一同は、困惑したように顔を見合わせた。

「ねえ、皆。白夜叉が私達の世話を焼いてくれたことがあったかしら？」

「ええつと・・・ギフトカードを貰ったこととか？」

まず、耀は魔王とのゲームで生き残れるか否かが左右されるラプラスの紙片こと、ギフトカードを貰ったことを上げた。

「俺は、メイドたちのことでもかなり世話になってるな。」

「確かに、私も世話になりましたね。」

一輝は、色々とおせっかいで連れてきた四人のことをあげる。

なんだかんだで、ヤシロ以外は白夜叉からギフトカードを貰っており、世話になっているのだ。

悪徳コミュニティの件を上げなかったのは、単に恥ずかしいからである。

「私を『ペルセウス』から逃がしてくれたこともあったな。」

レティシアは、コミュニティの再建を諦めるよう言うために『ノーネーム』を訪れた際のことを言う。

「黒ウサギには、皆さんが来る前の次期に審判の仕事を破格の報酬で紹介してくれましたね。」

かつてのコミュニティの稼ぎであった審判のことを、黒ウサギはあ

げた。

「俺は、下層のゲームに出禁になったから、代わりにゲームを紹介してくれたな。」

十六夜が言っている事の例としては、白雪が隸属したゲームがある。

「あ、それは俺もだな。そう考えると、火龍誕生祭にも連れて行ってもらってるし・・・白夜又が俺たちにしたことは、問題児的行動よりも助けてもらった回数の方が多いのか？」

「「「「なんと、驚愕の新事実!」「「「「」」」」」

「おんしら本当に失礼だなッ!!」

十六夜、黒ウサギ、飛鳥、耀、レテイシア、一輝、スレイブの七人が異口同音にそう言うと、白夜又は角を立てて怒った。

まあ、セクハラ行動が目立ってしまったので勘違いされがちではあるが、仕事に手を抜いたことは一度もないのだ。

だからこそ、一輝が何の見返りも考えずに潰して回った悪徳コミュニティのこと、しっかりと調べていたのだ。

「全く・・・おんしらのように誤解するものが多いから、私を箱庭三大問題児に数える輩がいるのだ。私はクイーンやアルゴールとは違うとあれほど!」

「「「「え!?!」「「「「」」」」」

一瞬、沈黙が走った。

「うおおおおおおい!!? な、何だその反応はッ!まさかおんしらも勘違いしておったのか!?!あんな非常識三傑集と一緒にするではない。というか、黒ウサギや一輝にはかなり便宜を図ってやっただろう!私は神霊、純血の龍、星霊——最強種の中では超!が付くくらい良心的で社交的なのだ!そうであろう、蛟劉ッ!!」

「せやな。」

「嘘でしょう!?!」

「いや、これは本当やで飛鳥ちゃん。他の最強種なんてどいつもこいつも横暴と非常識と宇宙原理^{ブラフマン}な輩が服着てお洒落して現世を闊歩しとるようなもんやからな。最強種がセクハラ一つで大人しくしとる

なんて、安いもんやで?」

「あー・・・ちなみに、他の最強種はどんな感じなんだ?」

「せやなあ・・・『今日は天気が良いから地平線あそこから水平線あそこまでを侵略して傘下に入ったコミュニティに美味しいティラミスを作らせましょう。』とかやな。」

「マジか・・・」

「うむ、私も魔王として侵略するべきか、それともセクハラするかで悩んだ末の選択なのだ。なので私は悪くない。というわけで、また音央と鳴央をつれてきてはくれんかの?」

「はっはっは。断るに決まってるだろ。」

「ならば、黒ウサギの胸を、」

「ふざけないでください、この御馬鹿様!」

白夜又は遠まわしにセクハラを正当化しようとしたが、失敗した。そして、十六夜は腕を組んで渋い顔をしながら、感慨深くつぶやいた。

「・・・世の中、上には上がいるもんだな。俺たち四人も、より磨きをかけて唯我独尊の道を」

「いえ、進まなくて良いですから」

「二」爆走しよう!」二」

「つて、上を行くんですか!?!」

黒ウサギは、これだけ突っ込んでも疲れた様子がない。

そういったギフトでもあるのだろうか、少し悩むものだ。

「まあ、恩を感じてないわけじゃねえよ。ただ送別会の百花繚乱が見事なもんだったから初日くらいは眺めてるつもりだったんだよ。・・・まあ、うちの女性陣が血気盛んだったり、一輝が参加してたりしたもんでね。」

「おいおい、俺のせいだよ。」

一輝は不本意そうにそういった。

「さて、少年達も来たことやし、僕も後任らしくもう少し根性見せようか。———そう言うわけやから、さっきまでみたいには行かんで、白夜王。」

「まあ、俺もこいつらの前でそんなことは出来ないからな。もうちょい、後先考えるのを止めるか。」

二人は僅かに闘志を滾らせる。

対する白夜叉も挑発的な笑みを浮かべ、微笑む。

「よい、まとめて相手をしてやろう。・・・ところで、後から来た五人はゲームルールを知っているか？」

「ええと・・・この闘技場から突き落とせば勝利とは。」

「うむ、確かにその通りだ。だが、それではさすがに不利すぎるから。よって、参加者には救済措置を用意してみた。」

白夜叉がパチンと指を鳴らすと、四対の発光体の光が衰え、本体が見える。

そこには丑、虎、戌、亥の獣印が入っている。

それを利用した特別勝利条件が、このゲームには用意されているのだ。

その内容は、『四獣の獣が駆ける謎を解き、季節を薫る花の簪を沈む大地に突き立てよ』。

「まあ、俺には何にもわからないんだけどな。」

「簡単には解かせぬよ。」

が、その意外な展開に、飛鳥は明るい声を上げた。

「そう・・・ふふ。それなら、私達にも十分に勝ち目がありそうじゃない。」

「無茶言うなよ。その条件を満たそうと行動すれば、間違いなく白夜叉の標的になるんだぞ?」

「せやから、白夜王の妨害をかわしながらになるんやけど、無理やろ?」

蛟劉のその台詞に、十六夜はむしろ楽しそうに笑う。

「何だ、それなら話が早い。せつかく頭数があるんだから、二手に分かれればいい。」

「じゃあ、それで行くか。俺は白夜叉に挑む。スレイブ、付き合ってもらえるか?」

「もちろんです。私は貴方の剣。貴方の望みに従いましょう。」

「なら、私達が謎解きね。」

「うん。そんなに難しそうじゃないから大丈夫。」

そして、七人が戦闘体制を取ると、白夜叉は扇を掲げ、ゲーム再開を叫んだ。

「では相手してやろう。かかってくるがよい、問題児共ツ！」

その瞬間、四体の発光体は闘技場を駆け回る。

そして、攻撃隊が発光体を攻撃しようとした瞬間、全員の足が闘技場から離れた。

「クソツタレ、空中じゃどうにもならない！春日部か一輝に拾ってもらうしか、」

「無駄じゃよ十六夜。他の連中は既にリング外だ。一輝も、ほれ。」

白夜叉がさすほうに十六夜が視線を送ると、一輝が片手に大剣をもって浮かんでいた。

「遅い、遅すぎるぞ小僧。おんしらが遅いせいで、謎解きタイムが終了してしまっただぞ。」

「は、はあ!?今始まったばかりだろうが！」

「いや、違う。もう始まっていた。そして、悠長なゲームメイクを選んだせいで、敗北をしてしまったのだ。少し考えれば勝利できたじやろうに。」

十六夜は落下していく僅かな時間に思考をめぐらせ・・・

「くそ・・・!!こんな簡単な勝利条件だったのか・・・!!!」

そう、本当はそこまで複雑なルールではない。

まず、季節を薫る花は、闘技場に捧げられている山梔子のこと。

そこから、季節は夏となり、夏には太陽は丑虎から戌亥・・・北東から北西に沈む。

よって、勝利条件はリングの北西方向に山梔子をさすことなのだ。

「当然だ。真に良質なゲームとは特別なものにしかクリアできないゲームではなく、誰にでもクリアできるものでなければならぬ。そういう意味では、ゲームの全てを把握してから戦いに挑むなど、チキンプレイに他ならんわ！」

白夜叉は扇を掲げてそう言う。

「くそ……くそ、くそ、これじゃ格好がつかねえ……!!」

「なあに、これで一つ学習したのである。何も死ぬわけではないのだから、次のゲームにいかせばよい。」

白夜叉は水面に舞い降り、十六夜のほうへと歩み寄る。

十六夜はそんな白夜叉に、苦々しい声音で告げた。

「……確かに、これからのゲームでは生かせるさ。でも、次の白夜叉のゲームでは生かせないんだろ?」

白夜叉は、十六夜の言葉に瞳を大きく見開いた。

そう、もう白夜叉のゲームを、短い一生しか送れない人間である十六夜が受けることは、出来ない可能性が高いのだ。

なぜなら、一度返却してしまった神格を再取得するには、数百年はかかるかもしれないのだから。

「事実上、これは俺たちと白夜叉の最終決戦なんだ。なのに俺たちがこんな負け方をしたんじゃ……とても、*“下層は任せとけ”*なんて、口が裂けてもいえないからな。」

白夜叉は、そんな十六夜の言葉に本気で動揺していた。

彼らが下層を去る白夜叉を安心させようとしていたのにそうすることも出来なかったとしり、初手必殺をしてしまったことに罪悪感を感じているのだ。

そして、二人の間に沈黙が満ちし……ふと、十六夜は顔を上げた。

悪戯を思いついたような顔をした、問題児の顔を。

「ところで白夜叉……本当に、全員を落としたと思うのか?」

「は?何を……」

白夜叉は本気で拍子抜けしたように返すが、後頭部に走った衝撃で、バランスを崩す。

「鬼道流体術、流星。」

「×2、だ。」

そして、白夜叉の頭の上には、一輝とスレイブの膝があった。要するに、二人係で跳び膝蹴りをしたのだ。

ちなみに、十六夜がみた一輝とスレイブは一輝の式神が化けた姿であり、本物の一輝とスレイブは水に乗って一気に上空に飛んでいたの

だ。

少し考えれば、大剣が沈まないことに疑問を抱けたであろう。

「それに、敗北条件もないし、な！」

十六夜はそう言いながら、バランスを崩した白夜叉をつかみ、引つ張る。

同時に何本もの手が白夜叉をつかみ、白夜叉を引きずり込もうとする。

「ぬ、お・・・簡単には、」

「さあ、百鬼夜行の始まりだ！」

もちろん、白夜叉は耐えようとするが、自分の上に現れた重みによって、水中に落ちる。

一輝が、妖使いを使って檻の中の妖怪を大量召喚したのだ。

「よっしゃ、よくやったで少年！これで僕らの勝利や！」

「YES！見事に作戦勝ちなのですよ！」

そう言いながら蛟劉と黒ウサギが堀の上に向かってくる。

飛鳥と耀もそれに続いて堀の上に向かってきて、空から堀に着地した一輝や人間常態になったスレイブも合流し、八人でハイタッチをする。

「ハハ、備えあれば憂いなしだな！」

「ええ。文句なしの大勝利よ。」

「・・・精神攻撃はゲームメイクの基本。」

「あの演技のおかげで、俺とスレイブはかなり動きやすかったしな。」

「少しでも上を向かれば、気付かれましたからね。」

そして、黒ウサギや蛟劉も口々に喜びを漏らし、その場を笑い声が包んだが・・・それは、だんだんと弱まっていき、ついには無くなった。

笑うことに飽きたのではなく、危険を感じ取ったのだ。

悪寒の発信源は、白夜叉が落ちた辺り。

普通であれば、白夜叉が祝福の言葉を述べ、一輝たちがそれに一言ずつ返すことで感動的なフィナーレになるはずだった。

だが、肝心の白夜叉は全く行動を起こしていない。

どうしたものかと一同が戸惑っていると・・・突如、大地から白い風が吹き始めた。

「兄様、これは・・・」

「あー・・・皆、俺は逃げる！」

「オイ待てこら！」

一輝は、スレイブを連れて脱兎のごとくその場を去った。

数分後、メイドたちを連れて訪れた一輝が見たのは、シースルーのビッチェスカートを着て歌って踊る、黒ウサギの姿だった。

短編 湖札とウロボロス、出会いの物語 ①

「久しぶりに日本に帰ってきたなく。今日までの予定だったから当然だけど。」

一輝が箱庭に旅立つ数時間前、湖札は日本に入国していた。持ち物はかなり少ない。

手提げのバッグが一つと、肩に野球のバットを入れるような入れ物をかけている。まあ、湖札も一輝のように空間倉庫を持っているので、これで全てというわけではないだろう。

ちなみに、一輝はこの事を知らない。

驚かせるために、湖札自身、いつ帰ってくるのかを秘密にしていたのだ。

「さて、よくよく考えてみたらお兄ちゃんが今どこに住んでるか分からないんだけど・・・それよりも先に神社かな。早くお兄ちゃんに会いたいし、昔みたいと一緒に寝たりしたいけど、まずは、ね。」

湖札は、初日くらいは許してくれるよね、とつぶやきながら足を進める。

もちろん、そこに神社がないことは知っているが、自分が生まれ育った場所なのだ。まず最初に訪れても何もおかしくはない。

なので、湖札はおぼろげな記憶を頼りにその場所へと向かった。

|||||

「・・・えっ。」

湖札が神社跡に着いたとき、無意識にそうもらした。

まあ、無理もない。向かった先で、巫女服を着た長い嘴を持つ何か、人を喰らっていたのだから。

《いけないいけない、まずは冷静に状況を判断して・・・》
が、そんな動揺は一瞬だった。

湖札も生まれてからずっと陰陽師、妖怪に関わっている身だ。

これくらいで取り乱したりはしない。

《まずは、あれの正体を探らないと・・・思い当たる妖怪はいないし、目を使おう》

湖札はそう言って目を瞑り、再び開く。

すると、その目は茶色から翡翠色へと変化する。

その間にも人は食われていくが、カツとなつて突っ込んで無駄なので、その場を動かない。

《情報、巫女服、嘴、食人。食人から邪の存在と推定。巫女服より日本の、女性怪異と推定。》

これが、湖札が陰陽術、言霊の矢とは別に持つギフトだ。

ギフトの由来について、湖札自身が知っていることはない。

だが、それ以外についてはいくつか分かっている。

まず、使うためには自力でいくつかの情報を得なければならぬ。

だから、こうして視覚から得られる情報を整理しているのだ。

《検索・・・該当妖怪なし。》

検索に失敗するが、湖札は冷静に情報を組み立て直す。

《検索内容の変更。対象、女性怪異。有力候補・・・女神。検索・・・成功。・・・うそ・・・》

湖札は、検索が成功したことに驚いた。

日本で妖怪じゃなかったから女神と入れたが、ほとんど、当たらないだろうくらいのつもりだったのだ。

《・・・成功したからには、そうだって考えるしかないか・・・。検索結果、名称は天逆海に断定。詳細検索、開始。》

このギフトは、まずいくつかの情報から名を得ることができ、その名から、その存在の全てを知ることができる。

検索先は不明だが、得られない情報は、ほぼ皆無だ。

《情報の取得完了・・・よし、まだ全員食べられた訳じゃない。間に合った。》

湖札は鞆を下ろすと、式神統合で弓矢を作り出し、天逆海に向けてはなち、同時にその場を離れる。

「ギャアアアアアアアアアア!!!」

その矢は天逆海に当たり、食事を邪魔された天逆海は怒りの咆哮を

あげ、湖札のいた場所へと走る。

「式神展開、傷つきし戦士を安らぎの場へ。」

そして、その隙に湖札は倒れている人たちに近づき、式神を展開して怪我人を運び出す。

「これであの人たちは大丈夫・・・後は、天逆海をどうにかするだけ。」
「グウウ・・・ヒギヤアアアアアア!!」

湖札は、怒りのボルテージが上がっていく天逆海を見て、より冷静になっていく。

もちろん、神と戦うことに焦りを感じていないわけではない。だが、

《思いでの詰まったこの場所で暴れるのは・・・許せない。》

という、怒りが上回り、一輝がハクタクと戦ったときのような形で冷静になっているのだ。

そして、湖札は肩にかけていたものを下ろし、そこから一振りの日本刀を取り出し、鞘を腰に吊るすと一気にその刀を抜く。

そして、それを危険と見た天逆海は、大きく息を吸い、口から鬼の形をした霧を次々と吐き出す。

「口から鬼を吐き出し、自らのしもべとする・・・うん、情報通り。」
湖札は情報に誤りがないことを確認しながら、自分に向かってきた鬼を斬り、

「血を吸え、村正!」

そこから流れた血を、手に持つ妖刀に吸わせる。
魂は存在しなかったが、肉体はすべて揃っているようだ。

「これで・・・だいたい切れ味も増したよね。」
湖札が使うのは、妖刀村正。斬ったものの血を吸い、切れ味を増す

刀だ。
鬼の群れを壊滅するまで刻んだ今なら、その切れ味は神をも切る。

「じゃあ・・・一太刀つかまつる!」
そして、湖札は一気に天逆海まで駆け、

「鬼道流剣術、逆駆」
下から一気に切り上げる。

そして、その身へと届くだけの入り口を作れば、後は矢の出番。村正をしまい、距離を取りながら言霊を唱える。

「我は我が敵たるすべてを言霊をもってここに殲滅する。この言霊は尊く、儂きものなり。」

その瞬間に、湖札の手に銀の洋弓が現れる。

「天逆海、あなたは日本神話に伝わる、一柱の女神です。」

湖札は、天逆海に何かされる前に潰すため、一気に言霊を唱える。「スサノオノミコトが溜まっていた邪気を吐き出した際に、その邪気より生まれた、戦いを愛するのみの存在。天狗やカツパなどの祖先とも言われています。」

そこで一度矢を放ち、天逆海の存在を抉る。

「ギャアアアアアアアアアア!!!」

もちろん天逆海も黙ってはいない。

湖札に手を向け、父親、スサノオの力である暴風を振るう。

「その暴風はスサノオの力の現れ。天逆海と言う女神が父の力を多分に受け継ぎ、父親に縛られているという証拠です。そうしてできた力は脆く、薄い!」

が、湖札はそれを穿つ言霊を込め、矢を放ち、風を霧散させる。

この湖札のギフト、『言霊の矢』は、湖札の実力のメインとなるギフトだ。

前に過去編で使った際に説明したように、矢に対象の経歴の言霊を込めることで霊格を穿ち、存在できないまでに殺すというもの。

故に、一輝と戦っても勝てないこの頃の湖札は、だがしかし、一輝には単独での撃破ができず、カグツチの際にやったように三人がかりでようやく倒せる神を、単独で殺すことができる。

「貴女はそのようにして、穢れより生まれた邪なる神。故に、英雄である鋼から生まれながら滅ぼされる蛇の属性も持つ。鋼の力と蛇の力を両立する神。天狗や河童、鬼を支配者に置く邪なる神。それが貴女の本質です!!」

湖札は言霊を最大まで込め、矢を引き、天逆海に向けてはなった。

その矢は天逆海まで一直線に飛び、その霊格を穿った。

「予想以上にしぶといですね・・・まあ、止めを刺せばいいだけのことですが。」

湖札の言うとおりで天逆海はまだ生きているが、もう虫の息だ。

湖札は妖刀村正を抜き、天逆海に迫り・・・その瞬間、天逆海の後ろに穴が開き、天逆海を吸い込んだ。

「な・・・って、待ちなさい！」

湖札は一瞬驚いたが、すぐに気を取り直して、その穴に飛び込んだ。

その先に何があるのか、何にも知らずに。

短編 湖札とウロボロス、出会いの物語 ②

「・・・殿下、成功したみたいだよ。」

「そうか。まったく、どこかでやってる召喚に便乗するなんて、よく思い付いたな。」

「考えるくらいなら、軍師ならできて当然だよ。むしろ凄いのは、そんな無茶ぶりを可能にしてくれたアウラさんと・・・」

「マクスウエル、か。やっぱり、あれでも魔王なんだな。」

「だね。あの人には後ろに控えてもらってるから、邪魔はしてこない・・・はず。」

「勧誘の邪魔さえしなければいいさ。人間の召喚に便乗して、その人間のいた世界に魔王がいるなんて、こんな偶然は何がなんでもものにするぞ。」

「うんっ!」

そして、二人は黒いグリフォンを連れて、召喚予定の場所に向かった。

|||||

天逆海を追って入った謎の穴を抜けた先には、ただひたすらになにもない場所が広がっていた。

「(ん)・・・(ど)ん・・・?」

湖札は、世界中を回つたのに見たことのない場所が広がっていることに動揺を隠せないでいた。

が、ズルズル、というなにかを引きずるような音で、それどころではないと思ひ出した。

「そうだ、天逆海・・・いた。」

そして、逃げようとしている天逆海のそばに行き、村正を振り上げ、断末魔さえあげて許さず、その命を奪い、魂を自分のなかに封印する。

そしてその瞬間、神を自らの手で葬り、封印したことで、奥義神成

りが発動し……カチリ、という封印の解ける音が、湖札の中から何
度も、何度もなり、記憶が、よみがえった。

そこには、黄金の弓を引き、言葉で表すことのできないなにかと戦
う、自分がいた。

少し遡り、女神と契約を交わす、自分がいた。

少し遡り、言葉で表すことのできないなにかと戦う兄と、その兄に
守られる自分がいた。

少し遡り、泣きじやくって座り込む、小学校に入る前の自分と、そ
こにてをさしのべる兄の姿があった。

「私……贄殿、湖札、です……」

それは明らかに、初対面同士の挨拶だった。

《え、うそ……でも、私にも檻が……》

湖札は必死にその事実を否定しようとするが、より鮮明な記憶がよ
みがえってきて、そんな湖札を嘲笑う。

別に、檻は本家の人間でなければ持たないのではない。

鬼道の血族なら、分家であつても、檻を持つし、その檻は封印され
ていない。

そして、記憶の中の湖札が名乗っていたのは……紛れもない、分
家の一つの名だ。

湖札は、その場に頭を抱えて座り込んだ。

《じゃあ——ダメ——私は——ダメ!——》

湖札は、認めたくない真実と、それを認めざるを得ない状況に、混
乱していき……

《お兄ちゃんの——ダメ!!——妹じゃ——ダメ!!!——
——ない?》

その事実を、認めてしまった。

||||||||||||||||||||

「む……この辺りのはずだが……」

殿下たちは目的地にたどり着き、召喚した魔王を探していた。

封印が解ける前は自ら言霊を唱える必要があつたが、解けた状態・・・元々の状態なら、自分の中に知識があれば問題なく発動することが出来る。

グライアがこれを喰らって生きているのは、生命の目録を発動することです。自らの中に異なる種の力を宿していたからだ。

あくまでも湖札が放つたのはグリフォンを穿つ矢なのだから、他の種を穿つことはできない。

「まずいな・・・リン、グー爺を安全なところまで運んで手当てしてやってくれ。」

「うん、分かった。殿下はどうするの?」

「そうだな、とりあえず・・・」

殿下はそう言つて、自我を失っている湖札に肉薄する。

「コイツを、俺の配下におく!」

そして、二人は拳をぶつけ合った。

短編 湖札とウロボロス、出会いの物語 ③

二人の戦いは、状況だけを見れば互角だった。

一撃一撃の威力を見れば殿下が勝っているのだが、戦闘経験という面において湖札が圧倒的に上だった。

実年齢三歳以下の殿下と三年間様々な国を回り、魔物との戦いを繰り返してきた湖札とでは、戦闘経験の有利不利ははっきりと現れる。

「該当存在、無し。検索失敗。」

「ん？オレの正体でも探っているのか？」

だが、それ以上に湖札にとって不利な点があった。

それは、殿下の存在を知ることが出来ないため、切り札である言霊の矢を使うことが出来ないのだ。

「・・・変更。鬼軍進行を始めましょう」

なので、時間を稼ぐために天逆海の力を使って鬼を大量に召喚する。

記憶が戻ったことによるショックは湖札の自我を押し込め、ただひたすらに冷静な戦士としてしているのだ。

「へえ・・・鬼の群れか！やりがいがあるなあ！」

「・・・効果は薄いと判断」

だが、その鬼達は殿下の攻撃一撃一撃で大量に殺されていくため、湖札はさらに鬼を追加しつつ、別の奥義を使うことにした。

「さあ、百鬼夜行を始めましょう」

「たった一人でこれだけの戦力を持つてるのか!?なんでもありだな！」

湖札の体から白い霧が出てきて、霧が固まり、様々な妖怪、魔物の姿をとる。

その中には、青行燈の姿もあり、青行燈はすぐにヤマタノオロチへと姿を変えた。

「すごい大物だな！ますます欲しくなってきました！」

「検索実行。情報から外見に関する情報を除外。代わりに・・・特殊攻撃の破壊、身体の硬度を追加。検索・・・一件、ヒット。」

そして、闘っている殿下の様子を外側から観察し、試しに放つてみた風の砲弾が破壊されたこと、ヤマタノオロチの牙が利かなかつたことから情報を追加し、検索して・・・ついに、その正体までたどりついた。

「情報整理・・・地球の半星霊の言霊を装填。発射。」

「これは・・・避けるのが得策か。」

殿下は有象無象の妖怪、魔物と戦っていたが、飛んできた矢の存在に気付くと体を捻ってそれをかわした。

が、矢は当然のようにホーミング機能がついており、湖札もいくらでも矢を放つことができるので避けるだけでは意味がなくなってくる。

「おいおい・・・ここまで何でもありか!」

「対象の戦闘能力に誤算あり。最大警戒に修正し、次の手段へと移行する。」

殿下はその矢を全て、魔物をぶつけることによって破壊し、妖怪も全滅させたので湖札へと攻撃を開始する。

湖札は殿下の攻撃を避けつつ、次の手を実行する。

「百の鬼よ、我が率いる異形の軍団よ。今この一時、我が砲弾となれ。汝らの持つ瘴気を、一つの塊とせん。」

湖札は思いつき後ろに飛びながら言霊を唱え、檻に戻った妖怪、まだ外に出ている魔物から瘴気を集め、殿下へと放出する。

「効かないね、こんなもの!」

殿下はそれを殴って破壊し、霧散させる、が・・・

「瘴気に形は無く、命もない。ゆえに幾たび砕かれようと、それが消えることはなく、祓われるまではそのものに呪いをもたらさん。」

「な・・・!?!」

瘴気というものは、その程度でなかったことに出来るわけではない。

瘴気は祓われるか対象の中に入り込むまでは、消えることなく、対象へと効果を表すのが、湖札が使った奥義『瘴気砲』と『怨恨縛鎖』のあわせ技である。

この奥義は何代も前の鬼道が、世界に絶望した際に作り出したもの

だ。なので、檻の中に大量の妖怪がいて霊獣、神すらいる一輝が使ったりしたら、世界を呪い尽くす勢いのものが出来るため、一輝は決して使うことがない。

「く……だが、耐えられないほどではない……か……なら！」

殿下は自分を包む瘴気に顔をしかめるが、耐えることが可能だとわかるや否や、湖札への特攻を再開する。

大本である湖札を倒せばこの瘴気も消える、そう考えたのだろう。

「対象の制圧、不可能だと断定。これ以上の抵抗手段、存在しません。」
「だったら、さっさとぶっ飛べ！」

湖札は大人しく殿下に殴り飛ばされ、気を失った。

|||||

「うん……ここは？」

「あ、起きた。殿下〜！起きたよー！」

湖札が目を覚ますと、そこは湖札と殿下が戦ったところで、リンが顔を覗き込んでいた。

「お、起きたか。早速で悪いんだが、これをどうにかしてくれないか？
さすがにきつくなってきてな……」

「それ、瘴気？なんでこんなもの……」

「いや、オマエがやったんだが？」

「え？」

湖札はそこで自分が何をやってたのかを思い出し、慌てて瘴気を消し去るために、言霊を唱える。

「我らが一族の放ちし瘴気、今我らが檻へと戻らん。そして、汝らが主のもとへと帰り行け」

湖札がそう言霊を唱えると、殿下を覆っていた瘴気が全て湖札の折に吸い込まれ、もととなる妖怪の元に返った。

ちなみに、こちらの奥義は絶望した鬼道の息子が瘴気を止めるために父親を殺すがとめることができず、止める力を強く願った際に編み出されたものだ。

「ほんつとうにごめんなさい……ちよつと錯乱しちゃついで……」
「まあ、それについては戦つてて分かった。で、何で錯乱してたんだ？」

「ちよつと殿下！そんなことを女の子にはつきりと聞くなんで、デリカシーに欠けてるよ！」

「アハハ……別に気にしなくていいよ。それに、今回迷惑をかけちゃつたのは私だし……その辺りの説明はしないといけないって思つてるから。」

湖札はそう言うのと、記憶が戻り、その内容に混乱してああなった、と説明をした。

「記憶の封印、ですか……というか、その言い方だと、まるで貴女が人間である、みたいに感じるんですけど……」

「人間ですよ？ちよつと生まれとかが普通じゃなかったりはしますけど、血はほぼ純粹な人間です。」

湖札の言葉に、二人は目を見開いた。

「あの……どうしたの、二人とも？」

「いや、どうしたというか……オレたちは天逆海を召喚して、その位置にオマエがいたから……」

「てつきり、貴女が天逆海だと……もしかして、召喚に失敗した？」

二人が少し慌てるのを見て、湖札はその辺りの説明も始める。

「あ、いえ……召喚には成功してますよ？ただ、私が天逆海についてきただけで……」

「ついてきた？なら、本物の天逆海は？」

「……私が、殺しました。」

「!？」

湖札がそう言うのと、二人は今までで一番大きな驚きを見せた。

「神霊を、人間が殺した!？」

「そんなことが出来るのか？オマエ。」

「うくん……出来たから、出来るみたい。もう何度も驚かれるのも大変だから一気に説明しちゃうけど、その天逆海の魂は私の中に封印されてるし、混乱して君と戦つてるときには私が天逆海になった。」

「……………」

もはや、二人は絶句し……

「アハハハハハ！面白いな、オマエ！」

「その反応は予想外だったかな……じゃあ、次はこっちから質問してもいい？」

「あ、はい。どうぞ。」

とても楽しそうに笑っている殿下を放置して、女子二人は会話を再開した。

「まず、私が矢で撃つちゃったあのグリフォンさん……大丈夫？」

「ええ、大丈夫ですよ。ギリギリ自分の存在を書きかえれたおかげで、傷さえふさがれば大丈夫そう、だそうです。」

「そっか……よかった……」

湖札は自分の矢で貫いてしまったためにもう手遅れだと思っていたが、問題がなかったと聞いて心から安心する。

「じゃあ、次に……ここって、どこですか？召喚って言っていましたけど……」

「ああ、貴女は外から来たんですね？ここは、箱庭の世界。ギフトを持つ修羅神仏が面白おかしく暮らす世界です！」

「……なんでもありの世界、と言う認識でいいですか？」

「まあ、大体そんな感じですよ！」

湖札はその認識で納得した。

流石は一輝の妹、といったところだろうか。

「そっか……異世界……じゃあ、もとの世界には帰れる？」

「……スイマセン、多分無理です。」

「そっか……じゃあ、お兄ちゃんに会うのは無理、かな……」
湖札は残念そうに、そうつぶやいた。

「あの、少し質問してもいいですか？」

「何についてでしょうか？」

「ちよっと、あなたのお兄さんについて。」

リンは一つの可能性に気付き、湖札にたずねた。

「私に答えることでもいいなら、いいよ？」

「じゃあ・・・お兄さんって、『陰陽術』以外にも何かギフトって持ってました?」

「・・・うん、二つ。一つは私も持つてる・・・こんなものなんだけど。」

湖札はそう言って、空間に穴を開けた。

「もう一つは?」

「もう一つは、形の無いものを何でも操れる能力・・・ギフトなんだけど、私が一緒に暮らしたところは、全然使えてなかった。」

「そのギフト、どうして宿ってるのかって分かりますか?」

「全然分からない。戻った記憶の感じだと、いつ手に入れたのかは分かるんだけど・・・何から与えられた力なのかまでは・・・」

リンはそこで少し考え・・・湖札にいった。

「なら、もしかすると・・・お兄さん、この世界に来てるかもしれないよ?」

「本当!?!」

「わっ!」

湖札はリンの言葉に、ものすごい勢いで反応した。

「ねえ、それ、本当なの!?!」

「か、確定ではないですけど、可能性は高いと思います!今回私達が使った召喚は同じ時間に行われた召喚と同じ時間に、同じ世界に対して行われたものに乗っかっていますから・・・強力なギフトを持った人は、その召喚の候補になるんです・・・」

「確かに、あのギフトなら使いこなせるようになればかなり強いし・・・記憶にあつたあれが本領なら・・・」

湖札は考えに考え、かなり可能性が高いことに気付く。

一輝は日本の第三席に入っているし、それも奥義に覚醒していない状態で、だ。

奥義に覚醒せずにその座に入っているのなら『無形物を統べるもの』は使えているはずだし、自分の言霊の矢と同じように封印がかけられていると考えていい。

「・・・ねえ、その辺りの情報って、貴女たちのところで集めれたり・・・」

「できます、けど……」

「タダで集める、つてわけにはいかねえな。」

ようやく話に入れた殿下が、湖札にそういった。

「なら、どうしたら？」

「オレたちは、魔王連盟、ウロボロスつてところに所属してるんだ。で……オマエも入らないか？」

「……入ったら、お兄ちゃんの情報、集めてくれるの？」

「ああ。名前、ギフト、特徴、辺りを教えてくれれば、こちらで調べよう。」

「うん、入る！」

「即断即決過ぎません!？」

湖札の即断に、リンが突っ込んだ。

「あ、私、湖札って言います!これから、よろしくお願いします!」

「ああ、よろしく。俺のことは殿下と呼んでくれ。」

「あ、私はリンです!」

ここでようやく三人は自己紹介をした。

「あ、これ。お兄ちゃんの名前と持つてるギフト、性格の特徴。陰陽術のほうは正確なものだけど、もう一つのほうは私の想像だから、一部違うかも。」

「書上げまでの時間、短すぎませんか!？」

湖札からしてみればずっと覚えていたことなので、思い出す必要すらなかったのだ。

「よし、あまり表立っては動けないが、調べておこう。リン、他の二人……いや、三人も呼んできてくれ。」

「あ、うん。」

リンはギフトを使って残りの三人を呼びに行った。

「あ、そうだ。これ、あつたほうが便利なギフトカードだ。」

「ありがとう、殿下。」

湖札がギフトカードを受け取ると、湖札のギフトが表示された。

湖札・ギフトネーム // 言霊の矢 // 外道・陰陽術 // 空間倉庫 //

「ん? オマエ、苗字はないのか?」

「そういえば、別にいいかな〜ってつけてなかった・・・」
湖札は少し考えて、苗字を決めた。

「へえ・・・天野、か。」

殿下はギフトカードを覗き込み、そうつぶやいた。

「もう、テキトーでいいかなあ、って思ってた。」

「まあ、あんまり考えても仕方ないからな。」

「殿下ー！つれてきたよー！」

そのタイミングでリンが帰ってきて、湖札はグライアに謝り、改め
ての自己紹介をした。

|||||

私が殿下たちと一緒にに行くことになったのは、そんなことがあった
からだ。

いろいろなところを回っている間に、リンちゃんに言われて、呼び
方を兄さんに変えることにした。そういつたところが変わっている
ほうが印象を与えられる、といわれて納得したのだ。旅で自分の内面
も成長したし、ちょうどいいと思ったのだ。

それに、私だけの奥義も出来た。ぬらりひよんは私の覚悟を聞いて、
半分呆れながらも奥義を編み出させてくれた。

その後、ウロボロスが関わっていた魔王、ペストが倒された際に、大
量の妖怪が召喚され、その妖怪が武器になったと聞いて、兄さんが来
ているんじゃないか、と期待は大きくなった。

殿下たちに調べてもらって、その人が色んなところで人助けをした
り、面倒ごとだろうと自分から首を突っ込んだりしていたことを知
り、ますます私の知っている兄さんと情報が一致してきた。

たった三人で魔王に挑み、その魔王を隷属させ、さらには魔剣まで
口説いたと聞いたときには少しムカツとしたけど、それでも兄さんの
面影と重なって、嬉しい気持ちのほうが大きかった。

リンちゃんがアンダーウッドでたたかった相手が寺西一輝を名乗
り、もとは鬼道だったという話を聞いたときには、嬉しすぎて天に昇

るかもと思った。

そして、我慢ができなくなって勝手に兄さんの顔を見に行つたときには殿下に怒られたけど、久しぶりに兄さんの顔が見れてうれしかった。

最後にあつたときより成長して、男らしくなつた兄さんはすごくかっこよかった。

ただ、昔はいつつも作つたような笑顔だつたのが自然な笑顔になつてたことには嫉妬したけど。

で、少ししてから煌焔の都で殿下をどうにかこうにか説得して、兄さんに会いに行くことを許してもらつた。

魔王連盟だから、主催者権限を持つてる人を勧誘できる、というのは効果的過ぎるくらいの交渉のカードになつてくれた。

ペンダントランプの上でお弁当を食べてるのを見つけたときは他の人がいたから近づけなかつたけど、一人で行動する、って聞いてチャンスだと思った。

それで、亜龍から逃げる兄さんをどうにかこうにか追いかけて、やっと一人になつたときには話しかけるタイミングを探っていた。

昔みたいに後ろから飛びつこうかとも思ったけど、そんなことをしたらせつかく大人っぽくしようとしてるのが無駄になる。

そんなこんなで話しかけることも出来ず、ただついていってたら、兄さんがキャンドルランプの周りにいる微精霊を見て、こうつぶやいた。

「もといた世界だと、あんな小さいのすら殺すやつらがいたからなく。ホント、見境がない、金の亡者だらけだよな。」

私の口は、無意識のうちに動いていた。

「うん、本当にそんな人ばかりだったね、兄さん。」

振り返つた兄さんの顔は驚きに染まっついていて、自分もそうならないかとても不安だつた。

でも、どうにか口を動かして・・・話を続けた。

「でも、父さんもそうだったし、一族全体で見れば、私たちの家系も、金の亡者だと思うよ。ともあれ、久しぶり、兄さん。」

泣きそうになる自分を抑えて、私は兄さんと会話をした。

その後、兄さんと色んなところを回ったのは、もうどうしようもないくらいに楽しかった。

どうにかして勧誘しないと、とは思っても、そんなことは無駄だつて分かりきつてたから、この時間を楽しむことにした。

その後、もうバラすしかなかったときにはこの時間も終わるかあ、って悲しくなったけど、受け入れることにした。

ウロボロスに恩が有ることは事実だし、私は魔王。元々、兄さんと戦うことになるのも覚悟の上だった。

次に兄さんに会ったのはギフトゲームの最中で、私は「主催者権限」を使って兄さんにゲームを仕掛けた。

私が本気で戦っても、兄さんはそれを超えて私を倒してくれる、そんなことを望みながらのゲームだった。

だから兄さんをおおったし、本気でぶつかり合いをした。

ゲームは途中で中断するしかなくなったけど、あのままいったら、私は間違いなく負けてた。

放った鬼もメイドさんたちにあらかた倒されてたし、ゲームのクリア条件は完全クリア、となっていただろう。

でも、それどころじゃなくなった。

いま、兄さん達はアジ・ダカーハの分身体と戦っているはず。

さつき兄さんに動きがあったことは判りやすく確認できたし、これなら死なない可能性は高いけど・・・それでも、確認したいことはある。

それに・・・私が本当の妹じゃないって分かって、どうするのかも知りたい。

「湖札さん？ジン君が話を始めますよ？」

「うん・・・ゴメン、リンちゃん。今行く。」

でも、今はそのときじゃない。

いつかその時が来たら、またその時に聞けばいい。

私は、殿下たちが集まっているところまで、小走りで向かっていった。

短編 畑の天狗、今に至るまで ①

「ノーネーム」の畑で、今日も子供達は土いじりをしていた。

「おーい！そろそろ休憩入れるぞー!!」

「はーい!!!」

そして、そんな子供達を仕切っているのは、一輝の倉庫の畑にいる、求道丸だった。

一輝たちがギフトゲームに出て稼いでいる間などに本拠が狙われる危険があることと、畑仕事に慣れていることからこうして手伝うことが多いのだ。

「そういえば、求道丸さんって一輝さんの倉庫の中で暮らしているんですよね？どうしてプレイヤーの皆さんみたいに、自分の部屋を貰わないんですか？」

「あー・・・俺、もう兄貴の倉庫の中で暮らして一年半くらいになりそうだから・・・あっちのほうが落ち着くんだよ。」

ちなみに、求道丸はこんな話し方も出来る。

子供達の前では、基本こんな感じだ。

求道丸がそう言うのと、子供達はその話に興味を持ち出した。

「求道丸さんと一輝さんって、どうやって知り合いになったんですか!?!」

「あー・・・ちよつとヤンチャしてたころがあったんだけど、その時に兄貴にボッコボコにされて・・・そのまま捕まって、今に至る感じが・・・」

「どんな起承転結が!?!」

「いや、俺もあの件について本当に細かいところまでは知らなくて・・・あ、兄貴！お疲れ様です！」

求道丸は話の途中で帰ってきた一輝を見つけ、立ち上がって一輝に向かってそう声をかけた。

子供達も、求道丸に続いて「おかえりなさい!!!」と返した。

「おう、ただいま。何の話をしてるんだ？」

「いえ、俺が兄貴に捕まったあの件について子供達に聞かれましたの

で！」

「あれか。なつかしいな。確か、俺が光也から電話を受けたのが始まりだったか。」

「覚えていらっしやるんですか？」

「まあ、俺が今まで観察責任者した中で一番大変だった一件だからな。なんで霊獣のビヤクよりも大変だったのか・・・」

「いや、本当にあの件についてはスイマセンでした・・・」

求道丸もそれだけ言われる心当たりがあつたようで、素直に頭を下げる。

「あの件については、一生頭が上がらないです・・・」

「まあ、実際にはオマエが一人で頑張っただけだ。俺がやったのは、ただの後始末。警察から地方公共団体、周辺陰陽師に手を回しただけだし。」

正確には権力によるもみ消しという表現がかなり近いことをしていたのだが、席組みに所属していた一輝からしてみれば大した手間ではない。

元々かなり広く知り合いの輪を広げていたため、新しく何かつながりを、とは行かなかつたということもあるが。

「で、皆はそのことについて聞きたいの？」

「はい!!!」

「求道丸、休憩っていつまで？」

「まだ当分はこのまま休むつもりです！」

「じゃあ、その時間を使って話をしようか。と言つても、そんなに面白い話ではないけど。俺が知らないところは、求道丸がカバーしろよ？」

「了解です！」

そして、一輝はそのときのことについて話し始めた。

|||||

「木の葉天狗の通り魔？」

中学三年の十一月、一輝は光也からの電話を受けていた。

『ええ、被害にあつた陰陽師の中には意識を取り戻したものもいました、その人たちからの情報です。』

「へえ…意識を取り戻したってことは、そいつらは命に別状はなかったのか？」

『ありませんでした…というか、被害者は皆、気絶するだけの攻撃しか受けていません。』

「それでも、意識を取り戻してないやつはいるのか…で？何で俺にそのことを？」

『いえね、出来ることなら討伐してもらえませんか？と。』

一輝は本気でダルそうにしながら、食器を洗い始める。

「なんでそんなこと…まあ、偶然にも会えたりしたら、こつちで対処してやる。でも、急いでるなら学生に頼むのは間違つてないか？」

『いやまあ、そうなんですけどね。私としては、討伐といいつつ保護してもらえるのが一番理想的なんですよ。』

「ああ、そういう…」

陰陽師は妖怪を殺すことでお金を貰つて生活しているため、野良の妖怪にあつたら殺すのがほとんどだ。

一輝のように、頻繁に観察責任者になる人は少ないので、保護したい妖怪などがいるときには頼られやすいのだ。

『ただ純粹に強者を探す妖怪…そして、ただの一人も殺さないなんて、中々ありませんからね。』

「いいけど、俺が公正の余地無しと考えたら、何のためらいもなく殺すからな？」

『寺西さんがそう判断されたのなら、間違いないのでしよう。判断については一任します。』

「それなら、その依頼受けた。」

一輝は食器を倉庫にしまい、そのまま靴を履いて家を出た。

いつものごとく荷物は倉庫の中なので、特に準備はしていない。

|||||

そのまま時間が過ぎて、今は三時間目の保健の授業。一輝はいつものごとく、窓から二列目の最前列で眠っていた。

そして、授業時間が半分ほど過ぎたところで、異変は起こった。

「だれか・・・強いヤツはいねーかー!!」

そう言いながら、窓ガラスを突き破って教室に人影が飛び込んだ。きただ。

当然、教室は沈黙に包まれる。

「聞いてんのかー！誰か、強いやつは」

「ああもう、うるせえ！」

そして、快眠を邪魔された一輝は不機嫌になりながらその人影の腕をつかみ、片腕で飛び込んできたのとは別の窓に向けて投げ飛ばす。

一輝自身も、またその隣の窓を突き破ってグラウンドに出る。

現在の被害、授業の中断、窓ガラス三枚。

人の被害は出ていないので、大した問題はない。

「はあ・・・で？お前は何なの？人の快眠邪魔しやがって・・・」

「あ、俺か？俺は木の葉天狗の求道丸だ！」

「・・・また面倒ごとが自分から・・・！」

一輝はいつそ無視する気だった案件が自分から飛び込んできて、かなりけだるそうにする。

だが、依頼を承諾したことには間違いないので、スイッチを切り替えて自然体で構える。

「まあいいや。で？強いやつと戦いたいのか？」

「ああ！より強いやつと戦えば、俺には生きてる意味が出来る！」

「生きてる意味、ね。まあ、その辺りは倒してからにしようか。」

「やれるもんなら、やってみろ！」

求道丸はそう言つて一輝に殴りかかるが、一輝はそれを受け流し、地面にたたきつける。

そのまま軽く飛んで踵落としを放つが、求道丸はその場を転がって避ける。ちなみに、その場には小型のクレーターが出来ていた。威力高すぎだろ。

「へえ・・・強いんだな、オマエ！やつと全力が出せそうだ！」

「まあ、今までは全然全力じゃなかったみたいだな。だからか？気絶させる程度の攻撃しかしなかったのは。」

「ああ！俺は人を傷つけないわけじゃねえからな！ただ、強いやつと戦いたいだけだ！」

「で、期待はずれは最低限の攻撃だけで、轢かれたりしないように道路の端なり公園なりに運ぶのか。途中からは、自分の少ない妖力を放つて近くの陰陽師に知らせて？」

一輝はここまででは問題なし、と判断して、再び求道丸と拳を交わす。

短編 畑の天狗、今に至るまで ②

二人の勝負は、少し長くはなったものの一輝の圧勝に終わった。ちなみに、一輝は自分のギフトを一切使っていない。鬼道の一族に伝わる対術だけだ。

「あー、負けた！それも体術で負けた！」
「の割には嬉しそうだな。」

一輝の言う通り、求道丸は笑っていた。

「ああ！何かしらの陰陽術の類を使ってきたら悔しかったが、体術で負けちゃあ何も言えねえ！完璧な敗北だ！」

「・・・そんなつもりであんな戦い方をしたわけじゃないんだけどな・・・」

一輝がギフトを使わなかったのは、気分三割に仕事の都合が七割だ。

そんな清々しさをプレゼントするためでは、決してない。

「さあ、殺せ！負けて死ぬ覚悟はどうに出来てる！」

「いや、殺さねえよ・・・ってか、殺しづれえよ・・・」

一輝はため息をつきながら求道丸に近づき、その腕をつかんで引っぱりあげる。

「とりあえず、立て。行くぞ。」

「は？どこに・・・」

「いいから、さっさと行くぞ。そうだな・・・お前の場合、ビヤクみたいな仕事は向かないし・・・出来そうもないしな。畑でいいか。」

「畑!?俺に何をさせる気だ!!」

「あ、その前にメシだった。これだけは外せない。他のやつらのときもそうだったしな。ちようどこの時間なら、じいばあ食堂も開いてるし。」

「だから、説明をしろー！ってか、さっきのおっさんがお前の事呼んでるぞ!」

一輝は始めて立ち止まって振り返り、またすぐに歩き出す。

「気にすんな、あんな教師。別に教師の言うこと聞く必要ないし。」

「いや、お前何者だよ!？」

求道丸の叫びは一輝にスルーされ、仕方なくついていくのだった。

|||||

「あら、一輝君じゃない。いらつしやい。この間はありがとうねえ。学校はどうしたんだい？」

「諸事情により、サボった。時じいの野菜づくし定食、二つお願い。」

「はいはい。少々お待ちください。」

注文を受けた定食屋のおばちゃん、豊ばあは台所に立ち、調理を始める。

「なあ、俺には今の状況が一切理解できないんだが・・・」

「今の状況？大したことないだろ。じいばあ食堂に来て、時じいの野菜づくし定食を頼んだんだよ。」

「いや、そうじゃなくてだな・・・なんで俺はまだ生かされてるのか、だよ!？」

まあ、妖怪からしてみれば当然の疑問だろう。

「ああ、そこか。そういや、ビヤクもそんな質問してきたな。悟はいつそ何にも言わなかったけど。」

「この反応をしなかったヤツもいるのかよ・・・」

「まあ、聞かなくても分かってたからな。で、理由だが・・・まあ、単純なことだ。」

一輝が二人分の水を汲んで空いている席に座るので、求道丸もその隣に座る。

「その単純なこととやらを聞いてるんだよ、俺は。」

「なら、答えてやる。それは、俺は必要でない殺しをするつもりはないからだ。つつても、妖怪との共存を主張する狂者みたいに、一切殺すなどとは言わないけどな。殺したやつらの方が圧倒的に多いし、その金で生活してるし。」

「・・・必要ない殺しってのは？」

「お前が知ってるかは知らないけど、」

一輝はそう言いながら携帯を弄り、陰陽師課のホームページ、妖怪と人間の共存についてのページを開く。

「もう一部の妖怪は人間と一緒に暮らしてるし、別で生活してるやつらの中にも、人間との取引を公に行ってるやつらもいる。」

「それについては知ってる。河童村がそうだよな?」

「ああ。あそこのキュウリはかなり美味しい。高級食材として取引されてるな。」

まあ、俺は知り合いのよしみでタダで貰ってるんだけど、と一輝は一言挟んだ。

「で、そんな世の中だから更生の余地があるやつらについては、チャンスをやることにしてるんだ。まあ、やり方はたくさんあるけど。」

ついでに言えば、一輝はこんな感じのために妖怪撲滅派にも妖怪共存派にも余りいい目で見られていない。

いや、正確には正体不明の第三席『型破り』が、だが。

まあ、それ以前に卵の立場で席組みに入っているのです、その時点で余りいい目で見られていないのだが。

「・・・なんでそんなことしてんだ?」

「暇だから。」

そんなくだらない話をしていると、定食が運ばれてきて二人の前におかれる。

「こ、これは・・・」

「ん? どうした?」

一輝が既に食べている横で、求道丸の表情が驚きに染まる。

そして、

「乗ってるもん、米以外全部野菜じゃねえか!」

そう、言い放った。

そう、二人の前にある定食には、肉や魚は一切使われていない、野菜と白米だけのものだったのだ。

野菜のてんぷら、かき揚げ、ほうれん草のおひたし、野菜炒め(肉無し)、サラダ、たくあん、etc・・・品数はかなり豪華な、ベジタリアンにも食べられる仕様になっている。

「定食の名前、聞いてなかったのか？」

「・・・ああ。そういや・・・」

求道丸も思い出したところで、箸をすすめる。

まず、てんぷらをつゆにつけて一口。

「・・・・・・」

求道丸は目を見開いて固まり、そのまま二口、三口と食い進めた。

「うめえ・・・」

「だろ？野菜ばかりで学生としては食い足りなくはあるんだけど、美味いからたまに食いに来るんだ。ついでに、お前みたいに更生対象にした妖怪にも、食わせてる。」

一輝がそう言っている間にも、求道丸は求道丸は箸を進め、料理を食していく。

木の葉天狗も天狗の一種、食材そのものの味を感じ取れるだけの舌を持っている。

それゆえ、使われている食材そのものの質、料理人の腕も感じ取っているのだろう。

そして二人が全て食べ終わると、一輝が会計をして定食屋を出る。

「さて、もう分かっただろ？俺がお前に何をさせたいか。」

「ああ、分かった。負けた以上は、やるつもりだ。」

「そうか。じゃあ、さっさと市役所に行つて登録してくるか。その後、ホームセンターに行つて必要なものを買って揃えるぞ。」

一輝はそう言つて、市役所に向けて歩き出した。

短編 畑の天狗、今に至るまで ③

市役所では結局面倒で光也に電話して手続きを全て済ませ、さつきとホームセンターに来ていた。

「さて、とりあえず道具買うか。服とかはそれ用のいるか？」

「いや、別にどつちでもいいが……」

「じゃあ買うか。まずは形から、ってね。」

一輝はそう言いながら、長靴などの服装関連のものを買い揃えた。

余談だが、求道丸は今、一輝が倉庫の中から取り出した一輝の服を着ている。さすがに、半裸で町を歩かせたりはしていない。

「さて、次は道具関連を……」

一輝がそう言いながら方向転換すると、一輝の目の前に白く輝く文字が現れた。

その文章は、『お久しぶりです、かずさん。』というもの。一輝は心当たりがあつたようで、文字が飛んで来たほうを向き、その人物を探す。

「どうしたんだ？それに、その文字……」

「ああ、多分これは知り合いが俺に向けて飛ばしたやつで……お、いたいた！」

一輝はそう言いながらそちらに歩いていき、その方向からも小学生が三人ほど歩いてくる。

「久しぶり、静寂ちゃん。そっちの二人は友達？」

『はい。学校の友達で、私から見て右の子が芹澤久留巳ちゃん、左の子が桐崎ココロちゃんです。』

「久留巳です！初めまして！」

「桐崎ココロと言います。寺西さんの話は静寂からかねがね。」

「うん、とりあえず呼び方は苗字以外でよろしく。」

一輝は対称的過ぎる二人に少し驚きながら、そういった。

ちなみに、静寂は一切喋っていない。全て、手に持っているペンで空中に文字を書き、一輝の前まで飛ばしたものだ。

『ところで、そちらの方は誰ですか？』

「ん？ああ、コイツか。俺が今日から担当することになった。」
「えつと・・・木の葉天狗の求道丸だ」

求道丸は求道丸なりに子供達を怖がらせないように、頑張っている。
「へえ、かずやんはまだ卵なのに妖怪の監視なんてやってるの？」

「かずやん・・・まあいいか。ああ、ちよつと頼まれてな。」

「大変ですね。卵での監視はかなり大変だと思いますけど。」

「それでもないぞ。今までも四人ほどやってたし。」

一輝はそう言いながら後ろで静寂が持っているものと同じペンで文字を書き、静寂の元まで飛ばす。

『この二人、どこまで話した？』

『かずさんに助けてもらったことと、かずさんが卵だと言うこと、かずさんがどんな人か、と言ったところです。正体とかは話してませんよ。』

『そう。ならいい。』

一輝の文字数が少ないのは、ペンの使い方に慣れていないからである。

逆に普段から使っている静寂は、綺麗な文字を、それも文字数が多くても会話をすると変わらぬスピードで書いている。

「そういうえば小学生の中には俺みたいに妖怪を人間社会に混ぜようとするヤツを否定するのが多いって聞いたけど・・・」

「まあ、確かに多いね。バカな男子とかは、よく言ってる！」

「私達については、私が妖怪とのハーフなのでそういうことは少ないですね。」

「ああ、そうなんだ。確かに、言われて見れば・・・」

求道丸は会話に入れずにいたが、一輝がどんな人間なのか判断しようとしていた。

まあ、まだ全体像はつかめていないのだが。これまでの一輝と言う人間は、面倒がったかと思ったら求道丸を圧倒し、さらには自分を更生させようとし、こうして小学生と談笑している。

つかめ、と言う方が無茶だろう。

「そういうえば、三人とも学校はどうしたんだ？」

『運動会の代休ですよ。かずさんも来てくれたじゃないですか。』

「そういえば、そうだったな。」

「むしろ、かずやんの方がどうしてここにいるの?」

「ウチの兄は、まだ中学で授業を受けている時間ですが。」

「最近の小学生はしつかりしてるな。」

一輝は自分の現状があまり誉められたものではないため、少し言いよどむが……

「まあ、必要があつてサボつた。」

『ダメじゃないですか。私には真面目に学校通えよ、つて言つてたのに。』

「そうそう!ウチだつて受けたくもない授業をちゃんと受けに行つてるのに!かずやんズルイ!」

「中学三年と聞いていましたが、入試は大丈夫なのですか?」

「いや、ココロちゃんはしつかりしすぎ……まあ、もう決まつてるから。」

一輝はこのころには既に、今いる高校への入学が決まつていた。

ついでに、学校の生徒の安全を守る、学校在住陰陽師の次期トップになることも。

『じゃあ、私達はこれから遊びに行くので、もう行きますね!またお会いしましょう!』

余談だが、一輝たちがいるホームセンターは、スーパーマーケットの中の一店舗、他に遊び場はいくらでもある。

「うん、また食事にも来いつて彩夏にも言われてるからな。また行くよ。」

「次は一緒にあそぼーね、かずやん!」

「私にも、陰陽師関連で話を聞かせてください。」

「ははは……うん、分かつた。」

その会話で、三人組は走り去つていった。

もちろん、求道丸にも挨拶をするのは忘れずに。

「さて、それじゃあ行くか。」

「……あの、さつきの子つて……」

「ん？どの子？」

「静寂、って子。」

求道丸は、目的地までの道中にそんな話を始めた。

「ん？惚れでもしたのか？」

「ちげえよ！」

「冗談だ。で？静寂ちゃんがどうした？」

「ああ・・・喋れないのか？」

「そう、喋れないな。」

一輝は特に気にせず話しをしていく。

先ほどの間に静寂から聞かれたら答えていいと言われているので、
気にする必要もないのだ。

「全部話すのは大変だから止めとくけど、あの子は昔実験体にされて
てな。」

「実験？」

「ああ。人から言葉を奪い、我らが神々との感応力を挙げる、って言
う。」

「それって、まさか・・・」

求道丸は一つの予想をし、一輝はそれに答える。

「ある家族の元から浚われて、声帯をつぶされた。」

「その家族ってのは・・・」

「皆殺しにされたよ。で、捕まってたところを俺が連れ出したって訳。
あのペンも、俺がプレゼントしたやつでな。呪力を込めながら空中に
文字を書くとその文字になって残り、視界の中の人になら、目的の
人のところまで飛ばしてくれるんだ。」

ちなみに、実験自体は成功みたいな感じでかなり強い陰陽師、と最
後に付け加えながら、一輝は必要そうな道具を見繕って求道丸に持た
せていく。

選ぶ基準としては、①異常に丈夫。②普通異常の重さ。の二つだ。

それくらいでないで、求道丸が振るった際に壊れかねない。

「よし、こんなもんだな。後は・・・種。あそこなら土はあるし、他に
も必要なものは・・・あ、木材がいるな。」

「木材？」

「ああ、木材。そう考えると他にも結構・・・オイ求道丸。この辺の荷物も全部持て。」

「ああ・・・って、おい！前が見えねえ！」

「それくらいは何とかしろ。さて、木はこれとこれと・・・」

「まだ増えるのかよ！」

一輝は求道丸の手の上にとんどん木材を載せていく。

途中で何度もふらつく求道丸だが、どうにか物を落とさずにバランスを取り、力を加える。

そして、そんな状態の二人にホームセンターの店員が近づき・・・

「あの、台車使います？」

単純な解決策を提案した。

|||||

「さあ、ここが今日からお前がやる畑だ。やり方とかは天狗だし、分かるだろ。とりあえず、種植えたりしとけ。」

「いやその前に説明しろよ！なんなんだよこの空間!？」

一輝が家に帰らずに空間倉庫の一つを開き求道丸をつれて中に入って説明すると、求道丸はそう叫んだ。

まあ、入ったら畑が広がっていて、上を見上げれば空と太陽があるのだ。当然だろう。だが、

「知らん。ここについては俺にもよく分からん。ま、危険ではない。」

「んなテキトーな・・・まあ、畑とかかについては分かるからいいけどよ。」

求道丸はぶつくさ言いながらも道具の中から必要なものを取り、作業を始める。

「さて、俺も始めるか。家作り。」

そして、一輝も求道丸が住む家を作り始めるのだった。

短編 畑の天狗、今に至るまで ④

あれから求道丸は言われたとおり、野菜を作っていた。

一度負けた以上、言うことは聞くようだ。

「へえ、本当に畑やるの初めてか？」

「まあ、これでも天狗だからな。遺伝子レベルでこの類のことは得意なんだよ。」

「ふうん。じゃあ、もう次のステップに行くか。」

一輝はそう言いながらでかい台車を持ってきて、求道丸に渡す。

「じゃあ、そうだな・・・初めてだし十個ずつでいいか。」

「何がだ？」

「売りに出すやつだよ。全部十個ずつ乗せて、この地図のところに行つて来い。俺のほうから話は通しておくから」

余談だが、この倉庫の中では季節に関係なく野菜を育てることが出来るため、結構な種類の野菜があったりする。

「売りにつて・・・は？」

「そのまんまの意味。朝市でこの野菜を売つて来い。相場とかは、向こうに行つて向こうの人に聞け。さすがに俺は知らん。」

「まあ、わかつたが・・・あ、その前に。」

求道丸はそう言つて畑中を走り、種類一個ずつの野菜を取つてきて一輝に渡す。

「一応、ここを貸してもらつてる身だし、殺されずに済ませてくれるからな。」

「お、くれるのか。」

「最低限の礼儀だ。」

「意外と堅いんだな、オマエ・・・」

一輝はそう言いながら地図と一緒に紹介状を渡し、求道丸を送り出した。



「えつと……この辺りか？」

求道丸がついたところには、お寺があった。

「えつと……スイマセン。ちよつといいですか？」

「なんだい？」

求道丸は、とりあえずお寺の住職さんらしき人に話しかけた。

「あの……俺、寺西一輝って陰陽師の卵に言われてここに来たんですけど……」

「ああ、あの子の紹介かい。なら、君は妖怪だね？」

「はい。木の葉天狗の、求道丸と言います。」

「そうかいそうかい。なら、あそこにいる人のところに行きなさい。あの人に朝市のこととは任せてあるから。」

「はあ……ありがとうございます。」

求道丸はお礼を言ってから、住職が指差した方へと歩いていき、その人に話しかけた。

「あの……」

「なんじゃ？」

「えつと……寺西一輝の紹介できたんですけど……」

「一輝の？」

「は、はい……あ、これ紹介状です。」

求道丸はその人の持つ雰囲気呑まれ、パツと招待状を渡した。

謎の威圧感がある人は、話しかけづらいものだ。

「ふうん、なるほど……更生期間中の妖怪か。持ってきた野菜はそれか？」

「あ、はい。一輝がとりあえず十個ずつといたので……」

「初めてのやつにこんな持たせたのか、あの小僧は……その形の悪いのは何だ？」

「あ、これは……初めてなので、こういうのを食べてもらって、味を知ってもらおうかと……」

指差された一部の野菜を見て、求道丸は答えた。

「なら、売り物じゃねえんだな？」

「はい。」

「一つよこせ」

求道丸はすぐに渡した。

そうしないと何かされるんじゃないか、という恐怖のもとに。

そして、渡されたものが食べられていくのを、黙ってみていた。

「・・・あそこの木のすぐ前。そこで売ってる。」

「はい、わかりました。・・・あ、それと。」

「なんだ？」

「売値を教えてください。」

「あんの小僧・・・この表のとおりに売れ。大体こんなもんだ。」

「あ、ありがとうございます・・・」

求道丸は言われた場所まで行き、表に書いてある値段を参考にして
値札を作り、野菜の前に立てる。

そのままお釣りの確認などをして、やることもなくなったので求道
丸は辺りを見回す。

「へえ、野菜だけじゃなくて果物に魚。肉や卵も売ってるのか・・・あ、
服とかもあるな。野菜を売ってるのは・・・俺とさっきの人だけ・・・」
そんなふうには朝市の確認をしているうちに朝市は始まった。

そして、新しく見る顔を珍しく思ったのか、一人の女性が求道丸の
前まで来た。

「あらあなた、始めてみる顔ねえ。新しく来た人？」

「あ、はい。今日始めてきました、求道丸と言います」

「そう。若く見えるけど、いくつなの？」

「いくつ・・・スイマセン。俺、妖怪なんで、途中で数えるの止めちゃっ
たんですよ・・・」

「あら、妖怪さんだったの。そうは見えないから、驚いちゃった。」

求道丸は自分が妖怪だと知っても何も変わらない相手に、少し驚い
ていた。

「あら宮田さん。その人は新しい人？」

「ええ、宮崎さん。何でも、妖怪なんですって。」

「あら、やけに若いと思ったら、そうだったの。何て妖怪？」

「えつと・・・木の葉天狗です。」

「聞いたことないわねえ・・・赤っ鼻とは別の？」
「別ですね。」

求道丸は相手の勢いに押されながらも何とか対応し、ようやく野菜の話に入った。

「ところで、この野菜は時じいのテストを何回で合格したの？」

「時じいのテスト？」

「ええ。ここで物を売るには、あの人のテストを合格する必要があるのよ。」

求道丸は指差された方に先ほどの人がいるのを見て、何の事だか理解した。

「アレ、テストだったのか・・・今日持ってきて、すぐに許可されたけど・・・」

「あら、珍しい。あの人が、中々許可しないことで有名なのに。」

「そうなんですか？」

求道丸はすぐに許可を貰っていたので、信じられない様子だった。

が、二人はそれに気付かず、野菜に興味を示す。

「そんな野菜なら、食べてみたいわね・・・」

「あ、それなら。形の悪いのでよければどうぞ。」

「いいの？」

「どうせ売り物になりませんからね。味を知ってもらうために持ってきたんです。」

求道丸はそう言って野菜を切り、さらに乗せて差し出す。

二人はその野菜を食べ、

「あら、おいしい！」

「すごく美味しいわ、これ！時じいもこれなら許可するはずよ。」

「ねえ、これ農薬とかは使ってるの？」

「いえ、使ってませんよ。害虫とかは、自分でとるか自然素材のものでどうにか。」

天狗の知識は、一部の分野で人間のはるか上に行く。

「体にもいいし、時じいも認める野菜。それなら安心ね。キュウリと大根、それにトマトももらえるかしら？」

「私は白菜とキャベツ。」

「あ……ありがとうございます！」

求道丸は自分の作った野菜が売れたことに喜び、嬉々として野菜を渡した。

そしてそれから、その二人がうまく働いたのか、次々と野菜が売れていく。

そこには、求道丸の性格もあつたのだろう。

最初の二人はまだ子供がいる、位の年齢だったが、基本この朝市に来る客の大半は老人ばかりだし、売る側もそんな感じだ。

そんな中で求道丸のような（見た目）若い者がいれば人は興味を持つし、何より求道丸は老人の話をつまらないと感じることなく聞く。

そういった人のほうが知識を持っていることは分かっているし、妖怪に自分の年齢を数える習慣がないだけで、求道丸はまだ三十ちよい。

先人を敬う心を、フルに発揮している。

そして、そんなペースで売れていき、完売とは行かなくても大部分が売れたところで朝市は終わった。

「ふう……終わった。」

「ねえ君。」

「は、はい。なんででしょう？」

終わって一息ついていたらところに声をかけられて、求道丸は驚きつつも対応した。

「ゴメンゴメン、驚かせちゃったね。ここに来るのは初めてだろう？もうみんな移動しているよ。」

「え……？あ、本当だ」

求道丸は辺りを見回し、もうほとんど人がいないことに気付く。

「もしかして、終わったらすぐに出て行かないといけないとかですか？」

「そう言うわけじゃないんだけどね。基本、朝市が終わったら皆でじいばあ食堂に行くことになってるんだよ。」

「そうなんですか……どうしてですか？」

「朝食を皆でそこで取るのが習慣になっていてね。売れ残ったもので豊ばあに作ってもらうんだよ。」

「そうなんですか・・・そこって、俺も行って大丈夫なんですか?」

「当然じゃないか。」

「じゃあ、すぐに行きます!」

求道丸はそう言って準備し、教えてくれた人を台車に乗せてから急いでじいばあ食堂に向かった。

もちろん、安全を第一に配慮して。

短編 畑の天狗、今に至るまで ⑤

「はい、到着です！」

「いやあ・・・車より早かったねえ・・・」

「体術ばかりを強化した妖怪なのだから、当然だろう。」

「ん？遅かったじゃねえか。」

「あ、どうも。終わったらここに集まってるとは知らなくて・・・」

「一輝のヤツは何にも教えなかったんだな・・・」

頭に片手を当ててそう言うのを、求道丸は苦笑いで見ていた。

「で？あまった分はドコだ？」

「あ、表の台車に乗ってます。」

「すぐにもつてきて、そっちのばあさんに渡して来い。」

そう言いながら台所を指差したので、求道丸は初めの三分の一程度余ったものをまとめて運び、奥にいたおばあさんに渡す。

「あの・・・」

「あそこでの朝市では、毎日売れ残ったもんで朝食を作ってもらって一緒に食べることになってんだ。」

「ああ、それで残ったものを・・・」

求道丸はようやく現状を完璧に理解し、席に着いた。

「あ、時爺さん！ちよいとこつちにきてくれ！」

「なんだ、まったく・・・」

求道丸はそう呼ばれていったのを聞き、どこか引つかかったように頭を捻る。

「あれ？時じいってどこかで聞いたような・・・」

「野菜づくしじゃないかい？」

「あ!!」

求道丸は一輝に初めて食わされた定食を思い出す。

「じゃあまさか、あの人・・・？」

「そう。野菜づくし定食の野菜は、あの人畑で取れたものだよ。」

「知らなかった・・・」

求道丸が驚いている間に、全員分の朝食が運ばれてくる。

「つて、調理スピード速くないか・・・？」

「ああ、君は知らないのか。豊ばあは千手様なんだよ。」

「・・・はい!？」

さすがの求道丸も驚いて固まっている。

すぐそこに千手観音・・・神様がいたのだから、当然だろう。

「気まぐれな人でねえ・・・何を思ったのか、急に顕現して、食堂をやりたい、つて言ったらしいんだよ。それが確か・・・百年位前かな？」

「そんなこと、あるのか・・・」

「あつたみたいだよ。でも、証言できる人はいないんだよね。」

「できましたよー。皆さん、運んでください。」

そして、豊ばあが料理の完成を告げたことでその話は終わりとなった。

|||||

「おかえり、求道丸。初日はどうだった？」

「もつと前もつての説明が欲しかった。」

「何の問題もなかった用で何よりだ。」

一輝がそう判断したこと求道丸は眉を顰めるが、一輝はそんなこと気にもせずに話を進める。

「とりあえず、今日から来年のお前が捕まった日までは朝市に参加してもらおうから。」

「それが、俺の更生期間か？」

「さすがに、誰も殺していないとはいえ意図的にやってたからな。問題なし、と頭の堅い連中に平和的にハンコ押させるには、一年は必要だったんだよ。」

「まるで、平和的じゃなければ方法はある、みたいな言い方だな。」

「実際、あるからな。」

はつきりと言い放つ一輝に求道丸は一瞬ほかんとしたが、すぐに話を戻す。

「じゃあ、俺がその間問題を起こさなければ、それで終わりなんだな

？」

「ああ。一部の例外を除いて人に手を出したり、とかをしたらその瞬間にアウト。」

「いつそ逃げた場合はどうなるんだ？」

「逃げれると思うのか？」

一輝の実力は求道丸も知っているため、何も言い返せない。

「まあなんにせよ、一年頑張れば更生期間も終わり。人間と供に暮らすにしても暮らささないにしても、陰陽師に殺される心配はなくなるから。」

「それは助かるが、それでオマエに何の得があるんだ？」

「得？」

一輝は求道丸の言葉を理解できずに少しばかり時間を要したが、話の内容を理解する。

「ああ、そういうことね。はいはい。」

「で、どうなんだ？」

「そうだな・・・ないんじゃないか？」

一輝の発言に、求道丸は再び口を開いて固まる。

「まあ、一応陰陽師課の上から報酬は出るんだよな。全然割に合わないけど。」

「・・・ホント、なんでそんな仕事してるんだ？」

「前にも言っただろ。暇なんだよ。」

「嘘だろ、それ。」

求道丸ははつきりと決め付けた。

まあ、何度か一輝の仕事にもつき合わされているため、一輝がそこまで暇な生活をしていないことくらいは分かるのだ。

「信じてもらえないなんて、酷いなあ・・・」

「絶対に違う、つていえる証拠を見せられたからな。で？実際のところは？」

「気分。」

求道丸が青筋を立てたので、一輝はまあまあ、と落ち着くように手振り以示す。

「これについては、わりと本気の原因なんだよ。なんとなくやりたい
と思ったから、なんとなくでやってる。」

「・・・変人？」

「知り合いからは問題児って言われることが多いな。」

「ああ・・・」

「納得したような声を出すな。」

求道丸の心から納得した声に対して一輝が抗議の声を上げるが、何
の意味もない。

だって、一輝なのだから。

「いや、普段の行動見てる限りだと、問題児ではあるだろ。それだけ
じやなさそうだけだよ。」

「そうか?・・・まあ、そんなもんか。」

一輝はそう言いながらまとめていた資料を空間倉庫に放り込み、求
道丸のほうをむく。

「じゃああらためて、初日お疲れ様、求道丸。」

「おう。売り上げはどうでしたらいい?」

「それ使って、必要なもんを買え。何か新しく育てたいものがあつた
ら、それでもいいかもな。無駄遣いはするなよ?」

「了解。それなら、今から買いに行ってくる。」

「ほいほーい。」

そして、求道丸は何日かけて果物を育てるのに必要なものをそろ
え、倉庫の中で育てるもののバリエーションを増やしていった。

短編 畑の天狗、今に至るまで ⑥

「お買い上げ、ありがとうございますー!!」

求道丸が一輝に捕まっただけからちようど一年、更生期間最後の日の朝。

求道丸はいつも通り朝市で野菜を売っていた。

「相変わらず、求道丸さんは元気ねえ。」

「あ、おはようございます中川の奥さん!いつもと同じなのでいいですか?」

「ええ、お願いします。」

求道丸は慣れた手つきで袋に入れていき、代金を受け取りつつ袋を渡す。と、その時。

「オイジジイババアども!」

へんな不良が、朝市に乱入してきた。約二名。

「毎日毎日ウゼエんだよ労害!」

「いつもこまけえことグチグチと言ってきて、」

ドゴン!

そんな音が彼らの間でなり、一気に青ざめる。

音の発生源は、もちろん求道丸だ。

勢いで二人の間に拳を振り下ろし、一つのクレーターを作り上げていた。

「……今すぐ消えるか、これを喰らうか、どっちがいい?」

「……ど、どうせそんなことできやしねえ、」

次の瞬間、求道丸に本当に軽く殴られ、吹っ飛んだ。

「もう一度聞くぞ?今すぐここを立ち去るか、それとも……」

「……ヒッ」

求道丸はもう一人の鼻先数ミリの位置で拳を止め、それ以上は何も言わない。

が、それでも十分に通じたようで、そいつは気絶している相方も連れて逃げて行った。

相方を忘れなかったのは奇跡だろう。

「はぁ・・・あ、ヤベ。手出しちゃった・・・」

求道丸は一輝以上に感情に任せて行動するので、今になって後悔し始めた。

そして、そんな求道丸の耳に低い声が聞こえた。

「ほう・・・やはり、人間のガキでは何もできんか。」

「・・・誰だ!」

求道丸は自分の斜め上から聞こえてきた声に振り返る。

そこには、燃える車輪が浮いていた。

「・・・ほんとに誰だ?」

「オレの名を知らぬのか・・・妖怪の中ではそこそこに有名だぞ?」

なんとも拍子抜けする会話である。

「では改めて・・・オレは火車だ・・・といえば分かるか?」

「・・・ああ!こんなところに顕現する妖怪だったか?」

「それには、少しばかり事情があるのだ。」

「事情?」

求道丸はそれによつては一輝に相談しようと思った。

「うむ。最近死者が少なくてな・・・で、だ。仕事をするためにも自ら

殺そうと、」

「ふざけんなあ!」

が、一考の余地もなかった。

「いやいや、オレも無差別に殺すつもりはないぞ?一昔前なら死んで

いた歳のを殺すくらいなら、」

「い・い・わ・け・ねえだろ!!」

求道丸はそう言いながら、手が火傷するのものとわずに下から殴り

上げ、自分自身も火車の上まで跳ぶ。

「ま、待て!オレたち妖怪にとつてその存在理由を保つことがどれだ

け大切なことかくらい、」

「知る kann こと!俺は、実際にこうして問題なく暮らせてるんだよ

!」

そして、両の掌を合わせて頭上にもつてきて、

「是害流体術究極奥義、超絶虚空!!」

思いつきり叩きつけ、火車も地面に叩きつけられてボロボロになる。

が、そのまま姿を薄れさせていき、消えた。どうやら逃げたようだ。「はあ．．．これはもう、言い逃れできねえな．．．」

求道丸は目の前と後ろに出来ているクレーターを見て、肩を落としながら、のろのろとした動きで一輝の家に向かって歩き出した。

＝＝＝＝＝＝

「あ、別にオマエ何にも問題起こしてねえぞ?」

「．．．え?」

「いや、妖怪と契約してたバカをとつちめて、その大元の妖怪を追い払ったんだから、問題あるわけねえじゃん。」

「いや、でも、証拠とか．．．」

「証拠1、あの朝市の場にいた人全員からの証言。証拠2、妖怪と契約したバカ共は既に捕まってる。あってるよな、悟?」

「ええ。全て証拠として受理されました。」

一輝の質問に、その場にいた男性が答える。

「その人は．．．」

「あ、どうも初めました。私、刑事やってます悟です。今回の件について報告等に来ました。ついでに言うと、妖怪のサトリです。」

「んで、コイツに証人などの証言があってるかどうか、頭の中を覗いてもらって確認してもらった。」

求道丸が口をあけて固まっている間に、一輝はさらに証拠を取り出す。

「で、これが最後の証拠だけど．．．今回出てきた火車の魂。」

「．．．は!?!」

一輝がさらっと取り出した瓶を見て求道丸が目を見開く。

「さつき実体を解いて逃げてくのを見たから、ついでに封印した。ま、後は権力でも使えば文句を出すやつらはいなくなるだろ。」

「．．．．．オマエ、何者?」

「だから、ただの陰陽師の卵だよ。」

「にしては、一輝さんの権限って強すぎますよね。今回も、陰陽師課から直接、これ以上の調査をするな、という命令が来しましたし。」

「・・・ま、いつか。これから言うことは一応国家機密みたいなものだから、誰にも言わないでくれよ。」

つつても、もう結構の人にばらしてたりするんだけど、と一輝は前置きしながら話す。

「俺さ、これでも席組み第三席、『型破り』なんだよ。」

その一言に対して、二人は信じられない部分が多いながらも、納得してしまっていたためにこれ以上何も言っていなかった。

「じゃ、話を変えて・・・これからの求道丸について。」

「あ・・・そうか。もう今日で終わりか。」

「そうなるな。で、どうする？戸籍作ってどっかで暮らすならその辺りの手続きしてくるし、まだ人との共存は・・・って感じなら、その手続きをしてくるけど。」

「・・・どうするか・・・」

求道丸はない頭を捻って悩み、

「じゃあ、このまま、で。」

「というと？」

「アンタの倉庫を借りて、このまま農業を続けていく。」

「さらっと倉庫一個貸せて言ってきたな。」

一輝は少し驚きながらも、断ろうとはしない。

「で、何が目的？」

「そうだな・・・農業にはまった。」

「そ。まあ十分だな。たまには俺の仕事も手伝わせるからな？」

「了解！」

そうして、求道丸の倉庫残留が決定した。

ただし、求道丸に他の意図があったことを、一輝は知らない。

その意図とは、一輝という人間の底を知ること、だ。

まあ、いまだにその目的は果たされておらず、むしろ尊敬の念がはいつてきた結果、今の求道丸がいるわけだが。

余談だが、求道丸が破壊したもののや一年の間に起こした小さな問題は全て一輝が片付けていたということを知り、一生頭が上がらなくなった。

|||||

「と、そんな出会いだったよ。」

「・・・とりあえず、一輝さんがもといた世界でも規格外だった、ということは分かりました。」

「えー・・・」

乙 ①

ノーネーム本拠、農園。

黒ウサギやメイド、ちびっ子達は農作業にいそしんでいた。

「黒ウサギのお姉ちゃん！」

「はい！何でございましょうか？」

桑を持って畑を耕していた黒ウサギは、リリに呼ばれて手を止める。

「そろそろお腹がすくころかな、と思っておにぎり作ってきたよ！皆疲れてるだろうし、ちよっと休憩したらどうかかな？」

「わあ、有難うございますリリ！」

黒ウサギが喜んでいると、近くにいた音央と鳴央も近づいてきて、リリの持っているバスケットを覗き込む。

「美味しそうなおにぎりね。ちよっどお腹がすいていたのよ。」

「そうですね。皆で一緒に、太陽の下で食べるご飯というのも楽しそうですね。でも、少し多くないですか？」

「あ、それは・・・ちよっど張り切りすぎちゃって・・・」

リリが少ししよんぼりすると、黒ウサギがフォローに入る。

「御心配には及びませんよ！今日はあの四人も手伝ってくれるという約束ですし、余ることはありません！」

「えっそうなの？」

リリが首をかしげる横で音央と鳴央は顔を見合わせ、Dフォンを取り出す。

「YES！ちゃんと指切りをしましたから、もうそろそろ来るころかと・・・」

「大変です!!」

黒ウサギの言葉を遮り、ジンが慌てて走ってくる。

その手には一枚の紙が握られていた。

「えっと・・・ジン君。その手に持っているのって、問題児達から？」

「は、はい！今朝から四人の姿が見えないので・・・まあ、一輝さんはいつものことですけど、残りの三人は珍しいなと思って探していた

い・・・ではなく、倉庫いっぱい食べ物を買って食べている。

「なんだかずいぶんと楽しんでいるみたいね、貴方たちは。」

「おー。さっき買ったこの食い物もわりと美味しい。」

「こつちのも中々だよ。サーカスが来てるみたいで屋台が出てたから、ゲームしてたくさん貰ってきた。二人も食べるか?」

「食べる!」

一輝が倉庫を開くと、耀が手を突っ込んで頬張り始める。

余談だが、一輝は一切お金を支払っていないし、ゲームもしていない。

普段からの人助けの結果、屋台の人が快くくれたものばかりだからだ。

「ねーねーそこ行くかわいいお二人!よければウチのコミュニティに入らない?」

そして、そんな事をしながら歩いていたら、飛鳥と耀の二人が分かりやすくナンパにあった。

そして、次の瞬間にはそのナンパ野郎の肩を一輝がつかんでいた。

「すいませんが、ウチのコミュニティのものにちよつかいかけないでもらえますか?殺すぞ?」

「ん?何言ってるの?」

どうやらナンパ野郎は一輝との格の違いに気づけていないようで、一輝を挑発しにかかる。

が、一輝からしてみれば全然怖くない。始めてあったころの豊の方が怖かったなあ・・・すぐのしたけど、とか考えている。

「まあまあ、ちよつとあつちで肉体言語おはなししましょう?」

そして一輝はそいつを連れて行き・・・いつぞやのように雷を落とすから三人に合流した。

「お待たせ。悪い悪い、ちよつと被害が少なくなる場所を探したら遅くなった。」

「一応お礼は言っておくけど、別にあの程度、私達でもどうとでもなったわよ?」

「うん。何の問題もない。」

「それは悪かった。まあ、ちよつとしたうさ晴らしだと考えてくれ。」
一輝としては、元の世界にいたころのマヤの一件のときのやつら
思い出しただけで、二人を助けようとかは一切ないのだ。

「うさ晴らし？ 何かいやなことでも」
「どいてどいてー！」

耀が一輝に聞こうとしたタイミングで、一人の少女が四人の間を走りぬけた。

「な・・・何なの!？」

「待てやくソガキーツ!!」

そして、その少女をエプロンをした、肉叩きを持ったおっさんが追いかけている。

そのまま二人は口論になるが、十六夜が投げた紙くずによつて強制終了させられる。

「ああすまん。ゴミ箱と間違えた」

「ちよつと十六夜君。ゴミにゴミをぶつけてどうするのよ。ちゃんとゴミ箱に入れなさい。」

「そうだよ。箱庭でもマナーは守らなきゃゴミがかわいそう。」

「いや、きつとゴミはゴミ同士仲良くやっていけるさ。」

「それはないだろ。紙くずはリサイクルできるんだぞ。」

そして、ピクピクしているおっさんを放置して四人は歩き出す。

「それに早く逃げないと・・・」

「うん、背後に何かいるよな・・・」

「見ーっけーまーしーたー」

が、背後に鬼の形相で立っていた黒ウサギから逃げることは出来なかった。

結局、黒ウサギの説教が始まる。

「まったく、どうして皆さんはそうじつとしてられないんですか!!? 音央さんに鳴央さんも一輝さんに順応してきて『別にいいんじゃない?』『そうですね。』って言うてきますすし!! 毎度肝を冷やす黒ウサギの身にもなつてくださいよ!!!」

あの二人の一輝への順応度がかなり高いレベルに達している。

「実は俺『じつとしていると髪が逆立ってしまう病』なんだ。」

「じゃあ私は『じつとしているとリボンが本体になってしまう病』。」

「じゃあ私は『じつとしているとスライムになってしまう病』。」

「なら俺は『じつとしていると檻の中の存在全てが支配下から離れてしまう病』。」

「反省の色なしということは把握しました!というか、一輝さんののは冗談になりませんよ!?!」

かなりの大惨事が予想される。

「まったくもう。皆さんはコミュニケーション『ノーネーム』の一員なのですよ!?!あまり軽率な行動をして仲間に心配をかけないでください!!」

そのあともクドクドと黒ウサギの説教が続けられるのだが・・・

「あのさあ、黒ウサギ。」

「実はもう、揉めちやってたりする」

「!!?!」

怒りの形相で立っているおっさんを見て、説教は終わりを迎えた。

乙 ②

「さつきはよくもやってくれたな、小僧……こりや仕返ししねえと腹の虫がおさまらねえぜ……」

肉屋のおっさんは、怒りの形相で十六夜を見ながらそう言った。が、黒ウサギ以外誰も怖がっていない。

「皆さん！誰ですか、この敵ついハンバーガー屋さんみたいな人は!？」

「先日リストラにあつてムシヤクシヤしている元ハンバーガー屋さんだ」

「それと、極度の幼女趣味の持ち主よ」

「さらにはシヨタコン。」

「オマケに十二歳より上は老婆とみなす、十二歳以下限定の両刀さんだ。」

「勝手に設定を作るな!!」

問題児達は、今日も絶好調である。

そんな様子の五人に、先ほどぶつかってきた少女がおっさんについて説明してくれる。

「そいつは肉屋のカラッチ・トーロって言って、最近この町で好き放題やってる悪党だよ!」

「あら、貴女まだいたのね。」

「怪我とかしてないか?」

「あ、それは大丈夫。」

一輝に手を取られ、少女は立ち上がった。

「で、カラッチについてだけど……相手に対して不利なルールを設定して、力で脅して参加を強制して来るんだ!!」

「へえ、そんなヤツなのか。」

一輝の声から、優しさなどが一切消えた。

残ったのは、純粹な怒りだけだ。

「十六夜、飛鳥、耀。ちよと付き合ってもらってもいいか?」

「ああ、いいぜ。」

「私もいいわよ。」

「うん。」

三人の許可を得たところで一輝はカラツチの元まで歩いていき……殺気を振りまく。

「さて、クズヤロウ。選択肢を二つだけくれてやる。一つ目は、俺に再起不能なまでにボコられる。二つ目は、今ここでギフトゲームを開催する。さあ、どうする?」

一輝の殺気にカラツチは声も出なくなるが、どうにか持ち直す。

「ふ、ふん! 所詮はノーネームだな! てめーらみてえに群れてるガキは、全然身の程つてヤツをしらねえ!」

「うるせえハンバーガー。」

「そうよ、うるさいわロリコンさん?」

「うん。シヨタコンうるさい。」

「言いたい放題言いやがるな!?!」

「いいからさっさと開始の宣誓をしろ。」

三人に突っ込んで多少は余裕が出来たのか、カラツチの調子が元に戻る。

「まあ待て。その前にゲームステージの準備だ!」

カラツチがそう言うと、五人の周りの風景が変わっていく。

変化が終わると、そこにあるのは迷宮だった。

『ギフトゲーム名 “ラビュリントス”』

・プレイヤー

・逆廻十六夜

・久遠飛鳥

・春日部耀

・寺西一輝

クリア条件

・ステージの謎を解き迷宮を突破。又はステージ内にいるホストを打倒。

敗北条件

・降参もしくはプレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓

上記を尊重し、両者はギフトゲームを行います。

“カラツチ・トーロ”印

“ノーネーム”印

「わあすごい・・・巨大迷路だ・・・」

「中々楽しそうなステージじゃない。」

「これだけのステージを準備できるってことは、あれもそこそこのギフト保持者なのか・・・黒ウサギ、どうした？固まってるぞ？」

一輝が黒ウサギの目の前で手を振ると、黒ウサギははっと戻ってきた。

「何て事をしているんですか、一輝さん!?挑発してギフトゲームを開催させるなんて!」

「ムシヤクシヤしてやりました。反省はしていません。」

「だまらっしゃい!せめてゲームの内容を確認してから、」

「おい。チップのところ、ウサギ肉贈与って書いといたぞー!」

「何やってるんですかおバカ様!」

黒ウサギはハリセンで一輝と十六夜の頭をはたく。

「ウサギ肉って黒ウサギのことですよね!」

十六夜と一輝はシンクロした動きで領いた。

「鬼悪魔ド外道ーツ!!」

「ああ、うん。俺鬼道っていう外道の一族の人間。」

「そう言う事を言っているではありません!!」

「まあまあ。きつと美味しいハンバーガーになるぜ。」

十六夜が茶化したことにより黒ウサギが涙目になるが、そこに四人が慰めの言葉を掛ける。

「大丈夫よ、黒ウサギ。勝てば何も問題ないのだから。任せておきなさい。」

「私、頑張るよ。黒ウサギがハンバーガーにされないためにもね。」

「まあ、そう言うことだ。俺たちがあんなのに負けるはずがないだろう?」

「俺たちは楽しむためにこの箱庭に来たんだ。簡単にクリアできる

ゲームじやつまらねえ！」

十六夜が黒ウサギに早く来るように促すと、黒ウサギは涙を流しながら十六夜の手をとる。

「い、十六夜さん……皆さん……なんと頼もしい……黒ウサギは、貴方達三人が着てくれて本当に……本当によかったです……！」

黒ウサギは一度落とされていた分、かなり強い感動に包まれながら、膝を立てる。

「それで？とりあえず啖呵きつたはいいけど何か作戦はあるのか？」

「えっ別に私作戦なんて考えてないけど。」

「私もとりあえず便乗してみただけだし……」

「俺は感情に任せて行動しただけだしな。」

「何だ勝算ゼロかよ！テキトーにいくかー」

「まあ、何とかなるだろうし。」

引きずられている黒ウサギは、再び泣きたくなってくる。

「ぜ……前言撤回……」

今回のことを、一輝は後に『落として上げて落とす作戦』と呼んでいる。

「やっぱりとんでもない問題児達ですっ!!!」

|||||

「作戦会議を行いましたよう！闇雲に動いても無駄に体力を消耗するだけですから、突破口となりうる」

「気をつけて進む！」

「前向きに進む！」

「勘を頼りに進む！」

「明日を見据えて進む！」

「二「ガンガン進もうぜ!!」二」

「作戦会議終わったー!!!」

以上、飛鳥、耀、一輝、十六夜、四人の順にお送りしました。

乙 ③

「全く、皆さんは石橋をたたいてわたると言う言葉を知らないのですか?」

「俺はそもそも、心配なら空を飛ぶ派だし。」

「あ、私も。」

確かに、それならわざわざたたく必要もない。

「全く、どんな罠が仕掛けられているのか分からないんですよ?とにかく十二分に注意して」

その瞬間、黒ウサギの姿が消えた。

前を見ていなかったせいか、油断をしていたのか、罠の落とし穴にはまったのだ。

「「ガンガン進もうぜ!!!」」

「お願いですから助けてくださいーい!!!」

さすがに放置はせず、一輝が倉庫の中から取り出したロープで黒ウサギを引っ張りあげ、

「あ、手が滑った。」

「きやあああああああ・・・」

再び黒ウサギが落ちた。

「ちよつと一輝君、何をしているの?早く引っ張りあげないと。」

「え?引っ張りあげた方がいいの、アイツ?」

「まあ、このまま放置していくのもなんだし。」

一輝はロープをしまいかけていたのだが、二人に言われて再びロープをたらし、黒ウサギを釣り上げる。

黒ウサギは完全にへそを曲げていたが、四人は放置してる。

「そうだ。春日部はグリフォンの力で空とべたよな?ちよつと上から迷路全体を見てくれねえか?」

「あ・・・うん分かった」

十六夜に言われて上空から迷路全体を眺めるが、両手で大きくバツ印を作る。

「ダメ・・・霧がかかっててあまり遠くまで見えないよ。」

「そうか・・・なら、一輝。ちよつと風を起こして霧を払ってみてくれ。」
「了解。」

一輝は言われたとおり風を起こすが、耀はバツ印を浮かべたままだ。

もうムダだと判断し、耀も降りてくる。

「そういえば以前本で読んだのだけど、こういう迷路は壁に右手をついて歩けばいずれ出口に・・・」

「それは平面的な迷路での話しだよ、飛鳥。」

「一輝の言うとおりだ、お嬢様。ここみたいに孤立した階段、建物があるところじゃ応用できないぜ。」

二人に言われ飛鳥はむすつとするが、すぐに別の案を思いついたようにギフトカードを掲げる。

「飛鳥、何をする気だ？」

「別に。要は出られればいいのだから・・・ディーン！壁を薙ぎ倒し、一直線に進むのよ！」

そして、ディーンに命令を出して壁を破壊させようとするが・・・それは黒ウサギがディーンの前に出て、庇いに出た十六夜によって止められる。

「なにやってるんだ駄ウサギ！」

「そうよ、危ないでしょう!？」

「す・・・すみません！反則だったものでっ!!」

十六夜と飛鳥は黒ウサギを攻めるが、黒ウサギはそう返した。

なんでも、クリア条件が「ステージの謎を解き迷宮を突破」であるが故に、迷宮としての形を壊すのはルール違反らしい。

「申し訳ごいません・・・」

「あなたは無理に判定を覆すと爆死するのだし、仕方ないわ」

「別に問題ないと思うんだが・・・」

一輝はポツリとつぶやいたが、それを聞くものは誰もいなかった。そしてそのまま黒ウサギの案内で歩き回るのだが、数時間後。

「あれ・・・この道、さつきも通りました？」

思いつきり迷っていた。

「はぁ・・・これだけ歩いてると、さすがに疲れてくるわね・・・」

「お腹空いた・・・」

「ハハハ・・・屋台で買ったのまだ残ってるけど、食べるか？」

「食べるー!」

一輝が耀の腹の音に苦笑いしながら倉庫から食料を渡すと、耀は嬉々として食べだす。

「やっぱ壊すか。速やかに!」

「爆死しろと、速やかに!?!」

「じゃあ、地震でも起こすか?大体ここが崩れるくらいのを」

「結局爆死するじゃないですか!!」

十六夜が壁に手を当てながら、一輝が量産型妖刀を抜きながら言う
と黒ウサギが全力で突っ込みを入れる。

「あ・・・でも見てください!なにやら大きな建物が見えましたよ!!あそこに入ってみませんか!?!」

「おおっ本当だ」

黒ウサギが指す方には、確かに建物があった。

「まって黒ウサギ。建物に入るならあっちの方が近そうだけど・・・」

「い・・・いやダメですよ!」

耀の言葉に、黒ウサギは少し焦ったそぶりを見せるが、女性陣二人は気にしない。

「こっちの道のほうが安全そうですから!ほらほら、お早くー!!」

「あらあらなんだか張り切っちゃってるわね。とりあえず、ここは黒ウサギについていきましょうか。」

そう言つて、女性陣は黒ウサギについていく。

「オイ、一輝・・・」

「ああ。間違いない。」

「OK。迷宮は任せた。」

そして、男二人も少し話してから歩き出した。

そして、進んだ先にあったのは壁面に囲まれた空間だった。

「ふうん。牛の頭に人の体。ってことはミノスカミノタウロスか?迷宮に糸玉、短剣・・・ミノタウロスっぽいな。糸玉もあったし。」

「お、そっちには糸玉があつたのか。」

一輝が糸玉を拾って弄っていると、十六夜が話しかけてくる。その手には、三つにばらされた短剣があつた。

「お、どうしたんだその短剣？」

「大切にもつておこうと思つてな。攻略に必要なアイテムだつて黒ウサギも言つてたし。」

そう言いながらも、さらに短剣を折る十六夜。

行動と言動がまるでかみ合っていない。

「確かに。じゃあ、これも大切に持つておかないとな！」

そういいながら、一輝はチャツカマンで糸玉に火をつける。

こちらもちちらで、行動と言動がまるでかみ合っていない。

「ちよ、ちよつと二人とも!？」

「一体何をしているのをございますか!!」

飛鳥と黒ウサギの二人から突込みが入るが、一輝と十六夜は「大切にだなあ……」と言いながら残骸を背後に投げる。

「何つて……なあ？」

「ああ。くだらねえ茶番に付き合つてやつてんだよ。」

「なあ、このゲームのクリア条件は何だった？」

二人は、黒ウサギにそう聞いた。

「何つて……『ステージの謎を解き迷宮を突破』『又はステージ内に潜むホストを打倒』ですが……」

「今ならもれなくその条件、二つ同時に満たせるぞ」

そう言いながら、十六夜は黒ウサギを思いつきり殴り飛ばした。

「な……」

「一輝！」

「おう！我が百鬼より出でよ、山男！この迷路を力づくでぶつ壊せ！」

一輝の体から現れた山男は、一輝の命に従つて力づくで迷路を叩き壊し、四人はもといた町に戻ってきた。

「戻つて……来た……?」

「私達が勝つたと言う事？」

女性陣二人が戸惑っているので、十六夜は倒れているおっさんを指

差す。

「見ろ、俺がさつき殴ったのはアレだ。」

「え．．．まさか、さつきまで私達が一緒にいたのって．．．」

「おっさん（変態）」

二人は全く同じタイミングでそう言いはなつた。

「まあ、変化のギフトでも持ってたんだろうな。で、黒ウサギが穴に落ちたときに入れ替わったんだ。」

「まさか、一輝君が落としたのも．．．」

「もちろん、わざとだ。あの時点でもう分かってたからな。」

「で、そこからずつと俺たちと一緒に行動して俺たちを誘導し、迷路が見た目ほどは広くない張りぼてのつくりだと悟られないようにしたんだ。」

「で、俺たちの体力の消耗を待った。耀が指した近道を通らなかつたのは、少しでも疲れさせるため。ディーンの召喚のときに焦ってたのは、それがクリア条件だからだ。」

二人の説明にしばし呆然としながらも、耀が質問した。

「でも、どうして二人はアレが偽者だつて分かったの？」

「俺は髪の色だな。アイツの髪は感情が高ぶったときに桜色になるのに、穴に落ちてからはテンションに関わらず桜色だったからな。」

「まあ、普段から割りと簡単に変わってたりはするけどな。俺は、霊格が圧倒的に下がってたからそれで分かった。黒ウサギは、なんだかなでかなりの霊格の持ち主だからな。」

「で、だ。何より決定的だったのは．．．」

二人は一泊置き、

「あんまりアホ面じゃなかったことか．．．」

「ああ．．．!!」

そこで納得するなよ、二人とも。

その後四人は黒ウサギと合流し、チップに貰ったバーベキューセットを見てなきながら突っ込んでくる黒ウサギをさんざん弄るのだった。

乙 ④

一輝たちは肉屋のおっさんのゲームの後ノーネームの本拠に戻っていたのだが、フェルナがお礼に、と持ってきたサーカスのチケットにより、再び町へと来ていた。

「そういえば、公演はいつからなのでしょいか？」

「えーっと・・・お昼過ぎからだって。」

黒ウサギに聞かれたフェルナはそう答えた。

「このサーカスって一日一回しか公演してないのに、あちこちから観客が集まってきてるから・・・」

「なるほど・・・つまりとても貴重なチケットなのですね!？」

黒ウサギは感極まってフェルナを抱きしめた。

「そのようなものを黒ウサギ達のためにわざわざ四枚も集めてきてくださったなんて・・・フェルナさんはなんと良い方なのでしょう!」「く・・・苦しいよ・・・」

フェルナは顔を黒ウサギの胸に押し付けられ、息が出来ずにもがく。

「それに比べてウチの問題児達と来たらもう大変でしてね!?いつもほんの少し目を離れた際に・・・」

黒ウサギが振り返ると、そこに四人の姿はなかった。

「やっぱり突然の自由行動してたー!？」

「わあああっ」

フェルナも若干呆れている。

そして、一人ずつ黒ウサギのまえに姿を現していく。

「ねえ黒ウサギ見てー!その露店のおじさまが『幸福になれるツボ』を格安で売ってくれたわよっ。」

「詐欺られてるんで今すぐリリースしてきてくださいっ!!」

世間知らずー。

「ポップコーンメガ盛りにしてもらった・・・。」

「もはや屋台荒らしじゃないですかッ!!」

大食らいー。

「着ぐるみが喧嘩売ってきたからボコつといたぞ。」

「謝ってくださいッ!!」

「やんちゃー。」

「悪霊に取り付かれてる人たちがいたから、ちよつと御払いして来た。魔王の残党かな、あれ。」

「あれ、予想外なことに問題児的行動じゃない!?」

「ついでに、屋台荒らししてきた。」

「つて、あなたもですかッ!!」

「ヤンチャな陰陽師ー。」

「二」祭りの空気に浮かれてやった。今は反省している。「三」

「せつかくの休日だと言うのに胃がねじ切れそうですう……」

「た……大変なんだね……」

そんなことをしているうちに、サーカスへ着いた。

「アハハハ皆様いらっしやいマシ。サーカス一座、トリックスター」

へ。お手持ちの平穏とお別れする準備はいいかな?アハハハハ!!」

なんとも陽気なピエロに出迎えられ、中へ入るよう促される。

「もうショーは始まってイルよ。お早く着席ッ!!アハハハハ!!」

そして中へ入ると、派手にサーカスが繰り広げられていた。

「イツツ、ショータイム!!」

そう、団長らしき人が言うと、猛獣使い、ピエロによる芸、小さな動物による音楽隊、猫娘による曲芸など、様々な形で観客を楽しませる。

「さあさあショーもいよいよクライマックス!ラストは大マジックで締めくくりますぞえ!」

そう言いながら、団長らしき人物は観客に向けて大声を出す。

「これからそのマジックの主演を一名、お客はんの中から選ぶさかい!」

そして、団長に当たっていたスポットライトが客席中を回るように照らしていく。

「それは……この方!」

そして、スポットライトが照らしたのは……黒ウサギだった。

「えっ!!えっ!?!く・・・黒ウサギですかっ!?!」

「おめでどうどすウサギはん。さあ、舞台の方へおいでやす。」

黒ウサギはあわあわしつつも、舞台まで下りていった。

「で・・・でも、何をすればよいのやら・・・」

「ご心配なく。ここに座ってるだけでええので。」

そんな黒ウサギの様子を見て耀が羨ましがるが、飛鳥がそれをたしなめる。

「・・・黒ウサギが選ばれたのって、偶然なのか?」

「どういう意味だ?」

「いや・・・これだけの観客がいる中で、今日急に来ることになった黒ウサギが選ばれるもんかな、と・・・」

「まあ、さくらを仕込んでおくことが多いからな・・・まあ、箱庭の貴族なら、こうして目立つのにもちようどいいから、じゃないか?」

「そんなもんか。」

一輝はどこか納得いかないようだったが、十六夜の説明にとりあえず納得する。

「ほんでは今から、こちらのウサギはんの姿を変えてみせるどす。」

そう言いながら黒ウサギに手を向け、カウントを始める。

「スリー! ツー!!ワン!!」

その瞬間、黒ウサギの姿が巨大な竜へと変わる。

「竜か・・・張りぼてかな?」

「さあ、な・・・」

「これで本日の公演は終了どす。皆様のまたのお越しを、待つとります。」

問題児達もあっけに取られている中、サーカスは終了した。

「・・・すごい・・・けど・・・」

「ええ・・・」

「黒ウサギ、どこに行ったんだらうな?」

|||||

「・・・お待たせ。」

「ああ。どうだった、お嬢様?」

「黒ウサギはどうしたって?」

「テントから出てきた飛鳥に、十六夜と一輝が尋ねた。」

「それが、スタツフに聞いたら黒ウサギは裏口から退場させた、の一点張りなのよ。」

「ふうん・・・じゃあ、今頃この辺りでもうろついてるんじゃないか、ってか?」

「つたく、面倒なことだな・・・」

「うん、先に帰るわけにもいかないしね・・・探す?」

「それしかない、な。」

「そう会話をしながら、方針を決めていく。」

「春日部の五感や、一輝の霊格探知である程度の居場所が把握できたりしないか?」

「それが・・・そう思ってきつき匂いをたどってみただけど、この町、漠然としすぎてて匂いの判別がつかなかったの。」

「俺のほうでも簡単に探ってみたりしたんだが、どうしてか黒ウサギが見つからん。式神も投入したんだがな・・・」

「全くどうしていいかわからずにいると、フェルナが四人の元に駆け寄ってきた。」

「とりあえず、向こうに宿を取っておいたの。どっちにしろ、今から帰っても暗くなっちゃうし、今夜はこの町に滞在したらどうかと思つて・・・」

「・・・それもそうね。とりあえず、一休みして、すぐに探しましょう。」

「一輝、帰るのが遅くなるって連絡してもらえるか?」

「了解。」

「一輝はDフォンを使って、念のために音央と鳴央の二人にメールを送る。」

「内容としては、『黒ウサギが行方不明になった。探してくるから、今日は帰れない』というものだ。」

乙 ⑤

宿で一休みしてすぐに搜索を始め（一輝は一切休まず、徹夜で探していたが）、途中で白夜叉が飛鳥にセクハラするなどの事態もあったが、その後で白夜叉から説明された、〃サーカスを見に行つたもの達が、帰つてこない〃と言う話を聞き、事態がよりいっそう深刻なものになる。

「なあ、ちよつといいか。それについては、こいつからも話があるんだ。」

十六夜はそう言つて、フェルナを指した。

それからフェルナが言つたのは、フェルナのコミュニティにも行方不明者がいる、という話だつた。

「ええっ!?!フェルナのコミュニティにも行方不明者がいるー!?!」

「う、うん・・・実は私、サーカスに行つたのは昨日が初めてじゃないんだ。」

そこからのフェルナの話を要約すると、

①前に行つた際にも黒ウサギのように一人帰つてこなくなり、聞いても『裏口から退場させた』の一点張り。

②サーカスが怪しいとは思つたが、フェルナたちでは打つ手が無い。

③そんなときに四人と出会い、何とかしてくれるんじゃないかと思つた。

④そして、四人をサーカスに誘つた。
の四点だ。

「危険だとは分かつてたんだけど、そうするしかなかったの。それに、まさか黒ウサギさんが巻き込まれるなんて思つてなくて・・・」

「・・・」

一輝たちはどう返したらよいか分からず、少し黙つてしまう。

そして、最初に動き出した一輝は、フェルナの頭に手を置き、

「中々見る目があるな、お前。依頼達成率百パーセントの俺に頼んだのは正解だぞ。」

「え……」

「ま、どうせ黒ウサギを取り戻さないといけないんだ。一緒にフェルナの仲間も助けてやるから、任せとけ」

「お兄さん……」

「皆も、そんな感じでいいか？」

一輝は四人のほうへ振り返りながらそう尋ねた。

「ええ、それでいいわよ。にしても一輝君、こういうことになれているのかしら？」

「まあ、慣れてるよ。こんな依頼も、たまにあつたし。」

「達成率百パーセントっていうのは……？」

「事実。依頼のフリをしてだましてたのは除くと、だけどな。」

全体の方針が決まったところで、十六夜が白夜叉にたずねる。

「……つまり、黒幕はやっぱりサーカス団か。そこに魔王がいる可能性は？」

「そういえば、おんしらのコミュニティは打倒魔王を目標に掲げとるのだったな。」

「まあ、こんなに頻繁に行方不明者が出てるんだ。可能性はかなり高いだろ。」

「うむ！これ以上大事へ発展させんためにも、ひとまず様子を探りに行くぞおんしら！」

そして、全員でサーカスのテントまで行き、*“契約書類”*が出てきたことにより、各自行動となった。

|||||

「さて、専門じゃないんだけど、そんなことも言ってられないよな……昨日ずっと探しても見つからなかったんだし。」

一輝はフェルナから話を聞いた場所まで戻り、倉庫から様々な道具を取り出して並べていく。

「ふう……霊脈干渉。範囲、町全体。搜索対象、黒ウサギ……」

そして地面に書いた紋章の中心に座り、呪術による搜索を始めた。

サーカスを出てすぐに行った簡易的なものではなく、本格的なものだ。

「範囲内に黒ウサギの反応なし。対象変更・・・特異点。レベル10以上。」

黒ウサギが見つからなかったため、対象を特異点へと変更する。

何かある場所なら、特異点となるだろう、という推測からだ。

が、それに該当するものが多数発見できたため、一輝はそれぞれがなんなのかを絞り込むのに時間を要した。

「この一番でかいのは・・・白夜叉か。対象から外して・・・」

一輝は目の前に広げた町の簡易的な地図の上に反応を起こし、まず一つ、外した。

「つてことは、一緒にいるこのでかい反応は十六夜だろうから外して・・・この噴水のは俺だろうから、これも外す。」

十六夜は「正体不明」なんてギフトを持っているし、一輝はその身の中に大量の妖怪、霊獣を封印している。

十分な危険物だ。

「で、この建物を気にせず移動してるのは耀だろうから除外して・・・確かここにあったのはサーカスのテントだから、招待状とは関係ないし、除外。ゆっくり動いてるこれは・・・ああ、デインと飛鳥か。これも除外。」

パツと判別できないものはもう少し詳しく調べ、その霊格から特定していく。

「となると・・・残ってるのはこの、町外れにある小さい丘、か・・・念のため、もう一回・・・」

一輝が確認のためにもう一度搜索をかけると、サーカスと一輝以外の反応全てがそこに集まっていた。

「間違いないな・・・少し急ぐか。」

一輝はペットボトルを取り出し、水に乗ってそこまで飛んでいった。

|||||

「あれは・・・サーカスの入り口にいた。ピエロか？」

一輝が丘の上空にたどり着いたとき、そこには顔の一部がなくなつて少しばかりスプラッタになったピエロがいた。

「多分、敵・・・だよな。えい。」

「これは世界をバラ色に染めルモノ。真つ赤なバラ色ギャああああああっ」

ピエロはかっこつけた台詞とともに十六夜に襲い掛かろうとしたが、一輝が気まぐれに放った火の槍により、燃え尽きた。

「・・・あれ？いまの、何の工夫もないただの火の槍だったんだけど・・・」
「オイ一輝。後からききといて美味しいところもってくんじゃねえよ。」

地面に降りてきた一輝に、十六夜はそういった。

一輝としては、そういわれても、何がなんだか・・・といった状況なのだが。

「・・・あれ？せっかく街灯持ってきたのに、道化師さんは・・・？」
「一輝君がぶつけた火の槍で燃え尽きたけど・・・どうして燃えたのかしら・・・？」

「ああ。それは、あの道化師さん、油絵具だったから。」

「それでか・・・」

「でも、いいの？まだ招待状貰ってなかったのに、道化師さん燃え尽きちゃったけど・・・」

「その心配には及ばぬよ。」

耀の心配は、白夜叉によって打ち破られた。

「ヤツが絵具だったのはこのためじやろうのう・・・地面に魔法陣が描かれておる。」

白夜叉が見る先には、確かに魔法陣があった。

「この魔法陣に乗れば、やつらの本拠に飛ぶと見て間違いないじやろうな。」

「・・・うん、正解。転移先は、あのテントのなかの座標になってる。」
「おおっ。だったらモタついてねーでさっさと行こうぜ！一輝のせいで中途半端にやる気な状態で止まってるしな!!」

「もうそれはいいだろ・・・」

一輝と十六夜がそんな会話をしているうちに、五人は魔法陣に乗った。

そして、転移した先のサーカスには、たくさんのお客がいた。

「これは・・・なんだか、俗物ばつかな感じがするな・・・それに、契約書類にあった闘技場つてのも引つかかるし・・・」

「おやおや皆さん、おそろいで一体どうされたのですか!？」

一輝が周りを見回していると、黒ウサギが声をかけてきた。

五人が声のした方に振り返ると、そこには、

「あつもしかして!黒ウサギの玉乗り芸を見に来てくれたのですねーっ!？」

玉乗りをする黒ウサギがいた。

ものっそい笑顔の。

《《《この笑顔・・・殴りたい・・・》》》》

《人に徹夜で探させといて・・・とりあえず、エアショット》

問題児の思考が一致したところで一輝が空気の弾を発射し、黒ウサギの乗っていた玉を弾き、

「おわっ!？」

「揉みたかったぞ黒ウサギイイーツ!!」

「ひゃああああ!？」

「もう貴女は引っ込んでなさい!!」

落ちてきた黒ウサギに白夜叉が抱きついた。

飛鳥の突込みには、聞く耳も持たず。

「で、だ。黒ウサギはこんなところで何をしていたのか、順を追って説明してもらおうぞ。」

「あ・・・すみません。その、ですね・・・」

「何かしら?」

中々答ええない黒ウサギに、飛鳥が若干キレた口調でたずねる。

「ア、アルバイトをしておりました・・・」

「アルバイト?」

「はい・・・あの公演の後、裏手で団長さんにスカウトされたのですよ。」

玉乗りショーに出てみないかって・・・！」

黒ウサギは、若干興奮した口調で語りだす。

「少し興味もありましたし、どうしても言うので引き受けてみたのですよ。皆さんにはその旨を伝えていただける、とのことでしたし・・・」

「むしろ、シラを切られたらしいぞ?」

「え?あれ?おかしいですねえ・・・」

「はあ・・・まあいいわ。」

飛鳥は若干呆れたように頭に手を当てながら、そういった。

「無事だったのだから、ひとまずよしとするわ。」

「早く帰ろ・・・」

「なんだかお騒がせしたみたいで・・・申し訳ありませんでした。」

「後で罰が待ってるからな、つと!」

一輝はそう言いながら、量産型妖刀で飛んできた刀を弾く。

「どういうことかな、団長さん?返答によっては、殺すぞ?」

「・・・あきまへんよ、お客様。まだギフトゲームは終わつとらんどす。」

「ギフトゲーム?」

「そうや。契約書類を見てごらんなし」

一輝はそういわれ、テントの前で現れ、ポケットにしまっていた契約書類を見る。

『ギフトゲーム名 “Funny Circus Clowns”』

・プレイヤー一覧

・現時刻、テント前に現れた者

・クリア条件

・円形闘技場にて五回試合での三勝以上。ただし、同じプレイヤーの二度以上の参加は不可。

なお、プレイヤー達は招待状を見つけなければ闘技場への入場を許可されない

・敗北条件

・上記の条件を日が昇るまでに満たせなかった場合

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します

『トリックスター』印』

「ふうん・・・試合、ね。」

「そうや。五回試合での三勝以上・・・それが始まってもおらへんのに、みすみす帰す訳にはいきまへんなあ。」

「え!?え!?いつの間に、」

「少し黙ってろ、黒ウサギ。」

驚きの声を上げる黒ウサギの口を一輝が塞いだ。

「ま、もう一遍サーカス仕込みの剣撃を食らいたいなら話は別ですけども・・・」

「それで済むなら、むしろ楽でいいんだけどな。」

一輝は刀を構えるが、それで済まないことなど分かっている。

「まあ、他のお客様もそろそろ退屈してるよろし、はよそちらのトップバッターを決めてくれますか?ちなみに、こちらのトップバッターは・・・」

団長はそう言いながら、一輝に口を塞がれている黒ウサギを指差す。

「この黒ウサギはんどす!」

「・・・ムグ?(え?)」

乙 ⑥

「ど……どういふことですか？黒ウサギが……トップバッターって……!？」

「もちろん、戦ってもらはんや……そこの五人の誰かとな!!」

「ちよ……ちよつと待ってください！黒ウサギは、ノーネームの一員なのですよ!？」

「そうは言うてもなあ……今日に限りうちでバイトする、そう契約したはずどえ?」

黒ウサギは何も反論できず、五人に助けを求めるが……

「うむ、良いのではないか？面白そうだし。」

「面白そうだな。」

「面白そうだね。」

「面白そうね。」

「面白そう。」

「お気楽クインテットは黙っててくださいッ!!」

全員、ほのぼのとした雰囲気でした。

まあ、大した問題ではないのだろう。

|||||

「多分この辺りに……あ、ありました音央ちゃん!」

「本当ね。一輝たちもあの辺りにいるかしら……」

鳴央を抱えて飛んでいた音央は、サーカスのテントを見つけてそこに降り、鳴央を降ろした。

「へえ、これがサーカステント……思った以上に大きいわね。」

「そんなことより、早く一輝さんたちに合流して黒ウサギさんを探しませんと!」

「あ、貴女達ノーネームの……!!」

急に空からやってきた二人のメイドに、テントのそばにいたフェルナは驚きの声を上げた。

「どうしてここに・・・？」

「ちようどいいところにしたわ、フェルナちゃん。」

「こんばんは、フェルナちゃん。私達、黒ウサギさんを探しに来たんです。」

「一輝から行方不明になったってメールは貰ったんだけど、さすがに遅すぎるもの。Dフォンも通じないし。今どんな状況か、教えてくれない？」

二人が問いかけると、フェルナは一瞬答えづらそうにするが、

「それが・・・サーカス団が実は魔王の一味だったらしくて・・・黒ウサギさんも取り込まれてしまったとか・・・」

「それは・・・一輝さんたちは、どちらに？」

「一輝さんたちは・・・」

フェルナは先ほど以上に顔に影が差したが、

「今は町外れの宿で休んでる。」

なんでもない顔で、嘘を伝えた。

「とりあえず、明日対策を練ろうって」

「嘘ね。」ですね。」

が、二人に一瞬で切り捨てられる。

「え・・・いや、嘘なんて、」

「あの一輝が、友達が行方不明なのに『明日考える』なんて呑気なことをするはずがないわ。」

「一輝さんなら、見つかるまで休まずに探し続けるはずですよ。まあ、それはやめて欲しいんですけど・・・」

実際、二人の予想通り一輝は黒ウサギが行方不明になってから一睡もせず、食事もそこそこに搜索を続けていた。

「それに・・・もしそうだとして、あなたはこんなところで何をしているのですか？そんなに、このテントが気になるのですか？」

「そ、それは・・・」

「まあ、そんなことはないんですけど。単に、ここから邪魔者を遠ざけるためにいる。ってことは、このテントの中で何か起こっている・・・」

音央はそう言いながらテントに手を当て、

スリーピングビューティ
「茨の檻！」

茨を放ち、テントを引き裂くが、テントは勝手に治っていく。

「え……元に戻った？」

「……あ、当たり前でしょ……内側からも外側からも、簡単に破れるわけではないじゃん。」

「貴女……」

明らかに口調が変わったフェルナを、二人は警戒するように見る。

「『ペルセウス』や『グリムグリモワール・ハーメルン』に打ち勝ち、『ルインコーラー』が設置したゲームをクリアした奴等……。そういった仲間になれば楽しいだろうなあと思ってたんだ……。私達、トリックスターの仲間だね……。そして……」

そして、次に顔を上げたときには、二人の知るフェルナの表情は、そこにはなかった。

「もっともっと……この箱庭を盛り上げるのよ!!!」

「フェルナちゃん……まさか、最初から……!!!」

「待って、鳴央。さすがに様子がおかしすぎるわ……」

フェルナの肩に手を置こうとした鳴央の手を、音央がつかんだ。

「盛り上げる。盛り上げるの。それが私達の役目なんだ。たとえどんな手段を使っても!!!」

|||||

さて、再びテントの中。

ここではもう既に三試合が終わっていた。

これまでの二試合の内容は……

一試合目、十六夜vs黒ウサギ。両者が思いつきりぶつかった結果、二人揃ってリングアウトし、引き分け。

印象的な一言。「ごめんなさい、黒ウサギが有能なばつかりに。容姿端麗鉄心石腸完全無欠なばつかりにいい。」

二試合目、飛鳥vs猫娘。最初は劣勢だったが、デイーンを召喚し、

客席を引っぺがし、投げつけることで飛鳥の勝利。

印象的な一言。「クソツタレが」「ぶん投げろ!!!」

三試合目。耀vsブレームンの音楽隊。小さな動物相手に手を出せなかったが、相手がロボットだと知るや否や遠慮なく攻撃した耀の勝利。

印象的な一言。「決して友達が少ないわけじゃ、ないし!!」

そして、これから四試合目が始まるうとしている。

「・・・さて、とうとう残すところあと一勝。戦況は確実にこちらが有利でございます!!」

調子に乗った黒ウサギは、団長相手に威張っている。

「見たところそちらのコミュニティでまともに戦えそうなのは団長さん一人!対してこちらにはまだ二人のプレイヤーがいます!つまり、どう転んでも圧勝必至!!これも我が新生ノーネームの圧倒的パワーと、黒ウサギの優秀さを以ってすれば当然の結果なのですよーっ!!!」

「.....」

そして、対する団長は「ふっ」と鼻で笑い、

「せやな。」

「すみません・・・今回たいして何も出来てないのに調子乗っちゃってスイマセン.....」

ほんの三文字で、黒ウサギを返り討ちに合わせた。

「にしても、妙だな・・・向こうが追い込まれてるはずなのに、なんだか余裕そうだし.....」

「確かに、何か裏があるのかもしれないね。でも!!」

早くも復活した黒ウサギは、十六夜を手で示し、

「ノーネーム最強問題児の十六夜さんがひとたび暴れれば、」

「いや、俺もうお前と戦っちゃってるし、参加できないぞ?」

「え?」

「はい、黒ウサギ。契約書類。」

黒ウサギは契約書類を読んで、十六夜にはもう参加資格がないこと

を知る。

「うむ、そう言うわけだから今度こそ私が、」

「んじゃ、次は俺が行ってくる。」

「二行つてらっしゃい。」」

勢いづこうとした白夜又を無視して、一輝がステージに上がる。

「じゃあ、お相手願いましりょうか、団長さん？」

一輝はそう言いながら水を漂わせ、戦闘準備を整える。

「へえ・・・じゃあ、ゆっくり調教してあげようやないの、坊や。」

「悪いけど、そっちの趣味はねえよ！」

団長が鞭を放つのに対し、一輝は水と日本刀で応戦する。

ここで量産型妖刀を抜かないのは、十六夜から言われたことを確認するためだ。

「なんや、防いでばっかりで張り合いありませんなあ。これなら白夜又はんがきたほうが面白があったんとちやいます？」

「それは、期待を裏切って悪かったな。」

「・・・ふん。まあ何しろ」

挑発に乗ってこない一輝に少しつまらなさそうにしながら、団長は続ける。

「坊やは絶対、私に勝てまへんけどな。」

乙 ⑦

「……へえ?」

「これは予言どす。坊やはこれ以上、こちらの攻撃を防ぐことはおろか、私にダメージを与えることも出来ずに負ける。」

「言霊……それも、古いタイプか? まあなんにせよ、大した自信だな。随分となめられたもんだ!」

一輝はそう言いながら一瞬で団長の懐に入り込む。

「鬼道流剣術、立ち。三の型。逆駆さかがけけ!」

そして、あごに向けて下から峰を打ちつけ、脳震盪を狙う。

「ふう……手ごたえあり。」

明らかにもろに入ったのだが、団長は後ろに倒れながらも、ニイ、と笑い……一輝の全身に、深めの切り傷が出来た。

「……あれ?」

「一輝!!」君!!」

そんな一輝の様子に飛鳥と耀は声を上げるが、一輝自身はそこまであわてていなかった。

「ほら、いうた通りやろ……? 貴方では私には勝たれへんで。」

「……まあ、このまま行ったら、勝てないだろうな。」

「なにを……!?!」

一輝は水を高温にして水蒸気をぶつけ、その隙に距離を置き、ギフトカードから量産型妖刀を取り出し、抜刀する。

「つつても、俺にはまだ切り札があるし。……人々に知を与えし霊獣よ!」

そして、檻の中の存在を召喚する言霊を、唱える。

「中華の国にて妖怪たちの長となりし霊獣よ! 今その身を、我が為に、我が眼前へと顕し、我が命を聞け!」

一輝が殺した、霊獣を召喚する言霊を。

「今ここに顕現せよ、白澤!」

一輝が言霊を唱え終わると、一輝の体から光り輝く霧が出てきて、固まり、白澤の姿をとる。

「な・・・オイ、あれって・・・」

「間違いない・・・霊獣、白澤だ！」

「人間が白澤を召喚したぞー！」

一輝のすぐ横に霊獣である白澤が召喚されたことで、客席が一気に賑やかになる。

「・・・オイ、小僧。何だあの言霊は。我、白澤ほどの存在に我が命を聞け、など無礼にもほどがあるぞ！」

が、白澤はその一輝に対してそんな事を言う。

観客はそれで落胆したような反応を示すが・・・

「うるさいぞ、白澤。」

一輝はそんなこと気にも留めず、白澤に笑顔を向ける。

十人が十人震え上がる、殺気を込めた笑顔。

「大人しく言うこと聞け。さもないと・・・今度は、あの時以上の拷問をするぞ？」

「調子乗ってスイマセンでした！何なりとお命じください！」

一輝の言葉で白澤が一気に態度を変え、観客席はただの人間に怯える白澤を見て、再び盛り上がる。

大したことないと思っていた人間が、予想以上の大物だった、と。

そして、そんな様子の観客に対して、一輝は芝居がかった口調で語りかける。

全体に伝わるよう、大声で。

「ご来場の皆様！僕の試合、ここまでは相手の实力を知るためにつまらないものになってしまっていたことを、ここにお詫びします！」

そうして、観客の心を一つにまとめいく。

「この白澤の召喚は、そのせめてものお詫びと・・・これからすることの余興に過ぎません！まだ盛り上がるには早いですよ！」

「へえ、随分と演技が上手いもんだな。」

十六夜がぼそつとつぶやいたが、それは一輝に注目が向いていたために、耀にすら気づかれなかった。

「僕はこれから、白澤なんて目でもない存在を召喚し、そいつの全力をお見せしようと思えます！これまでの試合とは比べ物にならないく

らしいに、見ごたえのあるものになることでしょうか!」

「皆様! そんな出鱈目に騙されたらいかんどす!」

団長は必死になって観客の心を自分に向けようとするが、

「おい、なんか面白いものがみれそうだぞ!」

「ああ! 白澤以上の存在・・・」

「今日は来たかいがあつたな!」

白澤を前座に済ませた一輝から注目を取り戻すなど、不可能ではない。

そして、そんな様子の観客に対し、「ただし、」と一輝は話を続ける。先ほどまでよりも、声音の低くなった声で。

「皆様方の命の保障は、一切いたしません。」

シーン、という擬音が聞こえてきそうなほど、会場が静まり返った。「いえ、むしろ皆様方の九割以上は助からないでしょう。運が悪ければ全員が。なにせ、中国の妖怪のボス、白澤がプライドもへったくれもなく、ここまで大人しくなってしまうのですから。死にたくない方は、今すぐここから離れることをお勧めしますよ?」

一輝がそう締めくくると、客席では蜘蛛の巣を散らすように、大騒ぎになる。

「オイ、今の聞いたか!?!」

「ああ、さつさと逃げるぞ!」

「いや、むしろ一割は残れるんだから、」

「冗談じゃねえ! 巻き込まれてたまるか!」

「早く逃げろ!」

「どけーっ」

「な・・・観客達が・・・」

そして、そんな様子の観客に、団長はよりいっそう焦りだす。

「皆待ちなはれ! 最後まで観てるんや! こんな出鱈目に、」

「いやいや、出鱈目じゃないんだって。この白澤を観れば分かるだろ?」

冷静に返しながら、一輝は自分の体についていた傷がなくなっていることを確認する。

「ふうん、やっぱりそうか・・・分かったぞ、あんたのギフトの正体。」
「な、何を・・・」

「アンタのギフトは、人が抱くイメージを具現化させるものだな？」
「く・・・」

自分のギフトが完全に見破られ、団長は歯噛みする。

「ここからはただの予想だけど、アンタのギフトは他人の心象を読み取り、現実にあらわすものだ。例えば、」

一輝はそう言いながら、自分の腕を傷つける。

「な、なにを・・・」

「あ！傷が治ってく・・・」

そして、その傷はすぐにふさがっていった。

「今みたいに傷を負っても、ここにいる人間のイメージの中で多いものを反映させるんだろうな。」

ちなみに、今は一輝を心配した飛鳥に耀、黒ウサギ、一輝と同じ予想を立てていた十六夜、そして一輝自身のイメージが反映された。

「そのためにここに観客を募って、さらに高圧的で自信に満ちた態度、
「予言」「勝てない」などの思わせぶった言葉などを使って、アンタが強い、というイメージを植えつけた・・・まあ、そんな味方達観客がいなくなれば、もう丸腰同然なただけだ。」

「・・・やれやれ。」

そして、団長はもう観念した。

「まさか、こうもあっさり、種も仕掛けも見破られるとは・・・まいりましたわ」

そう言つて鞭を手放し、一礼する。

「『空想劇』イマジネーション・ユクス。初戦で黒ウサギさんが戦ったとき、昼の公演でドラゴンを出したときなんかこのギフトを発動させとりました。」

そして、顔を上げて一輝に尋ねる。

「それにしても、まさかあんな虚言で客を散らしはるとは・・・」

「いや、わりと本気だったんだけどな。まだ俺ですらコントロールできてないのを使おうとしてたから、多分観客のほとんどが死んだし。」
「そ、そうですか・・・初めから、白澤ほどの名前を生かすつもりだっ

「たんどすな?」

「まあ、な。こんなザコでいけるかどうか、少し不安だったんだけど。」

「オイ、小僧。ザコとは、」

「ああ?」

「いえ、何でもありません!」

「はあ・・・もういいから、オマエさっさと帰れよ。」

「はい!分かりました!では失礼します!!」

「わたし、ものすごい人を相手にしてたんやなあ・・・」

白澤が言われたままに帰っていくのを見て、団長は今更ながら少し後悔する。

「にしても、ノーネームか・・・名無しにしては骨のあるコミュニティやった・・・久々に楽しませてもらったぞ。アンタ達なら、もしかしたら・・・」

そう言いながら一輝に向けて手を伸ばすので、一輝はその手をとろうと、手を伸ばす。

「このサーカスを・・・」

が、手が?がれる前に団長の姿は消えた。

乙 ⑧

「団長が消えた、か……いやでも、まだ行方不明のやつらが……」
一輝がステージから降りながらそう呟くと、そのタイミングでステージが揺れ、サーカスが一気に廃墟になる。

「どうということよ、これッ!!まるで廃墟じゃない!私達、まだ誰かのイメージを」

「いや、団長はもう消えたんだし、それはないだろ。多分、これが本来の姿なんだ。」

飛鳥の問いに、一輝が警戒しながら答える。

そして、そんなところに愉快的声が響き渡る。

「アハハハ。まだ戦いは終わらせナイヨー♪」

「こ……この瘡に障る声は……」

「まさか……」

「そのまさかだろうな。」

「え、何?皆なに言ってるの?」

一輝はその声に心当たりがないため、全然話についていけない。
い。

「ここで選手交代っ」

そんな中、五人の目の前で油絵具が集まっていき、

「ダンチョーに代わって、このボクが才相手しヨウじゃないかーっ!!!」

なんだか、残念そうないケメンが現れた。

女性陣がその姿にヒソヒソとティスリ、少しショックを受けている。

「やっぱりまだ生きてたのか、ねじ切れ太!」

「どさくさ二紛れて変な名ツけるのやメテくれナイかな?」

「まさか、ねじ切れ太って、あの……!?!」

「君モ納得しないでクレるかな?ピエールだよ!」

ピエールとは、たいしたこと出来ずに一輝に燃やされたピエロのことである。

そして、一輝の知らなかったことがいくつか十六夜によって明かさ

れた。

「まあまあ、そう目くじら立テナいでよ。気二なってるンでしょ？行方不明者がドコにイルのか？」

そう言いながらピエール（以下ねじ切れ太）は両手を広げる。

「ダカラ連れて来てあげタんだヨ!!」

その瞬間、ねじ切れ太の背後にたくさんの人が現れる。

恐らく、彼らがサーカスに取り込まれた人たちなのだろう。

「うわー、結構いるなあ・・・白夜叉。」

「なんじゃないんじゃない。私はここでおせんべい齧るのに忙しいんじゃない。」

「まあまあ、そう拗ねないで。」

一輝はそう言いながら白夜叉の肩をつかみ、ねじ切れ太のほうを向かせる。

「そうだけ白夜叉、このショーも、大詰めだ!」

「いいヨいイよ。全員まとめてかかってオいで。皆でワイワイ楽しんで、拍手喝采のフィナーレとイこうじゃないか!!」

そして、大乱闘が始まる。

「さあ皆さん!いよいよゲームも大詰めです!!相手は取り込まれていたコミュニテイの方々!迂闊に手を出せない以上ここはやはり作戦会議を、つて、もう既にガンガンいつてるー!!!」

黒ウサギが何か言っている間にも、問題児達とはらわれていた人たちと戦っている。

迂闊に手を出せない?何言ってるの?といった感じで。

「こんな大混戦じゃ策なんて通用しないわよっ!!」

「口より体を動かしたい!」

「まあ、どうせ怪我をさせたとしても責任を押し付ける相手はいるし!」

「せっかく戦闘解禁されたのだ。暴れさせんかー!!」

以上が、問題児達の主張である。



「フェルナさん……一体どうしたのでしょうか……座り込んで動かなくなってしまうましたし……」

「気にしないでいいでしょ。敵みたいだし……あつたわ。」

音央はそう言いながら、Dフォンでの検索結果を伝える。

「トリックスター、かなりおかしな連中の集まりだったみたいよ。」

「魔王のコミュニティ、なんですよね?」

「ええ。でも、決してそれだけじゃない。確かに、主催者権限を使って公演中に観客に対してあらゆるギフトゲームを強いたけど、団員のひょうきんな性格のおかげで、訪れた町はそれなりに活気付いたですよ。」

「魔王ではあるけれど、歓迎された、といったところででしょうか?」

「みたいね。当時は、魔王にしては少し異色だった話題になったみたい。でも、もう何十年も前に滅びたはずなんだけど……」

そこで、音央の声を遮るような爆音とともに、テントの天幕が吹き飛んだ。

そして、その爆発の中から十六夜が出てきて、二人を発見する。

「ん? オイ一輝! オマエんとこのメイドたちが来てるぞ!!」

「え、マジで!?!」

十六夜に言われて一輝も出てくると、二人の前に着地した。

「ちよ、一輝たちはまた何をやらかしてるのよ!? Dフォンも通じないし!」

「細かい話は後々。あ、良かったら二人も祭りに参加していく?」

「ま……祭りとは……?」

鳴央に言われて、一輝は背後の人の山を指差す。

「大乱闘じゃないですか——!!」

「いや。さすがにこの人数を無傷でとか、無理だし。それと、さすがにそろそろ限界……」

一輝はそう言いながら、鳴央に向かって倒れこむ。

「え、ちよ……一輝さん!?!」

鳴央は自分の胸に向かって倒れこまれて少し焦った様子を見せた

が、一輝が全然動かないので心配になって声をかける。

「いやー、失敗だったわ・・・さすがに徹夜してからの儀式、無形物、霊獣召喚は無茶だった・・・」

「なにやってるのよ、アンタは!?!」

ついでに言えば大したものも食べていないので、栄養も足りていないし、現在の時間も時間なので、そんな体で一日以上寝ていない。

「昔、徹夜からの陰陽術は普通に出来たからいけると思ったんだよ・・・悪いけど、後は任せた・・・」

一輝はそういつて、完全に意識を手放した。

|||||

「ほら皆ー。肉焼けたぞー。」

ノーネームの貯水池付近でバーベキューを行い、一輝が焼くのを担当していた。

というのも、一輝は最後眠っていたため、その分のペナルティとして肉を焼いているのだ。

「あの、一輝さん。もし良かったら私が焼くので、お肉を食べてもらっても・・・」

「気にしなくていいよ。俺も隙を見て肉とか食べてるから。」

「大丈夫よ、鳴央。さっきから見てたけど、時々ギフトを使って焼いてるから、本当に肉も食べてるわ。」

鳴央が見ていなかった理由は、子供達のお世話をしていたからである。

「それにしても、かつて滅ぼされた魔王の遺留品、か・・・」

「はい。どれももう既に限界は来ていたと思うのですけど・・・」

「ま、人の想いつてのは時にすごい力を発揮するからな。前にいた世界でも、そんなことはよくあったし。」

「それにしても、なんだか切ない話よね。あの子、あちこちで今回と同じことを繰り返していたんですって?」

「そふみたひ。解放された人達は北や南のコミュニティばかりだったひね。」

「まあ、後始末は白夜叉がやってくれてるみたいだし、気にしなくてもいいだろう。」

「まったく、とんでもねえ寂しがり屋もいたもんだぜ。なあ、黒ウサギ。」

「そうですねー。何で黒ウサギだけはんぺんなのでしょいか?」

一輝たちが肉を食べているのに対し、黒ウサギが持っているのははんぺんの刺さった串だ。

が、問題児達は一切悪びれた様子もなく、

「二」心配かけたペナルティ。」「二」

そう言いはなった。

「今回は私達が散々迷惑かけられたもの。」

「拳句敵にも回りだすし……」

「人には徹夜で探させるし……」

「この箱庭の貴族(迷)」

「ぐぬぬ無駄に正論で突っ込み返せない……っ!!」

そんな中、メイド二人が一輝に突っ込んだ。

「そういえば、一輝、あんたはまた無茶をしたわね?」

「まあ、その結果今こうして肉を焼いてるわけだしな。」

「全く、何回私達に心配を掛ければ気が済むのですか?」

「悪かったって。また今度、何らかの形でお詫びするから。」

さすがに二回目ということもあって、一輝は全面的に謝罪する。

「ふうん……じゃあ今度、一日買い物にでも付き合って。」

「そんなんでいいのか?」

「あ、出来れば私もそれで……」

「ふうん……二人別々の日のほうがいいか?」

「当然じゃない。」

「はい。そちらの方がいいです。」

「分かった。また時間空けとくよ。」

二人はそこで一輝から離れる口実として子供達の方を見てくると

いい、一輝から離れていった。

「あの二人も変わってるなあ・・・俺なんかと買い物に行っても、なんも面白くないだろうに。」

もういつそ、こいつには天罰が下ってしまえばいいと思う。

|||||

サウザンドアイズ、白夜叉の私室。

「・・・と、そんな出来事もあり、奴等とおるのは退屈せんで良いぞ。まあ仲良くやるのだな、ペスト。」

「へえ、それは面白そうだねっ。」

白夜叉がペストに話しかけると、それに別の人物が返事を返した。

「ほう・・・久しぶりだのう、ヤシロ。」

「うん、久しぶり白夜叉お姉さん！そっちのペストちゃんは始めまして、かな？」

ヤシロが笑いながら話しかけるが、ペストは一切反応しない。

「それで、何のようじゃ？一輝に頼まれておるから手は出さんつもりだが、事としいによつては・・・」

「ううん、そんな殺伐としたことじゃないよ。私のゲームをクリアした人のことを聞いたかったのと、前もって報告しところかな、って。」
「なにをだ？」

「近々・・・といつてももう少し先、収穫祭の前くらいに、下層で勧誘活動するから。」

ヤシロはそう、はっきりと伝えた。

「よいのか、階層支配者である私にそんな事を言つて？」

「うん。それに、もしかしたら伝えておけば私のゲームをクリアしたお兄さんに会えるかもしれないし。」

そう言いながらヤシロは出口へと向かって行く。

「話しはきかんでよいのか？」

「うんっ。さっきの話で十分。あとは、お兄さんに直接聞くよ。じゃあね!!」

ヤシロは元気にそう言うと、これまた元気に走り去って行った。

「さて・・・いつ一輝に伝えようかのう・・・」

そこには、面白そうに笑みを浮かべる白夜叉と、以前無口なペストだけが残った。

「とりあえず、まずはおんしじやペスト。これに着替えよ！」

訂正。変態と、その被害者だけが残った。

暴虐の三頭龍 名の継承

「おーい、じいさん。アンタはいつになったらサラちゃんに階層支配者の立場を譲るんだ？」

『知った風な口を叩きおつて。まだ隠居する気はない。』

和服を着た青年と火龍は、そんな会話をしていた。

そして、その青年は和服には似合わない、指輪を全ての指にはめていたり、ブレスレットを両手首にしていたり、ネックレスをしていたりと、合計二十一のアクセサリをしている。

『それより、貴様はよいのか？いつまでも卵のまままで。』

「いいんだよ。俺は家の奥義を継ぐ気はない。自分の奥義を編み出すか、一生卵のまま過ぐすさ。」

そう言うと同時に、〃サラマンドラ〃の元に通達が届いた。

曰く、「全軍、集合せよ。」と金糸雀名義で。

「・・・全軍、つてことは緊急事態だよな。おい、じいさん。ウチの参謀が呼んでるんだが。」

『うむ、すぐに向かうとするか示道よ。』

そして、二人は〃サラマンドラ〃のメンバーと個人で所有する戦力を呼び、開かれた門を進んでいった。

「・・・意外。一番乗りが〃サラマンドラ〃だとは思わなかったわ。」

『フン・・・貴様の』

「聞いてくれよ金糸雀。じいさん、スツゲー勢いで全員を呼んだんだぜ！」

『黙らんか示道！』

示道はそう言つて雰囲気をぶち壊し、金糸雀に近づく。

「で？今回こんな大規模に呼んだのはどうして？」

「ちよつとね。今回の魔王を倒すには、とにかく頭数が必要なものよ。示道、あんたあの娘たちは連れてるの？」

「偶然にも、全員いるぞ。さあ、夜を行こう。」

示道がそう呟くと、身に着けた二十一のアクセサリーが輝き、その場に二十一人の美少女、美女・・・隷属した元魔王が現れた。なぜか、全員がメイド姿で。

「相変わらず壮観ね。じゃあ作戦を伝えるわよ。ドラゴたちは眷属を率いて『アヴァロン』の援護。ガロロはラプ子たちと合流してサポート。示道たちとコウメイ——って、ちよい待ち。」

「ん？どうしたんだ金糸雀？」

「どうしたもこうしたも・・・コウメイは？ドラゴたちのところにいたはずじゃ？」

「そういや、アイツいねえな。」

二人は辺りを見回し、件の男を捜す。

『奴なら数日前に西側へ向かったぞ。』

「あれ？姉御達のほうに連絡行つてませんか？」

「来てないし聞いてないわよ。」

「全く、行き先も言わずに向かうとは。常識知らずなやつめ・・・」

「最初の行き先すら伝えないあんたが言うな！アンタの影響でその娘たちにも無断でどこかに行つちやう様になったんでしようが！」

「まあまあ。今は、あの最強戦力にその自覚はないって話だろ？」

「あんたも最強戦力の一人でしょうか！人のことの前にもまず自分が自覚しなさい！」

全くだ、とその場の一同が一斉に頷く。

金糸雀は疲れたように肩を落とすが、気を取り直したように顔を上げ、

「あ、お札のストックがねえ。」

「常にストックしときなさいって言ったでしようが！」

られなかった。

まあ、それでもどうにか顔を上げ、指示を出す。

「とにかく、指示を出したところはその通りをお願い。『サラマンドラ』は敵の群れが出る前に防衛陣と結界をお願い。神霊級を一体でも下層に逃がしたら目も当てられないわ。心してかかって。」

『心得た。』

「姉御も御武運を！」

そうして、指示を受けたものたちは飛び立っていった。

「ん？君は……月の兎の子？」

「あ……はい。黒ウサギといます。」

「黒ウサギ……そっか、そう言うことか。それでこれだけのメンバーが。」

示道はようやく現状を把握しきり、表情が真剣なものになる。

そして、話しかけられたことで我を取り戻した黒ウサギは、ようやく彼女らが何者なのかという疑問にいたった。

「マヤの終末暦^{マヤ・ヒストリー}」。 「キルケー」。 「エレシユキガル」。

「ヘル」。 「アテ」。 「ネメシス」。

「メリツサ」。 「ブロッケン^{の魔王}」。 「ザババ」。

「リリス」。 「リリム」。 「ブードウ^{の魔王}」。

「ハンニヤ」。 「ラジェル」。 「ゴモリー」。

「アスタルテ」。 「バルベロ」。 「パルテノペー」。

「ウアジエト」。 「バステト」。 「デイスノミア」。

そして、その二十一の魔王を隷属させる男。

純血の吸血鬼。 「燕尾服の魔王」。 日天の獅子の同士。

南の支配者。 「アヴァロン」と 「龍角を持つ驚獅子」。

北の支配者。 「サラマンドラ」と 「ラプラスの悪魔」。

そこには一切の統一性がないが、只一つ、これだけの集団を問答無用で呼び出せる金糸雀という女は只者ではないことだけは分かる。

そして、多くの魔王を従わしている青年もまた、只者ではない。

そう言う意味合いを込めて黒ウサギが二人を見上げると、彼らはいたずらっぽい笑みを浮かべて答える。

「そういえば、自己紹介がまだだったわね、ウサギの御子様。私は」

「の参謀を任されてる金糸雀よ。」

「俺も一方的に名乗らせちゃったな……俺は」

「に所属

してる、只のプレイヤーで陰陽師の卵の高橋示道だ。」

が、一人その立場がよくわからなかった。

「あんたは今度何か役職を付けたほうがよさそうね……」

「やだよめんどい。まあ、安心して。君の今後についてはまたあとで話せばいいし、生き残りのウサギさんは俺たちで保護するから。」

「ほ、本当ですか?」

「もちろん。私たち」

“は、連盟の同士を決して見捨てない。その中でも、“月の兎”は同じ旗の下で戦った同士よ。見捨てるはずがないわ。だから、今は休みなさい。」

そう言つて金糸雀が黒ウサギの額に口付けをすると、黒ウサギは眠りに落ちた。

「お母さんかよ、お前は。」

「それもいいかもしれないわね。でも……まずは、この子が起きるまでにこの悪夢を終わらせましょう。」

「だな。さーて、いっちょ働くか!行くぞお前ら!」

『了解(です)(なのです)!』

そう言つて、その青年は二十一人の元魔王を引き連れて、魔王の討伐へ向かった。

|||||

気絶してしまった黒ウサギが落ちないよう、しっかりと支えながら飛んでいた俺は、飛鳥たちを発見したため、そこに向かっていた。

「皆!無事か!」

「一輝君。ええ!ここにいるメンバーは無事よ!」

俺はそのままディーンの肩に乗り、誰がいないのかを確認する。

「ジンはどこに?」

『方々探してみましたが、頭首殿の行方はつかめませんでした。』

「黒ウサギは無事なの?」

「ああ、大丈夫だよ。黒ウサギは、な……」

俺の言い方に疑問を抱いたのか、飛鳥が俺に尋ねようとするので、そのタイミングで黒ウサギが目を覚ました。

「つ……みな、さん……?」

「目を覚ましたか、黒ウサギ。」

黒ウサギを下ろすと、飛鳥が黒ウサギに近づき、ふらつく体を支えてくれる。

そして、飛鳥、耀、俺、ヤシロちゃん、スレイブ、音央、鳴央、アルマ、デイーンの姿を確認すると、

「・・・十六夜、さんは？十六夜さんはどちらに？」

そう、眩いた。

そして、全員の視線が俺に向かう。

・・・確かに、これは俺の役目だよな・・・

「十六夜は来ないよ。一人で残って、戦ってる。」

「なっ、」

そして、黒ウサギは表情を驚愕に染め、残りのメンバーは言葉を失った。

「俺が十六夜のところに着いた時点で、あいつは腹を貫かれて重傷だった。それでももう逃げ切れないと思ったんだろうな。俺に黒ウサギを任せて、この現状の原因を作った魔王に一騎打ちを挑んだ。」

今の俺には、このことを説明する責任がある。

できる限り淡々と、あのときのことを語らなければ。

だが、黒ウサギにはそれが許せなかったようだ。俺につかみかかってきた。

「な、何てことを・・・!!一輝さんは陰陽師なのですよね!?!それならば、あの魔王の正体は・・・いえ、もしそれが分からなくてもその霊格の高さはわかったはずですよ!」

確かに、俺にはあの龍の正体がつかめている。

前にラストエンブリオの件があった際に、軽く調べたのだ。

「アレは、魔王アジィダカーハは只の魔王ではありません!あれこそ、数多の神軍を退けた人類最終試験^{ラストエンブリオ}ッ!十六夜さんであっても勝ち目は皆無です!それが分からないはずがないですよね!」

・・・もう、淡々と語るのは無理だな。

「ああ、それくらい分かったさ!一目見て分からないはずがないだろう!」

「だったら、どうして、」

「でも、それくらいは十六夜も分かってた！勝てるはずがないと分かった上で、俺にお前を託したんだぞ！」

黒ウサギは俺から手を離し、頭を抱えてしやがみこんだ。

『黒ウサギを連れて逃げろー』『皆を頼んだ。』俺は確かに、アイツからそういわれた。

そうである以上、俺は皆を守らなくちゃならない。

だったら、嫌われ役も俺の役目だ。

「黒ウサギ、俺のことはどれだけ恨んでくれてもかまわない。でも、お願いだからあいつの思いを無駄にしないでくれ・・・」

偶然にも、外道である俺は嫌われ役になれている。おあつらえ向きだろう。

「・・・お兄さん・・・」

ヤシロちゃん俺の手を握って首を横に振っている。

気付けば、他の三人も俺の近くに来ていた。優しいな、四人とも・・・気を抜いたら泣き出しちゃいそうだ。

「・・・ねえ一輝君。十六夜君は、その・・・」

「・・・死んだのを見たわけじゃない。もしかすると、逃げ切ったのかもしれない。・・・でも、あの重傷じゃ・・・」

飛鳥は俺が言わんとすることを理解してくれたらしく、「そう・・・」と喋ってうつむいた。

「悪いんだが、正直こうしてる時間も惜しい。アルマ、何かあの龍を抑える方法はないか？」

そして、俺はアルマに近づき、小声でそう質問した。

アルマも俺に合わせてか、小声で耳打ちしてくれる。

『そうですね・・・元々、あのような魔王に対抗するためにおのれの霊格を開放して試練と化す神魔の秘奥・・・それが“主催者顕現”です。』

「なら、“主催者顕現”さえあれば、あの龍を倒すことも？」

『理屈上は。ですが、試練の食い合いになるわけですから、あの魔王に対抗しようと思えば、それこそ最強種クラスでなければ・・・』

「そうか・・・」

・・・なら、あれを試してみるだけの価値はあるな。

「・・・兄様、何かするおつもりですか？」

「やっぱり、スレイブにはバレちゃうか・・・」

前に聞いたが、スレイブは俺の剣として契約したことにより、俺の感情を少し感じ取ることができるようらしい。

「そのために、少しばかり意識を沈めるから、何かあったら起こしてくれるか？痛みを与えるか、何か精神的に動揺するようなことがあれば起きるから。」

「・・・分かりました。御武運を。」

そして、俺は意識を沈めて、檻の中へと繋いだ。

|||||

さて、久しぶりに檻の中に来たな。

「本当に、久しぶりだのう・・・で、何のようじゃ？」

声が聞こえたので振り向くと、そこには案の定ぬらりひよんがいた。

「分かってることを聞くなよ・・・ちよつと力が必要だね。継承しに来たよ、鬼道の名を。」

「・・・そうか。では、場所を変えようか。継承の間へ。」

その瞬間、目の前に巨大な門が現れた。

「この中が継承の間だ。覚悟はよいか？」

「ああ。今の俺には力が必要なんだ。それに、いつまでも責任から逃げてはいられない。」

俺は、なんだかんだと言い訳をつけて正式に名を告ぐことを拒否してきた。

それによって生じる責任の重さに、恐怖していた。でも・・・

「であれば、わしからは何も言わん。白澤も来たようじゃし、いくか。」
「ああ、いこう。」

継承の際には、その当人が倒した中で最も霊格の高いものが付き添うことになっている。

俺は白澤を横に引き連れて、門をくぐった。

「久しぶりだな、一輝。」

門に入った俺を出迎えてくれたのは、俺の父さん、鬼道星夜だった。「なるほどね・・・継承する前に先代が死んだ際の措置ってのは、こういうことか。」

「ああ。歴代鬼道は死んだ際に魂の一部を檻に留め、子孫を見守り、名を継承する。ここは、継承とお前を見守るための空間だ。」

そして、さらに奥を見てみるとそこにはさらに多くの人々、恐らく、初代鬼道から父さん、第六十二代の鬼道がいるのだろう。

「見守るって・・・ここでは普段、外の様子でも流れてるのかよ。」

「ああ。お前を見守るように、映像が流れている。」

「プライバシーも何もあったもんじゃねえな。そこんところはどんなんだ？」

「これもまた、鬼道が背負うものだ。」

「いやなもんを背負わせるな・・・まあ、文句を言っても仕方ないか。」

「じゃあ、そろそろ本題に入ろう。俺は一刻も早く、十六夜や皆を助けたいんだ。」

「視ていたからな、分かってる。お前がここにいる間は外ではほとんど時間はたたんが、それでも、なのだろうな。」

父さんはそう言って、継承の間の中心まで移動する。

そこで手招きしてくるので、俺も父さんの前まで行く。

「さて、最後に確認だが、鬼道の名を継ぐということの意味、分かっているな？」

「ああ。人の道を外し、外道となり、鬼となる。その道にありしは人の栄光にあらず、民の侮蔑と、畏怖成り、だろ？」

「分かっているのなら、俺は止めん。始めようか。」

そんな無駄話をしている間に他の歴代鬼道も俺達を囲むように並び、横に自分が倒した最も格の高い存在が控えている。

「我、第六十二代目鬼道、鬼道星夜。今ここに、鬼道の名を継承せん。」

汝、これを受け入れるか。」

「我、寺西一輝。鬼道の血を継ぎし者とし、今ここに鬼道の名を継承す。汝、我に力を与えん。」

開始の言霊を唱えると、その場の全員の服装が男性はデザインの統一された和服、女性は巫女服へと変わる。

ただし、俺のもの以外は全て黒い。

「一族に受け継がれしは、忌むべき鬼の名。」

「一族が得しは、わずかの栄光と、多大な畏怖。」

「しかし、それが我らが名の象徴。道を踏み外しし、外道の象徴である。」

何人もの人が同時に言霊を唱え、それに俺が一人で返す。

「その名を継ぐことは、すなわち、汝も人を止めることである。」

「妖と契約し、その加護を得る、陰陽師にあらざる行為成り。」

「一族の歩みし道は、暗く染まり、一涙の光もなし。」

「だがしかし、我にはその道を進む覚悟あり。」

「我らには、その道を進みし義務がある。」

「我らには、その道を守りし義務がある。」

「我らには、その道を背負いし義務がある。」

「であれば、我もその一端を担おう。新たに道に踏み込み、わが身を染め上げよう。」

だんだんと、俺の和服も黒く染まっていく。

「汝、一族の業を背負う覚悟はあるか。」

「愚問成り。我、覚悟を持ってここに参上す。」

「汝、一族の責務を背負う覚悟はあるか。」

「愚問成り。我、覚悟を持ってここに参上す。」

そして、俺の和服が真っ黒に染まると、言霊を唱えるのは俺と父さんだけになった。

「我が名は一輝。一族の歩みし道を照らす者成り。」

「我が名は星夜。一族が歩みし道に、一時の輝きを与えるものなり。」

名の意味を唱え、継承は最後の一節に入る。

「汝、今ここに」

「我、今ここに」

「大いなる鬼道の名を継承せん！」

継承は終わり、俺の和服は完璧な漆黒に染まった。

黒よりも深い、無の色に。

「これで継承は終わりだ。」

「OK父さん。これで、皆を守る力が手に入った。」

次いつここに来るのか分からないし、少しくらいは話をしておう。

「にしても、あそこまで継ぐことを拒否していた一輝が鬼道を継承するとは。」

「あれだって、本気で言ってたわけじゃねえよ。何かきっかけがあれば、いつでもこうなった。」

これは間違いない。でなければ、とつくに陰陽師なんて止めてる。

「なんだか、オマエが継承したときと似たような流れじゃのう、星夜？」

「おとうさま・・・」

へえ、この人が俺のじいちゃんか。始めてみるな。

「確かオマエも、友を救うために継承を望んだのではなかったか？」

「言われてみれば、そうでしたね・・・懐かしいです。」

「へえ、父さんもだったんだ。」

まあ、意外ではない。何せ、片思いしてたころ母さんを助けるために命を賭けた人だ。

「それより、名を継いだもののみ知らせることがある。早く初代様のところに行くといい。」

「そんなことがあるんだ。じゃあ、そこに行く前に一つだけ言わせてくれ。」

「なんだ？」

さて、どうしても言いたかったけどいえなかったこと、今のうちに伝えるとしますか。

「俺をここまで育ててくれて、ありがとうございました。」
そう言つて頭を下げ、何か言われる前にその場を去った。
後ろからしゃくりあげるような音が聞こえるけど、聞こえなかった
ことにして。

|||||

「どうもこんにちは、初代様。自己紹介とか、いる？」

「いや、別に必要ない。いっつも檻の中から見てたからな。」

初代様との挨拶は、こんな感じで終わった。

「で？俺に伝えることって？」

「まあ、それは見た方が早いだろうな。オレとぬうりひよんが契約した理由、鬼道が背負う仕事について。」

そう言いながら、初代様——確か、名前は示道だったはずだ——

は継承の間を出て、檻のさらに奥へと向かつて行く。

まあ、何かあるんだろうな、とは思っていた。ただの人が何の代償もなしに大妖怪と契約できるわけがない。

だが、初代は何も代償とせずに契約したと伝えられてるし、実際に俺も、代償なしで契約しているようなものだ。そこに何か事情がなくては話が合わない。

「この中で見れるって事は、何かしらの封印が契約なのか？」

「そうじゃ。あれをどうにかするには、ワシら異形の方だけでも、おんしら人間の力だけでも足りなかった。ゆえに、ワシはそいつの一族に力を与えるという契約で、その任を任せた。」

異形側でも、人間側でもない存在。それがキーワードか。

「ほら、着いたぞ。これが、契約の代償だ。」

「これが・・・？」

示道が指すところには、よく分からない像がぼつぼつと八個・・・いや、九個並んでいた。さらに、像をさらに置くと思われる場所が、数え切れないほどある。

「なんだ？まさか、像のコレクションが契約の代償だとも言うのか

？」

「その言い方は間違つてはいないが、正しくもないな。正確に言えば、この像の元を封印し、この場で完全に封印することだ。」

「像の元・・・？まさか、こいつらが元は生きて外の世界にいたとでも言うのか？」

「ああ、その通りじゃ。」

・・・ありえない、真つ先にそう思った。

そこに現されているものに、俺は心当たりがない。

確かに、俺は湖札のように豊富すぎる知識を持っているわけでもない。だが、陰陽師の中でも中の上くらいの知識量はある。

その知識を元に考えても、こんなものに覚えはない。

こんな・・・一体の像が一体に見えない、一の存在のはずなのに二つの存在に見えるものなど。

確かに、異形の存在である妖怪や魔物、霊獣に神は何でもありの、混ざった存在だが、こんな・・・言葉で表しきれないことなど・・・

「そうか・・・確かに、これは人間だけでも異形だけでもどうにかできないわけだ・・・」

「ああ。しかも、こいつらの一体一体が神何ぞとは比べ物にならない力を持ち、異形から見ても異形であるせいで記録されず、何の報酬も出ない。」

「なんつうタダ働きだよ・・・つり合わなさすぎんだろ・・・」

まあ、納得できなくはない。中には小指の爪ほどの大きさの像もあるが、封印されているにもかかわらずかなりの格の違いを感じさせられる。

「だが、別の形での利点もある。倒したものには封印の影響で、そのものの力が宿るのじゃ。」

「こんなんの力がただの人間に宿るのかよ・・・」

そんな人間、もうチートどころの騒ぎじゃない。

だが、その話が本当なら、その力を持つものが過去に九人いたことになる。

「じゃあ、それに成功した人間が過去に九人もいて、そいつらが皆死ん

だつてのかよ。」

「まあ、力を得たもののうち、七人が死んだのは確かじゃ。」

「そいつらの内六人はこいつらの同属によって殺され、一人は寿命で死んだ。二度目の遭遇は、ほぼ例外なく死与えたものじゃ」

なるほど、確かにそれならば力を持つものが死んだことも理解できる。

それに、このことから遭遇率は低いことも分かった。一度会えば引かれる、というわけでもないらしい。

「だけど、それならあと二人はどうなるんだ？もう生き残ってるやつらなんて……」

いや、違う。

まだ……まだ二人だけ、生き残りがいる。

「そうだ……こいつは、おんしとおんしの妹によって封印された。それゆえ、姿が薄くなっているのだ。」

そうか……最初に気付かなかった姿のあいまいな像は、そこに半分しかないからだだったんだ。

だが、それでは計算が合わない。

「じゃあ、残りの一体はどうして……」

「それは、またおんしの妹もあわせて話すべきじゃろうし、今は、最低限の話だけにおこう。」

「ああ。いそいでいるんだろう？」

「そうだった……」

「それに、神成りを使えば分かることもある。どれ……来い、蚩尤。ぬらりひよんがそう言うと、この場に蚩尤が現れた。

なるほど、考えてみれば当たり前のことだ。ここは檻の中で、この檻の本当の意味での主はぬらりひよんなのだから。

「ほう……小僧、あの奥義を使うのか？」

「ああ。少しでも力が欲しいらな。」

「だが、今の小僧ならそうせずとも、あれはつかえるのだろうか？」
「使えるみたいだけど、これは隠しておきたいからな。」

そう言つて、俺は蚩尤に触れて言霊を唱える。

「我、今此処に大いなる神の力を希^{こいねがう}う。我が血族の名は鬼道。鬼の名を持つ一族成り。故に我はわが身の丈を考えず、神にならんと欲す。汝、その大いなる力を我に貸し与えよ。」

言霊を唱えると、蚩尤の体が輝く霧となり、俺の体に同化していく。そして、蚩尤の力が完全に俺のものとして一体化すると、カチリ、と言う音が三回聞こえ、封じられていた記憶が戻った。

そこには、翠色に輝く、どこか禍々しい大鎌を振るう、かなり幼い……小学校に入ったかどうか、と言うころの自分がいた。そして、その視線の先には、黄金の洋弓を構える幼い湖札と、言葉で表現できないなにかがいた。

少し遡り、言葉で表現できない……だが、先ほどの記憶のものは違う、何かと話している、地面に倒れた自分がいた。

少し遡り、湖札を背に隠して、一つ目の記憶にいた何かと対峙している自分がいた。

少し遡り、湖札と手を繋いで歩いている自分がいた。

そして、封じられていた中で最も古い記憶にたどり着き……そこには、泣いてうずくまっている湖札と、そこに手を差し伸べている自分がいた。

「大丈夫か？俺は鬼道一輝だ！困ってるなら助けるぞ！」

それは明らかに、初めて会うもの同士の挨拶だった。

「そっか……そういうことか。」

俺は意外にも、冷静だった。

かなり衝撃的な事実を突きつけられたのに、全然動揺していない。

「どうじゃ？少しは理解したか？」

「ああ。なんとなくだけど、理解したよ。そう言うことか……」

でも、今はそれどころじゃない。

「だけど、その辺りについて考えるのはまた後にしよう。ぬらりひよん、檻の中の妖怪、霊獣を全員呼んでくれるか？」

「別に構わんが、どうするのじゃ？」

「俺は今、できうる限り最善を尽くしたいからな。百鬼統合を使う。」
「はっはっは！神成りを使い、さらにそこまでするとは流石はオレの子孫だ！」

初代様が何か言っているが、ぬらりひよんは気にせず全妖怪を呼ぶ。

「我、今此処に汝らに命ず。これは勅命である。我が望みしは汝らの力、恩恵、功績、その全てである。故に汝らは、我が身に宿り、その全てを明け渡さん。今ここに、我はこの奥義を発動する。その名は、百鬼統合也。」

言霊を唱え終わるとその場にいた妖怪、霊獣の全てが俺の中に入り、俺と同化する。

そして、俺の身にすべての妖怪の霊格（そんざい）、功績、恩恵が宿る。

「その奥義は、一輝のオリジナルだったな？」

「ああ。俺が望んだ力に対応した奥義の一つだ。」

そして、その場にいるのが俺と初代様だけになると、さすがに無視するわけにもいかないから、そうかえした。

「それだけの力を持っているなら、黒ウサギたちを任せても安心できるな。」

「・・・さて、その言い方だとまるであんたが黒ウサギと知り合いみたいじゃないか。」

「まさしくその通りだ。」

まさかの新事実だった。

「オレは一時期箱庭にいてな。そのころ、今のノーネームに所属していたんだ。」

「それってぬらりひよんと契約してから・・・じゃないよな。だとしたら、黒ウサギたちが俺の奥義や元の苗字に反応してるはずだし。」

「ああ、まだ苗字がなんの捻りもない高橋だったころだな。ギフトも、陰陽術しかなかった。」

「陰陽術ってことは、妖刀に式神、お札つてところか・・・それで何ができたんだ？」

「これでも、五十を超える魔王を倒し、二十六人の魔王を隷属させたも

「んだぞ！陰陽術サブに体術メインで！」

初代様は予想以上に強かった。

そんな人が外道・陰陽術まで使うとか・・・どうなるか考えたくもないな。

「まあ、まだ黒ウサギはオレたちが箱庭の外にいったことは知らないみたいだし、まだばれないようにしておいてくれ。」

「だったら話すんじゃないよ・・・」

「悪い悪い！俺の子孫が箱庭に行くことになったときのために、ぬらりひよんと契約したからな。予想以上に強いやつが行つてくれて嬉しかったんだよ！」

「このご先祖様は・・・そういや、アンタが隷属させた魔王はどうなったんだ？」

「あー・・・一人を除いてみんなどこかにいるはずだ。」

なんともまあ、あいまいな言い方だった。

「あんたが俺がいた世界に追い出されたつてことは、魔王とのゲームに負けて、つてことだよな？」

「そうだな・・・アレは、なんともタイミングが悪かった。あいつらが全員揃っていれば、もう少しまともなゲームができたかもしれないなかつたんだが・・・」

示道は、本当に残念そうにそう話す。

そして、コイツは勝てるではなく、まともと言った。

俺たちが倒そうとしている魔王は、それほどの存在だと言うことだ。

全盛期のノーネーム、示道一人でも二十六人も元魔王を従えていたコミュニティですら、勝てる可能性は、低かった。

「まあ、今更そんな後悔をしても遅いんだがな。一人だけ元の世界につれて帰ったやつは、神社にしまつてあるぞ。バックル、見たことないか？」

「あつたな・・・今は俺の倉庫の中にあるぞ。」

「じゃあ、もし他のやつらも確保できたら一緒に出してやつてくれ。」
「了解。じゃあ、そいつらはどこに？」

「じゃあ、俺は『主権者顕現』を使って、最低限でも時間を稼ぐから、このメンバーへの指示は頼んだぞ、アルマ。音央と鳴央も別行動で。今の俺は、本気でヤバイから。」

一方的に指示を出すと、俺は皆から少し距離をとり、背後で炎を上げる。

「あ、そうだ。もしも俺が魔王に落ちたら、飛鳥に耀・・・それと、十六夜の三人で俺をぶん殴って『ノーネーム』につれもどしてくれ。鳴央に音央、ヤシロちゃん俺に隷属してたりするから、どうゲームに影響するか分からん。」

「一輝・・・何する気なの？」

「別に・・・昔一度やってみたみたいに、感情に任せてみようかな、とね。スレイブはどうする？」

あんまり俺といっしょに来るのがいいとは思えない。

そう思つての提案だったのだが・・・

「愚問です。私は貴方の剣。常に貴方とともにある。そう何度も申したつもりですが？」

「さつきも言ったけど、俺は魔王に落ちるかもしれない。それでもいいのか？」

「それこそ愚問です。・・・私は、ここに誓います。」

そう言いながら、スレイブは俺の前まで来てひざまづき、右手を差し出してくる。

「私は貴方とともにあると誓った。例えその道が王道であれ霸道であれ、正義の道であれ悪の道であれ、魔王の道であれ滅びの道であれ、私はともに進みましょう。」

「ははは・・・ありがとう。じゃあ俺も、破滅だけはさせない、そう誓うよ。」

俺はそう言いながらスレイブの手を取り、剣の姿になったところで抜剣する。

そして、すべての準備が整ったところで俺は炎の勢いと規模を上げていく。

ああ、俺がこれだけの怒りを抱いて、冷静でいられるのが不思議だ。

いや、スレイブのおかげでもあるんだろうな。

でも、間違はなく本気でキレてる。もう二度と、大切な家族を、仲間を失わないと決めた俺が、こんな状況を作ったやつに対して。そして、覚悟の足りていなかった過去の自分に対して、だ。

そして、俺の怒りに合わせて激しくなっていくそれを空へと上らせていく。

「ゴメン皆・・・」

そして、俺は元の世界にいた頃。記憶が封印されてからずっと、殺女に渴を入れられるまで使っていた、作った、無理をした笑みを浮かべ、

「ちよつと、無茶してくる。」

そう、言葉を向けた。

「一輝！」

「一輝さん！」

「一輝君！」

「お兄さん！」

『一輝殿！』

そして、業火をそのまま弾けさせ、火の粉の一つ一つを輝く『契約書類』にし、あたり一体に降り注がせる。

|| || || || || || || || || ||

私は、殿下たちとともに深い森の中にいた。

とりあえず私の戦果は認められたらしい。

魔王すら一人で圧倒できる兄さん、そして元魔王に、神話の魔剣。テイターニアに神隠しまで一人で押さえ込んだんだから、文句を言われる筋合いはない。

誰も彼もが、成長すれば主催者権限を手に入れられる存在・・・それこそ、兄さんはあの場で使うことも出来たんだから。

「・・・あれは・・・」

そんな状態で兄さんのことを考えていたら、視界に入るものがあつ

た。

「なんでしようね、アレは・・・火の粉？」

そう、火の粉。

「だけど、それは降りながら姿を変え・・・一つ一つが、輝く契約書類になる。」

「あ、あれは・・・」

「ちよつと、湖札さん!？」

リンの制止の声を無視して風をまとって飛び、その一枚を手にして地上に戻る。

内容に目を通して・・・無意識のうちに、兄さんと戦った方向に飛び出そうとして、

「湖札さん！」

リンの声で、正気を取り戻す。

そうだ・・・ここには、マクスウエルもいる。

迂闊な行動は、出来ない。

「どうしたんですか、湖札さん・・・そんなに慌てて」

「・・・これ」

私は契約書類を・・・兄さんの名前で開催されたギフトゲームの契約書類を渡して、天を見上げる。

「こんなギフトゲーム・・・何がしたいの、兄さん」

|||||

『ギフトゲーム名 “神明裁判”』

・参加者側プレイヤー一覧

ゲームマスターが今裁くべきだと認識する悪全て（常時変

動）。

・主催者側プレイヤー一覧

ゲームマスターが裁くものと認識するもの全て（常時変

動）。

- ・主催者側 勝利条件
- ・全ての参加者の殺害
- ・参加者側 勝利条件
- ・ゲームマスター、鬼道一輝の殺害。
- ・ゲームマスター、蚩尤の殺害。

・備考

このゲームは、ゲームマスターが蚩尤の主催者権限を失うと同時に、勝敗をつけず、強制終了するものとする。

参加者側プレイヤーは、ゲームマスターが定める範囲（常時変動。ただし、縮小することはない）の外に出ることを禁ず。

宣誓 上記を尊重し、誇りとホストマスターの名の下に、勝者が絶対的正義であることを、ここに宣言します。

『鬼道一輝“印”』

「さあ始めようか。絶対悪と外道による、神々の裁判を！」

そして、すぐそばの草むらを睨みつけ……そこにいたアジィダカーハの分身三体を作り出した剣で貫き、その命を奪った。

神明裁判 ①

一輝は森を走りながら、アジ・ダカーハを切り裂いて進んでいた。本来であれば神霊と同等である第一世代を倒すことが、そう簡単であるはずがない。

それに劣るとはいえ、第二世代、第三世代も簡単に倒せるような敵ではない。

それでも、一輝は一太刀の下に切り伏せ、進んでいく。

今の一輝を構成している霊格は、大きく分けて六つだ。

一輝個人としての霊格、鬼道という一族の霊格、檻の中にいた妖怪、魔物、霊獣の霊格。

そして、神である蚩尤の霊格。

蚩尤一つでも十分なその霊格にさらに付け加えられ、今の一輝は人間の領域を完全に遺脱した、それでも人間であるという小さな矛盾を生んでいる。

それもまた霊格を強化する要素となり、たかが第一世代、おのれの霊格で押しつぶすことが出来る。

だが、それではゲームは終わらない。

アジ・ダカーハの分身体もまた、アジ・ダカーハと同じ性質・・・血より新たな世代を生み出すことが出来る。

一輝が斬り裂くと同時に新たな世代が生まれ、それを切り伏せると同時にまた新たな世代が生まれる。

湖札が言っていた『こんなギフトゲーム』という言葉は、この要素があるゆえのものだ。

その要素さえなければ、ギフトゲームは成立しているといえよう。いや、現時点でも成立はしている。

ちゃんと主催者、参加者の双方が勝利することは可能だ。

ただし、主催者が一方的に不利ではあるが。

「やっぱり、数の利は向こうにあるか。」

「その上、質もかなり上です。・・・今からでも遅くありません。兄様、ルールの変更をなさるべきかと。」

「・・・ダメだ、それは出来ない。」

スレイブの個人判断で一輝の体を動かし、背後から迫っていた第一世代を切り伏せ、その後から湧いてきた第二世代、第三世代を続けて切り伏せる。

スレイブ自身も、一輝の鍛冶神としての神格によって霊格をあげている。

その上で一輝が正面、スレイブが背後を担当した時点で死角というものも存在しない。

「何故ですか、兄様！」

「・・・コイツらに合わせてこのルールを変更した場合、俺以外の人まで巻き込むことになる。」

コイツらに合わせる、というのは目の前にいるアジ・ダカーハの分身体のことだ。

今回、一輝がゲームを開催したことによって分身のほとんどは一輝のもとに集まってきた。

そりやそうだ。一輝一人を殺せば、このゲームは終了するのだから。

今回のゲームにおいて、一輝は自分自身を危険にさらし、自分が勝利するのを難しくすることによって相手の行動を制限している。

そうして、範囲外に逃げた人たちの安全だけは確保したのだ。

・・・代償として、無限に近い数の敵を殺さねばならないのだ。

「俺が何とかして敵の数を減らして、その間に求道丸が比較的力のない人たちを避難させる。」

求道丸は今、一輝から譲られた空間倉庫の中にそういった人たちを避難させつつ、ゲームの範囲の外まで逃げている。

「その避難が終わったら、次はその次に力のない人たち。だんだんと参加資格を剥奪して、範囲外に逃げていってもらおう。・・・俺が言いたいこと、分かるな？」

「その上で言わせていただきます。私は、最後まであなたとともにいると」

一輝が水の刃で敵を切り伏せ、スレイブが勝手に動いて敵を屠る中、二人は言葉を交わす。

「確かに、それは可能でしょう。今はギフトカードに『裁くもの』と出て、参加しているものもいるでしょう。そういったものたちは、そのしるしが消えると同時に逃走へと向かう。ですが、それでは逃げないものもいます。」

「そう、それでは逃げないものもいる。」

一輝は当初、そういった人たちのためにギフトゲームの禁則事項を一つ、作るつもりでいた。

すなわち、『参加者の、ゲームに直接関係ない生物、物質、非物質への関与を禁止する』と。

だが、それをできるほど、ゲームに余裕がなかったし・・・何より、一輝という人間がそれにそぐわなかった。

一輝という人間が正義の味方のように動いていたのなら、人からそう認識されていたのなら、違ったのだろう。

正義の名の下に悪を裁く。その名目を掲げた時点で、一輝にはそのルールを設定する権利が生まれる。・・・でも、一輝はそんな人間ではない。

自分が育った一族は『外道』とよばれ、一輝のいた時代ならそこまで酷くはなかったものの、それよりも前の、はるか昔の時代において、人にあだ名す存在を退治してきた彼らに民から与えられたのは、多大な畏怖。忌むべき鬼の名。人でないとする、はつきりとした差別。

彼らにとって、『鬼道』は悪であり、同時に強すぎたために手を出すことの出来ない存在であった。

そんな一族のほぼ全てを一身に受けた一輝が、正義を名乗れる道理があるであろうか。

箱庭という世界のシステムによって今は魔王の位に落ちていないが、本人のほんの少しの感情の変化によって、簡単に魔王の位に落ちてしまう。

そんな危うい綱渡りのような道を、さらに中国において悪を率いた蚩尤の名を使って主権者権限を得たのだ。

だからこそ、一輝は一番望む形でのゲームを開催することが出来ず、さらには自分側のプレイヤーまで存在するという状態でのゲームの開催を余儀なくされた。

「・・・そんなことは分かっている。それに、ただでさえ危ない身を、それでも危険にさらしてらるんだからな。」

「せめて、それだけでも解除しましょう。あの方も、それで気分を悪くすることはないはずです。」

「いや、ダメだ。それは出来ない。・・・これは、俺の意地だけだな。」

一輝はそう言いながら、近くに來ていた分身体を切り倒し、再び現れた分身体を水の水压で押し流す。

最初は、一輝は狐火によって血を蒸発させ、新たな世代が生まれるのを防ぐつもりでいた。

だが、相手は拜火教の神霊。火を与えてはダメだと気づき、それからは余裕がない場合は流すことにしているのだ。

「・・・なら、最後までお付き合いしましょう。最初の目的はなんですか？」

「そうだな・・・とりあえず、」

そう言いながら一輝は倉庫を開き、その中にあつた大量のペットボトルを斬り裂き、

「コイツらを、全滅させる。」

本来は出来ないはず。だが、水を操り、弾丸のように発射し続け、分身体を掃討していく。

新たに生まれては死に、どんどん数を減らしていき・・・最後には、新たな世代すら作れなくなって終わる。

それでも、息をつくまもなく新たな分身体が現れ、一輝の前に立ち塞がる。

「・・・それから出来ることならマクスウェルと本体を叩きたいんだけど・・・」

「まだ、道は長そうですね・・・来ます！」

相手が動くのと同時に、一人の人間と一振りの剣は殺戮を開始した。

神明裁判 ②

湖札が落ち着いてから、話し合いは再開される。

「とりあえず、湖札さんのお兄さんが開催したギフトゲームは気になります。……今現在、問題はないものとして話を進めましょう。」

そう言っているリンのギフトカードに浮かぶのは、『裁くべき悪』。

殿下やアウラ、グライアにマスクウエルのギフトカードにも同じ文字が浮かんでいる中……

《兄さんは、どうして……》

湖札が見ているギフトカードには、『裁くもの』と浮かんでいる。

つまりは、今回のゲームにおいて湖札は主催者側のプレイヤーに、残りのメンバーは参加者側のメンバーにカウントされているのだ。

「では、まず私からいいかね？」

「……なんでしよう？」

マクスウエルが発言を求めたのを警戒しつつ、リンが発現を許可する。

「何、増援が来た、という話だ。」

その一言で、その場にいるマクスウエル以外の全員が息を呑む。

ジンは、この場に新たな敵が増えることに対して。

残りのメンバーは、自分達を監視する役目を持つヤツが増えることに対して。

「……どんな方が、来たのでしょうか？」

「私の親友だよ。」

《えー……》

湖札はその発言に対して、心の中で不満をもらした。

湖札も女性であり、コイツがウイラに対してしてきたことは知っている。

そんな性格のヤツと親友をしていられるなど……一体、どんなのが来たのやら、と心配になったのだ。

そして同時に、まだ見ぬ被害者に対して同情の念を向けた。

「そろそろ来ると思うのだが……お、来た来た。」

マクスウエルが空を見上げて、そういった。
つられて他のメンバーも空を見上げて……蝶のような羽を羽ばたかせ、こちらへと向かってくる人影が見える。

その姿は、神々しく素敵なものであるのだが……油断してはならない。

相手は、このマクスウエルと親友となれるヤツなのだから。

「こちらだ、我が親愛なる友よ!」

そして、そんなヤツに対してマクスウエルは声を張り上げ、

「おお、そこにいたか、我が親愛なる友よ!」

そいつもまた、近づいてきながら声を張り上げた。

この瞬間には、四人の中にあつた『性格は真反対なのに馬が合う』という可能性は消え、『単なる同類』であるとの烙印を押された。

「どうだい、君は運命の花嫁を娶る事が出来たのか、マー君よ。」

「」「マー君!」「」

五人がついその呼び方に突っ込みを入れてしまったのは、仕方のないことだろう。

「いや、ダメであつた……」

「そうか……だが、気にすることはない!あれだ、ツンデレというヤツだ!」

「ツンデレ……なんだ、それは?」

「好きな相手には、ついツンツンとした……尖った態度を取ってしまうことだ。」

「おお……確かに、それはウイラにピッタリ当てはまる!」

《いや、普通に嫌いなだけでしょ……》

湖札は、あえて突っ込みを心の中で行った。

その右手は、つい気持ち悪さからリンの左手とつながれている。

どちらかが意図的に行つたのではなく、自然に、お互いが。何かにすがりたかつたのだ。

こんな気持ち悪い話、聞かされている身にもなってほしいのだろう。

「それに、この状況!なんともおあつらえ向きではないか!」

「おあつらえ向き・・・何のことを言っているのだ？」

「このギフトゲームのことだ。」

そう言いながらその男が取り出したのは、「神明裁判」の契約書類。

「このゲームにおいて、我々は『裁くべき悪』となっている・・・ということは、様々な困難があることだろう。それを乗り越え、マー君がウイラ嬢の元にたどり着くというのは・・・」

「おお・・・なんと運命的なのだ!!」

自分の開催したゲームをそんなふうに解釈されている一輝は、いい迷惑だ。

「・・・では、ついでに一つ頼まれてくれませんか、マクスウエルさん？」

リンはこれをチャンスと見て、マクスウエルに提案をする。

ただし、左手は湖札と繋いだままだ。

「なんだね、「軍師」殿？」

「とりあえず、貴方は今から避難民と残存戦力を叩いてください。空間移動が可能な貴方なら、一人でもそれが可能なはず。」

リンの提案に、マクスウエルはほんの少し顔をしかめる。

その様子から、このまま後少し押せば・・・と、リンは追い討ちをかける。

「はあ・・・全く。マクスウエルさんは、乙女心が分からない人ですね。」

「は？」

二人のキモいやつらの声が重なった。

そんな様子のマクスウエルに『ビシイ!』と音がなりそうな勢いで指を差し、

「いいですか？貴方の花嫁・ウイラ「ザイグニファトウスは今、窮地に立たされています。きつと・・・いえ、間違いなく心細いことでしょう。誰かに支えて欲しいことでしょう。抱きしめられて、安心したいことでしょう。頼りになる運命の王子様に迎えに来て欲しいことでしょう!」こんな絶望的な場面に颯爽と現れる実力派美形残念ストーリーカーがいたらどんなに気持ち悪い相手でもチョロインよろしくメロ

メロコロンになることは、確定的に明らかなのです！」

「ちよつと待つてリン！それはさすがに無茶が、」

「メロメロコロンだと!?」

「なかつた!?!」

湖札が突つ込み役になつてきた。

「そうです！上手くすればモミモミでパフパフです！」

「も、モミモミでパフパフだとツツ!!?」

「それはないです！さすがに、ただだけチョコインでもないですよ!!!」

湖札の、一人の恋する乙女として精一杯のウイラのための叫びは、しかし誰にも聞き入れられることはなかつた。

「そうです、最新の魔王様！貴方の花嫁・ウイラレーザーニグニファトウスは今まさに、王子様が駆けつけてくれるのを待っているのですツ！」

ズドオオオオオオン!!!

と、そんな馬鹿っぽい爆発音とともにスイッチがONになるマクスウエルを、湖札は冷めた目で見ると。

ああ、コイツ・・・どんな女性でも生理的に無理だ、と。

「あの・・・その初めてお会いするお嬢さん」

「!?・・・な、なんででしょう?」

湖札は、キモイ人二号に声をかけられて、鳥肌をたてながら応答する。

「その、だな・・・君なら、自分のピンチに助けに来てくれた殿方に対し、そのような感情は抱くのか?」

「え、あ、そうですね・・・」

湖札はその丁寧な口調に驚きつつ、同時にそれでも収まることのない鳥肌から、コイツも、どんな女性でも生理的に無理だ、と直感する。

そして、それを抑える意味合いでも、回答をするためにも少し妄想。自分が超特大のピンチのときに、颯爽と駆けつけて自分を助けてくれる兄の姿。

そのまま感情に任せて抱きついて、唇と唇が・・・

「ホワァ〜・・・」

「あの・・・」

「あ、そ、そうですね・・・」

湖札はどうか現実に戻ってきて、返答をする。

「とりあえず・・・普通の女性であれば・・・思い人がいなければ、そう言う感情を持つのではないかと」

少し、間があいて・・・

「マー君・・・」

「オーちゃん・・・」

二人がアイコンタクトを取り、同時に一つ頷いてから、

「う、おお・・・ウイ、ウイラアアアアア!!!今行くぞオオオオオオオオオオ!!!」

「う、おお・・・ヒ、ヒメエエエエエエ!!!今度こそ、放さないぞオオオオオオオオオオ!!!」

マクスウエルは熱風と冷風を撒き散らして去っていき、

もう一人のキモイ人は、再び翼を広げて、飛び去っていった。

二人ともが、一陣の恋の風となって出陣していった。

「・・・」

『魔王連盟』一同は、一連の出来事を遥か彼方の宇宙のように生温い瞳で見守る。

そんな空気がそろそろ耐えかねなくなってきたころ・・・リンがコホンと咳払いをして、

「さてさて。私と湖札さんのファインプレーで邪魔者・・・いえ、超キモイコンビは去りました。」

「そうだな。」

「そうね。」

『うむ。』

「何気にひでエなお前ら。」

「私としては、被害者が倍になったことがすごく心配になったんだけど・・・」

一人、恋する乙女がその人に思い人がいたときのことを考え・・・かなり、同情していた。

そんな中でリンはジンに歩み寄り、膝を折って顔を近づける。
「ジン君。本題に移ろう。さっきの話の続きを、今度は全員でね」

神明裁判 ③

ヤシロは、一人でアジ・ダカーハの分身体と戦っていた。

一輝が立ち去ってから、とりあえずの方針としては原作キャラは原作通りに動き、一輝に隷属している三人はヤシロは一人で、音央と鳴央は二人で動くということになっている。

だからヤシロは一人で戦っている。

「ふう……こんなもん、かな。」

ある程度分身体が集まるまでは、百詩編で戦っていたのだが、集まると同時に口を止め、唱えていた百詩編を終了する。

そしてギフトカードを取り出し……今ではすっかり懐かしい、ノストラダムスの預言書”を取り出す。

「『主催者権限』までは戻ってないけど、」

そう言いながら分身体の攻撃を避け、魔導書を広げる。

そのまま念じて……自分の物語、破滅の物語を召喚して分身体に向かわせる。

「よし、召喚できるようになった。皆、久しぶり〜。」

ヤシロの陽気な挨拶に対して、破滅軍団は一切の返答をしない。

ただ無言で、分身体に破滅を与えていくのみだ。

「ふう……。」

ヤシロが拗ねて見せるが、一切の反応がない。

破滅の物語が、そんな事を気にするとも思えないが。

「……いいもん。他の子達を呼ぶから。」

そう言いながらヤシロは再び魔導所を開き、新たに破滅の物語を召喚する。

ただでさえ一方的なのに、そこに投入することがかなり酷いことのように見える。

まあ、相手が相手だし問題はないと思うが。

「……あれ？出てきてくれないかな〜、って思ってたんだけど？」

ヤシロは自分で召喚しておきながらそんな事を言っている。

まあ、それも仕方のないことだろう。

これまでに一度も召喚に応じてくれたことのない人たちを召喚してみても、それに成功したのだから。

「そう？今のあなたなら、協力するのもやぶさかじゃないけど。破滅を与える、ではないんだし。」

これまで出てこなかった理由は、破滅サイドとして動くつもりがなかったからだ。

とはいえ、これで全員、というわけでもない。

まだ出てきていないのも、何人かいる。

「一応、我々も恐怖を与える側なのですが・・・」

「恐怖推進活動、だよね。」

「燃えてくぜー！」

まず出てきたのは、三人の少女と一人の青年。

そして、その次に出てきたのは・・・

「あの・・・私は、そっちじゃないんだけど・・・」

そう言っつて、控えめに手を上げている少女。

「まあまあ、灯花。細かいことは気にしない。」

「全然細かくないよ、アーリさん!？」

「そう？まあでも、気にしなくていいと思う。いつその機会に、灯花ゼクスドラグナーも六皇魔竜にはいる？」

「はいらないよー！」

無表情に本気かどうか分からないテンションが組み合わさった勧誘を受け、灯花が必死になって突っ込む。

「さすがはアーリ様。どさくさに紛れて灯花さんを引き込もうとするその技量、感服いたします。」

「ラストイちゃん、多分あれは違うと思うよ？それに、勧誘にも成功してないし。」

「おっしやー！ガンガン料理してやるぜー!!」

「計都くんも勝手に戦いに行っちゃうし・・・」

「大変そうだねえ、リヴィアちゃんも。」

「あははっ。それでも楽しいよ？」

と、ここまでこれば分かる人には分かるだろうが、かなりの援軍を、

ヤシロは召喚して見せた。

四体の魔竜に、一振りの聖劍^{魔劍}。

世界を恐怖に陥れ、破滅へと導く魔竜、という破滅の物語に、世界を三度焼き尽くすという破滅の物語。

かなりレベルの高い破滅の物語が、一気に戦場に現れた。

「さて、それじゃあ・・・よろしく、でいいのかな？」

「うん、問題ない。」

そう言いながらアーリは両手を広げ、左目に刻印が現れると・・・

「おいで。私の魔竜——『究極の悪竜・ザツハーク』」

その瞬間に、銀色の巨大な龍と、それに巻きつく小ささまざまな龍。龍によって作られる一つの城が、アーリの背後に現れた。

「とりあえず、最初から全力でいく。」

アーリがその宣言をすると同時に、魔竜の城を更生する魔竜の全てが『魔竜祝福』^{ドラゴンブレス}を放ち、殲滅していく。

もう、ただひたすらに圧倒的だ。

「それでは、私も・・・我が魔竜よ吼えろ——『金色の牙竜ラドン』」

!! 『覇竜裂牙』!!」

「じゃあわたしも。おいで！わたしの『蒼銀の滅竜・リヴァイアサン』^{ヘルベリデス・トライアード}！『禍竜潮流』^{ファイフス・デイズ}!!」

「おっしや！来い『真紅の炎神・燭竜』！『北天光炎』^{ドラゴンブレス}へアウローラ・アングイス』!!」

さらに、残りの三人も一斉に『魔竜祝福』^{ドラゴンブレス}を放ち、分身体という名のザコどもを殲滅していく。

いや、本来はザコなどではないのだが、今の状況ではザコといって問題ないだろう。

「おー、やっぱり皆を呼んで正解だったよ！」

「あの・・・私、いる必要がある？」

「もっちろん！」

ヤシロは、満面の笑みで答えた。

「どうせやるなら徹底的に、それがお兄さんのスタイルだもん！じゃあ、そう言うわけで」

「あっ……」

ヤシロはそう言いながら灯花の胸の少し上部分に手を当て、真名を唱える。

「来て、『咎人の王の魔剣』、レーヴァ・ティン！」

その瞬間に灯花の体は漆黒の炎に包まれる。

そして、触れているヤシロの腕も燃え上がるが、そこに熱さは存在しない。

「んっ……あ、あああっ！」

切なげな灯花の声とともにその体は輝き、やがて人の輪郭を失つて

ボワツ！と一際強い炎が立ち上がると。

ヤシロの手には、その体には不釣合いな、刃渡り約一・五メートル、全長一・八メートルの大剣が現れる。

「じゃあ、いっくよー！」

『あ、レーヴァ・ティンの黒炎を使えるのは、』

「三回だけ、でしょ？大丈夫！これ以降は調整して使うから！」

つまり、一回目は何にも考えずに使う、ということだ。

「じゃあ、せーのー！」

ヤシロはレーヴァ・ティンを大きく振りかぶり、

『『九世終炎剣』——!!』

振り下ろした瞬間に、黒炎は衝撃となって分身体を消し飛ばしている。

そのまま、ヤシロはその不釣合いな剣を自分の体の一部であるかのように扱い、分身体を倒していく。

同時に、魔竜たちも分身体を蹴散らす。

その光景は、圧倒的強者による弱者の殲滅でしかなかった。

神明裁判 ④

「にしても……」

「いくらやっても、数が減りませんね。」

音央と鳴央は、そうぼやきながら分身体を相手していた。

当然、二人の攻撃が効いていないわけではない。

音央は自らの力で妖精を片っ端から召喚して相手の気を引き、やれる場合には茨で拘束する。

鳴央はその隙に、奈落の穴で削り取り、血の一滴すら落とさせずに消滅させる。

今回のアジ・ダカーハに対して鳴央はかなり有効な一手だ。

流れた血から分身体を作り出す力は、しかし血が流れなければ発動することはない。

奈落の穴で吸い込む、という手段は血を流さずに無効化することが出来、その先で待っているのは忘却による消滅。

何の抵抗も出来ずに、ただただ存在そのものがゆったりと消えていくので、第一世代をそのまま消し去ることが出来るのだ。

とはいえ、これはいつでも通用する手段ではない。

今回は音央が気を引いていることと、相手が生まれたばかりであるから通用してこそいるが、成長して知力を持てば持つほどこの技は通用しなくなっていく、無駄になっていく。

「それでも、今、この場を相手するだけであれば、」

「問題なくいけるわね！」

そう言いながら、二人は次々と襲い掛かってくる分身体を片付けていく。

元々、この作戦を提案したのはアルマだ。

二人はあまりあの魔王についての知識もなく、知識のあるものが同伴するわけでもないので前もってアルマが二人の技量を元に作戦を提案したのだ。

ぶつつけ本番であるその作戦を完全に息を合わせて行えるあたり、流石は元は同一の存在である、といったところだろうか。

「鳴央、次行くわよ！」

「はい、音央ちゃん！」

そんなこんなで、二人は次々と分身体を無力化していく。

音央が一瞬拘束して、それに抵抗する時間を与えずに鳴央が神隠しにあわせる。

その隙に攻撃しようとするものは、全て妖精によって抑えられる。

この場においてのみ言うのであれば、完璧な作戦に完璧な行動。

今日の前にいる敵だけを倒す作戦。

だからこそ……

「おお……ようやく見つけたぞ、我が花嫁よ。」

「!？」

イレギュラーに、弱い。

「おやおや、そんな驚いた顔を……私のことを忘れてしまったのか」

そいつは……マクスウェルの友人であるそのキモイヤツは、劇でもやっているかのようなオーバーリアクションでそのことを嘆かわしく思っているかのように振舞う。

そして、そんなキモイヤツに対して……二人は、とっさに距離をとる。

無意識のうちに感じ取った格の違いと……

「……ねえ、鳴央。」

「はい、音央ちゃん……」

「この人、ダメだ」

同様に感じ取った、生理的に受け付けない面から、とっさに離れようとしたのだ。

「おお……何故私から逃げるのだ、私はこんなにも愛しているというのに！」

二人は無表情で攻撃を放ち、それをキモイ人は笑顔で受ける。

普通に気持ち悪い。控えめにいっても気持ち悪い。

「ああ……記憶が戻っていないのだな。でも安心してくれ！君がゲームに捕らわれていたときは助けることが出来なかったが、今は違う！こうして、君の前に現れることが出来た！今度こそ、君を助けてあげ

よう、タイターニア！」

「ここに来てようやく、キモイ人の目的が分かった。

「……って、私？」

「あの呼び方なら、そうでしょうね。私がタイターニアなわけないですから。」

「え、でも……私、ティターニアよ？」

「そこまで、差はくないですか？」

「その意味には大きな差があるのだが、箱庭の世界においてはそこまで大きな差ではない。

「それゆえに、キモイ人も音央が目的なのだ。」

「さあ、こっちに來たまえ！」

「イヤよ！私はアンタに助けてもらうつもりはないわ！茨の檻!!」

音央が割りとは本気ではなつた茨は、キモイ人の前で燃え尽きる。

「だったら……女王の命令に従いなさい！」

音央はそのまま、妖精を召喚して使役し、キモイ人を襲わせようとするが、

「王の命を聞け」

その一言で霧散してしまい、効果を出さない。

「な、なんで……」

「音央ちゃん！奈落の穴!!」

呆然とする音央を守るように、鳴央が奈落の穴を二人の前に展開する。

だが、キモイ人はそんなこと気にもせず、手を突っ込み、靈格を少し開放して中から破壊する。

「私とタイターニアとを邪魔するとは、どういうつもりだ？」

「……音央ちゃんを、連れていかせはしません！」

鳴央はそう言いながら手に桜羅天の炎と天狗のうちわの組み合わせで攻撃するが、それも効いた様子はない。

これまでに二人が相手したことのある中でも、かなりの実力者なのだ、このキモイ人は。

キモイが、確かに力は持っているのだ。キモイが。

大事なことなので三回言いました。

「そうか。だが、邪魔だ。」

「きやあー！」

鳴央は腕の一振りで吹き飛び、木に当たって気を失う。

すぐそばにいた音央も同じように気を失い、キモイ人は慌てて駆け寄り、抱き上げる。

「おお、すまない……だが、すぐに君の記憶も戻る。そうしたら、謝らせてもらおう。」

そう言つて、キモイ人は再び羽根を広げ、飛び立った。

そして、兎は煉獄へ
人類最終試練、二人

白夜叉と孫悟空の二人が切利天の前で話をしていると、そこに近づくものがいた。

「天岩戸を準備してある。あそこなら誰にもバレない。」

「あら、それは準備がいいわね。」

「!?!」

二人はその少女——少なくとも、見た目は——が近づいていたことに気付かず、声をかけられて一気に警戒心を高めた。

が、その少女はそんなこと気にも留めず、肩をすくめながら話しかける。

「全く、お釈シヤカ〇に悟空だけじゃ心配だから見て来い、って言われてきてみれば……何二人揃ってランデブーしようとしてるのよ？悟空は悟空で聞いてて感心したくなるくらい鮮やかに誑かしてくし。」

「……オマエは、だれだ？その面を外せ。」

「酷いわね……こんなお面つけてるの、あたしくらいだって分からない？！」

「まあ、分かるんだが……確認のためだ。」

「用心深いわね、白夜叉は。いいわよ。」

そう言いながら少女はお面……二本の長い角に、牙を向いた口、鋭い目つきをしたお面を外す。

その下からは、先ほどのお面からは想像もつかないほどに、可憐な素顔が出てくる。

「で、どう？これで警戒心といてくれる？」

「……うむ。スマンな、疑って。」

「いいわよ、別に。確かに、いまの二人は警戒心を高めないといけない立場だものね。」

そう言いながら外したお面を側頭部にかけ、二人に近づいていく。

「で？お前は何しに来たんだ？ハンニャ。」

「さつき言ったわよね？お○迦シヤカに言われて、来たのよ。」

「つまり、目的は……」

「白夜叉が下層に行こうとして悟空がそれを止めようとしなかったら、あたしの『主催者権限』で止めて、二人とも無理矢理にでも連れて来い、って言われたわ。」

心底面倒そうに話すその姿からは想像できないが、ハンニヤの『主催者権限』はそれを可能に出来るだけのものだ。

それゆえに、白夜叉と悟空の二人も警戒心を解いてこそいるが、一触即発の空気は消えていない。

「……なあ、ハンニヤ。ここは同じ仏門の縁で、見なかったことにしてくれないか？」

「いやよ。そんなことしたら、あたしがあんたを見失ったってあれに言われるじゃない。」

「そこを、どうか……」

「私からも頼みたい。ここは昔なじみの縁……それに、似たもの同士縁で見なかったことにしてくれんか？正直、おんしと戦いたくはない。」

「確かに、白夜叉とは魔王だったところからの馴染みだし、似たもの同士よね。同じ、クリアされつつも、完全なクリアではない人類最終試験同士。」

そう、ハンニヤは人類最終試験の一つを担っている。

名こそハンニヤを名乗っているし、存在もハンニヤとしての側面が強いのだが、本質まで覗くとそれはハンニヤではない。

人類によつてその存在の何面かはクリアされているが、全てがクリアされていないという意味合いにおいては、彼女は白夜叉と似ているのだ。

……まあ、本当に奥底まで覗いた場合、多少訳が違っては来る……かもしれない、微妙な存在ではあるが。

「でも、見なかったことには出来ない。そんな選択肢、あたしの中にないもの。」

「そうか……では、しかたないのう。まず、おんしから、」

「ちよい待ち。なんか勘違いしてるみたいだけど、最後まで話は聞きなさい。」

臨戦体制に入ろうとする二人を、ハンニヤは手振りで止める。

「勘違い、だと？おんしのことだから、あやつに言われたことを遵守するのかわかっているか？」

「ああ、確かに私の主に言われた言いつけは、何があっても守るわよ。」

「それは、シ〇カに言われたことをちゃんと聞くように、じゃろ？」

「それも有ったわね。あたしはお釈〇シヤカの一部といっても間違いないんだから、ちゃんと言うことくらいは聞いとけよ、って。」

「だったら、俺たちを止めるんだろ？」

「確かに、それだけだったらそうね。でも、言われたのはそれだけじゃないもの。」

そういいながらハンニヤは再び、拳をおろすように催促する。

そして二人が降ろしたのを見て、それを話す。

「あの人は、ただし、コミュニティのためなら、気にせずやってくれ、とも言ってたわ。だから、あたしはここで白夜叉と悟空を止めない。」

もちろん、ここで言っているコミュニティとは、現時点での「ノーネーム」のことだ。

「だが、それでは命令に逆らったことになるのでは……」

「大丈夫よ。悟空もあたしも、言われたのは白夜叉を下層には行かせな、ですもの。天岩戸に引きこもってくれるなら、それ以上助かることはないわ。」

「いいかげんじやの……」

「それが、あの人から学んだことよ。」

「それでいいのか？悟りおんしは。」

「いいに決まってるじゃない。あたしは、愛した人のために生きる、って決めたのよ。」

そして、ハンニヤもまた白夜叉に一言。

「そういうわけだから、あたしも二人と一緒に行くわよ、天岩戸。」

「……は!?それこそ、シ〇カのやつに怪しまれて、」

「報告の義務とかないし、大丈夫でしょ。それと、もう一つ。白夜叉か

らゆつくり聞きたいことがあるのよ。」

「聞きたいこと？」

白夜叉が聞き返すと、ハンニヤは真面目な顔つきで、

「寺西一輝、つて子のことを、聞かせて頂戴。」

そう、言った。

「それは構わぬし、暇つぶしになるから良いのだが・・・なぜ、一輝のことを？」

そう、それは事情を知らない人間からすれば当然の質問だ。

だが、事情さえ知っていればこの質問の意味はすぐに分かる。

「簡単なことよ。何回か色々な手段を使って彼を視ただけで、似てたのよ。」

「似てた、とは？」

「誰にだ？」

「私の主様。」

その言葉に、二人が揃って絶句した。

ハンニヤの主・・・高橋示道は、カナリア金糸雀が活動していたところに基本すぐそばで動いていた、たった一人で五十を超える魔王を討ち取り、その内の二十六人を隷属させたもの。

かなりの有名人だ。

「・・・それは、まことか？」

「ええ。どんな繋がりなのかは分からないけど、そこそこに深い繋がりのはずよ。血縁者とかじゃないかしら？」

「で？ハンニヤはそれを聞いて、どうしたいんだ？」

悟空の質問は、当然のものだ。

いまの彼女は名目上お釈迦に仕えてこそいるが、それはあくまでも名目。

仕えていた示道が行方不明になったから仕方なくそうしているだけで、お釈迦もそのことは了解している。

だからこそ、そう聞いたのだ。

が・・・

「まだ決めてないわ。」

「・・・意外だな。間違いなければ、そのまま仕えればばかり思っておったが。」

「そうしたい気持ちもあるけど、その前に悟りあたしを従えることが出来るかどうか・・・」

「そういえば、そうだな。」

白夜叉は納得したように頷き、

「分かった。私が知っている一輝のことを、すべて話してやろう。」

「ありがとう、白夜叉。この恩は多分踏み倒すわ。」

「オイ、悟り。」

「あら、知らないの？悟りって言うのは、いろんな種類があるのよっ。」
「だとしても、ここまで適当になるのは・・・と思わなくはない。」

「だが、それは間違いなく示道のせいであって、ハンニヤが悪いわけではないのだ。」

神明裁判 ⑤

「……このあたりは、これで終わりか？」

「はい。こちら側にももういません。」

一輝が前方を、スレイブが後方を確認して敵がないのが間違いないと分かると、一輝は水を操ってスレイブの表面についた血を洗い流す。

あまりに切りまくっていたせいか、途中から新たな世代を作り出さなくなった血が残っているのだ。

「……ところで、どうして兄様は二つのギフトを併用できているのですか？」

「ああ……正直、分からん。ただ、こう……今までとは、ギフトの感じが違うみたいなんだ。」

「といたしますと？」

「これまでより、威力が高すぎる。正直に言うとなれる限り使いたくないタイプなんだよな。」

「それほどまでに……」

一輝は心底そう思っている。

そして、その原因は一輝の父親にあったりするのだが……まあ、その話はまた後ほどに。

「まあ、その話はいいんだ。それより、今は……」

「……でしたね。どうしましょうか？誰の方へ手助けに……」

その瞬間に、ある場所で爆発が起こる。

一輝が反射的にそちらの方を向くと、森が燃え上がっているのが見えた。

「スレイブ、あっちには確か……」

「アストラルゲート境界門が、あつたはずです。」

一輝はスレイブのその言葉で、これからの行動を決定。

是害坊の力で翼を生やして、そちらへと向かう。

「・・・ホント、信じられない。境界門を壊すなんて、魔王たちでも夕ブルーなのに。新鋭ストーカーの行動力をちよつと舐めてました。」
そう言いながら茂みから現れ、マクスウエルの前に姿を現したのは、ノースリーブにスカートという軽装のリン。

そんなリンに驚いた様子も無く、マクスウエルは

「誰かと思えば軍師殿か。丁度良かった。私は今から、例の男の迎撃に向かう。すまないのだが、私の代わりにウイラを連れてきては、」
「言われるまでもなく、もう捕まえましたよ。これでいいよね、リン？」

突然聞こえてきた湖札の声に「は？」と間の抜けた声を発するが、リンはそんな様子を無視してクルリ、と一回転。

すぐ後ろに来ていた湖札とジン、ペストの三人にあと一人・・・
「さてさて。大きく予定が狂ったけど、避難民はしばらくは無事ですか？」

「多分、大丈夫だと思うよ。これで停戦条約と、例の約束はOKってことでもいいかな、二人とも？」

リンの問いかけに湖札が答え、さらに湖札がジンとペストの二人に尋ねる。

「湖札さんのほうはともかく、停戦契約の方はまだだ。まだ肝心の約束が果たされていない。」

「そうね。わざわざウイラを拘束する手伝いまでしたんだもの。一番大きな報酬を貰わないと割に合わないわ。」

そう言うペストの手には、最後の一人、ウイラの両腕を拘束している鎖が握られている。

そんなウイラの目は涙目だが・・・まあ、仕方のないものだろう。どさくさに紛れて近づいてきたペストと湖札に捕まり、鎖を巻きつけられ、こんなところまで連れてこられたのだ。

だが、リンはそんなウイラの様子を気にすることも無く、満面の笑みを返した。

「勿論、そつちの約束も守りましょう。——皆、準備はいいですか

？」

そう言いながらリンが視線を動かすと、そこには別のものたち……湖札以外の、ウロボロスにおいて殿下についてきている者たちが集合している。

「……何の話だ、軍師殿。」

「やだなあ。そんなの決まってるじゃないですか♪」

そう言いながらリンは悠然とした笑みを浮かべ、ナイフを引き抜いてマクスウエルに宣言する。

湖札はそんなリンの様子を見ながら、『神成り』を発動し、いつでも戦えるようにする。

「マクスウエル・パラドックス」。メイカーの権限を持って、貴方の首を挿げ替えます。二二〇に現れる「パラダイムソフト歴史の転換期」――

――「第三永久機関」の霊格をね」

その瞬間に、神と化した湖札が仕掛ける。

暴風を操りマクスウエルに攻撃したところに、

「アウラさん！おじ様！湖札さんにあわせて!!」

「わかったわ！」

『了解した!』

豎琴の音色とともに現れた雷鳴と、黒龍の口内から放たれる気焰。

その二つが湖札の暴風と混ざり合い、青と赤の派手なコントラストで彩られた派手な外装をまとうマクスウエルに向かうが、

「っ、頭に乗るなよ木っ端がア!!!」

その全ては、マクスウエルが両手を広げると同時に軌道を変え、空中で爆発する。

それによって現れるはずであったリンたちへの被害は、湖札が周囲の気圧を操っていたために無かったが、そうでなければかなり危険だったであろう。

そして、そんな様子から一旦、リンと湖札は距離を置いて、建物の影で拘束しているウイラに振り返る。

「高スペックなストーカーほど怖いものは無いねー。ちよっぴり同情しちゃいます。」

「私としては、かなり同情しちゃいます・・・気を強く持つてくださいね。」

「……………あう。」

二人の言葉に少しは救われた気にもなれたであろうが、それでも目まぐるしく変わっていく展開についていけず、ウイラは涙目で首を振る。

「それじゃあ、ウイラさんをお願いね、リン。私が相手をするから。」
「はい。ウイラさん、走るよ！ついて来て！」

あうあう、と半泣きになりながら、ウイラは先導に従う。
そこに周囲を覆いつくすほどの大吹雪が襲い掛かる。

「私の花嫁を渡せ、メイカアアアア!!!」

「だから、そういうことは一方的に言わないでください！」

湖札はそんな大吹雪を風で払いながらマクスウエルと拳を交え、それでも押されながら、後退しながら戦い続ける。

「私以外がウイラを縛るとは、何様だ貴様ア!!!」

「貴方に縛る権利があるわけでもないでしょう！」

湖札はほんの一瞬、拳の先に集めた空気の固まりを開放し、爆発させる。

それでマクスウエルは一瞬後退し、初めて湖札を認識する。

「邪魔をするな、小娘エ!!!」

「お断り!!我が百鬼より出でよ、青行燈！」

湖札はその隙に檻から青行燈を召喚する。

「我は汝の物語を読み解こう。汝は語られて顕現する。汝は百の物語を身に宿し、百一の存在であり一の存在であるもの。故に我は百より一つを選び出す。」

湖札の言霊に反応して、青行燈がその姿を変えていく。

「汝は八股の蛇！八つの首を持ち、酒を好み、姫を贄に求めたもの！今ここに、その姿となれ！ヤマタノオロチ!!」

そして、湖札の言霊が終わると同時に、その場にはヤマタノオロチが現れた。

そして、そのままマクスウエルに襲い掛かる。

「ふう．．．よし、検索開始。対象、マクスウエルの悪魔。」

そして、その隙に湖札は知識から検索を始める。

それは確実な情報を元に検索していただけ会って一瞬の間に対象を発見し、湖札の手に現れた矢にその言霊が込められる。

「まがい物の蛇で、私を止められるものかア!!!」

そして、簡単にマクスウエルに引きちぎられた青行燈が檻に戻る間に、湖札は矢を放つが．．．それは、マクスウエルに届く前に逸らされ、森の木に当たる。

「邪魔だ、小娘エ!!!」

「あぐっ．．．!」

そして、一瞬の間に肉薄してきたマクスウエルに、湖札は殴り飛ばされ、森の木に背中をぶつける。

「私とウイラの邪魔をするやつは、全員殺す．．．死ぬ、小娘エ!!!」

そして、マクスウエルは湖札に向かって拳を振り下ろし、湖札は目を閉じて、身をこわばらせる。

．．．が、いつまでたつてもその衝撃は、湖札の元に届かない。

「貴様は．．．!!!」

「．．．オイ、コラ。何人の可愛い妹に手出してんだ。」

「えっ．．．?」

そして、湖札は自分のすぐ前から聞こえてきた声に驚いて、目を開く。

そこにあつたのは、自分の最後の家族．．．

「魔王ごときが、殺すぞ．．．!!!」

自分の兄の大きな背中が見え、左手でマクスウエルの拳を受け、右手に大剣を持ち、マクスウエルの魔王を睨みつけている。

「おにい、ちゃん．．．」

そして、そんな兄を見て、湖札は無意識のうちに、そう漏らした。

神明裁判 ⑥

「スレイブ、あわせてくれ。」

「イエス、マイマスター。」

スレイブが懐かしい呼び方をすると同時に、一輝はマクスウエルの拳を握っていない方の手でスレイブを構え、唱える。

「我は鉄を打つもの。鋼を打ち、武器を造りしもの。」

「我は剣。打たれ、鍛えられ、武器となりしもの。」

「我は今ここに、我が剣を鍛える。我が武器は全てを切り裂き、全ての敵をなぎ払おう。」

「我は今ここに、和が主に鍛えられる。我は主とともに万物を切り裂き、主の障害をなぎ払おう。」

その瞬間にスレイブは輝き、一輝がそれをマクスウエルに向けて振るう……が、マクスウエルは自らの手を切り離し、後ろに跳んで避ける。

空間を飛んで避けようとしたが、一輝の中にある妖怪の一つの力で、それは防がれているのだ。だから、自分の腕を切り落として避けた。

……否、避けたつもりになった。

「二刃よ、全てを切り裂け!!」

二人の声が重なった瞬間に、マクスウエルの体は両断される。

空間すらも切り進んだ刃によって。

「ふう……湖札、あれでいけたと思うか？」

「え、あ……たぶん、ダメだと思う。あれを倒すには、存在後と吹き飛ばすしか……」

「それは、ちよつと面倒だな……仕方ない、いったん引くぞ。」

一輝はそう言いながらスレイブを納刀し、動けないでいる湖札をお姫様抱つこの要領で抱き上げる。

「ちよ、兄さん!？」

「ん？呼び方戻ったな。」

「あ……あう……」

湖札は一瞬で顔を真っ赤にして黙り、一輝はその隙に是害坊の力で作り出した翼で飛び、先に行った一行に追いつこうとする。

「・・・なあ、スレイブ。なんか不機嫌になつてないか？」

「はて、何のことでしょうかマスター？」

「いや、間違いなく不機嫌だよな。呼び方も戻ってるし。」

「ああ、申し訳ありません。先ほどそうお呼びしましたので、それが抜け切っていないようです。」

「ああ・・・なんだかよくわかんないけど、なんかスイマセン。」

一輝はその原因に気づくことができなかったが、自分が原因で不機嫌になったことくらいは察したようで、自分から謝る。

「えっと・・・スレイブちゃん、だっけ？」

「なんででしょうか、妹君？」

「あ、湖札でいいよ？」

「では湖札。なんででしょうか？」

「えっと・・・苦勞してそうだね。」

「・・・ああ、かなり。」

そして、二人の間に何かしらのつながりが出来た。

「さて、湖札は大丈夫か？怪我とか。」

「あ・・・うん、大丈夫・・・」

一輝が湖札に問いかけると、湖札は視線をそらしながらそう返す。

それは恥ずかしいからではなく、これまではどうにか兄と会話をしないようにしていたのが、兄から話しかけられたことでそうも行かなくなつたのだ。

そう、湖札には一つ、気にしていることがあるのだから。

「そうか、ならよかった。もしそうじゃなかったら・・・あのクズは、本気で消し飛ばさないとイケなかったし。」

「・・・確かに、兄さんならやれそうだよな。昔っから、何でも出来ると思つてた。」

「何でもは出来ねえよ。出来ないことだらけだ、今も昔も。」

一輝がそう語る表情には、どこか寂しげなところがあり・・・それが、湖札には昔の一輝の表情と一致して、聞かずにはいられなくなつ

た。

「あの・・・兄さんは、記憶が・・・」

「ああ、神成りを使ったときに戻ったよ。」

その瞬間に、湖札は目の前が真っ暗になった。

だが、それは・・・

「だからって、何か変わるわけじゃないけどな。」

一輝のこの発言で、一瞬で払われる。

「え・・・」

「ん？どうかしたのか？」

「どうかしたかって・・・だって、私は」

「本当の妹じゃない？」

「・・・うん。」

一輝のその一言は、湖札がずっと危惧していたことだった。

自分が一輝の本当の妹じゃない以上、それはこれまでの一輝とともに過ごした時間が無駄になってしまいうのではないか。

それが、偽物になってしまいうんじゃないか。

そう、ずっと不安だったのだ。

「まあ、確かにそうだな。あの記憶の感じだと、湖札は俺の実の妹じゃない。」

「うん・・・だから、」

「でも、湖札は俺の妹だ。それは変わらない。」

一輝がそういった瞬間に、湖札は信じられないというように顔上げた。

「ん？おいおい・・・なんだよ、その信じられない、見たいな目は？軽く・・・いや、ぎっくりと傷つくぞ?」

「あ、ゴメン・・・でも、」

「でもじゃない。じゃああれか？湖札が俺の妹として過ごしてきた十一年間は、そんなことではなかったことになるのか？」

「・・・そんなことはない。絶対に。」

湖札は、はつきりとそういった。

「ならいいじゃねえか。何があっても、湖札は俺の妹だ。頼むから、兄

貴をひとり残さないでくれよ？寂しがり屋の、ダメ兄貴なんだから。一輝が冗談めかしてそう言うのと、

「・・・うん、分かった。お互い最後の家族だもんね。もう二度と、兄さんから離れない。・・・と思う。」

湖札は、そう返した。

「曖昧だな、オイ。」

「いやあ・・・一応、私も魔王でウロボロスに所属してるから」

ようやく、二人の会話が昔のものに戻った。

「・・・でも、」

湖札の声音が一瞬で真剣なものになり、一輝の胸に右手を当てる。

「湖札・・・？」

「今回のゲーム、アジ・ダカーハが討伐されるまでは、一緒にいれる。」

湖札はそう言いながら、奥義を発動する。

ぬらりひよんから全ての奥義を継承された一輝も知らない、湖札だけの奥義を。

「我は鬼道に連なるもの。我は鬼道の乙女。我は力なき乙女。」

湖札が望んだ力は、兄とともに戦う力。

どのような形でも、兄とともに戦うことだけを望んだ力だ。

「故に我は全ての力を託す。我が全てを託す。我は、鬼道の長に我が存在、その全てを託す。」

湖札が唱える言霊に応じて、湖札という存在が一輝の中・・・一輝の檻の中へと、入っていく。

「なんだよ、この奥義・・・」

「・・・今、我と汝は統一される。我が力・・・存分に、使いこなしたまえ。」

言霊を唱え終わると同時に、湖札という存在の全ては一輝と統一される。

檻の中身も、湖札のギフトも、この瞬間に一輝のものになった。

「・・・なんだよ、この奥義。俺は知らないぞ？」

『当然だよ。私のために生み出された奥義だもん。次の世代からじやないと分からないよ？』

「・・・念のために聞いてくけど、」

『大丈夫だよ。この奥義は簡単に解除できるし、解除すればちゃんと分離されるから。』

一輝が尋ねようとしたことは、たずねるまでも無く湖札に答えられる。

今、湖札は一輝の中にいる。一輝の感情は、お見通しなのだ。

「つと、合流できましたね、一輝さん。えつと・・・湖札さんは？」

「ん？あ、ジン。何でウロボロスと一緒に？」

「あ・・・ちよつと、停戦協定を結びました。一輝さんのおかげで今は問題ありませんが、マクスウエルの魔王をこのまま放置するわけには行きませんので。」

「そつか。それで、湖札だけ・・・」

『ここにいますよ？』

一輝の中から、湖札が声をかける。

その声に、その場にいるメンバーの中で殿下以外は驚きを示したが、

「・・・そうか。そういうことなのか？」

『あー・・・うん、片方は。もう片方は、まだ分からないけど。』

「あつそ。なら、その気になったら遠慮なく言えよ。元々、そう言う話なんだから。」

『分かってるよ。躊躇う理由なんてないし。』

「いやいや、少しは躊躇えよ。」

「二人は何の話をしてるんだ？」

二人の会話に対して、一輝が口を挟むが・・・

「いや？オマエは、まだ知らなくていいことだ。」

『そうだよ。兄さんは、まだ知らなくていいの。』

その質問は、二人によって却下された。

神明裁判 ⑦

「―― Summon Maxwell myths. 3S,
nano machine unit――!!!」

一輝たちの目の前で、マクスウエルが召喚式を唱えた。

そのマクスウエルの表情はかなりの怒りに染まっており、そして……

「なあ……マクスウエルのヤツ、何であんなに腹を立ててるんだ？」

一輝は、何故こんな状況になっているのか、全く分からなかった。

『兄さんは知らなくていいの。ね、スレイブちゃん？』

「ええ。一輝様は知らなくて良いことです。」

というのも、リンとウイラのキスシーンが始まった際、スレイブが勝手に動いて一輝の目を塞ぎ、湖札が中から干渉することで聴覚まで封じられていたのだ。

知れという方が、無茶である。

そして……そんな一輝のことなど気にもかけずに、召喚式は効果をあらわしていく。

生気を失ったマクスウエルの周りを熱波と寒波が吹き荒れ、大気中にプラズマが走る。

境界の狭間はたやすく砕け、空間もまた、ガラス細工であるかのようにたさすく弾け飛ぶ。

そうして炎熱と極寒をまとって現れたのは、背中に巨大な翼を持つ鎧の怪物。

その正体は、全くもって分からない。生物かどうかも怪しいその存在に――

一輝は、なんの躊躇いもなく突っ込んでいった。

『ちよ、兄さん!?!』

「どうせ、正体がわかってるまいが分かるまいが敵であることに変わりはないんだ。だったら、一気に行く。」

一輝はそう言いながらスレイブを振り下ろし、天使のかぶとを打ち砕く。

そこには一切の感覚も無く、霞を敵にしているかのようなのだ
が・・・一輝はそんなことは気にもせず、胴を払って足を蹴り、そ
のまま後ろに跳ぶ。

「ふうん・・・妙なヤツだな。」

「それはオレが言いたいことだな。お前、本当に人間か？」

「一応、人間として生まれてはいるよ。・・・あれ、神霊？」

一輝は内心では確信を持ちながら、横に来ていた殿下に尋ねる。

「正解だ。どうして分かった？」

「どこか、分かるものがあつた。これでも、今の俺は神霊だから
な。・・・あの天使もどきは任せた。」

「じゃあ、そっちはマクスウエルを？」

「そうさせてくれ。たぶん、俺が相手をする分にはあつちの方がいい
と思う。」

一輝はそう言いながら、おのれの霊格をほんの少し、開放する。

これまでに使っていた蚩尤の霊格や霊獣、妖怪に魔物の霊格とは別
の、一輝個人の霊格を。

「・・・へえ、そうか。オマエはそう言う存在なんだな？」

「まあ、な。色々とあつたんだよ。・・・全部ぶつ潰したけど。」

一輝は苦い思い出でも語るかのように表情をゆがませながら、それ
でもしつかりと視線を敵に向ける。

「・・・湖札、知識の方は任せた。」

『はくい』

「スレイブは、俺の死角からの攻撃を。最悪、俺の体を全て操ってくれ
ても構わない。」

「了解しました。」

一輝は次の瞬間に、一気にマクスウエルの元まで跳び、そのまま切
りかかる。

当然のようにマクスウエルはそれを避け、境界門を使って飛ぶ
が・・・その先に向けて、一輝はスレイブを突き出す。

「!？」

「ん？自慢の奇襲が効かなくて驚いてるのか？残念だが、」

そして、再び飛んだマクスウエルが出現した瞬間に、一輝の腕はその顔に向けて延ばされていた。

「サトリの力の前には、奇襲は一切成功しないよ。」

そのまま手を伸ばしていき……マクスウエルの片目を、抉り取る。「そして、これはミカリ婆の力。行き会った人の片目を奪う力だ。……こんな目、いらないけど。」

そう言いながら一輝はマクスウエルの目を踏み潰す。

マクスウエルの失われた目が、治っていくことは無い。

少なくとも、一輝が奥義を解除することでミカリ婆の力を檻に戻すまでは。

「……さあ、かかって来いよ。お前も、魔王を名乗ってるんだろ。」

片目を押さえて動く様子の無いマクスウエルに、一輝は感情のない声でそう語りかける。

マクスウエルは本当に生気を失っているのか、一言も発さず……。それでも、一輝に強い怒りの視線を向ける。

「魔王を名乗る以上、そこには何かしらの覚悟があるはずだ。どんな小さなものでも、貫き通したいものがあるはずだ。それなら、それを俺に見せてみる。」

そう言いながら、一輝は様々な手でマクスウエルに攻撃し、マクスウエルはそれを二割ほど避け、残りは全て喰らう。

相手は四桁の魔王。だが、そんなことは関係ないとばかりに圧倒していく。

マクスウエルを構成している霊格は、第三永久機関のもの。他にも様々な矛盾に歴史の転換期などもあるが、結局、それは第三永久機関のものだ。

それに対して、最下層のコミュニティに所属する今の一輝を構成している霊格は、本当に様々なものがある。

一輝個人として保有する霊格もあれば、檻の中にいるものたちから借りている霊格もある。

その中にある蚩尤の霊格がかなり大部分を占めていたのだが、湖札と同化することによって天逆海の霊格も付け加えられ、神話の神だけ

で二柱の神の霊格が存在しているのだ。

本来であれば、その霊格は下層にいいものではない。神話の神なのだから、上層にあるその神話体系に収まるべきなのだろう。

そんな存在が・・・本来であれば、今回のような魔王の対処のために送り込まれてくるようなヤツが、四桁の魔王に苦戦することがあるだろうか・・・

答えは当然、否である。

まだ明かされていない霊格もある以上、なおさらだ。

「かかつてこれないのなら、それがお前の底だ。所詮は、こんなガキに止められてしまうような、その程度のものだってことだ。」

そんな存在である一輝が、檻の中にいるものたちに借りている霊格を開放すると、ただそれだけの余波でマクスウエルは吹き飛ばされる。

「さあ、どうなんだマクスウエル。お前がその程度だというのなら、それはそれで構わない。殺すだけだ。だが、」

一輝は再び攻撃を放ち、片手間でぶっ飛ばす。

「もう一度言うぞ。貫き通したい意思があるのなら、それを俺に見せてみる。俺に立ち向かい、圧倒するでもいい。この場を去り、その意志のために力を蓄えるのもいい。正しく状況を判断し、逃げる事が出来るのも、一つの強さだ。・・・さあ、選べよ。」

一輝の冷酷な言葉が響いたのかは分からないが、マクスウエルは境界門を発動して、姿を消す。

一輝はしばらくの間、警戒するように周りの気配を探り・・・完全に消えたことを確信して、スレイブを納刀した。

「ふう・・・逃げた、か。後は任せても?」

「ああ、任せろ」

一輝の声に殿下がこたえ、そのまま一輝の横を駆けていった。

「さて、と・・・どうしようか。」

そう言いながら一輝が見る先では、雷が落ち、そのふもとにはごうごうと煉獄の炎が燃え上がっている。

「・・・とりあえず、黒ウサギと飛鳥をどうにかして見つけて、連れて

帰るとするか。ヤシロにも、音央と鳴央を回収するように言つて……と」

一輝はそう言いながらDフォンを操作し、ヤシロに連絡を取りながら雷の元へと向かった。

大切な仲間がどうなっているのかも、何一つ知らずに。

誓いと呪い

一輝がマクスウエルとの戦いを終えて黒ウサギたちの元に向かうと、そこには二人を回収しようとしているものがいた。

一輝はそれに対して何のためらいもなくスレイブを向ける。

「……オイ、アンタ。二人をどうするつもりだ？」

「……君は？」

「寺……鬼道一輝。その二人と同じコミュニティのもんだ。」

まだなれていないのか、一瞬寺西と言いかけた一輝は、一切警戒心を解かずに名を名乗った。

『そうか。君も“ノーネーム”の……それに、このゲームも君が？』
「ああ、俺が主催してるゲームだ。……場合によっては、参加者側のプレイヤーにしてやるが？」

『いや、それは遠慮させてもらおう。……それに、今は急いで逃げるべきだ。』

そいつはそう言いながら二人をゲーム盤に移動させようとするそいつを、一輝は炎を飛ばして止める。

「だとしても、せめて俺が信用できるだけのものを見せてくれないか？ そうでもなければ、俺はアンタを止めるしかない。」

『……確かに、そうだな。来て見てくれといっても、無駄に決まってる。』

そう言いながらそいつは一輝に顔を向け、ようやく、名を乗る。

『俺は春日部孝明。春日部耀の父親で、まだ名と旗が有ったころの“ノーネーム”のメンバーだ。』

「……そうか。」

『信じるのか？』

「とりあえず、な。もしそうじゃないならそのゲーム盤で暴れればいいし、これでも色んな人を見てきたんでね。人を見る目くらいはあると思ってる。」

一輝はそう言いながらスレイブを納刀し、背に翼を生やす。

「ところで、ウロボロスの連中とジンたちを知らないか？ 見かけた記

憶が無いんだけど。」

『彼らなら、もうここを去ったよ。．．君たちのリーダーに見逃してくれと頼まれたんでね。』

「そうか．．ならいいんだ。マクスウエルも追ってくれたみたいだし、主催者権限も解除していいか．．あ、もう一ついいか？」

一輝は一つ、聞かなければならないことを思い出して、主催者権限を解除してから孝明に尋ねる。

『どうした？』

「いや、他にも俺の仲間がいるはずなんだが．．金髪を伸ばした女の子と、俺と同じ年くらいの黒髪ロングと茶髪ツインテール、見てないか？」

『．．．前二人は、既にあのゲーム盤にいるが．．．』

「．．．どういうことだ？音央はどこにいるんだよ、オイ!？」

『．．それについて、俺は何も知らない。向こうで、直接聞いてくれ。』

「．．．ああ、分かった。早くそのゲーム盤に案内してくれ。」

一輝はこれ以上聞いても無駄だということを知り、移動を始めた孝明の後を追って飛んだ。

＝＝＝＝＝＝

「．．．あ、お兄さん．．．」

「ヤシロ。音央のこと、何か知らないか？」

一輝はある部屋の前で心配そうに立っているヤシロを見つけて、そう尋ねた。

だが、ヤシロは首を横に振って、

「ごめんなさい、私には分からない。ただ．．私が鳴央お姉さんを見つけたときには、もういなくなっちゃたよ。」

「そうか．．鳴央はどこに？」

「このお部屋の中。なんだか心配で．．．」

「そっか。」

一輝は本当に心配そうにしているヤシロの頭を撫でて、微笑みかけ

る。

「じゃあ、鳴央のことは俺に任せてくれ。……まあ、音央のことで手を借りるかもしれないけど。」

「でも……」

「いいから。……何かあったなら、感情をぶつける相手も必要だろうし。それは、ふがいなくも主やってる俺の仕事だよ。」

その言葉に納得したのか、あるいはいくら言っても無駄だと思ったのか、ヤシロはいつもの可愛らしい笑みを浮かべて、

「それじゃあ、鳴央お姉さんのことはお願いね？それと、私に頼りたいことがあったら遠慮なく言って！」

「そうさせてもらうよ。とりあえず、今はスレイブの相手とか、お願いしてもいいかな？」

「は〜い！」

ヤシロはそう返事をする、走って去って行った。

そして、スレイブもまた、何も言わずに人間の状態に戻り、ヤシロのあとを追う。

「……湖札も、一度出てきてくれるか？あんまり知られるわけには行かないから、倉庫の中にもいってもらうことになるけど……」

『……うん、分かった。頑張つてね、兄さん。』

湖札はそう言うてから一輝の中から出て、そのまま倉庫の中に入っていく。

これで、部屋の前に立つのは一輝一人のみだ。

そのまま一輝は部屋の扉をノックし、中からの返事を待つ。

「……はい、どなたでしょうか？」

「俺……一輝だ。中に入ってもいいか？」

「あ、ちよつと待ってください……はい、どうぞ。」

一輝は許可を得てから、部屋の扉を開けて中に入る。そこには、ベッドの上に座っている鳴央の姿があった。

目が若干赤くなっていて、先ほどまで泣いていたのかもしれない。

「どうしました、一輝さん？何かあったんですか？」

「……そうだな、こっちは何もなかったよ。俺もスレイブも、何の間

題もない。無事だ。」

「そうですね。それは・・・よかったです。」

そう言いながら笑みを浮かべる姿は、多少無理をしているようにも見える。

一輝はそんな鳴央の姿を見て、歯を強く食いしばってから近づき、率直に問いかけた。

「・・・何があった？」

「何って・・・そんな、」

「音央。」

一輝の言葉に、鳴央は黙った。

「ここにいないってことは、何かあったんだろ？・・・話してくれ、頼む。」

「・・・音央ちゃんは、浚われてしまいました。」

一輝の言葉に、鳴央は顔を伏せながらその時のことを話し始めた。

「誰に浚われたのかは、分かりません。・・・でも、とても強い人でした。私達は何も出来ずに・・・」

「・・・そうか。」

「ただ・・・あの人は、音央ちゃんを誰かと間違えている・・・それか、誰かだと思い込んでいる様子が有りました。」

鳴央はそう語ってから、顔を上げる。

一輝を心配させてはいけなと思ったのか、その表情は優しく笑っていて・・・今日だけでその表情を何度も見た一輝は、再び歯を食いしばった。

「大丈夫です。あの様子なら、音央ちゃんに害を及ぼすことは無いと思いますから。だから、大丈夫」

そして、鳴央の言葉は遮られた。

一輝が抱きしめたことによつて、物理的に中断されたのだ。

「一輝さん・・・？」

「もういい。・・・無理は、しなくていい。」

「無理って、何を・・・」

鳴央がそう言うと、一輝は一度、少しだけ鳴央を放して、その手を

握って目の前で言う。

「音央が浚われて、不安なんだろう？」

「それは……」

「だったら、その感情は溜め込まない方がいい。……鳴央自身が、壊れるぞ。」

「でも……」

鳴央はそれでも、話そうとしない。

そんな鳴央の頭を自らの胸に押し付けて、片手は鳴央の手を握ったまま、もう片方の手でその背中をポンポン、と叩く。

「……今、ここにいるのは俺だけだ。そして、俺からは鳴央の顔は見えない。……他にも何か心配なこと、あるか？」

「……ダメなんです。」

鳴央はそう言いながら、必死に涙をこらえる。

「今、この感情をぶつけてしまったら、一輝さんに迷惑が……」

「そんなことなら、なおさら気にするな。俺にだったら、いくらでもぶつけてくれればいい。……今は、それくらいしか出来ないから。」

「でも……」

「いいから。俺としてはそれより……鳴央が壊れることの方が怖い。」

その言葉に感化されたのか、鳴央は涙を流しながら、語り始めた。

最初は静かに……それでも、途中からは泣き叫ぶように。

自分の妹が浚われたこと、その時に自分は何も出来なかったこと。

そして……自分のこと以上に、音央を心配する気持ちを、吐き出していった。

一輝はそれを、最後まで。

何も言わずに、ただじっと聞き続けていた。

|||||

あの後、散々泣いて疲れたのか、それとも感情を全て吐き出して多少は楽になったのか、鳴央は眠りについた。

元々ベッドに座っていたこともあって一輝は簡単に寝かせること

が出来たのだが・・・つながれていた片手は、眠っても離されること
が無かった。

一輝は何故そうなったのかは分からないが、そこには・・・心細さ
が、あったのだろう。

「・・・大丈夫だ。」

一輝はそんな鳴央の手を手放さず、ベッドの横に座って、眠ってい
る鳴央に語りかける。

「俺が必ず、音央を助け出す。」

その言葉は、一つの誓い。

必ず助け出して見せるといふ、誓い。

そして同時に・・・自分自身に対して、呪いをかけているようです
ら、あった。

——無力な、自分への。

短編集? part 2

箱庭のとある日常

ノーネーム本拠、そこで一輝は帰ってきた瞬間に正座させられていた。

一輝はその理由が分かっていないそして同時に、汗をたっぷりかいたため、早くシャワーを浴びたいとか考えている。ついでに言うと、今も絶賛汗を掻いている最中なので、いつそギフトを使って体温を下げよう、とかも考えている。

だが、まあ目の前で怒っている黒ウサギの様子を見て、それはダメかな、とちやんと理解できていた。

「はあ・・・なあ、いい加減なんで怒ってるのかを聞いてもいいか?」
そして、このままでいても話が終わらないことを理解して、一輝のほうからそう問いかけた。

ちなみに、黒ウサギの後ろでは問題児三人組が笑いをこらえている。

「何で、ですって・・・。そんなの、決まってるじゃないですか!」

そう言いながら、黒ウサギは一輝の後ろで縛り上げられている巨大な怪鳥を・・・両足の長さが不揃いな怪鳥を指差し、

「なんで情報を集めてきて欲しいといった『魃』を倒してきたのですか!!?」

そう、言った。

言われた本人である一輝は腕を組み、少しばかり考えた後に、
「俺、そんなこと言われてねえぞ?」

|||||

結論だけを言ってしまうえば、一輝の言い分は一切間違っていないかった。

だがしかし、一輝も悪くないわけではない。

なぜかといえば、黒ウサギが情報収集を依頼した一輝は、一輝の式神だったからだ。黒ウサギが一輝に頼もうと考え、本拠で見つけて話した。そして、一輝は自由に散歩をするために式神を置いていったのだから、当然五感の共有なんてしていなかった。

結果、情報の行き違いが生じてしまったのだ。

「はあ……全く、何で偶の散歩に行ったら怒られにやなんのだ……」
「そうね。強いて言うなら、プレイヤーにもかかわらずギフトゲームにも参加しないで遊ぼうとしたからかしら？」

風呂上りの一輝が食堂で水を飲みながら愚痴を言っていたら、音央がそれに答えた。

「にしても、珍しいですね。一輝さん、いつもなら出れる限りのギフトゲームに出て、ようやくご自分の時間を取っていますのに。」

「それも、自分の時間といいながら人助けばかり。」

「いつも言ってるだろ？人助けなんてしてない。ただの憂さ晴らしだ、って。」

一輝はそう言いながら、再び水の入ったコップを傾けて水分を補給する。

そのコップが置かれるのと同時に、鳴央が水を注いだ。

「あ、悪いな。」

「いいですよ。それに、どう考えても水分不足でしょうし。」

「まあ確かに、水分は足りないでしょうね。」

早魃そのものである魃の退治に、入浴。

汗を掻く要素には困らない。間違はなく水分不足だろう。

「で？何で一輝は、いつもと違って朝から出かけていたのかしら？」

「……いい天気だったし、散歩日和かなー、と」

「早魃が起こるような方向が、ですか？」

一つ目の理由は、鳴央によってあっさり否定された。

「……いや、早魃と遭遇したのは偶然だし、」

「ある程度近づいたら、陽炎が見えたんじゃないかしら？」

「……あ、そうだ。俺も一応、サウザンドアイズに行ったほうがいいんじゃない、」

「換金なら、黒ウサギさんだけで十分ですよ。」

「それに、魑が意識を取り戻しても十六夜に飛鳥、耀がいれば問題ないわ。」

一輝が逃げることも出来ず、誤魔化すことも出来ない状況を作られてどうしようかと悩み始める。

「というか、それ以前にどうして朝から出かけていたのかしら?」

「確かに、そこからおかしいですね。どうしてギフトゲームに参加しようとしていなかったのか……いえ、そうじゃないですね。どうして、」

「どうして今日、ギフトゲームが開催されないのかを知っていたか、だろ? 全く、なんでか俺の周りの女性陣は、俺の心が読めるヤツが多すぎる……」

一輝は前の世界のことまで含めてそう言い、頭を掻いてから観念したように顔を上げた。

「確かにそうですよ。俺は今日、ってか当分の間ギフトゲームが開催されないことが分かった。それで、散歩に出かけたんだよ。どうだ、これで満足か?」

一輝がそう言うと、二人は一輝の隣に座った。

それは、一輝が放す前に逃げるのを封じよう、という意図によるものだ。

「じゃあ、まずはどうしてギフトゲームが開催されないことを知っていたのかしら?」

「……尋問?」

「一輝さんのことですから、自分のやったことを誰にも知られずに済ませようとしているのではないかと思ひまして」

一輝は再び、唸った。

そして、今度こそ心から観念して、聞かれたことを答えていく。

「晴明。この間、あいつから聞いたんだよ。魑が来る、って。」

「なるほどね。それで、一輝は何もないからでかけたのね?」

「そして、そのまま魑胎児に向かった、と。」

「ま、元々は魑退治、ってより依頼をこなすためだったんだけど。」

一輝に対して出された依頼は、情報収集。依頼主は清明である。ただし、倒してしまっても問題ない、とも言われていた。「それで、どうして倒すことになったのですか?」「そうだな…ま、大した理由じゃないよ。ちよつとそんな気分になっただけ。」

そして、一輝はその時のことについて話し始めた。

|||||

一輝が陽炎に向かって歩いていって見たのは、ユニコーンが巨大な爪に貫かれようとしている瞬間だった。

そして、一輝はそれを見た瞬間に飛び出してその爪をつかんだ。

『貴方は…』

「ん、俺?通りすがりの“ブローネーム”。」

一輝はそう言いながら、爪をつかんでいる相手を観察する。

「ふむ、コイツの近くで陽炎が起こってることと長さのおかしい両足から考えて、コイツが魘で間違いないか?」

『は、はい。間違いなく、魘ですが…』

「そうか。それはちよつと良かった。」

一輝がそう言いながら手を離すと、魘は一輝から距離をとる。

そのまま逃げようとしたのだが、一輝の張った結界によってそれは出来ぬ相談になってしまった。

「にしても、魘と遭遇するとか…変な縁を感じるな。俺が殺した白澤に、五代目が殺したやつのもあるし…」

『どうするのですか?』

一輝が考え事をしてっていると、後ろからユニコーンが話しかける。

「どうする、ってと?」

『魘をどうするのかと聞いてまして。』

「ああ、なるほどなるほど。そうだな…あれって、倒したらまずかったりするかな?」

『いえ、問題ないと思います。』

「じゃあ次に、あれって倒したらお金か何かもらえたりするかな？」
『あれ自体が、売れると思います。』

「ん、なら倒そう。」

一輝はそう言いながら量産型・妖刀を抜き、

「一閃、絶雅。」

一太刀の下、魃を倒して見せた。

|| || || || || || || || || ||

「とまあ、そんなことがありましたとき。」

「つまり、いつもと変わらない人助け、ってことね。」

「ですね、安心しました。」

二人はいつもと代わらぬ一輝の様子に、笑みを浮かべた。

「でも、それなら正直に言えばよかったじゃない。」

「やだよ、わざわざ人に言うことでもない。つーか、おまえ達にも話すつもりは無かったのに・・・」

「ダメですよ。せめて、私達には話してください。」

鳴央はそう言いながら立ち上がる。

「一輝さんが自分のやったことをなんとも思っていないのは、良いことだと思います。でも、それを誰にも知られていないのは悲しいです。」

「そういうこと。だからせめて、私達には話さない。」

鳴央に続いて音央も立ち上がり、そう言ってから、

「じゃあ、私達は仕事に戻るわね。まだやることもあるし。」

「それなら、俺に聞きだそうとなんてしないで仕事しなうぜ?」

「それも、私達の仕事ですよ。」

一輝は、どんな仕事だ、とは言わなかった。

「あ、そうだ。今度、六本傷のカフェで私と鳴央に何かおごって。口止め料、って事で」

「了解。それくらいならお安い御用だ。」

そして、一輝を残して二人は仕事に戻っていった。

余談だが、結局一輝がやったことは御礼に来たユニコーンによって、コミュニケーション全員の知るところとなったのである。

乙 ⑨

某所温泉、女風呂。

日ごろの疲れを取ろう、という企画で「ゾーネーム」のメンバーは温泉旅行に来ていた。

「ふう〜・・・確かに、たまにはこうして休まないといけないわね。」
「はい。いつも気を張っていては、いつ切れてしまってもおかしくないですし。」

「それについては、一輝様が一番心配なのだがな。」

「だね〜・・・やっぱり私、男湯の方に行つて、」

「やめろ。一輝様が余計に疲れるだろう。」

当然ながら、一輝一行も来ている。

普段から別行動が比較的多めになっている一輝も、今回ばかりはのんびりとしているだろう。

「にしても、面白い温泉よね・・・」

音央が見る先では、温泉の水面から撥ねる水の魚が居た。

「確か、スクナビコナという神様による設計でしたっけ？」

「そう言ってたね〜。黒ウサギのお姉さんも今そう言ってるし、間違いないと思うよ?」

そして、音央と同様に珍しそうに見ている鳴央と、一輝と一緒に風呂に入った際に見ている、さほど珍しそうでもないヤシロが答える。

「スクナビコナか・・・一輝様は色々やらかした英雄、と表現していたが・・・」

「何、その一輝評価・・・それに、この感じならそうでもないんじゃないかないかしら?」

「そのようだな、つと。」

そして、いつの間にか背後に回っていた白夜叉をスレイブが手刀で殴りあげ、音央が茨で捕らえて黒ウサギに向けて投げ飛ばす。

「のわっ・・・だがこれはこれで役得ぶべら!?!」

そして、そのまま黒ウサギによって殴り飛ばされた。

「ちよつと音央さん!何で黒ウサギに向けて投げたのですか!?!」

「え……だって、ここは黒ウサギに向けて投げる場面じゃないの?」
「ちがいますよ!?!」

「「え……?」」

「何で耀さんに飛鳥さんまで不思議そうなんですか!?!」

相変わらず、黒ウサギの突込みには切れがあるのだが……いかにせん、問題児二人と一輝の影響を受けてきている音央が相手では分が悪い。

「そういえば、そっちの四人は一輝君のこと、どう思ってるのかしら?」

そして、そのタイミングで飛鳥が四人に向けて質問をした。

「どう思ってる……というのは?」

「異性として、じゃないの?」

耀の一言に、約三名の顔が真っ赤になった。

温泉であることは、一切関係ないだろう。

「ちよ、耀! 何言ってるのよ!?!」

「いや、何言ってる、って……さすがの私でも、見てれば分かったし」
「黒ウサギも聞きたかったです! さあ、せっかくの温泉なので、さあ! ガールズトークとまいりましょう!」

そして、そのまま野次馬根性丸出しの三人と面白が手来たレティシア、リリによって追い詰められている。

「あはは。三人とも初心だなあ……私はお兄さんのこと、好きだよ?」

そんな中、唯一恥ずかしがるそぶりも見せていないヤシロが先陣を切る。

「あら、はつきりしてるのね。」

「うんっ。隠しても仕方ないからね。さすがに、お兄さんに聞かれてたら恥ずかしいけど……もうお風呂からは上がってるみたいだし」
「何でヤシロには分かるの?」

「隷属の契約、これってちよつと感覚を済ましてみると近くにいますか?」
「どうか位は分かるんだよね」

そして、すぐ隣の男湯に居るかどうかを確認した、というわけだ。

「そ、そうなのですか・・・なんというか、こう・・・」

「期待通りの反応がでさなくてごめんね？そのあたりはほら、こつちの三人がやってくれるから！」

そう、無責任に言ってからヤシロは方位陣から抜け出し、リリと共に風呂を上がっていく。

魂胆はこう、誰もいないうちに一輝と時間を過ごそう、というものだ。

そのついででのぼせる前にリリを回収できるあたり、かなり気配りも出来ているのだが。

「じゃあ、次は誰が話すのかしら？」

「・・・これ、話さないといけないのかしら？」

「・・・我慢大会でもする？」

耀の提案は、三人にとってもあまり喜ばたものではなかった。

そして、

「私は、というより私達は、なのですけど・・・そういったことよりも、まずはお礼がしたいんです。」

まず、鳴央が口を開いた。

「お礼？」

「ええ。私達、助けてもらっただけで一輝に何も出来てないから。」

「一輝はそんなこと、気にしてないと思うけど。」

「間違いなく、気にしてないですね。」

「それでも、私達が気にしてるのよ。」

そう言う二人の表情は、再び温泉とは別の要素で紅くなっていた。

婉曲的に言っているつもりなのだろうが、それでも一輝のことが好きだといってしまっているようなもの。

それを察することが出来ない連中ではないため、思いつきりニヤニヤされているのだ。

「あーもう！これだけ言ったんだからいいでしょ!?!それとも、まだ聞きたいの!?!」

「そうね・・・出来ることなら、一輝君のどこが好きなのかを聞いてみたいんだけど・・・」

そう言いながら、飛鳥は耀、黒ウサギ、レティシアと協力して逃げ出そうとしていたスレイブを捕まえる。

「それより、ここまで必死になっているスレイブの事を聞きたいかしら？」

「うん。こつちの方が気になる。」

「確かに、これは黒ウサギも気になるのですよ！」

「遺憾ながら、ここまでされると私も気になるな。」

問題児もそうでないメンバーも、スレイブの様子がどうにも気になつたようだ。

まあさすがに、ここまで必死になられると気にもなるのだろう。

「わ、私は一輝様の剣！ そのような感情は、」

「ないわけじゃないみたいね。」

スレイブの言葉の途中で、飛鳥が否定に入った。

「飛鳥・・・分かるってことは、経験が？」

「ないわよ。」

「ちなみに、私も。」

「あ、私もです。」

「私もだな。」

「なら、何で分かるのですか・・・」

「ごもつともな意見ではあるのだが、スレイブはそれほどまでにあからさまである、ということなのだろう。」

そして、そのまま四人の好奇の視線にさらされて、スレイブは普段考えていない感情に視点を当てざるをえなくなっていく・・・

「・・・(ぶしゅくくくく!!)」

「あ、スレイブが剣になつたわよ！」

「さわらないように気をつけて。切れ味抜群だから・・・って、意外と重いよね、大剣って・・・」

そう言いながら、音央は刃に触らないように柄を慎重に持つて風呂を上がっていく。

その横に鳴央も着いていき、何かあっても対応できる体制である。

そして、残ったメンバーは・・・

「なんと言うか・・・スレイブ、中々にかわいい反応ね。」
「うん。普段クールな感じだから、たまにああなると中々面白い。」
「YES!そして、あんな子に慕われている一輝さんは幸せ者ですね!」

黒ウサギの一言で、話の矛先が一輝に向かった。

「そういえば、一輝君の周りって中々に個性的なメンバーが集まっているのよね。」

「というより、あれは人に好かれやすいんだと思う。」

「その好かれる、の方向性が一つではない、ということですね。」

「そうだな。元の世界でも、様々な友人がいたのではないだろうか。」

レテイシアの予想は、かなりの面において当たっている。

だがしかし、そうでないめんが有るのもまた事実だ。

いろいろところで、恨みも買っている。

「そういえば・・・一輝は、箱庭にきたことについて何か思ってたりはするのかな?」

「というと?」

「ほら。今の話があたってるなら、元の世界にも未練があるんじゃない?」

「・・・それはない、と言っていましたよ。」

耀の疑問には、戻ってきた鳴央が答えた。

「鳴央さん!スレイブさんは大丈夫なのですか?」

「はい。音央ちゃんが一輝さんのところに連れて行くと言っていました。私は、何か一輝さんについて話しているから聞いてくるように、と。」

そう言いながら、鳴央は再び湯船に浸かる。

「一輝さんは元々、家族を失った時点でどこにいても変わらない、と考えているみたいで。」

「・・・そう、なのですか。」

「はい。だから、この世界・・・箱庭の世界は、無駄なことを考えずに済むから居心地がいい、だそうです。」

その言葉には、一輝が何か大きなものを背負っているということが

分かりやすく表れていたのだが・・・それについて聞ける人は、ここにはいなかった。

一輝が温泉を出て歩いていると、十六夜が卓球のラケットを持って
いるのを発見した。

「何やってるんだ、十六夜？」

「ん？ああ、せっかくだから卓球でもやろうと思ったんだが・・・」

そう言いながら、十六夜は一緒に居たメンバー・・・ジンとサンド
ラを見て、

「誘っても乗ってくれねえんだよ。」

「まあ、十六夜と卓球なんて死亡フラグに近いからな。」

そう言いながら、一輝は卓球のラケットを手に取り、球を跳ねさせ
て遊びます。

「まあ、それなら俺とやるか？」

「ん？お前、卓球出来るのか？」

「一応、な。スポーツに特別力を入れたことはねえけど、そこそこには
出来るレベルになってる。」

そして、十六夜vs一輝の卓球勝負は始まる。

一輝がサーブを打ち、それを十六夜が返す。そのままラリーを続け
ている間は普通だったのだが、途中でほんの少し十六夜が力んだ瞬
間、ピン球が壁をぶち壊した瞬間に、一輝の目の色が変わった。

「なるほど・・・そういうことでもいいんだな？」

「ああ・・・それでもいいぜ？」

そして、一輝が普通にサーブを打ち、それを十六夜が先ほどと同じ
力で返して・・・一輝もまた、十六夜に同じ威力で打ち返す。

それを十六夜が少し上乗せした威力で打ち返して、一輝は再びその
威力で打ち返す。

そうしてどんどん威力が増していくピン球を、もはや卓球台なんて
関係なく打ち続けて・・・とうとう、さすがの箱庭製ピン球も限界を
迎えた。

何度も打ち返され、運動エネルギーを溜め込んだピン球はさながら
散弾銃のごとくその場に降り注いでいき・・・

「って、何やってるんですかこの問題児様方!!」

色々とボロボロになっていてその場を見た黒ウサギのハリセンを受けることになった。

|| || || || || || || || || ||

「うう……なんで温泉旅行で疲労を溜めないといけないんですかあ……」

「あはは……ゴメンね、黒ウサギ。一輝のせいで……」

「あ、いえ！音央さんは何にも悪くないのですよ！」

一輝の代わりに謝った音央に対し、黒ウサギは慌てて止めにかかる。

ちなみに、何故ここに一輝がいないのかといえば……一輝は今、蛟劉に呼び出されて依頼をこなしているのだ。

そちらにスレイブもついていったため、一輝一行の中で今この場にいるのは、音央と鳴央、ヤシロの三人である。

「まあまあ、黒ウサギお姉さん。弁償関連は全部お兄さんがやったんだから、それで許してあげようよっ」

「まあ、それについてはそれでいいのですが……というか、何で一輝さんはあれだけのお金を持っているのでしょうか？そうでなくとも、かなりの金額をコミュニティに入れてくださっているのに……」

「ああ……あれは、不自然にならないギリギリのラインにしてるからね〜。」

「どういうことでしょうか？」

ヤシロの言葉に、黒ウサギが首をかしげた。

「一輝さんは、普段からギフトゲームのほかに人助けのような事をしているんです。」

「本人は、気に食わないからやってる、って言って聞かないけどね。」

「それで、その報酬を毎回毎回白夜やお姉さんが……階層支配者が変わってからは蛟劉お兄さんが、ちよつと多目に払ってるんだよね〜。」

「それならそうと言ってくださればいいのに……さすがに、そのお金

までコミュニティに入れろとは言いませんし、

「そうじゃないのよ。」

黒ウサギの言葉を、音央が遮る。

「アイツは、お金を自分の懐に入れたいわけじゃないの。むしろ、出来る限り多くコミュニティに入れたいのよ。」

「ですけど、それ以上に自分がやっていることを知られるのが気恥ずかしいらしくて。」

「それで、怪しまれないギリギリまで入れておいて、何かあったら迷いなく使うんだよね。」

「・・・よくわかんねえヤツだな。」

十六夜の評価は、最もである。

「まあなんにしてもそう言うわけだから、このことは知らない、ってことにしておいてね？少なくとも、お兄さんの前では。」

「知られたってことが分かったら、なんていうか分かったもんじやないから。」

「一輝さん、ご自分のことを知られるとすっごく恥ずかしそうにしますからね。」

「お三人とも、一輝さんのことを良く知っておられるのですね・・・」
「やっぱり、よく見ているとそうなるのかしら？」

飛鳥の言葉に二人は赤くなるが、

「あはは。そうかもねっ。」

「あら、温泉でも思ったのだけど反応が薄いよね？」

「さすがに、お兄さんに聞かれるのは恥ずかしいけどね。あ、そうそう。お兄さんが直接使ってるスレイブちゃんなら、もつと詳しいんじゃないかな？」

そんなことを話しながら本拠に向けて歩いていくと、パタパタとリリが走ってくる。

「そんなに慌てて、どうしたのリリちゃん？」

「あ、音央様！それに皆さんも、ちょうど良かったです。」

そう言いながら一度息を整え、

「旅行から帰ってきたら子供達が妙に慌てたから、事情を聞いてみ

たら・・・これが、届いたって。」

「そして、手に持っていた羊皮紙を・・・契約書類を、黒ウサギに差し出す。」

「これ・・・契約書類、よね？」

「はい、間違いないです。それも・・・主催者が不明の、ギフトゲーム・・・！」

乙 ⑪

「……だめね。一輝のDフォンにつながらなくなってる。」

「そうですか……出来ることなら、一輝さんにも参加してほしいかったですけど。」

黒ウサギはそう言いながら、ギアスロール契約書類を見る。

「この主催者だけではなく、ルールも場所も、何一つ分からないギフトゲーム……一輝さんの経験は、大いに役立つと思ったのですが……」
「一輝さんは……ルールなんて気にしないで、ひたすら暴れることの方が多い気がしますけど……」

黒ウサギは、鳴央の発言に対して苦笑を返すことしかできなかった。

だがしかし、一輝がそればかりやっているのもまた、事実である。そして、最終的に呪力を利用した拷問に耐えきれなくなった相手が勝利条件を喋る事になるのだが……まあ、そんな一輝の日常は気にしなくてもいいだろう。

「それにしても、不気味な図形だね。切って並べたらパズルとかにならないかなっ?」

「やめてくださいいヤシロさん! 契約書類を切るだなんて!」

「でも、お兄さんそんなギフトゲームやったことあるよ?」

「……本当に色々なことをしているのですね……」

若干、黒ウサギの声に呆れが混ざってきた。

「Dフォンの不調は……白夜叉さんに聞けばいいのかしら?」

「でも、あの人は今どこにいるのか分からないですし……」

「不調なのかも怪しいしね。ほら、私のから音央お姉さんや鳴央お姉さんのはつながるみたいだし」

と、試しに掛けてみると三人の間では電話が通じるようだ。

だが、スレイブのDフォンにはつながらない。現在仕事中の二人にはつながらなくなっているようだ。

「うくん……電源を切ってる、はずはないし……」

「緊急時のために、いつでも電源を入れておくことにしてるから……」

「じゃあ、電波が通じないところにもいるのでしょうか・・・」
「・・・Dフォンって、電波でやりくりできてるの？」

音央の発言はもつともである。

ギフトの一つであるDフォンが、そんなちやちなもので連絡を取れているとは思えない。

事実、箱庭の不思議パワーを利用する形で連絡を取り合っている。

「だとすれば、現在電話が通じなくなっているのは一輝とスレイブのDフォンに不調が発生しているからで。」

「こつちからは何にも出来ないのですね。」

「お兄さんは、今回参加できないんでよね。いや、困った困った！」

ヤシロは困ったと言いながらも、なんだか楽しそうである。

と、そこで十六夜が三人に声をかける。

「オイ、そこの一輝のメイド三人！ひとまず教会に行くぞ！」

その声を聞いて、三人は問題児一同について行った。

|| || || || || || || ||

一輝は呪札を投げ、放たれた病魔を消し去る。

そのまま一步踏み込んで放ったやつを切ろうとするが、ギリギリのところスレイブが一輝の体を操り、横に跳ばせる。

先ほどまで一輝がいたところに病魔が放たれたので、冷や汗をかきながら自分でも後ろに跳ぶ。

「はあ・・・確か、こいつは七人ミサキだつて言ってたよな？」

「はい。間違いなく白夜又は七人ミサキだと言っていました・・・正確には、神格を手に入れた七人ミサキだと。」

どっから手に入れた、一輝がそうぼやくのも仕方のないことだろう。

しかも、七人で一つの存在である七人ミサキであるがゆえに一つの神格を常時全員で共有している。

そして、七人ミサキという怪異はその崇りを鎮めるために狂塚が作

られるほどの怪異。元々、人間からの信仰を受けていた、歴史の流れによつては神霊になりかねない存在。

「魔王になる前に倒してしまえ。簡単に言ってくれるよな、白夜叉は……」

「とはいえ、兄様であればそれも可能かと。」

「軽く買いかぶりだよ、それは……」

そう言いながら呪札を数枚取り出し、七人ミサキの一人に向けてすべて投げる。

「病魔を払え、急急如律令！」

その瞬間、囲まれている七人ミサキの一人から構成している要素である病魔が払われていくが……残りの六人が、その一人を助け出す。

助け出された一人は残りの六人の病魔に包まれることで、ダメージから全快する。

「とまあ、こんな感じに一人だけを倒そうとしても無駄なんだよな……」

「……予想以上に面倒ですね、これは。いつそ復活できないまでに切り刻みましようか？」

「病魔の化身って、どれくらい切り刻めば消滅するんだろう……」
ダメージはあるが、それでも開いた穴を他の六人によって埋められれば復活してくる。

一輝はそんな七人の女性をにらみながら片手でスレイブを構え、もう片方の手で倉庫をさばくる。

「なんかねえかな……つと！」

「妖怪に対抗する策、どれくらいあるのですか？」

「昔もこういうやつを相手にしたことはあるんだけどな……その時は、落とし穴に落としとして生き埋めにして殺したんだけど。」

全員まとめて落とすことで、全員まとめて攻撃する。

だが、今回の相手は……

「病魔の化身だし、生き埋めにしたくらいで死んでくれるのかな……」
「では、その案は使えませんね。……ならいっそ、神格を取り払ってみてはいかがでしょう？」

スレイブの案に首をかしげながら、一輝は放たれた七人分の病魔をスレイブで切り裂く。

本来形のない病魔ですら切り裂けるあたりに、スレイブが素晴らしい剣であることがうかがえる。

ついでに、両手剣をあつさり片手で使いこなすあたりに一輝の異常具合もうかがうことができる。

「と、いうと?」

「身にすぎた力は、その持ち主を狂わせます。彼女たち、現時点で一言も発していませんし。」

「七人ミサキって、喋る妖怪だったかな……とはいえ、神格さえなくなればどうにかできそうではあるな。」

一輝はスレイブの案を採用する方向で決定し、ギフトカードの中から獅子王を取り出して抜刀する。

「我が百鬼より来たれ、髪切り!」

一輝がそう言霊を唱えると、黒い霧が集まって普通より大きなカミキリムシが現れる。

そして、髪切りを対象にして次の言霊を唱える。

「わが百鬼たる妖怪よ!今、我が武器に混じり、新たなる武とならん!」

その瞬間、獅子王が輝く霧に、髪切りが黒い霧になって交じり合い、それがはれると散髪用の鋏が現れる。

「うっわ……使いづら!」

「……頑張ってください、兄様。」

「隙を作るの、手伝ってくれよスレイブ……」

そう言いながら右手にスレイブを、左手に髪切りの鋏を構える一輝。

なんだか恰好がつかない感じになっているのだが……一輝は一つ溜め息をつくくと、七人ミサキを見る。

そして、一人目が病魔を放つのと同時に走りだし、病魔を肘に作った結界に収めながら、その一人目の髪を鋏でほんの少し切る。

その一人目の足を引っ掛けて転ばせて、服ごと地面に小刀を突き刺

して固定。その瞬間に背後から迫ってきた病魔を上に乗って回避する。

「後六人か・・・髪が短いのもいるし、警戒もされてるし・・・」

「とはいえ、何か言ったところで何か変わるわけではないですよ。」

「ごもつともだな！」

一輝はもう一度上に跳んで病魔をよけ、二人を下敷きにして降りるとその二人の髪も少し切る。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前。オン・ビシビシ・カラカラ・シバリ・ソワカ！」

そのまま次の攻撃を喰らう前に後ろに跳んで、さらには金縛りをかけて一人行動を封じる。

そのままそいつに向かって走る・・・ふりをして、先に残りの三人に迫りながら一人の体をスレイブで切り裂く。

それが復活する前に髪を少し切って、スレイブを逆手に構え、

「鬼道流剣術特ノ型八番、霞斬り！」

残りの二人を、完全に分断する。

そのまま髪を切ってから肘の結界を解き、病魔を補充することで傷を治す。

最後に金縛りに会っている一人の髪を少し切って、

「よし、これで終わりだな。」

武器を全て、収めた。

乙 ⑫

「何というか・・・再確認出来るわね。」

「彼らもまた、一輝さん並みの問題児、ということが・・・」

「お兄さんも、こういうの好きそうだよね。地下ダンジョン！みたいな感じの！」

ヤシロのセリフに二人は頷きながら、先を言っている一行の後を追う。

その途中で黒ウサギがものすごい勢いで追い抜いて行ったが、それには一切のリアクションなし。

そのまま、久しぶりにノーネームを外側から観察しながら下りていくと、その先には・・・

「ワシは今回のギフトゲームの進行役を務めさせて頂く、インディ・ハムズっちゅーモンじゃ。」

ランタンを片手に持つてそう言う、ローブを被ったハムスターがいた。

さすがのヤシロも一瞬、言葉を失っている。

「大好きなのはヒマワリの種と芋焼酎。」

「くそどうでもいい。」

「ダメだよ十六夜お兄さん、そんなこと言っちゃ！はい、ヒマワリの種。食べる？」

が、そこは一輝のメイドの中で唯一問題児に分類できるヤシロ。

すぐに正気を取り戻し、どこからか取り出したヒマワリの種をあげながら撫でている。そんな様子を耀が羨ましそうに見ているのだが・・・

「ねえ、ヤシロ。私にも頂戴。」

「あ、うん！どうぞ。」

・・・訂正。

思い立ったらすぐにヤシロの隣に移動し、ヒマワリの種を受け取ってハムズに渡している。

まあ、耀なのだから仕方ない。

「それで？あの妙な契約書類を送りつけたのはあなたなの？」

「ケプツ・・・ああ、そうじゃよ。けど主催者はワシじゃねえぞ。」

そういうと、彼はその場にいる全員を視界に入れて、

「主催者は最深部にいる。そこにたどり着くことこそが本ゲームのクリア条件じゃ。」

そして、ゲーム内容の説明が始まった。

「もちろん道中、いくつかの難関は用意させてもらっとる。それを突破しプレイヤーのどいつか一人でも到達できればクリアとみなそう。」

「うくん・・・ずいぶんとあれなゲーム内容なんだね？難易度も主催者の顔も名前も分からない。魔王のギフトゲームよりよっほどあくどいんじゃないかな？」

「だとしても、ここまで来た時点でゲームに乗ったも当然じゃろ。」

ヤシロは挑発の意味も込めて言ってみたのだが、相手は一切とりあうつもりがない。

それが分かった時点でヤシロはすぐに挑発をやめ、いつもの笑顔へと戻った。

「何、安心せい。クリアした暁にはそれ相応の賞品を用意しておる。ガキどもにとって決してそんなゲームにならないことは保証しよう。ただし・・・クリアできなかつた場合は、命をもらうことになるがの。」

その瞬間、その場に大量の水が流れ込んできた。

その後で告げられた言葉は、この水が落ちる前に扉の鍵を解き、部屋を脱出すること。

「これ・・・一輝がいれば楽勝じゃない。」

音央のつぶやきは、水音にかき消されて消えていった。

＝＝＝＝＝＝

「ふう・・・さて、そろそろ話せるくらいになったか？」

「はい。もう大丈夫かと思えます。なので、これを外していただける。」

「はっはっは。そこまで敵意だらだらのやつらが、一体何言ってるんだか。」

一輝とスレイブの目の前には、ひとまとめに縛られている七人ミサキ。一輝とスレイブはもはや一切の敵意がない状態で彼女たちの前に立っているのだが、七人ミサキからは一切の敵意が消えていない。むしろ敵意しかない、と言っても過言ではない勢いだ。一輝の言い分はもつともだろう。

「では、これを外すまで私たちは聞かれたことに一切お答えしません。いいんですか?」

「ああ、別にいいぜ? 話させる手段はいくらでもあるし、なあ?」

一輝はそう言いながら倉庫をあさり、色々な物を取り出していく。それを見て、だんまりを決め込んでいた六人も代表として交渉をしていた一人も、恐怖から震えだした。

「・・・それで一体、何を?」

「ん? 何だろうなあ? さてはて、何だと思うスレイブ?」

「拷問・・・と言つても、中世ヨーロッパのように身体的な苦痛をメイに置いたものではないですね。精神的な・・・女性には辛いものかと。」

その瞬間、七人の震えが増してきた。

「あ、そうだそうだ。昔某国から俺の正体を探るために送られてきたスパイですら屈服したやつとかあるんだけど、どこにしまったかな・・・」

「やはり、それも?」

スレイブの質問に対し、一輝はその時のことを笑顔で話した。それはもう、とびっきりの笑顔で。

「女の人だったな。謎の第三席、それが男だつてことくらいは掴んでみたいで、異性を送り込まれたんだけど。お、あつたあつた。これが予想以上にうまく決まってさ。あれ以来一種のトラウマと変な癖になったらしくて、俺の名前さえ出せば何でもする、超DMの世界トップクラススパイが誕生したんだよ。完全に日本に寝返ってくれてさ。光也とか、それはもう助かってたんだよな。いやはや、懐

かしい懐かしい。」

「「「「「すいませんでした！何でも話しますのでどうかやめてください！！」」」」」

七人ミサキ、一瞬で手のひらを返した！

一輝はその様子に満足そうにうなずいてから、道具を一切しまわずに話を聞いていく。

「さて、と。じゃあまずは何でこんなところで暴れていたのかを聞かせてもらおうか？」

「神格を手に入れて。」

「そのまま自我を失って暴れておりました。」

「じきに私たちの体に神格がなじんだその時には。」

「私たちの自我を保つことも出来るようになるだろうと。」

「そう言う判断をお互いに交わした私たちは。」

「とりあえずこの場に来てから神格をギフトに同調させて。」

「そのまま暴れていた、という形になります。」

一輝は七人が順々にこたえたのを聞いて、どうにか現状を理解していった。

「なるほど。つまりは、お前たちに神格を与えたやつがいるんだな？」

「はい。いるにはいますけど・・・」

「あ、こんなところにお手軽拷問セットが、」

「本拠の場所から何まで、全て喋らせていただきます！むしろ喋らせてくださいー！」

主への裏切りよりも拷問の方が怖いようだ。

一輝はその後に続けられた神格を与えた存在の名前を聞いて・・・

「ふうん・・・ま、依頼のついでか。」

「あ、あの・・・私たちはどうするので、きやー！」

一輝は何かを決め、七人ミサキをひとまとめにした束を片手で持ち上げて倉庫の一室に投げ込み、

「んじゃ、ちよつと行くぞスレイブ」

「はい、兄様」

スレイブを引き連れて、聞きだした場所へ向けて歩きだした。

あの一輝を見てもその忠誠心に一切の変化がないスレイブは、もう本気で尊敬できる。

「なんだか・・・あんな契約書類だったのに、ずいぶん平和的になったわね。」

「最初のゲームには命の危機がありましたけど、それも簡単に回避できましたし。」

鳴央の言う通り、水攻めに会った最初のゲームも命の危機は簡単に回避できた。

手段はごくごく単純なもので、鳴央が水を神隠しに会わせたのだ。それが叶わなかったら、その時は人を石盤ごと神隠しに会わせ、石板を完成させてから戻ってこればいい。とはいえ、ゲームが成り立たなくなるため本当に危険にならない限りは使わない、という結論に至ったため、使っていないのだが。

同様の理由で、白雪もギフトを使っていない。

頭を働かせれば、死ぬ可能性はゼロにまでなるゲーム内容。主催者の名前すら出さずにおこなうゲームとしては、いささか安全すぎる。

そして、今回のゲーム内容は・・・

「お料理、か。確か、鳴央お姉さんは得意だったよね？」

「得意、といえるほどのものではないですけど。」

鳴央はいつも通り謙遜を見せたが、それが嫌味にならないのは彼女の性格ゆえだろう。

「そんなことないわよ。鳴央の料理はおいしいわ。」

「そうでしょうか・・・？」

「うんうんっ！お兄さんの胃袋もがっしりつかめるんじゃないかな？目指せ籠絡！」

その瞬間、鳴央の顔が一気に紅くなる。

「ろろ、籠絡って・・・!？」

「お兄さん、たぶん色仕掛けとかよりもそう言うの方が効果あるともうよ？」

「確かに、一輝はそんな感じよね・・・あれが色恋沙汰に興味あるのか、そこから謎なんだけど。」

音央がそう言った瞬間、目の前で黒ウサギたちがハムーズと話しているのを放置して三人での話が始まる。

「そう言えば、お兄さんはそこから怪しいかな。大人びてる?」

「いや、あれはむしろ中身結構子供でしょ・・・やりたいことは全部やる方向だし。」

「感情に正直ではありませんね。・・・とはいえ、本気で怒ったところは見たことないです。」

音央と鳴央に対して一度怒ったことがあるが、それも本気で怒っていた様子はなかった。二人のいないところで一度キレてもいるのだが、それも自分が原因ではなくレティシアに対するペルセウスの態度にキレたことだ。

そして・・・

「・・・なんだかんだ、あいつって自分のために感情が動くことと少ないかしら?」

「これまで一緒にいて、そういう傾向にあるのは確かですね。」

「その分、人のことで動くのは多いよね。そして、人のために命がけに見えることも平気でしちゃう。あのギフトもそうだし。」

最後にヤシロがつぶやいた言葉が、二人に聞かれることはなかった。

ヤシロは一輝のギフト、『無形物を統べるもの』に発生する代償の頭痛、これの正体は何なのかを知っている・・・というよりは、偶然知ってしまった。

一輝ですら知らない頭痛の正体。ヤシロは自身が破滅という存在であるがゆえに、それが本人の破滅へと向かう要因であることを理解してしまった。

《あれ、基本影響は無いに等しいんだけど、たまにお兄さん無茶して使うからな。》

ヤシロはそう思いながら、しかしその正体を一輝に伝えていない。伝えたところで一輝がそれを使うのは間違いなく、かと言って破滅それを取り除く手段があるわけでもない。

変に心配させるくらいなら、という考えのもと、ヤシロは一輝のこ

とを心配しながらもそれを心のうちにしまっている。

「ヤシロ！ 私たちも料理始めるわよ！」

「私が指示を出しますので、手伝ってください！」

「あ、うんっ！ すぐに行くね〜！」

《たぶん、元の世界にいる間はあのギフトをあそこまで行使することはなかった。だからこそ与えられたんだろうけど・・・箱庭では、使う頻度も増してるし、それが原因なのかな〜》

ヤシロはそんなことを考えながら、調理台についた二人の元へと向かった。

限りなく正解に近い思考を走らせながら。

|| || || || || || || || || ||

「えっと・・・あの七人ミサキが言ったのってこの辺りだけ？」

「それで合っていると思います。とてもそれらしき建物ですし。」

二人の目の前にあるのは、雰囲気が病院のような建物。と言って、肝試しに使いそうな、という言葉が頭につくのだが。

「ま、そうだよな・・・それにしても、ずいぶんと大物が出てきたよな〜。あれは驚いた。」

「確かに驚きましたが、同時に納得も出来ました。あれほどの存在であれば、神格の一つや二つ、簡単に渡せるでしょうし。七人全員に神格が宿っていたのも納得できます。」

「いや、あれは一つの神格を共用してたんだろ。七人で一つの存在なんだし。」

そう言いながら建物に進む二人の後ろには、様々な病魔の化身が転がっていた。

この建物に来るまでに相手にしたのだが、いかんせん神格を宿していても二人の相手にはならなかった。

そもそも、一輝には病魔なんて放つても自らの免疫能力を操る事で治してしまうし、スレイブは基本人間の姿ではあるものの本質は剣。無機物相手に放つ病魔ほど無駄なものはない。

「さて、最後の相手くらいは手ごたえがあるといいんだけど・・・」
「相手は神です。これまでの有象無象とは比べ物にならない実力があ
るか。」

「だよな。・・・んじゃ、派手に始めるとするか。」

一輝がそう言いながらスレイブの手を握ると、スレイブはすぐに剣
の姿に変わる。

鞘を腰に固定してから抜刀し、刀身に呪力を纏わせていく。

『今回はこちらなのですか?』

「ああ。とりあえず、妖力よりもこつちからやってみる。」

『了解しました。すぐに順応します。』

スレイブのその発言通り、刀身に纏っていた呪力は一切荒れた様子
がなく、完全に順応して・・・

「鬼道流剣術、立ち、十二ノ型。一閃断斬。」

一輝がスレイブを横薙ぎに払うと、纏わせた呪力がそれに対応して
刃を作り、そのまま進んでいき・・・建物を、上下に分断した。

「立ち、十五ノ型。崩し。」

さらに一輝がスレイブを一閃し、その瞬間に先ほど切り離された上
半分が粉々になる。

「・・・よし。これで出てくるかな?」

『今ので斬られてでもない限り、さすがに出てくるでしょう。』

「だといいいんだけど・・・いや、期待には答えてくれそうだ。」

一輝がそう言いながら笑みを浮かべた瞬間、建物であったものが吹
き飛び、もはや建物としての形を下半分すら失う。

そして、その中から長身の男が出てくる。

尖った帽子をかぶり、棍棒と盾を持っている。

「・・・まさか、この様な挨拶を受けるとは思っていなかったぞ。」

「そうか。なら、挨拶しなおしてやるよ。　「ノーネーム」所属、寺西一
輝だ。」

『同じく「ノーネーム」所属、ダンスレイブ。』

「そして、まさかちゃんとした挨拶が帰って来るとも思っていなかつ
た・・・」

その男は、一輝の問題児っぷりに軽く戦慄している。

その場で軽く頭を抱えてから、そいつも名乗りを上げる。

「では、俺も名乗ろうか。俺の名は、」

「ああ、ラシヤプだろ？大丈夫、七人ミサキから聞いてるから。」

「・・・思い出した、形無き物を操り、妖の群れを連れる問題児だな。」

一輝の認識は、そんな感じで統一されているらしい。

「さて、俺の部下を倒してくれた礼は、俺のギフトゲームで返させて、」
「いや、そんな時間はやらねえよ！」

一輝はそう言いながら主催者権限を発動しようとするラシヤプに向けて踏み込み、スレイブで斬りかかってから、返す太刀に獅子王を切り上げる。

「な・・・お前!？」

「いや、やっぱり主催者権限持ちにはこれが一番有効だろ！」

「話が違うぞ、白夜叉!？」

ラシヤプが何か言っているが、一輝は一切気にしない。

今回の件の依頼人の名前とか出てきたが、一輝はようやくの強敵相手の戦いを楽しむことしか頭になく、スレイブはそんな一輝の考えに従うだけ。

はつきり言おう。ラシヤプが不憫すぎて仕方ない。

「ええい、主催者権限を使わせろ！そうでなくともせめて話を聞かなか！」

「やなことった！面倒なルールなんて取っ払って、戦いを楽しもうぜ！」

「この問題児め！その上戦闘狂など、面倒にもほどがあるぞ！」

そして、二人の戦いは続いた。

料理対決が終了し、レティシア率いる三人のメイド組みが脱落して進んでいく。

その先には不気味な屋敷があり、鍵が開いていたのでそこに入っていく。扉の先には……

「……不気味ですよ、こういう甲冑って……」

「二輝はこういうの好きなんじゃねえか？」

十六夜の発言に対して音央と鳴央の二人は無言で頷き、ヤシロは目を輝かせて甲冑へ走っていく。

「こういう甲冑っていいよね。一個くらい持って帰っても怒られないかな？」

「いや、こんなのどうやって持って帰る気よ……」

「うくん……着て？」

「ヤシロちゃんでは、背丈が余っちゃいますよ。」

音央が半分呆れながら、鳴央が微笑ましげに見ながらそうコメントをしている。

そして、ヤシロが甲冑に手を伸ばした瞬間、それがガタリと揺れ、

「あ、やっぱりこれいらないうやー！」

ヤシロはすぐに、それを破壊した。

それが皮切りになったのか、屋敷の中の甲冑が次々と動き出し、彼らを襲いだす。

だが……

スリーピングビューティ
「茨姫の檻！」

アビスホール
「奈落落としー！」

それらは全て音央の操る茨にとらえられ、それ自身も動いて次々と甲冑を飲み込んでいく黒い穴、神隠しそのものに放り込まれて行く。

誰かが何かをする暇もなく、甲冑が危害を加える暇もなく、全ての危機を取り除く。一輝とともに行動し、危機に対する対応能力の向上からなる一連の動きだ。

「ふう……これで全部かしら？」

「はい。この屋敷にある甲冑は全て呑みこめたと思いますよ。」

「・・・素晴らしい手際でございますね。」

ようやく何が起こったのかを理解した黒ウサギが、二人の手際にその声を漏らした。

珍しいことに問題児三人も頷いているので、この認識に間違いはないだろう。

「いや・・・一輝と一緒にいると、ね。」

「色々と荒事には巻き込まれますから。気がつけば、こういった弱い人がたくさん来た時の対応には慣れてしまいました。」

「一輝さん・・・黒ウサギたちの知らないところで一体どれだけの無茶を・・・」

黒ウサギはそんな感想を漏らすのが、問題児たちは、

「全くだぜ。アイツ・・・」

「一輝くんだったら、一人でやってしまっただもの。」

「みずくさいっただらないうね。」

「皆さん・・・!」

珍しくまともな問題児組みの感想に、黒ウサギは感動したように顔をあげ、

「『そんな面白そうなこと、一人でやるなんて!!!』」

「って、そちらですか!？」

だがしかし、続いた言葉で一気に落とされた。

だが仕方ない、相手は問題児なのだ。

彼らからしてみれば、言ってくれば手伝うという話ではなく、自分たちも楽しいことに参加させる!という話なのだ。

そんな話をしていたら、階段を下りてくる足音が聞こえてきた。

そちらを全員が向くと・・・ランタンを持ち、フードで顔が見えなくなっている少女がいた。

「鎧兵殲滅に十数秒・・・いやはや、予想外にもほどがある。それも、たった二人でそれを成してしまうとは。」

その声には少なくない動揺が含まれていたが、それを指摘する人物はここにはいない。

それ以上に、このタイミングでここにあらわれたことの方が重要である。

「このタイミングで出てきたってことは、このゲームの主権者なのか？」

「ん？何をいつとる。自己紹介ならとづくに済ませたじやろう！」

そう言いながら、その少女はフードをとり・・・

「みんな大好き、ハムーズさんじゃよ！」

.....

「言われてみれば確かに、フードもハムスターの耳っぽかったねっ。」

「いやいやいや！ヤシロさん落ち着き過ぎでしょう!？」

「ワシ、年寄り臭くてもロリじゃないとは一言もいつとらんぞ。」

「いやだからって当然のように登場されてもですね!!」

「そんなに驚くことか？ロリや変身くらい、箱庭ではよくあることだろ。」

「慣れてるー！ー！ー！ー！ー！ー！ー!!!」

黒ウサギが突っ込み大変そうだが、誰も手伝おうとはしない。

突っ込みは突っ込みキャラに任せる、と言う方針なのだ。

「そう言えば、なぜか女性の魔王ってロリばかりよね・・・」

「確かに、そうですね・・・少なくとも見た目は幼い人ばかりです。ヤシロちゃんは、本当に幼く感じますけど。」

これまでに出会ったのは、白夜叉にレティシア、ペスト、ヤシロ。ものの見事に幼い見た目ばかりが集まっている。

ここまで来ると、そういう法則性があるのではないかとかんくぐつてしまう位だ。

|| || || || || || || ||

「オイオイラシヤプさんよ！さつきから防戦一方じゃねえか！それでも神霊かよ！」

「それについては、むしろ貴様が本当に人類なのかを問いたいな！」
ラシヤプはそう言いながら、事実防戦一方となっている。

一輝がスレイブと獅子王の二刀流でラシヤプに向かい、その攻撃を棍棒でいなし、盾で防ぐ。この一連の動作が先ほどから続いているのだ。

当然ながら、ラシヤプも反撃をしないわけではない。

武器で攻撃するだけの隙を一輝が与えないので、他の手段で・・・病魔を放つ事で、一輝を倒そうとしたし、せめて武器を使う暇だけでも作るつもりだった。

彼はヘラクレスとも同一視される軍神。一度でも武器を使い、攻撃を当てさえすればこちらのものだ、と。だがしかし、その目論見は一度足りともうまくいくことはない。

一輝はなんと、ラシヤプの病魔さえもギフトで無効化してしまったのだ。

放たれ、それが体に入ったと分かったその瞬間に人間の限界以上に免疫能力を高め、体内に入ったそれを全て殺しつくす。

そして、それと同時に進行でスレイブで斬りかかり、逆にその隙を突かれてしまう。

「ひどい言われようだな！そりや妖怪の血が混ざってる可能性は否定できないが、ニアリーイコール人間と言えるくらいには人間だ！」

「それでその力はある得ないだろう!」

そう言いながら振り上げられた棍棒を、真っ向から獅子王で迎え撃ち、拮抗しているうちにスレイブによって斬りつけられる。

ラシヤプはそれを盾で防ぎ、

「あー、それ邪魔だな。ぶっ飛べ！」

次の瞬間には、一輝によって盾を破壊された。

「な・・・!?!」

「盾殺し。盾を破壊する技だ！」

ラシヤプはそれに茫然としてしまい、これまでにない隙を一輝につかれる形になる。

一輝は開いた胸にスレイブを突き刺し、ラシヤプがそれに気を取ら

れた瞬間に棍棒も獅子王で切り落とす。

休む間もなくスレイブを引きぬいて、体ごと回転しながら横一文字を刻み、体の向きが正面に戻った瞬間に縦一文字も刻みこむ。

その中心にはスレイブで突き刺した傷があり、一輝は再度そこにスレイブを・・・獅子王を納刀し、火を宿らせたスレイブを突き刺そうとして、

「・・・降参、かな？」

「・・・うむ、我の負けだ」

どう見ても致命傷の傷を負っているラシヤプが正直に負けを認めたので、一輝は火を消してスレイブを納刀。スレイブが人型に戻ったところでラシヤプに人の悪い笑顔を向けた。

「んじゃ、全部話してもらえるかな？」

そのセリフは、今回のことが全て仕組まれたことであるということを確認していることがはっきりと分かるものだった。

第三者が見たなら、状況は最悪に見えるものだった。

ハムーズをなめてかかった飛鳥と耀は、揃ってぶっ飛ばされた。

デイーンの手は指一本でとめられ、黒ウサギはその心配をしている間にひざ蹴りを喰らう。

火と煙で視界が悪く、どのようにしてハムーズを探し出すか悩んでいた耀は、その時間で倒されてしまった。

音央と鳴央はそれを見て一気に警戒レベルをあげ、容赦なく殺し技を使い始めたが、それがハムーズに効くことはなく攻撃の手を緩めた瞬間に二人揃って一撃を喰らい、倒される。

ヤシロはと言えば、これだけ狭い空間で百詩篇を使うわけにもいかず、かといってロアが標準的に持つ身体能力で立ち向かって勝てる道理もない。

狭い空間ではどうにも力を十全に使えず、それ故にあっさりと倒された。

最後の砦となった十六夜は互角の戦いを繰り広げたのだが、黒ウサギめがけて投げられた石ころを頭に受け、そのまま倒れた。

実を言えば、十六夜はただ黒ウサギの太ももの感触を楽しんでいるがために起きないだけなのだが、そんなことは本人以外誰にも分からない。だからこそ、これは第三者からしてみれば大ピンチなわけで。

「うっわー……まさか、ここまで劣勢とは……」

式神・送り狼に乗って駆け付けた一輝がこのように漏らしたのは、仕方のないことだろう。

「ほう？もうここにたどり着いたか。」

「ああ、ちよつと急いできたんでな。」

一輝はそう言いながら式神を札に戻し、腰につるしたスレイブを抜刀してハムーズの前に立つ。

「さて……少しは俺にもこいつとやらせてくれよ、十六夜？」

「ツチ……いいぜ、もう少し観戦に回ってやる。」

十六夜はそう言うてから何事もなかったかのように立ち上がり、呆

然としているメンバーを気にも留めずに座った。

頭からかなりの量の血が出ているのでスプラッタなことこの上なのだが、本人が問題ないと言っているので大丈夫なのだろう。

《ま、十六夜だしな。》

そうだね。それにしても、このやり取りも随分と久しぶりだな。

《コラボの方でやって、久しぶりにやってみようかな、と。》

さつらつとメタい発言してんじゃねえ……あっちに行ってるお前は時系列的に見てまだ先だろうに……

《知らん。》

「話はまとまったのじゃな？」

「ああ、またせて悪かったな。もう準備オツケーだ。」

「では、始めようか！」

ハムーズはそう言うと同時に一輝に迫り、一輝は何のためらいもなく尻餅をついてそれを避け、両手を床について蹴りあげる。

「ん？今の感触は……」

「考え事とは、余裕じやのう！」

「いや、そう余裕でもない。」

一輝が考え事をした瞬間にハムーズは一輝に殴りかかったが、それは空気の壁によって防がれる。

「それにしても、落ち着いて対応しとるのではないか？」

「正確には、攻略法を思いついたからそれを実行するために冷静になったただだよ。とりあえず……準備が整うまではやり合うとするか！」

一輝はそう言うと同時に先ほどまでの丁寧な防御を切り捨て、スレイブ片手に一気に踏み込み、容赦なく横薙ぎに切り払う。

当然のようにそれで斬る事は出来なかったが、防御に片腕を使ってきたのもう片方の手に持った呪札を押し付け、そこに呪札が耐えきれぬ量を過剰にオーバーした呪力を流し込み、爆発させる。

「爆破物なんぞ隠し持っていたのか！」

「本来の使い方からかなり遺脱した使い方だ。ま、簡単に爆弾を作れるから重宝してるんだけどな！」

そう言いながらさらに呪札を投げつけ、一度に十数枚を爆発させる。

同時に結界を展開し、被害をその中に閉じ込めることで爆発の威力を高める。

「これでワシが倒せると思うたか！」

「いや、全然。宿してもらった力とはいえ、そこまでの力を持つてるんだ。この程度で倒せるとは思っちゃいねえよ。．．．あの爆発も、手軽な代償に、熱を一切持たないからな。」

その瞬間、ハムーズの表情が一瞬動いたが、一輝はそんなこと気にもせずに話を続ける。

「俺が何度かお前と打ち合っと思ってついた手段は二つ。一つ目は急激な温度差を連続して与えることによる破壊だが、これは建物にも有効だからな。あんまり使いたい手段ではない。だから、俺は別の手段をとる事にさせてもらった。」

「別の手段、とな？」

「ああ。まず．．．ここに、あほみたいな量のフツ素があります。」

そう言いながら一輝が手をあげ、倉庫をあけるとそこに空気が圧縮されていく。

それは全てフツ素。フツ素だけを集めて圧縮していく。

「次に、ここに水樹の枝があります。ここからこちらもあほみたいな量の水を出していき、先ほどのフツ素とは別で集めていきます。」

その瞬間、ハムーズが何かに気付いた様子で一輝に迫るが、一輝はそれを避け続ける。

両手の上にフツ素と水を集めているので、手を出すことはできない。

だが、それでも脚は出せるので膝で腹をけり上げ、そのまま体ごと回転してハムーズを蹴り飛ばした。

「カツ．．．」

「全く、人が話してるってのにそこで殴りかかってくる奴があるかね。せっかくの実験、邪魔するもんじゃねえよ。」

そう言いながら、一輝は両手の上に集まっているフツ素と水を接触

させ、その二つは激しく反応を進めていく。

「この二つは接触すると激しく反応し、 $2\text{H} + \text{O} + 2\text{F} \rightarrow 4\text{HF} + \text{O}$?という反応を行いフッ化水素と酸素を発生させる。今回は反応物を同量準備したから、全部反応しきって相当量のフッ化水素が発生した。」

そう言っている一輝の頭上には、相当量のフッ化水素が液体で存在していて・・・一輝は、とても笑顔だった。

いたずらを思いついたような、これからやってやろうという意味が見え見えの笑顔を。

「さて、ここで十六夜君に問題です。これをあれにかけたらどうなるでしょう?」

「・・・フッ化水素は毒物だ。あれが生物ならそれだけの量。毒でくたばるだろうが・・・ハムーズに対してはそうじゃねえな? 正解は侵される、だ。」

「お見事!」

一輝はそう言った瞬間に頭上にあるフッ化水素を操り、蛇のようにしてハムーズに向けて放つ。

ハムーズはそれをかなり必死で避け続けるのだが、それでも何度か体にかすり、かすった場所が溶けていく。

「く、この・・・!」

「お前はどっかのコミュニティが作ったガラス細工に実力者が力を与えたものだろう。本質がガラス細工である以上、これが効かないはずはないよな?」

そう言いながらも一輝はフッ化水素をハムーズに向けて放ち続け、気がつけばフッ化水素がハムーズの周り360°を取り囲んでいた。「じゃあな、ハムーズ。ラシャプとの戦いと同じくらい楽しめたぜ。」

最後にそう言ってから、一輝はフッ化水素のドームの中にさらにフッ化水素を流し込んで中を満たし、ハムーズを溶かしつくした。

|| || || || || || || || || ||

「うん、肉はうまい。」

「そうかそうか。まあ、それは私からの謝罪とでも考えてくれ。」

「そうさせてもらうよ。何せ、意図的に俺をゲームから遠ざけてたんだからな。」

黒ウサギが問題児たちに全て話した後、ノーネームの敷地内でバーベキューをしていた。

一輝はそこで今回のことで白夜叉に対して文句を言っているのだ。

「まあでも、ラシヤプとの戦いはそこそこに楽しめたからな。得もあつたし、最後には間に合ったからいいんだけどな。」

「それならよかった。ラシヤプのやつも褒めておつたぞ。あんなの、人間ではない、とな。」

「それって褒めてるって言うのか？ただ、俺が存在自体あり得ないって言われたみたいなものだろ。」

「私としては、それは否定できないのう。」

あつさりと白夜叉がラシヤプに賛成したことで、一輝は少し気に食わなかったのか手に持った肉を大きくかみちぎった。

「んで？今回俺に対して出した試練には何の意味があつたんだ？」

「ああ、それは・・・その封印を解かせようと思つておつたのだ。」

白夜叉はそう言いながら、一輝の右腕を指差す。

「・・・いつ知つたんだ？」

「何、それくらいは見れば分かる。・・・それは、おぬしの呪力と霊格を大幅に封じているものだな？」

「ま、そんなところだな。と言つても、これがあつたところで気にするほどのもんじゃない。」

そう言いながら一輝は袖を伸ばし、封印の刻まれている部分を隠した。

基本的に不可視なのでそうしてもしなくても変わらないのだが、気分的なものだろう。

「それは、どのような経緯でかけたものなのだ？」

「あー・・・ま、元いた世界でそこその立場にいてな。その関係で、その立場にいる全員がかけられてたんだ。そうでもしないと、感情が

高ぶった時に霊圧で大変なことになるんだと。」

「それでも、力の大部分が封じられているのは事実であろう?。」

一輝は白夜叉のその言葉に対して少し悩むそぶりを見せたが、

「まあ、確かにそうなんだけどな。それでも、その分は俺が体術なり剣術なりで補えばいいんだ。」

「・・・この先、魔王と戦う中でその枷は致命的なものとなりかねないぞ?。」

「分かってるよ、そんなことは。」

そう返した一輝に対して、今度は白夜叉が少し悩むそぶりをみせ、

「その封印、解けないか専門家を紹介しようか?。」

「いや、それはいい。」

「遠慮はせんでもよいのだぞ。今回の私からの試練の褒美だとも思ってくれば。」

「そうじゃなくてだな・・・これ、俺の意思で解けるから。」

一輝はそれ以上話すつもりはない、というように足を進め、肉のついていない骨を軽く回して新しい骨付き肉を取りに行く。

「そう言うわけだから、本当に必要になったら俺の意思で解くよ。」

「そうか。」

「そうだ。基本的に使わないのは、まあ溜めこまれてるのが一気に解放された時の周りへの被害が恐いからだ。決して、仲間のピンチに対して手を抜いてたわけじゃない。」

白夜叉が言いたいことを先回りして答え、白夜叉もそんな様子の一輝に対してもうこれ以上何もいわない。

が、最後に何かを思い出した。

「そう言えば、得があったと言っておったな。ラシヤプから何か受け取ったのか?。」

「ん?ああ・・・ま、そんな感じだな。七人ミサキが、俺に渡された。今は求道丸監修の下畑仕事をしてるはずだよ。」

そう、あの七人ミサキは一人残らず一輝に渡され、今は求道丸とともに倉庫の中での畑仕事&ノーネームの畑仕事をしている。

文句タラタラではあるが、一輝に逆らった場合のリスクが大きすぎ

るためにちゃんと畑仕事はしているのだ。他のことは一切していないが。

「あ、おにーさーん！もうお話は終わったの？」

「ああ・・・もういいよな？」

「うむ。すまん、長話をしてしまった。」

白夜叉から終了を告げられたので、一輝は自分を呼んでいるヤシロのもとへと向かった。

ヤシロ自身も一輝に向かって走ってきて跳びつき、一輝はそれを抱き上げた。

「ほらほらっ。早くいかないとお肉なくなっちゃうよ？」

「そうだな。せっかくだし、食いたいただけ食べないとなー！」

そう言うと、一輝はヤシロと抱えたまま走り、音央と鳴央、スレイブのいるところまで向かった。

撃て、星の光より速く！ 戦力外通達

「今回は二人で来たんじゃない。」

「ああ。あの記憶、あれが一族の役目だというなら、二人とも話を聞く義務がある。」

「そう言うわけだから、初代様にも出てきてほしいんだけど。」

一輝と湖札は二人ともが陰陽装束を・・・一輝は、一族の長である証の漆黒の神主衣装を。湖札は奥義を継承した証の巫女装束をまとい、一輝の檻の中に来ていた。妖剣は二人も言っている通り、一族の役目であるというものについてだ。

そして、その役目において重要な立ち位置に来るあの像。その元となる存在と、二人は記憶の中で戦っていた。

「今、聞かねばならないことなのか？」

「むしろ、今聞かないとどうしようもないことだ。でないと・・・アジ
||ダカーハ退治に参加させてもらえないみたいだからな。」

|| || || || || || || || || ||

「んで？用事ってのはなんだ、ラプ子？」

一輝はラプ子に呼び出され、少し苛立った様子で用件を聞きに来ていた。

苛立ちの理由はとても単純で、音央を助けに行くことを止められているからだ。

『一人の仲間のために、この箱庭の危機にもかかわらず戦力に勝手なことしてもらっては困る。』という理屈に、一輝は一ミリも納得していない。

「では、単刀直入に聞きましょう。貴方の主催者権限、それは一体何色ですか？」

「何色・・・？」

一輝は一瞬、何を言っているのか理解できなかつたが・・・すぐに言わんとしているところを理解した。

主催者権限によつて出現する契約書類。その色は魔王ならば黒。善なる者なら輝いている。それを聞いているのだ。

「そう言えば、ラプ子はまだ湖札のことに気づいてるんだよな。」

「当然です。気付かないわけがないでしょう。」

一輝はそう返事が返ってきたので、それも含めて話した。

「・・・今俺が自由に使えるのは、蚩尤の善が一つ。湖札がどうかしている今だけの限定的な天逆海の魔王が一つ。」

「その二つは知っています。聞きたいのはそれらではありません。」

一輝の答えはラプ子の望むものではなかつたようだ。

「一応、これで全部だと思ふんだが?」

「いえ、そうではないはずです。切り札のつもりでしょうけど、もうあと一つ、自由に使えるものがありますね?」

一輝はその問いに対し、どう回答するのか少し考えて・・・

「・・・はあ、正解。確かに、今の俺が自由に使える主催者権限は三つある。何でわかるのかね。梨、食べるか?」

「私をなめてもらつては困ります。・・・とはいえ、その正体は何にもつかめそうにないですけど。いただきます。」

そう言つたため息をつきながら梨を受け取り、それをしゃくしゃくと食べながら話を再開する。

「ですが、それがどれだけ不安定なものなのかは、すぐに分かりました。」

一輝は何も言わず、話を続けるよう目で催促する。

「そもそも、貴方という存在自体が不安定なのですが・・・悪神でありながら倒された蚩尤。これは倒した人が善の意識を持っていたのでしょうか。善へと属しています。」

「まあ、五代目は正義感が強い人ではあつたらしいな。」

蚩尤は多少不安定ではあるのだが、それでも善というカテゴリーの中に確立している。

「天逆海は、おそらく倒した人がその後すぐにも悪側に属してし

まったのでしよう。ですが、まだ安定して魔王となっているのでいいでしょう。」

その辺りについては多少違う部分があるのだが、一輝はそれをわざわざ訂正することはしない。

「ですが、残りの一つはどっちつかずとなっている。それも、その一つだけは借り物ではない、純粹にあなたのものでしよう。そんな不安定な、いつ魔王となつて脅威とかすかも分からない人を置いて戦えるほど、甘い相手ではありません。」

そしてラプ子は、その一言を下す。

「貴方はそれを・・・不安定な貴方自身の主権者権限を安定させない限り、戦いへの参加を禁じます。」

「ん、分かった。」

が、それに対する一輝の返答はその程度のものであった。

さらには、雰囲気が生き生きとしている。

「・・・貴方、」

「ああ、勘違いしないでくれよ？俺はアジッダカーハと戦えないのは心底残念だ。絶対悪の人類最終試練。それほどの相手なら相手に不足はないし、今の居場所であるノーネームを守りたい。」

けど、それでも。

彼には、それより優先してなさねばならないことがある。

「今回、戦略を考えて全体の指揮権を握ってるラプ子から戦力外通達をされた。だったら、俺がここを離れても文句を言うやつはいないだろう。」

「・・・私は、どこか部屋にこもるか何かして自身を確立しろ、と言っているのですが？」

「断る。この主権者権限は、俺の一族が長い年月をかけて功績を積み重ね、信仰を受けて手に入れたもの。そんな軽々しく扱うつもりはない。」

そう言うってから一輝は背を向け、出口を向かう。

「これの善悪を決めるなら、それは戦いの中にしかない。戦いの中で、俺自身が答えを出す。そうでなければ意味がない。これが、第六十三

代鬼道としての決定だ。」

「意思を変えるつもりは？」

「ないね。そういうわけで、俺は音央を助けに行く。」

部屋を出る直前、そういえば、と一輝は声をかけた。

「何ですか？」

「当然ながら、鳴央とスレイブ、それにヤシロちゃんは連れていくから。」

「そ、それは・・・！」

「文句は言わせねえぞ。あの三人は俺に隷属したりしてる身だからな。俺を戦力外にする以上、あの三人も同じ扱いになる。」

ラプ子はそれに反論することができず、奥歯を噛みしめる。

スレイブは一輝以外に使われる気がないので大きな問題にはならない。鳴央の神隠しの力は強大だが、どうしても必要というわけではない。

しかし、ヤシロは別だ。本人が明るいこともあって忘れがちな人もいるかもしれないが、ヤシロという存在は『アンゴルモア・プロフィットノストラダムスの大予言』。神話とはまた違った形で誕生し、確立した終末論そのものだ。

それが持つ霊格は弱体化した状態でもとても強大な力を持っているし、神格を与えればアジィダカーハにも対抗しうる一手だ。是が非でも参加させたいだろう。

だが、ヤシロがどこに参戦するかを決める権利を持っているのはラプ子でもヤシロ本人でもなく、一輝。その一輝が音央の救出に連れて行くと言えば、その決定を変えさせる権利は誰も有していない。さらには、ラプ子はすでに参戦禁止令を出してしまった。

かといって、一輝を参戦させるのは危険極まりない。そうである以上は・・・一輝の決定を覆す手段がない。

「ま、相手が魔王なら俺がどっちを選ぶのか決めるにはいい相手だし、終わったらこっちに来て五人で参戦するから。」

「貴方は、それでいいと思ってるのですか？」

「ああ。今、俺の中で最優先なのは音央の救出だ。」

「それが貴方の決定ですか。」

「俺は外道だ。大切な人を一人救うために他を切り捨てるくらい、何とも思わねえよ。」

最後にそう言い残して、一輝は部屋を去った。

|| || || || || || || ||

「と、言うわけでまずは鬼道の一族について知ろうかな、って思ったわけだ。」

「だったら、一族の役目を知るのが一番手っ取り早いし、ついでに私たちのあの記憶についても知れて一石二鳥という結論になったんです。」

「なるほどのう。どうするのじゃ、示道?」

「話すしかないだろう。それに、俺が仕込んだものについても説明しておきたいし。」

そう言いながら虚空より示道が現れ、身振りについてくるように言う。

「封印の間で全部説明する。さ、ついてこい。」

鍵の継承

一輝が主催したゲーム、『神明裁判』。その効果範囲を少し外れた場所に、一つの神殿が建てられていた。

その周りには様々な微精霊が漂っており、神聖な雰囲気をも漂わせる。古くから存在し、人々から信仰を与えられてきたと言われれば誰も信じてしまうであろう。

だが、この神殿はもともと存在していたものではない。

つい半日前までは、ここは何もないただの草原であった。たった半日の間に、この神殿は出来上がったのだ。

神殿の周りにいるのはその神聖に引かれてきた微精霊だけではない。疲れきつてぐったりとしている精霊がいた。おそらく、彼らがこの神殿を組み立てたのであろう。

ではなぜ、立った半日しかたっていない建物にそれだけの神聖が存在するのか。その秘密は、この神殿の主の存在にある。

彼は、大量の生物を捕らえて神殿に帰ってきた。

捕まっているのは亜人種等の箱庭の住人。彼らは当然逃げようとするが、逃げられはしない。

ここの主である彼は生粋の神霊。並みの相手では太刀打ちできるはずもないのだ。それゆえ、彼は暴れているのを気にもしないで全員を連れて神殿を進んでいく。

「おかえりなさいませ、オベイロン様。贄を集める程度の事、このわたくしめに任せていただければよろしいのですのに。」

「これは私の仕事だよ、パック。我が花嫁を元に戻すための贄を集めるのだ。私がやらなくて誰がやる。」

そう言いながらその神霊・・・オベイロンは、パックにも持ってきた贄の一部を持たせて、神殿の奥へと進んでいく。

そうして進んでいくと・・・茨に囲まれた、より一層神秘的な空間があった。そして、そこには人が一人、茨の中心に存在した。

彼女は両手を天井から伸びている鎖に捕らわれ、脚も床から伸びている鎖で拘束されている。

「さあ、どうだねタイターニア？」

「誰が・・・タイターニアよ・・・」

彼女・・・音央は苦しそうにそう言っ、オベイロンをにらみつける。

「ああ、まだ記憶は戻っていないのだね。だが、安心してくれたまえタイターニア。君の記憶が戻るまで私は贄を集め続ける！」

「そんなもの、いらないつつてんでしようが・・・！」

さらにきつく睨みつける音央の目を、しかしオベイロンは気にもしないで音央に近づき、繋がれている鎖を手を取った。

その鎖にとらえてきた生贄を一人ずつ触れさせ、その瞬間にその人は鎖に吸い込まれていく。

吸い込まれた人はそのまま音央に流し込まれ、生贄を与えられたことで音央の霊格は挙がっていく。

音央が何を言おうとオベイロンはその作業をやめず、全員を音央の糧としてから満足そうにその場を離れた。

そして、その場には音央だけが残され・・・彼女はただ、涙を流していた。

|| || || || || || || ||

「ここが、封印の間の入口ですか？」

「そう、鬼道の一族が誕生した理由の一つ。・・・アジ||ダカーハと戦う以上、これも渡しておかないとな。」

そう言いながら示道は刀印で何かを描き、ぬらりひよんはそれに妖術をかけてから二人の方にとぼしてくる。

それは二人の右手付近を漂い、湖札の方はそのまま右手に入り込んで同じ物を掌に描いた。

一輝の物は右手の周りを少し回った後、左手に回ってそこに同じ物を描いた。

「ん？右手に何かあるのか？」

「ああ・・・これがあるな。」

一輝はそう言いながら袖をまくり、呪力を流してそこに刻まれている刻印を浮かび上がらせる。

「それは・・・封印か？」

「正解。あんたが生きていた時代はどうだったか知らないけど、最近席組み全員にかけられてるんだよ。」

近代に近づくほどに、席組みに対する民からの信仰は強くなっていく。

そこにはアイドルのような形の物、憧れといった形のもが含まれるが、これもまた信仰の一つ。

さらに、霊獣殺しともなれば英雄のように扱われ、死後は神としてまつられていく。

それゆえに、大きくなりすぎる霊格を普段は封印されているのだ。

「それは、つまり・・・全力を出せないのか？」

「そうでもない。席組みの上から三人には、全員の封印を解ける呪印鍵が与えられてるからな。」

一回も自分の解いたことないけど、と言いながら一輝はそれを消し、袖も戻す。

「え・・・じゃあ、私と戦った時もそんな枷を付けた状態で？」

「そうなるな。これ、俺みたいなのが・・・霊獣殺しが解除すると、溜めこまれてた霊格と呪力が一気に解放されてクレーターができるし。」

まあでも、箱庭なら被害も少ないか。あっても何とかなるだろうし。と危険なことを言いながら一輝は新たに刻まれた刻印に目を落とす。

「で、これはなんだ？」

「ああ、そうだったな。・・・それは資格を、力を持つ鬼道に与えられる封印の間の鍵だ。」

「ふくん。」

一輝は生返事をしながら扉に手を向け、鍵を開く。

「簡単に開くんだな。これはここにいないと使えないのか？」

「いや、外からでも使える。むしろ、歴代鬼道が戦闘中に使い、力を与

えるためのものだしな。」

歴代鬼道。それは、鬼道家の当主となった物、という意味だ。

さらには、一輝を含めて六十三人いる中でも、実力が十二分にあると認められたものだけに与えられる鍵。

与えられた者は、神殺しや霊獣殺し。そう言った大業を成したものであったりそれ以上の存在を殺し、封印したものだ。そうでなくとも、強者であれば与えられる。故に……

「あの……それって、私ももらってよかったですか？」

「まあ、前例はないが問題ないだろう。おぬしは神を単独で殺したのじゃから。」

湖札にも、例外的に与えられた。

そして、一輝が開いた扉の奥に向けて四人は進んでいき……それを、視た。

九体の封印。それは前回一輝が来た時と同じであるように見えたが、一つだけ違うものがあった。

「これ……この前来た時はもつと存在が希薄じゃなかったか？」

「ま、そうだったけど今回はもう半分も……一時的に同化してるしな。」

「……湖札がここにるのが理由か。」

一輝は納得した様子で頷き、もう一度それらの封印を眺める。

「相も変わらず、ものすごい格の違いを感じるな。こんなの相手には絶対にしたくねえ。」

「が、それをしないと強くなれない。さっき渡したのには、こいつらの封印を解くカギも組み込まれてる。」

「マジかよ……」

「と言っても、外に出すかどうかは自分たち次第だ。どうやって力を借りるのか、それは自分たちのやり方でやってくれ。」

「一輝のには全ての者の鍵を、湖札の者には半分ずつで封印されている物の鍵を、それぞれ組み込んでおいた。うまいことやるんじゃない。」

その瞬間、一輝はうへえ、と面倒そうな顔になった。

一体でも間違いないキツイのに……と考えているのだ。

「あ、でも。こいつら倒した本人にはやけに従順だから頑張るのは一

輝だけだな。」

一輝はその言葉に安心しつつ、同時に苦勞するのは自分だけか、と内心愚痴っていた。

「・・・はあ、まあいいや。最悪、もう一回倒せばいい。」

「それが一番手っ取り早いであろうな。」

「なら、もうそれでいいや。早いところ、一族の役目について話してくれ。」

そう言いながら、一輝は一番近くに有った像に手を触れた。

「戻ってきた記憶の中にあつたあれ。あれを倒すのが一族の役目だというのなら、あれはいつたい何者・・・いや、あれは一体何なんだ？」
そう言つて、一輝は当時のことを思い出した。

|| || || || || || || ||

鬼道の一族と分家は年に一度、各家の当主が本家に集まるしきたりがある。

と言つても、これはどこの一族にも存在するしきたりだ。

これは今から十年前。一輝が六歳、湖札が五歳の時に行われたしきたり。その日に起こった史実である。

兄妹の出会い

鬼道本家のある山、そこに様々な分家が集まっていた。

本家に集まってきた人間は、大抵が三人一組。その家の当主とその妻ないし夫。そして長男または長女だ。

将来自分の後を継ぐ可能性が最も高い子を連れてきて、その場の空気になじませることで、お互いの顔見せが目的となっている。

親同士は自分の子がどれだけのことができるようになったかを自慢しあい、子供たちは一か所に集められる。

そして、お互いの実力を示すために手合わせをするのが恒例行事だった。

この時、自信満々なもの同士がぶつかりどちらかのプライドが傷つくこともあれば、弱々しそうなのに負けてプライドが砕けることもある。それもまた、恒例行事だった。

・・・そう、だった。

そんな恒例行事は、今年に限って行われていない。子供たちがいなかったわけではなく、むしろ自信満々な、こういった力試しが大好きな連中が集まっていたし、歳も中学生以上のまさに成長が著しい時期だ。

だからこそ、昨年のリベンジに燃えるものも多くいたし、負けるもんかというものもまた多くいたのだが・・・そのどちらにも属していないものが一人だけいた。

この行事に参加するのは小学生になってから。だからこそ、今年から参加するという人がいてもおかしくはなく、むしろその年の一番の行事と言ってもいいのが、その人物の参加だった。

この手合わせに対しては無礼講。本家の跡取りであろうと本気で叩きのめしても何もお咎めがない。そんなイベントに今年から本家の跡取り息子が参加するといわれれば、それは一番のイベントとなつて当然だろう。

そして予定通り、本家の跡取り息子はそれに参加して・・・

「ねえねえ、もうこれでおしまいなの？」

あどけない笑顔で、全員が倒れている中央に立っていた。何が起こったのか、それは誰の目から見ても明らかだ。

初めて参加した本家の息子が、たった一人で全員を倒して見せた。ただの一撃も喰らわず、逃げることもしないで。それはその場にいたすべての分家の大人を驚愕させた。

「ねえ、父ちゃん。聞いてたのと違うよ？全然つまんない。」

頬を膨らませながらそう言っている姿はとても子供らしく、見る者を和ませそうであったが、いかんせん状況が状況である。

「そう言うなら、少しは手加減をだな・・・」

「だって、あの人たちが自信満々に『本気でやってきていい』っていうんだもん・・・」

まさか彼らも、六歳の子供の実力が自分たちよりも上だとは思わなかったのだろう。この時点で、彼はもう基礎的な陰陽術をマスターし、一族が作ったオリジナルの術も一部、さらには自分でオリジナルの術を編み出し、それだけでは止まらず鬼道流の体術までマスターしているとは、誰が思ったであろうか。

「せめて、体術とオリジナルの術式をなしにしたら楽しめたんじゃないか？」

「そのつもりだったよ、最初は。でも、あの人たちが・・・」

彼は相手の自信満々の様子から、自分が本気でやってもいいんだと、とてもうれしく思っていた。

もはや門下では相手にもならず、父とお互いに本気で（と言っても、奥義はなし）戦うことでしか本気を出して楽しむことができなかった。一度として勝てたことはないのだが、それでしか本気での手合わせが楽しくはならない。

彼が希望を持ってしまったことは、仕方のないことだろう。

「はあ・・・まあ、紹介するには一番の形ではあるな。」

そう言いながら彼・・・星夜は一輝に目線を送り、名乗るように促す。

「あ、うん。えっと・・・現当主、第六十二代鬼道、鬼道星夜の息子で次期当主になります。名の意味は『一族が歩みし道に、一時の輝きを

与えるもの。』」

そこまでいってから顔をあげ、満面の笑みを浮かべて自分が今倒した分家の次期当主やその保護者である現当主に向けて、

「鬼道一輝です。まだまだ未熟者で奥義を習得できてはいませんが、どうぞよろしくお願いします！」

そう言い、ペコリと頭を下げた。

これが、十年と少し後に箱庭に招待される問題児、寺西一輝が初めて分家の前で実力を見せた日。そして、六歳にしてここまでの実力を持つていた一輝は分家の人間から歴代最教になるのではないかという期待を・・・信仰を、この日から鬼道一族が減じるその日まで受けることになった。

|| || || || || || || ||

一輝が自己紹介を終えた後、早め早めに手をつけておこうという分家の汚い大人や今のうちに自分のところの娘を婚約者につけておこうという大人などの対応にうんざりしていたら、一輝は星夜から声をかけられた。

「一輝、ちよつといいいか？」

「何、父ちゃん？」

これ幸いと言わんばかりに一気に明るい表情になり、人をかき分けて父のところに向かう一輝。

「一輝、ちよつと頼みごとをしてもいいか？」

「何何？」

「・・・やけに素直に聞くんだな。」

まあ、仕方ないか、と星夜は苦笑してからその要件を言い渡した。

「どうにも、時間になっても分家の一つが来なくてな。家は出たらしいから、もうそろそろのはずなんだが・・・」

「うんうん、それで？」

「もしかしたら山の中で何かあったかもしれんから、ちよつと見てきてくれないか？あの家は、そこまで実力のある家ではないからな。」

一輝は星夜の言いたいことを理解し、

「うん、分かった！」

「なら、頼んだぞ。ついでに、野良の妖怪がいたら退治してきてくれ。」

「それについては、やらないと逆にやられちゃうから言われなくても
そうするよ。」

「それもそうか。．．探す分家の名前は『贄殿』だ。当主とその奥さん、
それにお前の一つ下の娘さんと来てるらしいから、頼んだぞ。」

一輝は元気良く返事をしてから一度部屋に戻り、手合わせて消費した
分のお札の補充、念のための治癒札と子供の筋力でも扱える小刀を
装備してから、山の中の散策へ向かった。

＝＝＝＝＝＝

「うう．．．パパあ．．．ママあ．．．」

その少女は、一人で山の中をさまよっていた。

泣きながらそう言っているの、おそらく両親とはぐれたのだら
う。

道なき道を進んでいるので、手足には木の枝が引っ掛かってできた
傷がたくさんある。

「うう、どっお．．．怖いよお．．．」

泣きじやくりながらも、必死に足を進めていく。

すると、彼女が向かう先で枝を踏み折る音が聞こえてきた。

「．．．．．」

彼女には当然ながら、その音の正体は分からない。

誰が枝を踏み折ったのか、それは自分の両親かもしれないし、それ
以外の誰かという可能性もある。当然ながら、どちらでもない可能性
だってある。

だから、少女はどうするか少し悩んでから．．．勇敢にも、その音
が聞こえてきた方へと向かうことにした。

両親だったなら、そのまま合流すればいい。そうでなくとも、人に
会えれば何とかしてくれるかもしれない。そんな考えに至ったから

こそその行動だったのだが・・・結果からみれば、それは間違っていたのだろう。

彼女が音のした方へと歩いていくと、その先にあつた青々とした枝を大きな手が折って・・・鬼が出てきた。

「ひっ・・・お、鬼・・・！」

少女はそれを見てさらに涙を流しながら尻餅をつき、後ずさるが鬼は情けなどかけてはくれない。

少女を食べようと手を伸ばしていき、少女は少しでも逃げようと後ずさる。

ひ弱な少女、屈強な鬼。その二人がこのような形になればどちらに軍配が上がるかは考えるまでもないことだろう。

背が樹にあたり、もう逃げられなくなつた少女。鬼の手は容赦なくそこに向かつて・・・少女を掴む前に、とめた。

「人じゃなくて鬼かあ・・・でもたしか、父ちゃんは妖怪も退治するよと言つてたよね。」

止める原因を・・・鬼に向けて呪札を投げつけた少年はそんなことを言いながら新たに呪札を取り出して、鬼と対峙する。

そして、鬼はそんな少年に向けてどこからか取り出した棍棒を振り上げ・・・

「棍棒は金属でできてる・・・うん、予想通りだ。今回ののは、金気の鬼。」
そんなことを言っている少年が張つた結界に、棍棒は受け止められた。

「ごめんね、鬼さん。これも仕事だから。・・・五行の理を持って、我は相剋する。火気は金気を鎮ずる。これ即ち五行相剋！」

あつさりと棍棒を止められたことに驚きの表情を見せた鬼は、その瞬間に投げられた火行符の発する火気に包まれる。

少年の言う通り、今回の鬼は金気からなる鬼。五行に沿つて火気に包まれば、その存在は一気に消滅へと向かう。

事実その鬼も火気に包まれて消滅し、魂は少年の体に封印された。

「よし、これでおしまい、っと・・・」

そこでようやく、彼は少女に気付いた。

たくさん怪我をしているのを見て、すぐに近づいていく。

「大丈夫か？俺は鬼道一輝だ！困ってるなら助けるぞ！」

そう言いながら少年、一輝は少女に手を伸ばして、笑顔を見せる。

差しのべられた手を困惑した表情で見っていた少女は、自分を助けてくれた人であるという事実をようやく理解し、

「私・・・贄殿、湖札、です・・・」

そう言っつて、その手をとった。

後に兄妹となる二人の出会いには、このようにしてなされた。

これは、違う

一輝と湖札が合流し、事情を聞いたことで二人は本家に戻るのではなく湖札の両親を探し回る事にした。

一輝自身、頼まれたのは贄殿家の三人を連れてくることなので、それに従った形である。

「いねーねー、お前の父ちゃんと母ちゃん。」

「はい……」

「どの辺で別れたのか、覚えてないのか？」

「ご、ごめんなさい……何も考えずに、動き回っていたので……」

んじや、仕方ねーな、と言いながら、一輝は一枚の式符を取り出す。

「それは……？」

「式符。……式符展開、呪力供給……完了。回路最細接続。攻撃性

式符展開、急急如律令！」

全ての手順を踏んで式符を展開し、山の搜索を命じる。

「ふう……これでたぶん、二人で探すよりも手際が良くなると思うぞ。」

「……えっと、次期当主さんは、もう陰陽術がそこまで使えるんですか……？」

一輝は湖札が自分に対して質問しているのだと一瞬気付かず、次期当主……？と首を傾げてからようやく自分のことだと思いだした。

「うん、使えるけど……」

「凄いん、ですね……私はまだ、五行符くらいしか使えないので……」

余談だが、こういったことの会得順序としては、

呪力の流れを感じる

物に対してながしこめる

呪札に流し込み、起動させる

普遍型式符の起動

五行符への応用

と続き、そこからは本人の得手不得手にしたがって変わっていく。

なので、湖札のように出来るようになる事の順序が違うのはとても稀であり、才能のあることを示しているのだが……五歳、六歳の子

供がそんなことを知っている道理もない。

「へえ、そうなんだ・・・それと、ひとついい？」

「な、何か私ダメでしたか・・・？」

湖札は本家の跡取り息子に対して何か無礼を働いてしまったのかと、びくびくし始めて・・・一輝はそんなことに気づきもせず、ただそれを伝えた。

「次期当主、って呼び方は、こう・・・」

一輝はそう呼ばれた時の感情を伝えようとしたのだが、それを表す言葉が見つからなくてそこで止まってしまった。

いやでもないし、でもなんとなく・・・と、どう伝えようと考えていたのだが、結局適切な言葉が見つからなくて、

「うん、たぶん俺反応できないから、普通に呼んでくれない？」

「普通に、ですか・・・？」

「そう、普通に。一輝って名前で呼んでくれればいいし、呼びづらいなら・・・幼馴染の子が呼んでるんだけど、カズとかでもいいから。」

「で、でも、私の方が年下で、次期当主さんの方がお兄さんなんですし・・・」

そう返されて、じゃあ何かないかな・・・と考えてから、一つ思い浮かんだ。

「じゃあ、俺がお兄さんなんだから、それでいよ。」

「え・・・？」

「お兄さんでも、お兄ちゃんでも、兄ちゃんでも、そんな感じで。それなら名前じゃないし。」

そこに一切理屈が存在していないのだが、幼い子供であるのだし仕方ないだろう。

というよりも、一輝としては今の呼び方さえ変われば何でもよかったのだ。

「え、えっと・・・じゃあ、お兄さん・・・？」

「うん、それで。妹っていないから、なんだか新鮮だな！」

どことなくうれしそうな一輝はそう言いながら湖札の手をとり、どんどん道なき道を進んでいく。

途中で何度も妖怪と遭遇したが、それは全て陰陽術で退治し、自分の中にその魂を封印していく。

さすがに、今回の集まりのために前もって山の中にいる妖怪は退治されているので、二人が妖怪に遭遇する回数は少なめであるし、大妖怪のたぐいは出てきていない。

星夜も、一輝なら余裕を持って退治できるという事が半ば確信できていたからこそこの仕事を任せただ。

この日に山の中で遭遇する妖怪は、せいぜい前日に探した際死に場所すら特定できなかったような妖怪。大した問題にはならないだろう、と。

他の所から来たとしても、運が悪くて大妖怪。さすがにそれだけの存在が山に入れば結界が探知するし、一輝なら自分たちが駆け付けるまでは耐えるだろう、と。

当然ながら、霊獣や神が現れる可能性は、星夜の頭の中にはない。そんなものと遭遇する可能性はぐくぐくわずか。油断と言ってしまえばそこまでだが、そんなことは考えもしていない。

と、星夜はここまでは考えた。神が降臨するなどという突拍子もない可能性をほんの一瞬だけ考えて、それで思考を停止してしまった。だからこそだろう・・・結界の設定も、神までしか反応しない。

「ん・・・？何か光ってる・・・？」

一輝は怪しく光る青色の光を発見し、それが何なのかと思って湖札の手を引きながらそこに近づいた。

まだちゃんと警戒心があったのか片手に五行符を一種類一枚ずつ持ち、いつでも攻撃に移れるようにしてからではあるものの、彼はこう考えながら近づいていた。

『やっと思つた・・・』と。

あの青い光は何か自分が知らない術なのではないか。それを使っているのは湖札の両親なのではないか。

そう考えていたがゆえに五行符こそ手に持っているものの、足取りは軽い。

あと一メートル。その先にある枝をこえればその光のもとにたど

り着くというところで、青い光の位置が変わった。

ゆつくりと上に伸びていくのを見て、一輝はようやくそれが怪しいということに気づいた。

途中まで・・・大人の身長くらいまでは何の反応もしなかった。

だが、足を止めた時点でそれは二メートルを超え、呆然としているうちに三メートル、四メートルと伸びていき・・・一瞬強く光ると、二メートルくらいに縮まり、密度が増した。

光が縮まった時の衝撃ですでに枝は吹き飛んでおり、二人の姿はそれから丸見えであろう。

「・・・何、あれ・・・」

一輝がついそう洩らしてしまったのも、仕方のないことだろう。

それ・・・青く光る、賢者のようであり書庫のようでもある存在から漂う気配は、イレギュラーにもほどがある。

多い少ないの差こそあるものの、全ての人間に流れている呪力の気配は、感じられない。

妖怪に流れている妖力の流れも、感じられない。

一輝は出会ったことはないのだが、話に聞いていた霊獣の気配や神の気配を感じることも出来ない。

何よりも、直感的に一輝は・・・二人は感じ取った。

これは、違う。

力の契約

「…五^{いっ}の道、今ここに相生する。木生火、火生土、土生金、金生水、水生木。五行互いを相生し、輪廻の輪を形成せよ。五行相生、輪廻。急急如律令！」

一輝は湖札を自らの背に隠し、すぐに攻撃に移った。

すぐに使える道具は、五行符が一枚ずつ。だからこそ、彼はその武器で出来る一番威力の高い攻撃を放つ。

木、火、土、金、水の順に円形に札を並べ、全ての札に対して真横の札と相生させる。これによって無限に相生が繰り返され、その威力は驚異的なものとなる術なのだが・・・それは、二人の目の前の異形によって防がれる。

正確に言えば、目の前の異形にあたり、情報に分解されてとり込まれた。

歯が立たず新たに呪札を掴めるだけ掴み取った一輝は、しかしどれが有効なのかと一瞬悩む。

少なくとも、ただのお札は相性が悪い。上位互換である五行符が効かなかった以上、そう考えるのが妥当だろう。そう判断して・・・腰に手を回し、小刀を逆手に引きぬく。

「・・・愚者、敵対者。」

そして、一輝が小刀を構えた瞬間にそれは一輝に対して光を伸ばした。

その光は一輝のもとに向かいながら槍状に収束していき、

「霞切り！」

一輝はそれを実体のない物と判断して、実体のない物を斬る技、霞切りで対応する。

その判断は正しく、一輝が二度振るった小刀は槍の先端を切り落とし、勢いが収まらなかった槍を二度目で両断したが・・・それは、止まらなかった。

切り落とされた槍はトカゲの尻尾のように動いたと思ったら宙に浮いて、再び一輝へ向かって飛んでくる。

「うそっ・・・!?!」

一輝はそう言いながらも飛んでくる物の片方を小刀で、今度は斬るのではなく打ち落として、もう片方は呪力を纏わせた手で弾こうとするが、触れたところから呪力を情報に書きかえられ、吸い取られる。

それを見た瞬間、恐怖から反射的に小刀でそれを斬り落としてしまい、合計三つになった槍は全て、一輝に突き刺さった。

「痛い・・・」

一輝は痛すぎて声をあげること出来ず、二本刺さった左腕をぶらんとたらしながら、どうにか立ち上がり・・・平たく伸びた光をたたきつけられ、アバラを何本か折られながら樹にぶつかり続け、五本折ったところでその勢いは収まり、六本目に叩きつけられてようやく止まった。

一輝がその衝撃で立ち上がれずにいると、それは一輝に近づいていき、手の様なものを振り上げて・・・そこに突き刺さった黄金の矢によって、手の部分は霧散した。

|| || || || || || ||

湖札は自分を守りながら戦う一輝を見て、震えながら、何もできないふがいなさを感じていた。

力がなく、昔から親の後ろに隠れてきた自分。戦うことが恐くて修業をすることも少なかったつけが回ってきたことを幼いながらも自覚したのだ。

だがそれでも、腰が抜けてしまい、さらには指一本動かすことができな

きない。
それ以前に五行符が効かないのは先ほど一輝が放ったのを取り込まれたのを見て理解している。自分が使うものの何百倍もの威力を持つそれが無効化されたのだ。元々ないに等しかった自信すら失っている。それでもまだ、何かできないかと手段を探しているのはもはや奇跡と言っていないだろう。

そして・・・それだけの強い意志に、神は答えた。

『強い意志・・・圧倒的な敵に対してそこまでの瞳を持つとは、感心です。』

「だ、誰・・・？」

虚空から聞こえてきた声に対して、湖札はそう声を漏らす。

その声に反応したのか何なのか、湖札の周りに強風が吹き荒れ・・・それが収まると、一人の女性が現れた。

いや、正確に言うのなら・・・一柱の女神が現れた。

「貴女は・・・？」

『おや、私の名を知りませんか・・・しかし、ここは異郷の地。さらには貴女は幼子なのですから、仕方のないことなのかもしれませんね。』
湖札がその神のことを知らない様子に、しかしその神は気分を害さなかった。

『なんにしても、私の名を知りたいのであれば自らの手で知って見せなさい。』

「私の、手で・・・？」

『ええ。もしもう一度出会う事があったなら、その時にまた聞きましょう。私の名を当てられたなら、褒美をあげましょう。』

楽しそうに話している女神に対して、湖札はだんだんと心を開いていた。

それもまた女神の持つ力の一つなのだが、湖札がそんなことを知っている道理はない。

『それで、どうしたいのですか？貴女はこの状況に対して、何をなさそうと欲します？』

「何を・・・？」

『ええ、何を。・・・いえ、それよりもまず、貴女は彼のことをどう思っているのか。そこから訪ねさせて頂きましょう。』

その問いかけに対して湖札は何と答えればよいのか分からなかったが・・・しかし、心の中でざわめく何かを感じてはいた。

「どう？・・・？・・・？？」

『なるほど、まだそう言った感情を理解できてはいませんか。ですが、それだけの自覚があれば十分でしょう。』

それだけの自覚。そこに込められているのは、少なくとも彼を失いたくないと考えているという意味だ。

『では、再び問います。貴女はこの状況において、どうしたいのですか？』

「どう・・・。」

『ええ、どう。この場から逃げ出したいのか、今のこれがなかったことになってほしいのか。』

湖札は無意識のうちに、その二つを否定した。

そして、こちらもまた無意識のうちに口を動かして・・・

「・・・お兄さんの、力になりたい。」

そう、伝えた。

その言葉の中にも違和感が存在していたのだが、内容は完全に本人の気持ちだ。

『そうですか。その気持ちに偽りはありませんね？』

「・・・ありま、せん。」

『よろしい。では、一つ契約をしましょう。』

契約。それを市民登録もしていない異形と交わすことは、一部の特例を除いて禁忌とされている。

だからこそ、その言葉に対して湖札は戸惑いを見せたのだが・・・眼前で一輝が三つに分かれた槍に貫かれたのを見て、心はきまった。

「内容、は？」

『そうですね。では、一つ。』

急かす様子の湖札に対して、女神は慌てる様子を見せなかった。

『一つ目は、あれを討伐してください。』

「あれ、を・・・？」

『ええ。あの少年と協力してくださいと言っても構いません。どのような手段であれ、あれを討伐することを約束してくださいできれば。』

「私に、出来るの・・・？」

『ええ。貴女の一族であれば、あれを討伐することが可能。そう言った血を引いているのです。』

女神はそれ以上の説明をせず、次の内容を告げる。

『二つ目は、そうですね・・・何か一つ、絶対にあきらめないものを定めましょうか。』

「・・・!?」

『ふふっ。貴女を見ていて少し悪戯心が生まれてしまいました。あの少年に対して、決してあきらめない。そう誓ってください。』

小さく笑いながらそう伝えられ、湖札は理解できずに頷くと・・・視界の先で一輝が樹を折りながら飛ばされていくのが見えた。

『と、あまり余裕はないのですか。では、今伝えた内容で契約成立、それでよいですね?』

湖札は頷いた。しかし、女神を一切視界に入れないで。

『では、力を与えましょう。私の力の一端。初回ですし、少しサービスもしてあげましょう。』

そんな様子に再び微笑ましそうにしながら、女神は手に黄金の光を集めていき・・・それを、湖札に譲渡する。

「これ、は・・・!?!」

湖札は流れ込んでくる力の質が異質にもほどがあることに気付き、しかしその強大すぎる力が自分を破壊しないことに、心から驚く。

『私が貴女の体に適応するよう、調整してながしこみました。貴女に最も合う形をイメージしつつ、それを具現化して見せなさい。』

「イメージ・・・具現化・・・」

湖札は女神に言われたまま、その力に形をイメージしていき・・・それは、黄金の弓となって湖札の手にあらわれた。

『それが貴女のイメージした、貴女に最も合う形の力。知を持って敵を誅する武具です。』

「知を・・・?」

『ええ、知を。今回は私から与えましたが、以後使う際には自らの手で得るのですね。』

では、契約をなしなさい。そう言い残して、女神は消えた。本体が来たのではなく、何かしらの手段で意識だけを飛ばす、それに近いことを行っていたのだ。

湖札は一瞬、女神について気になったのだが・・・すぐに気持ちを

切り替えて、一輝に近づくと何かに狙いを定めて——初めて扱うはずなのに、その姿は様になっていた。——矢を、放った。

放たれた矢は一直線に一輝に向けて伸ばされた手あたり、その手を霧散させる。

そして、初めて自分に意識を向けたそれに対して、湖札は。

「お兄さん……お兄ちゃんに、手を出さないで！」

そう、いい放った。

その呼び方はこれまでのものと違い、やけにすんなりと受け入れることができた。

力と対価

一輝は樹からずると滑るように地面に倒れた。

自分に相手の注意が向いている間は気を張っていたので樹にもたれかかったままだったのだが、湖札が放った矢によって注意が逸れてからは、一瞬で全身から力が抜けてしまっている。

そんな状態でもそれからは目をそらさず、湖札が黄金の矢を放って戦っているのを見ているのだが、一輝はあまり湖札が有利だと判断できずにいた。

確かに、湖札の矢は当たったところを霧散させている。それでも、その存在が削られているようには感じられなかったのだ。正確に言えば、削られたそばから元に戻っている。

どうして存在そのものを削られているのに戻るのか、一輝には分からない。

それに一つの存在理由があり、その存在理由ゆえに湖札が女神に与えられた力では倒しきれないことなど、一輝に知るすべはないのだ。

だがそれでも、直感的に湖札はいくらやってもとどめを刺せない、と、理解していた。

「……このままじゃ、ダメだ……」

一輝はそう言いながら全身に力を込め、立ち上がろうとするもの、それはかなわずに再び倒れる。

先ほど攻撃された関係で既に一輝の体はボロボロ。諸事情により生きてこそいるものの、普通の人間なら死んでいて当然と云っていい状態なのだ。

「同族の気配を感じてきてみれば……なんじゃ、生まれたてか。」

そして、そんな状況の一輝の横に何かが見えた。

「この世界にも飽いておったところに見つけたから、暇つぶしになるかと思うてきてみれば……あれはダメじゃのう。失敗作の中でも失敗作じゃ。」

それは今湖札が戦っているのと似た存在。しかし、それとは違って経験の様なものを感じ取れる。

「じゃがまあ、面白い物は見つけられた。おんし、名を何と言う?」

一輝の目の前にしやがんだそれは、一輝にそう問いかける。

一輝はそれを見て、生を感じ取った。いくら手を打っても消えることのない、永久の生を。

そして同時に、死を感じ取った。近くにいるだけで命の灯が消えてしまうような、虚無の生を。

さらには・・・その形を、視ることができなかった。正確に言えば形はなかったが、そこにいることだけははつきりと分かった。

「・・・鬼道、一輝。」

一輝はそれに対して、何も考えずにそう答えた。

少しでも言い淀んでしまえば生を吸い取られ、灯を消されてしまうように感じて。

「一輝、か。よき名じゃ。そして、強い魂を感じる。おんしの成長を見るというのも、老いぼれが過こすにはよきスパイスとなるやもしれん。』

そういうと、それは一輝に向けて手を差し伸べた。

「一輝よ。おんし、力が欲しくはないか?」

「力・・・?」

「うむ、力だ。幸いにもおんしはあの血を引く者のようじゃし、都合も良い。』

そこで一度言葉を切り、内容を告げる。

「全ての敵を打倒しうる圧倒的な力。極めれば世界の理すらも打倒できる力が、欲しくはないかのう?」

「・・・それがあれば、あれを倒すことも出来る?」

一輝はそう言いながら、湖札が戦っている物を指差す。

「出来るであろうな。あれは生まれたばかり、それも失敗作じゃ。それを屠たやることなど、容易たやすいであろう。・・・ただし、奥義は習得できなくなるやもしれん。』

「奥義が・・・?」

「うむ。この力は、ありとあらゆる障害を打ち破る力となろう。さすれば、奥義も必要なくなるものだ。』

「必要ない物は、会得できまい？それはそう言って、選択を迫る。」

「・・・それでも、その力がないとあれは倒せないんだよね？」

「今の一輝の力では、まず間違いないで倒せぬ。あの小娘と力を合わせたところで、その事実が変わらんであろう。』

「それでも、その力があれば倒せるの？」

「何度も言っておるであろう。あの程度、倒せぬ道理はない。』

その言葉で、一輝の心は決した。

「なら、いいよ。その力を俺にちょうだい。」

「よいのだな？」

「うん。そんなことで二人とも生き残れるなら、それでいい。」

「ほう・・・当然ながら、対価もいただく。生命力を使うごとに徴収させてもらおうかのう。何、しっかりと睡眠をとれば戻る程度じゃ。』

「別にいいよ。それくらいなら、くれてやる。」

最後の確認は、

「これは契約じゃ。ワシがおんしに封印されて力を与える代わりに、使うたびに対価を徴収する力を授ける。これはおんしら人間から見ても、一族から見ても悪となる所業じゃぞ。』

「・・・別にいいよ。守りたい者も守れないなら、俺は悪でいい。・・・

俺は、外道だ。」

一輝の心は、ここで決まった。

正しき道をたどっては大切な人も守れないなら、自分は悪でいい。

悪ですらなせぬことがあるのなら、自分は外道でいい。

「よき覚悟だ！より一層、楽しみになったぞ！」

そう言いながらそれは一輝に触れ、自ら一輝の檻の入口を開いて封印される。

そしてその瞬間、一輝の中に新たな力が生まれた。

そして、一輝はその使い方を本能的に理解して・・・空気を操り、湖札が戦っているそれに対して、ぶつける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それはその攻撃を喰らって一輝の存在を思い出したのか、一輝の方を視て・・・驚いた、ように見えた。

まず間違いない立ち上がることも出来なかったはずの一輝は、樹に手をつけて立ちあがり・・・そのまま、二本の脚で自立した。

外から見ても分からないが、折れていたアバラの全ては限定的に増加した万有引力によってつながれ、脚の骨も同じ方法によってつながったので、自力で立っている。

さらに言えば、叩きのめされていたことによって弱っていた魂すら、魂そのものを操り修復されている。

死寸前であったその生命が完全に復活しているのだ。驚かない方が、無理である。湖札も同様に驚きを示していたのだが、それどころではないと気丈に弓を構えた。

そして、湖札は注意が逸れた隙に矢を放ち、何かをしようとしていたのを霧散させて・・・次の瞬間、一輝がそこをさらに抉った。

湖札のように何かを使ったのではなく、怪しい翠に輝く光を纏った手で殴っただけ。その攻撃は確かにその存在を削って・・・そこが治ることは、なかった。

一輝はそこで光に叩かれ、距離を取らされたが重力を強化することで飛距離は伸びず、過ぎに地面に足がついた。

一輝はそこで手を横に伸ばして・・・手の中に、翠に輝く禍々しい大鎌が現れる。

「.....!?!」

大鎌を見てそれは驚きの・・・いや、恐怖の気配を漂わせたが、一輝はそれを気にせず近づくと。

そして、それは恐怖から本能的に逃げようとしたが・・・一輝が逃がすことはなく、大鎌をふるう。

大鎌はそれを傷つけはしなかったが、その代わりに魂に直接攻撃をした。

さらに一輝は、大鎌で追撃をする。一度切られて飛ぶことも出来ず、地に落ちたところを・・・上から叩きつけるように、大鎌で斬った。

その攻撃でそれはようやく息絶えて・・・魂を両断され、一輝と湖札の中に封印された。

|| || || || || || || ||

一輝と湖札の二人がそれを倒してから数分後、青い光を見て異変に気付いた星夜が慌てて駆け付けると、一輝と湖札の二人が倒れているのを発見した。

そして、二人を見て星夜はすぐに気付いた。二人が一族の役目をなしてしまったことに。

一輝が成してしまったのは、まだ何とかなる。本家の息子なのだから、自分の監視下に置いておくことができる。だが、湖札は違う。どうしようかと悩んでいるところに・・・彼に式神から、贄殿家の二人の死体を発見したという知らせを聞いた。

そして、二人をどうするのか。それが決定した。

|| || || || || || || ||

「うくん・・・」

一輝は目を覚まし、布団から何のぎこちなさもなく立ち上がった。

そして上を向いて天井を見て、腰を回して周りを見てから状況を把握した。

「そっか・・・俺、集まりの最中に寝ちやっただ。」

思い出してみると、最後の部分の記憶は集まりでの食事が終わったところだ。お腹がいっぱいになって眠くなったのだろう、と理解した。

そう判断すると立ちあがって、一つ背伸びをしてから部屋を出ようとして・・・襖を開けたら、そこにいた少女とぶつかった。

一つ下くらいの少女。はて、この子は誰だったか・・・と、その子が上を向いて顔を見ると、すぐに分かった。

「あ・・・お兄ちゃん、起きたんだ？集まり、もうそろそろ初代様へのあいさつをやるから起こして来いって。」

うん、そうだ。妹だ。五年前に妹になって、自分は兄になった。

何でわからなかったのだろう、と一輝は心の中で首を傾げたが、
「ああ。おはよう、湖札。」

いつも通りに。

記憶の中で自分が呼んでいるのと同じ呼び方をした。

これが、二人の出会いであり、兄妹となった経緯。

一族の集まりの次の日、二人は登録上正式な兄妹に、事実としては
義兄妹となった。

ありもしない過去の記憶を、星夜が植え付けて。

なかったはずの力は、元から持っていたという記憶を持たせて。

幼き身には強大すぎる力には、封印をかけられて。

そうして・・・二人は、兄妹となった。

王と女王 ①

一輝は閉じていた目を開き、同じように目を開いた湖札を確認してから示道とぬらりひよんを見る。

「あの記憶、あれから俺達のこのギフトが何なのかも分かった。でも、分からないことしかないぞ。」

「まあ、そうだろうな。ってか、あれで理解されたら驚きにもほどがある。」

そう言いながら肩をすくめ、示道は一族の役目を話した。

そして・・・それを聞いた二人は、目を見開いて驚きを示した。

湖札は、もはや声すら出せなくなっている。

「・・・確認しとくぞ。それはマジか?」

「ああ、マジだ。今話したのが鬼道という一族とあれ・・・俺は『歪み』と呼んでいる物を最も正確にあらわしたものだ、俺は思う。」

そう、あらわした。

いわばこれ、という言い方でしか表現できないものが、鬼道の一族と『歪み』なのだ。

「ま、この表現についてはワシも示道と同意見じゃ。これ以上の表現方法は、存在せんじやろう。」

「・・・なら、それでいい。じゃあ次に・・・何で示道は、そんな重荷を背負うことにしたんだ?何で・・・そんな重荷を、後の一族に背負わせることにした。」

「アジィダカーハを倒すため、ノーネームのためだ。」

一輝の問いかけに対して、示道はそう即答した。

「アジィダカーハを?」

「ああ。あれを倒すために必要な要素、その答えは原典候補者であると言われたが・・・俺は、別の手段でそれをなすことにした。」

「そのために、その重荷が必要だったんだな?」

「ああ。前提条件として、それが必要だった。・・・俺がぬらりひよんと契約し、作り出し、封印して集めた要素。それを、今教えておく。・・・どうか、あれを倒してくれ。」

そして、示道はその術を・・・民から外道と呼ばれ、悪と罵られてでも集めたその手段を、二人の子孫に告げた。

＝＝＝＝＝＝

現在、一輝と鳴央、スレイブ、ヤシロの四人は一輝の放った式神が発見した神殿へと向かっていた。湖札は一輝の檻の中にいるので、実質五人である。

「さて、普段なら主権者権限を使わせる前に潰しにかかるんだけど・・・相手がオベイロンともなると、音央がゲームに組み込まれている可能性が十分に高い。」

「あの・・・一体いつ、相手の正体を知ったんですか？」

「ラプ子が出発前にすんごく悔しそうにしながら教えてくれた。」

ラプ子からしてみれば、一輝は自身を確立してさえくれば十分に戦力となる。生還のためにも、情報を渡す選択をしたのだ。

『それで兄さん、私はどうしたらいいの？』

「とりあえず、住み心地は悪いかもだけどそのまま中で待機だ。いざとなれば切り札として使えるし。」

『了解、兄さん。それと、中々住み心地はいい空間だよ？』

どうなっているのかは分からないが、一輝の中の空間は住み心地がいろいろいい。

『ギフトは、基本こっちで？』

「そうなるな。どうにも、無形物を統べるものは制御できそうにない。」

一輝はそう言いながら手の上に水の渦を作り・・・それは一瞬形をなしたものの、すぐにはじけ飛んだ。

「うくん・・・ギフトの制御ができなくなってるね？」

「どうにも、そのようですね。戦闘の最中は使えていませんでしたか、兄様？」

「途中で使うのやめちゃったけどな。・・・まあ、あの時は神成りしてたおかげだと思う。・・・それでも、制御できてたわけじゃないんだ

けど。」

そうあつさりという一輝だが、彼の中にあるのは純粋な恐怖だ。強すぎる力は、時に持つ本人に対して最も恐怖を与える。制御で来ているのならともかく、全然できていないのだから当然のことだろう。

そして、制御できるようになる方法にも心当たりはあるのだが：それをなすのは、さらに危険な賭けだ。今それをするのは、避けたいだろう。

「・・・っと、ついた。これだな。」

そんな話をしている間に、彼らは神殿の前へとたどり着いていた。「され。話を戻すけど、俺はさつき言った理由から主催者権限を使わせるべきだと思うんだけど。」

そう問いかけると、それに反論する声は誰からも上がらない。

よって、一輝は倉庫の中からハンマーを取り出し、

「音央を返せこんちくしょー!」

入口を思いつきり破壊して、神殿に乗り込んだ。

「ん・・・君たち、一体何の用だね?」

「死ね!」

さらに、入ってすぐのところにいる人に向けて、たった今使っていたハンマーを投げつける。

が、ハンマーはその男にあたった瞬間に砕けちった。

「うくん・・・やっぱり効かないか。」

「・・・どういう、つもりかね?」

頬をびくびくさせているのだが、一輝はそんなこと気にもしないで用件を告げた。

「魔王オベイロン。音央を返してもらいに来た。今大人しく返すのなら、殺す程度で済ませてやる。」

「音央?はて、誰の事やら・・・今ここにいるのは私と我が花嫁、パツクくらいだが?」

「なら、そのお前が花嫁だと思い込んでるやつだな。さつきと返せ。」

一輝の発言と同時にオベイロンは立ち上がり、抑えていた霊格を解

放したのだが一輝とヤシロの二人には、何の被害もない。

残りの二人は少し後ずさったのだが、それでもすぐ一步前に出て、元の位置に戻る。

「・・・聞き間違いでなければ、私の花嫁を返せと言ったかね？」

「いや、テメエが花嫁だと思ひ込んでいる俺達の仲間、音央を返せって言ってるんだよこの精神異常の誘拐犯。」

「・・・・・・・・私が、誘拐犯だと？」

「ああ。前にいた世界にもいたよ、女の子をさらって奥さんですって言う変な人。お前がそれ以外のなんだって言うんだ？」

一輝はそう挑発しながらスレイブの手を握り、鞘をかぶせたままの大剣を構える。

「違う。私たちは愛で結ばれている！」

「うっわ、さらにそんな夢でも見ちゃったのか・・・？お互いに初対面だったってのにありえねえだろ。」

「違う！私とタイターニアは元々よき夫婦だった！タイターニアは一度死んでしまったが、こうして再誕生、再開した！まだ記憶は戻っていないが、それでも、」

「うっせえんだよー！」

そして、一輝がキレた。

「死んだ人間が再誕生するだど？ふざけてんじやねえぞ！そんなものは残された者の勝手な希望、妄想にすぎない！そんなものを関係のない音央に押し付けてんじやねえー！」

「希望、妄想・・・私のこの気持が、そんなものだど・・・!!」

そして、一輝にそう言われて・・・それが凶星であったがゆえに、オベイロンの怒りは一度頂点に達した。

頂点に達したら、後は下るだけである。

オベイロンは怒りが頂点に達したことにより、逆に冷静になっていた。

「ハハハ・・・ハハハハハハ！そうか、これが試練なのだな！」

「・・・根本的に狂ってやがるな。壊れてる。」

一輝のつぶやきは、もはやオベイロンに聞こえていない。

「ならばこの試練を乗り越え、貴様たちを贄とすることで彼女の記憶を取り戻そう！それが今、私の超えるべき試練！」
そして、オベイロンは主催者権限を発動した。

『ギフトゲーム名 “王と女王”』

・プレイヤー一覧

・鬼道 一輝

・六実 鳴央

・鬼道 湖札

・ヤシロ・フランソワ一世

・ダインスレイブ

・ホストマスター指定 プレイヤー側ゲームマスター

・鬼道 一輝

・ホストマスター側 勝利条件

・参加者全員を女王の贄とする。

・参加者全員の殺害。

・プレイヤー側 勝利条件

・王の殺害。

・女王の殺害。

・特殊ルール

・王よ、女王のために剣を収めよ。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

『“オベイロン”印』

王と女王 ②

ゲームが始まった瞬間、契約書類に女王と記されていることから音央がいると判断した一輝は、鳴央とヤシロにアイコンタクトを取ってから、単独でオベイロンに向けて走り出した。

そして、オベイロンがどこから取り出した黄金色の剣を構えたのを見て、スレイブを構え・・・二つの剣がぶつかる寸前で上に跳ぶ。

「逃がすかあ！」

そう叫びながらオベイロンは一輝に向けて剣を突き出すも、人型に戻ったスレイブの手刀によって防がれる。

「そいつの足止めは任せたぞ、スレイブ、ヤシロちゃん！」

「了解！」

二人から返事が返ってきたのを確認すると、一輝はDフォンを操作して鳴央を自分の隣に召喚し、二人で神殿の奥に向けて走り出す。

当然、オベイロンは二人を追おうとするのだが・・・その道をスレイブがふさぎ、後ろにはヤシロが立っている。

「悪いが、一輝様の邪魔はさせない。」

「お兄さんと鳴央お姉さんが音央お姉さんを取り戻すまでは、ここにいてもらうよ？」

使い手のいない剣と、閉鎖空間であるためにギフトを使えない元魔王。

そんな圧倒的不利な状況であったが、二人は一輝がすぐに帰ってくることが信じて魔王に立ち向かった。

|||||

「鳴央、無理はするなよ。キツイようならすぐに速度を落とす。」

「大丈夫です。これでもハーフロアですから、体力はあるんですよ。」

そう言っただけのもの、一輝の横を走る鳴央はどう見ても少し無理をしていた。

そして、それを見た一輝は・・・速度を緩めずに、そのままのスピー

ドで奥へと向かう。

もし自分が鳴央と同じ立場だったらこの状況でどうしているか。それを考えてのことだ。

「・・・悪いな。俺が外道・陰陽術を使えば、式神に乗ってもらおう事が出来るんだけど・・・」

「仕方ないですよ。ゲームのルールで縛られているんですから。」

一輝は鳴央も理解していたことに少し感心しながら、ギフトカードを取り出してそこに記されている文字列を視る。

そこに記されている、道具以外のギフトは・・・

“無形物を統べるもの” “×外道・陰陽術” “空間倉庫・1番～10番”

となっている。

「・・・明らかに、この特殊ルールが原因だな。音央を取り戻さない限り、戻らないと見た。」

『王よ、女王のために剣を収めよ』。この王を主催者、参加者双方のゲームマスターの事だと解釈したなら。」

「捕まってる・・・向こう側に音央が捕まっている限り、ルールの対象は俺ってわけだ。」

そう、このゲームにおいて王とは双方のゲームマスターの事を。女王とは音央を。剣とはギフトを・・・正確に言えば、妖精に関わるギフトのことを指す。

だからこそ、一部の外国からしてみれば妖精と同じものになる妖怪にまつわる力、ぬらりひよんとの契約によってえた『外道・陰陽術』が使えなくなったのだ。

「はあ・・・二つとも使えないのは辛いな。妖刀も札も起動しないし。」
「何もギフトの関わっていないもの・・・体術などしか使えませんしね。」

「それだけだと、魔王を倒すのも少し難しくなってくるんだよなあ・・・」

むしろできるのだろうか、と鳴央は思ったのだが口には出さない。
なぜ出さなかったのかと言えば・・・やれてしまえそうだと、一瞬

思ったからである。

「おやおや、オベイロン様が獲物を逃がすとは……何とも珍しいことです。」

と、二人が走っている先から声が聞こえてきて、同時に止まった。

そして、警戒態勢にある二人の前方から……シルクハットをかぶり、モノクルをつけて、杖を持っている猫が現れた。

サイズは普通の猫に比べてかなり大きく2足歩行しているが、二人ほどの大きさではない。

手に持っている杖はくるくると振りまわしているので、ファツション的な何かでしかないだろう。モノクルとどこから取り出して時間を見ている懐中時計からも、それをうかがう事ができる。

だからだろうか。二人の思ったことは、

《《胡散臭い……!》》

と、完全に一致していた。

「さて、そうなるかとたくしめが貴女方を打倒し、贄とせねばならないわけですか。そう考えてみると、仕事があることを喜ぶべきでしょう。」

そう言いながら懐中時計をしまい、またこれもどこから取り出したパイプをふかす猫。

一輝は一瞬、この隙に殺して前に進もうと考えたのだが、日本刀に手をかけた瞬間に鳴央に止められ、日本刀から手を放した。

「さて、そういう事情がありますので、お二人の相手はこのパツクめが務めさせていただきます。何、大人しくしてくださいれば贄とするだけで済みますので。」

「一輝さん、ここは私が相手をします。」

そして、何か言っている猫……パツクを無視して、鳴央が一輝に告げた。

「……俺は、こいつを俺が引き受けて鳴央が音央を助けに行くのがベストだと思っただけだ。」

「いえ、おそらく私では今の音央ちゃんを助けてあげることができません。」

一輝の提案は、すぐに却下された。

「距離が近づいたおかげで、音央ちゃんとのリンクが少し復活しました。．．．今、音央ちゃんはそのころに似た精神状態にあります。」
「そう言いながらも鳴央は戦闘準備を進め、服装も和服へと変化した。」

「あの頃．．．？」

『A CAPTIVE TITANIA』のゲームに捕らわれていたころです。」

それは、音央がゲームに捕らわれて大量の生贄を与えられていたころ。

その頃の音央は．．．自らの死でそれを終わらせることを望んでいた。

「あの頃の音央ちゃんに私が会ってしまったら、私は自分が死ぬことで．．．と考えてしまいます。」

「．．．俺みたいな外道には、説得とか一番向いてないと思うんだけど。」
一輝はそう言いながら頭をガシガシと掻き日本刀を倉庫にしまつて身軽になる。

「そんなことはないですよ。今の音央ちゃんに必要なのは、無茶苦茶な理屈と、それをなせてしまいそうな．．．そんな人ですから。」

「つまり、感情的になって勝手に理屈を押し付ける、俺みたいなやつが最適ってことですね。」

「はい、そう言う事です。私は、一輝さんのそういうところ、好きですよ?。」

「そいつはどうも．．．やる気出てきた。」

二人の表情が覚悟を決めたものになると、バックもまたシルクハットを抑えながら杖を構えた。

「．．．一瞬、あいつの注意を俺から外してくれ。その隙に奥まで走る。」
「分かりました。3秒後に．．．三．．．二．．．一．．．行きます!。」

鳴央が小さく行っていたカウントが終わると同時に一輝は走り出し、鳴央はバックに向けて奈落^{アビスフール}としの球体を放つ。

そして、パックがその球体を危険なものとして判断し、杖の先からあふれ出た闇をもって対処していると……一輝はその隙に、天井を走って進む。

「おや、ギフトの使えない人間にしては面白いことをしますね。ですが、」

「鬼道流体術、圧砲！」

パックは床に降りた一輝に杖を向けるが、純粹に放たれた拳圧を正面からくらって倒れ、一輝はそれを見届けもしないで……後の体力分配も考えて、軽く時速六十キロで走り出す。

「おやおや……あれで本当に、ギフトを封じられているのですかね？」

「ええ、封じられていますよ。そうでなければ……貴方は出会った瞬間に殺されています。」

そう言いながら、鳴央は自分の周りに黒い球体を漂わせる。

「おやおや、それはこわい。わたくしめとしましても、そう何もできずに死んでしまうのでは主に顔向けできませんから。」

「そうですか。では、顔向けできませんね。……私、珍しく心から怒っているんです。」

そう言った瞬間に、鳴央の周りの球体の数は倍にまで増える。

「なので、ちよつと八つ当たりをさせてもらいますね。」

そう言った鳴央の表情は……とても、怖いものだった。

王と女王 ③

鳴央は膨大な数の球体を放ち、パツクはそれを杖から出した闇で対処する。

それは奈落と闇で共通する部分があったのか相殺し、さらにパツクは杖の先から炎を放ったり水を放ったりして鳴央にダメージを与えていく。

「ほら、どうしました？その調子ではわたくしに八つ当たりすることなど夢のまた夢ですよ？」

「くっ……『奈落落とし』！」

鳴央はそんな状況でも球体を作り出して、少しでも攻撃を神隠しに会わせていく。

それでも消しきれない分や球体の範囲を超えている分が鳴央自身に襲いかかるが、それでも鳴央は、膝をつくとすらくすらく消滅の力を操っている。

「はあ、はあ……」

「もう終わりにしませんか？わたくし、女性を痛めつける趣味はないのですが。」

そして、対照的にパツクは無傷である。

このカラクリ、実はパツクはオベイロンから神格を与えられている。そうして精霊の中で最高クラスまで上がった力と身につけているギフト。それをもって、ここまで戦っているのだ。

「……それでも、私があるを倒さないといけないんです！」

そう言いながら鳴央は球体をいくつも同時に放ち、目の前に残した一つに向けて手を突っ込む。

「奈落の門！」

奈落の門。二つの奈落をつなぎ、空間を超える技だ。

鳴央はそれの対象をあえて絞らず、偶然つながった一つから手を突き出して……その手に、天狗の団扇を呼び出す。

「風よー！」

「ふむ、東洋の妖精の力ですか。」

それをこれまでの何倍もの勢いでふるい、自分が近くにいたら巻き込まれたであろうレベルの竜巻を引き起こす。

さらに言えば、今回空間を超えてふるったことで鳴央本人への反動すらなくなっている。反動に耐えることのできない鳴央が編み出した、鳴央だからこそできる方法である。

だがしかし・・・それすらも、パツクの杖から放たれた風によって相殺される。

それを見て・・・ついに、鳴央は膝をついた。

「・・・ご理解いただき、ありがとうございます。せめて苦しまないよう、気を失った状態で贄とさせていただきますので。」

その鳴央の様子を諦めと取ったパツクは、その意思を狩り取るために鳴央に近づく。

そして・・・ある位置を超えたところで鳴央の表情が変わったのを見て、進むことを躊躇ってしまう。

「貴女・・・なぜ、まだそんな表情を、」

『奈落の世界』!!!
アビス・ワールド

そして、行動をやめてしまったパツクの分、鳴央は行動を再開した。

片手を床に叩きつけ・・・そこを中心に、半径二メートルの範囲で球体が形成される。

「これは・・・!?!」

「ここは、奈落の世界・・・この中にある全ての空間が、あなたを奈落へと導く入口です。」

パツクが驚いている前で、鳴央は何もない場所に手について立ち上がる。

今形成されている球体。この中にある全てが鳴央の意思に従って動く、敵を奈落へと落とす入口だ。

そして、鳴央の発言を裏付けするようにパツクの体が吸い込まれ始めた。

「な・・・そんな馬鹿な!?!これほどの消滅の力を、広範囲に展開するなど、」

「普通なら、出来ないでしょうね。でも、今の私には出来ます。……音央ちゃんを助けるためなら、どんな力でも手に入れて見せます。」

それが、鳴央の覚悟。

そして、その意思の力はこうして形をなした。

「……ですが、呑みこまれるよりも早く貴女を倒すことができれば！」

パックはそう言いながら杖を構え、その先端から隠し刀が展開すると消滅していく体を無理やり動かして鳴央に向けて突き出し、

『奈落の門』。

その空間に吸い込まれ、パックの心臓の前の空間から突き出てくる。

そのままその刃はパックの心臓を突き刺した。

「……カフツ。」

「言いませんでしたか？今ここは、全てが奈落へとつながる入口なんです。」

そう、鳴央とパック以外の全てが鳴央が作り出す穴と同じになっているのだ。

だからこそ、鳴央は自分の目の前の空間とパックの目の前の空間をつなぎ、その矛先を変えて見せた。

そのささった刃が致命傷になり、動かなくなったパックはそのまま落ちていき……消滅した。

パックを完全に倒したと確信すると、鳴央は展開していた球体を収めて、壁に手をついてふらつく体を支える。

そしてそのまま、半ば体を引きずるようにして、神殿の奥へと進んでいく。

|| || || || || || || ||

「ここか……数秒でついたな。」

アホみたいな速度で走った結果、大した時間もかからずに一輝は神殿の最奥にたどり着いた。

そして、そのまま進んでいき……両手両足を鎖につながれている

音央を発見した。

「・・・よう、音央。助けに来たぞ。」

「一輝・・・？ああ、それでゲームが・・・」

音央は一輝に声をかけられて顔をあげると、何か納得したようにそう洩らした。

「状況は分かっているみたいだな。んじや、さっさと帰るぞ。」

「・・・無理よ、もう・・・」

一輝がいつも通りに声をかけているのに対して、音央は弱々しく返事をしている。

「無理？」

「ええ。・・・私はまた、たくさんの人の命を、生贄にされた。・・・もう、あんたたちとは、」

「あー・・・そう言うのは帰ってから聞くから、とりあえず帰るぞ。」
が、一輝はそんな音央の様子を完全に無視して話を進めようとする。

「帰るって、どうやって・・・」

「お前をつれて戻って、オベイロンをぶっ飛ばして、だ。それでゲームクリア、全部丸く収まる。」

そう言いながら一輝は鎖に手を伸ばし・・・

「ダメ！その鎖に触らないで！」

音央がここに来て初めて声を張り上げたので、手を止めた。

「・・・その鎖から、生贄を流し込むの。触った瞬間に、その人は生贄になるわ。」

「ああ・・・取り返しに来た時のための処置、だろうな。つたく、面倒な・・・」

本気での苛立ちを頭をガリガリと搔くことで抑え、一輝は音央に問う。

「なあ、何かどうにかする方法知らないか？」

「・・・あるわよ。簡単なのが、一つ。」

「そりゃいい。教えてくれ。」

「私を殺せばいいのよ。」

気軽に聞いた一輝に対して、こちらもまた気軽に、さも当たり前のことであるかのように音央が答えた。

「…このゲーム、勝利条件の中に私の殺害が含まれてるのは、分かってるでしょ？それで、オベイロンは私が死んだらまず間違はなくキレて…攻撃が単調になる。そうなれば、ギフトなんかなくても一輝なら楽勝でしょ？」

そう、それもまた事実であり、正論だ。

今回のゲームにおいて必要となる条件は、王と女王の殺害。さらに、今音央がいった順序で殺していけばまず間違いなく言った通りの結果になる。

だが…そんな正論は、

「ふざけんなよ、お前。」

一輝にしてみれば、正論ではない。

「…ふざけてないわ。いたってまじめよ。」

「なら、自分が死んでいいとでも？」

「ええ。どう考えても、それが一番有効なもの。」

「そうだな。確かに、その方法なら確実にこのゲームをクリアできるだろうよ。女王の殺害がクリア条件に含まれている以上、そうしないとゲームクリアにはならないだろうしな。」

「分かってるじゃない。なら、」

「だがな。」

一輝の声は、これでもかという位低く…怒りが込められていた。

「俺は、そんな選択を認めない。」

「…それなら、どうするのよ？」

そんな一輝の声に対する恐怖が音央の声には存在していたが、音央はそれ以上の感情でそれどころではなかった。

「なら、どうするって言うのよ。他に手段があるの？オベイロンが私の事をあきらめるとは思えない。そして、このゲームも開催されてしまってる。それならもう、私が死ぬのは避けられないじゃない？それ以前に、もう私は弁論の余地もないくらいに生贄を捧げられてるのよ？そんな私に、生きてる資格なんて、」

その瞬間、パン！という乾いた音が・・・一輝が音央の頬をひっぱたいた音が、その場に響き渡った。

一輝は眼を伏せ、手を振りぬいた姿勢で。音央は驚きで目を見開き、一輝を視る姿勢で固まっている。

「な、何を・・・」

「もう一度言うぞ。ふぎけんなよ、お前。」

そして、一輝は音央の胸ぐらをつかみ、顔をぶつけるくらいの勢いでひく。

「ふぎけんなつて、だって、他に手段が、」

「だからどうした!」

そして、一輝がキレた。

「俺がききたいのは、そんなことじゃねえんだよ!お前は どう思ってるんだ!?!」

「どうつて、だから他に手段が・・・」

「方法があるかどうかじゃねえ!!」

そう、そこではない。

そんなことは、問題にすらしていない。

「俺が聞きたいのは、そんなどうでもいい事じゃねえ!正しい正しくないとか、どうでもいいんだよ!俺が聞きたいのは、お前がどう思ってるのかだ!」

「私が、どう・・・?」

「そうだ!出来るかどうかなんて、そんなもんは二の次でいいんだよ!方法がないなら創り出すだけだ!お前が心から望むなら、俺はそれを全力で手伝ってやる!そのための障害があるなら、全て撃ち破ってやる!俺は大切な人を守るために、力を手に入れたんだよ!」

「・・・そんなの、あなたの勝手な都合じゃない!」

「ああそうさ、俺の勝手な都合だよ!でもなあ、お前が本心を言ってるかどうか位は分かる!だから俺は、お前に本心を聞いてるんだ!」

そして、一輝は一度息を吸い、

「お前は どうしたい!?!答えろ、六実音央!!!」

王と女王 ④

私は、もう生きている資格もない。そう、そのはずだ。

一度だけでは済まず、二度目の生贄をささげる儀式を受けている。これが両方とも受動的であることは、この際問題ではないだろう。

生贄をささげられたという事実。それ自体が、一つの罪だ。

いや、一つの罪なんて生ぬるい物ではない。

捧げられた人数の数だけ、罪がある。

手に入れてしまった力の分だけ、罪がある。

生贄というのは、一輝に言わせてみれば最も手軽に霊格をあげる手段らしい。

他の命をささげられるというのは、生贄を捧げるものからの信仰を受けるということ。

生贄をささげようと思うほどの存在というのは、本人にとって神の様なものだから。

他の命をささげられるというのは、生贄としてささげられるものからの信仰を受けるということ。

生贄にされるといのは、純粹に恐怖の塊だから。

こういった要因が重なり合って、手軽にできる霊格をあげる手段なんだろう。

それと、正しくない道というのは、最も短く、簡単な道だ。

つまり、手軽に効果を得ることのできる生贄という手段は、どう考えても正しくはない。自分の中にある常識と照らし合わせても、その事実が揺らぐことはない。

だから、私はもう生きている資格もないのだ。

でも・・・一輝は、こう言った。

『そんなどうでもいいこと』と。

『正しい正しくないはどうでもいい』と。

私は、心からその言葉を否定することができなかった。

だって・・・それが一輝に会ってからあいつが貫いてきた意思だから。そして、外道と呼ばれている一輝そのもののように感じられたか

ら。

一輝が元いた世界で、『外道』と呼ばれる一族だったことは、知っている。

そう呼ばれるという事は、つまり他の人間から見たら悪でしかないことをやっていたということだろう。それも、一族単位で。

そんな一輝だからこそ・・・言葉に、重みがあった。

『私がどうしたいのか』。

一輝はただ単純に、それを聞いている。

こうするのが正しいとか、これはできないとか、そう言ったことを一切考えないで、ただただ純粹にそれを聞いている。

そして・・・一輝は本心を言えば、それを実現してくれそうな気がする。

邪魔するものは正義でも悪でも全て撃ち破って、倫理観を無視して、それを実現してくれる。

それがとても頼もしい。

目を開けばすぐそばにある顔からも、その頼もしさは感じられる。むしろ、本気でぶつかってくれている今だからこそ、いつも以上に。

だから・・・何も考えずに、その言葉は私の口から発せられていた。

「・・・生きたいに、決まってるじゃない。」

そして・・・一度言ってしまうと、もう止まらない。

「生きたいにきまってるじゃない!?本気で死にたい人間なんていないわよ!」

ああ・・・もう、だめだ。

「生きたいわよ!アンタと別れたくない!鳴央と別れたくない!スレイブとも、ヤシロとも、ノーネームのみんなとも、箱庭で仲良くなつた人たちと別れたくないわよ!まだ伝えてない気持ちもあるのに、そんな状態で死ねるわけじゃないじゃない!!」

もう、感情は抑えられない。

「でも、無理なのよ・・・こんな罪、重すぎて背負っていけない・・・」

ああ、一輝はズルイなあ・・・

「私のせいで失われた命が多すぎるのよ・・・」

自分の心には相手を入れない癖に、人の心の中にはあつさりとはいつてくるんだから。

「もう・・・ダメなの・・・」

涙が流れてひどい顔になってるだろうから、私は顔を伏せた。

こんな状況でも、一輝にこの表情を見られたくない。

「・・・なら、一緒に背負ってやる。」

でも、一輝はそんなこと気にしない。

下から私の顔を覗き込んで、そう言ってくれた。

「重すぎるなら、俺がその罪を一緒に背負う。全部は無理でも、半分くらいなら、誰かと一緒に背負っても大丈夫だろ。」

「・・・なんで、そんな・・・」

「それが罪だというなら、そこから勝手に連れだした俺も同罪だ。だから、俺も一緒に背負ってやるよ。だから・・・もう一度、聞かせてくれ。お前は、どうしたいんだ？」

一輝の声は、いつの間にか優しいものに戻った。

普段の声とも違う、優しい声。聞いているだけで安心してしまおう、そんな声。だから、私は・・・

「まだ、生きたい・・・」

そう、本心を告げた。

「・・・分かった。それが、お前の本心なんだな。」

そして、一輝はそう言うのと同時に鎖を掴み・・・引きちぎった。

「・・・どうだ？俺の力、流れてきたか？」

「・・・全然・・・」

「ならオツケーだ。ま、こんな神霊が作った程度の鎖が俺から命を吸いだせるとは思えないけど。」

一輝はさらっととんでもないことを言いつつ足の方の鎖も引きちぎり、倒れそうになった私に、肩を貸してくれる。

「・・・さ、音央はこう言ってるぜ、鳴央。」

「え・・・」

一輝が視る先には、壁に手をついてボロボロになっている鳴央がいた。

「ちよ、鳴央、アンタ・・・」

「・・・ちよつと、苦戦してしまいました。」

そう言いながら倒れそうになった鳴央の元まで走って、半ば転ぶようにしながら鳴央の体を受け止めた。

「鳴央、何をしたらここまで・・・」

「それよりも・・・音央ちゃんは、大丈夫ですか？」

自分の体の事よりも私の事を気にしてくれる鳴央。

そんな姿を見て、私は・・・また、涙を流した。

「どうしたんですか、音央ちゃん？」

「・・・ゴメン。ゴメン、鳴央・・・」

そう言いながら、私は鳴央にしがみついて涙を流した。ここまで心配してくれたのに、勝手に死のうとしたのが申し訳なくて・・・ただ、泣き続けた。

＝＝＝＝＝＝

「・・・これで、大丈夫かな。」

一輝はそう、鳴央に抱きしめられている音央を視て漏らした。

この分なら、音央は大丈夫だと判断したのだろう。

《・・・よい物ですね。あれは、友情でしょうか？》

「どうだろうな。少なくとも、あの二人は姉妹以上の姉妹だ。」

《なるほど、姉妹以上の姉妹ですか。あの人は、そんな二人を引き離そうとしたのですか・・・》

そこで初めて、一輝は横にいた存在・・・もはや魂だけになっている物に、目を向けた。

「で、アンタは誰？」

《私は、タイターニア。あの人・・・オベイロンの妻です。このたびは、旦那が迷惑をかけてしまって申し訳ありません。》

「・・・別にいいよ。どうせ、俺はあいつを殺すんだし。」

《もちろん、私にはそれを止める権利も止める意思ありません。ですから、それについては何も言いませんよ。》

ただ、と。

タイターニアは続けた。

《謝罪だけは、先にしておきますね。……このギフトを、全てが終わったら彼女にあげてください。》

そういいながらタイターニアの幽霊的な何かは一輝のギフトカードに触れ、ギフトを一輝に預けて消えさった。

話が終わり、二人も落ち着いてきたように見えたので……一輝は、二人に近づいていく。

「さて、と。出来ることならもう少しそのままいさせてやりたいんだが、そう言っていられるほど時間があるわけでもない。だから、聞かせてもらうぞ。」

そして、音央と視線を合わせて、

「依頼を、聞かせてくれ。お前は俺に、どうしてほしい?」

そう、聞いた。

「お願い……私を、助けて!」

「OK。依頼、引き受けた。」

王と女王 ⑤

「む……我が花嫁を連れて何をしているのかね、君は？」

「どこにテメエの花嫁がいるって？戯言もいい加減にしろよ。」

一輝はお互いに支え合っている音央と鳴央を背後に隠しながら、オベイロンにそう言い放つ。

そしてそのまま歩き、もう肩で呼吸をしているスレイブとヤシロに近づき、

「お疲れ様、二人とも。後は任せとけ。」

「あはは……よかった、お兄さんたちが来るまで耐えられて。」

「すいません、剣が主とともに戦えず……」

「いいよ、気にしなくて。スレイブなしで戦うのは少し辛いけど、アイツ程度ならどうとでもなる。」

そう言いながら二人を抱え上げ、オベイロンを完全に無視して音央と鳴央の元まで戻り、二人を預ける。

「じゃあ始めようか、オベイロン。テメエはここでぶつ殺す。二度と再生しないほどに、輪廻の輪に戻れないくらいに、な。」

「ギフトの使えない君に何ができるといえるのかね!?今の君は、ゲームのルールに縛られて、」

「それはテメエだろ。」

一輝はそう言いながら獅子王を抜き、陰陽装束を展開する。

音央を助け出し、完全に一輝側についた今、特殊ルールによって縛られているのはオベイロンの方である。

「な……何故。何故タイターニハはそっちについたんだ!」

「元々、捕まっただけで一度として音央はそっちについてねえんだよ!」

驚愕に染まっているオベイロンの事など気にもしないで一輝は踏み込み、獅子王を振るが、

「そんな……そんなこと認めないっ!タイターニアは、私の花嫁だ!」
オベイロンは黄金の剣を振り上げ、それを防ぐ。

技術の差によって押されてはいるものの、剣の質がいいのか全く攻

撃が当たる気配はない。

「君を殺して、タイターニアを取り戻す！そうすれば、そうすれば！」「死ぬのはテメエだ、オベイロン！」

一輝はそう言いながら獅子王を横薙ぎに当て、剣ごとオベイロンをぶっ飛ばす。

「湖札、戻ってすぐに悪いんだが、頼むぞ。」

『OK、兄さん。あの武器は任せて！』

二人の会話が終わると同時に一輝の体が黒い霧に包まれ、それがはれるとそこには巫女服を着た湖札がいた。

なんてことはない。ただ体の主導権を入れ替えただけである。

そして、湖札の手には妖刀村正が握られている。

「行くよ、村正。」

『うむ。あれほどの剣であれば、妾が斬るのにふさわしい。』

「何で、何でだ！何で神霊である私が、人間如きに攻撃を！」

一輝が一切攻撃を喰らわず、逆に攻撃を受けてしまったオベイロンはそう叫びながら湖札に向けて走り、黄金の剣を振り上げて・・・そこで湖札は村正の柄に手をかけ、鞘を逆の手でつかむ。

そのまま半身の姿勢をとり、オベイロンが間合いに入った瞬間・・・

『剣殺交叉!!!』

目にもとまらぬ速さで抜刀し、剣の最も弱い部分を正確に切り裂いて、武器を破壊する。

「エ、エクスキャリバーがあ!?!」

「兄さん！」

『オウ!』

オベイロンが手に残った柄・・・エクスキャリバーとやらの柄を見ながら叫んでいるのを無視して、体の主導権を入れ替える。

「さあ、まだ抵抗するか？自分のゲームでギフトが封じられ、武器も壊された・・・もう出来る抵抗はないだろ。」

「ヒツ・・・いやだ、死にたくない！死にたくないイイ!!」

そう叫びながら、オベイロンは走り出す。逃げるつもりなのだろう。

「ギフトさえ！ギフトさえ使えば、あんな奴は！」

「へえ、自信満々だな。ならその願い、叶えてやるよ。．．俺は今ここに宣言する。俺は．．俺だ！」

一輝はそう、自らを確立した。

善であるとも、悪であるとも名乗らず、自らは自らであり、他の何物でもない、確立した。．．ラプ子から出された条件を、ラプ子が求めた以外の方法で成して．．主催者権限を、発動する。

そして同時に、オベイロンの主催者権限が解除された。

「私の主催者権限も解除されただど!?一度開催したゲームを強制的に終了させるだなんて．．っ！」

オベイロンは自らのゲームを強制的に終了されたことに驚愕し、降ってきた契約書類を手にとつて、さらなる驚きを見せる。

「何だ、これは．．なんなんだ、この契約書類は!?お前は一体．．！」

「俺は外道だ。正義でも悪でもない。ありとあらゆる道を外した、ただの外道だよ。」

そう言いながら笑みを見せる一輝に、オベイロンは心から恐怖した。

神霊として生まれたオベイロンが、心から、である。

開催されたギフトゲーム。その名前は『一族の物語 ―貫きたい意思』。契約書類の内容もまた謎に包まれた文章であったが、オベイロンが驚愕し、未知ゆえの恐怖を抱いたのは、そこではない。彼が驚いたのは、契約書類の色だ。

普通、契約書類の色は三種類である。

主催者権限を持たないものが開催する際の、ただの羊皮紙による契約書類。

主催者権限を持つ善神の類が開催する際の、輝く契約書類。

だが、一輝が今発動した主催者権限によって現れた契約書類は、そ

のどれにも属していない。その色は．．白黒。^{モックロ}

おそらくこれが、一輝という人間を最も表している主催者権限と言

えるだろう。

「こんなの、こんなのありえない！こんな主権者権限、箱庭のルールに……！」

「そんなことを考えていられるほど、余裕があるのか？」

オベイロンが何か叫んでいるが、一輝はそんなこと気にもしないで殴り、重力を強化してその場に縛りつけて殴り続ける。

最後に重力による縛りをなくして蹴り、オベイロンが樹にぶつかって止まったところで拳を下ろす。

「……さて、音央が本心話してくれたんだ。俺も少しは、本気を出さねえとな。……我、第六十三代鬼道の名のもとに、汝の封印を解く。……出てこいよ、歪み。話がある。」

「ワシをそのような十把ひとがけらの呼び方で呼ぶでない。』

「なら、名前があるってのか？」

「無いのう。どれ、何か付けてはくれんか？」

そう言いながら現れたのは、一輝に無形物を統べるものを与えた歪みだ。

自ら契約によって一輝に封印されただけあって、とても友好的だ。

「なら、俺はお前をスイミと呼ぶことにする。」

「うむ、何でもよい。で、何ようじゃ？」

「力をよこせ。……中途半端に封印されてたせいで崩れた契約を、今ここでやり直す。」

無形物を統べるものは、星夜によって封印されていた。その封印は二人の間に交わされていた契約を崩し、その力を部分的に封じるもの。だからこそ、その封印が解けた瞬間にギフトは一輝の制御から少し外れたのだ。

「よかろう。ワシは一輝に何も望まん。先ほどの覚悟、それに敬意をしようする。おんしは何を望む？」

「俺は力を望む。『無形物を統べるもの』。これを完全な状態で、俺によこせ。」

「傲慢なやつだ！よかろう！ワシの力、望みのために使うがよい！』
歪み……スイミはそう言いながら再び一輝に封印され、新たな契

約をもつて一輝にギフトを与える。

そうしてより強力なギフトを手に入れ、上がった霊格を隠すこともしないでオベイロンに一步近づくと、オベイロンは同じだけ後ろに下がろうとし・・・背に樹があることからそれができず、さらに焦り出す。

「い、いやだ！私はまだ、死にたくないんだ！」

「知るかよ、そんなこと。」

「私はオベイロンだぞ?!北欧の神話体系に名を連ねる、生粋の！」

「どうでもいいね、そんなこと。魔王を殺して誰かに目をつけられるなら、そいつらも全員殺すだけだ。」

実を言えばこのオベイロン、北欧の神話体系に多少関わりがあるだけで、これが殺されたからと言って大本が動くほどの立場ではない。タイターニアを求めたことから分かるように、北欧神話側のオベイロンではなくシェイクスピアの作品、夏の夜の夢のオベイロンなのだ。

「俺はお前が死にたく無かろうが、何であろうが、そんなことは関係ないんだよ。俺はお前がむかつくから殺す。お前に反吐が出るから殺す。お前が生きているということが不快だから殺す。お前がお前だから殺す。そこに変更の余地は、存在しない。」

そして、一輝はそう言いながら手を横に伸ばし、

「疑似創星図、起動。」

そこに翠色の鎌・・・スイミを完全に自らの力として所有権の移行したそれを、過去とは比べ物にならないレベルで発動する。

「何だそれは！そんなの、そんなの一体何を！」

「お前が知る必要のないことだ。どうせすぐに死ぬんだからな。」

一輝はそう言いながら近づき、腰が抜けた状態でどうにか逃げようとしているオベイロンに近づき、

「嫌だ、嫌だアアアアアア！」

「魂を狩りとれ、■■■■■■■■！」

おおよそ人体に発音できない、全ての生物に発音できないはずのその名を唱え、オベイロンの魂を・・・欠片も、粉すらも残さずに切り

刻んだ。

少女の想い

オベイロンという存在を完全に消滅させた一輝は、四人の元まで戻り・・・手に持っていた鎌の形を、甕へと変える。

そして、様々な要因で傷ついた四人に向けて、その中身を・・・優しく光る翠色の甕から、同じ輝きを持つ液体を、流した。

「恵みを与えよ、」

その液体は四人の体を優しく包み、全ての傷をいやして見せた。

「・・・ねえ、それは何なの？」

「俺にも分からん。・・・ただ、中々に便利なものみたいだな。」

一輝はそう言いながら甕を消し、陰陽装束も解き、発動しているギフトを全て解除する。

「まあでも、何も問題はないだろ。音央を取り戻せたんだ。しかも、おまけで魔王オベイロンを討ち取って、俺という存在まで確立できた。ここであれの正体が分からないとか、そんなのはたいした問題じゃない。」

「・・・うん、そうだね。よく分からないことなんてお兄さんに関しては今更だもんね！」

ヤシロが真っ先にそう言うと、その空気が全員に伝染し、一輝もほっと一息ついた。

「湖札は大丈夫か？よく分からん力を使ったし、少し心配なんだが。」

『大丈夫だよ、兄さん。檻そのものには何の影響もなかったから。』

そう自分の中から返事が返ってきたことを確認すると、一輝はようやく一息ついた。

そして、そのまま音央に近づき、

「さて、と。音央、まずお前に渡すように、と預かっている物を渡しておく。」

「私に・・・？」

「ああ。ギフトカードを貸してくれ。」

首をかしげながらも差し出されたギフトカードを受け取り、一輝はそれに自分のものを一度重ねてから音央に返した。

「これ・・・ギフトが増える。」

「オベイロンが迷惑をかけたから、ってタイターニアから預かってきた。何である人がオベイロンと夫婦になったのか、理解できねえな。」
そう呆れながら一輝がいうと、音央はそのギフトが記されている部分を指でなぞる。

『妖精の女王』・・・これって、『夜妖精の女王』と何が違うのかしら？」

「俺には分かん。ま、いつか使ってみて判断するんだな。」

「そうね。きつと、何か違うでしょ。」

音央はそう言いながらギフトカードをしまい、再び一輝を見上げる。

「それで？まだ何かあるんでしょ？」

「よくわかったな・・・」

「さすがに、あんたが何か言いたそうにしてるかどうかわからない、分かるわよ」

「そうか。なら・・・音央、お前はこれからどうしたい？」

「そう、一輝は聞いた。」

「どう？」

「ああ。とりあえず、俺はお前に依頼されたことをこなしたし、今回の事件の関係でお前の隷属は解けてるんだよな。・・・だから、どうするか決めるのは音央自身でやるべきだな、と。」

今回、オベイロンは自らの霊格を利用して一輝と音央の繋がりを斬った。

それをどうするか、一輝はそれを聞いているのだ。

「そう・・・じゃあ、私あんたに隷属するわ。今更変わる、ってのも違和感があるし。」

「ん、分かった。なら、これからもよろしくな、音央。」

とても軽い一言だが、隷属の契約はなされて二人の間に再び、つながりができる。

「じゃあ、これで全部終わったんだし、早く戻るぞ。まだアジールダカーハとの戦いは終わってないんだ。」

理解し、顔が真っ赤になった。

過去、マヤが頬にキスをしたときは比べ物にならないくらい、真っ赤である。頭から湯気とか吹きだしそう。

「さて……どう、一輝？何が起こってたのか理解できた？」

「理解、出来たが……何でこんなことになったのか、理解できてない……」

「ふうん……ひよつとして一輝、こう言うの初めて？」

「そりゃ、な……」

「ちよつと意外ね。でも、そつか……初めてなんだ……」

音央は一輝のファーストキスが自分であるという事に花が咲いたような笑顔を見せ、一輝は今キスしていたこともあってさらに赤くなる。

そして、音央は……

「一輝。私は……あんたの事が好きよ、異性として」

そう、一輝に自分の気持ちを伝えた。

さすがにこの状況で邪魔をする気になれなかったのか、ヤシロにスレイブ、湖札の三人も黙っている。

「えつと……その……」

「あ、無理に返事はしなくていいわよ？今返事を求めるのは……ズルい気がするし。」

「……スマン、助かる。」

「だからいいって。惚れた弱み、とも言うしね。」

音央はそう言いながら笑っており、一輝はその前で申し訳なさそうにしている。

「あー、でも。いつか返事を要求するかもしれないから、その辺ちゃんと考えといてよ？」

「……分かった。ちゃんと、真剣に考える。」

音央が自分の事も考えて返事を延期してくれたことくらいは鈍感極まりない一輝でも分かったので、その言葉はとても真剣だった。

「……それと、まだお願いしてもいい？」

「……何だ？」



主戦力や女子供、怪我人などが乗っている空中城塞。その上空に、突如ヒビが入った。

その亀裂は甲高い音を鳴らして響き渡り、城塞の中に待機していた主戦力の視線を集めた。

その様子を見て、クロアは主戦力全員に向けて叫ぶが・・・警戒するだけで、すぐにそれに対応できるわけではない。

破裂する空間。舞い落ちる粒子の羽。現れるのは、蒼と紅、純白の装飾で身を固めた人影。

そう、とある少女のストーカーをしていた、とつてもキモいその人・・・マクスウエルである。

魔王マクスウエルは出現と同時に弓形に体を反らし・・・言語野を失ったように、もはや知性すらなくなってしまったかの如く、叫ぶ。

「GEEYAAAAAaaaaa!!!」
「うるさいー」

そして、出現したマクスウエルを、いつの間にかそこにいた湖札が本気で殴る。

『・・・はあ?』

湖札がマクスウエルを殴るまで誰もそこにいることに気付かず、さらにはあっさりと殴ったことで城塞の中にいた人間が同時に疑問の声をあげた。

「はあ・・・全く、統合したためにアクセスしてみたら、まさかこのタイミングで来るなんてね。思ってもいませんでしたよ。」

「GE・・・RE・・・!!!」

湖札が話しかけても、マクスウエルにまともな反応は見られない。それどころか、ギチギチと音を立てて軋みをあげている姿から、正気でないことは明らかに分かる。

「はあ・・・完全に壊れてる。そこまで壊れるなら、いつそ全部壊れてから来ればよかったのに。」

湖札はそう言いながら陰陽装束を展開し、殴り飛ばされてから動く

気配のないマクスウエルに向けて瘴気を放った。

普通であれば死へと向かう、ここまで壊れているマクスウエル相手であれば一瞬で死んでもおかしくないが、それでも死んでいないだろうと、湖札は確信していた。

「GE………RE………WE——WEEeeeLAAAAaaa!!」

「人違いーそれと、貴方はここで死ぬんだからもう二度と会えないよ！」

二本の足で立ち上がったマクスウエルは口が裂けるのではないかという位に獰猛な顔で突っ込み、湖札はカウンターで拳を放つ……ふりをして、空間跳躍で背後に回り込んでいたマクスウエルの顔面を村正で貫く。

「悪いけど、全部無駄だよ。今、青行燈を憑依させてるから。」

湖札の中に封印されている青行燈。これが誕生する際、そこに込められた物語の中に『覚』がいる。

その力を使い、壊れているおかげで単調になっているマクスウエルの思考から次の行動を予測しているのだ。

だからこそ……空間跳躍というチート技をもっている相手に対して、湖札は圧倒的に戦う。

マクスウエルが空間跳躍をして攻撃しようとするれば、出てくるところに攻撃を向けて何かする前に止める。

空間跳躍を使わずにくるのなら、真正面から叩き伏せる。

憑依させることで青行燈を構成する全ての妖怪の力を使い、あらゆる事態に対応して、魔王を圧倒していく。

そして、自分が不利であることに気付いたのか、マクスウエルは動きを止めて弓形にのけ反って絶叫をあげ、周囲の熱を奪い始める。

「WEEeeeLAAAAaaa!!」

「これは……ウイラさんには絶対に会わせず、ここで殺さないよ。」
そう言いながら、湖札はマクスウエルを観察する。

そして、その場が寒冷地にでも来たのではないかという位に冷え込み、壁には霜と氷柱が降りてきたところで……湖札は、自分の中に

コッペリアへと流れ込んだのだが・・・それはまた、別の話。

「ふう・・・これで、マクスウエルは片付けた。後はタイミングを見計らって兄さんに合流して・・・」

「オイ、今のは何だ？」

と、湖札がこの後の事を考えていると十六夜が後ろからそう尋ねる。

「・・・何のこと？」

「何の事、じゃねえだろ。今お前が使った疑似創星図の事だよ。・・・名前も現れた現象も、全てが分からねえ。」

「それはそうでしょうね。これは、私たちの世界にしか存在しないものですから。」

そう言いながら湖札は振り向き、真正面から十六夜を見る。

「それよりも、今はやることがあるんじゃないですか？・・・兄も、そのために今準備をしてる。」

「一輝か・・・あいつは今、何を？」

「封印の解除。さすがに、今回は解かないと無理だつて判断してみた。せつかく解けるようになったんだから、全部完全に解く、つて。」

|| || || || || || || ||

一輝はゲーム盤の中で、座禅を組んでいた。

そしてそのまま右手の刻印に対して血を垂らし、言霊を唱える。

「汝、寺西一輝の封を『型破り』の名のもとに解く。今ここに、完全なる力を。」

その瞬間に席組みとして受けていた封印が解け、圧縮されていた呪力と封じられていた霊格が全て解放されてその場にクレーターができる。

だが、封印の解除はそれでは終わらない。

「第六十三代鬼道、鬼道一輝の名のもとに、一族の戒めを解く。我は世界より信仰を受け、民より憎悪を受ける。その存在、今こそ開放しよう。我らが敵を葬らんがために。」

続けて紡がれた言霊は、一輝が生まれてからずっとつけられていた封印を、解除した。

そして、一族が湖札以外全員死んだことよって一輝にまとめられた鬼道の一族の霊格が、功績が、その全てが解放され、さらには一輝という存在の本来の霊格（そんざい）が、解放される。

さらにいくつかの封印を解き、スイミとのシンクロ率も限界以上にあげたところで・・・目を、開いた。

「・・・終わったの、お兄さん?」

「ああ、これでとりあえずは全部だ。危険因子はさすがに、解放できないしな。」

ヤシロに聞かれた一輝は、そう答えながら自分の存在を安定させていく。

解除したばかりであれている存在を、だ。

「まあ、ここまで強くなればいけそうよね。」

「ええ。すぐそばにいただけでも、一輝さんが強くなったのがすぐに分かります。」

そう言いながら音央と鳴央が手を差し出し、一輝は片手ずつ二人の手をとって、引っ張り上げてもらう。

「で、どうだ?俺の存在、まだ危険な状態だったりする?」

「・・・いえ、問題ないかと。今の状態であれば、十分に安定しています。」

スレイブからそう返事をされたことで、一輝はようやく、自分の足で歩きます。

「んじや、行くか。」

「ええ。」

「はい。」

「分かりました。」

「レッツゴー!」

一族の物語 ―我／汝、悪である― ①

火龍と鷲獅子、二つの龍角を得たアジィダカーハはそれを石畳に投げつけ、自らの分身に与えた。

結果、双頭龍は大嵐の化身となって咆哮をあげ、フェイスレスに襲いかかる。

さらに上空では、アジィダカーハが主催者の一人を倒されて意気消沈したプレイヤーに向けて牙をむく。

その場にはレティシアと鵬魔王が駆け付け、その片翼こそ奪ったものの・・・彼はそんなこと気にもしないで、個人として持つ最大の恩恵。世界の三分の一を滅ぼすと伝えられた閃熱系最強の一撃、^{タワルナフ}“覇者の光輪”を空中城塞に向けて放つ。

それは空中城塞を落とすのではないかと思われたが、耀が最強種、^{ケッアルコアトル}“原初龍・金星降誕”を創造し、そこに殿下の疑似創星図、^{アヴァ}“アヴァターラ”の補助が入ることによってその軌道を変え、防いで見せた。

こうして生まれた奇跡の連続。三頭龍はそれに対して、自らの持つ最大の一撃を防がれたことに対して、耀に報復の意味も込めて攻撃を放つが、ここでまた一つの奇跡が起きる。

ジャックが、その身を魔王に墮としてアジィダカーハの一撃を防いだのだ。

墮ち方としては、考えられる限り最悪のもので。

ジャックは、自らの主催者権限で開催するゲームに、無条件で自分が有利になるルールを、大量に盛り込んだのだ。当然、そのようなことをすれば膨大なロジックエラーが発動し、そのゲームは強制的に終了させられる。

さらには、その手法によって膨張した霊格は自壊し、死後も天界から罰を受け続ける。

後見人であった聖ペトロとクイーン・ハロウィンも、黙っているはずがない。ジャックの事を信じ、信頼したからこそ後見人を請け負ったというのに、そこに泥を塗ったのだから。

だがしかし、ジャックはその全てを覚悟したうえでアジィダカーハを討たんとする。

悪を以って巨悪を討つ。

自らの歩んできた畜生の道に、大輪を添える。

その覚悟があることは、誰の目から見ても確かだ。事実、絶対悪であるアジィダカーハもその覚悟の中に正義を感じ取り、全力で答えている。

誰も、その覚悟を邪魔しようとは思わないだろう。・・・普通なら。

ここには、その覚悟を許せないものが一人、いた。

彼は刀を抜刀し、それを上段に構える。

「ふざけんなよ、ジャック・・・！」

そしてそれを振りおろし、主催者権限を発動した。

白黒^{モジクロ}の契約書類を振りまき、全ての主催者権限を強制的に終了させる、外道の主催者権限を。

当然、その瞬間に発動していた主催者権限は全て、強制的に終了させられた。

『GROUND COVER on the MOON SEE』
も・・・『Jack the monster』も。

それによって、主催者権限によるブーストをしていたジャックはそのブーストを失って・・・三頭龍と戦うことも出来ず、その主催者権限を発動した少年・・・一輝の前に、落ちる。

「・・・ジャック、お前は何がしたいんだ。」

「ヤホ、ホ・・・一輝さん、ですか。」

もうあとは崩れていくだけの体であるジャックだが、それでも誰に話しかけられたかくらいは分かるようだ。

そして、もう自分の最後の覚悟を邪魔されたことに対して何かを言うだけの生命もないのか、やけに静かに、そう返した。

「自らの歩んできた人生を全て無駄にして、お前にとって大切な人もたくさんいるのに、お前が大切な人だというやつらもたくさんいるのに、死ぬつもりなのか？」

一輝はそんなジャックに、容赦なく言葉を浴びせていく。

「……ええ。この畜生の人生。彼らを守るために使えるのであれば、その先に何が待っているとしても、後悔はありません。」

「そうか。なら悪いが、その覚悟は俺が折らせてもらう。……これまです通りの形では生き残れないだろうが、凶々しく生き残ってもらうぞ。」

そう言いながら一輝は刀を振り上げるが、ジャックはそれを止めるでもなく……ただ、自らを語った。

「……ここで凶々しく生き残ったとしても、私は死にますよ。先ほどの主催者権限、あれの使い方で私は魔王に堕ちました。天軍の征伐対象にも、リストアップされていることでしょう。ですから……この身の延命、そのために力を使わないでください。」

「やなことだ。このまま勝手に死なれたんじや、俺が止めた意味がない。」

「……なら、貴方相手であれば、こちらの方が効果的でしょうか。」

そして、ジャックはいった。

私は、殺しましたよ……と。

「私は、少年も、少女も、幼い赤子も……己の創作意欲を満たすためだけに、殺しました。」

「なら俺も殺したさ。金を稼ぐために妖怪、霊獣……幼い子供の妖怪も殺し、俺が気に入らないという理由だけで権力者を、正義を、色んなものを斬ってきた。……だからこそ、俺がお前に対して、罰を下すことができる。……どうしても赦されないとこのなら、俺が罰をくれてやる。」

そう言いながら一輝は親指の肉を一部噛みちぎり、血を一滴足下におとした。

その瞬間、一輝とジャックを中心に赤い……血色の陣が描かれる。

「これは……?」

「ただの契約……鬼道の奥義の一つだよ。そこまで気にしなくていい。」

そして一輝は、奥義を発動する。

「俺はここに、神霊として生まれたものとして罰を言い渡す。」

「な……！」

ジャックは一輝の言葉に、ただただ驚いた。

弱りすぎていて感じ取ることができていなかったのだろう。

だが、この場にいる他の人間が何もしてこないのは、一輝が神霊となつていることに対する驚きか、モノクロの契約書類に目を丸くしているものか、他の主催者権限が解除されたことに対する驚きが多くを占めている。

唯一、アジィダカーハだけは二人の様子をただ静かに見ていたが。

「我が一族はお前の魂を、力を、恩恵を、その全てを幼子の笑顔のために、幼子の命を守るために使う。汝それを受け入れるのであれば、名を名乗り、魂を献上せよ。」

「……それは、本当に罰なのでしょうか？」

「ああ、罰だよ。まず一つ目に、お前はこれから先永遠に、捕らわれ続けるんだ。俺が死んでも、この契約は子孫であったり、何かしら檻をもっている人間に継承されていく。二つ目に、幼子の命、笑顔のために必要なら幼子を殺すのにも使える。外道がそれをしないって保証は、どこにもないからな。」

一輝はそう言いながら、見るものが恐怖しそうな笑みを浮かべる。

この奥義には、相手が弱つていれば弱っているほど契約に乗ってきやすくなるという、相手の心を操る式も存在している。

一輝がそれを使っているのかどうかは分からないが……ジャックは、

「……魔王、バンブキン・ザ・クラウン 南瓜の王冠”。この魂、どうか幼子のために……」

契約に乗り、その存在全てを輝く霧へと変えて……一輝に封印された。

そして、そこでようやくアジィダカーハへと目を向ける。

ずっと一輝たちを見ていた三つの頭も、一輝と視線を合わせる。

「……よう、アジィダカーハ。その首をもらいに来たぞ。」

『ほう……それは、友の覚悟を蔑にしてまで成したいことなのか？』

「ああ、成したいね。俺の手で、お前を殺したい。」

一輝はそう言った瞬間に跳び、獅子王でアジィダカーハを斬りつけ

る。

『そうか、そうまでして私を殺したいか！いいだろう、その意思絶対悪たる私が受けて立つ！』

そして、彼の彼たる故を宣言した。

『来るがいい、英傑よ。そして踏み越えよ——我が屍の上こそ正義であるッ!!』

「残念ながら、俺は英傑なんて立派なもんじゃない。……折角だ、俺も正しい名乗りを上げるか。」

そして一輝も、それに答えた。

「我は悪である！忌まれし外法をもって力を得、民より悪と罵られるが故に！」

右手をあげ、そこに今回のゲームの契約書類。一輝のゲーム開催と同時に降り注いだものと同じ文面の、黒く染められた契約書類を持つ。

「我は善である！民に、妖に、神に、全ての者に倒せぬ悪を討ち取るが故に！」

左手をあげ、そこに今回のゲームの契約書類。一輝のゲーム開催と同時に降り注いだものと同じ文面の、輝く契約書類を持つ。

「我は外道である！善の道悪の道、その双方を踏み外したが故に！」

そして、両手を打ちつけ……二つの契約書類を、混じり合わせる。

そこには白黒の、今この場にいるプレイヤーモノクロが持っているものと同じ契約書類があった。

「さあ受け取れ、アジィダカーハ！俺が、我が一族の功績をもって開催するこのゲームを、受けて見せる！」

一輝はそれを投げ、アジィダカーハはそれを受け取って初めて、契約書類の文面を見た。

今ここに、外道の主催するゲームが、始まった。

『——ギフトゲーム名 “一族の物語 ——我／汝、悪である——”』

我らが一族は、外道である。

外道であるが故に悪であり、外道であるがために悪を学ぶ。
外道であるが故に悪をさばき、外道であるがために悪となる。
ああ、何故我らは外道を名乗るのか。

我らは何故故に、民より悪として認識されるのか。

我らは何故故に・・・恐怖と畏怖を捧げられるのか。

我らは時に神としてあがめられ、時に悪として裁きを受ける。

汝ら民を守ってきたのは誰だ!?

日の国の民を・・・否、我がいる世界の民を守ってきたのは誰だ!?

それは我らである!

我らは大いなる妖怪と契約し、その力を借りて世の歪みを殺してきた。
た。

人も、妖も、神ですら殺めることのできぬ存在を、我らは屠ってきた。
た。

時に死を覚悟し、時に契約を結び、時に死を対価として。

我らには、その事実による栄光は決して訪れない。

その事実を知るものはいない。

我ら一族以外には、彼らを殺すことは出来ないのだから。

妖怪であれ、魔物であれ、霊獣であれ、神であつてさえも、歪みを殺すことはできない。

そして、その存在を伝えることも出来ない。

我が一族には、様々な鬼道がいた。様々な・・・六十二の道があった。
た。

^{初代}一人は、一族のために道を作り出した。

世界の民を守るために、禁忌とされていた妖怪との契約を交わして。
て。

事実を民が知ることはない。

ただひたすらに侮蔑を向けられると分かっている、それでもそんな民を守ろうとした。

だからだろうか。陰陽師としての名も無く、動いていたのは。

^{二代目}一人は、初代の遺志を継いだ。

初代の遺志を継ぎ、生涯で一度、歪みを屠って見せた。

だが、二度目は無かった。

二度目の邂逅、そこで彼は命を失った。

三代目 一人は、歪みと邂逅することはなかった。

だがしかし、契約によつて得た力で霊獣を殺し、一族の名を汚名から拾い出して見せた。

四代目 一人は、これまでの道のように、何かを残すことは出来なかった。

だが、先代の作り出した道を、闇に閉ざされた道に差す光を広げることは、やってみせた。

五代目 一人は、数々の妖怪を屠り、封印して見せた。

だんだんと消えていく汚名の中で、彼女は希望を見出していた。

だからこそ、命の尽きるその瞬間まで、人に仇名す妖怪を、人のために屠っていた。

そして、最後には神すらをも屠り、一族の中で最も異質な奥義を編み出した。

六代目 一人は、先代を疎んでいた。

先代の偉業、神殺しが彼にはプレッシャーとなり、それに押しつぶされようとしていた。

だが、民はそんなことは気にもしない。

先代の強さを彼にも望み、彼がそれに答えないと掌を返した。

先代はすばらしかったのに。

先代は人となりもよかったのに。

七代目 そんな言葉が、彼に世界を呪う決心をさせた。

八代目 一人は、父の意思を継いだ。

否、継がされた。

彼は生まれてからずっと、父に洗脳されていた。

世界を呪え、ただそれだけを教え込まれてきた。

そうした心で過ごしていたせいか、一族は再び恐怖の対象となつてきていた。

そして、志半ばで死亡した。

八代目 一人は、そんな父を間近で見ってきた。

そして、一族の歴史を紐解き、民が何度も掌を返していることを

知った。

そして、父の死とともに、彼は堪えが効かなくなった。

彼は世界を呪うために一つの奥義を編み出し、そして、そこで息を引き取った。

九代目一人もまた、父の様子を見てきた。

そして、父の奥義を完成させるために怨みを連ねた。

一族の奥義は、強き意志によって編み出される。

それゆえに、彼は怨みを重ね、怨みを連ね、世界に絶望し……

父の奥義と対になる、奥義を編み出してしまった。

十代目一人は、そんな歴史を知らなかった。

父は自らが狂っていることを理解していて、子に会うことが無かった。

だが、父の死とともに、全てを察した。

長寿であった父を生かしたのが何であるのか、それを知ってしまった……

そして、霊獣を殺すのにその二つの奥義を使い……世界の全てを、呪った。

十二代目一人は、祖父の死を境に壊れていく父を、隣で見ている。

それ故に唯一止めることができ……だが、それを実行しなかった。そんな父を止めるしかないことは分かっていた。

だが、彼にはそんなことが出来なかった。

目の前で高笑いする父を、壊れていく父を、殺すしかないとは思った。

だが、心優しい彼には、父を殺すなんて出来なかった。

そして、殺さずに止める方法を強く願い……

誰も殺さずに、全てを収める奥義を、編み出した。

十二代目一人は、天才であった。

幼きころに祖父が世界を呪い、父がそれを止めた。

そして、その瞬間に祖父が自殺し、父も自殺したにも関わらず、彼は強く生きた。

そのことを知った瞬間に奥義を習得し、一族の長となった。

幼き彼を疎む分家は数多にいたが、それすらねじ伏せ、そしてその人望で束ねて見せた。

そんな彼だからこそ、彼は一族の勤めを果たした。

歪みを殺し、さらには得た力で霊獣を殺して見せた。

十三代目一人は、ひたすらに強かった。

人望があるわけでもなく、ほかに何かあるわけではなかったが、力のみはあった。

寡黙な彼は、一族のために何も出来ないと考え・・・

せめて、と。霊獣を二体、殺して見せた。

人間には到底倒せないとされた、神に近い霊獣を、殺して見せた。

十四代目一人は、ひたすらに弱かった。

だがしかし、父と違って力以外の全てを持っていた。

彼はその人望で、一族の汚名を雪ぐ努力をした。

弱いなりに努力し、力ない人たちのために働いた。

だがしかし、一族の汚名は中々雪ぐことはできなかった。

十五代目一人は、何も持っていなかった。

感情すら持たずに、ただ何も感じずに生きていた。

そんな彼女だったからだろうか。

その肝を狙う霊獣がいた。

感情を持たず、しかし確固とした力を持った彼女の肝を、狙われたのだ。

だがしかし、そんな霊獣でさえも彼女には何の感情も抱かせなかった。

恐怖も何もなく、ただ淡々と霊獣を殺し、その配下も殺していく。

その様子は、ともに捕まっていた少女達に一つの存在を思わせた。

鬼を、感じさせた。

十六代目一人は、ある意味不幸であった。

先代がそんな人であったせい、感情が豊か過ぎた。

そして同時に、鬼道の名を持つ最初の一人となってしまうた。

先代が鬼と呼ばれ、それからはそれまでの呼び名と混ざって鬼道と
なったのだ。

そんな彼は、感情が豊か過ぎたせいでその声に押しつぶされていき……

最後には、豊かだった感情を失い、生と死の区別すらつかなくなつた。

十七代目 一人は、自ら鬼道を名乗つた。

民に認識された以上、それが我らだと。

胸を張り、堂々と名乗つた。

そんな彼は、歪みを殺して見せた。

十八代目 一人は、何もかもが中途半端だった。

良いわけでもなく、悪いわけでもなく、平均にいるわけでもない。

どこにも属さない、ひたすらに中途半端な存在だった。

十九代目 一人は、英雄だった。

民の一人も認めない、英雄だった。

善を愛し、悪を憎む。

どれだけ民から憎まれようとも、民を守り続けた。

そして、彼は歪みを殺し……強すぎる力ゆえに、民によつて殺された。

二十代目 一人は、完全に無であつた。

才能はあるがなく、感情はあるがない。

全てがあるのに全てがない。ありとあらゆる無を感じ取る、そんな

人間であつた。

ああ、何故我らは存在するのだ！

ああ、何故我らは生まれたのだ！

ああ、何故我らは生きているのか！

ああ、ああ！世界よ、何故我らを求める！

ああ、ああ、ああ！！世界よ、なせ我らに滅びを許さぬのか！

民は、我らに完全を求める。

我らは、我らに闇を求める。

民は、我らに悪を求める。

我らは、我らに勝利を求める。

民は、汝らに勝利を求める。

我らは、眼前の敵を消すことを求める。

さあ、剣を取れ！弓を引け！

拳を握り、銃を握り、槍を握り、武を交えようではないか！

その実に宿る力の全てを、その身に宿る星の輝きをぶつけ合い、造られし星を示せ！

我らの間に存在する邪魔な全てを取り除き、雌雄を決しようぞ！

全ての望みを叶えしその先に、我らが、民が望むものがあると信じて！

一族代表、第六十三代鬼道「鬼道一輝」印

宣誓 「鬼道」の名を継ぐ者が開催する限り、この試練ゲームが正当であることを保証します。

「世界」印』

一族の物語 ―我／汝、悪である― ②

「アジールダカーハを倒すには、三つの弱点を同時に討たなければならぬ。」

「三つの弱点？」

一輝は精神の中で、示道からの話を聞いていた。

「ああ。頭蓋、双肩、心臓の三か所を、な。」

「・・・それで、三つの頭に杭が、肩には変なボルトが入ってたのか。」
「そうだ。双肩については心当たりがないが、各頭蓋の杭は俺達が施した封印の一つだ。そして、分身体を全て吐き出させれば・・・最後の弱点である心臓が、浮かび上がってくる。」

「で、そこを討てばいいわけだな。なるほどなるほど、中々に無理ゲーなわけだ。」

一輝がそう言いながら肩をすくめると、示道もまた肩をすくめる。
「だけど、俺はお前ならそれができると思ってる。・・・俺がぬらりひよんと契約したのは、お前みたいなのが生まれるという可能性にかけてのことだ。」

「俺みたいなの・・・？」

「ああ。幼くして外道を名乗り、歪みから力を得て、一族の功績を一身に受けるような、そんな奴をな。」

「うっわ・・・ほとんど俺じゃん、それ。」

湖札の功績だけは一輝に含まれてないが、その問題は湖札が生み出した奥義によって解消された。

「だけど、わざわざ俺を選ぶ必要はあったのか?・・・はつきり言っちゃえば、もっと後の時代であれば、さらに功績を積み重ねたやつもいるだろ?」

「いやいや、お前も湖札も箱庭に来てんじやん。そうでなくとも、白澤襲来なんてあんな事件、中々起きないし。」

「立体交差並行世界論・・・だったか?あの考え方でいけば、未来の可能性は無限だろ?」

「確かに、そうだな。・・・けど、残念ながらその考えは通用しない。」

そして示道は、その事実を伝えた。

「俺とぬらりひよんが契約をした世界は、それ以降の分岐がほとんど、存在しない。」

「……つまり、俺がいた世界では、全ての道が確定されていた、つてことか?」

「まあ、ほとんどそうだな。その少ない分岐も、一輝が生まれた瞬間に統合されてからは一度も存在していない。」

つまり、一輝のいた世界は一輝という存在によって、統合されている。

それによって得る霊格は……想像を絶するものとなるだろう。

「だからこそ、箱庭の世界にお前たち二人が来た時点でお前が救う以外の選択肢はないんだ。」

「……まあ、それには納得するでしょう。悪を討つのに悪を使うという考えも、かなり同意できる。悪を討てるのは、正義か悪のどちらかでしかない。」

そして、正義は悪を討ち取ることで己の正義という属性を強め、悪は悪を討つ事でさらなる悪を抱え込む。

「……で?まさかアジィダカーハを倒すための要素が、まさかこれだけだなんて言わないよな?」

「まさか。ちゃんと、必要になると思ったものはそろえてある。」

|||||

一輝とアジィダカーハは、上空でぶつかりあっている。

アジィダカーハの繰り出した拳を一輝はサトリの能力で察知して避け、ジャツクの力で炎のスプリングを作り出して一気に跳び、手の中に作り出した空気の爆弾をぶつけてその血を流させる。

アジィダカーハもやられっぱなしというわけではなく一輝に向けて何度も攻撃を放ち、サトリの力でもよけきれなくなってきている分は素直に喰らって、それを蛇の生命力で無理やりに治して勢いが衰えることなくアジィダカーハへと進んでいく。

『ここまで血を流してもなお倒れぬとは、一体、』

「その考察、自分でしないと意味がないぜ！」

一輝からそう言われて、アジィダカーハはゲームのルールを一つ、理解した。

《つまり・・・このゲーム、こやつが存在を自ら読み解かねばならないのか。》

だがしかし、そのためには一つの矛盾を解決しなければならない。

即ち、一輝が人間でありながら神霊として確立し、その二つが独立して存在している、という事実を。

さらに、なぜ一輝が神霊として生まれることができたのか。その神霊となるだけの信仰はどのようにして得ることが出来たのか。そもそも、鬼道というのはどのようなようにして生まれ、どのような役割をもっている一族なのか。

様々な世界に存在する神話の神々ではなく、一輝がいた世界にしか存在しない神霊の情報を、得るだけではなく読み解かなければならない。

中々に難易度の高い、かつチンタラしていたら一輝があっさりとかリア条件を満たしてしまうような、そんなゲーム。

それを開催できたのは、それもまた鬼道という一族の功績によるものだ。

「考え事をしてると、相手の術中にはまるぞー！」

そう言った瞬間、アジィダカーハをミキサーにかけられたようなダメージが襲う。

なんてことはない。一輝が空気の刃を形成し、さらに蚩尤の力で強靱な刃の属性を上乗せしてミキサー状に操っただけ。

だがしかし、その攻撃は単純であるがゆえに操作が簡単であり、一度術中にはまってしまえばどこに動いてもついてくる。

アジィダカーハの動きに合わせて一輝はそれを動かし、アジィダカーハはそれを打ち破ろうと様々な恩恵を使う。

イタチごっこのように繰り返されるその攻防は・・・いつか、その心臓をむき出しにするであろう。

「さて、お兄さんがあそこまで頑張ってるんだからこつちも頑張らないとね。」

そう言いながらもヤシロは神格を与えられているために使える状態の魔道書を使い、どんどん分身体を潰していつている。

それだけではなく、タイターニアより与えられた恩恵で一時的に神霊化している音央に、ヤシロと同じように一輝から神格を与えられている鳴央、スレイブの二人もどんどん分身体を倒していき、元々そこにいた人たちと変わらない。それどころかそれ以上の戦果を出している。

そんな中、ヤシロはもう出し惜しみをする必要はないと感じて…その詩を、唱えた。

「L, an mil neuf cens nonante neuf sept
Du ciel videntra vng grand Roy d'Angolmois,
Resusciter le grand Roy d'Angolmois,

Auant apres Mars regner par bonheur.
その瞬間、二人の魔王が…恐怖の大王と、それによって復活させられたアングルモアの大王が、この場に降臨する。

恐怖の大王はアングルモアの大王を復活させるのと同時に消え去ったが、アングルモアの大王はその場に残る。

「な…なんや、あれは。」

「大丈夫だよ、蛟劉お兄さん。あれ呼んだの私だからっ。」

事実、現れたアングルモアの大王はアジィダカーハの分身体だけを倒していき、プレイヤーには被害を出していない。

「魔王を呼び出せるって、もう…。」

「あの魔王が現れる、っていうのが私の物語だしね。仕方ないよ、こればかりは！」

そう言いながらも、ヤシロはとても楽しそうである。

こんな状況でもない限り使えない百詩篇。それを使って、さらには

一切容赦しなくていいという状況が楽しくて仕方ないのだろう。

「なんや、えらい楽しそうやな。」

「不謹慎かな？でも・・・うん。楽しいよ。お兄さんの力になれてるのが、すっごく嬉しい。」

そうはつきりと言ったヤシロに、これ以上言っても無駄だと判断した蛟劉は肩をすくめるだけであった。

「おー・・・遠くから見ても分かったけど、兄さんかなり本気だなー。封印全部解いて、さらに檻の中の妖怪たちの力も十二分に引き出して・・・やっぱり、これが当主と分家の差なのかな。」

自分は十分にしか引き出せないの、その差を湖札は感じていた。が、それどころではないことをすぐに思い出して・・・

「さて、と。私は兄さんの方に行ってくるから、こっちはお願いしていいかな？」

「湖札お姉さんはあっちのお手伝いなんだ？」

「うん。私がいけないと、兄さんは完全にはならないし。」

そう言つて、悪魔の翼をはやした湖札は一輝の元まで飛ぶ。

その途中で、一つの主催者権限を発動させながら。

『ギフトゲーム名「汝、知を読むもの」

参加資格

- ・ 知に富むもの。

勝利条件

- ・ 我が写し身を、意思をもって破壊せよ。

敗北条件

- ・ 上記の条件を満たせなくなった時。

特殊ルール

意思をもって過ちの写し身を破壊したとき、参加者は霊格にダメージを受ける。

汝、私の閲覧を禁ずる。

参加者がゲームをクリアしたとき、このゲームによって受けた全ての傷は癒える。

宣誓 上記を尊重し、誇りとホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

封ぜし者『鬼道湖札』印』

「間に合った、兄さん？」

「かなりギリギリに、な。凄いぞ、アイツ。こんなに早く、鬼道と世界が深く関わりを持つ事を当ててきやがった。」

「だがしかし、アジ♠ダカーハはそれ以上の思考を……ルールによってできなくされた。」

『ほう……単純な思考はできるようだな。しかし、深く考えることはできない。読み解く、という行為は封じられたわけか。』

「そんなもって、この現象を理解するものまた早い……」

「だねえ……でも、正解。私のゲームをクリアしない限り、これ以上兄さんのゲームについて考えることはできないよ？」

そして、湖札の開催したゲームのクリア条件について考えることも出来ない。

このゲームをクリアしたければ、運次第になることを覚悟し、片っ端から目につく物を破壊していくという手段を取らなければならぬのだ。

その度に、霊格に傷を負う覚悟をしたうえで。

「さて……我は鬼道に連なるもの。我は鬼道の乙女。我は力なき乙女。故に我は全ての力を託す。我が全てを託す。我は、鬼道の長に我が存在、その全てを託す。……今、我と汝は統一される。我が力……存分に、使いこなしたまえ。」

湖札は奥義を発動し、一輝と融合することで一輝の鬼道という霊格を完全なものまで引き上げる。

「……これで、俺は完全になった。お前を倒すのに必要な要素は全て揃ったぞ、アジ♠ダカーハ！」

一族の物語 ―我／汝、悪である― ③

一輝は湖札と同化してから何の容赦も、温存もなく力を使っていた。

常に全力の一撃を打ち続け、体力がなくなれば妖力、魔力、霊力を檻の中から借りてひたすら打ち続ける。

『狂気のような攻め方をするな、外道！』

「うつせえ、絶対悪！これでいいんだよ・・・！」

一輝はそう言いながら、ついに蚩尤と天逆海の神気を燃料にしだした。

別に、この場で使いつくしたとしても檻の中の魂が消滅するというわけではない。むしろ、魂だけとなつている存在なのだから少しすれば回復する。自分の呪力を使い尽くせば話は別だが、後に必要となるので呪力は使っていない。

『兄さん、私のも！』

「・・・悪い、借りるぞー！」

そして、最後に湖札の呪力まで借りて最大の一撃を打ち続け・・・自分の呪力を一部使い、ようやくアジィダカーハの心臓を、剥き出しにした。

「はあ、はあ・・・どうだ、絶対悪。弱点がむき出しだぜ？」

『フン、予想以上にやりおる。まさか、神殺しである私が、神霊にここまでやられるとは！』

《俺が用意したもの、一つ目。アジィダカーハを抑え、同時に對抗できる存在。神霊としての主催者権限に人間としての対抗手段。》

それが、鬼道という存在。人間として生まれ、同時に神霊として生まれた矛盾を使えば、原典候補者でなくとも対抗手段となることができる。

さらには、一輝のいた世界にしか存在しない神霊の存在と予定外であった湖札の・・・歪みから得た主催者権限。これによって、ゲームクリアはほぼ不可能となる。

「悪いけど、俺は人間をやめたつもりはないんだよ。・・・神霊の部分

はどうにかする手段があるのかもしれないが、人間のと同時に消しきれるのかな？」

『確かに、それは難しい。が……もうまともにも動けそうにもないな？』
アジィダカーハの言っていることは事実だ。一輝はもう、自分の体を動かすだけの余力が存在しない。妖怪、魔物、霊獣、神からかりた力は、切り札を切るのに必要なぬらりひよんの力が十割と、一輝自身の呪力が四割。これ以外すべて使いつくしている。

だが……まだ使っていない要素が、残っている。

「我、第六十三代鬼道の名のもとに、汝らの封印を解く。力をよこせ、スイミ、ヴァチ！」

「二体分、耐えられるかのう！」

「……」

封印を解除したのは、一輝に対して友好的な歪みのスイミと、一輝と湖札の二人によって殺された歪み、ヴァチ。

その二体は一輝の左右に顕現し……そこにいるだけで、世界が死に近づきそうになる。

『……中々に危険なものを飼っておるのだな。』

「飼ってる、ってよりも封印してる、なんだけどな。」

「何、敗北し封印されたこやつにも、一輝に興味を持ち契約したワシにも、世界を殺す意図はない。安心せい、トカゲ。』

『フン。……病巣、といったところか。』

湖札の主権者権限があっても、直感的な感性までは封じることができない。

だからこそ、一輝はアジィダカーハの病巣という表現に少し冷や汗をかいたが、どうにかそれを表情に出さず左右の歪みに手を触れ……それを自分の体に同化させる。

「……さあ、これが最後のブーストだ。」

『つまり、それを討ち破れば私の勝ちというわけだな。』

「ま、そうなるな。……討ち破らせる気はねえけど！」

そう言った一輝の足に蒼翠の光が集まり、それがはじけた瞬間……一輝は第六宇宙速度で、アジィダカーハに迫る。

『むう……!?』

「疑似創星図、混合、起動……！」

その途中で一輝は疑似創星図を混ぜ合わせ、起動させる！

その手に蒼と翠の光が集まり、混ざっていき……蒼翠に怪しく光る、大鎌が現れる。

「魂を喰らいつくせ、■◆◆◆◆！」

その大鎌は無数の牙を刃に宿らせ、アジィダカーハの魂を喰らいつくさんと迫り、

『「アヴェスター」起動。相剋して廻れ、疑似創星図……!!!』

アジィダカーハはそれを自らに上乗せして自分に向けられた刃にぶつけ、その場を圧倒的な破壊が……荒れ狂わず、全て一輝の支配下に置かれる。

『ほう……疑似創星図同士がぶつかり、発生した破壊を支配下に置くか!』

「形のない物は全て俺の手足みたいなものだ。それに……」

そう言いながら大鎌から片手を放し、指を揃えて後ろに引いて……その手に、鈍色の光が集まる。

『……キサマ、一体幾つの疑似創星図を……!?!』

「自由に使えるのは、借り物を含めて三つだ。……この力、上乗せできるか……!?!」

一輝に言われ、アジィダカーハはその力を上乗せしようとするが……半分程度しか、乗せることができない。

その事実に対してアジィダカーハが顔を歪めたのを見て、一輝は賭けに勝ったことを確信する。

「乗せられるはずがないよな!この力は人間と神の合作で生まれたもの!お前の疑似創星図は、人類の生み出した遺産は上乗せできない!」

《アジィダカーハの切り札。その一つ目があいつの疑似創星図だ。あれを無視できる力は、あの三頭龍と宇宙観を共有していなければならぬ。……だからこそ、このイレギュラーな疑似創星図を生み出した。……疑似創星図でありながら疑似創星図ではない、俺達外道に

ふさわしい、な。》

ありとあらゆる事象においてイレギュラーを生み出し、敵の考えや世界の真理すら無視する外法。それを使い、アジィダカーハを倒そうとする。

『魔王を—— “絶対悪” を甘く見るでないわッ!!! 対応できぬのなら、同時に使えばいいだけの事!』

だがしかし、その工夫すらアジィダカーハは超える手段を手に入れる。

絶対にできないと思われていた、“アヴェエスター” と “^{タワルナフ}覇者の光輪” の同時使用。

アラハバキであるぬらりひよんによって生み出された疑似創星図をアヴェエスターで防ぎ、示道によって生み出された疑似創星図を^{タワルナフ}覇者の光輪で焼き尽くす。そのために、口内に閃熱を収束させていく。

だがしかし……

《そして、あの魔王は進化を遂げる可能性がある。最も恐れるのは、二つの切り札を同時使用できるようになった場合だが……そのために俺は、長い年月をかけて一体の封印をした。》

《は……? 今聞いたのに対応できるような霊獣、いないはずだが……まさか今から歪みを一体従わせろなんて言わないよな?》

《そんなこと言うわけないだろ。何……石川県にいるような、ただの妖怪だよ。》

そんな進化すら、示道は対策を討っていた。

「神格をくれてやる。先陣を斬れ、火取り魔!」

その瞬間、一輝の右手に集まっていた鈍色の光から小さな靄のようなものが飛び出し……三つの疑似創星図を除く、全ての光が喰われた。

当然、^{タワルナフ}覇者の光輪も含めて。

『何……!?!』

「残念でした。オマエのその進化は、とっくに対策されてんだよ……!」

そして一輝は、手に集まった鈍色の光を一層輝かせ・・・
六十三の道。その輝きを、完全に宿らせる。

「百鬼よ駆けよ、百鬼矢光」・・・!!!

その手を突き出し、光の矢をアジィダカーハの心臓に向けて放つ。
その光の中には、色んな姿が見られる。

妖怪の総大将であり、アラハバキであるぬらりひよんの姿が。

牛の頭をもつ中国の鍛冶神、蚩尤の姿が。

ハロウインの主役であり、子供たちを愛する悪魔、ジャックの姿が。

スサノオの穢れより生まれた鳥の頭をもつ女神、天逆海の姿が。

中国より日本に来た天狗、是害坊の姿が。

湖よりつながる地底世界の王、ユランの姿が。

地を揺らす神格をもった大蛇、パロロコンの姿が。

人を惑わせ、背後から操る九尾のキツネの姿が。

国を作り出した巨人、ダイダラボッチの姿が。

八の顔をもつ、ヤマタノオロチの原型、八面王の姿が。

英知と九つの目をもった中国妖怪の長、白澤の姿が。

百の物語より生まれる、百一の姿をもつ鬼女、青行燈の姿が。

牛鬼、河童、鬼、夜行さん、機尋、天邪鬼、納豆小僧、日本に存在

する妖怪のほぼ全てに加え、世界の妖怪、魔物の一部。それらの姿が一輝の放った光の中にあり、光とともにアジィダカーハの心臓を貫き、駆けていく。

人、妖怪、魔物、霊獣、神。そう言った存在によって組み立てられた攻撃が、人による畏怖、憎悪といった信仰が、世界から受ける救世主としての信仰が、その一撃を絶対悪を討つものにまで押し上げる。

『・・・まさか、まさかここまでの悪を背負うものが存在するとは！』

アジィダカーハは自らの心臓を貫く、既に鈍色の光も消えている一輝の手を見ながら、晴れ晴れとした笑顔でそう言い放つ。

「・・・何、ありとあらゆる世界で悪を背負うお前とは比べ物にならねえよ。たったひとつの世界、そこで高々六十二代の悪を積み重ねた程度だ。・・・それでも、絶対悪を受け止める地盤には、十分だ。」

『・・・我が屍のうえこそ正義である。外道、お前は十分に正義だ。』

「悪いが、それを受け入れてもまだ俺は外道、悪を背負う神霊だよ。……だからこそ、俺が認めてやる。」

だんだんと崩れ、その端から輝く霧となつて一輝に封印されていくアジィダカーハにそう告げた。

「神の一人として、お前を許す。悪に敗れた悪なんて格好のつかないものではなく、悪に滅ぼされた正義があることを。誰か大切に思つた人のために、“絶対悪”という最も重い人類最終試練を背負つたお前にも一つの正義があつたことを、俺が保証してやる。」

『……ハハハッ。まさか、まさかこの私が正義を保証されることになるとは！それも、私を倒した勇者に！』

ひとしきり笑つたアジィダカーハは、今度は己を貫くのは逆の手、一輝が先ほどまで疑似創星図の大鎌を握っていた手を握り、告げる。

『では、私も教えておこう。世界の全てより忌まれる悪を背負い、さらに悪でありながら悪を討とうとするその意思。それが覚悟だ。』

「それはそれは。常々ほしいと思つてる物の一つだ。それがあつて言われる……それも、神からあるといわれるとは。うれしいね。」

『さらに、私という悪まで自らに取り込もうという。そうまでして業を重ねるか、鬼道一輝よ。』

「それが俺の力になるのなら、いくらでも重ねてやるよ。それがそのまま、俺の大切な人を守る力になる。」

『そうして得た力は、いずれ身を滅ぼすことになるやもしれんぞ？』

「その時はその時だ。……いつそ、仲間を殺してもらつてコミュニケーションの名前をあげてもらえれば本望、かな。」

その言葉を聞き遂げると、アジィダカーハは線香花火の最後の炎のように燃え上がり……その全てを外道に封印されて、消えた。

深紅の布地の“絶対悪”の旗印はその紋様を変え、封印の鍵となつた本来の旗印——自由を象徴する少女と丘の旗印、“アルカディア”大連盟の物に書き換わる。

途端、火山が噴火したのではないかというような大歓声が起きた。天地を揺るがす声は神仏だけではないのだと訴えるかのような

雄々しい声が廃都を満たしていく。

生き残ったことを素直に喜ぶ者。

仲間が生き残ったことに涙する者。

喪つてしまった友を悼んで涙する者。

未来を達観して空を見上げる者。

千差万別の声が響く中で、鬼道一輝は：：気を失い、
“アルカディア”大連盟の旗印を掴んだまま、頭から落下していく。

一輝が主催したゲームは、アジールダカーハを一輝が殺したことで主催者側の勝利となり。

湖札が主催したゲームは、アジールダカーハが死に、勝利条件を満たせなくなったことで主催者側の勝利となり。

その事実を知らせる白黒の契約書類、輝く契約書類が舞う中、一輝は落下していった。

その途中、一輝の中から出てきた湖札が一輝を横抱きにし、自分の中にいる歪みの力を借りてフワリと着地する。

湖札がそのまま一輝を地面に寝かせると、すぐに四人の少女が駆けよつてきて五人で囲み、そのさらに回りを“ノーネーム”の面々が、その外側を今回の戦いに参加した人間が、囲んでいく。

一輝は箱庭で得た仲間たちに囲まれ、ほんの少しの呪力だけを残した、満身創痍の体でそこに倒れていた。

恋する乙女の顔、起きる気配のない仲間を心配する顔、また無茶をしたことに多少の怒りを浮かべる顔、旗印が帰ってきたことに喜ぶ顔。

だが、少し離れたところにいた少年はそんな表情を浮かべてはいなかった。

自分に課せられた役目を果たせず、さらには仲間がたった一人でその敵を倒したという事実に対して・・・

完全な敗北を味わった逆廻十六夜は、悔し涙を一滴、流していた。

番外編

異世界の家族へ

アジィダカーハを倒してから、俺は強制的に治療室へと收容された。

まあ、仕方ないだろう。今の俺は・・・それこそ、歩いているだけで死にかねない状態なんだから。・・・そのために呪力を消費するだけでも、命の危機。

あーあ、これは完治したら説教だなあ・・・憂鬱だ。

「・・・それにしても、暇だな・・・」

何もやれることがない。

唯一、俺の呪力や生命力を消費しないギフトである空間倉庫だけは使えるのだが、中にある本も箱庭に来てから百回近く読んだものばかり。こんな時、ネット回線があると便利でいいんだけど・・・

「さすがにそれは、無理な相談だしなあ・・・」

そう言いながら、もう本気でやるのがなくなつたことを察した。そして、ついに倉庫の中を整理してやろうかと意気込んだところで・・・ある一つの空間倉庫。大切な思い出などが関わってくる物を入れてあるところをあけてみた。

最後の手段、思い出に浸るとかいうやつで・・・

最初に出てきたのは、これまでに参加したギフトゲームの契約書類。

黒い魔王の契約書類から、階層支配者等が主催した娯楽のようなゲーム、店の屋台くらいのレベルのゲームまで様々に。

どれも何かしらの思い出を含んでいる、大切なものだ。

他にも、俺がこれまでに三度主催したゲーム・・・「神明裁判」、一族の物語―貫きたい意思―、一族の物語―我／汝、悪である―の物も出てきた。

最も、正確に俺の主権者権限と言う事が出来るのは後半二つだけで、「神明裁判」は蚩尤からかりたものなのだが・・・まあ、細かい

ことは気にしなくてもいいだろう。

むしろ、俺が俺の主権者権限で発動した物の方がよっぽど悪質だし。

・・・世界より善性を保障され、魔王のそれに落ちない主権者権限なんて、どれだけ悪質だろうか。

もちろん、やり過ぎればいつか魔王に堕ちるだろう。しかし、多少のやり過ぎは問題なくなる。俺達「鬼道」のもつ「外道」の本質ゆえに得たこの性質は、それこそジャックがやったような一方的に俺が有利になるルールすらも許容してしまう・・・ま、外道の主権者権限の事を考えるのは俺の仕事じゃないか。

それはこのゲームに挑戦するプレイヤーと秩序を守る階層支配者の仕事。そう、それでいい。

次に出てきたのは、気に入らないから暴れていたらお礼だと言って渡された品の数々。

いらないと何度も言ったのだが・・・まあ、押し付けられてしまった。

どうせ白夜叉が報酬って言って渡すのになあ・・・ありがたいけどさ。

・・・本当に、ありがたい。

俺と言う存在は、とても歪いびつなのだろう。歪、という表現が正しいのかは分からないが。

俺と言う存在は、百パーセント人間であり、百パーセント神霊。今は神霊の部分を封じているから種族的には人間なのだが、それを解いた時、そんな矛盾した存在となる。

そして、受けてきた信仰もまた歪である。

民からは悪として見られ、妖怪からは悪として見られ、魔物からは悪として見られ、霊獣からは悪として見られ、神からは悪として見られ・・・元いた世界では、「鬼道」はほんの一部を除いて全ての生命に悪として見られてきた。

だがしかし、その全ての悪としての信仰に釣り合うだけの善としての信仰を、世界から受けてきている。

だからこそ、善悪双方の信仰を・・・同量、と表現できる形で受けたからこそ、あんな主催者権限となった。

そうでなくとも、鬼道の一族は感情に欠落を抱えているし・・・種族的な意味ではなく、人間ではないのかもしれない。

はてさて、どう判断するべきなのか・・・

「おつ、これは・・・」

と、そこで倉庫の中から引っぱり出したものに、意識をとられた。

それは、一つの手紙。箱庭に招待された時の物ではなく・・・異世界の家族からの、手紙。

博愛主義者から届いた一通だけではなく、他のメンバーから届いたものもいくつかあった。

「そういえば・・・色々と忙しくて、読めてなかったっけ。」

たくさんの異世界の家族とであった数日間。

出来ることなら届いた時点で開けて返事を書くべきだったのだが・・・いかんせん、アジィダカーハ関連で忙しくてそれどころではなかった。

だから、一つ一つ丁寧に開いて読んでいく。

そして、最後に開いた五月雨からの手紙。

そこに同封されていた家族の集合写真を見てもうすでに懐かしく思えてしまっている自分に苦笑してから、手紙を読んでいく。

そして、最後まで読んでから・・・

『まぎれもない『人間』だよ 種族的なことじゃなくてな?』、か・・・

もし、そう言ってくれるのなら。

もし、俺の事をそう認めてくれるのなら・・・そう言う事でも、いいのかもしれない。

いくら道を外していようとも。

いくら人を手にかけていようとも。

いくら欠落を抱えていようとも。

いくら悪行を重ねていようとも。

そう言う事でも・・・そんな解釈があっても、いいだろう。

今回、ジャツクの持つ殺人者としての悪。そしてアジィダカーハの

“絶対悪”。

この二つを“外道”に取り込み、さらに悪の霊格を抱え込んだのだが……まあ、周りが認めてくれるのならそれは些細なことなのだろう。

「つてか、今の俺はアジィダカーハを封印したからこそ生きていられるんだし。」

再び苦笑をしてから、俺は手紙を置き、倉庫から取り出した写真立てに集合写真を入れてベッドの横にある小さな机に置く。

最後に、添付されていた赤茶色のスカーフを首に巻いてから頬を少し叩く。

そのまま体を起して、食事用の小さな机を自分の前まで移動させてからそこに便箋とペンを置き……さて、まずは五月雨宛ての返信を書くか。

そうして、手紙の内容に合わせて書いていき……書けたところで、ベッドわきに立てかけてある杖を持って、窓際まで歩く。

窓を開けると、少し風が吹いていたので……それに合わせて手紙を手放し、しばらく飛んで行ったところで銀色のオーロラに包まれたので、そのまま窓枠に肘を置いて風に吹かれる。

と、そこで部屋の入り口が開く音がした。

マズイ……

「……つて、一輝！あんた絶対安静って言われてたの忘れたの!？」

まあ、うん。予想通りと言うかなんというか……怒られた。

普段なら逃げるのだが、今の俺にはそれも危険だという事が分かっている……大人しく、そのままにしている。

で、すぐに音央が肩を貸してくれてベッドまで戻してくれたので、大人しくそこに収まる。

と、そのタイミングで鳴央にスレイブ、ヤシロちゃんの三人も部屋に入ってきた。

「あ……音央ちゃん、何かあったんですか？」

うん、何で部屋に入っただけに分かったのだろうか。

「一輝がベッドから抜け出したのよ……さすがに、部屋から出る

気はなかつたみたいだけど。」

「二輝様、お願いですから安静にしてください。」

そして、スレイブはそれを聞いてすぐに近づいてきて、そう忠告してくれた。

まあ、ね。安静にしないで死ぬって言われたもんね、俺。一番泣きそうになつてた事を思い出して、かなり申し訳なくなつてきた。

で、助けてくれないだろうかとヤシロちゃんの方を見ると・・・

「ねえ、お兄さん。これって・・・」

「ん？・・・ああ、うん。前に異世界に行つた時に撮つた集合写真。」
「届いたんだ！」

「つてか、届いてた、なんだけどな。」

忙しさを理由に出すのは・・・まあ、やめておこう。

言つても仕方のないことだし、現状をごまかすためにもそつちの話題は出さない方がいい。

「へえ・・・よく撮れてるじゃない。」

「五月雨さん、写真を撮るのもうまいんですね。」

「確かに、これは・・・」

三人の意識もそつちに向いてるみたいだし、このまま逸らす方向で行こう。うん。

「さて、と・・・まあ、長い手紙を書くのも俺のキャラじゃないし。」

四人の意識が写真に向いているうちに、他のメンバーへの手紙を書きいていく。

一つの世界につき一枚ずつ。俺らしい文章で。

「これでよし、と・・・」

さて、また勝手に立つたら怒られるよなあ・・・

「だれか、肩を貸してくれないか？ちよつと窓際まで。」

「あんた、また・・・」

「頼む。」

しっかりと頭を下げ、頼む。

さすがに、俺のそんな様子に何か感じたのか・・・鳴央が近づいてきて、肩を貸してくれた。

三人も何かを言う様子がないので、文句はないのだろう。そのまま肩を貸してもらい、窓際から先ほどと同じように風に乗せて飛ばすと、しばらく飛んでから銀色のオーロラに包まれた。もういいというと、鳴央は俺をベッドに戻してくれた。

「さっきのは？」

「ああ・・・異世界の家族への手紙だよ。」

家族。それが、俺達とあいつらの繋がりでいいだろう。

「そう・・・また会えるといいわね。」

「ええ。また会って、今度は楽しく遊びたいですね。」

「うんうんっ！次はあんな物騒なことはなしでめいっばい楽しもー！」

「・・・私も、そうできたらいいと思います。」

「・・・だな。今度会った時はフルで、遊ぶとしよう。」

そう言ってから、再び体を横にする。

ポロポロの体を動かし過ぎたな。たったこれだけの事で体力の限界だ。

なので・・・そのまま俺は、意識を手放した。

|||||

『拝啓 異世界の家族へ』

ま、何か色々と有ったけど楽しかったな。出会えてうれしかった。またなんか面倒事があったり、面白いことがあったら呼んでくれ。全力で手伝いに行くし、全力で遊びに行くから。

寺西改め、鬼道一輝より』

兄と妹。その思いに込めるのは。

これは、少し前に有った出来事。

一輝と湖札が箱庭で再会してから『T a i n B o C u a i l n g e』が始まるまでのほんの短い期間に有った、本人たちからすれば些細な。しかし周りにしてみれば何やってんだお前らというような出来事の話だ。

|||||

「あれ？何やってんだ、湖札？」

「そう言う兄さんこそ、何やってるの？」

煌焰の都のすぐそばに有る森の中。後に二人が戦う事になるのは別の場所で二人は遭遇した。

現在の二人の立ち位置は、魔王連盟に所属する魔王の一人と、それに対抗すべく準備をしているノーネームに所属するプレイヤーの一人。はつきり言って敵同士。

普通なら、たがいに武器を抜くかギフトを使うかしての戦闘になるはずだ。敵同士である以上は今後のためにも互いの戦力を削るべき。それもお互いがお互いの主力クラスであるのだが。

が、しかし。

「俺はちよつと自然の気を吸っておきたくてな。ほら、決戦前なわけだしさ。それと色々と準備をする都合上、万全の状態にしておきたいんだよ。」

「ああ、なるほどなるほど。確かに兄さんがあの神様を使えるようになっておいた方がいいかもね。私が使うのは、神話に記された神様の力なんだし。」

「ま、そう言う事だ。どの神様の力なのかは分からないけど、それでもな。それで、湖札はどうしてここに？」

「兄さんと同じ。殿下達に言ったら『そんな敵主力のすぐそばに行くとか、アホか!』って言われたんだけど、ここ以上となると中々ない

から勝手に抜け出してきた。」

「湖札もなのか。俺も自分の部屋で休むよう言われてたんだけど、勝手に抜け出してきた。」

二人は、どちらからともなく笑いだす。その瞳には一度も、敵意や殺意は浮かばなかった。

そう、戦う気が微塵もないのである。敵意もなければ警戒もしていない、お互い完全に心を開いている。もしここにどちらかの陣営の者がいれば頭を抱えるでは済まなかったであろう。

「そう言うことなら、ちよつとのんびりしてつか。ビニールシートくらいならあるぞ？テーブルとイスがいいならそつちも準備できるけど。」

「ビニールシートの方がいいかなあ。自然の気も吸わないとだし、寝転がれる方が都合がいいもん。」

「ん、了解。」

一輝はそう言うのと空間倉庫の中からビニールシートを取り出し、ついでにお茶と少しのお菓子を並べる。そのまま二人はその上に座り、菓子をつまむ。

「さて、どうする？…このまま何もせずのんびりと、つてのもありだとは思うけど。」

「兄さんって、結構精神が老人だったりするよね。」

「失礼な。」

まあ、どちらともいえるのかもしれない。何もせず、ただ時間を無駄遣いして過ごすという贅沢も、誰かと語らつて過ごすのも、体を動かして過ごすのも、どれも一輝は楽しむ。これには一輝のもつ感情に問題があるのだが、それはまたの機会に。

「じゃあ、どうせなら話しながらすごそつか。遊ぶのはこの間やったし。」

「OK。話す内容は、そうだな…箱庭に来てからかその前のお互いに会ってない期間か、どつちにする？」

「箱庭に来る前の方がいいんじゃない？私は兄さんが何をしてたのかリンちゃんに調べてもらつてたからなんとなく知ってるし、私の方は

邪魔な人達を殺してたつて話くらいしかないから。」

「了解。じゃあ、俺からでいいかな。」

湖札の発言に対して何も思うところはなく、一輝は話す内容を探す。

湖札が一輝に会いたいという理由だけで魔王連盟に参加し、その手を血に染めることに何の躊躇いも感じなかったように、一輝もまた感覚が狂っている。

自分と深い関わりのない人間が死のうが食われようが何とも思わない。だからこそ湖札が自分を探すために罪を重ねていたとしても何も言わないし、何も感じない。

むしろ二人の立場が逆であったのなら一輝は何の躊躇いもなくそうしていただろうし、また今の立場でもその必要があるのなら何人でも殺せる。

自分の大切なもの、大切な思い、大切な人のためなら文字通り何でもできるのが、この兄妹なのだ。

「つつても、俺もそこまで面白いストーリーがあるわけでもないんだよな。お姫様を助けた話は、湖札も知ってるんだろ？」

「うん。それはもう、遊園地に連れて行ったとか同じ部屋で過ごしたとか、色々よね。」

呆れ半分、ムカつき半分という声音で湖札は言うが、一輝は徹底して気付かないふりをして、次の話を探す。

一瞬同じ布団で寝た話をしてやろうかと悩んだが、さすがにそれは地雷だと理解したようだ。

「後はまあ、席組みになった関係で面倒事が増えたくらいかな。光也はあんまり表に出せない仕事を正体不明だからって俺に押し付けるし。」

その度に莫大な金をむしり取っていたやつがよく言うものだ。

「でも、その分強い敵と戦う機会もあったんじゃない？」

「そうだな。白夜とは何度模擬戦をしても勝てなかったし、慈吾朗は力では勝ってるはずなのに経験の差で負けるし。…カグツチと戦ったのも、今となつてはいい思い出だな。」

「兄さんが一回も勝てない人間なんていたんだ……」

その事実に対して湖札は驚くが、その相手とこれから戦う事になることを理解しているのだろうか？

何となく、理解していない気がする。

「後は、外国の一位レベルと戦う機会ができたことかな。ヨーロッパ一位とか、かなり勝つのに苦労した。」

「それって、今代のアーサー？」

「そう、そいつ。アレクサンドラ・メイヤール。普段は超がつくくらい緩いのに、戦う時はエクスカリバーを使いだしたりで、もう強いもの。」

まるで楽しかった思い出を振り返るような気軽さで話す一輝だが、その時の戦いの傷跡は元の世界に今でも残っている。それほどのことをおきながら、のんきなものだ。

「そう言えば、中国の第一位とも戦ったって聞いてるけど？」

「ああ、あいつか……開始十秒で足と腕折ったから、そんなに強くないんじゃないか？」

「ねえ知ってる？あの頃は、中国の第一位は世界四位で、ヨーロッパの一位は世界八位だったんだよ？」

つい湖札が突っ込みに戻りてしまうレベルの驚きだったようだ。

だがしかし、一輝は特に何も感じていないようで、

「で、湖札の方は何かあったのか？」

「え、えっと……そうだ。ちよつと悪魔の封印を解いちゃって大惨事になったことはあったなあ。」

「どんな感じに？」

「うん、それがね……雨宿りに立ち寄った神殿に悪魔が封印されてたみたいで。ふとした拍子にそれを解放しちゃってもう大変！」

さらつともものすごいことを言っている。こういうところは、一輝の妹だ。

「全部殺して封印したところに神殿を管理してた人たちが来てさー。結構怒られたんだよね。」

「そいつは大変だったな。それで、その悪魔ってのはなんだったんだ

？」

「えっと、確か・・・アガレスとアンドロマリウス、アムドウスキアスだったかな。といつても、完全に悪魔としての姿で出てきたからこの三体での主催者権限は無理みたいなんだけど。」

結構な大物である。何故主催者権限を持ちえないのかが不思議なほどに。

そして、その三体を相手取って全て殺して封印してしまう湖札にも驚きであるが。

「その頃は、まだ奥義の習得できてなかったんだろ？よくその三体を殺せたな。」

「その辺りは、相性の問題かな。それこそ三体が七つの大罪の悪魔だったり他の神話体系の悪魔だったりしたら難しかったけど、『ソロモン七十二柱』を討つ矢を作ったら、まとめて潰せた。」

湖札の持つ、とある女神から与えられたギフト、『言霊の矢』。敵の持つ霊格を語ることでその力、存在を討つ矢は、ソロモン七十二柱という大まかな括りでも討ち抜けたようだ。

「その三体はまだブチブチ言ってるから、使ったこと無いんだけどね。」

「自分で殺したんだから、強制的に従わせることも出来るんじゃないか？」

「出来るんだけど、それだといつまでたっても仲良くなれそうにないから。どうでもいい妖怪とかはそれで済ませてるんだけど、あの三体はちゃんと強いからねえ。」

鬼道の檻の中の存在は、殺した本人は強制的に従わせることができ。故に、檻の中身が全て自分の手で殺した存在である湖札は中身の全てを従わせることが出来るのだが、それをするつもりはないという事だろう。

ちなみに、一輝の場合は代々の鬼道に連なる全ての者の檻の中身がまとめられているので、大部分が自分からは一輝に従わない。どいつもこいつも面白いことが大好きなので、従わせるかいつそ一度バトルして倒すかすればそれで大体は済む。

一輝ほど面白い人間は中々いないため、後従っていない異形の類はこの時点では一柱だけだったのだが。

「・・・さつきも言ったけど、俺もまだ一番の戦力が言うこと聞いてくれないんだよなあ・・・」

「むしろ私としては、霊獣がみんな従ってることも驚きなんだけどね。・・・って、敵同士なのに手の内を明かしてもいいの？」

「あー・・・そういや、そうだな。」

自覚なしである。そして、普通にダメだ。どう考えてもダメだ。

にもかかわらず、本当にこの二人に気にする様子がない。アハハ、とか笑いあってる。

「・・・それっ!」

「ん?」

二人はならんで寝転がっていたのだが、湖札が一輝の方に転がって抱きついた。

一つ違いの男女が寝転がって重なっているという、誰が見ても勘違いする構図である。

「・・・湖札?」

「えへへー、ぎゅー!」

問いかける一輝を無視して抱きつく力を強め、一輝との密着具合をあげる。

一輝はつい先日再会した時の湖札とは違う、まるで昔に戻ったかのような様子に少し驚きながらも、懐かしみ、その背に手をまわして抱き返す。

「・・・ねえ、お兄ちゃん。やっぱりこっちにこない?」

「・・・諦めてなかったのか。」

「うん。だってそうでしょ?お兄ちゃんだって・・・鬼道の一族がどっち側なのかは、分かってるはずだし。」

「・・・まあ、そうなんだけどなあ・・・」

一輝自身、自分が善側の存在だとは微塵も思っていない。

自分自身の目的のために、気分のために、ただ気に入らなかったという理由だけで、多くの人を殺してきているのだ。

性別を問わず、年齢を問わず、種族を問わず、その手にかけてきた。
《そんな自分がどっち側なのか、それは理解してるけど・・・》

「・・・それでも俺は、今の場所にいたいんだよ。だから、そっちに行くことはできない。」

「・・・絶対？」

「ああ、絶対に。」

「・・・お兄ちゃんの、ばか」

拗ねたように一言つぶやき、湖札は一輝から離れる。

そのまま立ちあがると、一輝を指差して、

「今回のゲーム、私は兄さん達の相手をするように言われてるの。」

「ああ。予想はついてる。」

「だから、そこで私の主催者権限で兄さんにゲームを挑む。そして：：それに負けたら、兄さんは私に隷属して。」

一緒に来てでも、また暮らしたいでもなく、隷属して。

それは、一輝がいくら言っても聞かないと分かっているからこそその言葉であった。

それでも一緒にいたいのなら、選択肢は二つ。湖札が自分から取れるのは、こちらだけである。

「・・・そうか、分かった。なら、こっちからも二つ。」

「私の出した数よりも多い・・・うん、何？」

「二つ目に、約束。この喧嘩は、どっちかの勝ちが決まるまでやることを約束する。」

「・・・喧嘩、なんだね。」

「ああ。生涯初の兄妹喧嘩だ。そして・・・これは、仲直りとかで終われるものじゃない。」

湖札自身もそう思っているのか、体を起こした一輝に向けて一つ頷く。

「じゃあ、二つ目だ。俺が勝ったら、湖札は俺に隷属しろ。」

「やっぱり、そう来るよね。」

「そういくにきまつてるだろ。どっちかが隷属する以外では、この件は終われない。」

その形でけりをつけなければ、本人たちは構わなくても周りから干渉される。

片方は魔王連盟に所属する魔王で、もう片方はその魔王連盟に戦いを挑む側の人間。敵対する組織に所属している以上、絶対に裏切れない形を作らなければ周りは納得してくれない。

「でも、うん。OK、それで行こう。．．．私はまた直前に誘うから、それまでに考えが変わってたら言っただけ。」

「変わることはないから、このままでいいさ。お前も俺も、今の場所を捨てる気はないんだから。」

「分かっている。それでも、聞いておきたいの。．．．お互いに本気で、喧嘩しようね。兄さん。」

最後にそう言い残して、湖札は立ち去る。湖札がそのまま魔王連盟の元に戻ろうとしているということが分かっているながら、一輝はその後を追わない。

家族が間違った道に進んでいるのに、それを止める気は一切ない。そんな歪んだ感情。

ただ、それでも。一つ残っているとすれば．．．

「．．．妹との喧嘩で本気を出す兄貴が、どこにいたんだよ。」

それは、湖札が立ち去ってからしばらくした後。

一輝がその場を立ち去る寸前に口にした、この言葉ではないだろうか。

if ストーリー

「やったねえ、兄さん」

「ああ、まあかなりやらかしたって感じなんだけどな」

どこまでも荒野が広がるその場所。草木の一本も生えてはおらず、二人を除けば生命は存在していないその場所、その世界で。

この上なく歪んだその兄妹は、互いの手をかさねてそこに座っていた。

「それにしても、あの時は驚いたな。まさか兄さんに勝てるだなんて」

「オイオイ、勝てると思ってもなかったのに喧嘩を売ってきたのか、湖札は？」

「それはないんだけどね。一応、ちゃんと勝つつもりではいたよ」

呆れたように問いかけた一輝に対して、湖札は軽く笑ってそう返す。

二人にとって初めての兄妹喧嘩。その最後の一撃、一輝の頬に打ち込んだ湖札の一撃が一輝より一瞬早くきまったことで彼女の勝利に終わったその喧嘩。いま二人が共通して思い出しているのは、その時の光景である。

「ただそれでも、兄さんは私の予想をかなり飛び越えてくると思ってたから」

「お互いにお互いの予想なんて裏切ってただろ」

「それはそうなんだけど、ほら。兄さんって兄さんだし」

「なんだよそれは」

くくつ、と堪えられなかったように小さく笑いをもらす一輝。この世の誰よりも愛おしい彼のそんな姿を見て、湖札はその肩に少しよりかかる。

「でも、実際に兄さんは兄さんだった。私の予想なんてどこかに消えちゃったみたいにな」

「なんだよ、急に。ってか今はお前が俺の主なんだから、従僕に予想を超えられたらダメだろ」

「あんなことをしておいてよく言えたものだね、この口は」

少しだけ力を入れて、一輝の頬をつねる湖札。いひやいいひやいと
か言ってる一輝であるが、いたいはずがない。湖札はそんなところに
ムツと来て、少しだけ力を強めた。本当に痛いくらいに。

「ちよ、湖札。ホントに痛い」

「痛くしてるんですよーだ」

「え、えー・・・」

もうどう反応していいのか分からなくなってしまい、一輝はそのまま
ま抓られたままになる。だが、ここまでやってもただやられるだけに
なっている一輝を見て、湖札は一つため息をついて手を放した。

「はあ・・・こんな兄さんだから好きなんだけど、それでもあそこまで
されるともう何も言えないよ」

「あそこまで、つてーと?」

「身内だけ全員箱庭の外に放り出して、箱庭蹂躪」

簡略化されているのにとても分かりやすい。今二人の前に広がっ
ている光景は、一輝がそれを実行したことによってできた光景だ。

元々の魔王連盟の目的である太陽の主権戦争。だが一輝はそんな
もの無視して行動を始めたのだ。真っ先に行ったのは、自分にとって
大切である者たちを外界に飛ばすこと。そのために必要なギフトを
主権者権限によるギフトゲームで奪い取り、反対する声を聴きもしな
いで全員テキトーに飛ばした。

そして、そのまま一族の主権者権限を箱庭にいる全員を対象に発
動。後は流れのままに向かってくる全てのものを殺し、全てのコミュ
ニティを滅ぼし、全ての階層を破壊しつくした。今壊れきった箱庭の
世界にいるのは、もう彼ら魔王連盟の者たちだけである。

「はあ・・・にしても、ホントにすぐに全部終わっちゃったなあ・・・
なんで兄さん、一桁から来ても勝てちゃうの?」

「俺達鬼道がそういう存在だからだろ。何を分かりきったことを」

「それはそうだけど、あれにはみんな驚いてたんだよ?」

「二桁三人相手にしてかったやつが何を言ってるんだか」

「・・・それを言われると、ちよつと言い返せそうにない」

すつと目を逸らす湖札。彼女もまた何してんだコイツ、な状態だ。なんだこの規格外兄妹は。どこまでできるんだこの二人は。

「・・・それで？これからはどうするの？」

「あー、他のみんなはどうするって？」

「みんなバラバラ。ただ、こんなところにとどまる人はいないみたい」「まあ、こんなところにとどまろうとは思わないだろうなあ・・・」

自分が残した爪跡を、苦笑しながら見つめる一輝。多少の自覚はあつたようだ。

「・・・でも、俺はここに残りたい」

「奇遇だね、兄・・・お兄ちゃん。私も、このまま兄さんとずっと二人でいたい」

その会話が終わると、二人の手に込められている力が少し強くなった。もう放さないよ、もう二度と放れないよ、そう主張しているかのように。そして。

「大好きだぞ、湖札」

「うん、私も大好き。愛してるよ、兄さん」

紡がれた、愛を語る一言。

それはなにもなく、ただ広がるだけのその世界にとけていった。

湖札の受難

「うーん、最近こういうの多いなあ・・・発情期なのかな？」

湖札が箱庭に来るよりも前の、とある時期の話。実力を評価され、かつ後継者以外、つまり長男長女以外が特別に国からの全面援助を受け世界中を好きに旅をして修行する制度。陰陽術師や退魔師としての才能だけでなく勉強面でも大きな才能が求められるその制度をフルに使って長期旅行を楽しみながら修行をしていた時期の話だ。

このころはまだ十三のころで、それに対してと言うのはどうかと思うのだが、湖札はそこそこの頻度でナンパを受けていたのだ。言ってしまうえば人間以外の種族もヒトとして暮らしているのだから年齢的な概念がずれていることも当然ある。だが、そうと分かっても湖札視点で見れば嫌になっても仕方ないだろう。そして、それがピークに達したからなのだろうか。ふと、彼女はこんなことを考えた。

「あ、そうだ。ド砂漠に行けば人いないよね！」

考えてしまったのだ、こんなぶっ飛んだことを。というか頭おかしいんじゃないかな、ということ。

普通の人物であれば、この時点でかなり多くの障害があるしそのためにやめる人物がほとんどだろう。人がいない地域であるということとはつまりそれだけいまだに敵対する異形がいるということであるし、移動するための費用もかかる。そもそも人間が普通に生きていられる環境ではない。というか生きていくために必要な荷物は多すぎるレベルだ。夜とか凍え死ぬるし。なのだが・・・

「異形はまあ、いぎとなれば死ぬ気で矢作って撃てばなんとかなるよね！」

こうして一つ目の障害はぶっ壊れた。

「お金についても日本が全面負担してくれるし、そもそも旅の間になり殺したからたくさんある！」

二つ目の障害は、そもそも障害でもなんでもなかった。

「荷物は一切問題なし！」

三つめの障害もまた、空間倉庫のせいで障害でもなんでもなかった。

つまりまあ、ようするに、だ。これらの一般的に障害とされているものはその全てが何でもなくなってしまうたし、そもそもマジで何でもないし、で。彼女はそこへと向かうことに決めたのだ。ナンパ避けのために。ナンパ避けのために。

やはり、彼女は立派に一輝の妹である。

で、マジで即断即決してそのまま大量の水と寒さをしのげるだけのかなりしつかりとしたテント、大量の食糧、その他諸々必要になるものを確保し空間倉庫に放り込み、その身一つで飛行機に乗り込んで、来ましたでっかい砂漠。気軽にいけちゃうとか、砂漠も身近二ナツタナ。

「うわあつ。やめとけばよかった・・・」

殴りたい、この子。

|||||

「ふう、やっぱり異形はちよつと強めだな。自然発生してすぐじゃないし、それなりに死んだ時より成長してるのかな？」

と、あの後。クツツ暑いしそこはストレスだけどさすがに何もしないで帰ると国がうるさいから、という理由でひとまず砂漠を一、二週間ほど練り歩くことに決めた湖札。水行符を体に貼りつけて少し呪力を流して自分の周りの温度を下げることで暑さ避けを、薄く結界を張ることで日光避けを、麦わら帽子をかぶることで眩しさ避けを行い、麦わら帽子ならと白ワンピースを着て歩き回っている。ついでに出会った異形とバトルをして、普段に比べたら強かったためにちよつと満足していたり。

その魂は自動的に湖札の中に封印され、残った死体は火行符を貼りつけて一気に燃やし尽くす。

「よし、これで全部かな。これだけ派手に殺せばしばらくは来ないだろうし・・・お昼ご飯にしよーつと」

つい先ほどまで大量の死体を積み上げていたとは思えない気軽さで空間倉庫を開け、分厚すぎるシートを地面に敷いて倉庫の中から食料を取り出す。最終的には日持ちするものを食べていくことになるが、まだ初日。普通の食事にありつけるというわけだ。

「さ、いったただつきまー・・・うん？」

と、手を合わせて今まさに食べだそうとした瞬間。分厚いベーカーコンが用いられたBLTサンドの上にポツン、と水滴が落ちてきた。

「・・・砂漠で、水滴・・・？というか、雨？」

当然のことだが、別に砂漠で雨が降らないというわけではない。むしろ思いつきり降って流れに吞まれて溺死する例もあるほどだ。だがまあ、砂漠の定義的にもそれは少ないものだし、大丈夫かなーなんて油断していると・・・

「あ、ちよ、うわ!？」

ザ・土砂降りである。今まさにお昼ご飯と言うタイミングで降りまくった雨。BLTサンドはもうだめになってしまったし、しかも運の悪いことに傘などの雨具は先日ダメにしてしまったばかり。まさか砂漠で雨にあうなんていう運の悪い目に会うとは思っていなかったために買いなおしてもおらず、まあ、つまり・・・

「雨のバカアーーーーーーー!」

思いつきり雨に降られながら、彼女は全力で走り出した。そんな砂漠で走ったところで何かあるとも思えないのだが・・・幸運なことに、すぐそばに一つの神殿が存在する。

まあ神殿とか言うくらいだし、基本立ち入り禁止つてのが言うまでもない常識なんだけど・・・そんなことを気にするようでは、一輝の妹とか名乗れないのである。何のためらいもなく入り口にかけられていた封印をぶち壊し、中に入って雨宿りを開始する。

「あー、もー・・・せつかくの帽子にワンピースがあ・・・着替えないと・・・」

とにかく逃げこんでから、彼女は倉庫からタオルを取り出してふきつつ着替えを引っ張り出す。こういう時お兄ちゃんみたいに倉庫が複数あると分けて入れられるのになーとか考えながら目的のものを引っ張り出して、ひとまず脱ぐ。まだ上の下着はつけていないために

パンツ一枚になって、そこもグツシヨリになっているのを見てそれも脱ぐ。

まとめて放つてから水行符を取り出して一通り体を流して、体を拭いて水気を取っていく。

「・・・今更だけど、ここ誰かいたりしないよね？入り口結構嚴重に封印されてたし、誰かいた形跡もないから大丈夫だとは思うんだけど・・・」

自分が全裸でいるという不安感からか、ふとそんなことを考えてしまふ。一度浮かんだ不安感はそうそう拭えるものではないのだが、かといってすぐに分ることもない。さてどうしたものかと考えて・・・とりあえず、早く着替えることにした。

髪はいったん放置して、下着をつけ、いざ服を着ようとしたところで・・・パキン、と。何かが割れるような乾いた音が。

「・・・うん？」

「お、なんか半裸の女がいるぞ」

「目が覚めたと思つたらいるな」

「盗賊的にはありがたい。やるか」

順番に、ワニに乗って手に猛禽を止まらせた老人、ユニコーン、蛇を首に回した青年、と言つた見た目をした三人組。ぱつと見では二人目とか人間の味方をしてくれそうなもののだが、そうであればこんな発言は生まれていない。

「ふむ、まあアリだな。幼くはあるが」

「ならさつそくだけど人間の姿になろうかな」

「よし、やるかのう。あ、終わつたらこやつらの餌にしよう」

と、そんなことを言いながらユニコーンがシヨタい男の子の姿になり、三人そろってゲスい笑みを浮かべている。そんな視線を向けられ、今更ながら人間と比べればるか上位に存在する気配、そもそもその存在としての格の高さを隠そうともしない、全てを畏怖させんとするその気配の前で・・・怖いほど冷静に、動きやすいジーンズをはき、ラフなTシャツを着て、靴下と靴を履く。抵抗があることを面白がっているのかそんな様子を手を出さずに見ている三人だが、湖札はそん

オリジナル編 1

目覚め

一輝がいた世界で、一つの物語が紡がれた。

それは、とある一族の物語。ある事情から世界中で有名な、日本に存在したとある一族の物語だ。

その一族は、日本の呪術会に置いて最も大きな罪悪を抱えるとされた。

それは、かつて全ての妖怪と人間が対立していた時代。

それは、妖怪を屈服させたがえるのであればともかく対等の契約を交わすことを禁忌とされた時代。

それは、人間を屈服させたがえるのであればともかく対等の契約を交わすことを禁忌とされた時代。

そんな時代に、神に等しい大妖怪と契約した一族の物語。

そんな時代に、最も強い意志を持った人間と契約した妖怪の物語。

だがしかし、時代の流れとともに人間と妖怪は友好を結び、対等な契約を交わすことも、婚姻を結ぶことも珍しくない時代になってもなお、その一族は悪としての罵りを受けた。

常に悪としての名を、『外道』と言う侮辱を受けるその一族。しかし、その一族は全ての民が知る場でも、全ての民が知らぬ場でも世界を守ってきた。

民は知っていた。その一族によってどれだけ平和に暮らせていたのかを。

その一族は人間とは比べ物にならないほどの力を持つ霊獣を七体も倒し、二度と現れないよう封印して見せた。さらに、人間には到底討伐できない神をすら一柱、討伐し封印して見せた。しかし、民は彼らを悪として罵った。

彼らは恐れたのだ。それだけの力を持つその一族を。そして、封印した者たちの力すら振るう事が出来てしまうその一族を。だからこそ、彼らはその一族を罵り・・・そして後悔した。

それだけの働きをした彼の働きは、その一族の者が一人残らず世界から消えた時初めて、全ての民に公開された。

その一族によって、民がどれだけ救われたのかを。人間に知りうる限りの範囲で、民へと知らされた。

彼らは、そんな一族を『外道』と罵ったことを悔い、彼らに十分な感謝を伝えることすらできなかったことを悔いた。滅びた一族について詮索することを禁止されていながらその事実が知らされたのは、ある事情から・・・一族が滅びながらも生き残り、国の第三位として国の名前を背負って戦った戦士がいたからだ。彼の存在に、彼の活躍に対して報いるために、特例としてこの事実が知らされた。消えてしまった国の第三席を英霊としてまつるためにも、その手順が必要であったのだ。

そうして知らされた事実から、人々は一つの物語を紡いだ。

大罪を背負い、力を得て民を守った彼らのことを後の世代に語り継ぐために。

そして、その物語は新たな神話となる。

狂信者による宗教としてではなく、語り継がれ、祀られる神として神話になった。

その物語は、こう題名づけられる。

その一族は、百鬼をしたがえる。

その一族は、一度動き出せば止まらない。

その一族は、民へ光を示した。

故に・・・その題名は、『百鬼矢光』。

|| || || || || || || || ||

「ん・・・んは・・・？」

目を覚ました一輝はそこがどこなのかを知るために見まわそうとして・・・しかし、首を動かさず少しばかり困惑する。

何かしらの形で拘束されているのかとも思うが、首にそんな違和感はない。体中の感覚で違和感があるのは腕の点滴だけであるために、

余計に困惑する。

《えっと、何でなのか・・・》

と、そこでようやく原因に行きついた。超がつくほど疲れているのだ。というか、動かすほどの力が湧かない、という方が正しいだろうか。

一輝はアジルダカーハとの戦いにおいて使える限りの力を使った。檻の中の妖怪の妖力を全て注ぎ込み、霊獣の霊力、蚩尤の神力、歪みの持つ力も同様にした。さらに湖札の呪力を約九十パーセント自分が使えるように変換して使い、最後には自分自身の呪力を死ぬ直前まで、さらに生命力も注ぎ込んでとどめの一撃を放ったのだ。

結果としてどうなるか、それは明らかだろう。それらが回復するまでは動けないのも当然のことだ。

と、そのタイミングで部屋の入口が開く音がして、一輝はそちらを見ようとして・・・首が動かないことで見れないため、ストレスをためる。

「あ・・・一輝さん、目が覚めたのですか!？」

「え、ホント!？」

「あー・・・その声は、リリとサキか？首が動かねえから、他に誰がいるのかも分からないんだけど・・・」

一輝がそう言うのと年長組の二人はベッドに駆け寄り、一輝の顔を覗き込む。それ以上のもの音がしないことで一輝はこの二人だけなのだという事を認識した。

ついでに、物が落ちる音から何か持ってきてくれたんだなあ、という事も。そして、それがダメになったかもしれない、という事も。

「あー、おはよう、二人とも。とりあえず泣かれると困るっていうのと、何がどうなってこうなってるのかとか聞かせてくれるか？」

「あ、はい・・・」

もう一人の一輝がサキと呼んだ少女だけは耐えられなかったように泣き出してしまったが、リリだけはどうかそれを抑え込み、一輝へと今の一輝の状況の説明を始める。

あの後何があったのかの説明ができた方がよかったのかもしれない

いが、地上にいなかったためにそれは出来ないのだ。

「えつと・・・細かいことは清明様の説明を聞いていても分からなかったのですけど。」

「俺の診断、あいつがしたんだ・・・いや、陰陽の神だし、適任なのか・・・？」

「そんなことはどうでもいいんです！」

「あ、はい・・・」

軽くふざけることでその場の空気が変わればという一輝の発言は、わりと・・・いや、かなり本気目のリリの怒りの声によって潰された。そして、リリがここまでなるという状況にあの一輝が大人しくなった。

「とりあえず理解できたことだけお伝えしますが、一輝さんは今、死の直前くらいになってしまっているんです！」

「・・・まあ、あそこまで無茶したからなあ・・・清明は、なんて言うてた？」

「・・・呪力の使いすぎに生命力を注ぎ込んだ事、そして檻の中の存在の力を引き出したことが無茶すぎのレベルだったために死の直前なんだそうです」

一輝はそこでようやく、自分の体が首を捻ることすらできない理由を理解した。体にそれだけの余裕がないのだ。

今、一輝の体は色々なものを回復させようと全力を費やしているのだ。ギリギリ死なずに済むより少ない量しか残らなかった呪力を回復させていきながら、その大半を檻の中の存在の妖力等を回復させるのに回し、生命力の回復はほんの少しずつ行われていく。そんな状態の体を動かしたら死ぬ可能性すらあるために、自らを守るために体が動かないのだ。口だけは動くのは、何かを食べなければ余計に危険だからだろう。

「・・・他には？」

「・・・これから先、生き残ったとしても意識が戻らない可能性すらある、と。それも、かなりの高確率で。」

「それで、俺が起きたことであんなに驚いてたんだ・・・」

周りからしてみれば、一輝が意識を取り戻したことは奇跡的なことなのだろう。一輝本人にしてみれば、自分自身の霊格を成す功績の都合上起きないことはないために実感がわからないのだ。

「・・・それと、もし起きたならまた呼んでほしいとも。それに、黒ウサギのお姉ちゃんに耀様、飛鳥様、レティシア様、ペスト様、白雪様、ジン君も起きたらすぐに会いに行くからって。」

「・・・ちなみに、他の主力メンバーはどうしたんだ？」

一部一部名前の出ていない人間がいたために、一輝はリリに尋ねた。

いかにも気にしそう・・・というか説教しに来そうなメンバーの名前があがらなかったことと、笑いに来そうなやつ（本心からではないことは分かっている）の名前があがらなかったことに違和感を感じたのだ。

「えっと・・・十六夜様は『一輝のことだし、大丈夫だろ』と・・・何か有りそうな感じでしたけど」

「?・・・まあ、気にしなくていいか。」

あの十六夜が、という事に一輝は一瞬だけ疑問符をあげるが、すぐに気にしないことにした。十六夜の事だから気にしなくていい、という判断にしたのだろう。

「で、残りの方たちは・・・音央様と鳴央様は『説教するにしても、まずは回復してからにしないと危ない』と」

「どこまで説教する気なんだ・・・」

軽い恐怖心を一輝は抱いた。

回復してからにしないと、であればまだいい。まずは回復、という心が見て取れる。だがしかし、その後に『危ない』とつけばもう・・・どうなるのが全く分らない。

「スレイブ様は『恥ずかしいことだが泣き出してしまったって迷惑をかけるだろうから、それは回復してからにしたい』と」

「泣きだすのはやめられないんだな」

「スレイブ様ですし・・・」

妙に納得できる一言である。スレイブだから。

「ヤシロ様は、『お兄さんだし、きつと大丈夫だよ。ちゃんと回復したらめいいっぱい甘えさせてもらう事にする!』と」

「一番安心するなあ・・・」

『めいいっぱい甘える』というのがどこまでなのかは全くもって分からないのに、一輝は安心感を抱いた。前二つが何が起るのか分からなさ過ぎて感覚がくるっている可能性がある。

「えっと・・・なので、清明様と黒ウサギのお姉ちゃん達に連絡してきますね。」

「うん、悪いけどお願い。・・・その前に、涙だけぬぐってからな。」
「あ・・・はいッ・・・ごめんなさい、私もちよつと泣いてからにしますね」

リリはそう言つてサキと同様に一輝の布団に顔をうずめ、声をあげて泣き始める。せめて一輝とリリの邪魔をしないようにと声を殺して泣いていたサキも、声をあげ始める。

一輝はそんな二人の頭を撫でてやりたいと思いつつもそれができないことにもどかしさを感じつつ、自分のためにここまで泣いてくれる人がいることに感謝する。

容体

「二一輝(さん)(君)!!」

「おー、ヤッホー三人とも。一気に賑やかになったな。」

清明に診察されている一輝は、部屋の開く音と同時に入ってきた三人の声からすぐに誰が来たのかを察し、その声をかけた。そして、

「って、この期に及んでふざけている場合ですか!？」

「黒ウサギ、ストツプや。今一輝君にダメージを与えるのはやめといてや」

軽すぎる一輝の対応に対して反射的にハリセンを取り出した黒ウサギと、それが構えられる前にとめた清明。そんな様子を一輝は見ずに想像していた。

「う・・・スイマセン・・・」

「全く、ダメよ黒ウサギ。病人にハリセンを向けるなんて。」

「全くだよ。これだから箱庭の貴族(笑)は。」

「って、誰が箱庭の貴族(笑)ですか!？」

そして、その分なのか飛鳥と耀の二人が黒ウサギにハリセンでたたかれた。

妙にバランスが取れている。

「悪いな、心配かけて。この通り俺は意識を取り戻したから。」

「あら、それにしても全然大丈夫そうにみえないのだけれど。こちらに顔を向ける様子もないのだし。」

「体が全然動かないんだよ。目を開いたり眼球を動かしたり口を動かしたりは出来るんだけど、他が全然動かない。首をひねることすらできないんだ。」

と、その一輝の言葉で三人は一輝の体が後遺症を負ってしまったのかと思っただが、

「ああ、大丈夫や。今一輝君の体は休みたがってるんや。だからこそ、こうして体が動くことを拒否してる。」

「ああ、そう言う事ですか・・・って、体がそこまでなるほど酷使したのですか!？」

「体よりも呪力、生命力の類やな。とはいえ・・・」

と、そこで清明が全ての診察を終えて立ち上がり、リリとサキの二人が一輝の体を支えて背もたれを外し、ゆっくりと横たわらせる。

「ま、また無茶したら今度こそ死ぬやろうな。体が動くようになるまでは絶対安静。食事とか体を拭いてもらうとかは子供たちにも頼むんやな」

「食べさせてもらい、拭いてもらい、か・・・マジかあ・・・」

ちよつとアレな状態に一輝はどんよりとする。が、他の方法もないためにそれを受け入れた。

「で、体が動くようになってもしかばらくは絶対安静。そやなあ・・・せめて檻の中のやつらを全回復して、君自身の生命力と呪力も最低半分が回復するまではベッドの中や」

「それ、何も変わってねえよな？」

「そうでもないで？食事は自分で取れるし、体も背中以外は自分でけるやろ。」

「なるほど、ね・・・結局、当分の間は暇になりそうだな。」

「そやな。ま、多少歩くくらいは体がもつかもしれんし、何かあった時のために杖ぐらい準備しといたほうがいいで。」

とはいえ、そんな状態で歩いているのを見つかったら怒られるだろう。よつぽどのことがない限りはベッドの中である。

「そんで、さつき言っただくらいまで回復したらベッドの中で無くてもええで。」

「まあ、それくらい減るのはよくあることだしな。」

「せやな。といつても、それは呪力の話であって生命力の話とはちやう。ベッドから出ることは許可するけど、体の一部が動かんようによか」

一気に一輝の表情がうげつというものに変わった。よつぽどいやらしい。

「ちなみに、どんな感じに・・・？」

「そやな・・・基本的には腕を封印。食事中やトイレなんかでは足に変更。お風呂や寝る時なんかはなしでええやろ。」

「それ、ずっとなしじやダメか？」

「ダメやな。一回ちゃんど回復させとかんと、どうなるか分からんし。よっぽど両方解かないと出来なくてどうしても自分でやらなあかんことがある時はええけど。」

つまり、基本的には完全封印である。そして……

「とりあえず、一輝さんには手伝いに年長組の者を付けましょう。サキ、貴女にお願いしていいですか？」

「は、はい！頑張ります！」

急に黒ウサギから任されたサキという少女が驚きながら了承を返す。その場でそうなってからのサキの仕事をどうするかをリリと話し始め、一輝は完全に封を解くのは基本ないな、という事を理解した。

まあ、一輝に隷属している四人がいればあの中誰かに任せる形になっただろうから、それと比べればまだかなりマシだろう。いや、ヤシロは見た目的には大丈夫かもしれない。それ以前に、黒ウサギもそこを考えたからこそ子供を付けたのか。

「……それで結局、一輝は大丈夫なの？」

と、最初に入る時に喋ってからここまでほとんど喋っていなかった耀が、清明に結論を求める。

「ま、そやな。今無茶をすれば九十パーセント以上の確率で死ぬし、歩けるようになってからであつても無茶をすれば後遺症がなにかしらの形で残るかもしれへん。そんな感じや。」

「……つまり、しばらくの間一輝は能なし？」

「間違つてはいないけど、その言い方はやめてくれ。……明後日には、檻の中のやつを一人子どもたちの手伝いに回すよ。」

「でも、それは危険なのは……」

「いや、そいつを出す分には俺の方に負担はないみたいなんだ。……つっても、完全な状態で出せばかなりの負担になるんだけど。」

と、そこで一輝はリリに向けて、

「そう言うわけで、明後日にはそいつをだすからこき使つてくれ。力仕事が大暴れか、物を壊すくらいしか能がないやつだけ。」

「えつと……では、力仕事をお任せしますね。」

「そうしてくれ。名前とかはまた本人に直接、で。」

一瞬悪戯者の顔をした一輝に黒ウサギはいぶかしげな眼をするが、さすがにこんな時に何かをすることはないだろう、と判断した。…それが正しいのかはともかく。

「まあ、とりあえず今言えるのはそんな感じや。明日にでも封印用の呪具は持つてくるから、回復したらそれを使つてな。それと、ついでに霊薬なんかもテキトーに見つくるつとくわ。」

「悪いな、清明。代金なんかは俺が回復したら払うから、つけといてくれ。」

「とらへんよ、そんなもん。君のおかげでこの箱庭は救われたんやから、そのお礼や。…それにしては、かなり安くなつてもうてるけど。」

そう笑つた清明は荷物を持ち、部屋を出て行くこうとする。

そして部屋を出る直前、

「そや、お見舞いなんかの申し込みもあるやろうけど、せめて自分で起き上がれるようになるまではダメやで。今は精神的負担もあかん。その時になれば、そう言う疲れくらいなら問題ないけどな。」

「…分かりました。では、今来ている申し込みもその時まで待つていただきますね。」

「え、もう来てるのか…?」

意外そうな顔をした一輝に答える者は誰もいなく、清明はそのままリリとサキの二人に見送られて出て行つた。

「それにしても…良かったわ、一輝君の意識が戻つて。」

「あはは…それについては、皆様に迷惑、ご心配をおかけしました…。」

飛鳥の言葉に対して一輝は割と本気で申し訳なきように謝つた。とはいえ、言葉だけで頭を下げる、の様なモーションはつかないのだが。

「ううん、気にしなくていい。一輝はそうなつても仕方ないだけのことをしてたんだし。」

「YES!今や、一輝さんのことを知らない人はいないくらいの勢い

でございませう！」

「あんまり有名になってもなあ……それ、他の人の名前に置き換えられない？」

「いえ、それは無理でしょう。」

「どう考えても無理だ。というか、ここまで広がったものを変えることはどう頑張っても出来るはずがない。」

「はあ……まあ、コミュニティの事も広まるだろうし、よしとするか。それに、人の噂も七十五日って……」

「いえ、結果として一輝さんはほぼ一人で人類最終試練をクリアした形になりますから……」

と、黒ウサギの言いにくそうな様子に一輝はいやな予感を募らせ、「かつて人類最終試練である『閉鎖世界』デイズトピアが討伐されましたが、その際に参加した主要なコミュニティの事はいまだに語り継がれています。ですので……」

「俺のことも、語り継がれるだろう、と？」

「それどころか、様々なコミュニティで『人類最終試練の一つ、絶対悪を討伐した英雄』として子供たちに語られ続ける可能性も……」

「……もう嫌だ、何だそれ……」

今一輝が動けたのなら、orzのポーズになっていたかもしれない。それほどに、一輝は落ち込んでいた。

暇だ

「ノーネーム」、医務室。そこベッドの上で一輝は仰向けに寝転がり、天井を見てぼけーっとしていた。

一輝が目覚めてから既に一週間がたつが、まだ一輝は顔以外を動かさずにいた。つまり、完全安静の状態である。一応例の一輝が出しても一切負担のないやつを出して子供たちの手伝いをさせているものの、本人は一切働けずにいる。

そんな一輝は、部屋の天井を見ながら、ぽつりと。

「・・・暇だ。」

そう、呟いた。

本人、ひたすら暇なのだ。体を動かすことが出来ないから、何も出来ないのだ。さらにはかなりの時間寝たのでしばらくの間はどう頑張っても寝ることが出来ない。ここまで暇になる環境も中々ないだろう。

「耐えてください、それは。今の状態では、一輝様に出来ることはないんですから。」

「それなんだよなあ・・・何でここまでになっちゃったんだか・・・」

あの後、結局一輝につきっぱなしになることになったサキとそう会話をして、再びため息をつく。何かあった時のためにも、誰かがずつついていた方がいいということになったのだ。一人だけ他の子供たちとは別の場所に寝るということに一輝は猛反対したのだが、黒ウサギや耀、飛鳥、そしてサキ本人に押し切られた。

「・・・そういや、俺にお見舞いしたいって連絡があっただっけ?」

「はい、かなり入っていますよ。みなさんお手紙の形で連絡が来きます。一応、ここに置いてありますけど・・・見れませんよね?」

「首動かないしなあ・・・どれくらい来てる?」

ちなみにだが、この二人は一週間同じ部屋に居るだけあってもう話すような話題がない。

元々サキは一輝が『ムカつくから』という理由で潰したコミュニケーションに捕まっていたのを連れ帰った少女で、その時の思い出話もし

た。

お互いの過去の話もしたし、サキが「ノーネーム」に来てからあった思い出話なんかもした。なので、普通の話はしつくしてしまっただ。そこで、ふと思いついたお見舞いの話題を出した。

「そうですね・・・これ全部終わるには、何日かかるんじゃないでしょうか？」

「・・・そんなに？」

「はい。これを期に一輝様とのつながりを作りたいコミュニティのものもありますし、今度同盟を組むコミュニティからも来ていますね。それ以外にも、元々の知り合いからのものもありますよ。」

何かと勝手に動くことの多い一輝は、その分知り合いも多かったりする。それに加えて新しく繋がりを作りたいコミュニティが増えれば、かなりの数にもなるだろう。

「・・・ちなみに、知り合いってのはどんな奴らが？」

「有名な方は「階層支配者」の方々でしたり、「クイーン・ハロウィン」からフェイス・レス様、「混天大聖」様等ですね。他にも、コミュニティ「剣閃烈火」のように一輝様個人との知り合いも。そのほとんどが、一輝様に助けられた方やコミュニティですが。」

「・・・いつも言ってるけど、助けたわけじゃなくて気に入らなかつたから攻撃しただけだ。」

「一輝様がどのような意図で行ったのか、という問題ではないんです。ただ相手がどう感じたのか、なのですから。」

このやり取り、様々な相手と何度も交わされている。一輝自身が本当に自分がむかついたという理由でやっているため、このやり取りが消えることはないだろう。

「それにしても、本当にたくさん来ましたね。まだまだ増える勢いですし。」

「有りがたいんだけど、面倒だなあ・・・」

「そう言わずにちゃんとお見舞いされてくださいよ。そして大人しくして早く復活しましょう。追悼式も、一輝様が治るまで延期されましたから。」

「いや、それは俺の事は気にせずに行うべきだろ・・・」

「まあ、どうせ全部直すまで時間がかかるので、まだ先になりますけど。」

一輝が全ての主催者権限を打ち消した関係でロンドンの街も消えてしまったため、結構被害が出ている。

「・・・それと、あんなに凄い御方を出していて、本当に負担はないのですか?」

「ああ、ないよ。本質が俺に近いからなのか、本来の力からかなり小さくした状態を出してるからなのかは分からないけど。」

「それならいいんですけど・・・あの方が自己紹介をした時、沈黙で満たされましたからね?ちよつとした恐怖が原因で。」

「あー、悪い。そこまで気が回らなかった。・・・泣き出しちゃったとか、いる?」

ちよつと罰が悪そうに一輝が尋ねると、サキは首を横に振った。

「確かにその名前を聞いた時は怖かったですけど、見た目があの状態でしたからね。それに、リリちゃんは何とも思っていないみたいに普通に接して、さらにはすぐに仕事を任せていたのを見て、なんだかそのまま怖がってる必要もないんだな、ということとは分かりましたから。」

「リリすげえな・・・元魔王のペストにヤシロ、神格持ちの白雪とも臆することなく話してたから、強い子だとは思ってたけど・・・」

有る意味、*“ノーネーム”*で一番強いのはリリなのかもしれない。

「それでは、そろそろお食事の時間なので取ってきます。」

「ああ、よろしく。」

|||||

「お兄さん意識戻ってよかったね!」

「確かに安心したわ。・・・起きるだろうな、とは思ってたけど。」

「清明さんはああ言っていましたけど、一輝さんですからね。」

「一輝様だからな。あれで起きないような方ではない。」

復興作業に参加している一輝のメイド四人は、一輝が起きたという

話を聞いてそう反応した。

「でも、もう少し回復したらちゃんと言えないとね。」

「そうですね。無茶しすぎない、というから単独で挑むのに賛成したんですから。」

「私たちが会う時にはある程度回復しているだろうが、まだ回復しきっていないんだぞ？」

「ある程度回復してれば大丈夫よ。」

やはり、お説教はどうしても避けられないようだ。

ちなみに、この四人が今いるのは一輝が戦った際に被害が出たところだ。基本的にこの四人はそこを中心に動いている。

最後の一撃を空中で、それも斜め上向きに放ったことで本気で深刻な被害は出ていないが、それでも戦いの余波はかなりのものであった。一輝が神霊としての力を解放しただけでもクレーターが出来たほどのだから、その状態でアジィダカーハと戦えば被害も出る。

ついでに言うと、この四人が分身体と戦った場所にもそこそこの被害が出た。

音央はタイターニアからもらったギフトで神霊となって戦ったし、ヤシロは一時的に一輝からもらった神格によって魔王であったころ以上の力を得て戦った。他の二人も元々の霊格が高い上に一輝から神格を受け取っていたため、それはもうかなりの被害だ。

神霊 “タイターニア”、終末論 “アンゴルモア・プロフィットノストラダムスの大予言”、神隠し”、魔剣 “ダインスレイブ”。本当に滅茶苦茶なスペックのチームだな、おい。

「でも、動けないってことはお兄さん今結構暇してるんじゃないかな？」

「ベッドから動けない、ではなくてほとんど動けない、ですからね。ずっと寝ているわけにもいきませんし。」

「むしろ、大人しくしてるしかない今の状態はいいと思うわよ？休め、って言って休むやつじゃないし。」

『確かに……』

他の三人も同意のようだ。一輝のことをよく分かっている。

と、そんな会話をしている間に今四人がいる場所に開いていた穴は全て埋まった。ギフトを用いているので結構早く進めることが出来るのだ。

「よし。あとここに立ってた物を戻すのは専門の人たちに任せるとして・・・」

「私たちは他のところに合流しましょうか。」

「やることはまだまだあるからな・・・」

「お兄さんの分もガンバロー！」

一人元気なヤシロの声が、煌焔の都に響き渡った。

泣きつかれる

「……ん、まあ大丈夫やろ。呪力ラインも完全にもどっとるし、生命力もある程度回復しとる。お見舞いとかも進めて行つて大丈夫やな。」

「それはよかった。あまりにも暇すぎて、お見舞いでも何でもいいから時間をつぶす理由が欲しかったところだ。」

ベッドの上で体を起こしている一輝は、そう言いながら伸びをする。さらに、伸びのついでに簡単な腕のストレッチも。

この日の朝になってようやく体が動くようになったところなので、色々と固まっているのだ。

要するに、朝起きたらかなりだるく動かしづらかったのだが、それでも体が動くようになったから清明を呼んだのだ。

「それにしても、予定より早くなったなあ。僕の見立てではあと二週間はずれないと思ったんやけど。」

「なら、俺の体は予想以上に強かったってことなんじゃないか？それか、俺の霊格が肥大化したのか、何かしらの功績が関わってるのか。」

一輝がそう言うと、清明はどこか納得したように声をあげた。

「なるほど、もしかすると一輝君のいう通りなのかもしれないな。」

「ん？どういうことだ？」

「いや、そのまんまの意味や。たぶん……というかほぼ間違いなく、一輝君の霊格は大きくなつとる。ものすごく大きな功績を立てたからな。」

「一体何の……って、ああ。そういうやそうか。そうなるのか。」

一輝は動くようになった手をポンと打ち、そのまま腕を組んでうんと頷く。ようやく動くようになったことによる喜びなのか、普段よりも動きが大きく、オーバーになっている。

「そう、なんだかんだ君はアジィダカーハを討伐したんやからな。そらあの場には他にもたくさんの方がいて頑張つとったけど、最終的には一対一で戦つて倒した君にその功績のほとんどがいつて当然や。」

「人類最終試練、『絶対悪』アジィダカーハ討伐。確かに、かなりでか

い功績になりそうだな。」

まあ、一輝が清明の見立てより早く復活したのはそういう要因からだ。

このことから一輝は神霊としての部分を封印して純百パーセント人間である今の状態でも、英雄の様な形でかなりの霊格を手にし、そのことから色々なパラメーターが上昇、冬全回復スピードも上がる、と。より簡単に言ってしまうえば、成長して体力の回復が早くなった以上。

「とはいえ、まだ回復しきったわけやない。特に体に対する疲れは前よりも強く感じるはずや。もっと回復するまでの間は歩いたりするのは極力避けてな。」

「歩かなければいいのか?」

「ベッドの上でする、本当の意味での常識的な範囲でなら。歩くときは今みたいに体重を自分で支えなくてもいいわけとちゃうからな。負担が大きい。」

そうでなくても、落ちた足の筋肉が戻らないと歩くことも難しいだろう。ベッドの脇に立てかけてある杖も、本当に何かあった時のためのものでしかない。

そうして現状の話が終わると、減った分の薬の補充や状態が変わったことによる薬の入れ替え等の作業が行われ、清明は立ち上がる。

「ほな、今後のことをジン君と黒ウサギちゃんの二人に話して、そのまま帰るわ。何か質問とかあるか?」

「あー……いや、特にないかな。」

「そか。ま、何か質問とかあったら遠慮なく呼びだしてな。今僕、階層支配者の方々から君の主治医認定されとるから、責任重大やねん。」

君の身に何かあった時が怖いんや、とふざけたように言い残して清明はドアを開き、部屋を出る直前。

「そや。一応言っとくけど、筋トレとかリハビリとかもまだ駄目やで?」

「え、ダメなの?」

「……いうとよかったな。まだ駄目や。もっと体が休まるまで禁

止。」

強い口調で素晴らしいのこして、今度こそ清明は部屋を去った。

そして、部屋の前で待機していたのだろう。清明と入れ替わるように四人の少女……音央と鳴央、ヤシロ、スレイブの四人が部屋に入ってくる。

「お、久しぶりだな四人とも。どうだ？元氣」

「兄様ああああー！」

そして、一輝が片手をあげて笑顔を見せながら挨拶すると、スレイブがそれを遮って飛び付く。一輝の顔を見ると同時に目が潤みだし、笑顔を見せたところで涙腺が崩壊し、声を聞くのと同時にこれである。よくこれまで普通に作業を出来ていたものだ。

「お、おいスレイブ？そんなに泣いてどうしたんだよ？」

「兄様、兄様あー！」

「ちよ、ええと……」

少しは覚悟していた一輝だが、開始直後にこれで完全に困惑していた。そのためか少しの間何も出来ずにただ泣きつかれるままになり……その後、スレイブの頭に手を置いて、優しく撫でる。ちょうど今朝動くようになった、その手で。

スレイブはその行動でより一層一輝に強く抱きつきなく勢いもましたが、一輝はされるがままになる。

「あーあ、こりやミスったな。むちゃくちゃ心配させたみたいだ。」

「ええ、ものすごくね。あんたはそれだけの心配を、色んな人にかけてのよっ。」

「しかも、大半の人は感謝しないといけない立場なために文句も言えません。」

「だな、中々に最低だ。だからと言って後悔があるわけじゃないんだけど、まあでも……ごめん。説教はいくらでも聞く。」

「よろしい。」

珍しく一輝がそういったことで、二人も一時的に矛を収めた。一時的でしかないが、一輝が大人しく受け入れたことが大きいだろう。

「まったく……二人は素直じゃないなあ。スレイブちゃんみたいに抱

きついちゃえばいいのに。」

これまでしやべらなかつたヤシロは、二人に対して少しばかり呆れたような様子でそう言った。

「わ、私は別にそういうのは……」

それに対して、鳴央は一瞬で顔を赤くしてあわあわし、

「んー、そうね……とりあえずそれは、また二人きりの日にするわ。」

もう告白したこともあって余裕なのか、音央はそう返した。それでも少しばかり顔が赤い辺り、少しは無理をしているのかもしれない。

「そうなんだ。なら、私もまた二人きりになった時にしよーつと。」

「とかいいながら腕に抱きついてるのは何なのかな？」

「ん？これは別だよ、お兄さん。」

良く分からないが、ヤシロの中ではちゃんとした理屈があるのだろう。そして何より、一輝も起きてからこれまで会えていなかったり何も出来なかつたことがあつてか、こうして触れ合えているのがうれしかったりする。

「それで、どうだ？なにか面白いこととかあつた？」

「そうね。強いて言うなら、普通のサイズのトカゲが大量の荷物を運んでるのを見て驚いたけど。」

「確かに、あれは衝撃的でしたね。一輝さんの代わりに働いているんですってっけ？」

「ああ、一応そうなるな。つつても、子供たちと一緒に雑用をこなすくらいしか出来てないんだけど。」

話は今現在「ノーネーム」の敷地内で一輝の代わりに働いているやつのことに移った。

「あれ、一輝の式神？だとしたら呪力消費があるはずだけど。」

「いや、そつちじゃなくて檻の中のやつ。何でか分からんけど、あの状態なら呪力や生命力の消費が無く出せるから、こうして働いてもらつてる。」

「へえ、そうなんですか……これまで何度も戦いの中で檻の中から妖怪を出すのを見てきましたけど、あんな妖怪いましたっけ？」

ああ、まだ正体に気付いてないんだ、と一輝は嬉しく思った。どう

せなら、一番いい反応をしてくれるやつの前でバラしたいのだろう。さすがに一緒に働く都合から子供たちには知られてしまっているが、それくらいは仕方ないと考えているのだ。

「……この感じだと、トカゲさんあの正体は話さない方がいいのかな？」

「ああ、頼む。出来ることなら階層支配者の誰かにばらしたい」

「おー。確かにそれは面白そう。」

そんな中ヤシロはその正体に気付いているようだったが、話す気はないらしい。まあヤシロも問題児だから仕方ないな。うん。

「他には……一輝について色んな人に聞かれたわね。」

「というど？」

「どんな人なのか、どのような功績を立てたのか、ギフトはどのようなものなのか、あの時発動した主催者権限は一体何なのか……上げて行くとキリがありませんね。」

「そして、全部答えにくいんだよね。お兄さんについての主観くらいは話せるんだけど、ほかはあんまり外に出したくない情報だし。」

「まあ、対策なんて出来ないだろうけど、一応必要か。」

一輝のギフトについては、相手に知られたからと言って簡単に対策できるものではない。オベイロンのように特殊な主催者権限でも持っていれば話は別なのかもしれないが、それでも抑えることが出来るのは片方だけ。

だから話してしまってもそこまで問題はないように思えるが、念には念を入れておくべきだと判断するのは当然のことだ。

そして、一輝の主権者権限については今現在知っているのは一輝と湖札の二人だけなので、四人はそもそも話すことが出来ないのだ。

「ちなみに、スレイブちゃんはお兄さんのこともの凄く絶賛して伝えただから、そういう認識の人が多くなってるかも。」

「うわあ、予想以上に面倒そうな状況になってる。」

「別にいいじゃない？悪く思われてるのよりは変えやすいし。」

「まあ、そこは救いだけ……」

「あと、ウイラさんにも一輝さんのことを色々と聞かれましたね。」

「ウイラに？」

と、ここで何か聞かれるような心当たりのない名前が出てきたため、一輝は聞き間違いではないかと思いきり返した。だがしかし、聞き間違いではない。

「そういえば、私も聞かれたわね。ヤシロとスレイブも聞かれてなかった?」

「うん、聞かれたよー。ウイラお姉さん、色んな人にお兄さんのことを聞いて回ってたし。」

「んー・・・あ、そうか。俺個人で考えるからダメなのか。」

「何か心当たりがあるの?」

「一応、一個出てきた。」

自分の中で勝手に納得できた一輝は、満足げな表情をする。

ちなみに、一輝のこの予想は当たってはいるのだが、完答は出来ていない。なぜなら、ウイラが一輝に興味を持ったのは一輝が思い浮かべている事の他に・・・『一輝が戦っている姿を見て』、というものがあるのだから。

お見舞い客、一組目

「邪魔すんで、一輝君。」

「邪魔するなら帰れ。ほらサキ、扉閉めて追い出していいぞ。」

「用があつて来とんねん！つてか、見舞客を追い返すなや！」

まあいつも通り過ぎる一輝に対して、蛟劉は軽くどなった。上層からせかされながらも起きるまで待ち、心配してきてみたらこれである。そりや怒るだろう。

しかし、まあタイミングも悪かった。ずっと退屈をしていたのだから、誰でもいじるくらいの勢いになっても仕方ない。そんな中、弄れば面白そうなのが来たのだ。何をするかなんて、火を見るよりも明らかである。

「まったく・・・相変わらず問題児ですね。あの時は自分にとって都合の良い方向へ話を進めるためかと思いましたが、常日頃からそのようにしているとは。」

「確かに、こんなのが今や誰も知らぬ者のいない大英雄とは、信じられないものね。」

「まあそう言うなよ、ラプ子に迦陵ちゃん。これでも俺はここノームームでも一二を争う問題児なんだから。」

「迦陵ちゃんと呼ぶなツ!!!」

その瞬間に病室であるにもかかわらず金色の炎が放たれるが、その全てが一輝によって操られ、最後に火取り魔が喰らう。何ともまあ素晴らしいほどの手際だ。

「ハハハ・・・まあ、一輝殿は普段はこんだが、やるときにはちゃんと働く。事実、アンダーウッドでの巨龍騒動、魔王連盟とのゲームに、そして今回のアジールダカーハ。その全てで何かしらの手柄を立てているだろう？」

と、最後にサラがちよつとしたフォローを入れた。一輝の部屋に入ってくるのはこれで最後。三人の階層支配者と鵬魔王という大物四人である。お見舞いの最初のメンバーが豪華すぎる。

「それにしても、最初がこのメンバーかよ・・・面倒な話とかありそう

だから、最後の一番疲れた時に半分寝ながら済ませるつもりだったんだけど。」

「そういうやろうって話になったから、こうして一番最初に持ってきてもらったんや。」

「まあ良く分かっていきますねえ、嫌になるほどに。で？話つてのは」『スマンが、邪魔をするぞ。』

と、一輝が話を聞こうとしたその時に割り込んでくる声があった。それが誰なのか分かっていない一輝を除いて全員が扉の方を見るが：：そこには誰もいない。

「今の声、どこから・・・」

「ああ、下下。視線を下に。」

一輝に言われたとおりに四人が視線を下にずらすと、そこには勝手に動くトレーがあった。その上には、水の入ったコップと薬がいくつか乗せてある。

「トレーが勝手に動いている・・・これは式神か付喪神の類かな、一輝殿？」

「いやいや、そんなちゃんげなやつじゃない。悪いんだけど、そのトレーがこの台に乗せてもらってもいいか？あと、殿はやめてくれ。前みたいに一輝でいいから。」

「そうか。では、そのように。」

そう言いながらサラはしゃがんでそのトレーを持ち上げ、一輝のさした台へ置く。それによって、台を運んでいたものの正体があった。トカゲである。

「・・・トカゲ、やな。」

「トカゲ、ですね。」

「トカゲ、ですわね。」

「いえ、これは・・・ッ!?!」

一人ラプ子だけはその正体に気付いたようで一輝に対して攻めるような視線を向けるが、一輝は素知らぬ顔で薬を飲んでた。それが分かったからか、それとも諦めからなのかため息をひとつついたら、気づいたのは一輝だけだった。

「えっと、このトカゲがさつき喋ってたん？」

「ああ、そういうこと。これで星の一つや二つは持ちあげれそうなくらい力あるうえに出してても俺に負担がないから、動けない間子供たちの手伝いさせてる。」

「ほう、話に聞く『檻』とやらの中から出したのですね。ということは、ただのトカゲではなく何かしらの妖怪ということでしょうか？」

迦陵はそういいながら、壁を登って台の上へ向かうトカゲを見る。約三名何という妖怪だったかと記憶の中から探していると、トカゲの方から声をかける。

『トカゲとは失敬な・・・と言いたところだが、この姿では致し方あるまい。ともあれ久しぶりだな、火龍の英傑に混天大聖、覆海大聖、ラプラスの悪魔よ。』

「ん？何や、僕ら君と会ったことがあるんか？」

『会った、等というほどちんけではない。それに、さすがの私でも自分を討った英雄が現れた戦いに参加していた実力者のことくらいは覚えるさ。』

「・・・ん？」

と、ようやく違和感を覚えたらしい蛟劉は、そのトカゲをいぶかしげな眼で見る。いや、正確にはまだこのトカゲの正体を知らない三人にも、一つ可能性として頭に浮かんでいる名前があるのだが・・・それを口に出すことは出来ないでいた。いやまさか、さすがにそれはないだろう、と一輝の問題児性はそこまでではないだろうと、信じていたがゆえに。

だからこそ、実際にはどうなのかを、確かめずには居られなかった。

「なあ、一輝。この、えっと・・・トカゲ。名は何というのだ？」

「ん？このトカゲの時は、アジ君。」

「そ、そうか。なら・・・」

「って、ちよっと待ちなさい。このトカゲの時はと言いましたね？」

「ああ、言った。」

「つまり、この姿が本来の物、というわけではないのかしら？」

「うん、違う。」

笑顔で、しかし何か企んでいそうな笑顔で一輝がそう言うので、三人は一気に固まり、冷や汗を流す。この笑顔から、危険を感じ取ったのだろう。

「じゃ、じゃあ何て名前なんや?」

「それはやっぱり、本人に聞かないとな。ほらアジ君、自己紹介。」

『ふむ、では元の姿に戻ってもよいのか? どうせ名乗るなら本来の姿で名乗りたいものだが。』

「んー、さすがに負担がでかいからやめてくれ。人間体ならまあいけると思うけど。」

『ならば、まだこの姿の方がよいだろうな。欲を言うなら、首だけでも戻したいものだ。』

「あ、それなら負担掛けずに出来ると思う。ちよつとでかく・・・大体コモドオオトカゲよりちよつと小さいくらいになら出来ると思う。」

コモドオオトカゲはそこそこにでかい。十分すぎるくらいには大きくなるだろう。それが分かったからかアジ君も頷き、一輝は檻の中から微調整して輝く霧を出す。それを吸い込んだアジ君はだんだんと大きくなっていき、一輝の言っていた通りコモドオオトカゲよりちよつと小さい程度で止まると、今度は新たに首が生え始めた。合計二本、結果三つ首になる。

「三つ首って、確か・・・」

「ええ。あの魔王と特徴が一致しますわね。」

「いやでも、まさか・・・いや、一輝だからな・・・」

「お、察しがついたか。では、自己紹介、どうぞ。」

一輝が本格的に楽しくなってきたという表情をしながら、アジ君に手で促す。

『では、私を追い詰めた英傑たちよ。改めて名乗ろうか。私は元“人類最終試練”の一角、“絶対悪”を担っていたアジⅡダカーハだ。今は私を討った英雄である一輝の檻の中に封印され、使い魔の様にこの本拠に手力仕事を担当している。トカゲの姿の時はアジ君と呼んでくれ。』

「というわけで、“ノーネーム”の新しい御手伝い、アジⅡダカーハこ

とアジ君でした！他にも執事服を着せた人間体のアジさんver、そして本来の姿のアジIIダカーハver等がありますが、まあそれは俺が回復してからのお披露目ってことで、ひとつよろしく！」

わーぱちぱちー、と一輝が拍手をしていると、四人はシンクロした動きで頭を抱え、床に膝をついた。下層の平和を守るといのが仕事である階層支配者からすればアジIIダカーハがいるというのは頭の痛くなる話だろうし、そうでない迦陵としてもこんな頭の痛くなる話はないだろう。

「…せめてもの救いは、隷属の形である分霊格も減ってるやろう、つてところやろなあ。ほとぼりが冷めるまでの間に外に漏れたら、まあ面倒になるやろうけど…」

「ああいや。コイツについては箱庭の力による隷属じゃなくて、俺がこの手で殺して檻に封印したわけだから、それには当てはまらないんだよ。」

「では、どのような形なのでしょう？私は階層支配者ではありませんが、あの戦いに参加したものとしてそれを知る権利はあると思いますか？」

「ま、おっしゃる通りだ。じゃあ教えてやるけど、驚かないでくれよ？」

そう言うと、一輝は聞かない方がいいのにとでもいうような態度をとってから、

「俺が殺すまでの間の、最も強い状態で、だ。だからまあ、そうだな…：疑似創星図、アヴェエスターと覇者の光輪が同時に使える状態、かな？」
『その上、私に施されていた頭蓋と双肩の封印は解かれた状態で、のようだ。邪魔な封印であったからか、檻に入る際に取り除かれたようだ。』

「なんやそれ…そんなん、下層にいいのとちやうやん。つてか、
“ノーネーム”に最強種がとか、頭痛くなるで…」

まあごもつともである。ついでに言うならば、“ノーネーム”が東側に本拠を構えるコミュニティだからか、南と西の階層支配者である自分は関係ないといわんばかりに顔をそむけているため、蛟劉はなお

さら頭痛がしていることだろう。

だがまあ、これで済ませてはくれないのが一輝なわけで。

「あ、ゴメン。アジ君の前に俺の中に蚩尤いるから。」

「ああ、何やねん。下層の『ノーネーム』に属するプレイヤーの一人が、最強種を二柱も従えてるって・・・というか、危険なん tochやうんか?」

「ああいや、そうでもないぞ。蚩尤はもう大分俺の面白さに満足したみたいで言うこと聞いてくれるし、アジ君・・・アジⅡダカーハについては俺がこの手で殺したからな。外道・陰陽術で捕らえた異形については、殺した張本人は絶対遵守の命令を出せるから。」

まあつまり、この二柱が下層で暴れるようなことは基本的にはないということである。一輝が命令すれば話は別だが、そんなことは基本起こり得ない。起こり得る可能性はあるから心配な要素こそ残るかもしれないが、それでもまあとりあえずは安心できる。

「ま、まあええわ。じきに第六層への昇格の話も出とるんやし、まだ何とかなる。最強種が二柱とか本気で五層か四層に所属するコミュニティに移動してほしいくらいやけど、どうにか使い魔つてことで誤魔化していけば、まあ何とかなるやろ。少なくとも、どれだけアジⅡダカーハを倒していたとしても人間なんやから、まあ何とか、」

「あ、ごめん。確かに俺純百パーセントの人間として生まれてるけど、同時に純百パーセントの神霊としても生まれてるんだわ。」

「二・・・はあ!?!」

さらつと投下された爆弾に対して、四人は同時に声をあげる。まあそれはそうだろう。一輝の発言をそのまま信じれば、生まれながらに神霊であり、それが百パーセント、という事なのだから。

「・・・いえ、ちよつと待ちなさい。だとするならば、アジⅡダカーハがその霊格を自らに上乘せ出来たはずでしょう。」

「まあ普通ならそうなんだけど、俺の方はまあ色々特別製でな。まず、そうだな・・・俺には『Boost Trap Paradox』が適用されない。純粹に神霊として存在してるけど、そこには前提として民からの信仰があったから神霊になった。」

「・・・もうとりあえず、大概の事は驚かんことにするから、驚く分の時間はとらんでくれてえで？」

「そう？それは楽で助かる。」

そう言いながら一輝は、自分の中で表現できる言葉を探す。

「だからまあ、俺の持つ神霊としての霊格とか最後に使った疑似創星図、〃百鬼矢光〃なんかも、人類の作り出した、人類の遺産ってわけだ。」

『私の疑似創星図 〃アヴェスター〃では、人類の遺産は上乗せ出来ないからな。一人分ならばなんとかならなくもないのだが、コイツの場合はコイツのいた世界の全ての民の信仰からなるうえに、代を重ね継承する一族ということもあってか、一人で一人分の霊格ではないという、まあ私にとって不利でしかない相手だったわけだ。』

「とかいいながら俺をこんなになるまで追い込んでるんだから、人類最終試練ってのは無茶苦茶だよなあ。いやホント、良く勝てたもんだよ。」

「無茶苦茶言うなら、君も大概やろ・・・」

「〃ノーネーム〃が異世界から呼び出した人材はどれも辺りばかりとは思っていたが。」

「全員大当たりクラスだというのに、彼は一人でここまでの戦力を手にしてしまいましたし。」

「彼と逆廻十六夜については、私がいくら調べようとしても情報が集まらないような存在です。もう無茶苦茶です。アンビリーバボーです。」

「そいつはどうも。」

「〃〃褒めてない！〃〃」

皆さん大変元気である。何かいいことでもあったのだろうか？いや、逆か。大変困ったことがあったのだ。

「全く、みんな元気だなあ・・・お見舞いの他にも何か話すことがあって来たんだろ？ほらほら、話してみろよ。もうお前たちのおかげで今日の分は満足できる位弄れたから、ちゃんと聞くぞ？」

「次兄。今更ではありますが、来るなら二番目が良かったのではない

かしら？そうすれば、彼も中々に満足していてすんなりとはなしに入れた気がするのだけれど。」

「うん、そやな。またなんかあったら、この反省を生かすことにしようか。」

もう諦めたのか、それとも一輝がまじめに聞く体勢をとっているうちに話を済ませたいのか、蛟劉は話を進める方向に入った。どうやら、メインで話をするのは蛟劉一人のようだ。

「まあ、と言っても話があるのは僕らやないんやけど。」

「あ、そうなのか？階層支配者として、あの主権者権限について制限をかけるとか、そんな話だとばかり。」

「いやいや、別にそんな話はせえへんよ。というか、僕らが束になってかかっても勝ち目がないのに、そんな一方的なことはいえんし、とりあえず君の人間性を信じる、ゆうはなしになったんや。あそこまでのものなら、悪戯には使わへんやろ？」

「それはまあ、さすがにな。」

さすがにあの主権者権限は一族の歴史そのものであるので、そんなことでは使えないのだ。一輝自身のプライドにも関わる。

「せやけど、まあ仕事の一環として上層に今回のことを報告したら、まあ色んなところの神軍がうるさくなってるなあ。やっぱり、『主権者権限によるゲームを強制的に終了させられる主権者権限』というのを無視するわけにはいかんみたいや。」

「そりやそうだ。俺だってそんなもの話を聞いたら気になるだろうし。」

「そういうことや。ついでに今日の話で分かったことも報告することになったから、神霊やってことも伝わるし。」

「え、それ伝えない訳にはいかないの？ほら、そんなこと言ったらスカウトとかありそうで面倒極まりないんだけど。」

「無理やな。あともう一個、その色んな神軍から『一度話がしたいから本拠まで来い』っていう旨の手紙を預かっとなるんやけど、ちよつと行ってきてくれるか？」

蛟劉は素晴らしいながら大量の手紙を取り出してお見舞い品を乗せ

るための台に乗せて行く。そこには本当に神軍から届いたということとを証明する各神軍の旗印が押されていて、旗を取り戻したとはいえ最下層の「ノーネーム」に届くようなものではない。が、

「えー、面倒くさ。用があるならテメエが来いよこの駄神ども、つて連絡返しといてくれ。」

「戦争になるわ!」

「絶対にやめなさい!縁起でもない!」

全部の神軍が全部、というわけではないかもしれないが、大体の神様はブチギレるだろう。結果として戦争になってもおかしくはない。そうなったとしたら、間違いなく七天戦争以上の数の神軍を相手にすることになるのだ。蛟劉と迦陵が声を荒げるのも無理はない。

「というか、あなた言いましたわよね!?もうふざけずにちゃんと聞くと!」

「いやだから、俺本気で面倒だからテメエが来いよこの駄神、つて思ってるんだよ。」

「そんなこと言ったら戦争になるいうとるやろが!神軍を相手取るいうんがどれだけのことか、ホンマにわかつたらんのとちやうか!」

「ふうん・・・アジ君、そんなに大変なのか?」

『そうだな・・・』

一輝に問われたアジ君は少し考え、

『まあ、普通なら大変では済まないであろうな。しかし、神軍側も切り札は主催者権限。それを無効化し、自らのゲームに引きずり込む事の出来る一輝ならば、勝利することもそう難しくはないかもしれない。』
『ほうほう。』

『それに加えて私の疑似創星図も合わせれば、あらゆる神仏は相手ではない。一輝のゲーム盤に引きずり込めば下層にも被害は出ず、自らの手で殺した分は自らの力となるのだから、戦力強化できるかもしれないな。』

「・・・なあ、アジ君。結論としては、なんなんや?」

ちよつとこわごわという感じで、蛟劉がアジ君に問う。まあ、ここまでの流れでは怖いと思うのも当然ではある。

『そうだな。仮に上層の神軍の多くに喧嘩を売り、戦争になったと仮定するのなら。』

「「仮定するのなら？」」

『一方的に一輝が得をする、という可能性は極めて高いだろう。強いて言うのなら主神クラスを相手取るのが難しくなる可能性こそあるものの、それすら殺した者の霊格を取り込んでいくうちにどうとでもなろう。』

「とか言ってるけど、頼むから神軍に喧嘩売らんといてな。本間に頼むわ。ちよつとトラウマクラスやねん。」

蛟劉はすぐさま判断し、一輝にそう言った。まあ、七天戦争の経験者としては、トラウマになっても当然というものだろう。

最終的にこの件は、『一輝が各神軍を回るのにかかる費用等を全て神軍側が負担。この件自体は階層支配者からの依頼』という形に落ち着いた。日程については一輝の都合を全面的に優先する、ということに。

『下層の平和を守護する』というのが仕事である階層支配者としては、これ以上ない仕事っぷりと言えるだろう。

お見舞い客、二組目

「師父、このたびは人類最終試練アジィダカーハの討伐。誠にお疲れ様でした！」

「ホント、相変わらず暑苦しい連中だな、お前らは……」

そうは言うものの、自分のお見舞いに来てくれたということとはちゃんと理解しているので、一輝は追い出そうとはしない。

最初のお見舞い客、階層支配者プラスアルファは最後にアジ君がサラにゲームの報酬としてサラから奪った全てを返却したところで帰り、二組目の客は彼ら、コミュニティ剣閃烈火である。まあ暑苦しい。全員が入室すると同時に膝まづき、頭を垂れ、リーダーがそう話すのだからもう本当に暑苦しい。サキは既に室外に退避している。

「師父の戦い、我らは遠方より見るのみでしたが、それでも師父の實力は一目瞭然！ただ投手のみにてあのアジィダカーハにも劣らぬ戦い、そして最後に放たれた鈍色の一撃！われら一同、感動いたしました！」

「だから、暑苦しいつつつてんだろ！ってか、なんだその大絶賛は！なんか恥ずかしくなるからヤメロ！」

それと、一輝としてはちよつと苦手な連中でもある。この剣バカはこれを本心から言っているし、しかもそれがコミュニティの総意でもあるのだから、まあ苦手にもなるかもしれない。

「はあ……そういや、お前たちもアジィダカーハ戦ではあの城に乗ってきて、分身体相手に戦ったんだって？」

「はい。とはいえ、我らは確な戦力にもなれず、お恥ずかしい限りなのですが。」

「あの場では、一時的なものであっても足止めができてれば十分だ。……被害は？」

「師父が我らのコミュニティのものに授けてくださった剣術のおかげで、死人はいません。」

「そ。それは良かった。」

「しかし、我らの代わりに死んだ者はいます。」

「だろうな。けど、俺からすれば俺の知らない奴が何人死のうが、心底どうでもいい。それよりも俺が技術叩き込んだ連中が調子に乗った結果死んだ、とかなるほうが後味悪いんだよ。」

その犠牲者のいるコミュニティのものが聞けば激怒しかねないそのセリフを、一輝は本心から言う。そんな発言に対して、しかし剣閃烈火の者たちはとつとくに理解していたので反応はない。剣バカであるからこそ、一輝の剣筋から感覚的にはいえ、それを理解しているのだ。

一輝も、自分が決して正義ではないということをや彼らが理解しているからこそ、こうして関係を続けていたり、ほんの一部とはいえ彼らに鬼道流の剣術を教えているのだ。

「それについては、ご安心を。我ら全員、師父の教えてくださった剣術は相手を倒すためのものではなく、生き残ることを最重視したものであることは承知しておりますので。」

「そいつは良かった。俺としても、そこを理解してくれてるならそれでいい。それで？何か戦果はあげたのか？」

「戦果などと、胸を張れるものでもありません……。コミュニティ全体で、もはや第何世代なのかもわからないような下つ端を何体か。そして、第二世代を二体に、第一世代を一体がせいぜいでした。」

「……イヤ、マジですごいぞそれは。俺が教えた時にも全体的に才能はある連中だとは思ったけど、まさかそこまでは……」

これには、本気で驚いた。一輝は本気で、そこまでの連中だとは思っていなかったのだ。

「いえ、確かに相手は神霊級と称される第一世代。とはいえ、我らコミュニティ全員でかかり、そして師父のお教えくださった技術で生き残ることは出来ましたから。ダメージを与え続ければ、あの獣のような相手であればいずれ倒せます。」

「その理屈、基本的には通用しないからな。」

「とはいっても、第一世代ですら赤子の手をひねるようにはなったばつたと薙ぎ払い、最後には大元であるアジールダカーハと一人で倒した師父に比べれば、まだまだでございませうれば。」

「自分で言うのもなんだけど、俺は比較対象にするにはレベルが違いすぎるからな？あの戦いに参加したコミュニティ全体に、戦いへの参加人数と第一世代をどれだけ討伐できたか、聞いてみるよ。」

そして、こいつらのような愚直なまでのバカならば、そのような成果は自信へつながら、最後には力へと変わる。それが、この時の一輝の考え方だ。

昔の彼らであればつけあがるだけであっただろうが、一輝と出会ったことで大きく変わっている。それこそ、一輝がそこを信じていることができるほどにまで。

「それと、我々見舞いの品をお持ちしました。大したものは準備できませんでしたが、お納めください。」

「見舞いの品をお納めくださいって、何かおかしくないか？それと、そこにケチをつけるようなことをする気は一切ない。これでも一応、神社育ちだ。」

なので一応敬語は使おうと思えば完璧に使えるし、家事の中でも掃除が一番得意。各種礼儀作法も身にはつけている。本人にそれを行使する気がないから、完全に無駄になっているが。

「で？何持ってきてくれたんだ？」

「はい。最初は我々、業物の調理刀などでも思っていました。が、師父に対して我々が選んだ刃物など無礼千万ということになりました。」

「なんでそうまでことを考えるんだ、お前らは。どこまで俺のことを過大評価してるんだよ。」

「評価は、とくにあなたの剣の腕、そしてあなたの相棒たる二振りの刀。そこから剣、刀、刃に関わることは、過大評価ではなく、そしてどこまでも。」

「本気で恥ずかしくなるからやめんか！ってか、お前たちの刃物を見る目は確かだろうが。」

「もったいなきお言葉です。なんにしても、そういう次第でありまして・・・結論として、菓子折りを、ということに。」

「まあ、無難だな。また今日の見舞い陣が終わったら頂くよ。受け取ったほうがいいんだろうけど、この通り動けないからそこに置いと

いてくれ。」

「畏まりました。」

「悪いな。」

一輝の声に従って剣閃烈火のリーダーは菓子折りを台に置き、再びもとの位置、元の体勢に戻る。少しは崩してくれないかと期待していた一輝は、それを見ていい加減にあきらめる。つまり、こいつらが自分に対するこの態度を崩すのは剣を交わすときのみである、と。

「はあ・・・もうほんと、お前たちってどこまでもお前たちだよな。」

「これが我らです。それと、この場で話す事なのかはわかりませんが、ひとつお話したいことが。」

「どうぞどうぞ。もういくらでも聞きましょう。」

「では・・・我ら剣閃烈火を、同盟に組み込んでくれないでしょうか？」

「いやそれ俺に言うなよ。」

まあ色々とやってはいるが、所詮一輝は“ノーネーム”のプレイヤーにすぎない。そこまでの大事を勝手に決められるはずもない。

「では、師父は反対はしないか？」

「別にしねえよ。お前たちは他は一切の意味がないほどに無能だけど、戦力としてならある程度使えることは知ってるんだ。俺が反対する理由はない。ただ、商業面でサポートできないお前たちに対して、俺たちが経済的支援をすることはまず無理だからな？」

「分かっているつもりです。ですから、そのうえで言っています。」

「ならどうぞご自由に。なんにしても、ジンが了承するかどうかだ。俺からお前たちが少しは戦力になることは伝えといてやるから、あとは自分たちで自己アピール頑張りな。」

「御意に。」

「まるで俺が入れて命令したみたいな言い方してんじゃねえよ。」

と、二組目の見舞客は、一組目とは違って一輝が疲れるといふ結果に終わった。意外とやるのかもしれない、コミュニケーション 剣閃烈火”。

お見舞い客、三組目

あの後、剣閃烈火の者達が長ったらしい言葉を残してから出ていこうとしたので一輝が追い出す、と言う形で二組目のお見舞い客は帰った。

そして、三組目は……

「よお、一輝!」

「おお、いらっしやい。えっと……ほら、」

「アンタ、私の名前わからないの!」

「ああいや、分かってるよ。うん。なんとか・イグニファトウスだっつのは思い出せてる。」

「一番重要なところ思い出せてないじゃん!名前出てきてないじゃん!」

「そうカリカリすんなよ、アーシヤ。胃に穴あくぞ?」

「誰のせいだ誰の!」ってか、今名前呼んだよな!」

「え、何のことだ?俺はお前の名前がアーシヤであることなんて微塵も知らないけど。」

「それだよ!間違ひなく呼んでただろ!」

「はあ、全く何をそんなに騒いでるんだ?元気なやつだなあ。」

「ああくそ!ほんとに問題児だな!」

と、そういいながら頭をかきむしるアーシヤ。そして、

「あう、えっと……大丈夫、なの?」

「おう、今ので分かったと思うけど、割りと元気だ。」

「そっか……よかった。」

と、ホッとした様子を見せるウイラ。ウイル・オ・ウイスプを代表して、この二人が訪ねてきた。

「それにしても、まさかウイル・オ・ウイスプから来るとは思ってたかった。」

「ん?何で?同盟相手になるんだから、来るに決まってるじゃん。」

「いや、だとしてもさ。一応、ジャックを殺したのは俺になるわけだし。俺としては、この事で同盟が破棄になったりでもしたらみんなに

どれだけ頭下げても足りないなあ、って考えてたくらいだし。」

「・・・そんなことは、しない。それに、むしろ同盟を組むだけの利益が、そっちにはなくなつた。」

「ん？」

ウイラの言っていることが理解できなかった一輝は、短く聞き返す。

「だって、ジャックがいなくなった以上、神珍鉄の加工をするという契約が果たせるかはあやしい。」

「ああ、そんなことか。」

「そんなことって、十分に重要な問題だろ？」

まあ、普通ならアーシャの言うとおりだ。基本的な技術を備えているのはジャックであるし、他にもそのあたりの技術を持つていそうなやつとしてルイオスがあげられるが、それではネームバリューという価値が気になくなる。それならば六本傷に頼んだ方がよっぽど連盟の、そして「ノーネーム」の利益になる。が、

「いや、うん。だって俺がジャックを召喚すればいい話じゃん？」

「・・・え、できるの？」

表情の乏しいウイラの驚く顔という何とも貴重なものに満足感を覚えながら、一輝は続ける。

「うん、できる。」

「私たち、あんたが殺したって聞いてるんだけど？」

「正確には、契約して封印した、だからなあ・・・契約内容さえ満たせば、簡単に召喚出来たり。」

と、その言葉に一気に嬉しそうな顔になる二人だが、すぐに場が場だということと、契約内容、という言葉に反応して表情を戻す。

「でも、その契約内容もあるんでしょ？ だったら・・・」

「ああ、それだけ・・・相手はジャックだし、あの内容だし、多分簡単に何とかなる。」

首を傾げる二人だが、一輝はそんなこと気にもしないで話を続ける。

「えっと、そうだな・・・たとえばアーシャ、一つ質問いいか？」

「へ？あ、うん。いいけど。」

「じゃあ遠慮なく・・・ジャックに会えたら、お前は笑顔になるか？」
最初、アーシヤもウイラも一輝の言っていることが理解できなかったが・・・それでも。

「そんなの、決まってるじゃん。ジャックさんに会って私が笑顔にならないわけがない。」

「だろうな。さらに言うなら、*グノーネーム*の子供たちもジャックに会えるなら笑顔になるだろうし、飛鳥も間違いないだろう。んで、ウイル・オ・ウイスプの子供たちも。」

「それはそう、だけど・・・それがどうかしたの？」

「ああ、結構重要なことなんだよ。あとというなら、今あげたメンバーは全員、ジャックもそうだし、一般的に見ても*子供*と分類するやつが大半だ。」

飛鳥は十五歳。大分ギリギリなラインに思えるが、まあ子供と分類するやつの方が多いだろう。中学と高校のラインは、割と大きい。箱庭でもその認識はあるのか、二人もうんうんと納得したような様子を見せる。

だがまあ、うん。

「つて、だれが子供だ！」

アーシヤはこう反応するだろう。それはそうだ。

一輝はそんなアーシヤにまあまあと落ち着くようジェスチャーで促した後、話を再開する。

「で、だ。俺がジャックに一方的に押し付けてジャックが受け入れた契約の内容は、『お前の魂を、力を、恩恵を、その全てを幼子の笑顔のために、幼子の命を守るために使う。汝それを受け入れるのであれば、名を名乗り、魂を献上せよ。』だ。んで、あいつはこれを受け入れて名前を名乗り、俺に魂を献上した。」

「・・・だから？」

「いや、ジャックを召喚して笑顔になる子供がその場にいるなら、俺はあいつを召喚出来るんだよ。」

「・・・えー・・・」

なんだそりや、とでも言いたげな声の二人だが、しかし二人の表情はうれしそうである。ジャックに会える、というのがうれしくないはずがない。

だがまあそれでも、もう会うのは難しいだろうと思っていた相手だけあつて、どこが足りてきたような様子があるのは仕方ない。

「でも、悪いけど今召喚するのは無理だ。契約の方よりも俺自身のコンディションが最悪だし。」

「あ、うん。それはわかってる。でも・・・えっと、」

「ああ、分かつてる。ちゃんとジャックと会う場、それに話す場は設ける。とりあえず、俺が復活したら一度“ノーネーム”に来てくれ。」

「うん・・・ありがとう。それと、よかつたら“ウィル・オ・ウイスプ”の方にも来てほしい。あなたとあなたのメイドたち、みんな招待する。」

「おう、了解。・・・って、俺のメイドたちも、なのか？」

「あ、えっと・・・いくつか聞きたいこと、あるから。」

ウィラはその内容について話さないので一輝は首をかしげるのだが、話す様子はないのでまあいいかと流す。

「あ、それと・・・カズキに相談したいこともあるから、それもその時に。」

「うん、俺に相談？ いったい何を？」

「えっと、ジャックの扱いとか、他にもちよつと、相談したいことが・・・」

「俺に相談したところでなんになるのか、つてのが本音なんだけど・・・まあ、俺でいいならいくらでも聞く。」

どこか不安そうな様子のウィラを見て、一輝はその頭を撫でながらそう答える。一輝のその行動にウィラは顔を赤くして俯けるのだが、一輝はそれに気づかず、

「・・・え、ちよ、ウィラ姐ねえマジで・・・？」

一人アーシャだけが気づいて、そう漏らす。本人としては今すぐにも問い詰めたいところなのだが、さすがに一輝がいるところできうするわけにはいかない。

らう方がよっぽどではある。だが、かぼちやを選択したのもどうなのだろうか、と思わないではない。

「なんにしても、そういうことなら遠慮なく。そこに置いといてくれるか？」

「ん、了解。」

と、もう既に五つのお見舞いの品が置かれているそこに、アーシヤがかぼちやを乗せる。

「・・・じゃあお見舞いも渡せたし、そろそろ失礼する。お大事に、カズキ。」

「また完全復活したら来るから、あの話忘れるなよ！」

「おう、分かっている。んじや、またその時にな。」

こうして、お見舞い三組目は帰って行った。被害者はアーシヤ一人と、とても平和である。

お見舞い客、四組目　そして、異変

「・・・お前か、マンドラ。」

「ああ。体はまだよくないのか？」

「そうでもない。少なくとも、首から上しか動かなかった時に比べればかなり回復したしな。」

そう言っつて肩をすくめる一輝に対して、マンドラは頭を下げる。

「・・・なんだ？」

「いや・・・礼を、言いに来たのだ。」

「頼むから、それはやめてくれ。」

が、一輝はそんなマンドラに対して頭を上げるように言う。礼なんていらぬという意味ではなく、言わないでほしいという意味で。

「そもそも、お前が・・・『サラマンドラ』が俺に礼をいう理由がないだろ。一番死者が多かったのは、『サラマンドラ』なんだから。」

「だからこそ、だ。あの後、お前がアジールダカーハを相手してくれていなかったらもつと多くの同志が命を失っていた。」

「そうじゃないだろ。そもそも、俺は分身体をまき散らしたようなものだし、そもそも最初から俺の『主催者権限』を使っていれば、犠牲はさらに少なくできた。」

これは、どうしようもない事実である。極論になってしまいが、一輝があの時最初から『主催者権限』を使えてさえいれば犠牲をゼロにできていたかもしれないし、そうでなくともあの場に残ってさえいればもつと早い段階で食い止めることもできた。

言い始めればきりがなく、そしてそれをしなかったという事実に関心を痛めていない一輝は、だからこそマンドラに謝るなどという。頭なんて下げるなど、そう言う。が、

「そういうわけにはいかん。そもそも、私を含めたサラマンドラの同志は吸血鬼化をして、元から死ぬつもりである場に立ったのだ。にもかかわらず生き残れた者がいる以上、礼を言わないわけにはいかない。」

「・・・たとえばそれが、同志の死を防げたのにそれをしなかったもので

も、か？」

「そうだ。それに・・・お前に同志の命を救ってもらうのは二度目だからな。これでもまだ例を言わないのでは、サラマンドラの名前をつぶすことに他ならない。」

本人も吸血鬼化していて、あれだけ霊格を削らんほどの勢いで戦い、さらには党首であるサンドラを失って辛いだろうに。それでも、ここまでする。

自分より百以上年下の相手に対して頭を下げて、恨み言を言う権利があるのに何一つ言わない。そこには、菲才な彼なりの誇りが込められているように感じられる。

「だから、改めて言わせてもらおう。今回、話がコミユニテイの同志が命を落とさずに済んだのはお前のおかげだ。死んで当然の戦い。死を覚悟した戦い。二度も命を救ってもらったこの礼は、今度こそコミユニテイ、サラマンドラ”のある限り忘れない。」

「・・・あっそ。ならもう勝手にしろ。言いたいなら勝手に言えばいい。俺は何も聞いてないけどな。」

最終的に、一輝はそう言っただけで顔をそらした。そんな様子にこれ以上は無理だと感じたのか、マンドラも見舞いの品とお礼の品を台に置いて終わりとした。

「さて、ではここからは雑談と行こうか。正直なところ、聞きたいことは山のようにある。」

「まあ、だろうな。最初に来た階層支配者ズはもの凄く聞きたそうだったし。」

それを感じ取ったのに、向こうの胃が痛くなる情報ばかり渡したのが一輝である。

「じゃあ、それで？一つまでなら、質問に答えてやるぞ？」

「ふむ、一つ、か・・・」

「そう、一つ。大サービスだぜ？今全階層支配者やら上層の神軍やらが喉から手が出るほど欲しい権利だ。」

「確かに、その通りだ。」

そう言うマンドラは少し考え。

「では一つ。お前はなんなのだ?」

「・・・それは、俺の主観か?それとも、客観的な事実か?もしくは・・・世界から授けられた役目か?」

「お前の主観だ。」

そして、最も価値のない回答を聞いた。二つ目か三つ目であれば、それはゲームをクリアする材料となる。そして、今であればその情報は上層に高く売りつけることのできる情報だ。『サラマンドラ』が復興することのできるだけのギフトを得ることも、サンドラを開放する手助けをさせることもできたかもしれないのに、だ。

「・・・それでいいんだな?」

「ああ、構わない。それに、どうせ言わなくても手伝うのだろうか?」

「・・・俺に出来ることがあつて、俺がやろうと思つたら、な。その時は手伝つてやるよ。」

「主催者権限を無効化できるのだ。協力を得られるのなら、最も得た相手でもある。」

「あの手のやつは、出来るかどうか微妙なところだけだな。」

一言そう言つてから、一輝は自分に対する主観を述べる。

「ま、俺はただの悪^{クズ}だよ。本来なら、今すぐ討たれてもおかしくなくらいに染まりきつてる、な。」

それは、世界の認識とは大きく離れたものであつた。

|| || || || || || || || || ||

「はあ・・・なんか、疲れた・・・」

「一日座つてお見舞いに来てくれた人と話してただけじゃない。むしろ、あんたと話した人の大半の方が疲れてるわよ。」

と、あんな感じで進んでいったお見舞いも一輝が関わりのないところを拒否したことで、一日詰め込みで終わった。その密度はかなりのものであるのだが、まあ大した問題ではない。むしろ、詰め込んでも一日つぶれるほどの人数がお見舞いにきた、ということ自体かなりのことである。

「それにしてもまあ、よくあんなにお見舞いに来たもんだよな。」

「あんだ、自分で分かってないだけでいろんなところであつなかり作つてんのよ。まあ、さすがにラシャプさんが来た時は驚いたけど。」

「実は、俺もちよつと驚いた。どこの神軍にせよ、俺の扱いは問題になつてゐるはずなんだけど。」

「そこを無理してでも来てくれたのよ。もしかすると、神軍の上の方からの指示なのかもしれないけど、」

「それを別にしても、ちゃんと来てくれたかもな。」

一輝がそう言いながら少し笑うと、音央も笑う。

全部終わり、食事等も済ませた後、この部屋には一輝と音央の二人だけがいた。一輝はベッドの上に座り今日のことを思い出しながら、音央は部屋の簡単な掃除や皆が持ってきたお見舞いの品を整理したりしている。

「つてか、そこまでしなくてもいいんだぞ？さすがに埃がたまりきつた部屋で過ごす、とかはいやだからやってくれるとうれしいけど、その辺の見舞いの品とかは復活してから整理するし。」

「いいのよ、これくらい別に。好きでやってるんだから。」

「・・・よくやれるもんだな。」

「不思議と、辛くないのよねー。好きな相手のためにやるのつて。」

あつさりと音央がそう言うのと、一輝は一瞬遅れて顔をそむけ、そのまま顔が赤くなる。

「・・・」

「・・・」

「・・・何か、言つてよ。恥ずかしくなつてくるじゃない。」

「いや、その・・・よく言えるよな、おまえ。」

「言つてから、ものすごく恥ずかしくなつてきてる。」

「そうか。」

そして、そのまま音央も顔を赤くした。

しばらく無言が二人の間に流れたが、このままではどうしようもないと二人が判断したために何事もなかったかのように話が再開され

る。

「・・・あー。別に今返事がほしいわけじゃないからね？」

「そうか。まだできそうにもないから、それは助かる。」

「でしようね。あたしも、今言われても困るし。」

「じゃあ、ちよつと聞きたいことあるんだけど、いいか？」

「何かあるの？」

「ああ、まあちよつと気になることなんだけど・・・」

一輝は言うかどうか少し悩んでから、音央に尋ねる。

「十六夜って、なにか忙しかったりするの？」

「十六夜が？」

「ああ。この間黒ウサギと飛鳥、耀の三人が俺が目を覚ましたって聞いて来た時も、音央たちが来たときも、その他もろもろ一回も来てないだろ？この部屋に、じゃなくてコミュニティの本拠に。」

声とか聞こえなかったし、と一輝は言う。あの箱庭では常に楽しいのか、声を上げることの多い十六夜だ。本拠に来ていたのならその声が聞こえるはずであるし、そもそもあの仲間思いのやつが起きたと聞いて顔も見に来ないはずがない。だからそう尋ね、

「ああ・・・十六夜君は今、復興のほうに手を貸してるわよ。それこそ、復興を始めたその日から今日まで、一度も帰らずに。」

「ああ・・・なるほどな。向こうでやってるわけか。」

「あ、でも・・・」

「うん？」

音央は頬に手を当て、少し思い出すようにしてから、

「そう言えば、本当に最低限しかしゃべらないで、作業してたわね。少し妙だと思った記憶があるわ。」

訪問者

「ん、大分よくなつとるな。驚異の回復スピードやで。」

「それは良かった。これで悪化してるとか言われたらいろんな奴に叱られちまうからな。」

肉体的な診断に呪的な診断、その他もろもろ。一輝が起きて以来定期的な“ブローネーム”の本拠に来ている清明は、用具をギフトカードにしまいながらそう言う。

そして、その後にギフトカードから取り出した薬を一輝に渡すと、今度は一輝が自分のギフトカードを取り出してそこにしまった。そのギフトカードには今、旗印が刻まれている。

「それだけ体が動くなら、明日からはベッドの生活を終わらせてくれないええで。」

「本当だな? 『歩いてもいいけどその代わりに腕封印』とか言う、この間みたいなことはないんだな?」

「ないない。もう本当に大丈夫や。そら完全に治ったわけとちやうけど、これ以上待つのは治療やのうて過保護言うもんやし、それにこれ以上じつとすると筋肉が落ちすぎるやろ?」

「それなんだよなあ・・・そうじゃなくても、体が一切動かなかった間に全身の筋肉が落ちちまったし、今もベッドで過ごし続けている中でほとんどん筋肉が落ちてる。今じゃスレイブはもちろん、日本刀もろくに振れないだろうな。困ったもんだ。」

手を挙げて肩をすくめる一輝だが、かなり深刻な問題である。一番慣れた武器である刀剣の類を振るうことは出来ず、そして全ての動きに組み込んでいる体術も今の筋肉量では一部しか使えない。

七層クラスの魔王程度ならこんな体でも呪術だけで倒すだろうし、六層、五層クラスの魔王が相手でも“外道・陰陽術”に含まれている自分が動かなくても済む奥義で倒せるのだろうが、それ以上の相手であつたり数が来たりしたときはちよつと怪しいかもしれない、という状態なのだ。今なら、一輝に恨みを持つ人たちが団結して超頑張れば、一輝を殺せる可能性が五十パーセントちよつと発生する。実は大

ピンチである。

「じゃあ、どうするんや？何か必要なものがあるんなら、準備してもええで？」

「そうだな・・・じゃあ、運動向けの服を数セット準備してくれないか？前までならどんな服装でも大抵のことはできただろうけど、しばらくの間は筋肉落ちた状態でやるわけなんだから、怪我をしないように気をつけないといけないし。」

「OKや。元いた世界のものに似せて作っとくわ。」

清明はそう言い残してから部屋を出ていき・・・入れ替わりに、十六夜が入ってくる。

「よう、久しぶりだな一輝。意外と元気みたいじゃねえか。」

「十六夜、か？」

一輝は音央が十六夜の様子がおかしかったと言っていたのここに来たことに驚いて、ちよつと目を見開いた。だが、十六夜はそんな一輝の様子を気にしないで・・・もしくは、そんな一輝の様子を意識に入れずに、ベッドわきにあるイスに座って軽薄な笑みを浮かべる。「今更だけど、お疲れさん一輝。お前のおかげで旗印が取り戻せし、うちにも被害は出なかった。」

「・・・その分、肩代わりしたやつらがいただけの話だよ。それに、俺は最後に出てきておいしいところを持つてただけなんだから。」

「それにしても、だろ。つかなんだよあのギフトゲーム。全然内容がわかんねえぞ。」

十六夜はそう言いながら知的好奇心に満たされたような表情を造り、「一族の物語——我／汝、悪である——」の契約書類を取り出す。

そこに記されているのは、誰かが語るような口調の文章。今現在それが何を意味するのかを知っているのは、二人しかいない。それ以外のものが見ても何も分からないような、そんな文章。

「こんななんだつてのに、この中にちゃんと勝利条件と敗北条件が記されてるんだよな？なんだそれわくわくするじゃねえか！」

「そいつはどうも。さらにヒントを上げるのなら、勝利条件に敗北条件、その勝利条件に挑戦する権利を得るための条件等々、それはもう

大量の事柄が記されてる。」

「なんだそれマジかよー！」

ヤハハハ！と普段以上の笑みを造り、普段以上に大きな声で笑う十六夜。その姿は他の誰かが見たのなら違和感を感じないであろう程によくできていたが、一輝はその全てに違和感を感じていた。そのことと関係があるのかは分からないが、十六夜の持つ契約書類は中々に傷んでいる。

「あとは、そうだな・・・あんまりヒントをやりすぎても詰まらんからやめとくが、解くにあたって“鬼道”の一族がどんなものなのか、つて情報が必要になる。」

「そんなもん、持ってるやつがいるのかよ。」

「俺と湖札、つまりは主催者側の人間くらいだな。強いて言うなら清明も少しは知ってそうだし、ヤシロちゃんも何かを察してるかも。」

自分自身が滅びの物語を集めているせいか、ヤシロは滅びというものに敏感だ。だからこそ、一輝のギフトが持つ滅びの濃さも、一輝が召喚した存在がなんなのかも、知っているはず。一輝はそう推測した。

「ま、知識不足も悪いのはそっちなんだ。頑張つて推測したまえよ。」

「そうさせてもらうぜ。あれか？普段の一輝なんかも参考に出来たりするの？..」

「情報源にはなるんじゃないか？つてか、情報源になるものがそれくらいしかないだろ。」

「全くだ。つたく、なんだよこの無理ゲーー！」

一輝がそう言うのと、十六夜は再び笑う。ヤハハハハハハハ！と、とても愉快そうに、とても楽しそうに。そう見えるように。

なぜなら・・・その時十六夜が感じていたのは、圧倒的なまでの差なのだから。

|| || || || || || || ||

「ふう・・・ようやくこのベッド生活からも解放、か。起きてる間だけ

でも、かなり長かったな・・・」

ベッドの上でそう言いながら伸びをした一輝は、ぐるっと部屋を見回す。

意識を取り戻すこともできず眠り続けていた期間も決して短くはなく、その後もベッドですつと生活している。何より排泄に困り“空間倉庫”を利用するということを思いつくまでの間我慢するのが辛かったなど不便だった思い出の多い場所だが、それでもどこか変な愛着が生まれてしまっているのだ。

「って、医務室に愛着がわいたらまずいだろ。」

一輝はそう言いながら苦笑し、ギフトカードを取り出す。そこにギフトの宿った私物を収納していき、それが済んでからは“空間倉庫”の中にただの物をしまっていく。

その作業の中で自分のギフトカードに旗印が刻まれているのを見て、少し笑みをこぼす。

箱庭に来た当時は、“名”も“旗印”もなかった、自分が居場所と決めたコミュニティ。今はそこに、“旗印”が戻ってきた。ジンや黒ウサギが個人的に一輝の病室を訪ねてきて、涙を流しながらお礼を言っていることを思い出した。

「・・・あんな、心から嬉しいと思えるお礼を言ってくれたんだ。まだここにいても、いいよな。」

そう言いながら一輝が次に見たのは、自分の手首につけられているブレスレット。シンプルな造りのそれには、ちょうど腕時計でいう時計部分が付いているところに“ノーネーム”の“旗印”が刻まれている。

先程一輝の部屋を訪ねてきた十六夜が、一輝に渡していったもの。せつかく旗印が戻ってきたんだから、何かつけようということになったようだ。

「飛鳥は指輪で、耀はチョーカー。黒ウサギはブレスレット・・・ジンがローブの背中にでっかく刺繍を入れてたあれは、かなり目立ちそうだ。」

一輝はちよつとした運動として十六夜と話した後本拠内を歩き回

り、他のみんなのを見せてもらっていた。まだ全員分を準備することは出来ないから、とりあえず主力中の主力には配っておくことにしたんだとか。

どうしても、落ち着いてからでないとは大量に発注することは出来ないのだ。

そして……

「十六夜は……つけてなかった、な。」

十六夜は、それを身につけていなかった。

渡されていないわけではない。十六夜ほどの実力を持つ人物に渡されないわけがない。だとすれば、他の理由でつけていないのだ。

「……何かあった、んだよな。」

「まあ、何かあったにはあったんだが、あれだけのことで心が折れてちや意味がないだろ。」

それでも原典候補者かよ、とぼやきながら医務室に入ってきて来る人影。一輝はそれに対して驚きを見せることなく、ただ睨みつけた。

「なんだ、出てくるのか？まだ本調子じゃねえし、そのまま帰るなら見逃してやるつもりだったのに。」

「さすがに、やること終わってないのに帰るわけにもいかない。俺のことはとりあえず遊興屋ストーリーテラーでも呼んでくれ。」

その人影は一切隠れようとも隠そうともせず堂々と歩き、一輝のすぐ隣に立つ。

線が細かく、背の高い切れ長の目をした男。そんな特徴を口にすることは出来るのに、その見た目から何も読み取ることができない。場所も、存在理由も、目的も、何も読み取ることのできない男。そんな奴を見て、そして名乗りを聞いて、一輝はその正体がなんなのかを知った。

「ああ……あなたがグリムの詩人なのか。コミュニティ幻想魔道書群グリムグリモワールを率いた元魔王が、俺に何の用だ？」

「いやあんた、なんでそこまで知って……って、ああそうか。閣下から聞いたのか。」

どこから情報を手に入れたのか、遊興屋ストーリーテラーは一輝がアジィダカーハ

を従えていることを知っていた。そのことにまゆをひそめた一輝だが、そんなことはどうでもいいと話を再開する。

「まあ、そういうことだ。アジ君からは『会ったらすぐ殺すくらいのつもりでちようどいい』って言われている。」

「閣下物騒すぎ・・・今日は俺も、お互いにとって利益のある話を持ってきただけなのにな。」

「ふうん・・・」

一輝は探るような視線を送るが、一切気にする様子はない。自分から話して一輝に話の主導権を与えるつもりはないのだろう。

「で、話の内容ってのはなんだ？」

「いやさ、閣下が原典候補者でもない君に倒されちゃったから俺の計画が丸ごと崩れたわけなんだ。だから、代わりに君が俺に協力しないか？俺が詩人の力もなんでも使いまくって全力でサポートするけど。」

「断る。」

一輝は即答でそう返して、倉庫の中から短刀を取り出す。日本刀を振るえるだけの力は残っていなくても、これくらいのもならば扱うことができる。

「へえ・・・理由を聞いても？」

「興味がない、ただそれだけだ。」

「なるほどなるほど、分かりやすい理由だ。ちなみに、協力しないと大変なことになるって言ったら？」

「俺が守りたい人はちゃんと守るから、どうぞご勝手に。関係ない奴が何人死のうがどうでもいいし。」

はつきりとそう言い放つ一輝を見たグリムは、腹を抱えて声を出して笑ってしまいそうになるのをどうにか抑える。そしてそれがある程度落ち着いてから、一言。

「ククツ・・・やっぱりあんた、コツチ向きだよ。どう考えてもその考えは、魔王のそれだ。こっちにくるべきだって。」

「その言には全力で賛成だけど、だからって行くわけにはいかないな。どうしようもない悪である俺の^{クズ}ことを仲間だと言って受け入れて

くれるやつらの敵になるのは無理だ。」

「そう思い、行動すること自体が悪行だとしても?」

「俺が悪だつてのは、もう今更だ。その程度のこと気にならねえよ。」

そう言った一輝は自分の足で立ち、短刀を抜いて構える。

これ以上話すつもりはないと、態度で示すために。

「せっかく構えてるところ悪いけど、無駄だぜ。前に閣下にも似たようなことを言ったがそんなものじゃ今の俺は殺せない。」

「まあ、そうらしいな。首をはねても何の効果もなかったって言われたし。」

本人にはつきりとそう言われた以上、いくら脅しにかかっても無駄にしかならない。それを理解した一輝は、次はからだからほのかに光を放つ。そのまま翠色のものは右手に集まっていって、鈍色のものは左手に集まる。そして・・・炎の塊のようなものが、一輝の前に集まりだした。

「だったら、これならどうだ?お前は、疑似創星図三つまとめてぶつけられても、死なないのか?」

「・・・さすがにそれは簡便だな。けし飛びかねない。」

「安心しろ。ウチの一族の疑似創星図なら、そこにいない相手にも届けられるし、けし飛ばしたいと思ったやつはたいいけし飛ばせるから。」

そう言った一輝が腕を向けると、グリムは両手を上にあげて降参の体勢をとる。それを見た一輝はしぶしぶといった体ではあるものの光をおさめ、ベッドに腰掛けた。

「はくあ、予想は出来てたけどやっぱり駄目だよなあ。」

「結構あっさりあきらめるんだな?修羅神仏も引き込む甘美な勧誘術、とかあるんじゃないのか?」

「あるにはあるんだけど、どうせ君には無駄だろ?どれだけ君にとつて甘美な誘惑でも。自分を捨てても、それこそ一族のすべてを捨て去っても守りたいものがある人に、何を言っただって無駄なんだ。」

そう言われた一輝は、確かに何を言われたって気にしないだろうなと察する。そもそも、一輝がグリムについて行って得があるとすれ

ば、湖札がいるということくらいなのだから。

「つてか、無駄だつて分かつてんならなんで俺のところに来たんだよ。何か行けそうなあてがあるから来たんだろ?」

「いやそこまであてはなかった・・・つてか、それでも来ないといけなかったし。俺の野望のためには。」

「・・・? 殿下でやればいいんじゃないのか?」

「それができるならまだいいんだけど、お前が閣下を倒しちやったせいで色々と計画が狂ってるんだよ。殿下を使う作戦じゃ修正しきれない。」

「なら、十六夜か? あいつも原典候補者なんだろ?」

「あー、あいつなあ・・・」

一輝の言葉に、グリムはほんの少しだけ悩むようなしぐさを見せ、しかし。

「いや、だめだな。閣下との戦いの前の彼ならともかく、今の彼じゃ何の役にも立たない。」

「へえ、かなりのいいようだな。あれでも下層じゃ敵なしに近い奴なんだぞ?」

「そりゃ戦力的には十二分だし、今の彼なら簡単に勧誘できるだろうが・・・あれじゃあ原典候補者としての価値はねえよ。肝心のブレイブも足りなけりや、意志の力もない。殿下の方も肝心のブレイブは足りねえし、最悪仏門の方に行って孫悟空引っ張ってこないとなあ。」

超大物なうえに、出てきてくれるようなやつではない。つまりは現時点でグリムの野望はほぼ潰れたといつていいだろう。

「あーあ、こうなったらしゃあねえや。魔王連盟の目的の方に全力を尽くすか。」

「おう、そうしろそうしろ。そうしてくれば俺は今すぐにお前を消し飛ばす理由ができる。」

「それは本気で簡便だな。すぐそばに護衛もいるけど、今の君になら通用するかどうか・・・」

「なんなら、今すぐに本気を出せるようにしようか? 剣術と体術は無理かもだけど、呪術戦ならいくらでも行けるぜ?」

「よし、逃げよう。」

一輝の言葉が終わると同時にグリムはそう言い残して一瞬で消えた。何とも素早い逃げ足である。

そして、静かになった部屋に残る一輝はベッドに横になり、天井を見る。そのまましばらくしてから、自分の手を視界に持ってくる。そこには、旗印の刻まれたブレスレットが。

主力全員に配られたはずのそれ。しかし十六夜は身につけていないそれ。

「……ま、俺からできることは何もないか。」

一輝はぼつりとそう呟いてから、瞼を下し、眠りについた。

悔しさ

目の前で繰り広げられているのは、二人の強者の戦い。自分はそれを、分身体を殴り飛ばしながら見ている。

そもそも、何故自分はそのにいないのか。そもそも、何故自分達はいつ一人にすべて任せてしまっているのか。

いや、そんなことはわざわざ問わなくても分かっている。・・・あいつに、希望を感じたからだ。

アジィダカーハを殺すために集められた実力者たち。そこに誰も届かないほどの強さを、遅れて現れたあいつは持っていた。

ついこの間までは、自分と同じくらいの実力を持っていたものと思っていた。だからこそあの時、黒ウサギをつれて逃げてくれと言ったのだ。もし自分に何かあったとしても、あいつさえいてくれればコミュニティは大丈夫だと、そう思ったから。

だがしかし、実際には全く違った。あいつは、自分とは比べ物にならないほどの高みにいた。そんなやつに対して任せろとは、よくもまあ言えたものだ。

あの時、アジィダカーハは言った。

武勇を尽くせ、と。

知謀を尽くせ、と。

蛮勇を尽くし、己を貫く光輝の剣となってみせろと。

そのうち、自分はいつたいくつの剣をもっていたのだろうか。

武勇。これは持っていた。確かに自分は、持てる力のすべてをもつて、武勇の剣を示すことができていた。

知謀。これも持っていた。戦いが始まる前にも意見を交換し、対策をたて、戦いに挑んだ。いざ戦いが始まってからも、思考を放棄することはなかった。

では、最後の剣はどうだろうか。・・・否だ。

最初は、持っていたかもしれない。無理を可能にする覚悟も、腕の一本はくれてやる覚悟もしていた。そのつもりで作戦もたてた。だがその全ては、たったひとつの太陽主権で消え去った。

刃の通らないからだ。それがあればすべて解決してしまうのだ。もちろん、これを渡したラプ子に対して文句があるわけではない。あの場でアジィダカーハを倒せなければ、何もかもが終わっていたのだから。

では、あいつはどうだろうか？あいつは一体、いくつの剣を持つていたのだろうか。

一つ目の剣。武勇はどうか。考えるまでもない。家に伝わるという体術に剣術、その他にも様々な技のさえをみせた。ギフトを含めれば、常に使い続けていた『無形物を統べるもの』を用いた攻撃、補助に、『外道・陰陽術』による様々な技のさえ。あれを武勇と言わないはずがない。

では第二の剣、知謀はどうだろうか。これもまた、考えるまでもない。

あの魔王と戦うことができる時点で頭を使っていないはずがないし、そもそもあいつのギフトの一つは、封印している異形の数々についでに知識がいなければ使えないものだ。63代目を重ね封印してきた異形は数も種類も想像を絶する数であるはずなので、知謀を尽くしたに決まっている。

では、最後の剣。蛮勇はどうだろうか？・・・前の二つ以上に、考えるまでもない。

何せあいつは、自らの持つすべてを尽くして戦ったのだから。アジィダカーハが消えた瞬間、あいつはなにもできずにただ落ちてきた。身体中の力は抜け、目を閉じ、本当になにもできない状態となって。

本拠に運び安倍晴明に見せたところ、呪力や生命力等いきる上で必要なものがほとんどなくなっていると言われた。文字通り、命を削って戦ったあいつに、蛮勇がなかったわけがない。命をかけて、命を削って戦うというのは、そういうことだ。

つまり、あいつは間違いなくアジィダカーハの望む勇者であった。

自分とは違い、新に資格のあるものだった。

だからこそ、最後にあの二人は互いに認めあっていた。

鈍色の、美しいとも耀いているとも言えない、しかし目をそらすこ

とができなかつた一撃。抜き手の形で放たれたそれがアジィダカーハの心臓を貫いたとき、そのままの体勢で互いに神託を与えあつた二人は、本当に認めあつていたのだ。

自らを倒すに値する勇者として。

全力を出し、命をとして戦うに値する相手として。

互いのすべてを見せあい、感情のそこまで出しあえる相手として。

||||||

ノーネーム本拠、十六夜の私室。

一輝が目覚めたときき、ギリギリまで帰らずにすむようにしたものの、これ以上居残ることはできないとなつたので帰ってきた、十六夜。(……………クソツタレ。)

十六夜は見てしまった夢の内容を忘れるために頭を振り、汗に濡れたシャツを脱ぎ捨てる。そして、回想する。

自分がやるべきはずだった役目を。自分がたどり着きたかつたレベルの力を。それを目の前で見せたあいつを見て……

「クソ!!」

ただただ、悔しかった。

||||||

「ハツハツハツハツ」

一輝は走っていた。理由としてはとても単純で、落ちに落ちた体力と筋力を戻すためだ。

自分自身を神とすれば体は自然と全盛期のものになるのだが、ずっとそうしているわけにもいかないし、何より本人も周りの人もその神威に当てられてきづかれしてしまう。それでは何がしたいのか、という話になるのだ。

「ふいふ、疲れた〜!!」

そんな一輝はランニングを終え、『ノーネーム』の子供たちが主だつてやっている農園のすぐそばに倒れこんだ。

「あ、一輝さん。お疲れさまです。もしかして、今までずっと走っていたんですか？」

「ん？ああ、リリか・・・走ったり木を駆け上がったたり川を走ったり、ほとんど走ってたかな。腕立てとかもしたけど」

それはもう色々と落ちた一輝は、『とりあえず走るか』という考えのもと、とにかく走った。具体的には、

「・・・確か、お日様が上るより前に出ましたよね？」

「それくらい、だったかなあ・・・一人分だけ早くつくってもらっちゃって、わるかったな。」

「いえ、元々起きていたのでいいんですけど・・・今、もうお昼ですよね？」

そう、日が上る前に走り始め、太陽が真上から少し進んだくらいの時間まで、とにかく走り続けたのだ。

リリは言ってから真上を見たりお腹のすき具合から昼食をとったかを確認したりして、間違っていないという確信をえた。

「やっぱり、まだそれくらいだよなあ・・・あー、体力落ちたなあ・・・」「それで落ちてるんですか・・・」

「もといた世界じゃ、一日二日全力で戦い続けることもあったし、それに耐えられるくらいの体力はあったんだよ。それを考えると、結構ね・・・っと」

息も整ってきた一輝は、清明から届いたジャージの上を脱ぎ、それを絞る。

したに小さな水溜まりができると、次はインナーも脱いで、絞る。水溜まりはさらに大きくなった。

「・・・全部汗、ですか？」

「そうだけど。水分補強とかは水樹の枝でできたし、汗はかきつづけた。リリ、どばっと水かけて」

「あ、はい」

一輝から水樹の枝を受け取ったりリリは、言われた通り思いつきり水

をかける。

「あー、汗も流れてスッキリした！ありがとな、リリ」

「いえ・・・えっと、お風呂はいれますけど、入りますか？」

「そうする。軽くほぐしとかなないと、筋肉痛になりそうだし」

「そういうながら立ち上がった一輝は脱いだものを着なおしてから風呂場に向かう。」

念のために、と脱衣場で一通り確認をし、声も出してみても先客がいないことを確信してから、服を脱いで洗濯かごに放り込み、タオルを一枚だけもって入る。

そこに充満している樹の香りを胸一杯に吸い込むと、かけ湯をしてから湯船につかった。

「あー・・・やっぱ風呂はいいよなあ・・・」

なんだかんだ言って神社育ちの純日本人である一輝は、表情を緩めともう少し湯船に沈む。そのとき腰に巻いたタオルが目に入り、一瞬もやっとするがまあ仕方ないとして流す。本人としては気にしておらず、件の相手も気にしていないのだが、外聞的な問題とでもいうべきか、まあそういう方面で多少の問題があるのだ。ついでに、うっかり入ってきてしまったときのためでもある。年頃の少女がいる以上、必要なことなのだ。

「ふう・・・もうちよい筋肉つけないと、スレイブは使えそうにないな。獅子王は、完璧じゃないけど使えなくもない」

湯船の中で軽く腕を動かしてみたり肩を回してみたりして調子を確かめつつ、リラックスする。ここでもまで鍛えるつもりはないが、確かくらいはしておきたい、というところだろう。

「体術の方は、使えて全体的に十の型までかな。他は・・・早々使わないし、いいか」

もとの世界ではそうでもなく、全体的に鍛えていた一輝なのだが、ここは修羅神仏の遊び場である箱庭。そういう考えから、今はまだ使えてもこれから先使えなくなる技術は捨てることにする。これまで身に付けたものまですてるのではなく、これ以上の鍛練をしないという形で。

アジールダカーハと戦った結果、これ以上成長したとしても通用しない、とわかってしまったのだ。

「んで、呪術の方は・・・」

一輝はそう言うてから目を閉じ、体中に呪力をめぐらせる。イメージしているのは、血管。常に血が流れていて感情によつてその速さが変わる血管というのは、常に体中に呪力を巡らされ、怒りによつてその量が一気に増える一輝にとってはとてもイメージのしやすいものであった。他にも、血が流れるという光景をよく見るから、という理由もあるのだが。

今回はそれを、意図的に流れる量を変え、どの場所により多くいさせるのもかえる。

「・・・よし、ちゃんと動いてるな。これならよっぽど何かあつても大丈夫そうだ。」

「確かに、ちゃんと動いてるね！体の方もある程度なら戦えそうだし。」

うん？と返事が帰ってきたことに一輝は首をかしげるが、目を開いて目の前にいる人物を見て納得する。

「ヤシロちゃんか・・・いつの間に入ってきたんだ？」

「お兄さんが目を閉じて集中してる間にこつそりと。それにしても、一日で結構ついたね〜」

ヤシロはそう言いながら一輝の腕をふにふにする。足の方も軽くさわって確認している。ただボディタッチをしているだけという可能性もあるのだが、まあそこは気にせずにいこう。

「普通の人間と比べると、かなりついてる。つい最近までベッドで寝たきりになってたとは思えないくらい。けど・・・」

「前に比べると落ちてるし、そもそも相手は人間のわくにいない。体一つで戦うのはしばらくは無理かな」

念のために言うておくと、前だつてムツキムキだったというわけではない。服の上からでも分かるほど、というわけでもなく、ただ脱いだら驚くとか、さわってみて驚くとか、そういう部類だ。

「まあ、あそこまでは欲張らないけど、スレイブを使いこなせるくら

「いまでは戻したいところかな」

「それくらいになった方がいいのは、間違いないね。よいしょつと！」

ずっと一輝の体をさわっていたヤシロは、そこで一輝の足と足の間に入り、一輝の体を背もたれにして座る。せつかくの広い風呂場なのになにしてんだ、といたくなる光景だが、一輝はもうなれた様子で座りやすいように足を開き、髪が湯船に浸からないようにまとめているその頭を撫でる。

あ、本当に今さらだけど、ヤシロは真つ裸だ。見た目十歳ほどなのでほえましい光景ととるかわいかわい光景ととるかは皆さんにお任せします。大抵は後者だろうが。

「それにしたって、こんなに早く筋肉とかつて戻るものなの？お兄さんが神霊なのと関係してる？」

「いや、そっちはなにも関係ない。ただ、呪力でちよつと刺激しながらやって、戻りやすくしたってだけ。なんだかんだ、体はちゃんと覚えてるからな」

「へえ。便利だね、呪力って」

ヤシロはそう言うのと頭をポスンと一輝の胸にのせる。

「そうは言っても、一気に戻せるのは今くらいまでが限界な上に、一度でかなりの運動量が必要になる。そう都合よくはいかないんだよな」
「うまい話しには裏がある、ってことだね」

「そういうこと。ここからは地道にやってみてくしかないかな。ま、じきにスレイブは使えるようになるし、そこまで大きな問題ではない」

「上層とケンカすることになっちゃったら？」

「そのときは神霊になればいいだけだからなんも問題なし。」

「それもそっか。そもそも、今このタイミングで手を出してくる人はいないだろうし」

かなり印象が悪くなるだろうし、そもそも情報不足にもほどがある。そんな馬鹿はいないだろう。

「そういえば今さらなんだけど、何でこんな時間にお風呂に入ってるの？」

「ほんとに今さらだな・・・ついさつきまで走ってたから、汗を流したりリラックスしたり、あと軽くマツサージしとかないと、とな。そういうヤシロはどうなんだ？」

「私はリリちゃんからお兄さんがお風呂に入ってるって聞いて、ちょうどお姉さんたちもいないから突撃してきただけだよ？」
「そうか。」

もはやそれくらいのことでは驚かなくなってきた一輝。『ヤシロだから』という理由で受け入れてしまっている。

「じゃあ、私がマツサージしてあげようか？」

「あー、なら頼んでもいいか？何だかんだ言っ、かなり疲れたし。」
「オツケー！体もまだ洗ってないよね？」

「かけ湯しかしてないな」

「りようかい！さ、お兄さん。上がった座って！」

一輝はヤシロに手をひかれるまま湯船を上がり、そのまま椅子に座る。

ヤシロはその後ろに立つと、ボディークリームを手にだし、泡立て始めた。どうやら、手で洗うつもりらしい。

「えっと、全部私が洗っちゃっていいの？」

「さすがに前は自分で洗うぞ。絵的にまずいだろ」

「あー、確かにそうだねー。じゃあそういうことにして、となると足もお兄さんが、かな？」

「そうなるかな。足を洗おうと思うと、前に回ってこないといけなくなるし」

二人とも、恥ずかしいとかそういう方向は一切なくただ外間的な理由で判断している。なんだこれは。

もうほんと、この二人の思考回路はどうなっているのだろうか。

「うんしょ、うんしょ、と・・・」

「・・・なんかくすぐったいな」

「手で直接洗ってるからねー。それくらいは仕方ない、ってことで我慢してくださいっ」

そんなことを言いながらヤシロは手を動かし、鍛えている分肩幅も

大きく、広い背中を洗っていく。

「よし、お兄さん右腕上げてー」

「あいよー」

自分で洗う部分は終わった一輝は、ヤシロに言われるままに体を動かしてヤシロが洗いやすいようにする。

ヤシロは新たにボディソープを泡立てると、一輝の腕に自分の腕をからめるような体勢でその腕を洗う。体格差の都合上腕以外の部分も一輝のからだにあたっているのだが、まあ相変わらず二人に気にする様子は見られない。というかもう、ヤシロの方はわざとだろ。

「うんうん、意外と楽しいね。他の人の体を洗うのって」

「そうなのか？俺は今、妙なくすぐったさと違和感を感じてるんだけど」

「貴族っぽいなー、とかそういう優越感は？」

「これがまた見事はない。強いて言うなら、真新しさを感じるかな」

「不快？」

「それは一切ないから安心していいぞ」

「なら続けるねー」

そう言ったヤシロは逆の腕も洗い、桶に湯をためて泡を流している。そうして泡を全て流してから、次は頭に湯をかけて髪を湿らせる。

「じゃあ次は頭を洗うから、一応目を瞑っておいてね、お兄さん」

「あいよー」

一輝が言われたとおりに目を瞑ると、ヤシロは髪を洗う。表面だけではなく地肌まで洗い、佐羅にはマッサージまで組み込んで、中々に有能だ。

「なんつーか・・・慣れてるのか？」

「そうでもないよ。ただ、ちよつとロアの知り合いからコツを聞いてただけ。うまくできてるかな？」

「出来てるよ。すっごく気持ちいい」

その言葉にヤシロはさらに笑みを浮かべ、指を動かす。

背中に比べて面積が少ないおかげか、頭を洗う作業は比較的すぐに

終わり、二人はそろって風呂を出る。ヤシロはただ一輝と一緒に入るために来ただけなので、またあとで洗うつもりなのだ。

ついでに洗ってしまえば、というのには気にしない方向で。

「じゃあお兄さん、マッサージするねー」

「よろしく。・・・大分硬くなってると思うから、無理そうだったら遠慮なく言ってくれ」

うつぶせに寝転がった一輝にそう言われ、一輝の腰辺りに座っているヤシロはまず肩に手を当てると、

「・・・本当に硬いね。冗談じゃなくて石みたい。人の体ってこんなになれるものなの？」

「体質もあるみたいだけど、呪力で強化したりするところなる。ほぐせばちゃんとはぐれるんだけどな・・・」

「そっか・・・じゃ、頑張る」

そう言ったヤシロは座る位置をもう少し前にして、体重をかけるようにして肩をほぐそうとする。

「あつ、ん・・・ふにゅ・・・」

「辛いかな？」

「大丈夫、夫・・・んっ・・・」

とりあえず力づくでもほぐさないと始まらないので、力を込める。途中でこのままでは無理だと気づき、曲げた肘を乗せてグリグリしたりもするが、辛そうな声はなかなか消えない。

「あー・・・そうだ、ヤシロちゃん。一つ聞いてもいいかな？」

「いいよー。んっ・・・なあに、お兄さん？」

「なんかき、最近十六夜おかしくないか？」

先日十六夜と話をしたときに違和感を感じた一輝は、そうヤシロに尋ねる。一輝の知る中でそういう方面に一番敏感なのは彼女だ。

「そうだねー。んっ、んー・・・何か無理してるのか、隠してるのか、ごまかしてるのか・・・そんな、感じかな？」

「やっぱり、そんな感じだよなー」

そして、その八代が自分と同じ考えであることを知り、まず間違いないだろうと確信する。つまり、あの十六夜に何かあった。そし

て・・・

「・・・どうすつかなー・・・」

「んあつ・・・いつも通り、でいいんじゃないかな？」

「いつも通り？」

「うん、そう。あんっ・・・お兄さんらしく、真正面から」

「・・・ま、それもそうだな。いつもと違って男相手だから、遠慮なく殴れるし」

はつきりとそう言った一輝にヤシロは笑みを見せ、再び全体重を肩にかける。

この後しばらくの間、一輝の部屋からヤシロの悩ましそうな声が聞こえてきたとかなんとか・・・

土地の復興

「あー……いかん、割と暇だ。」

一輝はそうぼやきながら「ノーネーム」の敷地の中を歩く。今他の問題児たちは「アジィダカーハ」による被害の復興も終わってき、てこれまで以上に開催され盛り上がり上がっているギフトゲームの数々に参加している。では、一輝はなぜ本拠の中にいるのか。

確かに完全に戻っていないとはいえない、下層の「ギフトゲーム」に参加するのが難しい状態ではないのだ。にも関わらず、コミュニティにおいて「プレイヤー」として所属している一輝がギフトゲームに参加しないのでは、本当にただ飯を食らっているだけだ。もちろん本人だって、そんなニート状態でありたいと思っっているわけではなく……「……ギフトゲームに参加させてもらえないとはなあ……」

ひとえに、それが理由であった。どこに行っても、参加を拒否されてしまうのだ。それこそ、清明や蛟劉と言った大物のところに行つたとしても、参加を拒否されてしまうレベルで。

別に彼らだって、嫌がらせでやっているわけではない。だがしかし、下層を救った英雄である一輝をギフトゲームに参加させたら、どうなるか。せっかくの復興のためのギフトゲームなのに、『なんだこいつ、出てくるなよ』と内心で思うのが他のプレイヤーであろう。そして、それをくむのが主催者の仕事。もうどうしようもない。

「はあ……ま、こうぼやいても仕方ないか。しばらくの間は雑用にいそしむとしよう」

と、一輝は気持ち悪いくらいあっさり切り替え、何かないと探し始める。

普段であればDフォンを使い自分のメイドたちに何かないか聞くのだが、あいにく今日はそれもできない。

鳴央とスレイブの二人は一輝がギフトゲームに参加できない分ギフトゲームに参加し、終末論「アンゴルモア・プロフィット」に妖精の女王「タイターニア」とまあアジィダカーハ戦で有名になり一輝と同様の理由で下層の普通のギフトゲームには参加できなくなったヤシ

口と音央の二人は、それでもまだ参加することのできる『階層支配者』主催のゲームに参加している。要するに、今本拠には一人もいない。

と、そんな現状を自分の中で再確認した一輝は、視線の先にいる二人の人物を見る。

「・・・何やってんだ、二人とも？」

「ん？・・・ああ、一輝殿か。いやなに、この土地をどうすれば元に戻せるか、という相談だよ」

「ああ・・・この土地を、か」

そう言った一輝は一度しゃがみ、廃材をつかむ。それは一輝が深く力を入れる前に砕け散った。ほかにも、路面は乾いてひび割れ、ところどころ陥没しそうな場所もあり、いつしか地割れが起こってもおかしくはない。素人である一輝にもそれは分かる見なれた光景である。なので、

「いや無理だろ。メルンとメリル、メルルの三人だって農地で手いっぱいだろうし」

「クロア殿と全く同じリアクションだよ、マスター」

「つまり、誰であっても同じ感想しか抱かないということだろう。これならいつそどこかの土地神でも招いた方がよさそうだ」

「『ノーネーム』に来てくれる土地神なんているのか？」

「ただの『ノーネーム』であれば無理だろうが、今ほどに有名になっただけでいればどうにかなるだろうよ」

と、二人はどう招くかという話をしているのだが、侍女頭であるレティシアは難色を示した。

「馬鹿を言うな、二人とも。この土地は代々リリの一族が守ってきたものを借りている立場なのだぞ。私たちの独断で土地神を呼ぶなど、不義理にもほどがある」

「ああ、そう言えば宇迦之御魂神の命婦がいたな。神格保持者の直系が残っているなら丁度いい。稲荷大社には私から一報を出しておくから、新たに神格を戴こう」

サラっととんでもないことを言ったクロアにレティシアは目を点

にして固まったが、しかし二人はそんなことを気にしない。

「ふうん、今のリリでも神格を保持できるのか？」

「まあ、私とアルマ殿、それに君からの推薦状でもつけければ問題ないだろう。元々彼女は宇迦之御魂神の直系の眷族なのだから。今はまだ未熟でも、修業をしつつ神格を授かることぐらい訳も無い。リリ君ほど頑張り屋な娘なら向こうも仮免くらいくれるだろうよ」

「それって、俺から神格を渡すんじゃないのか？」

「ダメではないだろうが、まあ先程言っていた不義理云々もなくはないし、神格の目的が大分違う。最後にこれが一番の理由だが、リリ君の体に君の神格がなじむかどうかという問題もある。そもそも彼女は戦闘向きの人間ではないのだから」

「あー、それがあつたか。つてか、もしかして俺から何人かに神格を渡したりしたんだけど、今は回収してるとは言えませんでしたりするか？」

「主神が自分の眷族に与えて何の問題があるというんだい？リリ君の神格についても、似たような理由さ」

なるほどなあ、と納得する一輝のよそで、レティシアは全くスケールの違う話に戸惑いながら、しかし同時に妙手だとも考える、

忘れられがちだが、クロアはこれでも立派な主祭神の一人なのだ。それに加えて豊穰神であるアルマテイアの推薦状があればそれで十分だろうし、さらに一輝の一筆も加えれば、彼と繋がりを作ろうという企みから乗ってくる可能性も十分に出てくる。そしてそうなれば、この土地の復興も可能となるだろう。

「・・・まあ、それが一番の手か。では、まずはリリの修行かな？」

「そうだろうね。出来るなら、誰か指導役がいるといいのだが・・・」

「指導役、ねえ・・・」

三人の頭の中には真つ先にアルマテイアが浮かんだが、彼女は基本飛鳥と行動を共にするため無理であろうと却下する。となると、次点是谁であろうかと考え・・・

「・・・あ、俺の檻から九尾出すか？」

「ふむ、九尾の妖狐か。確かに似たような霊格の持ち主であるし、丁度

いいかもしれないな」

「確かに、な。問題があるとすれば、あの性格だが・・・」

ああ・・・、とそれを知っている一輝は納得する。しかし、それを知らないクロアからすれば二人が何を悩んでいるのかは全く分からないので、

「何か問題があるのかね？」

「いや、まあな・・・プライドが高いんだよ、異様なほどに。高圧的だし」

「なるほど、確かにその方が九尾らしくはあるがな」

一輝の簡潔な説明にクロアは納得した。いろんな人が持っていると思いたいあの九尾のイメージがそのまま固まったような九尾なのだ。いろいろと面倒になりそうというのが共通の意見だろう。

「まあ、一応ウチの先祖が殺したときも生き肝狩りの真つ最中だったらしいしなあ・・・」

「本当にそんな相手に教えさせて大丈夫なのかね？」

「一応、今ではそれに比べれば丸くなったし・・・ちゃんと礼節を持って接すればちゃんと対応すると思うぞ」

まあ、そういうことなら・・・と何ともしぶしぶといった様子でそのプランでいくことに決定した二人。なんにしてもやってみないと分からないことではあるが、ちゃんと対応してくれるのであればそれはこの上ない修行になる。そこまでのメリットを見逃すのは惜しい。「さて、じゃあそんな感じでたまにあいつを出しておくことにする。リリに言つといてくれるか？」

「分かった、伝えておこう。ところで、一輝はしばらくの間本拠にいるのだったか？」

この話はここで終わり、レティシアはこれからについての話に移る。

なんだかんだ色々忙しくなっている一輝がいつから活動し出すのか、それを確認しておきたいのだろう。

「ん？あー・・・そうだな。とりあえず、しばらくの間は本拠にいることになるな」

「いつから活動を始めるんだ？」

「とりあえず、ちゃんとスレイブ使って戦えるようになるまでは体作りだな。そうなたらたぶんちよつとあるから、それをこなして」「さて、そのちよつとあるにいやな予感しかしないんだが」

レテイシアの言葉を一輝は無視した。一切とり合わず、話を続ける。

「それから、一回『ウィル・オ・ウィスプ』の本拠に泊まりに行く予定だな。俺ん所のメンバーで泊りに行って、今後のこととか色々確認する」

「色々、とは？」

「ジャックがいなくてもどうにかなるのかどうか、だな。ジャックがいなくなつちやうとあのコミュニティでまともに戦えるのはウイラだけだし、あのまま向こうにいて大丈夫なのか、とか色々とな」

既にこの件について一任するという許可をジンからもらっている一輝は、はつきりとそう告げた。その結果によってはまた色々やらなくてはならないということも、二人なら既に理解しているだろう。

「では、その後は？」

「あー、そうだな・・・そう言えば上層の神群から呼び出しかかってたし、そつちにも行くか」

「今すぐ行けよ」

レテイシアとクロアの声がぴたりと一致した。まあ、呼び出されているのに行こうとしないのだから、当然の反応ではある。

「えー、これでもこつちから来い、つて言いたいのを我慢してるんだぞ？」

「それを我慢できているのはすごいと思うが、それでも早めに言った方がいいだろう。変に印象が悪くなったら、何をしてくるかわからないのだから」

「だから万全の体勢になるために体作りしてるんじゃないか。期待してていいぞ、話し合いがうまくいかなければ俺は大量の神を封印して帰ってくるから。これで『ノーネーム』もパワーアップ！」

「やめろ！何が何でもヤメロ！」

この日を境に、二人は時折頭痛に悩まされることになる。

『この問題児が何の問題も起こさないでいられるのか』と、そして本当に争えるだけの力があるだけに、戦争にならないだろうか、と。冗談抜きで切実な問題である。

問いかけ

「あー、結構疲れたー」

「まあ、お疲れ様だ湖札。よくもまあ一人でどうにかしたものだな」

ある場所で、巫女服姿の湖札が村正を片手に地面にあおむけに倒れ、それをすぐそばにいる殿下が見下ろしている。しかし誰もそれに対して文句を言う様子はない。湖札自身も疲れきって倒れているので何もできそうにないのだ。

「それにしても、この箱庭って節操がなさすぎない？まさかあんなのまで魔王として現れるなんて・・・」

「それについては俺も意外だったが、どこからか神格を調達していたようだし不思議ではないだろう。知名度の高さもあるしな」

「あー、確かに知名度はありすぎるくらいにあるよね・・・なんせ、『赤ずきん』だもん」

そう言った彼女は体を起こし、自らの手で破壊した封印塚を見る。

旧 “ が封印していたと思われる封印塚の一つ。彼女はそれを壊し、中に封じられていた魔王を開放して・・・それと、全力でバトルした。相手の開催したギフトゲームを完璧に解き明かし、それを語りながらボツコボコにした。そうして倒した少女は・・・赤いずきんをかぶった幼い少女は、今壊した封印塚のすぐ横に倒れている。

打撲等の傷を負い、とても痛々しい姿のその子に近づいて・・・

「癒せ、急急如律令」

治療符をかざし、その傷を全て癒す。

「・・・なぜ、私の傷を治すのですか？」

「死なれたら困るから、だよ」

「どうせ何があっても、私はあなた方に従いませんよ」

「それは分かっている。でも、じきに隷属させた魔王を強制的に従わせる人が来る予定だから・・・しばらくの間、寝ててね」

湖札はそう言って手作りのフェルト人形・・・赤ずきんを模した人形をかざし、その中に魔王 “赤ずきん” を封印した。

「・・・よし、これで終わった。はい、殿下」
「おう」

返事をした殿下は湖札の渡した人形を受け取ると、自分のギフトカードの中に入れる。そうして新たに「赤ずきん」という項目が追加され、他にも「ピーターパン」、「アリス」とその他に湖札が倒した魔王が入れている。

「それにしても、本当にいいのか？俺としては、湖札が一人でやってる間に他の魔王の方に行けて楽だが」

「いいんだよ、これで。私なら知識量がかなりだし、たいていのギフトゲームには対応できるし・・・何より、最後かもしれないんだから仕事はしないと」

湖札はそう言っただち上がるが、殿下は少し顔をしかめる。

「・・・まさか、負けるつもりじゃないだろうな？」

「そんなつもりはないよ。もちろん本気でケンカするし、勝って兄さんをひきこむつもり」

湖札は持ったままだった村正をかかげ、

「でも、相手はあの兄さんだから。たぶん今一番勝てる可能性があるのは私だけど、圧倒的な実力持ちだしなー」

「ああ、それは間違いないが・・・」

「だからこそ、私たちの目的のために引き込めたらどれだけいいか。・・・本当の魔王連盟を作って箱庭を滅茶苦茶にするなら、あそこまでふさわしい人はいないから」

湖札はそこでようやく納刀し、巫女服から普通の私服に戻る。何かあった時のために動きやすいジーンズにTシャツというラフな格好だが、それでも少女としての魅力にあふれる。巫女服の際には一つにまとめられていた長い髪も、今は解かれ風になびいている。

「それじゃあ殿下、次行こう。私としても兄さんとのけんかまでに少しでも強くなりたいし、もうグーさんと昆世魔王さん、リンちゃんも次に行ってるんでしょ？」

「・・・ああ、そうだな。次のやつはちよつと大物だから、全員で相手をするぞ。異論は認めないからな」

「おっけー。さ、次も頑張ろう！」

檻の中にいる蛇の系統の魔物の力を借りて完全に治癒した湖札は、何事もなかったかのように歩き出す。

「・・・そう言えば、今更なんだけどな」

「うん？何、殿下？」

「お前は、本気の殺し合いを自分の兄とすることに対して、何も思わないのか？」

「ああ、そんなこと？もちろん・・・」

＝＝＝＝＝＝

「あ、あのー・・・本当によろしいのですか、一輝さん？」

「おう、問題ないぞ。よろしく頼む」

「・・・そうおっしゃるのでしたら、やりますけれども・・・」

あまり乗り気ではなさそうな黒ウサギがその手に持っているのは、ボウガン。それも、しっかりと殺傷能力のある実戦用のものだ。

そのほかにも、ボウガンの矢を入れてある矢筒や弓、銃など様々な遠距離武器が黒ウサギに装備されている。

「・・・本当に、ここまでやらなければならぬのですか？」

「というよりは確認だから安心してくれ。反射神経がどれくらい残っているのかの、な」

そう返した一輝は、逆に何も装備していない。ごくごく普通の、何の恩恵も宿していないし服に身を包み、両手にも何か持っているというわけではない。その状態で、ジーンズのポケットに手を突っ込んで立っている。

「じゃあそういうわけで、黒ウサギのタイミングではじめてくれ」

「分かりました。では・・・行きます！」

これ以上何を言ってもどうせ聞かないと察した黒ウサギはボウガンを構え、照準を一輝の頭に合わせると同時に引き金を引く。そうして勢いよく放たれた矢は狙いの通りに一輝の頭に向かうが、一輝はそれを少し横に動いてかわし、走り出す。

今二人の間にはかなりの距離が空いているため、一輝から反撃に出るのは不可能。そもそも一輝の確認のためにやっていることなので、反撃することはないのだが。

そうして距離が詰められた分、避けるのが困難になったはずなのが、流れるように矢をセットして連射し続ける黒ウサギの矢を、一輝は避けていく。

決して狙いをつけづらいようになんて考えず、むしろしつかりと狙って放たれたものをギリギリのタイミングで体を動かして避けていく。大きく避けるのではなく、むしろギリギリのところかわすように。

一輝が予想以上に動けることに驚いたのか黒ウサギは一瞬動きを止めてから、その神の色をピンクへと変化させ、後ろに跳ぶ。その間にボウガンを腰に引っ掛けて獲物を狙撃銃に変え、自分が着地すると同時に一輝に向けて放つが、これもまたギリギリのところかわされてしまう。

《一輝さん・・・本当に病み上がりなのですか!?!》

内心意外すぎる動きに驚きながらも、しかしそこは「箱庭の貴族」。決して冷静さを失わずにコッキングレバーを動かして次弾をセットし、再び放つがそれもまた避けられる。走るスピードは一切落とさずに、だ。

そこで黒ウサギはライフルをその場に捨て、弓と矢を数本手に持って全力で上に飛ぶ。そのまま、上空からの一斉狙撃。避ければその先に矢が来るように放たれたはずのそれは、一輝がそれらの矢の隙間を器用に走り、跳ぶことで避けられてしまう。

その動きが思考によって叩き出されたものでも、経験によって得たものでもなく、直観や本能によるものであると当たりをつけた黒ウサギは、その場で弓と矢筒を捨て、木を蹴って一輝の背後に跳び下り、一輝が振り返る前にピストルの引き金を引く。しかしそれは、背を向けたまま体をそらした一輝の上を通り過ぎる。

《やはり、本能的に避けている!》

確かにそれなら身体能力が落ちていようと無視することは出来る、

と理解してピストルを左手に移した黒ウサギは、右手でボウガンをとって矢を番え引き金を引く。それもまた避けられていくが、気にせず矢を放ち続ける。初めて矢が髪に少しあたり数本を絶った時には一輝はほぼ目の前にいたが・・・

「これで、どうですか!?!」

そこで、左手に持ったままであったピストルを向け、引き金を引く。至近距離で放たれる銃弾。それは撃ってきたと認識したときには既に当たっているはずのものが・・・しかし、一輝はまたそれをギリギリのタイミングで避ける。そして、握った拳を黒ウサギの目の前に放ち、

「・・・うん、反射神経は落ちてないな。サンキュー、黒ウサギ。かなり助かった」

「い、いえ、お役に立てたのならうれしいのですが・・・なぜ、このようなことを？ 実戦であれば、武器で防ぐものなのに・・・」

「あー、まあそうなんだけども。俺も実際、獅子王とかスレイブで切り落としてただろうし」

と、一輝が黒ウサギから武器を受け取っては倉庫にしまっていると、視線の先に十六夜がいることに気付いた。唇を噛み、表情を殺した姿は、ずっと二人の様子を見ていたのかもしれない。

ずっと黒ウサギの背後を見ている一輝を不審に思ったのか、黒ウサギは振り返ってそこに十六夜がいることに気づく。

黒ウサギがそのまま手を振ると、十六夜は一度うつむき・・・顔を上げた時には先程までの面影はなく、いつも通りの十六夜の表情で手を振り返し、立ち去る。

「・・・?」

「あー・・・まあ、理由だけども」

首をかしている黒ウサギに何を言うべきなのか分からず、一輝はとりあえず話を再開することにした。

「あ、はい」

「今度ちよとケンカする約束をしてるんだけどさ、そいつが中々に強くて・・・その状況で武器を防御に回せるか分からないから、念のた

めに、な」

「ケンカ、ですか……」

「ああ、ケンカだ。……ギフトゲーム形式でやる予定なんだけど、黒ウサギに審判頼んでもいいか？」

「……それは一体、どのようなギフトゲームのですか？ケンカつて……」

黒ウサギが本気で呆れた様子なので、一輝はどう説明したものかと悩み……

「まあでも、審判頼む以上は知っておいて貰った方がいいのか」

「何を、ですか？」

「ケンカの相手。湖札とケンカするんだよ」

「妹さん、でしたよね？」

「ああ、最愛の妹だ。だから、思いっきりケンカしてしつかり倒す」

何の迷いもなくそう言い気言った一輝に思うところはあったのだろうか、黒ウサギは他の質問をする。

「あの……一つ、お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「別にいくつでも構わないぞ。なんだ？」

「それでは……最近の十六夜さん、何かおかしくありませんか？」

これには、一輝の方が驚いた様子を見せた。

「……気づいてたんだな」

「YES。とはいえ、何かおかしい、という違和感程度なのですが……何か御存じではありませんか？」

「なんとなく察しはついてはいるけど、今はまだ言えない」

一輝がきつぱりと言い切ると、黒ウサギはため息をひとつついてあきらめた。

「わかったのですよ……黒ウサギの方でも悩みを聞いてみることできかないか、ちよつと頑張ってみます」

「おう、ぜひそうしてやってくれ。それで解決するのが一番だからな。最悪、押し倒しちまえ」

一輝の言葉に一瞬首をかしげた黒ウサギだが、一輝の言わんとしていることを理解すると一気に顔を赤くする。

「な、何をおっしやっているのですか一輝さん!？」

「ん?十六夜が相手ってのは不満なのか?」

「そう言うわけではないですけど……って、何を言わせているのですかこのおバカ様!」

このリアクションは予想外、とばかりに一輝は目を見開く。

「……え?マジでそうなの?半分くらい冗談だったんだけど」

「あ、いえ、完全にそう、というわけではないのですが……ちよっと、惹かれてはいます」

そう言うと同時に赤くなった黒ウサギを前にした一輝はどうしたもんかと頭を少し搔いて……

「あ、それじゃ俺は行くな。さー、雑用頑張らないと」

「って、ここまで言わせておいて放置なのですか!？」

「いや俺ホント、その手の話題は苦手なんで」

「音央さんからの告白を先延ばしにしている時点でなんとなく察しはついていたのでですよ!って、黒ウサギはそんな人にあんないじられ方をされたのですか!？」

よく分からないことに驚愕している黒ウサギのだが、一輝は本当にそんな黒ウサギを放置して歩き出した。そして、あと一歩離れたら走ろうと構えた瞬間、

「あ、それと……もう一つ、質問いいですか?」

「……なんだ?」

「では……」

再び尋ねられ逃げることでできなくなった一輝は、その場に残って黒ウサギが何か言うのを待つ。そして、

「一輝さんは、その……妹さんと殺し合うかもしれないということに、何も思わないのですか?」

「ああ……そつか、そっぴやそっぴやだ。そう思うのが普通だよな。まあでも……」

＝＝＝＝＝

「たぶん兄さん相手に殺すつもりで向かって勝ったとしても、殺すことは出来ないよ」

「俺は湖札相手に殺し合いをして、殺せる自信なんてないぞ」

それは、とある兄妹の言葉。

「だからこそ殺し合いになったとしても安心して刃を向けられる」

「だから、負けないように出せる限りの力を出す」

決して精神が病んでるわけではなく。

「それに、主催者権限で共同開催のゲームになるだろうから、死んじやったとしても箱庭のルールで強制的に生き返るし」

「まあたぶんこんな感じの文面のゲームを共同開催するから、どっちかが死んだとしても今生の分かれにはならない」

だがしかし、とある事情から他の人間とは物の感じ方が違うが故の、歪んだ答え。

「私が望んでいるのは、最後の家族と一緒にいたいってだけで、実は殿下たちに協力したいっていうのはオマケなんだ。恩があるから、兄さんを引き込みたいなーって思ってるだけで、それがもう少し小さかったら裏切って“ノーネーム”に行ってたと思う」

「俺が望むのは、最愛の妹と一緒にいたいってだけだからな。俺が向こうにつけば早いんだけど、そうするには俺には“ノーネーム”が大切になりすぎた。だから裏切るのも心が痛むし」

そして、それは・・・

「だから、私は」

「だから、俺は」

血が繋がっていないはずの、二人の兄妹は。

「全力で兄さんを信頼して、殺すかもしれないでも戦えるよ」

「あいつの実力を信じて、本気で行っても殺さないって確信できるから、殺し合いになるかもしれないでも戦える」

どこまでも、兄妹らしかった。

チームバトル

『ギフトゲーム “チームバトル”』

- ・参加者
- ・参加申請したものすべて
- ・勝利条件
- ・優勝
- ・ルール詳細

- ・三人一組でのみ参加を許可
- ・トーナメント形式で行う

・手段は基本何でもありだが、殺しは禁止。審判が危険だと判断した時点で強制失格。自らの誇り、コミュニティの “名” と “旗印” に恥じぬ戦いを心がけましょう

・また、一定量以上のダメージを受けた時点でリタイアとなり、それ以上その試合には参加できない

- ・降参した際にも、リタイアと同じ扱いとする

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

『陰陽師の集い “印”』

清明が主催したこのギフトゲーム、もともとはギフトゲームに出れなくなってしまうた一輝のために主催し、多くの実力者に声をかけたものだったのだが、いかにせん、本当に実力を持つ者たちは自分のコミュニティのことで忙しく、結局一輝の参加が不可能になってしまったのだ。

清明がその旨を一輝にあやまりに行った時も、まあさすがに予想がついていたことと、自分だつてやる必要があるのに気を使ってくれたことも理解しているの、特に何も言わず、むしろお礼を言ったほどに、清明は動いていたのだ。

(完全に復興が終わったら、今度こそちゃんとやらんとなあ)

下層のプレイヤーが楽しそうに参加しているのを見ただけでも、このゲームを開催した意味はあったが、目的を達成できていない。次こ

そはちやんと彼が参加しても大丈夫なプレイヤーを集めようと決意し、壇上に立つ。

「あー、プレイヤーのみんな、お疲れさん。ここまでの試合、チームであるからこそその戦略も一人一人の力も見せてもろうて、楽しかったで。アジィダカーハの騒動なんかもあつたんやけど、一番の功労者もめえ覚ましたことやし、ここは神魔の遊び場、箱庭”や。この調子で盛り上がっていな」

さすがは箱庭というべきか、すでに敗退しているプレイヤーも含めその場にいる全員が盛り上がった。各々に声を上げ、拳を突き上げ、自らの意思を見せる。

「ほな、そろそろ次いくで。ラストバトル、決勝戦。参加すんのは、まづ遠距離武器のことなら下層では彼ら。プレイヤーもいれば製造もあり、この一点集中のコミュニティ、アーチャーズ”」

清明はその言葉とともに流れるように色とりどりの鳥の式神を展開すると、まず黒い者たちが集まって”アーチャーズ”という名を、残りの式神が並んで、弓と銃が交差した旗印を、コミュニティ”アーチャーズ”の旗印を描く。

「もう一方は、アジィダカーハ”との戦いでも中心メンバーとして活躍したコミュニティの一つ、”ノーネーム”のメンバーや」

再び同様のパフォーマンスが起こり、当然ながら名は描かれませんが、代わりに一輝が取り戻した旗を描く。日の昇る丘と少女の、旗印を。

これまでではありえなかったその光景に対して二人の少女はその顔に笑みとやる気を見せ、一人の少年は、ほんの一瞬だけ悔しさをにじませる。

「さ、お互いに準備はええな？もうどっちも豪華景品をもらえるのは確定しとるけど、どうせなら上目指してえな。ほな・・・決勝、始め！」

|||||

ゲーム開始と同時に、^ッアーチャーズの三人は一人二門ずつのマシンガンを構え、弾幕を張った。連射である。『到底比べ物にならないくらい強いし、先手を打とう』という考えでの連射である。これでダメージを与えることができれば十分、万が一にも一人でも倒すことができたのなら御の字のその作戦は・・・

「ふんっ！」

しかし、耀の繰り出す、グリフォンの恩恵によって防がれる。高密度で張られた風の壁は、弾の一つでも通ることを許さない。

「ありがとう、春日部さん。おかげで助かったわ」

「ううん、別に私が何かしなくても大丈夫だったと思うんだけど」

「アルマがいれば大丈夫だったかもしれないけど、今回のゲームでは使わないもの。私自身の身体能力はただの人間と変わらないし」

「お嬢様の言うとおりだぜ、春日部。だからやっぱり、さっきのはナイスプレーだ」

いつも通りの表情の二人からの言葉に耀は小さく笑みを向け、すぐに正面に戻す。ここでは、相手がマシンガンを捨て、それぞれの得意な武器を手に行っているところだった。

今回のゲームでも、三人は自分の力を抑えてゲームに参加している。我路炉に言われたように、これは全力を出していいゲームではないのだから。

その結果、耀は『合成をおこなわず単一での行使のみを行い、また最強種の具現は行わない』。飛鳥は『アルマティアとデイーンの使用禁止』。十六夜は『力や防御力を強制的に落とす枷の着用』。といった形での制限を受けている。

よって今回、耀が何もしていなければ飛鳥はリタイアしていたのは間違いないだろう。

「じゃあ、ここからは予定通りに？」

「そうね。じゃあ私はあの弓を持つてる人にするわ」

「なら俺はライフルのやつでいいか？」

「うん、いいよ。私がボウガンの人の相手をするから」

どうやら、三人は最初からこのような形で予定を立てていたらし

い。つまり、完全な一対一。

実はこの三人、初戦で三対三をやるうとした結果、相手の緻密に練られた作戦にしてやられているのだ。その時はどうにかぎりぎりでも勝利したものの、それ以降は『基本一対一、何か必要ならサポート』という戦術で固定された。チームバトルの意味がない。

なお、ちゃんとした多対多の戦い方は、後日練習するそうさ。

「では・・・いくわよ、メルン、メリル、メルル！」

「はい！」

三人の群生例の少女たちが元気よく返事をするのと同時に二人はそれぞれの相手に向かい、飛鳥は籠手を着ける。燃やす宝玉と凍らせる宝玉のついたあれだ。

飛鳥 side

|||||

さて、こうまで遠距離の相手に対してどう戦おうかしら・・・

「飛鳥、危ない！」

「え？」

メルンの言葉で顔を上げると・・・矢が大量に迫っていた。

「も、『燃やしなさい！』」

とつさに宝玉に命じて燃やし尽くすけど・・・おかしいわね。どうやったら、弓であんなに同時に・・・

「なんにしても油断大敵、ね」

いくら下層の、ギフトを抑えて参加しているゲームとはいえ、ギフトゲームに変わりはないんだもの。私が疑似神格を宿しても耐えられるものがなければ弱い私は、策を練らないと簡単に負ける。

「・・・メリルとメルルは、二つ前と同じことができるように準備。メルンは私と一緒にいくわよ」

「はー！」

言われたとおりにメリルとメルルが地に潜りメルンが肩に乗ったのを確認してから、再び矢をつがえて構えている私の対戦相手を見

る。多分私と同一年くらいなの、耳のどがった女の子。

「私は久遠飛鳥。コミュニティ「ノーネーム」に所属するプレイヤーよ。貴女は？」

「・・・わざわざ名乗る必要がありますか？」

「ええ、もちろん。だってこのギフトゲーム、まだプレイヤーの名前が読まれてないのよ？名乗りは必要でしょう」

「・・・確かに、一利ありますね。宣伝のためにもちようどいい」

そういった彼女は矢を引き、こちらに狙いを定めながら、

「遠距離攻撃系コミュニティ「アーチャーズ」所属、プレイヤーのシエルです。メインウエポンは、弓」

「あら、言ってしまった方がいいのかしら？」

「私たちは自らの武器に誇りを持っています。これを偽ることはしません」

私は武器を使わないからわからないのだけど・・・

「・・・いいわね、そういうの。私たちのコミュニティにも、自分の武器を誇りに思い、命を預けるプレイヤーがいるわ」

「それは素晴らしい。武器の種類は異なるのかもしれませんが、同じ志を持つ方がいるというのはうれしいことです」

「まあ、彼の場合には本当に武器そのものにも愛されているのだけけど・・・」

「武器が意志を持つのですか？」

「ええ、そうよ。それはもうぞつこんで」

スレイブは、本当に見ていても飽きないのだけど・・・そろそろ何か動いてほしいわね。そうでなくとも、いい加減に動かないとおいて行かれそうな感じだし。ヤシロはいつ動いてもおかしくないし、音央さんはしっかりと動いたみたいだし・・・

・・・恋の一つもしてないのに、何を言ってるのか、っていう話よね。身近なのは一輝君か十六夜君で、どっちもかなりの相手ではあるんだけど、一輝君は競争力が高すぎるし、十六夜君もなんだかんだで一途だし・・・

「・・・悲しくなってくるから、考えるのはゲームの後にしましょう」

「どうかなさいましたか?」

「いいえ、何でもないわ。ただちよつと、自分の恋愛経験のなさに絶望してしまっただけで」

「・・・よろしければ、今度相談に乗りましようか?これでもあなたの十倍は長く生きてるので」

あら、意外・・・でも、エルフだというならあり得ることなのかしら。

そして、それだけの経験があるなら、自分のことだけじゃなくてあの辺りのことも聞けそうだし・・・

「それなら、お願いしようかしら」

「では、お茶の用意をしておきますね!」

彼女はそう言いながら再び矢を射ってくる。今度は意識をそらさずにそれを見ていると、射られた矢が分裂していく。なるほど、それで弓なのにあそこまで同時に向かってきたのね。これが彼女のギフトによるものなのか、それとも弓の力なのかはわからないけど・・・そこは、とりあえず気にしなくていい。

『『燃えなさい!』』

もう一度まとめて燃やし尽くし、彼女との距離を確認して、肩に乗っているメルンにアイコンタクトをとる。この距離なら、たぶん行けるはずよね。

というわけで、走る。

「・・・はっ・・・って、ちよつと!?!」

急に走り出したことに驚いたのか何なのか、少しの間ぽかんとしたくれた間にだいぶ距離を詰めることができた。で、あとは・・・

「一にして全」
ワンフオーオール

「メルン!」

「はい!」

その言葉と同時に放たれた矢が一気に増えたので、メルンに穴を作ってもらい、そこに落ちることやり過ぎしてから再び走る。

「ああもう、その子たちも厄介ね・・・!」

「私のかわいい仲間たちだもの。強いにきまつてるじゃない。」

そういいながらギフトカードに触れて、水樹の幹を取り出す。ペルセウスのギフトゲームでこれの本体を使つて大立ち回りしたことはあるけど、幹で戦うのは初めてね。といっても、一輝君の戦い方からヒントを得ただけね。

『水を！』

「？一体何を・・・」

まあ、急に水樹の幹から大量の水を出せばその反応になるわよね。けど、その隙は決定的よ？

『凍れ！』

続けて宝玉に命じて、その水を一気に凍らせる。出来上がるのは、超巨大な、分厚い氷の壁。

うーん、やっぱり一輝君のようにはいかないわね・・・コツペリアの時、一輝君は本当にきれいに、空気の一つも入れないで作っていたもの。そうじゃなくても、形もきれいだった。まあ、うん。一輝君にやり方とかを教わってなかったら、もっと酷かったと思うのだけど。「巨大な氷の壁、ですか。まさか、それで防御を完璧にしたつもりですか？」

そう言いながら、再び矢をつがえるシエルさん。砕くつもりなのかしら？なら。

「メルン、足場を少し緩めて！」

「はい！」

さっさと行動するだけよね。うんうん、向こうもやってきたことじゃない。先手必勝。

というわけで、メルンに頼んで氷の下の地面を、彼女のほうだけ少し沈める。結果として起こるのは・・・

氷の壁が、彼女に向かって倒れていく♪

「え、ちよ、はあ!?どんな精神してるんですか、あなた！」

「『ノーネーム』主力『問題児四人衆』、久遠飛鳥よ」

「そんなのが主力で大丈夫なのですか!?そして、本気でむかつくのでその素晴らしい笑顔をやめなさい！」

あら、笑顔でいることはいいいことだと思うのだけど・・・不満だっ

たみたいね。

「ちなみに、この間、アジィダカーハ」を倒した一輝君と、ここにいる三人を合わせて、よ？」

「英雄のイメージをさも当然のように崩さないでください！ちよつと憧れていたのが一瞬で崩れ去りそうですよ！全オールフオーワンにして一！」

一にして全だと別れたということは、たぶん全にして一はその逆・・・威力重視、というところかしら。それなら好都合ね。

「メルル、メルル！」

「・・・え？」

間の抜けた声を出した彼女は、そのままメルルとメリルのあけた穴に倒れる。要領は、さつき氷の壁を倒した時と同じ。今回は後ろ向きに倒れたら彼女がその穴にきれいに入るくらいにしたんだけど・・・うん、ちゃんと入ってるわね。そして、氷の壁で蓋もされてる。

「お疲れ様、三人とも。完璧だったわよ」

仕事が終わって私の周りをまわっている三人に声をかけてから、彼女に近づく。どうにかしてどかさうとしてるけど、そこそこの重量を持つてるからどけることもできない。穴も狭いから、弓を構えるのも無理よね。

「さあ、どうかしら？」

「・・・はあ、私の負けですね。降参します」

彼女の近くまで行ってから宝玉を向けて尋ねると、降参してくれた。同時に全プレイヤーの胸につけられている清明さんの札も赤く色づく。

「それで、ですね。降参しましたので、ここから出してくれませんか？」

「・・・」

「すいません、なぜ目をそらすのでしょうか？」

・・・どうやって出すのか、考えてなかったわね。相手を穴に落とす戦法は他でもやったのだけれど、こうして蓋をしたのは初めてだし。

「・・・ねえ、メルン、メリル、メルル。何か方法はない？」

「「んー?・・・むり!」」

「ちよつと待っててください、何も考えてなかったのですか!？」

「無茶を言わないで。自慢じゃないけど私、この身そのものは単なる人間と変わらないのよ?」

「本当に自慢になりませんね!」

さて、本当にどうしようかしら・・・とりあえず、終わったら十六夜君か春日部さんに頼みましょう。

——ドガン!

とか考えていたら、爆発音が聞こえた。

|||||

さて、私の相手はボウガン。・・・ボウガンって、どんな武器なんだろう?使ってるのを見るの、初めてかも。

「えつと・・・『ノーネーム』の春日部耀です」

「・・・ハハツ、開始早々自己紹介ですか。いいですね、それ」

見るからに爽やか!っていう感じの人が素晴らしいながら笑ってる。なんだろう、これ。

「じゃあ僕も改めて。『アーチャーズ』のフェテス・ガラです。メイ
ンウエポンはクロスボウ」

「クロスボウ?」

「よく言われるのは、ボウガンという言い方ですね。実際にはこれ、正しくないんですけど」

「そうなんだ」

「残念なことに、知られてないんですよ。貴女も、ボウガンを使う人にそんなにあったことはないでしょう?」

確かにその通りだ。弓ならフェイスレスとか一輝の妹とかが使うみたいだけど、ボウガン・・・クロウボウは初めて。

「では、私なりの改造を加えたクロスボウがどこまで通用するのか・・・試させてもらいます」

「改造してあるんだ」

「ええ。本来私はプレイヤーではなく、生産者ですので！」

そう言いながら放たれた矢を、とりあえず風で無理矢理に止める。うん、いける。

「なるほど・・・それが、グリフォンの恩恵ですか。確かに噂の通り、人間でありながら幻獣の力を使うようですね」

「うん。これは、友達の証」

「友情がより一層力を強くする。素晴らしいと思いますよ、とても羨ましいです」

「・・・貴方だつて、生産側の人間ならそれができるんじゃないの？」

「そうなりたいからこそ、自分で試しているのです」

彼は再び矢をつがえる。少し緑がかつた矢はさっきのとは違うけど・・・それが何なのかわからない以上、普段通りにするしかない。

下手に考えず、気負わず、とりあえず普段通りにして、問題が出たら修正する。戦いに慣れていないなら、これが一番なんだとか。

・・・これはこれで難しいと思うんだけど。なんで当然のように勧めてくるかな、一輝は。できることなら、私たちがまともに戦い始めたのは箱庭に来てからだつてことを考えてほしい。一輝と違って、普通の世界出身なんだから。

「では、行きますー！」

そう言つてこちらに向けて放たれた矢をさつきと同じように風で対処しようとする・・・それが全部吸収されて、速度を増してくる。だから割と必死になって避けた。全力になって避けないと避けれそうになかったから、瞬発力とかが大きい動物、幻獣の力を借りて。

「・・・おや、避けられましたか」

口調そのものはさつきまでと変わらないけど、少し間が空いたあたりから動揺したのだと思いたい。あとできるなら、こっちが動揺したのだとは思われたくない。

「うん、避けた。今のは風の恩恵を吸収するの？」

「似たようなものですね。より正確にいうのなら、金気と水気を組み込んだ矢、ということになりますけど」

「言っちゃっていいんだ」

「ええ。できることなら、そちらのコミュニティの陰陽師殿にお伝えしていただきたいので」

そう言えば、五行思想って陰陽術の関連だったっけ。それで、一輝に売り込みたい、と。

「できるなら、彼に使っていただいて宣伝効果を、と考えております」

「・・・予想の一つ上だった」

「我々にとっては重要なことなんですよ、宣伝って」

彼はそう言いながら矢筒に手を伸ばす。今更だけどいくつもの矢筒を下げて、その全てに違うデザインの矢が入ってる。ということとは、全部込められているものは違う、できることは違うってことなんだと思う。

とはいえ・・・まったくもってわからない。五行思想とか、そんな物知らない。というわけで、

「・・・よし、このまま突っ込もう」

「正気ですか？」

「うちのコミュニティで一番戦いなれてる人から、『よくわからない能力が相手でも、勝てない、って思わなかったらとりあえず突っ込んで』って教えられてる」

「ずいぶんとクレイジーなようで」

「うん。一人で三頭龍に突っ込むくらいにはクレイジー」

その言葉に彼が驚いた隙を狙って、一気に突っ込む。具現するのは火蜥蜴の力。とりあえず手に火をまとわせてそれで殴り掛かる。そんな感じのざっくりとした作戦を立てて向かっていくと、今度は茶色っぽい感じのデザインの矢が放たれる。で、避けたのに火が全部吸収された。

「・・・ま、いっか」

「へ？」

とはいえ、相手は矢を放った直後。もう一度新しく矢を番^{つが}えて、狙いをつけて、それから撃つ。なら、そんな暇を与える前に殴ればいい。うんうん、何も問題はない。

「もう少し驚きとかないんですか、貴女!？」

「残念だけど、色々と体験しすぎてそうそう驚かない自信がある」
「なんですかそれ！」

そう言いながらも矢を番えている彼はプレイヤーもちゃんとできるんじゃないかなんて考えつつ、左腕で無理矢理払って照準をずらす。なぜだか彼はそのまま、まるで私の腕を支えにすみたいに構えてたけど・・・とりあえず分からなかったのも、予定通りにおなかを殴る。あんまり怪我しないように、それでも確実に意識を刈り取れるくらいで。だいぶ意外なんだけど、一輝はこういう技術も持つてるらしい。てつきり、技として備えてるのは殺す前提のものだけだとばかり思ってた。

まあなんにしても、最近本拠で暇な一輝に教わったそれは思った以上にうまくきまり・・・彼は、矢を放つと同時に気を失った。そして、私の後ろのほうで爆発音。

「・・・うん？」

オーケー、状況を整理しよう。

私は結局、力技で相手を倒した。これは問題ない。ついでに、一輝にも宣伝しておこうと思う。

そして、彼は私がそらしたつもりのクロスボウから矢を放った。これ自体も、問題ない。

で、放たれたほうから爆発音が聞こえてきた。これはさすがに問題だ。

|| || || || || || || || || ||

俺の相手はライフルを使うだけあつてか、すぐにでも距離をとった。フィールドが広いことにかこつけて、四キロほど。で、狙撃を受け続けている。

よくもまあ狙えたもんだと思うが・・・まあ、ちようどいい。ライフルとはちよつとやってみたかったんだ。

「つつても、この距離じゃあなあ・・・」

なんとなくだが、あれは銃弾を見るつてよりは撃つてる本人を見て

るように思えた。となると、ここまで距離を取られると難しいもんがあるな……

「なら、近づくか」

そうしないとできねえんなら、やるしかない。そういうわけでとりあえず、ちよつと強めに踏み込む。よし、見える距離になったな。

「……無茶苦茶にもほどがあるわね、アンタ」

「安心しろ、最近俺程度じゃ無茶苦茶なんて役不足だって知ったところだ」

「だとしたら、アンタは何なのよ？」

「……何の役にも立たねえ、ただの人間だよ」

拡声器みたいなもんを使ってるっぽいそいつに言われて、そう返す。

さて、ここまでこれりや……この距離なら、見える。あいつにできたなら、できる。出来ないなら……

「……さあ、やるか」

「そうね……やるわよ」

そう言つて撃たれた初弾を、俺は横に跳んで避けてしまった。これじゃあ、意味がない。

確かあいつは、あの時……そうだ、走つてた。なら、俺も走るか。判断が終われば、あとはその通りに走るだけだ。だから、俺は走つた。あの時のあいつが出していたスピードを意識して、走る姿勢は自分が一番楽な姿勢で。

初弾は、避けられた。イメージしたとおりにギリギリのところまで、速度が落ちた。

次弾は、全然だめだ。しゃがむとか、動きが大きすぎる。

その次は、避けること自体は完璧だった。確かに、あいつの動きをそのまま再現できた。が……

「ガッ!？」

その後が、駄目だった。避けた弾に横から飛んできた矢が当たつて、爆発する。俺はそれをもろに受けて、吹き飛ばされ……リタイア。

倒れた俺が見たのは、春日部が横から飛んできてスナイパーを倒した姿。ああ・・・また、駄目だったか。
本当に・・・俺は、無力だ。

後継者

「一輝さん、少々お話しいいですか？」
「ん？」

何もすることがなく、毎日体作りやら雑用やらに時間を費やしている一輝がデツキブラシ片手に風呂掃除をしていると、ジンとペストが真剣な表情で訪ねてきた。

「あー、別に問題はないが・・・場所を移動したほうがいい話か？」

「はい。誰にも聞かれない場所で」

「なら、ここでこのまま、つてわけにはいかないよなあ・・・式神展開、
“化”。あとよろしく」

一輝は残りの仕事を式神に任せると、手や足を洗ってから靴を履く。掃除のために服装はかなりラフなものだが、気にするほどのものではない。

「んじや、行くか。どこかあてはあるのか？」

「一応ありますが、誰か来る可能性は十分に・・・」

「そもそも、このコミュニティの中に絶対に誰も来ない場所なんてないわよ」

「そりやそうだ」

たとえ自失であろうと来るときは来るし、そのまま侵入して来ることもある。何せ、このコミュニティには問題児が四人もいるのだから。

「あの三人は、今日何してるんだっけ？」

「三人一組、トーナメント形式の対戦ゲームに参加しています。そろそろ終わる時間ですけど」

「となると、ちよつと難しいか・・・よし、俺の部屋に結界を張るか」「大丈夫なんですか？今も、リリの指導役に九尾を出しているのに・・・」

「過保護すぎだ。別に三日三晩かかるとかでもないんだし、大したことじゃねえよ。いい加減に病人扱いはやめてくれ」

一輝が肩をすくめ面倒そうにしながら歩き出すので、二人は慌てて

その後を追う。そのまま三人は誰かに会うこともなく一輝の私室にたどり着き、結界を張って誰も入れず、音も漏れないようにして、二人はベッドに、一輝は背もたれを前にした椅子に腰かける。

「それで？話って何？」

一輝は何のためらいもなく、何も考えずにそう聞いた。

ノータイムでそう聞かれた二人は少しの間顔を見合わせるが・・・そう長くはなく、ジンが語りだす。

「一輝さん。『ノーネーム』のリーダーを継いでくれませんか？」

「人選ミスにもほどがあるだろ」

即答だった。それはもう即答だった。

「いやというか待て、俺の想像してたより何倍か真面目な話なんじゃないか？」

「まあ、はい。それなりに真面目な話です」

「マジカー・・・俺、『何？ついに二人結婚でもするの？』とかの弄りから入るつもりだったのに」

「お願いなので真面目に話を聞いてください」

「あ、ハイ」

最近、何かあったのかリーダーらしくなってきた人の言葉に、珍しく一輝が従う。

「いや、まあ、さすがにそういうことなら真面目に聞くけどな・・・とりあえず、俺は全部を知るとは思うんだけど・・・いいか？」

「もちろんです。いいよね、ペスト」

「仕方ないじゃない。それに、こいつなら話しても大丈夫でしょ」

「そういうわけなので、何でも聞いてください」

ジンからそう返された一輝は、少しの間額に頭を当てて考える。まずは何を聞くべきなのか、そしてどれだけの事情を知っている必要があるのか。

「まずは、そうだな・・・ジンが後継者を見つけないといけない理由はなんだ？」

「近々、僕とペストが『ノーネーム』を抜けるからです」

「その理由は？」

「私の目的のためには、殿下たちの側についたほうがいいからよ」

「あー、そういう・・・確かに、太陽に復讐しようと思うと、こつち側じゃ無理だよなあ」

もう二人に一輝が知っていることに対して驚く様子はない。

いったいどこで知ったのかはわからないのだが、それでも知ることのできる機会があった。黒死病がひろまった原因を知っていれば思いつくことではあるし、一時魔王連盟側である湖札と行動を共にしていたのだ。

「抜けるのはいつの予定？」

「一輝さんと湖札さんの喧嘩の最中に浚われた、ということにする予定です」

「なるほど、そうなるのか・・・」

そして一輝も、ジンたちが兄妹喧嘩を知っていることに対して何の驚きもない。まあ、問題のレベルの差もあるのだが。

「じゃあ最後に。なんで俺なんだ？血筋的には、耀になるだろ」

「・・・それは、どこで知ったんですか？」

「まあ、いろいろと筋はあったけどな・・・ちゃんと聞いたのは、俺の先代に、だ。高橋示道、ってわかるだろ？」

「・・・はい、全盛期の『ゾーネーム』において、プレイヤーだった人です。それはもう、たくさんの魔王を従えていました。・・・一輝さんの先祖だったんですね」

「どうにも、そういうつながりで俺は召喚されたっぽい」

ジンが過去を懐かしむように瞳を閉じ、語る。

「とても自由な方でした。自由で、勝手に、なのに一度親しくなってしまうとだれも憎めなくて・・・陰陽師なのに剣と拳で戦ったり、それなのに知識が豊富だったために本当にたくさんの魔王を隷属させていった・・・そんな人でした」

「まあ、そうみたいだな。ついでに言うと、あいつは幹部職でもなんでもなく、最後までただのプレイヤーだった。その子孫に継がせるのは、ちよつと問題だろ」

「確かに、そういう面では問題です」

ジンははつきりとそう伝え、

「ですが、耀さんはまだコミュニケーションのリーダーとしてやっていくには、足りないものが多い・・・そう、思います」

「なら、それをお前が教えればいい」

「僕たちが抜けるといえば、全力で止められますよ」

「もつともである。耀に限らず、十六夜も飛鳥も黒ウサギも、このコミュニケーションにいるほぼ全員が、その行動を止めるのは間違いない。

「ですから、その選択肢はありません。なら、血筋を無視してでもその素質がある人に任せるべきだ」

「俺にその素質があるか?」

「はい。どのような形であれ、人の上に立ち、導く力が」

大げさだと思いつつも、一輝は何も言い返さない。はつきりと『無い』と言い切ることもできないのだ。ジンは、『どのような形であれ』といったのだから。

「そして、僕にはなかった実力もあります。ほかにも、まだ僕たちのコミュニケーションが“ノーネーム”であるなら必要となってくる宣伝頭としての役目も、一輝さんの名前なら十分に」

「・・・有名になったよなあ、俺」

さすがにそこははつきりと自覚している一輝である。あれだけのことをやらかしたのだから仕方ないともいえるが。

「以上の点から考え、そしてこの話をしても止めようとはしない人という点を考慮に入れると、一輝さんかヤシロさんの二人です。なら、より一層有名であり、主でもある一輝さんに頼むべきかと」

「理にはかなってるんだよなあ、困ったことに・・・」

もちろんそうでない点もあるだろうが、この時点で一輝が反対するだけの理由は消えている。しいて言うのなら自分が『悪』に該当する資格を持っていることだが、それを言い出せば『クイーン・ハロウィン』も『牛魔王』もそうだ。今更それを気にしても何にもならない。「・・・・・・・・・・はあ、OK。いくつか条件を付けていいんなら、その話を受けてやる」

「本当ですか!?!」

「ああ本当だ本当だ、だから俺の出す条件を聞け」

一つ目に、と一輝は人差し指を立てる。

「ジンが抜けてすぐには、リーダーは継がない。そうだな・・・上層めぐりが終わって帰ってきたら見つけた、ってことにするからなんか書置きっぽいもの作つといてくれ」

「わかりました、今日中には渡します」

「渡すタイミングに気を付けろよ」

つまり、上層めぐりが終わるまではその立場にはつかない、ということだ。

もちろん本人が面倒臭がっている、という理由もある。だがそれと同じくらいに、上層の連中から話を持ち掛けられる可能性を減らしたい、という理由もあるのだ。一応、ちゃんとした理由が。

「んで、二つ目。耀がリーダーを任せられるくらいに成長したら、俺は引退してあいつに継がせる」

「もちろん問題なんてありません。むしろそうしてほしいくらいです」

さらには、いつまでもやっているつもりはない、ということだ。これについては本当に本人が面倒がっているだけである。他の理由なんて存在しない。

「んじや、そういうことでよろしく。これ以上何か言うつもりはないから。」

「はい、わかりました。・・・僕たちのわがままに巻き込んでしまい、申し訳ありません」

「気にしなくていいぞ。多分、俺がジンと同じ立場だったら何も言わずに抜け出してただろうしな」

これで話は終わりとばかりに一輝が結界を解いたので、ジンとペストは立ち上がって扉に向かう。そしてそこを開き外に出ると・・・

「あら、ジン君にペストじゃない。」

「あ、ほんとだ。一輝の部屋で何かしてたの?」

ちやうど一輝の部屋をノックしようとしていた飛鳥と耀に遭遇した。何ともタイミングが悪いと考えるべきか、むしろギリギリのタイ

ミングで間に合ってよかったと考えるか。

「あ、えっと、ですね・・・」

「ちよっとジンから恋愛相談受けてた」

「一輝さん!?!」

そして、一輝が爆弾を投下した。もちろんだが、一輝という名の爆弾はしつかりと爆発し、飛鳥と耀という二つの爆弾にも誘爆する。

「あら、それは面白いわね。どういう内容だったのかしら?」

「いやそれがさあ、ある女の子の目的のために自分も一緒にについてって手伝いたい、っていうんだよ。超過酷な道だつてのに、さ」

「おー、意外とやるね、ジン」

「一輝さん、なんてことを!?!」

とつても温かい目で二人からみられ、ジンは一輝に半分怒鳴るくらいの勢いで問う。

「ん?何か間違ってたか?」

「それは・・・間違つてない、ですけど・・・」

そして、何も言い返せなくなる。事実そこまで間違っていないし、ここで違うと言おうものなら再び爆弾が爆発する。もはや、ジンにはこれしか選択肢が残されていない。まあ、二人そろって顔を赤くしたり事実が少し混ざっている分青くしたりと、これはこれでいじられそうなものが残ってしまったのだが。

「まあそういうわけだ。われらがリーダーの成長を祝う意味でも、このことは誰にも言わずそっとしといてやろうぜ」

「それもそうね」

「うん、それがいいと思う」

それでも、三人からにやにやとみられる程度で済んだので、いいほうだろう。ジン本人は『あなたは知ってるでしょう!?!』という目で一輝を見ているのだが。

「さて、と・・・それで?二人は何でここにきてたんだ?」

「あ、そうだった。ねえ一輝、最近の十六夜の様子について、何か知らない?」

「うん?」

少しばかり心当たりのある一輝は、この二人まで訪ねてきたことに少し驚いていた。一輝の見たところでは、まだこの二人には気付かれそうもないと思っていたのだから。

「あー……いや、わからない。何かあったのか？」

「うん、それが……今日のゲームで、ちよつと様子がおかしかったから」

「様子が？」

「そうなのよ。いつもの十六夜君らしくないというのか……普段の十六夜君なら、銃で撃たれたらその瞬間にはよけてるか、殴りついたり掴んだりするかじゃない？」

「まあ、普段の十六夜ならそうしそうだな」

「でも、今日はちよつと違ったというか……清明さんに映像で見せてもらったんだけど、ギリギリまでひきつけてから避けてたから」

「……」

その言葉を聞いた瞬間、一輝は一つ心当たりができた。なぜ十六夜がそんな行動をしたのか。その時十六夜が何を思っていたのか。そして……なぜ、最近十六夜はあんな様子なのか。

「そういう、ことか……はあ、あいつバカだな」

「何か言った？」

「いや、何でもない。それと、十六夜についても俺はわからないな」

「そう……」

「悪いな、力になれなくて」

「ううん、大丈夫。それなら、一輝には私たちの手合わせやってもらうから」

「二対一で私も春日部さんも本気でやるけど、問題はないでしょう？」
「俺が病み上がりだってことと、そっちが無茶すると後に響くってことを考慮するなら、な」

話は纏まったとばかりに二人が歩き出したので、一輝はジンたちにウインクを一つ残してその後を追う。

「あー……ま、やっぱりぶん殴るのが一番早いか」

「一輝、今何か言った？」

「いやなにも」

最後の一輝のつぶやきは、誰にも聞かれることはなかった。

本気で殴り合う

「呼び出して悪かったな、十六夜。」

「気にすんなよ、どうせ今日は何もなくて暇なんだ」

一輝が十六夜をぶん殴ろうと決意した日から数日がたったある日、一輝は十六夜を自分の部屋に呼び出していた。数日を待ったのは、十六夜が参加するゲームのないオフの日を待ったためである。その間にも、十六夜は彼らしくもないミスを連発している。

「それで？何の用事で俺を呼び出したんだ？」

彼は床に胡坐をかいて座り、椅子に座っている一輝に向けてそう問いかける。そんな彼は笑みを浮かべてはいるのだが、それは無理矢理にいつも通りでいようとしているのが目に見えていた。まあ、今の十六夜が一輝と正面切って話をするのだから、こうもなるだろう。

「ん？いや、別に大した用事じゃねえよ」

「それならわざわざ部屋まで呼び出さなくてもよかつたんじゃねえか？」

「いやいや、さすがにそういうわけにもいかないんだよな・・・ほら、そんな目立つところでゲーム盤展開するわけにもいかないだろう？」

「・・・は？オマエ、何言ってる」

十六夜の発しようとした言葉は、しかし次の瞬間に広がった光景によつてさえぎられた。

一瞬視界の全てが歪んだと思ったら、目の前に広がるのは夜。広がる闇の中、空からさす月の光だけがその空間に明るさを与えている。

十六夜は急に変わった世界に驚き、立ち上がって周りを見回す。そうして、ここがなんであるのかを理解した。

まず彼の正面、一輝の背後にあるのは一つの社。阿吽二対の狛犬が置かれ、その先には神の住まう社がある。

そして次に彼の背後にあったのは、長い階段の先にある神社の入り口たる鳥居。石で造られたその上には、おとろしという名の妖怪が乗っている。

その他にも鳥居から社までの参道があり、注連縄の巻かれた太い樹

があり、龍を模した像から水が流れる手水舎があり、その土地の全てを囲むように鎮守の森が。

それだけならまだ理解しきれなかったかもしれないが、この空間は普通ではなかった。まず怪しげな霧が立ち込め、最後にさまざまなお妖怪が彼らを見張るように、もしくは何か面白いものでも見るように取り囲んでいる。すなわちこれは、

「・・・まさに、オマエのゲーム盤ってわけだ」

「そういうことだ。どうだ、いかにも俺っぽいだろ？」

確かに彼の言うとおり、この場合は・・・神社という場合は、彼が生まれ育った場所であるからこそ彼のゲーム盤としてこれ以上の場所もない。

「それで、だ。なんでここにお前を招待したか、なんだがな・・・」

そう言った次の瞬間、一輝は十六夜の視界から消え・・・横から、十六夜を殴り飛ばした。

「ガッ・・・一輝、テメエ何を、」

「気に入らねえからぶん殴った。ただそれだけだ」

|||||

「あの・・・ヤシロさん、一体どうされたのですか？」

「んー？だから言ったじゃん、お姉さんたちに見てもらいたいものがある、って」

ヤシロはそう言いながら振り返り、後ろをついてきている面々に笑みを見せる。

それだけしか伝えられずに連れてこられた三人・・・黒ウサギに飛鳥、耀の三人は顔を見合わせるが、何もわからずに再びヤシロの背中を見る。

「えっと、せめて行先くらい教えてもらえないのかしら？」

「あー、うーん・・・まあ、それくらいはいつか。今向かってるのはお兄さんの部屋だよ？」

「一輝の？」

「うん」

これでより一層、三人はなぜ連れてこられたのかわからなくなる。一輝が何か用事があるのならわざわざヤシロに頼まず、自分で伝えるはずだ。では一輝は関係のない案件なのだとすると、行先が一輝の部屋であることがおかしい。結論、何もわからない。

「まあまあ、部屋にいたらちゃんと言明するから」

「は、はあ……」

これ以上の質問は無駄だと感じたのか三人は何も言わずに社の後に続いて一輝の部屋に向かう。そうして一輝の部屋の前につき、扉を開けると、そこにあつたのは……

「……テレビ?」

「……はい、テレビなのですよ」

「……それも、ダイヤル式の超骨董品」

そう、テレビがあつた。無駄に古いデザインのそれが部屋のど真ん中にあるというのは、中々の存在感である。

「ですが、どうしてこのようなものがここに?何か見れるというわけでもありませんのに……」

「まあ、それがこの部屋に来た目的だからねー。ちょっと待っててー」
困惑している三人の横を通つて一輝の部屋に入ったヤシロは、三人を手招きで部屋の中に誘導しつつ、テレビの電源を入れてダイヤルをいじる。そうしてガチャガチャとやっていくと……砂嵐が収まり、鮮明なカラーの映像が映される。それも、ちょうど十六夜が一輝に殴り飛ばされる場面で。

「……これは、何かを録画したのですか?」

「ううん、リアルタイムの映像だよ」

「じゃあ、何かの演出なのかしら?」

「それも違う。少なくともお兄さんは本気で殴り飛ばしたし、十六夜お兄さんも状況を理解できてない」

「……これ、どこなの?」

二人の発言をすぐさま否定したヤシロに対して、耀がそう問いかける。それに対してヤシロはさも当然であるかのように、

「今二人がいるのは、お兄さんのゲーム盤だよ。」

「そんな・・・それはつまり、今お二人はギフトゲームをしているということですか!？」

それも、一輝がゲーム盤を展開してまで何かした、というのはいそれだけのゲームを始めていると判断するのが普通だろう。しかし、

「うーん・・・ゲーム盤を展開したのは周りへの被害を考えてであつて、ゲームを始めたわけじゃないんだよねえ・・・」

「・・・被害?」

「うん、被害。・・・まあ、さすがにあの二人が本気で殴り合えば、被害も出るよねー」

そのヤシロの言葉に、三人は絶句して再び画面を見る。そこでは、十六夜が立ち上がり、一輝をにらみつけているところであつた。

一生勝てねえ

「・・・なに、言ってるんだ?」

「あー、そうだな。一応、説明くらいはした方がいいか」

一輝は十六夜に睨み付けられているにも関わらず、なんてことないように手を握って開いてと調子を確かめている。

「つつても、本当に大したことはないんだけどな。最近のお前が気に入らなかつたからぶん殴りたくてここに招待した。ただそれだけだ」
「ああ?意味わかんねえ、よ!」

本当に理解できそうにないことを言った一輝に対して、十六夜もまた地を蹴って一輝に肉薄し、その横つ面に殴りかかる。星をも砕くその一撃は、しかし。

「んなっ・・・」

「軽いんだよ、それは」

一輝の左手にあつさりと受け止められ、そのまま上に投げ飛ばされる。

そして一輝はそれを追うように跳び上がり、十六夜の腹に踵落としを決めて叩き落としてから、その腹に飛び降り、後ろに跳んで十六夜から距離をとる。

「ガハッ、ゴホッ・・・」

「ったく・・・どうしたんだよ、その一撃は。その眼は。弱くなった、なんてもんじゃねえぞ」

「何の、ことだよ・・・」

「ふぬけきつたお前のことだよ、十六夜」

さも当然のことであるかのようにきっぱりと答えた一輝の言葉は、どうにか地面に手をつけて起き上がろうとしていた十六夜の行動を止めるには十分だった。

「お前が何考えてんのかは、まあ何となく察しがついてるけどな。んな下らねえことで自分見失って、何とか自分を装おうとして、それでも相手を真似ようとして・・・そんなやつを弱くなつた以外、どう表現しろってんだ?」

「・・・黙れ」

「やなことった、自覚するまで黙る気はねえよ」

「だったら黙れよー！」

そして、十六夜そが崩壊するのは早かった。

一輝の抜き手が三頭龍の胸を貫いたのを見た瞬間から今この時まで、ずっと目をそらし続けようとして、それでもそらすことができなかった。少しでも近づこうとして、しかし全くもって近づけなかった存在。それにここまでの確に指摘されてしまえば、崩れるのは容易だろう。

「そんなこと、とつくに自覚してんだよ！ああそうだその通りだ、全部お前の言うとおりで一輝！」

「ふうん・・・目は、そらしてなかったのか」

「けどな、何にもわかんねえんだよ！」

一輝のつぶやきが十六夜の耳に入ることはなく、彼の独白は続く。「勝手に同格だと思ってたお前は実は手も届かないほどに格上で！ほんの少しですら近づけそうにない！ここまで圧倒的に負かされて、どうしろってんだよ！」

「さあ、どうするんだろうな」

「そいつは俺にはできなかつたことをやってのけて、俺がやりたかつたことも果たした！」

もはや彼には自分の言葉しか聞こえず、自分の弱さしか意識に入らない。

だがしかし、自分の弱さだけは意識に入ったが故に・・・

「なあ、一輝・・・」

自分のもとに近づいてくる気配にすがりたくて、それを見もしないで、訪ねてしまう。

「俺は、どうすりゃいいんだよ・・・」

その問いを。自分ですら答えを出せていないその問いかけを、してしまう。

彼は、なまじ強かったが故に抱いてしまったその問いに、自らよりも強いものならば答えることができるのではないかと、自分ではわか

らないその答えに導いてくれるのではないかと、期待してしまった。
「俺にはもう、何をすればいいのかも、何をしたいのかも、わからねえんだ」

涙とともに吐き出される、問いかけ。そんなもの……

「そんなもん、俺が分かるわけねえだろ」

そんなもの、他人が答えられるわけがないのに。

|| || || || || || || ||

もう、立ち上がるだけの気力すらわからない。うづくまるように四肢をついて、頭を地面にこすりつけるこの体勢を、変えられそうにもない。

「俺にはもう、何をすればいいのかも、何をしたいのかも、わからねえんだ」

だから、頼む。その気力を与えてくれ。

俺自身の涙で濡れる地面を見ながら、吐き出したその問いかけは。

「そんなもん、俺が分かるわけねえだろ」

はつきりと、否定された。

あれだけ他者を導いてきたこいつが、アジⅡダカーハにすら神託を与えたこいつにすら、分からないのかと。そう驚愕して顔を上げると……目の前には、あいつの足が。そのまま振りぬかれ、蹴飛ばされる。

階段を転げ落ちた。途中、段になっていないところで転がるのが止まり、そのまま四肢を投げ出して、あおむけになる。顔が濡れているのが分かった。涙と、鼻水と……鼻血まで出てやがる。そのせいで砂とか砂利までついてんじやねえか。

ハハ、ホント……なさけねえな。

「テメエにすらわかんねえもんが、俺に分かるわけねえだろ」

ああ、確かに言われてみりやその通りだ。あいつだって分かったたのは、俺にも自覚があったものくらいだな。

「その上で言ってるが、その辺りの事すら分かんねえなら、もう拳を

握るな。そんな状態で戦いに挑んだところで、何の役にも立たねえよ。むしろ邪魔なだけだ」

ああ、これもその通りだ。あれ以来、どんなゲームに参加してもへましてばかりだしな。

「だがまあ、そんな状態になつても俺にとつては大切な仲間なんだな。本拠にでも引きこもつてろよ。ちゃんとまとめて守ってやる」

ああ、そりやいい。あいつが守るってんなら、そこまで安全な場所もねえ。さっさとギフト手放して、毎日ガキどもの手伝いでもして過ごすか。

「ああ、それともう一個」

ああ、でも・・・なんか、引つかかるな。

「お前が黒ウサギと交わした約束・・・残りも全部、俺が果たしといてやるよ」

・・・黒ウサギと、交わした約束。何のことだったか。

いや、悩むまでもねえ。名と旗印を取り戻してやる、つて。あの星空に俺たちの旗印を飾ろう、つて。目指すは箱庭一、つて。そんな約束を、あいつとしたんだ。

どうせ、もう一つは一輝にとられてんだ。残りをどうしようと、大差

本当に、そうか？本当に、それでいいのか？それだけは・・・譲つて、いいのか？

「・・・ハッ、何だよ・・・未練がましすぎるだろ、俺」

約束を果たせなかった。そんな醜態をさらしておきながら、どうやらまだ諦める気がないらしい。けど・・・ああ、体が動く。立ち上がれる。

全身を包む痛みを無視して、まず上半身を起こす。そのまま手をついて、立ち上がる。

ひびは笑ってるし、今にも倒れそうだが・・・確かに、立てたな。階段を見上げると、もうこっちに背を向けている一輝がいた。

「待て、よ・・・」

「ん？」

億劫そうに首だけひねってこっちを見た一輝の表情は、つまらなさそうだったが・・・すぐに、変わった。笑みを浮かべてやがる。

「ふうん・・・なんか見えたのか？十六夜」

「ああ、そうだな。見えたよ見えた。ってか、オマエ気付いてて最後にあれ持ってたきやがっただろ？」

「さて、何のことだろうな」

ああ、気に入らねえ。こいつは間違いなく、勘なのかもしれないねえが、確信があって約束あれを最後に持ってきた。だが・・・ここは、乗せさせてもらうか。

もはや悔しさすら感じられないが、それでも体を動かして階段を上る。

「それなら、聞かせてもらおうか」

おう、何でも聞きやがれ。そう言い返そうとしたが、口が動かない。まあ、下手に動かしたせいでこっちの気持ちを答えられないんじゃないや意味ねえし、別にいいか。

「さあ、お前は今後どうしたいんだ？・・・答えろ、逆廻十六夜！」

「んなもん知るかよ！」

お、ちゃんと口が動いた。ついでに、階段を上る勢いも増していく。「ああ、そんなもん知るかよ！もうごちやごちやして、俺がこれまで持ってたもんも全部ぶっ壊されて、明確な答えはわかんねえよ！」

腕で涙を拭って、鼻水も、鼻血も、ついでに今更気づいた口の端の血も拭って、動くのに邪魔だから上着を脱ぎ捨てる。

「けどな、アイツに約束したのは・・・黒ウサギと約束したのは、俺だ！」

これを言霊っていうのかは知らねえが、体中に力が満ちてきた。階段を、駆け上がる。

「確かに一つはお前にとられて、果たせなくなった！けどな、だからって残りまでくれてやる気はねえ！」

右手の拳を握りしめて、血が滲んでもさらに強く握りしめて、階段を上りきる。

「何より、好きなやつと交わした約束を守れないだけじゃなく、守ろう

ともできねえとか、そんな情けねえマネができるかよ！」

少し驚いた様子の一輝に満足しつつ、アイツの前まで走りながら右拳を引いて、

「だから、俺は最低限約束を守ろうとする！名を取り戻して、あの星空に旗印を刻んで、箱庭一になつて、その三つを目指す！」

何ともなさけねえ、約束を守るとも言えないような情けない姿をさらしながら、それでもどこか納得したようで俺の口は自然を笑みを作っていた。相手を威嚇するしか能がなさそうな、笑みを。

「それで、文句あるか！」

そう言いながら一輝の顔に殴りかかる。体中ボロボロで、最初よりも間違いなく弱くなつてはるはずが・・・さつきよりも、いい音が鳴った。

さつきと変わらず一輝の左手に防がれたが、さつきとは違って衝撃は地面にまで伝わり、一部陥没する。

「・・・いい表情、いい目になつたじゃねえか」

だがそれでも、目の前にいる一輝は揺るがない。しつかりとその左手で売れの拳を防ぎ切り、顔は笑みを浮かべていて・・・

「その目で言えるなら、文句はねえよ」

ああ、こりや俺一人じゃ一生勝てねえな・・・なんて考えながら、階段の一番下まで殴り飛ばされた。

恨むぞ

「な、な、んなんなな・・・!?!」

「おー、これはこれは・・・」

「まさか、公開告白になつてしまったわね・・・」

そして、場所は一輝の部屋。まさか見られているとは知らずに言つてしまった十六夜の言葉は、しっかりと黒ウサギに聞かれていた。なお、何も言っていないヤシロはどうしたのかというと、一輝のベッドの上で腹を抱えて大笑いの真っ最中だ。よつて、これ以上の描写はない。金髪のロリ美少女がメイド姿でスカートなんて気にもせず笑い転げている姿なんぞ、どう描写しろというのか。

だがしかし、まだ本人がいなければシリアスモードのまま見れたのかもしれないが、残念ながらここには黒ウサギ本人がいた。そんな状況では殴り飛ばされた十六夜が、一輝の手を取つて立ち上がったシーンを見ても、ホツとすることはないだろう。むしろ、

「ちよ、ヤシロさん!?!これ、いつ戻つてくるのかとか、」

「お、お兄さんは、全部終わつたら戻る、つて言つて、た・・・アハハハハハハハハ！」

「笑わないでください!?!というか、笑いごとじゃないのですよ!?!」

本気でまずい、というか今の真赤になつた顔を見られたらすぐにもバレル、と思つた黒ウサギはすぐにでも部屋を出ようとするが、しかし立ち上がろうとした黒ウサギの手を、両サイドに座っていた飛鳥と耀に掴まれる。

「お二人とも何を!?!」

「いや、ねえ。さすがに聞いているにもかかわらず逃げる、というのはどうかと思つて」

「ファイト、黒ウサギ」

「何をおっしゃるのですかこの問題児さま!?!」

「あ、戻つてくるみたいだよ」

髪色をピンクに変え、顔を真っ赤にして焦る黒ウサギを無視して、耀が画面を指さしてそう告げた。画面の中では、一輝が手を伸ばして

ゲーム盤から出ようとしている。そして、黒ウサギがそれを認識した瞬間には、二人は三人の前に出てきた。

「あークソ、とりあえず傷の手当てしねえと……なんで三人がここに
いるんだ？」

そして、その場の状況に真っ先に疑問を抱いたのは十六夜であった。戻ってきてみれば一輝の部屋に黒ウサギと飛鳥、耀（ついでにヤシロ）がいたのだから、何も知らない彼からしてみれば当然だろう。余談だが、一輝はその隣でヤシロとアイコンタクトをとって状況を確認していた。そして少しばかり申し訳なさそうな顔をしたと思っただら、

「あー……悪い、十六夜」

「あん？何言って……オイ、なんだその表情は。なんだその『面白くなってきた』って表情は!？」

すぐにでも問題児の表情になり、親指で自分たちの背後を示してから扉に向かい、それを閉めた。完全に二人の逃げ場を封じた形である。門番よろしく立ってるし。

「ん？なんだこの古いテレビは……なあ、一輝。ここに映ってるのはお前のゲーム盤か？」

「あー、まあそうだな。さつきまでは生放送してたけど、一応録画もされてる」

「……生放送？」

「お客様は、そちらの四名様でございます」

「ふざけんなよ teme ！」

これには、さすがの十六夜も顔を真っ赤にして一輝に詰め寄った。一輝の襟首をつかみ、思いつきりぶんぶんと振っている。

「つまりあれか!?! さつきのなっさけねえ俺を見られてたってことか!?!」

「まあ、うん。ほら、この三人もお前の様子を変だなー、って心配してたから。だったらちゃんとしておくべきかなー、と思ってヤシロに呼んでもらっておいただよ」

「その結果、俺のあれが公開告白になってんじゃねえか!」

まあ、うん。これは十六夜が擁護される側であろう。アハハーとか言いながら頷いた一輝の襟首をさらに強く揺すり、二回に一回くらい一輝の後頭部が扉にぶつかっている現状を攻めるものはどこにもいないはずだ。

そして、そんなことをしながらも十六夜は状況を理解していく。

つまり、お嬢様と春日部、ヤシロ、一輝の四人がニヤニヤとしながら残りの二人を見ているのはそういうわけで、黒ウサギの髪が桃色になって顔が真っ赤になって、お嬢様と春日部につかまってるのもそういうわけで・・・と、そんな感じのところまで考えが至ると、さすがの十六夜も観念したのか、一輝の襟首をはなした。

「・・・一輝、とりあえずこの件については、今度一発殴らせろ」

「あー、うん。まあ、さすがにこれは仕方ないかなあ・・・」

一輝に今度一発殴るといつてから、十六夜は黒ウサギのほうに近づく。そこで飛鳥と耀の二人は黒ウサギの脇に手を入れて立ち上がり、十六夜とすれ違うようにして一輝のもとに向かう。ヤシロもまた、気が付けば一輝の隣にいた。

「あーっと、だな。黒ウサギ」

「は、はい・・・なんでしょうか？」

「なんともまあしまらねえ形になっちまったが・・・まあ、うん。俺はお前のことが好きだ」

改めて、はつきりと伝えられた黒ウサギは、顔を真っ赤にしてあわあわとして、としばらくの間観客を楽しませて、十六夜をハラハラさせてから・・・

「その、一日・・・返事を待っていただけじゃないでしょうか？その、色々とありすぎて混乱してしまっ・・・」

「・・・ああ、分かった。混乱の原因は俺にもあるだろうし・・・待つか、一日くらい」

そう、返事をした。まあ、一輝に比べればちゃんとした返事である。そして、この場はこれで丸くお収まるはずであった。・・・これだけであれば、だが。

「あー、何だ。ちゃんと立ち直ってんじやねえかよ。遊興屋に言われ

てちよつと楽しみにしてたんだがな……」

まあ、何とも残念なことには、この場はそれだけでは終わらなかつた。「まあでも、面白いもんが見れたし、いいとするか」

そう言いながらあらわれたのは白髪の少年、殿下であった。

彼はそんなことを言いながら宙を歩いて空いている窓から、一輝の部屋に入ってくる。いやちよつと待て、ここ最上階。

「オイコラどこから見てやがったテメエ」

「ヒヤハハ、大体お前さんが階段を転げ落ちた辺りからだなあ！」

「もちろん、一回目だがな」

部屋に入ってきた殿下は十六夜の質問には答えず、代わりに続いて宙を歩いて入ってきた混世魔王とグライアが答える。二人ともとてもニヤニヤしている。

「うわー……それにしても、このゲーム盤ボロボロだなあ……」

そして、いつの間にか部屋に入っていた湖札はテレビに移されているゲーム盤の様子を見て、そう呟く。いつの間にかいた彼女に対して一輝とウロボロス川の間以外の全員が驚くが、

「あ、黒ウサギさん、おめでとうございます。ちゃんと返事してあげてくださいいね？」

「あ、はい……って、そうじゃないのですよ！」

それだけ伝えた彼女は、その場のカオスさに目もくれずに一輝の元まで歩いて行った。

「やつほ、兄さん。なんだかあんまりよくないタイミングで来ちゃった？」

「あー……いや、そうでもないぞ。かなり面白くなってくれた」

「だとしても、私としては黒ウサギさんと十六夜さんに悪いことをしたなー、って感じで……」

湖札はそう言いながら、頬をかいて部屋の状況に苦笑する。『ノーネーム』と『ウロボロス』の殿下派、双方の主力が勢ぞろいして約二名のことをいじっている。まあ、確かに二人には悪いことをしているかもしれない。

「あの二人については、気にしなくてもいいと思うけどねー。あ、お兄

さん。私はジン君とペストちゃんに声をかけてから、他の主力の人たちを呼んでくるね?」

「そんな感じでいいんだよな、湖札?」

「うん、あとでリンちゃん来るから、それで大丈夫だよ」

「だ、そうだ。頼んだぞ、ヤシロ」

「はい!」

そんな中、事情を知っているヤシロは一輝に言われたとおりジンとペストの二人に家出の準備をするよう、そして浚われる様子を見咎められないように主力の全員をこの場に呼び出しに行った。

「それにしても、本当にごめんね兄さん。兄さんの部屋でこんなに大人数が騒ぐことになっちゃって」

「まあ、別に大丈夫だろ。ほら、ここ最上階の角部屋で他の部屋よりも広いし」

「・・・その伏線、今使うの?」

「作者も半分忘れてたくらいのものを、むしろよく使ったもんだと思う」

大体、十五話くらいだったかな・・・いやはや、懐かしい。

《何逃げようとしてんだよ》

《他にも色々と残ってるんじゃない?》

ホントにそうですね・・・ちゃんとしないとなあ・・・

というか、割り込んでくるんじゃないやねえ。

「さて、と。あの連中もそろそろこっちを見てることだし・・・人も集まってきたみたいだし、本題に入るか?」

「まあ、そろそろ頃合いだね・・・うん、本題に入ろう、兄さん」

そう言いながら一輝は雑用に出しているアジ君と今日の分のリリの教育を終えた九尾を檻の中に回収して、湖札はこの部屋に入ってくるための足場になっていた結界を解除する。つまり、二人ともそろって全力を出せる状態になった。

「それじゃあ、兄さん。あらためて・・・」

その状態で向かい合い、二人は少し距離をとる。そして、
「喧嘩、しに来たよ。兄さん」

「おう。喧嘩、するか」

そう、お互いに告げた。

「・・・すみません、十六夜さん。本当に申し訳ないのですが、返事、もう一日追加で待っていただけじゃないでしょうか・・・混乱が収まりそうにないですよ・・・」

「ああ、大丈夫だ。さすがにこの状況で一日で返事、つてのは無理だろうからな。・・・恨むぞ、一輝」

・・・二人に、合掌。

兄妹喧嘩 ①

「へえ、このゲーム盤、実際に入ってみるとこんな感じになってるんだ・・・」

「ま、そうだな・・・懐かしいだろ？」

「うん・・・すごく、懐かしい」

湖札はそう言いながら、そのゲーム盤を見る。そこは・・・かつて、まだ鬼道の一族が存在していたころ、彼らが暮らしていた神社そのものののだ。

既に先ほど一輝と十六夜によってつけられた傷跡は消えているので、湖札が懐かしむのも仕方ないことだろう。

余談だが、今この場にはこの二人以外にも、ジンとペスト、リンを除いた「ノーネーム」、殿下一派の主力陣が一切被害の出ない場所から二人の様子を見ていて、黒ウサギは上空から審判をするために待ち構えている。

「・・・うん、よしっ」

「もういいのか？」

「うん。出来るなら、ここで兄さんと一日くらい懐かしみたいんだけど・・・兄さんを倒して隷属させれば、いつでも懐かしめるからね」
「あー、まあ確かに、いつでも懐かしめるのは事実だよな・・・俺が倒しちまえば、湖札は俺に隷属するんだから」

声を揃えてそう言った二人は、同時に日本刀を抜いた。

一輝は師子王を、湖札は村正を。もはや二人ともその動作がなくなるとも奥義を使えるのだが、そろって妖刀を抜いた二人は、それを自分の前に横向きで構えて、言霊を唱える。

「我、今ここに汝の降臨を希うこいねが」

それは、檻の中の神霊を呼び出す言霊。

「汝は中華の軍神。悪妖を従え、八十一の兄弟と共に天下を横行したもの」

「汝は日ノ本の女神。荒ぶる嵐の神より生まれ、その猛気を体現したもの」

一人は先祖が殺め、自らに封じた鍛冶の神を。一人は自らの手で殺め、封じた荒ぶる女神を。

「我はここに汝の力を求める。汝、我がために兵器を作り出せ」

「我はここに汝の力を求める。汝、我がために全てを投げ飛ばし、全てを噛み壊せ」

それぞれが、この場に降臨する。

「今ここに降臨せよ、蚩尤！」

「今ここに降臨せよ、天逆每！」

そうして二人の隣に、二柱の神が降臨する。

一柱は、牛の頭を持つ巨大な神。一柱は、鳥のような頭を持つ、人間サイズの神。

二人はそれぞれの神に手を触れ、再び言霊を唱える。一息に、やることを終わらせる。

「我、今ここに大いなる神の力を希う。我が血族の名は鬼道。鬼の名を持つ一族也。故に我は我が身の丈を考えず、神にならんと欲す。汝、その大いなる力を我に貸し与えよ」

彼らの言霊に応じて神と妖刀が解^{ほど}け、輝く霧となって彼らの体に入っていく。その結果、一輝の額には鉄が埋め込まれ、湖札の耳は長く伸び、とそれぞれの神の面影が現れ・・・神と、なった。

「・・・さ、準備は完了かな？」

「うん、これで準備完了。それじゃあ、ゲームを開催しようか」

湖札が言うのと同時に二人は腕を突き出し、神主衣装と巫女服の袖から、それぞれ火の粉と白い霧が吐き出されていく。

「契約書類の内容はどうする？ここで話し合う？」

「わざわざそんなことしなくても同じ文面になるんだら、気にしなくてもいいだろ」

「それもそっか」

「ああ。どうせ、考えることは一緒だからな」

そうして二人が合意すると、火の粉と白い霧は舞い上がり・・・二人の頭上と、観客たちの頭上へと、降り注いだ。

方や、一輝が使用した蚩尤の主権者権限によつて作られた輝く契約

書類となつて。

方や、湖札が使用した天逆毎の主催者権限によつて作られた黒い契約書類となつて。

『ギフトゲーム名 // 兄妹喧嘩』

・プレイヤー一覧

・鬼道一輝

・鬼道湖札

・勝利条件

・相手に勝利を認めさせる。

・相手を戦闘不能にする（殺害を含む）。

・備考

・敗者は勝者に隸属する（死亡している

場合も、箱庭によつて強制的に蘇生）。

・主催者の双方が主催者権限を失つた

時、このゲームは強制的に終了する。

宣誓 上記を尊重し、誇りとホストマスターの名の下、ギフト

ゲームを開催します。

兄 // 鬼道^{蚩尤}一輝 // 印

妹 // 鬼道^{天逆毎}湖札 // 印』

|| || || || || || || || || ||

「オイオイ・・・これが本当に、喧嘩の内容なのかよ」

はじめ、十六夜は喧嘩なのにルールがあるのかよと呆れていたのだが、この内容を見た瞬間にそんな考えは吹き飛んだ。

要するにこれは、何でもありの喧嘩なのだ。ルールとして示しているのは、喧嘩の後のこと。敗者は勝者に絶対的服従を誓うという、喧嘩にはやりすぎなくらいの誓約を明文化している。

「・・・なあ、おい。白髪鬼、テメエはあの二人がこの内容でゲームをするって知ってたのか？」

「ん？いや、この内容でゲームをするとは知らなかった」

「じゃあ、何かほかのことは知ってたのか？」

「ああ。この内容で喧嘩をする、とか言うバカげたことは聞いてた」

そういう殿下は、苦笑気味である。さすがの彼でも、こんなゲーム内容で契約書類まで作って喧嘩をするというのは信じられないのだろう。

「いえ、それよりこれは本当に喧嘩なの？」

「喧嘩なんだから、あの二人が言ってる以上は」

そして、飛鳥はこんなことまで決めて喧嘩をするという二人に軽く引き気味であり、混世魔王は自分自身も姉に喧嘩を売る気満々だからかそこまで大きな反応は示していない。

「・・・というか、二人の様子が喧嘩をする前じゃないんだけど」

「兄妹がどのような形であるなんかなんてそれぞれであろうが・・・さすがに、あれは異常だろう」

耀は契約書類まで出したのどこか和やかな雰囲気の二人に対して違和感を抱いて、グライアはその異常さに対して、その片割れがこれまで自分と一緒にいたということに驚きを抱いた。

「つーか、その一輝のメイドたちはいいのか？お前らの主が勝手に隷属込のゲームやってるけど」

まあ当然ながら、一輝に隷属している・・・つまり、一輝の所有物と大差ない立場である四人に十六夜はそう尋ねる。

「まあ、たぶん一輝が勝つでしょ」

「一輝さんですしね。勝手なイメージですが、負ける姿がイメージできません」

それに対して、音央と鳴央は一輝に対する絶対的な信頼を見せるが。

「私は一輝様の剣だ。一輝様がどこに行くことになるうが、それについていくだけ」

「私はぶっちゃけちゃうと、お兄さんと一緒に入れたらどっちでもいいからなー」

「ああ、確かにそれはあるも」

しかし、そののちの二人に同調してしまった。要するに、彼女たち

からしてみれば一輝と一緒にいられさえすればそれでいいのだ。

そんな様子の四人にまたそこにいるメンバーは軽く引いたが……
どうにかその感情を無視して、兄妹の様子を見る。

「つーか、あんな和んだ様子だし割と平和的に終わるんじゃないかねえか？」

「あ、大丈夫だよ。まず間違いなくそれはないから」

十六夜のもっともな言葉は、ヤシロによって即座に否定された。そして、

『では、主催者双方の合意がありましたので、審判は私黒ウサギが務めさせていただきます。それでは……始め！』

黒ウサギの開始の合図と同時に、二人の間で十を超える札がぶつかり、軽い爆発が引き起こされる。

開始一秒もない間に引き起こされたそれに（一輝のメイドを除く）観客と審判が言葉を失うが、そんなことは気にもしないで二人は攻撃を続ける。

『ノウマクサラバタタギヤテイビヤクサラバボツケイビヤクサラバタタラタ』

火系の真言の中でもっとも威力の高い火界呪を二人は異口同音に唱え、結果として二人の背後から超高熱の炎が蛇のように伸びて二人の間でぶつかり合う。どちらが勝ることもなくそれらはぶつかり合い、周囲に高熱と火の粉をまき散らす。その威力だけでも並大抵の敵なら消し飛ぶほどで、当然それを維持するのは並大抵の苦労では済まないはずなのだが……二人はそんなこと何でもないかのように五行符を取り出し、それを互いに投げ合う。

一輝が土気と木気の札を同時に投げて土生木を繰り出すと、湖札は金気の札によってそれを相克し、続けて水気の札によって金生水を繰り出して水でできた多頭の蛇で一輝を攻める。

自分に向かってきたその多頭の蛇を一輝は殴りつけ、許容量以上の呪力を流し込むという力技で霧散させ、蚩尤の力で刀を作りながら走る。

湖札もまたギフトカードから短刀を二振り取り出し、それを逆手に構えて走る。

その途中でも二人は札を投げ、ぶつけ合い、また相手の辺りまで達した札も切り裂かれながら進み、そしてぶつかる。

『センドマカロシヤダケンギヤキサラバビキンナン』

もちろん、この間も二人は火界呪を唱えるのをやめていないので刀を交える二人の頭上では高熱の炎が互いを食らわんとするかのような勢いでぶつかり合っているが、二人はそんなこと気にも留めずに、むしろ壮絶なまでの笑みを浮かべて金属音を鳴らしている。

そしてそのまま、二人は一度思い切りぶつかったことで距離ができ、それを踏み込み一つで詰め、全力で刀をぶつけ、

『ウンタラタカンマン!!!』

火界呪も完成し、より一層の炎がぶつかり合うが、全くの互角であつたようぶつかった瞬間に派手に散った。

火の粉一つでも神格もち程度なら、低級の神霊であつてもこの空間においておけば死亡するだろうほどの炎が舞う中、二人が鏝迫り合いをしているのを見て、なめていた全員が察した。

これが、本当に殺し合いであるということ。

兄妹喧嘩 ②

「さて、と……準備運動はこれくらいでいいか？」

「まあ、うん。そうだね。……これくらいでいいんじゃないか、な！」
鏢迫り合いをしていた二人はその言葉と同時に後ろへ飛び、湖札は袖から大量の白い霧を出してそれを鬼の群れへと変える。

一輝はそれを確認すると、蚩尤の持つ鍛冶の力を用いて次々と剣を作り出し、それを鬼に向けて放つ。

鬼の軍勢と剣の嵐がぶつかり合い、互いに互いの数を減らしていく中、双方の将はその様子に目もくれず互いを見ている。いや、むしろ一瞬でも目を離せば敗北するがために目を離すことができないのかもしれない。

その状態がしばらく続き、鬼の軍勢が剣の嵐に押され始めてきたところで、湖札が動いた。

「式神武装、〃弓〃」

手持ちの式神すべてを用いて和弓を作り出し、遠距離から次々と矢を放つ。放たれた矢は本来矢が出すようなものではないスピードで鬼や剣にあたることなく一輝の元まで飛んだが、一輝はなんてことはないかのように剣で切り落とす。

そのまま湖札が放った矢を一輝がすべて切り落とすというやり取りが繰り返されたが、しびれを切らせた一輝がマシンガンを作り出し、それを構えた。

この状況でただのマシガンかと侮るなかれ。仮にもこれは一柱の鍛冶神の力で造られた伸造の武器。威力一つとっても既存の全てより高く、逆に反動は既存の全てより低い。そして弾は作り出す限り無限という、キチガイスペックである。

そんな無茶苦茶な代物を一輝は構え、大雑把な狙いだけを付けて引き金を引く。もちろんそんな状態で放たれた弾は全てが湖札に届いたわけではないが、数を打てばその何割かは狙った場所にあたる。当たらなかつた弾も、鬼にあたりそれを消し去っているため、無駄にはならない。

一輝はそうして放ちまくった弾が湖札まで届きつつも、しかしその全てが湖札がギフトカードより取り出した刀によって切り落とされているのを見て・・・現状を維持しつつ、湖札に向けて走り出した。

「ちよ、マシンガン撃ちながら走るってなにそれ!？」

「距離詰めるにはそれしかないだろ! ってか、逃げんな!」

「この状況で!？」

一輝が近づくのに対して、湖札は刀で弾をはじきながら後ろに跳ぶようにしてはなれる。

その中で湖札は鬼を作り出したりもしているのだが、その全ては数の暴力によってあえなく散った。

「ってか、距離詰めねえと俺が不利なままなんだよ!」

「だからこそ距離をとってるの! 兄さん剣術と体術以外は、よくて達人レベルだし!」

「お前だって剣は俺と変わらねえだろ!」

「だからってわざわざ距離を詰めさせるか!」

今の会話に対して違和感を感じるかもしれないが、この二人は一切ふざけていない。達人クラス、というのは人の中では超上位であるが故に・・・所詮は、人の領域である、と。だからこそ、可能な限り相手を人の領域で押しとどめ、自分はその外側にまで到達した技術を用いると、この二人の会話はそういうことだ。

「それにしても、やっぱり鍛冶神の力は厄介だなあ・・・応用がきくし」

「まあ、確かにそれはあるな、うん」

「だから・・・やっぱりまずい、それを奪おう」

湖札はそういうと和弓を構え、正確に狙いをつけて・・・たった一本の矢で、マシンガンを破壊した。

「・・・マジか」

まさか一本だけで完全に破壊されるとは思っていなかったのか少しの間一輝の行動が停止したが、鬼が近づいているのに気付いてすぐに立て直す。

再び蚩尤の力を用いて二振りの短め剣を作り、それを両手に握って鬼を切る。湖札がいる限り無限に湧いて出るそれを相手し続けるの

はバカらしい話なので、自分の周りからいなくなつたところで、

「ああ、八面の君よ。八の首を持ち、その猛威を振つた蛇の王よ。祖は人々に忘れられてもなお、その力衰えることなかれ！」

それは、とある蛇を召還する言霊。ヤマタノオロチの原型でありながら、しかし人々に忘れ去られてしまった、蛇の言霊。

「今ここに顕現せよ、八面王！」

名の通り、八つの顔を持つ大蛇の化け物。一輝は自ら召喚したそれに乗る、

「鬼どもを蹴散らせ、食い散らせ！」

とても単純な、しかし効果的な命令を下す。そして、八面王もまたその命令に従って鬼をその巨体で蹴散らしつつ、食らっていく。そうして大量の鬼が消えていく中、湖札はさらに距離をとって鬼を作り出しつつ・・・言霊の矢を構えた。

「軍神の一柱、鍛冶神蚩尤。それは中国神話に登場する、牛の頭と多六本の腕を持つ姿で語られる神の名です」

「あ、ヤベ」

湖札が言霊を宿すのを聞いた一輝はあせるが、それで八面王の動きが速くなるわけではない。さてどうしたものかと考えた結果・・・降らせることのできる範囲に剣の雨を降らせる。

八面王には、鱗の硬さゆえに刺さることがない。しかし鬼には、十分に刺さる。一輝はその方法で少しでも急ごうとしているのだが、

「我が百鬼より来たれ、アオアンドン」

湖札がそれを見てもなお、鬼だけで済ませるはずもない。湖札は何のためらいもなく、今自分が出すことのできる最大の戦力を投下した。

「汝は語られることで顕現する。百の物語を媒介として、新たな一となったもの。故に我は、百の中の一を求め。・・・ヤマタノオロチ！」

湖札の言霊に従い、鬼女は八つ首の蛇となった。そしてそのまま、八面王へと向かう。

伝承としては互角になる二匹の蛇。それらはそのまま互いを食い千切らんと襲い掛かり、結果として一輝の行動は阻害される。

一輝はその状況からどうにか抜け出せないかと考えを巡らせるが……

「彼の神の周りは霧が立ち込めた、全ての兵器を作り出したなど多くの逸話を持つこの神は、六人の兄弟と共に天下を横行し、また妖あやかしを従えていた、悪側の存在でした」

当然ながら、湖札はそんなこと気にもしないで言霊を矢に込めていく。言霊を込められている矢はより一層輝きを増し、言霊の対象である一輝はその輝きに寒気を覚えた。

「そしてそこまでの力を持つていたためか、その神は日本へと輸入……日本の神に取り込まれます」

「……うん？」

一輝はここで違和感を覚えた。このまま中国神話の蚩尤を語っていくのかと思えば、急にベクトルが変わったのだ。当然といえば当然かもしれない。

「その神の名は、ひょうすべのかみ兵主神。名前こそ変わり日本の神社にも祀られるようになりましたが、この神の性質は、ほぼ完全に蚩尤のものを受け継いでいます」

湖札はここで、矢を放った。放たれた矢は当然のように一輝の元ま
で向かい、その胸を貫く。攻撃のための矢ではないそれは一輝を傷つ
けることはなかったが……

「……書き換えとか、そんなんありかよ」

「実際、打ち消すよりはこっちのほうが楽なんだよね。……まあ、この方法じゃ殺すことはできないし、数日もすれば戻っちゃうんだけど」

現時点ではそこまでの不便はないので驚いているだけの一輝だが、湖札が再び弓を引き、矢をつがえたことで顔をしかめる。まだ、終わらなかつた。

「一度で消さなかつたってことは……なるほど、それが狙いか」「バレちゃった？」

「ああ。さすがにそれはこまるから、止めたいんだけど」

「止めさせないよ、絶対に。・・・兵主神は、そうして日本で新たに信仰を集める」

湖札が何を狙っているのかを理解した一輝だが、しかし現状は悪化する一方だ今この場合は、完全に湖札の優位にある。

「・・・オイ、八面王。どうにかして全力で取っ組み合え」

一輝はもうそこまで余裕がないことを悟り、八面王に対して簡潔な命令を出した。それができるかどうかとも怪しく、できたとしてもうまくいくかはわからない賭けであるが、このままやられないためにはこれしかない。

「神という存在に対して寛容である日本だからこそ、他の国の神も受け入れられた。しかし、それも永遠に続いたわけではない。歴史の中で日本には、外国を徹底的に排除しようとする時期が存在する」

「・・・まだだ」

新たな言霊が矢に込められていく中、一輝はじつとその時を待つ。その足元の八面王は、ヤマタノオロチの首の一つに噛みつき、自らの首の一つがヤマタノオロチに噛みつかれている。距離も縮まったまま離れないので、互いに互いを押しつぶさんとしている体勢だ。

「その時期に排除の対象となったものには、他国から輸入した神も含まれた。多くの神がその存在を消され、あるいは書き換えられていく中・・・兵主神もまた、その対象となる」

「そのまま抑えてろ、八面王！」

湖札の言霊がまともに入ってきたこの時、一輝は動いた。互いに互いの首を抑え、そして押し負けまいと踏ん張っている八面王とヤマタノオロチ。相手に負けないために全力を使わざるを得ない二匹の蛇の上を、一輝は走る。この状況では、ヤマタノオロチは一輝を足止めすることができない。

まだ消えていない鍛冶の力で刀を一振り作り出すと、横に切り払う構えをとり、さらに速度を上げていく。

「そうして変化の対象となってしまう神は、その身のある妖怪へと落とすこととなる。そもそも鍛冶の力というのは山にすむ天狗や川

にすむ河童という妖怪が持つとされていたため……彼が持つこととなつたのも、これらの妖怪の名」

「一閃！」

どうにか湖札の元まで間に合った一輝はその勢いのまま刀を払うが、湖札は異様なほどに体をそらせてそれを回避。そして、

「その妖怪の名はひょうすべ。後に河童が秋になると山に登るため変化する姿とされた、河童を茶色にし、体毛をもった姿の、ただの妖怪！」

そして湖札の矢は、外すことのない至近距離から放たれた。

兄妹喧嘩 ③

「あー、これは・・・ちよつとマズいかも」

「結構呑気だね、兄さん！」

蚩尤の力を完全にひょうすべのものに書き換えられた一輝は呆然とするが、湖札はそんなことは気にもせず、攻撃を仕掛ける。

怪力をもつかみ、天逆毎の力で攻撃を受ければまず間違いない無事では済まないが・・・一輝は手を翼のように羽ばたかせ、空を飛ぶ。

先ほど湖札も語っていたように、ひょうすべとは河童が秋になると山に登る姿とされている。彼らはその際、毛の色が変わってから群れで集まり・・・飛んで、山に向かう。それゆえに一輝は飛ぶことができているのだ。

「いやまあ、実はそこまで呑気なわけでもないんだけどな。実は結構焦ってる」

「そうは見えないんだけど？」

「そう装わないと、まず負けるからなあ」

そうつぶやいた一輝は空間倉庫を開き、そこから二つの巨大な密閉容器を取り出し、それから火炎放射器を取り出した。

湖札はそのわけのわからない組み合わせに首をかしげたが・・・その入れ物の大きさが大きい方が小さい方の二倍であることから、一つの仮説を立てる。自分で思いついたことはいやまさか・・・と考えるが、すぐに考えを変えた。この兄ならやりかねない、と。

「・・・ねえ兄さん、それはさすがにないんじゃないかな？」

「いやいや、このレベルの戦いなら十分にありだつて」

「いやでもそれ、体積結構あるよね？圧力が標準値だったとしても、小さい方四モルはない？」

「うんうん、大丈夫。圧力二十倍くらいの、メイドイン箱庭だから」

すつごくいい笑顔でそう言った瞬間に、湖札は走り出す。さすがに無茶苦茶だと思うが、それが妹に対してやることかと思うが、しかしあの兄であり、これは殺し合いなのだ。やるといっている以上、本当にやるだろう。なら、止まった瞬間に終わる。

そうして走り回る湖札に対して、一輝は密閉容器の中身を混ぜ合わせながら追わせる。彼の持つギフト、〃無形物を総べるもの〃によって、大量の空気を・・・存在比一对二の酸素と水素で、湖札を覆おうとする。

その追いかけては、勿論ながら一輝がかかった。どれだけ頑張っても速さには限界がある湖札に対して、一輝の操る空気には速度の限界がない。どこまで無茶苦茶なのかという話なのだが、速さにも形はないのだから。

「あ、あははー・・・マジ?」

「うん、マジ」

完全におおわれた湖札はかなりひきつった笑みで兄に尋ねるも、その兄はさつきよりもさらにもいい笑顔で火炎放射器から炎を放つ。勿論ながらそれにも形はないので、勢いよく湖札を覆う^{超特大の爆弾}酸素と水素に着火され・・・水素爆発。

当事者二人以外の全員が耳をふさぎ座り込む中、一輝はその爆発によつて作られた水を槍状にして湖札がいた場所を襲わせ、

「うーん、この感じだと・・・仕留めれてない、かな」

「まあ、うん。かなり本気で防いだしね・・・」

一輝の問いかけに湖札が答えると、爆心地から風が吹いて視界がクリアになる。その場にいる観客の全員がそこを見ると・・・巫女服こそボロボロになったものの、体には傷一つない湖札がたっている。

「まったく、どうやって今のを防いだんだ?倒せなくても傷くらいつけたかなー、くらいのつもりでしたっけ」

「超小規模の嵐の結界の中にいました。天逆毎はスサノオの娘なんだよ?」

「なるほど、納得した」

一輝はそう言いながら入れ物と火炎放射器を倉庫の中にしまい、あごに手を当てて考える。

「それにしても、やっぱりただの水や爆発じゃ、負けなくても勝つのは難しいか・・・」

「そう思うんなら、神霊化しないの?」

「あつちについては、この喧嘩に使えそうもないしな。相手も鬼道だし」

一族の力をそのままに相手に使うわけにはいかない、と考えたのだろうか。一輝はそう言ってから改めて考え……

「あ、別にまだあるじゃん。神になる手段」

「ちよつと待ってそれは防がせて」

一輝の言葉から何をしようとしているのかは察したのだろう。湖札が思いっきり踏み込んで一輝の元まで跳ぶが、一輝がひようすべの力を使って真上に飛んだため、空振りに終わる。湖札は一輝のその姿を見て上に跳ぶが、

「さあ、百鬼夜行の始まりだ！」

「ムグツ!？」

大盤振る舞いなことに、一輝が檻の中の妖怪や魔物をすべて召喚したため、降ってきたそれに押し戻される。そしてそのまま、妖怪の山の中に埋まる。力技もいいところだ。

そして、作り出した時間で一輝は……さらなる力を、召喚する。

「『我は悪である』。汝はそう、世界に宣言した」

巖かに唱えられた瞬間、一輝の掌に一匹の蜥蜴が現れる。その蜥蜴もまた、ただの蜥蜴ではなく……三つの首を持つ、蜥蜴。『ノーネーム』の雑用係として定着してきたその姿は、しかし比べ物にならない霊格を宿している。

「その身の全ては悪を尽くし、倒れし今もその意志に変化はなき絶対悪」

さらに霊格をあらわにすると、蜥蜴は一輝の手を飛び下り、主より放たれる霧を吸い込む。そうして示すのは、かつて箱庭の全土を恐怖に陥れた魔王のそれ。

『絶対悪』として箱庭に顕現し、ラストエンブリオ人類最終試験として悪の限りを尽くした、最悪の魔王。

「ああ、ああ！今こそその名を、その悪行の全てを、我らが外道と共にせよ！」

「父なる暴風の神よ、我にその加護を！」

一輝の召喚の言霊が完成しようとした時、湖札もまた練り上げた呪力を用いてさらなる力を使う。天逆毎が持つ数少ないつながり、父スサノオの神力をこの一時だけ使用したのだ。

さすがはスサノオというべきか、たった一度吹き荒れた暴風によつてすべての異形は吹き飛ばされ、解放された湖札は一輝めがけて跳ぶ。が、

「今ここに降臨せよ、アジィダカーハ！」

「間に合わなかった、か」

その一撃は、ギリギリ解放の間に合った三頭龍の手によつて防がれる。

一輝という英傑に撃たれたのち、初めて完全な姿を現した、元人類最終試験。アジィダカーハ。湖札は召喚を防げなかったそれをみて、作戦を変更する。それは、兄に使われる前にこの龍を討つ、という無謀にも思える作戦。そのために距離を置いて言霊の弓を構えるが、

「力、よこせ」

『了解した、我が主』

そんな暇もないほどに一瞬で、神成りが完了する。

「うそお・・・それはさすがに、ずるくない？」

「残念だったな、召喚以外では言霊がいらなくらいに相性がいいんだよ、外道と絶対悪の霊格は」

弓を構えきることができず中途半端な体制で固まった湖札はそういうが、一輝はそんなこと気にも留めずに初めて使う力を確かめる。

身体的な変化として両の肩から蛇が生えて腕に巻き付き、手の甲に頭が来ているが、動きを阻害することはないので問題なしと判断。他の変化は、急所を守るようにして生えている鱗。これもまた動きを阻害することはなく、防御力を上げていたのでよしとする。

つまり、一輝が戦うにおいて問題点は、ない。

「よし・・・んじゃ、やるとするか、湖札」

「アハハー、それはさすがに想定外かな・・・」

どちらかといえばザツハークに近い姿になって一輝は言うが、湖札はもう苦笑いを漏らすことしかできない。そのまま言霊の弓を消し、

距離を置いたのちに刀を構えるのみ。

言霊の弓を使ってアジィダカーハを討つとすれば、そこで語るのは伝承の存在としてのもではなく、今日の前にいる兄が従えるもの。箱庭におけるアジィダカーハを語らなければならぬ。しかし、その結果が今の現状なのだ。それを語ろうものなら、より一層強固なつながり生まれ、兄の力はさらに強いものとなるだろう。ただでさえ低くなつた勝率を下げようなどとは、湖札は考えない。

そして・・・そのまま振り返り、二匹の蛇の元まで走る。

「つて、ちよ!?ここでスルー!?!」

「勝つためにはこれしかないんだから、仕方ない!というか、勝負の最中にこれ以上のリアクションは無理!」

ペー、と少し舌を出して見せた湖札はそのまま走り、一輝は。

「ああ畜生、かわいいじゃねえか!」

「ふっふっふ。いろんな国をまわつて、いろんな仕草を覚えたからね!ウインクとか超得意だよ!」

「それはいいな!」

なんかもう、どうしようもないくらいシスコンだった。本当にどうしようもないな、こいつ。だがまあ、それでもちやんと湖札を追つてる辺りまだ救いようがあるかもしれない。

とはいっても、二人にはスタートに差がある。一輝との間に大きく距離をあけた湖札はいまだに取っ組み合っている二匹の蛇、その片割れであるヤマタノオロチの尾に触れ、

「神秘錬成、アメノムラクモ!」

その姿を一振りの太刀へと変え、一息に八面王を切り刻む。

ごくごく短い言霊によつて発動した奥義、神秘錬成。一輝と戦うための力として湖札が編み出した奥義であり、その効果はいたって単純。名前の通りに、神秘を生み出すのだ。

ただし、これは誰もが使える奥義ではない。例えば今回であれば、ヤマタノオロチの尾からアメノムラクモの剣が出てきたという伝承があるから『尾に触れ、太刀へと変えた』。このような伝承があつて初めて発動することのできる、少々面倒な奥義である。

だがしかし、それに見合うだけの代物ではあるようだ。ヤマタノオロチの原初の姿である八面王は完全に死亡し、一輝の中へと帰る。

「うっわー・・・存在の書き換えに、伝承からの武器生成とか。どこまで成長するんだよ、お前は」

「目標が兄さんに勝つ、だからね。どこまでやっても大丈夫な気がしないんだよ」

「だからって、まさか三種の神器を作り出せるほどの奥義を編み出すとはなあ・・・っと!」

話している最中に湖札が襲い掛かってきたので一輝は残っていた剣を構えたが、触れた瞬間に砕け散った。やはり、武器としての性能に差がありすぎるのだろう。

だがそれでも湖札は止まらないため、一輝は自分自身も動いてよけながら蚩尤並びに兵主神の力で造りまくった武器を拾っては使い、どうにか凌ぐ。普段と違って特に意味もなく量産した武器だから実行することのできる戦法。とはいえ、それも限界があるためわざと一太刀を受けて、血を流した。

今の一輝は、アジ^{一輝}ルダカーハとでも表記するべき存在だ。なので、流れた血はそのまま双頭龍となり湖札に襲い掛かる。

「あー、とりあえず時間稼ぎ!」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

少しばかりテキトーな一輝の命令にも双頭龍は従い、雄叫びをあげて湖札を食い止める。

「・・・鬱陶しいなあ、もう!」

「オマエ、仮にも神霊級をその扱いかよ」

「大した敵じゃないし!」

「それには同意するけどな」

何だか双頭龍がかわいそうになってきた。どこまで言われてもまだちゃんと戦ってるんだよ、彼は。いやもしかすると彼女なのかもしれないけど、そこは気にせずに。

「まあ、でも・・・そんなに邪魔なら、消してやるぞ?」

「・・・?」

これ以上増えられても面倒だと双頭龍を血を流さずに殺そうとしていた湖札は、一輝の言葉に内心首を傾げ、そちらを見る。そこには、握った拳を自分に向けている兄がいて……その手の甲では、蛇が口を開けている。

「存在の書き換えに神器の錬成と驚かせてくれた礼だ、こつちも別の形で驚かせてやる。……タワルナフ覇者の光輪！」

「ちよ、ウソオ!？」

勿論ウソなはずもなく、蛇の口から放たれる。

伝承において世界の三分の一を滅ぼすと伝えられてきた閃熱系最強の一撃。終末論の引き金を引く力を召還し、炎熱として扱う恩恵を、一輝は何のためらいもなく使用する。かつてあれほどまでに参加者を苦しめた一撃をなんでもないように放たれているのだが、これはいいのだろうか？

《別にいいんじゃない？》

《私からしたら全然よくない!》

こんな時でも平常運転なんだな、お前たちは……もういいけどな、別に。

さて、おふぎけは手短に済ませて現状に戻ろう。湖札は自分に向かってきている閃熱を確認すると、すぐさま目の前にいる双頭龍の首をつかみ、その中に投げ込む。これを放った張本人であれば防げたのかもしれないが、分身体程度にそこまで期待するのは酷というものだろう。いともあっさりと蒸発し、新たな分身体は生まれない。

だが、それで攻撃が止まったというわけではない。一切速度も威力も緩めることなく進む一撃。湖札はそれを見据えると、右手で剣を握りしめ、体を限界まで振じり、刀の腹に左手を添えた。そんな体勢で自分にあたる直前まで動かずにじっと構え、

「燃ゆる全てを薙ぎ払え、草薙の剣!」

覇者の光輪そのものを、切りつける。

草薙の剣は、水神ヤマタノオロチの尾より生まれ、燃えている草を薙ぎ払ったという伝承を持つ刀だ。元々、火に対する影響力は強い。それを全力でぶつけたのだから……覇者の光輪が完全に消えている

現状も、当然といえるだろう。

ひとまずの成功にホッと息をつく暇もなくこんな無茶苦茶を行った張本人を警戒する湖札だが、一輝がいたはずの場所には、もう彼はいなかった。

「どっこい、」

「残念、覇者の光輪はただの囷わとりだ！」

あわてて周囲を探そうとするも、その時にはすでに真横まで迫っていた。湖札はガードをかませることもできず、その蹴りをもろに受けた。思い切り勢いを付け、さらに全力で放たれた回し蹴り。それによつて湖札はぶつ飛ばされ、大木にきれいな穴をあけたと思つたら堀を壊してその中に埋まった。

「ふう・・・よし、一撃入れた」

「普通、たった一撃入れるために使うものじゃないよね、それ・・・！」
清々しい笑みで汗を拭いながらそう言う一輝と、対照的にこめかみに青筋を浮かべて瓦礫を吹き飛ばす湖札。湖札が押していたと思えば、その構図は一気に書き換えられた。

「全く、まさかそんな手で来るとはなあ・・・それはさすがに想定してなかった」

「だからこそ、俺はこの手段をとつたんだよ。普通の攻撃でできそうなのはこれしかなかった、とも言うけどな」

「まあ、確かにね。こつちとしても、これ以上普通の攻撃で行けるとは思えないし・・・千日手じゃ、いずれ観客にも飽きられちゃうし」

湖札はそういうと同時に言霊の弓を完全に解除し、札や刀といった武器、ギフトカードを全て空間倉庫の中に放り込む。

一輝もまたそれを見て、無形物を総べるもので行っていた簡単な制御を捨て、湖札同様すべての武器とギフトカードを空間倉庫の中に放り込んだ。

二人そろつて邪魔なものをすべて取り去り、最後には外に出していた異形だけでなく自分と同化させていた神までも、檻の中に戻した。即ち、完全に身一つ。本人たちが一番動きやすいという理由から服装だけは神主衣装と巫女服だったが、それだつてギフトを発動している

わけではない。まあさすがに、裸になるのはまずいかなーとか、その程度のものだ。

「・・・それじゃ、ラストバトル開始かな？」

「ま、ここまでやって互角だったんだ。・・・こうするしか、ない」

二人は同時に構え、消える。

完全に観客の視界から消えた二人の存在は、二人がぶつかり合った衝撃でのみ確認される。技術も何もない力づくでの移動に、体術でもなんでもない暴力のぶつけ合い。どちらかという才能とでも呼ぶようなもので力を得ている二人には、型の存在しないやり方のほうが強かったりするのだ。

そんな応酬の中、蒼い光が空間に線を描き始めた。つまり、

アナザーコースモロジ
「疑似創星図、起動！」

切り札を、発動した。

湖札の言葉と共に蒼の光は、怪しく光る蒼い光はより強くなり、湖札の右手を覆う。

それでは終わらずに、右手を覆い尽くした蒼い光は形を変えてゆく。貪欲に全てを喰らおうとするものであり、そして賢い頭脳も持つ狼に近いであろう、顎の形へと。

「知へ変え喰らいつくせ、◆◆◆◆◆・・・！」

一輝に暴力をふるい、ふるわれている間に構築したそれ。完全に発動した、およそ人体には発音できない名の疑似創星図を次にぶつかる瞬間にたたきつけようとするが、

アナザーコースモロジ
「疑似創星図、起動」

今まさに喰らいつこうとした顎を、一輝の双掌が・・・より正確に言うのなら、そこにある力の渦を凝縮した灼熱の球体が防ぐ。

「相克して廻れ、アヴェエスター！」

二つの疑似創星図がぶつかり合い、湖札がどれだけ力を込めてもその分アヴェエスターが強化されていくので、二人そろって吹き飛ばされる。軽く最終戦争クラスの被害が周りに及ぼされ、張本人二人もゲーム盤の端と端に飛ばされたのだが、

「疑似創星図、起動！」

そんなことは何でもないといわんばかりの勢いで、一輝がさらに疑似創星図を起動する。

まだ彼の手には球体が残っているにもかかわらず、上書きするよう
に現れたのは・・・翠色の光。複数の疑似創星図を持っているからこ
そ挑戦できる、無茶。

禍々しい翠に輝く光は横に伸ばした手に集まり、大鎌を形成する。

「魂を刈りとれ、■■■■■■■■！」

およそ人体には発音できない、すべての生物に発音できないはずの
その名を唱えると、一輝は両手で構えて跳ぶ。それに対して湖札は右
手を突き出し、左手で二の腕強く握って呪力を注ぎ込み・・・

「疑似創星図、再起動！」

無理矢理に消えかけていた疑似創星図を起動しなおし、その顎で大
鎌の刃に喰らいつく。

改めて完全に拮抗した状態になると、二人は全く同時に左手をはな
し、指を揃えて後ろに引き・・・鈍色の光に、包まれる。

「疑似創星図、起動！」

全く同じフレーズを全く同じタイミングで唱え、その鈍色の光はよ
り一層輝きを持つ。

「百鬼よ駆けよ」

「廻りて駆けよ」

「二百鬼矢光！」

これまたまったく同じように解放され、しかし内包するものに大き
な差がある二つの攻撃は、その差故に一輝の勝利に終わる。しかしそ
れは、ただ威力を比べるだけであればの話。驚くことに、湖札はその
一撃をギリギリまで絞り、細くすることで、兄のそれと相打ちにまで
もっていく。

たった一人が十五年とちよつとの時間で作り上げたそれ。兄が持
つ六十三代をかきねたそれに比べればはるかに格下のそれだが、しか
しだからこそ、自分一人で作り上げてきたものだからこそ、多少の自
由がきいた。

再びの爆音。二つの百鬼矢光だけでなく、彼らが歪みから手に入れ

た疑似創星図もそこでため込んだエネルギーを吐き出し、そろって吹き飛ばされた。

技術をぶつけあっても千日手。呪術を比べあっても千日手。権能を比べあっても千日手。ギフトによる応酬でも千日手。疑似創星図をぶつけあつてすら、千日手。

もはや次元が三つ四つ違う戦いを繰り広げている二人に対して、もはや誰一人として言葉を発することもできない。客席にいるものも。審判として空中にいる黒ウサギも。そしてゲーム盤の外、映像としてこの光景を見ている三人も、口を開け、身を乗り出し、食い入るようにその光景を目に焼き付ける。何のルールもなく、箱庭らしさのかけらもない……。だからこそ、これぞ箱庭であると訴えかけるような、そんな二人のゲーム。箱庭にて上に昇らんと野望を抱く者たちにとって、その光景はどこまでも心憧れるものであった。

そして、そんな感情を抱かれているとはつゆほども考えていない二人は、目を見開き、歯を剥いて、どこまでも凶暴に笑う。

目に入るのは、相手一人だけ。
耳に入るのは、兄妹の呼吸の音のみ。

肌で感じるのは、最愛の家族から向けられる殺気ただ一つ。

「大好きだぞ、湖札」

「うん、大好きだよ、兄さん」

そして、一言だけ言葉を交わした二人は拳を構え、同時に踏み込んで、再び消える。どうなったとゲーム盤を見る観客たちは、しかし今度はずぐに見つけることができた。

消えるその瞬間まで、二人がいた場所。そのちょうど真ん中で、お互いに一撃を入れた体勢で固まっている。

湖札の拳は、一輝の頬に。一輝の拳は、湖札の腹部に。それぞれ全力で打ち込み、ねじ込んだ二人のうち、先に動いたのは……。湖札。頬に入れた拳は力を失ったように滑り落ち、一輝の横に向けて倒れていく。その体が地に落ちる前に、一輝が抱き留める。

「……どうにも、打たれ強さでは俺の方が上だったみたいだな」

「そう、だね……。あーあ、負けちゃった、なあ……」

今にも飛びそうになる意識を無理矢理にとどめている湖札は、切れ切れに言葉を漏らす。

そして……

「……お兄ちゃんの、バカ。大好き」

「ああ、悪いなこんな兄貴で。……大好きだぞ、湖札」

戦いの最中にも交わされた言葉を交わし、完全にその意識を落とした。

＝＝＝＝＝＝

「……ねえ、僕たちは本当にあれを相手にするの？」

「まあ、そうなるわね」

「本当にどうやって戦うんだろうね。湖札さんも取られちゃったし」

場所は戻って、一輝の部屋。その場所で画面に映る映像を見ていた三人が漏らしたのは、そんな感想であった。

「というか、そう思うんならあの子に今回の件を許可しなければよかつたじゃない。あれだけの戦力をかけられるほど勝算があつたわけじゃないでしょ？」

「まあ、それはそうなんだけどね……勝てるとしたら湖札さんくらいなのもあつて、あのまま任せるしかなかつたんだ」

首をかしげている二人の様子を見ると、リンは湖札から聞いた事柄を二人にも話す。

「一輝さんや湖札さん……要するに『鬼道』の一族は世界からある加護を受けてるんだよね」

「加護？それって、彼らが持つてるギフト『外道・陰陽術』のこと？」

「そつちじゃなくて。あのギフトについては一人の人間と一柱の大妖怪が協力して生み出したものだから。……それに、一方的に世界がおこな行ってるだけだからギフトとしては発現してないし」

「なら、その加護は何なのよ？」

「うん……冗談でも誇張でもないから、ちゃんと聞いてね？」

自分自身でも信じ切れしていないその事実を、前置きをしてから二人

に伝える。

「彼らが本気で相手を殺そうと思つて戦つた時、その相手の勝率を下げる・・・そんな加護」

「・・・それって、どういう？」

「私も伝聞だから、あんまり細かいところは聞かないでね」

「それはあなたの説明次第よ、リン」

ペストの言葉に対してうへえとなるが、それでもちやんと説明を始める。

「とはいつても、本当にそのままの意味だよ？どれだけ相手の勝率が高かろうが低かろうが、例外なくその格を落とす。運の要素しかないような接戦なら、彼らに幸運を訪れさせる。相手のギフトによって殺せないならそのギフトを使えないようにする。相手が不死だから殺せないならその不死の属性は消える。相手の剣とかそういうたぐいの技術によって殺せないならその技術が弱くなる。そうやって無理やりにも下げるんだって。最低でも五分五分までは」

「何それ笑えない」

「ごもつともである。」

「じゃあ、あの特殊な主催者権限も？」

「その辺りが具現化されてるんだろうね。そんな感じの特徴を用いて、他の主催者権限を強制解除して自分のゲームを開催できるんだと思う」

とはいえ、この加護も鬼道であれば誰にでも与えられるものではない。ある程度の力を持つ者にのみ与えられるものなのだが、さすがに情報のかけらもなくこれにたどり着くのは不可能だ。

「まあそういうわけで、その要素の食い合いができる湖札さんくらいしか一輝さんに勝てる可能性はなかったわけですよ」

「その湖札も負けてとられてるけど、どうする気なの？」

「そうだね・・・とりあえずジン君にたくさん魔王を従えてもらつて、いずれは彼自身の主催者権限を使えるようになってもらいたいかな」

「そんなことは可能なの？」

「可能だよ。隷属させて従える、つていうのは立派な功績だし」

そして、挑発とも取れる一言を伝える。

「それで、どうする？もし無理だと思ふんならやめるのもありだと思ふけど」

「やるよ／やるわよ」

が、二人は間をおかずに返した。

「そっち側につくって決めた時点であの人の相手をする覚悟はできてる。むしろどこまで無茶苦茶なのか分かってよかったくらいだ」

「そもそも、ジンは私との契約があるもの。今更変えようとするなら殺してそっち側につくだけよ」

「・・・そっか。それなら、一緒に頑張ろう。そっちの方に向けて一歩進めばちよつとした隠れ家につくから、そこで待っててね」

若干青ざめた様子のジンに笑いそうになるのをこらえながら、リンは自らのギフトを使い二人を移動させる。一仕事終えたといわんばかりに一つ伸びをした彼女は、とても幸せそうな顔で意識を失う湖札と、それを抱きしめこちらにも幸せそうな一輝。その二人が映されてテレビを見て、若干の思考に走る。

「・・・湖札さんは最後まで教えてくれなかったけど、世界がそこまで干渉するなんて、ただの人間ではありえない」

勿論、厳密に言えば二代目以降の当主の全員が生まれながらに神霊である、という時点で普通の人間ではないのだが、彼女が言っているのはそういう話ではない。むしろ、相手が神霊であるのならより一層世界が干渉する理由がない。

だがしかし、そんな中で一つだけ世界が過剰に干渉するだろうものが存在する。

《世界がそこまでして勝たせようとする理由が・・・彼らを守ろうとする理由が『自己防衛』であると仮定すれば、全ての辻褄が合う》

即ち、世界もまたただ加護を与えているわけではない。彼らが勝つことに意味があり、彼らが生き残らなければ引き起こされる問題がある。それ故に、彼らの一族が死なないうよう加護を与える。

《それに、その仮定が事実であるなら他にも納得できることがある。あの二人が同じ名称の疑似創星図を発動した点》

今回、起動の言葉こそ違ったものの同じ名称の疑似創星図をあの二人は使用した。その特性上同じものの担い手が複数存在するはずがない。であれば、あの光景は何だったのか……

《彼らが、世界の求める存在……英雄の一族であるのなら、そこで生きる強者がそれぞれ固有の宇宙観を作り出したとしても、可能性がないわけじゃない。自分自身を守りたい世界が、その程度のことを受け入れないわけがない》

であれば彼らが英雄なのかと考える。確かにそれなら、あの契約書類にも納得することができ。民に知られることがなく、力を持つがゆえに迫害されてきた英雄の一族。ではそうなのかと考え、そこでリンは新たな疑問にぶつかる。

《でもそれなら、なんで彼らは『外道』だと名乗るの？自分自身の霊格を開放する主権者権限ホストマスターの発動。その際に名乗るのは本来のものであるはずなのに、彼らは自らのことを『悪』であり、『外道』であると名乗った。それなら、それもまた真の立場であるはず》

一つ解決したと思えばまた新たに矛盾が生まれる。あまりにも複雑な事情があるからといって難しく考えすぎてしまっているリンは終わりのない思考にはまりそうになるが、画面の中の一輝がゲーム盤を解除しようとしているのを見て、思考を一時停止する。

彼を相手にする以上彼の主権者権限を打ち破るすべを考えるのは必須事項だが、今最も重要なのはジンとペストをさらったということに気付かれる前に全員で立ち去ること。何人か協力してくれそうなものがあるとはいえ、敵側の人間を頼るわけにもいかないだろう。

頬を軽くたたいて意識を切り替えると、ちょうどゲーム盤の中に入れた人たちが外に出てくる。

「ん？オマエは……」

「ウチのメンバーだ。ちよつと仕事があったから間に合わなかったんだが……うまくいったのか？」

「うん。首尾よく行けたよ」

「そうか」

言葉を濁してジンとペストの勧誘が終わったという報告を終える

と、リンはそのまま一輝の方を見る。

「あー、そうなっちゃいましたか」

「見ての通りだ。・・・ゲームのルール通り、湖札はこっちでもらうぞ」
「互いに了承してのギフトゲームで決まっちゃった以上、変えるのは無理ですよ。・・・どうするの殿下、戦力大幅にダウンしちやっただよ？」

「これまで通りに伸ばしていくしかないだろ。予定通りに魔王ぶちのめして引き込む。これだけだ」

何とも物騒なことを言っている二人に周りの人間は黙ってしまいが、そんなこと気にもしないで全員が窓際集まる。

「それでは皆様方、我々ウロボロスはここで失礼させていただきます」
「次に会うときは本当の魔王連盟を作り出していると思うから、お楽しみに」

「おう、まあよくやってくれよ。こっちの人間総出で潰してやる。それと・・・これまで湖札のこと、ありがとな」

「こっちも色々と助けられたんだ、気にするな」
その言葉を最後に、ウロボロスのメンバーは全員消える。なんだかもうやりたい放題やってまたボロボロになった一輝なのだが、周りの心配する目を気にもしないで自室を出た。

そのまま少しだけ歩いて、すぐ隣の部屋を開く。本来そこには何も無いはずなのだが、しっかりと家具が揃えられていた。

かつて一輝が神社の中にあるものすべてを倉庫にしまった際、一緒にしまわれた湖札の部屋にある家具一式。もう一部一部本人からすれば小さいものもありそうなのだが、その辺りについての判断は湖札がするだろう。

一輝はそんな、かつての湖札の部屋を再現した一室の中に入り、布団に湖札を寝かせると、頭をなでて一言。

「お帰り、湖札」

biwanoshin、天崎コラボ 二つのぬらり
ひよん出会いし時、相對せしは偽物。

邂逅

「……どこだ？」

上層に赴くなど、いくつかの仕事で忙しくなる少し前の日。朝早くに目が覚めてしまった一輝はどうしてか寝直すことが出来ず、仕方なしに散歩していたのだが……どうしてか、迷ったのだ。

「いや、まさかよく分からない門をくぐったら全く知らない場所に出るとは……」

原因は予想外にはつきりしていた。どう考えてもその門が原因である。

『全く……だから私は言ったのだ。怪しい物に当たるなら真正面から壊しにかかるべきだ、と。』

「いやでもさ、アジ君も賛成だったじゃん。『しかし、こういったものに正面から当たるのも王の役目だろう。』って。」

『うむ、そこそが真の魔王。しかし私はもう元魔王だ、王ではない。故に関係ない。』

「コノヤロウ……」

自分の肩でさらつとそう言った元絶対悪の魔王、アジィダカーハに對して軽く恨み言を漏らす一輝^{それを倒した張本人}。そしてパツと見は普通の人間が自分の肩に乗っている三つ首のトカゲと会話しているという構図なだけに笑えてくる。

箱庭では三つ首トカゲくらいは珍しくもないだろうから、二人の正体を知らない人はなんて事のない日常として流すだろう。その人すら、この辺りにはいないのだが。

「はあ……にしても腹減ったな。あの辺に生ってる果物とか食えるかな？」

『異界にとばされた可能性がある以上避けるべきなのだろうが……私や一輝を殺せる毒などないだろうから、食べてもいいのではないか』

？』

「だな。でも一応毒見よろしく。」

繰り返すようだが、最近持ち前の器用さと知識の助けもあって力仕事にとどまらずアジ君verでの各種掃除をマスターし、アジさんverでは農作業をマスター。現在、アジ君verで洗濯、アジさんverで料理にチャレンジし、マスターも近いという……どんだんノームの雑用係としてのスキルをあげているような存在であっても、元魔王。『絶対悪』の人類最終試練であり、箱庭中を恐怖で満たした存在。彼が討伐された際の戦いなんて上層すらこの箱庭を棄てる決断をしたほどの存在なのだ。それを、毒見扱いである。

さらっとそれをやる一輝にも、そしてそれをさらっと受け入れるアジィダカーハも、何やつてるんだこいつらである。

『ふむ、大丈夫そうだぞ？糖度も高く、水分も多く含んでいる。この食料のあてがない場で食すことができるなら十分すぎるものだ。』

「そいつはよかった。どれだけ歩くことになるかも分からないし、いくつかもらつてくか。」

そう言いながら一輝は果実をもぎ、ギフトカードに入れて行く。

一輝はこれまで、ギフトカードの中に食料を入れてこなかった。唯一分類できなくもない水樹の枝も、水分としてというより武器として入れているのだ。その理由は一輝の持っていた空間倉庫のうちの二つ、求道丸が畑をやっていたものとそこで収穫できまくった果実、野菜類を保管していたものに有る。だがしかしそれを求道丸を避難誘導に向かわせた際に求道丸に譲ってそのままにしているため、食料は今もいだ果実のみ。ここがどこなのか分からない以上意外とピンチだ。

「さて、せめてどこかに出られないかな、と……」

『歩いていけばいずれ、どこかに出るだろう。……そう言えば、一輝は連絡手段を持っているのではなかったか？』

「何でだか、誰にも通じない。怖いから召喚の方はまだ試していないけど。」

『そうか。……』

と、そんなことを話ながら二人の化け物が進んでいくと、二人の視線の先に日本家屋が現れる。

数百人が宴会できそうな広さの土地に建つその建物。二人のいる位置からは見えないが、そこそこの広さの庭と池まであったりする。要するにアホみたいに広い。

そんな土地に建物を建てられるとすれば？それはもう、凄いやつかそこそこのコミュニティかだろう。既に契約書類の生成を行うことでここが箱庭であることは確認済なので、この世界の住民相手なら多少のやんちゃはギフトゲームで許してもらうことも可能。

一瞬の間にそんな判断をした一輝は、悪い笑みを浮かべながら量産型妖刀（小刀ver）を抜いた。

|||||

「はあ。つたく、何で俺が直さないといけねえんだ。」

その日の朝、緋御悟は自分の父親がリーダー（総大将）をしているコミュニティ、『百鬼夜行』の本拠を奥に向かって歩いていた。理由としては、なにかと宴会をするこのコミュニティ、当然のように乱闘にまで発展する血の気の多いやつらが集まっている。この前日もまあそこまで発展し、それによって出た被害を直すために材木などのある場所を聞きに行くのだ。

これが普通のコミュニティであれば誰かに聞けばいい話なのだが、残念なことにはここは普通のコミュニティではない。と言うわけでは知っているかどうか微妙なやつには聞かずに確実に知っている自分の日に聞きに行くのだ。まあ自分が覚えとけよと言う話なのだが、そこは気にしない方向で。

「と、ついたりついたり。毎度ながら、ここまで来るのは面倒だな・・・」
そうぼやきはするが、その必要があることは重々承知しているの
で、特に文句はなかったりする。

と、悟は自分の母親の部屋に入ることと遠慮などするはずもなく、
普段通り普通に入る。

「なあお袋、材木と大工道具ってどこに・・・」

が、普段通りに続けることはできなかった。なぜなら、そこには先客がいたから。

話はズレるが、ここで少し悟と言う存在がどのような存在なのかを話しておこうと思う。といっても、細かい性格等を話すまでもするつもりはない。流れる血の、ギフト関連の話だ。

端的に言ってしまうと、彼はぬらりひよんとサトリを親にもつ、言わば混血の妖怪だ。よって、使う能力もその二つとなる。

ぬらりひよんの血が強いときはぬらりひよんの力を。

サトリの血が強いときはサトリの力を。

そんな形が変わってくる。だから、どんな時でも気配を察知する能力にはある程度長けているのだ。にもかかわらず、彼は・・・

「か、会長!？」

「オイコラメタい発言やめろ。」

この発言がどういう意味なのかを知りたい人は、かつこうむしさんの連載しているコラボ作品をご覧ください。

まあなんにしても、彼は今日の前で、自分の母であり、部屋の主であり、ついでに今悟の尋ね人であるサトリのたてたお茶を旨そうに飲んでいゝ一輝と、その横で和菓子をとても旨そうに食べていゝ三つ首トカゲの存在に気づけていゝなかつたのだから。

「え、ちよ、なんで!?!俺気づかなかつたんだけど。」

「ああ、それはこれの・・・この帽子のおかげ。」

そう言いながら、一輝は自分の被つていゝ帽子を取つてみせる。

それをとつた瞬間には、悟は二人の気配を感じ取れるようになり、そこで察する。

「まあこれでわかつたとは思ふけど、これで気配隠してた。ぬらりひよんをベースにして作つてあつて、俺と、あとは霊的に繋がつてゐるやつの気配を隠せる代物だ。」

まあ、サトリに対してかえつて逆効果だつたみたいだけど、と一輝は視線をサトリに向ける。

「まあ、当然だの。私にしてみれば、その力は懐かしすぎるほどに懐か

しいものだ。気づかぬわけがなからうて。ところで一輝、よいのか？」

「ん？何が？あ、すごく美味しかったからもう一杯いいか？」

「構わん構わん。私にしてみれば心を読めぬ相手など、それはもう貴重な話し相手なのだ。こうして話し相手になってくれる礼に、何杯でも馳走しよう。」

そういうと、サトリは一輝と、ついでにアジ君のうつわを受け取って新しく茶をたて始める。

その前にそれはもう旨そうに和菓子を食べているアジ君に追加を出す辺り、かなり気を使える。

「で？何が良いのかなんだ？」

「いやのう、それを外したら、うちの連中にバレてしまうのではないか？」

「あ、ヤベっ、」

一輝はそう言いながら、慌てて指に引つ搔けてくるくと回していたその帽子を被る。が、ドタドタと大きな音をたてながらこの部屋に向かつてくる足音を聞く限り、まあ無駄だろう。

「サトリッ！今この部屋に誰か・・・」

と、まあ珍しく慌てて入ってきた傭兵コミュニティ、百鬼夜行のリーダーことぬらりひよんは、そこにいる見覚えのない男と同様に見覚えのないトカゲを見て、絶句する。

ついでに、そいつらがサトリの信頼を一応の形とは言え得ている様子に更なる驚きを見せて、

「ああなんじゃ、サトリの知り合いか。それならそうと、前もって言うておいてくれんかのう？」

「さて、何のことかのう、ぬらりひよん？私が一輝と会うのはつい先程が最初だがの？」

「・・・はっ。」

「その際にそいつの頭を覗いてもいいかと聞いてみれば、まあさらっと許可してのう。妨害できていたのに簡単にそれを解いてしまうもんだから、面白くて興味が湧いた。」

宴会

突然、異世界のノーネームの人間を名乗って本拠に侵入し呑気に茶を飲んでいた一輝。そしてそれに付き従う形で本拠に侵入し、和菓子にはまりにはまったアジ君こと、アジⅡダカーハ。

そんなもうわけのわからない二人が突然現れてしまったコミュニテイ「百鬼夜行」の本拠では、今・・・

「いよっしゃー、宴会じゃー！呑むぞテメエらー！」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
！！！！』

盛大な宴会が開かれていた。

・・・いや、うん。もちろんわかっている。補足をしておこう。

数多く存在している「箱庭」の世界。その中の一つである今回一輝が訪れた世界には、「百鬼夜行」という大妖怪ぬらりひよんの収める傭兵コミュニテイが存在する。そんなコミュニテイなのだが、総大将であるぬらりひよんの性格もあつてか侵入者が現れた程度のことを気にするような人間も少ない。

『実害が出るまでは放置。しかし、手を出して来たり害となったのなら潰す』という考えを全員が共有しているがため、今回一輝とアジ君が勝手に本拠の中にいたことに対して何か言ったものもいなかった。それどころか、手練れである彼らがその侵入に気付けなかったことと見た目ただの人間のガキである一輝が人類最終試験、絶対悪「アジⅡダカーハ」を討伐し従わせているという話がコミュニテイ中に広まるや否や、大騒ぎムードに。

総大将の妻でもあるサトリがこの話を肯定したがために疑う者もおらず、あとは大騒ぎが好きな連中によって宴会が開かれた、という流れだ。当然ながら、二日連続の宴会であることを気にする者はいない。

酒は酌み交わされ、大量に作られた料理は運び込まれては消え、運び込まれては消えを繰り返す。時折放たれる妖術はご愛嬌。

「いやー、それにしても賑やかなコミュニテイだな。どんちゃん騒ぎ

もここまで来るといつそ感心だ」

「そう言いながらこの空気になじんでるお前も中々だけどな」

俺の勝ち、と怪力自慢の妖怪と腕相撲をして圧勝した一輝に、悟は声をかけた。声をかけられた一輝はそちらを向き、見もせずにもまた一人敗者に変える。

「おう、悟。いいコミュニケーションだな、ここは」

「行く場所がなかったり追い出されたり暴れるのが好きだったり、そんなやつらの集まりだけどな」

「なるほど、俺がなじめるわけだ」

一輝はそう言うのと最後の一人に勝利して、腕をプラプラさせながら飲み物を口に含む。悟はその中に注がれているものを見て、

「なんでジュースなんて飲んでんだ？お前。こんなに酒があるつてのに」

「どうしてもだめなんだよな、酒。後々面倒にしなければならない酔い方するから」

『次は飲み比べで勝負だ！』

飽きもせず一輝に勝負を挑む妖怪たちを見て悟は軽いため息をつくが、

「いいのか？俺、酔うと全力で暴れるけど」

「はいお前ら解散かいさーん。さすがにここでアジⅡダカーハの力を使われちゃたまつたもんじゃねえ」

掌返しの早いこと早いこと。とはいえ、さすがにそれがシャレにならないことはわかっていのか妖怪たちも一瞬停止してから再び騒ぎ始める。

「ったく、酒に弱いのかと思ったら迷惑なもんだな」

「そういわれてもなあ。ってか、事実弱いぞ？」

「今あなたが言っている『弱い』はどれだけ周りに被害を出すものなのかしら？」

きつぱりとそう言ったのはこんな時でも悟の腕に抱かれている、座敷童(?)の紅葉だ。憑りついている悟に対してのキツイ物言いやら天運食ったりやら、なんとも座敷童らしくないと自分は思っていた

り。

「ここら一体が平らになる程度じゃないか？」

「それは程度とは言わないニヤ」

続いて呆れながら近づいてきたのは、猫又の夏歩。夏の散歩中に出会ったから夏歩という、なんだか適当感にあふれる名づけ方をされた少女である。

「程度だろ。アイツが本気で暴れたら下層の生物が全部消えるんだぞ？」

「ついでに、相方の方も無茶苦茶出来るしな・・・」

一輝と悟がそう言ってみる先では、二人の人(?)物がどんどん酒を消費し、料理を喰らいながら語り合っている。

一人は、死体のように白い肌に青みを帯びた白髪、はくはつ白い角を持ち深い青の着物をまとった女性。その控えめな胸は、しかし残念要素にはならず和服を纏う彼女の魅力を増している。悟一派とでも呼べる集団の中ではおそらく最強であろう、百の物語を従える女鬼、青行燈。昔色々とやらかしている分、悪い意味で有名な存在だ。今は悟に惚れ、それだけの理由から彼と共に行動している。なお、ぬらりひよんとは仲が悪いようだ。

もう一人は、褐色の肌にオールバックにまとめられた黒髪。今このときは優しさを持つている切れ長の鋭さを持つ目は、一度睨み付けたのなら問答無用で恐怖に包むが出来るだろう。そんな貌で長身の彼は執事服を纏っており、それがより一層彼に知的な印象を持たせる。一輝の従える者の中で誰が最強かと問われたのなら、十人中八人は彼であると答えるであろう、元「絶対悪」の人類最終試験、ラスト・エンブリオアジィダカーハ。かつて神群を全滅させかけるなどという無茶苦茶から有名すぎるような三頭龍。今では「ノーネーム」にてメイド長のレティシアの指導により召使いとしての仕事を覚えた超すごい執事さんである。

・・・互いの最強戦力が酒を飲みかわしながら談笑している。虫が軽く絡みに行き、アジィさんがそれにある程度対応しつつも本気では対応しないといういい感じの酒の飲み方をしている。なんだか穏やか

そうなのに、たった二人なのに、料理と酒の減り方が他のテーブルより圧倒的に早い。

「・・・若、何ですかあのテーブルは」

「ウチの感覚じゃなくても、だいぶおかしくない？」

そちらを見て絶句しているのは、吹雪と粉雪。双子の雪女である。見分ける方法は、右目を隠しているのが吹雪で、左目を隠しているのが粉雪。そっくりなのも困ったものである。

「あー・・・まあ、暴れることはないだろうし気にしないでいいだろう、蜚は。そっちのやつは大丈夫なのか？」

「問題ない問題ない。なにせアジさんは最強種だからな。酒で酔うことはねえよ。もしそうなったとしても強制的に俺の中に戻せばいいんだし」

「・・・なあ、それどうなってるんだ？」

ふと、悟が気になったことを一輝に尋ねる。そうじゃなくともアジⅡダカーハが従っているのだから、気になることは多いだろう。

「それ、つてーと・・・こんな感じの？」

一輝は確認のためにギフトを発動し、檻の中から強すぎず、この状況で騒ぎ楽しめそうな妖怪を召還する。そいつらは状況を見ると、そのままどんちゃん騒ぎに合流していった。

「そう、それ。妖怪を召還して使役するとか、さつきはぬらりひよんのが宿った帽子つかってたし、なんなんだ？」

「と、言われてもなー・・・説明めんどうだから、ぎっくりでいいか？」

「ああ、問題ない」

「先祖がぬらりひよんと契約して、殺したり契約したりした妖怪を封印して使役できるようになった」

本当にぎっくりだが、十分な説明になっている。これで済んでしまふあたり、彼の持つギフトは単純なものなのかもしれない。

そして、その説明を聞いた者たちは軽い警戒態勢をとるが、

「・・・あ、別に何かするつもりはないぞ？つてか、箱庭でその方向性でやっていけるわけないだろ」

「あ、そりゃそうか」

一輝の一言でそれはとかれた。まさに彼の言うとおり、そんなことをしていいものなら一瞬で討伐リスト入りだ。

「んじやこつちからも聞かせてもらうけどな、お前はここではどういう立場なんだ？最初はそこその立場かと思ってたんだが、なんかそういう扱いしてないやつもいるし」

「そればかりは、ウチのコミユニティだからなあ・・・どうしようもねえよ」

つまり、一応何かしらの立場のようなものはある、ということだろうと一輝は察した。

「そんニヤこと、わざわざ説明するようなことでもないニヤ・・・」

「こちらは若様。要するに、総大将の息子であり、百鬼夜行の後継者にございます」

さすがに分るだろと言わんばかりの夏歩の言葉を補足したのは、両目を隠すように包帯を巻いた、スーツ姿の女性。伏目と呼ばれている、百目の妖怪だ。

一輝はそれを聞いてやはりと納得し、そして彼の周りにはいるのが女性ばかりであることを認識して、

「・・・オマエ、ハーレムでも作る気なのか？」

「オイ待て、ちよつと待て」

自分からナンパとかもする（しかし、自分から行くとは失敗しまくったり、一定以上まで来るとヘタれる）悟だが、さすがにこれには待ったをかけた。というか、一輝がネタを見つけたといわんばかりの笑みを浮かべているので、反射的に待ったをかけた。

要するに、悟の中に流れるサトリの血が、彼に訴えたのだ。直感的に『これは危険だ』と。

「いえいえ、確かに若様の現状を見ればそのような思われても仕方ないのですが」

「伏目？気のせいか俺にはお前に追い打ちをかけられたように感じるんだけどな？」

「ですが、貴方もまた大差はないかと」

「・・・うん？」

悟の言葉をさらっと無視した伏目の言葉に、一輝が首をかしげる。その時頭に浮かんだのは、これまでに一輝が他の箱庭に行った中の一。あの問題児の性別が入れ替わってしまったている世界で、その問題児の持つギフトによって彼の人生を知られた時のことだ。

まさか、そんなはずは・・・と、そこで一輝は百目がどのような妖怪なのかを思い出し、そして。

「五人ものベクトルの異なる美女、美少女を隷属させ、自らのメイドとしている・・・その中の一人には告白までされ、その返事をしていない。いかがでしょう？」

「思いつきり全部暴露したな！いつそ清々しいぞオイ!!」

全てぶちまけられ、机を叩いて身を乗り出す一輝。だが、伏目は何でもないように酒を飲んでいる。余談だが、この場に一輝以外に酒を飲んでいないものはいません。

「・・・ま、それは悟も大差ないんじゃない？」

「・・・は？そういう評価？」

そして、一輝をそのネタでいじろうとした悟は腕の紅葉にそういわれてしまい、何も言えなくなるのだった。

|||||

「向うは妙に騒がしいわね・・・」

「我がマスターはああいうやつだからな。もう仕方ないと考えるべきだろう」

乗り込んで参加してこようかと悩みだした青行燈を、アジさんが酒を注ぐことで止める。これ以上危険物を増やしてしまえば酒の勢いでバトルが始まりかねないという彼の判断は、一切間違っていないだろう。事実、このコミュニケーションにはつい前夜に騒ぎを起こしているという前科があるのだから。

「ふうん、我がマスター、ねえ・・・あんた、いつもそう呼んでるの?」「そうでもないな。マスターと呼ぶこともあれば主と呼ぶこともあるし、一輝と呼ぶこともある」

「また色々ごちやごちやしてるわね・・・私と違って別に性格が一定しないわけじゃないでしょうに」

「・・・ふむ、この世界の青行燈とは、そう言う存在なのだな」

「たったこれだけの会話でアジさんはこの世界の青行燈・・・すなわち、蛍という妖怪のことをあらかじめ理解した。」

「どこまで理解したのかは知らないけど、こっちの質問に答えなさいよ」

「おっと、それはすまないな」

「素直に謝られると、それはそれでなんだか、ね・・・こっちのアンタと戦った身としては、どうにも違和感しかないわ」

「つまり、この世界の私も私とそこまで変わらないというわけだな」

少し笑いをもらした彼は、目の前の酒を瓶ごと掴んで一気に飲み干す。なんだか無茶苦茶しているように見えるかもしれないが、彼はこれで龍なのだ。この程度の酒で何か起こるわけもない。それは蛍もなのか、彼女も似たようなことをたまにしているのだが。

その証拠に、二人の周囲には大量の酒瓶が並んでおり、目の前の机の上にもそれはもう大量に準備されている。一体どこから経費が出ているのだろうか？

「因みにだが、私の呼び方がバラバラなのは作者がまだまだ迷っているからだ」

「え、それ言っちゃっていいことなの？観測者の目とかあるのよ？」

「気にするな、今更だ。なにせ、私の扱いをこうしてしまったことで原作がどうしようもなくなり、後悔しているほどだからな」

ああ、うん。アジさんは間違いなく自分の敵です、これは。何の容赦もなく自分の弱いところを攻めてきやがるぜ。いいぞ別に、原作や絶対悪なんてみんなが忘れるような魔改造を施してやる。

《仕返しの仕方がセコくはないか？》

そして、さらっと一輝や湖札と同じことをしてきやがって・・・！それがいったいどれだけの作者に迷惑をかけるのか、分かっているのか！

《どうせお前とコラボをする作者など限られているだろうに》

はいはいそうですね、コンチクシヨウ！

「何やってるのよっ」

「いや、なんでもない。それより、もっと飲まないか？お前という存在には興味がある。私の知っている青行燈とはだいぶ違うようなのでな」

「まあ、そりやそうでしょうよ。なんせ私はしじ…って、これはまだ言っちゃダメなやつか」

よくわからないが、蛭は自分で勝手に何かもんどうをし、

「というか、アジィダカーハ。話すのはいいけど、一つ条件よ」

「ふむ、なんだ？」

「その、お前とか青行燈とか、その呼び方を変えなさい。私には蛭って名前があるのよ」

「それは失礼した。だが、私もこの姿の時はアジさんと名付けられていてね。そちらで読んでもらってもいいかな？」

そう言っただけで読んでもらってもいいかな？」

「アハハハハハハハハハ！あ、あんた。本当にこっちのアジィダカーハとは違うわね！」

「まあ、一輝と本気の殺し合いをして神託を与えあい、変わった面はあるのかもしれないな」

アジさんもまたそう言いながら肩を震わせ、当然のように手刀で酒瓶二つの口を切り開けると、片方を蛭に渡す。

「では、互いのことを語るとしようか、蛭」

「ええ、そうね。私としても語るような内容が増えるのはいいことよ、アジさん」

二人はそのまま乾杯でもするかのようなかたちで一升瓶をぶつけ、飲み始めた。

遭遇

「なるほどなるほど、こっちの世界のノーネームはあんな感じのメンバーなのか」

「ああ、基本あんな感じの連中だ。そっちにはいないのか？」

「十六夜とか黒ウサギなんかはいるんだけどな……あの目が死んでる学ランとか、中途半端で吸血鬼にも人間にもなれなさそうなやつとか、ドーナツ吸血鬼とかはいない」

「いやその呼び方はどうなんだよ」

大騒ぎに終わった宴会の翌朝。

一人酒を飲んでおらず、またその後を起こったちよつとした騒ぎにも参加はしないで外から眺めていた一輝は早くに目が覚め、暇だったという理由で悟の案内&紹介のものとの世界のノーネームを訪れた。今はその帰りである。

「何も間違っちゃいないだろ？」

「確かに間違っではないが……一人は結構な強さだぞ？」

「そりゃあの吸血鬼はちゃんとした状態なら強いだろうけどな……普段があれだろ？」

「それについてはそっちの執事さんもなかなかじゃないか？」

それもそうだな、と一輝は悟の言葉にうなづく。自分の世界にいるヤシロこと終末論『アンゴルモア・プロフィットノストラダムスの大予言』も普段金髪ロリでのノリだが、ノーネームの中では一輝に次ぐ実力の持ち主だ。強いやつほどそうなっていくものなのかもしれない。

「因みにだが、今日は不在だったがあと一人無茶苦茶なのがいる。全能領域三桁とか二桁とかに分類されそうな無茶苦茶なやつが」

「それはすげえな……」

「だろ？」

「ああ。俺はまだ全能に片足突っ込んだくらいだしな……普通にすごいと思う」

「いやちよつと待て、もう今更かもだがオマエ今なんて言った？」

一輝のノリのせいで悟君が突っ込みにまわりそうな予感がする……

迷惑をかけて申し訳ありません。

とはいえ、ネタバレはこれくらいで止めておくとして。今更感はあるもののちよつとした状況説明といこう。そこまで説明することがあるわけでもないのだが。

普通なら護衛の一人でもつく必要のある立場の悟。だが今はそんなものはないとおらず、一輝と悟の二人だけだ。この二人がいれば護衛はいらないとかそういうことは言っただけでいい。それを言っただけで済ませたい。ここからの説明が全部無駄になる。

ではなぜ他のものがここにはいないのか。その理由は大きく分けて三つほど。

まず一つ目に、さすがに酒を飲みすぎたやつら。二日連続なうえに普通ではありえないことが起こったからの宴会だ。酒を飲む速度も上がり、普段はそこそこにしか飲まないものも周りに流されて飲んでしまった。結果として、まだ本調子に戻っていなかったり昼時になった今でも寝ていたりしている。

そして二つ目に、ちよつとしたアクシデントの被害にあったやつら。前日あれだけ飲んでおいて言うのもあれなのだが、本来虫は酒に弱い。酒瓶口に突っ込んだら倒れる程には弱かった。では前日アジさんとあの勢いで飲んでいたのは何なのか。言っただけで勢いである。青行燈という妖怪は、そもそもが観測者によってぶれてしまうような存在。一輝とアジさんという普通ではありえない二人組の存在によって少しばかりぶれてしまい、時間差で一輝のような酔い方をしている、何人かがこの被害にあった。最終的にそれはアジさんの手によって止められたのだが。

で、最後に三つ目が、たつた今行われているバカ騒ぎに参加しているやつら。バカ騒ぎの内容は、アジさんvs虫。もちろん本気は出さない。参加している奴らは臍主催の賭けに大盛り上がりだ。本当にバカばかりである。そんな馬鹿をやることを許容した一輝と悟、ぬらりひよんもあれなのだが。

「で、お前の予想だとどっちが勝つと思う?」

「そうだな・・・さすがに今の虫がアジィダカーハとガチバトルしたら

勝ち目はないけど、それはないんだろ？」

「さすがに、な。人間体までしか許可してないし、〃アヴェスター〃も〃覇者の光輪〃も檻の中だ。分身体もそこまで強いのは出せないようになってる」

「それならいい勝負するだろ。蛍の方もある程度抑えるよう言ってるからわかんねえけど」

＝＝＝＝＝＝

「楽しいわねえ、これは！」

「否定はしないが、この状況で笑っているというのはどうなのだ？」

「口の端上げてるあんたに言えたことじゃないでしょ？」

その発言に対して頷きを返すと、アジさんは龍影を繰り出し、蛍はそれを避ける。そのまま勢いで色々とはなってみるものの、アジさんはアジさんで防ぐか避けるか、あるいは当たってもびくともしない。互いに抑えているとはいえ、普通にやっついていれば最終戦争クラスになりかねないレベルだ。

そんな戦いを普通に繰り広げられていては、さすがの観客も・・・

「ほたーる！もつとちゃんとやれー！」

「アジさんあんた全力でやれよ!」

・・・そうでもなかった。結構強いのか、余波にびくともせずに観戦している。誰か止めるよと思うものの総大将であるぬらりひよんが笑ってみているのだから性質が悪い。数少ない真面目陣も、もはや手を出せないレベルになっている以上黙ってみているしかない。

結局、あの二人がバトって何も起こらないわけもなく、また止める者がおらず煽るものがあるのでは、本気でどうしようもないということとだけだ。

なお、率先して蛍に精神攻撃を仕掛けていきそうな紅葉はと言え、しっかりと悟の腕の中で爆睡中だ。なら二人きりじゃねえじゃねえか。

「さて、それにしてもなにもねえな・・・」

「いや、色々とお前からすれば楽しいこともあっただろ？」

「楽しいというか新鮮なことだけだな。とはいえ、これまで異世界に跳ぶ〓何か面倒事があるだったから、何かあるもんだと身構えてたんだよ」

何だその慣れ、と悟は若干呆れる。その中一輝は『まあ一応、夜子の時は何もなかったか』とこの特に何も無い状況に納得しつつある。何かあるのなら大歓迎だし、そもそも戦うのが大好きな戦闘狂いではあるのだが、別に何もない平和というのが嫌いなわけではない。そもそも異世界の人間と会えたというだけでも結構な経験だから十分満足できる。

まあとはいえ、何も無く終わるわけもないが。

それは前触れもなく、その場に現れる。偽物ゆえかその存在は薄く、背後にいるそれに二人もすぐには気付くことが出来ない。その存在に気付いた時には時すでに遅く、黄金に輝く剣を振り上げ得ていた。

「切り裂け・・・エクスカリバー！」

二人は反射的に後ろに跳んで刃を避けはするが、その余波に当てられダメージを負う。しかし二人はそんなものは気にせず師子王を抜刀し、警戒を高める。

「あちゃあ、避けられちった。せつかく護衛が減った隙を狙ったのに」
狂ったような笑い声をあげる騎士のような恰好をしたそれ。急に目の前に現れたよくわからないやつに対して二人はめんどくさそうな視線を向けるが、

「なあ、今アイツエクスカリバーつつつたよな」

「間違いなく言ってたな。あの剣がそうだったことだろ」

「ついでにあの剣がびったりおさまりそうな鞘もあるな」

「つまりはフル装備ってことだな。あれか？オマエのところのコミュニティ、アーサー王関連のところに恨みでも買ってる？」

「さすがに、アーサー王に恨まれる覚えは・・・」

それでも、現状の理解には手を抜かない。

ひとまず信じがたいことではあるものの、目の前の騎士が持っている剣からはなかなか感じられないような威圧感が放たれているのだから、まあそうだと考えることにする。そうであるのなら、あの鞘が与えるのは不死だ。つまり普通に厄介な敵である。

「あー、アンタ、何かと間違ってないか？」

「いやあ、何も間違っちゃいないぜ？オレが狙ってるのは百鬼夜行だからなあ」

「ほら見ろ、やっぱりお前んどこじゃねえか」

一輝の言葉に対してお前はどっち側なんだと突っ込みたくなるのを抑え、記憶を探る。しかしいくら悩んでもアーサー王に恨まれるような記憶はなく、とはいえ結構な数のコミュニティを潰しているから確信は持てず。

「あー、まあ向かってくるなら潰せばいいか」

「いいのかよそれで」

「ウチのコミュニティじゃよくあることだしな。乗り掛かった舟だ、手伝えよ一輝」

「えー」

なんだか文句が言いたそうな返事にイラツとしつつ、それでもちゃんと武器を構えて警戒はしているので抑えることに。そのまま少しの間お互い口には出さずに作戦を決め。

「とりあえず殺す！細かいことはそれから！」

「物騒だがそれが一番楽そうだよな！」

もはやどうしてこうなっているのかは気にもしていないとでもいうような作戦。別に細かい事情が分からないままでもいいのだろうか？

まあなんにしても、二人はそう言う作戦であると宣言して、刀を片手に敵へと向かう。そして、

「唸れ、エクスカリバー！」

その一振りで、一気に後ろまで跳ぶ。木にぶつかったり地面を滑っ

たりと、結構後ろまでいき、見た目ボロボロになる。騎士はそれを見て笑みを深くすると、まず近くにいた一輝に切りかかる。

防ぐだけで攻撃に移らない一輝であったが、その分背後から悟が近づき、背後から切りかかる。一輝の足を踏むという手段によって行動を封じられた騎士はその攻撃をそのままくらい血を流すが、その傷はすぐに癒え、塞がり、剣を大きく振うことで範囲攻撃を繰り出す。

獅子王を自分の横で構えた一輝はそのまま引張られて、反対側にいた悟にぶつけられ、飛ばされる。まとめて吹っ飛んだ二人は木にぶつかって止まり、サンドイッチされた悟は大きくせき込んだ。彼が妖怪でなければ骨の多くが折れていただろう。

「ハハッ、ハハハハッ！なんだ、百鬼夜行の若頭も大したことないじゃないか！」

あまりにも簡単に二人を抑えられているため、その騎士は笑いあげる。今のだけはダメージのあった悟は文句を言おうとしたが、その前に一輝が口を開いてしまう。

「おーい、笑われてるぞ若頭」

「うるせえ陰陽師。ってか、まだこんなことしてないといけねえのか？」

「ハハハ、ハハハハ、ハハ・・・は？」

そして、その会話の内容は彼にしても聞き流すことはできないものだった。さらには目の前の二人がつかつきまで見せていた戦おうという意志のようなものも霧散しているのだから、ポカンとするしかない。

「あー、どうだろ。多分そろそろだと思う」

「その辺はつきりしてくれよ？この三文芝居がいつまで持つのか」

「・・・三文、芝居？」

「二あ、バレた」

そして、何ともわざとらしく二人がネタばらしをしたので、騎士の方は狐につままれたかのような顔をし、一瞬後に青筋を立てる。

ピクピクと震えるその様子を見て一輝は満足したようにうなずいて、悟は妖怪より危ないなコイツと若干ひいて・・・そして、二人の

周りに援軍が到着する。

「お、ようやくついたか。そろそろ引き伸ばしも限界だったんだぞ？」
『それは悪かったが、これでも人数を集めたのちに可能な限り早く来たのだ。文句を言われてもどうしようもない』

「いやまあ、つてかよくこれだけの人数でこれだけ早く来たよな」

三つ首蜥蜴の姿ではなく、人間の姿でもなく、三頭龍の姿でそこに現れたアジィダカーハ。龍影を広げてそこに多くの妖怪を乗せてきた彼を見て悟はついそう漏らす。

もうすでに、サトリの能力で相手の正体は知っている。それに対してぶつける戦力としては、過剰すぎると思ったのだ。だがまあ、それで躊躇するほど人間出来てもないのだが。

目の前の騎士との戦闘を始める直前。一輝は霊的パスでつながっているアジィさんに対して『なんか面倒なの出た。悟の名前でついてきそうなの連れてきて』と命令。ついでに檻の中にある彼のものをすべて与え、この場まで急がせる。軽くサポートをすることで龍影の上に人が乗れるようにする。

で、そんな命令を受けたアジィダカーハはとりあえず言われたとおりに声をかけていった。で、集まったのが。

鴉天狗の濡鴉。

がしやどくろのがしや。

河童の河澄。

双子の雪女である粉雪と吹雪。

百目の伏目。

鎌鼬の鎌音。

猫又の夏歩。

茨木童子の茨。

鞭の風間。

土蜘蛛の土丸。

青行燈の螢。

一反木綿の臯。

以上の、悟の百鬼と呼べるメンバーである。相手は一人だというの

にこの人数。やることがえげつない。質も高いからなおさらえげつない。

「さて、と。これで今すぐに集められる戦力は全部か？」

「一輝の方で誰がいるなら別だな」

「ならこれで全員か。ま、十分だろ」

間違いなく十二分なその状況で一輝はそう言い、悟と肩を並べて先頭に立つ。そして同時に騎士に師子王を向け。

「さて、と。それじゃあ今度こそちゃんと始めますかね、騎士アコロン？」

「結局まだ事情は分かんねえけど、ウチのコミュニティの敵っぽいからな。ここでしつかりと潰すぜ？」

正体を見破られ、有利だと思っていたのは勘違いであり、さらには相手側に増援まで現れる。そこまで追い詰められた騎士アコロンは、それでもエクスカリバーを構えた。

別れ

「かかれっ！」

『応！』

悟の号令に合わせ、彼の百鬼は一斉に襲い掛かる。アコロンがどれだけ聖剣をふるおうとも、どれだけ鞘の力で治癒しようとも、気にもせずに攻撃が繰り返されていく。本気で容赦の欠片もないためにアコロンはだんだんと防戦一方になっていく。

同士討ちをしてしまわないように一定の距離をとって動く彼らは、それだけでも十二分にアコロンを殺せそうだったが、

「あ、お前も行ってきた」

『そうか。では！』

後方で悟と一緒にいた一輝は、アジィダカーハにも参戦するように命令を出す。

勿論、彼が本気になってしまえばこの場にいるほぼ全員が命を落とす。そうならない程度まで力を抜いて、それでもアコロンに対するオーバーキルは収まることがない。むしろ過激になっていく一方だ。

最初のころは一気に変わった状況に対してグチグチ言っていたアコロンのだが、今となってはそれどころではないのか静かなものだ。さすがにここまでやれば一輝も、

「・・・なんか、物足りねえな」

「お前マジかよ・・・」

全然満足していなかった。どこまで圧倒的にむごたらしく殺すつもりなのだろうか、彼は。

「なあ、何かないか？今以上にあれをボコれる方法」

「俺たちが混ざればそれで済む話だろ？」

「それは詰まんねえだろ。今の戦力差が変わるわけでもねえし」

「つつても、そんなこと言われてもな・・・」

急に言われたところで何か思いつくものでもない。悟はそれよりさっさと混ざれよなど言いたくなるのを堪えて考え、探して・・・

「・・・あ、あった」

自分の持つ師子王を見たところで、その方法を思いつく。

「何かあるのか？」

「ああ、俺のギフトに一個あるにはある」

「説明、簡潔に」

「百鬼全体を共鳴させて強化する」

「臨時の百鬼は？」

「アリ」

今度は、悟も笑みを浮かべる。いいことを思いついたというよう
な、少し危険な笑みを。

もう既に一輝のギフトについて聞いているのだから、この反応も当然であろう。そして、二人は自分の仲間を呼び戻す。再び、一輝と悟の二人が陣頭に立つ、数こそ少ないが百鬼夜行の形に。

「・・・なんだ？もう終わりなのか？」

「いやいや、そんなわけないだろ。むしろここからだぞ、お前をぶつ殺すのは」

「ま、そう言うこった。百鬼夜行に手を出した以上仕方ないと思って、諦めて死んでくれ」

は？と疑問を明らかに示しているのだが、当然ながら彼らは気にもしない。今するのはただ目の前にいるやつをぶつ殺すことのみ。それも、できる限り圧倒的な戦力を持つて。

この二人が協力すれば、それは簡単に現実となる。

「さあ、百鬼夜行の始まりだ！」

まず、一輝が言霊を唱える。彼の持つ奥義の中で最も基礎的なもの。ただ檻の中にいる妖怪を全て外に出すその言霊は、この状況を面白がった霊獣の一部もまとめて出てきた。そして、その圧倒的なまでの数によって彼らは誰にも文句が言えないほどに百鬼夜行を現した。だが、当然ながらこれで終わりではない。

「ギフト『百鬼夜行』発動」

次にギフトを発動するのは、悟。

彼が今使ったのは、獅子王を媒介に百鬼全体を共鳴させて強化するギフト。普段であれば共鳴する人数が少ないために規模は小さくな

り、しかしその力は数倍にまで跳ね上がる。では、今回はどうなるだろうか？

即席の百鬼として、悟は一輝と彼の従えるすべての異形を加えた。その数は千や万程度に収まるものではなく、それだけの者たちを共鳴させたのなら・・・その百鬼がどれだけの力を得るのか、もはや想像することすらできない。

「ハ、ハハ・・・」

圧倒的なまでの力の差。目の前にいるどの妖怪も自分より大きな力を所有しているその状況に、彼はもはや笑うことしかできない。聖剣エクスカリバーと、持ち主に不死を与えるその鞘。いくらそれが彼の伝承をもとに作り出した偽物であるとしても、そこまでのものを持つているのに何もできないのでは情けなさすぎるといふものだ。

そして、そんな彼に対して。

「百鬼・・・進軍、開始！」

即席の百鬼の頭二人は、容赦の欠片もなく攻撃を指示する。

目の前にいるのは、もはや戦意を失った相手のみ。それでも、一息に殺してやるつもりはないようだ。そして、それは彼らの百鬼も同じこと。

即席の百鬼たちは頭二人の支持と同時に駆け、蹂躪していく。妖術や体術、武器など様々な手段を用いて騎士アコロンを髑り、殺しはせずにズタボロにしていく。偽物の鞘ではもはや修復不能なほどに。偽物の聖剣ではもはや逆転不能なほどに。そんな蹂躪が可能になるほど、二人のギフトの相性はよかった。

|||||

「なんか悪かったな、こっちの面倒事に巻き込んだみたいで」
「気にすんな、そこまで面倒な事態でもなかったし」

騎士アコロンを全員でフルボッコしたその日の夜。後処理やら証拠隠滅やらの細々とした作業を終えて本拠に帰るころにはそこそこに暗くなっていた。

なんでも、今回突っ込んできたアコロンは昔百鬼夜行が潰したコミュニティ・・・大物の偽物として生まれた者たちの集まりであった、何とも微妙なコミュニティの生き残りだとか。まあ所詮は偽物ではないのだが、それでもそこそこの実力だけはあったそうで。下手につけ上がって百鬼夜行に手を出した挙句ぶつ潰された逆恨みということだ。とてつもなくアホい。

「それにしても、なんか結構な恨みを買ってそうだよな、このコミュニティ」

「そもそもが傭兵コミュニティだ。恨みを買わないはずがねえ」
「それもそうか」

雇われて兵を出す。そんな傭兵のコミュニティである以上、恨みを買わずにいられるわけがないのだ。

「つつーか、本当にオマエってよくわかんねえよな」

「何が？」

「全体的に、だ。アジールダカーハを倒した英傑のはずなのに、この上なく問題児だし」

「俺の問題児っぷりをなめるなよ？ここでも俺のところでもない、とある世界の十六夜すら弄る対象だからな」

「なんだそれ」

この上なくくだらないことをいい、そして笑い声をあげる二人。悟の私室で大きな笑い声をあげればだれか来そうなものであるが、しかし今はもう三日連続とか言うふざけすぎな頻度で開かれた宴会のため、そこまで目立つこともない。異世界人が来たことで浮かれきっている可能性がある。

「あ、そうだ。一つ聞きたいことがあった」

「なんだ？」

「お前つてき、今どうなることを目指してるんだ？」

何を聞かれているのか分からなかった一輝は首を傾げたが、すぐに何を言いたいのかに気付く。元々、悟が父であるぬらりひよんに認めさせるために力を付けたたり功績を遺したりしていることは聞いていたのだ。

だからこそ、この上ないほどの功績を遺した一輝に対してそう尋ねている。

「そうだな・・・まだ何も決まってるねえな」

「何も、なのか？」

「ああ。箱庭って世界はどうしても退屈になれないしな。何も考えずに楽しんで、それで何か見つかったらそれを目指せばいい」

「そうか」

悟がその考え方に至るのは、まだ難しい。身近に圧倒的なまでの力を持つものが出て、自分がその背を見ることができていないのは・・・暢気すぎると思わないではられない。焦りは、どうしても生じてしまう。

だが。

「まあでも、お前の場合はちよつと変わってくるんだろうな」

鬼道一輝という人間は、その気持ちを全く知らないがゆえに。そんな経験をしたこともないがゆえに、悟の抱いている感情を理解できしてしまう。

「ってーと？」

「いや、お前が力を手に入れるのは割かし単純なことだろ？仲間を増やしていけばいいんだから」

アコロンとの戦いのさいに悟が使用したギフト、“百鬼夜行”。その効果は、超単純に言ってしまえば仲間の数だけ強くなるというもの。そうである以上、仲間が増えさえすれば強くなっていくし、そこに至るための経験も自分を強くする。

「俺がお前たちに会ってからはまだ二日しかたってねえけど、それでもお前とお前の百鬼の中に確かな繋がりがあることは分かる。それが純粋な友情からなのか、好意からなのか、利害の一致からなのか。まあ色々あるみたいだがそんなこと気にもしないだろ、オマエ」

「気にしたらこのコミュニティどうにもならねえしな」

「だったら、どんな形でもいいから自分の百鬼を増やしていけ。自分の背中を預けられるだけの関係を作って、そしてその数だけ力を増していく。そうすりゃ、いつかもっと高いところにたどり着ける」

普通の精神をしたものにしてみれば、彼の言っていることは歪んでいると感じるかもしれない。友情や好意だけでなく、利害の一致ですら背中を預けられるなどと。そんな一つのきっかけで簡単に崩れてしまいそうなもので、本当にいいのか、と。だが、しかし。

緋御悟という存在もまた、普通ではない。

「ま、そういうことなら俺も身内を増やしていくとすつか。大英雄の言葉だ、これほどためになるもんもねえだろ」

「初めて会った時にもいったけど、俺は所詮悪側の人間だ。気まぐれな神霊が神託をくれた程度に考えとけ」

「・・・え？オマエ神霊なの？」

「生まれながらに神霊で、生まれながらに人間だぞ？」

「マジかよ!？」

本当に今更ながら、目の前にいるやつが無茶苦茶の塊であるということを確認した悟。最後の最後に落とされた爆弾に対して、その場は再び笑いに包まれた。

「はー、笑った笑った・・・そうだ、一輝。一個聞いときたいんだが」「なんだ？」

「オマエ、檻の中のやつ憑依させたら酒が飲めるようになったりしねえか？」

「・・・考えたこともなかったな」

『酒は後が大変だから飲まない』と宣言している一輝。だからこそ酒を飲むという可能性すら思考にいれていなかったのだが、悟に言われて少し考える。そして。

「そう、だな。一切酔わなくなる、って感じになら出来る」

「一切酔わないのかよ」

「それくらいぶっ飛んだやつでないと俺の酒の弱さはかき消せないと見た」

はつきりとそう宣言して見せた一輝に対して、悟はもう何も言わない。むしろ酔われてしまって大暴れ、なんてことになったら自分が死ぬのだ。だから何も言えない。

「そういうことなら、それやつてもらってもいいか？」

「酔わないように、ってことか？」

「ああ。ちよつとやりたいことがある」

はつきりとそう言われ、一輝は首を傾げながらもギフトを使用する。自分の檻の中から九尾を選択、酒強さだけを取り出して自身自身に憑依させていく。念には念を入れて、他にも酒に強そうなやつらからそれを取り出して自分に重ねる。

「それで、どうしたらいいんだ？」

「ああ、まずはこれを持って」

そう言うと、悟は一輝の右手に盃を持たせる。酒を飲むようにした以上は酒を飲むだろうと予想がついていたため、一輝はそれを受け取った。

「んで、次にこうする」

悟はその状態で待っていた一輝の盃に一升瓶から日本酒を注ぎ、続いて自分のものにも注いでから右手でもつ。

「あとは、最後にこうやって腕を交差させて、中身を飲み干すだけだ」
「・・・義兄弟盃？」

「まあ、そういうことだな」

もう、あとはお互いに自分の盃から酒を飲めばいいだけの体制。そうなるってようやく一輝は何をしようとしているのかを理解し、なんで急にこうなった、という目で悟を見る。

「別に大した理由があるわけじゃねえよ。ただ、次に会ったときは裏の方も使えた方がいいんじゃないか、ってな」

「裏？」

「ああ、裏。普通のと違ってこっちは即席の百鬼じゃできないんだよ。んで・・・さすがに義兄弟盃を交わしてりゃ使えるだろ」

「確かに、繋がりとしてはかなりのものだよな・・・ふむ」

どうしたもんかと一輝は少し考えるが・・・

「まあ、大丈夫だろ。多分お前は、俺という存在のことを十分に理解してる」

「あー、それはあれか？オマエが本気で、人間性としては英雄に向いてないとか」

「そうそうそれそれ。俺は本質的には悪だつてことを理解してくれてるんなら、それで十分だ」

そう言うや否や一輝は盃に口を付け、悟もまた口を付ける。お互いに目をつむって一気に傾ける。部屋は一気に静まり返り、そして……カラン、と。

音が返ってきたときに響いたのは、盃が床に落ちる音だった。

＝＝＝＝＝＝

「つと……帰ってきたのか」

『うむ、そのようだな』

一輝は一瞬ふわつとしたような感覚を味わい、目を開いた時視界には自室が広がっていた。屋敷中を見たいしている妖気もなければ、バカ騒ぎの声も聞こえてこない。自分がいた箱庭の、自分の部屋。

「そういうや、アジ君は何してたんだ？」

『宴会に参加していたさ。さすがに酒樽に投げ込まれた時は驚いたな』

「そのサイズだからこそできる酒のプールの気分は？」

『あまりよくはなかったな。べた付く』

「それはそれは、お疲れ様でした」

一輝はそう言いながら水樹の枝をとりだし、水を操ってアジ君を洗っていく。

「んで、アジ君から見えてあいつらはどうだった？」

『まだまだ未熟ではあるが、面白い連中ではあったな。あの若頭の一派もしばらくすれば成長するだろう』

「おっ、中々に高評価で」

『見込みがあるのならそう言うさ。……まあ、さすがに蛍を一度殺してしまったときは焦ったが』

一輝のいないところで一体何があったのだろうか。そんな疑問が生まれてしまうのだが、まあ細かいことは気にしないようにしよう。

『それで、お前からすればどうだったのだ？』

「あー、そうだな・・・ま、大丈夫だろ」

目の前のアジ君の力も少し自分に重ねて、一気に体内のアルコールを分解。全てを無害なものにまで分解してからギフトを解除して、ベッドにあおむけに倒れる。

「あいつは・・・あいつらは、必要なら無関係な人間でも殺せる。ちやんと大切なものが何なのかを理解して、それを守るために何でもできるような奴らは・・・心配する必要もねえよ」

『そうか』

その会話を最後にして、一輝は目を閉じる。新たにできた義兄弟がどのように成長していくのか。次に会えたのなら、それを聞いてみよう。そう義兄弟の未来を祈りながら、眠りへとつく。

|||||

「悟ー。アジ君が急に消えたんだけど・・・」

一輝が消えたほんの少し後。

同時に消えたアジ君のことを尋ねに悟の自室に来た螢は、そこで一人酒を飲んで悟を見る。

「え・・・なんで一人寂しく酒飲んでるの？」

「ついさっきまではもう一人いたんだけどな・・・帰ったらしい」

「ああ、そういうこと・・・」

そう言いながら螢は床に転がっている盃を見つけ、拾い上げた。

「ここで一輝と酒を飲んでたのね」

「ああ。とりあえず義兄弟盃を交わして、終わるころにはもういなくなってたぜ」

悟はそう言うってから再び盃を酒で満たして、一気に煽る。その際にほんの一滴が口の端から落ちて、床にシミを作る。真新しい水濡れが一つ。他にはどこも濡れていないがために、それはとても目立つ。

「あ、悟。寂しくひとり飲んでるくらいなら私に酌なさいよ」

「断る。オマエ少しでも飲んだら倒れるだろうが」

「大丈夫よ、昨日は何とかなったから♪」

「あとから大暴れしたじゃない、この蜘蛛女」

さらつと毒を吐きながら紅葉が現れ、螢の手から盃を奪う。そのまま自分で勝手に酌をして悟の隣で酒を飲みだした。

「オイコラクソチビ。何勝手に人の盃とつてんのよ」

「どうせ飲めもしないんだから持つても無駄でしょ？ただでさえ鬱陶しくて騒がしいんだから、せめて面倒をかけないようにとか思わないの?」

「ああ?」

もう既に喧嘩腰になってきている二人。それをみて悟は一つため息を漏らす。

「これを、どうにかしてまとめていくのか・・・」

思い浮かべるのは、義兄弟の百鬼。何の統一性もない、癖の強いものもいるそれだが、しかし一輝のもとで統率がとれていた。まだまだ自分では彼とは雲泥の差だ。実力という面でいえば、その足跡すら見えない。それでも、父親に自分を認めさせるにはどうしても必要なこと。それなら。

「やるしかねえよなあ・・・」

「どうしたのよ、悟?」

「きつと蜘蛛女が面倒になってきたのよ」

「うるさいのよクソチビ。アンタには聞いてない」

「あー、もういいから少しくらい落ち着けお前ら」

まあやるだけやってみよう、と。自分なりの道を探しながら、悟は次のステージを目指す。

|||||

異なる形でぬらりひよんの力をえた二人の少年の物語、いかがだっただろうか。

当然ながら、彼ら二人の考えは全てが正しいわけではない。普通の感性をしたものから見れば、歪んでいると感じるかもしれない。

それでも、彼らは迷うことなくその道を進んでいく。一人は、自分

の大切を守るために。一人は、自分の目的を果たすために。

そんな彼らの道が再び交わるときは来るのか、もしその時が来たのならそれはどのような物語を紡ぐのか・・・

彼らの未来に幸いあれ。彼らの道に試練あれ。そして・・・彼らの未来、どうぞこれからも見守ってくださいるのなら、幸いにございます。

(悟との関係、義兄弟)

(関係続行、以後の邂逅、不明)

ウイル・オ・ウイスプ編 手合わせ

とある日のノーネーム。建物から少し離れたところに一輝と十六夜はいた。

お互いに向き合って拳を握り、一瞬の沈黙が流れ・・・同時に動く。地面を踏み込み、拳と拳がぶつかる。その衝撃でどちらも後ろに跳ばされ、十六夜はその先に合った木を蹴って再び跳ぶが、一輝は横に跳んでしまったので空振りに終わった。

十六夜は自分の拳で倒れてしまった木を無視して一輝のとんだ方を見るが、その瞬間に青筋を立てる。ニコニコとしながら手を振っていたのだから当たり前だろうが。

そんな理由からイラツとした十六夜だが、しかしそれでも突っ込むことはなかった。少し前までの彼ならともかく、今の彼からは慢心と言ったものは消えている。

自分より強いやつが、このコミュニティだけでも一輝、湖札、アジⅡ、ダカーハと三人はいるということを知っている。その点から彼は慢心と言ったものを捨てている。格上に対してはもう下手に動くことはない。

一輝は十六夜のその様子を見て感心したのか、そんな表情を作り、次の瞬間には十六夜の視界から消える。

それにはさすがの十六夜も表情を変え、どこに行ったのかとまず右を見る。そして、その瞬間には左から殴り飛ばされた。

日本人の習慣ゆえか、それとも利き腕が右手だったのか。なんにしても右から確認してしまったために十六夜は攻撃を喰らい、再び飛ばされて木にぶつかって軽く口の端から血を流す。それを拭い地面に手をつけて立ち上がると、どうするか少し考える。このまま続ければ、今日の手合わせも何もできずに敗北して終わってしまう。それだけは避けねばと考えて・・・結局何かできそうな手は一つしか浮かばず、それを実行する。

一輝にしてみればそれは何か考えていたと思つたら急に突っ込んできた、というような状況なのでさすがに一瞬目を見開いて固まったが、手合わせの最中にそのままにいるわけにはいかない。すぐに頭を切り替えて構える。十六夜がしてくるとしたら何であるか、それをこれまでの手合わせから考え、どれがきても対応する手段を立てて：そのどれでもない一手を打たれ、その驚きと内容から行動を停止してしまう。

十六夜の打った一手はとても単純。立つ際に握りこんだ砂を一輝の目にめがけて砂を投げつけたのだ。この上なく単純であるその一手なのだが、しかし今回についてはそれがとても効果を出した。

まず一つ目に、一輝は何が来ても対応できるようにと『目をしっかりと開いていた』。当然ながら砂も入りやすく、一輝の視界は塞がれた。その上に反射的に体が固まってしまったので、隙もできた形だ。そして二つ目に、それがこの上なく十六夜らしくなかったということだ。十六夜といえば真正面からぶつかってくる、そんな印象を抱いていたところに砂による目つぶしだ。その驚きはかなりのものになるだろう。

そんな形で、これまでの手合わせでは一度も作ることでできなかった隙を作ることのできた十六夜。当然の流れでそのまま拳を突き出して、始めて一輝にまともな一撃を入れた。それでよろめいた一輝に對して十六夜はもう一撃入れようか考えたが、それを踏みとどまって一度下がる。ここまで行けた以上はできるところまで行き、可能なら勝ちたい。そのためにも慎重を期していくためにも、このままでは二撃目がどこから飛んでくるのか簡単に想像されてしまう。普通の相手ならともかく、一輝ではそれだけの情報で十分なのではないか。そんな考えから彼は音を立てずに短時間で移動し、真逆から攻撃をする。

が、しかし。その拳は一輝の手に阻まれた。

少なくとも子の二撃目まではいけると考えていた十六夜は目を見開き、一輝がまだ目を閉じているのを見て再び驚く。しかも、もう一度後ろに逃げようとしてもしっかりと握りこまれてしまっているの

で、逃げることもできない。今度はそこで十六夜が隙を作ってしまったために、一気に投げられる。

まだ目が見えないにもかかわらず、一輝は地面にたたきつけられて息を吐き出した十六夜の喉に手刀を当て、いつでもその首を落とすことが出来る体制となる。

|| || || || || || || ||

「これで俺の勝ち、だな」

「ああ、そうだなコンチクショウ」

心の底から悔しそうな声をあげた十六夜に対して、一輝は「ま、よくやっただろ」と一言だけ言って立ち上がる。そのまま手さぐりで倉庫の中からペットボトルを取り出して目を洗っていると、十六夜もその後ろで立ち上がる。

「まったく・・・まさか十六夜がこんな手を使ってくるとは。考えてもなかった」

「だからこそやったんだろうが。・・・結局、意味なかったみたいだけどな」

「意味なくはないだろ。俺に初めてまともな攻撃入れれたんだ」

その時点で意味がねえ、と十六夜はぼやく。自分よりも上にいる相手であるとはいえ、ここまで圧倒的では、ということだろう。

「それよりも、なんで今日はあんな手を使ってきたんだ？」

「別に・・・変なプライドは捨てることにしたんだよ。何を使つてでも、勝てるならそれで勝つ、ってな」

「・・・ふうん」

今度こそ、一輝は本気で感心する。一度の挫折を乗り越えたただけでここまでの成長を見せるとはさすがに思っていたいなかったのだろう。

「つーわけで、これからは色々と試させてもらうぜ」

「それについては、まあご自由に、って感じだけどな・・・そうか、それなら」

一輝は少しの間上を向いて考え、そして十六夜を見る。

「なあ、その意志はもうしつかりとしてるか？」

「あー・・・まあ、俺らしくはないと思いつながら、それでも迷わず実行できる程度には」

「ふむ・・・んじや、もう一つ。オマエ、なにか確固たる意志とかつてある？」

「ああ、それはある」

「こんどは迷わず、即答する十六夜。そして続けられたのは。

「俺は仲間を守り、弱者を守り、そして無関係なやつらには飛び火させずに・・・敵の全てをぶつ飛ばす。それが、俺の目指す場所だ」

「それはまた・・・俺なんかとは比べ物にならないくらい立派な考えだな」

自分にとって大切だと思うものでなければ、心の底から守ろうと思えないほどに偏っている一輝。だからこそ、こうしてはつきりと言ってしまえる十六夜を少しだけまぶしく感じた。

「それなら、今のお前におすすめの技が、一族に伝えられてる中にある。それこそ、汚い、姑息、卑怯者、とか言われかねない系統のものだけだな」

「・・・それは、どんなものだ？」

「一番早いのは、自分の目で見て、自分の体で体感することだな。つつつても、俺も全部使えるってだけで得意なわけじゃねえんだけど」

「そう言いながら一輝が取り出したのは、真っ黒なロングコート。それを着てから腕や肩などを少し抑え、その他にも色々なものを十六夜が確認できない速度で取り出しては服の中に取り付けていく。」

「まあそれでも、使えるし十分実用できるレベルにはあるからさ・・・
鬼道流暗術、暗伎、暗殺技の数々。とりあえずその身で味わえ」

ジャック

「あの、お二人とも・・・何をしていたのですか？」

諸事情から人が訪ねてくるため、一度応接間に集合した『ノーネーム』の主力メンバー。

黒ウサギに耀、飛鳥、そして一輝のメイドたちが集合しているところに遅れてきた一輝と十六夜の二人を見て、黒ウサギが漏らした一言がそれである。

「あー、いや、最初はいつも通りの手合わせのつもりだったんだけどな・・・」

「気が付けば、俺の方から割とマジになってた」

「で、俺もノリで少しマジになったら十六夜がこんな状態に」

そんな声をかけられた二人のうちの一人、一輝の方には特に何かあるわけではない。普段通り外見や他人からどうみられるかなど気にもしていないためにジーンズにTシャツというラフな格好で、唯一何かあるとすれば右手首につけている旗印の刻まれたブレスレットくらいだ。ではなぜ黒ウサギが声をかけたのかというと・・・まあ当然ながら、十六夜が理由だ。

そんな十六夜は、まず服がボロボロになっていた。刃の通らない体となったことで体に傷こそないものの、その外側である服はそうもいかない。つまり、それだけ刃物による攻撃を受けたということだろう。さらに言えば土にも汚れているし、何より十六夜本人がいらだつた様子。最後に小脇に抱えている真っ黒なロングコートだ。普段と違いすぎてもうどう反応すればいいのか困るレベルに、十六夜が残念な状態である。

「え、えっと・・・とりあえず、十六夜さんは何か着替えてきてください。そのままの格好でいられるのは・・・」

「ああ、分かった。・・・ってか、俺がいる必要あるのか？」

「別に最悪俺一人でもいいんだが、会えなくてもいいのか？」

「そいつは困るな」

一輝の一言にはつきりと答えた十六夜は、すぐに部屋を出ていく。

そして、入れ替わるように・・・

「あの・・・お邪魔、します」

「こんにちはー」

「ああ・・・いらっしやい、ウイラ、アーシヤ」

同盟コミュニケーションの一つ、ウイル・オ・ウイスプから二人が入ってきた。

|||||

場所は変わり、ノーネームの本館の前。

ウイル・オ・ウイスプのこれからについて少しくらいは話しとけよと思わないではないが、しかしそれ以上待つことが出来ないという二人に、「面倒な話などする気もないという一輝によって割愛してしまった。

実際問題としてこの件については一輝に一任されているのだから、あんなに人数集めて話し合ったところで、ということでもあるのだが。

というわけで、本館前に集まったノーネームのメンバーとウイル・オ・ウイスプの二人。今度は主力とか関係なく全員が集まって一輝から少し距離をとって囲むように立っており、その中心に居る一輝は目を閉じ、師子王を横向きに構え・・・唱える。

「我はここに、契約に基づき汝を召喚せんと欲す。汝、これを受け入れるなら我が言霊に従い、ここに顕現せよ。」

一輝がこう檻の中に向けて唱える。そして、彼は一つの声を聞いた。肯定にも否定にもなっていない、ほんの小さな笑い声。

『ヤホホ』というそれを・・・一輝は、肯定と受け取り、伏せていた顔をあげ・・・笑顔で、楽しそうに唱える。

「トリック・オア・トリート！彼の道化師はこう唱え、その祭りの主役となるー！」

それは、彼の真の姿を呼ぶものではない。殺人鬼のジャックではなく、道化師のジャックを呼ぶ物。

「南瓜頭の道化師は、誰よりも子供の笑顔を望んだ！子供たちの笑顔のため、子供たちの未来のため！君はただそれだけのために、ここに顕現せよ！」

ハロウインの主演、ジャック・オー・ランタン。

アジィダカーハとの戦いの中一輝と契約をし、その檻の中に封印された彼が今、血なまぐさいことはなくただ子供たちの笑顔のために。「さあ、皆を笑顔にージャック・オー・ランタンー！」

最後まで笑顔で楽しそうに唱えた一輝の隣に、顕現した。

大きなカボチャの頭に、縷切れのマント。その全てが生前と同じ姿である彼。そんな姿を見て真っ先に反応したのは、当然ながらウィラであった。

彼女が最も長い時を共に過ごしてきた相手。死んだと思っていた彼と再会できて最もうれしいのは彼女だ。だからこそ、一輝の手で彼女の前に押し出されてきたジャックをみて当然ながら涙を流し、

「・・・久しぶり、ジャック」

「ええ。お久しぶりです、ウィラ。・・・すいませんでした、勝手なことをして」

「ううん、気にしなくていい。・・・ジャックは、蒼炎の旗印に・・・」
そして、最後まで言い切ることもできず堪えられなくなり、彼に抱き付く。彼女は自らの年齢も気にせず、声をあげて泣き、ジャックにしがみついている。そんな二人の周りにいる者たちは皆それを見守り。

「・・・ま、こうなるならよかったかね」

一輝はただ一人、その輪から外れながらそう呟いた。

|| || || || || || || || || ||

一輝がジャックを召喚してから少し経った後。

ウィラが泣き止んだために飛鳥や耀、黒ウサギに十六夜、そしてノーネームの子供たちなど。ジャックに会えたことを喜ぶ者たちに囲まれながらアーシヤを乗せている。

そうして賑わっている中、真つ先にその輪を抜けた一輝はそのまま一人、本館の屋根に座つてそれを見ていたのだが・・・それは一人ではなくなった。

「あの・・・カズキ」

「ん？どうかしたのか、ウイラ」

散々泣いて、散々抱き付いて。自分の分はそれでいいと判断したのか。ウイラもその輪から抜けてきて、一輝の隣に座った。

「えつと・・・改めて、ありがとう」

「気にすんなって前にも言わなかったか？むしろ俺が勝手に殺したんだから、お前たちには俺を恨む権利がある、って」

「そんなことはしないって、こっちも言った」

ムカツとしたのか、頬を少し膨らますウイラ。そのまま少し向き合っていた二人は、同時に嘔き出して笑い出す。

「ま、そうだな。そこまで言うなら、俺はもう気にしないことにする。だからウイラも気にすんな」

「分かった。じゃあ、そういうことで」

もうこれ以上ジャックの件について引つ張らない。そう二人の間で取り決めをすると、再び視線をジャックたちに戻して、話を始める。

「それにしても、やっぱりジャックは子供たちに好かれてるよな」

「うん、何せジャックだから」

「ジャックだもんな」

ジャックだから、という理由だけで彼が子供に好かれる理由の説明には十分。もはやそれは誰もが共有している考えなのだろう。

「それじゃあ、この後は前に言った通りで大丈夫？」

「ああ、問題ない。今の状況なら俺たち六人が本拠にいらなくてもどうにかなるし、最悪どっかの魔王が攻め込んできてもアジィダカーハは残していく予定だから」

「・・・もし魔王が攻め込んできたら、むしろかわいそう」

「勝ち目がかけらほどもないからな」

アジ君でもなく、アジさんでもなく、アジィダカーハを残す。一輝がそう言ったのは、本拠にいるのは一輝の檻の中にアヴェスターのみ

を残した状態であるからだ。つまり、アヴェスターこそ使えないもののそれ以外は全盛期の彼その物。本当に、魔王が攻め込みでもしようものなら覇者^{タウルナフ}の光輪一撃で消し飛ぶ。かわいそうになるのも仕方ない。そして、たかが本拠の護衛にアジⅡダカーハを残す一輝もどうなのだろうか。

「あ、万が一のために蚩尤も残してるんだった。今は武器庫にいるけど」

「待って、カズキはどんな敵を想定してるの？」

「新たに誕生した人類最終試練、とか？」

「冗談でもダメ・・・」

本気であきれた様子^のウイラを見て、一輝は首を傾げる。まあ最悪の可能性を考えると^{いう}その行為そのものはいいことなのかかもしれないが、それにしたって、^{という}ことだろう。そしてもし仮に人類最終試練の魔王が出てきたとしても、アジⅡダカーハ一人で十分である。少なくとも一輝が駆け付けるまでの時間くらいは稼げる。

「はあ・・・でも、問題ないならこのままいく方向で」

「ああ、勿論行かせてもらうぜ。ウイル・オ・ウィスプからのお招きなんだからな」

寝やがった!?

約束通り「ウィル・オ・ウィスプ」の本拠に招かれた一輝とメイド五人。実に今更ながら湖札もメイド姿となっているのだが、まあそんな些細なことは置いて。

当然ながら無事何事もなく本拠にたどり着いた一輝は、着くなり子供たちにせがまれてジャックを召喚した。

「あー、悪いな、一輝。ろくな挨拶もさせてない・・・」

「気にすんな、子供は本来あんな感じでいいんだよ」

そんな、遠慮も礼儀もないような子供たちの行動にアーシャとウィラは少しばかり頭を抱えたが、一輝に気にする様子はない。型っ苦しいのが嫌いな彼にしてみれば、こちらの方が楽でいいのだろう。

「さて、と。とりあえず部屋まで案内してもらってもいいか？今日はもうこのまま寝て過ごしたい」

「疲れてる？」

「いや、そうじゃなくて・・・いや、最近ちよつと疲れがたまりやすくてな」

「何だそのあからさまな怪しさは・・・ハア、ならアタシが案内することっちだ」

「んじゃ、案内よろしく。ふあゝ・・・」

思いつきり大きく欠伸をする一輝だが、しかしそこで思い出したようにたちどまり。

「そうだ。今日中に五人で確認できる限りでいいから現状を確認して。いいよな、ウィラ？」

「うん、大丈夫。説明とかは私がするから」

「とのことだ。頼んだぞー」

一輝の言葉に全員が返事を返した。なんだか五人が空気になっていく気がするけどそれは気にしない。

「・・・なあ、世話になることっちが言えたことじゃないけど、それでいいのかわ？」

「まあ、大丈夫だろ。というか、むしろ俺よりも湖札の方が知識量は多

い」

「なるほど、そういうことか」

再びアーシャの隣に戻るなりそんなことを言われていたが、一輝の一言で納得してしまった。さすがにこの状況でふざけることはない、という点は分かっているのだ。そうでなければ一輝に一任されていることを良しとするはずもないのだが。

「んで？アンタが今日このまま寝ていたい本当の理由は？」

「いやだから言ったじゃん。最近疲れがたまりやすくて眠いんだって」

「さすがに、あそこまで言っついてそれが事実ってことはないだろ」

「だよな・・・」

さすがに分っていたようだ、あれは無理があつたと。それでも一輝は少し悩み、事実を伝えるかどうか考えて、結局伝えることにする。

「ジャックをここのいる間ずっと顕現したままにするためには、呪力が足りないんだよ。それで、呪力蓄えるために一回寝る」

「そこまで負担が大きいのか？」

「ジャックはあれで霊獣クラス・・・その中でもそこそ上位に位置するレベルの存在だからな。今は切り離してるといっても、断罪者としてのものを含めれば主催者権限まであるくらいだ。さすがにずっと出し続けるには負担がある」

だからこそ、ひとまず今日は寝る。今日の残りの時間を全て寝て過ごし、その間に生成された呪力を全てジャックに回すことでここにいる間はじやつくがでていられるのだ。

「一々出したりしまったりするのもだるいからな。それ灘出しっぱなしの方がよっぽど楽だ」

「ふうん・・・なら、本拠に残してきた二柱の神霊は？」

「アジィダカーハの方は相性がいいから元々負担少な目だし、神霊化しなければほぼゼロ。蚩尤に至っては今回本拠の武器庫にしまつてある武器を依代にしたから、こっちも負担なし」

「ジャックさんもそうするわけには？」

「んー、そうだな・・・ジャックの依代にできるとしたら超がつくくら

いの罪人かジャックをかたどっている長いこと信仰された何かなんだけど」

さすがにそれを準備するのは難しい。そんな現実的な問題からこの手段は却下される。

「それに、そうじゃなくても姿が依代に依存するからな」

「それは確かに・・・」

姿が違うというのはかなりきつい。と言うか物によっては子供たちが泣き出しかねない。それはさすがに問題である。

「そう言うわけで、他に手段が思いつかなかったわけだ。疲れてた、つてのもあるわけなんだが」

「そっか。ならちよつと相談したいことがあったんだけど、明日以降にした方がいいか？」

「いや別に、相談くらいなら今日でいいぞ」

本当に何でもないかのように一輝が言ったので、もうアーシャも気にしないことにした。一輝についてはもう気にしてもどうしようもない、と察しているのだろう。

そうこうしているうちに、一輝が寝泊まりする部屋についた。当然ながらきれいに掃除したり整理したりはされているものの、少しぼろい部屋である。

「あー、うちも中々に金がなくなてな・・・」

「いいよ別に、前いた世界では野宿とかもあつたんだし」

「いやアンタ前にいた世界は何だったんだよ・・・」

「任務によつては色々とな・・・」

一輝ですら辛いと感じるものがあつたのだろうか、少し思い出しただけで頭を抱えてしまった。かなり珍しい一輝の凶である。

「さて、と。それで？相談って何？」

「一気に本題に入ったな・・・」

「こういうのは下手に長引かせても何にもならん」

ベッドに座ってはつきりとそう言う一輝に呆れたような溜息をついてから、アーシャもまた部屋に入ってきて椅子に座る。背もたれを前にして座るちよつと行儀の悪い形だが、彼女には不思議と似合つて

いるように思う。

「あーっと、さ。元々アタシがプレイヤーやってたのって、ジャックさんとウイラ姐さんに無理言って、何だよね」

「うん？」

「ほら、『ウィル・オ・ウイスプ』って本来は主催者メインのコミュニティだからさ」

そう言われて、一輝は思い出した。ウイラがかなり強いプレイヤーだから忘れがちになってしまったが、本来はそういうものなのである。

「それでも、鬼姫連盟の開くゲームを見たときに、かなり憧れたんだ。自分もあんなステージに立ってみたい、って」

「・・・それで、いろんなゲームに参加してたんだな」

「うん、そう。この服もさ、ジャックさんが『それなら一張羅を作らねば!』って言って作ってくれたもんだよ」

自慢の一着であるのか、服について話すときが一番うれしそうだった。そして、だからこそ。次に続く言葉には強い覚悟が込められている。

「でも、さ。ジャックさんがいなくなった以上、もうそんなことを言ってるわけにもいかないから」

「・・・なるほど、な。相談つてのは、プレイヤーを引退する話なのか」

「そういうこと。二足の草鞋でできる程主催者は甘くないし、アタシ自身の実力もない。だから、どこかできっぱりと引退しようと思う」

ふむ、と一輝は少し悩む。さすがにこの場でふざけることはしない。だからこそ真剣に考えて、そして。

「・・・なあ、これまでに白星って何回上げたことがある？」

「一回、だな。ジャックさんと一緒に耀に勝ったやつ」

「そうか。なら、一個提案が」

そう言っ指を一本立てた一輝に、アーシャは何かいい案があるのかと身を乗り出す。

「とりあえず、今度一個上の層で開くギフトゲームに出る。出納め、ってことだ」

「・・・それ、意味あるのか？」

「ちゃんとキリを付ける、つてのは重要なことだぞ。それで、その結果で考え直すなら考え直して、そうじゃないなら主催者に回る」

「・・・できると思うか？」

「多少はノウウハウがあるだろうから、大丈夫だろ」

あつきりといった一輝に対してアーシャは文句を言おうとしたが・・・

「なんなら、俺も手伝うし」

「・・・は？」

この言葉で、それも難しくなってしまった。

「いや、なんで？」

「同盟コミュニティだし、あとギフトゲームでれなくて暇だし」

「あー・・・」

そしてすごく納得してしまった。この問題児たちにしてみれば、暇というのは天敵でしかない。

「まあそう言うわけだから、俺にできる協力はするぞ。必要なギフトがあるなら都合できるかもだし、檻の中の異形だつて貸せる」

「・・・それ、だいぶゲームの幅が広がらないか？」

「広がるだろうな。で、それをうまいこと実行できるかはオマエのやり次第だ」

「うわー、プレッシャーが・・・」

そうはいつているものの、アーシャの顔はとても楽しそうになっている。どんなことが出来るかと想像しているのかもしれない。

「ま、そういうことならとりあえずゲームに出てから考えるよ。まだ先なんだっけ？」

「しばらく先になるかな。少なくとも、俺の上層めぐりが終わってからじゃないと」

「・・・上層めぐり？」

「ああ、なんか呼び出されてさ・・・面倒で仕方ないけど、階層支配者たちが行けつてうるさいから」

「え、それはあれなんだよな？先方からもう少し先で、つて言われてる

んだよな?」

「何も言われてないから後回しにしてる」

「それ絶対すぐに来るって考えてるよな!? 上層の神群の方々、ちゃんどくるって考えてるからこそだよな!」

当然ながらアーシヤが突っ込みを入れた。まあこの話の流れでは仕方ない。

「えー、それならちゃんと日時指定してくるだろ。だから問題ない」

「相手は上層の神群だろ!? 失礼したらどうなると思ってるんだ!!」

「俺の手で全滅させるだけだろ」

「何言っちゃってんのオマエ!」

ああ、また一輝による被害者が増えてしまった。せっかく一つ覚悟を決めた彼女なんだから、せめて穏便にしてあげてほしいのだが……まあ、一輝がそんなことを考えるはずもなく。

「んじや、相談も終わったことだしそろそろ寝る。お休み……」

「オイ! 話まだ終わってないんだけど!」

「zzzzzzzz……」

「ホントに寝やがった!」

ああ……頑張れ、アーシヤ。強く生きてくれ。

相談

「さて、と。それじゃあウイラお姉さん、コミュニティの現状とかについて質問していくから、正直に答えてね？」

「あ、うん。えっと・・・なんでヤシロが？」

一輝が立ち去って少ししてから。

ジャックの号令で子供たちがそれぞれの仕事へ向かい、ジャックがそれを一か所一か所見回りながら手伝っている間に、応接間で現状の確認を始めていた。そこにいるのはヤシロとウイラの二人だけである。

「うーん・・・一応あの中で一番年上なの私だし、人生経験もある分判断しやすいから、かな？」

「あ・・・そういえば、そうだった」

「うんうん、実はそうなの」

この様子だと、ウイラは完全に忘れていたらしい。たびたび作者も忘れそうになるのだが、彼女がノストラダムスの大予言そのものである、ということ。

「それに純粋な実力で考えても『ノーネーム』の中ではお兄さんの次だしね。こういう時は代理で♪」

「それなら、わかった。何から聞くの？」

「財政状況はこの本拠を見ればわかるし、お姉さんたちが今色んなところを手伝いつつ見て回ってるからいいとして・・・」

今ヤシロが言ったとおり、残りの一輝のメイドたちは屋敷の中に散らばってそれぞれ手伝いをしている。そのさなかどれほど本拠がロボロなのかなどを調べる、という流れで。

「あ、そうだ。一番大事なこと」

「何？」

「今このコミュニティに魔王が来たとして、まともに戦えるのは何人？」

「・・・私、だけ」

「うわお」

ヤシロは思わずそう漏らしてしまった。そこにはそんな現状への呆れではなく、むしろこれまでよくジャックとウイラの二人だけの状態でこの箱庭を生きてきたという純粋な称賛が込められていた。

「一応、戦うことが出来る子もいるんだけど……相手が魔王となると、ちよつと……」

「うくん、確かにウイラお姉さん一人いれば下層の魔王くらいならどうにかなりそうだけど……その他は堪えるのも難しいかも」

「そうじゃなくても、ルール次第で……」

これがただのコミュニケーションであればそこまで考えなくてもよかつたのかもしれないが、今や「ウイル・オ・ウイスプ」は打倒魔王を掲げている「ノーネーム」と同盟を組んでしまっている。これから先魔王のコミュニケーションに狙われる可能性は高いだろう。それも、そのまま他のコミュニケーションが駆け付けるまで耐えられない可能性も。

「だいぶ難しい状況だね……うーん、たぶん剣閃烈火の人たちに頼めばここに入れ替わりでいてくれるだろうけど、あの人たちも脳筋というか剣しかないし……」

「魔王対策には、ちよつと……」

「あ、お兄さんに頼めばアジお兄さんをここにおいてくれるかも！」

「それは、ちよつと……」

最後のはホントにどうなのだろうか。というかウイル・オ・ウイスプの子供たちが泣きかねない。だが魔王対策としては実力面でも知識面でもかなり高い水準を持っているのだが。

「とまあ、冗談はこのあたりにして」

「ヤシロ、少し本気だった……」

「かなり効果的な案ではあったからね」

「効果的だけど、心労が……」

「……もつともだ。」

「そうになると、手段としてはかなり絞られるよね。というか、元々お兄さんから『もうノーネームの本拠に来てもらうのが一番だろ』って言われてるし」

「……場所とか色々、大丈夫なの？」

「とりあえず一ヶ所土地を元に戻そうと頑張ってるし、ゲームに参加できない子供たちの仕事も多いから大丈夫。まあウイラお姉さんにはメイド仕事してもらおうことになりそうだけど」

「ん、分かった」

そのことに対しては何もないのか、ウイラははつきりとそう答える。一任されている一輝に確認をとらないと確定とは言えないが、まあとりあえずこれで決まりだろう。

「さ、それじゃあ次の話題」

「・・・？まだ、何か話すことが？」

「うん、すつごく個人的なことだけど」

その瞬間、ウイラの中の何かが警鐘を鳴らした。目の前にいる幼女が見せたそれは、問題児の笑み。一体どんな爆弾を投下してくるのかと警戒していると・・・

「それで、お兄さんへの想いはどうするの？」

「・・・」

フリーズしてしまった。そのままフリーズすること一分。結構な時間をかけて再起動したときには珍しく顔が真っ赤になっている。

「えっと、その、これは・・・少し違ってます」

「あ、うん。大丈夫。その辺りについてはちゃんと理解してるから」

「・・・なら、言わないでほしかった」

あははー、と言っているヤシロを、ウイラは少し恨めしそうに見る。しかし彼女はそんなこと気にもせず。

「私としてはそれはそれで一つの想いの形だし、いいと思うんだけど」

「・・・さすがに、こんな短期間でそこまで割り切れない」

「あはは、そっか」

見た目の上では幼女が弄ってる図となるのだが、実際の年齢で考えればヤシロの方が上なのでそこまで間違っではない。箱庭において見た目なんて何の参考にもならないのである。

「・・・ねえ、ヤシロ。ちょっと相談していい？」

「今のウイラお姉さんの状況だったら、たぶん私よりもお兄さんの方が専門だよ？」

「本人に相談するの・・・？」

「もういつそその方がいい気がするけどね。それに、お兄さんならそのことを言われても変なことは考えないだろうし」

「・・・そう、なの？」

「あのお兄さんだからね。・・・まあ、他にもちよつと事情があるんだけど」

「事情？」

「うん。ちよつとした、ね」

ヤシロはそう言うと、床についていない足をぶらぶらさせ、少しだけ話す。

「多分、湖札お姉さんを除けばちゃんと気づいてるのは私だけなんだけど・・・お兄さんって、ちよつと特殊な感情の在り方をしてるんだ」「特殊な在り方？」

「そう、特殊な在り方。どれくらい特殊かというと、普通の人ならそれを理解してたら自己嫌悪に陥ったり自分が信じられなくなるくらい特殊。周りの人からしてみても、本当に普通の一般人にすればお兄さんのことを人間なのか・・・生物なのか疑うんじゃないかな？」

あつさりと言われたそれは、ウィラが固まるには十分なものであった。そこまでのたとえ方をされるとは、一輝は一体どんな感情の在り方をしているのか、と。

「・・・それは、カズキが大切を失わないためには何でもする、とかじゃなくて？」

「ああ、それは知ってるんだっけ？でも、うん。それとは別のことだね」

唯一心当たりのあったものを聞いてみたものの、しかしそれは違ったらしい。ではいったい何なのか・・・少し悩む様子を見せたが、しかし何も思いつかなかったのかそれも短い時間で終わった。

「・・・知ってるのは、二人だけなの？」

「ちゃんと知ってるのは、私と湖札お姉さん、それにお兄さん本人だね。音央お姉さんと鳴央お姉さんは違和感を感じてるかもしれないし、スレイブちゃんが気付いたうえで何も気にしてない、って可能性

はあるけど」

何せスレイブちゃん、お兄さんの相棒だしねー、と。剣と主という繋がりや剣筋に感情が出るという話など。スレイブがそれに気付いている可能性は意外とあることをヤシロは告げた。

「・・・なんでそれを、私に?」

「簡単なことだよ。これで考え直すことになるなら、それでいいと思う。もしここまで言ってもそれに気付けないなら、その感情は何が何でも捨てるべきだと思う。そして・・・それに気付いてもなお感情に変わりがなかったりするなら、まだ悩んでも大丈夫。そんな感じ」

つまり、これは彼女なりの手助けなのだ。もう何度目か分からないが、彼女はここにいる中で、それこそ言ってしまうえば一輝の檻の中の住人を除けば最高齢クラスに経験を重ねているのだ。実は一番相談に乗っていい解決法を示してくれる可能性が高かったりする。

「そう言うわけだから、そんな感じで判断してみるのがベストだと思うよ、ウイラお姉さん」

「そう、なの?」

「うん、そうなの。大サービスでもう一個ヒントをあげちゃうと、普通なら興奮するような状況にもつてくのが分かりやすいかな」

一瞬。今度は本当に一瞬だけ固まってから、訪ねる。

「えっと、それはなんだか楽しくなってきたとか、そういう?」

「ううん、性的な方♪」

一瞬の絶句。そしてそのまましばらく、ウイラは固まったままであった。

吊り橋効果？

「ふぁ……ん？」

ところ変わって一輝の部屋。

本人はもう今日は寝ているといったのに起きた一輝は、一つ欠伸をしてから首を傾げる。

前にも言ったかもしれないが、呪力というものは減りすぎるとそれを回復しようとする。そこには呪力を全部使うと死んでしまうという部分があるため、その回復は体の方にしてみればかなり重要なことだ。

だからこそ、かなりの量をジャックに送り続けるようにしていた一輝にしてみれば目が覚めたこと自体に疑問符が浮かんだ。が……割とすぐに冷静になって、状況の理解を始めた。真っ先に行うのは、ジャックとのリンクの確認。そして……

「……なんでジャック、こんなに呪力に満ちてるんだ？」

自分が送った以上の呪力、そして生命力をジャックが持っていることを確認し、普通に驚いた。それでもそこまで冷静さを失わない。驚くという感情を知らないかと疑うほどにあっさりと考えを進める。

「可能性としては俺が成長したか、もしくは何かイレギュラーか——
—ジャックが子供たちといたからか」

呪力というものは、感情に大きく左右される。そして他者から与えられる感情というのは、もはや完全に魂だけの存在となっているジャックにはこれ以上なく大きな影響を及ぼす。

この上なく子供を愛しているジャックという存在に、この上なくジャックが大好きな『ウィル・オ・ウィスプ』の子供たち。そんな関係によって影響を与え合ったのではないかと、そんな仮定を立ててみて……

「……ま、無粋なことは考えなくてもいいか」

その思考を放棄する。自分が知る必要があるのは、とりあえず自分がやることが減って楽になったということのみ。それならそれでいいとベッドから降り、一つ伸びをしてから何をするかと考える。

ジャックの方がかなり早いタイミングでクリアできてしまったのか、彼は今ただ寝て起きただけのような感覚を味わっているのだ。

「この様子だと、まだ夜だしな・・・」

外を見て時間を確認。まだ全然朝に近づいていない、しかしもう皆寝静まっているような時間。さてどうしたものかと考えてから・・・

「・・・体痒いし、風呂いこ」

結局、そんなテキトーさで何をするかを決める。タオルだってボディーソープだってシャンプーだって倉庫の中にある。水は水樹の枝で出せるし、お湯を出したいならその温度を操るといふ手段に出るだけなのだ。必要なのは水を出しても問題がなく、裸になっても問題のない場所。要するに風呂だ。

倉庫の中を探って上記のものを取り出し、ついでに着替えとして和服を取り出して部屋を出る。そのままテキトーに歩き回って風呂場を探して、そこに入った。

「ふむ・・・風呂場は割とどこでもちゃんとしてるのか？」

「ノーネーム」でも風呂場自体は豪華だったので、一輝はそう考える。そのままそこに入っていつて服を脱ぎ、全て倉庫にしまって和服だけあとで着やすい場所において中に入っていく。

入り口を開き、自分に向けて流れてきた熱気と湯気に首を傾げる。扉が開かれたことで湯気は流れていき、クリアに近づいた視界には・・・

「カズキ・・・？」

「・・・あれ？」

「コミュニケーション」「ウイルス・オ・ウイスプ」のリーダー。ウイラ・ザ・イグニファトウスがいた。全裸で。マッパで。生まれたままの姿で。

「・・・」

「・・・」

お互いに何も言えない沈黙の時間。一輝は状況の理解、そしてどうするのが正しいのかの判断。ウイラは現状の判断にそれぞれ脳をフル活動させて・・・

「・・・えっと」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ」

ウイラが声を漏らした瞬間。そこから一つ置いて。そしてもう一つ置いてから。

「あ、すまん！すぐに出てく！」

わざと声を張り上げてそう言い、体の一部を反応させて、顔を少し湯気とは関係なく赤くして。そうして勢いよく振り返ってそこを出ていこうとするも。

「あ、待ってカズキ」

そこを、ウイラに呼び止められて止まることになる。

「えっと、私悪魔だし、人間と少し文化が違うからそこまで気にしないんだけど・・・」

「・・・・・・・・そういうもんなのか？」

「うん、そういうもの。と言つてもさすがにマクスウエルみたいに見てこれたら無理だけど・・・」

それはそうだろう。あの変態が相手では会話をすることすら嫌がるものが多いはず。しかもウイラは直接の被害者なのだから。

「それに・・・今、分かった。ヤシロが何を言いたかったのか」

「・・・・・・・・ヤシロが？」

「うん、ヤシロ。・・・少し、話そう？」

「ここで、それも年頃の男に対してこの状況で、つてのはさすがに問題だろ」

「ううん、問題ない。だって・・・カズキ、一切興奮してないんだから」
ピタリ、と。

その瞬間に、一輝は完全に固まった。それはもう、何の疑いようもないほどに。そして、その表情は驚愕の一言に染まっている。

「それでも今の反応があったおかげで、たぶん理解できた。カズキの感情がどうなってるのか」

「・・・・・・・・そうか」

ウイラのその一言で、さすがに一輝は観念した。

先ほど彼が意識的に出したすべての反応を取りやめ、一種のマナーとしての意味だけを込めてタオルを腰に巻いてからウイラの元まで

「……ここまで知った以上、ちゃんと全部話した方がいいか？」

「お願い。ヤシロのあの言い方からしても、全部知った方がいい気がする」

「……？まあ、いいか」

何のことなのか分からないが、それでも一輝は気にせず話をする。この疑問という感情ですら、彼は自分のものだと断言できないのだから。

「とはいえ、さすがに風呂場で長時間こんな話をするのもあれだからざつくり話すぞ」

「それは大丈夫。さすがに全部話してもらえるほど単純だとも思っていない」

「ありがと」

前置きを受け入れられて、今度こそ一輝は話を始める。

「まあ前提条件として、俺の一族……『鬼道』って一族は、世界においてとある役目を担ってるんだよ」

「とある役目？」

「本気でしっかりと説明しようと思うと四、五時間かかるからそれは省略させてくれ」

「……うん」

さすがのウイラにもそこまでの根気はなかったようだ。

「まあなんにしても、世界においてとある役目を担ってて、そんな世界からの過保護を受け取って、ギフトや霊格を人間の身で手に入れて、そして神霊なんていうものを、ちゃんと信仰からとはいえ両立はできない、百パーセント生まれついでの人間であり百パーセント生まれついでにの神霊であるなんていう矛盾した存在を得て。それで何の犠牲もなく済むと思うか？」

「……それで、感情を？」

「ああ。それこそ、歴代の中で一番強かった人は自分の感情と断言できるものが一切なかったらしい」

代償が大きいのであれば、同時にリターンも大きくなる。そういうことだ。一輝が異常なほどの強さを持っているのには、そんな事情も

存在した。

簡単にそう説明を済ませると、質問をどうぞと一輝は手で示した。

「それじゃあ・・・今のカズキの持つてる感情は、何なの？」

「ああ、これか。ざっくり言っちゃえば、学んだんだよ」

「学んだ？」

「ああ。他の人間から向けられたり、他の人間が抱いているのを見たり。そうやって他者の持つそれをどうにかして理解して、分析して、自分なりに再現する。不器用な人間やそいつの感情がゆがんだものだけだった場合、かなり歪んだ人間になるそうだ」

実際に世界を呪おうとした人とかいるらしいし、と一輝は続けた。より正確に言えばもはや呪いの実行に移ったのだが、それをその息子がとめたのだが、そんな細かいことは気にしない。

「さ、これが俺という人間の。かなり歪んだおかしな、しかし信じられない現実ってやつだ」

「・・・そう、なんだ」

「あら意外。ヒかれると思ってたんだけど」

「まあ、かなり驚いたしなにそれともおもったんだけど・・・えっと、なんかそれだけだった」

あつさりといわれたことに、今度こそ一輝は驚きつくした。

「・・・それに、元々カズキがかなりの悪人だつてことも知ってたからかそこまで気にならなかったのかも」

「・・・そうか。ウイラはそれも知ってたのか」

「うん、ジャックの件がある前から・・・こう、なんだか似てるな、って」

似てる、というのはジャックと、ということだろうか。それとも、その他の彼女が出会ったことのあるものの事だろうか。

なんにしても、彼女には既に見破られていたのだ。

「・・・いつごろから？」

「確か、殿下たちのゲームの少し前・・・だから危ないと思って、金槌も投げなかった」

「ああ、あれか」

耀や飛鳥から話を聞いていたから、一輝はクスクスと笑う。もう、一輝は本気で理解した。すぐ隣にいる人は、ウイラ・ザ・イグニファトウスは、本当に自分という人間を理解してるのだと。

「……って、そういや。なんでヤシロはウイラにヒントを？」

「え？……ああ、それは……」

ウイラはそのまま、少し悩む。ここまでの会話で、そして今一輝から聞いたことでヤシロが言っていたことがどういうことなのかもわかったのだ。

「えっと、今私、一般的に恋心って呼ばれるものを一輝に対して抱いてると思う」

「ほうほうほう……ほう？」

一輝、一瞬で固まった。彼自身がまだ理解しきれておらず、そして多少の理解ができたのすら最近……すなわち恋心と呼べるものを、恋愛感情と呼べるものを持ったのすら音央に告白されたのをきっかけとし、アジィダカーハ戦の後起きてから少ししてようやく抱いたような超超超初心者だ。さすがにこう言われてはフリーズしてしまう。

「でも、」

だが、そのまま話が続いたことで再び戻ってくる。

「でも、たぶんちよつとおかしい。こう……吊り橋効果？みたいなのが働いてる」

「吊り橋効果？」

「うん。これまではマクスウェルのこともあってそんな余裕なかった。でも、それがなくなつて、その時カズキがアジィダカーハを倒すのを見て、それからジャックに再会もできて、つて感じに色々」

「ああ……」

そう言われてあっさりと理解してしまうあたりにもまた、一輝という人間の異常性を感じられる。

「そういうわけだから……その辺りの事は、整理がつくまではそんなこともあったなー、くらいに」

「ん、了解。何か相談したくなつたら言ってくれ」

「そうする」

・ ・ ・ とうとうのつて、本人に言うのはありなんだろうか？

どんな道を歩むのか

「なんか、こういうのは久しぶりだな……」

風呂場でウイラとの一件があった後。一輝は興奮する、すなわち性欲という感情が存在しないから。ウイラはだいぶずれているから。とそれぞれの理由から混浴状態でも何も気にしなかった二人は互いの背中を流しあい、いったん別れた。彼女はどのようなようにして一輝について判断するか悩んで寝ていなかったらしく、そのまま寝室へと向かったのだが……。一輝はもう十分に寝ていたので、再び寝られるわけでもない。よってそのまま準備していた和服を着て本館の屋根の上に昇り、朝になっていくのをただのんびりと眺めているのだ。

「元の世界にいたころはよく、徹夜した後に社の上に乗ってこうして眺めてたっけか」

いや何やってんだ神社の息子。どう考えてもそんなことやっちゃいけない立場だろうが。

《俺がそんなことを気にするんでも?》

だろうと思っただよ……

《もちろん、毎回父さんがどなってたけどな。そのたびに何か手を出して社を傷つけたらいけないからって何もできないでいたのは、かなり笑えた》

ダメだコイツ、本格的にダメだ……

まあそんな感じで、一輝はただ座って朝へと変化していく光景をただただ見ていた。普段の彼からは考えづらいくらいに静かに、ただただ眺めるだけ。そうしてその場に流れていく沈黙は、少女がそこに上ってきたことで破られた。

「なんだか、お兄さんかおじいさんみたいなことしてるっ」

「ん……。?ああ、ヤシロか。おはよう」

「うん。おはよう、お兄さんっ!」

うんしょ、といいながら梯子から屋根に移ったヤシロは、そのままトテトと歩いて一輝の隣に腰を下ろし、横になって一輝の足を枕にする。所詮は膝枕なのだが……。屋根の上でやるとは、中々に度胸が

ある。

「・・・なんで膝枕？」

「何となく、だよ。意外と和服って枕にすると気持ちよかったから、このまま続行で」

「ん、了解」

それだけの説明で納得してしまう一輝はそのままヤシロの頭をなで、ヤシロはそれをくすぐったそうにしながらも気持ちよさそうでもある。

「それで、なんでわざわざここに来たんだ？屋根の上に何か用事でもあったのか？」

「ううん、お兄さんがいるみたいだから来たの。何か私に聞きたいことあるんじゃないかなー、って」

「・・・まあ、勿論あるけども」

だからって自分から来るのか、とさすがの一輝でも少し頭を抱えるが『ヤシロだし』という理由で納得してしまう。一つため息をつき、頭をかいてから。

「あ、でもその前に一個私の質問いいかな？ちよつと気になることがあって」

「お、おう・・・なんだ？」

「そんなに大したことじゃないよ、お兄さん。本当に小さなことだから。なんで呼び方変わってるのかなー、っていう」

言われて一輝は、ようやく自分がヤシロのことを呼び捨てにしていることに気付いた。なんでそうなったのかを少し考えて・・・

「・・・完全に無意識だな」

「あ、そうなんだ？」

「ああ。なんでだろうな・・・うーん・・・？」

「別に、絶対に知りたいってほどじゃないからいいよ？」

「それなら、そうさせてもらう。悪いな」

完全に無意識のうちだったのだろう。本当に何も思い出せなかった一輝はヤシロにそう言っただけで思考を放棄した。

「それでお兄さん、何が聞きたいの？今朝のお風呂の件？」

「それしかないだろ・・・ってか、なんでそれ知ってるんだ？」

「ここに来る途中でウイラお姉さんにあっただ。『昨日のこと、お風呂でちゃんと理解した』って」

「・・・なるほど」

情報源としては十分である。これ以上に正確な情報源もないかもしれない。

「んじゃ、まずはそうだな・・・なんでヤシロはそこまでちゃんと知ってたんだ？」

「勘、かな。まあ私が滅びの気配に敏感なのもあるんだけど」

『滅び』を収集し記録する存在であるヤシロ。だからこそ彼女はどれだけ薄くとも滅びというものに敏感に反応できるため、一輝のそういう部分に気付きやすいのだ。

「それにしても、ヤシロは俺がそう言うものだって知っててもそのままなんだな？」

「あ、うん。なにせお兄さんのこと好きだしね」

「そこまで知ってもそう言ってくれるのはうれしいな」

「あ、もちろんだけど異性的な方だよ？」

「・・・えっと・・・うん？」

さらっと落とされた爆弾。本当に今のは告白なのだろうかと悩んでしまうくらいにはあっさりと言われたそれ。強いて言えばヤシロの頬が少しばかり赤く染まっているのだが、それだって告白直後だとは思えないレベルだ。

「・・・えっと」

「あ、返事はまだね？音央お姉さんが待たせてるのに私が要求するわけにもいかないから」

「そういうもん、なのかな？」

「うん、そう言うものだよ。ちゃんとフェアに行かないと」

そう言うときヤシロは一輝の足に頬ずりする。

「それにしても・・・よくまあ、俺がこんなだって知ってて好きでいられるよな」

「ん？こんなん、って？」

「いやだから、俺がどこまでクズなのかとか、そもそも感情のあたりとか……」

「そんなの気にしてるんだったら、とっくにお兄さんから離れてるよ」
「……そうか。ありがたい限りだな」

そもそも彼女だつて歪んでいるのだ。気にしていることはないだろう。

「さて……つい音央お姉さんだけじゃなくてウイラお姉さんまで動くから言っちゃったわけなんだけど、ついでに今のうちに言っておいてもいいかな?」

「何を、だ?」

「色々、かなあ。さつきも言った通り私はお兄さんのことが好きだから一緒になりたいんだけど、そうじゃなくても多分耐えられると思うんだ」

「それは……多分、普通ならおかしいんだろうな」

「うん、おかしいよ。でも、私は耐えられる。もう一個言うと、お兄さんが滅びの道を歩んでいくとしても辛いとは思わない」

ヤシロはそう言うのと仰向けになって、一輝の顔を見る。

「私はお兄さんのことが好きだし、これから先一緒にいたいと思うし、言っちゃえば遺伝子もほしいと思う。でもそれ以上に、お兄さんがこれから先どんな道を歩んでいくのかに興味があるの」

「どんな道を?」

「うん。このままお兄さんがこの環境の中で生きていくのか、それとも自らが抱えるものに潰されて滅びの道を歩んでいくのか、もしくは……一族の役目を完遂して、真に英雄になるのか」

もはや、一輝はヤシロの発言に対して驚きもしない。ヤシロならそれくらいは知っているだろう、くらいのレベルになっているのだ。それに、滅びに対して敏感であるヤシロが『歪み』をその目で見ているのだ。その本質がなんであるかを見破ることなど、造作もない。

「とまあそんな感じで。私はお兄さんのことが好き。これは本当に本音なの。でもそれ以上にお兄さんの未来にとっても興味がある。それも、本音」

だから、と。一輝の顔に自分の顔を近づけていき……その頬にキスをする。

「お願いね、お兄さん。私にとっても面白い物語を見せて？」

「……俺にできるのは、俺が思ったままに生きることだけだぞ？」

「それでいいの。お兄さんくらい考えが普通じゃない人が思うように生きれば、それは十分に面白くなるから」

ニコツ、と。再び一輝の脚に頭を戻しながら笑いかけるヤシロ。その姿はとても幼女のものであるのに、しかし妙に大人びているようにも感じられる。実際の年齢は高いヤシロだからこそ感じられる魅力だろう。

そんなアンバランスな魅力。その笑みを真正面から向けられた一輝は、さすがにすこしばかりドキツとなる。彼にも少しくらいは恋愛感情のようなものが生まれ始めているのだろうか？

「あ、そうだ。返事の方も考えてはおいてね？」

「あ、ハイ……とりあえず、恋愛感情をもう少しで理解できそうなので、そうすれば俺にも恋愛感情が生まれますので……」

……大丈夫なのだろうか、これ。

本拠の守り

「あ、オハヨーー一輝さん!」

「あ、一輝さん来た!」

ヤシロと屋上でしばらく話してから。そろそろみんな起きるくらいの時間だろうと屋敷の中に戻り食堂に行くや否や、一輝は子供たちに囲まれた。ちよつと意外な反応に一輝は一瞬戸惑ったが。

「おー、元気だなーガキども。なんで朝からそんなに元気なんだ」

『ジャックさん!』

「あ、納得」

割とすぐになれた。そこまで気にしていなかったのが大きいのかもしれない。

「そうだ!一輝さん魔王を倒したんだよね!」

「隷属させるってどんな感じー?」

「魔王ってやっぱり強いの?」

「あー、魔王か……。どの魔王のことを言ってるんだ?隣のこの幼女も元魔王なんだけど」

一人で討伐しただけでも魔王は四人。そのうち隷属させたりしたのが三人だから、一輝としてはどいつのことを言っているのか、という話だ。まあでも。

「えつとねー、あの絶対悪の!」

「やっぱり、時期的にそれだよな……。アジィダカーハなー。アイツはいま本拠で執事やってる」

『執事!』

「オウ、執事。なんか妙にあの服装に合うし、主にリリに色々と習ってどんどん万能になっていつてなー。最近じゃもう『そこまでするの?!』ってレベルのことまでできるようになってる」

「いやうん、確かにあれはもう、原型がないくらいよね……」

驚きに染まる子供たちを面白そうに見る一輝の横で、音央が呆れたように呟く。今は特にメイドの仕事をしているわけでもなく客分として招かれているためか、普通に私服だ。今更ながらではあるが、ヤ

シロも私服（白ロリ風）である。

「つつてもな・・・仕方ないだろ。リリはアジさんに何にも臆さずに教えてくし、アジさんはそれをすぐに習得してくし・・・最近では菓子作りを習得しようとして頑張ってるしさ」

「アジさん、もうそろそろ習得しますよ？この間一緒に作りました」
「・・・まあ、兄様に関わってしまった時点であなつて当然かもしれないが」

そんな、関係者が聞いたら驚いてしまいそうな話。それを朝の一時に笑い交じりで話していると、鳴央とスレイブも食堂に入ってきた。二人もまた同様に私服であるが、スレイブのそれだけは鞄になる特注品だ。大人し目な鳴央にボーイツシユなスレイブ。このスレイブの服装については前にもっと女の子らしい恰好をさせようという試みがあつたのだが、結局この服装に落ち着いたようだ。

そして、まだ来ていないと思われるはずの湖札はすでに部屋に入つて子供たちとじやれている。さすがはぬらりひよんの力を持つ一族というべきなのか、それとも一輝のぶつ飛び具合に一番慣れているからなのか、特に話には入らずにいたわけだ。

「さて、と。アンタらもそんな入口で突っ立ってないで座りなよ。もう子供たちが朝食の準備はしてくれたから」

「あ、了解だ。えつと・・・」

「アーシャだ！そのネタまだやるのかよ!？」

「俺が飽きるか反応しなくなるまではやり続けるぞ。それが俺だ」

「どんなことでドヤ顔するな!」

・・・このコミュニケーションでいじつて楽しいのは彼女だけ。すなわち一輝がここにいる間主に苦勞するのは彼女ということだ。

止めてあげることができないけど、せめて合掌して上げることしよう。アーシャに、合掌。

とまあそんなやり取りがありながらも全員が席につき、朝食がはじまる。さすがにこれだけの人数で食べると騒がしくなってくるものなのだが。

「あ、そうだ。ウィル・オ・ウイスプのこれからについてなんだけど」

一輝がさらっとその話題を持ち出したことで、それどころでもなくなってしまうた。

「えっと、それって今話すの?」

「わざわざ後で全員集まるのを待つのも面倒だろ。だったら今決めちまった方がいい」

そう一輝が言うと全員が手を止めた。一輝が食事をしながらいいといっても聞く耳は持たなかったので、もういいやと再開してく。

「とりあえずヤシロから全部聞いたけど、〃ノーネーム〃の本拠に移ってもらうのがいいと思ってる。檻の中の妖怪を総動員すればすぐにも建物はできると思うから、それをしばらく待ってくれればいける」

「それは、ありがたいんだけど・・・本拠での立場は、ヤシロが言っていた通り?」

「ああ。子供たちは雑用に、ウイラもメイドになるはず。それと・・・アーシヤ」

「ん、アタシ?」

一輝に声をかけられ、自分を指さしてそう返すアーシヤ。一輝はその顔を見て一つ頷き。

「お前には、ギフトゲームの主権者関連の手伝いをしてもらうことになると思う。ガッツリか少しかはこれからお前がどうするか次第だけど、な」

「・・・アタシになった理由は?」

「ウチのコミュニティに主権者のノウハウがないのが理由だな。〃ノーネーム〃ではこれから主権者もやっていくことになるから、その辺の知識があるやつがいるかいはいかは大いんだよ」

「・・・こつちが世話になるんだし、そういうことなら主権者に回ってもいいんだぜ?」

「そこまではしなくていいよ。どうしたいのかを決めてくれれば、それに合わせて仕事を回す。そもそも主権者に回るのは俺なんだから、力技でどうにかしようと思えばできるしな」

はつきりとそう言われたためか、アーシャはそれ以上は何も言わなかった。言われてみれば確かに一輝ならどうにかできそう、という面もあるのだが。

「えっと、それは大丈夫なんだけど・・・」

「いいのか？子供たちの中にはいやな子たちもいると思うんだけど」

「みんな、それはちゃんとわかってるから。ただ、できるならこの本拠をこのままにしておくのは・・・」

「まあ、確かにここをほったらかしにはしたくないよな。というわけで、こんなギフトゲームを提案してみる」

一輝はそう言ってウイラに一枚の契約書類を差し出した。

『ギフトゲーム名 “この先進入禁止”』

・プレイヤー一覧 ウイル・オ・ウイスプに無断で侵入した者全て

・プレイヤー側勝利条件 主催者との一騎打ちに勝利すること

・主催者側勝利条件 侵入者の殺害

・備考 このギフトゲームに降参は存在せず、参加者の死亡

か主催者の敗北でのみ終了する

宣誓 上記を尊重し誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

ノーネーム所属 “鬼道^蛭一輝^尤” 印』

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

一輝の差し出した契約書類を見た “ウイル・オ・ウイスプ” の全員が絶句である。いやまあ、分からないではないのだが。

「この契約書類を進入しようって意志を持った人の前に現れるように設定して、ついでに門とか一部の壁とかに貼っておけば入ろうってやつはないだろ」

「いや確かに、主催者にアンタの名前がある以上入ってくるやつはいないだろうけど・・・」

「それにしたって、えげつない・・・」

さらっとこんなギフトゲームを提案してきたことに対して『えー』

という視線を向けるが、一輝はそんなこと気にもしないで食事を進めている。一部の子供たちは主催者権限によつて作られた輝く契約書類を見て目を輝かせているのだが、それはご愛嬌。憧れのようなものがあるのだろうか。

「それでもつて、入ってきたとしても俺の前に強制転移。それでバトル。なんともなるさ」

「まあ、でも・・・うん。確かにこれなら、本拠は守れそう」

「そゆこと。勿論ながら『ウイル・オ・ウイスプ』のメンバーは入れるから安心してくれ」

「なら、これでもいい」

「了解した」

ウイラから直接許可を得たところで、一輝は指を一つ鳴らす。その瞬間に彼が持っていた契約書類は消えてギフトゲームが開催された。「んじゃ、今後の方針も決まったことだし・・・明日になったら『ノーネーム』に戻ることにする。建物が出来たらまた連絡するから、簡単な準備だけはしておいてくれ。・・・つつても、俺の上層巡りが終わってから立て始めるから、まだまだ先になっちゃうんだけど」

一輝がその場にいる全員にそう伝えたところで、ようやく食事が再開された。ひとまず決まったのは、『ウイル・オ・ウイスプ』の『ノーネーム』への移動に、『ウイル・オ・ウイスプ』本拠の安全。珍しく何もなく平和なものである。

(真剣)

「それでは！第二回ガールズトーク（真剣）、イン、ウィル・オ・ウィスプ」をはっじめます！」

ワーパチパチー、とヤシロが盛り上がるのに合わせて音央と鳴央が手を叩き、スレイブは一つため息を漏らす。そしてこんな雰囲気に参加（正確にはヤシロによって強制連行）されたウイラはひたすら疑問符をあげている。

なお、（真剣）とついたのは別に真剣な話題でもなんでもなく集まったものが開催されているからだ。そちらについては本当にヤシロの気分で開催されたりしている。そして飛鳥や耀、黒ウサギ、リリなどの参加もあるものだ。話す内容は本当に何でもよく、どちらかというただおしゃべりをしながらお菓子を食べてお茶を飲む場となっている。

一方の（真剣）の方は、第二回という名称からもわかるようにこれまでに一回しか開かれていない。たった一度、収穫祭の時に開かれたものだけ。割と真剣なのだ。

余談だが、初参加のほすの湖札はとづくにこの空気になじんでいた。

「はい、まあというわけで集められたのはいいんだけどね。なんで集めたの、ヤシロ？」

「ウイラお姉さんが参戦するかもだから」

「……うん？」

知らなかった四名が一斉に疑問符をあげた。そして、ウイラはどう説明したものかとかかなり慌てる。だがまあ。

「——というわけで、厳密にはちよつと違うんだけどね」

「ああ、そう言う感じの……」

「それは、ちよつと複雑ですね……」

「いやだから！な、なんで私とその話題で呼び出されるんだ!？」

「うーん……」

そんな中でも一人だけ通常状態だったヤシロが説明したことでそ

の場はすぐに収まった。とりあえずスレイブの発言は「はいはい」といった様子で流して、話の再開に移る。

「とりあえず、なんだけど・・・ウイラさん。それって重要なことなの？」

「・・・えっと、どういうこと？」

「あ、うん。ごめん。確かに私の言い方が足りないですね。ただ、私^{鬼道}たちにしてみればそれくらい普通だから」

そう言われて納得した様子を見せたのは二人だけ。まだ細かい事情を知ってはいない三人は首を傾げたが。

「そっか、音央さんに鳴央さん、スレイブちゃんは知らないんだ」

むしろそこから湖札は誰が知っているのかを判断し。

「何を知らないの、湖札？鬼道ってことは一輝にもかかわること？」

「うん、むしろ分家の私よりも本家の兄さんの方が」

「ここまで話した以上、説明はするんだろうな？」

「もちろん。といっても、全部説明したら朝になっちゃうからざっくりと説明するけど・・・私たち鬼道の一族って、感情が一部欠落してるんですよ」

そう前置きをして、湖札は説明を始める。

鬼道の一族には、『自分の感情』であると断言できない感情が存在すること。

それは生まれつきその人にはやどらないものであること。

だから、鬼道の一族はその感情を『理解』し、そして『模倣』することで感情を得ているということ。

そう言ったことをとりあえず湖札が説明して、少しの間三人が理解するのをまち。

「えっと、まず湖札は何が欠如してるの？」

「私は、そうですね・・・細かい、別にどうなってもそこまで差がないようなのが数えきれないくらいと、あとは恋愛についてちよつとした常識が」

「常識、ですか？」

「うん。まあ生まれは一人っ子だったから何ともなかったんだけ

ど・・・鬼道の方の子供になつてからは問題が発生したかな。私にしてみれば問題でもなんでもないんだけど」

「いやだから、なにが・・・」

「血のつながった肉親に対してであつても、恋愛感情を抱いてしまう」
湖札はそう言ったが、別に他の者たちは・・・特に箱庭になじみまくっているヤシロにウイラ、スレイブの三人は反応を見せなかった。

そもそも、昔であればそんなものはありえたのだからこの反応は正しいのかもしれない。だがしかし。

「私たちのいた世界つて、時代的なものもあつてかそういうことがありえない世界だったんですよ。要するに、時代の流れと共に生まれた新しい常識というか感情というか、そんな感じなものが抜けてるんです」

「ああ、そういう・・・つてことは、湖札ちゃんはそのなりに大きな被害はないのね?」

「はい、幸いにも。さらに言えば欠落してる物の数に比例して強くなるので、本当に幸運でした」

私は、ですけど。そうつづけた湖札の言い方が気になつた人間は何人かいたようで、湖札に疑問の視線を向けた。

「あ、兄さんは三つの感情を除いて全て欠落してます」

が、これまたあつさりと湖札に言われて再び絶句する。

「それでもまあ、兄さんはちゃんと感情を理解して自分に模倣していますし、さらに言えば『個性』というものも理解したので独特の性格になれています。恋愛感情や性欲の方向が欠けていましたけど、それも音楽さんのおかげでそろそろできそうですし、そこまで気にしなくても大丈夫です」

その絶句の中で湖札が現在の状況を一方的に話して、勝手に終わらせた。

まるで、この程度を受け入れられないというのならさつきと手を引けどでもどうかのように話を終わらせた湖札は、そのままウイラに視線を向ける。

「ウイラさんは知つてたみたいですけど、私たち鬼道というのはそう

言う一族です。だからこそ、そうやって生まれてしまった感情だつて普通に生まれた感情だつて変わらない。そう考えると、別に何か違うものだとは思えないんです」

「・・・それは、そうだと思う。けど、もう少しちゃんと考えたいから」「そうですね。ならそれはそれでいいと思います。けど、その前に一つだけ。・・・ウイラさんは、そうと知って何かありますか？」

真正面から、そう問いかける。そして。

「・・・私は、そこはそんなに気にならなかった」

「そうですね。なら、私は何も言いません。しっかりと悩んで判断してください」

そう湖札がウイラに伝えたところで、このガールズトーク(真剣)は終了し・・・次の日の朝、一輝たちは“ウイル・オ・ウイスプ”を後にした。

え、えー・・・

一輝たちがウィル・オ・ウィスプに泊まっている間のノーネーム本拠。その武器庫。

「しかし、お前も物好きだねえアジィダカーハ。わざわざこんな武器しかないところに来るなんてよ」

『そう言うな、蚩尤。私としては対等に話せるものが少ないのだ』

そんな場所にいるのは二柱の悪神。共に一輝に封印され使役されている蚩尤とアジィダカーハ。本来なら下層の、それもッノーネーム“にいていい存在ではないのだが、まあそんなことはいまさらである。そもそも一輝自身が生粋の神霊である上に音央もまた神霊、ヤシロは終末論だ。

「ふーん・・・それで？何か話したいことでもあるの？」

『あるから来たのだが・・・その前に、気になることが出来た』

「なにー？怠いから手短にねー」

『では、聞かせてもらおう。一輝の記憶にある姿とはかなり違うのだが、どうしたのだ？』

まあ、うん。前に一度だけこの神が話しているところを思い出してもらえばわかると思うのだが、かなり変わっている。その姿もあの時はちゃんと伝承通りのものだったのに、今は『働いたら負け』と大きくプリントされたTシャツにジーンズを着た、容姿だけは中華系のイケメンであるその姿は、本当に残念なイケメンである。

「んー？怠いから」

『いやだから、なぜあの時は・・・』

「雰囲気って大事じゃん？」

即答である。もはやアジィさんですら絶句してしまったくらいに即答である。

「あの六十三代目と話した二回は結構重要なことだったしねー。神様として雰囲気は作らないとでしょ」

『それであれになったのか』

「そうそう。で、今はその反動でこうしてダラーっとしてる。あー、ビ

バグータラ生か・・・」

『せめて最後まで言わないか』

アジさん、もはやあきれ返っている。片手を額に当ててため息を一つついてしまっている。

こんなのが本当に自分と同じ『悪』の霊格を持つ神霊なのか。かつて箱庭に現れた蚩尤は魔王であったというが、それと同じ存在であるのか。あれか、『怠惰』という悪性でもつかさどっているというのか。「俺が殺された時だって、何かするのが面倒で手下に全部任せてたら五代目が来てさー。『神ともあろうものが惰性に走るとは何事かッ！』って言われて、そのまま大喧嘩の後に殺されたんだよねー」

『知りたくもなかった真実だな』

同じ神霊であつても。鬼道の一族に殺され封印された数少ない神霊であつても、ここまで大きな差が出来てしまうのか。そう言えば天逆毎もまた自分たちとは方向性が違ったということ思い出して、なんだか妙な納得をしてしまったアジさんである。

「それで？何が話したいの？というか、なんで僕？」

『ああ、それは・・・って、今一人称変わらなかつたか？』

「え、変わった？統一するのも面倒になったかな・・・」

『・・・もういい。お前に話に来たのは、私と対等に話してくれるものが三人しかいないからだ』

もう気にもしなくなったアジさんは、そう本題を切り出した。

「三人？一人はボクとして、他はだれなの？」

『ああ。一人はあの木の葉天狗だ』

「あー、確かにそう言うこと考えなさそう・・・」

求道丸。彼は相変わらずであるようだ。相手との立場なんてほとんど考えず、尊敬している相手であつても対等に話す。そう言う点ではアジさんにとつては貴重な相手であるように思えるが、だがしかし相談事には徹底的に向かない性格をしている。

「それで、もう一人は？というか、あの問題児三人組とか気にしなさそうな人いる気がするんだけど？」

『あの三人は、かえってどこか遠慮がある。私を殺そうと立ち向かつ

てきたときにはああも遠慮などなかったというのにな・・・』

「多分、六十三代目との殺しが合いが印象に残ってるんだらうねー」
『なんにしても、だ。そう言うわけであるの原典候補者や月の兎の末裔、キメラ、疑似神格の少女は遠慮がある。吸血鬼などはない方ではあるものの、あれは私に執事を教える時のみだな』

「・・・名前、憶えてあげなよ」

『今努力しているところだ・・・』

アジさん、どうやら名前を覚えるのは苦手なようだ。これからの努力に期待しよう。

「それは、結構意外だなー・・・あ、それじゃあと一人は誰なの？」
『ウム、ちょうどそのことで相談に来た』

アジさんはそう言うのと、ぐでつと床に横たわっている蚩尤に視線を合わせる。さすがにその状況でそのままの体制でいるのはあれだと思っただのか、体を起こして武器の上に座る。思いつき刃丸出しのものもあるのにそれで大丈夫なのかと思わないでもないが、まあ大丈夫なのだろう。アジさんも同様に武器の上に腰かけてるし。

「それで？相談って何なの？この大ダラケる軍神でよければお聞きしますよ、《絶対悪》様」

『いや、そこまで重いことではない。ただちよつと分からないことがあるのだ』

「分からないこと？何それ、千の魔術なんていうあだ名まで持つてるアンタに分からないことが、おれっちに分かるはずないじゃん」

『私のそれは技術というもの全てだ。こういう面ではそう役に立つものではない』

『どんなの？』

『うむ。・・・その者と話すことに妙な高揚を覚え、動悸は高まる。気付かぬ内にそのものを探してしまうほどなのだ』

「・・・え？」

かなり驚いている。あの蚩尤が、さっきまであんな態度だった蚩尤が背筋を伸ばしてしまう程度には驚いている。

「え、ちよ、マジで？その症状マジっ？」

『事実だが』

「じゃあ、それが何なのか分からない、つてのも?」

『事実だ。そもそも、相談に来たのに嘘をつく理由があるまい』

思いつきり断言したアジさんに、蚩尤はもはや絶句である。口を開いて、ポカンとしてしまっている。

と、そんな少し妙な空気が流れる中。武器庫をノックする音と共に。

「あの一、蚩尤さん。入っても大丈夫ですか?」

そんな、リリの声が聞こえてきた。ついでに、蚩尤の目の前のアジさんが一瞬ビクツと本当に注意していないとわからないくらいに小さくビクツとなった。

「……あ、うん。入ってもいいよ、リリちゃん」

「はい!では、失礼します!……つて、アジさん?」

何とも元気に、お盆と料理をもって入ってきたリリは、そこにアジさんがいるのを見て驚いた。

「どうしたんですか、アジさん。こんなところで?」

『いや何、神霊同士少し話をしていただけだ』

「あ、そうなんですね!」

なんだか楽しそうな雰囲気の二人。蚩尤はそれを見て、そしてさっきの話を思い出して一つの仮説を立てた。

《い、いやでもまさか……》

さすがにそれを信じる事が出来ないのか、蚩尤は他の可能性を考えるもその他の可能性が出てこない。そして。

「あーつと、アジ!ダカーハさん?」

「あ、この人の状態の時はアジさんっていうんだそうですよっ」

「あ、そうなんだ。ありがとう、リリちゃん。それでさ、アジさん……

一つ質問、いい?」

『なんだ、蚩尤』

「えつと、さつき言ってた子つてこの子?」

『そうだが』

「え、え……」

ダメだ、これはあの仮定が正解だ。この人まだ全然気づいてないけど、あの仮定ガチだよマジかよぶざけんなよこれ軽く事件だろ・・・そんなちよつと暴走気味の思考をどうにか押さえ込んで顔をあげるよ、目の前にはリリの顔が。

「えつと、どうしたのリリちゃん？」

「あ、いえ。頭を押さえていたので、どうかしたのかなー、と」

「あ、ううん。大丈夫、問題ないよ」

どうにかして平常心を装う蛭尤。リリはそんな様子に安心したような表情を見せると、お盆を渡した。

「あの、これ！食堂に食べるには来られないとのことだったので、持ってきました！」

「あ、そうなんだ。ありがとう。でも、俺達には食事必要ないよ？」

「でも、おいしいとは感じるんですよね？だったらぜひ食べてくださいー！」

そこまで言われて受け取らないわけにはいかず、蛭尤はそのお盆を受け取った。そしてそこに乗っている味噌汁のおいしさに少し目を見開いてから。

「アジさん、今日この後はどうするんですか？」

『レティシアにはいくつか力仕事を任されているな』

「それなら、それが終わったらいつしよに晩御飯の準備をしましょう！今日は和食なので、アジさんも興味あるんじゃないかと思って」

『うむ、それは興味がある。早く済ませて向かわせてもらおう』

目の前の、狐少女と絶対悪の三頭龍が仲良く話している光景を見て、再び目を見開く。

《ふむ・・・確かに、ほとんど全員におびえられてる中こうして俺たち神霊にもわけ隔てなく接してくれるなら、そりゃ多少は来るものはある。格別の加護与えたいなー、とは俺も思ったわけだけど・・・アジさんほどは、えー・・・》

・・・なお、作者は蛭尤に完全同意である。どうなるのだろうか、このふたりは・・・

biwanoshin、オシロイバナコラボ 破綻者と歪狂者。その邂逅の果てに

邂逅

「んー・・・ま、ここならいいかな？」

「ええ、ここまでこれば大きな被害が出ることもないでしょうし、許可も出ています。問題ないと思いますよ。」

一樹とすれイブの二人がそんな会話を交わすのは、森の中。箱庭の外壁の外側の、『この辺りの木ならどれだけ切り倒しても問題ない。誰かいても罪人だから気にしなくていい』と珍しく前もって階層支配者の許可を取ってからきているその場所。こんな周りに木しかない場所は何をしようとしているのか。

二人は場所の確認が済むとどちらからともなく手をつなぎ。

「んじゃ、やるか。キツかったら言ってくれ」

「あまりに懐かしく気にならないかもしれないかもしれませんが・・・わかりました、兄様」

そして、行動を開始する。

|| || || || || || || ||

「・・・なあ、これってどういう状況なんだろうな」

「僕に聞かれてもわからんで・・・」

「だよな・・・」

とはいえ何も考えないわけにはいかないから、状況を自分の中で整理してみる。

町を歩いてたら目の前に場違いな鳥居があった。

二人でマナー通り端を通ってくぐった。

なんか森の中にいた。

うん、わかんねえ。何一つわかんねえ。

「せやから僕言ったやん、神道の類なんか関わるだけ損なんやからや

めとこ、って」

「いやこれ神道関係ないだろ・・・」

「そっち系のやつの主権者権限に巻き込まれたとか」

「だとしたら契約書類がどこかにあるはずだし・・・」

いくら考えても答えは出てきそうにない。しかしこんなわけのわからん状況で何も考えずに行動するのは避けたいし、蛟劉も階層支配者の仕事上こんなわけのわからんものを見過ぎすわけにもいかない。何かないかと考えて・・・

「来るッ」

「わかってるー!」

反射的にこれまでつないでいた手を放して、それぞれ左右に跳ぶ。一瞬遅れて俺たちが立っていたところに巨木が倒れてきた。誰がやりやがったのかと根元のほうを確認するが、そこにあるのは恐ろしいほどになめらかな断面のみ。

「次くるでー!」

蛟劉の言うとおおり、別方向からどんどん巨木が倒れてくる。その数、合計四本。最初の一本も合わせれば計五本のまったく別の場所に生えてた巨木が倒れてきたことになる。姿の見えない何者かの手によって切断されて。

「そっち、誰かいたか!?!」

「おらんで!そっちは!?!」

「こっちもだー!」

二人で固まるかどうか考えて、すぐにやめる。固まらずに広い範囲を気にしたほうがよっぽどいいだろう。なにせ、固まっていると二人まとめてつぶされかねない。

しかし、なら犯人はどこにいる・・・

「――流剣術、面の型六番」

と、その時。

最初のほうは聞こえなかったが、後ろから厳かな声でそう聞こえてくる。そちらを見るとそこにも巨木があり、陰に隠れて相手の顔は見えないが、両手剣と思われる剣先が・・・

「千本針！」

「ヴァーくん！」

その名前と面の型というフレーズに嫌な予感を覚え反射的にヴァーくんを元の大きさに戻す。次の瞬間名前の通り巨木が大量の針になってとんできたが、すべて燃え尽きる。その間に相手の姿を確認しようとするが、すでにそこにはいない。

つまり、あれか？こいつは巨木をでかい両手剣で切って縫い針くらの木の針を大量生産。全部こっちに放ってからみられる前に移動した？

「面倒なギフトもってそうだな・・・」

「せやね」

「いいのかよ、こっちに來て」

「今のでわかったけど、こっちがどう動いてもまとめて倒せるやん。せやったらかわらへんよ」

まあ、確かにその通りだ。というか、この敵間違いなく強い。これだけ無茶苦茶な剣技が使えるんだから、普通に直接戦っても強いはず。大概の相手とは一対一で戦っても勝てる自信があったこと、このバカに戦っても問題ないことを証明するとか考えたりしたのは間違いない早計だった。

「それで、どうする？」

「せやね・・・とりあえず、この邪魔な木を一掃しよか」

蛟劉がすでに二本の棍を持つてるのを見てグローブをつける。

それで木を片っ端からへし折るつもりなのかと思っただが、多分そんな面倒なことじゃなくて・・・

「やっさと出てこいやー」

予想通り、水を操って周りの木を次々と切り倒した。

一本一本倒していくのでは相手はその間に次から次へと移動すれればいいだけ。だが、一気に倒してしまえば移動できる範囲から移動先を奪えるはず。

で、そうなれば相手の取る行動としてはこっちに向かってくる・・・！

「ッ!」

と、その可能性をもとに考えていたら俺達に向けて水が飛んでくる。それも、ただ飛んでくるのではなく明らかに操られて・・・

「二人目、っと」

その一瞬。つい一瞬前に蛟劉が操っていた水が敵に回った一瞬の間に、蛟劉が首元に刃を押し付け、地面に倒されるという状況に。それを見て、それ以上される前に倒そうと殴りかかり・・・

「・・・って、あれ? オマエ・・・」

「いや、それはごつちのセリフだから・・・」

相手の顔を見て、踏みとどまった。まあつまり、うん。

「こんなところで何やってんだ、夜子?」

「ごつちとしてはここがどこなのか教えてほしいんだが、一輝」
思いつき知り合いだった。

＝＝＝＝＝

「ふうん、つまりなんか鳥居があったからくぐって見たらごつちにいた、と」

「そういうことだ。よくあることなのか?」

「そうでもないんじゃないやねえか? 俺もまだ一回しか経験ねえし」

「・・・ちなみに、その時も別の箱庭に?」

「ああ、別の箱庭にいたな」

さすが一輝というべきか、そこに誰かいたら殺してもいいといわれていたから思いつき殺しにかかったのに、知り合いだとわかったとたんにこれである。ここまでの間に一切謝っていないというのだからいっすずい。そしてその状況でこうして普通に話しながら歩いてしまっている辺り夜子もおかしい。

「えっと・・・つまり、二人は元々知り合いつてことなん?」

「あー・・・二度あることは三度ある、の二度目」

「なるほど納得」

この説明で理解できてしまったらしい。というかこのたとえにな

るってどんだけ別世界の人が来たのだろうか。

「因みにだが、俺が鳥居をくぐって別の世界に行ったときは勝手に戻るのを待つしかなかったな」

「今回もそれだと?」

「俺の時と同じ現象ならそうなる。・・・ひとまずこっちの『ノーネーム』に来るか?前世話になったわけだしそれくらいの提供はさせてもらうが」

「あー・・・悪いけど頼む」

「あいよー。二部屋準備しとくよう連絡しておく」

一輝がそう言いながらDフォンを取り出して電話を始めると、夜子の目が見開かれた。箱庭で電話出来ていることが驚きなのだろう。そして、その気配を察したのか一輝の腰に吊るされている剣がしゃべりだす。

「念のために言っておくと、あれは白夜叉に作らせたギフトだ」

「あ、そうなのか・・・ってか、しゃべれるんだな」

「ん・・・?あ、戻ってなかったか」

と、そう言いながら人型になるスレイブ。しかしまあ無機物の類が人型になる程度のこととは箱庭では珍しくもなんともないので特に驚いた様子はない。

「あれは隷属の契約用だな。私を始め兄様に隷属している全員が持つていて相互連絡が可能だ」

「何それ超便利」

「なあ、その技術教えてもらえへんかな?いつでも十六夜ちゃんと連絡取れるとかかなり魅力的なんやけど」

「隷属の契約を利用している、ということしか知らん」

バツサリと切り捨てるスレイブ。おそらく、この二人に興味がかけるほどでもないのだろう。

「よし、二部屋準備するようにはいったからこれで大丈夫だろ」

「・・・なあ、いいのか?別に俺としては蛟劉と相部屋でもいいんだが・・・」

「カップル同じ部屋にしていちやつかれても迷惑だからな。言つとく

が、マジで迷惑になるから極力控えるように」

「お前は俺を何だと思ってるんだよ!？」

「何かあったら蛟劉が思いっきりイチャつきだしてそれに流されるタイプのやつだと思ってる」

「あ、うん・・・」

思い当たる節がないわけではないのだろう。若干納得した様子の夜子はそのまま黙ってしまった。そう言うわけなのか、代わりに蛟劉が話に参加してくる。

「それにしても、まあ何度経験してもおかしい体験やなあ・・・別の箱庭なんて、本来あるはずないんやけど」

「つつても、今まさに別の箱庭にいて別の箱庭の住人が目の前にいるわけだからな」

「なんでそんなもんがあると思う?」

「知らん。が、ある以上はあるんだろ。こんなもん、物理の証明と同じ扱いでいいんだよ」

物理という分野において、なんでそうなるのかが示せなくても実際にそうなっている状況を見せることが出来れば証明になるのです。

「なんや、テキストに生きとんなあ・・・」

「分からないことに対して考える必要もないのに考えても、って話だろ」

「たしかにそやな。なら、別のこと質問してもええかな?」

「いいけどそろそろ外壁の中に入るからそんな時間ないぞ。あと、この辺のどれか被って顔隠せ。階層支配者が外から帰ってくるとか無駄に騒ぎになるんだよ」

一輝がそう言いながら空間倉庫を開けて色々取り出す。狐面や般若面などのお面もあったのだがそれを全て当然のように避けて、最終的にフード付きのオーバーコートを着る蛟劉。その状況に一輝は一つ舌打ちをする。

「で?質問ってのは?」

「その子、なんなん?人型になれるってことは何かしら凄い武器やと思うんやけども」

「だとき、スレイブ」

「はぁ・・・ダーインスレイヴだ」

蛟劉、若干の絶句。しかしまあ夜子はある程度一輝について覗いたためかそこまで驚きではないのか、入れ替わりで参加してきた。

「魔剣がこんな可愛い女の子になるんだな・・・ってか、なんで猫耳メイド？」

「白夜又特製のメイド服を渡したらそうだった。にあってるからそのままにしてる」

「確かに似あつてはいるが・・・」

スレイブ、もう慣れてしまったのかそんな夜子の視線にも反応なしである。なれって怖いね。

と、そんなどーでもいい会話をしているうちに“ノーネーム”の本拠にたどり着き・・・

「ん、ああマスターか。なんか知らん者どもがいたから捕まえてみたが、知り合いだったりするか？」

「知らないやつら？」

「ああ。俺達はノーネームのメンバーだよ！』とうるさかったので渡されていたガムテープで口を封じて縛り上げて物置に放り込んでおいたんだが」

と、褐色のイケメンにそう伝えられる一輝。すぐ後ろにお客様がいる状況でどうしたものかと考えた一輝なのだが、ふとある可能性に気付き。

「どの倉庫に放り込んだのか、案内してくれ」

「うむ、こつちだ」

と、その男性に案内をさせる。一輝は何の説明もせずにお客様二人にもついてくるように身振りで示してから男の後ろについていく。そして、その物置にたどり着くと戸を開けて・・・

「あ・・・」

「やっぱり、オマエのところの知り合いか？」

「うん、まあ、そうだな、うん。・・・なんかスマン」

「気にすんな。急に異世界に放り出されたらこうもなる」

一人は、緑の髪に水色のYシャツ、白衣の男性。
一人は、黒い短髪に狼の耳としっぽを持つ青年。
一人は、青黒い髪に水色の瞳の青年。
とかまあ書き上げてはみたが、要するに、だ。
夜子の世界の「ノーネーム」の同士たちであった。

決闘

「なあ一輝。一つ質問だ。・・・あの執事、何者？」

「我がノーネームが誇る万能執事さんだ。掃除洗濯炊事その他諸々なんでもござれ。なお、一番得意なのは荒事な模様」

「いやそれなんも説明してへんからな・・・？」

と、順番に拘束を解かれていく夜子ズノーネームの三人を見ながら話している一輝たち。三人の正体を知る二人にしてみればあれを一人で片す執事など何者なのかという話なのだが、一輝にしてみればこの執事にどうにかできない相手という方がおかしい話なのだ。こんな反応になってしまっても仕方ない。

「はあ、酷い目に会った・・・にしてもそうか、別の箱庭だったのか、ここは」

「お前らからすればそうなるな。悪いけどまだ増えるとは思ってなかったからしばらくこの辺で待っててくれ」

「あ、なんかスイマセン。こちらから突つかかったのに滞在中の諸々までお願いしてしまって・・・」

「気にすんな、ソイツ一回こっち来て遊びたい放題（俺で）遊んで帰ってったから」

「ねえ待ってそれ知らないんだけど」

めんどくさいため、ひとまず真哉の発言はスルーである。

そして、そのまま一輝と異世界組の簡単な自己紹介のみ済ませる。が、正直描写してもつまらないので割愛。なんだか流したり割愛したりと手抜き感を感じた君。きつと勘違いだ。

「さて、と・・・暇だし、ちよつと手合わせしようぜ夜子」

「待てオイコラちよつと待て。暇だからっていきなり手合わせするかよオマエは」

「だって暇だし」

仕方ない、一輝だもの。

「で、マジで始まるんだもんな・・・」

「まあ、せっかくの異世界交流なんだ。代表同士のギフトゲームくらいじゃないと嘘だろ」

と、一輝のテキトーなノリで提案された手合わせは黒ウサギ審判、その他諸々観客のギフトゲーム形式で執り行われることとなった。

「では、不肖ながらこの黒ウサギが審判を務めさせていただきます。

一つ、相手の肩に触れた方の勝ちとする。

一つ、ギフト、使い魔などの使用には基本制限なし。

一つ、周囲への被害を考え、湖札さんの張る結界を壊さないこと。

一つ、勝った方は負けた方へ一つ命令権（のようなもの）を得る。

以上を承知いただいたうえで契約書類へのサインをお願いします。

特に三つ目。いいですね、特に三つめへの同意ですよ!」

「なあ一輝、黒ウサギはこっちの世界でも苦労してんのか?」

「や、だって俺がいるし」

「悪い、聞くまでもなかったな」

南無黒ウサギ。きつと君の胃に穴をあけることはないさ。

と、そんな間に双方ともにサインを終え、湖札によって結界も張られる。いつでも始められるだけの状態が出来上がり。

「それでは、始め!」

黒ウサギのあいさつと同時に、どでかい水素爆発が起こった。

『・・・・・・・・』

「ん、決められなかったか。残念」

爆心地から、ゆらゆらと立ち上がる影一つ。

「よし分かった。よし分かった、分かったぞ一輝。前に会った時は全く勝てないと思ってあれだけおちよくられても挑まなかったけど、もう知ったことか」

と、それは若干ボロった服に、乱れた髪。しかし傷一つなく、笑みを浮かべる夜子の言。そして、その手に乗るのは一冊の書物。

「ちよ、十六夜!?それはさすがにアカン、喧嘩で使うのはアカンて!」
「大丈夫だって蛟劉。開幕同時に水素爆発喰らわせてくるようなキチ

「ガイ相手なんだ、ナニヲサレテモモンクハイウマイ」

「『十六夜!?!』」

その書物の真価を知る異世界組四人は悲鳴のような声を上げるが、一輝はむしろワクワクしてきている。そして十六夜は若干キレそう
で怖い。

「再現、^{タワル}覇者の^{ナフ}光輪」

訂正、たぶんこれキレてる。しっかりとキレてる。キレツキレである。異世界に來たせいかわ封印が解けてしまっているのをいいことに思いつきり使ってきている。

そして、それをさも当然のように火取り魔を召喚して消し去った一輝を見て、一周回って冷静になった。もはや一輝相手に一々気にしても仕方ない。そんなどうしようもない現実を再確認し、そして。

「来て、ヴァークン」

使い魔使用許可、からこれも使って大丈夫だろうと双頭龍を呼び出す。呼び出されたそれは瞬時に本来の大きさになって一輝に襲い掛かるが、一輝はそれをかわし、かわし、かわしてかわしてかわし続けた。

「うっひゃー、双頭龍召喚とかマジかよ。よくこんなの持つてるなオマエ」

「俺の、ってよりは再現なんだけどな。さすがにアジィダカーハのそれをそのまま出せるわけねえだろ」

「それもそうか、っと」

と、そんなことを言いながらも夜子は夜子で青龍偃月刀で一輝に切りかかり、一輝はそれと獅子王で切り結ぶ。が、さすがの一輝も刀の腕はあるとはいえヴァークンと夜子の二人を同時に相手するのは難しいものがあるのか防戦一方になり、

「だークソ、メンドクセエなオイ」

「知るか、お前が悪い。ってかさつきと本気出せ」

「え、出しているの?なら出すけど」

「よし、ぶった切る」

思いつきり殺しにかかる夜子の剣を弾き、ヴァークンを踏み台にし

ていったん距離を置くと。

「我が百鬼より出でよ、アジ君」

掌の上に、蜥蜴を召喚する。

「……やれ、ヴァーくん」

そして、それを見た夜子はふざけているものとみてヴァーくんを特攻させる。

「んじゃ、あれ止めてくれアジ君」

『蜥蜴に対してあまりにも無茶ではないか？』

「完全開放、許可」

『む、そうか』

そして、一輝は向かってくるヴァー君に対して掌の上の蜥蜴を投げつけ……それが、彼の三頭龍『アジッダカーハ』へと変わった。

「……は？」

当然、それを見た異世界組の反応は『驚愕』ただ一つである。夜子のようにギフトでの再現ではないかと最初は疑ったが、しかしそれにしてはそこにあるのがリアルすぎる。説明できないが、再現では絶対に現れない何かがある。そして何より。

『お手』

そこには、三頭龍の右手に右手を乗せる双頭龍の姿が。

『おかわり』

そこには、三頭龍の右手から右手を下して左手を乗せる双頭龍の姿が。

『聞き分けがいいな。それ、取って来い』

そこには、ビクビクしながら三頭龍に撫でられ、夜子の背後へと投げられた骨を全力で鳥に走る双頭龍の姿があったのだ。そこはつきりと表れている力関係を見て、まだそれが実物ではないとなぜ言えようか。

「……なあ一輝、聞くまでもない気がするけど、あれ何？」

「彼こそは箱庭を恐怖のどん底に叩き落とし、暴虐の限りを尽くした絶対悪の元人類最終試験、アジッダカーハさんです」

「や、うん。まあやっぱりそうだよな。……何でいるの？」

「俺が殺してゲットした。我がコミュニティの誇る万能執事さんです」

「さっきの・・・そりゃあの三人があっさり捕まるわけだ」

「ま、そう言うことだ」

と、骨を取ってきて再びびくびくしながら頭を撫でられているヴァーくんと頭をなでるアジさんを並んでみる夜子と一輝。もはや驚きのレベルが高すぎて他のことに意識がいかないのか呆然としている彼女の肩をポンと叩き。

「ま、確かに双頭龍はいい手だったかもしれねえけど、相手が悪すぎたな」

「ホントそれな」

そして、なんとも微妙な流れで勝負が決まった。

交流 ①

「なあ、改めて言わせろ。どうなってるんだこの『ノーネーム』は」
「それはこっちのセリフだと思っぞ」

なんともグダグダつと終わったバトルの後、とりあえず各人に準備された部屋へ各々移動したり他で遊んだりしている中、双方で諸々話しあおうということで一輝と夜子の二人は一輝の部屋で茶を飲んでた。前回の逆みたいなものだ。

「嫌だつて、ノストラダムスの大予言にティターニア、神隠しそのものにダインスレイヴだろ？」

「お前の方だつてさっきのフェンリルの兄妹がいる時点ですでにだろ」

「否定はしない。だが、アジールダカーハがいる時点でもうそんなの吹っ飛ぶ」

「やべ、否定できねえ」

所詮、どっちもどっちとか言うやつである。

「さて、と。それじゃあ簡単に伝えとくが・・・その一。本拠内でのいちやつき禁止」

「俺に死ぬと申すか。つてか2回目だぞそれ」

おかしい、夜子ちゃんこんなキャラじゃなかったはずなのに。

「理由としては単純明快。①ウザい。②子供たちの教育上よろしくない。③気まずさを考えろ」

「一輝がまともなことを言ってる、だと・・・!?」

「お前が俺のことをどう思ってるのかはよくわかったけどな。まあ何にせよ、②を一番の理由だと思っと思ってくれ」

ここまでいわれれば、さすがのバカカップルでも気を使う。というかそもそも、さすがにこの状況でいちやつきだしたら精神を疑われるというものだ。

「その辺についてはウチのコミュニティ唯一のカップルも気を使ってるからなあ。全員の共通の見解だ」

「そいつら、よく耐えられるな・・・」

「本人たち曰く、『そういう関係にはなったけど、変わるのも違和感』だそうで」

他の箱庭に比べ、ずいぶんとあっさりしているものである。なお、純100パーセントで作者の趣味です。

「あとはまあ、暴れすぎなければ特に問題はねえぞ。何かあったらガキどもかメイド、執事組に聞いて来れば何とかなる」

「・・・因みに、アジィダカーハも？」

「あいつはその方面についてレティシアに次ぐ立場だ。問題ない」

「お前のせいで悪影響出てねえか？」

「あれは元々だと信じたいなあ・・・」

やはり、他の箱庭の住人から見てもアジィさんの様子は異常らしい。

「そういや、あの後何か面白いこととかあったのか？こっちはこないだそっちにいつてからそんなにたつてねえんだけど」

「あー・・・アジィダカーハ倒して、その後も話すようなことじゃないが色々あって・・・今は彼氏と長期でギフトゲームしてる」

「何それ超興味ある」

「ただの喧嘩だよ」

面白そうな匂いを感じ取って一輝が食いつくが、夜子は話そうとはしない。そもそも完全に個人の問題なのだから、ただでさえ異世界の人間に対して話すような内容でもないのだが。

「なーんだ、つまらん」

「テメエ、他人事だと思いやがって・・・そういうお前の方こそどうなんだよ？ちゃんと返事したんだろうな？」

「あ、それまだ。なんなら追加来た」

「マジでクズだなオマエ」

「最近、人間的クズのほかにそういう言う方向も増えてきてんじゃないかという悩みがあつてだな・・・」

遠い目をしているが、夜子には今はつきりと分かった。少なくともその方向性では悩んでいない、と。

「そーゆーわけで、そんな感じでよろしくな」

「あー・・・まあ、世話になる以上それくらいはな」

「なあ、ホントに君のお兄さんと一緒にしといても問題起こらへんの？」

「大丈夫ですよ、兄さんですし」

「僕、まだその領域には至れないんやけども・・・」

「この箱庭においては最強の一言である『一輝だから』も、異世界人にはまだ伝わらないようである。悲しい。」

「それより、何か聞きたいことがあるんじゃないんですか？それでもなければわざわざ仕事中の私のところには来ないでしょうし」

「あー・・・ま、せやな。さつき一輝君には聞いたんやけど、今回みたいなことって前にもあつたんやろ？」

「あつたらしいですね。私はその時は関わってないですけど」

「それについて、何か調べてたりしてないん？」

そう、蛟劉が、この蛟劉が彼女が男と二人きりになっているという状況にもかかわらず別行動をしているのはこの質問のためだ。ただそれを聞くだけであれば他の相手でもいいのではないかと考えるかもしれないが、今回の件には『鳥居をくぐる』という動作が発生している。であれば、神社にかかわりの深いものに聞くとというのがベストな手段だろう。

「んー、そうですねー・・・一応、私と兄さんとで簡単には調べてあります」

「何か分かったんか？」

「ほとんど何にも、ですね。唯一、この世界移動が何者かの主権者権限ホストマスターによるものである、ってくらいです」

「主権者権限・・・つまり、何らかのクリア方法がある？」

「クリア方法なのか、もしくは異世界とのかかわりというのは一過程で、ゲームクリアの条件の前段階なのか・・・その辺りはまったくわかってないんですけどね」

お手上げです、と掃除道具を持った両手を上にあげて見せる湖札。

だが蛟劉はその姿はみずに思考を重ねている。

「せやったら・・・他の主権者権限で何らかの反応を出したりはせんのかな?」

「そう、ですね・・・出さないことはないと思いますけど、正直あまり進んでやりたくはありませんね。ゲームルール同士がどんな干渉をするのかも怖いですし、蛟劉さんの場合同じ主権者権限をこちらの蛟劉さんも持っている可能性があります。そんな状況で軽はずみに使えばどうなるか・・・」

「確かに・・・前例がないことだけに、何が起こるか分かったもんやないな。そんなら、君のお兄さんの主権者権限はどうなんや?他の主権者権限を任意に解除できるすぐれもの、って聞いたるんやけど」

「元の世界に変えられる可能性とこの世界に残ってしまう可能性がありますが、問題はありますか?」

「問題しかない気がするなあ・・・」

八方ふさがり、というやつだろうか。今ここで起こせるアクションはない。

「まあ、兄さんが別の世界に行ってしまった時はテキストに過ぎずして1個蹂躪的なことをしたら戻ってきたって言うてましたし、気軽に考えていれればいいと思いますよ?」

「その気軽さ、いつそ羨ましいわ・・・」

「考えるな、感じる。ってやつです」

「のんきやなあ・・・」

このままで大丈夫なのだろうか、と。そう気になってしまいう蛟劉であった。

交流 ②

「……………何もしないのって、案外暇だね」

「骨でも投げてあげよっか？」

「あれ、今思いつきり犬扱いされた!？」

「狼でしょ?なら犬と同じだよ、ワンお兄さん」

「あー、なるほど。同じイヌ科だね!」

「そうそう、ワンワンお兄さん。私もよく使い魔っぽい立場の狼召喚してフリスビーとか骨とか投げて遊んでるし」

「狼に何やらせてるのさ!？」

ちよつと会話が長めに続いたが、場所も人も変わってヤシロとフェンリル、場所はノーネームの無駄に広い庭っぽいところ。面白くなる気配を感じて仕事をとつと終わらせたヤシロが散歩していたら見つけて、そのまま一緒にいる、という流れだ。

「って、あれ?やっぱ狼にやらせるのおかしいよね!？」

「気が付くの遅いねー、ワンちゃんお兄さん」

「バカにされてた!?!というか現在進行形でバカにされてる!？」

「うん」

「うわああんっ!幼女がいじめるー!!」

あ、フェンリル泣き出した。これが北欧神話においてあの主神であり知識大好き変神^{へんじん}であり軍神であり嵐の神でもあるオーディンを喰ったというのだから、北欧神話大丈夫だったのだろうか。……………あ、各家を『信仰してくれー』って言いながら回ってたことになってる時点で手遅れでしたねハイ。

「とまあワンチャン弄りはおいといて」

「もはや、もはやお兄さんという敬称っぽいものすら消えた……………なに?」

「んー、情報収集みたいなものかな?なにかこっちに来る時、感じたものとかない?」

と、ヤシロはどこから取り出したメモ帳を片手にそう尋ねる。今の状況としては結構サラツとしているのだが、原因不明なうえに帰り

方すら分からない異世界転移、その上主権者権限が絡んでいるのだ。今後何かあった時のためにも、情報を集めておきたいのだろう。だが、

「んー」

「ほらほら、なんでもいいよ?」

「確か、鳥居をくぐって」

「くぐって?」

「ぴかっとなって」

「なって?」

「こっちにいた」

まあ、うん。つまり、ですネ。

「使えないなー、このワンワン」

「バカにしてるよね、それ!? ねえ!!」

涙目になってるこのワンコ、ちよつとおバカかもしれない。

「あ、暇なら農園手伝って来たら?」

「うう・・・そうする・・・」

満面の笑顔で「バイバイ」と手を振る金髪少女と、背を曲げてちよつと肩を落とし、トボトボ歩く黒髪犬耳青年の姿が、そこにあった。

・・・あ、狼耳か。

|||||

「うーん・・・異世界のノーネームといわれても、結局ふだんみてるものとかわからないだよなあ・・・」

と、そんなことをボヤきながら廊下を歩く男が一人。

基本自由にしてていいといわれたが、なにやら部屋に向かった夜子の方へ行くわけにはいかず、蛟劉と一緒に行動とかケンカして迷惑をかける可能性しかない。さすがにアジさん相手にする気にはならないので(当然である)どうしたものかと考えているうちに一人になり、ならもういいかと散歩中なわけだ。

と、そんな感じで意味もなく歩き回っていると前方に人を見つけ
る。はてどうしたものかと考え、自分の世界にいない人と関わるのも
面白そうだという判断に。

「やつほー、猫耳メイドさん!」

「.....」

「ちよ、いきなり切りかかっておいて何も言わずに仕事する!」

『さ』のあたりで手刀をふるわれ、髪がはらり、と少し落ちる。そして
それから誰だったのかを確認したその猫耳メイドさんことスレイブ
はしれつと仕事に戻った。

「するだろう。ゴミが増えたんだからな」

「や、増やしたの君・・・や、うん。もういいや」

スレイブにいつても無駄、と言うことを察したようだ。

「で、何か用か?迷ったなら誰か案内を呼ぶが」

そして、このまま無視していても無駄なのではないか、と何かを察
したスレイブはスレイブで抱えていた野菜入りの箱を下し問いかけ
る。

「あ、うん。暇だから、どうせなら女の子にとって何もなかったかのよ
うに立ち去らないでね!」

スレイブ、即決である。とことん一輝意外には興味がない子なの
だ。

「はあ・・・黙れ、それ以上下らないことで仕事の邪魔をするなら、首
を落とすぞ」

「おーつと、それは勘弁。でも俺鳩だよ?希少種だよ?」

「希少種の変態など絶滅すべきだろう」

「自分で言うのもあれだけど全員が全員ではないと思うよ!」

頑張れ天夜。スレイブはボケじゃないけど、天然でずれてるんだ。
「それにほら、毒あるから気を付けた方がいいって。全身毒だよ、ぶつ
ちやけ」

「そうか、だが私は無機物だ。金属の塊が毒死とか、それはただのギヤ
グだろう」

「.....あ、うん。そだね」

見た目人だけど、実態は別のもの。そう言う例を他に知っているのか、天夜は案外サラッと受け入れた。箱庭では珍しくない、というのも理由の一つだろう（二度目）。

「あ、でもほら。君の主さん？のお客さんだよ、一応。さすがに殺すのはマズいんじゃない？」

そして、どういう理由ならば引つ込むのかという好奇心がわいてしまった。その為、色々と探ってみる。今回はそこそこ本命で、『主に迷惑がかかる』というネタだ。

が、

「たとえ客塵であつても、セクハラでもしてきそうな害鳥だ。に、一輝様はまず何も言わん」

「ちよつとまつて、それはさすがに待つて」

はつきりとした断言にさすがに慌てた。というか色んな意味での危機感を感じた。

「え、そう言う系？殺しオツケー？」

「さすがに親しい相手は怒られるでは済まないだろうし、あとが面倒な相手は「えー」と言われる」

「・・・ちなみに、俺の評価は？」

「異世界人だし、どうとでもなるだろう」

「・・・」

敵対しないようにしよう、極力。それをはつきりと学んだ。

「しかし、無機物、無機物か・・・」

「だからなんだ。まだ下らないことを言うようなら斬るぞ」

「あ、うん。たぶんマジで斬られるだろうなー、つてのは分かったから」

大人しく切られることはないだろうが、かといって殺し合いを自分からしようとは思わない。と言うか人間そんなことは普通考えない。よっぽどのマゾか戦闘狂いくらいである。

さて、そうであれば何をしようとしているのかと言うと・・・まあ、うん。

「それにしては、結構感情豊かじゃない？」

ほれぼれとするじゃねえか」

「なんか気軽そうに言つて、ますけど・・・いいん、ですか?」

「あー、別に口調とか気にしなくていいぞ。性別違うつつてもあれと俺似てるし、色々面倒なんだろう」

「・・・はあ、んじやえんりよなく、これくらいで。で、それ高くは?」

「俺が暇つぶしに高そうに見えるようにやすい材料使つて作ったやつだから問題ない」

「色々やつてるなあ・・・」

実は暇つぶしでもなく一輝によって下された修行の一環ということになってるのだが、言われないうちに気付くことはまず無理だ。

「さて、うん。一番聞きたかったこと聞いてもいい?」

「なんだ?」

「その格好、なに?」

と、そう十六夜(男)に尋ねる真哉。指さされた十六夜は一瞬何のことかと思えて、もう慣れてしまっていた自分の着ているものだと把握する。

それが・・・真つ黒なロングコート、腰につけた黒い仮面、をさしているのだと。

「えつと、厨二趣味?」

「ちげえよ・・・や、そう思われても仕方ねえけどな、これ」

うん、ぶつちやけそうとしか見えない。特に仮面。

「あー・・・これに馴れる、つてのが今後のために必要でな。基本、着てる」

「必要、つて・・・何かの修行?」

「そうなる、な・・・」

「因みに、師事してる人とかは・・・」

「・・・一輝」

「・・・それ、面白がつて遊んでない?」

「・・・最近、俺もそう思い始めた」

ちよつと面倒な師を持った者同士、どこか通じ合うものが出来上

がってしまった。

なお、この件についての一輝の回答は……。「え、遊んでる」である。この邂逅が終わってからこれを聞いた十六夜はブチギレたとか何とか。

命令権

「ふあ……昨日は妙につかれた……」

と、来て早々に殺しにかかれたりバトルしたり各人で異世界交流したりした翌日。普通にあてがわれた部屋で平和に寝て、平和に起床した夜子は身軽に動けるタイプの普段着に着替えて見慣れた、しかし全く違う「ノーネーム」本拠の廊下を歩いている。向かう先としては食堂であり、まあ要するに朝食をいただくというわけである。

余談だが、身軽に動けるものをチョイスした理由はただ一つ。初日に「ノーネーム」内の人物から色々聞いた結果の一輝対策だ。暇に暇を重ねて暇を重ねるくらい暇している一輝のここ最近の行動を聞いたらついつい警戒するしなくなってしまったのだ。

「ん、ああ夜子じゃん。おはよ」

「ああ、おはよう……他のやつらは？」

「ガキどもはもう全員分のメシを作って各々の仕事。アジさんが今日のガキどもの監督担当だからその他はみんなまだ寝てるよ」

そう言いながら自分の朝食に手をつけ、同時に準備されている朝食を指さす。そこに準備されているものを運びながら白米と汁物をよそって、他に誰もいないために一輝の前に座った。

「……あ、そうだ。さすがに帰れるまで全面的に世話になるわけにもいかないから手伝おうって話になった」

「マジか。前に俺が行ったとき世話になったから気にしなくていいのに」

「結局オマエ、一泊もしてないからな？人数もあるし、さすがに心が痛む」

「ふうん……ま、いつか。そこまでいうならアジさんとレティシアに話は通しとくけど、お前はこつちに付き合え」

「何かするの？」

「帰る手がかり探し」

「あー」

当然のことだが、そつちをまるつきり任せるといわけにもいかな

い。そんな点から夜子は即決し、そちらを手伝うと返す。

「さて、そうと決まればこっからの行動は確定だな。ちようど動きやすそうな格好してるし、メシくって他のやつらが起きてきたら行くぞ」

「あいよ。．．．あ、そう言えば」

「うん？」

と、ずいぶんと前から来ていたのか既に食べ終えた一輝が茶を飲んでみると、何かを思い出したように夜子が声を上げる。

「なんかあつたか？」

「や、そう言えば、結局命令権はお前にとられたらどろ？」

「あー、うん。取ったな」

「それ、どうすんの？」

「あー．．．」

一輝も考えていなかったようである。ぶっちゃけ、いつそ次に会った時に回してもいいくらいに何も考えていない。であればとネタ枠で何かエロ方向に使うこともコラボサービス的になしではないのだが、一輝の心情的にそれがありえない。

なにせ、十六夜なのだ。同姓同名の別人というわけではなく、全く同じ人物。なまじ見た目も似ているせいでぶっちゃけ『唐突に知り合いが性転換した』という感覚に近い。さて男性諸君、質問だ。仲のいい同性の友人を思い浮かべてくれたまえ。で、そいつの性別を入れ替えてくれ。エロいことをしたいだともしくはエロい想像ができるか？無理だろう。というか気持ち悪いだろう、ぶっちゃけ。

つまり、そう言うことなのだ。であるため、どうしたものかと考えて．．．

「あ、十六夜ちゃん。先に起きてたんやな」

「おー、おはよう蛟劉。つってもついさつき起きたとこだけだな。．．．あ、手伝いの件はオーケーだってさ」

「そか。んじゃ、僕は本拠の中で出来る仕事でも手伝どうてようかなあ」

「あ、そうだ」

ふと、一つのアイデアを思いついた。実用性もあり、そして同時に面白味もある。ぶつちやけ想像するだけで楽しくなってきたレベルだ。即断即決、ギフトカードから命令権を取り出して、それに乗せながら。

「命令実行。この世界にいる間、夜子な」

「……は？」

唐突に、彼氏と話していたら実行された命令権。しかも内容は意味不明。何をしてるんだコイツ、という目で一輝を見る夜子と蛟劉の二人。当然だろう。不服ではあるものの、この十六夜にしてみれば『夜子』と言うのは自らに着けられた愛称であり、自分自身なのだから。そしてその中、先に口を開いたのは蛟劉であった。

「えっと、なにかおかしいところとかあらへん？夜子ちゃん」

「や、俺は別に何、も……蛟劉、もう一回俺のこと呼んで」

「へ？なんや、呼び方おかしかったか？夜子ちゃ、ん……!？」

と、夜子自身は一回目で、蛟劉は二回目でおかしな点に気付いた。そして、妙に楽しそうに問題児的笑みを浮かべている一輝の方をそろってみる。

「さて、それでは答え合わせといきましょう。異世界よりいらっしやいました逆廻さま。お名前をいただいてもよろしいでしょうか？」

「……逆廻、夜子……。一輝 teme！」

「アハハハハハハハハハハハハハハハ！なにこれおもしれえ！」

そう、一輝がした命令は結果として、この世界にいる間目の前にいる『逆廻十六夜』という存在を『逆廻夜子』へと変換したのだ。そのため、普段から十六夜と呼んでいたものでも無意識的に夜子と呼んでしまうし、自分でもそう名乗ってしまう。根本の意識から書き換えられていないのは、一輝の心の中の思惑まで反映された結果だろう。南無南無。

念のために言っておくと、面白いという理由のほかに、十六夜呼びでは二人混ざるといふ心遣いもある。紛らわしいのだ、うん。

「ほらほら、とつとと飯食って調査行くぞ、逆廻夜子、ちゃん？」

「ぶっ殺すー！」

なあ……」

と、若干混乱している様子で会話をする二人。まさかの、この二人が弱レベルとはいえ混乱である。一輝と夜子が、だ。既にアジィダカーハとの戦闘も終えたレベルの二人ですらそうなってしまいうくらのインパクトが、そこにはあった。

「やー、うん。さすがにダメもとくらのつもりだったんだけど、ここまであからさまだとなあ」

「俺もそう思う。ってかあれ、ギアスロール契約書類じゃね？」

「え、マジで？」

と、さすがに怪しくて近づこうとしなかった二人なのだが、夜子が指さした先……鳥居の柱に貼りつけられている紙の存在から、さすがにこのまま見てみぬふりをするわけにもいかず近づいていく。そして、そこに貼りつけられていたものは確かに契約書類であった。

『ギフトゲーム名 “カーニヴァル”』

・プレイヤー一覧

・鳥居をくぐりし者

・ゲームルール詳細

このゲームでは、ランダムに二人一組を作り、それぞれのゲーム盤にて参加。

・チーム数は5、すなわち十人が鳥居をくぐった時点でゲーム開始とし、人数に達するまではくぐったものは全員拘束される（現在カウント：0）。

それぞれのゲーム盤では、何かしらの伝承、その解釈の一つにともなったストーリーがなされ、プレイヤーにはそれに参加していただきます。

・人食いがなされた時点で失敗となり、ループする（一部例外あり）。

このゲームにおける『人』とは、言語による意思の疎通を図ることができるプレイヤー以外のものとする。

・プレイヤー側勝利条件

・人食い並びにそれを補助、教唆したも

のの殺害。可能であったなら、被害者を保護せよ。

・プレイヤー側敗北条件

- ・2度目のループで失敗したとき。
- ・死亡、並びに降参。

・主催者側勝利条件

・プレイヤーが一組でも敗北条件を満たしたとき。

・主催者側敗北条件

・全てのプレイヤーが勝利条件を満たしたとき。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

“カーニヴァル”印』

「魔王のゲームじゃねえかこれ」

読み終えた二人の感想がこれである。まあうん、内容的にも思いつきり魔王的だし、そもそも契約書類が黒い時点で確定なのだが。

「あー・・・見なかったことにする、か？ほら、今度俺達で何とかするし、これくらいなら」

「や、さすがにここまであからさまなのを見てそう言うわけにもいかねえだろ。さすがに手伝う」

「そうか。や、それはそれで助かるか・・・うーむ・・・」

さすがに、相手が魔王であるのだから多少は警戒もする。というか自分が規格外だからバトル系であれば何とかできる自信があるためにとつとと済ませるのだが、これはどちらかと言えば謎解き系。つまり、力技では済まない可能性が高い。

「・・・因みに、こういう伝承的なものの知識は？」

「まあ、なくはない。元々興味あったし、こんな世界だからその後も勉強したり」

「そうか。他のやつらは・・・蛟劉はあるだろうな」

「ちよつと抜けてるけどフェンリルも大丈夫だろ。残り二人もまあ、問題はない」

「あ、五人だすのな・・・んじゃ、こつちからも五人選ぶか・・・」
ちよつと面倒事になってきたなあ、とか思いながら。一輝はDフォ
ンを取り出して、残りの八人を連れてくるようにと湖札に電話をかけ
る。

カーニヴァル ①

「では、今回のギフトゲームの対策を始めよか。何か提案は？」
「はい」

「・・・一輝の提案とか、嫌な予感しかしねえ」

夜子の世界から来た全員に彼らと個人的な交流を行った一輝の世界の五人、合計九人が件の門の前に集まってから。別の世界でとはいえ階層支配者として働いている蛟劉の元この魔王への対策会議を始めようとしたのだが。真っ先に一輝が手を上げたことで一気に夜子が警戒態勢に入った。

「ひでえな、夜子。俺が何したってんだ」

「そうだな。少なくとも、これから魔王のギフトゲームに挑むつてのに黒ウサギを呼ばなかった時点で色々とアウトだよなあ!？」

「・・・あ、そうか。そう言えば、魔王のギフトゲームに挑むなら審判権限って便利アイテムがあったっけ。ここしばらくくなしで挑んでたから忘れてた」

一気に心配になる異世界組である。と言うか、そんなことすら忘れてるやつの進行で大丈夫なんだろうかと。

「まあまあ、そう心配すんなって。作戦内容についてもシンプルで分かりやすく、かつ今すぐにも行動できるものだ。いけるいける」

「・・・君んとこの人たちが慣れた様子で、と言うかももうわかりきってたこの展開みたいな目をしてるんやけど、その作戦内容は？」

「ああ、まず・・・こうして」
「へ?」

フラッと立ち上がった一輝は、そのまま自然に歩いてフェンリルの後ろにつき、その襟首をつかんで持ち上げた。

「で、こうする」

「え、ちょ、ま」

そしてそのまま、鳥居へ向けて放り込む。実に鮮やか、待ってのまの字しか言わせずに放りこんでしまった。

「ってオイ!?!なにやってんの!?!」

「いやだから、作戦実行だつて」

「ウチのが一人放り込まれただけじゃん!？」

「つかそもそも、作戦内容って……」

『『ガンガン行こうぜ!』だけど?』

考える気が元々ないとか言う流れであつた。もうこれどうしようもない、手の付けようがない。災難極まりなかつた。南無南無。

「さ、というわけで。行くぞー」

「ま、お兄さんだからこうだよね」

「兄さんだしね。まどろっこしく考えてる方が似合わないし」

「一輝様の命であれば、私に否はありません」

「はあ……相変わらず一輝の関係者はノリが軽い……」

「ああ……一輝のこれ日常的なのな……」

あまりに暇で暇で暇すぎる今日こんにちの一輝。マイブームな暇つぶしはどれだけやっても文句を言われない『魔王狩り』だそうです。

「んで、お前たちはどうする?」

「どうする、ってかな……テメエのおかげで行くしかねえ状況なんだけど」

「おお、それはそれは。俺に感謝ですな」

「どの口が言いやがる!」

夜子は 反射的に 殴りかかった!

一輝は 反射的に 受け流した!

夜子は 鳥居の中に 吸い込まれた!

「ちよ、夜子ちゃん!？」

「ちよい待て、俺を巻き込むなつて」

「はあ……諦めるかなあ……」

そしてそれを見た結果、ついつい動揺してしまった蛟劉が残りの二人をひつつかんで鳥居の中に飛び込んでゆく。これで夜子×sノーネーム+αのメンツは全員ギフトゲームに参加したことになる。

「……この状態で三日位放置したらどうなるかな?」

「間違いなくキレるだろ、こんなもん」

「だよなあ……それはそれで面白そうだけど」

と、そう言いながら一輝は鳥居へ向けて足を進めた。

「それ以上に、これは久しぶりに頭を使う楽しめるギフトゲームになりそうだ」

半ば事後的にギフトゲームに参加してしまった面々と違い、一輝☒sノーネームはそれぞれの意志でしっかりとギフトゲームに参加していく。

一人はその顔に笑みを浮かべ、一人はその後ろをスキップ気味についていき、一人はうーんと伸びをしながら気軽に歩き、一人は自分の意志など関係ないとばかりにただ歩き、一人はまたこれかと頭に手を当て呆れながら歩き。

そうして、合計十人のプレイヤーがギフトゲームへと参加した。・・・参加のしかたは、大分と異なるけども。

そして、その場に残された鳥居は、誰もいない森の中。その契約書類に文章を並べ、それを読みあげる。

『十名の参加者を確認。 試練実行者は各ゲーム盤へと移動してください』

『五名の主催者側プレイヤーのゲーム盤への移動、並びに伝承の開放を確認』

『イレギュラーの発生・・・なし。ゲーム開始条件を満たしました』

『これより、ギフトゲーム“カーニヴァル”を開催します』

そうして、契約書類によってギフトゲームの開始が宣言され、次の瞬間には鳥居はその姿を消す。これ以上の参加者はそもそも定義されていらない。であれば、ギフトゲームが終了するその時までそこにある意味は無く、誰もそのギフトゲームへは介入できない。

|| || || || || ||

主人公☒s Side

「ふむ、さすがにこの展開は予想外」

「俺は、こんな考えなしがアジ♠ダカーハに勝てたつてのが想定外だよ・・・」

と、再び森の中に現れた一輝と夜子、すなわち主人公二人組。一瞬ギフトゲームに参加できなかったのではという可能性が頭をよぎったが。

「樹の種類は・・・別のものになってるな」

「だな、明らかに葉の形が違う。ってことは、ここは確かにゲーム盤の中ってわけだ」

すぐに、二人そろってそれを否定する。なんだかんだ、さすがの注意力である。

「さて、と。ひとまずは、ここが何の伝承なのかを知るところから始めたいんだけど・・・」

「つつてもなあ。今ある情報とえば・・・」

と、手ごろな枝を拾った夜子が地面をメモ代わりにしてガリガリと書いていく。

「まず、ここが森か山の中である、ってところか」

「若干斜面になってるし、上にも下にも続いてるから、たぶん山だな」
「だな。そこまで高くはないだろうが・・・んで、二つ目。たぶん、ここは日本だ」

と、そう夜子が言うのに合わせて視線を動かす。二人がいるのは周囲が樹に囲まれており、地面もほとんど踏み固められていない場所。ここが山であれ森であれ、樹や天然の食料があるこういった場所に人が踏み入らないはずもなく、少し周囲を見渡せば人が通る道が存在する。

そして、そこを通っているのはぼろい着物を着た人物・・・それだけで、日本人だろうと考えることは容易だ。

「ってことは、これから始まるのは日本における何かしらの『人食い伝承』ってわけだ。大分絞られたな」

「つつても、まだ結構あるんだけどな」

「そこは気にしない方向で」

と、そこで情報が途切れる。ただ森の中にいてこれ以上の情報を出すということ自体、そもそも無謀である。

「さて、と。どうクリアに向けて動く？俺としては、ひとまず今回を捨

てにして様子見、情報収集ってとこなんだけど」

「二回は失敗できるし、そんなところか・・・もちろん、超単純な鬼が食いに来るパターンとかだったたり、もしくはなんの伝承なのかが分かった場合にはやるんだろ？」

「そこで動かないのはさすがに無駄だしな。その時はやる」

「ならまあ、その方針で行くか」

そう言いながら杖を捨て、立ち上がって一つ伸びをする夜子。と、一輝が立ち上がる姿も見せずにどこかに手を突っ込んでゴソゴソやっているのに気づく。どう見ても空間にないはずの穴が開いているのだが、夜子クラスになるともはやこれくらいは驚くようなことでもない。

「何やってんだ？」

「こつちとしては、そんな格好で警戒されない可能性ってどれくらいだ？」

「あー・・・ゲームだって考えると、どつちもありえるな・・・」

先ほども言ったように、ボロボロの、ツギハギつきの和服を着ているような場所なのだ。どう見ても時代的には一輝、夜子の双方から見えて過去。服装が合うとも思えない。

「というわけで、だ。下着までそろえるのはまあ無理だが、外面くらいはこの時代に合わせるべきだろ、と」

「なるほどな。ってことは、その中は物置みたいなもんか？」

「ギフトネーム的には倉庫らしいけど・・・っと。あったあった」

と、そう言いながら一輝が取り出したのは、紗妃ほど通った人が着ていたものに似ているツギハギのめだつ薄汚れた和服・・・に見えるよう加工された和服だ。ついでに黒のロングのウィッグもある。

「や、何でそんなピンポイントなもん持ってたんだよ」

「昔、文化祭で演劇やった時のもんだ。・・・こういう便利な物置があると、捨てるのが面倒になってきてなあ・・・」

「洗濯してあるんだろうな、それ・・・」

「あ、それは大丈夫。ちゃんと洗濯済みだ。・・・洗濯してない状態で何年も放置とか、さすがにな」

「どうする、ゆうたつてなあ……ひとまずは、ここが何の伝承の中なのかを探るところからやろ」

「ま、それが分からないと何もできないですよー」

と、そう言いながら立ち上がった蛟劉に続けて湖札も立ち上がり、妖刀の短刀を抜いて服装を巫女服へと変える。この二人も手法こそ異なるがここが日本であると見抜いたため、服装を警戒されにくいものにしたのだ。とはいっても、蛟劉はそのまま、湖札もギフトを発動しただけとずいぶん手抜きではあるのだが。

「さて、ひとまずは人里でも探します?」

「せやな。そこで何かが起こるにせよ、そうでないにせよ、情報を集めるには一番やろ」

方針決定。なぜ主人公たちと違いここまですんなりと行動が始まったのかと思つたが、どう考えても一輝のせいだった。あれがふぎけるのが悪い。

「ほな、ひとまずはこのまま道を進んでいって……」

「誰か人を発見したら、ひとまず話を聞いてみる。襲い掛かってくるようなら取り押さえて拷問して情報を、ですな」

「うん、特に反対はないし正しいとは思うんやけど、ずいぶんとためらわず言わんかった?」

「んー……ほら、一週間くらい旅したら1、2回くらいはしません?拷問」

「なんやろ、僕の知ってる旅と何かが違う気がするんよなあ……」

湖札もまた、立派に一輝の妹であった。

|||||

苦勞弟子コンビ Side

「なんだろうな……あれか、面倒な師匠を持ったってことでなんか判断されたのか、これは」

「そんな判断のされ方、本気で嫌だ……」

と、ところ変わって面倒な師匠のせいで苦勞をしている弟子たちの

元へ。相方は誰なのかと顔を上げて見直し、十六夜が言った言葉があれである。もしかすると、師匠のせいで苦勞したエピソードとかを話し合って意気投合したのかもしれない。うんうん、そのきっかけが一体なんであれ、仲良きことは美しきかな。

「さて、しっかし・・・山だな」

「ああ、山だな。もうほとんど手が付けられてない、それはもう見事な山だな」

「自然って、大切だよね・・・」

「俺のいた時代だと、こういうのは中々見れねえしなあ。ヤハハ、面白いじゃねえか」

と、相方が分かったら次は状況確認。そもそも謎解き系ギフトゲームであるのだから、今自分がいる場所がどんな時代背景なのか、国はどこなのか。それらの情報がこの上なく貴重になってくる。しかし・・・

「ここまで山だと、どうしていいもんなのか・・・因みに、十六夜・・・は、どう見る?」

「オイなんだその間は」

「いや、同じ名前同じ存在なのに、一輝のせいで頭に思い浮かべて違和感なく言い分けてることに、強烈な違和感を感じた」

「あー・・・確かに、紛らわしくはなくなっただけど、妙なことをしたよな、アイツ」

作者としてはとつても楽です。二人の十六夜に対してどっちがどっちなのか分からなくなりそうだし、キャラに対してどう呼ぶのかとか、それこそこっちの十六夜を向こうの人たちになんて呼ばせようかとか。

「まあ、たぶん帰ったら戻るだろうし、気にしないことにするよ。で、どう見る?」

「あー、正直なんとも。さすがにこんだけどこにでもありそうな樹だと国はぼんやりとも把握できねえし、これといって人がいるわけでもねえし。真哉は?」

「うーん・・・正直同意見。この木の葉っぱとか、葉っぱだつてことに

「私も知らん」

「・・・えっと、現状の情報量とかじゃなくて、この後の方針だよ？分かってる？」

「バカにしているのか？ギフトゲームが、それも謎解き系のものが始まったんだ。何をするのかくらいは分かっている」

「ああ、うん。だよね。よかったよかった。で、どうする？」

「知らん」

「ちよつと!？」

まさかの天夜君が全力ツツコミモードに強制突入である。正直楽しいです。

「うるさいから黙って!？」

「唐突に何を言っている？」

「や、地の分だから。気にしないで。・・・で、えーっと、どうして？」

「ふむ・・・私は剣だ。それはいいな？」

「うん、大丈夫。昨日嫌というほど思い知らされた」

「さてここで質問だが、剣に最も必要なものは何だ？」

「・・・スイマセン、さすがにそんな立場になったことがないので分かりません」

「私も自分で言っておいてそう思ったから問題はない。答えは・・・武器であることだ。武器が考えるのは戦闘のことだけでいい」

「・・・あれ、嫌な予感がしてきたんだけど。つまり、どういうこと？」

「主に求められれば持っている情報も出すし、思考の手伝いもしよう。

その他諸々、主が望むすべてを行おう。・・・が、この場に主がいない」

「まあ、別チームになったみたいだしね」

「その時点でそれらの機能は使う気にならん・・・というか、武器であるから使えん。一般常識レベルとして童話なんかは知っているが、それくらいだな」

「お願いします主いなくても仕事して!?!?・・・そして地の分も仕事して!?!？」

黙れって言われたから黙ってたのにー。ぶーぶー。

「余計な茶々入れるなつてことだよ！なんでここまで両極端なのしかこの場にいないんだ！」

「それだけ突っ込んでいて疲れないか？」

「原因の片割れがそれを言う!?言っちゃおう!？」

割と本気の絶叫を前にしてスレイブは顎に手を当てて考え、そして。

「ふむ、1つ案が浮かんだ」

「ほうほう」

「まず、一回はループできるのだから、この一回を捨てよう」

「なるほど、情報収集に徹すると。で、その方法は？」

「ひとまず、手当たり次第に殺してみる。で、クリアできればもうけもの。出来なかったとしてもループした瞬間に殺した相手が重要人物である可能性が高い」

「もういいよ！俺が考えるから！その方針で行こう!？」

「すべては従わないぞ。私は一輝様の剣だ」

「あーもう、この子めんどくさい!!!」

スレイブの取り扱いはコツが必要なのである。頑張れ天夜！負けるな天夜！

「うるさいー!」

しっかし、なんかぱつと見文字数少ない・・・あ、地の分がないから改行少ないのかこれ。

「自分のせいだなそれは!」

「いつまでもわめいていないで行くぞ」

「俺だつてやりたくてやってるわけじゃねえよ!」

||||||

もののけ姫コンビ Side

「さて、ワンワンさん」

「もうそれで行くのね・・・いいよもう・・・馬鹿にされ馴れたよ・・・」

「馬鹿になんてしてないよ?アホワンコ扱いしてるんだよ?」

「うわあああんっ！幼女がいじめるー！」

安定の流れを行った後、ヤシロはメソメソしているフェンリルの頭をよしよしと撫でながら立ち上がり、辺りを見回す。再びの森である。どこもかしこも森だらけかよー！

「さて、ワンワンさん。いつまでもメソメソしないでゲームにいども？ね？」

「うー．．．やるけど、やるけどさ．．．何か釈然としない．．．」

そう言いながらも、そこはフェンリル。なんとか気を持ち直して立ち上がると、周囲を見回す。少なくとも現時点で、周囲には誰もいない。

「で、どうするの？情報が『何かしら人食いが絡んでくる』ってのしかないとなると、動きづらいんだけど」

「まあ正直このままクリアするのは無理だよねー。そういう意味合いで公平性を持たせるために、『伝承の再現』と『一回やり直し可』ってルールになってるんだろうけど」

そう言いながらヤシロは一つ伸びをして、メイド服のスカートをパンパンと軽く払う。

「というわけで、一周目は素直に捨てて情報収集とか、したいなあって思います」

「ってことは．．．ひたすら動き回って情報集め？」

「うん、そう言うわけだからワンワンさん」

「．．．．．？」

「狼に、なつて？」

「．．．．．あ、ハイ」

半ばあきらめの境地。そこへと到達したフェンリルはすぐに狼の姿になり、何かを言われる前に伏せの姿勢を取る。言うまでもなく、ヤシロが乗りやすいようにだ。

「でもさ、こうして狼になつてはみたけどこれ誰かに見られたら一発でアウトなやつじゃない？狼とか物語の中では撃ち殺されるようなイメージしかないんだけど。それこそ人食いの解釈として『赤ずきん』とかそのまんまだし」

「ごーんな可愛い女の子が乗ってる狼を即座に射殺、ってことはないと思うけど」

「自分で言うのね・・・」

「可愛いでしょ？」

「可愛いけども」

この時、フェンリルの頭の中をよぎった言葉は『綺麗なバラには棘がある』である。

「まあでも、そんなに心配だって言うんなら・・・えい」

「え、ちよ、何を・・・」

ヤシロの掛け声と同時に感じる、首筋の違和感。位置的に自分で見ることができず、右前脚でその辺りを撫でて、器用に首の後ろ側も撫でる。手で感じたのは輪つか状の皮が自分の首に巻きついており、後ろ側からは何か金属の鎖みたいなのが伸びていて・・・

「首輪とリード!？」

「これなら大丈夫じゃないかな？」

「まさかのペット!?!ペット扱いで行くの!?!」

「他に狼が安全ですよー、って言える手段があるならそれでもいいけど」

「・・・そもそも、狼を安全に見せる手段がなかった・・・」

この姿も、ヤシロが魔女で狼を従えている、と見ることでできてくる。狼然り、ライオン然り。肉食獣が安全であると示す方法は時代がさかのぼるほどになくなっていくのだ。

「さ、気を取り直してレッツゴー!」

「ああ、ハイハイ・・・時間大切、我走行ス、気を付けられよ・・・」

・・・仕方ないじゃない!フェンリルはいくらでも弄っていいって神様に言われたんだもん!言われたんだもん!

カーニヴァル ②

主人公s Side

「つたく、何で俺もこんな格好・・・」

「こんな格好、って言うてるものを俺に着せようとしてたんだからな？その辺分かってるんだろうな？」

「他人に着せるから面白い。自分で着ても面白くない」

「ふざけろ」

あの後、口論の結果・・・というかコイントスの結果、一輝も同じ服装をすることになった。若干ぼろい感じのする、しかし貧乏人というほどではなさそうなレベルの塩梅の服。そして、人が通るためか踏み均された道を歩いていき、村を発見した。

「あ、村あった」

「あったな、村」

「村・・・だよな。家百個ちよいだし」

「まあ、正確な区分は知らなくてもいいだろ。こういうのに出てくるのは大概村だ」

「なるほど、そりやそうか」

「お兄さんにお姉さん、何やってるの？」

などと、村の入り口で話しながら入ってこようとしない男女の組み合わせ。それはもう目立ち、二人と変わらないくらいの少女が近づいてきて声をかけてきた。

余談であるが、夜子が一発で女だと分かってもらえたのはさらしを外したからである。理由は単純で、『男と女が一人ずついた方がいろいろ対応できる』ということ。女を生贄にするパターンもいけるし、男が退治に行く流れを作ることでもできる。色々と都合がよいのだ。「やー、つとな。俺達ちよつと旅をしてるんだけど、そこで何かに襲われてな」

「どうにかけがもなく逃げてはこれたんだけど、どこかで一休みできないかなー、つてな」

「あー、そう言う・・・うーん、何か人を襲うようなこの辺りにいた

かなあ・・・」

少女は少し考えるような動作を見せたが、すぐに思考を放棄して二人に向き直る。

「まあでもそういうことなら、どうぞ入ってください。食料は一切出せませんが、井戸や川が近いので水は出せます」

「あ、いいの？」

「はい。ほら、旅の方によくしたら神様の使いで、という伝承あるじゃないですか。なので、そのチャンスは逃さないようにしてるんです」

それ言っちゃだめなんじゃないか、と夜子は思ったのだが口には出さない。まあ、神霊をその身に宿してるって意味合いでは一輝も似たようなものだし、だったらまあ何でもいいかという考えだ。

「それで、えっと・・・」

「あ、一輝だ」

「夜子・・・って、まだこれ馴れねえな・・・」

「はい、一輝さんに夜子さんですね。どうぞ、村長のところに案内します」

と、トントン拍子に話が進んでいく。そういう意味合いではない状況ではあるのだが、しかしこれといった情報がないには変わりがない。まだまだ気を抜ける状況ではなく・・・

「そう言えば、お二人はどのような関係なんですか？お付き合いしているとか、駆け落ちの最中とか？」

「コイツはぜってーありえねえ」

お互いを指さしながらの即答である。普通ならば、からかえそうなネタが飛び込んできたとき誰でも思うところだろう。昔からの縁とか、なんだかそんな感じの。だが、少女の中にそんな感情は生まれなかった。二人とも、マジで、本気で、どこまでもいやそうな顔をしていたのだから、「あ、これマジなやつだ」と考えてしまっても仕方ないところだろう。

|| || || || || || || ||

「・・・あの、これはどう判断したらいいんでしょう？」

「何とも言えへんなあ・・・ただ、間違いなく重要な何かやとは思いうんやけど」

と、そう話す二人。今いる場所はあの後少し歩いて見つけた村であり、何ともあつさり歓迎されてしまった。だが、混乱しているのはそんなことではなく・・・

「鬼って、人食いの代表格みたいなところ、ありますよね」

「日本では、やけどあるなあ」

人を喰らうは鬼の化生。日本あるあるです。

「それであれ、鬼なんですよね」

「鬼らしいなあ。さつき見せてもらった時も角とかあつて、明らかに鬼やったし」

そして、そんな鬼を発見できたらしい。これはゲームクリアへと近づけた可能性が！

「でもあれ、調理されちゃってますよね」

「されちやつとるなあ」

そうでもなかった。

とまあ、うん。二人は鬼を見つけた。だが、鬼はすでに殺されて、その上で調理されてしまっているのだ。これではその鬼に関わることもできないし、既に死んでいるものを殺すことなどできようはずもない。それはつまり、その相手は人食い出はなかったということになるのかもしれないが・・・

「・・・なににせよ、色々と事情を細かく聞くしかないですね。鬼が絡んでくるのは間違いないですし」

「そういう意味では、中身を知れるタイミングでこれたのはよかつたんかもしれへんな」

「確かに・・・もう少しあだったらただお肉にお祭り騒ぎしてるだけでしたし・・・下手したら食べてたかも・・・」

「出自的に僕は抵抗あらへんけど、まあ嫌やろうなあ」

これといった理由はなく、ただ湖札は人間であつて、どうしても食

べられなかったただけだ。ゲテモノ系の料理を食べたくないのと同じようなものだ。

そして、蛟劉はそもそもがその妖側、それも悪性のものだ。ゲテモノ料理も元々食べる側の存在であれば、食べるだろう。

「ところで、日本って確定したわけやけども、心当たりはないんかな？ 鬼を調理して食べる、やなんてそうあるものでもないと思うんやけど」

「うーん、そうですね・・・そもそも、今でも伝わっている形であるのかどうかも分かりませんし。粗暴な人とかそう言うのをまとめて『鬼』としていたくらいですから」

日本における鬼とは、異形の存在だけではなく当時の人々にとって未知であるものすべてを指していた。故に、

「盗賊を懲らしめたー、とかですら鬼になってる可能性がありますし、正直なんとも、です」

「つまり、候補が結構、と？」

「です。そもそも、私たちがいた世界を基準にして考えちゃうとずれる可能性もありますし」

そう言いながら手に持っていた湯のみの中身を飲み干し、立ち上がる。一緒に食べないか、という誘いは反射的に断っていたが、それだけだ。手伝うなりなんなりして恩を売って、仲を深めて、情報を得る。情報命。

「すいませーん！何か手伝うこととかってありますかー？」

「おや、いいのかい？今頼みたいことといえば力仕事位なものだし、熱いから女の子にはつらいぞ？」

「大丈夫です！どれだけ熱くても重くても軽々と運んでしまいます！・・・こっちの人が！」

「って僕かい!？」

さらっと全部の仕事を押し付けられた蛟劉が反射的に叫び、それに村人全員が声を上げて笑い出す。ええいもうやけくそだ、とばかりに蛟劉も湯のみの中身を飲み干し、湖札に押し付けると未だ熱せられている金属鍋を素手でつかみ、持ち上げて見せることで村人たちを驚か

せるのであった。

苦勞弟子コンビ Side

「あれだな。箱庭にいるってのにこの表現を使うのも違和感だが」

「ああ、うん。あれだね。この世界はまあ、あの類だ」

「フアンタジー系」

口をそろえてそう言った二人は、今こうして休んでいる前まで見ていたものを思い出す。といっても、発見できた生物はたったの四。

「ジジイとババアは、まあ普通だったな。やけにのんびりつてかまったりしてたが」

「タヌキとウサギは四頭身で二足歩行してましたね・・・」

「つか、ジジイとババアでタヌキとウサギ、つてことはもう、心当たりが一個しかねえんだけど、オレ」

「偶然ですねー。俺も一個しか知らないやー」

二人そろって遠い目をしている。はつきり言おう。確かに、登場人物が山とその周辺に四人だけ、それに合うことは確かに難易度が高かった。だが、会った瞬間にはその逸話が分かってしまうのもどうなのだろうか。

「カチカチ山だ、これ・・・」

山の周辺に、おじいさんとおばあさんが住んでいて、登場人物は他にはタヌキとウサギのみ。そんな物語の類は何なのかといわれたら・・・まあ、カチカチ山くらいのもんだろう。もしかしたらこんな超限定的な状況で出来上がるような奇特な物語が他にもあるのかもしれないが、そこにさらに『人食い』の要素まで絡んでくるなどということは・・・まず、無いだろう。

「さて、となればもう何をするのかは確定だな」

「だね。確かに後の時代に伝わっている物では書きかえられてはいるけど、元々の形がどうであったのかはそれでも有名だ」

「ああ。タヌキがババア殺して婆汁作ってジジイの喰わせた、つてな。ジジイとタヌキ殺して終わりだ」

「だね。どっちをやる？」

「・・・一応、まだ皆伝はもらってねえけど俺が習ってるのは暗技だ。ジジババの家に潜んでタヌキが来たら殺す、ってんなら俺のが適役だろ」

「了解、ならお爺さんは俺がやるか。・・・正直、あんまりいい気分がするものじゃないけどな」

人食いが人を襲う前に殺す。そういえば聞こえはよく、その行いは圧倒的善のものだろう。だがしかし、今回のそれはそうとは知らずに、それも自分の妻を喰らってしまう相手の殺害だ。それを言い気分で行えるものは、よほどの精神異常者か快樂殺人鬼の類だろう。

「それはまあ、ワリイ。けど、ゲームだって割り切るしかねえな」
「だね。まあ、相手が一人だけって考えれば、だいぶマシか」

そう言いながら、二人はそれぞれの担当先へと向かう。十六夜は家のすぐそばに潜んでいたためその屋根に上り、死角を作り出してそこへと隠れる。信也はおそらくはまだ山で仕事をしているであろうお爺さんを見た場所と家とを繋ぐ道を進み、それと遭遇するまで進んでいく。

そして、ある意味予想通りに。特に記述すべき事柄もなく、二人はゲームのクリア条件を満たした。

|| || || || || || || ||

???
☒ s Side

「さて、分かったことをまとめましょう」

「この辺りの瓜はうまいな。ゲーム中に必要であるのかはわからないが、いい食料になる」

「いや、ギフトカードの中にあるでしょう・・・食料くらい・・・」

だがしかし、事実二人がそれぞれ歩き回って得られた情報は「野生の瓜がある。美味しい」ということだけなのだからどうしようもない。スレイブなんてよく育った瓜を2つ抱えて「これが戦果だ」とはつきり言ったほどだ。一輝がいないと本格的にただのポンコツになるな、コイツ。

「はぁ・・・ねえ、自分で言うのもあれだけど、山の方をひたすら見て回った俺が瓜を見つけたのは、まだ分かるんだよ」

「それはそうだろう。この山、少し探せばすぐに瓜が見つかる」

「でもさ、なんで近くにあった村の方に行った君がそれしか情報ないの？ほら、村で聞けば何かしら出てくるものでしょう？」

「この髪にこの目だぞ？人に会った瞬間に殺しにかかられた」

「・・・あ」

そもそも、各地に伝わる鬼の伝承は異国人を指すものである、という説がある。その存在をしっかりと把握していない一般人にしてみれば、自分たちとは顔立ちの子となる異国人は、それはもう妖怪の類に見えたことだろう。

つまり、銀髪に紫の瞳を持つスレイブは、それも性質たちの悪いことに手持ちの服はメイド服だけで、猫耳猫尻尾が完全にセツトなのだ。妖怪に見られる要素が満載である。

「しかし、これは困った・・・そう考えると、俺が行くわけにもいかないし・・・」

天夜の見た目は、緑色の髪をもち、瞳は銅色だ。こちらもまた、出会えば即妖怪判定されて話を聞くどころではないだろう。

「まあ、そうだな。私としてもまた『天邪鬼が来たぞ！』とか騒ぎになられて追いかけられたくはないからな。殺さないことが難しかった」「ちゃんと殺さないでくれたのね・・・って、うん？」

と、そこで天夜は一つ引つかかった。今コイツ、なにか結構手掛かりになりそうなこと言わなかったか？と。

「・・・天邪鬼？」

「ああ、そう言われたな。それがどうかしたのか？」

「いや、その・・・鬼、じゃなくて、天邪鬼、だったんだよな？」

「そうだな。どちらも大差ないだろうが」

「大差、あるんですけど・・・」

頭を抱えた。

「・・・ねえ、他にも何かなかった？どうでもいいと思ったこととか、特に収穫もなかったからなかったことにしていると、そう言うのが

あつたら全部教えて。お願いします」

「お願いします、とか正直そのキャラでやられると気持ち悪いな……ふむ、そうだな」

よほど気持ち悪かったのか、スレイブは素直に思い出していく。この様子からやはり何もせずには帰ってきたわけではなく何かしらやつては来たのだな、と天夜は頭の中で情報を整理する準備をして……ふむ、そうだな。さすがにあまりにも当然のことは除く」

「うん、そうして。さすがにそれは省いて」

「一人を脅して馬車に隠れて村を回った時、やけに上質な織物があつたな。織物自体は何種類か存在したが、その中でも一種類だけ飛びぬけていたものがあつた」

「……他には？」

「面白かったものでは、しゃべるカラスがいたな」

「何で言わないのさ、それ!?特にカラス!どう見ても異常だよね!?!
ねえ!?!」

「何を言う。カラスはしゃべるものだろう」

「オーデインのこのカラスかな、それは!?!」

魔剣ダーインスレイヴ。その関係でしゃべりそうなものといえば、かかわりはまずなさそうだが、オーデインのカラスたちだろう。まさかしゃべったのだろうか。そして、それと会話する機会があつたのだろうか?

「はあ……うん、この伝承分かった。どうすればクリアなのかもわかつた」

「ほう?私はお前の印象をクソ男から役には立つクソ男へと変更した方がよさそうだな」

「クソ男!?!」

「昨日の印象がそうなっていないでも思っていたのか?」

「クツ、確かにテンションが少し上がっておかしな言動をした記憶はある……!?!」

自分のせいでもあつたと悟り、複雑な気分になる天夜であつた。

「それで、その伝承というのは?」

『うりこひめとあまのじやく』ってやつ・・・」

「ああ、あれか。瓜から生まれた女が瓜子姫と名付けられ、ジジババ夫婦に育てられ、二人がいない時に訪れた天邪鬼に殺されて皮を剥がれ、それを被って瓜子姫のまねをした天邪鬼が老夫婦に瓜子姫を料理したものを喰わせるとかい。しゃべるカラスが化けてる天邪鬼の正体を教えるというパターンもあつたな」

「なんでそこまでしつかりと覚えてて、その上でなおその名前が出てこなかったの？ねえ、なんでなんで？」

「そう言えば、瓜子姫は機織りが得意だったか」

「そこも覚えてるんならなおさらだぞオイ！」

天夜君、オコである。ガクンバ♪

「ああもううるさい！なんかイライラするからとつとと殺りに行くぞ！」

「伝承的には、人食いが老夫婦でそれをやらせたのが天邪鬼、と言うところか」

「そうだな！だから俺の薬で瓜子姫眠らせて老夫婦とつとと殺して、天邪鬼が来たらそれも殺す！ああクソ、これはこれで腹がた」

と、その瞬間。二人の視界が一瞬歪み、再び目を開けるとそこはゲームが始まった時にいた場所。それはつまり・・・

「なるほど、時間切れで戻った、と言うところか」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

スクツと立ち上がり、歩き出す天夜。先ほど方針を決めた以上はそれを実行するのだろう、とスレイブも考えて立ち上がり、その後を追う。

後にスレイブはこう語る。「私が何をやるまでもなく、手を出せるだけの場すらなく、ギフトの毒と薬と翼で全てを終わらせていた」と。

||||||

「うーん、森だねえ・・・」

「森だしねえ・・・」

そう言いながら森を歩いていくのは、首輪と鎖を付けられた銀狼と、その背に乗って鎖をつかむ金髪の少女。どう見ても異様な組み合わせで道を進んでいく。

「しっかし、本当に森しかないねえ・・・」

「森とか人食いあるあるだし、正直情報にならないよね・・・」

「ホントだよ・・・はあ、ワンコなんだから臭いとか追えないの？」

「ワンコじゃない・・・狼・・・」

そう言いながらも鼻を鳴らし、何か臭いがないかを探し始める。神話クラスの狼、その辺りの能力もまた一級品なのだろう。

「うーん、これといって何かは・・・あ」

「何かあったの？」

「甘い感じのにおいがする。これは、砂糖・・・いや、焼かれてるし、お菓子かな？」

「お菓子？」

ヤシロの顔がぱあつと輝くように笑顔になった。さすがは女の子、それも見た目相応なところのあるヤシロだ。そして、その気配を明確に、野生の勘で感じ取ったフェンリルはしっかりと本格的に、自身の恐怖という形で感じ取り・・・次の瞬間にあきらめた。

「よし、レッツゴーだよワンコお兄さん！」

「あーハイハイ、逝きましよう逝きましよう」

ちよつとニユアンスがおかしかったが、しかしそれを気にしてくる人はこの場にはいない。しかも首輪から鎖でつながれており、その相手は見方によっては自分と同等^{末論}の存在なのだ。そして何より、女に逆らうというのは危険なものなのだ！

というわけで、言われたとおりに臭いがした方へと歩いていくフェンリル。若干呑気ではあるものの時間制限があるということは忘れておらず、若干走り気味でそのにおいの元へと向かう。一人を乗せて走るといふそこそこ体力を喰われることをしているフェンリルに対してその背中はどうねだってお菓子をもらおうかと考えているヤ

シロである。

と、さすがはフェンリルというべきか、つい少し前までは全く見えていなかった臭いの元がほんの少し経っただけで見えてくる。それを視認するのと同時に……

脇道へと飛びそのまま隠れた。

「うん、偶然とはいえ正解だったね。さすが私！美少女最強！」

「……もうツツコミも疲れたなあ……」

若干遠い目をしたフェンリルだったが、すぐに状況を思い出して真面目に戻る。そして先ほどの臭いの元へと目を向けて……

「お菓子の家、かあ……」

「これは食べられそうにないな」

「まあ、間違いなくあのお菓子全部材料：人だろうしね」

「狼なら食べられるんじゃない？」

「食べられるとしても進んで食べようとするには人間と一緒にい過ぎたかなあ」

「そう言うものなんだ？」

「そう言うものだよ？」

*biwano shin*の勝手なイメージ以下略です。

「さて、と。お菓子の家が出てくるのってヘングレ以外にあったっけ？」

「ヘングレくらいだと思うよ。というわけで魔女を殺すのは決定」

「問題はヘングレの二人を殺すべきなのかどうか……」

「お菓子は食べてるし、人食い判定でいいと思うんだけど」

「だね。うーん……一回様子見？」

「よし、それで」

一回はやりなおせる。であれば、ヘングレが来たところで家へと近づき、中の様子を探って調べればいいのだ。そしてその後、繰り返しの中で終わらせればいい。故に、二人は待ち続ける。待って、待って、待って、二人が来たらそれに続いて家へと近づき、その様子を見て……繰り返しの中で、魔女と二人の子供を三匹の狼が殺害した。

|| || || || || || ||

十六夜と真哉のカチカチ山、スレイブと天夜のうりこひめとあまのじやく、ヤシロとフェンリルのヘンゼルとグレーテル。これらは全て、一回繰り返しができるという条件の中では簡単すぎるゲームだ。一回もやり直せないとなれば確かに難しいゲームなのだが、だからといって一回のやり直しを許可した瞬間に難易度がお遊び程度にまで落ちるような、そんなゲーム。

何故魔王がそのようなゲームを、自分に不利なゲームを設定したのか。そのことが示すのは……

カーニヴァル ③

家族 ☒ s Side

「さて・・・では、夜になったことですし作戦会議といきますか」
「ああも関わってこられるんなら、この時間帯にやるしかないんやろうなあ」

と、つい少し前、村人たちが皆眠るまで思いっきりバカ騒ぎに巻き込まれていた二人は話し始める。

「では蛟劉さん、ギフトゲームの先達、そして同じ魔王として何かあればお願いします」

「なあ、君丸投げひどない？あと、君も元魔王だって聞いてるんやけど」

「やだなあ、兄さんと再開するためだけに魔王やってた私分かるわけないじゃないですか」

「・・・魔王って、一体・・・」

残念ながら、この妹のブラコン度合いはかなり振り切っているから仕方ない。

「まあ、せやなあ・・・ここまでではつきりとした自我がある村人以上は、無関係ではあらへんやろうな」

「じゃあやつぱり、この村がクリアのカギに？」

「この村そのものなのか、あの鬼を食べてたのが伝承的になのか、その辺は分からへんけど」

やはり、結論はそこへと落ち着く。どう考えても鬼を煮て喰うとか異常なのだから。

「報復、ってパターンが一番わかりやすいんやけど」

「あー、確かに」

「けど、まだなんの伝承なのか分かってへんのがなあ」

「ちよーつとわかり辛いんですよねえ・・・土着系なのかなあ」

そうなる、その地域の人以外は分かり辛くなってしまふ。あるいは一輝であれば、日本にいた期間の長さや国の第三位としての活動範囲の広さから知っている可能性は高い。日本について詳しく知る、狭

く深い知識が一輝だ。それに対して、湖札は世界を回ることによって広く浅い知識になっている。特に日本については深くないのだ。

それは、蛟劉についても同じ。むしろ箱庭という世界にいるからこそより有名な、より大きな霊格を持つものに対しての知識が大きくなり、日本という国の一地域、などという形になるとその判別が難しくなる。

もし仮に知識があったとしてもそれと結び付けることこそが難しい。湖札の持つある種の叡智もまた、この障害故に情報不足の現状では使えない。

「・・・で、結論は？」

「何か起こるか待って、君の知識から引つ張り出す」

「ま、そうなりますよねー」

なににせよ、ギフトゲームの鉄則、情報収集から。そう言うことで二人は同じ部屋にとどまり、眠ることなくただひたすらに何か起こるのを待つ。

「しっかし、他はどうなつとるんやろうなあ」

「なんだかんだ、誰が行っても何とかする気がしますけどねー。あ、スレイブちゃんは難しいか、性格的に」

「こつちもその辺りは何とかなるやろうな。誰と誰がなったんかとかで問題はあるんかな？」

「そうですねー・・・ギフトゲームの内容によっては、兄さんと夜子さんが一緒になるとマズいかもです」

「そうなん？」

その湖札の発言に対して、蛟劉は首を傾げる。

「確かに彼、夜子ちゃんを隙あらば弄って楽しむ・・・というよりは誰であろうと隙あらば弄って楽しみそうやけど、ギフトゲームの最中なら大丈夫なんとちやう？夜子ちゃんはこんな状況で喧嘩うらんやろうし」

「あー、そつちじゃないです。弄るのについては間違いなく隙あらばやってますけど、それにしたってギリギリ大丈夫な範囲を責めるはずですから」

「ギリギリなんか……」

可能な限り手を抜かず全力で。それが一輝である辺りが、どうしようもない。

「ただ、そうですね……たぶんウチの人たちだと兄さん辺りは、このゲームの状況を理解してそうなんですよね」

「とゆうと？」

「この伝承を再現する核が『伝承』ではなくて『主催者側プレイヤー』である、ということですよ」

「……そう言うこと、分かった時点で言っただけじゃあな」

まさかのゲームに関する情報交換がなされていなかったという事実に、蛟劉は少しばかり頭を抱える。そして、湖札に続きを促した。

「まあそんなことは置いといて、ですね。例えば……再現された伝承が『オオカミと七人の子ヤギ』であったとすれば、この伝承の中で人食いにあたるものは誰でしょう？」

「そら、オオカミやろ」

「はい。そして、オオカミであれば殺すことにためらいは生まれません。だって、明確に『悪』ですから」

では、と。湖札は人差し指を立ててくるくと回し、別の伝承の名前を口にする。

「その伝承が『ヘンゼルとグレーテル』であれば、どのような解釈になりますか？」

それは、偶然にもヤシロとフェンリルが挑んだ伝承であった。そして、その答えは。

「可能性として魔女、そして確定しとるんは……人が材料であったお菓子を食ったヘンゼルとグレーテル、やな」

「はい、正解です。ですからクリア条件はその三人の殺害。魔女についてはさしたる抵抗もないでしょう。ゲームであると割り切れる状況であれば何も知らずただ騙されて食べてしまった二人を殺すことも可能だったかもしれません……では、それができない状況では？　一相手も本当に生きていると分かっている状況では？」

《……？》

「・・・難しい、やろうな。魔王の軍勢と分かっているてもなお、心理的に難しいもんがある」

「はい。それこそ蛟劉さんのように汚れた世界に生きていた悪人や私、兄さんのような一種の破綻者であれば、抵抗なく殺せます。・・・夜子さんの心は、そのレベルに強いですか？」

蛟劉は、何も言えなくなる。

「夜子さんの心は、そのレベルに壊れていますか？」

なぜなら、それはできない可能性の方が高いから。

彼女の目には、世界は綺麗なものに映っている。その全ては一部を除いておもちや箱の中身であり、人形であり、自分にとって美しいものであつて。そう映ってしまうような方向に、自分にとって都合のいいように歪んでいる精神であつて。

であるのならば、その世界はそんな悲劇をただ自然に受け入れられるものなのだろうか？

「・・・たぶん、その事実を知った上で殺すことは、できるんやと思う」
「では、殺した後は？」

「心に負担がかかるかもしれへんし、さらに壊れるかもしれへん。もしかしたら堪え切れるかもしれへん。・・・分からない、のが本音のところやな」

けど、と。蛟劉は続ける。

「それでも、大丈夫や。その事実にとどり着くには、君たちみたいな特殊な何かがある。夜子ちゃんがそれに気付くことはあらへんよ」

「そうですね。・・・兄さんと一緒になければ、ですが」

「・・・話す、と？」

「はい、間違いない」

「・・・それは、自分が今から罪のない相手を殺さなければならぬと知る義務があるとか言う、価値のないクソツタレな偽善のために？」
「いえ、むしろ兄さんや私は殺しに特殊な意味を感じていませんから。ただ、試すために伝えます」

湖札の言った言葉の意味が、蛟劉には理解できない。試す、とは一体何を？

「もし仮に夜子さんが兄さんにとって友人程度に考えられる相手であれば、そんな人間一人が簡単に壊れるような事実を伝えることはないんですけどね。身内と定めた相手にはダダ甘なんです、あれで」

「・・・つまり、そうは思っていないから？」

「はい。思っていないから、ちよつと試しに、とやってみる。それで面白い結果を見せられる相手であればよし、そうでないのなら・・・度合いによりますが、最低でこれまで通りのどうでもいいけど弄つたら楽しい相手、ですかね」

「・・・それならまあ、今と変わらんから問題ない。ただ・・・最大なら？」

「殺します。つまらな過ぎたのであれば、躊躇なく」

瞬間、蛟劉の顔は怒りに染められた。こうしている場合ではないと、組み合わせがどうなっているのかを知らなければならぬと、その手段を躍起になって探す。たどり着いた結論はこのゲームをクリアする・・・すなわち、終わってから確かめる、と言う方法だけ。

「なんやねん、それは・・・！」

「そう言うわけで、正直私としては心配なんです。帰れる手段が見つかっていない相手と面倒な軋轢を生みたくないですし」

「君が考えるのは、それだけなんか!？」

「はい。・・・というか、七天大聖なんて名乗って天に喧嘩を売った大悪党が何を言ってるんですか」

湖札の言っていることは、ある意味では真実だ。頭領である孫悟空は人を襲い、殺し、食料とした。それだけでもはつきりと分かるほどの大悪党であり、その義兄弟がどうなのかなど考えるまでもない。

だが、人はしばし、自らの罪を棚上げにして考える。それが自分にとって大切なもののためであればなおさらに。

それでも、それ以上に。自らの誇りのため、愛しき義姉のために悪となり、魔王となり命を奪った蛟劉と。ただ義兄と再会するのに都合がいいかもしれないという理由で悪となり、魔王となり命を奪ってきた湖札では。箇条書きされた項目は同じであっても、本質が全くもって別物過ぎた。

「そういう問題とは」

「静かに」

「何を言ってる、」

「静かにしてください。．．．外が騒がしくなっています」

湖札の言葉で、蛟劉は一握りの冷静さを取り戻した。そう、愛するもののことがこの上なく心配である。だがそれ以上に、今はギフトゲームの最中なのだ。クリアして真実を聞くことくらいしか、この状況を解決する手段は、現状存在しない。

「．．．その件については、出てから、この目で見てからもう一回判断する。それでええな？」

「はい。元々そのつもりで話しましたし」

湖札は立ち上がってギフトカードから日本刀を抜き、蛟劉もまたいつ何が来ても対応できるように準備をして。そのまま出口を出て互いに背を向けて村を見回す。何かがあらした痕跡こそあれど、その犯人は見当たらず．．．

「．．．おつたで。鬼が、人を喰いながら家から出てきとる」

否、たつた今外に出てきた。湖札もそちらを見ると、そこには確かに人の死体を片手に、むさぼりながら次の家を目指す鬼の姿があった。

しかし、それを鬼と断じることが出来たのは、ある意味奇跡だったのかもしれない。その形は崩れかけており、部位の欠損は存在し、人型をギリギリ保っているような状況だ。．．．だが、その見た目であったがゆえに、二人はその鬼の正体を見破る。

「うわー．．．正直、ありえないとすら思ったレベルなんですけど、あれですよね」

「せやな．．．あれは、村人がくつとつた鬼やろ」

形が崩れかけているのは、煮込まれたから。部位が存在しないのは、喰われたから。であるのならば、あの鬼は鍋の中にいたあの鬼なのだろう。

そして、鬼はまるで湖札と蛟劉の二人が見えていないかのように歩き、外に逃げ出していた人間を追う。聞こえてくるのは、悲鳴と、力

による破壊の音と・・・鬼と人との間で行われる、会話の内容。

「うわちゃー・・・これは、殺す人数が難しいですね・・・タイミングも結構大変かもです」

「せやな。正直、夜子ちゃんがこれじゃなくてよかったと思うわ。・・・やりなおしたらまず、すぐにこの村までやな」

「はい。そこで調理が終わったタイミングで、誰も口にしないところで村人を皆殺し。夜まで待つて復活した鬼を殺して終了、ってところですか」

念のために、と。湖札は今集まった情報をもとに自分の脳内に検索をかける。少しの負荷と時間を要して・・・その伝承の名前が検出された。

「はい、今立てた方針で確定です。伝承は『あぶくたった』。日本の子供たちの遊びとかかわらば歌とか、そんなところですね」

「相変わらず、日本のはえぐいなあ・・・」

「さて、それでは。そろそろ戻るでしょうし、実行しますか」

「せやな。はよ、終わらせんと・・・」

蛟劉のうちに存在する焦り。その感情は、敵が強敵であったのならば大きすぎる枷となっただろう。だが、今回殺す相手はただの村人全員にちよつと生命力の強い鬼が一匹だ。箱庭を揺るがせるだけの力を持つ魔王と元魔王の前では、そんなもの無いに等しい。

カーニヴァル ④

主人公s Side

「・・・なあ、どうしてこうなったんだ？」

「俺に聞くな。ってか、基本的になつかれてるのは夜子の方だろ」

「いやまあ、そうだけど・・・なんでこうなった・・・」

二人は今、百人の子供たちによってもみくちやにされていた。4：6くらいの割合で。おそらく、一輝の方に行かないのは子供が本能的に『危ない人』であると察しているのだろう。

「おねーちゃん、あそぼあそぼー！」

「鬼ごっこ！鬼ごっこ！」

「ああはいはい、分かったから少し落ち着けお前ら！」

と、夜子は全力でもみくちやにされている。一輝の方はもそう変わらず、何なら両陣営に属している子供もいるレベルであるのだが・・・と、そこで。いい加減疲れてきた一輝が子供たちへと指示を出す。

「俺に群がってるやつら！一回聞け！」

その声は、何かしらのカリスマを孕んでいたのか、もしくはただ本能に従っただけなのか、一輝の方だけでなく夜子へと群がっていた子供に対しても影響を出した。それを見た一輝は満足げに頷き、夜子は休めるとほんの少し一輝に対して感謝を抱いた。

「全員、そっちのおねーちゃんを見ろ！」

そして、一瞬でそれを後悔した。逃げるべきだとも思ったが、自分の周りにはくつつくくらしいの近さで子供たちがいる。怪我をさせてしまうのは忍びない。

「主にあの胸を見ろ！」

「何言ってやがる一輝！」

「あのレベルは中々出会えるものではないぞ！そして、今のお前たちくらいの年齢だからだ女問わず許される！人生経験として、突撃してこー！」

「オイコラテメエ！」

『はーいー！』

「マジか!？」

そして、一輝の号令に合わせて子供たちが夜子へと群がっていく。近いもの言われたように胸へと手を伸ばしたりしているのだが、その大半は指示されてそれに従って動くということ自体を楽しんでいるのかただ群がったりタツクルしたり手を引つ張ったりしているだけである。その物量に耐え切れなくなって夜子が仰向けに倒れると、その周りやら上やらにどんどん、総勢100名の5歳周辺児が群がっていった。さすがに物量的に普通なら死にかねないんだが・・・

「ま、夜子なら大丈夫か」

「大丈夫なのですかね・・・」

「大丈夫大丈夫。アイツは山一個くらいなら潰されてもピンピンしてるって」

と、全て夜子に押し付けることで自由になった一輝は隣に来ていた村長と言葉を交わす。当の夜子が恨みがましそうな目を向けてきたが、情報収集とジエスチャーを返されて何も言えなくなってしまおう。哀れ、夜子。

「そう言えば、すっかり休ませてもらっちゃってありがとうございまして」

「食べるものは何もだせていませんがね」

「ゆつくりする場所と飲み物、それだけあれば十分休まります」

と、そう一切疲れていなかった身でほらをふく一輝。そう少しばかり会話を交わしてから、少しだけ核心へと迫る。

「というわけで、俺としてもあいつとしても何かしら恩返しをしたいんだけど・・・何かないか？」

「何か、ですか。そうですね・・・そうだ。では一つ、ご迷惑かもしれないですがお願いしてもよろしいでしょうか？」

「はい、言ってください」

かかった、と。一輝の心情を表すならこうであろう。

「実はですね。今年は100人もの子供がああの年まで育つことが出来ました。私の孫も6つになったんですよ」

「それはそれは・・・この時代に珍しいことですね。おめでとうござい

ます」

「ありがとうございます。それで、そのお祝いと今後の成長を祈願して、彼らに山を登ってもらう予定なんです。今日」

また急な話だな、と一輝の心情を表すならこうであった。そして同時に、下手に伸ばされても面倒か、とも考える。

「元々は村の者を二人ほどついていかせるつもりだったのですが、それをお願いできないでしょうか？なにぶん、農作業などやることは多いものですから。あの子たちもなついているようですし」

「かまいませんよ。何か特殊なことがあるというのなら、それができるかはわかりませんが」

「ありませんとも。ただ低い山を登り、神へ感謝し、そこで食事をとる・・・ただ、それだけです」

であればまあ、大丈夫か。そう考え、同時に山を登る百人の子供とは何とも鬼が好みそうな状況だと、ゲームが進んでいるのを感じて少し上機嫌になる。

「そんなことでよければ、喜んで」

「では、よろしくお願いします。・・・老いぼれはこれで」

と、仕事を与えてからそそくさとその場を離れていく村長。何かと思っていたら・・・結構純粋な、一方的に向けられた殺気を感じた。ふとそちらを見れば、何と見事なことか、子供たちを統率し、こちらを睨んでいる夜子の姿があるではないか。

「・・・アハハハ」

「かかれー！」

『おー!!!』

今度は子供たちに、一輝が押し潰された。

「あー、腰いてえ・・・」

「お前も俺にやったことだぞ、分かってんだろうな」

「ったく、だからって一々やり返してくるかよ・・・」

そう言っている一輝も間違いないかやり返すので、お互いさまだろう。

「はぁ・・・それで、いいんだな？このまま間違はなく問題になることに巻き込まれる方針で」

「虎穴に以下略。なんにせよ、まずは挑んでみないと何とも言えんのだろ」

そう会話を交わしながら二人は子供たちを待つ。頂上で食べるものや飲み物などを準備するといって帰っていったためにそれまでの時間を情報交換に用いているのだ。

「そっちは何かあったか？」

「あー、そうだな。『友達百人もできたの！めずらしいことなんだよ！』って自慢気にいつてたな」

「・・・それだけ？」

「悪いかよ」

子供にもみくちやにされていたのだから、意味のある情報がないのがある意味では当然といえるだろう。むしろ、村長から情報を引き出している間子供たちを抑えていたのだからそれで十分だと考えるべきだ。

「しっかし、山登り、ねえ・・・」

「どんな形で人食いが出てくるのやら・・・」

「・・・守りたい、とでも思ってるのか？ゲームの登場人物に」

「悪いかよ」

その発言に対して、一輝は何も返さない。そしてそのタイミングで、子供たちの群れが二人の前に現れた。

『おまたせしましたー！』

「・・・耳がぐわんぐわんするから、お前ら音量落とせ」

『はーい!!』

「いや、だから・・・もういいや」

一輝が何とかさせようとしたが、聞く様子がない。大人しく諦めて、耳栓を倉庫の中から取り出した。

「さて、それじゃあ・・・行くか、お前たち」

『はあああああああああああああああああああ！』

「だー、うるせえ!!」

一輝のその人ことに対して、子供たちは全員そろって爆笑した。夜子もまた、その光景にほおを緩めます。

「・・・二度と、もう二度と、ガキの大群の世話とか見てたまるか・・・」
「そうそうあることでもねえだろ。・・・つてか、あれだな。ノーネームの子供たちつて、異常なほどおとなしいんだな」
「それな・・・何とかなると思ってた」

と、子供たちの後ろからついていきつつそう会話を交わす。ついさつきまではそろつてもみくちやにされており、飽きたのか何なのか今は子供たちだけで騒ぎながら進んでいる。

「さて、陰陽師的にどうなんだ？鬼は出てきそうなのか？」

「俺の世界を基準にしているのかはわからねえけど、正直いなさそうなんだよなあ・・・こう、瘴気がねえつてか、よどんでねえつてか・・・わかるだろ？」

「わかるか」

分かるわけがない。

「つてなると、もしかして村の方で何かが起こってるパターンか？」

「可能性はあるな。子供たちが返るとそこには食い荒らされた親兄弟が。100の子供たちは途方に暮れ、怨霊軍となる・・・なくはないか」

「後味悪い話だな・・・」

「妖怪伝承はそう言うのかギャグかの二択だ。だからその分、よけいに候補がいくらでも広がりそうなんだよなあ・・・」

そう言いながらも、一輝は頭の中で妖怪伝承をあさっていく。夜子もまた同様に妖怪伝承をひたすら思い出していくのだが、ズバリこれだというものは浮かんでこない。

「あ、お兄ちゃんにお姉ちゃん！もう頂上だよ！」

「ごっはん！ごっはん！」

「美味しい美味しいおにぎりだ——！」

と、そうしている間にも山の頂上についていたようだ。確かにこれなら子供でも登れるほどに低い。そしてそれはつまり・・・この山に

は、妖怪がない可能性が高くなってくる。

「……さて、これは困ったぞ。妖怪いなくなってる可能性がある」

「だとすれば……どうなるんだよ？」

「さて……そうだな。正直今一番可能性があると思ってるのは、正しい意味でのカーニヴァル……カニバリズムってところか」

「……まさかオマエ、あの村が」

「ねえねえ、何話してるの？」

と、小声で話していたところで目の前に少女が現れる。村長の言っていた孫娘だ。

「何でもないよ。一緒についていってくれ、なんていわれたから何かあるのかと思ってる。拍子抜けしただけだ」

「なーんだ、そうなの。じゃあ、もう食べてもいいのね？」

「ああ、食べる食べる。俺達のことには気にしなくていい」

「はーい。みんなー！食べていいってー！」

と、そう夜子が言ってる少女は子供たちの元へ戻りながらそれを伝える。それを聞いてから鞆に手を入れているのを見て、まさか許可を持っていたのかと少し申し訳ない気分になる。

「さて……改めて、どうする？」

「……ここまではつきりと村があつて、しかも謎の風習がある。だつたら、これがギフトゲームに関わっていないはずがないんだ」

「ああ、まあそうなるよな。ってか、そうじゃないとしたらミスリードにもほどがある」

「けど、ミスリードはむしろさつきまで考えてた鬼の方だろ。子供だけ、この人数で動く、ってなればその方が自然だ」

「神、って発言も現実以外の者がいるって言う誘導だろうな」

だとすれば。鬼による、妖によるものではないとなれば解答は一つ。先ほども話が出たように、人が人を喰らうパターン。

「だとすれば、やっぱり喰われるのはこの子たちだろ。襲われるのは弱いもので、言い方は悪いが若いほどいいにきまつてる」

「だな。だとすればやっぱり、この山で……いつそ山賊辺りにでも襲

われる流れつてのが自然なんだけどな……」

しかし、だとすればその山賊を鬼として伝えるのが伝承というものの。結果起こるのは堂々巡りであり……

「……外敵によるものではない？」

「それだ」

夜子のつぶやきに、一輝が同意する。外敵によるものが全て妖の類に書き換えられそうな状況。であるのなら、その要因は外にはなく……

「例えば、儀式か」

「だとしたら、今この状況まで含めてその一部……この後、誰かしらがるまわれる？」

「その可能性もあるんだが、どうにも引つかかる。何か、何か忘れて……」

と、そこで。ふと顔を上げただけの、それだけの動作だった。その動作で、自分がどれだけ愚かな判断をしていたのかを知る。そうだが、どうしてそれを除外していたのか。

そもそも、これは比較的と言うゲームなのだ。人間の『嫌がる』という感情を最後の武器とすることで、ゲーム内容に含まれている不利を、含まざるを得なかった不利を帳消しにしようという考え。それを持つて始めてゲームが公平なものとなり、審判権限でもってゲーム内容に対する改変を拒否できるだけの形になりえるのだ。

だから、そう。このゲームは、相手プレイヤーとの一騎打ちのような形であり。殺すのを忌避するような形を、最も好む……！

「夜子、あれを見ろ」

「は？何を……」

だから、今回は大人しく負けを認めよう。その上で、次の繰り返しでは確実に勝利できる。その為にも、相方にはその事実を見せつけなければならぬ。だから、夜子にそれを見せた。

「なんで、おにぎり、って、言ってたのに……」

赤い、血の滴りそうなほどに新鮮な、肉の塊を喰らう子供たちの姿を。

カーニヴァル ⑤

主人公 ☒ s Side

「なんで、あんな・・・」

ループ。その肉の塊を喰らう子供たちの姿を見ると同時に起こったそれは、その行為こそが人喰いであったことを証明している。だが、それをそうやすやすとは受け入れられないのが人間というものだ。

「はあ・・・うっかりしてた。あまりにもそろいすぎた情報のせいで、一番単純な可能性を無視してた」

だがしかし、もう一人はそれをすぐに受け入れる。彼の中に、人間らしさはろくに存在しない。

「一番単純な可能性って、なんだよ・・・」

「間引き、だよ。考えてみれば、当然のことだ」

そして、一輝はそれを語る。一輝が今回見たものから、持っている知識からつながった情報でもって、その回答を語る。

「当然のこと？あんな子供たちが、人間を喰うことか？」

「ああ。だって言ってただろ？『この村には上げられる食物がない』『農作業をしなければならぬから人手が惜しい』。そんな状況で、その場には百人もの子供だ。口減らしは必須だろうさ」

「だとしても！何でそれを喰うことに」

「食料が足りない、って言ってるんだろ。そして、そこにあるのは口減らした子供の肉・・・腹を満たせるものには変わりない」

だから、殺し、喰わせた。それが一輝の解答だ。

「・・・じゃあ、お前はこういうのか。被害者は偶然口減らしにあったかわいそうな子供で、加害者はそれから免れた運のいい子供、ってか！？」

「違う。その理由で殺すんなら、もう少し待って体が弱ってきたところでやる。村に必要なのは働き手になりうる子供だからな。他があれだけ元気な以上、その状態じゃない。・・・足が不自由な子供とか、そんなところじゃないか？」

若干の怒りを孕み始めた夜子に対して、一輝は異常なほどに冷静だ。

そして、冷静に爆弾を落とす。まずは、1つ目。

「だから、今回のゲームにおいては保護すべき被害者はその足が不自由な子供。殺すべき被害者はそれ以外の幼い子供全員。ころさなければならぬ共犯者は、残る村人全員」

「ふぎけん！それに、まだ確証はない！村長だつて言つてたんだろ、『100人がこの歳まで生きられた』つて！ならあれ以上の子供はいないはずだ！」

「足が不自由な時点で健康ではないだろ。それに、ガキの一人がこういつてたんだろ？『友達が百人もできたの』、つてさ」

「だから、そのどがおかしいって」

「冷静になれよ。この場にいるお前の仲間俺だけは一人、この場にいるのは二人俺とオマエだ」

そう、百人と友達になったのなら、あの場にいるのは百一人でなければならなかったのだ。しかし、実際にいたのは百人だけ。一人、足りない。そしてその一人こそが、今回の被害者であろう。

「・・・だったら、この伝承の正体は何だつてんだよ」

『一年生になつたら』、だ。一回くらい歌つたか聞いたことあんだろ？100人の友達と、100人で上る富士山。おにぎりつてのも俺達で言うおにぎりじゃなく、美味しい小さなサイズのもの、つて辺りになるんだらうな」

その一連の説明によって、夜子はもうそれを受け入れた。そもそも、子供たちが肉の塊を喰つたところは自分の目で見ているし、それによってループが起こつたのも体感している。最低限、彼らが人喰いであるということだけは、自分自身が証人となりえる。

「・・・なら、それでこのゲームは終わるんだな」

「ああ。そのことと、後はまあこれが『一年生になつたら』だつて考えると・・・あの百人の子供が『一年生になつたら』の霊格持ち、精霊群つてところか」

「ちよつと待て、精霊群つて・・・」

「ん?…ああ、そう言えばまだ今回のゲームについて説明してなかったか」

そして、一輝は説明を開始する。これは推理によるものでもなんでもなく、自らのギフトによるものだといってから、その真実を。

「このゲームは、主催者の霊格をもとに大規模なゲーム盤を作成、そしてコミュニティのメンバーをもとに小規模のゲーム盤を作り出して主催者側プレイヤーと参加者側プレイヤーによって行われる殺し合いだ」

「…ってことは、なんだ?俺達はゲームのNPCじゃなく、生きてる相手を殺すってのか!?あの罪のない、ガキたちを!」

「罪がないってことはないだろ。自発他発と問わず、人を喰らうことってのは一般的に罪だろうに」

「じゃあ、テメエにはそんな理由で、ガキを殺す覚悟ができるってのか!?!」

「何言ってるんだ、んなわけあるかよ」

一輝のその発言から、夜子は目の前の男がそれなりに理由を付け、この決断をしたものなのかと考えた。だが、

「ガキを百人殺す、千人殺す、万人殺す…そこどこに覚悟が必要になる?」

瞬間。夜子は、ほぼ反射的に動いていた。響くのは、乾いた音…

一輝の頬を、はたいていた。

「で、満足か?」

「んなわけがあるか。だが…それしかないのは、分かった」

「そうか。んじゃ、とつととやるぞ。面白味はあったが、飽きも早いゲームだったな」

そう言いながら立ち上がると、一輝は一度師子王を抜く。服装は黒い神主衣装へと変わり、檻の中身の力を限定的に引つ張り出す。

その力の元は、中華の鍛冶神蚩尤。その力で作り出したのは、地面と弾帯がつながる二丁のマシガン。

相手は三百を超える。その相手をチマチマ殺すのは割に合わず…いつそ暴力的なまでに、この武器はそれを成しえる。

「そら、行くぞ。まずは俺の小妖怪を先行させて足の不自由なガキを探す。それを保護したら、後は一気に撃ち殺すぞ」

「・・・ああ」

納得はしていない。理解もしていない。だがそれしかないことだけは分かっている。だから夜子は、その後が続く。そしてその後も、行動を起こした。その後のことは、嫌になるほど明確に覚えている。

自分自身は、嫌になるほど冷静に、マシンガンの引き金を引いていた。子供を守ろうと立ちふさがる大人ごと後ろの子供を撃ち抜き、家に向けて撃つて中の人間を殺し、目につく端から殺していった。

そして、自分以外のもう一人。一輝は、自分とは比べ物にならないほど精力的に動いていた。マシンガンで大人を殺していき、逃げ出した子供に向けて引き金を引いたまま銃を動かす。二方向に逃げたなら、片方にマシンガンを向け、もう片方の逃げた先に足元の死体の頭部を引っこ抜き、背骨の付いたそれを投げ込んでいた。恐怖で足がすくみ、座り込み、その時間でさらに殺していく。例えば、大部分を一輝が殺していた。

とても慣れた手つきで、より効率的に、より確実に
そして、ギフトゲームは終了した。

|||||

『ヤシロ、フェンリルペア。ミニゲーム『ヘンゼルとグレーテル』クリア』

『スレイブ、天夜ペア。ミニゲーム『うりこひめとあまのじゃく』クリア』

『十六夜、真哉ペア。ミニゲーム『カチカチ山』クリア』

『湖札、蛟劉ペア。ミニゲーム『あぶくたつた』クリア』

『一輝、夜子ペア。ミニゲーム『一年生になったら』クリア』

『全参加者のゲームクリアを確認。参加者側勝利条件が満たされました』

『これより、全プレイヤーの排出をおこないます。主催者側マスター

はこの場へお越しください』
全てのギフトゲームが、ここに終了した。

別れ

ギフトゲームが終了し、全てのプレイヤーが鳥居から外へと排出される。全員がそろい、彼らの前には一人の老人が膝をついている。

「負けは負け、このサトウルヌス、ここに隷属を」

「スレイブ」

「イエス、マイロード」

そして、隷属を誓おうとした彼の首は、次の瞬間には体から離れていた。単純明快に、一輝によって首を落とされ、絶命する。好みにもあわずに檻への立ち入りを拒否し、そのままその魂は消え去った。神霊であると考えれば再び箱庭に招待される可能性もあるが、倒されるべくして倒されたかれは、現れない可能性の方が高いだろう。

が、そんなことを考えている者は、この場には一人もいなかった。

「・・・一輝、今、何で殺した。」

「ゲームは面白かったが、本人がここまで面白みがないとは思わなかった。ぶっちゃけつまらん」

「そんな理由で、殺したと?」

「そうだけど?」

再び、その手がふるわれた。夜子もまた不愉快極まりないゲームを組まれ、その影響で殺したいと思うほどにはこのゲームをしくんだ魔王のことが憎くはなっていた。だが、しかし。そうだとしても。一輝のような理由で殺すことを是とできる程ではない。

だから彼女は平手を放ち、一輝はそれを容易に手で受ける。

「・・・お前は、最低だよ」

「そこまで壊れてるやつに言われるとは、だいぶ意外だね」

「だから!」

「黙れよ」

瞬間、一輝は本気で殺気を放つ。そしてそれは、夜子の放てるものとは度合いが異なった。

当然だろう。二人が命がけの戦いの中に身を投じた時期は、全く異なる。夜子は命がかかる戦いの世界に来たのは箱庭に来てからであ

り、そのスペック故に本当に命をかけなければならなくなったのはもう少し後だ。

だが、一輝は違う。生まれたときからその世界に生きることは決まっており、実際に4か5の時にはもう妖怪の命を奪い始めていた。最初のうちはまず負けない相手であったが、少し経てばそれも変わってくる。そして、人生の転機が訪れたのもそのほんの少し後だ。

単純に、生きてきた世界の違いだ。

「・・・んじや、俺は先に帰る。今日一日は部屋にでもこもってるから、好きに過ごしな」

さすがに空気を読み、一輝は頭をかきながら本抛の方向へ戻る。スレイブは無言で当然のようについていき、ヤシロと湖札はあきれ顔でその後を追う。その場に残されたのは表情を怒りで固めた夜子と、そのノーネームの仲間、そして十六夜の六名。

「あー・・・まあ、ああいうやつなんだよ」

「ああいうやつって、お前はそれでいいのかよ。お前も俺なら・・・同じ考えは、あるだろ」

「あー、まあ、あるんだろうな。けど、一輝の力は俺より圧倒的に上だ」
「だからってあきらめるようなタマかよ」

「仕方ねえだろ、俺はあいつには一生勝てない。そう思っちゃまったんだから」

夜子と十六夜は、同一の存在であり、全く別の人間だ。そして、既に二人とも原点とも大きく離れている。

例えば夜子は、それを精神性の異常として。

例えば十六夜は、圧倒的敗北として。

だからこそ、夜子が認められないことも十六夜は認められる。

「・・・あー、クソッ！」

そんな事実到现在気づいて、近くの木を殴る。簡単にへし折れた。

「落ち着いて、夜子ちゃん」

「これが落ち着いて」

「落ち着いて」

と、蛟劉に肩をつかまれ、視線を合わされることでどうにか落ち着

「何言ってんだ、こちとら単独でアジッダカーハ倒してんだぞ？そうそう負けるかってんだ」

そう言って、一輝は構える。夜子もそれにこたえるように構えた。ぶつちやけると、夜子のこの行動に深い意味は無い。言いたいこととかそれはもう無限に近いくらいにあるが、お互いに譲らない時は本当に譲らないと、彼氏との件ではつきり分かっている。であれば、それをゆがめるのに必要となるのは・・・圧倒的力、それによる勝利だけだ。

そんな野蛮な考えの下、二人は同時に地を蹴り・・・

|||||||

「ん？ここは・・・もしかして、戻ってきたんかな？」

「っぽいな」

と、夜子と蛟劉の二人がいるのは、元の世界。散歩中にくぐった鳥居の合ったあたりだ。

「なら、よかったんやけど・・・って、その頬どうしたん!？」

「ん？あー・・・一輝と殴り合いして、くらった」

「はあ!？」

何言ってんだコイツ、という目で蛟劉は夜子を見る。この場に真哉と可もいたなら、もつと騒ぎになっていただろう。そんな彼ららは都合主義で本拠へ直送されました。

「ちよ、え、なんで!？」

「や、考え変えてくれそうにねえし、だったらブツ倒そうかと思つて・・・一方的に喰らった」

と、そう言いながら無茶苦茶腫れた頬を手で抑える。そうして触れただけでかなりの痛みがあった

「はあ・・・次はブツ飛ばす」

「そ、そか・・・アジッダカーハに単独で勝てるだけの力をえるわけか・・・」

「ああ」

「マジかぁ・・・」

自分のギフトゲームの難易度が上がったことを蛟劉は実感して：：それでも負けるわけにはいかないと、己のエゴを強化した。

|||||

「ふむ・・・ま、さすがにあれを喰らうことはないな」

と、夜子の意図もほとんど分かっているまま、一輝は殴った手をぶらぶらとふる。相手の攻撃はしっかり避けたので、完全に無傷である。

「さて、どうしたもんか：：あのわけ分からん喧嘩は面白かったし：：ふむ・・・」

そして考えるのは、ゲーム中に試してみたことだ。憤慨し、その上で己を押し込んでクリアへと向かった姿勢は、一輝的にはマイナスだ。それしかないと分かっている、その上でそれを拒否するような狂い方。それが見れるかと期待していただけに、それがなかったことは一輝としてはない。

だが、その後は面白かった。まさか自分が意図をつかめないような行動を取ってくるとは、完全に思っていなかったのでこの上なく面白い。

というわけで、色々考えた結果。

「・・・ま、保留でいいか」

と、投げ槍にも聞こえる判断を下す。

しかしこれはそう単純なものでもなく。次会った時の行動がつまらなければためらいなく殺し、面白ければ友人として自分にできる最大限の協力をしてやろう、と。そしてもし一輝が思いよらないような面白い出来事と一緒に来てくれれば、そのときは遊びに弄り倒すこれまで通りの関係でいるだけ。

「ヤー、帰って寝るか」

|||||

これが、わたくしの描く一輝と夜子との物語。

二人はともに歪んでおり、壊れている破綻者だ。

だがしかし、その方向性が全く異なり。

それ故に、その思いは非日常においては衝突する。

そんな二人の次の出会いがどうなるのか。何を生むのか。どんな関係へと変化するのか。

片方が命を落とすかもしれない。予想がつかないほどに友情を得るかもしれない。全く想定外の何かが生まれるかもしれない。

ただ一つ定まっているのは、殺し合いから始まるという一点のみ。

その結果がどうなるのか・・・さて、それが紡がれる未来は来るのでしょうか？

上層巡り編

一つの日常 キメラと三頭龍 ①

「ふう・・・暇だなあ」

その日、春日部耀はぶっちゃけ暇であった。

念のために言っておくと、別に彼女がサボっているとか逆に張り切り過ぎて休めと怒られてしまったとかではない。問題児たちは、箱庭という異世界を全力で楽しむ、住み家の食い扶持くらいは稼ぐ、働かざる者食うべからず、といった考えは共通している。それ以上に面白そうだと考えてしまったことがあればその仕事は放棄したりするものの、その時はその時でその新たな面白そうなことに全力を出すのだ。よって、今の耀のようににはつきり心の底から『暇』の文字がわき出てくることは普段であれば稀である。

しかし、今はその『普段』ではない。もう絶対悪の爪痕もなくなっているし、しつかりガッツリ復興も終了したとはいえ、それは下層としてのものでありノーネームとしてのものではない。しかもなぜかリーダーとそのお付きが一緒に消えるというどうしたものかの事態まで発生しているのだ。いくらなんでも、これまで通りというわけにはいかない。

と、いうわけで。問題児四人＋黒ウサギ＆レティシアの多数決によつて暫定リーダーとして一輝が指定され、結構な報酬も入ったこともあり別段急いでやらなければならないこともない。だったらもう休息の期間にしまえばいいんじゃないかね？といわれわざわざ仕事としてやるのがなくなり、その時間が開いてしまったのだ。唐突に時間が出来れば、空暇にもなる。

と、長々と語ったが要するにそう言うわけである。これだけ言っておけばノーネームの現状説明全部すんじゃないやあって楽でいいよね。

と、暇な耀。問題児と暇の相性は最悪であり何が起こるか分からない爆弾でしかない。もういつそのこと街に出て大食いでも荒してやるのかと考えだしていたところで・・・ふと、一人の人物が視界に入っ

た。

「ん、あれは・・・？」

普段執事服であるために一瞬誰なのか分からなかったが、彼女の視覚情報はその人物名を弾きだしていた。

褐色肌に黒のオールバック、斜め後ろから故に一瞬だけ見えた目は鋭いツリ目。そんな特徴を備えた人物はこのノーネームに一人しかない。しかし、やはり服装が違う。というか執事服意外には見たことがないために、はつきりと自信をもって彼であると断言できないのだ。

だからこそ、彼女のなかで興味が勝った。

迷わず靴から羽をはやして屋根を跳び下り、その人物の隣に降り立つ。すぐ隣から見てもやはり間違っていないと確信した。

「ヤッホー、アジィダカーハ」

「ム、確か・・・カメラの」

ムツ、と。さすがにその呼び方はないだろうと思い、迷わず反論する。

「せめて人間扱いを付けたしてほしかった」

「ではカメラ人間か？」

「・・・それはそれで何か嫌だな、うん」

しかし残念、まだ彼は全員の名前をはつきりとは覚えていなかったのである。なんだかんだで頑張ってはいるのだが、こればかりは生物としての格が違うのだから仕方ない。彼の今後の頑張りに期待しましょう。

「まあとにかく、春日部耀です。コミュニティの同士として、今後よろしく」

「なんだ改まって、気持ち悪い」

あれ、こんなキャラだったっけ？一輝のせいなんだか大変な問題が発生していないか？そんなことを察した耀だったが、一瞬でその考えを捨て去った。

それにまあ、うん。思いつきり殺し合った相手に対してこれは確かに気持ち悪いといわれても分からないではないのだ。自分があつち

の立場であつたとしても気持ち悪い。

「けど名前覚えててもらうにはこれくらいの方がいいかなあ、つて」

「なるほど、確かにインパクトの有無は大きいな」

「そう言うこと。そういう意味合いでも一輝なんかは簡単に覚えられたんじゃないの?」

「私を討ち取った相手のことはさすがに覚えているな」

一応参加していたし覇者の光輪も防いだりしたんだけどなあ、とか考えながらやはり気にしないことにする。そもそも規格外の存在なんだから細かいこととか気にしてもダメだ。強者⇨変人。これ箱庭の鉄則。

「ああ、それと一つ」

「うん?」

「一輝から種別を付けられたのだから」
「種別て」

呼びかた差分のことです。

「人化している間はアジさん、らしい。むやみに本名を出しても面倒事しか起きないのだから、とな」

「あー、そういえばコミュニティ関係者以外には知られてないんだっけ?」

「黒死病や箱庭の騎士の比にならないレベルであろうからな。隷属以上の縛りにあるとはいえ、それで納得するものでもなからう」

確かに、絶対悪の魔王。人類最終試練の一角がしれつと下層で生きてるとか。白夜又みたいにどこかの庇護下にあるわけでもなくただのノーネーム傘下としてだ。これは間違いなく面倒事になる。

「因みに、トカゲの時は?」

「アジ君、だな。三頭龍状態の時はアジ⇨ダカーハでよい」

一輝の悪ふざけが垣間見えるのだが、やっぱり気にしない。

「さて、それでは本題に入ります」

「ようやくか」

「まあ、うん。ぶつちやけると、どうしたのその格好?」

ようやく彼女がアジさんの服装に突っ込んでくれたので、彼の装い

について説明していこうと思う。

まず服そのものだが、黒いシャツに淡い色のカーディガン、ジーパン、スニーカーとこの上なくシンプルであるが故に素体そのもののレベルの高さを強調する。シャツのボタンは多めに開けられていてカーディガンも羽織るだけのためにその引き締まった体もはつきりと目に見えている。

その他にもベルトからポケットへ、手首のブレスレット代わりなどにシルバーアクセが入っており、耳にはイヤリングが。

一見チャラそうな男性、がしかし纏っている雰囲気がある印象を一切与えてくれないような。ぶつちやけると近寄りたくなるような、そんな雰囲気醸し出している。

「というか、ピアスじゃなくてイヤリングなんだ。結構印象の外側」

「ピアスなどしていたら有事の際耳ごと引きちぎられるであろう」

「何この考え方怖い」

これが一切冗談ではないのが怖いところである。一輝やアジさんがピアスをしている相手と徒手でケンカするとなれば真っ先にピアスをつかんで耳の肉ごと引きちぎる、右手親指人差し指で相手の右耳をつかみ、目を潰しながら引きちぎる等々を迷わず実行する性質であるがための考えなのである。けど普通に考えて人化しているとはいえ龍種の体を引きちぎるとか不可能ではなからうか。

「で、どうしたの?」

「何、一輝から命令・・・のようなものを出されてな」

「命令?」

「金はやるから遊んで来い』だそうだ」

「.....」

『どうせこれから先長いこと箱庭でノーネームの奴隷するんだから、とつとと普通を知って来い』だそうだ」

「普通とはよっぽど程遠い人間が普通とか言ってるよ・・・」

というかノーネームの奴隷って、アジさん的にはそれでいいんだろうか。これでも私たち・・・というか下層のプレイヤー全員がかりで命がけて倒した大魔王なんだけど。何だろうこれ。

「まあそう言うわけだな。遊ぶとなれば私服もいるだろうと、一輝の服を借りたのだ」

「あ、一輝ので着れたんだ。アジさんの方がそこそこ大きいように見えるけど」

「変装用だそうだ」

一回一輝の倉庫の中を探検してみたい。ものすごく面白いものがたくさんありそうな気がする。農場もあるって時点でありえない状態なんだし。太陽とかどうしてるんだろう。

「というわけで、そろそろいいか？私としてもこうして人の視点で見て回るのには興味がある」

「あ、うん。呼び止めてゴメン。もう大丈夫・・・」

と、うん。ここで彼の目的を思い出して、ちよつと大丈夫なのだろうかと思った。というか、うん。

「問題、おこさないよね？」

「・・・規格が違うのだから起こしかねないな」

「その件について一輝は？」

『今の俺ならそこそこの発言権あるし何とでもなるだろ』と丸投げであつたな」

「オーケーとつても一輝らしかった」

わたしとか飛鳥、十六夜、一輝レベルならそれでもいいのかもしれないけど、絶対悪の魔王に対してそれはマズい気がする。というわけで。

「私もついていっていい？」

「かまわないが、よいのか？」

「うん。正直暇だったし・・・一輝の言うとおり、今後も『ノーネーム』の奴隷をするならいい加減なれないとなあ、って」

正直今でも大丈夫なのかなとは思ってるわけなんだけど、まあそうも言ってもらえない。私たち三人はやっぱりまだ壁を作ってるわけだし、誰か一人でもその先にいければ何か改善するかもしれない。

あと、魔王の側面と一緒に過ぐす側面は案外違ったりするし。ペストとか弄つてると結構楽しかった。

「じゃあ、街に行こうか。何がある、ってわけじゃないけど」

「何もないのか？」

「私の視点では、何か特殊なことはないかな。ゲームくらいは開催してると思うけど、さすがに参加するわけにはいかないし」

私もだけど、それ以上にアジさんが参加するわけにはいかないと思ってる。

一つの日常 キメラと三頭龍 ②

「食べ過ぎではないか？」

「全く同じ量を食べてるアジさんにそんなことを言われても」

これといつて参加できるゲームもなければ面白い見せものがあるわけでもなく、そして面白おかしく引つ掻き回せるものがあるわけでもない。となればもう食べ歩きくらいしかやることがないわけで。

どれくらい持たされてるのかと確認したら一輝の財布を丸々持たされていたから、遠慮なく食い倒れの費用にさせてもらっている。大丈夫、アジさん一切止めなかったし。

「それにほら、一輝から『遊んで来い』って言われたんでしょ？」
「言われたな」

「そして私の知ってる気軽にできる遊びは『ギフトゲーム』か『食い倒れ』だから」

「なるほど。言われたことをこなしている、というわけか」

と、そんなことを話しながらまたどんどん買い込んでいく。片手で歩きながら食べられるものは食べながら、それ以外はいったんギフトカードにしまっておくことにした。買い込み終わったらどこか座れるところを探して食べることにしよう。

と、そういえば。

「超今更だけど、アジさんもギフトカード持ってるんだね」

「ギフトカード・・・ああ、ラプラスの紙片のことか」

と、そう言いながらアジさんはポケットから真っ白なギフトカードを取り出す。今はほとんど全ての能力を一輝の中においてきている状態らしく、しるされているギフトも「龍種」、*「龍影」*の2つだけ。名前の欄にも一体何をしたのか「アジさん」とだけ記されている。まあこれなら取り出したとしても大変な騒ぎにはならないだろう。

「何、*「ノーネーム」*の執事をするなら必要だろう、といつて一輝に渡された」

「待遇厚いな一輝」

「家事関連、警備関連で有能な人材にはそれなりに対応する、とのこと

だ」

「どう考えても必要以上の人材だよ、うん。もう今更か。

「えっと、うん。本当にこんな扱いでいいの？アジさん的には」

「敗者の務めだろうさ。それに、やってみればリリたちと仕事をするのはそれなりに楽しく、和菓子は美味だ」

「和菓子好きなんだ」

「大好物といって過言ないな」

「・・・それならおすすめのお店があるけど、行く？」

「是非とも」

うん、これではつきりした。危ないんじゃないかとかあの戦いのこととか気にしてたけど、なんの問題もないな。立場的には下っぽいし、今後は一切遠慮しない方向で行こう。

|||||

「いかがでしたか？私のおすすめ和巡りは」

「言葉もない。つい買いすぎてしまったとは思うがな」

「ま、その分はお土産ってことにすればいいんじゃないかな」

あの後。個人的にお勧めの和菓子屋さんに行ってお店で食べて食べて食べまくってお土産を買ってから、であるのならと和巡りをしてみた。主に、というか食だけで。ひたすらに日本の食を攻めて攻めて攻めまくったのだ。気に入ってくれて何よりである。

「しかし、悪かったな。聞くところによると、今は箱庭に来てから初に近い完全休暇期間だったのだろうか？」

「いやいや、お気になさらず。むしろ急に長い休暇をもらっちゃって超暇なの。暇を売って一儲けできるくらいに」

「であれば本抛の仕事を手伝えばよいのではないか？」

「私たちプレイヤーには、それが禁止されているのです・・・」

その辺りすっかりしましょう、という方針なのだ。戦うことのできない子供たちは、稼ぎを持ってくるプレイヤーのために。そこにプレイヤーが混ざっては意味がない・・・とか何とかで。主に黒ウサギが

うるさいのだ。

「一部、プレイヤーと兼任している者もいるようだが？」

「それは隷属してる立場なんだから、ってことらしいよ」

その辺り、是非現リーダーの一輝には変えていってほしいものだ。めんどくさがりな性格は私たちと同じなんだし、それくらいしてくれてもいいと思う。

「まあ何より、私も一輝のお金で食べたいだけ食べれたし」

「確かに、だいぶ減っているな」

大丈夫、使つていいつて言ったのは一輝なんだから。

「さて、と。それでどうでしたか？一日遊んでみた結果は」

「そうだな・・・ああ、悪くない。そんなところか」

「そっか、それはよかった」

悪くないつて思ってくれたのなら、今後も大丈夫だろう。何があつても何とかなるはずだ。・・・たぶん。

「さて、そういうわけだ。オマエにはその礼をしなくてはな」

「お礼？別にいいよ、同じコミュニティの同士になるんだし」

「それでも、だ。それに・・・一輝関連で聞きたいことがあるのではないか？」

と、そう言われて。正直それを狙っていなかったわけではないから、遠慮なく聞くことにした。

「そう言ってくれるなら遠慮なく聞くけど・・・えっと、いくつか聞いても？」

「ああ、構わん。答えることを禁止されていることでなければな」

「・・・禁止されてること、あるんだ」

「ああ。曰く、「ギフトゲームの答えは教えない」、だそうだ」

言われてみて納得した、それはそうだ。当たり前にもほどがある。

そもそも、一輝の主権者権限『一族の物語』。それをクリアするため一輝関連での知識が必要になるのは当たり前のことだし、それを教えられるだなんてプレイヤーとしてありえない。

「じゃあ、うーん・・・そうだなあ・・・そもそも、鬼道の一族、つて何なの？」

「・・・一言で言うのなら、世界を救う英雄の一族、だな」

「外道なのには？」

「輝かしい英雄譚、その裏にあるものなど圧倒的畏怖か迫害であろうよ」

はつきりそう言われてしまうとそうなのかもしれないと思う。英雄に倒される存在であるところのアジールダカーハにそう言われるとなおさら説得力がある。なるほどなあ、と焼きそばをすすりながら感心した。

「でも、うん。やっぱりおかしいよ」

「ほう、おかしいか」

「うん、おかしい。だって、それを成すだけの功績が箱庭には一切記録されていないんだから」

「・・・なるほど、プレイヤーとしての才はあるらしい」

揚げパンを食べながらそう言われたので、この考えがそれなりに正しいものだったのだと実感できた。正直怪しいところ満載の考えだから自信はなかったんだけど。

そもそも、箱庭に招待されるということは何らかの形でその祝福^{ギフト}なり功績なりが評価された結果だ。そして、そう言った実績の証明の形は多岐にわたる。

例えば、エジソンやノーベルのような発明品として。

例えば、豊臣秀吉や始皇帝、ナポレオンのような歴史に残る行動によって。

例えば、ヘラクレスやペルセウスのような神話として語られるだけの要素として。

例えば、十六夜や殿下のような世界を救う未来を祝福された形として。

例えば、私や飛鳥のようなギフトの回収の手段として。

それぞれ、箱庭へ招待されるだけの理由はそんなところだ。では、一輝はどうなのか。

ギフトの回収。それは理由として成立するだけのものとして間違いない。『無形物を総べるもの』だって一見そんなにだけ重力を

操ったりと外に放置しては危険なものだし、神霊すら封じて自在に扱うことのできる『外道・陰陽術』は言うまでもない。それこそ、目の前にいるアジィダカーハレベルですらできてしまっているのだから、本当に規格外すぎる代物だ。

そう言った要素だけで見ると問題はないのかもしれない。けれど、一輝は『英雄』の一族なのだ。箱庭に始めてきたときにも黒ウサギが言っていたけれど、そう言った何かしらは『語られている』何かがあつて初めて成り立つ。いや、英雄的功績があることと語られている何かしらがあつてイコールである、と言った方が正しいのか。

なんにせよ、そう言ったものはずなのだ。しかし、何度も言うように一輝はそれに当てはまらない。一輝から聞く世界観に当てはまる何かしらの物語なんて私は知らないし、一輝から聞いた文化レベルの背景や西暦なんかからも私よりも後の時代で生まれるものではない。英雄として一輝が存在することだけは、絶対にありえない。

「もちろん、私が知らないだけでこの箱庭のどこかで記録されているのかもしれないけど、」

「安心していい、それはない。一輝とどうかしたことで私は知ってしまったが、それこそ『ラプラスの魔』であつても知らないだろう」

それは、うん。だとすれば箱庭のどこであつても誰であつても知らないレベルだ。

「そしてこれはサービスだが、私の正体のように今後何らかの形で箱庭から観測される事象ですらない。むしろ、本来一輝に関する出来事が箱庭より観測されることは絶対に起こりえないのだ」

「・・・まっつて、え、ちよつと待つて」

一輝に関する出来事が一切観測されないはずだった。そして一輝は『世界を救う英雄の一族』であるんだから、つまり『一輝がいた世界は箱庭から観測できない』つてことで・・・

「でも、それなら何で一輝が箱庭に来ることが出来たの？」

「それはかつて、まだ名のあつたころの『ノーネーム』に所属していたという一輝の先祖によるものだな。黒ウサギが招待をすることと

なり、その際に初代との縁が、低すぎる低確率のもとほんの一瞬つないだのだ」

つまり、本来なら一輝が呼ばれることはなかったんだけど偶然に偶然が重なってしまった結果一瞬繋がった、と。そう言うことなのだろうか。

それは、うん。その奇跡に感謝してもいいかもしれない。

「つまり・・・鬼道Ⅱ英雄であり、また強すぎるために迫害された一族である」

「うむ。まあ、時代の流れと共にその状況もそうでもなくなったようだがな」

「そして一輝のいた世界は何らかの要因αによって箱庭から観測することのできない場所に存在している」

「そうだ。例外的に関わってしまったのは一輝、湖札、清明そして初代鬼道の4人だけだ」

「・・・余計に分らなくなった」

これが歴史に埋もれて伝えられなくなってしまった英雄のお話、つて言うんだつたら分かりやすかつたんだけど。そんなこともなくなつてしまった。

というか、うん。本格的にこれは難しすぎる事態だぞ。アヴェスター、アヴァターラ、そして十六夜のみたいなはつきりと分かる疑似創星図とちがって一輝の使う疑似創星図はどれもこれも全くわからないものだし。

.....

「謎が余計に深まつただけなんだけど」

「まあ、そうであろうな。そしてこれ以上は立場上答えられない」

「つまり、そこそこ答えに近いところまで来てる？」

「その一歩がどれだけ遠いのか、それは分からんがな」

うーむ・・・これ以上は引き出せそうにない。けど、あと一個だけ。

「その理由には、貴方が完全に消滅せず、同時に『絶対悪』がクリアされてることにも起因してる？」

「言っておくが、白夜王や第三種永久機関のように、『クリアしても箱

庭に残る』例も存在する」

そう言えばそうだった。

「その上で言うと、確かに私は一輝のその要素によって完全に切り離されているな。もはや箱庭で何をしようと、外界への影響として及ぼすことは不可能だ」

「断言できるレベルなんだ」

「一輝が私の力を使い、という形であれば何かしら可能かもしれないがな。すくなくとも『絶対悪』として出来ることは存在しない」

うーむ、つまりその辺りに何かしらの理由がありそうだ。ついでに一輝の持つ霊格が異常なほどに大きい・・・それこそ、外界を救った場合と同じくらいの大きさを得られる理由も、一緒に考えられそうだし・・・

「・・・よし、分からない」

「あまりにもあつさりしているな」

「うん、正直まだ情報不足な感が否めないし。今はとりあえず買ったものを全部おなかに収めていかないと」

「まだ夕食もあるのだぞ?」

「うん、だからこの量なんだよ?」

おや、今何かヒかれた感じがするぞ? おかしいな。

「まあ確かに、大丈夫か。美味しいものはいくらでも入るものだ」

「さつすが分かってるねアジさん。そう、美味しいものはいくらでも入る。こうして買いまくったものは全部美味しいし、リリの作るものも美味しいんだから」

「確かに、リリの作る料理は不思議なほどに美味しいものばかりだ」

互いに互いの目をまっすぐ見て、ただ無言で握手をする。もう、あの時の殺し合いとか関係ない。ようやく、本当の意味で彼を受け入れられた気がする。

「・・・そうだ、アジさん」

「なんだ、春日部耀」

「私と友達になってください」

「・・・友、か」

と、少し黙って考え込むアジさん。

「・・・不思議なものだ。まさかこの私が、友を得る日が来ようとは」

「そんなに不思議？」

「かなり、な。だが、悪くない」

と、繋いだままの手に力を込めてくる。

「これから、同じコミュニティの同士として、友として、よろしく頼む」

「うん、こちらこそ。友達一号としてよろしくね」

また和菓子食べ歩きとかしたいものだ。

一つの日常 化け物と怠惰

「さて、どうしたもんかな・・・」

と、少年は目の前に並べたものを見てこぼす。

そこに並べられているのは真つ黒なロングコートに仮面を始めとした、一輝に渡された装備の数々。その全てを使いこなせるようになったら弱体化するとはつきり言われたそれなのだが、しかし今彼が最も求めている力である。故にこそ、どうしようもないものが一つあるのがどうしようもなく悩ましく・・・

「・・・ひとまず、武器関連の専門家に聞いてみるか」

誰かを頼る。たったそれだけの、しかしこれまでの彼だったら間違いないと考えなかったであろう選択肢。それを迷わず実行できる程度には、彼は精神的に強くなっていた。

|||||

「というわけで、なんか選択肢はねえか？」

「いやー、うん。めんどくさいから面倒なんだけど」

というわけで。場所を十六夜の自室から武器庫に変えて、彼はそこに居座る鍛冶神へと相談を投げかけてみた。仮にも中国神話において全ての武器を生み出したと言われる鍛冶神だ。何かしらいい手段があるはずだという考えの下である。

がしかし、いかんせんめんどくさがりであった。大丈夫かなこれ。「それにほら、こんなもん改良のしようがないでしょ。どうしろって言うのさこれ」

「そこを何とかするのが神様の仕事じゃねえのか？」

「いやうん、神様だって万能じゃないんだよね・・・」

と、自前で持ってきた椅子の前後を入れ替えて座る十六夜に対して、頭をかきながらむき出しの武器の上に胡坐をかく蚩尤。ちよつと不思議な光景ではあった。

「それにさ、暗技習そったのだったでいぶ前なんでしょ？なんで今更に

なってきたいてくるのさ」

「復興作業なり賑やかしのギフトゲームなり、なんだかんだ忙しかつたんだから仕方ねえだろ。おチビがいなくなつた件でも色々あつたしな」

しかし今は、全部終わった上リーダー代行の一輝が休みを宣言してしまつたのですっかり暇になつたのだ。要するに耀と全く同じ状況になり、彼女が暇をつぶすことに困つたのに対して、彼は身近な問題を解決していくことへベクトルを向けた、というわけだ。

「なるほどなるほど・・・事情は分かつた」

「そうか、それはよかつた」

「しかしだね。それにしてもだね。確かに武器ではあるのだけれどね」

と、そう言つて。彼は今議題に上がつているそれを。来るなり「これを改良してくれ」と投げ渡されたそれをつまみあげる。

「ワイヤーとかピアノ線の類つてのは、結構手のつけようがないものじゃない?」

「ごもつともである。」

「しかしだな。他は大概全部何とかなつたつてのにこの関連だけはどうしようもねえんだ」

「それは君が頑張つて努力すればいいことじゃないの? 身体能力高いんだから、自分に似合わないつてわかつてたとしてもそれなりに頑張つてみるべきジャン? というわけですぐに出もここを出ていつて僕に楽園を返してよ」

「だが断る」

安定の問題児である。敗北によつて精神的に変化したとしても、本質の部分は一切変わっていない。魂レベルでの問題児である。

「それにだな、そもそもワイヤー、ピアノ線関連の技術は八割方会得不可能だ」

「そう言う逃げ、僕よくないと思うな」

怠惰の化身じみている奴が何を言い出すというのか。

「まあ話は最後まで聞け。当然つちや当然だが、こいつらを使う技術

は罠に近い利用をしていくブツだ」

「そりゃそうだよ。爆弾絡めたワイヤートラップ、相手の首の高さに斜めに張つての頸動脈切断、あえて緩く設置して引くことによる拘束等々・・・ぱっと思いつくだけでもこんなところかな」

「そうだな。まあ確かにそう言う系統だし、それらについてはまあ問題なく使える程度にはなつたんだが」

しかし、だ。そんなあれこれはもう既に、彼なりに努力とか言うものをして何とかしてみたところなのだ。問題になっているのはその後の話であつて。

「呪力をワイヤーに巡らせて自在に操る、視認できない刃とか言われども無理つてもんだろ」

「それは無理だねうん僕が悪かつた」

呪力ない人間にどうしろと言うのだろうか。

|| || || || || || || || || ||

鬼道流戦闘術。体術、剣術、槍術、弓術、戦術等々歴代鬼道がより効率よく妖怪を殺すためであつたり趣味の一環であつたり人間に殺されないための対策であつたり暇つぶしであつたりと様々な理由で生みだされた技術の山であり、その中に一輝から十六夜へと伝えられたのが暗技である。

基本的には、一般的にイメージされるそれであつていはずだ。侵入する技術であつたり、気付かれずに殺すための技術であつたり、毒や薬といった手段であつたり、正面から戦うフリをしつつの罠であつたりなのだが、その中でもワイヤー関連の細いブツを用いるものだけは、普通にやつては不可能になつてしまう。十六夜も述べたように呪力が絡んできてしまうのだ。一輝、もう少しちゃんと考えて技術の継承を行いましよう。

「というわけで、だ。完全に自在に扱うのはあきらめてるから、その分ある程度自在にできねえかな、と」

「それで僕のところを持ち込んできたわけか。なるほどなるほど、諦

めない?」

「だが断る」

「それ言えばいいとか思っちゃいないよね?はつきり拒絶すればなんでも何とかできるとか考えちゃいないよね?」

もしかしたら考えているかもしれない。作者が。

「うーん、しかしそうなるともた面倒が多いんだよなあ・・・」

「面倒が多いってことは・・・何かしら手段はあるのか?」

「うーん・・・鞭に近い扱い方をできるように調整したり、リールっぽいものでも増設して巻き取ったりでもしてみても、何かしらそれっぽくできるように、かなあ。あとは超単純だけど、なんか小型の剣かクナイでもくつつけて投げる」

「あー・・・確かに、ぐまかし程度は可能か」

もちろん、本当に自在に操る手段なんぞ存在しない。強いて言うのなら自前で伸縮可能な金属が箱庭に存在するもの、かなり貴重な代物であるために下手をすれば使い捨てになる武器に使うなんぞ不可能である。

「けどそれはそれとして神珍鉄製のも作っといってくれ」

「あれ加工するのめんどくさいからあげなかつたって言うのに・・・」

さすが用意周到な十六夜君。どうやったのか本当に謎だけどどこかしらから調達してきたらしい。

渋々、一輝から「まあ頼まれたら仕事はしろよ」と言われたために本当に渋々。その場で受け取ったものを全て並べて手で触れ、作り替えていく。

「ってか、考えてみたら鞭扱いするのは不可能じゃねえのか?物理的に」

「その辺りはちゃんと、何とかするよ。色んな金属を混在させて質量面とか色々、ね」

「・・・さすが鍛冶神サマ、器用なこって」

普通に考えたら不可能なだけけれど、そこは鍛冶神の不思議な技術ということに納得しておこう。と、小さなロマンに踊る心を抑え込んで手元から顔へと視線を移す。

「さて、それはそれとしてだ。質問いいか？」

「え、勿論嫌だけど」

「即答かよ」

「面倒事は嫌いなんだよネ、ボク。・・・まあ、作業中くらいはいいかな」

と、視線は手元から動かさずに話を促す蚩尤。それに対して十六夜は一切回りくどいことを考えずに、単刀直入に切り出す。

「ぶっちゃけ、鬼道って何なんだ？」

「その話をするのは大変面倒だからパス」

「そんなに面倒なのかよ」

「大変面倒ですよ。それはもう、外界の誕生から語らないといけないレベルで」

しれっと大そうなことを述べられてしまった。

「じゃあ、そうだな・・・あれだ。アジィダカーハとの戦いの時、一輝の体から出てきたよくわからない霧。あれはなんなんだ？」

「それも却下。さっきの話の原因について話してたら同じ話をしなくちゃいけないじゃん。面倒面倒」

あれもダメ、これもダメである。気になることは何でもそう。

「つたく・・・だったら何なら語れるってんだよ」

「君が気になってることって、基本あんまり語っちゃいけないことだしなあ・・・下手をすれば箱庭って世界そのものがその事実にもロジックエラー起こしかねないし」

「・・・そんなレベルなのかよ」

「理論上、箱庭から観測できない世界なんてものは存在しない。だって言うのに僕らの世界は観測不可能なんだ。箱庭の定義からして狂うような事態がロジックエラーにならないと思う？」

「・・・本当に、面倒な事情が存在するんだな」

「ホントにねー。彼がこの世界に存在する、って言うのは問題なくイケてる辺りなんだかねどかなるのかもだけど」

と、そう言っつて一個出来上がったものを十六夜に投げ渡す。その確認をしておくように言いながら次のものに手を加え始める

「けどまあ、そうだなあ・・・彼のギフトゲームをクリアできればその辺の諸々は何とかなるんじゃないかな、つては思うよ。それにあたり、1つだけヒントを上げよう」

「・・・なあ、お前は何がしたいんだ？」

「面倒を避けたいだけ。だったら今君に一つ情報を出しておけば、それについて考えだしてこれ以上の面倒事は避けられるかもしれない」と、そう言つて。一輝から借りている空間倉庫を開けていくつかの金属を取り出していきつつその言葉を吐き出した。

「一輝が今受けている信仰。これの大きさは箱庭から観測できる全外界の存在質量と等しいよ」

「それはそうだろ。アイツの出自がどうであつたとしても、事実として箱庭から観測される全外界を救つたのと同じことだ」

「うん、そういう結果として得たものであれば何の問題もない。封印されてたとはいえ箱庭に来る前からそうだったって言うのもまあ、同じことだね」

余計めんどくさくなくなつてきたか・・・？などとつぶやきながら、それでもちやんと最後まで語る。

そう、同じこと。人類を、世界を救いうる存在として霊格を得るのは十六夜のような例がある以上なにもおかしなことではない。が、しかし。そうではないのだ。

「一輝がその霊格を得たことと絶対悪の一件は全く関係ない問題だ」
「・・・は？」

「絶対悪の討伐。この功績を一輝は手に入れたけれど、その霊格を彼は得ていない」

「・・・さて、ちよつと待て」

「それらとは全く関係ない部分。それによつて・・・まだ成していない、いずれ成す功績への祝福^{期待}によつて、彼の霊核の全てが構成されている」

言われてみれば、当然の事実。箱庭から観測することのできない世界で生まれた存在が、箱庭から観測することのできる世界を救うことで霊格が構成されているわけがない。箱庭から観測できる世界を

救った霊格を得られるはずがない。

しかし、それでも。代々受け継がれていく一族の積み重ねという点を除いても。一輝という人間は異常だったのだから、そこへ想像を届かせることができなかった。

だがしかし、この発言からはつきりしたこともある。

寺西一輝とは、鬼道一輝とは。明確に世界を救いうる存在であり、そう言った未来を期待された存在であり、それ故に未だ自らの功績を明確に得ていない英雄なのだ。そうとわかれば、ギフトゲームの考察も少し進む。英雄を英雄と定義するために必要なのは明確な悪役。もつとも重要な部分が分かれば後は自然と発覚する。

する……のだが。

「……やっぱ世界の成り立ちかあのもやの正体を教えろよオマエ。結構なヒントを出したフリしといて全くわからないままじゃねえか」

「チツ、ばれたか……」

「当たり前だ。一輝の霊核がそこまでなる以上、箱庭から観測不可能である理由」と「鬼道の一族の役目⇨倒す相手」がイコールかそれに似たもので繋がれるのは確実だからな」

「ごもつとも。けどもう依頼は終わったからここまでだよ」

と、そう言いながら手を加えた、あるいは新たに作り出したものを全て風呂敷で包んで投げつける。唐突に神の力で投げつけられたそれを片手で受け止めると、もう少し何か聞きだせないかと考えてから……

「……はあ、まあ仕方ねえか」

「おやおや、案外諦めるの早いねえ」

「意図的に話そうとしないやつなら無理矢理聞きだせる。何かしらの交渉を求めている相手なら交渉をぶっ壊せばいい。ただただめんどくさがってるやつは手の付けようがねえ、つてな」

「だーいせーいかい。僕は役割でも箱庭のためでも命令でもなく、めんどくさいから話さないのさ。なんたって面どくさ……」

「せめて最期までいえよ……」

あと一文字、それを言うことすらめんどくさくなってきたらしい。

めんどくさがりにしては珍しく話したし仕事もしたので、もう全てがめんどくさくなってきたのだろう。

「まあそう言うわけで、僕からのサービスはこれにておしまいです。製品不良くらいなら見てあげるけど、それ以外は知ったこっちゃないよ」

「そうかよ。・・・ま、助かった。俺なりにこれ使ってやってみることにするわ」

「はいはい、がんばれがんばれ」

と、もう既にむき出しの武器の上に寝転がってせんべいをかじりながらおぎなりに手を振る蚩尤。いざとなれば腕を追加で生やせるといふ身体的特徴を十二分に活用している。

そんな、これでも箱庭においては魔王としてあらわれたという妖怪たちを引き連れる中華の鍛冶神の様子を半ばあきれた目で見つつ、十六夜はその場を後にする。ひとまずは、今手渡されたブツを使っているいろいろ試してみるところからだろう。

そしてそれはそれとして。

「とつとこのギフトゲーム、解読しねえとな・・・」

ポケットから取り出したのは、白黒の契約書類。もう内容を暗記するくらい読み込んだのだが、改めて読み直して、今手に入れた情報とかみ合わせてみて、新たな発見を探る。挑戦するためではなく戯れとして、そして同士について知るために、彼は頭を回す。

一つの日常 託宣者と陰陽師

「いやあ、すまんなあ。あくまでも個人的なお客様やから、僕が個人的に持つとるもんしか出せんくって」

「いいえ、どうぞお構いなく。むしろこちらが無理を言ってお邪魔させてもらっているんだもの。出されたものに文句を言うほど、育ちが悪くはないわ」

「そう言ってくれるとこつちとしても助かるわ。・・・いやまあ、こんな純和室で紅茶に洋菓子つてのがミスマツチなのは置いて、やけど」

「あら、いいじゃない。さつきも言ったようにこれはお互いにとって私的なもの。一々体裁なんて考えるだけ無駄というものよ」

「ま、たしかにそやなあ。それじゃ、その辺りのことはこれくらいにしておか」

と、そう言つて。体裁を気にするのはここまでだという相図のように正座から胡坐へ移行した男は、自分用に淹れた紅茶で口を湿らしたのちに少女へ問う。

「ほな、本題に入るか。本日はどういった用向きで？」

「私のギフトに耐えられる・・・あるいは自我なんてものがなく、遠慮なく使い潰せるような式神つてないかしら？」

久遠飛鳥は、安倍清明の問いに対してそう答えた。

|| || || || || || || ||

彼女もまた、きつかけは他の二人と変わらない。ただ暇になったから、自分なりにギフトを強化する、あるいはよりよく活用する術すべを探し始めた。とはいえずで持っているような火や氷を自在に操る術に用はなく、ディーンやアルマのような形勢をひっくり返しうるだけの戦力もこれ以上は必要ない。となれば、アジⅡダカーハ戦の時のように自らの与える疑似神格をもって戦わせるためだけの戦力を求めた。

もちろん、正史の彼女であれば早々に選ばない選択だろう。道具を使い潰すことにためらいはないが、生き物のように動くものを使い潰せるほど彼女は非情になれない。こちらの彼女だってそうだが・・・一輝と関わったためか、あるいはその戦い方を間近で見えてきたせいかな。それなりに、悪い影響というものも出ているのだ。

「それにほら、一輝君のやり方を見ている限りあれってある程度は壊れても治るものなのでしょう?」

「あー・・・ま、そやな。致命的な欠損でも出ない限りは、時間こそかかるものの自分で治っていくで」

「だとすれば好都合だもの。元々、魔王との戦いのようにいざというときの戦力になればいいと考えてきましたから」

「なるほどなあ・・・普段使いにしないって条件で考えると、確かにそこそこのいい手や」

ある種の妙案だと。そう判断しつつ、同時に彼はそれだけではないのだろうと察した。

そもそも、本当に理由がそれだけであればわざわざ自分を訪ねずとも一輝に聞けばいい話である。暇に暇を付けて暇をまぶしたくらい暇している一輝なら、それこそ式神の作成から使い方のレクチャーまで、暇つぶしの一環としてやってくれることだろう。彼女も、それが分からないほど短い付き合いではない。となれば・・・

《彼と戦う時、つてのも考えてるんやな》

寸分たがわず、陰陽の神は事実を看破した。その上で、断る理由もないと判断する。

「ええで。作成費諸々必要な費用は請求させてもらうことになるんやけど、それでよければ」

「もちろん、そこはちゃんとお支払いしますので、どうぞよろしくお願います」

しかし、彼としては彼女のこの口調に違和感しかない。いや、雰囲気としては合っているしそれなりに自然に出るような環境にいたこととは知っている。だがしかし、それとこれとは別なのだ。問題児として知られている彼女がこのような口調。頼みに来た立場だからとそ

うしているのだろうか・・・そろそろこらえるのも限界であった。

「とりあえず、いい加減その口調やめへん？どうこうって言うよりも、違和感で背中がかゆいねん」

「あらそう、では遠慮なく」

真紅のドレスを纏った少女は、何のためらいもなく口調を崩してきた。そんな様子にちよつとホツとしつつ、清明はまず何をすべきなのかリストアップしていく。

「さて、と・・・式神を扱う素質はあるみたいやし、使い方の指導から始めよか」

「ええ、どうぞよろしく」

そう言うのと二人は立ち上がり、清明の所有するゲーム盤へと移動した。

|||||

「普通に使えて正直ヒいたわ」

「失礼ね・・・」

数時間後。

清明としては呪力が全くない人間なので一切使えずそのまま終わり、もしくは何かしらの代用手段を考える方針で進める予定だったのだが、なんでかしれつとつかえてしまった。

「それにしても、なんでなんやろな・・・」

「さあ？もともと私は私のギフトのことを『他者に命令する』ものだと思っていたし、その関係じゃないかしら？」

飛鳥のその発言に対し、清明はふむと考えを進めてみる。

ギフト『威光』。その本質は『疑似神格の付与』にあり、与える側の力である。そして当然のことながら、神格を与える側と与えられる側の関係は主人と従者のそれ。

「だとすれば・・・確かに、式神を動かせるだけの理由にはなるんやなあ」

「何か納得できるだけの理由があったのかしら？」

「正解不正解は分からへんけど、何となくこうなんかなあ、程度なら」
「そう。まあ興味はないのだけど」

どうやら本質的な部分には全く興味がないらしい。彼女なりに、自分の恩恵がそれなりに複雑なものだと理解しているが故だろう。

「それで、どうなのかしら？ 式神使いとしてやっていけるだけのモノにはなりそう？」

「んー・・・本職にはその分野では勝てないにせよ、色々織り交ぜながらならなんとでもなるんちゃうかな？」

「なら、これはもらっていくことにします」

「まいど〜」

ひとまずと清明が準備した式神の束をギフトカードにしまう飛鳥。正式に商談となったために次はコミュニケーションの方から和菓子とお茶を引っ張り出してきた二人は、何のためらいもなくそれらを口にしていく。財政管理担当の人が涙目になりそうな光景である。

「それにしても、それだけやれるんやったら妖怪ベースの式神の方が圧倒的に強いと思うんやけどなあ」

「強かったとしても、使い捨てるには心が痛むのよ。・・・こんなことを言ったらアルマ辺りに怒られそうだけど」

「それで連れてこなかったんやな？」

「お小言ばかりでめんどくさいのよ」

アルマテイアの扱いが雑である。ドンマイ、アルマ。

「まあでも、確かにそれ考えたわ。全ての分野で強い妖怪はいないでしょうけど、火取り魔のような分野特化を揃えられれば、って」

「あー、火取り魔なあ・・・」

飛鳥の言ったことは何一つ間違っていない。

アジィダカーハとの決戦の際、覇者タワルナフの光輪を神格を与えられただけで喰らいつくした火取り魔。言葉を媒介とする疑似神格故に出力は下がるだろうが、それでも十二分の働きが期待できるといふものだ。

そして、妖怪伝承の中にはそういうった〇〇のみ特化、という存在は多く存在する。その全てがあれだけのことをできるのであれば、と考えるのは自然なことであった。が、しかし。

「んー・・・それは無理やろうなあ・・・」

「あら、私の疑似神格では出力が足りない?」

「や、そういうことちゃうんや。実際、彼の従えてる火取り魔やつたらできるやろうしな」

どこかはつきりしない口調に対して、飛鳥がちよつとイライラし始めている。こういった回りくどい口調は問題児に対してはNGである、ということを感じ、再び口を開く。

「んーと、まず彼の檻の中にいる火取り魔の説明なんやけどな」

「あら、伝承とは異なるものなのかしら?」

「いや、伝承のまんまや。ただちよいと本質が異なつとる」

曰く、火取り魔とは局所的な物理現象のようなものである、のとこのらしい。

上に投げたものがいずれ重力にひかれて落ちてくるような、それと何も変わらない物理現象。特殊な恩恵で持ってそれを自由に操る術は存在するが、基本的にはいかなるものであっても・・・アジ♯ダカーハであつても縛られるそれ。

故にこそ、覇者の光輪もまたそれに縛られた。確かに勢いの強い炎なのだろう。世界を焼き尽くす炎なのだろう。しかしそれでも、焼くだけの存在。伝承を『炎』というひな型に抑え込んだために、炎としてあらわれているそれに対して、火取り魔が引き起こす物理現象は致命的であつた。

「いかなる炎、光の類であつてもその場では消えてしまふ・・・?」

「そや。たぶん、元々は灯りがあつても夜道は危険である、つていう教訓の意味合いから作り出された伝承なんやろうけどな。僕らの世界の火取り魔は、生き物ではなく物理現象やつた」

初代鬼道はそれを、無理矢理生き物であるという性質を押し付け、力技で封印して見せた。その時点で色々おかしい何やつたらそんなことが出来るんだつて問題なのだが、目の前の清明も不思議そうにしている。飛鳥はこれ以上聞かないことにした。

「確かにそれだと、私じゃどうしようもないわね。物理現象に疑似神格なんて付与できないもの」

「そう言うことやな。ちなみに箱庭には火取り魔っちゅう生き物としての妖怪もいるわけやけど・・・そっちはあくまでも、火や光をエネルギーとして取り込めるだけの三流妖怪や。覇者あんなものの光輪取り込もうとした瞬間に容量オーバーやな」

「・・・まっつて、箱庭にいる火取り魔とあなたの世界の火取り魔は別のものなの？」

「別のものやで？」

ふと感じた違和感。例えば同じ織田信長という人間が箱庭に召喚されたとしても、性格が全く違う人間であることもあるだろうし、性別が違うなんてこともあるかもしれない。心底あつてほしくないが、吸血鬼であるなんてこともあるだろう。・・・あるかな？

まあそれは置いといて、そう考えれば別に、火取り魔の定義が全く異なる世界があつたとしてもおかしくはない。だからそれはいい。それはいいのだが・・・考えてみれば、もう少し前にもっとおかしなことを言っていたような気がする。

いや、おかしくない・・・やっぱりおかしい。そしてそう考えると、そもそも湖札の保有するギフトだつて矛盾する点が存在するはず。なんでそんな矛盾が、というかこれはどう考えてもおかしすぎる矛盾で・・・

「おーい、久遠飛鳥さーん？」

「あ・・・」

「どないしたん？」

「いえ・・・なんでも、ないわ」

清明に声をかけられ、思考の海から帰還する。明らかかな矛盾、あつてはならないはずの欠陥。それに気付くことこそできたが、しかしそれまでだ。未知すぎて。分からなさ過ぎて。真実が全く見えなくて。・・・だからこそ、それについてこれ以上考えることが、怖い。

思考を放棄する。考えることをやめる。恐怖から目を逸らすその行為が正しいのか間違っているのか。それすら考えることが怖くて、今はその時じゃないと自らをごまかす。

「今日はどうもありがとう。式神の都合と使い方のレクチャー、助

「かったわ」

「ああ、うん。別に彼とはそれなりの付き合いやし別にええんやけど・・・ホンマに大丈夫なんか？誰かに送らせよか？」

「大丈夫よ。ちよつとなれないことをして疲れただけだから」

「・・・そう言うんやったら、ええけど・・・」

なおも心配そうに見る清明をよそに、飛鳥はすつと立ち上がりその場を後にする。確かに、これ以上考えることは怖い。つい反射的に思考を放棄したのは彼女自身だ。しかしそれでも・・・鬼道一輝という人間について知るためには、その真実へ手を伸ばすしかない。

「妖怪、魍魎魍魎の類について知るには・・・資料か直接会うか、よね。なら一回アンダーウッドへ・・・」

彼女は未だ、何も気づいていない。まだ真っ白なそれを調べ、考察し、どのような結論を出すのか。何一つ未来は定まっていないが・・・今最も真実に近づいているのは、彼女である。

上層へ

「なあ君、いつになったら上層行くん？」

「運命は、自らの手で切り開いていくべきだと思うんだ」

「要するに気が向いたら、と」

「よくわかったな」

これでも長生きしとるからなあ、と。ため息交じりに蛟劉が告げた。

「しつつかし、わざわざ階層支配者サマがノーネームの本拠に尋ねてきて聞くことがそれかよ」

「それかよ、って言うけどな。こっちとしてはそこそこ大きな問題なんやで？」

と言われてもなあ・・・と、はつきり言いこそしないもののメンドクサイという意志を態度で示す一輝。強ければ強いほど変人であるというのが箱庭の大原則である以上、上層巡りなんぞして神群の皆々様と会話するなど待っている未来は二通りだ。

とっても楽しい知り合いができるか、クツソメンドクサイ事態になるか。ノーネームの仮リーダーという立場として仕事もある身としてはそんな面倒ごとに首を突っ込みたくないのである。

「まあうん、忙しいから諦めてくれ」

「・・・じゃあそやな。今日を含めて四日分ほど、何をしとったんか教えてもらおか」

「何をしてたか、って言われてもなあ・・・」

先一昨日は、朝起きて、メシ食って、書類整理して、来てた手紙を全部灰にして、寝た。

一昨日は、朝起きて、メシ食って、同盟関連の書類と会議済ませて、寝た。

昨日は、朝起きて、メシ食って、二日分の来てた手紙を紙吹雪にして遊んで、寝た。

今日は、朝起きて、メシ食って、今のこの怪談を済ませて、寝る予定」

「クツソヒマやないか！」

本当に、ただの暇人生活である。確かに重要なものも含まれてはいたが、それでもやっぱりただの暇人である。

「ええ加減にせえよ！んなこといつとらんとトットと行ってこいや！」

「別にいいじゃねえか、オマエに関係ないんだし」

「キミが来ないどころか一切返事せえへんから僕の方に遠回しな脅迫来とんねんこのドアホ!!!」

蛟劉の悲痛な叫びが、ノーネームの本拠に響き渡った。

|||||

「というわけで、上層巡りしてくることになった」

「後日黒ウサギ愛用の胃薬を送るのですよ・・・」

時間はたつて夕食時にて。一輝がことの顛末を話した際の黒ウサギのコメントである。あの黒ウサギ愛用の胃薬なら問題ないだろう。

「まったく、旅費全部向こう持ちで上層巡りとか楽しそうじゃねえか才イ。なんだって後回しにしてたんだ？」

「立場上色々面倒が多そうだったからなあ。あと、同盟関連で出張に出してる組が帰ってくるのを待ってたし」

「そういえば、一輝君のところは全員明日帰ってくるのだったわね」
「書類持ってくるはずだからそれを整理したり上層巡りの準備をする

のにもう一日使うとして、明後日出発だな」

なんだかんだ仕事をしていた。これは本当に一輝なのだろうか。

「つーわけでレティシア。アジさん連れてくからその辺の調整頼んだ」

「了解したよ主殿。ちょうどいいから白雪をみっちりしごとしよう」

さすがメイド長、容赦がない。そしてそんなメイド長に短期間で認められたアジさんマジ半端ない。さすが最強の魔王、絶対悪の魔王、人類最終試験！

・・・あんまり関係なかったかもしれない。

「ねえ一輝、それ私たちもついていくことってできないの？」

「ただでさえ六人分だせやと脅されていますので、これ以上は黒ウサギの胃的に問題なのですが・・・」

「まあ黒ウサギの胃と上層コミュニティの財政状況はどうでもいいんだけど」

「よくないですよ!」

瞬間、黒ウサギはツツコミを入れて自分の席に戻る。本当に一瞬、人間の認識速度を超えたその一撃は、不可視のツツコミとなった。

「まあ黒ウサギの胃は置いといて、だ」

「十六夜さんまで何を言っているのですか!」

瞬間、以下略。

「俺としても上層関連は興味がある。天部にも呼ばれてるんだろ？」

「あと仏門の方からも呼び出されてるな。・・・まあこっちは白夜叉に呼び出されたっぽいけど」

「そう言えば彼女、仏門に軟禁されたままだったわね・・・」

「うう、非常に人間きが悪いのですよ・・・」

あながち間違ってもいないと思います。

「とはいっても、まあ無理だな」

「その心は？」

「本拠の守りが死ぬ。主に俺の暇つぶしのせいで色んな魔王に目を付けられたからな。主力をぐっさり連れていったらここぞとばかりに攻め込んできかねない」

「全部一輝さんのせいなのですよ!」

問題児に暇を与えてしまえば、起こる結果は目に見えている。大切な教訓です。

「つーわけで、だ。十六夜と飛鳥、耀は本拠に残る」

「・・・要するにオマエのせいじゃねえか」

「それについては謝る。マジですまんかった」

ヒマが一周して冷静になった結果、それなりにちゃんと判断できるようになったようだ。しかし後悔先に立たず、終わったことは変えら

れないのだ。

「あと黒ウサギについても、二つの理由から本拠な」

「2つ、とは?」

「一つは審判権限。もう一つは俺気ままにやりたい放題したいから」

「問題だけは起こさないでくださいね!?!」

明らかに危険な笑みである。南無。

「戦力面はこんなもんで、あと農業、メイド、その他諸々各部のリーダーは残していくしかないとなると・・・やっぱ俺の手持ちで行くしかないってわけだ」

「あー・・・まあ、うん。確かに」

上層の美食食べたかったなあ、と。ちよつと心残りつつぶやきながら、しかしちゃんと受け入れた耀。一輝のせいで起こったこともあるが、それでもちゃんと理由が成り立っているのだから仕方がない。

「まあそう言うわけで、だ。土産くらいは買ってくるからそれで勘弁してくれ」

と、そうしめて。名言こそしなかったもののどこの神群を相手にしたとしても滅ぼせるだけの戦力を整えた一輝は、上層へと繰り出す。

・・・や、戦力的に神群に勝てるとは言わないよ。どれだけオーバースペックでもさすがに無理だつてことは分かっている。けどアジールカードがいるだけで神霊は全部何とかなつちやうからね。仕方ないね。

神話世界に喧嘩売ってみた、あるいは第二回異邦人のお茶会

というわけで始まった一輝一行の上層巡り。鬼道一輝、六実音央、六実鳴央、ヤシロフランソワ一世、スレイブ、鬼道湖札、アジ君というメンバーで行われるそれは、始めの内はそれはそれは酷いものであった。

箱庭上層、その中でも今回一輝を呼び出したのはほとんど全て神話からなるコミュニティ。有名なところで言えばギリシア神話、北歐神話、インド神話、日本神話と言ったところである。そしてそういった諸々の神話の中にも、当然ながら優劣が存在する。

確かに、箇条書きした情報で見ればその位は同等かもしれない。一時代において生みだされ、それから先現代、未来に続くまで信仰されている神話であり、主神が存在する。しかし、日本で十人に聞いて一人二人のみ知っていると答える神話とギリシア神話が同等であるとするのは、さすがに暴力的だろう。

そんな状況下で、唐突に現れたのが一輝である。新時代の神霊であり、人類最終試練、最強の魔王、絶対悪アジダカーハを討伐、自らの配下に加えた英雄。当然ながら、原点候補者関連の問題は発生した。だがそれも、彼自身が「神霊として生まれた生粋の神霊である」と同時に「人々の信仰から生まれた神霊である」という属性から、人類が先であるという回答に収束するだろうとみられた。

であるのならば。彼という存在を自分たちに組み込んだとしても問題ないのではないか。そう言った考えを比較的認知度の低い神話体系が考えたとしても、それに罪はない。彼らにとって最優先すべきことは外界の秩序を保つこと。その為に自分たちが滅んではならないのだから、そういったことを考えるくらいなんの問題もない。むしろ推奨されるかもしれないことだ。一輝側にしても真に英雄であるのなら自分を客観的に評価し、最も適している神群に帰依するのが筋というものだろう。

だがしかし、ここにいるのは鬼道一輝である。新時代の英雄でありながら、その本質は悪でしかない。そんなやつが果たして、「自分たちの神群に所属しないか？」と誘われて首を縦に振るだろうか？あまつさえ、中には高圧的に「所属させてやる」と言ってくるものまでいるのだ。当然、反発する。問題児として、正々堂々正面から反発するにきまつている。

彼の・・・というより同行人の名誉のために言っておくと、真摯に誘ってきた神群相手に何かしたわけではない。本人は「え、やだ」とはつきり言いはなつたし、それに対して青筋を立てる主神とかもいたが、何とか周りがとりなした。なお一輝一行で取りなしに参加したのは音央と鳴央だけである。

そして、高圧的に言ってきた相手には・・・もう、唯一の良心である二人もあきらめた。はあと一つため息をつき、ヤシロの張る結界内という安全圏へ避難。目を閉じ耳をふさいで「私たちは関係ありません」と主張した。そしてその後は、一種の地獄であった。

初めて高圧的に来たときは。一輝は満面の笑みを浮かべ、スレイブを手に取り、神群相手に全力で立ち回った。あまり戦闘的な行動ができなく・・・というか禁止されていたことで押さえつけられていたストレスの全てを吐き出し、殺しこそしなかったが神様の山を築いた。彼自身も少しボロボロになったが、それでもご満悦であった。

次に高圧的に来たときは。「またこれか」と満面の笑みでこそなくなったものの、それでもそこそこ楽しくなって無形物を総べるもので蹂躪を開始した。水、火、空気、電気をはじめとする形のない物質と、重力、万有引力といった形のない現象。それらを操るといふ権能と大差ない力を持って神群一つを相手取り、互いに損傷こそあったものの勝利し高笑いを始めた。

代償こそなくなつたものの権能一步手前のギフトを考えなしに乱用した負担は大きく、それでもやはり楽しそうにしていた。

次に高圧的に来たときは。群対群の決戦を行った。神群に相対するのは彼と妹の檻の中に封じられた異形とヤシロの蒐集した破滅の物語。なるほど神話の最終決戦とはこう言つたものなのかという光

景が広がり、後に残ったのは更地とそこに点々と倒れる神霊であった。

群の指揮を執るといふあまりない経験を、心底楽しんでいた。次に高圧的に来たときは。やはり個の戦闘が一番自分の性に合っているという結論に至り、しかしそれでは芸がないとアジィダカーハとタツグを組んで神群を文字通り蹂躪した。神霊相手であれば無類の強さを誇るアジィダカーハの存在によって、相手が神群・・・神話一つであるにもかかわらずただの一方的な蹂躪となってしまうた。

最終的に泣きながら土下座をする神群を前にストレスもなくなつた彼は満足そうな顔をしていた。

なおそれ以降は。いい加減飽きた彼によって一瞬で片づけられることになる。具体的には何か言おうとした瞬間に超極細の覇者の光輪タワルナフをそいつの顔すれすれむけて放つという、超暴力的手段によって。飽きるのも早いものだ。

以上、一輝的にどうでもいい神群との会談のダイジェストでした。まる。

「やー、うん。ひつきびさに全力で暴れられて超気持ちよかった」

「お兄さんすつこくいい笑顔だったよね。久しぶりに見たかも」

「たぶん、私と喧嘩したとき以来だよねえ。想像はしてたけど、まさかあれほどストレスがたまつたとはなあ」

「私としては久しぶりに使っていただけで満足です」

「黒ウサギの胃、大丈夫かな・・・」

「そして今後、一輝さんのストレス的に大丈夫なのでしょうか・・・」
まあ、うん。全て終わってからこうして心配事としてカウントしているのが二人しかいないって時点で、こうなることは決まっていたといつても過言ではないよね、うん。

なお本拠の黒ウサギはどうしていたかといえば。

特にこれと言ったこともなく、また他の三人が比較のおとなしくしていることもあり最大の問題児がいなくなったことで平和になった本拠にて、茶柱にほっこりしていた。そんな彼女の元に一部神群からの謝罪状が届き絶叫を上げるまで、あと六日。

「そんで？唐突に俺の部屋に訪れたと思ったら茶の準備をし始めた要件は何で？」

ところ変わって、ノーネーム本拠。かつて親睦会をした時のように十六夜の部屋を会場にすると女性陣二人によって決定されたそれは、メンバーが一人減った状態で開催された。

「そうね、まあ前にやったのと変わらない親睦会のようなものよ」

「親睦会ねえ。それならそれで、一輝が帰ってきてからの方がいいんじゃないかねえか？心機一転、新しいリーダーの下で頑張りましょう、ってな」

「今回の議題はどちらかと言うと一輝に知られたくないものだから、それはちよつと」

あん？と。ただの親睦会だと思っていた十六夜は整備していた各種道具をギフトカードに片づけ、ベッドに腰かけて紅茶で口を湿らす。今の言い方はなんの疑いようもなく、ただの親睦会ではないということだ。

しかしある種親睦会であり、一輝に聞かれては困るものである。それだけの情報があれば、回答にたどり着くのはそう難しくなかった。

「つまり、対一輝の親睦会、ってわけか？」

「そういうことね。どうせ十六夜君も考えていたのでしよう？」

実際考えていたので肩をすくめるだけに抑え、そのまま茶菓子に手を伸ばす。サクツと口の中で音を立てるクツキーにそれなりに満足した。

「それで？一体全体どういった形で親睦会とするおつもりで？今現在分かってることでも報告するのか？」

それはそれで大変興味がある、と。自分だけで集められる情報、推測可能な事柄では限界があったため、本心ではそう思いながらも表には出さない。この辺りの性格は変わっていないものとみえる。

「ううん、そんなことはしない」

「あん？」

「もつと言えば、推測を進めることもしない」

すなわち、本当にただの親睦会である。ちよつとがっかりしながら、どうせ暇なのだからとそれを良しとする。それに、そう言った意味のない時間というものもそれはそれで貴重なものだ。

「まあつまり、「いつになるか分からないけど妥当鬼道一輝！」と言ったところね」

「気の長い話だな」

「あらそうかしら？ 全くもってわからない相手に対して傍観ではなく打倒と立てるだけ、十分だと思うのだけれど」

「確か上層は今回の会談次第だけど、基本傍観の立場になるんだっけ？」

「そうらしいわね。よっぽど大規模のギフトゲームに殴りこむか本人が魔王にでもならない限り傍観の立場、役割があるとはいえ悠長なものよ」

お仕事だから仕方ない。それにマジでやらかしたらちゃんとう動してくれるらしいし、それでいいじゃないですか。

「しかしまあ、ホントに・・・どうやったらあれに勝てるのかねえ」

「あら、十六夜君にしては弱気じゃない？」

「考えてもみろよ。これでも俺はつい最近、一輝あれに惨敗してるんだぞ？」

ある種ごもつともな意見。その完全な敗北があるからこそ今の彼がある以上、『勝てる』などと考えられるはずもない。

「とはいえ、勝たないわけにはいかないでしょう？」

「うんうん、何が何でも勝たないと」

「おやおや、そこまではつきり断言するとは」

「だって彼、私たち二人のことはまだ、本当には認めてもいないじゃないかい」

はつきりと告げられた意見。十六夜は目を見開きながら、同時に問いかけた。

「・・・その心は？ アイツの特徴は身内に甘々だったことで、お前らの

状況がヤバければ助けるだろうに」

「ええ、それは間違いないわ。彼のことだもの、私たちのことを友人だとは思ってるだろうし、危険なことがあれば助けてもくれると思うわ。それこそ、命の危険があったとしても」

そう聞けば、彼女たちの条件は鳴央達や十六夜と変わらない。しかし、その本質は異なり・・・

「でもそれは、一個人としてじゃなくて、居場所としての判断」

本質は、今彼女が述べた通りのものであった。

彼女たちが気付けたのは、元の世界での立場ゆえであろう。育った環境から気付くことが出来たという立場で言えば、それに気付くことのできる人間は比較的多い。

久遠飛鳥は、財閥の娘であったが故に。育った環境、身に宿った異能。そういったものから、相手が自分を『個人』としてみているか『組織の1パーツ』として見ているか、自然と判断が付くようになった。

春日部耀は、動物と会話できるという異能ゆえに。自分のいる群れという環境のためにいるのか、それともその中の誰かのためにいるのか。そう言った違いには、度々遭遇している。

そういった点で言えば、彼は常にはつきりと、その線引きを行っている。

箱庭に来た際。『目的のために初対面の相手であつても犠牲にしてしまおう』という考えから六実鳴央を気に入り、そのために力を尽くしたように。

その後のギフトゲームにて、六実鳴央と六実音央を救った際。六実鳴央は上記の理由であるのに対して、六実音央はあくまでも『六実鳴央のついで』であり、彼女の死は鳴央に影響があると考えて救ったように。

外面は同様になつていても、その線引きははつきりしているのだ。

今で言えば、箱庭で個人として彼の大切に入りたどえ何をしてでも救おうと考えているのは鳴央、音央、スレイブ、ヤシロ、湖札、求道丸、十六夜の七人であり。

飛鳥、耀、黒ウサギ、レティシアをはじめとするその他のコミュニ

テイのメンバーは、あくまでも『自分の居場所』の一環でしかない。もし仮に彼女たちがコミュニティを脱退したのなら、意味もなく殺すところそなくとも必要となれば何のためらいもなく、冷酷に見捨て、機械的に殺すだろう。

「だからこそ、彼にしつかりと勝って言ってやりたいのよ」

『どうだ、私たちはお前にも勝てるんだぞ』って」

「なるほどなあ・・・」

「それで、十六夜君はどうなの？」

「あん？」

「このまま、負けたまままでいることを良しとして、一生敗者として屈辱の中で生きていくのかしら？」

明らかに、見え透いた挑発である。そして、それに対して逆廻十六夜は・・・

「そうだな。ぶっちゃけ俺は無理だと思う」

「おい問題児筆頭」

「その座は一輝に譲ったつもりなだけだな」

しれっと。そう言い放った。先述の通り今の彼は『鬼道一輝には一生勝てない』という考えからできているのだから、当然である。

「けどまあ、個人で挑戦しないんだっらいんじやねえの？」

そして、そうであるのなら。彼個人としての勝利でないのなら望めるのではないかと。アジィダカーハとの戦いでは絶対に考えることのなかった『誰かを頼る』という行動を。武具の調達などではなく『共に戦う仲間として』頼ることを、して見せた。

「つーわけで、だ。そう言うことなら、俺も一枚かませてもらうぜ。いっつになるか分かんねえけどな」

「あら、こつちを頼ろうって言うのに随分と上からの意見ね？」

「ハッ、自惚れじゃねえけどアイツのパワーやら檻の中の神霊やらをお前たちで相手できるのかよ」

「一応私はできる・・・諸刃の剣にもほどがあるけど」

再びの驚愕。特に神霊二柱などどうしようもないと思っていたのだが。

「というわけで、こちらとしてはいるに越したことはなくともいなくても何とかなりそうよ？時間はかかるでしょうけどね」

「ふむ・・・」

頭を下げる、というのは今の彼であってもプライド的に難しい。

しかし、だ。度合いなどの要素を度外視してただ戦力を箇条書きすると、耀に可能である以上十六夜が必須ではなくなる。対等な立場であれば先ほどのように向かっていけるが、そうではなくなったのだ。明らかに自分がした。さて、そうなれば残る選択肢など一つだけであろう。

「ああクソツタレ！一回頭下げてやるから俺も入れろこのヤロウ！」

「誰がヤロウなのよ」

「そうそう、こんな美少女捕まえておいて」

胡坐の膝に手をつき深く頭を下げる十六夜に対して残りの二人はからかうようにして答える。だがそれではまだ満足がいかなかったように。

「でも勿体ないからもう少し条件を設けましょうか」

「うんうん、こんなしおらしい十六夜は貴重だからね」

「デメエら・・・」

問題児女子二人が非情に楽しそうな顔をしている。大丈夫なのだろうか、これ。

「そうね・・・どうしましょうか、春日部さん？」

「うーん、私としては十六夜に一週間猫耳コスって言うのも面白いかなあつて思うんだけど」

十六夜がすっごくいやそうな顔をした。恋人であるところの黒ウサギの反応が怖かったのもあるだろう。猫耳ふざけるな派閥としての黒ウサギの反応も、唐突にポンコツ化する黒ウサギの反応も、である。大丈夫なのかあのウサギ。

「それよりも個人的にお願いしたいことが一つ」

「なんだよ・・・大概のことならマシだから引き受けるぞ」

「では遠慮なく・・・これは飛鳥に対しても何だけど」

私も？と。そんな表情をしながら自分を指さす飛鳥に頷くと、その

要求を口にする。

「いい加減、名前で呼んでくれないと思う」

そう、頬を膨らませて言う彼女の表情は。残りの二人を心底笑わせするには十分なものであったようだ。しばらくの間、その部屋から二人の笑い声が響き渡る。

「あー・・・なるほどなるほど。そういやそうか。考えてみれば春日部のことを名前で呼ぶやつ、そんなにいなかったっけか」

「そうね。同時に箱庭に来た中でも一輝君だけだものね。言われてみればその通りだわ」

「私はみんなのこと名前で呼んでるのにそれって言うのもなんとも複雑な心境だったんだけどなあ」

未だに頬を膨らまし年相応の表情をする彼女に再び笑いながら、話を進めていく。

「そう考えると、私も十六夜君にまともに名前で呼んでもらったことってないのよね」

「そうそう。そう言うわけで飛鳥もこっちの陣営につかない？」

「そうしましょうか」

久遠飛鳥、あっさりとした裏切りである。まあ当然といえば当然の裏切りだが。

「あー・・・・・・・・・耀に飛鳥、これでいいの？」

「うわお、半端ない違和感」

「言わせといてその反応かよ」

でも仕方ないと思う。長いこと同じ呼び方だったのを変えたときの違和感は半端ない。

「はあ、ったく・・・呼びかた変えるとかやつぱり違和感でけえな」

「あら、黒ウサギに対してはそう言うことはなかったの？」

「付き合ったからって何か変わるわけじゃねえだろ。デートだの何だのってのはあるが、だからって変化はねえよ」

「そう言うものなの？」

「そういうもんだ。そもそもそれまでの付き合いが心地よかったから

好きになったのに変えたら意味ねえだろ」

本当に本質を突き詰めれば、人付き合いはそんなものである．．．という作者の主観です。作者の主観なんです。作者の個人的意見なんです。いいですか三回いましたからね？何度だって隙あらば主張していきますからね？

「ふうん．．．面白みがないわね。何かないの？こっちが面白おかしく弄れるような内容は？」

「ねえよそんなもん。むしろそっちはどうなんだ、自称美少女サマたちは」

「あー．．．」

「それはねえ．．．」

ちよつと言いつらそうにした二人。はて何があるのかと思つてみると。

「まず現実的な問題として一輝君は競争率が高すぎるし」

「十六夜は恋人持ちだし」

「そもそもこの二人に惚れるつて言うのも趣味が悪いし」

「オイコラ」

何が悪いわけではないのだけれど。ついでに彼女たちも問題児であるために似た者同士ではあるのだけれど。それでもやっぱり恋人に選ぶかと言われたらNOであろう、やっぱり。

いや、誤解の無いように言えば逆廻十六夜はいい人間である。鬼道一輝のように本質がクズということもない。無いのだが、うん。友人としてはともかく恋人としてはやはりない、と。

「グリーと求道丸は言うまでもなく．．．だし」

半裸は駄目だよ、半裸は。

「アジさんもそう言う対象にはなりえないし」

こちらは全く違う理由からなのだが、まあ言うまでもないだろう。「まあそもそも命の危機も込み込みの環境だつて言うのに」

魔王との戦いとかガッツリ命の危険が存在し、崖っぷちコミュニケーション時代とか個人個人の稼ぎがマジでコミュニティ全体の命に影響する。

「恋愛に現を抜かすとかあまつさえ告白して成功失敗問わず環境に影響を与えるとか」

成功して付き合うことになったとして、あからさまにいちやつきだしたら。それを見た周りの人間がどう思うか。ほほえましいと思う人間とかいねえよ。イライラするだけだよ。

失敗した場合？言うまでもないでしょすぐに切り替えられるほど人間強くないんだよ。まずコミュニケーションに悪影響が出て、結果全体として問題発生だよ。とりなそうとして周りの人間も介入しだしたら悪夢の始まりだよ。

「そんなことを考える人間がいるとか、バカなのかなあ、って」

「今のその発言、俺とか別世界の箱庭の住人とかに対してクツソ喧嘩売ってるからな？」

一瞬十六夜の発言にノイズが混ざったこと、心より謝罪いたします。

また上記の発言並びに一部地の文における発言はあくまでも『無形物の世界における久遠飛鳥並びに春日部耀の個人的所感』であり、『作者の意見』では全くもってないことを此処に明言させていただきたく思います。証拠？ちゃんと十六夜と黒ウサギ付き合ってるでしょう？

・・・なんか今話では釈明の地の文が多めな気がするなあ。大丈夫かな、これ。

「とまあそう言う心象もあって。まあそれがなかったとしても対象がいないのだから、起こりえないのよ」

「そうそう。もういつそ飛鳥と百合の世界にはいるくらいしかないかなあって」

「あら、それもいいわね。いつそそうしましょうか？」

「あはは、うん。それもありがたも」

ほぼ冗談としてそんな会話をしていく二人に対して、女って怖えな・・・、なんてそんな簡単な事実を再確認する。

こうして行われた、第二回異邦人交流。その結果得られたのは女性の冷静さへの再確認と、気のせいか色んな人に喧嘩を売ってしまった

のではないかという後悔と・・・ちよつとした、対一輝への布石である。

こんなちつぽけな決意が彼を打ち倒す未来が訪れるのか、はたまたあつさり打ち倒されてしまうのか・・・その未来は、存外近いのかも
しれない。

北欧神話

「全くもって面倒な事態になったもんじゃ・・・」

「せっかく箱庭救ってやったつてのに随分な言いようじゃねえか」

眼帯をした老人がナイフを器用に使つて肉を食べている正面で、一輝が同様にちゃんとした作法のもと食事を進めている。仮にも神社育ちであり小さいころはちゃんとしていた一輝君、ちゃんと技術としては持っているのである。なお、今それを実践しているのは本人からではなく一輝チームの良心六実姉妹からの嘆願故である。可能なら無駄な軋轢は生むなというお話なのだ。まあ口調が何も変わっていないので意味なしとも言える。

「ハン、儂らもプロパカンダにやられたとはいえ上層に席を置く神群、移動する準備はできとつたからの」

「んなもんやつてる暇があつたらすこしは戦力よこせばよかつただろ。神霊が使いもんにならないだけで他はいるだろ」

「何が悲しくて敗北必至の戦争に戦力を貸し出すんじや。無駄死にさせる趣味はないわい」

それにしたつてとげとげしいと思うのだが、それも仕方ない面が存在する。片や今箱庭で知らないものがないレベルにやらかしている問題児の鬼道一輝、それに対面しているのは北欧神話の主神、オーデインなのだ。

戦の神としての側面、嵐の神としての側面を持つこの賢神は、それなりに激情家としての顔も持っているのである。

そして今、この場での発言を許されているのは一輝とオーデインのみ。他の面々は求められた時のみ発言する、トップ同士の会合というわけである。

「ちなみにだが、お前らとしてはどういう方針なんだ？ 勧誘か傍観か条件付きか」

「条件付きの傍観。扱い切れん危険物を身内におくのはロキのバカタレだけで満腹じゃよ」

と、そこで一輝が超興味のそそられる名前が出たが、どうにか抑え

込んで交渉を続ける。

「条件つてのは？」

「お前さんが箱庭を揺るがすような何かをせん限り、じゃな。要は白夜王やらクイーン・ハロウインやらと同じようなもんじゃ」

「あれと俺とじゃだいぶ違うだろ、下層をちやんと守つてるかどうかとか太陽神的な役割とか」

「んなもん大差ないわい。昔やらかしたつた分の補填と考えればまだまだ足りん」

一体どれだけやらかしたというのだ、あの二柱は。というか前回の太陽主権戦争どうやって箱庭は耐えきつたのだろうか。ぶっ壊れなかつたのかな。

「まあ、儂らが手エ出さないかん状況にならん限りは不干渉でいたる。魔王になったとしてもまあ、よっぽどやらかしたり断れん相手から討伐してこいでも言われん限りは無視じゃ無視」

「ふうん、それ以上要求することは？」

「無い。だがまあ現時点ではじゃからな。お互いに必要そうなら言えば手を貸す、くらいでいいじゃろ」

しれっと、体よく何かあった時に押し付けられる相手を作っている。だがまあこれは一輝側としても何かあった時に押し付けられる非公式な相手だ。最悪裏な仕事を押し付けたり暇つぶしの手段を探させたりすればいいか、ということ・・・

「『ノーネーム』としてじゃなく、『鬼道一輝』としてで良ければ、まあいいだろ」

「次の太陽主権戦争で多少は協力したりできんかの？ルールや状況次第じゃが誰かしら潜り込ませるかもしれんでの」

「それこそ状況次第だろ。場合によっては俺が見つけて引きずり込んだってことにしてウチのコミュニテイメンバーにしたりはできるだろうが・・・」

「そこまでせんでもゲーム中の協力やらなんやら程度でいい。相互で情報交換をするだけでも大きいであろう」

ギフトゲームにおける情報交換は場合によってはこの上ない価値

となる。共闘なんかよりハードな気がするのだが、気のせいだろうか？

「・・・疑い出したらキリがないって言うよね、うん。」

「じゃあま、そんな感じで。俺も太陽主権戦争レベルなら参加許可されるだろうし、参加者してるだろうからそれでいくか」

「そうなのう。では、ここからは関係のない話でもするか。料理もまだ残っておるしな」

これまでであれば一輝が空気を読まずに出ていったかもしれないが、今回はそれなりに気になったこともあるので食事が続ける。人となりを読み取ろうと考えているオーデインもいるのだが、まあそれならそれでいいかの考えである。

「そーいやロキつつつてたけど、いるのか？」

「いるが、それがどうかしたのか？」

「いや、北欧神話の終末論、ラグナロク。その霊格を誰が持つてるかって考えたらロキだったから、殺されてるか封印されてるかだとばかりな」

「それができるのならとつくにそうしている」

と、会話に割り込んできた巨軀の男は骨付きの肉を取りかぶりつく。唐突に表れた豪快な仕草に驚きつつも、その腰に下げられているものを見て納得する。

そこにあつたのは、柄の短い・・・というよりはいつそ柄ではない何かのように見えるものの付いた、鎚のような何か。そんな奇妙な武器を持っている北欧神話ゆかりの存在など考えるまでもなく浮かぶというものだ。

「というと、それはどういうことなのかな、戦神ツール？」

「どういうことも何も無い。我々北欧神話が今それなりの立場まで回復することが出来た一因がラグナロクなのだからな」

ほう、と。確かに一度は主神が精霊の立場まで貶められた神話がどのようにして復活できたのか、その点に関して興味が尽きることはない。

「一体どのようにしてっ？」

「まず一つ目は、再び神話の一つであるとして情報が広く知れ渡ったことじやな」

問いかけに答えたのはオーディンであった。

「信仰や宗教というものにたいして酷く寛容である日本は分かりやすいがな。現代に近づき元々の信仰からは遠ざかったが、『知られ』、『語られ』、『用いられる』というのは、一つの信仰のようなものとなった」現代に近づき、神々の奇跡が科学となるにつれて、どうしても信仰は薄らいでいってしまう。信者の信仰が弱くなったのではなく、『そうである』という明確に証明されてしまった事実が、どうしても弱めてしまうのだ。

そんな不可抗力。それに対して、知識が広まっていく過程や気軽に神話について知ることのできる時代となっていくことで、新たな信仰も当然生まれてくる。とある宗教団体がその蔵書の一部を一般公開したこともまた、そんな新たな信仰の一環となるのだろう。

「そのなかでも、我らの神話には一つだけ、他の追隨を許さないものがあつたからな。それによる復活分はバカにならんというわけだ」

まあ言ってしまうえば、厨二心のようなものをくすぐるブツ。北歐神話にはそんな側面がそれなりに多くあり、その代表がラグナロクであつたというだけの話。はつきり示された終末論、神々同士の戦争や神とそれに比肩するものの戦争が描かれる神話はあれど、あれほどまでにははつきりと『終末』を示している神話はそうない。

「なるほど、それをコミュニティ内に保有しておくことで回復してる分があるわけだ」

「そうでなければいかに義父上の義兄弟であろうとも、とうに頭を打ち抜いている」

明らかにホンキの発言である。これは怖い。

と、そんな形で気になつた発言の理由を知り満足した一輝は食事を再開するが、まだその話を続けたいものが一人いた。

「じゃあ、ロキだけじゃなくてフェンリルとかヨルムンガンド、ガルドム、スルト、レーヴァテインなんかもまだ残ってたりするの？」

目をキラツキラ輝かせ、一輝の後ろにある席を放りだし、そのよこ

から身を乗り出すのはヤシロ。終末論を具現化した存在として、終末論について興味があるようだ。

「まあ、いるが・・・どこかで見た顔・・・いや、霊格だな、お嬢さん」
「あ、覚えて、ました、かー」

ウツソお、と言いたげな顔で一輝の後ろに半身を隠した。明らかに何かやらかした顔である。それが示すものは何かと考え、ヤシロの様子を見ようと振り向いたところで別の人物が目に入り、それで納得した。

「なるほど、スレイブの時だな」

「うう、なんでそこで言っちゃうのかなあ、お兄さんは・・・」

凶星だったようだ。

「スレイブ？ 奴隷がどうかしたのか？」

「正式名称はダインスレイブとかダーインスレイヴとか。こつちなら聞き覚えあるだろ？」

「・・・なるほど、あの時の魔王か」

思い出したようにツールが見下ろすと、アハハハと空笑いしながらスレイブが手を振る。

「昔何かあったみたいだな？」

「ああ、まだそのような形をしていなかったその魔王・・・元魔王か。それに襲撃されてな」

ものすごいことをしれつと言われた。神話一つに対して襲撃を仕掛けるとか、ヤシロちゃんなにやっちゃってんのさ。

「あー、魔剣を一振り盗んだと思ったら消えたやつか。正直あっても困るものだったからと深追いはしなかったが」

「あ、因みにその魔剣、今後ろで猫耳メイドしてる」
「・・・知らなかったとはいえ、スマン」

正直に頭を下げた戦神ツールである。もしかするといいなのかもしれない。武人ってそう言うところいい人だったりするよね。

スレイブとしてもまああっても困るだけの魔剣であった自覚はあるため、何も気にせず食事を続けている。なお、湖札は会合が終わると同時にいつの間にか仲良くなっていた戦乙女と一緒にどこかに消

えている。何をしているのか正直怖いだけでも、気にしても負けだろう。あの兄にしてこの妹あり。とつても自由なのである。

「しかし、うむ。あの時は正体以上に対応でそんな暇はなかったが、どれ……」

と、オーデインは眼帯を少しだけ上にずらす。叡智の代償として失われた目は当然なく、ただ暗い穴があるだけのはずなのに……それは、しっかりとヤシロを『みて』いた。

「ノストラダムスの大予言……いや、これは後付けじやろうな。少なくともあの時アングルモアはまだ生きておった。であれば別の存在……終末を蒐集する、あらゆる終末を集めた存在。そうなれるだけの下地は……否、下地を持っていたのではなくそのものとしてあらわれた、人々の終末に対する恐怖、都市伝説の……」

「わーわーわーわー！あの時のことは謝りますから、それ以上は無しの方向でー！」

よっぽどまずいことを語られているのだろうヤシロは、もつと慌てました。とつても珍しいヤシロちゃんである。これは貴重だ、これは貴重だぞ……！

「では、これくらいにしておこうかの。あの時の萎縮返しとしては十分じやろう」

そういつて眼帯をもとの位置に戻すオーデイン。生きた心地がしなかったヤシロはようやく解放され、席に戻る気力もないのか一輝の膝の上に座った。そっちの方がきつくはない？

「それにしても、なるほど。あの時期に『終末』や『滅び』の属性を持つものが様々な神話から浚われておったのはそういうわけか」

「ハイ、そう言うわけです」

「そのダインスレイブ……今はスレイブと名乗つとるのか？」

「まあ、意味もなく便宜上、な。さすがに元の名前は目立つ」
「であろうな。滅ぶことを前提とした魔剣の名じや」

やべえ、オーデインさん発言にためらいがねえ。

「スレイブに人の形を与えたのもその一環、というわけか」

「うー……あのー、どうしたら、許してくれますかねー？」

「うん?・・・ああ、すまん。これは本当に他意はなく、純粹な興味からじゃ」

「それでここまで居心地の悪い思いをすることは思ってもみなかったよ・・・」

うがー!と思いつきり頭をかきむしり、ポスンと一輝にもたれかかる。その作業でリセットしたのか、ヤシロは会話を再開する。

「それで、いるんだよね?だったら会えたりしないかな?」

「会う?それで何の得が・・・ああ、そういうことか」

「うー、自分のガチの主権者権限、その答えを知られちゃったことを嘆くべきなのか、それとも話がトントン拍子で進むことを歓迎するべきなのか・・・」

「歓迎しておけばいい。一輝の支配下にある以上、僕は手を出せないのでだからな」

「はあ・・・もう、そうする」

これが締結後で本当によかったと一息つきつつ、やっぱり話を再開する。何度遮られるのだろうか?

「というわけで、お願いできないかな?取り込むことはしないから、

『見て』『知って』『記す』だけ」

「・・・まあ、取りこまんらいいか。ツール、オマエとしては何か気にすべき点に心当たりはあるか?」

「・・・まあ、持っていかれたり殺されたりしなければいいのではないか?ロキだし」

「ロキじゃし、それでよいか」

ロキの扱いが取っても酷い。でもまあ、これはこれで仕方ないだろう。

「ただ、危険物として準封印状態じゃからな。今からちよつと行つてきて、では済まんぞ?」

「あー、そうなんだ・・・お兄さん、お泊りってあり?私個人として」
「ありじゃねえの?」

一輝君の返答がとってもあっさりしている。これでいいのか本当に。

「もちろん、敵対しないって言ってる以上命の保証はしてくるだろうし、適宜便宜は図りましようってなったんだからこう言うところで便宜を図ってくれるんだろ？」

「なるほど、そう使われては断れんな」

あまりにもトントン拍子に進みすぎている気がするが、まあいいのだろう。うん、きつといいんだって。大丈夫大丈夫。

「でも、ヤシロちゃん唐突にどうしたんですか？そんなに興味をそえられるものが？」

「あー、そういう面もまああるんだけどね。それ以上に、戦力強化。お兄さんと一緒にいたら今後何があるのか分からないし」

終末を蒐集する存在であるところのヤシロとしては、会ってみるだけでも十分な強化となるのだろう。それも、相手はこれらの滅びの物語ではなく一つの神話体系の終末だ。その効果は計り知れない。

「そういえばそうね・・・とはいえ、私と鳴央はそうもいかないわね」「そうですね。北欧神話ゆかりというわけでもありませんし」

「うん？それでもないんじゃないか？黒髪の方はともかく、茶髪の方はタイターニアだろう？」

と、二人の会話に対して首を傾げるトール。それは事実であるし、タイターニアとタイターニアの二つの霊格をその身に宿す音央は素直に頷いた。

「だとしても、あれは正確には北欧神話じゃねえだろ？」

「まあ、厳密に述べればそうじゃな。だが、そも『真夏の夜の夢』は北欧神話復興の一環としてシェイクスピアに書かせたもの。故にオベロン、オベイロンという形で読者を信者に、感想を信仰に見立て、少々裏技を交えて神霊の座を作り、招き入れた。結果副産物としてタイターニアという精霊が生まれたがな」

確かにあの作品北欧神話的エッセンス多めではあるが、それにしただってそれはありなのだろうか。無しな気がする。というか魔王になってやりたい放題してたしどう考えてもアウトだったよねそれ。

そういう意志を込めて見つめると、さすがにバツが悪いのか目を逸らすオーデイン。

「今にして思えば、絶対にありえない、やってはならない選択であったよ。しかし、当時は全く、考えもせんかった。済んだこととあきらめたといってもいいだろうな」

「・・・まあ、それはいい。いや全然よくねえけど、むしろ当時よく他の神群に叩き潰されなかつたなと思うけど、やすやすとつかえる手段じゃないなら、まあ大丈夫だろ」

そう飲み込み、どうにか納得して、話を自分の中で整理する。

重要なのは、つまり音央のほうもここでなにか、自分の新たな可能性を知ることができるかもしれないということ。

「どうする、音央？」

「そうね・・・オーデインさんがいいんだったら、しばらくお邪魔したいけど」

「別にかまわんぞ、一人が二人になろうが三人になろうが大差ない。恩を前もって売れると考えれば、むしろ得であろう」

「三人も大差ないなら、私もいいか？」

と、ここで。当然といえば当然だが、スレイブも手を上げる。

「当然構わん。が、お前の目的は・・・」

「ヘグニに会う。いるのならヘジン、ダーインもだな」

「・・・紹介はしてやれる。だが、よいのだな？」

「私は構わない」

「だが、剣であるお前の意志で決めることはできないだろう。武器の意向ではなく、全て持ち主の意志で決められるものだ。それを何をしようとしているのか話もせず、」

「いやいや、別にいいけど」

シリアスっぽい空気を出していたオーデインの言葉を何のためらいもなく遮る一輝クオリティ。もうちよつと空気読んでお願いだから！

「いいのだな？」

「いいよ、別に。持ち主変更ってなればさすがにはんたいするけど、そうじゃねえんだろ？」

「当然です」

「だったら、別にいい。コイツが俺の期待外れなことをするのはねえだろ」

己の武器に対する絶対的な信頼。それを見せつけられた以上オーデインとしては何も言えず、三人の神話見学を許可した。

こうして。何か唐突に、一輝一行から三人が減った。しかし前もってもらっている旅費は返さないらしい。さすが一輝君、汚い。

・・・というか、湖札は一体何をしていたのだろうか？

日本神話

「そなたも日ノ本の子、すなわち我の子のようなものじゃ。ほれ、ちこ
う寄れ」

「うっせえ日本最古の引きこもり。弟がぐれた程度で部屋に引きこもって仕事もしなくなるような豆腐メンタルが偉そうにしてんじやねえぞ。っつか服とか飾りとかギラギラしすぎて見てらんねえんだよジャージでも着てるや引きこもり」

次に訪れたのは、日本神話。他国の様々な神話のエッセンスを何のためらいもなく取り込んだりする面もあり細かく読み解くと若干カオスだったりする神群であり、一輝の出身国の神話。そこの会談はお互いにジャブから始まる。ここから互いに探り合い、口撃の応酬が始まる・・・

「うわーん!!!もういやー!天お部屋の岩戸引きこもるー!!」

なんてことはなかった。一瞬で取り繕っていた表情がぶっ壊れ、涙と鼻水で汚くなり、天岩戸お部屋に帰ろうとする。主神がこんなメンタルで大丈夫なんだろうか、日本神話。

「ちよ、オイツクヨミ!アネキ抑えとけ!」

「はいはい分かっている分かってる。姉さん、たのむから会談終わるまでは耐えてくれな?そもそも天岩戸、貸出したまんまでしょ?」

「じゃあ別のところ!冥界!お母様のところ行く!」

「それは冗談にならないからやめましょうねー」

どこかに引きこもろうとしているアマテラスをツクヨミが全力で抑え込んでいる。スサノオは剣を取って一輝の方に近づいてきて、三人の後ろでは益荒男が一人腹を抱えて笑っている。括目せよ、これが日本神話の真実である。

「オイオマエ!敬えとまでは言わないけどせめて普通に接するくらい
のことはしてくれたのむから!」

「悪いけどこれが俺の平常運転だから諦めてくれ」

「だったら頼むから少し装って」

「ってかなんだ、あれか。シスコンこじらせた結果構ってほしくて実

の姉の部屋で暴れてクソしたのか？シスコンこじらせすぎだろ」

「頼むアニキー！こいつをぶった切らせてくれ！」

「いやいや、さすがにそれはマズい。ぶった切ることはできないだろうが、やろうとするだけでもヤバイ」

躊躇いなくスサノオも弄り倒しにかかった一輝、そのやつすい挑発に簡単に乗ったスサノオ、笑いながら羽交い絞めにして抑え込むヒルコ。カオスである。何とも言えないカオスである。

「・・・なあ、従者。聞いてもいいか？」

「はい、なんででしょうか？」

「マジで、何でもなく、本当に、あれが素なのか？」

「素ですね。・・・申し訳ありません、なんだか」

「・・・いや、気にするな。こちらも挑発していくと決まっていたからな」

そして、その背後で鳴央とイザナギが会話をしているわけだ。何と言うカオス、何と言う混沌の空間なのか。なお湖札は安定のどっかに消えている。アメノウズメと一緒にいたので、二人でどこかへ行つたのだろう。自由にもほどがある。

十分後。

「それでは、互いに不干渉ということでもよろしいですね？」

「ああ、それでいい。面倒事にさえならなければ正直なんでもいいよ」
「では、そのように。妾はこれで退室しますので、兄上、あとはよろしくお願いいたします」

「はいはい、かしこまりましたよ妹さま」

その後。一旦のクールタイムとして一輝たちに食事を出し日本神話サイドの落ち着くための時間を設け、どうにか協定を締結させた。その瞬間アマテラスは部屋を後にしたのだが、おそらく引きこもるのであろう。しばらく出てこられないかもしれない。

「まったく、日本神話は本当にあれが主神で大丈夫なんかね？」

「まあ、なんだかんだで問題なく回っているからな。大丈夫なのだろうよ」

と、そう言って先ほどまでアマテラスが座っていた席に腰かけるヒ

ルコ。当然のように座った彼に対し、一輝なりに気になったことを述べる。

「本当に大丈夫なのかよ？つてか、アマテラスってことで男性像が出来るとか、あれから一体どうやったらそうなるってんだよ」

「あー、あれなあ。言つていいやら悪いやら・・・」

と、ヒルコは周りを見回す。会談も終わったということによって主要の神以外は席を外しており、大国主は天部の関連で出向中、スサノオとアマテラスは席を外している。別に問題ないとツクヨミとのアイコンタクトで決議を下し、面白話として話すことにした。

「あれな、アマテラスがメンタルやられてミニ引きこもり期間した時、代わりに仕事をした俺の像なんだよ」

「ふうん・・・なるほど、それで剣をもった男の姿になったわけか」

「そう言うわけだ。アメノムラクモを構える俺の姿、つてな」

「ヒルコではなく、昼媛と対を成す昼彦として。天に昇る太陽神の片割れ、スサノオの原型となった時代の姿なわけだ」

「ハツハツハ！まあ、こちらの姿も便利で良いのだがな。覗きし放題ということ、アマテラスから正式に禁止令がだされてしまった」

一瞬、骨が消え流動体に崩れたヒルコだが、すぐにもとの形に戻る。「まあ、こっちの裏事情なんざどうでもいいだろう。またの機会に笑い話として披露してやるよ」

「兄上、抑えられますよう。あまり披露しすぎましては、貴方の主催者権限に関わります」

「何、俺の主権者権限なんざいくらバレタところで被害はすくねえよ。アマテラスの方はコミュニティの危機だがな」

いくら深い歴史を持つ神であっても、今はただの捨てられた失敗作。失われたとしてもコミュニティとしての被害は少ないものである。そうはつきり断言して見せたヒルコは、そんなことよりも、一輝にも聞こえるように言う。

「アマテラスのやつアバターの化身にはちゃんと連絡とったんだらうな？あれがああ様子じゃ役に立たんぞ」

「連絡は済んでおります。明後日こちらに来られると」

「であれば大丈夫だろう」

「化身、ねえ・・・アマテラスの代わりに働くヤツ、ってことか？」

「そう言うことだ。神が外界で活動するには限界がある故、その名代のようなものだな」

「ふうん・・・ま、おおよそ見当が付くからそれはいいとして、了解。肝に命じとくよ」

遠回しに外界に行くんじゃないやねえ面倒な制約があるから、と言われたので素直に聞き入れた一輝はちようどそこで食事が終わったので、湯のみの茶を飲み干して立ち上がる。

「ところで、スサノオはどこに行ったんだ？気付いたらいなくなってるけど」

「あー、アイツなあ。もう簡単に挑発に乗って問題起こしそうだから、追い出した。今は隔離部屋」

三貴士の一人がそれでいいのかと思うが、まあスサノオはずっとそんな様子だったので問題ないと思われる。

「つまり、今のスサノオなら挑発すれば乗ってくるわけだな？」

「・・・まあ、体を動かせばそれなりにスッキリするだろうし、都合はいいか」

少し悩んだのち、妹と弟の二人についてアフターケアするのが面倒だと考え、片方をぶん投げることにした様子である。すぐ隣に座っているツクヨミ、後ろにいるイザナギに声をかける。

「ツクヨミに父上、悪いがスサノオのところまで案内してやってくれるか？ついでにゲーム盤を展開して、好きなだけ暴れさせてやってくれ」

「・・・まあ、スサノオに好きなだけ暴れさせてしまえば、周囲は更地になりますからね。仕方ないですか」

「いつそのこと封印しているイザナミのところに向かわせないか？な？な？強いのと戦いたいならいいだろう？」

「父上、いい加減夫婦喧嘩に終止符を打ってください。いつまでも付き合わされる子孫の身になっていただきたくないです」

「いや、もう既にあれは夫婦喧嘩じゃないって・・・ないよね・・・な

いはず・・・だから、ね？」

「どうでもいいからとつとスサノオのところに連れてつてくれないか？」

なんだかもうどうしようもない感じの会話をしながら一輝を案内していく二神。スレイブがいなかったため空間倉庫から師子王を抜き、とつても楽しそうな笑顔になっている一輝。そんな一行を苦笑いで見送った鳴央は湯呑を取り、一口飲んでから顔を上げ、気付いた。

一輝は遊びに行った、湖札は気付いたらどこかに消えていた。音央、スレイブ、ヤシロは北欧神話の時点で別行動だ。この場に残っているのが自分一人のみという、何といえればいいのかな状況なのだ。唯一の救いは、

「さて、一気に人がおらんようになったなあ」

相手側も、ヒルコだけなことだろうか。

「そうですね。すいません、一輝さんがあんな感じで」

「いやいや、気にしてねえよ。あの絶対悪の魔王を倒し、従えるような奴だ。民の理想とする英雄か、もしくはそうとうなやんちゃ坊主つて相場が決まったら」

「そういつてもらえると、こちらとしても気が楽です」

と、主の不敬を謝罪した後に、彼女は考え込む。北欧神話の際に自らの妹がした決断、そこから彼女自身も自身の成長を願っている。当然といえば当然のことだろう。

一つ、当然のこととして。彼女自身のスペックは非常に高い。神隠し、という誰もが知っている概念そのものとなった存在。だからこそ、神隠しの力だけでなく神隠しを行うものの力も手に入れることを可能とし、一定範囲、一定時間のみに限定されこそするものの、無敵になることすらできる。だが、それでも。到底、一輝に並び立てるほどのものではない。

肩を並べて戦うなどできるはずもなく、後方からの支援すら不可能。ヤシロや湖札と違い、『極めて高い水準の力』を持っている存在であつても、『常識を鼻で笑う力』は持っていない。

故に、自らの新たな可能性を探る手段をどうするか考えた。神隠し

的伝承は様々な神話、民話、伝承で見られる。その中で日本のものは既に天狗を具現しているため、他の神話にするべきかと思っていたのだが……

「……すみません、一つお聞きしてもいいでしょうか？」

「あん？なんだ？」

「貴方の主観で構いません。『一を突き詰めた結果』と『広くて札を得た結果』、どちらの方が強いと考えますか？」

「そんなもん、前者に決まってんだろ」

即答であった。

「理由をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「別に大した理由があるわけじゃねえし、俺の主観だけだな」

前置きしてから、胡坐をかいて話し始める。

「全能神、って類のやつらは、ぶっちゃけ雑魚だ」

色んなところに怒られそうな発言である。

「より厳密には、『すべて等しくできる』という類の全能神は、ってことになるか。結局のところ、生き物、戦士、って類のやつらは『突き詰めた一』ってもんが必要なんだよ、いざってとき、自分の命を預けられるモンがな」

「全能だと、それが無い、と？」

「ああ、ねえな。すべて等しくできる、ってのは『全部等しい価値観』になる。んなもんに価値はねえし、いざってとき反射的に頼れるような技術でもない」

「……だったら。一つ、お願いがあります」

ヒルコ。先ほどの一輝の言によれば、元太陽神であり、アマテラスと同等の神。そんな存在からはつきり断言されれば、それは信用するに足る。故に、彼女もまた。

決意と覚悟を持って。凡庸性という強みへ進む道を断ち、自らの行く末を決定する。

「しばらく、こちらでお世話になることはできませんか？」

「ああ、うん。いんじゃない？」

まあヒルコの反応は非常に軽いものだったのだけけれど。

こうして、彼女たちは歩み始める。
妖精は、新たな神格のギフトを正しく理解するために。
終末は、滅びの物語を紡ぐために。
魔剣は、己が呪いの原点へ至るために。
神隠しは、その伝承を固定するために。
はてさて、彼女たちの行く末はどのようなのか。
強くなるのか、弱くなるのか。
未来を手にするのか、滅びを迎えるのか。
皆々様、どうぞお楽しみに。

？

仏門・・・というか白夜叉

「ふいっ・・・さすがに、白夜叉相手にそう簡単に勝たせてはくれないか」

「さすがに、まだ16、7年しか生きとらん若造に負けることはないのう」

ボロボロになった神主衣装から普段着に代わりタオルを取り出して汗を拭く一輝に、扇子を取り出して自身を扇ぐ、こちらも汗をかいだ白夜叉。全力を出すとは危険極まりない二人のため、ゲーム盤を展開、一部制限を付けて思いつきり戦っていたというわけだ。どんだけ戦いたいんだよ、一輝は。

なお大まかな制限としては、一輝はアジィダカーハ使用禁止。白夜叉は火力に制限、と言った形である。当然それ以外にも霊格的な色々が制限かかっているのだが、それは割愛。

「しっかし、シ〇カのやつも融通が効かんものだ。アジィダカーハがいかにも危険とはいえ」

「一応湖札も俺と大差ないくらいには強いんだから危険物のはずなんだけどな」

「まあ、そこは認識の違いじやろう」

危険物を近づかせず、それに十二分に対応できるだけの戦力を監視にぶつけておく。とつても普通で、そして問題の起こりにくい判断だ。一輝としてもただそれをされたら面白みがないと殴りこみをかかけかねないのだが、久しぶりに会う白夜叉との会話に戦闘だ。ちゃんと飴まで準備されている。釈〇すげえな。さすがは仏門のトップ。

「それに、同レベルの実力を持っているとしても相性というものがある。最強の神殺しの力を十全に使いこなせる初対面の神霊など、私であつても近づきたくはないのう」

「よく言う。白夜叉は神霊じゃなく星霊だろうし、本気だせばどうにか抑えられたと睨んでるんだがな」

「霊格を開放しゲームを開催すれば、ゲーム盤に閉じ込めるくらいのこととは出来ただろうが、勝てたかと言われると怪しいところだ。証拠

もない話だが、あれを倒すにはいくつかの条件があると睨まれておつた」

「条件？」

「うむ。その辺り、あのマスコットから聞いておらんのか？」

さすが白夜叉様、今日初対面なのに肩乗り状態のアジⅡダカーハをみてすっかりマスコット扱いしてくれる。確かに狙ってはいたが全員が全員「何ふざけたこと言ってるんだ!」なりアクションをしてくるがためにそろそろ飽きてきた一輝としても、これくらいのノリが気楽ですらあつた。

「んー・・・何も聞いてねえな」

「おらんのか？自らという終末を踏破した英雄に対し、それなりに興味があるものと思つたのだが」

「その辺りは、人類最終試練の先輩としてか？」

「はてさて、どうかの？」

既にクリアされた人類最終試練とはいえ、自らの手札につながる可能性が少しでもあれば明かしてはこない方針のようだ。

「まあ、あれだ。あんまり詳しくはねえんだけど、箱庭に現れる・・・つてか現れた三大人類最終試練、あれは全て外界における終末の具現・・・みたいなもんだろ？」

「まあざっくりといえば、そんなところだ」

「だとすれば、それ相応の・・・『外界を救う英雄』が倒さなけりやならない存在、結果逆説的に『世界を救う英雄として誕生した者』でないと倒せないものと想像しているんだけども？」

「当たらずとも遠からず、つてとこだな」

と。一輝と白夜叉だけだったその場に新たな人物が現れる。カツ、カツ、と足音を響かせて歩いてくるその姿を見て・・・

「何か胡散臭いおっさんが出てきたな。なんだ、観光名所か何かなのか、(´▽｀)?」

「言わんとすることは理解できるから困るのう。というか帝釈天、おぬし霊格が減りまくってはおらんか？」

「ええい、事情を察してくれてもよさそうなやつが味方してくれない

とは！」

味方はいなかった。ドンマイ極まりない。

「・・・つか、帝釈天、って言ったか？このおっさんが？」

「うむ。霊格やらなにやらに違和感しか存在せんが、帝釈天で間違いない」

「ふうん、これが・・・」

と、胡散臭いものを見る目でその男・・・白夜又曰く帝釈天を眺めた一輝は、とりあえず浮かんだ疑問を解消することを優先した。

「おかしいな、お前らんところからも来るように言われてた男思うんだが、自分から来たのか？」

「まあ最初は呼び出そうって話になってたんだが、部下に『どうせ暇してるんだから行ってきてくださいよ。そんでとつと片づけてきてください』と言われてしまつてな。書をだしてからいくら待っても来ないもんだから、しびれを切らしたらしい」

「それはそれは」愁傷さま

言外にお前のせいだと言つた帝釈天に対して一切気おうことなく発言して見せるのが一輝クオリティだ。

「まあいいや、1つ手間が省けたつてことだろ？それで？当たらずとも遠からず、つてのはどういうことだ？」

「私からも聞いておきたい、帝釈天。おんしら、アジⅡダカーハの謎を解いたのか？」

「いや、はつきりとその謎を解き明かしたわけじゃない。だからあくまでも俺の考察に過ぎないが・・・そこまで外してはいないだろう」
やけに自信満々な様子に二人そろつて首を傾げつつ、まあ暇だし時間もあるし何よりも暇だから話を聞く方向に移行した。一輝が空間倉庫からちやぶ台を取り出してその上に茶菓子を並べると、三人はそれぞれ正三角形を描く位置に座つた。そろつて一口茶をすすり、始まる。

「まず前提条件としてお前に知っておいてもらいたいののは、アジⅡダカーハを倒す条件、あれを俺達が満たしても倒すことはできなかった、つてことだ」

「それは神霊だったから、ってことじゃなく、か？」

「ああ。人間に降天しても、倒せなかった」

だとすれば、一輝に倒すことが出来たという事実にも疑問が生まれ
てくる。だからこそ、彼は一輝を呼び出したのだろう。

「俺は・・・というより俺達はお前がどのような功績を持っているのか
も、どのような世界から現れたのかも、どのような霊格の保有者なの
かも知らない。知らないからこそ真正面から尋ねさせてもらおうぞ」

「どうぞ。他言無用を守ってくれるなら話してもいい。元々白夜叉に
は話す予定だったし・・・マジモンの帝釈天だってんなら、実力、立
場双方文句なしだ」

含みのある言い回しが帝釈天の中で引っかかったが、一旦脇におい
て話を進める方針で決定した。

「あくまでも、俺が読み解いたクリア条件なんだがな。」

「アジィダカーハを倒し得る武力を持った人間の英傑」。

「アジィダカーハが内包する終末論Xの謎を解いた賢者」。

「アジィダカーハを不倒と知りながら挑む異世界の勇者」。

以上の三つだ。心当たりはあるか？」

「・・・異世界の、ってのはどういった理由からの条件付けだ？」

「単純な、と言ってしまえばそれまでだがな。あれがあくまでも人類
史を終わらせる終末論であるのなら、それを解決するのは外界の人間
の責務であろう、って考えからだ」

「ふむ、なるほどな・・・」

腕を組み、顔を上に向けて、じつくり30秒ほど悩んでから。あら
ゆる可能性を考え、結論を出す。

「まず、1つ目。これは該当するだろうな。一応生まれながらの神霊
ではあるんだが、それなりに面倒な成り立ちのせいで人間でもある。
武力は言うまでもないだろ」

「不思議な小僧だとは思っていたが、本っ当に面倒な生い立ちをして
おる」

「白夜叉に言われたくねえ」

「それは同意だな」

解せぬ・・・とつぶやく白夜叉をよそに、一輝は話を続行した。

「次に、二つ目。これについては正直分からん。あの一時、一瞬だけ真実を知ってた可能性はある、な」

「・・・どういうことだ、それは」

「今はアジールダカーハの真実は頭の中じゃない。湖札も叡智系統のギフトを持つてるけど、そこにも載ってないのは間違いない。ただあの一瞬だけは、その知識を保有していた、かもしれない」

「詳細は後からまとめて話すから一旦流してくれ、と一輝が言うので二人もそれ以上言及しない。その様子を見てから一輝は再び口を開いた。

「最後に、三つ目。これだけは、絶対に、該当しない」

「・・・ほう？」

「この上なく、はつきりとした断言。」

「では、お前は外界の出身ではないと？」

「広義の意味では外界・・・箱庭の外側の出身だがな。人類史、って意味合いでは無関係だ」

「となると、神霊であるのだし、神話の類か？」

「それでも無い。人が主となって作られる世界だ。妖怪も悪魔も天使も神様もいたけどな」

「・・・要領がつかめんな。つまり、どういうことだ？」

「問われた一輝は茶を飲み干し、新たに注ぎながら二人に問う。

「これから話す内容は、ぶっちゃけ俺の主権者権限のクリア条件だ。十割全部話しはしないが九割九分話すことになる」

「なっ・・・!？」

「一輝、それは、」

「まあ待て。別に、浅慮な考えで話すわけじゃない」

「いいから落ち着け、と本人に身振りで示されてしまつては落ち着くしかない。浮かせた腰を再び下ろして、二人も茶を飲む。

「その代わり、二つほど頼むことがあるんだがな」

「内容を申してみよ。自らの霊格をさらそうというのだ、ある程度聞き入れる」

「そいつはありがたい。ま、そうはいってもほぼ一つみたいなもんだ」
「逆に言えばその一個はかなりの危険物ってことになるんだよ
なあ……」

と言いつつも帝釈天にも否はないらしい。それを確認してから口
を開く。

「まず一つ目。他言無用と私闘禁止、ってことで契約結ギアスんでくれ。自
分の弱点晒す相手にいつでも襲われかねない状況は作りたくない」

「まあ、当然だよ」

「むしろ拍子抜け……ってか、それくらいで教えていいものではない
と思うが」

「事情が事情なんだよ。ガチで何かあった時どうにかできるやつと
か、俺の知り合いじゃ白夜叉くらいしかいねえし」

荒事の気配がする。

「んで、二つ目なんだが。まあ察してるかもしれないけど……俺が討
伐が必須の魔王に墜ちたとき、そっちで何とかしてくれ」

「……つまり、討伐しろ、と?」

「ああ。ただ魔王に墜ちた程度なら放置してほしいが、マジで危険物
になったら頼むわ。武力的に頼める奴も少ないし」

で、どうだ?と。

それなりに重みのある内容を頼まれた二人は、それぞれじつくりと
吟味する。吟味したうえで……肯定を選択した。

白夜叉は、下層を救った一輝に対する恩賞として。

帝釈天は、新たな人類最終試験の誕生を防ぐために。

それぞれが、その真実を聞く。

|| || || || || || || || || ||

「とまあ、こう言うわけだ」

「なるほど……まあ、スケールの大きな話だのう」

「そして確かに、その霊格ならあらゆる条件を無視してアジッダカー
ハを討ち取れるだろう。その段階で切り離されたやつが再び人類最

終試練となることもない。ないが・・・」

「まあ、そうなるのは分かる。俺だって知った時は心の中でそうなった」

懐かしいなあ、と。まだ半年すらたっていないにもかかわらずそう思考する一輝。何を考えているのだろうか、コイツは。

「まあそう言うわけで、な。悪いが帝釈天の疑問については別をあたってくれ。・・・たぶん、アイツを真に倒す役目を担うのは十六夜だっただろうから、そっちからたどるのが正解だと思うぞ？」

「ああ、そうさせてもらう。しっかし、またふりだしの予感がするなあ・・・」

彼の仕事は片付かない。困ったことに、だ。まあ動けば余計なことしかししないと定評のある神様なので、動けば動くだけ場が乱れることだろう。・・・ダメじゃねえか。

「それよりも、だ。一輝。おんしは自らが最も最悪の形で魔王に墜ちたとして、どうなると予想しておる？それなりに危険物となる予感があつたからこそ、聞いたのだろうか？」

「あー・・・まあ、突拍子もない予想だって言えばそうなんだけどな」
それでも、実現したときの被害が大きすぎるから。そして、最悪の場合ではなくともそれなりの被害を出せる自信はあつたがために。彼はこの提案をしたのだ。

「究極、俺が箱庭に受け入れられでもすれば、人類最終試練になったりする可能性がある、と考えてるな」

「・・・内容は？2000年以降に発生する終末論なんぞそうボロボロ生まれるはずもない。そんな中で発生するなど」

「ああ、違う違う。勘違いするな。俺がなるとして、なにも終末論ってわけじゃねえんだ。あくまでも『人類が乗り越えなければならぬ試練』だって言うんなら、終末に限らねえだろ」

「・・・そういや、そうだったな」

そこは勘違いするな、と断言した後には彼は語る。漠然としたものであるが故に表現が難しく、どういったものかと考えて・・・

「んー・・・『善悪とは』みたいな感じ、か？人類の終末、それを完全

に乗り越えた先に現れるものが何なのかって考えると、そういう現状『永遠の課題』であるものじゃねえのかな、と」

「あー・・・一理あるっちゃある。確かにお前の成り立ちを考えれば、その担い手となる可能性も考えられるだろう。が・・・たぶん、それはないだろ」

「うむ。それを担うものについては、より適任者がおる」

「・・・へえ?」

それはそれで面白そうだ・・・という話は一旦置いて。

「まあだとしても、何が起るかはわからねえからな。さっきの話は頭の片隅にでも置いてくれ」

「あいわかった。そうならんよう願っておるた、そうなった時は引き受けよう。いざとなればアジィダカーハに使おうとしていた手段を使つてでも止めて見せよう」

「こつちも引き受ける・・・と言いたいところなのだが、生憎俺の靈格は減りに減つていてな。そのときは代役を立てるかもしれないが、それは許してくれ」

「だが断る」

「死ねと!」

シンクロしたボケにしつかりツツコミを入れる帝釈天。さつきまでもシリアスな空気はどうしたのだろうか。

「ああ、その代わり一輝、おんしに頼んでおきたいことがある」

「頼み?なんだなんだ、それなりに世話になってるからある程度は聞くぞ?」

「うむ、まあまず手を出せ」

言われた通り手を差し出す一輝。その手を握り、用件を伝える。

「実は数年後、第二回太陽主権戦争を行う予定でな」

「あー・・・死人まみれ殺しアリの殺伐とした第一回の焼き直しか?箱庭の住人を間引く感じ?」

「いやいや、次は殺し御法度にするつもりだ。それにあたり一輝には参加者兼主催者として参加してほしい、と」

「無茶言つてねえか、それ?」

「まあ多少はな。だが、それくらい何とかできるはずだ。何が紛れ込むか分からん以上、参加者の中に対処できるものを紛れ込ませたいし
のう」

と、そう言っつて。白夜又は一輝に一つのギフトを譲り渡す。

「というわけで、だ。何が何でも参加してもらうために一つ、太陽主権を譲り渡す」

「さて事後承諾ヤメロってちゃんと許可を取れよそんな面白そうなごと全くもってサンキューな白夜又!」

「うむ!それでこそ問題児よの!」

「さて今しれつともものすごいことやらかさなかつたか白夜王!?!」

・・・大丈夫かなあ、この三人。

ギリシア神話

「いやーまったく、思っていた以上に面白いヤツだな！」

「俺としてもこれくらいノリのいい主神がいるとは思ってなかったからうれしい限りだな！」

「いやーまったく、楽しい時間だった！」

白夜叉と帝釈天に一つの依頼をした仏門の件からまた数日がたち。

ゾロアスターやら何やらとそれはもう様々なところをめぐり最後のいか所としてギリシア神群を訪れた一輝と湖札。最初の予定より思いつきり減っている人数に対して当然の反応を見せたものの、その後の行動はこれまでの神群の中でも頭一つ抜きんでておかしなものであった。

その時の会話を簡潔に再現すれば、以下のようなになる。

『よし、ひとまず今後の扱いを決めるためにもバトるか』

『乗った』

とまあ、このようになるわけだ。

・・・ゴメン、一個嘘ついた。周囲の者たちの反応を取り除いて二人だけの会話としていうのであればこれが全てである。おつかいなあ、ゼウスは確かに征服するものとしての側面を持っているけれど、ここまでひどいものだったかなあ・・・

まあ、そんな感じで。二人そろってなんだかおかしなテンションでおかしなノりを発揮し、ゲーム盤へ移動してバトルスタート。全能神の全権能と一輝の持つ全ギフトを発揮して繰り広げられたその戦いの結果、冗談ではなくゲーム盤が一つ崩壊してギリシア神群の一部が胃を痛め、二人とそのノリについていけるやつらだけがでっかいテールを囲んで食事に盛り上がっているわけだ。

大元の二人に至っては肩を組んで大盛り上がりである。さすがギリシア神群一の問題児。どうしようもねえ。

「はあ・・・ゼウス。そうして盛り上がり友好を深めることに対しては何も言いませんが、なんせよ今後の扱いを決めてからにしてくださいな？」

「ん、ああ、そういうええばそうであつたな。ふむ・・・まあ、嫁の一人でももらつてブベラツ!?」

と、すぐ後ろに立つていたキトン姿の女性の言葉に対してゼウスが答えていると、「まあ」のあたりではしたなくも足を振り上げ、言い終わる前にその側頭部を蹴りぬいていた。その一撃は非情に鋭く、縦に長いテーブルの上をきりもみ回転しながら跳び、そこにあるものを一切汚すことなく跳びきつて暖炉へ頭から突っ込んだ。

その光景を見慣れたものとしてスルーするギリシア神話の面々、ごく一部心配して暖炉へと向かう者、華麗に着地し髪を払う女性、おーと拍手を送る鬼道兄妹という光景。もうダメだねこれは。やつぱり強い！変人が箱庭の真理なんだよ。

「大変申し訳ありません、旦那兼愚弟兼愚兄がご迷惑をおかけいたしました」

「いやいや、こつちも良い蹴りを見せてもらったよ」

「それはまあ、はしたない真似をしてみました」

と、ゼウスが座つていた席へためらいなく腰を下ろしたその女性は先ほどの発言でもうはつきりしてはいるもののしつかりと名乗る。

「改めまして、ギリシア神群において実質全ての決定権を握っております、ヘラと申します。以後、お見知りおきを」

「・・・全権、ゼウスじゃないんだな」

「ええ。男尊女卑によつて成り立っているギリシア神話ではありますが、あの人には到底全体をおさめることなどできませんもの」

逸話的にはこの人にもできない気がするのだけれど、その辺りはまあ他の人たちも手を貸して何とかしているのだろう。と言うかそれでも無い限り回るわけがない。ハチャメチャ具合ではギリシア神話とかもう手のつけようがないレベルじゃないですかヤダー。

「つーか、冷静に考えると立場ものすごいことになつてんだな。妻兼姉兼妹つて」

「あなた方の時代ではおおよそ考えられない事態なのでしょうね」

「や、姉と妹が混在しているのはどの時代でも考えられないと思うんだけど」

一輝にしては珍しくまともなツッコミを入れたのだが、そんなものはすぐ隣からの声によってかき消される。

「そんなことないですよ、私はその立場を狙ってますし!」

と、一輝の顔を押しやって口を出したのは彼の妹であり頭おかしいレベルでブラコンをこじらせてしまった湖札である。実のではなく義理の妹ではあるが、それでもやはり倫理観の問題は存在する。上層にそういったことを成している神話の住人がいるにはいるのだが、それはあくまでも上層の価値観。中層、下層ではそれらのことに対する世間の目は、場所にもよるが存在することだろう。であるのなら、それは乗り越えなければならぬハードルではあるのだ。

・・・まあ、上層に実際それをしてしている例が、というかそれ以上のことをしている例が存在するのだし、すぐに受け入れられそうといえばられそうなのだが。

「あら、貴女も?えっと・・・」

「あ、改めまして。鬼道湖札です」

「そう、では湖札。いくつか質問いいかしら?」

「ええ、いくらでもどうぞ」

もうそのまま押しつけぎつて一輝の席を奪い取った湖札。それに対しヘラは姿勢を正して対面したので湖札もまた姿勢を正す。

「なぜそれを望むのですか?」

「理由なんてありません」

「貴女の兄のどこに惹かれたのですか?」

「特定の要素なんてありません」

「貴女とは親友になれそうですね」

「私もそう思います」

二秒の沈黙。その後ヘラの方から手を差し伸べた。自分たちの文化ではなく、相手の文化で友好の証を示す。そんなギリシア神話主神の妻という立場ではありえないような行動に対して、しかし湖札は気がねすることなくその手を取る。立場など関係ない。この二人は今、ただ一つの共通点によって手を取っているのだから。

・・・いややつぱりおかしいだろ。理由がちよつと頭いかれてんだ

ろ。常識つてもんはないのか常識は。理性で欲望を抑えられるからこそ人間ではないのか。

「あー・・・まあ、あれでいいか。契約の形は」

「ま、なんか無駄に意気投合してるしな。もうあれでいいんじゃないか？」
「では細かい内容を決めるか。とはいえ、同盟でもなければ侵略したわけでもなく。どうするべきものか」

「そう形式ばるなよ。俺はこの肩乗り蜥蜴っつーそっち向けの切り札があつて、そっちはそっちで全勢力で攻め込むっつー力技があるんだ。よつてお互い手は出さなくらいのもんだろっよ」

「他ともそんなもんか？」

「一応は。白夜叉と帝釈天の二人とは個人的に別の契約もしたけどな」

「んじやま、どつちかが破るか問題起こさない限りはそんなもんでいいだろうさ」

「んなもんかね」

これもまた、これまで通り。お互いに無駄な変化を起こすこともなく、神群側にとつてはこれまで目の上のたん瘤状態であつた三頭龍の件が解決した報酬もサボることが出来るなんて言う利点も存在しているわけだ。先んじて送つていた神群もあるわけだが、まあそいつらは除く。大体その辺は一輝のストレス発散の的になつたしね。関係ないよね。

「んじやま、そう言うことで。あの二人の話が終わつたらお暇いじまさせていただきますかね」

「あー、そうか。そういや、やること終われば残る理由もないつてわけだ。うーむ・・・」

「んだよ、なんかあるのか？」

「んー、できればもう少し時間を置いて考えたかつただけだな。さて、どうしたものか・・・」

と、しばらく。本当に時間を取つて悩むそぶりを見せたゼウスはやがて結論を出したのか近くにいた給仕の尻を触り顔面を全力で殴り飛ばされた後、とある女神を呼んでくるよう指示を出した。その後

料理を皿に盛って作法もクソもなく食い漁っている一輝へ近づく。

「ん、終わったか？」

「ああ、呼び出すことにした。ちよいと面倒かもしれんが、会ってもらってもいいか？」

「会うだ？」

「ああ、『絶対悪を討ち果たした英雄に会い、話を聞き、その在り方を知りたい』って五月蠅いのがいてな。たぶんお前は嫌いなタイプなんだが、締結の条件の一個とでも思っただけで耐えてくれや」

「そうか、無理だと思っただけで勝手に言うから引きずってでも引っ込めてくれや。でないとコイツつかって暴れたくなる」

と、一輝の肩で肉をむさぼるトカゲを指さされてしまったのは、ゼウスとしてもそれ以上何も言うことはできない。いざとなれば面倒事になる前に自らの手で封印でもしてやろうと判断し・・・先ほどの給仕が、慌ててその場に現れた。

「痴漢ゴミクソやろ、いえゼウス様！緊急事態です！」

「おう、まさか自分のとこの給仕から心の中でそう呼ばれてたとは思わなかった、確かに緊急事態だな」

「んな場合じゃねえんですよ！」

荒ぶる給仕である。彼女はきつと強くなるだろう。

「まあいい。んで、何があった？まずねえとは思うが、どっかの神群で人類最終試練の誕生でも観測されたか？」

「いえ、そうではなく・・・！お呼びに行っただけですが、あの人がどこにもいません！」

瞬間、ゼウスの表情が・・・否、その場にいるギリシア神群へ所属する全ての者の表情が険しいものになる。ゼウスが指示を出すまでもなく全員が行動を開始、ヘラはその式を取り始めた。

「オイオイ、何があったってんだよ。面白そうな面倒事なら首突っ込ませろ」

「いや、こっちとしては面白いことじゃないし・・・お前にとっても、そう冗談で済むことじゃねえだろうよ」

「・・・こっちにも影響があるってことか」

意地でも吐かせようとギフトカードから獅子王を取り出した一輝に対しそれを手振りで抑えるゼウス。湖札は何があつても動ける準備を済ませて一輝とゼウスを挟んだ位置に立つ。

「99パーセントの確率で、アイツの目的地は『ノーネーム』の本拠だろうさ。だからこっちは、ソイツに関する全ての情報を差し出す」「たったそれだけでついさつき結んだ不干渉協定破りを見逃せてか？」

「そうは言わん。そうさな……ギリシア神群は今後、ソイツに関する全権利を放棄する。説明を聞けば、その大きさは分かるはずだ。勿論、今回そっちがソイツを殺そうがそれ以上のことをしようが、ウチから文句を言うことはない」

「追加条件だ。アンタらからだけじゃなく、他の神群にも言い聞かせておけ。『箱庭への問題とならない限り』つつー曖昧な休戦協定結んでるからな。いい気になって出てきたヤツを皆殺しにするのも面倒だ」

「いいだろう、ゼウスの名に誓って、必ず。他に条件はあるか。……全てこっちの過失だからな、敵対しないで済むなら大概のことは受け入れる」

そう言うことならばと何かないか考えるが、特になかったのでその件はもう後に回す。今はそれよりも、『ノーネーム』へ向かったというその存在のことだ。とそこで、時間が惜しいということに気付く。「ソイツの名前だけ教えろ。んでその後、ソイツの説明ができるやつを一人よこせ」

「どういうこった」

「時間がないんだろ。道すがら説明させる」

「あー、それもそうか。分かった、すぐに呼び出す。門で合流させよう」

そういつてギフトカードを取り出し何かを飛ばしたゼウスは、再び一輝へ視線を向ける。

「今回、『ノーネーム』へ向かったやつの名前は――」

「わざわざノーネーム本拠までお越しくださったようですが、はてさて・・・アンタ、何モンだ？」

コミュニティの敷地、その入り口を少し進んだところで。その気配に真つ先に気付いた十六夜が駆け付け、その女神へ問いたです。

「あらあら、わたくし私 ったら。初対面ですのに挨拶すらせず、失礼いたしました」

無礼な口調で問われたその女神は、しかし女神らしからぬ寛容さを見せ、礼儀正しく頭を下げた。その様はまさに善神。由来から見ればどうしようもなく当たり前善性であるその女神は再び顔を上げ、見るものの心が安らぐ笑みを浮かべ、小首を傾げるようにして、自らの名前を名乗った。

「わたくし私の名前は・・・ギリシアにおいてはテミス、ローマにおいてはユースティティア。個人的には後者が気に入っておりますが——」

「まとめて、『正義の女神』や『正義』と呼ばれることが多いですね。どうぞお見知りおきを」

正義の執行 ①

ユースティティアという女神は、その性質、役割からいくつかの制約に縛られ、同時にいくつかのギフトを授けられている。

では、その役割とは何であるのか。それは、外界のある行いに対してその名を貸していることである。一切の介入はせず、名を貸しているだけ。だがしかし、その行いに対しほんの少しの影響でも与えられるわけにはいかず、故にギリシア神群は彼女に対して制限を課したというわけだ。

まず、彼女の感情、思考回路へ手を加えた。元々の性質である正義、それにおいて重要である善悪を判断する能力は存在する。それに対して発する感情もまた、存在している。

故に、その行いが悪意のもとに行われた善行であると判断することはできない。

故に、その行いが善意の下に行われた悪行であると判断することはできない。

故に、その悪行に情状酌量の余地があるかを判断することはできない。

故に、その悪行に対する罰、償いを如何様にするのかを判断することはできない。

しかしそれらの基準は、決して変化しない。完全に固定されている。

何故ならば。判断する基準は、決して変わってはならないのだから。彼女の名のもとに裁きを決める者はその時々に応じて変化する、基準となる法は場所によって変化する、当然与えられる罰の形も変わるのだが、それでもその大元が変化しては意味がないのだ。

故に、彼女の思考は。善悪を定める感情は箱庭に召喚されたその時点で合意のもと固定されており、これから先成長することは決してない。

続けて、彼女に対してギフトを与えられた。こちらは、非常に単純なものだ。

いわゆる不死のギフト。当然神秘がはびこり、修羅神仏がお遊び感覚で虐殺なんぞを行う箱庭の世界には不死を殺す手段などありふれているが、それでも彼女が殺される、箱庭からいない時間を減らすことが可能だ。その瞬間に外界の裁判へ及ぼす影響など、考えたくもない。

そう言った要素から成り立った、箱庭におけるユースティティア。外界の裁判という大きな要素へその名前を貸しているがゆえに、それほどまでに大きな手を加えられた、縛られし女神。

基本死ぬことはなく、死に箱庭から消えた際にもすぐさま召喚されるようシステムを組まれた、代わりの効く女神。

その状況を一人目は自分から提案し、二人目以降はためらうことなく承諾した、イカれた女神。

それこそが、箱庭から絶対の正義を許された、決して私情を挟むことなく、正しく悪を決定することのできる存在。

一輝の言っていた『人類永遠の課題』。その一つ『善悪の基準』の人類最終試練が現れるとすれば・・・その担い手は、彼女である。

はてさて、そんな彼女が、自ら軟禁を望んだ彼女が今回それを破つたのは・・・ありえないはずの精神的変化をもたらされたのは、一体何が原因なのだろうか。

|||||

「んで？その・・・正義の女神サマだっけか？ソイツがウチに何のご用事で？」

「ちよつと十六夜さん、相手が相手なのですからもう少し言葉をですね、」

「いえいえ、構いませんよ、帝釈天の眷属、月の兎さん。私わたくしの方も唐突な訪問でしたから」

と、コミュニケーションの応接間にて一輝不在の間リーダーの仕事を任された十六夜の発言に対し、ユースティティアは女神とは思えないほどに寛容な返事を返す。その上で姿勢を正し、頭を下げた。

「その件については今回、失礼な真似をしてしまったこと、深く謝罪いたします。何分私わたくしも突発的に行ったことでしたから。後日改めて、正式に謝罪させていただきます」

「いえ、そんなお気になさらないでください！ただでさえここ数日多くの神群から届いていて、これ以上は黒ウサギの胃が・・・」

「外界の裁判へ名前を貸している女神さまの正式な謝罪か。何が届くか楽しみだなー！」

「ええ、本当にね。当然正式な謝罪だもの、手紙だけではなく物品も届くことでしょうし」

「私としては美味しいもの希望です」

「何を言ってるっしやるのですかこの問題児様方は！」

黒ウサギの右手のハリセン、左手のハリセン、頭のハリセンが炸裂する。客人の前にもかかわらずついクセでやってしまった黒ウサギは一瞬で顔色を青くして、その客神をみる。

箱庭世界、上層の偉い人たちの中には「なんとなく気に入らない」という理由で下層の一地域を滅ぼすくらいのこととはして見せる。正義の具現であるとはいえ相手は女神だ。どうなったものかと恐る恐る確認して・・・

「仲がよく、大変素晴らしいコミュニケーションですね」

なんかすつごく人のいい笑顔であった。ホッと一息ついて、黒ウサギは自分の席に戻る。黒ウサギの胃に、一時の安らぎがもたらされた。すぐに壊れそうな未来も見えるんだけどね、うん。まあ仕方ない。

「それに、私わたくしはあなた方の功績を評価しています。過去にさしたる悪行もなく、彼の絶対悪の魔王「アジィダカーハ」の討伐へ参加、ノーム名無し」でありながらその戦いにおいて大きな功績を残す・・・普通に行けるものではございません」

と、そこまでいってから何かに気付いたのか。はっとした表情となり、再び頭を下げた。

「申し訳ありません。そのつもりはありませんでしたが、差別的な表現をしてしまいました」

「あ、いえ…それについてはお気になさらず。むしろ現状では、ノーネームという名前が売れていますから。他の呼び方をされてしまうと困る面は、正直ありますので」

現状、彼らのコミュニケーションは差別的意味合いではなく、〃ノーネーム〃と呼ばれている。むしろその名前であるからこそより一層名前が売れているため、そのまま広めていってほしいのだ。

まあ、名前が戻ってきたときはその限りではないのだが。その場合は全力でそちらを広めていく。と言うか、そうしないと下手をすれば黒ウサギが泣くだろう。

「…そう言われるのであれば、そのように」

そして。そこまでの事情を察したわけではないだろうが、ユースティティアもまたそれを承諾した。そもそも他の呼び方が存在するわけでもないため、それしかないのだが。それでも、差別用語を使うことへの抵抗はあったらしい。

「んで？俺としてはこのまま女神さまと雑談、つてのも知的好奇心が刺激されるから構わないんだが。本格的に、本題に入ってもらっても？」

「そうですね。では、わたくし私がこの度、箱庭に来て初めて本拠を出た理由を話させていただきます」

箱庭に来て、初めて。確かに今の箱庭であれば、それはさしておかしくないことではない。神群の一神霊がそうやすやすと本拠を出られないようになってきていることも、彼らは知っている。だが、それは今の箱庭だからだ。

では、かつての箱庭であれば。それはどうだろう。

ただの殺戮合戦でしかなかった太陽の主権戦争。

義兄弟の絆という尊無駄なこだわりいモノによって喧嘩を売った七天。

人類終末の謎に対する最初の戦いである閉鎖デイストピア世界戦争。

これらの、圧倒的悪逆に満ちた世界に『正義』の名を冠する女神を送りださないと到底考えにくい。一体どのような理由があり、その状況となったのか。必要な戦争で会ったこと、他の神群の事情であること、人類の手で乗り越えなければならなかったことを加味してもな

お、何かしらの事情があるのは間違いない。

そして、一体何が起こり、彼女がその束縛から解き放たれたのか。人類最終試練の一つ『絶対悪』の魔王三頭龍アジィダカーハの討伐に参加したがゆえに得た知識から、その疑問を飲み込むことはできなかった。

「まず、私がわたくしこうして自ら外へ出てきたのは。最悪の魔王、悪の具現たるアジィダカーハが討伐されたことがきっかけでございます」

「ふうん．．．アジィ悪ダカーハとユース正義テイア具現だからこそ、俺達に想像もつかない事情でもあるのか？」

「いえ、そんな難しいことではありません．．．これは閉鎖世界デイストピア、退廃エンド・エンブテイネスの風だけではなくかつて魔王であったころの天動説白夜にも言えることですが、私は『正義』の具現であり、外界における過去、現在、

未来全ての裁判の功績を得てしまった弊害として、『あらゆる魔王を無条件に下す権限』を、そのような『主権者権限』ホストマスターを有しております」

その言葉に。全ての神群のトップ、並びに彼らに並ぶものしか知らされていないその真実に対し、その場にいた面々はそれぞれ驚愕を抱く。当然だろう。もしそれが真実なのだとしたら、対魔王の手段として最大のものであると考えていた権限、黒ウサギをはじめとする月の兎が持つ権限であるところの『審判権限』ジャッジメントなどは比べ物にならない権限だ。

それ故に、彼らは一つの疑問を抱かずにはいられない。

確かに魔王には、人類の乗り越えなければならぬ試練としての面が存在する。知らなければならぬ真実が隠されている。だがそれでも、被害が甚大になる前にどうかする程度のことではできるのではないかと。

そう問われるのは分かっていたのだろう。女神は、先んじてそれに答える。

「ですが、それをすることはできません。悪逆を尽くす魔王を前にしてしまえば必ず私の主権者権限が発動してしまふ。ですがそれをしてはならない魔王が存在しましたから」

「．．．なるほど。そういや、何度も呼んでたっけか。ラスト・エンブリオ．．．『人類』最終試練」

「ああ、そういう・・・人類が乗り越えなければならぬ試練、だから」
「貴女はそれに会う可能性がなくなるまで、外に出るわけにはいかなかった」

「ご理解いただけただけで助かります。心苦しくはありましたが、その一時の感情に任せて外界を滅ぼすわけにはいきませぬので」

人類の乗り越えなければならぬ試練を、超越者の力で無理矢理に叩き潰す。箱庭においてそれが発生してしまえば、その終末が訪れることになっていく外界では、当然の結果として終末がそのままに訪れる。外界が完全に滅び、箱庭はノーダメージ、とはならないだろう。「だが、だとすればまだ退廃エンド・エンブテイネスの風が残ってるだろうが。それについてはどう説明するんだ？」

「あれは例外的な魔王ですから。そも、魔王の烙印もその性質からやむを得ず押されたもの。あれが完全に表れた時点で箱庭の消滅であるという事実も存在しますが・・・絶対悪アジリダカーハが討伐された時点でその可能性は限りなくゼロに近づきました」

だから問題なしとした、と。その話にはまだ聞いておきたいことが、特に退廃の風関連で存在したのだが、ひとまず飲み込むことにした十六夜。どうして今になって下層に来たのか、という疑問はこれで解決した。神霊が下層に現れることの難しさは知っているが、それについても何らかの理由が存在するのだろうか。仮にその主催者権限が『悪への裁判』という性質であったとすれば、それを行うために下層へ降りてこられないこともないだろう。

「ですので、私はかつての後悔を再びしないために、こうして直接赴かせていただきました」

「かつての後悔？」

「ええ。かつて終末論の具現、人類最終試練の一つであるデイストピアを下した金糸雀とその仲間たち。その滅びを知った時の後悔はそれはもう大きなものでしたから」

最凶の魔王、デイストピア。その魔王を討伐したその功績は誰のものかと問われれば、その戦争に参加したものは口をそろえて「金糸雀だ」と答えるだろう。それだけの功績を成した彼女はしかし、ある魔

王によってそのコミュニケーションと滅ぼされた。ユースティティアの言っていることはこれだ。

「立場上、そして保有している主催者権限の都合から外へ出ることはできなかつた。そうと分かっているにもかかわらず、それだけの正義を人間の身でありながら確立させた彼らを死なせてしまったことは・・・どれだけ後悔しても、したりませんもの」

その言葉は、黒ウサギには刺さった。かつての同士、共に過ごした仲間たちの死を悼むその様子は、下手をすれば泣きだしかねない案件である。

また、十六夜と耀もそれぞれに思うところはあつた。育ての親と実の親、前者は外界での死であり、後者は未だに生きていると知っていてもなお、その身に起こった悲劇への態度だ。それを何でもないと流せるような人非人でもない。まあ問題児ではあるし、その他にも問題点はあるのだが、それはそれ。今回は議論しないものとする。

故に。話題を次へ進めたのは飛鳥だった。

「それで。冷淡に話を進めることになつてしまうのだけど・・・結局のところ、何をしに来たのかしら？人類最終試練を踏破した二人目の人間を『死なせないために保護に来た』、というのであれば私たちも、そして私たち以上に一輝君自身がお断りしますけれど」

「まさか、そのような」

相手は神霊。故にその発想はぶっ飛んでいかねない。それ故に同盟や加入ではなく連れ去るという可能性を考えたのだが、相手は真つ先にそれを否定した。

「本人の望まない形で連れ去るなど。よほどの事態がない限り、そんな誘拐のような真似はできません。仮にも『正義の女神』としてあるものですか」

「・・・よほどの事情があつたらするのね」

「その時は、まあ。そうしなければその存在によつて平和が脅かされるというのであれば、殺しはともかく、管理程度は考えます。一般に罪あるとされる行為も、時と場合によつてはそうでなくなる。明らかに罪ある行為だつたとしても、親兄弟を殺された報復であれば、ある

程度軽減されてしかるべきです」

「あら、箱庭の正義は基準が緩いようね」

「何でもかんでも頭ごなしに否定することは、正しき行いではありません。少なくとも私の中の基準とは相反しますから」

「失礼する。遅くはなったが、よろしければ」

「あら、どうもありがとうございます。レティシア・ドラクレア」

と、そのタイミングでレティシアが人数分の紅茶と茶菓子を持ってきたので、ユーステイティアから話を断ちそれを受け取る。それなりに財政の豊かになったノーネームのメイド長が揃えたそれらの品は、まあ一応女神相手に出しても粗相にはならないだろうなというレベルのものだ。そして、それに文句を付ける性格もしていない。

もしかすると。甘いものが好きだったのかもしれない。そう思わずにはいられない勢いでケーキを食べきり紅茶を飲み干し、笑顔をより深めたのちに。失礼しました、と言ってから話を戻した。

「改めて、わたくし私の目的をお話させていただきます。ノーネームに来た目的の一つ目は、此度の英雄と会うことです。こちらは、お恥ずかしながら好奇心からですが」

「そちらについては、今日まさにギリシア神群のところへ招待されているはずですが・・・」

「はい、存じております。知ったのはこちらに来た時なのですが・・・残念です。そうと知っていれば、もうしばらく残っていたのですが」

と、そう残念そうに言って。しかしその割にはすぐに立ち直る。言っていた通り、好奇心からでしかなかったのだろう。それ故に、あきらめもつく。

では好奇心からではない目的は何なのか。それもまた、その場で伝えられる。

「ですから、ノーネームを訪れた二つ目の目的。それを済ませてしまいませんか」

そういった彼女の手に見えたのは、一つの天秤だった。弁護士バツチに印されている、裁判所におかれてある像の持つそれ。その後を目隠しをつけ、像の持つ二つ目のアイテム剣を手にとって・・・目隠し

越しにはつきりと、レテイシアを見る。

「私の目的^{わたくし}。それは、私の役割を実行することです。もう二度と、比類なき悪逆を許さないために」

天秤をレテイシアに向けて天秤をつきだす。たったそれだけの行動で、その場にいる人間は身動きを封じられた。

「この場にいる全ての者に問います。今から上げる人物のうち、今本拠にいる人物を述べなさい。本拠にいない人物については知っている範囲においてその行方^{ゆくえ}を答えなさい。なお、この問いには明らかなる人物も含まれます。裏を疑わず、ただ真実のみを答えるように。」

一人目。レテイシアⅡドラクレア。

二人目。クロアⅡバロン。

三人目。ペスト。

四人目。ヤシロⅡフランソワ一世

五人目。鬼道湖札」

上げられるのは、現在ノーネームに所属している元魔王の名前。それを問うのは、『正義』の名を冠し、裁判の功績、その全てを預かる女神。その意図に気付いたレテイシアは、素直に答えた。

「・・・レテイシア、即ち私は今まさに目の前に。」

ロリコ、失礼クロアは同盟コミュニティとの連絡、その後ウカノミタマ様へ神格をいただけに相談へ行くことになっている。

ペストは前リーダーⅡラッセルと共に行方不明に。

ヤシロと湖札は、現リーダーと行動を共にしている」

「そうですか・・・。まあ、クロアⅡバロンは元から問題なしと確信しています。ノストラダムス、鬼道湖札は心配ですが、鬼道一輝と行動を共にしているのであれば問題ないでしょう。黒死斑の魔王は問題ですが、知らないのであれば仕方ありませんね」

では、一人だけでも、と。そう告げた彼女は、言葉を紡ぐ。

「罪状、同族殺し、通称『串刺しの魔王』。殺害人数は甚大、その方法は残虐。いかなる理由があろうとも、許されるものではありません」

「ごもつともだ。その件について、私に一切の言い訳はないよ」

「ではそれについてはこれで。次に、この罪に対してそれを雪ぐだけ」

の行動をしているか」

目を隠した女神は、その事実を告げる。

「当然、否です」

「ちよ、ちよつとお待ちを！」

しかし、それに対して黒ウサギは反論する。飛鳥、耀の二人もまた、それに同意する表情だ。

「確かに、事情があつたとはいえレティシア様の行ったことは許されないことです。ですが、それに対する禊としてご自身に、様々な制限をかけました！ユースティティア様のおっしゃつていたデイストピア、アジィダカーハ双方の戦いにも参戦しておられます！当然その他の魔王とも幾度も、自分の命をかけて」

「確かに行動の中身はその通り。ですがそれは、度合いによつてその罪を軽減させるだけのことは出来ても、雪ぐことはできません」

「その者の罪。それを雪ぐだけの禊を決めることが出来るのは、まず第一に『被害者』。第二に、そして被害者の要求が過度なものであつた時いさめることが出来るのは、それだけの権限と責任を持つ者だけです。それ以外の者によつて決められたものなど、なんの意味もなさない。自分で定めたものなど、論外もいところですよ」

人を定めることが出来るのは、本人以外。自分にだけは、自分を定めることはできない。

彼女は、はつきりとそう告げた。自分で自分を見たとき、それを本当に正しく見ることが出来る者は存在しない。

驕り、本来より高く定める。

自らを低く見て、圧倒的にダメな者とする。

過剰な例はこれだが、程度の差こそあれ、物によつて変わりこそすれ、必ずこのようになる。これも自分には自分を定めることが出来ない理由の一つだ。だが、大きな理由でもない。

最大の理由は、非常に単純。

「どのような社会であろうとも。人は、他者の中でしか生きられない。人は、他者の評価でしか定まらない。そのようにできているのですから」

そう、ただそれだけのこと。本来は賢神にして善神でありながら、魔王の烙印を押されたクロアⅡバロンがいい例だろう。少なくとも現代においていうのなら彼が魔王の烙印を押された際、双方の主張において正しいのは彼のものであった。だがそれでもその他多くの神群は逆の主張をし、魔王の烙印を押し、現に魔王となった。

「彼女の罪状について、その全てはこれで終わりとなります」

その言葉とともに、ユースティティアの手の天秤が傾いた。

傾いた。天秤である以上、次に行われるのは逆側へ釣り合う質量を乗せること。

一方へ乗せられたのは罪の総量。であればもう一方へ乗せる物は。「続けて、罰を述べます」

そう、罰だ。釣り合うだけのそれをもって、その罪は真に雪がれる。彼女の言に従うのなら、それを決める最大の権利を持つのは実際に彼女の主権者権限が初めて発動された時の被害者、串刺しにされ死んだ吸血鬼たちだろう。だが、それはもういない。

なら、次にそれを決められるのは。それだけの権利と責任能力を持つ者だけ。

例えば、白夜叉の身分の保証人となった仏門のように。

例えば、ジャックの決意を持って後見人となった聖人ペトロのよう

に。例えば、外界において逮捕から裁判、刑の執行を許された者たち、そのシステムのよう

に。そして、その行為。全裁判の功績を持ち、感情的成長の要素が極限まで薄くなっている正義の女神、ユースティティアは。その行為をする者として、最適である。なにせ、彼女の主張は正しい。絶対に正しくなるよう、そう制限され、束縛されてきたのだから。

「罪状への罰は、死です。死をもって罰の執行となる。ここに私は、そう判断します」

カタリ、と。天秤はその言葉を持って釣り合った。持ち主以上の公正さを表す機器が、その真実を告げた。

「ここに天秤は成りました。続けて、罰を執行します」
「なっ・・・!?!」

目隠しは外れ、天秤はしまわれ、剣を持って立ち上がる。その間にレテイシアは何もない場所から現れた鎖によって縛られ、封じられている。あとは剣でもって罰を下すだけ。そして、女神にその行為へのためらいはない。当然だ。そうあるよう、縛られている。

だから。それに抵抗することが出来たのは。ここまでをその唐突さから見ていることしかできなかった。また、その罰が『死』だとは考えていなかった、彼女の同士である。

「ぎっけんな、クソ女神!」

逆廻十六夜の足が女神の側頭部へ当たり、壁を突き破ってその者を部屋から叩きだす。

「黒ウサギ! ヤツの主権者権限に対して審判権限は使えるか!」

「へ、ちよ、十六夜さん、」

「いいから早く答えろ! このままだと、レテイシアが死ぬぞ!」

その言葉で、未だに動けずにいた三人は状況を理解する。彼の言うとおり、このままであれば確実にレテイシアを殺される。それは許されない。

だが、リーダーのいない場でこれほどの女神に喧嘩を売って大丈夫なのかと、一瞬の思考。が、その結果はすぐに出た。そして、それはその結論をとうに出していた十六夜と全く同じ。

一つ、一輝がこの場にいたとしたら、理由は異なっただとしてもこの女神に敵対している。

二つ、そもそもアイツもさんざん迷惑をかけてきているのだ。早速できたコネを使ってギリシア神話に頭を下げてこさせればいい。

以上、問題なし!

「不可能です! 黒ウサギの審判権限は『魔王へ対抗する』ための手段! 相手が絶対の正義としてある以上、発動することは不可能です!」
「了解。んじや臨時リーダーとして決めるぞ。時間はないから文句は

無しだ」

ギフトカードから黒のロングコートをはじめとする各種装備を取り出し身に着けながら、方針を決定する。

「黒ウサギ、今の音でさすがにガキどもが混乱してるはずだ。そいつらを落ち着かせて避難。求道丸とかグリートかにも手伝わせる。飛鳥はアルマとディーンつかってその護衛。何が飛んでくか分からねえ。避難先は“サウザンドアイス”の蛟劉のどこ」

事態はそれなりに大きい。万が一に備え、前もって階層支配者をこちら側につけるか、そうでなくとも事情だけは知らせておくべきだ。「んで、俺と耀でアイツを・・・」

言うべきか、一瞬悩んだ。だが、先日決めたところだ。

逆廻十六夜、久遠飛鳥、春日部耀。この三名でいずれ、鬼道一輝を倒すのだと。

であれば、この程度は乗り越えてもらわなければ困る。この行為程度は、受け入れられなければならない。

レイシアを縛る鎖を力づくで破壊、狙われている以上は残すわけにもいかないため気絶させてから黒ウサギへ投げつけ、その言葉を告げる。

「アイツを、殺す」

『了解！』

飛鳥と黒ウサギは、応接間をでて廊下を走る。何かあったと子供たちが察したのなら、その場で混乱するか、冷静に避難するか、頼れる者の元へ向かうか。であれば廊下を通って向かうのがベスト。

そして、十六夜と耀は。先ほど開いた大穴から飛び降りる。汚い話、一輝のポケットマネーを含めればもう一回建物を立て直すくらいは余裕で出来る。避難さえ終われば、本拠内で暴れることに躊躇う必要はない。

「・・・同士をかばう気持ちは分かります。故に、それを悪だとはしません。これ以降の抵抗についても、それは同様です」

「へえ、そいつはありがたいね。だが、あまりにも緩すぎないか、女神サマ？」

「貴方の国でもあったと思います。自らの手で自らの罪の証拠を消すことは罪にならず、また親族が罪人をかくまうことも罪にはならない。わたくし 私にも、それなりに人情があります」

「・・・だったら、見逃してくれてもいいと思うんだけど」

耀の提案に対して、女神は間髪入れずに否定した。

「それはできません。また、罪には問いませんが、抵抗するのであればある程度傷つくことは覚悟してください」

その言葉を合図とし。二人は不敬にも女神へと牙をむく。

正義の執行 ②

さてこの状況、正しいのはどちらだと考えるのか。

今この状況を見ている方々の多くは、ノーネームであると答えるのではないだろうか。なぜならば、レティシアは既にその罪を雪ぐだけの働きを見せている。その命だって何度危険にさらされたことだろうか。

間違いなく、彼女は彼女自身の手で奪った以上の命を救済している。

だがしかし、ユースティティアの主張もまた正しいものだ。もしかすると、こちらと答える人も少なからずいるかもしれないほどに。

なにせ、彼女は自身の犯した罪に対して何一つ償っていない。その罪以上の功績を残したというだけで、罪そのものへ向き合っていないのだ。彼女が自身へ禊と定めたものも自身の利と重なるもの。そんなものが果たして、禊となるのだろうか。答えは単純、コミュニケーション「ノーネーム」への禊とはなっても、罪への禊とはなりえない。

間違いなく、彼女は彼女自身の罪を何一つ償っていない。

故にこそ、少年たちは反抗する。自らの同士を守るため、己の信じた正義のために。

故にこそ、女神は執行する。自らを縛る法によって、箱庭から破滅の可能性を摘み取るため。

さて、それでは――

|||||

剣の刃を向けて盾とした女神に対し、十六夜は一切の躊躇いなく拳を叩きつける。普通であれば拳から裂けていくはずの場面。しかし、十六夜の体は普通ではない。

「おや・・・」

「吹っ飛べ、クソ女神！」

その様子に首を傾げた女神を気にも留めず、剣との接点を軸にして

足を叩きつける。こらえきれぬものではなく、しかし部屋から叩きだされた時ほど飛ぶことはなかった。だからといって安全だったわけではなく、

「見よう見まね、空木倒！」

回りこんだ耀が木の葉天狗を具現し、こちらも蹴りを放つ。何かをする暇を与えず、確実に敵を削ぐ。当然の策……だが。

「なるほど、分かりました」

女神はそれを、なんでもないものとして切り捨てる。身に宿る不死のギフトは与えられた傷を修復し、元より保有する分析のギフトを持って何が行われたのかを理解した。対処法を検討し、剣を構えて十六夜へ向かう。

「罪状の特定、師匠殺し。これより執行します」

眩かれたのは、ヘラクレスの持つ罪状の一つ。そして放たれた剣の一撃は、防ぐために構えた十六夜の腕へ吸い込まれるように進み……薄皮を一枚割いて、止まった。

さすがに、本人の罪でないと絶対の能力は得ないらしい。しかしギフトを限定的に無効化するくらいのことではできるのだから、警戒しなければならぬ。そうしこうしている間に、ユースティティアは萎縮返しとばかりに十六夜を蹴り飛ばす。試してはみたものの通じないのならやる意味は無い。無力化するために肉弾戦を開始する。

知に足をつけて急停止をかけた十六夜に接近、腹部を正確に打ち抜き、続けて放った頭部への攻撃は防がれた。そこで攻撃を止め、しゃがみ転がる。耀も何もせずにいるわけではない。隙について攻撃しようとしたものの、簡単に避けられた。

「おや、これは……」

「まあ、ただやられるままなわけねえだろ」

と、転がった際に腕に違和感を感じる。見ればそこにはワイヤーのようなものが刺さった針が。何かと試してみると、腕の中に違和感。刺さっていたものが広がった感覚で、遺物が固定されたのだと察する。瞬間、ワイヤー経由で引つ張られ振り回される。

「これは……また贅沢なワイヤーですね」

ワイヤーの素材は神珍鉄。十六夜の意志に従って伸縮するその素材は、持ち主の怪力もあって女神を難なく振り回したのち大木に叩きつけられる。

何かされる前にすぐさま袖に手を突っ込み、取り出した筒状の何かにワイヤーを固定するとスイッチをオン。ミニロケット的な物が発射され、女神を樹に固定した。当然それでは終わらず、神珍鉄もまた縮み締め付ける。薄着と女神のスタイルから煽情的にすらなったが、この場にそれを気にする者はいない。十六夜が固定したそれに対して、耀はすでに肉薄していた。

生命の目録。これまでギフトによって採取してきた生物から力を持つものを可能な限り選択。それだけではなく半透明の腕も具現し、全て重ねて殴りつける。当然一撃で樹は根元からへし折れ、吹き飛ばす。だが転がったとしてもその身が樹に縛りつけられている以上動けない。これから行おうとしているのは、身動きの取れない相手に対するリンチだ。卑怯だとかそんなクソどうでもいいことは気にしない。そんなことを考えて勝てない相手であることは理解している。

だがここで、女神も動く。自身を通して衝撃を受けた樹はもろくになっており、身動きの取れない状態で与えた衝撃程度でも崩れる。ほんの一瞬緩くなった拘束を抜け出し、先に近づいてきた耀を剣の柄で殴り飛ばす。こちらも十分に脅威だ。しかし、この後向かってくる相手ほどではない。先に倒すべきは逆廻十六夜である。思いつきり本抛の瓦礫に押し潰されているのもしかすると復帰は無いかもかもしれないが、まあそれならそれでよい。続けて近づいてきた十六夜の拳を避け、こちらも拳で対処する。効果の無い剣はしまい、十六夜の拳を肘で叩き落としてから膝を腹に打ち込む。当然、全力だ。ユースティティア程度の全力で壊れる程柔な体ではないため、ためらいはない。殺さず、可能なら考えを改めさせ、それができないのなら執行する間だけ大人しくしてもらえればいい。

されど、相手は人間の頂点レベルに存在する。その身に宿るギフトは驚異的なまでの身体能力。神霊であってもユースティティアの身体能力ではその体を壊すことが出来るほどのものではない。故にこ

ここから行われるのは泥臭い殴り合い・・・であるはずだった。

現実には、そうはならない。十六夜の攻撃は全て避けられ、ユースティティアの攻撃は全て狙った位置へと打ち込まれる。ユースティティアの主権者権限は未だ発動したままであり、行われるゲームの内容は『罪の特定、及び罰の執行』である。これによって十六夜の害意を特定、結果としてどこへ打ち込まうとしているのかが判明してしまう。

皮肉なものだ。新たな力を得ようと一輝から習ったものは武器、手段と言う逆廻十六夜にとつて最も不要なものを与えてしまい、弱体化したが故のこの結果。一輝から何も習っておらず、武器を手にとるといふ愚もおかしていない十六夜であればこのような結果にはならなかった。そのころの彼の速度であれば、分かっていたとしても追いつくことはできない。否、頭で考えないが故に害意を特定したとしても場所は特定できなかっただろう。

結果として。身体能力から十六夜の体を撃ち抜く絞劉のような手段ではなく。技術によってその肉体を突破する一輝のようなやり方でもなく。本来撃ち抜けないはずの力を用いて、劣り過ぎる技術に乗せて、ユースティティアは逆廻十六夜に勝利した。

|||||

意識を取り戻し、瓦礫から抜け出した耀はまず額から流れる血を拭った。続けて顔を上げると、立っている人物が一人。十六夜ではなく、ユースティティアであった。慌てて立ち上がり、ギフトへと意識を向ける。もっとも使い慣れているグリフォンを取り出そうとしたところで、

「まだやりますか？正直、これ以上いくらやっても変わらないと思いますが」

と、断言される。意識を取り戻したらこの状況なのだから心のどこかでそう思っていた身としては、体が固まってしまう。それでも、何もしないわけにはいかない。時間を稼ぐことが出来れば飛鳥と黒ウ

サギが戻ってくる可能性もある。そこまでの時間稼ぎを行うことが出来れば、まだチャンスはある。相手が神霊だけに他のコミュニケーションが協力してくれるのかはわからないが、それでも何とかするしかない。これまでに使った中から手段を探る。

形状。杖、火力は足りないだろう。光翼馬、いざとなればこれで先に合流する。麒麟、威力は十分検討対象。火鼠、意味がない。マルコシアス、現状最有力。大鵬ヴィナマ・ガルダ金翅鳥、対神の属性は有利だと判断。原初龍・金星降誕ケツアルコアトル、有力ではある。後半はタイムリミットの存在が怖く合流して協力という目標は捨てることになる。

そこでふと、ある可能性が頭をよぎった。この状況を打開しうる最大の手段。その能力の大きさ故にタイムリミットが存在することは確定している。もしかするとそれ以上の対価が発生するかもしれない。試すだけの価値はあるだろう。ペンダントを握り、他に問題がないかを探る。

可能なかどうか。今やろうとして問題がない以上、可能だ。もつと最悪の事態となる可能性。向こうが見て斬るのは私自身の罪ではないため軽減されるのは間違いない。自身が箱庭の敵となる可能性。それならそれで仲間が何とかすると信じる。

結論、やるだけの価値はある。返事をせず、準備は整った。あとはペンダントへ宣言を下すのみ。口を開き、息を吸って・・・

「なあ、その女神。そこで何をしてる?」

そこで。コミュニケーションのリーダーが帰還した。

|||||

帰還した一輝は状況を見て、そしてその姿を見て理解した。そこにいるのが女神ユースティティアであり、この惨状は彼女の手によるものであり、倒れている十六夜と傷だらけの耀は向うの手によるものであると。

だがそれでも。問わなければならない。手を出してくる様子の無い女神を見ながら耀の前まで移動し、問いかける。

「初めまして、女神ユースティティア。一応ノーネームのリーダーとしてことになってる鬼道一輝だ」

「あらあらこれは。初めまして、絶対悪の魔王・アジィダカーハを打ち倒し英雄よ。私は正義の理を預かり、それを執行する者に名を貸す女神、ユースティティアでございます。お会いできて光栄ですわ」

私服姿の20も生きていない少年に、女神は最大限の敬意を表した。それだけ彼女は彼を尊敬しているのだ。

「それで、ここには何をしに？」

「箱庭を脅かす人類最終試験がついた今、さらなる危機は避けねばなりません。貴方様へその相談をしに来たのと、裁きを受けていない魔王を裁きに」

特に普段と変わらない様子を見せる一輝へ、女神はただ事実を伝える。会ってみただけだけという感情も存在するが、言わなかっただけだ。

「ふうん、対象としてはレティシアってところか。裁定の内容は？」

「罪状は言うまでもないでしょう。それに対して与えるべき罰は『死』です」

ここまで言われても、彼の表情、感情に変化はない。当然だ。レティシアがどうなってもいようとどうでもよく、それ以上に彼の意識を向ける対象があるのだから。

「ふうん。それはお前のさじ加減で？」

「まさか。正義は真に公平な立場から下すべきもの。私の主催者権限は発動から罰の決定までの間、私の意識を99%停止させます。その状態で下した決定をさらに、天秤で測る。これで決定したものです」
その発言でようやく、彼の表情に変化が現れた。しかし、彼女はそれに気付かない。

「なるほど。つまりお前の行いにお前の意識は存在せず、お前のエゴは介入せず、ただ公平に行った結果だと」

「ええ。それが私の主催者権限、私に与えられた役割でございます。貴方に会ってみただけ、という我儘わがままもないではありませんが」

「へえ、そうか」

ここで彼は、彼女の存在を完璧に理解した。どのような理屈を持つ存在なのか、それを知る。

それ故に。誰もが正しいのだと判断しなければならぬ存在であるが故に。間違ったことは何があっても行わない存在であると知ったが故に。

感情は、たった三つを残してそぎ落とされた。

一つ。大切を害する何人をも許さぬ。ただし、大切を定義する感情は存在しない。

二つ。一族の血を滅ぼさない。途絶えさせることは世界の崩壊故に、世界から植え付けられた感情。

三つ。気に入らない存在を、何が何でも排除する。しかし、気に入る気に入らないを定義する感情は存在しない。

しかし——感情が消失する前に、目の前の存在がこの上なく気に入らないと断定した。

今となつては、何故気に入らないのかも覚えていない。だがどうやら、気に入らないらしい。であれば、何をするのかは決まっている。

「ああ、反吐が出る」

瞳に感情は宿らない。当然だ。そんな感情は存在しない。

その体に一切の無駄はない。当然だ。無駄を発生させる感情は無いのだから。

手段に対するためらいはない。当然だ。恐怖も打算も存在しないのだから。

背後の存在への配慮は存在しない。当然だ。大切だとも気に入らないとも定義されていない彼女は、路傍の石ころと何も変わらない。

ここにあるのは。ただ目の前の女神を殺戮するだけの。機械だ。

外道の執行

その時の彼は、こんな心境だった。

彼女の決定に、怒りはなかった。

その女神の主張は正しく、その女神の行動は正しく、その女神の裁きは正しかった。

その対象は大切ではなく、その対象は必須ではなく、その対象の死は悲しくはあっても喪失ではなかった。

大切に区分される逆廻十六夜が傷つけられはしたものの死んではおらず、自業自得であったが故に思うところはない。

故に彼の発言は、「反吐が出る」という処刑宣言はそこに向けられたものではなかった。

では一体何に向けられたのか。それは、女神の在り方そのものだった。

正義を決定づける存在、それは存在するだろう。だが気に食わない。

正義を実行する存在、それは存在するだろう。だが気に食わない。裁かれなければならない存在、それは存在するだろう。だが気に食わない。

レティシアは死ぬべき悪である、それは事実だろう。まあそれはどうでもいい。

ああそう、つまり。絶対的な悪と絶対的な正義を決定づけることのできる彼は、絶対的な悪と絶対的な正義を決定づけることのできる彼女の存在が、ただ鬱陶しかっただけなのだ。

|| || || || || || || ||

外道は感情の宿らない目で周囲の情報をとらえ、刀を抜く。妖刀師子王、社に祀られ神刀へと足をかけた一振り。神をも切りうる名刀。

相対する正義はその対立を悲しく思い、剣を構える。鎚は裁きを下すためのものであり、剣は悪を両断するためのものであり、天秤は善

悪を測るためのものである。それ故に、相手の目を覚ますために振るうは剣だ。

双方は交叉した。そしてその結果は、明確であった。

第一に、双方の格に大きな差は存在しない。積み重ねた霊格こそ異なれど、正義の体現者と境界の体現者。境界を定め、それ故に主催者権限を封じる権利を持つ存在。運命への干渉は打ち消される。

故に、その結果を定めたのは目標にあった。女神は心の在り方を直すことを目的に振るい、外道は殺すために振るった。剣は両断され、足は切り落とされ、足の機能は失われた。

その瞬間、女神はようやく、一つの事実を認識した。躊躇うことなく足を狙い、罨を仕掛け、苦痛を与えるためだけに鈍らせたその刃に。相手は自分を苦しめるつもりでいるのだと・・・明確な悪意を察知する。

それを認識すれば、もはや躊躇うことはない。何故という困惑こそ残るものの、正しく裁くために主催者権限正義を実行する開催。天秤が現れ、その瞬間に彼女はゲームを正しく進行するためだけの存在歯車へと移り変わる。後は目に移る罪状を天秤へと導くのみ。しかし、その皿は何も乗せずに消滅する。

重ねて発動されるのは、外道の主催者権限。正義がゲームを開始するよりも早く、強制的に終了させられる。ゲームによって対処を縛ることが出来たのは、ほんの数瞬。切断された足はすでに生えているが、有利を取れるほどの時間ではない。・・・むしろ、ゲームの終了に伴って戻ってきた感情は、今見ることでできた罪を理解しきれない。

一族の敵を、必要以上に苦しめて殺す姿があった。

一族を皆殺しにされた恨みの発散にしては、強すぎる行為だ。

会社内に潜む敵を探りだすために、無差別に関係者を拷問する姿があった。

罪人の行った無差別殺害罪は重い。だが、無関係な人間も巻き込んだ。

せめて娘が独り立ちできるまで待つてほしいと頭を下げる父親の目の前で、娘と妻を射殺し「もう理由はなくなったな？」と残酷に告げる姿があった。

やむを得ず手を汚したお人よしに、自分のせいで愛する妻子が死んだという責め苦であった。

強さをもとめて辻斬りを繰り返した中華の守護者は、生きながらミンチとなった。

民を守り続けた英傑はただ無情に刻まれ、屍は鳥についばまれる。

妄執の果てに人間をやめた肉塊賢人は、虚無に吞まれて消滅した。

国を個人の欲望から解き放つための研究は、ゴミにもならないと嘲笑いながら破壊された。

それを直視したが故に、彼女は全て理解した。一つ、彼は互角の殺し合いに興奮する異端者である。二つ、彼は命を奪うことにためらいを覚えない殺戮者である。三つ、そもその殺しの動機すら必要としない機械である。

こんなものが正義であるものか。しかし、これは悪でもない。義務ではなく、権利も存在しない。感情に従った結果ではなく、仕事として行つたわけでもない。欲求に従つたわけではなく、必要に迫られたわけでもない。

本当に、何の要素もなくなった存在が、ただ殺しを行つたのだ。

行動に意志は無く、結果が善悪双方存在するが故の、外道。表す言葉があるのなら、最大のクス。当然、悪ではなくとも世界に存在しているものではない。剣を構え、次の瞬間、対象は眼前にいた。空っぽの瞳。何の感情もなく、ただ剣をいなして刀で足を抉る。正義の体は容易く転がり、外道はその胴へ刀を突きさす。女神は、神刀によって地面へ縫い付けられた。

たかが腹部を刀で貫かれた程度。ギリシア神群より不死を賜った体にはその程度なんでもなく、すぐに修復された足も駆使して立ち上がろうとするが外道はそれを許さない。上から抑え込み、四肢の骨を破壊して、その体に呪符を貼りつけ、九字を切る。続けて、不動明王

真言が唱えられた。不動金縛りの術。金縛りの文字通り、その身の自由を縛った。

この世の善を定める女神はここに、自由を篡奪された。

「ふう・・・」

敵の自由を奪い、鬼道一輝は感情を再構成した。腕を、足を、半身を何度も消し飛ばされつつの機械的な攻撃。それを行うために削除した感情を、これまでそうしてきたように作成して、鬼道一輝という本体に読み込ませる。といっても全て取り戻すのはまだ先の話。今は、今必要な感情だけを取り戻す。

そうして、感情を取り戻して目の前にいる女神をどうするか吟味する。ギリシア神群から道案内に出されたものから聞いたところによれば、目の前にいる女神は箱庭にて不死を与えられたらしい。だとすれば、殺すのは容易ではない。そもそも可能な限り限界まで苦しめるため、その方法を考えるために感情を取り戻したのだからサクツと殺すわけにもいかない。さてどうしたものかと考え・・・一つの結論に至った。

「我が百鬼より来たれ、鬼」

奥義の発動。その身に宿る檻から、『鬼』などいう大雑把なくくりで異形が解放される。そうして現れるのは、まさに人がイメージし、様々な物語にて悪役として登場させた鬼であった。

筋骨隆々、角と牙を持つ人間の敵。かつて鬼道の一族が例えられ、未だにその名に一文字を刻む存在。もっともありふれているが故に数も尋常ではない鬼の軍勢が、限定的に開放された。

「犯していいのかい、我が主？」

欠片も主とは思っていない声の主に対し、一輝は首を振る。

「却下だ。感情が戻ってないころならともかく、今は不快だ」

女が強姦されているのを見るのが不快なのではなく、それでは殺すことが出来ないことが不快。無駄なことに時間を浪費するのを、彼は許容できなかった。そうでなくとも、それでは相手の心を折ることができない。

であれば、殺すことが出来る手段であればいいといっているわけで

あり。

「なら、どのような？」

「ハッ、決まってる。——喰え。女神の踊り食いだ、そう言うの好きだろ？」

|||||

その言葉と同時に、鬼の一人が飛び出した。これまでくらって来たモノと比べるまでもなく極上のエサがそこにあり、好きだけ喰らえるとかかった以上躊躇う理由がない。砕かれた足へと手をかけ、一思いに引きちぎる。クチュクチュと、すぐ後ろを追っていた鬼が断面より滴る血を吸い、内モモへと舌を伸ばす。色情からではない。その肉が柔で美味であると知っているからだ。食いちぎり、嘔き出す血で喉を潤す。

膝から下を引きちぎった鬼は断面よりこぼれる血を飲み干したのち、骨付きの肉を喰らう要領で……否、事実その通りの動作でもって女神の肉を喰らう。生肉特有の弾力、それを自前の牙で食いちぎり、嚙下する。そこまで時が過ぎると、残りの鬼も殺到した。足へ、腕へ、乳房へ、臀部へ。暴れる柔肉の全てへ手を伸ばし、抑え込み、我先にと口を近づける。舌で触れ、次の瞬間、グチュリ、と生音が。肉を喰らう音、血を啜る音、女神の放つ悲鳴で奏でられる三重奏。次の瞬間、そこに歓声加わった。

ギリシア神群より不死を与えられたその体は、正しくその祝福^{呪い}を發揮する。修復されてゆく体。今間違はなく喰われた体は、血痕以外何の痕跡も残さず修復された。無限に喰らい続けられる至極の食事。喜びは声から行動へ変わり、女神が身につけていた衣服^{バツケージ}を引き裂く。完全に何も隠すものがなくなり晒された裸体。さすがは女神と云うべき美しさを持つ裸体であったが、今彼女を囲んでいる者たちが抱いているのは肉欲ではなく食欲である。鋭い爪が突き刺さり、血によって汚された。蛇腹^{小腸}のような形をした長い物^{大腸}が引き出され、麵類のように啜られる。

一対の大きな袋^姉が取り出され、握りつぶして一口に飲み込まれる。わざわざ取り出すのも億劫だとばかりに穴へ口を近づけ、直接内臓を喰らう。あまりの痛みに身を振り目を見開けば、そこには老婆が一人。単眼の老婆、ミカリババアはその眼へ指をつき立て、抉り取る。尻尾の付いた球体を飲み込むと、満足したのかケケケと笑い檻へと帰る。さらに高まるはずだった悲鳴は、同時に口周りを喰らわれたことによる驚きで埋められた。喉元にも一つ。声帯ごと喰らわれ、しかしすぐに治る。治った端から喰らわれる。当然のこととして女神も何度も抵抗を試みた。腕が治った瞬間近くの鬼を殴り飛ばし、次を狙ったところで一輝の操る空気によって押し潰される。同時に断面へと喰らいつくよう鬼へ命令を出す。手羽先のように喰えなくなったと不満を漏らす声はあるものの、それ以上に美食を喰らうことに意識を持っていかれていた。食事は続行される。ふと、拳^心大の塊^臍を取り出したとき、一瞬女神が停止したが、すぐに再起動。心臓の喪失はさすがに意識の停止を引き起こしたが、祝福^{呪い}によって再び。悲鳴は演奏へ返り咲いた。

捕食は終わらない。満足した鬼は檻へと帰り、新たな鬼がその美食を喰らうため表に出る。63もの代を重ねた一族の殺してきた鬼だ。その総数は到底、数えられるものではない。終わることのない責め苦。痛みを感じ、屈辱を感じ、そして何よりも自分が延々と喰らわれる。如何に希薄した感情の持ち主であっても、その精神は確実に弱り、ずさんでゆく。

死を願う女神は、やがてその解へたどり着く。

|| || || || || || || || || ||

目の前で起こっていることを、飲み込むことが出来なかった。いや、理解はできている。弱者が強者に喰らわれる光景。動物園で起こることはなかったが、水族館では起こったのを見たこともあるし、双方の言を聞いたこともある。自然界では言うまでもない。蜘蛛が蝶を喰らう姿・・・いや、蟻が集団でもっと大きな存在を喰らっている

時が、最も近いか。

しかし、やはり飲み込むことが出来ない。起こってもおかしくはないと思っていた。事実、箱庭に来たときグリフォンのご飯になる覚悟をしていた。それでも、実際にそうなっているのを見て、どうしようもないと思ってしまった。

いや、違うか。やっぱり、どう考えても、この光景が異常なのだ。終わることなく、化け物が一人の女を喰らっていく。それを一人の、同世代の人間が指示して行っている。しかも、指示した当人は何の感情も抱いていない。

ふと、ユースティティアが暴れ回る過程で目があった、ような気がした。そこでふと、その姿に。女性的尊厳が捨て去られ、その上でそれはまったく別のところを犯されていくその姿に、自分が重なった。それでようやく、その事実思い至る。あそこにいたのは、別に自分でもおかしくなかったのだ、と。それが一輝という人間で、寺西一輝という外道で、鬼道一輝という英雄の姿なのだ、と。

例えば、箱庭に来たとき。別行動をしていなかったのなら私は、彼に殺されていたのではないかと思う。

箱庭に入ってしまった後、彼がガルドの誘いを受けていたらそれに乗って私たちの敵になっていたのではないかと思う。

もつと簡単な例として。一輝と湖札の召喚先が逆だったのなら、今とは全く別の結果が現れていただろう。

そうなれば、今あの場で。裸体をさらし、悲鳴を上げて、失禁してもなお止まることなく喰われ続けたのは、自分だったかもしれない。その考えに至った瞬間、体が震え出した。ただでさえ力の入らない体がさらに崩れ、自覚した段階で五感が情報を受け取りだした。視覚は飛び散る赤を。聴覚は捕食音を。嗅覚は鉄臭さを。味覚は空気中を漂う血の味を。触覚は悲鳴による空気の振動を。ああどうして、どうしてこの状況に、私は直面しているのか……！

恐怖から詰問しようとしたところで、視界がふさがれた。

「えっ……」

「すいません耀さん、しばらくの間失礼しますね」

湖札の声と手の温度に、少し体の震えが治まった。考えてみれば彼女も一輝と同類だというのに、なぜ安心したのだろうか。年の近い同性の相手、というだけで安心したのだろうか。そんなことを考えていると、ピリツとした感覚が。

「兄さん、一切考慮してないですからね。確かに箱庭で生きていくって考えると必要なことですけど、個人的にはさすがにまだ酷かな、って思いますので」

「え、っと」

「しばらく、五感が落ちます。時間経過で元通りになるので、安心してください」

そういって、手を外される。目を開ければ、言われた通り視界がぼやけていた。他の感覚も平時に比べて落ちている。まだ視界にも入るし聞こえても来るが、それ以外で感じることはなくなった。ちよつと安心してしまふ。自己嫌悪は、抱かなかつた。

「さて、改めてお話ししましょうか。色々と察してはいたようですけど、あれは想定外でしょう?」

その通り。あれだけの残虐性は想定内であつたが、あの様子は完全に想定外。どうしてあそこまで無感情に、あそこまでむごいことを行えるのか。

「そう言うわけではつきり言わせていただくと、あれが兄の本性です。これまで同じ屋根の下で過ごし、同じ旗の下で戦ってきた、一輝という人間の本当の姿」

「もうあれ以上、隠してることはないんだ」

「鬼道のことを除けば、何一つ。まあ、耀さんや飛鳥さんが気付いてい

ることも含めて、ですけど」
その上で、仲間だと思えますか?と。そう問われ、すぐに返すことはできなかつた。この状況を見て、恐怖を抱いてしまったから。それ故に、耀は問いに問いを返す。

「湖札たちは、どうしてるの?」

「なんだか色んなところで聞かれてる気がしますけど、まあ同類だつたり道具だつたり諦めて受け入れていたり、です。本当に色々です

よ」

「そ、つか」

歪に過ぎる関係を知り、はてどうしたものかと思わしていると、悲鳴の舞台から大きな輝きが。目を向けると、何か黄金に輝く塊が発生している。

「あれは・・・?」

「ユースティティアの魂、でしょうね。殺されたことで兄さんに封印される、と言ったところでしょう」

「でも確か、ユースティティアはギリシア神群から不死を与えられたって」

「ええ、確かに不死を与えられていたようです。ですが、当然ながらそれはギリシア神話における不死・・・ケイローンの逸話をご存じですか?」

言われて、思い出した。ギリシア神話において、不死とは手放すことが出来るものなのだ。その思考に至った時、先ほどまで行われていたこともまたギリシア神話の再現・・・プロメテウスの逸話から来ているのだと察した。

「きれいに輝くんだね、魂って」

「霊獣か神様だから、というのもありますけどね。ただの妖怪や人間の魂は輝きません」

所詮人間なんざそんなもんだと言われたようで、釈然としない。そんなことを考えながら、全てのことを終えて近づいてくる一輝を見る。どんな表情で接すればいいのか、判断がつかなくて頭が真っ白になる。

「さてと、だ。ひとまずこれ、預けるわ」

「え?あ、うん・・・え?」

渡されたのは、Dフォンだった。確かこれは、隷属関連の重要なものだったはず・・・

「じゃ、しばらく任せた」

「え?・・・え!?!」

しれっとそう告げた一輝は、煙球を地面に投げつけ・・・兄妹そろっ

て煙がはれる間にいなくなっていた。しばし無言で呆れてから、ポツリ、と。

「なんでこー、なるの」

春日部耀の口かららしくなく、そんな言葉が漏れた。

正月に気が狂った、許せ
年末短編 魔王ジャンヌ・ダルク 前編

死屍累々という言葉は、その光景を表すのに最適な言葉であつたの
だろう。

簡素な鎧をまとい、槍や剣といった装備を手に持った兵士たち。一
人の少女が与えられ、捻じ曲げられたギフトによって召喚された、忠
実なる兵士たち。百を超え、千を超え、万にさえ至ろうというその軍
隊。少女の命令へ忠実に従い、主の言葉少女によつて鼓舞され、不可能と
言う理不尽を踏破する騎士団はしかし、もう一人として残つていな
い。

剣を持った兵士も、槍を持った兵士も、弓を持った兵士も、馬に乗つ
た兵士も、馬でさえも。差別はよくないとばかりにただ一人の例外す
らなく、両断され転がっていた。虐殺の具現たるその地には、二人の
人間が立っていた。

一人は、凡庸にしか見えない男。十代半ばか二十代前半ほどの、和
服を纏った男。戦場に立っているにもかかわらず防具の一つすら身
に着けておらず、武器と呼べるものも手に握る日本刀一本のみ。たつ
たそれだけでその人数を切り捨てようものなら骨に油脂で刃が鈍る
はずなのに、鈍っている様子はない。幾千幾万を切り捨てて見せよう
とばかりに、怪しく輝いている。

一人は、装備に身を包み、腰に剣を下げ、折れた旗を踏む少女。自
らを慕い、自らに従つて、その結果死体をさらすこととなつた死体た
ちへ何の感情も籠っていない瞳を向け、その瞳をそのまま男へ向け
る。二十歳になつたかどうかという見た目の年齢に似合わない眼差
しは、その存在の異常さを物語っている。

そうして相対する二人。双方方向性は異なりながらも異常性を示
している彼らは、血肉の川を踏みながら近づいていく。一方は刀に付
着する血肉を拭い捨てながら、一方は折れて短くなった柄を投げ捨て
ながら。一步一步間合いを詰めていき、刀の間合いに入り、それすら

生きないほどの距離にまで近づき、そして――

|||||

「さーて示道、私がアンタに頼んだ用事が何だったのか、覚えてるかしら？」

「あのなあ金糸雀、俺をバカにしてるのか？頼まれてからまだ一週間もたっていないのに忘れるわけないだろ」

「そつかそつか。じゃあ言ってみてくれるかしら？ほらほら、一字一句合わせなくてもいいから」

「ちよつと謎の兵団っぽい動きがあるから調査してきてほしい、だろ？」

「ええそうね。隠密能力にも優れているし単身で動くことも可能、巻き込まれても一人で一万くらいなら相手にできる。そんなアンタの能力を見込んで、『偵察だけ』を依頼したのよねえ」

うんうん、と。目を閉じ、腕を組みながら自身の記憶に間違いがなかったことを確認する。良かった良かった、と言わんばかりの笑顔でもう一度領いてから自身のマグカップを取り、ハーブティを飲む。リラックス効果のあるそれを一口、二口と含み、ホッと一息をついて。彼の後ろにぼけーつとしながら立っている少女を指さし。

「その女の子、どなた？」

「諸々の原因になっていた魔王・ジャンヌダルク。ゲーム内容がむっちゃ簡単だったからクリアしてゲットしてきた！」

『偵察』って言葉の意味を百回調べて来い、この問題児ッ！」

その恫喝は、本拠中へ響き渡った。

|||||

思い返してみれば、自分の生まれは農夫の娘であった。

ジャック・ダルクとイザベル・ウトンの間に生まれた五人の子供の一人。ドンレミの村で生まれた。両親からは大人しい子供、という評

価を受けていて、それは実際周りから見た場合にもそうだったのだろう。ただただ、これと言つてしたいこともなかったから、周りに望まれたようにしていただけだったのだが。

そんな私にも、好きなものくらいはあった。家族への愛情だって持っていたと思うし、日々の食事には感謝と喜びを向けていたように思うし、信仰の徒としても確かにあることが出来たはずだ。

だからこそ、あの出来事が心を大きく動かしてくれた、そのはずなのだから。

|| || || || || || || ||

「つたく、金糸雀め……ちよーつと単騎で魔王討伐してきただけじゃねえか。だつてのに、なんでこんな罰則まで……」

などとぼやきながら手中の苗をつまみ取り、ぐっと泥の中に差し込む。少し下がって、同じことをもう一度。明らかに慣れた手つきと使用感の溢れるその格好から、彼がある程度定期的に田植えを行っているのだという事実が垣間見える。おそらくその全ては罰則なのだろう。

「きわめて不可解です」

と、口だけはぼやきながら楽しそうな表情で続行していた示道に対して。この状況がきわめて不可解であると言わんばかりの表情で、少女が口を挟む。

「如何に指示した通りの結果ではないとはいえ、全ての指示がその通りに成し遂げられることなど、戦場ではありえないこと。その上私を倒したところでどこかから苦情が入るわけでもなく、貴方本人は無傷で私と言う奴隷を獲得してきた。これは十二分に功績として考えられていいだけのモノ」

と、慣れない手つき、なれない足取りで田植えを行いながらの長台詞。今着ている作業着も明らかに下したてであり、やり辛そうなことこの上ない。彼女でなければ、口調の不満にはやり辛いことへのそれも多分に含まれていたのだろう。

「新たに獲得した奴隷である私がこの作業をやるのであれば、自然なこと。しかし、単騎であれだけの戦力を誇り、功績まで持ち帰った貴方がこのような雑務をこなすなんて、何一つ釣り合わない、不条理この上ない」

と、そこでようやく示道を見る。何の感情も宿さない虚ろな瞳は、ただただ第三者という視点から観測された事実のみを形にする。

「貴方はこの状況に、何か不満はないの？」

その言葉には果たして、どれだけの意味が含まれていたのだろうか。

文句を言えるだけの立場だろう、という問いかけが。

何故従っているのか、という疑問が。

反逆の狼煙を立てないのか、という詰問が。

あるいは本当に、何も含まれていないのか。

さて、そんな感情を正面からぶつけられた彼はといえは。

「んー、でも今回の罰則は一区画だけ、時間制限なしだ。去年受けたのに比べたら、よっぽど軽い方だぞ？」

何とも思っていない表情でそう告げて。

「んなことより、とつとと終わらせようぜ。腹減ってきたし、メシ食いたい」

と、作業に戻る。現状の不満だとか能力に見合わない低待遇だとか、そんなモノより目の前のメシである、と。

|||||

それは、12歳になったある日のことだった。いつものように自分の役割をこなして、役得とばかりに干し草の上でお昼寝をして。そんないつもと変わらない一日を過ごしていたはずなのに、いつもとは異なる現象が起こった。

姿が見えず、声が聞こえない。にもかかわらずその姿を認識できず、声が頭に届く。そんな存在から、「王太子シャルルを助け、イングランドに占領されたフランス領を奪還して欲しい」と望まれた。当

然、何の事だか分からない。両親から心優しく、健やかで、普通の子供に育ってほしいと望まれていたのだから、一度は断った。断って、そこでその存在が何だったのかを理解した。

大天使ミカエル。アレクサンドリアのカタリナ。アンティオキアのマルガリタ。一人の天使と、二人の聖女。ああ、それだけの存在に望まれてしまつては仕方ない。親からの望みは大切だが、これだけの存在からの望みはその上に行く。

望まれたのなら、そうしよう。愛を裏切るその行為に、私は涙を流した。

|||||

「さてさて、それでは！罰を終えてメシも食つた、ということでお待ちかねの本拠諸々案内と行こう！」

「別に待っていない」

「残念ながらそうは問屋が卸さない！お前はこれから俺の従者として、ここで暮らしていくんだ。何も知らないままでいられると思うのか？」

至極もつともな返答が返ってきたので、もう気にしないことにした。何も知らされず勝手に部屋も使えず野宿、なんてことは悲しいにもほどがあるだろう。

「つーわけで、だ。まずはここ、お前の部屋な」

と言いながら鍵を刺し、捻る。ガチャツ、と言う小気味よい音を鳴らしながら開場され、ドアノブをひねれば扉も動く。ありえないほどに豪華な部屋、と言うわけではないがそれでも一人の人間が暮らすだけであれば十二分なスペースがある。最低限必要なものとしてか準備しておいたのかは不明だが、ベッドや箆筒と言った物はそろつていた。

「必須な家具だけはどこの部屋も常備してあるんだが、まあ見ての通り必要最低限だ。あとでいるもん買い足しに行くぞ」

「従者に与えるにしては過分に過ぎるのでは？」

「形式上、お前の立場は従者兼プレイヤーだ。ネームバリューも加味すると、まあこの程度の部屋はやらないと色々問題なんだよ」

まあ金はあるから気にするな、と言いながら先ほどのカギを投げ渡す。リングに纏められた、部屋番号の刻まれている二つのカギ。記された番号が同じなので、共にこの部屋の鍵なのだろう。

「何故、二つ？」

「リーダーから、一応主が一本は持っておけて押し付けられました。いらねえから両方やる、親友でもできたらそいつに渡せばいい」

「……なるほど」

明らかに渡したのは監視用だと思われるのだが、本人にする気がない以上どうやったところで無駄だろう。非合理的ではあるが、都合はいい。もらえるものはもらってしまおう。

「んじやま、衣装棚の中に今日からのお前の制服が入ってるから。本拠内の案内をする前に着替えるように」

と言つて部屋を出ていく。着替えるのだからと気を使ったのだろう。自らの奴隷に対してお人好しなことである。そう考えつつ、衣装棚を開く。

そこには、メイド服が10着吊るされていた。

一度衣装棚を閉じ、目頭をもむ。冷静な観測、及びそこから得られる情報を判別、判断することに長けた彼女をしてもそれが理解できず、たつぷり十秒ほど考え込んで、また開く。当然の結果として、同じことが起こった。

「なんだこれは」

「ウチの伝統……みたいなもんだ。ま、対外的にちゃんと従者である、ってアピールするためのもんだな」

なるほど、と納得する。力関係を見て分かるようにしておくことも、著名な魔王であった場合には従属関係にあるのだとアピールすることも重要なことだ。そして、女の従者が着る服としてメイド服を採用するというのも……まあ、普通と言えば普通か。普通なのだろう。私にはわからないが普通なはずだ。

思考回路を投げ捨てつつ一着取り出し、来ている服を脱ぎ捨てる。

かなり質のいい布で出来ていることやいくつかのギフトが付与されていることが、なんだかムカついた。

|||||

そうして私は、16の時。戦乱へと身を捧ぐ、第一歩を踏み出した。当然のこととしてにべもなく追い返されたが、関係ない。

これは後に知ったことなのだが、悪意ある何者かの介入によって敵軍に強大なギフト保有者がおり、たどるべき流れが変わる、そんな状況だったらしい。何にせよそんな経緯で、私はいくつかのギフトを与えられていた。ただの人間として何者の祝福も受けることなく生まれた、ただの人間が。容量不足の魂は、感情と言うデータを一部破棄した。

そうして私は、救国の聖女として完成した。

|||||

分かっていたことだが、はつきり言おう。無駄に広い。

「とまあ、まだ全部じゃないが必要になるのはこんなもんかな。後は生活する中でガキどもにでも聞いてくれ」

「……まあ、うん。本当に、基本雑用係、と」

「まあ戦力として魔王のギフトゲームに参加してもらったこともあるだろうし、他コミュニティとの交渉の方について来てもらったりもするだろうけど、基本はそっちだな」

まあ、それだけの扱い方をできるだけの戦力があるコミュニティなのだろう。実際今私を従えているコイツも一人で軍を殺しつくせるだけの戦力ではあるし、私の件を報告されていた金髪の女も、本人もかなりのものであったし部屋に控えていた彼女の従者もかなりのものだった。燕尾服の男など、あれ確実に神霊の類だろう。神霊を従える人間って、なんだそれ。

「あ、そうだそうだ。今本拠にいないから挨拶できないけど、いずれウ

チのリーダー様にも挨拶してこないとだな」

「あの金糸雀とやらはリーダーではないのか」

「諸々の運営は任されてるけど、リーダーではないな。ちなみにだが、リーダーを相手にすると俺は10秒くらいで負ける」

これが10秒とは……まあでも、ありえないかと言われるとそうでも無い。超常の技として若干の術は使えるようだが、それはそこまで強いものではなかった。戦況を操れるだけの能力は刀しかなかった以上、相性によつては容易に敗北するだろう。それこそ遠距離から無限に攻撃し続けるだけでも倒せる。

……砲弾だろうが刀一本で斬り捨てていたので、それなり以上の能力、威力を有する遠距離攻撃である必要があるだろう。まあこの箱庭とか言う世界ではそんなもの珍しくもなんともないだろう。

「まあそんな都合でこのコミュニティに入ったんだけどな」

「……お前も魔王だったりのか？」

「そんな立派なもんじゃねえよ。ご先祖様に有名人はいるけど、それだつて歴史の敗者だ。その上家出したしな」

つまり、家の者として獲得できる全てを投げ捨ててきた、ということだろう。大したものがあったのかもしれないが、それでも受け継げるものがあつたかもしれないのに。

「そんで家出して、ちまちまギフトゲームに参加しながら日銭稼いで過ごしてたら……」

「過ごしてたら？」

「偶然リーダー様と同じギフトゲームに参加して、惨敗して、フル装備でもう一回挑んで再び惨敗して、敗者としてコミュニティに入った」
「にしては堂々と過ごしてるな」

「あつちも丁度、俺の苗字とギフトが必要だったからな。対等に近い立場はゲットできたんだよ」

ふむ……苗字が必要、ということとは本人は散々な言い方だが、それなりの有名人かその血筋なのだろう。それによって獲得できる何か、といわれてすぐさま思いつくのは合間合間、補助的に使っていた魔術のことだろうか。

「それに、そうでなくともウチのコミュニティは実力と結果をガッツリ評価するからな。お前も仕事をこなせば、それなりの地位をもらえるだろ」

「つまり、主の上にも立てる、と」

「おー、それも面白いな。従者が主よりコミュニティ内での立場が上つての、面白いからは是非目指してくれ」

……私のギフトゲームをクリアして隷属させたの、自分の功績として点数稼ぎ、とかではなかったのか。まあ確かに、命令を無視していたっぽいから違和感はないが……何が目的なのか、まるで読めない。「んじや、案内も終わったところで買い物行くぞ。いろいろ買い出しタイムだ」

そんな何も読めないやつは、その通り何が言いたいのか読めない表情でそう言った。

|||||

夢を媒介とした、簡易的な予知能力。あらゆる過程をも見通す予知の魔眼とは比べ物にもならないが、それでも結果とちよつとした部分部分くらいは知ることのできる、そんな恩恵。自らの意志で使うことすらできない恩恵は、ニシンの戦い、その結果を私に与えた。当然、利用する。協力者も獲得していた私は、この予言によってシャルル七世と面会する権利を獲得した。人心を獲得する類のギフトを可能な限り発動して、さらなる協力者を得る。そうして、必要となる軍装、軍備を獲得することが出来た。強力なギフトではなかったが、それはこの上なくたやすいことであった。

度重なる屈辱的敗戦。その心は、つけ入る隙に満ちていた。

|||||

「さて、と。後は何がいるかな……」

何件か回った後にもかかわらず、なお言っている。食事を自分で作

るわけでもない以上追加で必要なものがあるとも思えなかつたのだが、そんな主張など知らんとばかりに次々と買い回る。まあ確かに寝間着や肌着、私服などは与えられるのであれば助かるなあという品だったわけだけど、それ以降はどうなんだろうかと思わないでもない。ティーセットとか必要性ないだろう。

「明らかに過剰では？」

「それでもねえだろ。自室、つてのは寝るだけの部屋じゃないんだから、ちよつとモノがあり過ぎるくらいでいいんだよ」

何やらそれっぽいことを返されてしまった。まあ確かにそうなのかもしれないが、従者というか奴隷と言うか、その立場にあるものへ与える部屋ではないだろう。

「後あれだ。俺紅茶とかハーブティーとか好きだから、是非とも行けば飲めるようにしといてくれ」

「完全に自分のために利用してるじゃないか」

「はっはっは、まあそう言うな！結構いい茶葉があるんだ、美味しいぞ？」

菓子は俺が揃えるから、と続ける。ならまあと思ったが、それに合うものを考えていれるのは私の役割なのか？と思うと何とも言えない気分になる。勝手に買ってくるのだから気が向いたら練習する、くらいでいいだろう。手抜きで入れられるものを準備するのも手かもしれない。

「と言うわけで、だ。その辺の用具を揃えようと思うんだが、それ以外で何か欲しいものとかあるか？」

「欲しい物？」

「ああ。こう……趣味とか」

趣味。趣味か。趣味ねえ……

「無い。そもそも、趣味を得られるような人生は送っていない」

「あー、それもそうか。じゃあ色々触ってみて、なんか趣味にしたいものが出来たら言ってくれ」

……まあ、有る程度余裕はありそうだし。何か始めてみるのも、良いかもしれない。

|||||

参加した戦いは、請われていた通りの結果を叩きだした。私に求められたのはほぼ正しい歴史へ持つていくことであり、そのために必要となることの最低限はしつかりとこなしてきた。軍の鼓舞は、人心を掌握するギフトをもって。軍略は、簡易的な予知能力のをもって。軍事力は、誰かにバレないタイミングで私兵を召喚して。そうして啓示によつて示されていた結果を、ただひたすらに実現して見せた。

今にして思えば。こうしてくれと与えられたシナリオには、ここまですしか記されていなかった。

|||||

「よし、こんなところだろ」

一通り買ってきたモノを設置すると、パンパンと手を叩きながらそう区切る。購入してギフトカードにしまえるものはしまい、そうでないものは使い魔に運ばせて。そうして本拠まで持つてくると、何故かここでは式神を使わずに手作業で設置していく。術を使う使わないの基準がまるで分らないが、まあ勝手に買ってきたモノを丸投げはされなかったので、気にしないことにする。

「んで、ひとまず俺の手持ちの茶葉系入れといたから、まあ練習してみてくれ」

「練習台扱いでいいのか、これは」

「いいよ、その辺は安物だし。侍女頭から『せっかくのいい葉を無駄にするな!』って全部没収されたからな」

どうやら好きだけで能は無いらしい。だから身近に高いものを淹れられる人間を置きたいのだろうか？だとしたら本当に、自由なやつだ。コレの上に立つ人間の苦勞が目に見えかぶ。

「つーわけで、ひとまずはその辺りで練習を是非してくれ。侍女頭がオーケーを出すレベルまで行けば、俺は大手を振ってたっかい茶葉を

「買ってこれる！」

「……買い物の自由すら奪われているのか、私の主は」

「紅茶関連だけはガッツリ制限されてるなあ……茶菓子や砂糖、ミルクすら買ってくと警戒されるくらいだ」

本気で悲しそうに、ガッツリと肩を落とす。情けない主を持つてしまったようだと言葉の絶望を抱きつつ……ふと。

「そもそも飲みたいのなら、その侍女頭とやうに頼めばいいんじゃないか？力関係がどうなっているのかを把握しているわけではないが、プレイヤーと侍女とであればプレイヤーが上じゃないのか？」

「あー、うん。頼めば淹れてくれるだろうし、表向きの立場で言えば俺の方が上だけだなあ……」

「つまりは、内部的な実際の力関係で言えば完敗している、と」

「ガハッ……」

まるで吐血したかのような効果音をわざわざ自分で発して、膝から順に崩れ落ちる。何をそこまでこだわるのかと聞きたくなるほどの再現度に、割と本気で殴り飛ばすことを考えた。

……

「ゴフワ……!？」

結局我慢できず、丁度足元にいたその腹部を思いつき蹴飛ばしてみよう。ちよつとすつきりした。

「ちよ、オマエ、仮にも主を躊躇いなく蹴飛ばすか!？」

「確かに主従関係にはなったが、考えてみたら特に何の命令もされていないからありかな、と」

「暴力反対！」

特に負荷にも感じていない様子で復活してきたので、まあ何ともないのだろう。というか主を名乗るのならここで多少はこちらに罰を与えてもいいと思うのだが……うん、わからん。

「よし、罰として今すぐ、一杯淹れてみる」

「………は？」

「安心しろ、菓子は買ってある」

どこからか取り出されたのは、綺麗にラッピングされたクッキーで

あった。警戒されてるんじゃないやなかったのか、それでも買ってくるつてよっぽどか。

「さあほら、淹れてみ淹れてみ」

テーブルを出し、椅子に座って。諸々の配置を一緒に行ったから当然だが自然な動作で大皿を取り出してクツキーをそこに並べると。やはりあの笑みで、そう告げてきた。

|||||

それからしばらくの間は、よく覚えていない。よく分からないからなんか来る人来る人の詰問を受けたり脱獄したりした記憶がなくはないけど、まあ特に意味は無い行動だったのだろう。だからすっかり覚えてる瞬間はこの後、処刑が執行される時の事だ。

自らの処刑が執行されるその日になって、私はようやく理解した。あの時、一人の天使と二人の聖女に望まれた役割は、もう終わったのだ、と。ついでにここまでやれば、親から望まれたことについても完了したと考えていいだろう。であればもう、自らの役割は終わりだ。感覚がふと、昔に戻る。祈る先として十字架が欲しくなってきた。立会人に頼み、十字架を立ててもらおう。足元から上がってくる炎。身を焦がし、感覚を奪っていく炎。朦朧とした意識の中、正常を失った頭は、声を聞いた。

魔女、と。

本当に、正常を失いきっていたのだろうか。ただ私をのしるための言葉だったのに、それを望みであると判断してしまったのだ。だがそんなこと、言っても仕方ない。

望まれたのなら、そうしよう。感情が薄氷の如くあった自分は、その選択肢を躊躇うことなく選択した。

|||||

「うん、マズいな！」

「ダメだこの主、オブジェクトのオの字もない」

淹れると言われたから準備されていた各種道具の使い方を考えつつ淹れたというのに、帰ってきたのは満面の笑みとこの言葉だ。もしかすると私は、愚鈍極まる主に使えることになってしまったのかもしれない。叶うのならば今すぐにもギフトゲームを挑み、主従関係の解消を狙うべきではなからうか。

いやしかし、再び根無し草になるのはマズいかもしれない。このコミュニティでは立場に関わらず実力と功績は等しく評価されると聞いた。主従が解消されてもこのコミュニティに残れる可能性はあるが、叶うのならば別の形……誰かほかの主を獲得するとか、そう言う方向で行きたい。

「まあ、道具の使い方も合ってなかったんだ。マズくなるのも必然、むしろマズくならなかったら問題だろ」

「そう思うのなら使い方くらいは教えてくれてもよかったんじゃないか、と思うんだが？」

「いやだって、それで美味しいの淹れられたら悔しいじゃん」

ダメだこの主、早く殺さないと。

……いけない、思考が危ない方向に走った。正直世にとって害ではないのではとこの短時間で思っているのだが、それでも短慮はいけない。

「ま、そういうわけで。是非ともこのクソマズいお茶会が笑い話になるくらい上手くなってくれ」

「そう思うのならとつとこの辺りの道具の使い方を教えてくれませんかね、マイマスター？」

「ヘタクソでマズイのしか淹れられないヤツに師事するとか、自殺ものじゃない？」

なるほど、確かにその通りだ。先ほどはなしに出ていた侍女頭とやらに後日、挨拶がてら聞くことにしよう。

年末短編 魔王ジャンヌ・ダルク 後編

この拘束を破り、魔女らしく暴虐を尽くしてやろう。そう決心したタイミングで、私は箱庭に召喚された。それなりに多くのギフトを与えられたため、ギフトの回収と言う名目の下、私に啓示を与えた内の一人、ミカエルの下へ、だ。歴史上私の死体は確認されているのだが、黒焦げになったものを観測されたうえ、その後灰となるまで燃やされている。背丈や性別辺りさえ同じなら、問題はなかった。

しかし、だ。彼らにとつて、この私の存在はイレギュラーでしかなかった。オルレ안의乙女、聖処女。そう呼ばれる少女は、どの少女もその名に相応しい、場合によってはその名ですら不足してしまうほどの聖人であつたという。

馬鹿々々しい。請われたからそうしただけの機械が、誠実な人間であるものか。

|||||

さて、どうしたものか、と。クソマズいお茶会が終わってから完全に暇になり、とりあえずということでもベッドに横になって天井を眺める。

「……………」

真つ白な天井。私一人に与えられた、私だけの空間。それにしては主が勝手に侵入してきそうな気配がなくはないのだが、まあ向こうの言を信じるのであればこの部屋の鍵は二本とも私の手元にある。本当に一人になりたいときは鍵を閉めてしまえばいいだろう。

「……………」

ゴロン、と寝返りを打って、壁側を見る。何もなймаつさらな壁。誰も使っていない部屋だと聞いていたのだが、それにしては本当に綺麗だ。誰も使っていない部屋を定期的に掃除するだけの余裕が、このコミュニティにはあるのだろう。もしかするとそうではなく、ただそういう細かいところまで几帳面な人が担当している、と言うだけな

のかもしれないが。

「……………」

ゴロン、と逆側へ寝返りを打つ。そこには、元からこの部屋に置いてあった衣装棚や姿見に始まり、主にご主人様を買ってきた食器棚をはじめとする諸々のティーセット関連。お古だと言つて持つてきた道具各種はやはりどう見ても使用感がなく、だとすれば一回目か二回目辺りで侍女頭に見つかり、以降まるで使っていないのだろう。さつき私が使ったが、まだまだきれいだ。

「……………」

ゴロン、と視線を天井に戻す。本当にこれが、私一人に与えられた空間。私一人をとらえるための場所ではなく、いつでも自由に出ることができ、自由に戻つてくることが出来る、そんな空間。隷属と言う首輪こそかかっているが、それも主は行使してこようと言う気配はない。その気になればいつでもこの身を好きにできるだろう権限を、完全に放棄している。

「……………」

あるいは、私に異性としての魅力がないのだろうか？権限を行使されても困るが、だからと言つてまるで何もしてこないのもそれはそれで腹立たしい。だなんて、この年頃の女はそんなことを考えるのかな？

「……………」

ふむ、だとすればと。自分の体を見下ろし、それでは足りないと思見の前へ移動する。そこに映る自分の顔と、見下ろして映る自分の体形。さて、それは女性的魅力に欠けるものだろうか？そうではないと信じたい。誰か目的の相手がいるわけではないが、まあ自分にそれがあつた方がいいのは間違いない。

「……………」

再び、自分の城を見渡す。決して広くはなく、しかし狭くはなく。自身をとらえる檻ではなく、帰つてくることのできない一時の幻でもない。自分に与えられた、自分のための空間。

不思議な感覚だ。この感情は果たして、何と名付けられるべきもの

なのだろうか？

「……………」

分からない。ふんわりとした回答は浮かんでくるものの、はつきりとした回答は浮かんでこない。こういった感覚は初めてだ。初めてなので……

「……よし」

ひとまず、部屋を出た。ポケットから鍵を取り出して、刺して、ガチャリ。

ようやくちよつと、自分の部屋だという実感がわいてきた。

||||||

お前が聞いたそれは人間の怨嗟の声だ。それでも、それを壊れたものとして受け入れるのか。彼はそう、私に問うた。当たり前だと、私は返した。ミカエルから頼まれたことは完遂したのだから、それ以上を聞く義理もない。魔女であれと願われたのだ、私はその通りに、魔女となるだけのこと。

ありがたいことに、私は死後、復権裁判および列福、列聖によって聖人としての霊格を与えられている。より厳密に言えば、与えなければ歴史が歪んでしまうが故に、魔女となろうとしている私にも与えられた。死後獲得するはずだった霊格を、死なずに獲得したわけだ。まあそのせいで何もせずに解放できず面倒が増えた面もあるわけなのだが。

問答の結果、私の存在は表には出さず、魔王の烙印だけ押し放り出すと宣言された。

箱庭に住まう住人、それに向ける何らかの試練にはなるだろう。とかなんとか言われましても。

||||||

「ふう……」

チャポン、と。自分が今使っている湯船に対して、水音がする。私
のこと自体はコミュニティ内に広まっていたらしく、偶然通りがかつ
た子供にお風呂はどこにあるのかと聞いたら、素直に教えてくれた。
長い金髪で、とても大人びた口調の少女。きつと将来は美人になるに
違いない。そんな感情を胸に、再び口から吐息が漏れる。

はじめは、案内された先にあるのが大浴場なるものであることに困
惑した。お湯に肩まで沈む、と言うその感覚が意味不明だったのだ。
人間を茹でてどうするのか、と。しかしどう考えてもそう言う用途の
ためにあるものだったため、指先で何度も確認してから湯船に入っ
た。熱いなあ、と感じていたのは……さて、どのタイミングまでだっ
ただろうか？全身がお湯に包まれる感覚、と言うのは思いのほか気持
ちがよいものだった。

「はふう……」

聞けばここに使っている水もかなり良いものらしい。水路を流れ
る水が分岐し、ギフトによって適温となつて浴室へ届く。気まぐれで
来たにもかかわらず適温の湯が満ちていたということは、もしかする
と常に流しっぱなしなのかもしれない。

「ふひい……」

お湯を流しっぱなし。それはつまり、水を常に流しっぱなし、使い
捨て状態である、ということだ。誰も入っていない時間帯など、浄水
が湯になり捨てられることとなる。無駄にもほどがある。逆に言え
ば、それだけ裕福なコミュニティということか、はたまた水を無限に
獲得できるギフトを保有しているということか……

「にやふう……」

その二択なら、是非後者であつてほしい。そのギフトが珍しくもな
んともない凡庸なものであるのなら話は別だが、そうでなければ水を
売ることでもいくらでも富を獲得することができる。水がなくても生
きていけるような生物はほとんど存在しない。生存に必要不可欠で
あるものを抑える、と言うのはそれだけで価値がある。

「にやひい……」

こうしてみるとやはり、このコミュニティは良物件の可能性が高

い。まだコミュニティの方針は聞いていないため確証は持てないのだが、こういつたいいわゆる無駄の部分に資金を避けるだけの余裕があり、メンバー全員がこれといって苦の無い生活を送れている。

「……くらくらする」

考えてみれば、気持ちいいとはいえずつと汗をかいていたのだ。このまま入り続けるのはよくないだろう。湯船の縁に腰をかけ、足だけを中に。程よく上記の立ち込める空間は、それでも十分に気持ちよかった。

さて、しかし良物件であればあるほどに我が主の待遇が謎になる。ここまで色々とみた感じ、あれでそれなりの立場にある様子だった。あんな何を考えているのか分からない、上からの指令を無視して突っ走るような奴が、だ。どれだけ優秀であろうとも、自分勝手な行動をとるものはそれだけで価値がない。問題だけを大きくし続ける害悪だ。そんなものに立場や権限を与えるだろうか？

「うーむ……」

では、あれがそれでも立場を獲得できるだけの理由とは何だろうか？立場を与えてもいいと、あるいは立場を与えるしかないと考えるだけのルール。例外が許されないだけのそれ。……となれば、コミュニティの方針に関わる何か？そうだったとして、その方針は？

「……そう言えば、私の調査に来た、んだったか」

異常が見られた。だから調査によこした。私の下に来た経緯は、どうやらそう言ったものらしい。つまり、そう言った偵察的な部分を担っているコミュニティだろうか？

「無いな」

そんなわけがない。そうだとしたら、あれだけの戦力を持つ人間は必要ないしあんな性格のやつがいるはずもない。神霊を従えていることにも説明がつかない。それだけの戦力を持ち、クセのある人間がいることに疑問が無いのは、むしろ……

「魔王討伐、あるいはそれに近いことを掲げている？」

荒唐無稽だ。私みたいな意味不明なものもあるかもしれないが、そも魔王と言うモノは天災と変わりない。それを討伐する、と言う方針を

立てるコミュニケーションなどあるとは考えにくい。考えにくいのだが……もしそうだとしたら、あれが立場を持つていることにも納得がい。強大なギフト持ちに対してはともかく、一騎当千の戦力だ。

「いやまあ、あれが演技の類、ってこともあるのか」

あるいは、演技などではなく二つの顔を持っているだけなのか。まあここまでの広げに広げた妄想が真実である可能性よりはよっぽどありえるのだが……それならそれで、私の偵察を依頼された以上スイツチを切り替えて偵察だけを行ったはずなのだ。

「……うん、分からない」

分からないものは分からない。分からない以上どうすればいいのかも分からないので、困るがどうしようもない。と言うわけで。

「分かるまで、そう時間もかからないだろう」

自画自賛じみてしまうが、私の保有する恩恵も一騎当千の戦力と並んで遜色のないモノだ。単騎で万軍を打ち破る戦力に対して、万軍を召喚するギフト。境界門による召喚ではないが、元から保有していた使い魔のような兵に、自身へ忠誠を誓って死んでいった、あるいは後に死んだ者のコピーを召喚出来る。

勿論、人間でしかない以上パーセントの活躍を保証できるものではないが、何かしらの形で戦闘が発生するコミュニケーションにおいてならば、確実に評価される。大丈夫、問題ない。

「………なんて」

そう考えていれば、まあ、普通だろう。普通なはずだ。普通だよね？

|||||

さて、そうして魔王として野に放たれたわけなのだが。ぶっちゃけ何かやることがあるというわけでもない。何かあった時のための戦力は与えられたギフトによって、私兵^{死兵}を召喚した。中には生前の既知であるところのジル||ド||レエだとかもいたのだけど、まあ大した問題ではない。色々と面倒事を押し付けられる、という利点を得たくら

いだ。さてどうするかなあ、なんて考えながら契約書類の文面を書き換えていく。

単純極まりないゲームくらいなら、私でも作れる。

|||||

「なーにをやってるのかね、俺の従者は」

「……さすがに、何も言い返せない。申し訳ない」

「それは俺じゃなく、風呂場からの救出を行ったガキ共に言っただけ。湯船に頭から突っ込んで意識失ってる様子なんざ、ぱっと見死んでるようにしか見えん」

さて、彼が言うことはごもつともとしか返せない。むしろその状態で意識を失い、よく溺死していなかったものだ。

「ああいった空間が初めてで、どれくらい大丈夫なのかも読めず……」

「それでも自分の体調がおかしいかどうかくらい分かるだろう」

「いや、全くもってその通り……」

ベッドの上に横になる少女の額へ、男が固く絞った濡れたタオルを載せる。傍らには水分もある辺り、従者の看病をしていると考えていいだろう。

「ちよつとまずいと思って、体は湯船から出したんだ」

「じゃあなんで湯船の中に頭突っ込んでたんだよ」

「縁に腰かけて足だけ入れていた」

「それで前のめりに、ってか。何だそのギャグ」

何なら一回警戒した分、ずっと湯船の中で気絶したよりも馬鹿々々しい。それが分かっているのか、本当に何も言えないらしい。あるいは、体に残っている不調がまだそれなり以上に大きいのか。

「はあ……そんなに気に行っただのか、大浴場？」

「いや、それもあるが……ちよつと考えごとを、な」

「考えごと？」

「ああ。今後どうするのかとか、大丈夫なのかとか……そう言った諸々を。従属する奴隷の立場として、おかしいだろうか？」

「うんにゃ、その理由ならおかしくはないな」

まるで同意しているようには見えない様子で返しつつ、グラスに水を注ぐ。体を起こさせて、支えつつ渡す。少女は渡されたそれを、ゆっくりと、コクコク飲んでいく。

「はあ……まあそういうことにしといて、だ。何か言った気がしないでもないが、ウチは本人の能力と功績を平等に評価する方だよ。だからなんだかんだジャンヌ・ダルク^おっていう戦力を保有することになった俺の評価は上がったし、まだカタログスペックしかないのにお前にも評価は与えられてる」

「……与えられてるのか」

「立場は一番下くらいからだけどな。まあそれは、しばらく働いてりや解消されるだろ。俺としてもその段階になって、裏切りなんかの可能性が否定できるようなら隷属の契約は解消してもいい」

少女は信じられないものを見る目で男を見る。せっかく魔王のギフトゲームをクリアし、それによって魔王自身と言うギフトを獲得して。ついでにその獲得によって自身のコミュニティ内での評価も獲得できたというのにそれを手放してもいいと言う。

「何を考えているのですか？」

「何を、って程のことは考えてねえよ。別にお前が俺の従者としてだろうがそうじゃなからうが、コミュニティ単位での戦力に差はない。だったらどっちでもいいだろ」

そう言われたらそうなのかもしれないが、それでもやはり違和感はなくならない。奇妙なやつだ、なんて考える。もういつそ、彼については考えるだけ無駄なのだろう。

「さて、それだけ話せるならもうついてなくてもいいだろ」

「ああ、大丈夫なはず」

「だったら大人しく休んどけ。俺は晩飯食いながら色々と話進めてくるから」

と、椅子から立ち上がって扉へ向かっていく。お礼を言おうかと悩んでいる間にはもう、部屋を出ていた。さてこの調子では明日どうなっているのかと、そんなことを考えながら少女は目を閉じた。

|| || || || || || || ||

まあだからと言って何かしていたか、と言われると別にそうでもなかった。確かに魔女としてやっていくことには決めだし、魔王の烙印も獲得したから順風満帆ではあったのだけど。じゃあ魔女として何をやるべきなのだろうか、と考えるとこれと言って思いつかない。貰ったままのギフトはまあ箱庭が回収するくらいには強いものなのだが、だからと言ってこれ一つで蹂躪できるかと言われるとまあ無理だろう。聖人としての霊格獲得でギフトも増えたりしたが、まあ、うん。無理だ。

と言うわけで、一応と召喚しておいた従僕達。その中でもジル||ド||レエのようなそれなりに頭の働く面々に聞いたところ、「貴女の心、その赴くままに」みたいなことを言われた。

自我へ介入することはできないギフトなのだけど、つまりこいつ等素で言ってやがるのか。マジか。

|| || || || || || || ||

「おつ、ちゃんと起きれたか。ってことは体調は大丈夫そうだな」
「……………」

早い時間に寝たためか、早い時間に目が覚めて。空腹を感じたから何かあったりしないかと食堂に向かったらエプロンをしてフライパンを操る主がいた。……目の前の光景が何なのか、私にも理解できない。

「それで、なんで食堂に来たんだ？喉でも乾いたか？」

「あー……空腹を感じて」

「なんだなんだ、大食いキャラだったのか？……って、そうか。昨日のが足りなかったのか。大した量なかったし、腹にたまらなさそうだったし」

自分で納得した様子を見せつつ、調理していたモノを大皿に移す。そのまま隣のフライパンの中身を取り出して新たに何かを置き、さらに隣にある大鍋の中身を掬って味見をする。どう見ても量が一人で処理できる量ではないので、大変信じがたいことなのだが……コミュニティのメンバー分の朝食を作っているようだ。

「……もしかして、だが。私が勘違いしていただけで、実は雑用係程度の立場だったのか？」

もういつそ、そうであってくれた方が納得できるのだが。

「いんや、昨日もちよろつと言った気がするけど、このコミュニティではそれなりの立場を貰ってるよ。これでも最強戦力その2なんでね」と言いつつギフトカードから何匹かの魚を取り出し、包丁でもって切り分けていく。大した時間もかけず、馴れた手つきで解体されていくそれ。達人というレベルにあるのかまでは私には判断できないが、少なくともプロと比べても遜色ないのではないか。

「それにしても、雑用になれている様子だが」

「元々いた家で色々と、な。おかげさまで和食だけに絞ればプロと勝負できるくらいになった」

なるほど、そういうことならその手つきについては納得するよしよし。だが問題はそこだけではない。

「だからって、何故朝食を？趣味でやっているのかもしれないが、そうやって下の仕事を上が奪うのは組織としてよくないだろう」

「ハッ、料理が趣味？んなわけあるか、俺は最低限食える味ならそれでいい、って派閥だ。こんな技術、磨くだけ無駄なモンだろ」

何故それだけ料理が出来て、その結論に至るのか。

「じゃあ、何故？」

「昨日の夜、金糸雀と将棋で簡易的なギフトゲームをして負けた。これはその結果だよ」

「つまり、勝者がその権利でもって敗者に対して朝食を準備するよう要求した、と？」

「そういうことだ。まあ確かに、暇つぶし程度のゲームに対してならこれくらいが妥当なんだろ」

これだけの大人数で構成されるコミュニティだ、全員分の朝食を準備するとなると仕事量はそれなりに大きなものになる。だが、それだけだ。本人が料理を得意としている以上その負荷もある程度下がるのだし、妥当と言えば妥当なのかもしれない。

などと考えていたら、目の前に二つの器と一つの小皿が。米が盛られた器と、茶色のスープが入った器と、野菜が乗った小皿。

「これは？」

「朝食はまだできてないしお前の分も準備する予定だから、それまでの繋ぎだ。さつき温めたメシに味噌汁、漬物……繋ぎならそれで十分だろ」

因みに朝食は炊き立てご飯と同じみそ汁、焼き鮭、卵焼き、漬物な—
—といつて背を向けて調理に戻る主。空腹なのは事実だしもらえるのなら貰っておこう、ということでもテキトーなテーブルへ移動して、スプーンを持って。さてどうしようかと考えてからスープ……味噌汁へ、スプーンを入れる。掬って、口へ。

「……美味しい」

「そいつはよかった。朝食に出すときはもうちょい手を加えてる予定だから、楽しみにしとけ」

今でこれだけ美味しいものにさらに手を加えると言われては、楽しみにならない方がおかしいだろう。その時間を待ち遠しく思いながら、米を口へ。さて次はどうするかと考えて、まだ手を付けていなかった野菜を。コリコリツとした歯ごたえに知っている野菜とは違う味。馴れるまでは毎回驚きそうだが……うん、美味しいのは間違いない。

「なるほど、勝利報酬として要求するのもよくわかる」

「この程度で分かれるのもなんだか悔しいけど……ま、ありがとな」
米が温めたものから炊き立てのものに代わり。味噌汁にはさらなる一手が加えられて。今ここにはない品目が追加される。今でも十二分に美味なものがさらに美味に、さらに豪華になる。ああなるほど、これは勝利報酬としてぜひ手にしたいものだ。

「なあ我が主。従者としての提案なのだが、今すぐにもプレイヤー

をやめてコックへ転身すべきでは？」

「ふぎけんな、出来るってだけで好きじゃねえんだよこんなの」

「だがこれをさらに開花させていかず、有効活用することもなく埋もれさせるのはどうなんだ？」

冗談交じりに、しかし3割くらいは本気でそう言う。

「知らねえよ、そんなもん。才能があるからってそれを世のために生かすことは義務でもなんでもない。才能を持つ者に課せられる義務は『その才能を悪用しないこと』だけで、生かそうが無駄遣いしようがそれは本人の自由ってもんだろ」

などと、思いのほか真剣な口調で言葉が返ってきた。料理程度のことでそれを言ってくるとは思えないので何か、有るのだろう。何かあるのかは分からないが……もしかすると、出てきたという家に関係しているのかもしれない。

そうであるのなら、あまり首を突っ込まないのが正しいのだろう。そう判断してそれ以上言葉を発することはなく、軽食を終えた。

|||||

さてどうしたものか、と。割と本気でそう悩み始めてしばらくたった時のこと。とりあえず完成したっぽいし、と言う理由で真つ黒な契約書類を何枚か張り付けておいたのだが、どうやらそれを見たらしいヤツがゲームに挑戦してきた。

はつきり言おう。まるで意味が分からない、と言うのが本音であった。自分が現在魔王と呼ばれる天災になっていることくらい、さすがの私も把握している。それに挑む、と言うその行為がもはや意味が分からない。討伐体単位で来たならまだ分かるが、1人である。単騎駆けである。もう本当に意味が分からない。まあでも挑まれたし、ということで。従僕達が向かっていくのは止めなかった。

最近ただのバカ説が出てきたけど、まあそれでも優秀なやつらだし、大丈夫でしょう。

炊き立てのご飯、味噌汁、焼いた魚、卵焼き、漬物からなる朝食を満足いくまで楽しませてもらって。それからすぐ、私は主と共にいた。

「それではこれより、お前の本拠における仕事を案内していく！」

「それもお前がするのか」

「同じ抗議を金糸雀にしたら、『お前のせいで組んでた予定が崩れたから、しばらく仕事ない』って言われてな。ヒマだから担当することにした」

酷すぎる理由が返ってきてしまった。と言うかそうか、偵察の結果を待って私への対処を予定していたのか。普通に殺されてた可能性を考えると恐ろしいものがあるな。

「つーわけでまずはここ、昨日も来た農園周辺」

「ここでは何を？」

「必要に応じて全部だな」

雑すぎるだろ、コイツ。

「まあココ、ホントに色々と育ててるからお前の経験が生きるところもあるだろ。大枠の担当はいるし、そうじゃなくても仕事の割り振りは丁寧に行われるし、これといった問題はないだろ」

「役割の分担はしっかりと行われている、と。当然ではあるが、その辺りの諸々がしっかりと行っているんだな」

「まあ、この手の生産ラインが死ぬと土台から崩れるしな。ある程度の規模を獲得した段階で、こつちも揃えていくさ」

揃うまでの間はゲームで勝ってその報酬で獲得する、買うという手段もあるのだろう。しかし、それではどうにも非効率的にすぎない。大所帯になればなおさらだ。で、こうなった、と。

「こつちでも財源を立てていけるだろ」

「その気になれば立てていけると思うぞ。まあでも、コミュニティの設立理由的な部分を考えるとそれはやれないだろうなあ」

そう言っただけを進める主の姿。やはり何か明確な、それも変えるこ

とがありえない目標が存在しているが故のコミュニティなのだろう。彼が参加しているのはそれに賛同しているが故か、言っていた敗北からの契約か、もつと大きな理由があるのか。

「それでもって、農園関連の道具はこの倉庫に入ってる。必要に応じて持っていくように」

「服装なんかは？さすがにこれでやるわけにはいかないだろ」

「まあそれでやってくれても付与してあるギフトで酷いことにはならないだろうけど……」

メイド服一つにどれだけ金をかけてるんだ、このコミュニティは。

「まあ、うん。ヒラヒラしてるし怪我の元か。明日までには準備させておくから、あとで採寸に行ってきたくれ」

「どっどっ？」

「あの部屋。今日なら多分部屋にいるはずだから、俺の名前を出して農園作業用の服、って言ってくれれば」

そう言って指された部屋をしっかりと記憶しておく。あとで、と言うのがどれくらいの時間になるかはわからないが、今日中には訪問することにしよう。

「で、次。隣の倉庫に入っているのが外掃除関連の道具です」

「掃除もするのか」

「まあ、うん。しばらくやってもらってこれを選任するのがいいな、つてなればそっちに行くけど、それまでは色々と試す方針で」

となるとまだまだ覚えることはありそうだ。と言うか、本当に無駄に広いから場所を覚えるだけでも一苦労だろ、これ。生活しながら順に覚えていくしかないか。

「さて、そんな感じで外で確実にやる仕事の場所はこんなところだ。次は屋敷の中について諸々案内していくから、戻るぞ」

「……先に屋敷の中を案内した方が早かったんじゃないか？」

「台所が確実に仕事だっただろうからなあ。順番的にこうなっちゃうんだよ」

あー……まあ確かに、仕事をしているところに邪魔するのは申し訳ない。この主がそんなことを気にするとはまるで思わなかったが、そ

ういうことならば仕方ない。

「それにこの後は生活範囲の案内をしつつ届け物をする予定だから、荷物持ちだすのは後にしたかったし」

「それ、ギフトカードに入らなかったのか？」

その手があったか、という表情をされてしまった。どうしよう、ホントにどうしてもこの主の評価を固定できない。と言うかギフトカードの存在すら忘れてるとか、どうしたらいいんだコレ。

|||||

ごまかしようがないからはつきり言ってしまうおう。驚愕した。何せそれなり以上に強い、あの戦争を勝ち抜いたやつらだ。そうでなかったとしても数の暴力を行うには十二分極まる数であったし、その勝利はほとんど疑っていなかった。強いて言えばそれすら覆すだけのギフトの存在だけは怖かったのだが、しばらくその立ち振る舞いを観察した結果それは無いと判断できた。にもかかわらず、あれはまた一人斬り殺した。

単騎でもって万軍を打ち砕く。そんなバケモノが実在するのだと、初めて知った。

|||||

「いやー……疲れた」

「それにしても終始楽しそうにしていたようだが？」

「人付き合い、ってもんがあるだろ。もし仮にヘットヘトに疲れてたとしても、それを出しちやいけない場はあるんだよ」

そんな似合わないことを言っつてベンチに腰を下ろす。少女は見ていられなくなり、手に持っていた飲み物を渡した。

「おー、サンキュ。貰っていいのか？」

「一応は従者、それくらいはするべきでは？」

「なるほど、言われてみればその通りだ」

そう言つて受け取り、ゴクリゴクリと喉の奥へ飲み物を流し込んでいく。それなりに飲んで落ち着いたのか、ふーと息を漏らして姿勢を正した。場所がちよつと広くなり、少女が十二分に座れるだけのスペース。躊躇うことなく、そこに腰を下ろす。

「とまあ、あの辺りが俺が個人的に付き合いのある相手だから。今後はオマエも関わっていくと思う」

「まあ確かに、関わりが深い相手には見えたな」

「好きで付き合いのある相手もいれば、お互いに都合があつて付き合いがある相手もいるけどな。まあそれでも、友好的なヤツだけだ」

つまり、友好的ではないつながりもある、ということだろう。本当にお互いを利用していただけの、隙あらば潰してしまおうと考えるような。あるいは、非合法的手段を行う類の集団が。

「それにしても、なんだつてあれだけの数のコミュニティと個人的付き合いを？交渉事なんかが必要ななら、コミュニティに任せてしまった方が楽じゃないのか？」

「あー、それは確実に楽なんだけどな。中にはそうもいかない相手もいるし、そもそも俺個人としては得があるけどコミュニティにとつては得が無い相手もいるというか……」

本当に個人的な付き合いらしい。コミュニティに所属する者としてホントにそれでいいのだろうか。

「あ、そうだそうだ。今の内にこれ渡しとく」

と、話を切り替える意味もあったのだろう。あたかも今思い出したかのように懐へ手を伸ばし、手のひらサイズのカードを取り出す。

「ギフトカードか」

「ああ、ギフトカード。今後コミュニティでやっていくには必須なものだから、今の内にな」

そう言つてギフトカードを渡す。既に記されているのは名前、旗印、保有ギフトのみ。何かを入れて渡したというわけではないようだ。

「なんだか今更感があるが、良いのか？」

「と言つと……」

「元魔王で入ったばかりの者にここまで与えて、だ。警戒心がなさ過ぎるように思うが」

「俺の隷属下にあるんだ、どうせ何もできねえだろ」

「そういうことにしたいのなら、隷属の契約を使って縛ったらどうだ？」

「あーら、言われちまった」

「誤魔化さないでいただけると」

と、改めて強い口調で言う。彼女にとってそれなりに気になることなのだろう。そして。

「……うん？それ、本気で聞いてたのか？冗談じゃなく？」

それが心底以外であったかの様子で、そう聞き返す。

「そこまで意外か？あのギフトゲーム、あれで正解だったの？」

「……むしろ意外に思うのが普通だろう？」

「いや、それは……うん？」

何か引つ掛かる様子で首を傾げ、体の向きを変えて少女の瞳を見る。黒い瞳で見たかと思えば茶に代わり、朱に染まり、蒼に満ちて、黒に戻り。

「あー……あー。なるほど、そう言う感じだったのか。それは知らなんだ」

「うん？」

「いや、何でもない。どうにもお前が自分のことを勘違いしてるっぽい、ってことを理解しただけだ」

そう言って改めて姿勢を戻し、少女の方を見ることもなく話を続ける。

「俺がお前の扱いをこうしてるのは、必要ないからだよ。少なくとも今のお前に、こっちを裏切るだけの理由がない」

「論理的思考から理由がないというのは、さすがにバカの思考では？」

「ああ、それはホントにバカの思考だな。損得勘定でないと切り捨てるのは、感情って要素を無視する無意味極まりない思考だ」

さて、ではどのような理由からその結論を出しているのか。その答えを告げるために、少女の頭に手を乗せる。

「俺がお前に対して何一つ警戒してないのは、復讐を成した抜け殻が

そんなことを考えられるはずもないからだ」

「……抜け殻？」

「ああ、抜け殻だ。さあ、しつかりと思いつき出せ。その生涯のハイライトを。そしてその終わりに訪れた感情を」

言葉と共に、意識は深く落ちていく。

|||||

気が付けば、自らの軍勢は全滅していた。元々召喚していたモノも、数が減つたために追加で召喚したモノも、一切の差別なく。すべて平等に一刀両断されていた。私の目も節穴だったのだろう。その手に持っていた剣は、間違いなく業物でしかない。人間を、馬をあれだけ一刀両断にして血脂に鈍ることもなく、骨によつて欠けることもない剣なんてそれだけで武器として強すぎる。まあそれでも、全て殺されたのは事実だ。

主催者として、求道者として。私は、問いを投げかけた。

|||||

「問いましょう、我が軍勢を打ち破りし戦士に。我が問いの答えは」

言葉と共に剣を抜き、地面へと突き刺す。問いかけられた側は手に持つ剣……日本刀を鞘へしまい、ギアスロール契約書類を取り出す。

『ギフトゲーム名“La Pucelle Le doute”

・プレイヤー参加条件

・以下の条件を満たす者

1：参加を望む者

2：主催者から参加を望まれた者

・プレイヤー側 勝利条件

・主催者側軍勢の壊滅

・主催者の心を述べよ

・ホストマスター側 勝利条件

・参加者の殺害

宣誓 上記と我が心に従い、ホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

『ジャンヌ・ダルク』印』

ここで問われているのは勝利条件の片割れ、「主催者の心を述べよ」のことだろう。勿論、このどちらかを満たせば参加者側の勝利である以上無視してもいい程度の物だ。にもかかわらず、男は刀をおさめた。それはすなわち、その問いに答える意志がある、ということだ。

さて、ここまで情報の無い中から心などと言う、存在するのかすら怪しい不確定な要素をどう答えるつもりなのか。そもそも、何に對しての心なのかすら分かっていない。トドメにその答える対象は救国の聖処女、ジャンヌダルクだ。

もし仮にその心を読む対象がただの人間であれば、まだ簡単だったかもしれない。ただの人間であればその思考もまた普通のものであり、読むことも容易いだろう。

しかし、今回の対象は英雄であり、その中でも聖人と呼ばれるに至った、極めつけのキチガイである。自らの欲のためにその生涯を生きた英雄と呼ばれるに至った種類の英雄ではなく、その他の何かのために自らを斬り捨てた聖人と呼ばれる種類の英雄。どこからどう考えても人間の思考はしておらず、キチガイのそれではない。そんな人間の感情を、果たしてどう答えるのか……

「すつきりした」

けれど、そんなことは何でもないと言わんばかりに。何のためらいもなく、一瞬でその言葉を口にする。同時に、拳を全力で鳩尾に叩きこむ。少女の口から空気が漏れ、意識は闇に沈んだ。

と、見せられるそんな光景。早送りのように、ハイライトのように、ほんの短い時間での生涯の振り返り。しかし、少女はなぜそれが答えとなったのかを、未だに理解していない。

『さて、お前が何にスツキリしたのか。それは言ってしまうえば、召喚した軍勢の全滅だ』

そんなところへ、男の声が響いてくる。

『さて、どうやらお前は自分に感情が無いと考えている様子だが、それは正確じゃない』

前からでもなく、後ろからでもなく。右からでも左からでもない。一体どこから聞こえているのか分からないのに、だからと言って空間全体に響いているわけでもなく。ただ音だけが、不確かに伝わってくる。

『確かに、基本的な感情は気迫を通り越して消滅してるんだろう。だがそれでも、全て消滅しているわけじゃない』

そしてその声は、そうであるが故に。ただ音だけが直接届いているが故に。その感情を、どこまでも揺さぶっていく。

『まあ何とも、ジャンヌ・ダルクって名前には似合わないもんだが……少なくとも一つ、大きすぎる感情がある』

大きすぎる感情。それは、生まれ持ったものなのだろう。その人間の根幹的部分を構成している感情。環境がどうか関係なく、何がどうなるうが変わることのない、そんなもの。では、それは何なのか。

『それは、破滅、滅びへの喜びだ』

そして。それははつきりと、告げられた。

『そうは言っても、自分の滅びではない。望むのは、自分へと重荷を背負わせたモノなどの滅びだ』

より簡潔に言ってしまうば、自分へとモノを押し付けた存在の滅びを。そう言ってしまうばある種、自然なものかもしれない。唐突に言われたとしてもだからどうした、当然だろ、と返してもよいような感情。

されどそれは。少なくとも、聖女と呼ばれる人間が持っているではない感情であり。

ないと思っていた立場にしてみれば、衝撃的でしかない感情だ。

|| || || || || || || ||

心地よかった。馬鹿々々しかった。おもしろかった。最高の喜劇だった。ああそうだ、確かに彼の言うとおりで！

私みたいなガキに軍の指揮を任せやがったフランス軍に壊滅を！
私みたいな無知に国に行く末を望みやがったフランスに滅亡を！
そして、生まれと名前で救国の聖女としての運命を決めてくれや
がった三匹のクズに死をも生ぬるい破滅を!!

私が生まれもったギフト、代償の霊格。人間の持つ基本構造、優先度の低いものから順に削除することで魂に空き容量を作り出し、疑似的な霊格を生みだすモノ。場合によっては容量を生みだし、本来身に余るほどのギフトすらも受け入れられるようにするソレ。まさに急造の英雄を作るためにあるようなギフトは、救国の聖女となるために、というクソのようなお題目の下押し付けられたギフトは、私から次々と感情を奪っていった。何一つ残っていないだろう、と言うレベルで感情が消失し、それでは軍からの信頼を獲得できないからとそれまでの自分を模倣し続けて。もう自分の感情なんて何一つないのだろうと思っていたのだけれど、どうやらまだ感情は残っていたらしい。なるほど、私は魔女になるべくしてなったのか！

ああ、この黒い感情は、この上なく心地いい!!

|||||

「おおー、何とまあすつきりした顔をしちやつて。これは無駄踏んだかな？」

そんなネガティブなことを言いながらも面白そうな笑みを浮かべる男。その眼前には確かに、妙にすつきりとした表情と邪悪な笑みの混在した顔つきをしている。

「さて、まあ仕方ないから隷属の契約を介して命令な。俺やコミュニケーションに対する反乱に値する行動をすべて禁止する」

「別にわざわざ言わなくても大丈夫ですよ？ここまでスツキリできるとは思ってたなかったので、その恩返しくらいは考えます」

「ハッ、むしろだからこそ怖いんだろうが」

なるほど、道理である。自身と言う矮小な存在に期待し押し付けてきた存在の滅びを望み、滅んだのなら心の底から歓喜する性質の持ち

主だ。どう信頼しろと言うのか。

「さて、と。それにしても、これ自覚させちやったせいで聖女ってより魔女とか、そっちになりそうだなあ」

「それでも無いと思えますよ？皆様からしたら残念なことに、私はすでに聖人としての霊格を預かっている上に後見人もいない状態です。もし仮に一人人虐殺、とかやってもこの霊格がぶれることはないですよ？」

なんて酷い詐欺だろうか。

「それで？私のご主人様は、今後どのようなになさるつもりで？」

「それを聞いてどうするつもりで？」

「いえ、ただ知っての通り感情がロクにないモノですから。何かこう、面白そうに装えるものが欲しくて」

「あー、なるほどなるほど。んー……」

などとしばらく考えて。

「俺、オマエ以外にも3人単独で魔王ブツ飛ばして隷属させてるんだけどさ」

「もしかしなくてもおバカなのですか？」

「結構色んな人に言われるんだよなあ、それ」

誰であっても言うだろう、これは。

「まあそうやって個人的な戦力増やしたり個人的な繋がりを増やしてものにも、それなりに理由があるわけだ」

「あるんですか」

「あるんですよ。ってか、口調それで行くのか？」

「あ、はい。どうするかなー、って悩んだんですけどこのコミュニティではこれが一番しっくりきそうなので」

感情が薄い女は、自分の口調すらどうでもよかったらしい。

「まあそれならそれでいいや。んで目的だけ……元々いた家を滅ぼす、ってのが目的だ」

しれっと一族を滅ぼそうとたくらんでいやがる。

「芦屋つつー日本出身のちっせーコミュニティなんだけどな。まあウザくて家出したわけだ」

「古い家と言うモノは何やら様々な面倒事があるとか」

「まあその辺の諸々だ。おまけで、なんか生まれつき一族の諸々を継ぐのにちようにどいい素質があるとかで更に面倒だったわけだ」

「きつとこれが、食堂での話につながるのだろう。」

「とまあそんな感じで、元々は家出したらそれで終わりのつもりだったんだけどな。コミュニティに所属して生活困りそうにないし、個人的な戦力を揃えて正式なゲームの下勝てば滅ぼせる状況を準備して。そうしたら大手を振って滅ぼす予定だ」

とまあ、そんな野望を告げられて。仮にも秩序側に立ちそうなコミュニティに所属しているにもかかわらず普通のコミュニティを滅ぼそう、などと画策している様子には。

「それ、とつても最高ですね。全力で付き合いますよ」

救国の聖女は、心の底から笑うのであった。

外道討伐編 決意の瞬間

一輝の行ったことは、蛟劉を通して上層へと伝えられた。

外界における裁判をつかさどる女神の殺害。その結果発生する外界への影響が恐れられ代用品はすぐ召喚されたものの、元凶たる人間の裁定は別問題だ。真っ先に、それについての会議が行われた。

まず、一輝と友好的な停戦協定を結んだ神群は、不干渉を示した。神殺しの力を持っている以上戦闘は十割不利であるのだからというようにしようもない理由からだだったが、どうしようもないのだから仕方ない。そも、神霊の一定数以上の死は外界へと多大な影響を及ぼす。それに対し、一輝と友好的な関係を築けなかった……会合が思いつきり滅ぼしあいになった神群は、当然危険すぎるものだからと討伐を決定した。箱庭が魔王として認定していないのが問題であったが、それは無視して決行する。

討伐隊の規模だけで見れば、七天戦争と変わらない。いくつもの神群が討伐隊を結成して、連合軍で向かった。戦闘に長けた神霊、知に富んだ神霊、闘争に生きる英雄。一部の神群しか参加していないとはいえ、誰もが思っただろう。これが相手ではいかなる魔王も死あるのみだろう、と。長時間いることによる下層への影響？それは知らん。が、しかし。その予想は安易に裏切られた。ゲーム開始から一時間。討伐隊はたった一人を残して全員倒れた。一切読み解くことのできないゲーム内容、アジ♯ダカーハの神殺し。この二つの要素によって、蹂躪されるのは目に見えていただろうに。そしてここまですてもなお、一輝の主権者権限は白黒のままであった。唯一無事であったものは、これらの事実を全ての神群へ伝えた。また、一輝からの伝言も伝える。

一つ。ユースティティアの天秤は返還する。

二つ。そちらから関わってこなければ戦闘の意志はない。

三つ。第一陣だけは見逃してやるから回収に來い。

四つ。それ以降に向かってきたやつは前の宣言通り殺す。
五つ。こつちの問題はこつちで何とかする。

以上である。これを聞き、神群は共通の結論を出した。

鬼道一輝は危険因子ではあるが魔王ではなく、一切関わらないものとする。コミュニティ・ノーネームへ戻った際も特別措置として罪に問わず放置する。

これは、彼には殺したものの魂を獲得、自由に操る能力がある故の決定。その気になれば箱庭の神霊を全滅させ全ての神群の権利を乗っ取ることすらできるといふ点に対する危険視である。

「とまあ、現状決定したことはそう言う感じなのかな?」

「あの人が持つてきたモノによるとそう言う感じらしいね。じゃあ、どうする?」

「んー…なにかしら一部神群が抱いてる不満をぐまかせる手段を考えるか、十六夜たちに期待して待つか…」

と、そんな結論を出し。兄妹は大量に出た死体を処理していく。

長き時を箱庭と言う神々の遊神の陰謀渦巻く戦場び場で生きてきたのが神群である。であればこそ、当然のこととして。自分たちの手足として動かすことのできる足のつかないコミュニティはいくらでもあった。神殺しのギフトを持つ相手故に、用いる手段は神霊以外の者を。そして当然の結論として、皆殺しに会う。

箱庭よ。これが魔王の所業じゃなくて何だというのだ。

|| || || || || || || || || ||

「黒ウサギ、ひとまずはあれで全部か?」

「イエス、先ほどの相手までで必要だった話し合いは終了なのですよ」
その言葉を聞き、十六夜は髪をかき乱しながら机に突っ伏す。リーダーが消え暫定のリーダーもいない今、その役割を担っているのが彼である。

「神霊本人が来たわけじゃないにしろ、神群の相手つてのもキツイもんだな」

「その神の代理に足るものとして神格を預かる存在ですから……少なからず、神を相手に渡り合うだけの力を持つているはずです」

「いいね、こんな状況じゃなきや是非行つて!と願いたいもんだ」

そうぼやく十六夜へ黒ウサギは紅茶を差し出し、一気に飲み干される。思わぬ会合は、確かに十六夜を疲弊させていた。

「が、疲れただけの価値はあった。上層の方針、表向きのモノとはいえそれを知れたのは大きい」

水分を取り落ち着いたのか。少しずついつもの調子を取り戻して、不敵に笑う。

「ひとまず、一輝の討伐指令は完全に取り下げられた。あれが個人的に箱庭へ害を及ぼしすぎない限り、『ノーネーム』も一輝も放置だ」
装飾を取っ払って言つてしまえば、上層が下した結論はこれである。本来であれば神へたてついた者としてはありえない結果。しかし彼という存在はそれを下されるに足るモノを保有している。

「今回ばかりは、神殺しと異形喰らいに感謝するしかねえな。害もなく、攻めるのも損と来た」

異形喰らい、と名付けられた存在。そのギフトに込められた意味も目的も不明ながら、その力だけは明らかだ。神を仕向けたとき、確実にその力が増す。一人で神群を形成することすら、ともすれば可能であろう。

「まあ、それも長くはないだろう。今はアイツの存在がブラックボックスだからいいが、そうじゃなくなった時どうなるかは火を見るよりも明らかだ」

人類最終試練、その正体が何であったのか。ハーメルンの笛吹き男、その事件の真相は何であったのか。人類種の最果てより来たりた吸血種の正体とは。

程度は違えど、それらと何も変わらない。正体が判明すればその霊格は丸裸になり、ギフトの理屈も判明し、滅ぼすことも可能となりうる。少なくとも、力によって滅ぼしていい存在なのかがはっきりする。

滅ぼしてよく、滅ぼせるのなら。その明確な脅威を、躊躇うことな

く滅ぼすだろう。それが叶わずとも、

「だからその前に、俺達でアイツを倒すのがベストなわけだ」

「まあ、そうなりますが……倒せますか、一輝さんを？」

「考えなしにやった場合は、確実に無理」

十六夜、即答である。

「断言してしまうほど、ですか」

「別に、俺が言わなくても黒ウサギなら分かってるだろ。鬼道一輝、って人間が持つてるギフトと身体能力はそれだけのものだ」

返しながら、頭の中に彼のギフトを並べる。話の流れが確定しているため、黒ウサギも同様のことを行った。

「まず、身体能力。破壊力ならウチのコミュニティでは俺が一番上だし、単純な総合ステータスだけなら一輝にも勝てるだろうよ。一輝のそれは、人間としては最上クラスでもそこまでのものだ」

「ですが、彼はそれを補助できるだけのものを持っている」

「ああ。陰陽術による身体能力の総合的向上、あれの倍率は控えめに言っておかしいレベルだ。そして無理なドーピングかと思えば、それに耐えられるところまでは鍛えてるしな」

「もしそれがなかったとしても、檻の中にいる異形の力を自らに上書きすることもできれば、そのまま書き換えることもできます。人間が保有しているはずの身体能力という弱点は、つくことができませぬ」

「オマケに耀のギフトでやれることだって、一輝はほぼ全部やれるだろ。接触によるサンプリングと封印による獲得って違いはあるが、結果は近似的なものになる」

保有する動物、幻獣のデータをサンプリングしていき、それらを自らの体へ模倣する。あるいはネットワークレスを媒介として武装へと変換する。ものすごく雑な纏めだが、これが春日部耀の保有するギフトである。もちろんこれも、最強種すら再現できる最高クラスのギフトではある。

しかし、外道・陰陽術に含まれる神成り、憑依、妖武装の三つもまたこれに近いことを行うことのできるギフトである。耀の保有する

ギフトとは違い檻の中にいる存在しか用いることはできないが、それでも蚩尤、アジール、ダカーハ、ユースティティアという三種類の神霊へなることが出来るのが現状だ。

「強いて言えば疑似神格を付与し軍勢を指揮する飛鳥のギフトは『強化する』って点において優位を獲れるだろう、が……」

『言葉』を介した疑似神格の付与は長続きせず、そうでなくとも負担が大きすぎる。一輝さんを抑えうる軍勢、というのは難しいでしょうね……」

となれば、ギフトによつて優位を獲得するという方針はそもそも取ることが出来ない。であるのならば、だ。

「取りうる方針はもう、そう多くない。ぱっと思いつくのは二つが精々だな」

「二つ、ですか」

「ああ。俺と、あともう一人同じだけの身体スペックを持つてるヤツとで一輝をぶちのめすか、あのギフトゲームを解き明かすか、だ」

即ち。多彩に過ぎる上に一個一個のレベルも高いギフトと馬鹿正直にぶつかるのではなく、接近戦に持ち込んで一気にすべて済ませてしまおう。あるいはギフトゲームを、鬼道という一族の霊格を解き明かしある種正攻法でクリアする。

現状立てられる対策はこんなものである。

「正直、やれるなら黒ウサギと俺とでやるのが一番じゃないか、とは思うが」

「黒ウサギのギフトゲームへの参加は難しいでしょうね。審判権限の影響で黒ウサギはギフトゲームへの参加権を保有していませんし」

「言えば一輝は参加を許可しそうなものだけだな。とはいえ、黒ウサギには緊急避難としての役割を任せたいから選択肢に入らないんだけどな」

「……審判権限、つかえるのでしょうか？」

「分かん。分かん、が……」

と、一輝の主権者権限、それによつて生成される白黒の契約書類を取り出す。

「こうして半分が黒で形成されている以上、〃そういうモノ〃として扱うことができるはずだ。むしろ〃そういうモノ〃としての要素すらギフトゲームのギミックに関わっていると考えていい」

全ては推測だ。しかし、契約書類は手元にあるとはいえ未知のゲームへ挑戦するのが魔王のギフトゲームであり、その状況は普段のものと何ら変わらない。推測だけで動きだし、ゲームの中で正解をつかみ取る。それが魔王のギフトゲームへ挑戦するプレイヤーのやり方だ。「よし、この内容で一旦主要メンバーに通して調整するぞ。主力総出で討伐に行く以上、本拠の守りをどうするかも決めないといけねえしな」

「そう、ですね……」

と、軽くまとめた紙を持って立ち上がり、部屋の扉を指す。そんな十六夜の背を見ながら、黒ウサギはしばらく黙り……

「……すいません、一つだけ」

「あん？」

「言わなければならないことだと判断したので、黒ウサギから言わせていただきます」

そして、彼女が最も言いたくない一言を。心を抉り、古傷を開き、回答によつては再び失意へと沈まなければならぬであろうその言葉を、それでも最年長者として告げる。

「コミュニケーション・ゾーン」には、一輝さんをそのまま放置する、という選択肢もあります。魔王に襲撃されたわけではなく、こちらへの戦意を持っているわけでもない以上、考えなければならぬ選択肢です」

「あー……まあ、そうなんだけどな」

と、そういつて。少し気まずそうな顔で頬をかき、めんどくさそうな顔で言葉にならない声を漏らし、いら立っているかのように髪をかき交ぜた後。

「勝手に一人で抱え込んでどっか行って、残した言葉は『じゃ、しばらく任せた』の一言のみ。その上俺は負けっぱなしと来た」

そう言いながら上げた顔は、彼が箱庭に来た当初から浮かべていた

表情。

天上天下唯我独尊、天は俺の上に人を作らず。そんな心情を掲げる少年特有の、一輝に敗北してからはついぞ浮かべていなかった、『逆廻十六夜』の顔だった。

「そんなヤツ、横っ面ぶん殴って連れ戻す。そうでもしなきゃ、スツキリしねえだろ」

「……………はあ」

そして。黒ウサギは自分が惚れた相手がどれだけ面倒な相手なのかを再確認して。どれだけの問題児なのかを再認識して。そんな人間として欠陥だらけの姿へ失望して。

「そういうことなら、仕方ないですよ♪」

きつと残りの問題児二人も同じことを同じ表情で言うのだろう、と。自らの生きてきた時間に比べてほんの短い時間しか一緒にいない最愛の同士たち、その日常を取り戻さんと決意した。

一族の物語 ― 交わした約束 ― ①

その日その瞬間が訪れたとき、外道は特に何か思っただけはなかった。

面白い勝負になるだろうとは考えていた。それなりに楽しいゲームになり、満足感を味わうことが出来るだろうと、その核心はあった。その日その瞬間が訪れたとき、少年少女たちが抱いていたのは『挑戦』の二文字だった。

自分たちと比べ、はるか高みにいる人間への挑戦。勝たねばならない戦いであり、勝ちたいと願う戦いではあったものの、しかしその行いは『挑戦』の二文字で表されるものだ。

故にこそ、眼前へ広がる光景は。外道にとって、想像をはるかに超える高揚感を与えた。

故にこそ、現実となったその光景は。少年少女にとって、何も考えられないほどの衝撃となった。

いかな神霊も越えられず、いかな英雄にも踏破不可能なはずの、外道の主催者権限。しかし、忘れてはならない。

いかなる時代、いかなる世界においても。不可能を踏破するのは。それをはるか高みであると自覚した上で挑む、大馬鹿者だけなのだ。

|| || || || || || || || || ||

その場はある種、地獄の具現と呼べる場であったのかもしれない。ただこれだけ言うとは誤解されてしまいかねないのだが、別に死体が転がっているとか、血の池があるとか、そういうわけではない。そう言った視覚的なものではないのだ。

では何であったのかといえ、だ。

「……酷い血の匂い。それに、何かを焼いた臭いも」

「おー、さすが耀は鼻がいいな。処理したのちよい前なんだけどな」

「隠す気ないのに、よく言うよね」

「ハハッ、まあバレるよなあ。隠す理由もないし」

と、そう呟いて。一輝は椅子代わりをしていた切り株から離れる。この後何をするか、彼らが何をしに来たのか。それは分かっているはずなのに、ただ友人へ近づくときのように軽い足取りで。

「そういや、悪かったな。あの後俺が雲隠れしたせいで面倒事、あっただろ？」

「ああ、思いつきりあったな。おかげさまでリーダー代行代行として楽しくもねえお話に参加させられた」

「うわー、それはマジで面倒だな。やっぱ俺リーダー代行十六夜に任せるわ」

「ぞっけん、とつとと代行に戻ってんだ」

それは決して簡単なことではない。討伐対象にはされていないし、大手の神群は基本気にしていないが、それは『倒せないから』という一点のみが理由だ。決して許されたわけではない。

故に、戻ってくる手段は簡単ではなく、限られている。

一つは、白夜叉のようにどこか大きな神群へ帰依すること。どこか、その存在を保証してくれる、その保証が十二分な証明となりうる集団に保証してもらう手段だ。しかし現状、アジィダカーハという神殺しの力を保有する一輝にこれは難しいだろう。

であれば、取ることでできる手段は別のものになり。それはこの上なく、単純なもの。

彼を討伐してしまえばいい。

彼の保有する主催者権限。その謎を解き明かし、ゲームクリアによって打ち破った者であれば。その対象を保有することは、当然の権利として保障される。故に。

「やるぞ、最新の英雄サマ。俺達はテメエを連れ戻しに来た」

「だよなあ、とは思ってたよ。……ま、そつちがやるって言うなら仕方ない」

仕方ない、と言いながら一輝の顔を彩るのは凶暴な笑み。これから始まるうとしている戦いを、確かに楽しみにしている。

その証拠に、契約書類は何のためらいもなく召喚された。記された

ギフトゲーム名は『一族の物語 ―交わした約束―』。

こうして、ゲームは開幕する。主催者側プレイヤーは鬼道一輝のみ、参加者側プレイヤーは逆廻十六夜、春日部耀、久遠飛鳥、レティシアⅡドラグレアの四名。審判に黒ウサギを据えたギフトゲーム。さて、ここで少し参加者側が立ててきた作戦について話そう。とはいえ、大まかな方針としては十六夜が語っていたものと変わらず、大まかなくくりとしてはアジⅡダカーハに対して用いたものとも似通っている。

まず、現在ノーネームが私情で動かしても問題の無い戦力を選出する。これは同盟所属の者は除かれ、ノーネーム所属、一輝の隷属下にない者が対象となった。

続けて、その中で一輝と相対することが相性的に不利な者が除かれた。神殺しの力を持つが故にクロア・バロンが、水を操るという共通のギフト故に白雪姫が除かれた。

最後に、本拠護衛のためもう一人ノーネームから選出される。これは手札を増やす、という意味もあり同一のギフトを保有した耀がおり、かつ翼が一つ失われているグリーが残された。

こうして参加メンバーは先述の四名となり、この中から一輝本人を相手にする人間、一輝の従僕を相手にする人間をそれぞれ二人ずつ選ぶ。単純に希望として振り分けられれば簡単なのだが、従僕に神霊二人、さらに霊獣までいるのだからそうもいかない。それら全てへの相性込みで、戦力を分担する。

結果。

いざとなれば広範囲を焼き払うこともでき、機動力のある耀。自身も従者を用いる、むしろ従者を指揮することが主だった役割となる飛鳥が従僕の相手を。

武器は己が体、近接戦闘が専門となる十六夜。槍を繰り、龍影という攻防可能な武器を持つレティシアが一輝の相手を。

そんな戦略を、彼らはたてた。

単純と笑うなかれ。そもそも、人数がない以上複雑な作戦なんぞ

立てるだけマイナスになることの方が多い。ギフトゲームのクリア方法が明確になっておりそれを満たすため、という形であれば話は別だがそうでないのなら、単純化された作戦は最適解である。

しかし、だ。単純化された作戦というのは、決行が容易であり、能力さえあれば成功率も高い代わりに。

相手もまた、その作戦を読むことが容易なのだ。

契約書類は現れた。ゲームの開幕はすでに告げられている。単純化された作戦を決行することが参加者側の最適解であるのに対して、主催者側の最適解は？

答えは、これもまた単純。

「吹っ飛ば、十六夜！」

先手必勝。策を読み、読めなかったとしても最大の戦力を真っ先に叩く！

反応される前に十六夜に接近し、ダメージを与えることなくその位置を他のメンバーから離すことを目的とした一撃。内側へ入り込み、腕を振りぬき十六夜を殴り飛ばすと、その勢いを殺すことなく回転し、レティシアへ向けて一矢射った後に距離を取る。

「おや……？」

放たれた矢をレティシアは当然防いだ。最初の一発であればともかく、二撃目以降を防げないほどの素人ではない。射線へ槍を置き、確実に防いだ……はずなのだが。

「手ごたえが、ない？」

「レティシア、加勢急いで！」

槍に矢が当たった感触はなく、その現実を訝しむ。その疑問は当然のものだ。確実に防いでおり、その矢が当たった感触はない。にもかかわらず、防いだ感触すらない。ともなれば特殊なギフトではないかと疑うのが当然の流れではあるものの……

今は、ふっ飛ばされた十六夜の心配をするべきだった。

ふっ飛ばされた先。威力ではなく飛距離を重視したが故に今にも合流へ向け動こうとしていたため、腰から札を取り出して躊躇うこと

なく投擲する。

「火氣招来、急急如律令！」

呪符を介して招聘される、普通ならざる炎。基礎中の基礎の陰陽術ではあるが、術者の腕が高ければそんなことは関係ない。基礎中の基礎の術は、必殺の一撃となりうる。例外の一撃。

しかし、例外は一輝だけの特権ではない。

逆廻十六夜もまた、例外の人間。その拳は山河を砕くだけにはとどまらず、ギフトによる形無き現象をも砕く。故に、炎というそれは格好の的である。

では、炎以外であれば？

「火氣の後に灰あり、土に還れ。火生土、急急如律令」

炎は砕かれる直前、大量の土へと姿を変える。インパクトの瞬間は躲かれ、与えた影響は拳の風圧によって一部の土が飛んだのみ。その多くは十六夜を覆うように降りかかる。大量の土が、十六夜を埋めた。

そして当然、それでは終わらない。

「大地より鉞物は生まれる。土生金、急急如律令」

ただの土塊で封じられるわけもなく、その土を全て金属へ変換する。呪術によって生成されるそれ、その金属塊へさらに呪符を貼り、九字を切りながら続ける。

時間との勝負、脱出されるより前に、その術を決行する。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・前・行。オン・ビシビシ・カラカラ・シバリ・ソワカ。古の九字、金剛の呪をもつて、ここに停滞の封を」

対象物、そしてその中へ向けて用いられる封印の呪い。金縛りの術と封印の術を混合した、停止の封印。意識の封印、物理的な封印が共に無意味であると考え、局所的な空間に対し時間の流れを書き換え行われた封印。

勿論、これで完全に封印できる、なんてことはありえない。なにせ対象が逆廻十六夜なのだ。この程度の封印、物理的に破壊するというありえない手法を取るにきまっている。

故に、行動は迅速に。自分への勝ち目がなくなるよう、主力を削る。

「遅かったな、レテイシア」

「一輝が絡め手を使うとは思ってなかったからな！」

いつそ突進気味に槍を構えて突っ込んできたレテイシアに師子王を抜いて応戦する。三合ほどの打ち合い、二人の足元では互いの影がその身を喰らい合う。

「なるほど、アジィダカーハの龍影か」

「ま、そういうことだ。それと、あらかじめ謝っとく」

「何……？」

「……火気は身を焼き魂を清める聖火。水気はその存在を遮断する流れ」

紡がれる言霊。それに伴い、一輝の腰から対応する呪符が宙を舞う。

「金気はその存在を討つ聖銀。木気は彼の邪を払う穀物を」

紡がれる言霊へ、レテイシアは内心ひたすらに首をかしげる。今一輝が語ったそれは、確かに吸血鬼に対して有効であると言われるものだ。しかし、それは後世に詩人が語ったもの。そうして作り出された歪みを彼女は一切保有しておらず、全て妹が引き受けた。

その歴史はレテイシアにとって最大の屈辱でしかないのだが、感情と事実は違う。レテイシアに対して弱点となりうるものは太陽に光ただ一つのみ。

故に、気にする必要はない。このまま攻め続け、合流した二人二封印を解かせる。それでいい、このまま攻め続ける。

そんな考えがあまかったのだと気づくのは、数秒の後。

「……何？」

呪符から伸びた植物が自身の腕を掠った瞬間。そこについた傷と走った痛みから、本能的に「これはマズい」と理解する。浴びたことはないが、太陽の光と近いもの。

理解が及べば行動は早い。なぜそうなっているのかはまるで分らないが、自身の勘がこれを危険だと直感している。体はそれを信じて躊躇うことなく動き出すが、

「鬼祓・吸鬼の陣。急急如律令」

既に術は、完成している。

金行札から生成された銀の十字へ拘束され、水流、聖火、忍辱の三物によってその身は蝕まれる。容赦もなく、また同時に正々堂々という言葉もない相性による攻撃。陰陽師という狩りを生業とする者としては正しく、主催者という挑戦者に対して試練を与える立場としては大きく間違っているその行い。

しかし当然のこととして。この場で正しさというモノは、なんの力も持たず。間違いであるという事実は、何一つ縛りはしない。

言霊の矢によって植え付けられた絶対的な相性。全身を犯す天敵の存在へ耳を劈くような悲鳴を上げるレティシア。その眼前に立ちながら一輝は一切表情を変えはしない。

もといた世界で日常的に行っていた行為。箱庭に来てからは頻度こそ減ったもののこれといって思うところはなく行っていた行為。見るからに姿の違う者であっても、二足歩行をする者であっても、見た目だけで言えば人間と変わらないものであったとしても、いつそ人間であろうとも。自分たちとの意思疎通が可能な存在を、一切の躊躇いなく殺してきた一輝が、何故この程度のこと……同じコミュニケーションに属し、幾度の死線を共にした仲間の悲鳴程度のこと、感情を動かされようか。

さらに手を重ねる。

「金行札、聖銀錬成。急急如律令」

手中の札は聖銀の杭となる。拘束具はすでに足りている以上、その使い道は一つしかない。磔にされたレティシアの胸部、その奥にある心臓がターゲット。

杭を引き、突き立てようとして……背後からの蹴りを杭で受け止める。

「おっ、間に合ったか」

「どい」が……！

耀の蹴りを受け止めた杭は砕けて、続けて放たれた二撃目を跳んでかわす。耀の一撃を受ける危険性とここまで削ったレティシアへとどめを刺す価値。その天秤は、容易に傾いた。

「いやいや、これでも褒めてる方なんだぞ？レテイシアと一緒に攻めてきてまとめて潰してやれば終わり、って思ってたからな」

「それは、さすがになめすぎでしょ」

「そうか？ま、だとしたら謝っとく」

そう言いながら、ギフトカードに手をかざし師子王を抜く。

「日ノ本の国に伝わりし、大いなる巨人よ。我が国を作りし、偉大なる巨人よ。今ここに、その所在無き身を、我が眼前に表わさん」

「やりなさい、アルマ！」

一輝の体より輝く霧が現れ、巨人の姿を構成しようとする最中^{さなか}。アルマに乗る飛鳥が己が騎獣へ向けて命令を下す。言霊の神格を飲み込んだ従者はその命令を忠実に実行するが……それは、一輝には突き刺さらない。

「突き破りなさい、これ以上何かさされる前に攻め切る！」

『ええい、無茶を言う!!』

しかし、それが事実だとはわかっているのだろう。アルマはその命令をこなそうと宙を蹴り、身に纏う雷電をより強いものへと変えていく。されど、それを受け止める巨人も尋常の存在ではない。国の形を作り出した巨人。神による国造りへと対抗する形で生み出された巨人信仰の具現である。

巨人故に、その動きはとても鈍い。それは事実だ。アルマが彼の周りを跳び回って攻撃を繰り返せばいずれ倒されるだろう。だが、今それをやるだけの時間的余裕は存在しない。それゆえの、一点突破。

自らの腹へ突き刺さろうとしている存在、それが動かないのであればダイダラボッチにも打てる手は存在する。体の大きさに伴った高い耐久力、それに任せて腹部へ突き刺さる小さなヤギをつかみ取りにかかると。

雷撃がその手を焼く。近づくことも難しく、それでも力任せに握りつぶさんと迫る巨大な手。その頼もしさへ口角を上げながら、巨人の背へ主の手が添えられる。

「我が従僕よ、我が一族によって討たれし幾千幾万の異形なる魂よ」

そして。紡がれるのは、外道の言霊。

「今、汝らの意志は必要なし。その意思を檻へ残し、力のみを具現せよ」

檻から表へと引きずり出された、異形たちの『力』。霊獣、神霊と言った固有名称でもって成立する者たちではなく、種族名によって認識される十把一絡げ達、その力。それら全てを、ダイダラボッチの背中へと流し込む。

「今ここに求められるは数にあらず。強大なる一へ統合し、我がための力となれ」

霊格が完結しているはずの存在に対し、なんの統一性もない力を強引に流し込む。その行いがどれだけの負荷を与えるか、考えずともわかるような外道の行い。しかし、寡黙な巨人はその苦痛に耐え、受け入れ、己が力へと昇華する！

「さあ、アルマの相手は任せたぞダイダラボッチ。それとも、まだ足りないか？」

「わざわざ言う必要はないだろう。時間の無駄だ」

「ああ、そりゃごもつとも」

これで、巨人が貫かれることはない……とまでは言えないが、拮抗し時間を稼げるレベルまでは至る。そして、それができるということは……

「さあ、耀。こっちはこっちで一對一だ。上手くやれば俺を討てるかもな？」

「……黒ウサギ、審判権限！」

一輝の言葉には一切反応せず、どこか離れたところで観戦しているのだろう黒ウサギへと告げる。挑戦者としての才能を持つ彼女の判断は、この上なく正しかった。

彼らが元々立てていた作戦は、酷く単純なものだった。しかし、その要となる二人が捕えられてしまった。完璧な破綻、確定した敗北であるのならば、二人が捕えられたままになるという負債を抱えることになるとしても、一時中断して作戦を練り直すしかない。難易度が高すぎるからと切り捨てた『鬼道』という存在、その定義を突き止める方針へ移るにしても、考察を行うだけの時間が必要だ。

さて、そうと決まればやらなければならないことは一つ。可能かどうかも分からず、どれだけ時間がかかるかもわからない黒ウサギの申請が受理されるその時まで、耐え続ける。

「飛鳥、作戦変更！持久戦に移るよ！」

「了解……ッ！デイン！」

掲げられたギフトカード。そこから巨体をさらに大きくし雄たけびを上げて表れるのは、彼女の忠実なる従僕。最も長く彼女を支え続けた二人目の従者、紅の鉄人形。主の勅命を受け取った忠臣は、その期待に答えようと眼前の巨人へ殴りかかる。

その一撃をノーガードで受ければ、ドーピングした巨人といえども耐えられるわけがない。山羊へ向けていた手を離し、その拳を受け止める。自由の身になった山羊と主人は即、飛んできた耀も乗せてその場を離れようと駆けだす。

「ひとまず逃げ出してみたけれど、どうするの？」

「逃げられる限りは逃げ続けて、できるなら遠距離から攻撃する。近づかれたら……」

『私が盾になり立てこもる、でしょうか？』

「うん、怖いからそうはしたくないんだけど」

『時間稼ぎが目的であれば、悪くはないでしょう。もちろん、いい手でもありませんが』

アルマは自ら提案しない。あくまでも彼女たちが考え付いていることを口にするのみ。あくまで自分たちの挑戦であるためそれに文句は言わず、自分の手札を再確認する。

一輝の全力、それに対して格で対抗しうるモノは『大鵬金翅鳥』、ヴァイナマ・ガルダ『原初龍・金星降誕』、『麒麟の矛』の三つくらい。しかし最強種の顕現はタイムリミットがあるという点から持久戦には向いておらず、そもそも効くのかすら分からない。原初の火は覇者の光輪に勝てないことが証明されているし、対神対龍対悪への絶対的優位もブラックボックスの霊格に対して通用する確信が存在しない。そうでなくともこの二つの恩恵が「火」の恩恵である以上、「火取り魔」という火への概念的優位を保有する妖に食われておしまいだ。

「おーい、逃げんなよ面白くねえ！」

「うるさい、こつちも作戦なんだよ！」

言いながら下を見ると、そこには巨大な蛇の頭に乗る一輝の姿が。翼を持つ大蛇、すぐさま記憶から引つ張り出される名前はパロロコン。レティシアのギフトゲーム、そこで巨龍に縛り付き捕えていた地震の神格を持つ蛇だ。神としての信仰も保有している。

「マズい、あれはその気になれば飛んでくれる」

「つまり、こつちが宙にいることでの優位は無いわけね」

「まあ、一輝はその気になれば飛べそうだから何とも言えないけど……」

それでも、単体で突っ込んでくると蛇込みで突っ込んでくるのでは意味が違う。質量の違いはそれだけで大きな武器だ。潰せるのであれば、あの乗り物は早い段階で潰しておきたい。

「飛鳥、手持ちの手段でなにかいいのある!？」

「あんな大蛇を何とかできる手段なんて、デイン以外ないわよ！耀さんは!？」

「あるにはあるけど、リスクが高すぎるかな！」

ある種八方塞である。しかし逃げ続けられる間は逃げ続ければ勝ちなのだから、注意して逃げ続けるやり方でも問題はない。逃げ続けて、何か遠距離から対処できる手段が思いついたらチマチマ攻撃して逃げる時間を追加で稼ぐ。

『二人とも、捕まって!』

と、そこで声。同時に自身の乗っているモノが大きく動く。飛鳥と毛皮を強く掴みながら何があったのかと前方を見ると、是害坊と白澤が宙にいる。これを避けたのだと判断しつつ下へ視線をやると、九尾の狐、八面王の姿が。完全に囲まれてしまった状態、手数が多さによる力技の詰み！

「アルマー！」

『長くは持ちませんよ、マスター!』

飛鳥が命令を下し、アルマがそれに従って二人を包み込む。あらゆる攻撃を防ぐギリシャ神群最強の盾・イージスの疑似具現。そう簡単

に打ち破れる代物ではなく、時間を稼ぐことは可能なはずだ。

……はず、だった。

音もなく、さも当然のことであるかのように球体の内側へ現れた男の手。当たり前のように貫いてきたそれは、一輝の手刀であった。

「ありや、いないか。じゃあ次はこの辺りを」

手刀で貫いてきたということは、本当にすぐそばにいるということ。しかもいるのは一輝だけではなくもう五体の霊獣もいるのだろう。その状況で球体を解除して逃げようとしたなら、確実にどちらかは捕まる。しかしこのまま籠城することも不可能、これ以上繰り返しばいずれ壊滅するのは間違いない……！

「そこまでですー！」

と、そのタイミングで。雷鳴と共に響いてきたのは、黒ウサギの声。

審判権限の制限によって主催者の同意なくゲームへかかわることが難しい彼女が、ゲームに対して口を出してきた。それが許されたということとは、つまり。

「『ジャッジマスター審判権限』の発動が受理されました！これよりギフトゲーム』一族の物語——交わした約束——は一時中断し、審議決議を執り行います！プレイヤー側、ホスト側は共に交戦を中止し、速やかに交渉テーブルの準備に移行してください！」

黒ウサギの宣言は、繰り返し返される。しかし球体の中にこもる二人の耳にそれは届かず、一輝の手によってあけられた穴から入る彼の声が届く。

「おー、受理されたのか。ワンチャンされないだろうなあって思ってたんだけど……ま、有り得たことではあるんだよなあ」

と、そう告げつつ。展開した異形たちもすべて収めて、言葉を交わす。

「交渉場所、時間なんかは後で式神をよこすからそいつに知らせてくれ。んじゃ、またゲーム再開後に」

やはりいつも通り、何でもないことのように。次に遊ぶ予定を告げるくらいの気軽さで用件を伝えて、立ち去っていく。

「……ひとまず、だけど」

「乗り切った、のかしら？」

ゲーム中断という緊急避難的目標をクリアできたのだ、と。その事実をようやく理解して。

二人は背中合わせに、球体の内側で崩れ落ちた。

一族の物語 ― 交わした約束 ― 中断

ゲーム中断後、黒ウサギの指示通りすぐに交渉テーブルの準備に移った。一輝から式神が遣わされると「今すぐに」と返し、森の中、テーブルを一つに椅子を準備しただけの場所でプレイヤー側は待っている状態である。

「それにしても」

と、そんな中。準備が終わってしまったが故の沈黙に耐えられなかったのか、それともずつと気になっていたのか。理由は分からないが、沈黙を破ったのは飛鳥であった。

「十六夜君、しっかり脱出していたのね」

「まあ、あの中で固まってたわけじゃないからな」

そして、十六夜も特に思うところもなくそれに答える。

「金属に覆われてて動きにくかったっちゃ動きにくかったが、壊せないほどじゃなかった。体感としては、時間の流れが変わってた、って感じた」

「もはや何でもありだね、一輝」

金縛りの範囲を個人から金属塊へ変えた術ということになるのだが、それを指摘するものは一人もいないので関係ない。

「ゲーム中断前にレティシアの方も全部ぶっ壊して助けたんだが……あれはもう戦線離脱だろうな」

「そんなにマズいの、レティシア？」

「命の危機は無い。そもそもなんともないはずの物ばつかだったのに何か起こってるのがおかしいんだ」

「あー、それはあれですよ。箱庭にはおあつらえ向きな『認識』があったので、それを利用して書きかえさせていただきました」

と、その瞬間。いつの間そこにいたのか、向かい側の席についていた湖札が答える。

「私のギフト『言霊の矢』は伝承とその源流を込め、撃ち抜くことによつて霊格を貫く矢と真実になるほど騙られた物語を込め、撃ち抜くことによつてその存在の定義を書き換える矢がありますから。今回

は後者を利用して私たちの世界の吸血鬼に近づけさせていただきました」

なんせこつちの世界での吸血鬼の定義、よくわかんないわ撃ち抜きづらいわですし、と。めんどくさそうに話しながら和菓子を口に放り込む。咀嚼し、飲み込んで。

「あ、良かったらいりますか？」

「いら」

「欲しい。ちょうだい」

「いいですよー、どうぞぞぞ」

十六夜が拒否しようとしたところで、耀が横から瞳を輝かせて手を伸ばす。箱ごと受け取ったそれ。筆頭取り出して、同じように口へ放り込む。

「お前なあ」

「だって今は黒ウサギの審判権限で交戦禁止状態だし。だったら、毒物も出せないじょうたいだもん。美味しそうなのは有りがたくいただくべき」

「まあ、気を張っていても仕方ないものね。私にもちょうだい、耀さん」

「うん、どうぞ飛鳥。黒ウサギも」

「あ、ありがとうございます」

と、女性陣が続々と和菓子を食べていく光景。仮にもこれから魔王との交渉テーブルが始まるというのに呑気なものだ、と呆れながらも一息つけている。

「それで？一輝はどうしたよっ」

「ああ、兄さんは来ませんよ」

と、緑茶を人数分淹れながら湖札は返す。緊張感、どこに消えたのだろうか。

「だってほら、多少なりともヒントを与えようと持ったら本人が来るのは色々と聞こえがマズいですし。間に立たされた人間が勝手に言った、って名目が必要なわけですよ」

と、湖札は躊躇うことなく発言する。当然、それで納得する参加者

ではない。ゲームの公平性を保つというお題目、お情けで獲得する勝利に興味はないという本音のもと発言をしようとして。

「だってこの真実、箱庭からの観測は不可能なんですから」

湖札の発言によって、遮られる。

「……それは箱庭の定義、ギフトゲームの定義に当てはまらねえだろ」「そりやそうですよ、こっちの世界系には一切当てはまらないんですから」

十六夜にそう返しつつ、コートの内ポケットから一枚の紙を取り出した。

「さて、面倒な議論を挟む暇はないのでまず言わせていただきます。今回のゲーム、一切の不正はありません」

「それについては疑ってない。何が何だかわからないルールではあるが、だからこそ変に手を加えられるだけの技術は持ってないだろ」

「まあ、それもそうですね。兄さんにも私にも詩人としての能力はありませんし」

ヤシロさんがいたらワンチャンあつたんですけどねー、とボヤきつつ契約書類をつまむ。

「まあなんにせよ、です。一切不正がないにもかかわらず中断させられている、という立場を利用していくつか条件を出させていただけこうと思いますが、よろしいですかね？」

「……まあ、中断したのはこっち側だからな。拒否権もねえだろ」

「ありがとうございます。まあ、あれですよ。この世界で自力で答えにたどり着ける存在なんてヤシロちゃん位なものですし、気にするだけ無駄かと」

あ、もう十六夜さんが参加者側代表、ってことで話し進めますね、と。先ほど取り出した紙を開き、読みあげる。

「二つ目。本ゲームに参加する全プレイヤーに対する疑似創星図の使用禁止」

「それはプレイヤー『が』使ってはいけない、なのか。それともプレイヤー『に』使ってはいけない、か？」

「後者です。完全に使用を禁止することはありませんが、その矛先を

主催者側参加者側問わずプレイヤーへ向けることを禁止します」

当然のこととして、これは参加者側が有利になるルールである。なにせ参加者側が保有しているのは十六夜の一つのみ、主催者側で考えるのであれば合計四種類。アジィダカーハに渡したままにするのであれば三人が使える形になる。それを禁止するということは……つまり、参加者側に対する温情だ。

「さて、これの可否を審判に問う前に次のルールも言ってしまったいいですか？」

「なら、先に話せ」

「ではお言葉に甘えて」

と、そう言つて。次の追加ルールも口にする。

「二つ目。参加者側のプレイヤーを逆廻十六夜、久遠飛鳥、春日部耀。以上三名のみとしてください」

「……まあ、これといって損はないかな」

この耀の発言は、至極その通りのものだ。何せ、元々の参加者の内レティシアが戦闘不能になっている以上戦えるのは名前が挙がった三人のみだ。

「ただ、そっちの意図が読めん。何が目的だ？」

「どちらかといえばゲームクリアへのちよつとした手助け、と言つたところですね。今回準備されているゲームクリア条件。一個でもクリアすればいい中の一つは、この三人以外の参加者がいると達成不可能なものですから」

「ふーん……ゲームギミックはある、と」

「一応ギミックと言えるものは、という程度ですけどね。おまけみたいなものですよ」

そこまでで、十六夜は……というか、三人は一輝の意図が大よそ読めた。それでも念のため、確認を取る。

「つまり、『今のまま挑んできても絶対負けなくてつまらないから少しは脅かして来い』、とでもいったのかしら？」

「That's right!」

パチパチと拍手を送る湖札に対して、問題児三名の額に青筋が浮い

た。だがこればかりは仕方ない、だって完全になめられているんだもの。

「で、どうします？ちなみにこの条件を飲んでくれない場合は『一切ゲームを中断される謂れもないにもかかわらず中断されたということで即時再開を求める』って伝言預かってますけど」

しかし結局、この一言で飲むこととなってしまふのであった。この分は完膚なきまでに解き明かして殴り飛ばすことで返すと心に決めながら、条件を飲む。即時再開などとされてしまえばゲームの仕組みがかげらほども分かっていない以上、そのまま負けるのみだ。

「で、では」

そんな葛藤で言葉がとまってしまった以上、進行を請け負うのは中立の立場の役割であり。今回それにあたる黒ウサギが、それを執り行う。審判に徹することしかできない以上、中立の存在であり続けることが彼女のすべきことだ。

「参加者側はそれでよろしいでしょうか？それならば箱庭中枢へ申請し、正式なものとなりますが」

「……………分かった、その二つの条件は飲む」

非情に。非常に腹立たしそうな表情を浮かべながら。それでも立场上飲むしかないが故に、参加者側の代表として回答した。目を閉じウサ耳をピコピコさせた黒ウサギが受理されたと伝えると、湖札は続けての条件を口にする。

「では、三つ目です。今回のゲームに関して質問をする相手として一部禁止する人物を上げさせていただきます」

「禁止？」

「ええ。まあ、『この人に聞かれたら答えが分かってしまう』って言う意味の禁止ではなく、『この人が真実を知る機会を別にちゃんと設ける』って方針ですけど」

つまり、ちよつと後の都合が大変だからやめといて、という程度のお願いだ。上げられた名前はある種想像通りの、一輝の従者たち。ヤシロを除く三人の名前が上げられた。

「まあこれについてはどつちでもいいと思います。できることなら、

程度のラインですから」

「まあ、知らないやつに聞いても意味がないか。ヤシロに聞くことが許されてる以上、あんまり変わんねえだろ」

「あの子が素直に教えてくれるとは思えないけどね」

あれはあれで立派な問題児である。

「なににせよ以上です。なのでここからはちよつとした質問タイムと言いましようか。まあそんな感じの時間にしましよう」

「さつき言ってた、箱庭から観測されないってのは？」

「あ、それはゲームクリア条件に直結するのでNGです」

「だったら、鬼道の一族は善か悪か」

「どっちでもありどっちでもないですね」

現状何もわかっていない感がある。

「そもそも、善悪の定義って難しいところですしねえ」

「一般的な主観とか、個人的な主観とか、国という単位から見た場合とか、定義しやすい基準はあるんじゃないかな？」

「まあ、そう言うのはあるんですけど……ほら、何代目、って継承していくような形なので、それこそ人による、といいますか。契約書類を見たとおり、と言いますか……」

うーん、と悩んで。まあ話したところで何もないか、と決断する。

「私たち鬼道の一族に連なる人間は、生まれつきいくつかの感情や本能が欠落しています」

「……それで？」

「まあそう焦らず、何か情報があるかもしれないと思って話を聞いてみてくださいよ」

実際問題として、鬼道に関する情報がまるで存在していないのだから聞くしかない。この言い方は少しばかり卑怯である。

「例えば私ですと、そこまで人間として支障が生まれるような欠落はありませんが、恋愛感情、性欲関連の部分で欠落が存在していますね」

「性欲って……それ、話して言い内容なの？」

「別に大したことでもないですし、気にしませんよ」

そんな歳でもないですし、という彼女の年齢はまだ十代、この中で

も下の方だ。十分そんな歳だと思っただが、彼女はまるで気にする気が無い。

「で、欠落内容ですけど。実の兄、近しい血縁者に対して恋愛感情を抱き、性的興奮を抱いてしまう、って結果になるように欠落していますね」

実際には実の兄だと思っていた相手に、だったんですけどねーなんて言っているがただのブラコンカミングアウトである。はつきり言ってリアクションに困り、というかツツコミ待ちなのだろうかと思っただけの四人。

「まあそういう反応になるのは分かりますけどね。でもこの感情の欠落は、人間という『動物』にとつては大きすぎるものですよ？」

「あー……まあ、確かに。種の保存、って観点でみると欠陥品にもほどがあるか」

「その通り。まあ他にも細かい感情がそこそこ欠落しているわけなんですけど、その辺は模倣して作ったりしましたので誤魔化せている状態になります」

模倣して作った感情。しかし人間というのはそういう存在ではないのか。育つ環境によって感情が育てられる、とはそういう意味ではないのか。

そんな疑問は、続く言葉でかき消される。

「で、まあ欠落してる感情の数や重要性が大きい感情が欠落しているとより強大な霊格を獲得する、という体質を初代のお嫁さんである魔王・ジャンヌダルクから継承しているわけなんですけど」

「オイちよつと待て」

「待ちません。で、歴代当主の中にはざっくりと『愛』という感情が欠落している人がいたんですよ」

衝撃的なカミングアウトに対する反応をしれつと流して、勝手に話を続ける。

「しかしその人は欠落していることを問題だと判断したみたいですし。神社の人間にも関わらず教会へ聞きに行ったんですよ」

「……まあ、『愛』ってものを聞く相手としちゃ間違っただけさそうだけ

どな」

時代によつては問題になつてしまひそうな行動である。

「さて、そこで優しい神父さんは明確に『愛』というモノを教えることはありませんでしたが、いずれ誰かから与えられる日が来る。その時はそれを、他の人にも与えてあげなさい。なんて伝えたそうです」

「変に愛の定義を教わつてそれを模倣するよりはいいんじゃないかねえか？」

「いやー、この場合は最悪の結果ですねー」

と、その後のどうなつたのかを告げる。

「当時少年だつたその人は、博愛主義を名乗る方から愛を学んでしまつたのです。これはもう、最悪の一言ですね」

博愛主義者。人種・国家・階級・宗教と言つた違いを超え、人類を平等に愛するという存在。なるほど、その考えは素晴らしいものだ。人間としての理性を正し曇つた上でそれを唱えられるのであれば。そしてそれを心に抱ける人間が増えたのであれば。そこから争いがなくなるのかもしれない。

「結果少年は、博愛主義の愛を自分なりに解釈して、咀嚼して、模倣して、自らの中に作り出しました。周りはそれを始めの内は歓迎しましたね。人格者として、鬼道の印象をいい方向に持つていけるのではな

いか、と」
いけるのではないか、という言い方。それが示すところとは、つまり。

「さて、彼はその感情の異常性を表に出さないまま当主を継承し、誰にでも優しい素晴らしい人としてちよつとした有名人になりました。お嫁さんをもらつて、子供もできて。まあその辺りのどーでもいい人生は割愛します」

カットです、と両手の指をハサミの形にして、物を切る仕草をする。その姿だけを見れば、可愛らしいものだ。

「そうして過ぐしていたある日、鬼道の家に暗殺者が侵入します。暗殺者はまず子供を殺し、偶然遭遇したお嫁さんを殺し、最後に当主を殺そうとして……まあ、あっさり捕まります」

『愛』という大きすぎる、重大すぎる感情の欠落。それは確実に、彼の力を増加させていたのだろう。

「さて、暗殺者が何をしたのか知った当主は何をしたのかといえば……答えは単純、何もしなかった、です」

「……嫁と子供を殺されたのに、ですか？」

「はい。だって彼にしてみれば、自らの嫁と子供に向ける愛と目の前にいる暗殺者に対する愛は、全く同じものなんですから」

そう、これが起こってしまった最悪。博愛主義、という考え方を言葉の通りに受け取り、模倣してしまったが故の弊害。一度も会ったことが無い人物に対してすら、殺意を向けてきた相手に対してすら、家族に向けるのと同質同量の愛を向けてしまった、狂人。

……いや、家族に対してすら、赤の他人に向けるのと同じ愛を、というべきなのかもしれない。

「とまあそんな人物がいたわけなんですけど、これは果たして善なのか悪なのか。イカれてることだけはまちがいないですけど、それ以上のことが分からないんですよねえ」

「……ちなみに、その人はその後どうなったのかしら？」

「そんなイカれた思考回路を知り、恐怖を抱いた近隣住民の方々に殺されました。最後まで笑顔だったそうですよ」

その後、鬼道の家は彼の弟が継承した。弟はその教訓から、「博愛主義を名乗るものが現れたら即刻処刑すること」という家訓を残す。

「まあ、個人的には博愛主義者を名乗る人間なんて迷わず殺しちゃうっていいと思ってますけどね。本当に博愛主義をやれている人物なら狂人の極みですし、なんちゃってで名乗ってる人間なんてロクでもないでしょうし、博愛主義をやれていると思ってる人間もまあ、害悪でしょう」

湖札は後々面倒事になるだろうという考えで、会ったならすぐさま殺してしまうだろう。

一輝であれば……どうだろうか。今後関わることがないと確信していれば放置するだろうか？まあ、関わりうると思えば面倒に思い殺すのだけけれど。

「とまあさつきのは極端な例ですけど、鬼道の当主なんてそんな感じのイロモノぞろいなんです。人間のコミュニケーション視線で見ただけですと、本当に当主次第、としか」

「……まあ、一輝も大概イカれてるし。そう思えば、納得もできる、けど」

「じゃあそのまま納得しておいてください。さて、次は何か質問ありますか？」

無駄に長い話であった。

そんな感じで少し待ち、さて何も質問が出ないだろうかと考えだしたタイミングで。

「……なら、妖怪や魔物、霊獣、神と言った一輝君の言う異形の存在は、あなたの世界でいつから存在するものなのかしら？」

「……ふうん」

飛鳥から、そんな質問が出る。湖札はその問いに対して柔らかな笑みを消し、一切目が笑っていない笑みに変えてから。

「はじめから、ですね」

そう、答える。

「それは、人間の観測しうる範囲において？」

「いえ、それより前の時間においても。私や兄さんが生きてきた時間軸で語らせてもらえば、それが誕生したときには既に。日本という国の始まりで語るのならイザナギ、イザナミの国産みから始まります。巨人の死体が大地となった場所であればその通りに、様々な国に伝わる国の始まりの神話がそのまま国の始まりです。勿論、さらに遡れば神が手を付ける前の世界があります」

一騎に語られた、かなり長いその答え。あからさまに何か情報があると云わんばかりであるが、この場でそれを考察し、問うたところで正誤すら返ってくるはずがないのだ。一旦この情報は脇において、他に質問しておくべきことがあるかを考える。

考えて、考えて、考え続けて……やはり情報がなさ過ぎて、対して出ては来ない。

「出てこないようでしたら、繋ぎに一つ忠告をば。十六夜さん、ちよっ

と手をこちらに伸ばしてください」

「はっ。」

「いいですから、ほらほら」

言われ、まあ現状害することをすれば審判によってとがめられる状態だ。であれば問題ないかと、言われたとおりに手を伸ばす。その手を取り、しっかりと伸ばさせる。

「さて、黒ウサギさん。一つ言っておきますね」

「はい？」

「これはあくまでも、忠告ですので。そういうことで一つ、よろしくお願います」

「というや否や。ポケットから取り出したナイフを握り、その肌に乗せる。」

はつきり言って、意味が分からない。十六夜は保有している獅子座の太陽主権によって切断という概念に対する絶対的守護を保有している。その状態に対してナイフを当てたところで何があるのか、と。

しかし、そんな当たり前が当たり前に起こるのであれば。今彼女は、ナイフを取り出してなどいない。少しだけ力を入れて、スツ、と引く。十六夜の肌が薄く切れ、血がプクツと湧く。

「何……？」

「とまあ、こんな調子で」

ナイフを放り捨て、話を続ける。

「私にも確実にその守りを破る方法が一個ありますし、いけるんじゃないかな、って方法ならまだまだありますから。どこまで耐えられるのかをちゃんと実験してみるべきだと思いますよ？」

「実験、つってもな……」

「私なら、奴隷を10人くらい買って死ぬまで実験します」

確かにそれは、確実な方法である。箱庭世界において奴隷を取り扱う商売が存在しないわけもない。そういう意味では、そのやり方は確実なものと言える。しかし、倫理観と照らし合わせたのなら……

「……ヤシロは」

そんな葛藤故か。実験動物たるマウスとも会話できる耀が、食肉用

に育てられていると知ってる動物と会話したこのある耀が、言葉を再開する。

「ヤシロは、このゲームのクリア条件、鬼道の霊格に関わる全て、そして一輝の能力とか。その全てを知ってるの？」

「ええ、知ってると思いますよ。箱庭からは観測不可能な領域ですけど、彼女はその特殊な霊格故に全て知っているはずですよ」

「それもあって面白がついてきたんでしょうねー、と。はつきり言ってくれたが、まあ、つまり。」

この場で湖札に聞かなければならない情報は存在せず。

なんならヤシロに答えさせることが出来ればより深いところまで知ることができ。

こちらがどこまでの情報を抑えているのかを知られることもなく。戦う上での方針を考えることまで出来てしまうのである。

なんてこった、10ヤシロのほうがいいじゃねえか。

「そう言うことなら、この場でこれ以上の質問はナシでいい。そっちの出してきた条件は全て飲む、その上で再開までの期間をよこせ」

「いいですよ、そっちとしてはどれくらい欲しいですか？」

「一ヶ月は最低でも、欲を言えば二ヶ月は欲しい」

「おやおや、欲張りなことだ」

そう言いながら、飲み物がなくなったためか倉庫から日本酒を取り出し、一口煽る。兄と違ってめっぽう酒に強い彼女はただ言い訳のためにそれを飲み。

「でも、いいですよ。個人的にも交渉に飽きてきましたし、それくらいなら許容範囲です。間を取って一月半あげましょう」

「いいのかよ、そんなによこして」

「問題ないですよ。それで必要な謎を全て解き明かしたのなら兄さんは好敵手として喜ぶでしょうし、そうでなかったのなら現状と何も変わらないというだけのことですから。悪化しないことだけは間違いないでしょうし」

さらに、一口。瓶から直接酒を口に含み、香りを楽しみながら嚙下する。

「あ、いりますか?」

「いらん」

「ですよー」

「さらに一口、二口。」

「それで、他に確認はありますか?」

「ねえよ、もうこれでしまいだ。酌が欲しけりや黒ウサギを貸してやるからとつとと帰れ」

「黒ウサギはお気軽貸し出し要因ではないのですよ!？」

「あ、大丈夫です。兄さんに頼むので」

「しれつと断られるのもそれはそれで辛いものがあります!!」

面白い人ですなー、と言いなながら立ち上がる。手に握る瓶を傾け、大地へと酒が飲み込まれていく。ドプリ、ドプリとこぼれ、酒気がその空間へ満ちてゆく。古来より人の認識をズラし、時に神すらを惑わせるのが酒の効力。であればこそ、酒気の中に立つ彼女の姿は揺れ、薄れ……陽炎の如く、消える。

その場に残されたのは、審判が一人に変わらず挑み続けるプレイヤーが三人。机の上には、追加事項が記されたモノクロの契約書類が一枚。

はてさて、彼らは真実へとたどり着けるのだろうか。それはまだ、誰にもわからない。

だが、もしも。彼らが完璧な真実へとたどり着いたとして……その時、自ら暴いた真実を前にして。彼らは戦うことが出来るのだろうか？

一族の物語 ― 交わした約束 ― 主催者は終わりを
夢想する

「たっだいまー兄さーん」

「……なんかテンション高いな、お前」

何も無い空間。そこに靄が広がると、中から一升瓶を握った湖札が現れる。せつかくの美少女が台無しである。

美女であればあるいは、酒瓶を片手に登場しても似合うのだろう。だが、まだ十代である。とことん似合わない。

「ほら、ちゃんと言い訳って必要じゃん？だからお酒？んできたのです。介抱してー」

「お前が日本酒程度で酔うタマかよ……」

「酔ってないよ？だから妹のおままごとにつき合ってほしいなー、って」

そう返しながら、一輝の隣へ座る。そんな妹へため息を返しつつ酒瓶を奪い取り、倉庫から取り出した猪口へ注ぐ。

「つまみになりそうなもん出すけど、なんか希望有るか？」

「んー、特にないかなあ。そこまで食に大きな好みもないし」

「そっか、じゃあひとまずこれでも」

ギフトカードから干し肉をいくらか取り出すと、その場繋ぎ程度に皿に盛って差し出す。その後さて何を作ろうかと手持ちの食材を頭の中に書きだした。

少し前までであれば、野菜を用いた何か一択だっただろう。彼の保有する空間倉庫の一つ、時間停止がなされるそこには大量の野菜が保管されていたし、もう一ヶ所野菜畑になっている倉庫も存在する。しかしそれらは全て、アジィダカーハとの戦いの前に所有権を求道丸へと移し、そのままだ。故に大量にあるわけではない。

そしてトドメに、そこまで複雑な調理をするつもりはなかった。

結果として。日本酒だから日本のものなら合うだろう、とアサリの酒蒸し、サンマの塩焼き、明太子、の三点にご飯を準備する。まあ見

て分かるだろうが、二つ作って飽きた。

「湖札はメシいるか？」

「んー……じゃあもらおうかな」

「はいよ」

いる、という返事をもらったのでよそうのは二人分。味噌汁くらいは準備すべきだったかなー、などと考えつつ運んでくると、頭だけもいだサンマにかぶりつく妹の姿。

「……オマエ、それでいいのかよ」

「身内しかいない食卓でそこまで取り繕う必要もないでしょ？それに、内蔵っていい感じに苦くて日本酒に合うんだよね」

「骨は？」

「面倒だからかみ砕く」

さすがの一輝も大丈夫かこの妹、と心配になる。先ほど自分でおままごと、と言っていたのでその一環だろう。そうに違いない。というか、そうであってくれ。

「それで、どうなった？」

「こつちが出した条件はちゃんと通ったよ。再開については向うの提案で一ヶ月半後」

「まあ、疲労回復にゲーム考察を進める時間、って考えればそんなもんだろ」

「そうかな？ヤシロちゃんに聞きに行くだろうから、考察はもっと早く済むと思うけど？」

「済むか？」

「うん。だって飛鳥さん、結構いいところついてきてたし」

飛鳥の質問内容を口にする、すこし一輝の表情が変わる。

「ふうん、まあ確かに湖札のギフトがあるんだから疑問に思ってもおかしくはない、か」

「私のギフトってようはそういうことだもんねー。むしろおかげさまで、真実を聞いた時にすっとな受け入れられたし」

さて、そうなれば時間の使い方が変わってくる。養生と考察に使う時間で終わりではなく、養生と考察と対策に使う時間。作戦を立て、

それを実行するための準備をして、ということに時間が使えるわけだ。

「となると、ギミックを解放されるころまで考えておいた方がいい、か」

「解放するとしたらどっちのギミックになるのかなあ。どっちになつたとしても面白そうだけど」

「俺としては、どっちも面白くねえんだよなあ」

「えー、主催者がそれでいいの?」

「俺のゲームじゃないからなあ、これ。できることなら、あいつらが面白くしてくれることを祈るのみだ」

と言いつつ、空になった猪口を満たす。湖札がどうせ全部飲み干すつもりでいることは分かっていたので、それに付き合っつて酌をする。

「うーん……面白くしたいなら、もつと簡単な方法があるんじゃないの?」

「……それを言うか、妹よ」

「言いますよー、そりゃ。妹だもん」

言われて、一輝の頭の中に何度も浮かんだ考えが再びよぎる。一輝自身が、最大限に楽しむ方法。

そも、彼という存在は。正しい人間ではなく、イカれた人間であり。どのようにイカれているかといえば、同等の存在との殺し合いが最も楽しいと感じる人間である。

自分より弱いモノとの戦いに楽しさは存在しない。それは蹂躪であつて、戦いとは呼べないものだ。

共に戦う存在のいる戦いに楽しさは存在しない。戦場に立つ仲間のことを考えなければならぬなど、億劫でしかない。

使命の存在する戦いに楽しさは存在しない。あらゆるしがらみを捨て、一切意義の無いただの殺し合いでなければ、楽しめるわけもない。

格上との戦いに楽しさは存在しない。自らを上回る存在とのそれは戦いではなく挑戦であり、殺し合いたりえないのだから。

そういう意味では、そう。箱庭に来てから彼が楽しめた殺し合い

は、隣に座る少女とのそれくらいのものだろうか。

であれば、彼が全力で楽しむには？そんなこと、考えるまでもないほどに簡単なことだ。魔王として大暴れして、人類の試練として保有する主催者権限を行使してしまえばいい。誰もが魔王であると認識して、神群ですら無視できないほどに被害を及ぼしてしまえば……確実に、討伐隊が派遣される。

彼の魔王、アジィダカーハを殺し、その霊格を獲得した魔王。そんな存在を討伐するとなれば、どれほどの英雄英傑が派遣されることか。一瞬よぎったその考えに舌なめずりしつつ。

「まあ楽しいだろうけど、さすがになあ」

「我慢するんだ？」

「これでも俺、箱庭とかノーネームのこと気に入ってるからなあ。もといた世界でもずつと我慢出来てきたことだし、一番楽しいことではあるけど一番我慢できないことじゃない」

「ものすごく歪にまつすぐだなあ」

「そんなもんだろ、人間なんて」

そう言つて、自分で焼いたサンマを食べる。酔いを言い訳に全て食べ尽くした湖札に対し、器用に骨と内臓を取り除き食べる一輝。幼いころに日本を出た妹と一応は作法も学んできた兄との差である。

「あ、兄さん。私アサリ食べたい」

「唐突になんだ……ってか、そこにあるだろ」

「たーべーさーせーてー」

ほらほら、と。もうは無しの流れもあつたもんじゃなく、全てぶった切つて口を開ける湖札。さてどうしたものかと考えて……

「ったく……ほい」

「わーい」

大人しく、殻を外してその口へ放り込む。ん〜いい味、と言いながら咀嚼し日本酒をグビリ。ちよつと飲みたくなってきたけど、それは置いていて。

「あ、そうだ兄さん。私一個やってみたかったことがあるんですけど」
「急にどうした……何？」

「ポツ〇ーゲームやりたい」

「お前マジで一切酔ってないだろ。この状況を利用できるところまで利用してやろうって魂胆だろ」

「あつたりまえじゃん、何言ってるの?」

「この妹、とつくにバレているとしてももう少し隠そうとしろと言うに。」

「ほらほらく、可愛い妹のお願いだよ?」

「そもそもこの世界のどこに〇ツキーがあるんだよ」

「? 兄さん知らないの? 結構あるよ?」

「ふざけてんだろ箱庭、何考えてんだ」

本当に何故あるのだろうか。というかどうかという経路で仕入れているのだろうか。まさか箱庭内部に工場があるなんてことは……

そんなことを考えつつ、湖札のつきだしてきたそれを啜える一輝。さて、構図だけを見ればやることに同意した凶なのだが……まあ、そんなわけもなく。

「……ねえ、さすがに開始1秒未満でおられるとは思わなかったんだけど」

「ルール上、勝ち負けにこだわらないなら問題ないだろ」

「あーもー、兄さんはそう言うところあるからなー」

つままないなー、と駄々をこねだす妹。さてどうしてやろうかと考えて。

「そんなにして欲しいなら、キスでもしてやろうか?」

「ほへっ!?!」

不意打ち気味に放たれた言葉が、その口をふさぐ。目を見開き、顔を真っ赤にして爆弾を落としてきた兄の顔を見る。冗談で言われたのだろうか? そう思うも、それにしても表情がいつも通りである。そうなる、つまり。

「……そう言えば兄さん、その辺りの感情模倣すらちゃんできてなかったねー」

「まあ、最近ちよつとずつ構成してきてはいるんだけどな。作っていない方が便利そうだから、そのまま突っ切るのも考えてる」

「はあ……前の世界でも告白くらいされてただろうに、なんで今更なのかなあ」

「そりゃ、あっちの世界でされたのがそこまで意志がこもってなかったんだろ。そういう意味では、音央にぶつけられたヤツは破壊力が高かった」

「チツ、敵ながらあっぱれですね、音央さん……」

そもそも元いた世界で一輝の本質を知っていた人間は、どれくらいいたのだろうか？それすら理解していない人間からの言葉が相手の心に届くはずもなく、当然の結果として彼は学ばずに今に至った。

しかし、六実音央はそうではない。もつと言えば、理解しないでいられる立場には存在していなかった。鬼道一輝の従者という立場は、自然とそれら全てを把握しなければならぬ立場になる。彼女はその上で、その感情を抱き、その思いを伝えた。その場の勢い、雰囲気、一輝が新たな感情を理解し始めるきっかけになったのもまた、事実なのだ。

まあ、まだ感情を構成出来ていないため鬼道一輝というソフトウェアには何もインストールされておらず。それゆえの発現なわけだが。「で、どうする？するの、しないのか」

と、若干それた話の軌道を戻す。サービスのつもりなのか無意識か、顎を掴んで自分の方を向けさせる徹底ぶりである。さて、そんな状態に置かれてしまった湖札はどうするのか。自分からそれを奪いに行くか、あるいはただ目を閉じ無言でそれを要求するか……

「……心が持たないので、またの機会に、で」

などと言った前向きな選択肢がとれるはずもなく。頬を朱に染め、目線を逸らし、兄の口を手で押し返す。結局のところ、自分から行くことは出来ても相手から来る時に対応できない性格なのだ。

故に、兄の手から逃れて体ごと逸らしつつ、誤魔化すように猪口を兄の方へつきだす。トクトクトク、という音と共に手元にかかる重みが増える。止まったところで自分の方に持ってきて一気におおき、再びつきだす。それを数回繰り返せば、極短時間で一気にアルコールを

摂取した形になるわけだ。いくら強いといえども、そんなことをすれば多少は酔いも回る。それに任せて再び一輝の方を向くと……

「……何、それ?」

そこには、目の前に文字を浮かべる一輝の姿があった。

何だそれは、と注視してそれが少し間違っていたと理解した。一輝の手は何かをつかんでいる様子であり、文章の上の方には「ギフトゲーム名」という文字が見える。それ以外の文字は「文字がある」ということしか認識できないが、それはつまり。

「……ギアスロール契約書類?」

「ま、そういうことだ。内容、読めるか?」

「ぜんっぜん読めない。何それ?」

兄の手にあるそれを奪い取ろうと手を伸ばし、握る。しかしその手は何かの感触をとらえることもなく、空を切る。

「……何それ?」

「あー、お前でもそれってことはかなり徹底してるのか、はたまた資格者が「鬼道」じゃなくて「鬼道一輝」なのか……ま、気にしなくていいと思うぞ」

と、一輝にはつかめているそれを巻き、ギフトカードへ収納する。

「気にしなくてもいい、って……一応私も、鬼道なんだけどなー?」

「どっちが原因で俺に与えられたホストマスター主催者権限か分からない上にまだ不安定なんだよ。だからひとまず、まだ放置」

と、誤魔化す意味も含めて酒を注ぐ。明らかにはぐらかされているが、どうあれ主催者権限を保有しているのは一輝だ。であれば、その内容をどうするかも主催者の自由。口を挟めない立場ゆえ、諦めて酒を受け取る。猪口へ口をつけ、

「それにこのゲーム、クリアされた時点で人類滅亡が確定するし、誰も挑戦しないだろ」

「ブホッ!」

しっかりと、その酒を吹きだした。

一族の物語 — 交わした約束 — 終末は少年少女へ
問う

本来のギフトゲームとは前提の異なる、外道の主権者権限。これが彼の主権者権限に対する正当な評価であるのは間違いないのだが、だからと言って根本から外れているわけでもない。

ホストマスター主権者権限。それは神々の権能すら超える、最強の強制執行権である。大元は人類に対する試練と化した魔王を、神霊の力で封印する手段として作られた執行権であり、その神霊が保有する、神々が成した試練を再現することで対象へ上位の法則性を強要する権限である。

例えば、インドラのヴリトラ退治。獲得した勝利、成した事実からゲームを製作することで、敵対者へ弱点を剥き出しにすることを強制する法則を強制する^{ゲーム}。

では、鬼道一輝が開催したゲーム『一族の物語』はどうかと言え。その真実は大きくことなる。そもそも齢16、7程度のガキがそれだけの功績を保有しているはずもなく。唯一保有しているアジィダカーハ討伐の功績も彼と言うバグによって引き起こされた異常事態だ。ゲームを製作することは叶わない。

もう少し、彼の主権者権限について掘り下げよう。あくまでも彼が保有する主権者権限は『鬼道一輝の主権者権限』ではなく、『鬼道の主権者権限』。ではその功績はあくまでも『鬼道』のものであり、『鬼道一輝』が成したものではないのではないかと。そう考えたのなら、確かに鬼道はそれを成しうるのかもしれない功績をいくつか保有している。

そう、それは歴代の当主が成しえた功績。三代目によって是害坊が、五代目によって蚩尤が、十代目によって八面王が、十三代目によってパロロコンとダイダラボッチが、十五代目によって九尾の狐が。それぞれ神霊やそれに連なる存在、及び固有の名前を持つ霊獣の討伐。それは間違いなく功績である。

が、しかし。それらは間違いなく『功績』ではあるものの、『ゲーム

製作可能な法則』へは繋がらない。何せこれらの討伐はどれにも、『神話を構成できる要素が無い』のだ。なにせ彼の世界には『神話』や『逸話』に語られる存在はそれだけで出現することができ。そんな当たり前に出現する存在を殺す行為は、山か何かに現れた害獣を殺すことと大差ない。故に『神話に語られる神々、魔物、英雄』であれば箱庭の世界に現れた場合にも主催者権限を保有することが出来るだろうが、『現代を生きる人間』にそれは不可能だ。故に一輝の中に封印される蚩尤や湖札の中に封印される天逆毎といった神霊だけは、主催者権限を持ち込んでおり、二人はそれを借用していた。

さてさて、こうして鬼道的主催者権限はさらに謎を深めていく。一体いかなる手段で鬼道は主催者権限を獲得できるだけの功績を、相手に強制できるだけの法則を獲得しているのか。少なくとも箱庭から同名の存在を観測できる異形は関係なく、鬼道の一族は未だにその功績を獲得していない。

即ちそれは。彼らが成し得た功績ゆえに獲得した霊格ではなく。これから成しえるはずだと期待された功績ゆえに獲得した霊格である。

箱庭から観測不能な世界で、これから先になしえるはずだと期待され、先駆的に得られた功績。この上なく不安定で不明確なギフトゲーム。揺れ動く主催者権限の謎は……さて、どのように読み解いたモノか。

|||||

「つーわけで、鬼道の霊格について教えろ」

「あ、うん。いいよ?」

とまあ、そんな感じで。

一旦本拠に帰ってきて、同じく本拠に帰ってきていたヤシロを呼び出して真っ先に行われた会話がこれである。はつきり言おう、あっけなさ過ぎる。

「……聞いた側であれだが、いいのか?」

「うん、別に大丈夫だよ？どうせお兄さん何かしらの手段で戻ってくる気だろうし、だったら上手く行きそうな手段に加担するのは従者として正解じゃない？」

なるほど、それだけ聞けば確かにその通りだ。それにしたって彼女らしくないというか……

「それに、ちよつとアドバイスすればお兄さんに勝てる方向には持つていけそうだし、どうなるか見ていけば面白そうだし♪」

訂正、思いつきりヤシロだった。

「それで、リクエストは『鬼道の霊格について』でいいんだよね？」

「ああ、それでいい。……ってか、それ以外にあるかよ」

「うん、まあ『鬼道の霊格』と『鬼道一輝』の霊格とじゃちよつと意味合いが違ってくるから、どっちがいいのかなー、って」

ギフトゲームが鬼道の霊格で開催されてるし、鬼道でいいとは思うんだけど、と続ける。

「あ、鬼道のギフトゲームで合ってるんだよね？」

「ああ、それであってる」

「それにしても、それ以外の主催者権限も保有してるみたいない方ね」

「うん、だって持つてるし。今お兄さんが保有してる主催者権限は『蚩尤』、『鬼道』、『アジィダカーハ』、『ジャック・ザ・リッパー』、『鬼道一輝』の5つのはずだよ？」

分かりやすい絶句。一輝のギフト、その構造上複数の主催者権限を保有していることは明らかだったため、今回驚きを生んだのはそこではない。

「あいつ個人として、二つ持つてるってことか？」

「うん、そう言うこと。もしかすると『鬼道一輝』の主催者権限はまだ完成してないかもだけど、そう時間はかからないと思うよ」

そんな言葉を告げ、更に続けるように一言。しかしそれは彼らをさらに追い込むものではなく。

「まあ、安心していいんじゃないかな？少なくともお兄さんがその主催者権限を使うことはないし」

「……何故、そう断言できる？アイツの主権者権限はその構造上、単身でダブルゲーム、トリプルゲームを開催できる代物だ。本気で相手すると宣言している以上、それらを使ってくることだって」

「いやー、ナイナイ」

「ご冗談を、と言わんばかりの軽いノリで返す。まるでそれが彼女の予想ではなく、決定された未来であるかのように。」

「だってダブルゲームトリプルゲームって、あれでしょ？つい先日のアジィダカーハ相手に使ったみたいなやつ。他のゲームのルール、時代背景まで取り込んで敵に対してより一層の制限を加えるやつ。そもそもまるで違うゲームでそれを行おうと思ったら詩人の力が必須で、お兄さんはそれを所持していない」

「これが一つ目の理由、と人差し指を立てる。なるほど確かに、彼女の言うとおりだ。実際アジィダカーハに挑む際にも詩人イソツプの手を借りている。」

「彼らの力を借りて主権者権限を書き換える以外の手段では、謎解きも何もない、極々単純なゲームしか開催できはしない。」

「そして何よりの理由が、この二つ目。お兄さんは単純に、それだけの複雑さを持ち、気軽に発動できる主権者権限を一つしか持っていない」

「そう言うのと再び手を握って、人差し指だけを立て直す。」

「まず、『鬼道』の主権者権限。これは極々単純な主権者権限で、『期待され、渴望され、祝福された、未来に世界を救う英雄』としての霊格を下に構成される主権者権限。強いて異常な点を上げるなら『過去に成した異形』からでも『過去に受けた敗北』からのゲーム構成じゃないことだけ……そんな主権者権限、いくらでもあるしね」

「そもそも、この箱庭と言う世界にとって未来という概念は大した意味を持たない。それこそかの大魔王アジィダカーハの主権者権限だって、未だ成されていない偉業をもとにしたモノだ。まああれにルールとかなかったけど。」

「次に、『蚩尤』の主権者権限。こつちに関してはお兄さんが普段から便利アイテム扱いして好き勝手書いてたルールじゃなくて本来の

ルールで用いればちやんと複雑で法則ルールを強制するものなんだけど、今はウイル・オ・ウイスプの本拠を守る手段として使ってる。と言うわけ、使えません」

蚩尤。中国神話において語られる鍛冶神。黄帝から王座を奪うという野望の下、兄弟と無数の魑魅魍魎を味方につけ、彼を追い詰めるに至った悪神。その霊格の在り方故に伝承を下地として主権者権限を発動するのなら敗者のそれになるしかないが、それでも彼が成し遂げた偉業は中国史の進化において無視できるものではなく。それ故に、それなり以上に強力で苦しいルールを強制されることは間違いない。

これで2つ、と中指も立てる。なるほど確かに、その主権者権限は解除されない限りそもそも使うことができない。

「三つめは、『アジⅡダカーハ』の主権者権限。これはまあ単純な事実としてそもそも現時点でルールが存在しない。四つめの『ジャック・ザ・リツパー』の主権者権限はもう既にクリア条件がバレてる上ジャックさんとの契約がある以上使用条件を満たせず発動できない」アジⅡダカーハ。彼の魔王の主権者権限は敵対者に対して何のルールも強制しない。そもそも主権者側の勝利条件すら存在していない。彼は人類がこのままでは避けることのできぬ滅びを、その中でも最悪の霊格を預かった存在。自らを打ち破る存在の誕生を渴望した魔王であり。そしてそれ以上に、そもそもその存在としてそのような手法を用いることなく最強を名乗れる暴虐であった。

ジャック・ザ・リツパー。イギリスの歴史に現れた、正体不明の殺人鬼。その正体は個人ではなく無数の子供たちであり、その名を冠したのは彼らを処刑した処刑人。エクスキューター聖人まで絡んだ複数回にわたる転生、そして繰り返された残虐。知らなければ解き明かすことは難しい霊格であるものの、その真実は既に解き明かされてしまっている。答えの分かった謎解きなんぞ、出すだけ無駄である。

「それで、最後の『鬼道一輝』の主権者権限だけど……使えるようになってたとしても私の主権者権限と同じで気軽に使えるものじゃないし、さすがのお兄さんも使わないはずだよ」

「あの一輝君に対してそんな希望的観測……というか、常識の部分が通用するとは思えないのだけだ」

「そう言われるとそんな気もするけど、内容が内容だからね。よっぽどマジな、ガチで殺したい相手に対してそれしか手段がなければ使うかもしれないけど、そうじゃ無ければ使う可能性はないよ。さすがに、『人類史が滅ぶ』可能性がある以上、箱庭そのものが壊れる危険がある主催者権限だもの」

そこまでいったところで、何か面白いことでも思いついたのか。そもそも話として世界を滅ぼす要因αの具現たる人類最終試験を全て滅ぼしたはずなのにこの状況と言う事実を噛み砕ききれていない三人をしり目に、ギフトカードから『ノストラダムスの大予言』と彼女が名付けた魔導書を取り出す。

「別に大して断る理由もなかったから無条件で『鬼道』の情報提供に協力するつもりだったけど、丁度いいや」

拍子をめぐり、続けて1ページ1ページめくっていく。消えることのない焰の中でもがく少女。蛾の羽を保有し飛行する人間。終末を告げるラツパ吹き。人々を滅ぼす竜。無人の豪華客船。程度の差こそあれ、終末や滅びを示す物語たちが描かれたページを繰っていき、やがて白紙のページへとたどり着く。魔導書の向きを変え、白紙のページを十六夜たちの方へ向け、

「お兄さんの同類、コラボス・エンブリオ人類封鎖試験として。鬼道一輝を連れ戻そうという、従えようというその言葉の意味を……テストさせてもらおうかな」

瞬間、〃ノーネーム〃本拠の一室が光に満たされた。

一族の物語 — 交わした約束 — 人類封鎖試験

これと言った前触れもなく、唐突に向けられた魔導書。放たれた光。常軌を逸した眩しきは彼らに対してすら視界を封鎖することを強制した。瞼を閉じ、ソレ越しに届く光が弱まって。網膜に焼き付いた光の奔流が収まった後、再び瞼を開くと……そこにあるのは「ノーネーム」の一室ではなく。

《俺がいた、外界か……?》

知っている場所ではない。そのはずなのに、どこかなじみ深さを感じる、そんな世界が広がっていた。十六夜はさらに情報を集めようと周囲を見回し、そこに飛鳥と耀がいることに気付く。

何が起きているのかはわからない。しかしこの状況を引き起こしたのがヤシロであることは間違いなく、彼女は主催者権限を保有する元魔王である。警戒するに越したことはない。そこまで思考して集まるよう声をかけ——

《………!?!》

られない。口を開き、声帯を振動させたはずなのに。そこから放たれるはずの音は、ささやき程度にすら出てはくれない。

既に術中にはまっている可能性がある。咄嗟に拳を握りこの世界を砕こうと、

『そんなに警戒しなくても大丈夫だよ』

したところで、脳内に声が響いた。耳を介さず、脳内に直接届けられた声。その違和感に顔を歪めながら、しかし拳はおろさない。横目に見れば、警戒を解いていないのは二人も同様だった。

『もう、だから大丈夫だってば。言っちゃえばこれは読書してるのと変わらない、自分が知らない世界を手繰る行為なんだよ? 知るべきことを言葉じゃなくて映像として教えてあげようって言ってるんだから、大人しくご視聴ください』

そこまで聞いて、ようやくヤシロの意図をつかんだ。先ほど言っていた、『鬼道一輝を連れ戻す』ことの意味。ここに入る直前彼女が言っていた『人類封鎖試験』なる聞き覚えの無い言葉。一輝に関わってい

るのだろうかという推測だけはたつそれらについて教えようと、即ちそう言うことだろう。

であるのならば、聞くしかない。誤魔化しようもなく自分たちは一輝を連れ戻すつもりで、彼女の言を信じればそこに付随する責任を知らない状態。挑戦者の責任として、それは知らなければならぬ。拳を解き、おろして、深呼吸を一つ。

『ようやく落ち着いてくれた。それでは改めまして、この場に関するルールをお伝えさせていただきます。』

一つ。この情景は時代としては逆廻十六夜がいた頃より、ちよつと先の未来。鬼道一輝の人類封鎖試験コラス・エンブリオがクリアされた場合に辿るifです。

一つ。お兄さんたちはあくまでも読者であり、この世界に干渉することも、干渉されることもできません。大人しく、私が起こすまでご観覧のほどを。

一つ。ここは可能性の未来ではありますが、デイストピアとアジッドカーハが倒された今。『鬼道一輝』の保有する主催者権限がクリアされた場合、確実に訪れる終末の未来です』

丁寧な口調で行われる、舞台設定の説明。今日の前に広がっている世界が何の世界なのかを、明確に示された。主催者権限を介しているわけではないので現実とは言い難いが、それでも真実であると考えていいだろう。

『私から皆様へ行う説明は以上になります。それでは皆様、しばしのご観覧を』

告げられる開幕。しかし、だからと言って目の前で何かが変わるわけでもない。自分が知ってる風景の中で、自分の知っている乗り物が動き、自分の知らない端末を弄る人間がいる。自分のような規格外があるわけでもなく、歴史に名を残すような事件が起こる気配もない。全体を俯瞰してみる自分の視点で何も見つからないのだから、本当に何も無いのだろう。

《いや、そんなはずはない》

何も無いはずがない。何せ今見せられている世界は『終末の未来』

なのだ。発生する結果は終末に間違いない。ではその起点はどこだ。一体何が原因となってその事態にたどり着く。どれだけの時間コレを見せられるのかはわからないが、無意味なものを見せられている可能性はない。どこかで何かが始まっているはずだ。ひとかけら程度の情報すら見過ごすまいと目を凝らす。とたん、上空から俯瞰する形だった視界が地上へと近づき、最終的にはそこを歩く人間と同じ高さになった。

自分からはそこを歩く人間が認識できるが、相手からは一切認識されない。触れることすらなく、自分をすり抜ける形で歩き去っていく。そんな不気味極まる情景。しかし、そこに立ったことで違和感に気付くことが出来た。

『……何だ、これは』

逆廻十六夜は、そこに歩く人間の表情に気付いた。この上なく奇妙な表情。面倒なことがあるのか顔をしかめている少年も、何か嬉しいことがあったのか浮かれた様子のサラリーマンも、子供を連れて歩く父親も。特売でもあったのか両手にパンパンになった買い物袋を抱える主婦も、クレープ片手に談笑しながら歩く女子高生の集団も、立場があるのか顔を隠して歩く女性も。それぞれ全く異なる状況、待ったル異なる表情を指定ながら、しかし全員が同じ表情を下地に張り付けている。

それは形容するなら、何かに対する恐怖だ。何か自分を害しうる存在を知っていて、それが牙をむく可能性は低いと理解しながら、それでも拭いきることのできない恐怖。

だが、それは何だ。何がそんな感情を与えている。改めて周囲を見回し、それだけの要因を与えるものが無いことを再確認する。確かに、人一人を死に至らしめるだけの要因はそこら中にある。道を走る車は容易にそれを成すだろうし、ゴミを漁っている野良猫やリードを付けられ散歩中の飼い犬も、その気になれば人間を噛み殺せる。しかし、それは可能であるという事実があるだけで、恐怖するだけのものがそこにあることにはつながらない。日常の一風景でしかないものに対して、そこまでの恐怖を抱くことはない。しかしこれだけ探して

も要因になるだけの物が無いのだ。一体何が起こって、どうなつてこの事態にたどり着いた……

混乱が混乱を生み、要因がより一層の矛盾を發揮する。普通ではない、何かが起こっている異常な世界であることだけは確信できたが、ではその異常が何なのかについて掴みきれていない。もつと広い範囲で、それこそ地球全体を見渡すようにして確認しようと上空へ意識を……向ける、その寸前。電子音と悲鳴が、十六夜の耳を叩いた。何事かと音源へ視線を向け、原因であろう少女を発見する。誰にもぶつからないのをいいことに、少女を囲むようにして形成されている人の輪をすり抜けてその傍へたどり着く。

『これは……』

悲痛極まりない悲鳴故に通リ魔にでもあつたのだろうかと考えていた十六夜だったが、そこにうづくまる少女には何の外傷もなかった。五体満足な体で、右手を額に当てながら左手首へ視線を注いでいる。何があるのかとそちらへ視線を向けると、そこには腕時計のような電子機器。しかし時計版はなく、それに該当する部分は今真っ赤に光り、耳障りな電子音を鳴らしていたが。

ここまで組み合わせれば、大まかにだが現在の状況をつかむことはできる。何かしらの作用によって手首の機械が作動し、それが少女にとって死に近いレベルの出来事だったのだ。

さて、それならばこの機械が光っていることが何を意味するのか。人垣を形成する者たちは触れてはならないものにただ視線を向けるだけだったので、なんの参考にもならない。発現することが禁忌であるような態度は、情報源となることを期待するだけ無駄だろう。彼女と楽しそうに談笑していた少女達ですら涙を流してこそいてもその態度なのだから。

であれば、注意すべきは子の少女だ。追い詰められパニックになった人間は、それ故にいくらでも情報を吐き出す。さあ、どんな言葉を紡ぐ。いかなる怨嗟を、いかなる弁明を繰り広げるのか。

「違う、違うの！私は何も悪いことは考えてない。だってこれくらい誰だって考える、ちよつとは想像することじゃない！」

目を開けば、そこに広がっているのはなじみ深い風景ではなく、最近毎日のように見ている風景。『ノーネーム』の本拠、

「気になつてるかもしれないから伝えておくと、あの後あの子は警察っぽい組織の人に拘束、回収されてそのまま死刑になる、って流れなんだけど……どうする？そこまで視る？」

「……いや、それはいい」

カットしたということは、さして重要ではないということ。そうではなくとも流れを聞くだけで嫌気がさすような内容だ。

「あれが、一輝君のギフトゲームをクリアしたら訪れる未来、と……そう言うのね？」

「まあそう言うも何も、事実だしねえ。見たただだと理解しきれないかもしれないし、はつきり言葉で教えておくね」

そう言つて、少女は何が起きていたのかを説明する。

「まず、あの捕まっちゃった女の子。彼女が何をしてあんなつたのかって話なんだけど……ぶっちゃけ、何もしていません」

「何もしてないのに、あんなに叫ぶような扱いを……死刑になるような扱いをされた？」

「うん。では何ゆえに死刑という結果にたどり着いたのかと言えば……『想像しちゃった』、つてのが原因かな」

想像した、それ故に処刑された。それはつまり、思考に対してすら制限が存在するということだ。

「あの手首についてたデバイスは、そう言う機能を持ったものなの。リアルタイムで本人の思考を読み、危険な思考を持つてしまったかどうかを判断する」

「持ったからつて即処刑、つてのは無茶苦茶だろ」

「うん、この上なく無茶苦茶だね。だから、処刑までいくのはもうワンステップ挟むよ」

もうワンステップ。たつたの、ワンステップ。それだけの差で、命を絶たれてしまう真実。

「その差は、その想像が実行をしようと言う意志のもとに成り立っているか。九割以上の確率で実行されかねない場合においてのみあの

状態になって、電流で気絶させられて、処刑されます」

この場合、反応すべきはどこのだろうか。

そこまでの精度でもって判別できるシステムが開発されている事実か。

はたまた、それでもなお実行前に処刑されてしまうシステム化。

あるいは、そんなシステムを受け入れてしまっている社会の方か。

「……それにしたって、無茶苦茶だろ」

口を挟むべき場所はいくらでもある。それ故に、十六夜は発言をためらわない。

「そもそもとして、その想像が……思考が危険であるかの判断が曖昧だ。何を持って善とし、何を持って悪とするのか。誰かに対する嫉妬だって黒く悪質なものから自らの向上心である善良なものまである。その判断ができない以上、そんなシステムが根付くはず……」

そこまで言って、まさかと言う可能性にたどり着く。そう、今のままでは決して成り立たないシステムであることは間違いない。だが、成り立たないはずという点は問題ではないのだ。なにせ未だ到達せざる極地であったとしても、そこは大した問題ではない。なにせ、そんな試練の具現こそが『試練』と名付けられる存在であり。

「まさか、そうなのか？ さつき言ってた鬼道一輝の主権者権限ってのは、保有している試練ってのは、そういうことなのか？」

「いやだなあ、そんな曖昧な言い方をされても分からないよ？」

分かっているだろうに、はぐらかすように。自分の口で言わせようと、ヤシロは促す。

そして。誘われたのなら、答えなければならぬ。口の中が渴き、言葉は空を切って……それでも、紡ぎきる。

「アイツが預かる試練ってのは……『善悪の完全な定義』、か？」

「大正解。それこそがお兄さんの保有する人類封鎖試練コラプス・エンブリオ。ゲームがクリアされ、人類がその試練を乗り越え、獲得した瞬間。人類史の崩壊が確定するクリアされてはならない試練の一つです」

|||||

人類へ与えられた試練、『善悪の定義』。

本来、箱庭世界がどのような結果をたどったとしても。試練として発生することこそあったとしても人類封鎖試練^{コラボス・エンブリオ}として確立することはあり得なかったはずの試練。

なぜなら、それを完全に定義するために必要な情報が箱庭世界には足りていなかったのだから。

そも、善悪を定義するのならば。そのために必要になる要素は三つ存在する。

一つ目は、善の定義。このような存在は善であると、ここから先であれば善であるという明確な定義。その心の在り方が正しいのだと明言できるような、そんな存在。

二つ目は、悪の定義。このような存在は悪であると、ここから下であれば悪であるという明確な定義。その心の在り方は討伐されるべきものなのだ^{と断言できるような、そんな存在。}

そして、三つ目。それは、境界の定義。人類が明確に善と悪に二分できるはずもなく、それ故に協会の存在が必要になる。ここにいるものはどっちつかずなのだ^{と、そのあいまいさを肯定する要素。}

箱庭世界には、この三つめが存在しなかった。より明確に言えば、発生することが不可能であった。

一つ目の善を定義する者は、箱庭に封印される形で存在していた。絶対悪の魔王・三頭龍アジィダカーハ。絶対的な悪となること絶対的な善を定義する存在。

二つ目の悪を定義する者は、箱庭に縛られる形で存在していた。外界における裁判の象徴・正義の女神ユースティティア。自らを善に固定することで、絶対的な悪を定義する存在。

しかし、三つ目の境界を定義する存在。これだけは箱庭には存在しておらず、それ故に人類封鎖試練が発生することもなかった。本来の歴史であれば確実に発生していなかったそれ。しかし、この歴史ではそれを定義できるだけの存在がいる。

それが、鬼道一輝と言う存在。世界にとって『自らを救う存在』と

いう善性の者であり、人類にしてみれば禁忌の果てに発生した悪逆の徒であり。そんな霊格を獲得し、それに最も適した存在。鬼道一輝の在り方は、境界として君臨するに足る存在であった。

こうして、箱庭の世界にその試練を構成する三要素が揃った。しかも揃うだけでは飽き足らず、『鬼道一輝』という個人の下へ集約された。三つの定義は、一人の人間に託される。

こうして発生したのが、より厳密に言えば発生しようとしているのが人類封鎖試練・善悪の定義。その発生は確定している存在。

では次に。何ゆえにその試練が人類を終末へと導くものなのか。それも、『クリアされたら人類が滅びる』という、ある種人類最終試練とは真逆の試練として確立しているのか。それはこの上なく馬鹿々々しい、下らない理由からだ。

もし仮に、善悪が完全に定義されたのならどうなるのか。善と悪の似分だけではなく、境界の存在も含めた『完成された定義』。その定義が間違いない以上、人を裁くのにそれを用いるのは当たり前の流れである。

なにせ、誰かの意志によって決まる定義でもなく、神などと言う不確定な絶対存在によるものでもない。完全に、完成された定義なのだから。

そうして、世界から『悪』はなくなっていく。初めはその行いから、正しくない存在を消滅させられ。最後には、思考に対してすら裁きを下して。訪れたるは完全なる管理社会。思考レベルで管理される人類に成長が訪れるはずもなく、成長無き人類史など、変化なき人類史など。

そんなもの、終わっているのと何が違うのか。

そんな結末を預かる存在を、貴方たちは自らの下へ連れ戻そうという。そんなことをすれば巻き込まれるのは確実で、そんな人類の終わりに加担しなければならぬ存在となる未来。それを受け入れ、生きていく覚悟はありますか？

そう、少女は。人類封鎖試練・終末への恐怖は。この上なく面白そ

うに笑い、挑戦者たちへと問いかけた。

一族の物語 ― 交わした約束 ― 再開

その問いかけは、容易に答えられるものではなかった。是と答えたのならば、人類の滅びへ加担すると宣言するようなものであり。

否と答えたのならば、共に死線を乗り越えてきた盟友を見捨てる断言するようなものであり。

どちらを選んだとしても、何か大きなものを失う問いかけなのだから。そうなるのも仕方ないだろう。

さて、そうなってしまうえば。あらゆる回答は正解へ昇華され、あらゆる回答は過ちへとなり果てる。

10秒。彼らは悩んだ。彼女はにこやかに待った。

20秒。彼らは思考を振り絞った。彼女はその様子を書物に記した。

30秒。彼らは背負ってしまった責任に押し潰されそうになった。彼女は欠伸を一つ漏らした。

40秒。彼らは決断を下せないと結論付けた。彼女は飽きてきて、もう見捨ててしまおうかと考えだした。

そして、50秒。

「、――」
人間らしい、エゴに満ちた発言に。

「いいよ……じゃあ、おバカな挑戦者たちに、ヒントを差し上げましょう」

終末の具現は、心の底からの称賛を示した。

称賛ゆえに伝えられたのが、答えではなくヒント。

まずは、前提条件について。

一つ目。一輝の世界は箱庭から観測できない。こうなっているのは箱庭が存在する世界を選択である。

二つ目。世界がそのような選択をしたのは、自己保存のためである。

そして、与えられるヒント。

一つ。あの世界における妖怪、魔物、霊獣、神霊といった『異形』についての情報を考えること。

二つ。善であり悪であり境界である鬼道の霊格について。その最大観測者が誰になるのか、最大観測者から見た場合何になるのかを考えること。

三つ。もしも『世界』と言う存在が意志を持っていて、『歴史』という時の流れを定義しているのなら……その流れは、一方通行なのかな？

|| || || || || || || ||

こうして、ヒントを与えられた挑戦者たちは思考を巡らせ……答えに、たどり着いた。

答えを獲得した少年たちは、それを祝福した終末によって策を授けられた。

挑戦者を得た外道はそうとは知らず、一人森の中で未来を待つ。

楽しめると期待して、クリアできるとは期待せず。さてどうやって大義名分の下「ノーネーム」に帰ろうかと考えながら。

思えばこの時点で、結末は決まっていたのかもしれない。……なんですか、だって？ そんなもの、考えるまでもないだろう？

油断しきった神様と、覚悟を定め挑む無力な少年少女。

ほら。結末なんて、考えるまでもないだろう？

さて、それでは。時を進め、ゲーム再開の日時へ向かうとしようか。

|| || || || || || || ||

「……へえ」

ゲームを再開したゲームマスターは、その陣形にふと声を漏らす。

その形は自らにゲームで挑むのなら絶対取るものがない形であり、しかし自分なら必ずこの形をとるであろう作戦。己がゲーム、及びそこに記された謎を解き明かしたのか、誰かから聞いたのか、ただこちらのテンポを崩すためのなりふり構わない作戦か。

《いや、どれでもないな》

はつきりそう切り捨てる。彼らに自らのゲームを解き明かせる知は無く、解答を知っている四人の人物に関して、内三人については答えを語ることを禁止した。禁止していない一人についても答えを語ることはないだろうが、

《ヤシロなら、何らかの条件をクリアすることでヒントを出すだろうな。こうして新たに現れた滅びの結末、それを俺がどう乗り越えるかを楽しむために》

それならばそれでも十分だ。刀にかけていた手を降ろして、相手側のリーダーにあたるであろう人物へ問う。

「さて、まずは答え合わせと行こうか十六夜。お前たちが出した答え。その結論から言ってみろ」

「最終解、『鬼道』Ⅱ『英雄』だ」

ただその答えを語られただけで、一輝の霊格に変化が起こる。その変化から答えの正しさを確信し、続きを語る。

「しかし、アキレウス、ラーマ、日本武尊とは異なり誰もが認める英雄ではない。真実を知らないものはその存在を悪であると断じ……そのためにこんな契約書類になった」

取り出したのは白黒のそれ。どっちつかずを体現するかのような書類の指す内容は、見たままのこと。

「まず、真実を覆い隠す虚像。悪と捉えられた鬼道について。これは以下の理由によるものだ。

一つ。悪である妖怪との対等な契約。

二つ。同胞を永遠にとらえ続け、利用し続ける異能。

三つ。時折現れるあらゆる常識の外側にある能力。

四つ。檻を持つ血族全員に存在する精神性の異常。

そんなおかしさをとらえる母数の多さから悪としての鬼道が成立

したが、実際にはこれだけの存在だ。悪としてとらえ、語り、存在するにはあまりにも弱い」

そう、言ってしまうえばそれだけのことなのだ。個人が悪の霊格になるには十分だが、一族単位で染めるには小さい、ただの勘違い。彼らが外道を名乗り、鬼の名を冠したために悪の霊格が成立してしまった、地盤はあまりにも緩い。これを維持するためだけに分かりやすい悪を成す当主が現れたのではないかと思えるほどに。

「では、正しい霊格である善の霊格。知れば誰もが納得するこの功績は何であるのか。それを語るため、まずは今いる世界。箱庭から観測できる世界がどのように成立しているのか、どのような歴史をたどったのかを推測の下語らせてもらう」

これは決して、英雄を恥ずかしめる行為ではない。その存在を真に正しく評価する、称える行いだ。だからこそ、語り始めた存在へ主催者は手を出すことができない。

「この世界には確かに、i fの世界が存在します。織田信長は死んだのか否か。源義経はチンギスハンになったのか。後者の答えは不明であっても、前者の答えは様々なものが箱庭から観測されている」

箱庭に複数回召喚され、その全てで魔王となった異例の存在。外界の人間が生きる世界から何度も呼ばれた以上、たしかにそのi fが存在している。

「しかし、このi fは大きな変化を許してはいけません。大きすぎる力を持ったのなら対抗馬へギフトを与えて必ず勝利させ、それでも生き残ってしまった織田信長は必ず箱庭に召喚される。箱庭から関与しなくてもその存在を処理する。そうまでして世界を、歴史を維持しようとする世界が……箱庭の外に妖怪も神も人間も共存する世界なんて許すはずがありません」

単純すぎる答え。箱庭であればいざ知らず、神話民話の中なら語られましょう。しかし、ただの外界でここまでのi fが許されるはずもない。これが、世界のありえない点の一つ。箱庭から観測されない理由とはならないが、箱庭から観測されていない証拠にはなる。

「そしてもう一つ、この世界の異常な点。それは妖怪の成り立ち、神の

歴史……一輝君の言葉を借りれば異形の存在です」

その言葉に続けて語ったのは、なんてことのない妖怪の数々であった。彼らが語られることには、必ず意味がある。その意味を含めて、自分で調べ、晴明に確認した内容を。湖札のギフトによって語られ、射抜かれるその形を。

例えば、板鬼。大きな板に手足がはえ、刀を持たぬ武士を押し潰す妖怪。刀を佩刀していなければならぬという、戒め。

例えば、火取り魔。夜道、いかに明かりを持つとも一寸先に闇はあり、夜の眷属に満たされるという注意喚起。

「これらはすべて、人が人の都合で語った妖怪です。他の妖怪にもその成り立ちに様々な人の都合があり、湖札さんのギフトはこれを撃ち抜くことでその存在を打倒する」

つまり、それが異形の核であるのだ。どれだけ無傷であっても、存在するための核を破戒されたのなら霊格は自然と崩壊する。しかしそれは、ただ考えるだけならば当然のこと。何せ、事実そうして語られ作られた壮大な空想こそが都市伝説を、妖怪を、魔物を、霊獣を、神を生み出したのだから。

しかし、今語っている世界は『普通』ではない。

「元々存在しており、当然のように生物としてそこにいるにもかかわらず」

犬、という生き物のことはご存じだろう。ではこの生き物の存在に人の都合はあるだろうか？ 現実に存在しない、認識できないものであればでっち上げられるのだろうか、確かにそこにいるのだ。その存在に対して嘘偽りを与えたとしても、根本には配置されない。

そんなありえないことが、その世界では起こっていたのである。それを言霊によって撃ち抜かれるだけで消滅してしまうほどの、根幹に位置している。

「生きているものの存在に対してありえないことが起こっている。そうである以上、この世界が誕生から今、そして未来に至るまで一方通行の流れをたどってきたことはありえない。何か別の歴史で発生した神や悪魔、魔物、妖怪を持って来たとしたか考えられない歪な世界。

それが一輝君の生きた世界です」

根幹を成す存在がそもそもありえない世界。ならばこの世界は虚構であるのか。……それは、否である。そうであったのなら、彼はここまでの霊格を獲得していない。万に一つその可能性が真実だった場合には、語られるさ中、虚構に満ちる一輝の霊格は搾りかすになっ
ているはずだ。

「異形の成り立ち、伝承の形は私たちの世界のものと変わらない。つまり、『同じ流れ』をどこかで、最低でも妖怪の伝承が語られたところまではたどった世界が、間違いなく存在したんだ」

二つの世界で同じ流れが一度は存在していた。それが表すことは、一つ。

「つまり、この二つの世界には構造上の大きな違いは存在しなかった。大元は、同じだったはず」

元は同じ、一つの世界だったんだ。

故に、分かれた後も一度は同じ流れをたどった。では一体いつ分かれたのか。何故分かれたのか。その解は、鬼道の与えられた霊格の大きさと、彼らの敵が示している。

「分かれたのは、世界が誕生したその時に。誕生と同時に、世界はあるモノに蝕まれていた。それが原因で自分を半分切り捨てて……切除して、完全に遮断したんだ」

だからこそ、鬼道は世界を救うという功績分の霊格を与えられた。それを引き継いだ一輝はそれだけの霊格を保有している。箱庭を救うのと同じだけの存在質量を救う霊格を、リソースを獲得した。

「分かれた原因は、生物でいう病気にかかっていたこと。治すことはできず、だんだんと蝕んでくるそれを、切除して捨て去った」

しかし、捨てられた側は意志を獲得した。自らの死を認められなかった。それ故に一度は全く同じ歴史をたどり、滅ぶことが確定したが故に滅ぶ前にリソースを回収した。

「そこから行ったのは、スケールの大きい対照実験だ。一度目の歴史で発生した様々な人間の空想、妄想。それが構成する世界を作って、より長く続くものだけを残り、データを蓄積した。だから妖怪が生物

として存在する世界を作っても、妖怪を構成するのは人間の都合、人間の妄想だった。その上で人間が主体の世界になったのは……偶然、かな」

そう、その点に関してはただの偶然でしかない。世界にしてみれば、自分が生き残れるのなら主体となる生物は人間でも猿でも犬でも猫でも、極論アメーバでもよかった。事実、それらを主体とした世界も何度も構成し、何度も滅び、何度も回収している。

「そうして崩壊と回収、新規実験を繰り返していたところに、ある人物が捨てられてきた。箱庭から魔王の力で投げ出され、あまりのリソースの異質さに外界をクツションとすることもできなかつた……元ノーネーム、最強の一人。高橋示道」

ゲームによって魔王を下し、人間ではありえない数の魔王を隷属させた存在。その従者は一人を除きすべて箱庭に囚われたが、それでもその功績は受け入れられる器が存在せず、病身の世界と同様に捨てられ、陰陽師と言う存在が最も適合するそのサンプルへとたどり着いた。

そこからは単純である。彼はぬらりひよんと契約し、新たな異能を得た。外の世界の能力、その中でも高水準のもの。配偶者である魔女ジャンヌダルクの血。これらはその力を十分に以上に次世代へ繋ぎ、時に永らえ、時に数秒で代替わりし、一輝の代へとたどり着く。

「これまでは滅ぼされるだけだった。何を準備しても何を混ぜ合わせても勝てなかつたところに、重なり続けたイレギュラーは勝利した。そこで世界がすべてのリソースをそのサンプルケースに集中させたから、それだけの霊格になった。世界も賭けに出て大きすぎる祝福^{おせっかい}を与えた」

それが全ての答えだ。与えられた結果の形だ。故に一輝は、絶対に答えにたどり着かないと思っていたために、心からの拍手を送る。

「じゃあ、最後の問だ」

そして、最終解を求める。

「俺の一族の霊格。それをお前は何と呼ぶ？」

お前なら何と呼ぶのか。この問いを、逆廻十六夜は真っ向から受け

る。

「世界に根付いた病巣に対して突然変異的に現れた、一つの抗体。不治の病に対して唯一効果を持つ正体不明。病巣を除去しうる謎の存在だ」

「大・正・解！」

鬼道の開祖は歪みをガン細胞にたとえ、自分たちをそれに対する唯一の抗体であると説明した。十六夜がそれとまったく同じ結論を出したことで、二つの変化が終了する。

一つ目は、契約書類。これまでは白と黒の正方形が交互に並んで形作られていたのだが、この宣言と共に黒は細く縁取るだけのものとなり、その内は輝きに満たされたものへと変化する。明確な善であると証明された以上、どっちつかずの契約書類はそれに合わせた形へと変化化する。

二つ目は、これまでも段々と上昇していた霊格が爆発的に上昇する。これもまた、当然のこと。

ジャック・オー・ランタンが保有していた謎の殺人鬼の主権者権限。こちらであれば、知られざる真実を解き明かすことは霊格の喪失へとつながる。当然だ、『知られていない』ことこそが恐怖霊格を与えているのだから。

しかし、鬼道のそれはそうではない。彼の一族は秘匿された英雄だ。秘匿されていた真実が語られたのなら……人々は、世界と同様の信仰を与えるのだから。当然すぎる帰結。

——今ここに、完成した。

魔王／英雄が完成した。

神霊が完成した。

人間が完成した。

鬼道が完成した。

外道が完成した。

そして何より……鬼道一輝が、完成した。

「答え合わせは終了した。お前たち三人はアジールダカーハとは異なる形で、ヤツと同じ立場に至った！歓迎しよう、我が挑戦者たちよ！」
ゲームの第一段階。ゲームクリア条件へ挑戦する権利を、三人は答えを語ったことで獲得する。

その存在が自らを脅かすに十分な存在であるという条件を満たしたアジールダカーハとは異なる形だが、この三人はその位へと足をかけたのだ。祝福もしよう。喜びもしよう。その程度の人間性を彼は模倣しており、試練を与えるものとしての感動を彼は獲得した。

「さあ、さあ、さあ！まずは誰が俺の相手をする！我が世界の真実を、我が一族の責務を解き明かしそれでもなお打ち滅ぼさんとする勇敢にして無謀にして愚物なる挑戦者達、その先駆けは！」

「ああ、見ればわかるでしょう？それとも、テンションの上がり過ぎで視野が狭くなってしまったのかしら？」

と、そう言つて。元から三人の中でも一歩前にいた彼女は、さらに一歩踏み出す。

ギフトカードを掲げ、胸を張つてそこに立つのは赤き乙女。己が従軍を従え、時に攻めよと、時に守れと、時に引けと、そして時に死ねと奴隷へ指示を出す、裏方にあるべき存在。何を間違つてもこの英雄に直接挑むべきではない、圧倒的な弱者。

「まずは私、久遠飛鳥が。鬼道の英雄にして外道の神霊たるあなたのお相手を務めます」

「たった一人で？この俺を相手に、戦闘能力皆無のお前が？」

「ああ、愚問ね。今の貴方相手なら私一人でも十分対応できます。むしろそれ以外の選択肢はないでしょう？」

完全にこのゲームを理解している。ヤシロのことだから答えにたどり着けないヒントを与えるかそもそも偽りの回答を与えたと思つていたが、彼女を満足させ正しい助言を得たのだろう。そう確信した彼は、刀を抜く。

「百鬼夜行・絶望」

唱えられたのは、一つの言霊。檻の内部に存在するものの中でも霊獣に匹敵するかそれを超えるものだけを呼び出すキーワード。有象

無象を用いるのではなく、少数精鋭による押し潰し。眼前にいる挑戦者を真に認め、打てる最大の手でもって対処する。

「アジールダカーハ、蚩尤。お前たち二人は十六夜の相手をしろ。残り全員耀の相手だ」

言葉と同時に、呼び出された従者^{異形}は指示された標的を狙う。狙われた側も同時に飛び出してそれぞれの方向に向かい、この場を離れる。男は黒のコートを身に纏い、女はメダリオンに手をかけて。不意打ちにはならず、戦闘が始まるのは間違いない。

「これで邪魔は入らない。……始めようか、久遠飛鳥」

刀をおさめ、陰陽師としての正装を纏った外道は言う。黒に染まったその装束は、彼の在り方の一側面を正しく表現していた。

「当然だが、こうなった以上主催者として一切の手加減は無しだ。……簡単に死ぬなよ？」

「ええ、死ぬものですか。私は私の役割を果たして、このゲームをクリアするのですから」

そう言って両者は、周囲に幾枚もの札を展開する。

「式神展開、急急如律令」

「兵よ、我が下で戦いなさいー!」

異なる言霊は、仮初の命を展開する。

死ぬためだけに、仮初は現実へと表^{ひょうじゆつ}出した。

ここに、殺し合いが始まる。

一族の物語 ― 交わした約束 ― ②

そこに現れた式神の形は、まるで異なるものであった。

当然だろう。一輝の使役する式神は彼の一族によって生み出されたもの。その血筋にとつて最も操りやすい形になるよう、調整されている。

それに対し、久遠飛鳥が従える式神は安倍清明から譲られたもの。陰陽の神によつて彼女が使いやすいよう調整されているとはいえ、ベースにあるのは彼の技術。

異なる形を示すのは、道理であった。

にもかかわらず、戦場における式神の動きはとても似通っている。一輝は経験から、飛鳥は指導によつて。それぞれ「率いるもの」としての最適な行動をとっているのだから。

さて、この戦場。それは結果として、いかなる形を取るのやら。それは是非とも、君たち自身の目で確認してほしい。

|||||

《ギリギリにも、ほどがある……！》

はたから見れば、その戦況は互角であるように見えた。しかし実際には、この上なく残酷な状況である。

一つ目に、式神を操る能力そのもの。これには経験の差が存在していたのだが、飛鳥はそれを己のギフトによるブーストで補助している形だ。力技でしかない。

二つ目に、総戦力の差。飛鳥は限られた時間、限られた費用の中で準備するしかなかったのに対して、一輝は箱庭に来る前から保有していたものに加え箱庭に来てからも作成していただけでなく、それが尽きれば檻の中の妖怪を召喚出来る。救いは霊獣クラスは既にほぼ放出しており、自身にはアルマとデインがいることだろうか。

そして最後に、指示する者自身の強さ。久遠飛鳥本人はさして強くないため隙を見せられず常に守りを固める必要があるのに対して、彼

は何かが襲ってきてても自分で対処できる。

《それでも、私がやるしかない》

「第一部隊、突撃！」

笛を振るい、一定数の式神へと突撃命令を下す。死兵前提の命令であるためすぐさま同数の式神を展開しつつ、自分の役割を再確認する。

『まず最初、お兄さんは鬼道の当主として……もつと言えば、ぬらりひよんの力を体現する者として戦ってくる。百鬼夜行を、己の部下を従え指示する存在としてね』

なぜなら、それが鬼道という一族の力の本質にあたる部分であるため。契約し、その力を得て、アレンジされたとはいえ本質はぬらりひよんのものなのだ。そんな鬼道の一族の正体を語られた以上、彼らの在り方はのように固定される。これが、このゲームに仕組みられたギミック。正体不明だったそれが明かされた以上、これ以上の秘匿は不可能であり。主催者はその霊格に従って動かざるを得ない。

『この三人でお兄さんに挑戦する以上、こうやって相手の力に制限をかけるのが最適解。アジィダカーハのようにその力を認められたとしてもゲームへの挑戦権は得られるけど、それは己を滅ぼしうる脅威への緊急措置だから、『一輝』としての全力で戦えてしまう。そっちへの勝ち目は……高く見積もっても0パーセントかな！』

笑顔ではつきりそう言われてしまえば、腹が立ったとしても言い返せるものではなく。不利な戦いであると知ってなお、その挑戦を続けなければならぬ。

『今警戒しなければならぬのは三つ。一つ、いつ式神の群れに木っ端妖怪が混ざるのか。二つ、一輝くん本人への攻撃を行わない。そして三つ、いつ彼が呪術を使用してくるのか』

それらへと完璧な対処をすれば、強制的に上げられる出力の差によって力技ではあるもののどうにか押し切ることが出来る。それらへの対処を間違えれば、自分は一瞬で消滅しかねない。ギリギリの綱渡り。

「式神混成・狼刀、急急如律令」

「押し潰しなさい、デイン！」

そして、三つめが使用された。言葉には力が宿る、故にその術名は術の在り方を体現しているはず。狼の刀。武装か特殊な式神か。こちらから干渉しない限りゲームルールによって彼本人は攻撃できないので、後者で間違いない。式神の域を出ていないのであれば、デインに敗北はない。しつこく食らいつかんと迫る刃は、拳によって叩き潰された。

攻め手を繰り出してくると同時にそれを叩きつぶし、さらにデインの巨体によって敵の行動も遮られた。この瞬間が、またとない好機！

「アルマー！」

すかさず、乗騎へと命令を下す。聡明な彼女はその意図を正しく読み取り、地面に降りて主を降ろす。手について、ギフトを行使。土地へ疑似神格を付与することによって、神殿構築を行う。急げ、だが急ぎ過ぎて土地の霊格を焼き尽くすな。

「構築、できた……！式神よ！」

自らの領域を作成し、それに合わせて式神を追加展開する。戦うための準備を整える。樹々や土地もさらに掌握、これで……！

「ふうん、器用なもんだ。神霊がルーツにあるとはいえ、ここまで見事にやるもんか」

攻め手に移れる。そう考えたところで、飛鳥とアルマの背後から一輝の声が聞こえてくる。飛鳥が振り返ると同時に、アルマが一輝と飛鳥の間に入りこむ。

「……そう言えば」

平然と式神を展開し配下を従える一輝に対し、アルマが告げる。

「今の貴方の在り方は、百鬼夜行の主たるぬらりひよんの物。他人の領域に入りこむのはお手の物と言うわけですか」

「ま、そう言うこつたな。むしろルーツ的にはこつちが本質と言っても過言じゃないし」

言いつつ、手に握る神刀・獅子王を逆手に握り地面へと突き立て、「神殿にあるべきは、純粹な神霊だろうか？」

構築された神域を奪い取りにかかる！

「アルマ、追い出して！」

それをされてはたまったものではない。準備が整っていない段階だが、それでも一輝への直接攻撃を指示する。躊躇うことなく式神を盾にするが……まあ当然、突き破られる。引き抜いた獅子王を追加で盾とし、自らも後ろへ飛んで回避する。

「はー、やっぱり僕のレベルしもへがアルマやデーンと比べると低すぎるなあ」

呟きつつ、率いる者として檻から妖怪を召喚していく。神殿を奪えなかった以上式神も妖怪も大して役には立たないが、それでも率いる者として召喚をしなければならぬのだ。

「あら、そうと分かった上であの配下たちを送りこんだのではなくて？」

「いやはや全くもってその通り。そうと分かった上で、あれくらいの数差し向けないといけない辛さが分かるか？」

「知ったことではないわ。そんなゲームを開催したのは貴方でしょう？」

「このゲーム、別に俺がルール設定したわけじゃないんだけどなあ」

|| || || || || || || || || ||

駆ける。 駆ける。 駆ける。

森の中を駆け、背後や横を走るそれらの影に追いつかれまいと全力を尽くす。相手は数も質も高い。一対一であれば確実に勝てるとしても、数が集まればそれは力になる。だから、今の選択肢は……

「そっ……っ……ッ！」

マルコシアスの恩恵。それをフルに活用して、迫ってきた敵を蹴り飛ばす。当たってから、それが是害坊であることに気付いた。絶好の機会、空を飛べる相手はここで潰す！

「これで、終わり……！」

鷲獅子の恩恵。その勢いを乗せ、蹴り飛ばした是害坊の腹部へ再び

の痛撃。次の狙いは、

「首、取った！」

体勢を立て直す前に、トドメの一撃。首へ足をかけ力づくでへし折った。そして、

「次……！」

差し向けられた霊獣は七体。是害坊は今倒したので、残りは白澤、ユラン、九尾、パロロコン、ダイダラボッチ、八面王。空を飛べるのはパロロコンとユランの竜種二体。そこを抑えれば、有利はこちらのものになる！

「すぐに、片付ける……！」

首元の生命の目録へ手をかける。特殊勝利条件、その内容ゆえに一人が役割を果たしたところで意味は無い。それでも、同士が問題なく勝ち残ると信じて……！

|| || || || || || || || || ||

持ち前の身体能力を使い、逃げながら攻撃を避ける。白い竜の拳をいなし、三面六臂から放たれる武器の数々は刃の有無を確認して対処する。

《やっぱりそうか……脅威としては、蚩尤が圧倒的に上だ》

そんなことを何度か繰り返し、十六夜はそう判断した。

後衛を担当している、中華の軍神・蚩尤。十六夜が樹木に囲まれた場所を逃げ続けているためだろう、彼は現在人間体で追ってきている。十代前半程度の身体でありながらそこに宿る力は生命の埒外に存在し、保有する権能によって『武器』と分類されるもの全てを作り出し用いることができる。銃をはじめとする「刃物」の概念が存在しない武器を権能で作られれば、それは彼にとっても十二分な脅威となる。

それに対して、前衛を担当。三頭龍の姿で追ってくる彼はどうかかと言えは……はつきり言って、大きく劣る。だからと言って弱いというわけではないが、今の彼は十六夜一人でも倒し切れる可能性が存

在するレベル。何故そんなことになつてるかと言えば、

「なあオイ絶対悪の魔王サマ！随分と戦いづらそうじゃねえか！」

『魔王ではない。元魔王、現ノーネームの執事だ』

「……いや、オマエそんなキャラだったか？」

すっかり一輝に毒されたというか、なんと言うか。だがそれはそれとして、

「疑似創星図が使えない、つてのは随分と不便なもんだな！」

『否定はすまい。あれが私の魔王としての脅威を高めていたのは事実だ』

今回は特殊ルールによって、「参加者を対象とする疑似創星図の使用」が禁止されている。それ故になのか一輝の檻の中に残しているのかは定かではないが、なんにせよ彼は疑似創星図を使うことが出来ない。

さて、そうであるのなら。この神霊二人は、

《想定通り、俺の手で十二分に倒し切れる》

焦るな。この神霊二人には確実に勝てる。

急げ。自分の役割はまだ先だが、それでも早く倒し切らなければならぬ理由がある。

この二人を倒す手段は決まっている。であれば後は、それを用いることのできる状況までどのようにして追い込むか。今の彼は、そのための手段を無数に保有している。

高い思考能力を用いて、対策を組み立てる。神霊二柱の撃破などと言う普通であれば不可能でしかないミッションに対し、彼はこの上なく冷静だった。

|||||

「まあ、とはいえ、だ。もう手が無いとは、一言も言っていないぞ？」

などと告げ。飛鳥の式神に倒される妖怪たちに見向きもせず、己が内へ意識を向けた。

「天秤を此処に成せ」

『ッ、マズい!!』

いつ攻め込むかと考えていたアルマは、その言霊で全てを察した。そう、彼の内に封じられた埒外は、まだ存在する!

「汝、善悪の天秤を成す者。汝、天秤を釣り合わせる者。汝、何一つ望まぬ機械」

狙いがバレたことにはもう気付いている。それでもなお、言霊を途切れさせることはない。不意を突くことが目的ではなく、対抗策を準備することが目的なのだから。

「さあ、降臨せよ。傀儡・ユースティティア!」

瞬間。一輝の体から金色の光が漏れだし、それが一点に集まりだす。その総量は、蚩尤やアジィダカーハと変わらない……ユースティティアの名に恥じない、神霊のもの。

光が集う。形を作る。情欲を誘う肉体を白の衣で包み、目隠しと剣を身に着けた、一柱の女神。返却したが故にその手から天秤は失われているが——その能力値は、この場において翳むことのない水準に存在する。

「さてさて。自我は封じてるとはいえ、コイツは本物の神霊……それも、本来箱庭ではありえない制限なしの神霊だ。そっちの戦力には、釣り合うんじゃないか?」

指から伸びる呪力の糸を繋ぎ、うつすらと笑みを浮かべながらそう告げる。その様を見て、なるほど確かに今の彼は神霊なのだど飛鳥は理解した。

《彼やその先祖たちが殺めてきた異形。その魂を捕え、永遠に使役する術……となれば当然、こうもなるわよね》

アルマの背後に隠れ、樹々や式神を並べつつ、心の中でこぼす悔しさ。いつから自分はこうなったのだろうかという、負の感情。否、その矛先は自分だけに向いたものではなく、コミュニティ全体へ向いたものだ。

もしかすると。長く彼といて、そのギフトの使用を見ていく内に誤解していたのかもしれない。

妖怪たちは皆、その指示の下戦っていた。そこに不満は、感じられ

なかった。

霊獣たちは中にはぶつくさと文句を言うものも、気だるげにする者もいたが。それでも、自ら彼に従っていた。

神霊たる蚩尤も、彼を従うに足る存在であると認め、その力を貸し与えた。

封印の結果を見ていく内に、誤解していたのかもしれない。

アジィダカーハ。最悪の魔王もまた、彼と殺し合い、その果てに互いを認め、討ち取られた。第二の生だとばかりに本拠で仕事を楽しんでいる様には、心の中でどこか喜びを感じていた。

そして何より、ジャック。南瓜頭ジャック・オー・ランタンの道化師であり、正体不明の殺人鬼ジャック・ザ・リッパーでもある、彼。自らの霊格を、功績を、贖罪を。その全てを捨て去って戦った彼は、一輝の檻へ自ら封じられた。本来失われるはずだった存在は……しかし、魂のみの存在となつて、同士たちと再会した。永遠の再会とはいかなかったが……それでも、救いをもたらしてくれた。

そんな術ばかり見ていたから。どこか正しいギフトなのだ、誤解してしまつたのではないか。

《だって、これは……》

眼前の女神、その表情を見る。苦しそうに、悔しそうに、辛そうに歪められ、同時に恐怖を抱く、そんな顔。

耀から、話は聞いていた。主催者権限を封じ、地へ縫い付け、手足を奪う。そうして一切の抵抗をできなくされた彼女を、鬼たちに喰わせた。

生きたまま、無限に喰われ続ける。あの感情なんてないように思えた彼女が、悲鳴を上げ、身をよじり、どうかと懇願した。それだけの行いをしつつ、さらには死を選んだ彼女の魂を捕え、人形として使役する。確かに意識は残っているのに、自由を奪われ、望まぬ行いを強制される人形として。

死者への冒瀆。それも、この上なく、終わらないモノ。それを平然と行う、眼前の存在は……

《はあ……今すぐにでも、飛びだしていきそうなものだけ》

心の中で、ため息を一つ。久遠飛鳥として『何を、外道!』とでも吠えながら飛び出していくべき場面であるのに、それを考えもしない自分へ抱くべきは失望か諦めか。

《知ったことではないわ、そんなモノ》

それら全ての迷いを、捨て去った。

何せ、そう言う存在であることは知っていたのだ。大を捨てて自分の感情を取り、人を殺すことに躊躇いはなく、死者の魂を平然と冒瀆する。自らの感性にあてはめれば許されることのない外道であり。その上で、仲間として連れ戻すと。友人として向かい入れると。同士として同じ旗の下へ、と。

……一人の人間として、認めさせてみせる、と。

矛盾を承知の上で、そう決めてここにいるのだから!

「デーン!」

「DEEEEEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

焰を走らせ駆けつける、紅の鉄人形。その忠臣の肩に乗り、飛鳥は吠える。

「アルマ!」

『ええい、無茶を言う!』

自分へと放たれた主の意図を、彼女は正確にくみ取った。故に空を駆け、一輝の前に降り立つ。

「おや、なるほどそう来たか」

『ええ、貴方のお相手は私が勤めます』

「いいのかい? そんなことをすれば、神霊があつちに行くぞ?」

『あなたも神霊でしょう』

どつちにせよ神霊を相手にするしかない状態である。

『ですがまあ、同じ神霊を相手にするにしても、貴方と今のユースティアアであれば、後者の方が可能でしょう』

「あらら、バレてら」

言いつつ、指から繋がる呪力を通して命令。状況に応じてある程度の働きをする、と言う程度の人形。討伐者による強制支配は当然のこととして、一定量の命令を必要とした。それをアルマティアの相手を

しつつのコントロール……二分するのが正解の状況。飛鳥はそれを、正しく読み取っていた。

「そういうことなら、仕方ない……とつととお前を殺して、あつちも殺しに行くか！」

言葉と共に、抜刀。鞘から表へ出た獅子王は、同時にその姿を変える。主の体より噴き出される妖力を吸い、より肉厚で、重く、幅広の剣に。

一輝はアジⅡダカーハ戦の後、自らの戦い方に修正を加えた。より正確に言えば、いくらかの切り落としを行った。肉体も日本刀より両手剣の類が使いやすいように、調整を加えている。それ故の、形を変えただけの妖武装。

「んじゃ、始めようかアルマティア。確固たる伝承を持つお前が、俺に勝てるかな？」

『大きく出ましたね、新神ツ！』

瞬間、剣と角が衝突する。

ⅡⅡⅡⅡⅡⅡⅡⅡⅡ

身に着ける武器を確認する。残るのは、両手につけるガントレット。そこには、二つの宝玉。氷結と燃焼を起こす程度のそれ。十分だ、そもそも大した武器を扱えるわけではない。

状況を確認する。一輝はアルマへ剣を向け、振るいつつディーンの動きを見ている。自分の周辺では、ユースティアが式神の軍勢を相手取っている。目隠しとしては大変優秀な状態。

一輝の様子を、改めて確認する。距離があるので、ギフトを用いて。……間違いはない。

「悔しいけれど、ヤシロさんの言うとおりになったわね」

神霊としての彼は、久遠飛鳥如きを視界に入れることはない。ディーンやアルマであれば警戒されるだろうが、その主は対象外。戦力は大きく存在しないし片手間で潰せる存在である、と。

良い度胸ではないか、ではそれを利用してやる。その心構えで、状

況の観察を続ける。ここまでは何度か想定からズレてこそいたが、それでも今の状態は都合がいい。一輝から距離を取り、デイーンの肩に乗り、アルマが相手をしている。空中は飛鳥の式神、一輝の妖怪、ユーステイティア。

よし、いけるはず。少なくともアルマが囹の役割を果たしている今なら、最悪の結果にはならない。そう結論付けて……デイーンの腕を、走る。

不安定で仕方ない、道ですらないその場所。周りで式神と妖怪が戦っているのを無視して、ただひたすらに。人間程度の身体能力しかなく、人間程度の体力しかない彼女が。本来体を動かす立場ではないにもかかわらず走るのには、理由がある。

なにせ、アルマとデイーンは警戒されているのだ。故に動けば意図がばれ、警戒される。それでも、自分なら。非力極まりない自分が走るのであれば。今の彼は、それを認識することすらできない。

そすいて……彼女は、デイーンの掌までたどり着いた。息を整えようと、深呼吸を一つ。無理だった、だが関係ない。ここまでたどり着けたのなら、もう自分が動くことはないのだから！

「すう……ズン投げろ、デイーン！」
「DEEEEEEEEEEN!!!」

忠臣へ、命令。素直に従い、カタパルトのようにしならせ、投げ飛ばす従僕。それと同時に、両手の宝玉へも命令を下す。一輝までの一直線、そこにいる妖を燃やせと命令を下し。同時に、そこへ突っ込む自分を保護するように命令を下す。燃烧と氷結の宝玉、共に砕け散るのを躊躇うことなく許容して、全力で耐える。

「な……ッー」

時間に見れば、ほんの一瞬でしかない。当然だ、デイーンが投げ飛ばしたのだから。

もう眼前まで来た彼女を見て、その意図を察する。だが、気付いた時にはもう遅い。

拳を振りかぶる。若干ずれた標的の位置は、アルマが逃げ場をふさぐことで修正した。

「殴り、飛ばせ……ッ!!!」

非力極まりない拳。!!それでも自らへ下した命令によって、的確に、鋭く、自分の拳を痛めながら。

それでも。最も弱いプレイヤーが、最も強い状態の主権者を、殴り飛ばした。